現代日本文學全集

XXXIX

社會文學集

改造社版

杉浦非水裝幀

社會文學集

改造社版

諸家照影

（上段向つて右より中江・矢野・酒井　中段同堺・安部　下段同人杉・木下・幸徳の諸氏）

「社會文學集」目次

序

歐洲社會運動の實狀は既に幕末の渡歐者の日記にも散見し、その斷片的な紹介は明治最初期の諸論文の中にも拾へる。併しその意義を把捉し始めて來たのは、明治も十年を過ぎてからであつた。

當時この方面を刺戟した外來思想は、大凡四樣に分つて見る事が出來る。曰く三田を中心とする英國流の功利的經濟說、曰く東京大學を中心とする獨乙流の國權說、曰く佛學塾を中心とする佛國流の民約說、曰く同志社及び札幌農學校を中心とする米國流の基督教。この中後年の日本社會問題誘導の中心主體となつたのは、後の二者である。

兆民中江篤介氏がルッソオの民約譯解を發表して自由民權論に指導理論を與へたことは、明治政治史上に於ける輝かしき功績であると共に、我國社會運動黎明期に於ける先覺的功業であつたと云へよう。その『一年有半』は自ら「生前の遺著」を以て許した居士の思想的、文筆的の總決算であり、當時洛陽の紙價を貴きを致した不朽の名篇である。

兆民門下の逸足として、先には佛學塾出身の酒井雄三郎氏があり、後に秋水幸德傳次郎氏がある。前者は歷史的な第一回メエ・デイの實狀通報者として、又、最初のインタナショナルの出席者として、更に又、マルクス主義指導下の歐洲諸運動の觀察家として、我國社會思想史上に稀有の文獻を遺した點に於て光彩著しく、後者は明治三十四年に於ける社會民主黨の創立者の一人であり、「平民新聞」の創刊者であり、共產黨宣言の飜譯者であつて、最後に大逆事件に連坐した。

米國流の基督教より轉じた先達の一人に安部磯雄氏がある。現在社會民衆黨の黨主である。安部氏が無產政黨運動への盡瘁は一日のものでなく、前述三十四年の社會民主黨設立の際に於ては、實にその主導者であり、その宣言書の起草者であつて、或る新聞が「個人にして卽ち吾邦無產政黨の全歷史」と言つたのは、蓋し適評であらう。『地上の理想國瑞西』は氏の自選にかかるもの、一篇以て氏の思想的全幅を窺ふことが出來よう。

木下尙江氏また當時に於ける基督教色彩の著しき一人であつた。熱烈の辯、鋭利の筆、而も氏を最も特色づけたものは、續々として刊行せられたその小說で、『火の柱』は實にその先頭を切つたもの。この一篇こそ、現代社會小說の父と云ふべきであらう。

堺利彥氏の枯川の號は、「平民新聞」創刊の頃より社會運動界に光を放つものがあつた。本集載するところの『堺利彥傳』は、小說に隨筆に評論に、之くとして可ならざるなき練達のペンを以て自ら描かれた氏の前半生、卽ち、氏が全國大衆黨の顧問たる現時を生むに至つた母胎の解剖である點に於て、正に我が社會文學史上逸すべからざる記錄である。

これと一對をなすものは、大杉榮氏の『自敍傳』である。その思想、その行動は、自ら語るに任すべきで、敢て吾等の喋々を俟たぬ。その最期に就いては茲に書く限りでない。

矢野龍溪氏に至つては、雜多の經歷を持つところ、自ら上記諸家とその撰を異にするものがある。併しながら、その『新社會』一篇は明治時代の產んだ最も傑出せるユートピアとして看過するを許さぬであらう。

觀じ來れば過去に於ける吾邦社會文學中の重要なるものはほゞこの中に結晶してゐると信ずる。一卷よく明治大正文學史上の好文獻たるを得ば我等が願ひは足る。

昭和五年八月

一年有半

中江兆民

一年有半

『生前の遺稿』

第四版小引

一、九月七日兆民先生堺を發し、三泊して京に歸る、予匆惶新橋に迎へ謁す、先生癌腫頗る脹起し、聲音全く嗄れて又言ふ能はず、知る可し病勢の更に大に進めることを、此時悲傷何ぞ堪へん

一、幾もなくして本書第二版、第三版を重ぬるを告げ、今や第四版の成るに遭ふ、江湖の愛讀如此きは近來の罕なる所、洵とに心に歡喜するに足るべし、但だ此歡喜は能く彼悲傷の萬一をだも慰するを得べき乎

一、若し予をして神なる者の在る有るを信ぜしめば、予は當に先生の爲めに禱れるならん、然れども先生曾て予に教ふるに、神の決して在るなきの理を以てせり、此歡喜や彼悲傷を慰す可らざるも、而も僅に之に依て強て自ら寛うせんと力むる、豈に已むを得んや

一、本書前版に比して增減する所なし、唯だ先生最近の影照一葉を加ふ(本集には之を缺く)、此れ八月二十五日堺に於て、大阪の寫眞師花淵正美君の撮寫する所

明治三十四年九月十四日　幸德生　謹誌

引

一、兆民先生病で泉州堺に在り、余を召して至らしむ、八月四日往て候す、先生數帖の草稿を蒲團の下に取り、莞爾として余に謂て曰く、我病勢日に惡し、意ふに餘命幾何もなけん、若し今にして一言の後人に告ぐる有るにあらずんば、豈に讀書の人たるに在らん哉、故に頃來筆を援て此稿を成せり、我瞑目の後、汝宜しく校訂して以て公にす可しと、余之を聽き黯然として答ふる所を知らず、既にして曰く、不敏謹んで命を領す、然れども之を出して世に問ふ、生前と死後と先生に於て何の擇ぶ所ぞ、天下先生の文を想ふ渴するが如し、請ふ直ちに之を刻するを許せと、先生喟うて甚だ拒まず、曰ふ、惟汝善く之を圖れと、翌此稿を携へて京に歸り、同門の先輩小山久之助君に諮る、小山君亦大に余の意を贊す、乃ち大橋新太郎君に託して之を剞劂に附するを爲せり、一年有半即ち是なり、夫れ唯だ數年の後にす可くして、而して數年の前に於てする、想ふに先生之を以て深く余等を罪せざるべし

一、本書每節附する所の目次は、先生、余に命じて作らしむる所也、深く恐る、蛇足狗尾、編中の趣旨と相副ふを得ずして、而して先生の意に滿たざる者多からんことを(本集には卷頭に之を捨て目次のみ掲載す)

一、先生政界を辭して後、多く筆硯と親しまず、唯だ明治三十一年一月より四月に至るの間、雜誌百零一に掲ぐる所の論文四篇、及び明治三十三年十月より本年三月に至るの間、毎夕新聞に寄する所の

論文數十篇あり、今其散帙を恐れて、之を卷末に附錄せり(本集には之を缺く)、其前裁次序の如きは、責一に不才に在り

一、先生の小照、甚だ多からず、家に存する所、皆な壯時の物にして、本書插む所は其一也(本集には之を缺く)、蓋し佛國留學中の撮影に係る

明治三十四年八月十八日

門生　幸德秋水　拜識

目次

第一

第二

第三

第一

○明治三十四年三月二十二日東京出發、翌二十三日大阪に着したり、二三友人停車場に來り迎へ、余が顔を熟視し大に驚きて、余が或は直に卒倒せざるやと迄に思ひたると、旅館に着したる後に言へり、宜なり余は去年十一月より頻に咳嗽を患ひ、當時咽喉專門の醫の診斷には、普通の喉頭加答兒なる旨に付き、爾來打棄置きたるに喉頭漸く疼痛を覺え、飲食共に半減せる中、夜汽車にて來りしが故に、斯くは疲勞を現したるなる可し、然れども此時余は矢張漫性喉頭加答兒位に考へて打棄置き、四月紀州和歌の浦に赴き游ぶこと四五日、然るに此時よりソロ〳〵呼吸微促を覺え、喉痛依然たるを以て、余の素人と雖も少く氣を遣ひ、或は世に所謂癌腫なる者に非ざる耶と、因て行李匆々大阪に歸り、耳鼻咽喉專門醫堀内某の診斷を請へり、醫例に依り光線を利用して、仔細檢視して曰く、是れ切開を要すと、余是に於て果して癌腫なりと察し、答て曰く、然らば請ふ一身を託して切開を施されんことを、既にして余の友人余の請によりて手術の證人たるを諾せし者、書面を余の留守許に發し詳細の事を告げり、妻彌大に驚き倉皇出發して下阪し來り、余の投宿せる中の島小塚に至れり、既にして衆皆癌腫切開の極めて危險にして、九死中一生無し、寧ろ維持策を取るに如かざるを謂ひ、余を尼めて已まず、余固より好みて死を速にせんと欲するに非ず、一息の存する必ず爲す可き有り、亦樂む可き有るを知るが故に、癌腫切開の方は思ひ止まれり、而して堀内も敢て強ひず、矢張危險と考へたりと見ゆ

○余一日堀内を訪ひ、豫め諱むこと無く明言し呉れんことを請ひ、因て是より愈々臨終に至る迄猶ほ幾何日月有る可きを問ふ、卽ち此間に爲す可き事と又樂む可き事と有るが故に、一日たりとも多く利用せんと欲するが故に、斯く問うて今後の心得を爲さんと思へり、堀内醫は極めて無害の長者なり、沈思二三分にして極めて言ひ惡さうに曰く、一年半、善く養生すれば二年を保す可しと、余曰く余は高々五六ケ月ならんと思ひしに、一年とは余の爲めには壽命の豐年なりと、此書題して一年有半と曰ふは是れが爲め也

○一年半、諸君は短促なりと曰はん、余は極て悠久なりと曰ふ、若し短と曰はんと欲せば、十年も短なり、五十年も短なり、百年も短なり、夫れ生時限り有りて死後限り無し、限り有るを以て限り無きに比す短には非ざる也、始より無き也、若し爲す有りて且つ樂むに於ては、一年半是れ優に利用するに足らずや、嗚呼所謂一年半も無也、五十年百年も無也、卽ち我儕は是れ、虛無海上一虛舟

○斯く一年半てふ、死刑の宣告を受けて以來、余の日々樂とする所は何事ぞ、旅の身なれば書籍とても無く、先づ差當り當地の朝日、每日の兩新聞と豫て愛讀し來れる、東京の萬朝報とを讀む事也、卽ち此三新聞に由りて余の世界との交際を繼續する事也、此間伊藤內閣倒れて、桂內閣之れに紹で興れり、極て微弱なる立憲內閣、否立憲內閣の幻影消散して、超然內閣勃興せり、桂內閣なる者は其成立したる丈けにて世の立憲政治家に向うての、宣戰布告と謂ふ可し

○星亨、健在なりや、犬養毅、健在なりや、民間政治家一たび利を目的とし、權勢を目的とし、成效を目的とせし以來は彼れ超然の怪物相共に、冠を彈して笑うて曰く、民間黨畏るゝに足らず

○伊藤大隈のリヴァリテーの時代は去りて、伊藤山縣のリヴァリテー時代と成れり、民間意氣

の銷沈實に是に至る、而して其原因は財無きに苦むに在り、余故に曰く、今の日本はコルベールの時代也

○余是迄新聞に雜誌に時々曰へり、「マンチェスター」派經濟論は我日本官民上下を毒せしこと久し、卽ち自由放任の經濟主義明治政府と共に發展して其力を逞しくし、今や經濟界の附屬品たる交通運輸の機關は日々に具備して、而して此等機關を利用す可き主要品たる產物は、三十餘年以來幾何の增殖を見ず、車輛有りて積貨無し、是れ我邦今日の經濟界也、是れマンチェスター派經濟論の賜也

○官民上下貧に苦しむ、是に於て乎凡そ施爲皆姑息是れ事とし、人情日々に菲薄にして、內閣は復た一國經綸の造出所には非ずして、箇々利慾を貪り權勢を弄ぶ最高等最便利の階段也、貴族院は陽に黨弊を矯正すると稱し、陰に機に乘じ己れ自ら內閣に割込む地を爲さんとして、强て攻擊を粧ふ險惡極まる物體の集合所也、衆議院とは何ぞ、是れ復た言ふに及ばず直に是れ餓虎の一團體なるのみ、夫れ一國政治の機關たる內閣、貴族院、衆議院の各團體にして、薦紳的野獸の淵叢なるに於ては、國民果して誰に適歸せん、コルベール出でて縱横裁割大に利源を開發し、官民上下をして財に饒ならしむるか、若くは自然の運移よりして此處猶尙多く年所を經て、コルベール大力量の效と同じき效を見得るに至るに非ざれば、我日本の政治經濟は竟に觀るに足らざる也

○是より先余の大阪に來るや、曾て文樂座義太夫の極て面白きことを識りたるを以て、(余は春太夫靭太夫を記憶せり)旅館主人を拉して文樂座に至る、越路太夫の合邦ケ辻呼物にて、其音聲の玲瓏、曲調の優美、桐竹、吉田の人形操使の巧なる、遠く余が十數年前に聞きし所に勝ること萬々、余素より義太夫を好む、然れども殊に大阪のものを好む、東京のものを好まず、東京の義太夫は大阪のものに比すれば一兒戯に値せざる也、其後又越路の天神記中寺子屋の段を聞き、忠臣藏七段に於て呂太夫平右衛門を代表し、津太夫由良之助を代表し、越路太夫於輕を代表して、所謂掛合ひに語り、更に越路太夫が九段目の於石となせの取遣りを語るを聞き、又明樂座に於て大隅太夫の千本櫻鮓屋の段を聞けり、夫れより四月二十日に妻來れるを以て復た共に文樂座に赴き、其後幾くも無くして又赴けり、故に此忠臣藏の淨瑠璃は妻は二度聽き、余は三度聽きて啻に厭はざるのみならず、愈々聽きて愈々面白味を感ぜり、巧なる證據なり、蓋し津太夫の狀貌並に其沈毅の音聲、重くるしき洒落等、正に千五百石赤穗城代たる大石內藏之助其人を想はしむ、呂太夫の善く關東音を遣ひ、率直にして勇み膚なる、卽ち平右衛門其人也、若夫れ越路の優美なる音聲と婀娜なる曲調とに至ては、於輕を模寫する誰れか之に近似し得る者ぞ、眞に是れ戲曲界の一偉觀と謂ふ可し、余既に三たび此偉觀に接す、一年半決して促には非ざる也、孔聖云はずや朝に道を聞て夕に死すとも可也

○然りと雖も所謂一年半も亦徐々歩を移し來れり、若し一歩も進むこと無ければ一年半に非ずして不老不死なるを得ん、卽ち余は喉頭の腫物漸次發達して大に呼吸の促迫を起し來り夜間安眠すること能はず、乃ち堀內醫師に謀る、此時余は妻及び友人の勸誘に由り、一たび東京に歸り更に下阪せんかと思へり、堀內一診して曰く、是れ危險極まれり、若し此儘にて汽車に御せば途中必ず窒息す可し、之を防ぐには氣管切開の一法有るのみ、此れ極て見易き手術にて、氣管恰好の處に穴を穿ち、更に銀管を插入し、以て呼吸に備ふる法也と、妻獨疑惧して決せず、急に電信もて余の從弟醫博士淺川範彥を

呼び之れに謀る、範彦固より堀内と同[illegible]なり、更に當地傳染病研究所長石神某と共に立合人と成り、五月二十六日を以て堀内醫院に於て切開を施し了りて、其前方なる淺尾某の一室を借りて療養を加ふる事と爲せり

○淺尾の家は今橋一丁目にて東横堀に面し、右に高麗橋有り左に築地橋有り、更に前方即ち東方に天神橋屹然として起り、夜間雨岸の燈火水に映じて恍として純然たる水郭に居るの想有らしむ、是に於て毎日堀内院長來診して創口を療し、余は平臥動くこと無く以て醫命に從へり、夫れ氣管切開術、小手術なるには相違なきも手術は手術にして、其初や相當疼痛を覺え、而して今後咳嗽する毎に、痰口より出でずして胸より出づ、而して聲音全く嗄渇して些の反響なく、僅に近接して談話を便ずるのみ、果然余は一種の不具者と成り了れり、而して是れ根本的治療には非ずして唯夫の一年半を迎ふる間、窒息して死するを豫防するに過ぎざるのみ

○氣管切開の事、京阪間に傳へられてより、書翰日々輻湊して手術後經過の狀を問ひ來るものには、余妻をして經過極て良好なりと報ぜしむ、而して世人多くは癌腫に於ける氣管切開の何物たるを省せず、直ちに認めて根本的切開と爲し、更に書を發して大に祝賀し來る者比々皆是れ也、所謂一年半は唯だ余と妻と之を知るのみ、即ち東京來書中二兒の葉書若くは封書有り、云ふ、父上御病氣追々快復云々と、此處父親たる余に於て聊かストイック的哲學の工夫を把り來りて、自ら防がざる可らず、人間も亦愚癡なる動物なる哉　呵々

○余が妻は、余が豫め患ひしよりは意外に哲學的にて、夫の一年半に於て絕て苦情を言はず、全然余の旨趣を採り務めて目前を樂しみ、以て自ら慰藉せしと見え、今此病院に居るも、何と無く陽氣にて宛然溫泉場に出養生しつゝ有るが如く、うつら〳〵日を送り其中創口も全く癒着し、唯だ咳嗽未だ去らざるのみ、因て六月十八日出院して再び中の島小塚旅館に歸れり

○是より先、未だ入院せざる前、余妻を携へて堀江なる明樂座に往き大隅太夫の淨瑠璃を聽く、妻が大隅を聽く是れを始めとす、大隅は名人故春太夫の弟子にして春太夫歿後之れが三絃を任し居たる古今無雙と稱せられし豐澤團平に從ひ、同人に其神品とも云ふ可き三絃を以て引廻され、自然に故春太夫の音節の蘊奧を極むることを得たりと云ふ、殊に近頃流行の壺坂寺の如きは團平實に開山にして、之を大隅に傳へたるが故に、殆ど今日に在りて大隅太夫の專賣とも云ふ可し、余出院して小塚へ歸るや、明樂座夫の三十三所の題目を揭げ、壺坂寺の段は大隅太夫之れを語ることと成り、毎日大入なりと聞けり

○斯くの如くに壺坂寺の段は、大隅太夫の十八番とも云ふ可き者にて、爲めに大入を占むる、是非一往せざる可らず、乃ち一日妻と共に往けり、夫れ明樂座は人形と云ひ、人形遣と云ひ、到底文樂座の巧妙に及ばず、其他道具と云ひ總て及ばず、然るに午後二時三時の比より客衆續々詰懸け來り、遂に場內立錐の地を留めざる者は、此輩全く其以前の太夫を眼底に置かず、唯大隅一人を聞くが爲めに斯くは雜踏し來る也、此れを以て言へば大隅一人にて優に文樂座の向を張り居れると謂ふ可し

○三十三所靈驗、順次段を逐て了れり、竟に壺坂寺の段に至れり、序幕は春子太夫影にて語り去り、既にして大隅太夫其相撲然たる肥大の體を揭げ來り、やがて彼の有名なる法師歌―夢が浮世か浮世が夢か―を唄ひ出し裊々絕えんと欲して絕えず、其澤市と里との噺の如き直ちに其人を現出したる如く、此間に大隅太夫無き也、

嗚呼技此に至りて神なり、是れ淨瑠璃か、是れ嘶耶、是れ活劇耶、他人の淨瑠璃は淨瑠璃なり、大隅の淨瑠璃は事實其物也、且つ彼れは故さらに拍手喝采を博せんと欲するが如き態絕て無く、唯自ら語り自ら研究して、自ら滿足し自ら樂むが如き所、眞に高尙上品にして、到底他碌々たる者と比す可きに非ず、嗚呼是れ斯道の聖也

○六月二十一日夜、朝日新聞號外の摺物を送り來る、曰く、本日午後三時星亨東京市會に於て伊庭某の爲め刺されて卽死せりと、余も亦驚きたり、是より二十六日葬儀を畢るに至る迄、京阪新聞、每日一二欄星暗殺事件の詳を載せざる莫し所謂一國如狂もの耶、何ぞ我邦人の輕浮にして沈重の態に乏しき耶、生ける星は追剝盜賊にして、死せる星は偉人傑士なり、是非毀譽の常無き一に此に至る、伊庭某余一面の識有り、名を想太郎と云ふ、極て溫厚沈重の人也、而して此擧に出づ、謂はれ無しと曰ふ可らず、但暗殺其事の善か惡か是れ言ふ迄も無し、刑法人を殺す猶ほ大に議す可き有りて、死刑を廢するの論各國に行はるゝ所以なり、況や人々相殺すに於てをや

○是故に暗殺は其是非を論ず可きに非ずして、唯其國社會に於て果して暗殺の必要を生じたること、是れ甚哀しむ可き也、人或は勢に乘じて鴟張して忌憚する所無し、其惡を恣にすること明かなるも、法律の公に於て未だ把捉す可らず、彼れや自ら恃みて毫も顧みず、是に於て義に激する俠雄の徒起ちて天下の爲めに之を刺す、是れ洵に勢已むを得ざる也、伊庭の事、蓋し斯く信じたるのみ、此を以て更に一歩を進めて之を論ぜば、文運大に開け法律用無くして、道德獨り力を逞しくして、乃ち一國人々皆君子なる曉は知らず、苟も社會の制裁力微弱なる時代に在ては、惡を懲らし禍を塞ぐに於て、暗殺蓋し必要缺く可らずと謂ふ可き耶

○世には又一種の灰殼連と云ふ可き輩は、己れ文明人たる事を示さんと欲し、無暗に同情を被害者に表し、意を枉げて奬贊媚悅し、加害者は則ち直ちに兇漢を以て之を目して、以て自家の文明溫和の人たるを衒耀し、其衷情を問へば或は正に之れと反對にて、心竊に此事件を快とせる者多々なるを知る、欺僞の世の中なる哉、教育の如きは要當に根本より革む可き也

○六月二十九日、東京文部省にて、法理醫文の諸科に於て博士號を授かりし者三十許名、余の從弟淺川範彥も亦醫學博士の號を授く、範彥篤學衆に絕す、北里後藤諸醫伯夙に藻鑒する所有り、其初て笈を負うて東京に來るや、余が家に寓すること數月、余之れに謂て曰く、大丈夫旣に一科の學に從事す、必ず一二創見する所有り、以て其社會及び後世に賜賚する有る可し、ニュートンの引力に於ける、ラウオアジェーの酸素に於ける、正に赫々人耳目を照す者也、然らずして唯書物にて學びたるのみにて、其頭腦中唯古人の言語を記憶するに過ぎざれば、吳服屋の帳面と一般ならん、何の學士か之れ有らん何の博士か之れ有らん、大丈夫一たび此地球上に生る必ず之れに一大爪痕を印す可きのみと、範彥深く以て然りと爲す、今回博士の學位を得たるは、正に細菌學に就て大に創見せし所有りしが爲め也、果然範彥は吳服屋の帳面に非ず、呵々

○夫れ其能く創見する所有るを得るは何ぞ、其人學術衆に拔く有るに由ると雖も、抑も亦眞面目なるに由らずんばあらず、彼れニュートンや、ラウオアジェーや、極めて正經の人也、極て眞面目の人也、人或はニュートンに問ふに、何を以て能く爾かく大發見有ることを得たると、ニュートン答て曰く、我唯思うて已まず

故に得たり、其心胸面目如何なる人たるを知る可きに非ずや、是れ小才識小學術有りて、俗に所謂横着なる、俗に所謂ヅウ〳〵しき小人輩の企及す可き所ならん哉、今や我邦中產以上の人物は、皆横着の標本也、ヅウ〳〵しき小人の模範也、余近時に於て眞面目なる人物、横着ならざる人物、ヅウ〳〵しからざる人物唯兩人を見たり、曰く井上毅、曰く白根專一、今や則ち亡し

○古今東西の歷史を看よ、興國の人は皆眞面目也、衰國の人、亡國の人は皆不眞面目也、希臘羅馬の末年に論勿く、卽ち一千七百八十年佛蘭西革命前を看よ、如何に人々不眞面目なりしか、朝野の一出來事や、一戰役や皆被らすに綽名を以てして、以て之を詬罵せざるなし、橫流の極、遂に天下古今の最も悲慘なる、最も滑稽なるロベスピエール輩を出して、此不眞面目なる一輩の徒を掩殺し盡して已めり、人事的論理の違はざる、此に至りて實に畏る可し

○我日本古より今に至る迄哲學無し、本居平田の徒は古陵を探り、古辭を修むる一種の考古家に過ぎず、天地性命の理に至ては瞢焉たり、仁齋徂徠の徒、經說に就き新意を出せしことあるも、要、經學者たるのみ、唯佛教僧中創意を發して、開山作佛の功を遂げたるもの無きに非ざるも、是れ終に宗教家範圍の事にて、純然たる哲學に非ず、近日は加藤某、井上某、自ら標榜して哲學家と爲し、世人も亦或は之を許すと雖も、其實は己れが學習せし所の泰西某々の論說を其儘に輸入し、所謂崑崙に箇の棗を呑めるもの、哲學者と稱するに足らず、夫れ哲學の效未だ必ずしも人耳目に較著なるものに非ず、卽ち貿易の順逆、金融の緩漫、工商業の振不振等、哲學に於て何の關係無きに似たるも、抑も國に哲學無き、恰も床の間に懸物無きが如く、其國の品位を劣にするは免る可らず、カントやデカルトや實に獨佛の誇也、二國床の間の懸物也、二國人民の品位に於て自ら關係無きを得ず 是れ閑是非にして閑是非に非ず 哲學無き人民は、何事を爲すも深遠の意無くして、淺薄を免れず

○我邦人之を海外諸國に視るに、極めて事理に明に、善く時の必要に從ひ推移して、絕て頑固の態無し 是れ我歷史に西洋諸國の如く、悲慘にして愚冥なる宗教の爭ひ無き所以也、明治中興の業、殆ど刃に衂らずして成り、三百諸侯先を爭うて、土地政權を納上し遲疑せざる所以也、舊來の風習を一變して之を洋風に改めて、絕て顧藉せざる所以也、而して其浮躁輕薄の大病根も、亦正に此に在り、其薄志弱行の大病根も、亦正に此に在り、其獨造の哲學無く、政治に於て主義無く 黨爭に於て繼續無き、其因實に此に在り、此れ一種小怜悧、小巧智にして、而して偉業を建立するに不適當なる所以也 極めて常識に富める民也 常識以上に挺出することは到底望む可らざる也、亟かに教育の根本を改革して、死學者よりも活人民を打出するに務むるを要するは、此れが爲めのみ

○今の日本を大體此儘に成し置き、漸次改正を加へて進み將ち往く可き耶、將た亟かに大革新して一の歐羅巴國と爲す可き耶・是れ今日國柄を秉る者の最も首に胸中に決せざる可らざる事也 是れ豫算に苦しみ、對議會に窘しみ、閣僚の統一に盡瘁して、其他一步も餘地を留めざる底の侯伯者流に在て、到底夢想し能はざる所也

○東洋大陸の事は余之を言ふを欲せず、事外交に涉り且つ目下に在るを以て、言はずして行ふを要す、唯だ我日本は當に自己の天職如何と省覺す可きのみ、自己百年の運命如何と考慮す可きのみ、世界のルーマニヤと成ること勿くんば幸ひ也

○七月四日、大阪中の島小塚旅館を辭し去り、妻と共に堺市に赴く、是より先き去三十三年春、余堺の友人某々等並に技師大上某の請を容れ大阪に來り、大上連年思を覃し力を殫して辛うじて好成績を得るに至りたる煉炭製造の業を創するが爲め、砲兵工廠に請うて更に化學的試驗を爲さんとす、余素より提理太田某と善きを以て、余爲めに斡旋の勞を取り、試驗成績極めて良好にして同人皆大に喜び、其後堺市の町に於て事務所を設け、合名若くは合資の一會社を組織せんとす、是に至り大上等余に勸むるに、該事務所に於て疾を養ふことを以てす、余已に久しく小塚旅館に居り、稍や意に倦む有るを以て、直ちに堺人の勸に從ひ事務所に來れり、宅甚だ宏ならずと雖も、構築整然として庭園頗る觀る可く、大氣極めて清涼なり、唯此一事既に以て一切他事を贖うて餘有るに足る、況や主人大上、其他共に煉炭事業に從事して此に居る者、皆洒然無害の長者なるをや

○政友會、星死して落寞の感を免れず、然れども政友會の重なる部分を爲せる自由黨は、歷史古く地盤固く、且つ彼輩深くベンタム的利己學の實驗に得る所有りて、唯だ利祿是れ圖りて、復た人間羞恥の事有るを知らず　故に今後とても決して分裂等の憂有る可らず、小波瀾は或は有る可し、小内訌は或は有る可し、各派の競爭は或は有る可し、然ども政友會の力は正に其大政黨たる所の處に存して、分裂すれば雙方共に損有りて益無きが故に、所謂内訌もキハドき所に至れば自然に已みて、相共に利を圖り害を避くることを是れ務めて、他念無かる可し、而して世の利益一方に志すの徒は、漸次に之に赴く可く　此處兎に角遽に衰滅に歸するには至らざる可し、但其内容を爲す所の人物は、大勳位を首とし他總務連中に至る迄、無氣力、無志概の人々なるを以て、唯だ蠢々然相蕩撼し、瞢々然歲月を空過して、既に國に益無く、亦大に己れに利するに至らずして、久しきを經て雲散霧消す可し、吁是れ政友會の運命也、夫れ或は周に繼ぐ者百世と雖も知る可き也、孔夫子我を欺かず

○大勳位は誠に翩々たる好才子也、其漢學は惡詩を作る丈けの資本有り、其洋學は目錄を諳記する丈けの下地有り、是れ既に大に他の元老を凌轢して後に無語ならしむるに足る、加之口辯ありて一時を糊塗するに餘有り、然ども是れ要するに記室の才也　翰林の能也、宰相者の資に非ず、故に法律制度に關しては、前後常に若干の功有り、總理大臣と爲るに及では、唯だ失敗有るのみにて一の成績無し、其器に非ざるを知る可し、故に侯の總理と爲りて企圖する所を觀るに、宛然下手の釣魚者也、船より竿より餌より絲より、百事具備するを待ちて始めて手を下すも、魚は一も得ること能はず、有名なる行政刷新、財政整理、皆な下手の魚釣に非ずや、一言之を斷ずれば野心餘り有りて膽識足らず、內閣書記官長に止まらしめば、正に其所を得たらん也

○早稻田伯、壯快愛す可し、然れども亦宰相の材に非ず、目前の智に富みて後日の慮に乏し、故に百敗有りて一成無し、野に在て相場師たらしめば、正に其材を竭すことを得可し、

○山縣は小黠　松方は至愚、西鄉は怯懦、餘の蓋し糸平、阿部彥の雄是れのみ

元老は筆を汙すに足る者莫し、伊藤以下皆死し去ること一日早ければ、一日國家の益と成る可し

○自由黨が其抑鬱困頓流離艱難の歷史を一棄して、自ら伊藤に獻じて少しも貴重顧藉せず、而して伊藤とは何者ぞ、正に往年自由黨をして抑鬱困頓流離艱難せしめたる所の張本にして、

即ち當の敵たりしを思へば、我れ自由黨諸子の度量に服せざるを得ず、抑も男子の氣節を奈何、彼れ唯利是れ視る、故に爲さざる所無し、故に其度量は大盡の愚弄に忍ぶ幇間の度量也

○進歩黨、其無主義、無經綸は自由黨に同じくして、而して面皮の厚きこと遠く及ばず、着々之が後に落つる所以也、自由黨先づ政府と提携して進歩黨之れに次ぐ、自由黨先づ積極を唱へて進歩黨之れに次ぐ、彼れ其れ衷情に愧づることを知る、故に遲疑して事に後る、其國家に益無きは則ち一也、其政俗に害有るは則ち一也

○自由黨、其無主義、無經綸を以て、殆ど自ら標榜して隱さず、其利祿を圖るが如きは、自ら夸耀して得々たり、故に舊敵を恨みず新來を賤まず、其能く巍然大を成す所以也、其大を成すこと愈々甚しくして其風俗を傷ること愈甚し、是れ久しからしむ可らず、伊藤侯、其區々の宣言書を以て自由黨を矯正せんと欲す、自ら揣らざるの甚しと謂ふ可し、今や侯全く自由黨の親分と成り了れりと、思ふに能く今の自由黨を矯正して之を規儀に納るゝ者は、必ずや釋迦、孔子以上の人物也、今の計を爲すには、他に一の政黨を作りて、天下の人心を收攬し、天下の義心を激揚し、其末ぞ自由黨を擧げて之を排斥し、政界に齒せしめざるに在り、腐壞彼れの如く甚しきは、復た濟度す可らず

○進歩黨は猶恥有り、故に其無主義を恥ぢて主義有るを爲し、其利を圖るを恥ぢて義に仗るを爲す、統領其人を得ば或は眞の政黨を成すに至らん歟

○御靈文樂座の人形遣に富めること久し、目今吉田玉造の男役に於ける、桐竹紋十郎の女形に於ける倶に神品也、而して玉造の男は團十郎に似たる有り、紋十郎の女は菊五郎に似、秀調に似て大に之れに優る、其神旺し手馳せて最も得意の候に及びては、人形の外絕て遣手を見ざらしむ、人形即ち人也、役者也、吁嗟、技の神なる也

○玉造、紋十郎は人形に於て、津太夫、越路太夫は淨瑠璃に於て、廣助、吉兵衞は三絃に於て、方に其神伎を騁す、所謂三絕也、文樂座狂言の天下に度越する所以也

○津太夫聲低くして、七八合目以外に在る觀客は恐らくは一語も聞ゆる無くして、唯脣頭の動くを見るのみ、態度の變轉するを見るのみ、然ども津太夫一たび場に現はるれば、滿座肅然として敢て譁譟する者無し、蓋し太夫意氣精神を以て語りて、聽衆も亦意氣精神を以て聽く也、若し二三合目の處に居て仔細に傾聽するときは、其音節の微妙にして高尙なる、態度の自然に出でて少しも無理と當込み無きこと、老鍊の極と謂ふ可く、彫琢して璞に歸るものと謂ふ可し

○越路音聲の美、曲調の巧、眞に匹儔無し、蓋し津太夫、呂太夫は、玉造の男形と相待ち、越路太夫は紋十郎の女形と相待ちて、倶に其妙を極むるを得、皆逸品也

○豐澤團平死して、絃界落莫たるを免れず、廣助吉兵衞皆體を具へて、而して微なる者

○堺市、濱寺風景甚だ佳なり、海濱松樹亂立して、其下縱橫步行して涼を取る可く、大に須磨及び東海道中、平塚に似たる有り、海汀一酒肆旅館を兼ぬる者一力と云ふ、構築頗る宏壯、欄に倚りて一望すれば、水天髣髴の際、神戶及び淡路を看取するを得、余一夕妻と倶に步して海汀に至る、遇ま天雨を催し、黑雲西方を蔽ひ、波浪岸を拍ち、鏜鞳の聲、人をして或は意氣壯ならしめ、或は悽然哀を催さしむ、余既に不治の疾を獲て所謂一年半の宣告を受けて、而して妻日夜余に侍して藥餌の勞を取るも、是れ固より治癒を求むるに非ずして、唯死期を待

つのみ、余や男子、且つ頗る書を讀み理義を解する者、個中又自ら樂地有りて、時々大疾の身に在るを忘るゝに至る、妻の如きは女性、近來頗る余の薫化を受け、快を目前に取るの術を得る有りと雖も、而も余の如く自得悠揚たる能はざるは自然の道理也、余固より産を治するに拙にして、家に逋債有りて貯財無し、而して斯重症に罹る、悲慘と云はゞ悲慘なり、此夕余笑うて妻に謂て曰く、卿年已に四十餘、余死したる後復た再嫁の望有るに非ず、余と倶に水に投じて直ちに無事の鄕に赴かん乎如何と、兩人哄笑し、途中南瓜一顆と杏果一籠を買うて寓に歸る、時に夜正に九時

○余は自殺死を排斥する者に非ず、但自殺は大に道德に背き、情義に反したる行ひ有るの後、自ら悔恨して措くこと能はざるの候、自殺して死を取り、以て罪過を懺悔するが如きは、必ずしも惡からず、金錢の爲め病氣の爲め等に原因して失望し、自殺を圖るが如きは是れ唯一味の惰弱のみ、且つ病氣蓐に在るが如き、其中に亦自ら樂地無きに非ず、余が一年半の記述の如き正に是れのみ

○人、七八十にして死せば長壽と云ふ可し、然れども死して以往は永劫無限也、七八十年を以て無限に比せば如何に短促なるぞ、是に於て乎彭祖を夭とし、武内宿禰を短命とせざるを得ず

○兒生る、其生るゝの瞬間より即ち徐ろに死しつゝ有る也、何ぞや、其最長期たる七十八十に向うて、進みて片時も休止すること無ければ、是れ徐に死しつゝ有ると謂ふ可し、何の不可か之れ有らん

（七月十一日堺市に於て此稿を畢る）

第二

○權略、是れ決して惡字面に非ず、聖賢と雖も苟も事を成さんと欲せば、權略必ず廢す可らず、權略とは手段也、方便也、但權略之を事に施す可し、之を人に施す可らず、正邪の別、唯此一着に存す、權略を事に施すとは、例へば大石良雄が始に城を背にして一を借らんと唱へ、中に殉死を唱へて、終に乃ち始めて其眞意を打明けて復讐を唱へたる是れなり、權略を人に施すとは、例へば戰國の時、詐りて敵と和し、敵將を誘ひ伏を設けて之を掩殺せしが如き、織田信長、明智光秀の屬、動もすれば此術を用ゐたり、是れ固より憎厭す可し、權略事に施すが如きは、多々益々善し、事を成す正に此に在り、是れ殆ど方法順序と曰はんが如き者

○佛のリセリュー、コルベール、チェール、英のピット、ロバートピール、グラッドストン、獨のビスマーク、意のカヴール、支那の諸葛亮、曾國藩、我邦の德川家康、大久保利通、是等を大政事家と謂ふ、今の五等爵位の輩、此れ特に太陽の前の爝火のみ

○大政事家の爲す所は、一定の方向有り、動す可らざる順序有り、光明俊偉の觀有り、其言ふ所は即ち其行ふ所にして、今や彼己氏が徒らに準備多く觸込み多くして、幽靈の足の如く輙ち消滅し去るが如くならず、而して聞く、彼己氏は則ち竊にビスマークを氣取りカヴールを氣取れりと、他日此二人に地下に逢はば、夫れ何の顏か之れに對せん、呵々

○大政事家は皆恐懼惕若の狀有り、小心縝密の態有り、其衷情眞面目なるが故也、彼己氏が公々然姬姜に戲れ醇酒に耽し、浮薄なる幕賓を集めて大言壯語し、而して僅に一二敵抗する者あるに遇へば、意氣輙ち沮喪して、唯だ逃るゝことの早からざるを恐るゝが如くならず、呵々

○輸出超過、輸入減退、正貨流入、物貨低落、輙ち曰く順境々々、批販零商の徒、賣ること

常に多くして買ふこと常に寡し、財に乏しければ也、一國も亦此の如し、其輸入殆ど皆無なるが爲めのみ、其正貨流入は購買力竭きて唯賣るを是れ事とするが爲めのみ、國の貧富は物貨生産の力の大小如何に在り、我國今日の患は貨幣乏しきに存せずして、生産力劣なるに在り、此處經世家宜しく眼を着く可し

○製造業極めて難し、品質精良にして而も價廉なるに非ざれば、以て市場に勝を制す可らず、物良にして價廉なるは科學に依るの外無し、是に於て乎學術の普及を圖らざる可らず、物良にして價廉なるも未だ市場の勝を必す可らず、必ずや需用者の嗜好に投ぜざる可らず、是に於て乎販路なる地方の人情習尙を諳知せざる可らず、是くの如きは到底一時の奇利を僥倖とする株屋連の能く當る可き所に非ず

○是故に輸出業は輸入業に比すれば大に難し、故に輸出業者に對しては、官宜しく相當の保護奬勵の法を設けて之を輔佐す可し、輸入業の如きは我邦人を相手とするものにて其嗜好は固より之を熟知し、其需用も亦同じく之を知れるが故に、百發百中失敗の憂殆ど絶無なり、是れ我邦の如き商業的未開の際に在りて、輸入商多くして輸出商寡き所以也、官に局に當る者此れ察せざる可らず

○近日官の唱ふる所の事業繰延と云ひ、公債支辨の事業と云ひ、皆當下を處理する所以にして、固より喫緊要務たり、然れども是元來已むを得ざる者にして、殆ど再思を須ゐず、若夫れ國家百年の計は別に自ら在る有り、當途者當に目を着く可し　百年の計とは何ぞや、曰く即ち前に論じたる生産力を增殖するの一事のみ

○衣食足而知榮辱、是れ中人以下皆然り、近日我邦上下人情浮薄、甚しきは墮落腐壞に至る所以の者は、詮し來れば人皆阿堵物に短にして、自己の需用の幾分をも飽す能はざるに因らずんばあらず、夫れ窮して而して爲さゞる所有る者は、千百人乃ち一人のみ

○今や我邦の文學は、殆ど戰國の時英雄割據の有樣に似たる有り、漢文崩しの體有り、飜譯(洋文)體有り、言文一致體有り、侍り鳬の體有り、各種雜用の體有り、惟ふに是等の諸體各短長有り、崇重典雅の樣を見はし、若くは悲壯慷慨の狀を寫すには、漢文崩し最適當なるを覺ゆ、委曲詳密透得十二分なるを求むるは、飜譯體若くは言文一致體に如くは莫し、優美の色彩を發するは、侍り鳬の體を長と爲す、故に此等諸體、今後時に其中に盛衰は有る可きも、消滅する者は無かる可し、又文字の如きも、漢字あり、萬假字中、草書伊呂波有り、片書伊呂波有り、萬葉有り、斯くの如く錯雜なる者は、恐くは古今何れの國にも無き所の例なり、是に於て乎文字改革の論有り、惟ふに時に政柄を秉る者、魯帝アレキジオウイットの果斷有りて之を處せば、羅馬字最便利なる可し、之を爲すの方、先づ大中小字書を作り、次に岩谷漣の御とぎ噺の如きものを羅馬字もて編し、之を小學の豫課に加へ、中學大學其他適當の一二書を羅馬字もて綴りて豫課に入れ、以て學生をして習熟せしめ、此の如くして竟に官の公示諭達の中にも入るゝに至らば、久きを經て一變するを得可し、但斯く文字を一定せんとせば、文體も亦一定せざる可らず、而して此時は言文一致體を獨り適當と爲す、歐米諸國即ち羅馬字を用ゆる諸國の文、皆此體なれば也

○余曾て或る新聞紙上に論載せしこと有り、曰く我邦人は既に自國を生活し、又歐米を生活す、一身にして二樣の生活を爲す、他邦人に比して一倍の生産力無かる可らず、何の謂ぞや、曰く吾人既に羽織袴を着し、又フロックコートを着す、既に煙管を銜み、又パイプを持す、

書院付き茶席付きの家屋の一隅カーフェル付きの洋室を設く、其他斯くの如き類枚擧に遑あらず、此事小なるに似て實は然らず、一國の經濟に關する極めて大なるもの有り、五等爵位の大經世家、其れ何ぞ此に慮及せざるや

○墓地日に月に益々廣がりて、宅地耕地總て生産地を侵すこと極て大なり、東京谷中青山に觀て見る可し、其間歳月の久き、舊を毀ち新に代へ、相償ふことを得べしと雖も、抑も大勢に於ては增す有りて減ずる無し、余は法案を設けて一切火葬と爲し、各人携へて去りたる餘は骨と灰とを一所に堆積し、毎月日を定めて之を海中に投棄せしめんと欲す、其各人祭祀の如きは遺骨を家に置き、且つ寫眞畫若くは油繪等を展べ、之れに對して焄蒿悽愴の誠を致せば、以て孝子貞女の情を竭すに於て餘有るに非ずや、何ぞ必ず墓域を以てせん、若し夫れ國家に大功勞有りたる人物の如きは別に碑を建てて之を表奬する可なり、斗筲の人にして一々碑に銘するが如きは笑ふ可きの甚しき也

○卜筮、觀相、風角、巫祝及び諸種佛神護符の類、其人事に害し並に人の神智を傷むること極て大なり、此等徐に法を設け、多少の猶豫期を與へて之を禁絶す可し、其他天理教、金光教會等淫祀の屬、皆此一例に依り之を禁絶す可し

○藝妓及び一切割烹店の婦女は之を放つ可し、其風俗に害し且傳染病毒を媒介するの恐れ有り、其聲妓の如きは往々躬ら黴毒を製造す、之を傳播するのみに非ず、且つ彼輩其業たる、專ら杯酌に侍し宴興を佑くるに在りて、而して縉紳の徒之を聘する者、初より褻瀆を事として少も敬意を表するを要せず、良家の令孃令夫人に接するに比すれば、自ら恣にして些の愼謹を須ゐざるが故に、自然に令孃令夫人をして、男子との交際外に斥けられざるを得ざらしむ、我邦婦女の交際の趣味を解せざるは、藝妓有りて男子の歡を擅にするが爲め也

○娼妓は余之を保存するを欲す、道德大に進み、今の僞君子皆眞君子と爲り、今の小人皆柳下惠と爲るの日を待ちて、娼妓始て廢す可し、彼れ既に驅黴の設け有り、聲妓の危險なるが如くならず、但娼家建築の方法を一變し、無意の人を誘惑すること無からしむる其れ可なり、遠きに聞ゆる樂器の如き、之を禁ずる其れ可なり

○娼家の設け本是れ社會に缺陷有り、人心に弱處有るに因り、人情已めんと欲して已む可らざる者有り、夫れ已む可らざる者、天下之れより要なるは莫し、故に彼れ僞君子の徒嗷々其非を唱へ官又深く察せず、所謂自由廢業の事起りたるも、竟に廢絶す可らず、但娼家主人饜く無きの慾に驅られ、諸無義無殘の手段を設けて娼妓を窘しむるが如きは、其弊宜しく一洗す可し

○然りと雖も余の癌腫、即ち一年半は如何の狀を爲す、彼れは徐ろに彼れの寸法を以て進めり、故に余も亦余の寸法を以て徐々に進みて余の一年有半を記述しつゝ有り、一の一年半は疾也、余に非ざる也、他の一年半は日記也、是れ余也

○疾病なる一年半、頃日少しく歩を進めたるものの如く、頸頭の塊物漸く大を成し、喉頭極めて緊迫を覺え、夜間は眠り得るも晝間は安眠すること能はず、其食に對する毎に、或は嚥下すること能はざる可しと思ふこと有るも、實際未だ然らず、雞子二三個、粥二碗、殽二碟、牛湩一日四合は之を攝取して違ふこと無し、是れ今日猶ほ能く余の一年有半を錄する所以なり

○七月十三日故五代友厚君の遺子某女、東京より小山久之助君の書翰を齎して來り、且つ會面を乞ふ、余聲全く嗄し談話すること能はずと

雖も、小山の書翰を見れば、佛蘭西學に從事し余に面せんと欲すること玆に久しき旨に附き、之を座に引き、强ひて聲を絞りて一二語を交へたり小山も亦頸頭塊物を發したりと傳聞し、五七日前書を裁して之を問へり、今其書中に曰く、淋巴腫にて橋本醫伯の治術を受け、少しく快に赴けりと、滔々今日の濁流中に在て、之子の如きは純粹愛すべき者、希くは余の疾の如く不治症に非ざることを

○是より先余の猶ほ大阪小塚旅店に在るに當り、野村泰亨君書を寄せ來り、舊門人(佛學塾)二十餘人の名姓を書し、格泉六十餘金を封じて贈り呉れ、曰く、聊か以て肴菓の料に供すと、余諸君の故舊に厚きを喜び、受けて之を納めり、余固より常に阿堵物に短なり、今此贈を得て、余が意恰も萬金を獲たるものの如し

○余が堺の寓、庭園小なりと雖も、頗る蒼古隱秀の態有り、樫木一樹七八十年の物、幹五六本立ち、其中一は外皮の如き形を成して、他の幹を半ば包容せり、山石大小數十、皆莓苔に封ぜられ、地面も亦大率苔を被り、燈籠四五も亦皆苔を被らざる莫し、若し柳々州の筆法を以て之を記せば、樹木や石や燈や一切の物を排置し、然後苔を以て之を包みたるものの如し、小盆池有り錦魚數十尾を蓄へり、余毎日吸入を行ひ藥を服し、若しくは一年有半を記し、其閒時に庭に下り餌を池に投じ、以て樂と爲す、龜有り大さ盆の如し、然れども此物や一種先天的野性にして、絕て人に狎るゝこと無し、時に頭を水面に出すも、跫音を聞けば輒ち沒す、此物竟に濟度すべからず

○堺の地魚類に富み又味美なり、吾邦に在りて南に面する海の魚は、北に面する海の魚よりも美なり、故に余が鄉里土佐及び中國筑前、博多等の魚は、仙臺、秋田、新潟等に比して夐に勝れりと稱す、此地海濱茅海樓、一力樓等酒樓にして旅店を兼ね旅客極めて多く、其大阪より來る者夥し、皆鮮魚を味ふが爲め也、魚は則ち鯛、鰕魴其他又蛤蜊の炙尤も美と稱せらる、但恨むらくは松魚無の一事也、余が鄉里松魚を以て名有り、今や梅霖の候此魚日々市に上ること極めて多く味の美西儔無し、一想する每に人をして垂涎に堪へざらしむ

○余が鄉里又楊梅有り、今方に其候也、楊梅に二種あり、一は朱色にして一は銀色なり、而して其銀の者尤甘美、漢土に在ては茘支龍眼肉に亞ぎて尙ばるゝもの實に楊梅とす、葡萄梨柿の屬は輿儓のみ、皁隸のみ

○桂内閣は、頃日公債を外國市場に賣出さんと欲して、其筋の者をして事情を探索せしめ、應募者無かる可きに窘しむと聞けり、是れ始より分り切りたる事なり、英國は南亞戰爭に莫大の費を糜し、佛國は殆ど國力の半を露國の事業に投じ、獨逸は正に恐慌に惱めり、此の如く歐洲大市場は今方に資金に短なり、而して我政府が二十七八年以來常に貧に苦しみつゝ有ることは、議會之を暴露し、新聞紙之を夸張し、外人をして竊に疑惧を懷かしむ、是の時に於て公債を賣出さんと欲す、迂も亦甚し、桂内閣果して百年の長計に着眼して、而して之を建つるに必ず巨貲を要するに於ては、何ぞ斷然抵當を揭げて財主を挑せざる、金を借るに抵當を入るゝは個人として恥づ可きに非ず、邦國としても亦同樣也、呼是亦從前のものと同じく、無經綸にして唯勢利是れ貪るもの耶

○桂内閣大に貴族院を懼れ衆議院を懼ると聞く、是れ大謬也、桂内閣たる者、唯天下後世に愧ぢざる當今の務に適切なる經綸無きを是れ懼る可きのみ、夫れ大經綸既に立つ、何ぞ貴族院を懼れん、何ぞ衆議院を懼れん、二院にして妄意抗衡するが如き有らば、直ちに天下に呼號し、演說に新聞に以て斯民に訴へんのみ

○國務大臣貴倚せらるゝこと殊に甚し、是れ昔時專制政治の遺弊也、衆議院議員固より大臣たらんことを希ふ、而して貴族院議員も亦爾かり、彼れ何會何派と稱して動もすれば官と抗爭することを好むは、其中心實は國務大臣たらんと欲する也、一言すれば兩院議員俱に勢利の餓鬼也、夫れ榮譽の地何ぞ限らん、大臣以外高等官に論無く、卽ち辯護士、新聞記者、工商業家、何の職業を問はず、力量あり手腕有りて能く功績を擧ぐるに於ては、皆貴倚尊重す可し、國務大臣と爲り何の爲す無く唯利祿是れ貪る、是れ恥づ可きの甚し、何の榮譽か之れ有らん、何の貴倚す可きことか之れ有らん

○我邦官吏甚だ尊きが如くにして、其實は然らず、是れ繁文の弊の生ずる所以也、何を以て之を言ふ、曰く且つ農商務の一省に就て言はん、旣に山林、鑛山、商工等の局を設け各々之が長を置けり、而も山林局長は獨り其局の責に任ずるに非ずして、他の高等官も亦必ず其文書に捺印して以て其責を分つ、是我制たる各局長を猜うて獨り其責に任ぜしめず、卽ち繁文の弊を生ずるも權を各長官に委せず、而して事務爲めに澁滯し日月爲めに曠過し、之れが害を被る者は人民也、故に曰く我邦官吏尊きが如くにして實は然らずと、此も亦行政刷新中の重なるもの也

○是故に凡そ事各局に係るものは其當該局長獨り責に任じ、他の局長は關知せず、乃ち山林の事、商工の事之れが局長たる者意見を出し、次官大臣之を採用せば、直ちに命令を發して可なり、此くの如くするときは今日三月を費す事項も、四五日乃至十日を以て之を辨ずべし、而して局長たる者、益々奮勵して事に從ふや必せり、是れ其人を尊ぶ所以也

○且つ官とは何ぞや、本是れ人民の爲めに設くるものに非ずや、今や乃ち官吏の爲めに設くるものの如し、謬れるの甚しと謂ふ可し、人民出願し及び請求すること有るに方り、之を却下する時は宛も過擧有るものを懲すが如く、之を許可する時は宛も恩惠を與ふるものの如し、何ぞ其れ理に悖るの甚しきや、彼等元來誰れに賴りて衣食する乎、人民より出づる租稅に賴るに非ず乎、乃ち人民の豢養を受けて、以て生活を爲しつゝ有るに非ず乎、凡そ官の物金錢に論勿く、一毫と雖も天より落つるに非ず地より出づるに非ず、皆人民の囊中より生ぜしに非ざる莫し、卽ち是れ人民は官吏たる者の第一の主人也、敬せざるを得可けんや

○民權是れ至理也、自由平等是れ大義也、此等理義に反する者は竟に之れが罰を受けざる能はず、百の帝國主義有りと雖も此理義を滅沒することは終に得可らず、帝王尊しと雖も、此理義を敬重して玆に以て其尊を保つを得可し、此理や漢土に在ても孟軻、柳宗元早く之を覰破せり、歐米の專有に非ざる也

○王公將相無くして民有る者之れ有り、民無くして王公將相有る者未だ之れ有らざる也、此理蓋し深く之を考ふ可し

○我邦人は利害に明にして理義に暗し、事に從ふことを好みて考ふることを好まず、夫れ唯考ふることを好まず、故に天下の最明白なる道理にして、之を放過して曾て怪まず、永年封建制度を甘受し士人の跋扈に任じて、所謂切棄御免の暴に遭ふも曾て抗爭することを爲さゞりし所以の者、正に其考ふること無きに坐するのみ、夫れ唯考ふることを好まず、故に凡そ其爲す所淺薄にして、十二分の處所に透徹すること能はず、今後に要する所は、豪傑的偉人よりも哲學的偉人を得るに在り

○近時我邦政事家井上毅君較や考ふることを知れり、今や則亡し

○新聞記者の口吻もて言へば、我邦には口の人、

手の人多くして腦の人寡し、明治中興の初より口の人と手の人と相共に蠢動して、其所謂進取の業を開張し來れること玆に三十餘年にして、首尾能く今日の腐敗墮落の一社會を建成せり、我日本人民何の天に罪か有る

○余嘗て論ず、明治政府の初より我官民上下英國マンチェスター派の經濟論に誤まられ、保護干涉を以て殆ど惡事と爲し、經濟上の自由と政治上の自由と混同せられ、民間政論家の如きは殊に保護干涉を憎惡し、政府時に萬已む可らざる必要を感じて保護干涉の策に出づること有る時は、群起して之を難じ、政府も亦固より怯懦にして且つ衷に信ずる所有るに非ざるが故に、民間の攻擊に遭へば輙ち逡巡し遲疑して、旋や竟に廢止するに至る、是も亦上下共に考ふること無きの罪也

○我商工界をして英佛國民と同一の度に在らしめば、放任固より惡からざる可し、今や然らず彼等の過半は猶ほ頑陋にして、加之資本に短に、新智識に乏しく、唯目前足の早き事業のみを企圖し、永遠の業は到底彼等の能く負荷する所に非ず、官の誘掖奬勵するに非ずんば、鞏固の業竟に得て興す可らず、近日紡績、鐵道、銀行、其他各種會社の續々乾沒するを觀て知る可し、此輩今日に在て紳商と稱し、且つ多數に比して資に豐かに識に富めりと號する者、猶ほ且つ然り、況や其餘をや、干涉保護豈止む可けん哉

○保護干涉、動もすれば官吏と當該商人と結託して私利を營むの弊有り、然りと雖も是れ弊也、豫防する可なり、懲罰する可なり、若し弊有るを以てせば、天下何事か弊無からん、是れ自ら別問題也

○歐洲諸國と雖も其初め十五六世紀の候に在て、干涉保護の政を行はざる莫し、特に佛國の如きセーウルの陶器、ゴブランの織物、皆保護に待ちて斯くの如きの盛大を致せり、且つ近く我邦內に觀よ、讃岐の砂糖の如き、余が鄕里土佐の抄紙業の如きは、皆藩親ら之を經營せり、啻に干涉のみに非ざる也、其他諸國の特有物產大抵皆封建の時、藩政の力に賴らざる莫し、干涉保護固より廢す可らざる也

○余嘗て意へらく、工業自ら四種に分つを得可し、第一種は全然人民の創立に任じて少しも干涉を要せざる者、例せば一切粗製に係るもの、即ち紡績の如く、毛絲の如きもの、及び大橋梁、大隧道無き鐵道等の如きもの、第二種は、未だ着手せざる前大に調査を要する者、惟ふに調査の爲め若干歲月若干資本を要するに於ては眼前の利を逐ふ私人の能く堪ふる所に非ず、故に官之れが調査を遂げ、之れが結果を與へて其業を興さしむる可なり、第三種は獨り調査の結果を與ふるのみならず、猶ほ益金を補給することを要する者、第四種は官自ら創設して經營し、若干利益を得るを確むるに及びて拂下ぐ可き者、是れ皆農商務省の業也

○農も亦大改革を要す、第一牧畜を兼ねしむるを要す、若夫れ大中小農務の如きは、各地の便宜に依る可なり

○我邦土沿海數千里、尤も魚介に富む、官大に水產業を奬勵し、或は自ら經營せば、面目爲めに一變せん、和蘭、嗹馬、諾衛乞諸國の水產業、視察して參考に供す可し

○北海道鮭鱒の如き、鱗界の王公と稱す可きものにして、鹽引と號する腐臭の物を製して、變ずることを知らず、嘆息に堪へず

○羊、兩種有り、專ら毛を用ゐて肉甚だ美ならざる者、毛肉共に用ゆる者と、英國蓋し多く此第二種を飼ふ、豕も亦數種有りて英國最も種類に富む、是宜しく實地に就て查察す可し

○豕、飼育法に稱ふときは、決して不潔なる者に非ず、又必ずしも呆ならず、其放散して山野

に在る時、食時鐘を鳴らし晡時笛を吹く等、苟も習熟せしむる時は、輙ち還り來りて嘗て時を違ふこと無し

○春夏の候草木青々たる時、原野若くは岡陵、人家三々五々簷端を樹間に見はす者、其近傍羊若くは豕の群、或は歩し或は臥し、牛馬も亦其中に雜居し、太白所謂花暖青牛臥の景尤も人目に宜し、歐米に旅行する者皆此景に感ぜざる莫し、我國原野之れに比して大に落莫たるを免れず、獨り經濟に損するのみならず、美術に於ても大に缺くる所有りと謂ふ可し

○男女服裝、斷然今日に於て一定す可し、惟ふに洋服日本服今に行はるゝ者の外、別に更に體に適し、且つ婦人の如きは、更に優美の觀を呈する者を創して、我より古を作す可なり、今の日本服は太だ緩豁にして、且つ動もすれば肉身を露はすの短有り、洋服は則ち太だ狹窄にして、祁寒炎暑の候人體に適せず、必ずしも沿襲せずして可なり

○今の日本服、洋服、其他支那、土耳其等の服に就き、其長を取り其短を捨て、更に意匠を加へ、斯の如くして、幸に恰當なる者を得ば、利便にして且つ觀美なること、大に今のものに勝る有るに至らん、天下萬事舊慣に泥せずして、常に變更改正を加ふる其れ可なり、獨り被服のみに非ざる也

○今や七月中旬にして梅霖未だ已まず、日々陰鬱甚し、主人大上君爲めに謠曲本を借す、乃ち披閱するに、蓋し觀世流摺版也、松風、鉢の木、百萬、邯鄲等文章として觀るときは大率拙陋の極、今日の露伴紅葉を以て之を視る、華族と乞食と也、蓋し當時僧侶輩纔に指を文學に染めて、而して本中稍や誦す可きは古歌を引用したる處、佛語を點綴したる處、白樂天の詩句を借り來たる處に過ぎず、一篇結構も亦千篇一律、多くは佛神の靈夢、古人の亡魂等を以て張本と爲し、其他は手に任せて塗抹したるものゝみ、若し外に採る可き所はと曰はゞ、唯隱然蒼古の色彩有ること是れなり、然れども是作者の功に非ずして日月年歳の力と謂ふ可きのみ

○近日文學、露伴、紅葉、逍遙、鷗外、皆佳なり、蓋し露伴雄渾高華に意有りて、即ち徂徠の所謂峩眉天外雪中看は、正に之人野心の嚮往する所ならん、紅葉は百錘千鍊、玲瓏明瑩、十二分に透徹せずんば休まざるの概あり、逍遙は極て自然に近し、其縱橫揮灑、一に東坡の所謂行く可き所に行き、止まる可き所に止まるものに似たり、若夫れ鷗外は溫醇にして絕て鋒を露はさゞる、蓋し其人或は斯くの如き耶

○近時作者、多くは修辭に專にして、趣向の巧奇は其野心の存する所に非ざるものに似たり、此點より云はゞ、今の作者皆な近松、竹田に及ばざること遠きこと甚し、近松、竹田、獨り其文字瑰麗なるのみならず、趣向も亦巧奇にして、人をして拍案せしむ、余常に謂ふ、我邦文章、義太夫本第一等也、歐西ツラジェヂー、ドラームに劣らず、物語の類皆及ばず

○和歌僅々三十一字、是れ世界文章中小品の又小品也、萬葉、古今既に在り、後人は唯陳腐の文字を並列するのみ、是猶ほ七絕唐以後觀るに足らざるが如し、體制甚だ小にして、意を致し鋪陳するに處無きが故也、即ち俳句川柳も亦同じ

○飜譯は故森田思軒最も佳なり、蓋し學漢洋を兼て、而して殊に漢學の根底有る者、之人一人也、故に善く文字を驅使して左右皆宜し、之れに亞で涙香の小說頗る觀る可し、余涙香の譯せし所の原書、一も嘗て讀みたること無し、思ふに是れ痛く節略を加へたるものなる可し、而して絕て痕迹を見はさず、其裁緝の巧は又恐らくは他人の及ぶ所に非ず

○如燕、伯圓、圓朝、柳櫻、の口頭の文、是れ

一種の記事文、若くは敍議夾雜體の上乘也、但其筆記を讀むと直ちに聽くとは霄壤の差有りて、余が記事文の上乘と曰ふは、筆記を謂ふに非ずして、其話頭を謂ふなり、則ち之れ又敍事體演說と謂ふ可きもの耶

○演說に至ては、其行はるゝ日猶淺く、辯士最も巧なるものと雖も、能く流滑にして語句を錯まらず、即ち雅馴を失はずと云ふに過ぎず、其筆記を讀み文章として稱美すべき者は、恐らくは有ること無し、チスラエリー、グラッドストーン、ガンベッター、チェール等の演辭の博辯宏偉、文章の上乘なるが如きこと能はず、是れ獨り未だ習熟せざるのみならず、其中心に燃ゆるが如き熱誠と、至剛の氣と無きの致す所なる可し

○常磐津、淸元、長唄の類、其音節曲調を外にして、文辭として稍々觀る可き者無きに非ず、常磐津の釋迦八相記、淸元の山姥、長唄の勸進帳、京鹿の子等の如き皆諷誦す可し、若し夫れ歌澤に至つては其中實に寸鐵人を殺す者有り、「色氣無いとて苦にせまいもの」の一曲、及び「時鳥自由自在に聞く里の」の一曲、其他の如き卽ち是れ也、都々逸に下ては鄙猥聞くに堪へず

○議論時文、故福澤先生、福地櫻癡、朝比奈碌堂、德富蘇峰、陸羯南、是れ其最なる者、福澤文天下之れより飾らざる莫く、之れより自在なる莫し、其文章として觀るに足らざる處、正に一種の文章也、櫻癡才筆諸體を該ぬ、而して一種封建の臭氣有るは奇と謂ふ可し、蘇峰直譯體蓋し殆ど其創立する所にして、一時天下を擅にせり、碌堂、羯南、倶に漢文崩しにして、時に措語不消化の弊有り、或は急普請の漢學者たるに因るもの耶、非か

○近時漢學振はず、人々唯だ用に供するに足ることを求むるのみ、故に獨修多きに居り、疎率極て夥し、三舍を讓る、鼻息を伺ふ、一葦帶水、旗幟鮮明の類紙上に相踵ぐ者比々是れなり、而して讀者も亦怪しむこと無し、是れ小中學の課程多事にして、漢學を脩むるの暇無きに是れ由る、蓋し此誤無き者は獨り思軒有るのみ

○歐洲人文章極て嚴なり、古大家の文と雖も或は措語穩當ならざる者、若くは文理に悖る所等有るときは、後人決して放過せず、爲めに書を著はし一々指示して假借せず、以て少年子弟に諭す、學校敎課書中欄外此種の指示を掲ぐる者甚多し、且つ佛蘭西に就て言ふ、ボシュエー、フェネロン、ウォルテール、モンテスキューの大家と雖も、往々此種の摘發を免れず、文章の益々雅醇に赴く所以也、日用言語の如きも兒輩或は誤ること有るときは、父母必ず爲めに誨へて之を規正す、演說談話の益々典則有る所以也

○兒童若し糞尿、陰部、若くは晦事等の語を直言するときは、父母兄姉痛く懲責して其後を戒む、談話の淨潔に赴く所以なるのみならず、實際風俗に關する所以も亦大なりとす、故に彼邦に在て都會に論勿く、遠村僻地と雖も、人家墻壁落書して忌諱を犯すが如きは絕て之を見ず、我邦倉庫白堊上、動もすれば陰陽二物を描きて、而して往來觀る者も亦曾て以て怪と爲す無し、即ち婦人盛裝して街上を過ぐる時、車夫相集る者往々指斥笑語して之を辱しむ、是れ其來ること遠く漸有る也、大に戒む可し

○我邦男子、其少壯婦人に接する、直に肉慾晦事に想及す、故に之れと晤語する往々男女の事に及ぶを常とす、良家夫人に對するも殆ど妓輩に於けると異なる無し、而して人之を怪まず、即ち當話婦人も亦之を以て非禮と爲して嗔ること無し、此れ風俗の日々に崩壞して、而して令孃令夫人の交際の高尙に赴かざる所以なり、

是れ亟かに改む可し

○邦人特性和易にして放慢に流れ易く、坦率にして猥瀆に陷り易し、嚴毅と莊重とは其短とする所也、局に敎育に當る者、當に眼を着くる所有る可し

○是故に看よ、我邦に在り位級高き人、若くは財に富む人、卽ち稍や莊重嚴正なる可き人にして、莊重嚴正ならずして反て物を待つこと和易にして、或は放慢事を事とせざるが如き有らば、衆人皆之を喜び之を愛して輙ち曰く、彼人にして斯くの如しと、其莊重嚴正を喜ばざること知る可し、是辯や國家天下に於て繫る所極て大なり、經世家大に意を矯正に致さゞる可らず

○諸種禮式の類は、人をして莊重嚴正ならしむる所以也、明治中興以後、封建時代の禮義格式一時に廢棄せられ、服制の如きも隨うて度無きを致し、爾來歐米の習俗採用せらるゝに及び、貴紳官人に在ては舊禮に代ふる所諸種禮式相踵で興り、大小禮服其他勳章位記等燦然品節を著定して、大に莊重の態を呈するに至れるも、中以下の者は未だ斯くの如きに至らず、上下肩衣廢せられて、僅に羽織袴若くは洋服を以て之に代ふるも、葬婚の類衣流しを以て列席する者往々有り、夫れ服の度ならざる、人々放慢に流れ易き所以也、邦人元來莊重の性に乏し、而して儀禮の以て身を律する無し、其橫流墮壞收拾す可らざるに至ること、甚だ懼る可し、是又經世家意を致さゞる可らず

○人と期を約する、一二時を後るゝも相共に怪しむ無し、是れ正に其心術の放慢なるに起因する所以也

○邦人又局量褊狹にして、小成に安んずるの傾有り、唯夫れ小成に安んず、故に少く得意の地を獲るときは、輙ち晏御揚々の態を露呈し、甚しきは直に傲慢を成し、人を待つ動もすれば無禮に失するに至る、卽ち官衙に在り門衛及び受附の屬、及び鐵道會社等に在り切符賣の徒、往々客に傲り禮を失するが如きは、他の縉紳に在ても或は免れず、是れ其自ら安んずるに因らずんばあらず、唯夫れ小成に安んず、故に彼手工商業に從ふ者、幸にして十萬二十萬の資を得るときは、輙ち自ら安んじ復た手を出さず、専ら其財を失はざらんことを是圖りて亦念有る事無し、或は一二萬を以て自ら安んじ、或は四五十萬百萬を以て自ら安んじ、其慾大小有りと雖も、抑々進みて已まず、死に至る迄經營造作して休せざる者は殆ど有ること莫し、近日我紳商中、獨り安田某、古川某、淺野某、雨宮某の如き稍や進取の氣に富めるを見る、其他は正に十萬に安んじ、百萬に安んずるの徒也、ロースチャイルド、ワンダービールドの巨貲は、此輩の到底夢想し得る所に非ず

○其官吏に在ても亦然り、課長と成れば輙ち自ら安んず、局長と成れば輙ち安んず、國務大臣と爲るに及では其自ら安んずる更に大にして、卽ち其勢位に據り事を行ひ、以て君恩に報じ民意に副うて盛名を成すことを思はず、唯其地位を喪はざらんことを是れ務めて、故らに無爲を事とし、以て破綻を致さゞることを求む、我二十三年以後の內閣卽ち是れのみ

○其學校の諸生に在ても亦然り、學士號を授かれば卽ち自ら安んず、博士號を授かれば卽ち自ら安んず、此學位に稱ふ所以の實力を有すると否とは、曾て自ら省せず、況んや此れより更に益々學に勤めて、以て事功を擧げ、若しくは好著述を出して世に益することを求むるが如きは、絕て以て念と爲さず、故に今の學士博士家にして好著有る者、蓋し之れ有らん、吾未だ之を見ず

○夫れ國人各階級、各職業、皆小成に安んじ易くして、而して大に改むること無きときは、其

國家に在りて實に寒心す可し、歐米諸國の斯の如く盛大なる者、他無し、其民皆孜々として其事に勤め、死に之くまで他靡きに由らずんばあらず、緬甸、土耳其、埃及、朝鮮等の萎靡振はざる今日の如くなる所以の者、其民小成に安んじて肯て勤めざるが故也

○大國民と小國民との別は、疆土の大小に因るに非ず、其氣質胸宇の大小に是れ因る、今や英國本土は斯くの如く其れ狹小なり、而して五洲到る處英領無きは莫し、而して凡そ其作爲する所、皆洋々大國の風を呈露せざる莫き者は、其胸宇の大なるに起因せずんばあらず、猗與盛なりと謂ふ可し（七月十八日堺市に於て此稿を畢る）

第三

○近日學士輩往々言ふ、獨逸學術極て盛を致し、其工商業に當用せらるゝこと益々切實にして、其製造する所精巧にして價廉なり、英國の販路皆拆けて獨逸の領分に歸す、蓋し英國は衰運已に兆せり云々、然れども看よ、英が南亞に事有ること既に久しく、其兵を用ゆる三十許萬、其財を靡する十餘億、其間又北清の事有り、然り而して未だ曾て金融逼迫を告ぐる有らず、息錢常に百分の三四に往來して、其以上に騰らず、其富資の固き眞に人をして驚嘆せしむるに足る、英國未だ遽に輕じ易からざる也

○七月三十日井上甚太郎君來り余が疾を問ふ、余の君と相識ること玆に殆ど二十年、君讃岐の人也、余の始て君を見るや、君早已に口を極めて、歐洲糖業の盛にして讃岐の糖の遠からずして壓倒し去られんことを論道し、速に學術を當用して之れが改革を謀るの必要を唱へ、當時既に其意見を詳述し、活刷して當業者に頒てり、而して其時や、邦人過半或は殆ど全部は、皆外糖を厭ひ、讃岐の三盆を以て最良のものと爲し、即ち當業者も亦自ら安んじて、肯て井上君に聽かず、爾來幾くも無く、菓子商最も首に外糖の精にして渣滓少きを悟り、復た内糖を用ゐず、其れより他一般外糖を用ゆる者、日月滋々多きを致して、内糖竟に壓倒し去られ了れり、井上君次に又内地鹽業に就て同一の意見を抱き、亦唱論すること極て到れり、今や獨逸の鹽年々輸入し來り下總醬油釀造家専ら之を用ゆと聞く、蓋し其苦汁寡くして有利なるを以て、猶ほ菓子商の最も首に外糖を用ゆるの利を悟りたると一般也、井上君の精思詳慮、以て事業の改正を唱ふること率ね此類也、即ち紡績や煙草や、其他百般農業的工事に於て意を致し査覈せしもの枚擧に遑有らず、蓋し君の如きは、余が前に論ぜる尤も眞面目の人物にて、今日我邦多數の人物、殊に目を當下の利に注ぐ政黨的人物と、夐然科を異にせり、其政友會に於て、常に亢爭論辯して少しも屈下せざる、如何に其眞面目なるかを見る可し

○試に井上君に問ふ、君の見る所を以てして、今の政友會中果て一人にても國家てふ觀念を懷ける者有る乎、權勢、利祿、地位、虚榮等都て身家の便を思ふ外、人民てふ意象を其腦中に映出す底の人物果て之れ有る乎、君苦笑して答へず

○井上君も亦余と同一の妄想を懷きし人也、即ち貴官大職に在るの人、及び代議士政黨員の如きは、身家の利益の外少しは國家とか人民とかの意象を腦中に蓄ふると信ぜし人也、而して今如何、此れ純然たる妄想たりし也、而して是れ洵に彼輩の智にして、吾人の愚なる也、何となれば國家なる者は兎も角も大物なり、其衰亡する迄には幾多個人を犧牲に供して餘り有り、然れば則ち國家を犧牲にして自ら益するに於て復た何ぞ憚るを用ゐん、人民とは何ぞや、無智なる農夫最も多きに居る、是れ天方に優勝劣負の大理に因て、他の智者の利益に供せ

らる可き物體に非ざる乎、嗚呼今の貴官、大職、代議士、政黨員は直に是れ啖人鬼と謂ふ可きなるのみ、我日本帝國の如きは、斯くの如き智者の啗食に供して、果して幾何年所を延ぶるを得可き乎

○然りと雖も、國家は兎も角も大物也、斯くの如き智者のみの窟宅には非ずして、亦余の所謂否な彼れ智者の所謂妄想家も其間に生存せり、是に於て乎、正義、公平、慈仁、愛國心、敵愾心の各種の妄念も亦相當の代表者を映出し來らずんば有らず、我日本帝國の如きも、彼れ啖人鬼に喰ひ盡されざる前、此等妄想家の來り濯するありて、社會は漸々眞面目に成り了るも未だ知る可らず、今日早巳に之れが象徴を示せり

○彼三四倶樂部中、帝國黨中、貴族院中、未だ社會の表面に現出せざる無名氏輩中、衷心より眞に政友會の智者一輩の所爲を憎疾して、夫の正義、公道、自由、平等、愛國等、都て言語として極めて陳腐なる、事實として極めて新奇なる意象を發揮する少數者を現出せんとするを見る、夫れ兆朕既に發せり、事實の之れに從ふこと蓋し甚だ遠からざる可し、世の眞面目なる人物よ、左迄に悲哀せず少しく自ら寛うせよ、皇天后土必ず我日本國を棄てざる也

○此兩三日來炎威頗る加はり、朝日新聞に九十度を報ぜり、其れが爲めにや余の一年半は、此際大に歩を進めたるが如き感有り、頸上の塊物俄然大を成し大に喉を壓し、裡面の腫物も亦部位を擴めたる者の如く、咳嗽頻々として發し、喀痰後呼吸大に促迫を覺ゆ、余喉頭癌を患ふる、今回を始と爲し(誰れにても勿論二回以上患ふる理なし)經驗無きが故に自ら明にすること能はざるも、食道の痞塞する甚だ遠からざるを覺ゆ、其れが爲めにや近日食氣殊に盛にして、粥三度四碗を喫し、菜物之に稱ひ、其間或は果物、或は菓子、手に應じて啗食し、其貪ること地獄の餓鬼の如し、故に余の目下の樂は、新聞を讀む事と、一年有半を記する事と、喫食する事との三なり、夫れ食啗斯くの如くにして、一日食道痞塞して食することを得ずして而も胃部は猶ほ健全にして哺を求むるに於ては、其不愉快果して如何なる可きぞ、故に余は今に及びて盛に食して快を取りつゝ有る也

○余明治の社會に於て常に甚だ不滿なり、故に筆を取れば筆を以て攻擊し、口を開けば詬罵を以て之を迎ふ、今や喉頭此惡腫を獲て醫治無く、手を拱して終焉を待つ、或は社會の罰を蒙りて斃るには非ざる耶、呵々

○明治八九年の頃なりしかと思ふ、余、西園寺侯、柏田盛文君、松田正久君、松澤憲君(幾何もなくして此新聞の爲に投獄せられて死せり)上條信次君、林正明君等と一新聞を創立し、號して東洋自由新聞と稱せり、當時自由黨未だ起らず、自由の字を把りて事物に蒙らせしは、蓋し此れを始と爲せり、其目的たる專擅制度を掊擊し、自由平等の大義を唱說するに在るを以て、時の政府に於ては方に正面の敵なりし、幾何も無く西園寺侯其筋の內諭を受けて新聞社を去り、尋で松澤其他一二人投獄せられ、新聞社竟に解體せり、其後自由黨起るに及び、余又板垣伯の囑に因り故島本仲道君、故馬場辰猪君等と所謂自由新聞なる者に載筆し、爾來大阪なる東雲新聞、後藤伯機關の日刊政論、及び二度目の自由新聞、立憲自由新聞、民權新聞等に主筆として揭載し、常に時の政府即ち薩長政府を攻擊して餘力を遺さず、爲めに誤りて我國體に加害する者と認めらるゝに至れり、今の余の疾即ち一年半は、俗に所謂業病なる者耶、而も余は他の一年有半即ち此記事を續けて、死に抵る迄攻擊の筆を騁せんと欲す、此れ又余の宿業に非ざる無きを得んや、呵々

○今や余の一年有半を記するや、旅寓の身一書をも携帶せず、余素より記性に短なり、今や參

考の書册無く、一々唯之を胸臆に取るのみにて、不自由殊に甚し、東京の宅に書籍有れば取寄することは極めて容易なるも、實は十數來余が家の恐慌の度、世上の恐慌よりも更に甚しかりしが爲めに、書籍の如きは漸次賣却して米鹽に代へ、今は一卷をも留むること無し、此れ余が事業に從事せし結果なり、世上智者其れ將に如何か憫笑せんとするや

○余の事業に於けるや、贏利は則ち他人之を取り、損失は則ち余之れに任じ、其末や裁判、辯護士、執達吏、公賣等續々生起し來りて後已む、是れ余が數年來事業に從うて遭遇せし所の境界の順序なり、今や不治の疾に罹り百數十里外に流寓して、定て荼毘の骨を以て家に歸る事と成る可し、然れども余の本領は別に在る有り、他なし此一年有半卽ち是れ也、是れ卽ち余の眞我也

○四五日前、寓の主人大上君の室に至り、晤話の末偶然君の机上の書筐を胠き、眞山民詩鈔と唐宋八家選本とを見る、余大に喜び、恰も天涯萬里の客舍に知友に逢ひたらんが如く、直に主人に乞うて借覽し、大に文思を養ふことを得たり、是より余が樂事又一箇を增し來り、先づ眞山民の詩より始めり、惟ふに余の此書を繙きしは十七八歲の時なりし歟と思ふ、其記憶に存せしは「絡緯數聲山月寒」の一什にして、餘は皆忘れて今始て讀むが如し、故に興味滋々饒し、記性の弱なるも亦時として益ありと謂ふべし

○山民の詩聲調極めて佳にして、立意は新奇を倘びて、所謂他人の牙後に落ちざる者、是れ最も倘ぶ可し、詩にもせよ、和歌俳句にもせよ、古人の意を蹈襲して、纔に字句の表を變じたる者は、一誦人をして厭氣を發せしむ、然れども和漢滔々大率皆是れ也

○余常に以爲らく、漢詩文は宋以後は觀るに足らず、誦ずる所古人の燒直しに過ぎず、故に余は宋以後の詩文は一讀して後復た反顧せず、夫文人の苦心は、古人の後に生れ、古人開拓の田地の外、別に播種し別に刈穫せんと欲する所の處に存す、韓退之所謂務去陳言戞々乎其難哉とは正に此謂なり、若し古人の意を蹈襲して、卽ち古人の田地に種穫せば是れ剽盜のみ、李白、杜甫、韓柳の徒何ぞ曾て古人を襲はん、獨り漢文學然るに非ず、英のシェクスピールや、ミルトンや、佛のパスカルや、コルネイユや、皆別に機軸を出さゞる莫し、然らずんば何の尊ぶ可きことか之れ有らん

○山民立意の斬新の外、大に意を聲調に用ゐたるものの如し、故に其詩他の宋人に比すれば、大に唐人に肖似する所有り、後世高青邱、蓋し山民の此等の處より悟入したるに似たりと、編者近藤南州の言誠に善し、青邱の詩正に立意斬新にして、聲調は則ち往々唐賢に迫れり、是模擬に非ずして自然の肖似なり、倘ぶべき所以也

○余、佛のコルネイユのシード、シンナー、ラシンヌのアタリー、イフィジェニー、近時ユゴーの諸作を讀みて、以爲らく漢詩に於ても亦此種の作を規撫して之を出すときは、大に人耳目を新にするを得ん、但此時に在て字句の雅醇なるを得ること極て難かる可し、槐南、寧齋、種竹の諸子と謀らんと欲せしも竟に果さず、此等大家の筆を以て變化を圖るときは、其功必ず大に觀る可き者有らん

○槐南先生の詩學は、獨り我邦詩人のみならず、彼土作家と雖も恐くは以て倘ふること莫かる可し、其作は余多く目を經ずして凡そ讀誦したる者は皆佳なり、先生の作實に其立意措語好きのみならず、題と副ふの一事極て其意を用ゆる所なりと見ゆ、且つ槐南、寧齋、諸子に倘ぶ所は、他の我邦人の如く間接に材料を佩文

韻府の如き機械より取り出し來るに非ずして、直に之を我が腹中の笈笥より取出し來るものの如し

○近時の漢文は一も觀るに足る者無し、其歸震川王遵巖の奴隷たるに甘んぜずして、更に下りて宕陰息軒の爲めに鞭を執るに至れり、其陳々腐々、人をして一讀頭痛を發せしむ、獨り岡松甕谷先生は實に近代の大家にして、其譯常山紀談、東瀛通鑑、記事本末、莊子注釋等の如き、他の漢學先生連中の夢にも想ひ至らざる所也、此等の書余之を鈔せんと欲せしも貧にして能はず、其原稿今果して誰氏の許に在る乎、切に善く保存して、時宜を待ち公行せられんことを望む

○岡松先生敍事文に於て大に力を用ゐられたり、其材を取る極て宏博にして、即ち三代秦漢より下明清に及び、旁ら稗官、野史、方伎の書に至る迄、時に應じ意に任せ、驅使して遺さず、而して其紙に著はるゝ所、所謂字々軒昂して、而も且妥貼を失はず、其常山紀談を譯する原文の一字をも漏逸せず、乃ち馬の綿轡、鑾の鐘鐸等の音と雖も、皆譯定を經て、而して字面一々出處無きは莫し、山陽息軒と云はず、徂徠と雖も恐くは筆を投じて膝前に平伏せざる能はざる可し、先生學殖斯くの如くにして、而も他の川田、重野の輩博士號を授かるに反して、一寒措大を以て家居して歿せり、然れども是れが爲めに先生に於ては始より損する所有らず、又益する所有らず、蓋し其川田重野に同じからざる所、正に益々尙ぶ可き所以なる歟

○團洲梅幸の優たる、是も亦今代の雄なり、余家内子供を拉して屢々往觀せり、即ち團の言外に意味有りて巧に人をして領略せしむる、菊の十二分の處迄透徹して遺憾無き、兩人相待て奇觀を成す、又秀調の老錬なる、芝翫の美にして艷なる、皆以て人心を怡ましむるに足る、但眞の惡形に至りては、團菊未だ人を厭しむる能はず、蓋し團は天姿上品にして惡なること能はず、菊は天姿輕佚にして毒々敷きこと能はず、故に師直、仁木、瀧口等に至ては團菊共に嵌らず、余曾て之を觀たるに、團の師直たる、其鮒ちや鮒ちや鮒士等の語、如何にも外より借來れるものにして、少しも憎む可きを見ず、是に於て乎團藏に待たざるを得ず、團藏場に上りて一瞥すれば、輙ち其骨を徹せんと欲せしむる迄に憎々しき也、余常に思ふ團十、菊五、團藏の三人をして一場に演ぜしむるときは、眞に奇觀を出すを得可し

○相撲は今の雷權太夫の梅ケ谷たりし時、是れ眞の日の下開山の號に稱ひしと謂ふ可し、五六年相繼で敗を取りしこと無く、又分けを取らず、唯々勝を取りしのみ、西の海小錦の横綱、皆相下れること遠し、蓋し眞の横綱たるに値する者無き時は、位を空くして二年にても三五年にても、眞の強力者即ち五六年間敗せざる者を待ちて、始て之を授くるときは、横綱の位尙くして、眞に日の下開山の名に副ふと雖も、夫れにては協會の利益手段に於て、定て不可なる所有る可し、故に歷代の横綱力士に於て大に差等有るを免れず、今の大砲、常陸山、梅ケ谷の屬、強は則ち強なるも、未だ二年間敗れざる者有らず、蓋し是れ時の運乃ち然らしむる者有る可しと雖も、抑々横綱を帶ぶる前日迄、時々失敗を示しては、何となく尊ぶ可きを見ず、蓋し今の横綱は猶ほ内閣に於ける總理大臣の如く、必ず無かる可からざるが爲めに、姑く之を置くと云ふ爾、梅ケ谷(雷)の横綱たりしは猶ほ故大久保公の内務卿たりしが如く、其名よりは其實に於て尊ぶ可きを見る也

○然れども余相撲に於ては未だ巧者に至らずして、動もすれば今の力士を以て陣幕、鬼面山、雷電、境川に比して、之れが聲價を減ぜんと欲す、

此れ定て不公平の見なる可し、何となれば相撲のものたる元來相對して勝敗を見るが故に、強き者兩々相對するときは、勢ひ勝敗相半せざる能はず、故に異代の相撲を把り來りて、之が絕對の優劣を判ずるは、殆んど出來可らざる事也

○余近代に於て非凡人を精選して、三十一人を得たり、曰く、藤田東湖、猫八、紅勘、阪本龍馬、柳橋（後に柳櫻）、竹本春太夫、橋本佐內、豐澤團平、大久保利通、杵屋六翁、北里柴三郎、桃川如燕、陣幕久五郎、梅ケ谷藤太郎、勝安房、圓朝、伯圓、西鄕隆盛、和楓、林中、岩崎彌太郎、福澤、越路太夫、大隅太夫、市川團洲、村瀨秀甫、九女八、星亨、大村益次郎、雨宮敬次郎、古川市兵衞、然り而して伊藤、山縣、板垣、大隈は與からず、而して其他擾々たる者、曰く彼等哉、彼等哉、人名辭書の四半頁をも汚すに足らず

○西園寺侯、氣宇高亮、識見宏遠にして、加ふるに聰明匹儔なし、但其太だ聰明にして、一切事に於て直に輒ち其着落の處を透觀するが爲めに、一も侯の好奇心を動かすに足る莫し、即ち天下如何なる事も侯に於ては始より奇なる莫し、即ち此侯や好奇心有る無し、是れ其冷々然として些の內熱無くして、其丰采に接し其言語を聽く者をして、亦皆其內熱を冷却し去らしむる所以也、侯其心必ず曰く、我兵を用ゐん乎、アニバル、ナポレオンには踰ゆ可らず、政事を執らん乎、ビスマルク、カウールには勝る可らず、且縱令我之を爲さゞるも、世間之を爲す者餘有り、我何ぞ人と功名權勢を爭ふことを須ゐんや、故に常に避けて就かず、其伊藤侯を佐佑するや、風に於ける柳の如く、菜花に於ける胡蝶の如く、亦唯冷々澹々、毫も自己靈臺に映射する所無く、自己志氣を動かす無し、郭嘉荀彧の阿瞞に於けるとは大に科を異にせり、到底侯は當局政事家たるを肯ぜざる也、可惜

○近衞公、最上名門の胄を以て、南船北馬少も勞を辭する無く、尤も意を東洋大陸の事に用ゐ、其薩長內閣に伴食大臣たるを肯ぜずして、獨り好みて學習院に長と爲り、華族子弟の敎育を司る者、是れ其志趣遠大なりと謂ふ可し、但余、公に於て謁を得る一再に止まり、其中に有する所果して如何を伺ふこと能はず、其他日果して衆望に稱ひ、天下の心を厭足するや否やを知らず、其大織冠公の裔たるに孤負すること勿くんば國家の幸也

○黑田長成侯、盛名有りと雖も、而も余曾て謁を得、座を賜ひしこと有らず

○犬養木堂、其狀貌を相るに精悍の氣盎然外に溢る、是れ定めて膽氣有る可し、其目光烱々たるを以てすれば、是れ定めて機智餘有る可し、然り而して其自由黨と相追逐する、動もすれば先を制せられて未だ大に氣を吐く有らず、惟ふに其人や、餘りに東洋的に、餘りに三國志的にして、事を事とせず、寧ろ晝眠以て三顧を待、寧ろ蝨を捫して主人を驚かすを喜びて、意地きたなく進取するを好まざる可し、然れども終に是れ得易からざる才なる可し

○大石正巳君、人と爲り活潑磊落にして大志有り、物を待つ寬平にして、自己は則ち矜持頗る高く、爲さゞる所無く、敢てせざる所無きが如くして實は然らず、其守る所幾ど人をして頑固と疑はしむるもの有り、是れ或は外人の覷破せざる所なり、但君も亦其學問を歐米にして、其識見を二十世紀にして、而も其行事は東洋的に且つ三國志的なり、加之執着力極て寡弱にして、往々初は脫兎の如く後に處女の如きの弊有るを免れず、今少く其品を下すときは、好箇二十世紀の政事家と爲るを得可き歟

○尾崎學堂の進歩黨を去りて政友會に入るや、他に意趣有りたる可きも、外より之を察すれば、其入閣に急にして、先年共和演説の餘毒を拂拭するには、伊藤侯天寵の渥を慕ひ、侯に頼り以て身を立つるに如かずと慮りたるものにて、其露と謀を連ぬる云々は、特に一時世人を瞞着せしに外ならざりしと、此想像にして眞に近き乎、學堂終に節義に病むこと無きこと能はず、左りとは學堂も亦其聲價を減ぜられざる能はず、我れ其更に一層政事家的なりしを信ぜんと欲す、要するに其智木堂に及ばざること遠きこと甚し

○田口卯吉君は翩々たる好博士也、凡そ今の文學博士中、著書の多き君に踰ゆる莫かる可し

○島田三郎君、口辯有り、文筆有り、精力も亦恆人に下らず、而して其名望甚だ揚らざるは何ぞや

○佐々友房君、小心謹密にして操行堅固なる可し、其政敵と雖も其敵す可きを見ずして、寧ろ一日相共にす可きを見て、心竊に之を延納するが如き態有り、是れ定て度量の稍や大なる所以なる可し、但志慮太だ周匝にして、恐くは爲めに時機を逸すること有るを免れざる可し、余亦再せば斯れ可なりと曰はんのみ

○頭山滿君、大人長者の風有り、且つ今の世、古の武士道を存して全き者は、獨り君有るのみ、君言はずして而して知れり、蓋し機智を朴實に寓する者と謂ふ可し

○坂本金彌君、年少白面輕薄才子の態有りて、內實に氣膽有り、識度も亦高遠なり、余唯一たび交語し大に敬意を發せり、是人後必ず名を成す可し

○今の內閣大臣及び前內閣大臣、特に加藤高明君、山本權兵衛君の如き、其人定めて多少學術有る可し、凡そ此等四十年位の輩は、縱令其最も汚下なる者も、薩長元老に比すれば大に田勝る可し、士官學校又は江田島學校出の佐尉官と、算數を知らざる元帥若くは大將との優劣の如くなる可し、而して彼れ元老輩猶ほ且つ皐姑然として、動もすれば其施政の際に、口を騰る有り、此れ其人國家の進運に害すること如何ぞや、時の日害つか喪びん予れ女と偕に喪びん、我薩長元老に於ても亦言ふ

○故黑田淸隆君、是に於て少しく人に出づる者有りしと謂ふ可し

○近來新聞紙上屢々恐露病てふ文字を見る、我政府の過度に露を罹るゝの謂なる可し、而して定めて此事實有る可し、然れども余は更に言ふ、我政府即ち薩長政府は久く恐外病に罹れり、歐米强國に論無く、支那朝鮮と雖も之を憚ること特に甚し、其亡命の徒を處する、往々其當を得ざるを見て知る可し、若夫れ他の諸强國に至ては、之を懼るゝこと更に甚し、蓋し彼れ强國、其物質の學の術に至ては、眞に人をして驚嘆せしむるに足る、然れども一たび理義の際を察するに及では、其畏る可きもの果て安くに在るや、外交と號する詐欺を逞しくして、其相排陷傾奪するの狀、宛も餓狗の腐肉に於けるが如し、我その賤しむ可きを見る、其敬すべきを見ず、但近日營を北淸の野に連ぬ、聯繫して敵に當るに方り、彼等が大に其弱失の處を見はして、蠻野の風を發せしを見て、我邦軍人輩、皆始めて彼等の所謂文明の往々形質の表に止まりて、理義に至ては我れと相下らず、或は大に我れに劣る有るを知れり、今より以往所謂恐外病其れ或は少く痊ゆるを得可き耶、蓋し一の極より他の極に走るは常人の情也、我邦人明治中興以前に在ては、外人を輕蔑すること殊に甚しく、曰く彼れ邪教を奉じて人の國を覦ふ、曰く彼れ異臭有り醜穢極まれり、曰く斯々、曰く云々と、是に於て諸藩少壯輩勸王敵愾の心に富むと自稱する者、

苟も途上碧眼の人を見れば、直ちに刀を拔て之を斫れり、武州生麥の事、泉州堺の事、其他枚擧に遑あらざる外人殺害の事、皆唯此くの如き意嚮の然らしむる所たりし、是正に侮外病と謂ふ可し、既にして開港互市の令を行ひ百度則を彼れに取るに及び、漸次に乃ち柔懦に流れて、其末や終に恐外病に陷りて、苟も外人と云へば之を懼るゝこと虎の如くなるものは、正に一の極より他の極に走りたるものに非ざる耶

○是故に今日我邦人が外國に在て、正義自ら持して敢て法度の外に逸せざる者は、其自ら守る所有ると云ふよりは、寧ろ懼るゝ所有るが爲めなり、蟲持の小兒は自然に害悪を爲さず、其勇氣に乏しきが爲めなり、我邦人の外人に對して能く道を守るは、蓋し蟲持の小兒に類する有るに非ざるを得る乎

○我外交の振はざる、蓋し我當局者知らず識らずの間、幾分夫の恐外病を持し、動もすれば、其蟲持小兒の爲めに類せんとするに因りて然るには非ざる乎、蓋し彼れ外人の我を輕んじ、我邦人の彼れを畏懼する、其習ひ既已に久し、往年(明治七年?八年?)岩倉公大使として歐米を巡回するに方り、大久保利通公倫敦に在てパークスと同車して、或る場末の一街を過ぐるに及び、適ま野狐有り走りて車前に來る、パークス之を見て急に拍手を打ちて之を拜し、公を顧みて微笑せり、蓋し我邦人の稻荷を祭るを以て、パークス之を愚弄して乃ち嘲る也、夫れパークス何人ぞ、其大久保公に比して主人と奴隷とのみならず、而して猶ほ此くの如し、故に此一點よりして云はゞ、往年日清の役並に近日北清の役に於て、我軍人が大に勇を戰陣に奮ひ國威を耀かせしは、外人の輕侮を除き我が恐外病を痊すに於て大に功有りしが如きも、飜りて政治經濟等に關するに至りては、恐外病尙依然たる者有るは何ぞや

○若し根本より恐外病を痊さんと欲せば、教化を盛にし、物質の美と理義の善との別を明にするに如くは莫し、夫れ學術如何に邃なるも、權勢如何に盛なるも、名望如何に隆なるも、若し子として父を虐し、良人として妻を窘しめ、朋友を欺き、及び諸々不善を行はゞ如何、我國家如何に強きも、隣國如何に弱きも、我れ故無く兵を隣國に加へば如何、外物は竟に理義に勝つこと能はざる也、本末の別あれば也、夫れ此言や、今の灰殼者流必ず言はん、陳腐聞くに堪へずと、然り凡そ理義の言は皆陳腐なり、之を言ふに於て陳腐なるも、之を行ふに於て新奇なり、且つ公等の陳腐とする所は、國家に於て皆極めて必要とする所也、男兒にして其面に粉し、丈夫にして其髮に膏す、是れ公等の新奇とする所にして、余は世人と共に之を臭穢とす、公等未だ理義の言に容喙するを許さざる也

○然りと雖も、單に物質と理義との別を明にするのみにては未だ足らず、即ち物質の美も、亦大に愛國心を催起するに於て力有り、而して愛國心の盛なる、自然に恐外病を癒すに足る、是を以て邦人の朝鮮支那に行く者、自ら之を憫恤するの念有り、而して朝鮮支那人の我邦に來る者、自ら我を尊尙するの心有り、他無し凡百事物の備具せる、彼れ大に我に及ばざれば也、即ち歐米諸國の如き、其我れに相勝ること我れの朝鮮支那に於けるが如き而已に非ずして、凡そ物件彼れより輸入する者、我内地に於て同一の物有るも其良否相比す可きに非ず、故に我賈人必ず言ふ、是上等舶來也と、夫れ凡百事物一々彼れ我れに勝る、我れ自ら卑屈を成す、是れ常人の免れざる所也、故に中人以下の如きは、獨り理義物質の別を明かにするのみならず、直に物質の美を進めて之

を示し、以て其愛國心を發せしめざる可らず、(戰爭の時の如き自ら別なり)故に敎化を盛にすると、科學を昌にすると、二つながら缺く可らず

○科學を普通にすること、是れ人々の皆認めて必要とする所也、只各種科學の中、我邦に於て未だ容易に世に售られざる者有り、卽ち理化の二學の如き是れ也、蓋し土木の如き、鑛山の如き、若くは醫の如き、其大學を出づるや直に售られて、官又は會社又は個人に聘せらる、理化の二科の如きは此くの如く直に售らるゝこと能はず、是れ他無し、事業家及び資本家の數絕對に寡くして、理化の二科に於て需用未だ蕃からざるが故也、是故に理學士たる者、往々玩具商の爲めに傭はれて、意匠を玩具に用ゐて、乃ち神佛の緣日奇利を博するの用を爲して、僅に口を糊する者有りと云ふ、是れ敎育家又知らざる可らざる一事なり、而して資本主と學士連中との紐結を蕃くすること、尤も肝要たり

○化學の如きも今日に在て應用未だ蕃からず、故に學士たる者、敎師と爲る外、之を事業に應用する道甚だ乏し、然れども余を以て之を思ふに、化學の如き其用極て博く、卽ち醫學の如き將來大發明を爲さんと欲せば、化學に資せざる可らずして、今の六十餘元素なる者、增して七十又は八十と成るか、或は減じて五十又は四十と成るも未だ知る可らず、思ふに今日化學的總合の術に由りて物質を製するもの、卽ち酸水の二素を引きて水を作るが如き、僅に二三品に過ぎざるも、其學の更に益々進むに及びては、他の有機物を製し、竟に血を製し肉を製し、其窮極する所、腦の作用たる智、感、斷の三者の如きも、亦化學的のものたるも未だ知る可らず

○科學を普通せしめ、盛に之を工業に當用し、以て精巧の物件を製すること、啻に國を富ますに於て、必要なるのみならず、亦人民の愛國心を涵養するに於て、極て必要なること前に論ずる所の如し、余嘗て歐洲に在て觀察するに、其巴理に於ては二三物件は英國廻りを尙ぶも、其他は皆な自國の製造を上等とし、價も亦貴し、曰く是れ地製也と、其倫敦に在ても亦同じく、二三物件殊に化粧品の如きは佛國製を尙び、其他は地製として自國の品を尙ぶ、凡そ是れ皆隱然の間に人民愛國心の表發を認む可く、亦之を涵養する所以を知る可き也

○若し之に反し、自國の物件一々劣等にして、中產以上の民皆給を外品に仰ぐが如きに至りては、戰時は措て論ぜず、其平時に在ては、自然に外國を尙びて、自國を卑しむに至ること、蓋し常人の情也、夫れ外尊內卑、是れ邦家の大患也、啻に男尊女卑のみに非ざる也、啻に官尊民卑のみに非ざる也

○橫濱商館の作頭洋妾、是れ外尊內卑主義の主唱者也、其次は灰殼卽ち廣襟連中也、其れより以往各階級の人物にして、隱然此主義を把持する者幾何人なるを知らず、蓋し憎む可く卑しむ可し

○然り而して尤も品能く尤も學術的の外尊內卑の主義を把持して、正に人をして少も省覺せしめざるに巧なる者は今の外交官然りと爲す、是れ又獨り憎むべく卑む可きのみならず、余は將に曰はんとす、此輩をして國際の務に膺らしむ、殆い哉岌乎たり

○余前に此書に於て、邦人相率て腐壞墮落の境に淪胥し去り嘆ず可きを言へり、惟ふに我邦久しく封建の制行はれ、人々各階級各族類に錮せられて振拔するに道無く、絕て競爭を容れず、卽ち農工商の中に在りても穀を商ふ者は幾世を經るも穀を商ひ、酒を商ふ者は幾世を經るも酒を商ひ、變換すること極めて罕なりき、一國民を擧げて殆ど化石したるが如くに相似て、絕て變動すること無かりき、絕て活動すること

無かりき、乃ち衣食住の如きに至りても、各階級各習慣ありて、其より侈なるを許さず、亦其より儉なるを許さず、一社會を擧げて魚介の形殼を變ぜざるが如くに相似て、之を要するに中產以下は質朴風を成し、否な質朴以上にして、卽ち人間以下の生活を爲し、以て常と爲せり、既にして明治中興の政布かれ、歐米の諸國と交際往復し、此等諸國貨物と其制度、文物、習尙、謠俗、被服とを併せて輸入し來るに及び、我舊物頓に消散し、一國を擧げて新天地の中に突入して、官民上下の階級は存するも、生活の樣は混同して一を成し、資力有れば游龍に鞭つ可なり、五層樓に倚る可なり、班階の別有ること無し、是に於て生活の度俄然昇騰し、人々皆其資力以上の娛樂を希望して、百方之を得んと欲す、是に於て乎、官吏に在ては苞苴賂遺以て身を肥やし、工商に在ては夤緣依附結託して奇利を覦ひ、加之維新改革の際に當り、數百年來刻急束薪の如き法度に窘められたる西國武士等一旦朝政に參し貴官を得るに及び、驕奢淫逸に流るゝこと奔矢の如く、大に都會淫靡の風を搆煽し、以て天下游冶の模範を垂れしより、紳商豪賈より、他中產以下に至る迄、相胥いで淪溺し、以て自ら夸と爲すに至る、是れ今日我日本帝國官民上下貴賤貧富一般各侈淫逸の習を成せし所以の歷史也、教育家、經世家、政治家、皆口を開けば、墮落腐敗を論ぜざるなし、洵に善し、然れども一たび活眼を闢て大觀すれば、一張一弛は人道の常にして、其今日の風を成せしは蓋しは勢也、自然の道驛也、已むを得ざる順序也、唯だ問題とする所は、能く此地獄外に一線の活路を切開き得るや否やに在り、能く大道に出でゝ長安に達するや否やに在り、而して余は前に云へり早已に好個の兆朕を發見せりと、東天些の明光を洩らせりと

○今日より各階級の人皆少く自ら修明して、理義の正に適合するを求むるに至る可し、且つ利益の點より考へて、爾か爲すに如かざることを省視するに至る可し、且此五六年來金融逼迫、工商不振の相繼ぎて間斷無きより、揮霍は貯蓄に如かず、而して貯蓄は節儉に因る、此外別に名策無きを知り、自然に侈靡の風を減じて、卽ち不義の富を要すること、前の如く太甚しからざるを得るに至る可し

○萬朝報社の理想團の唱は、正に此時機を窺破する有りて爾る耶

○理想團の本旨とする所は、余未だ其詳を得ずと雖も、而も人々自ら修明し、相共に名節を砥礪し、會合約束の微と雖も寸時も違ふこと無く、一言すれば君子と爲ることを求めて怠らざらんとするに在る可し、是れ善志也、夫れ政黨既に彼れの如くなる時は、所謂宣言と謂ひ政綱と云ひ、皆唯空言を臚列するに過ぎずして、人民たる者己れ自ら恃むに非ざれば、復た政事家に恃む所無し、理想團の必要たる所以なる耶、既に理想と云ふ、縱令其勢今日に行ふ可らざる者、卽ち純然たる理義の正の如きも、之を口にして之を筆にし、他年他日必ず之を實行に見ることを期するなる可し、卽ち自由、平等、博愛其他萬國と隔離する所の境界を撤去し、干戈を弭め、貨幣を一にし、萬國共通の衙門を設け、土地所有權及び財產世襲權を廢する等の如きも、其講求の中に在る可し、是れ大志也、其れ或は縲紲の苦と雖も辭せざるを期するなる可し、或は理義を解せざる狂漢の匕首をも避けざる可し、夫の某黨員某が區々たる一椅子を喪うて、氣沮み、心眩し、遽々然志を飜へし、十數年の交友を棄去りて敵黨に款歸したるが如く、世俗の虛榮を慕ふ無義無殘の徒の集合に非ざる可し、果して然らば團員諸君請ふ加餐せよ、余も亦石碑の後より、他日手を昂げて之を

祝する有らん

○團員諸君、諸君の志を伸べんと要せば、政治を措て之を哲學に求めよ、蓋し哲學を以て、政治を打破する是れなり、道德を以て、法律を壓倒する是れなり、良心の褒賞を以て、世俗の爵位勳章を拂拭する是れなり、紫を曳き朱を紆うて層樓の上に翺翔する、縉紳と號する、貴顯と號する、生きたる藁人形等は、宜しく之を千里の外に距く可し、唯だ獨り無爵無位の眞人之れに任ずるに足るのみ、團員請ふ加餐せよ

○八月三日、是より先き去月十九日より諸學校例年休業なるを以て、余の嫡男早稻田中學に上りし者年十三、東京より來り居り、毎日午餐後大濱に赴き游泳し、旁ら蛤蜊を撈うて歸る、此地蛤蜊に名有り、且余尤も是物を嗜む、因て毎日吸物と爲して食す、巴理カフエーアングレーのスープも及ぶこと能はざる也、余疾を得てより大に甘味を好む、是に於て毎朝粥を啜るに必ず砂糖を和す、又桃及び李の類皆砂糖を和す、蓋し胃と腸とは極て健全なりと見ゆ、但近日喉頭殊に緊窄を覺え、頸頭の塊物毎夕七時より疼痛を發し、進で左方頭部に及びて神經痛を起し、八時に至て終に已む、是れ特に近日の炎暑の爲めに然る耶、將た余は日々筆を秉りて余の一年有半を記し、社會各階級皆唾罵して餘力を遺さざるが故に、或は天余を憎みて、彼れ一年半を曠し、約を破りて大踏歩し來らしめ、以て速に余を殛罰して、所謂息の根を止めんと欲するに非ざる無きを得る耶、果て然らば余も亦歩調を迅速にし、一頁にても多く起稿し、一人にても多く罵倒し、一事にても多く破壞し去ることを求む可し、是に於て此炎暑の甚しき、健康の人と雖も晝間唯だ酣眠するのみなるに、余は病羸の身を以て、毎日筆を操りて、敢て懈ること無し、或は天も亦余の罵詈癖の頑なるに驚かざるを得ざらんとする耶、好笑

○余が當地に在るや、東京留守許より大抵書翰一日二日を隔てて必ず來る、而して債主の來り催迫せし事、若くは執達吏の來り封印せし事を報ぜざる莫し、是は則ち獨り余が身に於て不治の病を受けしのみならず、東京の余が家も、亦惡性の疾を受け居れりと謂ふ可き耶、此外患內憂に方り、余の罵詈病の益々僭烈なるを致すも亦宜ならず乎、此際余の味方たる者は、唯余の妻と、余の兒子と、余の筆と有るのみ、而して余に於て足れり、此れを除非して復た外に待つを要せず

○然りと雖も寓の主人大上君及び當市の知友、余の此くの如きを見て甚だ余を憐み、遇待せらるゝこと頗る渥し、蓋し此等の諸君は皆優に朝報社の理想團中に入る可き價値有る也、余の自ら慰するを得ること萬戸侯啻ならず、德孤ならず必ず隣有りとは此れの謂乎

○近日東西の新聞一も興味の事有る無し、大阪市長の辭職、其代人の選擇、伊藤大勳位の東北行中止、是くの如きのみ、而して余に於て一も心を用ゐしむるに足る無し、余の期待する所は、一葉落ち涼風生ずる後大阪堀江明樂座と御靈文樂座と開場するに及び、幸にして余猶ほ往來するを得て、今兩三回大隅太夫、越路太夫の義太夫を聽き、玉造、紋十郎の人形を視て、以て暇を此娑婆世界に告ぐるを得んこと至願也、余の音曲に於ける饕餮啻ならず、而して此等傑出せる藝人と時を同くするを得たるは眞に幸也、余未だ不遇を嘆ずるを得ざると謂ふ可し

（八月三日堺市に於て此稿を畢る）

「クーデーター」及國安

社會問題

社會黨の運動

五月一日の社會黨運動會に就いて

五月一日及び總擧同盟罷工

『社會問題』と『近世文明』との關繫に就きて

酒井雄三郎

「クー、デ、ター」及國安

佛朗西語に「クー、デ、ター」(Coup d'etat)と言ふことあり、邦語に之を暴擧又は掩撃と譯す、然れども其意義未だ盡さゞる所あり。蓋し「クー、デ、ター」とは國長、大臣、又は政權を秉れる一黨派の者が、其國人の中にて己れの專横に抗し、己れの野心を妨げ、其他何事に限らず己れの施爲する所に反對する輩をば、一時に捕縛し、禁獄し、追放して、從前より取極めたる法律の條文などには、一切頓着せざる亂暴狼藉の所業を謂ふ。故に平たく之を譯すれば、政府の暴行と云ふこそ或は穩當ならんか。モーリース、ブロック氏は此の文字に解釋を下して、『人民より政府に暴行を加ふるを叛逆と云ひ、政府より人民に暴行を加ふるを、「クー、デ、ター」と云ふ』と言へり。勿論「クー、デ、ター」を實行する手筈を定むるには、極々祕密を旨とし、其の發するや、所謂る疾雷、耳を掩ふに及ばざるが如く、何人も其難を遁るゝの暇なきを以て、屢々斯樣の暴行ある國に在りては、謹厚誠實の士も枕を高くして安眠する能はず、爲めに往々不測の大變動を惹き起すことあり。佛國近世の歷史を按ずるに、此の忌はしき文字は、實に其功烈千古に赫々たる大革命の事業に幾多の瑕瑾を與へ、「モンターニュ」黨は之を以て「ヂロンダン」黨を踏し、ロベスピエールは之を以てダントン、ヘベールの諸士を除き、而して「ヂレクトアール」政府亦た之を以てロベスピエールの一派を覆したり。降てナポレオン一世及びナポレオン三世が兵力を以て議院を劫かし、强項屈せざる代議士は先づ拘へて獄中に押し込め、仍て自立して大統領と爲り、終に帝號を僭竊せしが如き、シャルル十世が卒かに兩議院を解散して一時に全國の新聞を停止し、擅まゝに選擧法を變改して國人の怒に觸れ、自ら放逐の禍を速きしが如きは、是れ皆「クー、デ、ター」の著名なる者なり。去れば佛朗西は前世紀の末年より此の無法なる暴行の爲めに、動もすれば平穩にして秩序ある進步を妨げられ、革命に次ぐに革命を以てし、騷亂に易ふるに騷亂を以てし、國民一日も安堵の思を爲すこと能はず。凡そ國人の學識あり名望あり材德あり器能ありて、而して正道を履み節義を失はざる者は、則ちその正道を履み節義を失はざるの咎に由りて、常に此の暴行の犧牲となり、加ふるに其反動の結果は、國民一般に政事上に於ける寬厚の美德を失うて疑惧の念慮を增長し、英邁卓異の士あるも其驥足を展すに道なからしむ。現今に至るまで、佛朗西内閣の交迭極めて頻繁にして、政府常に搖々不定の有樣あるを免れざるが如きも、其病根蓋し之に外ならず。「クー、デ、ター」の禍も亦た大ならずや。

且つ夫れ吾人が藉々然として第十九世紀の功業を頌揚するは、その能く文明の光輝を放つて暗黑なる邪惡の魔界を照らし、暴力の荒野を開拓して道理の版圖を恢弘するが故なり。然るに今や吾人の利害に最も重要なる關係を有し、吾人の腦經に最も痛切なる感觸を與ふべき政事世界に於てすら、其文明の光輝、至つて微にして、道理の領分極めて狹く、而して彼の政事家の經典とも稱すべきマキヤヴェールの權謀とビスマルクの鐵血とは今猶ほ轡を駢べて人類社會に猛威を振ひ、殊に「クー、デ、ター」の如き無理無法の文字、未だ當世紀の歷史より刪除せられざるを視るときは、吾人は失望の歎聲

を放つ無からんと欲するも能はざるなり。

左れど滔々たる世上の政事家が、其人望を干むるに汲々たること彼れが如く、其虚名を貪るに熱心なること亦た彼れが如く、而して田夫、野人も、猶ほ且つ彈指して其無法を咎む可き「クー、デ、ター」の如き暴行を爲し、悍然として憚るの色なきは、豈に賴む所なくして然らんや。意ふに一個紕繆の旨義の之が說明者となり、之が辯護人となり、以て其暴行を助くれば也。然り現に紕繆の一旨義あり、古來深く政事家の肺腑に浸染して容易く爬掃す可らず、其旨義たる他にあらず、國安は最上無比の法則なりと言ふこと是れなり。

Salus populi suprema lex esto (羅句)

『國に政府の存するは其國の安寧を維持するが爲めなり。故に政府は其存立の目的たる國安を維持するが爲めには、如何なる手段を施し如何なる處置を爲すとも、一切妨げある可らず。何となれば、目的は手段を辯解すればなり』とは、世の所謂實務政事家の論理の根據とする所なり。噫是れ果して正當の論理なるか。所謂目的は手段を辯解すとの古諺は、果して如何なる場合に於ても人の必ず適用するを得べき不易の金言なるか。若しも之を正當の論理なりとし之を不易の金言なりとせば、更に此の論理を推して、『人の世に在るは、己れの生存を保ち己れの福利を求むるが爲めなり。故に人は其の處世の目的たる生存を保ち福利を求むるが爲めには如何なる手段を施すも一切妨げなし』と謂ふを得べく、極言すれば、『人は己れの生存を保ち己れの福利を求むるが爲めに、勝手次第に他人の權利を侵し、他人の財寶を掠め、他人の身體を戕うて些しも構ひなし』と謂ふを得べし。世豈に斯かる無法千萬の論理あらんや。勿論一國の安寧を維持するは、一國を統治するの任ある政事家に取りて一の重なる法則たるに相違なし。然れども、是れ單一個最上無比の法則にして、世には此の法則の外に一層大切なる法則はなきか。國民は如何なる代價を拂ひ如何なる損害を被るも、必ずその政事家より賣付けたる安寧(外見上の)を買はざる可らざるか。古今を問はず、遠邇を論ぜず、凡そ此の地球上に生息する人類が、造次顚沛の間も守つて違ふ可らざる一個嚴然たる法則の吾人の頭上に照臨する者なきか。且つ人己れの生存を保ち己れの福利を求むるを必要とするは何故ぞ。その能く之に資りて道を修め德を硏き、以て人たるの本分を全くするが爲めに非ずや。政府、國安を維持するを必要とするは何故ぞ。亦能く之に資りて正道を扶立し理義を闡明し、國人をして皆その權理を亢張し其の義務を服行するを得せしむるが爲めに非ずや。故に人は己れの生存を保ち己れの幸福を求むるの外に、更に之より大なる職分あり。政府は其國の安寧を維持するの外に、更に之より大なる責任あり。何ぞや、正義の法則を循守する是れなり。若し人その小なる目的の爲めに大なる職分を懈るときは、則ち其行を指して惡行と云ひ、政府その小なる責任の爲めに大なる責任を遺るゝときは、即ちその政を稱して惡政と云ふ。故に目的は手段を辯解する者にあらず。如何に其目的は善みす可きものあるも、苟も其目的を達する手段にして惡政に類し惡行に涉る者あるときは、正義の法則は均しく之を犯罪者と視做し、決して其罪を寬假することなし。近く吾が國に於て一の實例を擧ぐれば、年來各地方に於て屢々太平の天地を驚動し、明治照代の歷史を褻瀆したる彼の國事犯罪人の如きも、若し其の目的の存する所を問はゞ、弊政を釐め民害を除き權利の枉屈するを伸ばさんと欲せしに外ならざりしならん。左れど其の目的を達する手段を視れば、人を殺し財を奪ひ警察官に抵抗し爆裂弾を飛ばすが如き、亂暴狼藉の

所業に過ぎず。故に彼等の懷抱せる善良の目的は、彼等の實行せる兇器の手段、即ち彼等自身の所謂る非常手段を辯解するに足らずして、彼等の同類は皆な捕はれて獄に繫がれ、惟ゞに裁判所の處刑を受けしのみならず、亦た罪を正人君子の輿論に得たり。一個人の爲す所、既に然り。政府と雖ども亦た胡ぞ然らざらん。若し政府は一個人に超異したる强大の權力を有するが故に一個人の爲す能はざることをも擅まゝに爲すを得べしとせば、最早やこの世の中には正邪善惡の差別なきなり。吾人人類は再び坦々たる道理の平地を離れて暴力の荒野を彷徨するなり。彼のホッヅブスの所謂る『人は常に其力、之を爲すに勝ふる者を爲すの權利を有せり』との僻說は信の僻說にあらざるなり。三千年來、幾多の哲人君子が其考察の及ぶ所を極め其思想の精英を萃めて折角に建立したる道義學の原則も、詮じ來れば癡人の譫語と一般にして、曾て一文半錢の價値だも有せざるなり。豈に哀しからずや。

然りと雖ども吾が人類社會は幸にして斯く果敢なく淺ましき者にあらず。如何に人事の錯亂するも如何に暴力の跋扈するも、正義の法則は嚴然として終始吾人の行狀を監視し、若し一たび此の法則を犯す者あるときは、其力の大小强弱を論ぜず、又た其犯罪者の政府たると一個人たるとに係らず、必ず之に相應する刑罰を被らざるなし。但し一個人は小なる犯罪者なれば其刑罰も隨つて小にして、多くは禁錮、懲役の類に過ぎざるも、政府は大なる犯罪者なれば其刑罰も亦た隨つて大にして、革命內亂等の如き慘毒なる禍を受く。一個人の犯罪は裁判官ありて直ちに其判決を下すも、政府の犯罪は百世の下、公平なる歷史家の判決を竢たざる可らず。佛朗西革命の歷史こそ則ち之れが明證なり。視ずや、佛朗西革命の國安委員を。視ずや、彼れ委員が其職務を盡すの厚き亦た至れりと謂つ可し。彼れ身を挺んで、大難の衝に當り、進みては外敵の侵寇を禦ぎ、退きては內地の叛亂を鎭め、以て其國安を累卵の危きに維持したり。然れども、其施爲する所は、殘暴橫虐を旨とし、屢々「クー、デ、ター」を用ゐて敵黨を陷擠し、曾て正義の法則に依循するを思はざりしが故に、彼等の黨類は、前後二年を出でずして多くは身首處を異にしたり。而して國安委員の名稱は今猶ほ佛朗西の爲めに惡魔に均しき記念を留め、一人としてその國安を維持したる功勞を追慕する者なし。此他古今の歷史に就きて、國安の維持を名として濫りに正義の法則を犯し、仍て身を亡ぼし國に禍ひしたる例證を求めば、固より枚擧に遑あらず。咄、誰か國安は最上無比の法則なりと言ふや。

總じて之を論ずれば、凡そ一國の安寧を維持するは、固より政府の職務にあらずとせず。然れども是れ唯ゞ尋常普通の職務にして何も俄かに天より降り地より湧き出でたる絕無希有の事柄にあらず。平穩寧靜なる手段を以て其國安を無窮に維持するこそ、信に政事家の技倆とも謂ふ可けれ。然るに、平素此等の邊に心懸けなく、一朝何か事あるに及んで周章狼狽を極め、「クー、デ、ター」の如き亂暴なる手段に依賴して辛うじて其國安を一時に維持するは、是れその國に忠誠なるの致す所にあらずして、寧ろ其力量の、職務の重きに堪へざるの致す所と謂はざる可らず。何となれば、渠等は尋常なる手段を以て尋常なる職務を行ふ能はず、濫りに正義の法則を犯して、身を亡ぼし、國に禍ひするを顧みざればなり。吾が國、今に至るまで絕えて「クー、デ、ター」の禍なし。故に亦た其意義を精密に言ひ顯はすべき一定の譯語だも有らず。是れ良に吾が國民の幸福なり。余は今新年の佳

節を祝すると同時に、吾が國民の爲めに此の幸福を祝す。而して吾が國民の爲めに此の幸福を祝すると同時に、佛朗西國民の爲めに又た其の不幸を弔す。若し前車の覆るを視て後車の戒と爲すを得ば、佛朗西革命の歴史は吾が國民の爲めに信に坐右の銘箴なり。余は切に吾が國民に望む、此の憎むべく恐る可きの文字に對して、今後長く適當の譯語を定むるの必要を見ずして息まんことを望む。故に清明の世に於て此の不祥の言を爲す、讀者亦た尙はくは微意の存する所を亮せよ。

（『國民之友』第十五號）

「新舊社會主義」序

器械工業の發達と倶に、物質的文明の進歩と倶に、抑も亦八權平等の大義漸く世に明かなると倶に、社會旨義の勢力、益々その强大を加ふるに至るは、良に必然免るべからざるの理勢にして、今や泰西の文明諸國は往く所として社會旨義の爲めに、紛糾擾亂の禍を被らざるは莫し。苟もその志經國濟民に存し、又能く同胞相愛の眞情を有する者にして、奈何ぞ社會旨義の研究を忽諸に附することを得むや。友人森山信規君、夙に此に見る所あり、多年心を社會旨義の研究に潛め、頃者英人ウイリアム・グラハム氏の原著により新舊社會旨義を譯述して、將に之を世に公にせんとす。其載する所は、汎く古今各派の社會旨義を網羅し、その沿革の跡を討ね、其變遷の次第を述べ、又能くその說の長短得失を指摘し、人をして一讀直ちに社會旨義の眞相を知領するに難からざらしむ。顧ふに此譯書一たび世に出でて、能く本邦の學者の爲めに、社會旨義の講究に資する所、必ず尠少ならざるべきなり。余深く君の功勞の大なるを喜び、乃ち一言を記して序文に代ふ。

明治二十七年四月下浣　酒井雄三郎識す

社會問題（一）

勞役者の作業規定に關する列國會議

今日に於て大に歐洲社會の前途を劫かし、政治家、道德家、法律家、經濟家、若くは農商工業家に論なく、第十九世紀文明の進路に就いて、無數の憂懼と無量の心配とを抱かしむる者は、其れ唯々社會問題なるか。蓋し世の所謂社會主義なる者は、實に當世紀の下半期に於て絕大長足の進步を爲し、武斷專制の政も未だ之を鎭壓する能はず、民主共和の制をも亦た其心を悅服せしむるに足らず、彼れ其眼中、政府なく國境なく、彼我内外の別なく、亦た貴賤上下の差なく、苟も財力の跋扈する所、勞力の枉屈する地には、到る處其平等の旗を進めて戰を資本家に挑めり。故に若し歐洲諸國の人民が今日に至るまで保有し來れる社會の秩序と制度とは、將來何物か其根柢よりして顚覆破壞すべき者ありとせば、是れ魯帝の雄圖にあらず、曼相の偉略にあらず、英の堅艦、佛の强兵にあらず、即ち社會の最下層を潛行して日々に其封域を開拓する社會主義其物に外ならざるべし。

予は固より社會主義に同意を表する者にあらず。予は能く吾人の尊重する凡百の自由權利は彼れ社會主義と駢行僭立するを得べからざる者たるを知れり。彼れ社會主義の不俱戴天の讐敵たる所有の權利は、吾人の才力技能を自由に發達し運用して以て自主の生存を保つに須要缺くべからざる者たるを知れり。吾人人類が終極の目的は、彼れ社會主義に本きて各個人の權利を撲滅し之を社會の一手段と爲すにあらずして、却て各個人を以て皆な一の圓滿なる自主體と爲すに在ることを知れり。然れども如何に社會主義は道理に反せりとするも、社會問題は現に眼前に存在せり、最大最强の勢力を有して文明社會に橫行せり。且つ、假りに此問題をしてサン、シモン、ロベール、オワンの輩の構思より成り、終始空想の氛域内に蟄息して出づるなからしめば、之を友とするも固より賴むに足らず、之を敵とするも亦恐るゝに足らず。而して予の如く專ら時事の通信を事とする者は、初めより思を此問題に置くことなかるべし。然れども今や此問題は、既に空想の氛域より迸出し、當世期に於ける物質的文明の進步に由り器械工業の發達に由りて、貧富を隔つるの溝渠日々に其の深きを加ふるに從ひ、資本と勞力との爭鬪倍々劇烈を極むるに從ひ、必然逃るべからざるの勢を以て、實行の領分内に侵入し、凡そ政治、法律、經濟の事、一として之が影響を被らざるなく、而して吾人人類が將來の禍福休戚も亦偏へに平穩靜和の手段を以て此問題を解決するにありとせば、時事を談ずる者亦固より此問題に接觸せざるを得ず。故に予は社會主義に同意を表すること能はざるに係らず（否寧ろ之に同意を表する能はざるの故を以て）、始めて此土に來りしより常に其運動の狀を注視し、我邦人と共に豫め之に處するの道を講ぜんと欲したれども、之が機會を得ずして今日に至れり。此頃日耳曼皇帝の發企に係り、廣く列國會議を開いて相共に勞役者の作業を規定せんと欲するの議あり。此一事、亦能く社會問題が現今歐洲に於て如何なる勢力を有し、如何なる地位に立ち、如何なる方向に進みつゝあ

るやを觀察するの資料と爲すに足る者あり。因て其大要を開示し、併せて之に鄙見を加へ、教を大方に乞はんと欲す。若し夫れ、近世社會黨全體の運動に係る事情は、他日閑を得て更に詳かに報ずる所あるべし。

日耳曼皇帝と社會黨

日耳曼皇帝ギーオーム第二が、年若うして有爲の氣に富み、鐵血老宰相の木獅たるに甘んぜずして肆然自ら作興せんとするの風あるは、世人の夙に知る所なるが、此頃に至り、終に老宰相の意見を排し、其商務大臣の椅子を奪ひ、勞役者の困難を救濟するの方案として列國を通じ其作業を制限するの規定を設くるが爲め、本月中旬を期し其首府伯林に於て列國會議を開くの議を發したり。

今其事の利害得失は姑く之を措き、平素は專ら武斷擅制の政を好み兵隊の調練に餘念なかりし若年の天子が、斯の如く滿天下に向つて社會の最下層に沈淪したる勞役者の味方なりと宣言せしは、其事頗る奇異の觀なきに非ずと雖ども、熟々其國情を觀察すれば、是れ亦已むを得ざる勢に制せられて然る者にして、深く異しむに足る者あらず。何をか已むを得ざるの勢と言ふや。他なし、同國に於て社會黨の日々に其勢力を加ふること是なり。蓋し輓近曼國に於て同黨が其勢力を政治上に加ふるの大なるは、政府が之に對して施行する鎭壓令の嚴なると全く反比例に出で、其底止する所殆んど測知す可らざる者あり。現に去月二十日及本月二日の同國國會議員總選擧に於ても、社會黨は政府黨に對して大なる勝利を得、同黨員の選ばれて新議院に入るべき者は前期の國會より多きこと三倍の上に出でたり。今、昨夕刊行の當府「ルタン」新聞に掲げたる、去る千八百七十一年より本年に至り、曼國國會議員の每選擧期に於て國中諸政黨の收得せる投票の總數並に其當選議員の數に就き、單に其社會黨に係る分を左に抄録せんに、

選擧年期	當選議員	投票總數
千八百七十一年	一人	一〇一、九二七票
千八百七十四年	九	三五一、六七〇
千八百七十七年	一二	四九三、四四七
千八百七十八年	九	四三七、一五八
千八百八十一年	一二	三一一、九六一
千八百八十四年	二二	五四九、九九〇
千八百八十七年	一一	七六三、一二五
千八百九十年	三六	一、三四一、五八七

右の表に據れば、社會黨の收得せる投票の數と其當選議員の數とは、時に由り增減一ならずと雖ども、總じて之を言へば、二十年前には僅かに一名の代議士を有したる者が今は三十六名を有するに至り、殊に其收得せる投票の總數、即ち曼國選擧人の同黨に心を寄する者に至ては、其數年を逐うて增すことあるも減ずることなく、今日を以て之を二十年前に比すれば、其增加實に十三倍強に達し、而して最近三選擧期に於て其增加の比例最も甚しきを見る。此の如くして底止する所なくんば、曼國民を擧げて社會黨と爲るは年を期して待つ可しと言ふも亦不可なき者の如し。曼帝蓋し之を憂ふること久し、乃ち其祖父の遺訓を體し、毒を以て毒を攻むるの療法を用ゐ、彼の所謂る國家社會主義なる者を以て民主社會主義を鎭壓せんと欲し、列國相約して勞役者を保護するの規定を設くるに於て自ら其盟主と爲りて周旋の勞を執れるなり。

勞役者の作業を規定するが爲め、這回伯林に開設する列國會議の趣旨は其本く所果して前段に述ぶるが如しとせば、此會議の結果は能く曼帝の希望に滿足を與ふべきか、將た勞役者の作業を規定するに於て、獨り之を其統治する國

内に限らずして、列國相互の約束に因らんと欲するは其故如何。予は此事を究明するに當て、先づ、歐洲列國が各々其國内に於て勞役者の作業を規定するが爲め施設したる所の條例を按檢し、次ぎに、列國の共約に由りて此制限を設くるの方案に就きて其起因する所を釋ね、以て利害得失の論に及ばんと欲す。

勞役者の作業制限に關する各國の規定

夫れ人、其の有する所の財力技能を用ゐて其欲する所の業を採るは、是れ其人の自然に得たる權利なり。何人と雖ども固より之れを奪ふこと能はず。故にアダム、スミッスは言へり、貧人の財産は其力と其手工となり、苟も之を使用して他人に損害を與へざる以上は、何人と雖ども彼等が其欲する所に從ひ自由に此財産を使用するを妨ぐるの權なしと。此の自然の道理を推して之を言へば、法律を以て勞役者の作業に制限を置くは是れ其天與の自由權利を剝奪する者なり、左れど世には亦自ら其有する所の權利を用ゐて自ら其身を防衞する能はざる婦女、又は未丁年者の如き者あり。而して一方に於ては不良の父兄貧戻の雇主の、妄りに其幼少の子弟若くは雇人を虐使する者尠しとせず。斯る場合に於ては、何物か來て小弱者の權利を保護する者なかるべからず。時としては政府の干渉に由りて工場内に於ける就業の時間等を適當に規定するも亦一概に非とすべきにあらず。但し政府が其保護干渉を行ふに方り、苟も勞役者生計の難易、其生産の必要、若くは各地方の情況等に應じて斟酌を加ふることなく、嚴正劃一の法律を以て緊く生産者を檢束せんと欲せば、其干渉の弊亦殆んど堪ふ可らざるに至らんとす。若し夫れ成丁男子に至ては全くアダム、スミッスの理論を適用し、一に其爲す所放任する可なり。良し實際に於て全く其自由に放任する能はざるの事情ありて、政府の干渉に由りて之が規定を設けんとするも、其規定の及ぶ所は、多くは官用の大工事に使役する者の爲めに、一週一回休業の日を定むる等の事に止まり、其他民間に在る數多の小工場に使役せらるゝ者、家内に在て其業を操る者、若くは小地主の自ら其所有地を耕作する者、自ら些少の資本を運用して自ら工作を事とし一身を以て雇主と雇夫とを相兼ねる者に至りては、政府之に干渉して其作業に制限を加へんと欲するも徒らに煩苛の弊を加ふるのみにして、到底其效績を見ること能はざるべし。故に凡そ此輩の作業に就ては其弊害の必ず除かざる可らざる者ありとするも、初めより法律の力を假らずして專ら社會の道德風儀に依賴し、漸を以て之が改良を計るの固より有效無害なるに如かず。

按ずるに、歐洲諸國に於て勞役者の就業時間に制限を加ふるの規則を設けたるは、今を距ること八十餘年、英國に於て當時の宰相ロベールピールの發案に係り、ジョールジュ三世の、法律を以て綿絲幷に羊毛製造所に於て其職工の就業時間を一日十二時に定めたるを以て之が嚆矢とす。爾來英國に於て此種の法律を制定したるは十を以て數ふと雖ども、是れ皆婦人若くは幼年の勞役時間を制限するに止まり、曾て成丁男子に及ばず。且つ其成丁婦人の作業時間に制限を設けたる所以は、專ら之をして其夫の虐使を免れしめ、及び其男子に對する養育の義務を竭さしめんと欲するに在りて、固より婦人作業の自由を拘束するの趣旨に出でたる者にあらざるが如し。若し夫れ成丁男子の作業を制限するの不可なるに至ては、保守、自由の兩黨に論なく、共に之を認知せざるはなし。故に這回曼帝の發企に係る列國會議に就て、自由黨の首領グラットストーン氏は言へり、成丁男子が其

意の欲する所に從うて其時と其力とを使用するに當りて、人得て之を妨ぐるの道なしと。又た現に保守黨の内閣員たる内務大臣マツーウス氏は、近者鑛山役夫の同盟委員を接見し、其法律を以て就業時間を一日八時間に制限せんことを請ふに及びて、乃ち之に答へて言へり、政府は勞役者が其欲する所に從うて其手腕を使用するを禁じ、以て自由權利を箝制するの方案を贊成する能はずと。亦以て其國論の存する所を見るべきなり。

現今英國の法律に據るに、十歳以下の幼兒は總て工場に使役するを得ず、十歳以上十四歳以下は其勞役の時間、一週三十時間を超ゆるを得ず、又同年齡の男女の家に在て作業に從ふ者は一日五時間を過ぐるを得ず、十四歳より十八歳までの男子、又た女子は、其年の長幼に拘らず、織物場にては一週五十時間、自餘の工場にては六十時間以上業を操るを得ず、又右制限法の範圍内に在る者は、日曜日若くは夜間若くは土曜日の午後は、總て業を操るを得べからずとせり。

此種の法律は自餘大陸諸國に於ても大抵之を施設せざるはなく、獨り今日に於て絕えて此事に意を用ゐざる者は白耳義國あるのみ。蓋し白耳義に於ては、十歳以下の幼兒を鑛坑の内に使役するを禁じたるのみにして、他は總て其國人の自由に放任せり。

白耳義に次ぎ其規則の甚だ寬裕なる者を伊太利とす。伊太利にては、九歳以下の幼兒を工場に使役するを禁じ、十二歳以下を鑛坑内に使役するを禁じ、十二歳以上は何れの場所にても一日八時間以内之を使役するを得べしとせり。

何牙利にては十歳以下の幼兒は總べて製造所に使役するを禁じ、十歳以上十二歳までは一日八時間、十二歳以上十四歳までは十時間の使役を許し、其他の未丁年者は總べて日曜日及び夜間業を操るを禁ぜり。

西班牙の條例は大に何牙利に類し、十歳以下の幼兒は總べて工場内に使役するを禁じ、十歳以上、男子は十三歳、女子十四歳までは其勞役一日五時間を超ゆ可らずと爲し、男子十三歳より十八歳に至り女子十四歳より十七歳に至るまでは、一日八時間以上勞役に服するを得ず、又た夜業を操るを得ず。

丁抹にても亦均しく十歳以下の幼兒を工場内に使役するを禁じ、十歳以上十六歳までは其勞役一日六時間を超ゆ可らずと爲し、十六歳より十八歳に至るまでは十時間以内となし、又た其日曜日及び夜間業を操るを禁ぜり。

魯西亞にては十二歳以下の幼兒を工場内に使役するを禁じ、十二歳より十七歳までは其一日の勞役八時間と定め、又た未丁年及び女子は總べて織物場に於て夜業を操るを禁ぜり。

和蘭及び瑞典にても亦均しく十二歳以下の幼兒を製造場に使役するを禁じ、且つ瑞典にては十二歳より十四歳までは其勞役一日六時間以内、十四歳より十八歳までは十時間以内と定め、又其夜業に就くを禁ぜり。

日耳曼聯邦にても亦均しく十二歳以下の幼兒を製造場に使役するを禁じ、十二歳以上十四歳までは一日の勞役六時間とし、十四歳より十六歳までは十時間と定めたり。

墺地利にても亦均しく十二歳以下の男女は總べて製造場に使役するを禁じ、十二歳以上十四歳以下は其一日の勞役八時間に限り、十四歳以上は總べて之を十一時間に限りたるも、時としては更に一時間を增加するを許せり。又十六歳以下は總べて其夜業を禁ぜり。

蘇西聯邦共和國は最も他國に後れて勞役者の就業時間を制定するの法を設けたるに拘らず、一躍して其制限の嚴なる大に他國に超乘

せり。同國にては十四歳以下の男女は總べて工場内に使役するを禁じ、十四歳以上十六歳迄は一日十一時間の中より其學校若くは宗教の教育を受く可き時間を除きて、其剩餘の時間内のみ勞役に服するを許し、丁年者と雖ども其一日の勞役十一時間を超ゆ可らずと爲し、日曜日及び夜間は總べて業を操るを許さず、但し特別を以て右の制限に由らざる者亦固より少からず。

最後に佛朗西に於ては十二歳以下は概して製造場に使役するを禁ぜり。然れども其工場の種類に由り此禁を緩めて十歳以下に止まることあり。此場合に於ては十歳より十二歳までは其勞役一日十時間に限り、十二歳より十四歳までは亦た其初等教育を受けたると否とに由りて區別を設け、其之を受けたる者は十二時間、否らざる者は六時間を超ゆ可らずと爲せり。蓋し立法者は少年の初等教育を受くると否とに由て、亦た其體力の發達に遲速の差を生ずべき者と假定したるなり。次で十四歳より十六歳までの男子及び二十一歳までの女子は夜業を禁じ、且つ一週間一日は必ず休業せざるべからずと爲し、自餘の勞役者は總べて其作業時間を一日十二時間に限りたり。然れども右の條例は更に改正を加ふるの議あり、既に代議院の議決を經て元老院の議場に上れり。而して其改正案に於ては女子は其長幼を問はず都て夜業を禁じ、又た男女共に其一日の勞役を十一時間に限れり。(以上各國の條例は本年二月二十二日刊行の「エコノミス、フランセー」より抄譯する所に係る)

以上列敍する所に就きて何れの國の法律が最も其當を得たるやを詮索するは、今姑く之を措く。但し此事に就き各國の法制斯の如く區々一ならざるを致したるは、蓋し國各々其風土慣習を異にし、其生産の事情亦相同からざるものありて存するに由らずんばあらず。況んや一國内の規定すら多くは徒法に屬して實際に行はれず、若し強て實際に行はんと欲するも徒らに政權の干渉を大にし、空しく煩苛の弊を簇生し、以て其國の生産力を凋衰するに終らんのみ。而して今や日耳曼皇帝は更に此制を皇張し、列國の共約に由りて勞役者の作業に制限を置かんと欲す、是れ果して其目的を達すべきか。今之が斷案を下すに先つて且つ此方案の由て起る所を見よ。(巴里より、三月七日) （「國民之友」第八十一號　明治二十三年五月五日）

社會問題（二）

列國相約して勞役者の作業を制限するの議

今日に於て資本の痛く勞力を壓し雇主專橫を極めて雇夫苦境に沈淪し殆んど之を出ること能はざるは、蓋し文明諸國の製產社會に於て掩ふ可らざる現象なり。是れ果して貨財の配分經濟の法則に叶ひ、倫理の自然に合したる者と言ふを得べきか。夫れ今日の勞役者は固より古昔の奴隸に異なり、雇ふ者も雇はるゝ者も等しく斯世に生存するの權利を有し、等しく其安樂福利を求むるの權利を有せり。勞力何ぞ久しく資本の壓する所となり、雇夫何ぞ長く雇主の虐する所となりて振はざるを得んや。歐洲大陸に於て社會黨の日々に其勢力を加ふる、諸國の工場に於て罷工同盟の年に其頻繁なるを致す、是れ皆勞力資本の衡軛を脫し、雇夫雇主の羈絆を免れんと欲するに外ならざるのみ。且つ他の一方に於ては、雇主資本家の中亦能く義理人情を分別し、或は其使役する勞役者の賃銀を增加し、或は其勞役の時間を短縮し、以て其困厄を輕くせんと計る者、世固より其人に乏しからず。左れど勞役の時間を短縮して其給與する賃銀を減ずることなくんば、是れ其實は其賃銀を增加したるなり。既に賃銀を增加したるなり、乃ち亦其製產費を增加したるなり。既に其製產費を增加したるなり、乃ち其製產に由て得る所の利益を減ずるに非ずんば、其製產物の價を貴くして之を賣らざるを得ず。是れ甚だ視易きの理のみ。然り而して凡そ製產の利益と製產物の價値とは、固より經濟の理法に基き同業者の競爭に由りて自ら限る所ありとせば、己れ獨り賃銀を增加し、己れ獨り勞役時間を短縮し、己れ獨り製產の費用を增加して他の同業者之に倣ふことなくんば、勢ひ之が競爭に勝へずして其業を廢するに至らざるべからず。是に於て乎政府の法令を以て國中を通じ均一平等に賃銀勞役を規定するの必要初めて起る。然りと雖ども通商貿易の繁多なる彼れが如く、運輸搬送の便利なる此の如きの今日に於て、一國獨り其國人の勞役、賃銀に制限を加へて其國中の製產費を增加し、而して他國之に倣ふことなくんば如何、亦必ず之が競爭に勝へずして國內の諸業終に頹廢に歸せざるを得ず。尙ほ詳に之を云へば、一日の勞役を十時間に限りたる國民は、之を延して十二時と爲せる國民に對して、其製產高六分の一を減じ、日曜日の作業を禁じたる國民は、之を禁ぜざる國民に對して、亦其の製產高の七分の一を減ぜざるを得ず。是に於て乎、列國相約して勞役賃銀を制限するの必要亦た始めて起る。

按ずるに列國相約して勞役者の作業時間を制限するの方案は、獨り曼帝の創意に係り今日始めて世に出でたる者にあらず。今を距ること五十年、佛人ドニエー、ルグランなる者あり、始めて、列國會議を開いて勞役者の作業時間を規定するの說を唱へ、之を上院に建議せしことあり。次いで日耳曼にては、今を距ること二十餘年、有名なる社會黨の首領カルル、マルクス氏の創立に係る萬國勞役者協會に於ても亦同一の說を唱へ、此他世の所謂る基德社會黨と又た無神社會黨とに論なく、苟も社會主義に左袒する者は概ね列國の共約に由りて作業時間に制限を置くを望まざるはなく、而して前年和蘭

國ラ、ハイーに於て開設せる萬國社會黨會議に於ても、亦實に左の如き決議を爲せり。

一、兩半球の社會黨員は、萬國共通の作業規則を設くるを目的とし、蘇西共和政府に請求し其都府ベルヌに於て之に關する列國會議を開かしむべし。

一、右萬國共通の作業規則は、勞役者の生存及び自由を保護するを旨とし、之をして俄に其業を失ふこと無からしめ、若しくは其員數の一時に增加するを防ぐが爲め左の諸項を規定すべし。(一)十四歳以下の男女は總べて其勞役に就くを禁じ十五歳より十八歳までは其作業を一日六時間に限る事。(二)丁年の勞役者は其作業を一日八時間に限る事。(三)一週間に一日は必ず休業する事。(四)總べて夜業を禁ずる事、但し近世器械工業の發達に由り必ず夜業を要する者は此の限に非ず。(五)勞役者の健康を害す可き或る種類の工業を禁止する事。(六)萬國の共約を以て賃銀の最少額を定め、其額は男女必ず同一なるべき事。(七)右の規則を實行する爲め勞役者の選擧に出でたる監督委員を設け、政府之に俸給を與へ、一國限り若くは萬國共通して諸工場を監督せしむる事。

是れより先き千八百八十年、蘇西國國會に於ては佐官フレー氏なる者の發議に由り、同一の問題を議定するが爲め自ら盟主となりて列國會議を開くに決し、列國政府に招狀を發したれども、之に應ずる者少かりしを以て終に會議を開くに至らず。越えて八年即ち昨八十九年、更に幼年者及び女子の作業を規定し幷に一週一日の休業を定むる等の方案に就き亦た其首府ベルヌに於て列國會議を開くに決し、魯西亞を除くの外、歐洲列國の政府大抵之が招請に應じたるも、其照會往復に多く時日を費し其期日甚だ切迫せるを以て、昨年七月に至り更に其開會の期を、本年五月五日に延ばしたり。然るに日耳曼の帝國官報は突然二月五日の紙上に於て其皇帝より下したる二通の敕諭を掲載せり。即ち其の一は工部大臣メーバー氏及び新任商務大臣パルレップス氏に宛てたる者にして、其要旨は、祖父の遺訓を奉じ、基督教の慈善を體し、經濟社會に於て最も劣弱なる種族を保護するの旨意を以て國中勞役者の作業に關する諸般の規則を調査し、改正し、若しくは新定すべしと云ふに在り。其二は大宰相ビスマルク公に宛てて、勞役者の命運を改良し其困厄を輕減するに方り、外國の競爭に由て妨害を被らざる爲め、諸外國に派遣せる自國の大使公使に訓令を傳へ、此事に關して列國會議を其首府伯林に開くべき旨を通牒せしむべしと云ふに在り。次で獨國の大使、公使は旨を承けて各々其駐劄せる政府に其由を通じたるに、何れも會議に參同するを諾したれば、蘇西も亦其自國に開くべき列國會議の盟主權を拋棄して伯林會議に加盟することとなれり。

前述の如くなれば、列國相約して勞役者の作業を規定するの方案は、其淵源する所遠しと雖ども、其問題が實際に於て列國會議の席に上るは實に今回の伯林會議を以て嚆矢とす。而して此會議に於て日耳曼政府より提出すべき問題は、

第一、鑛山事業に關する勞役を規定する事。

○若干の年齢に達せざる幼年の勞役者は鑛坑内の作業を禁ず可き乎○鑛坑内に於て女子の作業を禁ずべき乎○勞役者の健康を害すべき鑛坑内の勞役は預め其時間を限るべき乎○其採掘額を減ずるに至らずして坑夫の健全を保護すべき方法ありや。

第二、日曜日の作業を規定する事。

○不測の災變に處するの時を除き總べて日曜日の作業を禁ずべき乎○此禁令を定むるの後更に之に循由するを要せざる若干の特例を立つべき乎○此特例は列國の共約に由りて之を定むべき乎、又は各其國の法律を以て之を定むべき乎、又は單に行政處分を以て之を定むべき乎。

第三、幼年の勞役を規定する事。

○若干の年齡に達せざる幼少の者は諸工場に於て總べて勞役に就くを禁ずべき乎○其制限の標準は何に由るべき乎○其制限は凡百の工場を通じて均一差異なき者とする乎、或は工業の種類に由りて之が差別を設く可き乎○幼年の作業を許すの場合に於て其時間の制限は如何に定むべき乎。

第四、壯年の勞役を規定する事。

○既に幼年の齡を過ぎたる壯年者の勞役にも亦制限を置くべき乎○其制限は如何なる程度にまで之を加ふるを可とする乎○幾許の年齡に至るまで其制限を及ぼすべき乎○預め特例を定め或種の工業には其制限を及ぼさゞるを可とする乎。

第五、婦人の勞役を規定する事。

○結婚婦人の晝間若くは夜間の勞役に就ても亦制限を設くべき乎○凡そ女性の勞役は長幼の別なく制限を加ふべき乎○其制限の程度は如何○預め特例を定め或種の工業には其制限を及ぼさゞるを可とする乎○若し之を可とせば其工業の種類は如何。

第六、右の規定を實施すべき方案の事。

○右の諸件を規定したる後之を實施するには如何なる方法を用ゆべき乎○自今預め時期を定め本會に參同したる諸國の委員は其定期ごとに相會合すべき乎○若し然りとせば其會合に由て如何なる事項を商議すべき乎。

等の數項なりとす。見るべし、曼帝の企圖する所は上段に揭げたる蘭國の萬國社會黨會議に於て議決せし所と大なる逕庭なく、唯々其問題に稍々周密を加へたる者なるを。是に由て之を見れば、國家社會主義と民主社會主義とは其常に相排擠し相敵視するに係らずして、其歸底する所を一にし、齊しく同軌一轍の迷路に陷りて、凡そ人生作業の自由は列國共通の規約に由り之に制限を施すを得べしと信じたるなり。彼等は人類自由の營作は區々法制の力を假りて之を抑止すべき者と思料したるなり。彼等は國各々風土慣習を異にするに由り、其民亦智愚強弱を齊しくせざるに由り、其物產の饒乏、工業の盛衰、物價の高低等亦相同じからざるに由りて、其製產の事情、勞役の要件に大なる差別の存するを解せず、愞弱暗愚なる野蠻國民も、強健機慧なる文明國人も、齊しく同一の勞役に服し、同一の製產を爲さしめんと欲するなり。之を概言すれば、彼等は（國家）なる意象を以て各國人に超乘たる神變不可思議の權力を有したる者とし、獨自一個の權利を撲滅して、之を彼等の稱して一の有機體と爲せし社會なる者の內に渾化溶解し去らんと欲するなり。是れ果して天理の自然に叶ひ、人事の常則に合したる者と云ふを得べき乎。斯の如き絕大宏遠の事業は果して吾人人類の薄弱たる力を以て爲すを得べき者なる乎。左れど予は今爰に社會主義に對して戰を開くの餘地ある者に非ざれば、姑く數步を退きて、吾人人類が極致の目的は道理上宜く彼れ社會黨の唱論するが如くならざるべからずとするも、今曼帝の企圖する所は、現在の社會に於て果して能く實際に行

はれ、一も障碍に遭遇する所非ざる乎。其提出せる議案は、果して能く列國會議の採決を經るに至るべき乎。良し其採決を經るに至るも議會の議決は果して列國政府を檢束して、其規約を實行せしむるに足るの效力を有すべき乎。誰か其監督の責に任じ、何を以て其犯則者に裁制を加ふべき乎。日耳曼の吏員果して佛國の工場を巡視し一々其職工を詰問して其雇主の伯林會議の規約に違へる者を譴責するを得べき乎。而して日耳曼亦能く佛國の吏員に其工場の門戸を開いて其作業の列國會議の規約に戻らざるや否やを檢視するを肯んずる乎。若し一國を擧げて其規約に背きたる時は誰か其犯則を裁判し誰か其裁判を執行する乎。且つ勞役に制限を置きて製產の費用を增加するの結果は、間接に其製產物の價を貴くして勞役者は高價の物品を消靡せざる可らざるに至り、結局其保護策は朝三暮四の手段に類する所なき乎。一方に於ては武斷の政を以て專ら社會黨を抑壓し而して他の一方に於ては却て社會主義を採納して自ら功とせんと欲す、其所謂る毒を以て毒を攻むるの療法は寧ろ倍々其毒の勢力を加へ、社會黨の爲め更に愈々其要求心を鼓舞するの媒介たらざる乎。凡そ是等の難問の曼帝の企圖に反對する者を擧ぐれば、十指を屈するも猶且つ足らず。今や列國は經濟の事に於て概ね割居の政略を守り、互に關稅の壘寨を高うして他國の物產を排擠し自國の物產を保護するに汲々たるの秋に於て、直接に製產者の頭上に著大の利害を生ずべき勞役問題を列國の間に規定せんと欲す、其之を行ふの難きは、寧ろ列國相共に兵備を撤去し城寨を毀壞し永く相戰ふ勿らんことを約するの難きに比して、更に是より甚しき者あり。左れば這回伯林の列國會議は、其問題の亙る所頗る廣汎なるに係らず、又此事に關して世評の嘖々囂々たるに係らず、其結果は纔かに官私の大工場に於て女子又は幼年の勞役を規定し、並に官の經營に係る工事に就きて日曜日の休業等を定むるの類に止まり、其餘の事に至ては恐くは其結果の大に見るべき者あらざるべし。唯々日耳曼皇帝が其親ら國政を執るの第一着手として兵備の擴張を說かず、他國の侵略を談せず、反て人世に於て其窮厄最も憫むべき勞役者の命運を改良するに其心を用ゐ、列國政府と謀議して此至重至難なる社會問題を解決せんとするの擧に出でたるは、其志深く喜尙すべし。而して此一事亦能く列國の平和を維持するに於て大に望を加ふべき者なきにあらず。予は猶ほ開會の日を待て議會の論議する所を聞き、其外交上に經濟上に影響の及ぶ所を按じ、以て之を我國人に報道するを怠らざるべし。

今や此通信の局を結ぶに當り更に一言すべき者あり。顧ふに我が日本に於ては未だ社會黨なる者を生ぜず、故に社會問題を今日に講究するも、亦未だ切實なる感情を人心に與ふるに足らず。固より近年我國に於ても世間或は自ら稱して社會黨員と呼ぶ者なきに非ず、然れども予の知る所を以てすれば、此輩多くは社會主義の何物たるをすら辨知せず、唯々社會黨の名目の矯激に類する所あるを喜び、之を取て自ら名け、以て世俗を驚かさんと欲する者の如し。而して更に之を製產社會の實際に徵するも、亦未だ資本と勞力との間に激烈なる爭鬪を開き、因て社會主義の干涉を仰ぐの跡あるを見ず。先年高島炭坑坑夫虐待の件の如き、其外見或は社會主義の發動に類する所なきに非ずと雖ども、是れは之れ其同類の慘苦見るに忍びざるより起りたる道德的感情の發動にして、學理に本ける社會主義の發動と固より同一視するを得ず。是れ實に我國の爲め深く賀すべきに似たり。然れども我國人は今日の現象斯の如くな

るを見て明日も亦斯の如しとして枕を高うし安眠するを得べき乎。其資本と勞力との間に甚しき爭鬪を生ずるに至らざるは、寧ろ其工業興らず製造振はざるの故を以て、此二者の交渉、亦隨て頻繁ならざるの致す所にあらざる乎。若し然りとせば今我國人が鋭意して計圖する器械工業の發達と共に、物質的文明の輸入と共に、社會主義は亦必ず海を渡て我內地に侵入するを覺悟せざるべからず。且つ聞く所に據れば、官に於ては夙に職工條例なる者を編制して、職工の賃銀又は勞役時間等を規定するの議あり、其草案亦既に成れりと。予は固より此草案の如何なる必要より起り如何なる事項を規定したるやを知らずと雖ども、意ふに是れ豈に自ら計らずして國家社會主義に一歩を推轉したる者に非ざるなきを得んや。今や我國には獨逸流の國家學なる者熾んに世に行はれ、國家なる意象を以て、適かに各個人に超乘せる「鬼神」の一種と妄信する者なきを保せず。左れば去年五月の頃ほひ國民之友に掲載したる國家社會說の一篇の如き、蓋し亦記者の烱眼夙に時弊に感ずるありて此說を爲せし者の如し。乃ち我國亦決して國家社會主義なる者存在せずと云ふを得ず。國家社會主義既に我國に存在せり、而して彼れ國家社會主義の行はるゝは、民主社會主義を鎭壓する所以にあらずして、適々其勢力を助長するの機會を與ふること、之を獨逸の近狀に照らし之を上文記述する所に徵して明白疑を容れずとせば、民主社會主義亦何ぞ我國に起るの日なしとせんや。是れ予が妄りに時事の通信者たる職分を越えて喋々云ふある所以なり。然らば則ち之に處する果して如何。他なし、亦其本に復り、彼の所謂る「セルフ、ヘルプ」なる說に基きて益々各人自主の權利を亢張し、獨り政府を以て無二の慈惠者と爲さず、獨り之を以て各個人の命運の主宰者と爲さず、凡そ國內各種各族の民衆、各々其責任の歸する所を明かにし、相救護扶持するの義務を怠らず、且つ須く勞役者の智見を開發し、其儉勤貯蓄の風習を養成し、其自由の合意に由て、合本會社、共濟會社、若くは近來歐洲諸國に行はるゝ共同勞役會社、養老保險會社の如き者を設け、以て一旦の變に際して雇主資本家の苛虐を免るゝの道を講じ、而して雇主資本家も亦た人情の愛なる者を體し、勞役者の利益と自家の利益とは必ず相待て並び存する自然の理法を解し、敢て妄りに其勞役者を虐使苦役することなからんのみ。（巴里より、三月七日）　（『國民之友』第八十二號 明治二十三年五月十三日）

社會問題（三）

日耳曼人の視察せる英國勞役者の仕組

余は前週の便にて、今度勞役問題に關し曼都、伯林に開くべき列國會議の事を報じ、併せて社會主義の蔓延の甚だ恐るべきこと、國家社會主義は、革命社會主義を鎮壓する所以にあらずして却て其勢を增長する所以なること、務めて勞役者の智見を開發し、之をして自主の精神を養成せしめ、其自由の發企に由て相互に救護扶援するの仕組を設け、政府の干渉を頼まずして自ら其權利と幸福とを防衛するの力を有せしむるは、社會主義の傳播を防ぐに最も安全の手段なることを述べおけり。去年日耳曼にてはウェストハリーの鑛山を始め、所々の工場陸續き罷工同盟の慘害を被りたるより、日耳曼工業中央協會と稱する者を首め、重なる四ケ所の工業組合より委員を選みて英國に派遣し、同國に於ける資本家と勞力者との關係を調査せしめしことあり。今、右の委員が報告の大意なりとて佛文に記したる者を見るに、前信に述べたる通信者の意見と頗る符合する所あり。顧ふに英國の事情は最も我國人の知了する所たるに相違なきも、社會主義の猖獗に日夜其心を惱ませる日耳曼人にて、而も其道に專門の智識を具へ、態々其事の爲めに派遣せられたる人々の報告なれば、自國の狀況に照し合せて見る所、事情に適切し、勞役問題を研究する者には又一段の見榮えあることと思ひ、前信の補遺として猶ほ其要旨のみを摘譯し送寄することとなしぬ。

日耳曼の委員は先づ不動產共有主義が如何なる度合にまで英國に廣まり居るやを探測せんとて「ビュルヂンク、ソサイチー」、「フラインドリー、ソサイチー」、「トレード、ユニオン」などと稱する職工組合に就て其事を尋ねたるに、雇主も職人も多くは此語の何物たるをすら解せざりしには何れも一驚を喫したりと云ふ。夫より更に倫敦に在る日耳曼領事館、及び去年倫敦船渠の罷工同盟を指導したるブランス氏に就て、纔かに其一斑を窺ふを得たりしが、其言に由れば、不動產共有主義は、慥かに海を渡りて英國に傳はり居るに相違なきも、流石に言論、出板、作業、貿易、一に自由を旨としたる英國の共產主義は、日耳曼と大に其趣を異にし、曾て矯激恐るべき所あらざるが如し。又た此頃は、英國にても政府が工業の事に干涉するを可とする者尠からず。政治家としては、ランドルフ、チョルチル卿の如き、此說を選擧の際に利用せば容易く急進自由黨に政權を得せしむるならんと信じたるが如し。顧ふに是等は日耳曼政府が社會黨に地歩を讓り、其要求を容れたるが爲め、曾て其勢を增長するを妨げざりしを察せざるの致す所ならん。

英國に設けある各種職業組合中にて、其組織最も完全し、其勢力最も强盛なるは、「トレード、ユニオン」なり。此組合は、始めは政府に抵抗するを目的とせる祕密會社の類なりしかど、今は自由制度の下に立て安穩なる發達を遂げ居れり。其會員は概して教育ある高等の職工にて、仲間の交際は平等を旨として雇主と雇夫との間に起る大抵の爭は、和談にて事濟みとなり、其罷工同盟などを起すは極めて稀れなり、良し已むを得ずして罷工同盟を起すことあ

るも、其紀律大に整頓せるが故に、妄りに亂暴狼藉の振舞を爲すに至らざるなり（此處に雇主と雇夫との爭を和解する方法を詳記せるは曼國委員の不注意なりと佛國の記者言へり）、總じて英國の職工は其團結力强固にして、凡そ其企てたる目的は、必ず之を貫かざれば休せざる堅忍不拔の氣象を有し、政府の力を待たずして自立の生計を營むの名譽たり、又た義務たるを了解せり。彼等は獨り其利益の爲めに結合せるのみならず、亦た共同類相扶持すべき情義の爲めに結合せるなり。彼等は痛く社會主義を嫌惡し、資本と勞力との平穩に共同するの甚だ須要なるを信ぜり。彼等は雇主の給與する賃銀にて安全なる生活を保つを得るときは其望み足れりと爲し、假令雇主が巨萬の富を累ね莫大の利益を收め、如何に贅澤なる生活を爲すも、一向頓着せざる者の如し。去れば彼等は日耳曼の調査委員に云へり、「起業者の收益多きは吾等の利なり、收益多からざれば、彼等は吾等の從事する業を廢して、他所に其資本を放下するに至らん」と。凡そ斯る純良の意念は、總べて彼等が常に自由貿易派の經濟說を研究し得たる者にして、實に英國の職工は能く經濟の理法を悟り、能く「責任」と云へる語を了解し、「道理ヅク」と云へることを深く信じて疑はず、其對談の際にも諸大家の說を引援して、喋々自由團結の須要なるを論じたるには日耳曼の委員一同驚嘆せりと云ふ。但し、右は勿論上等の職工に就て云へる者にして、腕力の外何一つ有せざる無智の職工中には、彼のブランス氏等の下風に立ち社會說を唱ふるもの亦尠しとせず。左れど其勢力は大陸の社會黨に比して、大に下る所あり。ブランス氏彼れ自身すら大陸の同宗徒に及ばざること遠く、或は主義上に於ては劣る所なしとするも、其實行の手段に至ては、務めて其擧動の急激に渉るを避くるものの如く、手近く言はゞ、是等は概して機會主義の社會黨とも名くべきか。

「トレード、ユニオン」にては、職工一名の醵金一週間に一志と定め、必要の場合には、之を增加することあり、組合の費用は職業なき組合員の救助に充つるもの大部を占む、救助金額は其休業十五週間以內は一週間に十志、三十週間以內は同上七志、六十週間以內は同上六志と定め、而して其濫弊を防ぐには用意頗る周到なり。救助を受け居る職工は組合より仕事を見出し之に授くる時は、何事に限らず之に就かざるべからず、若し其仕事場は遠方に在て汽車にて赴く時は、組合より其旅費をも給與す。去れば總ての組合員は其共同の積金を減ぜざる爲め、其職を失へる仲間には成るべく早く其仕事を見出さんことを務むるなり。又た病に由て業を操る能はざる組合員には一週間に五志乃至十志を與へ、年五十五歲に達し二十五年間組合員たりし者が老衰業を操る能はざるに至れば年金三百六十志を與へ、不時の災難に罹りたる者には其新たに職業に就くの資本として一時に百磅の金を與ふることとなせり。

此他英國にて、「フラインドリー、ソサイチー」と稱するは、特に職工の爲めに設けたる保險會社の類にて、疾病、災變、老衰に由りて職業を操る能はざる者を救護し、其寡婦の養老金、孤兒の養育費より、火事にて其道具を失へる時、職を失ひ遠方に赴く時など、皆夫々に相當の金を拂渡すなり。又其「ビュルヂング、ソサイチー」と稱する者は、貯金銀行と書入銀行と相兼ね者にて、職工の貯金を保管し、又た其資本の借用を容易ならしむるなり。又た共同消靡會社の仕組も盛んに英國に行はれ、職工日用の消靡物を廉價にて購求するを目的とせり。凡そ此等の仕組は、前に述べたる「トレード、ユニオン」と相待て極めて美良なる效果を奏し、

固より日耳曼にて政府の干渉强迫に由て職工保險の仕組を設けたると日を同うして語る可らず。人或は英國にては職工の賃銀貴からざるにあらざるも、其生活費亦從て貴し、左れば日々の賃銀より右の如き組合に拂込むべき金額を差引く時は、英國の職工が生計の困難なるは却て日耳曼の職工に過ぐるならんと云ふ者あり。成程、曼國にては災難の保險料は總て雇主より拂ひ、疾病の保險料も其一部を雇主より拂ひ、養老保險料も政府の補助金の外其三分の二を雇主より拂ひ居るゆゑ、職工の負擔は頗る輕きに相違なきも、英國の生活費は、其實、曼國より貴きにあらず、英國にては麵麭、肉、其他職工の生活に必要なる物品、即ち石油、珈琲、衣服の類は其價反て曼國より廉なり、其賃銀は貴くして其消費物の價は廉なり、而して英國職工の費す所、概して曼國の職工より多きは、是れ其生活の度の高等なるの致す所なり云々。(巴里より、三月十四日發)　(「國民之友」第八十三號 明治二十五年五月二十三日)

* * * * *

勞役法に關する伯林列國會議の議決

日耳曼皇帝の發案に係り、其國都伯林に於て列國政府の委員を會合し、勞役者の作業に關する列國共通の規程を設くるの件に就ては、去る三月初旬の通信に於て委しく其出所來歴を示し、併せて此會議は當時其開會前に於て頗る世論の囂々を致したるに拘らず、其結果に至ては左して望を屬するに足るもの無かるべきを述べおけり。其後曼國政府の招請に應じて列國より派遣したる委員等は、三月十五日より引續き會議を開き、先信に掲げおきたる曼國政府の提出せる議案に就き、一々審議を盡し、同三十日を以て其會議を終るに至りしが、果せる哉、其議決は唯々各國より集合せる委員多數の願望を示すに止まり、固より其議決を以て直ちに列國共通の法律と爲すべき效力を有せず、又其議決に本き列國各々其國情に適したる法律を定め、且的に會議の願望を實施すべしとの約束あるにもあらず、言はゞ其會議は各個人の私に催したる談話會に均しく、列國政府は其議決の爲めに固より一も檢束を被る所あらず。斯くては折角に政府の欽命を帶び、其各々其國を代表すべき委員を集めて、公式の會議を開きたる詮なきのみか、日耳曼皇帝が當初より企圖したる如く、勞役者の困苦を救濟して、社會黨の跋扈を制するの目的を達するには、其路程猶ほ甚だ遼遠なるものと言はざるべからず。左れど這般の會議を機として列國の委員は各々其國内に於ける勞役者の情態、雇、被雇の關係、並に其困厄窮苦を救濟すべき公私凡百の制度に就き、相共に其知る所を述べて彼我の長短得失を較量し、殊には這般の會議に於て勞役者の作業に關し、現時各國に施設する公私の制度は猶ほ甚だ不完全にして、其疾苦を療醫するが爲めに投ずる所の藥劑は、其效能猶ほ甚だ薄弱なる所以を表明し、世人をして兎にも角にも、此の恐るべき社會問題を平和に解決するには、新たに何等かの方案を求めざるべからずとの戒心を生ぜしめたるは、其功亦小なりと云ふを得ず。但々其新たなる方案を設くることは、政府の威令を以て都て作業に關する事項を規定し、政權の作用を以て富の分配を定め、富者益々富み、貧者益々貧なることなからしめんとするの國家社會主義に據るべきか、若くは人々各々自立の精神を發揮し、責任の意象を明かにし、勞役者自身に益々其智見を開達して未然の窮厄に備へ、或は自由の結合に由り、或は道德上の慈惠に依りて、彼我相救護するの制度を擴張せんとするの自由主義に放任すべきか、若くは或る部分は政府の干渉に託し、或部分は各個

人の自由に任ずるを可とするか、若し之を可とせば、各個人の領有する版域と、政府の領有する版域とを分劃すべき標柱は如何なる所に建立すべきか、凡そ此等の問題は人々其組述する學説に由り其立つ所の地位に依りて、其見解固より一に定むる能はず。唯々夫れ一に定むる能はず、故に社會問題は紛々乎として容易に其解決を見るの日なし。而して現時列國政府の施設する所も亦概ね姑息苟安の計に過ぎず。要するに世の所謂る社會問題、――換言すれば貨財の配分――に關する一事に於ては、吾が十九世紀の社會は猶ほ濛々たる闇黑界に彷徨し、何人も其往く可き道を知らず。而して今度伯林會議の結果に徴するも亦未だ闇黑を出でて光明に入るに於て咫尺も其歩を進めたるの足跡を見ること能はず。

右に述ぶるが如くなれば、伯林列國會議の議決は、固より大に重きを置くべきものにあらず。左れど先信に承接して爰に其局を結ぶが爲め其議決の要旨を摘載するも亦、全く無用にあらず。乃ち先信に掲げたる五ヶ條の議題に對し其議決の要旨を擧ぐれば左の如し。

第一、日曜日休業に就ては、總ての勞役者をして必ず一週間に一日休業するを得せしむること。其休業の日は日曜日と定むること。

○或時季に限りて爲すべき作業に就ては、二週間に一日休業するを得せしむること○其作業の種類は各國政府の商議に依て之を定むること。

第二、鑛山の作業に就ては、學術上出來得る限りは坑夫をして安全健康を保たしむること。

○政府の監察を嚴にし、凡そ鑛山の開採に從事する技師は必ず其專門の智識を具有したるを證明する者に限ること○技師と坑夫との關係を親密にして、相互に尊敬信倚せしむること○坑夫の疾病、災害、老廢等の時に至り、其身及び其家族に安全を得せしむべき各般の仕組を皇張すること○石炭の産出を斷絶せざる爲め同盟罷工を預防すること○雇主と被雇者との爭論を審判する爲め、此兩者の互選に成れる審判委員を設くること○幼年者の鑛坑内に降るべき年齡の制限は自今漸次増進して十四歳以上と爲すこと(但し南方の國に於ては其制限を緩めて十二歳以上となすも妨げなし)○婦人は總て鑛坑内の勞役に從事せしめざることと○以上の規程は諸國各々其法制に應じ隨意に之を定むること。

第三、幼年及び少年の作業に就ては、南方の國にては十歳以下、自餘の國にては十二歳以下の幼年は、一切の工場内に使役せざること。

○十四歳以下の幼年は日曜日及び夜間の勞役を禁じ每日の勞役は六時間を過ごさしめずして其間半時間の休息を爲さしむること○右の幼年者には衞生に害あるべき職業を爲さしめざること○十五歳より十六歳に至る少年は每日の勞役を十時間として其間亦半時間の休息を爲さしめ、是れ亦、夜間、日曜日及び衞生に害ある勞役を執らしめざること。

第四、婦人の勞役に就ては、十六歳以上の婦人は總て日曜日及び夜間業を執らしめざること。

○每日の作業を十一時間以内とし其間に少くも一時間半の休業を爲さしむること○若干の工業に限り右の規程に據らしめざること○甚しく衞生に害あるべき婦人の勞役に就ては特別の制限を設くる

と〇產後四週間を經過せざれば總べて勞役に就かしめざること。

第五、以上の議決を實施するに就ては、各國政府にて特別の監督官を設け、其國內の諸工場を監督せしむること。

〇右監督官の年々の報告は之を公版し、互に各國政府の間に交附すること〇本會にて審議せし事項に就ては各國政府時期を定めて其狀況を調査し、可成統計表の體裁と爲し同上の事項を規定せる法律又は行政規則と共に互に各國政府の間に交附すること〇本會決議の實施より生ずる成果を按檢し併せて之を改正補完するが爲め再び列國會議を開くこと。

前にも述べたる如く、右は唯々會議の願望を述べたるまでにして、固より此會議に參同したる列國政府は、必ず之を實施せざるべからずと云ふにあらず。又た此議決に由りて列國の間に彌蔓せる彼の革命社會黨に滿足を與へて其の陸梁を制止すべきにあらず。否な彼等は列國政府が自黨の勢力に憚れて、其主張する論旨の一部を採用せんとするの色あるを見て、益々其冀望心を開き益々其要求心を大にし、其勢力却て昔日に加倍するに至るは、勢ひ自ら然らざるを得ず。去年七月巴里に於て開きたる萬國社會黨會議の議決に本き、來る五月一日には新舊兩世界の各國各地に散在せる社會黨員、同時に起りて所在に示威運動會を行ふの手筈にて今方に委員を選び方案を定め、孰れも其用意最中なりと聞けば、五月一日の到るを待つて、其外形に顯はるゝ所を見ば、亦同黨勢力の一斑を知るに足る者あらん。兎に角近世社會黨の運動は列國の形勢を變易すべき重なる一彈機たるに相違なければ、苟も時勢に志ある士は固より之を輕々に看過すべからず。（巴里より、四月十一日發）

（『國民之友』第八十三號、明治二十三年五月二十三日）

社會黨の運動

五月一日

には先信に報じたる如く去年七月當府ロシュシュアール街の萬國社會黨會議に定めたる決議に本き、一日の勞役時間を八時間に減縮し、並に賃銀の最低額を定め、婦人幼童の夜業を嚴禁する等の法律を設けんことを各々其國の政府に要求するが爲め、新舊兩世界の社會黨員齊しく起りて示威運動を催せり、今通信者が當日府内に於て親く目撃せる所、及び諸新聞の報ずる所に據り、歐洲全土に於けるこの運動會の狀況を本邦人に報道するは、目下文明諸國の一大難題たる社會問題の傾向する所を察し其黨派の勢力如何を想測するに於て、毫末の裨益なきにあらざるべし、左れど通信者は當日運動の實況を記するに先ちて佛國特に

巴里社會黨の狀勢

に就き聊か記する所なかるべからず、さても何事に就ても、分離し易きは佛人の特性なるが、社會黨にも亦種々の分派あり、巴里にては之を大別すれば「ポッシビリスト」(Possibiliste の語は何人に問ふも其出所詳かならず、或は Possible の形容詞より出で、出來得る事を爲すと言ふの意か)「マルキスト」(有名なる日耳曼の社會黨員カルル、マルクスを奉信する一派)の二團體と爲す、此二團體も今より十餘年前著名の社會黨員ブランキーの世に在りし頃には、共に其配下に屬して「ブランキスト」の名稱を冠したりしが、其後右の如く分離して、動もすれば軋轢抗爭して相容れざること殆んど水火の如く、去年七月の當府社會黨萬國會議も專ら「マルキスト」の發企に係れる者にして、「ポッシビリスト」は之に加盟するを屑しとせず、却て同志を會して、同時に他に一會議を開きたる位なれば、今度の運動にも固より其團體の名を以て同意を表せず、

是れ巴里に於て社會黨の大に其勢力を振ふ能はざる所以の一なり

且つ右二大團體の中に於ても、亦幾多の小分派ありて、或は勞役社會黨と稱し、或は急進社會黨と稱し、或は革命社會黨と稱し、或は無政府社會黨と稱し、或は「ブランゼー」黨に加擔し又た或は之を敵視し、中には飛拔けたる危險の考を抱き居る者もあれど、中には亦因循なる者もあり。從て其働き區々にして一定の紀律なし、

是れ巴里に於て社會黨の大に勢力を振ふ能はざる所以の二なり

巴里は元來社會黨の發達に都合よき土地柄にあらず、巴里府民は言はゞ官衙富豪又は旅客等より乳養せられ、府内には一場内に數千百人の職工を使役する大工場とてもなし、府民の多數は小賣商人又は我が東京にて居職と稱し、例せば仕立職の如く手細工人の如く、各々其家に在て業を操り、其勞役の時間に由て賃銀を受けずして、其勞役の產出額に由りて賃銀を受くる者より成り居る事ゆゑ、斯る輩の腦髓内に社會主義を注入せんことは中々に容易ならず、

是れ巴里に於て社會黨の大に其勢力を振ふ能はざる所以の三なり

佛國の勞役者は思の外に儉勤貯蓄の念に富み、且つ近代社會經濟の進步に由り、貯金、救濟、保

險、養老等に關する各般の仕組大に發達し、民法上遺產均分の制は亦幾分か財產の不平等を制止するに足る者あり。是等の事情相抱合して貧富の間に大なる懸隔なく、貧乏人なりとて差向き恐るべき危險を犯しても、平等主義を叫呼せざる可らざるの必要を感ずること尠し、

是れ巴里に於て社會黨の大に勢力を振ふ能はざる所以の四なり

凡そ社會主義の如き過激の說は其國の政、專濫に流れて、國民中或る階級、或る業體の利害休戚、治者の觀察に洩れ、其不平の內に鬱結する者、反動の勢に激して橫流潰決するより起る者なるに、佛國は共和政の國柄丈けに、凡百の事自由を旨とし、凡そ一人、一家、一團體、一階級並に一部、一州、一國の利害に關する事は、何人にても言論に、出版に遠慮なく、其思ふ所を述べて、輿論の裁判を仰ぐを得、且つ職工、商人、文人、技藝家の別なく、其業を共にし職を同うする者は、平素より各々組合を設けて相共に同業者の利益を保護し、事あるごとに其組合より委員を市會又は議院に出して、請願建議を爲し、市會議院にても亦決して其請願建議を等閑に附し去らずして、一々丁寧に檢按を加へ、苟も採納すべき理由ある者は政府をして之を採納せしむるを猶豫せざるゆゑ、其不平の氣は常に洩るゝ所あつて、反動の勢を激成するに至らず、

是れ巴里に於て社會黨の大に勢力を振ふ能はざる所以の五なり

右五條の理由に依り今度の運動會も、巴里にては格別に目覺しき事あるべき筈なしと、通信者も豫て心に期したりしかど、されど又た他の一方より考ふれば、巴里府民は極めて輕躁暴激にして一寸した「ハズミ」に思はぬ大變を引起す事あり、今より百年前にバスチーユの獄を破りて彼の恐るべき大革命の端を發してより巴里は常に革命軍の先鋒を以て自ら任じ、千八百三十年にはシャルル十世を廢し、四十八年にはルイー、フィリップを逐ひ、七十一年には復た彼の慘劇なる共產黨の亂あり、前年グレヴイー氏退職の折の如きも、若し第一回の投票の如くにフェリー氏が大統領に舉げられたらんには、巴里は一夕にして修羅の巷に變じたること、當時の實際を目擊したる者の悉く信じて疑はざる所なり、斯る危險の土地柄なれば、百事自由を主とするに拘らず、市街の警察に至ては、以ての外に嚴重にして、英國などにては、時々諸政黨が運動會を催し、又は職人が罷工同盟を起すに際し、大勢行列を作りて、市中を練り行き、公園又は市中の廣場などに集りて演說を爲す等の事は珍らしからぬ例なれど、佛國にては決して多人數市街に群聚するを得ず(每年七月十四日の國祭日を除く)、大勢行列を作りて、市街を練り行くを得ず、又屋外に於て演說するを得ず、若し或る黨類の者、示威運動會の如きものを催すの噂あるか、又は總選舉等の日の如く、聊かにても人心の激動するの恐ある時には、豫てより多人數群聚すべしと思料する場所に、夥しく巡查並に步騎の兵士を派遣して、嚴に之を警固し、往來人の同一の場所に立止る者は、巡查之を叱責して其往くべき所に往かしめ、拒む者は直に最寄の警察署に引致す、又騎馬の兵士時々馬を飛ばして、群集の中に乘り込み、巡查の手に餘る者を追ひ拂ひ、是は實際を目擊せざる者には甚だ危險なる業に思はるれど、馬の天性從順なると、其騎乘の熟練なるとにて、斯る場合に馬に蹴られて怪我人ありしことは絕えて聞かず)、決して大勢の人衆を一所に寄せ付けず、平素に在てさへ斯の如くなるに、況して此度は巴里の社會黨が盟主となりて開きたる萬國社會黨會議の議決に本き、世界全土日を期して同時に催す大運動會の事なれば、巴里の同黨員

は就中力を盡して、此の運動に一層の光彩を添へて、其勢力の大なるを天下に示さんものと、おさ〳〵其用意に暇なく、或は委員を設け集會を開き、當日運動の手筈を取極め、或は激烈悲壯なる檄文の類を夥しく頒布して、頻りに人心を煽動する有様なれば、政府――特には國安保衛の主任者たる剛膽果鋭の現内務大臣は之に應じて嚴重なる鎭壓の處分を施すを怠らず、警視總監、憲兵部長等には夫々訓令を下して、豫め之が備を爲さしめ、又巴里鎭臺の司令長官將軍ソーシエー氏と謀し合せて、巴里在營の三萬四千の兵士は何時にてもスハと言はば一令の下に打出づるの用意を整へ、其中の一部は巡査憲兵を助けて市街の要處並に諸官衙等を警衛するの用に充てり、又た四月二十八日の夜より同三十日の夜に亙り無政府黨の巨擘にて侯爵の肩書あるモレーと云へる人を首めとし同黨中の目星しき者共三十餘名、今度の運動會を機として、騷亂を煽起せんと企てたるの嫌疑を以て逮捕を受け、社會黨の女丈夫として世上に名高きルイーズ、ミセール女も、前日里昂に赴きて、運動會を奬勵するの演説を爲し、三十日の夜歸つて當府の停車場に到る途端に、其同行せる他の一名の社會黨員と共に逮捕せられたり、是れ其以前サンチャンス府に於て騷亂を煽起するの演説を爲せるに由れりと云ふ、同女は[illegible]頃より社會主義の革命を遂ぐるには、

諸國勞役者同時に大擧して同盟罷工を起す

の外なしとの説を立てて諸方を遊説し居たり、通信者も一度其演説を傍聽せしことありしが、其言ふ所は女に似合はず中々に過激なれど、政府は大體言ふ儘に擱きて容易に之を咎めざるの例なるに、時節柄とて此禍に罹れるなり、

以上述べたる當時社會黨の狀勢と、政府の施せる鎭壓處分の嚴重なりしとを視て、讀者は最早今度の運動會に就て當府にては左して目覺しき事なかりしを推知するに餘りあらん、然り、

當府下の運動會は全く蹉跌して其目的を達する能はざりしなり

さても數週間來晴雨時なく、寒暖常ならざりし巴里の天氣も、此日の前日より打て換りて一天隈なく晴れ彌り、春風微和を送りて人をして轉た愉快に堪へざらしめたり、豫てより當日運動の場所は、昔時ルイー十六世の斷頭場たりし故に由り歷史上に其名高きコンコルドの廣場なりとのことなれば、通信者も午後一時頃より同場に出向きたるに、爰は早や幾隊の騎兵列を正し、轡を按じて四面を固め、一齊に毛色の揃うたる太く逞しき馬は首を併べて長風に嘶き、兵士の頭上に戴ける鐵甲は輝き亙る太陽の光に映じて、宛ら綺羅星を排べたるが如く、同場と代議院とを隔つるコンコルド橋は、巡査の人垣を作りて全く往來を杜絶し、場の左右に在るチュイレリーの公園と、工藝館の構内には、歩騎の兵士幾千となく屯集して、今にも百萬の大敵襲ひ來るに備ふる者の如く、儼しくも又凄じく覺えたり、之にも構はず、職人體の者共、紳士體の人々と相混じ、運動者とも付かず、彌次馬とも付かず、四方八面より蟻の如くにゾロ〳〵と群り來る、斯て其稍々集るを視る時は、巡査と兵隊と進み出でて忽ちに追拂ひ追ひまくる、追ひまくられては逃げ走り、逃げ走りては復た集る、兎角する中二時比に至り、當日勞役者の請願委員たる代議士チヴリエー氏は袖廣なる淺黃色の職人服を纏ひ、此チヴリエーと云へる男は選擧人との約束なりとて議院に出席するにも必ず禮服の上に職人の仕事着を纏ひ居れり、我が國にては中江兆民居士[illegible]れに此服を穿てることとあるべし、代議士ボーダン、フェルールの二氏、市會議員ヴイヤン氏外三名の委員と共に大通より代議院に向け靜々と進み來り、警

団の士官と暫時問答の末、人垣を爲せる巡査は道を開きて手早く委員のみを通して、又た其跡を杜げり、代議院は當時猶ほ休會中なりしかど、議長は其内の官邸に在りて幹事以下の役員亦在院中なれば、委員は此等の人に面晤して委しく請願の趣意を述べ、議長は議院開會の後、取敢ず其請願を検按する樣取計ふ可き旨を告げ、次で四時頃より委員は同院を出でて市廳に赴きしに、爰にはセーヌ州長ありて、内務大臣の嚴命なりとて唯々ヴイヤン氏一人委員の資格を以てせず、市會議員の資格を以て内に入るを許したるのみ、其餘は代議士と雖も、固く拒みて入るを許さず、終に空しく引返せり、同廳の前にも亦若干の群集あり、從て亦之に相應せる兵隊巡査の警固あり、午後五時に近き頃ひ、一群の暴徒、棒、短銃其他思ひ〳〵の獲物を携へ、コンコルドの廣場より程遠からぬ内務省の前に推寄せ來り、警固の巡査迎へ合せて、終に一場の接戰を開き、一時は巡査の人數不足にして散々に打負されしかど、軈て騎兵の應援を得て、忽ちに暴徒を追ひ拂へり、此時暴徒の中にて輕傷を負ひし者は十餘人、兵隊巡査の方にも二三十人の怪我人あり、是ぞ當日最大の出來事なりしならん、夜に入て後も、コンコルド近傍の市街にて巡査と人民との間に間々小ぜり合ひありたれど、何れも、別段に記するに足るべき大事に至らず、十一時を過ぐる頃には、人々思ひ〳〵に散亂して、市街の景況全く常に復したり、

此日コンコルドの近傍及び同所より市廳に至る道筋の諸商店大抵其店を閉したるは、亂暴人の侵掠を恐れてなるべし、又た府内諸工場にて同日休業せし職人は永久暇を遣るべしと威迫せられ、之に迫られて運動會に荷擔するを敢へせざりし者も尠からず、賢き職工等は初めより運動會の效なきを察し、休業の許可を得たるを幸ひ、好天氣に乘じ、家族を携へて近郊の公園に遊び、樂しく一日を送りし者も多かりしと言へり、

此日兵隊巡査にからかひ、警察署に拘引せられし者三百人に餘り、其中過半は即夜直ちに放免せられ、其餘も漸次に放免せらるゝ者多しとのことなり、

さて是れよりは

佛國各地方に於ける運動會の概況

を記さんに、前に述べたる如く、此度の運動會は何れの場所も日を期して同時に催す可きものなれば、之に應ずる政府の鎭壓處分も亦獨り巴里府内に止まらず、各地到る所に相應の備へを設け、其地を管轄する鎭臺司令官亦其地方官を助けて安寧秩序を維持するに力を致したるは、今更言ふ迄もなし、左れば何れの地方も思ひしよりは平穩にして、多くは唯々勞役者より市廳又は州廳に向け委員を出して請願を爲し、若くは夜間所々に會合を爲す等の事に止まり、別に示威運動とも稱すべき、大層らしき事もなく、「里昂」の如きは佛國第二の都府として、工業も盛んに、職工の人數も多く、動もすれば社會主義の勢力を張るに都合よき土地柄なれば、疾くよりして世人も大に眼を爰に注ぎ居たれど、爰にても亦た其前夜までに、不軌を謀れる無政府黨員數十人拘引せられ、晝間府内の各所に集れる職人等は巴里と均しく兵隊巡査より追拂はれ、別段の爭ひとてもなく、夜に入りて社會黨の者共、會議を開き、「諸國の勞役者大擧して同盟罷工を起すの可否を議するが爲め、此頃に再び萬國社會黨會議を開くべし」との事を議決せし迄なりき、左れど廣き佛國の中には兵隊巡査の力も未だ安寧秩序を維持するに足らずして、亂暴狼藉の狀を呈したる地方亦全く無きにあらず、今其重なる者を擧げんに、

馬耳塞

にては、多くの伊太利邊より來れる無政府黨に煽動せられて、數千人の暴徒幾群となく、旗を推し立て市內を横行し、或は市內の諸工場を破壞せんとし、或は麵麭屋に迫り、同盟罷工を起さしめて、富豪をして飢に苦しましめんと企て、又た勞役取引所(公けなる職工雇入周旋所なり)に到て亂暴を行ひ、警固の兵隊巡査と劇しき爭鬪の後終に潰走したりしが、拘引せられし者殆んど百人に達したり、

バー、ド、カレー州

の首府ランにては一萬五千の炭坑坑夫に、婦女を加へて總數二萬五千餘人、市街に群集して「メーチング」を開き、市中警固の憲兵は一萬餘の坑夫に取卷かれて散々に打擲まされ、アラーの兵營より一隊の兵士來援せしに由り、幸うじて其難を免れたれども、翌二日も引續いて同府は勿論、エナン、リエタール、ビリー、モンチニー等の炭坑坑夫、齊しく起りて同盟罷工を爲し、會社を脅迫し、又は市街に出でて頻りに亂暴を行ふ故、アランの兵營より數大隊の兵士を差向けて專ら之が鎭壓に盡力せり、

イゼール州

のヴィエンヌ郡にては三日前にルイーズ、ミセール女の演說に煽動せられたる一群の無政府黨員、織物工場の職工を脅迫し、同勢二千餘人演劇場に到て集會を開きたれば、代議士ジョソフロアー氏之に臨みて、騷動を取鎭むる爲め演說を爲さんとせしに、氏は忽ち大勢に亂擊せられ、之を救はんとて來りたる一人の警察官も亦散々に打擲せられ、二人共匐々の體にて演劇場の門番の內に逃げ込みたりしが、夫れより暴徒は一同外に出でて諸所の織物工場に至り、門戶を破り、器械を毀ち、亂暴狼藉至らさるなく、近傍の鎭臺兵來て警察官を助けて暴徒の張本人を取押へ、一時は鎭靜に歸したれど、翌日より織物、染物等を業とする男女の職工亦夥しく同盟罷工を起して工場に來らず、

ノール州

にてはルーベー、ヴァランシャンヌ、レースム等に在る炭坑の坑夫、總勢五六萬人前日より其業を操らず、一日には早朝より隊を結び群を爲して諸所の製造場を襲ひ、門を破りて其內に闖入し、職工の業を操り居る者を脅迫して、齊しく同盟罷工を起さしめ、翌二日に至りて其勢益々猖獗を加へ、同州の首府リールより二千餘の兵士を繰り出して鎭壓せんとすれども、其力足らずして猶ほ頻りに援兵の到るを待てり、

ガール州

のベセトジュにても亦五月一日の運動後炭坑の坑夫首とし、同盟罷工を起し、紡績の女工起ちて之と合體し、其勢ひ亦頗る猖獗なり、

右は通信者が五月四日までに得たる報道中にて其事の最も重要なる事を擧げしのみ、猶ほ此類の騷動を一々に書き立てたらんには、幾千行を塡むるも其詳なるを悉す能はざるべし、且つ同日の運動より變じて同盟罷工と爲れる者の中には、或は數日を出でずして、鎭靜に歸したる者あり、或は今猶ほ罷工を繼續して、其結局を視るに至らざる者あり、左れど爰には細かに其顚末を記するの暇なく、唯々五月一日の概況を報ずるを以て足れりと爲せり、

是よりは更に轉じて、

諸外國の狀況

を略述せんに第一、

日耳曼

は人の能く知る如く、社會黨の巢窟根據とも稱すべき土地柄なれば、五月一日には如何なる珍事をか引起さんと、人々心を痛め居たりしに、案に相違して、當日は首府伯林を始め、國中至て靜謐にして、別に示威運動會と稱すべき程

の事もなく、各地の工場にて、職人の休業せし者さへ極めて罕れに、左して記するに足るべき事あらざりき、

蓋し此日の運動に最も壯觀を與へたる者は、

墺地利　匈牙利

ならん、墺國の首府維納にては、何れの工場も大體休業して、午前には府内六十餘ケ所に職工の集會あり、この集會にては普通選擧の制を設くることと、勞役時間を一日八時間に減縮することとの兩條を議決し、午後よりは同職業の者、各々隊を組み行列を作りて、市中を練り行き、プラテールと稱する公園に集り、爰にて復た辯士の演說等ありしが、其狀頗る靜肅にして絕えて騷動ケ間敷き事もあらざりしと云ふ。匈國の首府ビュダーペストにては一群の罷工同盟人、當日休業せざる工場の前に到り、其内に在る職工を脅さんとしたれど、其目的を達せず、次で警察の許可を得、二萬餘の職工府内の公園に會して「メーチング」を開きしが事故なく解散し、其他フラーグにては、無政府黨の者ども同所と維納との間の鐵道線を斷切せんと企てたれども、其事未然に發覺し、ランデンブールグにても多數の職工暴動を起したれど、警固の憲兵難なく之を鎭靜せり、左れど此日より維納近傍のシメリング、幷にフラーグの官有鐵道の職工、マエヒリスッ、オーストロー、トリフアイル等の炭坑坑夫、ヒエリッツ、フレーワルドー等の紡績又は織物職工、ビュダーペストの麵麭製造人を始めとし、同盟罷工陸續として所在に起り、其勢ひ日に倍々熾んなり、

西班牙

の首府マドリードにては此日雨甚しくして、大勢屋外に群集するを妨げたれど、猶ほ一萬二千餘の職工行列をなして市中を練り行き、府内の公園に集り、代議院に向け請願委員を出し、無政府黨員各所に「メーチング」を開きて、極めて過激なる演說を爲し、バルスローヌ府にては三千餘の暴徒府内を横行し、職工を脅かして罷工同盟を起さしめ、火を放ち、家を毀ち、短銃を執て憲兵巡査に抵抗せるより、同府知事は遂に其印綬を解て鎭臺司令官に與へ、府内に戒嚴令を布きて百事軍法を以て處分することと爲し、其他アリカント、マラガー、アントルクラー、ミュルシー、ビルバオー等の地方にも亦此日より同盟罷工陸續として起り、四日日曜日に至り、國中所在の都府にて、再び示威運動會を催せり。

葡萄牙

にては首府リスボーヌを始め何れの地方も頗る靜穩にして左したることあらざりき。

伊太利

にては其首府羅馬を始めミラン、チュラン、ヴニース、フロランス、ハルム等の地方亦何れも降雨甚しく、且つ政府の警備甚だ嚴重にして、若干の人衆一所に集れば、忽ちに兵士をして追ひ拂はしめしがゆゑ、何れも果敢々々しき運動を爲すを得ざりしかど、チュランにては群集と警固の兵士との間に烈しき爭鬪を生じ、兩方にて傷を被りし者、百餘人に及び、此處も亦戒嚴令を布くに至れり、又た同國リヴールヌにても此日より鐵工、幷に硝子製造其他の職工夥しく同盟罷工を起し、勞役時間を減縮せんことを要求せり、

白耳義

の首府ブリュッセルにては凡そ一萬餘の職工行列を作り、「八時間の勞役、八時間の娛樂、八時間の睡眠、人民之を望めば必ず之を得べし」と、大記せる旗章を立て、市中を練り行き、其狀頗る靜肅にして何事もなく、アンヴェール其他の地方も大抵之に同じく、極めて平穩なりき、

荷蘭のアムステルダムにては市街に運動會を催すを禁じ、兵隊市中を警固し、同國ハイーにては前夜職工の「メーチング」を開き、其歸途行列を作りて市街を練り行かんとせしに、兵隊の爲めに追拂はれ、當日は再び運動を催すに至らず、其他の地方は何れも極めて靜穩なりし、

蘇西の首府ベルンヌは至て平穩にして、職工は午後のみ休業し、僅々千餘人の職工行列を作り、市街を練り行きしのみ、ジュネーヴ其他も亦至て平穩なりし、

瑞典及び諾威のストックホルムとクリスチャナーとの兩府にても亦職工の行列市街を練り行き、及び政府に向け、勞役時間を減縮するの請願委員を出せり、是れ亦絕て騷擾に渉る者あらざりし、

魯西亞及びバルカン半島の諸國に關しては何の沙汰もなし、最後に、

英國倫敦にても國民同盟と稱する職工の組合に若干の社會黨員を合して、凡そ一萬五六千人ほど運動會を催せしが、警察にては大に其取締を嚴にし、運動者の通行すべき道筋をば專ら府内にて商賣の盛んならざる街路に限りたり。運動者は行列を作り、赤色の旗に「雇主撲滅」又は「之ニ與セザル職工ハ奴隷ナリ」などとの言句を獨、佛、英、三國の語にて記したるを押し立て、一齊に佛國の國歌「マルセイエーズ」を歌うて、例の如くハイドパークに練り行き、爰にて辯士の演說等あり、終て一同穩かに解散したり、

此他南北亞米利加の狀況は、本信を發する頃までは、未だ其詳報を得ざりしかど、**合衆國**にて工業の中心たる紐育にては、二萬七千餘の職工運動會を催し、チカゴにては其數更に是より多く、且つチカゴの職工は、其日より引續き同盟罷工を起せりとの報あり、

之を要するに、此度の運動會に由り、到る所幾多の暴動、幾多の同盟罷工を引起したるは、得て疑ふ可らず、而して今や社會主義の日々に益々其勢力を加ふるの實あるも亦得て疑ふ可らず。通信者は猶ほ此事に就き、別に鄙見を開披して我邦大方の士に問ふ所あり、讀者幸に彼此參看して敎ふる所あれ、(巴里より五月九日發)

(『國民之友』第八十八號明治二十三年七月十三日)

傾きあり、然るに歐洲大陸に在ては、前に伯林の列國會議に係る通信中にも詳述せし如く、丁年者一日の勞役十時間を下らざる者極めて罕れなり、故に「三八法」を要求するの叫聲は、輓近頓に勞役社會に響き、加ふるに伯林の列國會議に於ても亦た勞役時間の問題を提出せしに由て、更に愈々其要求心を鼓舞したる者の如く、當時佛國政府より同會に派遣せられたる委員の一人、ドラエー氏の如きも亦た此「三八法」を主張するの熱心なる者にして、氏は米國の官立諸工場に於て一日の勞役を八時間に限り、英國にても一日の勞役平均九時間に過ぎざるも、其生產額を比較すれば、却て佛國其他の諸國に於て、十一時間乃至十二時間以上の勞役に由て得る所より饒多なりと爲し、彼此の統計を按じて其言の切實謬らざるを證明し、其議論大に勢力を勞役社會に得たり、

左れど氏幷に氏と意見を同じくする論者は、倶に甚しき矛盾の言を爲して自ら喜べり、云く、勞役時間長きに過ぐるに由て其生產額亦た多きに過ぎ、從て職工の其業を得る能はざる者多きを加ふと、噫々是れ果して何の謂ひぞや、今若し勞役時間を短減するの目的は、其生產額をして多きに過ぎざらしむるに在りとせんか、氏の引用せる英米の實例に徵するも、其所謂る「三八法」を實施するは却て其生產額を加ふる所以にあらずや、果して勞役時間を減ずるも各人の其生產額を減ずることあらずとせんか、氏の憂慮せる職工の其業を得ざる者を救濟するに於て、一も其甲斐なきに非ずや。

且其生產額多きに過ぎたりとの說も、亦甚だ精核ならざる者なり、左れば此事に就き、當時經濟學の大家ホール、ルロアー、ボーリーウ氏は說、爲して云く、ドラエー氏の視て生產額多きに過ぎたりと做せるは、其實社會全體の生產額多きに過ぎたるの故にあらず、唯々生產力及び生產物の配分、未だ全く社會に平均を得ざるより、社會の或る部分に於て間々其生產額多きに過ぐるの觀を呈することあり、譬へば猶ほ人身に於て氣血の循環宜しきを得ず、體中或る部分に於て膨脹を生じたるがごとし、纔かに其膨脹せる部分のみを觀て、之を多血の人なりと云ふは、庸醫だも爲さゞる所なりと、此言信に然り、何となれば、苟も人間社會が圓滿無缺の域に達せざる間は、何事に就ても多少の偏輕偏重を生ずるは、數の免れざる所なればなり、

將た彼れ「三八法」論者の唱道せる勞役の時間を減じて、其生產額を減ぜずとの說も、亦た未だ一概に信を措くに足らざる者あり、凡そ經濟上の所謂る生產なる者は獨り人の勞力のみに由て成る者に非ずして、又資本の協贊に由りて成る者たるは、今日に於て小學生徒と雖も猶ほ能く知る所たり、左れば英米諸國に於て、一日八時間乃至九時間の勞役を用ゐ、其得る所の生產額却て佛國其他の工場に於て十一時間若くは十二時間餘の勞役に由て得る所より多きことあるも、直ちに是を以て一に其勞役適度を得たるの效果なりと稱するを得ず、直ちに是を以て佛國其他の職工が每日八時間以外に費せる、四時間乃至五時間の勞役よりは、一切生產する所なしと論決するを得ず、而して英米諸國に於て其生產額を得るの多きは、其勞役時間を減じたるの故にあらずして、寧ろ勞力と並び立つて、生產の事業に重要の役目を勤むる資本の運用宜しきを得、其用ゆる所の機具器械は精巧鋭利を極め、其工場の整理、就業の方法等亦た大に完備せるの故を以て、其勞役時間を減じて失へる所を償ひ、猶ほ且つ餘りあるの致す所たるやも亦未だ知る可らず、夫れ今日器械工業の進步に於て、佛國を始め歐洲大陸の諸國は共に英米二國に一着を讓れるは滿天下の普く知る所な

り、蓋し彼れ社會黨は生產の事業に於て專ら重きを人の勞力に歸し、常に資本を以て不倶戴天の仇敵と爲す、是れ其本來の主義とする所、固より然り、故にこの僻見に陷りて悟る能はざるなり、

勿論人の生產力は自ら程度ある者にして、其自然の程度を超え、無暗矢鱈に働きたればとて、其割合に生產額を加ふる者にあらざるは、作業の自由を主張する論者と雖も亦た之を認めざるにあらず、左れど其所謂る程度なる者は、各々其國の風土氣候に應じ、其人種の體格資質に應じ、其工業の繁閑消長に應じて、各地各邦に到る所其揆を一にせず、啻に各地各邦其揆を一にせざるのみならず、一邦內若くは一地方內に生息する各個人の間に於ても、或は其體力の强弱に由り、或は其材器の長短に由り、或は其營業の種類に由り、又或は其生計の事情等に由り、千差萬別、亦た一も相齊しき者なし、昔人云く、夫物之不齊、物之情也と、情とは自然の謂ひなり、而して今や一片の法律を以て、政權の力を以て此の自然の傾向を矯め、强て其相齊しからざるを齊しくせんと欲す、此れ果して能くすべき乎、

更に一事の吟味す可き者あり、一日の勞役を八時間に制限するは、彼れ「三八法」論者の所謂る人間生活の時間を平等に三分するの生理說と全く相符合せざること是れなり、凡そ何れの邦國に於ても或は其政府の成典に因り、或は其人民の慣習に因り、或は其宗教の儀式に因りて、一年中若干の日數は必ず休業する事あり、又た文明諸國に於ては、日曜日には大抵休業するの例あり、工場の修繕、器械の破損等の爲めに已むを得ず其業を廢することあり、其職業の種類に由ては、雨天の日に勞働する能はざる者あり、今若し此等の日數を控除し、其餘れる者に就きて一日の勞役を八時間に限定せば、其單に成丁强壯の人のみに就て之を言ふも、其力を生產に用ゆるの時間は、其生活時間の三分の一は愚か、或は其六分の一にだも猶ほ且つ能はざるべし、是故に彼れ「三八」論者の說果して世に行はれんか、社會の生產額は必ず今日に比して大に減ずる所なかる可らず、社會の生產額果して減ずる所あらんか、其生產物の價必ず大に騰貴せざるを得ず、――勞役者の得べき賃銀に比して――其生產物の價果して騰貴せんか、勞役者と雖も亦必ず日々の生活に高價の物品を消費せざる可らず、是に至て假令法律の力を以て其賃銀の最低額を維持するも、勞役者の爲めに何ぞ一も得る所あらんや、其命運を改良し、其困厄窮苦を輕減するに於て、何ぞ秋毫も益する所あらんや、

且夫れ閑暇の時間を適當に消費するは、賢知の人と雖も猶ほ且つ難んずる所なり、況んや無知敎なきの勞役者をや、其閑暇を得ること多きに過ぐるの弊は、徒らに酒を飲み、博奕を事とし、益々其品行を亂し、滋々其惡習を增長するに至るやも亦た未だ計るべからず、固より人々の私行は人々の自由に屬し、其得たる閑暇の時間を如何なる事に使用するも、直接に害を人に及ぼさゞる以上は、他人之に干涉するの權利なしとするも、苟も勞役者の命運を改良し、其窮苦を減じ、其福利を進むるを以て自ら任ずる者は、須く其利弊の存する所を探究して以て進步の功績を實際に擧げんことを務めざるべからず、若し夫れ徒らに其說の新奇なるを喜び、雷同附和して勢を張り、以て社會の風俗を壞敗する者は是れ所謂る「デマゴーグ」のみ、

今若し一日の勞役を八時間に減ずるも、其生產額に於て一も減ずる所なきこと、實に彼れ「三八」論者の主張するが如しとせば、法律の制限を設くるまでもなく、世の雇主資本家必ず自ら進みて勞役時間を減縮するに至るべしとの說

は、予之を主張せざるべし、何となれば世の雇主資本家の中には徒らに舊習を株守して、更に改良進歩の意念を有せざる頑冥の徒頗る多く、此徒は恰も中世奴隷解放の前に、何人も自由勞役の却て奴隷の勞役より生産多きを悟らざりし如く、凡そ其慣行せる者の外には、絶えて善良移るべきの方法あるを知らざればなり、左れど斯る頑冥の雇主資本家、猶ほ世に其勢力を有し、而して又甘んじて之が使役に供するの勞役者、其數を減ずることなくんば、如何に嚴密の法律を設くるも、此徒は巧みに法網を潛りて、長く其羈絆を其使役する勞役者に加ふるを休めざるべし、我邦の娼妓を看よ、維新の後娼妓解放令出でゝ彼等は名義上自由の勤めを爲すに至りたるに拘らず、青樓主人は前借の鐵鎖を以て緊く彼等を繋縛し、待遇[illegible]待毫も昔時に異ならざるに非ずや、高利貸を視よ、利子制限法出でゝ、貸金の利子は年一割五分――？と覺ゆ――に超ゆるを禁じたるに拘らず、彼等は猶ほ能く五兩一歩の高利を貪り取て、而も其家業益々繁昌を極むるにあらずや、夫れ國民中僅々の少數に適施する法律すら其效を奏せざること斯の如き者あり、況や其大多數を爲せる雇主と職工とに適施するの法律をや、又た況んや、宇内萬國を通じて劃一の制を設くるをや、其效を奏せざる知るべきのみ、

斯く言へばとて、予は敢て勞役者今日の困厄は積勢の然らしむる所、詮方なき次第なれば、唯ゝ其行くに任せ、其爲すが儘に擱くに如かずと論斷するにあらず、夫れ星を戴き、月を踐み、嚴冬猶ほ汗を流してアクセク働くも、其得る所の賃銀は、其食する所の麪麭の價をだも償ふに足らず、妻子常に飢凍に泣きて困生窮死の外、復た人生の事に感なき者、滔々として天下に滿てり、是れ世の仁人君子の斷腸禁ぜざる所に非ずや、而して他の一方を顧みれば、綾羅を纏ひ、膏粱に飽き、輕に駕し、肥に鞭ち、復た人生勤勞の何物たるを知らず、又た且つ其金力の强大なるを恃みて、勝手氣儘に其同類を虐使し、一點慈愛惻隱の情を有せざる者亦滔々として天下に滿てり、是れ亦た世の正人志士の痛憤措かざる所にあらずや、夫れ此の如き現象は、人類社會極致の盛域に達し、富の生產、富の配分、共に經濟的自然の理法に叶へるに由て生ずべきものにあらず、自他天稟の器能不平等なる以上は、社會に貧富の不平等を生ずるは免れ難き數なりとするも、苟も人として斯世に生れ出でたる者は責めては其れ相應の職業を治めて家を爲し族を營み、人として恥しからざる生存を全くして、同類中他の階級の者より無理無法なる虐待を被ることなく、老者は安じ、幼者は教へて、疾病患難いつ何時にも頼む所ある丈けには、如何にもして社會の位地を推進めざるべからず。左れば其地方の狀況に由り、其工業の種類に由り、又た彼我の事情に由りて、其勞役時間果して長きに過ぐるものは、雇主に請求して、之を短減せしむる可なり、其賃銀果して寡きに過ぐる者は、之を增加せしむる可なり、場合に由ては、同業相謀りて同盟罷工を爲し――亂暴を行ひ、騷動を起すことなく――雇主をして其請求を容るゝの已むを得ざるに至らしむるも亦た甚だ可なり、然れども、劃一の法律を以て、――特に宇内萬國劃一の法律を以て――强て勞役の時間を制限し、强て賃銀の最低額を規定し、以て政權の干渉を大にし、以て作業の自由を減却し、以て各人自主の權を敗壞せんと欲するは、祇々に自然の法則に背反し其目的を達する甚だ難きのみならず、亦實に勞役社會の改良進歩を遂げ、彼等をして眞成の快樂、眞成の福利を享有せしむる所以にあらず、是れ予の斷じて與せざる所なり、

且つ彼れ社會黨の論者が如何に其詭辯を振ふも、現時の秩序を保有し、現時の進歩を繼續して、終に社會の改良を遂ぐる能はずとするは、是れ甚だ偏僻の見のみ、遠き昔は姑く之を措く、最近五十年來佛國の事例に徴するも、前には勞役者一日の賃銀平均二法五十に過ぎざりし者が、今は增して四法以上に上り、而して日常生計に必要なる物品は、其價却て低落せる者多くして、騰貴せる者稀れなり、是れ近世器械工業の進歩に由り、大に其生產費を減じたるの致す所にして、且つ多く器械力を使用するの結果は、昔日專ら人力にのみ依賴せる時に比して、職工の其勞力を用ゆるの量大に寡きを加へたるは亦た論を待たずして明かなり、之に加ふるに、貧困を救ひ災難に備へ、鰥寡孤獨を休養安撫すべき、公私凡百の制度日に月に漸く完備を盡すの趣あるは、是れ亦た得て掩ふ可らず、但に社會文明の進歩に伴ひ、人の嗜欲を促動すべき事物亦た從て繁多なるを致し、昔日の贅澤品は、變じて今日の必要品となり、貴賤上下を問はず、其日用の費途漸く多端に渉り、智慮淺短の勞役者は、徒らに目前の需用に追はれて其地位を修良するの暇なく、隨て窮苦困厄を訴ふる者、猶に大に其數を減ぜざるは、亦是れ已むを得ざるの勢なり、左れば今より後更に愈々勞役者の智見を開發し、其自主の權利を亢張し、其自營の精神を振作し、其責任の意匠を研明して以て自ら恃む所あらしめ、又盛んに自由の團結より成れる協會又は組合の類を設けて、相共に同業の利益を防衞し、以て雇主資本家の專橫に備へ、世の博愛慈仁の君子亦能く自ら奮うて、勞役者の味方となり、誘掖指導怠ることなく、而して法律は唯此類の仕組の進歩發達に妨害ある者を芟鋤し、若くは幼童婦女子の如き、不能力者を保護し、若くは貪戾無殘の雇主が詐を設けて暗愚の勞役者を欺き、面のあたり忍ぶ可らざる虐待を加ふるを禁遏するに止まらば、庶幾くは此の至難の社會問題を平和に解決するを得ん、

顧ふに我が日本は今や緊急切迫の問題の政論場裡を鬧がす者極めて繁多なるの秋に方り、予獨り我が國人に緣遠き此の社會問題を提へ來りて、反覆吶々の辯を試みる所以は、他なし、今や滔々天に漲るの勢を以て、泰西文明の航路を惱ませる此の社會主義の狂瀾をして予の愛する本國の疆土內に氾濫せしめざらんことを願うてなり、若し夫れ今に及んで預め之が計を爲さず、他日衆多の職工を一場內に使役する器械工業の類漸く發達し、貧富の勢ひ亦た漸く懸絕し、而して世の亡賴不逞の徒、其名を社會主義に託して、無智の勞役者を煽動するの時に至り、又た彼の獨逸流の國家社會主義を假り來て之に應ずるが如きは、民友記者の所謂「平民主義」を我邦に實施する所以にあらざればなり、（巴里より）

（『國民之友』第八十九號　明治二十三年七月三十日）

五月一日及び總擧同盟罷工

五月一日の勞役者運動會に際し又總擧同盟罷工の問題の囂々たるに會して聊か之に關する事情を講究し、國民之友の平民主義の讀者に富めるを知り、乃ち稿本を之に寄せて我邦の勞役者に傳へ、以てその一思を求めんと欲す、敢て博雅君子の瀏覽に供すと言ふにあらず。

去年以來、歐米二洲の勞役者の爲めに、宗教外の一の聖日と成れる五月一日再び來れり。彼等は此日を期して其の勢力の大なるを天下に表彰し、以て政府を抑制し、以て世の雇主、資本家を威嚇し、以て彼の所謂る三八法の實施を要求するに切なり。左れど本年の當日は孰れの國々にても、彼等の運動概して去年ほどに壯大ならず、又た去年ほどに亂暴ならず、而して世上一般の人心にも亦た去年ほどに心配を與へざりしは、是れ豈に彼等は既にその要求の目的を達したるが爲めか、良し或はその目的を達せりと言ふまでに至らざるも、責めては久しからずして容易く之を達するの心算あるが爲めか、將た或は彼等の勢力は早既に沮喪して、其熱心も亦た業已に冷却したるか。左るにても、彼等の希望するが如く其一日の勞役を六時間に限定し、並に其の賃銀の最少額を定むるの法律は、未だ孰れの國にも之を制定せんとするの沙汰あらざれば、彼等は固より一歩たりとも其の目的に接近したりと謂ふを得ず。而して今や勞力資本の抗爭は、日に益々紛糾を加ふるの觀あるも、曾て靜平に期するの望なく、社會主義の氣焔は日に彌々其勢威を張るの趣あるも、絕えて其鋒鋩を藏むるの色あらざれば、亦た何ぞ彼等の勢力頓に沮喪し、其熱心俄かに冷却するが如きことあらんや。人若し當日の一擧を視て乃ち彼の危難の問題が漸く將に重きを世に失はんとすと思料することあらば、是れ亦た早計の太甚きなり。

大凡新を趁ひ奇に趨るは是れ人の常情なり。況して思慮淺く、識見深からざる勞役者の輩にして、爭でか亦この常情に洩るゝを得んや。左れば去年までは、凡そ各國各地の同輩が、同日、同時に同目的の爲めに齊しく起りて運動會を催すと言ふが如きは、千古以來未だ曾て有らざりし事なりしゆゑ、吾れ人共に殊の外物珍しく思はれ、未だ其の影響の至る所、其の效力の及ぶ所を究尋するにだも及ばずして、此一擧忽ちにして能く世の爲政家を劫制し、世の雇主、資本家を震慴し、以て其の志す所を達するに難からずと妄信せし輩必ず多々ありしならん。而して世の治を厭ひ、亂を好み、平時、列國の間に潛伏して、間がな、隙がな事あれかしと覘ひ居る幾多の無賴漢——卽ち彼等自ら誇稱して無政府黨又は非愛國黨と云へる輩亦た必ず勞役者の多數が常に其の困窮を免れんと欲する冀望心の切なると、其經驗の功なきとを恃み、矢鱈無性に煽動教唆して運動會に加はらしめ、由て其間に匪望を逞くするの機會を得んことを求めたるならん。左ればこそ、去年の運動會は彼れが如く壯觀を呈したると同時に、又た彼れが如く亂暴を極めたりしなり。

左れど一たび之を實際に試みたるに、孰れの國々にても政府の警備は案外に手強く、資本家の恐怖は案外に手薄く、運動會の效能は案外に手緩くして、勞役者當初の希望は殆んど夢の

如くに消え失せたれば、爭でか妻あり、子あり、日々麵包の代金を要することある正直なる勞役者にして、其の一日の賃銀を抛ち、其の雇主のお目玉を恐れず、場合に由ては其の身と其妻子とが生命を繫げる工場より、永の暇を受くるをも顧みずして、今は早や珍しくもなき同一の戯曲を再演し、怒號狂奔徒らに巡査憲兵にカラカヒて以て自ら快とすることあらんや。

且つ去年の運動會は正直なる勞役者に右の如く有益の教訓を與へたるのみならず、當路の官廳も亦其經驗に由て、之を待つの手心を覺えたれば、孰れの國の政府にても敢て去年ほど曉々しく騷ぎ立つることなくして、靜に之に應ずるの備を設け、一方に於ては務めて勞役者の權利を敬重して、會合屯集一にその爲す所に任せ、自由自在に其思望を發洩するを得せしめたると同時に、又た他の一方に於ては、嚴重なる警固の手配を定め、苟も國の治安を妨げ、人の權利自由を侵害するの振舞を爲す者あれば、片ッ端より續々と之を取押ふるの職分を怠らざりしゆゑ、寬嚴各々其所を得て、敢て之れに由て勞役者の志氣を沮喪せしむることもなく、又た彼の無政府黨の輩も之に對して無體に手出しもならざりしなり。

斯る次第なりしが故に、通信者の居住地の如きも、當日は至て平穩にして、職人等の其業を休みし者さへ極めて稀れに、唯々平日よりは少しく早く其業を終り、夕刻よりお定りの行列を作り、旌旗奏樂儼しく市街を練り行きしのみ。其他、國内各地の市府にても大抵は同狀一轍。但し當日比よりリエージュ府の近傍にて同盟罷工を起し、今猶ほ倍々蔓延するの勢あれど、是れは必ずしも當日の運動會の爲めに起りたるに非ずして、下に記述する總擧同盟罷工の問題に關聯するが故に、爰には其詳なるを言はず。

巴里にては相替らず、社會黨員が三分四裂、或は當日は一同休業すべしと言ひ、否な休業すべからずと言ひ、或は屋外の集會を催すべしと言ひ、否な催すべからずと言ひ、小田原評定果ては何事も纏らず、唯々夜間諸所に集會を開き、其頭株の者共が出放題の暴論を吐き散すを聽き歡呼、喝采、僅かに其心を慰めしのみなりと言へり。晝間警察官が市中を徘徊する怪しき奴原を幾人となく拘引せるが如きは言ふ迄もなし。

英國人の實利に覺き、倫敦にては當日の運動會を翌々三日の日曜休暇に延し、當日は彼の廣きハイドパークに少數の無政府黨員、警察官に警衛せられて、暫時の集會を催し、空しく天を仰で無政府主義の遂に英の田土に移植す可らざるを浩歎せるのみ。三日の運動會は其人數六萬餘人頗る壯觀なりしと言へど、是も亦靜々謐々。

獨國も亦た其首府伯林を初め到る所靜穩なりき。數日前よりウエストファリー地方に起れる石炭坑夫の同盟罷工が、當日に至らば定めて大に猖獗を加ふるならんと思の外、却て徐々と其跡を斂むるに至りたるは奇と謂つ可く、而して亦推して此の記念日に於ける一般勞役者の傾情を測知すべし。

其他孰れの國々にても亦左したる異變を生じたることなし。左れど又た所に由ては、或は前に言ふ無政府黨員等の煽動に罹り、或は當路の官廳が勞役者に對して其鎭壓處分を施すこと嚴酷に過ぎたるの故に由り、却て其志を激して復た又た去年に均しき亂暴を引き起し、果ては群民と憲兵巡査との間に一場の血戰を開きて殺傷幾十人、捕囚幾百人と言ふが如き事なきにしもあらず。佛國にてリオン、マルセイユ、フールミーの如き、伊國にてはローマ、フロランスの如き、現に這般の悲劇を演出した

り。左れど、是れ亦去年の當日に就きて其詳なるを國民之友に報じたると其事件相類して、唯〻之よりも輕且小なりと言ふに過ぎざれば、必ずしも今復た其顚末を詳述するの要なし。故に五月一日の記事は之に止めて、更に近時の勞役問題に聯關する總擧同盟罷工に就て聊か講究する所あるべし。

(國民之友第百二十二號、明治二十四年六月二十三日)

* * * *

抑も總擧同盟罷工の問題たる、獨り當白耳義に於て、選擧權充張の一手段として起りたるのみならず、近時萬國社會黨の間にも亦往々その企謀する社會改革の目的を達するの手段として、此方案を取るべしと唱ふる者あり。而して去る三月の末に、佛國巴里に於て列國坑夫の同盟會を開きたるは、實に此の總擧同盟罷工の問題を論議するが爲めなりき。

右の同盟會には英國より四十一名の委員を出して、その國中の坑夫四十四萬八千六百餘人を代表し、獨國より十八名の委員を出して、其國中の坑夫十四萬千五百餘人を代表し、佛國より二十三名の委員を出して、十二萬七千人の坑夫を代表し、白耳義より十六名の委員を出して、九萬二千人の坑夫を代表し、墺國より一名の委員を出して、十萬人の坑夫を代表したれば、其會合せる委員の總數九十九名にして、その委員の代表せる坑夫の總數は多きこと實に百萬に垂んたり。是れ蓋し私設の列國會議としては、今に至るまで比類なきの盛會と謂はざる可らず。

蓋し石炭は近世社會富殖の源泉なり。彼れが如く絶大至强、精鋭纖巧の器械を運轉し、以て千の製造、萬の工業と營養するは、言ふ迄もなく、偏へに是れ石炭の力なり。而して石炭の採掘は最も衆多の勞役者を一場内に使役するを要するの業なり。その爲す所は他の職業よりも極めて難澁にして、又極めて危險多き者なり。左れば彼れ石炭坑夫は其腕力を用ゆるの多少に由て能く社會の財富を增減するの大權を握り、又たその多人數相共に艱苦を營むるに由て、大に協合團結の精神に富み、其勞する所は多くして其得る所は寡きに由り、方今社會の制度を以て正義に本きて立てる者にあらずと爲し、多くは其心を社會主義に傾けたれば、勞役社會の間に於て其勢力の大なる固より彼等の右に出づる者なく、彼等は殆んど勞役軍の中堅、牙營とも言ふ可き地位に立てり。故に彼等にして足を擧げて一たび呼べば、天下を動かすも亦た甚だ難きに非ず。而して此の大勢力を有する列國坑夫の大數が、各〻委員を派して相共にその將來の命運を改良するの方案を謀議せしめたるは、是れ亦要するに、列國各〻其政體を異にし、其政治の方針を異にし、上に在るの治者は動もすれば相反目、疾視するに係らず、下に在るの勞役者は其利害、休戚、趣向、感情、並に相同じき所ありて、協合、提挈、以て相偕に事に從ふの須要なるを覺知せること、日々漸く深且切なるを加ふるに由らずんばあらず。

偖て右の同盟會の議場に上りたる第一の論題は、是れ則ち彼等の金科玉條たる「八時間勞役の法律を制定せしむるが爲め、同會に代表せられたる列國の坑夫、齊しく起りて罷工を爲すの得失」にして、「八時間勞役の法律を設くるは、列國坑夫の現狀に於て須要缺く可らざる者なれば、其制定を要求するが爲め、列國相通じて總擧同盟罷工を起すことあるべし」との説は、殆んど全會一致を以て採決を經たりしが、「左らば其の總擧同盟罷工は果して何日より決行すべきや」と言ふに至り、白耳義委員は「一時を移さず之を決行すべし」と主張し、佛獨の委員中にも亦た此説に左袒する者ありしかど、英國委員は口を揃へて持重説を主張し、「今や吾儕坑夫黨は其組織未だ全からず、其紀律未だ整はず、其戰爭に要する軍資糧食(罷工中職人の救恤に用

ゆべき各組合の貯蓄金の類を言ふ）も亦た未だ充實ならざるの時に於て、敢て輕々しく事を擧ぐるは、是れ自ら敗亡を招くの道なり、且つ吾等委員は委託本人より總擧同盟罷工の期日を議定すべしとの委任を受けざれば、今之を議するの權なし」とて固く執て動かざりしゆゑ、期日の事は遂に議決に至らずして息めり。

是に次で「若し白耳義に於て選擧權擴張の爲めに、其國限りの總擧同盟罷工を爲したるときは、他の國々の坑夫は之に對して如何なる措置を爲すべきや」との議題に就ては、「白耳義の朋輩が政權に參與せんとするの要求は、是れ甚だ至當の要求なり。吾等宜しく列國連帶の情義を揮擢し、相共に彼等を援けて、其目的を達せしめざるべからず。故に彼等果して此事の爲めに、總擧同盟罷工を爲したるときは、吾等は其成功を容易ならしむるが爲め、各々自國の石炭を白耳義內に輸送するを妨止すべし。若し之を妨止するの力足らざることあらば、亦相共に罷工して、其產出額を減少せんことを計るべし」との賴もしき議決を爲して其會を散じたり。

斯くて其後四月五日に至り、更に當ブリュッセル府に於て白耳義國中の勞役黨大會を開き、選擧權擴張の爲めに、總擧同盟罷工を爲すの可否を論議したるに、前段巴里の坑夫同盟會より歸り來れる委員等は、同盟會の議決を報じて、即時に總擧同盟罷工を決行すべしと主張し、ワローン部の委員は大抵之に同意して、或は四月二十日を期し、或は遲くも五月一日の運動會を期して事を擧ぐべしと切論したれど、爰にも亦たフラマン部の委員等持重說を唱へ、「今や議院內に設けたる憲法改正の調査委員は已に其調査の事に着手し、而して議院は今方に預算案の審議中にて、預算は國の生命を繫ぐに須要缺く可らざる者なれば、之を擱きても憲法改正を先にすべしと言ふは、是れ無體の難題を構ふるなり。如かず、今姑く忍びて議院が預算案の審議を了るを待たんには。若し或は預算案の審議既に了るの後、議院猶ほ憲法改正の審議に取掛らずんば、是れ彼等は遂に吾黨の要求を容るゝに意なきなり。是に至て乃ち總擧同盟罷工の手段に出るも亦た敢て遲しとせず。左れば本會に於ては唯々憲法改正を要求する最後の手段として、總擧同盟罷工を爲すべしとの大主義の　を定め、而して之を決行するの期日は、一に本部委員の指定する所に任ずるこそ適當ならん」との說に終に多數の採決する所となれり。而してその所謂憲法改正は、其改正の條件に就てこそ各々意見を異にすることあるも、到底改正を行はざるべからずとの一事は、早や政府にても、議院內の兩黨中にても、皆均しく之を認めたれば、意ふに今や纔かに殘れる預算案の審議を了へたる後は、必ず直ちに之が改正に着手するならん。即ち現今の議院は政府と合議して憲法中にて改正を加ふ可き項目を指定し、而る後議院は一旦解散して新たに憲法議會を招集するならん。

附言　選擧法改正に關して、新たに朝野の間に現出すべき各種の方案は從て之を採收し、別に此事のみを纏めて報道せんと思へど、今日に在ては所謂群議百出未だ其大體の方向だに定まらざれば、猶ほ姑く其成行を熟視せざるべからず。

左れどワローン部の勞役黨はフラマン部の同輩が持重說をのみ固執するをモドカシク思ひ、逸りに逸りて動もすれば拔け駈けの戰を開かんとするの色あるより、斯くては其運動區々に分れて、其勢力一に合せず、遂に自ら敗亡を招くに至らんとて、當府の本部委員等は痛く氣を揉み居たりしが、端なく賃銀又は勞役時間に關する爭論の來て之と逢着したれば、遂に怺へかねて、前段に述べたる如く、五月一日の運動會に次ぎて、ワローン部中にて最も工業の隆昌せ

る、リエージュ府の近傍より相圖の火の手を擧げたりしに、彼の有名なるコックリールの製鐵場を始め、ムーズ河岸に簇立散布せる鑛坑、石炭坑、其他各種工場の工夫等均しく之に應じて其業を廢し、其餘焔延て、ナミュール、モンス、シャルロアー等の諸府に及び、其勢ひ頗る猛烈にして、或は爆裂彈を弄し、或は石を飛ばして巡査憲兵を要撃し、或は火を放つて森林を焼かんとするより、今は早や尋常行政官のみにては持て餘し、所在の鎭臺兵も亦憲兵巡査を助けて、頻りにその鎭靜に力を盡し居れり。而して其罷工者の人數は一昨五日の調べにて既に六萬七千の上に出で、其後日を逐うて增加するの勢あれば、思ふに今頃は早や十萬の上に出でしならん。

斯る勢に迫りたれば、本部委員等も最早や徒らに大會の議決にのみ拘泥して、勞役黨中の最も慓悍果鋭なる戰士をぞ、見殺しにして顧みざるの時にあらずとて、檄を國中の勞役黨に傳へ、相共に同情連帶の義を思ひ、その全力を竭して罷工者を援けんことを促したり。左れば、この後國中の勞役黨は、果して右の檄文に應じて、一齊に其業を廢止し、以て彼の所謂總擧同盟罷工を決行するか、將た或は現時の罷工を以て一切政治上、即ち選擧權擴張の運動に關係なく、唯ゝその賃銀又は勞役時間等經濟上の要求を達すれば足れりと視做し、未だ罷工せざる者も亦齊しく罷工するに非ずして、其應援は唯ゝ現在の罷工者に資金を供給するが如きに止め、以て其要求の目的を達するに至るまで之れをして其罷工を繼續するを得せしむるか、二者必ず其一に出づるならん。而して若し第一の手段に出でずして、第二の手段に出でんには、罷工は全く雇主と雇夫との爭に止まりて、今より更に著しく蔓延することもなく、或は雇夫の要求全く行はるゝか、或は仲裁和談等に由り、雙方歩み合ひの如きことに決着するか、孰れにしても、久しからずして一旦其陣を收むるに至るならん。

左れど若し然らずして遂に第一の手段に出でんか、是れ彼の勞役黨に取ては眞に由々しき一大事なり。蓋し同盟罷工も亦是れ一種の戰爭なり、其の勝敗に由て味方の運命を決する者なり。而も其戰爭は進攻襲擊を主とせずして、專ら退守防衞を旨とする者なり。此の如き戰爭に於ては、其軍資充實ならざる可らず、其軍紀肅ならざる可らず、其戰士は訓練能く至り、久しく窮苦艱難に耐へて、敢て屈折せざる勇氣なかる可らず。之に加ふるに其師を出す必ず名あり、其要求する所は必ず道理に叶ひ、又た能く彼我の勢を計料し、一も其策に遺算なきを竢て始めて事を擧げざる可らず。若しこの數者にして缺くる所あらば、屢ゝ戰うて屢ゝ敗れ、愈ゝ自家の勢力を削弱するに至る。近時各國の間に同盟罷工の起るは彼の如く衆多なるも、その勝つこと少くして、敗るゝことの多きは、蓋し亦た勞役者の思慮淺近にして、徒らに情火に激し易く、未だ必勝の算を定めずして、輕擧戰を開くに由らずんばあらず。

左れど、その罷工の一地方、一局部に止る者は、是れ唯ゝ其地方、其局部限りの小ぜり合に過ぎざれば、勝つも負くるも未だその全局の大勢に大なる影響を及ぼすに至らざるも、若し夫れ總擧同盟罷工に至ては其勢ひ大に之に異なり。彼れ勞役者果して一たび總擧同盟罷工を決行せんか、是れ彼等一個の階級を以て、全社會に存立する餘地の階級――無論無形上に存する階級――を相手に、殆んど天下分ケ目の大決戰を開けるなり。幸にして勝たんか、彼等は一擧能く敵を鏖にし、その後は社會の全權、擧げて彼等の掌中に歸すること、恰も佛國大革命に於て彼の第三族が能く僧侶、貴族を壓倒し

て、政治の全權を掌握せるが如くならん。不幸にして敗れんか、是れ彼等は一生懸命、その有らん限りの力を用ゐ竭して、最早や詮術あらざるなり。乃ち戰勝者の鐵鎖に緊縛せられて、永く之を斷切するの望なかるべし。

然り而して、今日に於て彼我の勢を料るに、彼等は果してこの天下分ケ目の大決戰を開きて、能く勝を制するの胸算あるか。勿論今日の勞役者は昔日に比して、其團結漸く固く、其組織漸く整ひ、その各業、各職、各組合の間に、各種の仕組を設けて貯蓄したる資金の如きも、亦能く一時の急を支ふるに足り、而して世の氣略膽識ありて、憤々志を得ざるの徒、亦相引て彼等の群に投ずる者ありて、其軍旅を統督指令するの將帥も亦甚だ其人に乏しからずと雖も、然れども、此の勢力と此の資金とは、果して能く天下の富を掩有し、天下の英俊を籠絡し、數十百年の久き、社會の要路に龍蟠虎踞したる彼等の敵手、即ち彼等の所謂統治の階級と對戰し、良し之を一擊に破碎する迄に至らざるも、責めては之と當等互角の勝負を爲し得るに足るか。思ふに彼等の黨中最も喜觀的の者と雖も、恐くは未だ然りと答ふる能はざるべし。

且つ勞役者の訓練教養するに難き、其の集りて群を爲すに及びてや、喧々囂々忽ち附景氣なる者を生じ、其始めは氣鋭に、志壯に、多勢を恃み、酒氣に使はれ、無賴の兇漢の煽動する所となりて、動もすれば亂暴狼藉の振舞を事とし、現に前にも述ぶるが如く、火を放ち人を脅かし、兇器を執て官人に抗し、自ら咎を引き罪に陷りて、遂には正當なる同盟罷工も、世人をして一揆暴動に均しき觀を爲さしむるに至る。是れ豈に稱して節制あり、紀律あるの軍と言ふ可けんや。若し夫れ曠日持久其戰ひ結びて解けず、其食に充つるの麵包は既に竭きて妻子飢に泣き、其家賃を拂ふの金も亦盡きて、居るに其所なきに至り、卑怯にも裏切り、內通、叩頭哀を雇主に乞うて、再び其業に就かんことを求め、竟に全軍潰敗の患を招くの徒、亦必ず節制なき紀律なきの陣中より出づ。意ふに彼れ勞役黨の大に憂懼する所は唯ゞ一に是に在り。彼の慓悍無前の坑夫黨にして、遂にその列國共通の總擧同盟罷工を斷行する能はざる所以、白耳義の勞役黨が亦た其國限りの總擧同盟罷工の必要なるを宣言しながら、猶ほ之が決行を遲疑する所以も、亦唯ゞ一に是に在り。

然るに今やその心配、憂懼は一も其用を爲さずして、その一局部の罷工は變じて總擧同盟罷工と爲るが如きことあらば、彼れ白耳義の勞役黨は始めより總擧同盟罷工を今日に決行するの意あるにあらず、隨て其準備支度も亦十分に整へるにあらず、唯ゞ其朋輩中に拔け駈けの戰を始めたる者あるが爲め、言はゞ本のお付き合までに、倉皇斯る大事を擧行する者なり。其紀律彌ゝ亂れ、其節制彌ゝ廢り、終に陣を張り久きに持する能はざるや知るべきのみ。且つ彼等の總擧同盟罷工を起すの趣旨は、一に憲法改正を促すが爲めに非ずや。然るに憲法改正の問題は既に前にも述ぶるが如く、今や方に好望を抱いて其の路程に上りつゝあるの時に於て、突如として斯る急激なる手段を用ゐて、天下を劫かさんと欲す。識者の輿論は其れ將た之を何とか言はん。是れ其師の出づるや名なきなり。夫れ甲兵完からず、糧餉豐かならず、軍に節制紀律なくして、其師の出づる亦た天下の望に反せり。故に凡そ兵家の忌む所は、彼等悉く之を犯して殆んど遺さゞるなり。此の如くして孤軍援なく、敢て政府を相手に、議院を相手に、富豪を相手に、又た中等社會を相手に、一大鏖戰を試みんと欲す、健氣と言はゞ健氣ならん、然れども其勢は卵を以て石に投ずるが如し、その潰敗する足を翹だてて待つべきのみ。是

故に彼れ勞役黨の爲めに計るに、如かず、今日の罷工を一局部に止め、その爭點を經濟問題に限り、靜かに其力を養うて以て時機の熟するを待たんには。

總じて之を言へば、通信者は其大體に於て必ずしも同盟罷工を非とする者にあらず。乃ち之を非とする者にあらずと雖も、亦必ずしも之を喜ぶ者にあらず、之を喜ぶ者にあらずと雖も、亦必ずしも之を恐るゝ者にあらず。蓋し同盟罷工は、彼れ可憐の勞役者が用て以て貪欲無慙の雇主資本家に抗衡する隨一の手段にして、時としては、此の手段の極めて良好なる效用を奏することあるは、亦た事實に徵して明かなり。勿論經濟上單に財富を產出するの點のみに就て之を論ずれば、同盟罷工の損ありて益なきや炳然たりと雖も、若し人は徒らに財富を產出するが爲めに生存するに非ずして、其生存を全くするが爲めに財富を產出する者たるを知り、而して勞役者も亦他と同一平等に人の群を洩れざるを知らば、固より此の一事を擧げて同盟罷工を非とす可きにあらず。但ゞ通信者が必ずしも之れを喜ばずと言ふは、他なし、其の勞役者の爲めに隨一の手段たるに由り、其の時としては良好の效用を奏することあるに由り、思慮なき經驗なきの勞役者が、其本を務めずして、其末に走り、先づ其始めに團結糾合、我の勝つ可らざる備を設けずして、輕ゝしく此の手段を濫用し、却て自ら其勢力を削弱するを恐るゝが故なり。去年濠洲の職工等が彼れが如き强大の勢力を以て、猶ほ且つ其罷工は終に失敗に歸したるが如き、亦た以て鑑むべし。

且つ人、その志の相同き者共に謀りて團結糾合するの自由（同盟）と、その爲すを欲せざる事を捨て爲さゞるの自由（罷工）とは、是れ固より得て奪ふ可らざるの權利なり。故に同盟罷工は道理に於て敢て一點の非難すべきなし。然れども既に一方に於て結合の自由、休業の自由の得て奪ふ可らざる權利たるを知らば、又た他の一方に於て作業の自由、分離の自由も亦た得て奪ふ可らざるの權利たるを知らざるべからず。左れば、彼れ勞役者が、一朝雇主に不平を構へて同盟罷工を起すに當り、或は他の同業者中、始めより之に加擔せざる者あり、或は一たび之に加擔するも、中途より其志を變じて、再び業を操る者あらんに、其平生の友誼に於て、之を道德の眼より視れば、或は憎むべき者ありとするも、其各人自主の權利を用ゆるの一事に於て、之を法律の眼より視れば、亦敢て一點の非難すべき者あらざるなり。

蓋し世に結合の自由、休業の自由あり、是に於て、暴戾不遜の雇主、資本家が妄りに其金力の大なるを恃みて、其雇使する勞役者を虐待するに當り、勞役者は能くこの自由を用ゐて、其暴横に抗し、以て其正當の要求を納れしむるを得べく、世に作業の自由、分離の自由あり、是に於て無謀短慮の勞役者が、濫りに無賴の兇漢に煽動せられ、無理無法の難題を構へて、爭を雇主、資本家に挑むに當り、正直溫良の勞役者は能くこの自由を用ゐて安んじて其生業を營むを得べし。左れば此二者は我が日本の陸海軍にあらざるも、亦た猶ほ鳥の兩翼、車の兩輪のごとく、相依り相扶けて、共に勞役者の權利を保護し、亦た猶ほ科學に所謂求心力と遠心力とのごとく、相牽き相制して、能く社會の平衡を保ち、敢て其生產事業を廢弛するに至らざるなり。而して通信者が、必ずしも同盟罷工を喜ばずと雖も、亦た必ずしも之れを恐れずと言ふも、亦た唯だ此二者ありて世に存するが故のみ。

若し夫れ其事は專ら經濟界の領分に屬し、常に需用供給の大法に由りて一上一下すべき――婦人小兒に非ざる成丁者の――勞役の時間、賃銀の定額をば妄りに人爲の法律を用ゐて制限

を加へんとするの危險にして事に益なきは、通信者も亦嘗て之を辯じたることあり。左れば、斯る事柄を名として、列國相通じて總擧同盟罷工を起すべしと言ひ、又は同盟罷工に由りて彼れ社會黨が頭腦の内に構成せる理想的——寧ろ妄想的——の新社會を出さんと欲するが如きは、是れ亦思はざるの甚しきなり。左れど、是も亦た患ふるに足らず。苟も國政に從ふの徒、彼等の怒號絶叫するに聽き悸ぢして遽てて其言を用ゆるが如きことなく、又たその勢力漸く大ならんとするの形あるを見て、他日の累を爲さんことを恐れ、濫りに其口舌を箝し其手足を縛し、敢て其言はんと欲する所を言ひ、其爲さんと欲する所を爲さしめざるが如きことなく、嚴乎として常に局外中立を守り、一意唯ゝ其本分たる治安を保つの職務を怠らず、其の雇主資本家の權利を保護すると同時に亦能く勞役者の結合の自由と休業の自由とを保護し、其結合の自由と休業の自由とを保護すると同時に、亦能く其分離の自由と、作業の自由とを保護し、而して世の雇主、資本家たる者は其雇使する勞役者も亦是れ己れと同權同類の人間なりとの大義を體して、念々忘るゝことなく、唯ゝ仁と愛とを以て之を待たば、前に所謂兩翼、兩輪、遠心力と求心力とは、雙々並び立て其間に言ふ可らざるの妙用を奏し、凡そ事皆その行くべき所に行き、その定るべき所に定らんのみ。彼の紛々然擾々乎たるの社會論、其れ將た我に於て何かあらんや。

　將た彼れ勞役者の輩も、其團結漸く廣く、其協合漸く大なるを致すに從ひ、亦必ず折々は多人數相會して時事を論議し、又は屋外に運動會の如きものを催し、以て其意思を發洩し、其勢力を表示せんことを求むるに至らん。斯る場合に際しては、假令當初は少々不體裁、不都合の廉ありとも、保安官吏は成るべく之を大目に見逃がして、唯ゝ面のあたり亂暴を働く輩を取締るのみに限るを善とす。是れ彼等をして聊か平日の苦惱を慰め、其胸中の憤悶不平を排洩せしめ、以て其横流潰決の患を防ぐ所以なればなり。其の當初の不都合、不體裁の如きは、漸く其事を累ぬるに從ひ、自家經驗と輿論の刺激とに由りて、自ら之を改悛するに至る可ければ、必ずしも深く心を用ゆるを要せず。若し夫れ然らずして、いつ迄も「お役人根性」を以て彼等に臨み、勞役者は無識、無教育の輩なれば、若し嚴重の取締りを爲さゞれば以ての外の不埒を仕出かするならんと心得、事ごとに壓抑干渉を旨とせんには、彼等も亦たいつ迄立つも「繼子性」を脱せずして、少しく其取締りの手緩き所あれば、忽ち其隙に乘じて亂暴狼藉を事とすることあるべく、斯くては幾十年を經るも政府は終に其干渉を解くに由なく、徒らに繁多の手數を加へて彼等の怨恨不平を買ふに異ならず。昨今兩年の五月一日運動會に徴するも、その動亂騷擾の發するは必ず政權の干渉苛嚴に過ぐるの佛國又は伊國の如き所に於てし、絶えて放任自由を旨とする英國の如き所に於てせず。國を治むる者、亦視て其の由る所を採擇する可なり。

　民友記者足下幸ひに異むこと勿れ。通信者が同盟罷工の事を記して、往々枝葉に入り、末節に移り、遂に此の冗長錯雜、文を爲せるを異むこと勿れ。是れ、其事たる通信者の常に視て至危至難なりと做せる社會問題に關聯して、吾等同胞の多數が、前途の休戚禍福を之に繫ぐこと、亦た甚だ輕小ならざればなり。（以上白耳義ブリュッセルより七月五日發）（『國民之友』第百二十三號 明治二十四年七月三日）

『社會問題』と『近世文明』との關繫に就きて

近者、同憂の諸君子相謀りて、社會問題の研究會を設立するの議あり、予輩も亦會末に加らむことを乞うて、その議を與り聞くことを得たり。本篇は則ち、社會問題の由來する所を按じて、その緊く『近世文明』に關聯繫結する所を明かにし、之を同志者に示して、その研究の方針を定むる參考の一に充てむと欲したる者なり。元と是れ予輩一己の私見に屬し、必ずしも同志者全體の意見にあらずと雖ども、亦以て今に於て社會問題を研究する最緊最急なる所以を世に明にするに足るものあらむ。

器械工業の發達と倶に、物質的文明の進歩と倶に、抑々又人權平等の大旨義の漸く世に明かなると倶に、多年蓄りに泰西文明の社會を煩惱せしめたる『社會問題』が、必然海を渡りて我邦に侵入するならむとは、夙に世上有識の士の預言したる所にして、今や將に此預言の適中せるを實際に證明せむとするの時運に會したり。

苟も我國民の前途を憂慮し、同胞相愛の眞情を存する者は、豈に之を不問に措くことを得むや。

假し『社會問題』なる一の術語を以て、汎く社會の不全不備を補ひ、その不公不平を矯むるの方案を討求するの謂ひなりとせば、孰れの邦國、孰れの時代に論なく、苟も人類社會が、完全至備の盛域に達せざる限りは、『社會問題』は恆久存立すべきこと勿論にして、獨り今日に及びて、紛々論議を試むるの必要あるべからず。

左れど、今日世間に於て『社會問題』と稱するは、一名之を『勞働問題』と云ひ、專ら經濟上に於ける富の分配の不平等に流るゝ弊患を防ぎ、貧富の間に甚しき懸隔を生ずる禍害を防ぎ、以て多數勞働者の窮苦を救濟し、その權利を扶立するの方案を求むるの義にして、近世社會が特に此問題の爲めに、大にその進路を刧かされ、その今日まで保存し來れる紀綱秩序すらも、亦或は之が爲めに敗壞し去られむとするが如き勢あるに至りたるは、他なし、即ち『近世文明』の賜物たる器械工業の發達が、人類生活の最大要件たる富の生産に一大變動を與へたるが故なり。果して然らば今我邦が出來る限りの力を竭して、泰西の物質的文明を輸入し、盛に精巧鋭利なる器械を備へ、巨萬の資本を運用して、數多の職工を廣大なる工場に雇役するの結果は、必ずや生産の要件たる勞力と資本との間に、一種新異の關繫を生ぜざるべからず。而して已に之に新異の關繫を生ずるときは、亦必ず之に處すべき新異の方案を求めざる可らず。是に至りて、『社會問題』は、未だ我邦に存在せずと言ふこと能はざるなり。

且夫れ凡百科學の進歩と、器械工業の發達とが、大に近世社會の生産力を增進し、近世社會は之が爲め、年に月にその富裕の程度を加へつゝあるは、疑もなき事實にして、是れ實に『近世文明』が、近世社會に與へたる鴻大の恩澤なりとす。左れどこの恩澤は、洽く社會の人衆に被及せるにあらずして、その産出せる夥大の富は、概ね少數人の享用する所となり、生産の資本は、漸く一部の人の掌中に聚積せられて、

其勢力强大を極め、而して、生産の最大要素たる多數の勞働は、却て少數の富人に抑壓せられて、自ら振ふ所以を知らず。彼の或は「自由競爭」と云ひ、『優勝劣敗』と云ふが如き、殘酷無慈の法則は、遠慮會釋もなく、經濟社會に横行して、亦少數の富强者を援けて、多數の貧弱者を陷擠せむと欲し、人の勞働は正しく商品の一種となりて『供給需要の定則』に支配せられ、而して、貧困なる勞働者が、その飢寒を支ふるに急なる、先を爭うて各自の勞働を資本主に供給するが故に、此『活動する商品』は、常に市場に溢れて、其價を低落し、貧者益〻其貧を加へて、富者益〻其の富を累ね、終に貧富の勢は遙かに懸絶して、天壤も啻ならざるの觀あり。夫れ斯の如くして、能く二者の抗爭軋轢を免れ、社會の平靜輯和を維持せむことは、得て而して望む可らず。

顧ふに、凡百科學の進歩と、器械工業の發達とは、その本然の目的に於て、能く人の勞働を省きて、其安息を加ふるの效果を生ぜざる可らず。左れど、その實際は全くこの冀望に反對し、科學の進歩と、工業の發達との爲めに、所謂『生存競爭』は、倍々その劇甚なるを加へ、世の雇主、資本家は、其生産器械に變形したる資本の運營を休止することを肯ぜずして、晝夜の別なく職工を驅役し、之をして出來る限り最少額の賃銀を得て、出來る限り最多量の勞役に服するの已むことを得ざるに至らしむ。云く「此の如くなるにあらずんば、同業者との競爭に勝ちて、生産の利を收むること能はず」と。所謂『近世文明』が、彼れ雇主、資本家等に命ずる所は、實に斯の如く、所謂「經濟的自然の法則」が、彼等に敎ふる所も、亦實に斯の如くにして、固より之を以て一概に雇主、資本家を責むべきにあらずと雖ども、社會多數の勞働者は、之が爲め復た人生安息の何事たるをすら知らざるに至る、何ぞ況んや、相倶に『近世文明』の恩澤に浴して、能く其智德を修明し、其の地位を上進するをや。

斯く言へばとて、必ずしも今日の勞働者は、其地位遙かに昔日よりも劣り、其貧苦大に昔日よりも加はれりと速了す可らず。若し單に外形の事物のみに就きて觀察を下すときは、今日の勞働者は、無論、昔日よりも多量の福利を享有したるに相違あるべからず。但ゞ昔日は社會に於ける富の產額一般に寡少にして、凡そ有形と無形とに論なく、概して人の嗜欲を催起し、その需要を促動すべき事物頗る乏しく、人々皆能く貧窶の境に安じて、左してその痛苦を感ずることあらざりしなり。今日は然らず、『近世文明』の恩澤は、到る處に快樂利便の事物を充滿せしめたるも、而も多數の貧人は一も自ら之を享用すること能はず。人の感覺機能の大に開發したるに由りて、その需用嗜欲は、千種萬樣、殆ど際限なきに至りたるも、而も企なきの勞働者は、一も自ら之を滿足すること能はず。一方に於て少數の富人は、生來殆ど勤勞の何事たるを知らずして、常に綾羅を纏ひ、膏粱に飽き、加ふるに『近世文明』の與へたる交通機關の發達は、その片足だも擧ぐるに及ばずして、夏時には之を淸涼の境に送り、冬時には之を溫暖の地に到らしめ、凡そ歡樂逸豫、好む所として得ざることなく、欲する所として遂げざることなきに反して、他方に於て、多數の貧人は、是れ亦『近世文明』の與へたる生産器械の急劇繁忙なる運轉に迫られ、『生存競爭』てふ峻厲無情の法則に驅られて、頃刻片時も其勞作を休止すること能はず。而してその得る所は、辛うじて其身と其妻子との飢寒を支ふるに過ぎずして、其生産したる一切の物品は、概ね少數の富人が、その嗜欲を滿足するの用に供せざる可らず。モンテスキウー氏の所謂「一人の衣服を製するに、

數多の人を要するが爲めに、數多の人は常に衣服に缺乏せるもの」滔々たる天下皆然らざるは莫し。要するに、今日の勞働者は、昔日に比して、必ずしも貧困の程度を加へたるにあらずと雖ども、『近世文明』は、今日の勞働者をして、その貧困の痛苦を感ずること、昔日よりも一層深且大ならしめし者にして、その實は貧困の程度を加へたると、結果に於て一も異なる所あらず。而して、『近世文明』の恩澤は、卒に少數の富者に厚くして、多數の貧人に薄しと謂はざる可らず。顧ふに人道の極致とする所は、豈に此の如しとせむや。

土地問題は、我邦の將來の爲めに、特に大に憂慮を加ふ可きものあり。從前は、土地の耕作者は、概ねその土地の所有者にして、その一家の勞作に由りて收得したる所は、裕に一家の生計を支へて贍らざることなく、獨立自營敢て他人に屈從することあらざりしなり。間々或は一家の所有する土地は、その一家の人口に比して多きに過ぎ、仍て其一部分を割きて、他家に耕作せしむることありしとするも、地主と小作人とは、累世鄉土を同じくして、互にその性情を知悉せる者にして、小作料の如きは、一に其地方に於ける積年の慣習に依準し、恣まゝに地主の欲望に任せて、苛重に之を誅求すること能はざりしなり。今日は然らず、『近世文明』が、莽りに資本を少數人の手中に聚積するの結果は、都會の資本家をして、漸くその手を村落に伸ばして、小農の所有地を兼併せしめ、其身は百里の外に居住し、曾て鍬鋤の業の何事たるをすら知らずして、數千百町の田地を所有し、眞個の農民は、唯その小作人となりて、曾て一面の識だもなき地主の爲めに、耕作の業に服するの已むことを得ざるに至り、而して『近世文明』の產兒たる『自由競爭の理法』、『需要供給の定則』は、その已に工業界を征服したる餘勇を鼓して、更に農業界に侵寇し來り、貧困の小民は、その自ら耕すべき土地を失うて、他にその衣食を得るの道なきが爲め、先を爭うて小作人たらむことを地主に求め、苟もその飢餓を免るゝに必要缺く可らざる者を除くの外は、その勞作に由りて得たる所を擧げて、之を地主に奉ずるを辭せず、是に於て、富裕の地主は、一も自ら其力を勞することなくして、益々其富裕を加へ、貧困の小作人は、終歲勞作休むことなくして、愈々その貧困を極め、地主と、小作人とは、恰も他界の人に異ならず。夫れ土地は凡百の生產物の主要なる原料にして、特に我邦に於ては、古來農を以て國本と稱し、今に至りて、農に由りて衣食する者、實に全國の人口中其過半を占むると云へり。而して其狀は則ち此の如し。苟も此の如くして、其勢長く變ずることあらずんば、地主の勢力は、到る處に强大を極め、眞個の農民は、皆その所有の土地を失うて、相引いて小作人と爲り、その窮困貧苦、復た救濟を施すに道なきに至らむ。是れ豈に我が國家の治安を永久に維持する所以ならむや。

啻に是のみにあらざるなり、『近世文明』は又能く吾人に敎ふるに、人權平等の大旨義を以てし、勞働者と雖ども、貧窮人と雖ども、苟もその人たるに相違なき以上は、皆等しく人たるの權利を保有して、貴賤尊卑の別あるべからざることを知らしめたり。而して我邦も亦夙にこの旨義を體して、已に民事刑事等の上に於ては、國人は殆ど皆平等の權利を保有すべきことを確認し、政事上の權利に於ても、亦將にその平等を定立せむとするの門戸を開きたり。左れど、今日の社會に於て、人能くその保有する權利を運用せむと欲せば、又必ず之に副應したる資產と學識となかるべからず。而して社會の多數は、常に此資產と、學識とを缺けり。故に社會多數の人の爲めには、その名は平等の權利

を得たりとするも、その實は一も之を得ざるに均しく、動もすれば、資產あり、學識ある少數の人に凌壓せられて、勢ひ之と相抗すること能はず。試みに思へ、職工は資本主に對し、果して平等の權利を以て、その作業を規定することを得るか。小作人は地主に對し、果して平等の權利を以て、その契約を訂結することを得るか。人若し坦懷虛心に其間に行はるゝ事實を點檢せば、必ずや、地主、資本主は、殆ど總ての權利を有して、職工、小作人は、殆ど一の權利だも有することなきを知らむ。夫れ、平等の大旨義未だ世に明かならずんば、則ち息む。其旨義已に世に明かにして、權利の平等は、已に國法の上に定立し、而して事實の不平等は、却て昔日よりも甚しきものあり。勞働者と雖ども、貧窮人と雖ども、その能く人たるの權利を保有するに於て、毫も他人に異なる所なきを覺知し、而して、實際に於ては、一もその權利を運用するの手段を有せずとせば、『近世文明』が、折角に吾人に教へたる人權平等の大旨義は、適ゝ社會多數の人をして、能く人たるの權利を有して、人たるの權利を運用すること能はず、別言すれば、殆ど人にして、人にあらざることを自覺せしめ、以て徒らにその心を懊惱せしむるの外なきものと謂はざる可らず。而して、天下の公道正義は、卒に斯る奇怪の事實が、永く社會の中に存留するを許すこと能はず。

以上は則ち、『近世文明』が、近世社會に及ぼしたる弊患の最も較著なる者にして、現に我邦に於ても、亦漸くこの弊患を發顯するの事實あるは、今必ずしも一々例を引き、證を擧げて、之を論明することなきも、苟も少しく世事に通ずる者は、皆齊しく認識せる所にして、所謂社會問題なるものの實體は、則ちこの弊患の存する所に存する者なり。然らば則ち、今に及びて、務めてその弊患の既に存する者を除き、又その將に發顯せむとするものを防制するの方案を講ずるは、是れ豈に我社會をして『近世文明』の與ふる所に就きて、その利は務めて之を收めて、其害は務めて之を避け、以て能く健全の發達進步を遂げしむるに於て、片時も忽せにす可らざる者にあらずや。

予輩は固より『近世文明』に向うて妄りに敵意を挾むものにあらず。頑僻固陋の說を唱へて、舊時の世態に復歸せむことを希ふものにあらず『近世文明』が近世社會に與へたる鴻大の恩澤は、予輩固より衆に先つて之を認識するを猶預せず、唯ゝ其れ之を認識するを猶預せず、故に此恩澤を洽く社會全般の人衆に被及して、進步の上に一層の進步を加へむと欲するのみ。知らずや、『近世文明』の最後の產兒たる、『多數』てふ一種の新勢力は、深くその根蔕を社會の最下層に發して、行ゝ將に天下を席捲せむとするの趣あるを。而して、今能く、社會問題を平和の間に解決するは、實に『多數』の勢力を正當に扶立して、『近世文明』の功業を大成する所以なるを。予輩が夙に、社會問題の最重至要にして、之が硏究を怠る可らずとするもの、豈に其故なしとせむや。若し夫れ此問題を實際に解決するの方法手段に至りては、予輩亦私かに見る所あり。固より一篇の文辭の能く盡すべきにあらざれば、今より同憂諸君子の後へに從ひ、時に卑見を開披して敎を大方に乞ふことあらむと欲す。但ゝ此問題の頗る新奇に類して、世俗の視聽を驚かすが如きものあるを喜び、漫りに之を藉りて、自己の聲譽を一時に博せむと欲し、若くは之に憑依して、自己政治上の野心を逞くせむと欲するの徒は、予輩が初より俱に事に從ふことを希ふものにあらず。

（『國民之友』第百九十七號）

新社會

矢野龍溪

新社會

自序

其の大なる者より之を見る、天地、則ち小なり、其小なる者より之を見る、拳石、則ち大なり、進で而て止まらざれば、千里則ち近し、止て而て動かざれば、咫尺亦た遠し、物窮まれば必ず變ず、變じて而て復た窮まる、誰か其の極を知らん、孟爾の「優都美」は遂に是に至るに由なし、我が新社會は遂に是に達するの日なき乎、昔喇撒爾其言の實行を五百年の後に期す、世勢の變、或は百年を待たざらんとす、萬岳、河に歸し、百川、海に入る、靜に萬物の化を觀、深く人事の歸を察す、亦た讀書人の一樂たらずんばあらず

明治三十五年六月　矢野龍溪識

注意

一編者が本書を編纂するや、毎回の標題に揭げたる事項は、成るべく其の項中に收むるを勉めたり

一然れども、人世の百事は相關聯せざる者なく、一項の事柄にして、暗に他項と聯接し居るが爲め、悉皆之を一項中に收むる能はずして、自ら他の諸項に散見するに至れり

一又假令一項中に收め得べき者なりとも、叙事先後の順序より、理會の難易を生ずべき恐れある場合には、便宜をもて之を他項に示すことあり

一故に或る一項の事を知らんと欲するも、之を其の項中のみに求む可らず、遍く全篇を通讀するを要す、否らざれば脈理貫通せずして、理會に苦しむの恐れあり、之を人體に譬ふれば、手足の生理を知らんと欲する者、必ず先づ其の全身の仕組を明にせざる可らざるが如きなり、本書を繙く者に在て、是を大切の注意とす

第一回　公園の邂逅

廣大なる公園の中に、清冽の水を湛へて大湖を作り、湖邊に起伏せる丘陵には、四季の草花を植ゑ列ね、萬樹の桃櫻は、綠樹の間に雜植せらる、花時の壯觀想ふ可し、又處々に大小無數の噴泉を設け、彫刻の名工が意匠を凝らせし大理石像は、點々其間に建設せらる、湖上に遊ぶ異樣の水禽は世界の珍を集め、小高き地には樂堂の設けありて微妙の樂を奏す、都人士が袂を連ね、三々五々、思ひ〳〵に園内を逍遙する有樣は、眞に太平の氣象なり、其の規模の壯宏なる、富貴の韻致ある、風趣の雅麗なる、掃除の行届きたる、一切萬事に於て、歐米最繁華の大都の、最大最美の公園すら、此に比すれば、物の數ならずと、評する外、其の有樣を盡すの詞なし

チト、隔りたる公園の一隅には、喬樹森々として枝を交へ、天然幽邃の趣を成し、蜒々として林間を縫ひ流るゝ幾道の清泉が、谿間に注ぐ潺湲の響は、宛然、小鈴を振るに似たり、樹間の涼蔭を經過し來る微風は、余が身神に無限の爽快を感ぜしむ、余は是處にて、樹下に据付

けられたる一の長椅子に休息せり、幾程もなく來會せしは、余が同行の一人

「君は何時、此處に着せられしか

「今着いて、此地に息ひしばかりのところ、君は何時

―僕は、五時間ばかり前に着し、君を待合する間に、既に此の都府を巡覽せり、田美野君、此の都府ほど、實に不可思議なる地は無し、其の街路が、四通八達の便を圖て建設せられ、掃除の行屆きたる等は、言ふに及ばず、全體の家屋一齊に壯麗にて、他國の如く、大小高低種々に入交りたる見苦しきことなし、又呉服、穀物、外國小間物、其他青物、水菓子等に至る凡て商店と名づくべき商店にして、其の規模の大なること　我が東京などの大店より、四五十倍ならざるはなく、又買手の便を圖りしと見え、諸商店は便利よく町々の最寄々々に建設せられ、辻車の樣式も悉皆一樣にて、荷車さへも悉く一轍なり、又人足體の者に至る迄、他國の如き見苦しき服裝の者、一人もなし、又最も愉快なるは、到る處、此の如き公園の類、澤山にて、此の都府は、恰も花園の内に造られたるが如く見ゆ、又公園内には、多く壯麗なる美術館を設け、其中には意匠を凝らせし繪畫彫刻を陳列すること實に夥し、芝居寄席の類迄も、建築壯宏にして、又其數の夥しきこと、他の諸國に嘗て斯の如きものを見ず、余は倘ほ都府の四邊を周覽せしに、倫敦、巴里、紐育、などに於ける如き極貧の民は、一人も見出すこと能はず、皆な相應に衣食し居る如く見えたり、實に驚くべき都府ならずや

―余が來路は、此の公園迄なりしも、其間に通行せし諸街の有樣より推して、君の言の誇大ならざるを信ぜんとす、併し極貧の民は、一人もなしと云へる一事は、君の言ながら、倘ほ甚だ疑なきにあらず、我々が、嘗て歐米に遊びし時も、單に或部分のみを見て、其の壯麗に驚きしも、仔細に他の部分を點檢して後、大に反對の感じを起せしこと少からず、此の都府の如きも、ウカとは感服す可らず

「イヤ、其邊は拔かりなし、余も實驗あるが故に、僅か四五時間の觀察ながら、出來得らるるだけは周覽したれども、實に前に述ぶる所の如し、且つ、都府の各公園内を逍遙する人衆の夥しきこと、亦た非常なり

―余も爾か思はざるにあらず、此の公園の如きも、アレ、見られよ、都人士の群集、實に斯の如し、是れ或は今日が大祭日などにて、斯る賑ひを爲すにはあらざるか

と語り居たる中、七十歲前後と覺しき、鬚髮雪白の老紳士、來て、余等が憩ひ居る所の椅子に休息せり、依て余は禮を爲し

「本日は祭日なんどにて、斯く賑はしきにはあらずや

と問ひしに、老人は「左にあらず」と答へつゝ、つく〴〵と余等二人を打眺め、其の來處を問ふ、余等の答を聽き

「貴國日本には、余も屢次遊歷せしことあり

とて、我國の事に語り及びしに、我が人情風俗は勿論、我が史籍にさへ通曉せり、余が同行者は老人に向ひ

―我々は、日に未だ見ざるの地を視、耳に未だ聞かざるの事を聽くを以て、無上の樂みとし、是迄世界を遊歷したれど、貴國の都府の如く、萬事行屆きたる地は、今迄嘗て見たることなし

とて、其の歎服せる條々を述立てしに、老人は微笑しつゝ

「貴客等の見給ひしは、單に我が社會の外觀に過ぎず、之を他の歐米諸國に比すれば、幾分か優り居るには相違なけれども、未だ左樣に賞辭を辱くするの價値あるものとは認めず、貴客の言を聞くに、貴客は、我國に來りてまだ幾日

も經ざると覺ゆ、若し暫く滯在して、我が社會の內容を詳かにせられば、或は大に贊辭を給はるものあらむも知れず

「貴君の言はるゝ、社會の內容とは、如何なるものぞ

「左ればなり、我國には、生れて教育を得ざる者なく、老いて養を得ざるものなく、衣食を求めて得ざる者なく、病みて醫藥を得ざる者なく、訴訟なるもの殆んど無く、犯罪する者殆んど無し、人氣和樂にして風俗溫良、人々相愛すること、眞の同胞の如し、尙ほ其外、他國に對して誇るべきものなきにあらねど、以上は其の最なるものならん、貴客にして、若し駕を茅盧に枉ぐるを憚られずば、是より來臨の榮を賜へ、我が社會の仕組を說明するは、貴客に取り、或は好箇の土產なるやも知れず

余が同行者は、ジロリ、と余の顏を打守りたり、余は彼れに向ひ

一折角の好意を辭するも不敬なり、兎に角、是れより御老人の宅を訪はゞ如何

彼も、稍や得心せし樣子にて、乃ち余等兩人は、名刺を出して老人に初見の禮を述ぶ、同行者は、金尾德太郞と記せし名刺を與ふ、其の肩書には二三會社の役員たる旨をも記入しあり、余は田美野悅藏と記せる名刺を與へ、懇ろに老人の好意を謝せしに、老人は

一別居せる愚息等の家に、餘儀なき用事あれば、今より之を訪ひ、直ちに歸宅して受くべき故に、必ず約を違へ給ふな

とて、其の住居番地を記せる名刺をさへ與へ吳れたり、老人が立別れし後

一田美野君、余は初め此國の有樣に感服したれど、夫の外觀の壯麗なるは、今や甚だ慕ふに足らざる者たるを疑へり、先きの老人の言の如く完全なる社會が、此世に有り得べきものにあらず、青年者ならば、時として斯る誇張の言を爲す者あらんも、彼れが老實なるべき年齡を以て、尙ほ此言をなすとすれば、此國も亦た賴もしからざる風俗と見ゆ、余は甚だ彼の家を訪ふを好まざるなり

一否な、一概に爾か思ふは誤りならん、若し、坐して百里の遠地と談話し、千萬里の海を隔て、無線の電信を通じ得べしと云はゞ、百年前の人類は、恐らく一人も之を信ずる者なかるべし、而も今日は實際に之を行ひ、之を怪しむ者なきにあらずや、理學界に於て、諸種の障碍を排し、是等の天則を應用して、實用を爲さしむる迄の工夫を思へば、人類相互の關係に過ぎざる社會の仕組を改むるは、左迄の難事とも言ひ難し、都府の外觀を斯く迄に整頓せしむる國人の智力にして、其の社會の仕組に、何等か工妙の工夫を行ひ居るやも知るべからず、其の仕組を攷究するも、亦た歸朝の大なる土產にあらずや

一夫れも、さうだ

との一言のみにて、金尾氏も、澁々と余に同意せり

第二回　舊社會の末路　上

老人の子息二人は、各々別に一戶を成し居り、老人は此家に獨棲の由にて、其召使は、小間使とも見ゆる十五六歲の少女の外、下女下男、各々一人なり、家內の器具調度は、奢れるにあらねども見苦しからず、先づ社會の中流に位せる、人士の品格を保ち居るが如し、余等が訪問せし後、程なく晩餐を饗せらる、主人も、我々と同好の遊歷者にて、壯年の頃は、足迹、世界に遍かりしとて、食事中、主客雙方の遊歷談は、湧くが如くに續出し、愉快に食事を終りたり、

それより喫茶、喫烟となり、時分は好しと余は主人に向ひ

「先きに物語られし、貴國社會の內容は、實に黃金世界なり、果して如何なる組織にや、そを

承はらむとの渇望は、疾くより胸に迫りたれど、斯く重要なる事柄を、食事中に伺はむも如何やと、實は今迄差控へたり

「左ればなり、そを物語るは容易ならず、ハテ、如何なる順序より説明すべきか

と暫し考へ居たりしが

「我が社會に、今の新仕組を用ゆるに至りしは、第一には我が國帝の聖明なると、第二には學士識者の先見あると、第三には富豪資産家に遠識ありて、前途の苦痛を避けむと心掛けしと、第四には自他一般の多數人民が、自主の氣力の盛なると、相湊合して之を行ふに至りしと云ふの外なけれども、亦た一方より之を言へば、其の裏面なる大原因は、舊社會の弊害が次第に積累し來るに從ひ、一般の人皆な其の苦痛に堪へかね、遂に新社會を組織するに至りしと見るも可なり、故に今の新社會を十分に理會せむと欲すれば國人を此の新社會に驅入れたる舊社會の弊害を略述し、然る後新社會の農業、工業、商業、政治、教育、法律、道德、其他一般の風氣に説及ぼすこそ適當ならむ

茲に主人は言葉を改め

「先づ試に兩君に問ふべし、貴國抔にて社會萬事の大本とする主義は如何なるものなりや

余等兩人は突然と此の廣大なる問を受け、互に顏を見合せたり、主人は又問へり

「貴國社會の生活上に於て百事の原則とする主義は如何

今や主人が「生活上」なる言葉を插みたるに付て、金尾氏は俄に思ひ得たるが如く余に向ひ

「隨意競爭『フリーコンペチーション、Free Competition』にはあらざる歟

余も忽ち然りと頷き、主人に向ひ

「今金尾氏の言の如く、先づ隨意競爭を以て百事の大本とす

「隨意競爭とは、如何なるものぞ

「農、工、商業、其他凡百の事業に於て、最も良き品物を最も廉價に製出し、互に顧客を取らむと競ふの謂にて、何人の行爲にも何の束縛を受くることなく、自由隨意に力限り勉強し、良質廉價の品物を製出するものは勝ち、高價の粗品を製出する者は敗れ、各人競うて、何事も需要者の最便に供給する者が、最多く世に用ゐらるゝの仕組を言ふ、斯の如くして新産物も出で、新方法も案出せられ、凡百の事物、皆な進歩し、復た一人の他より束縛を受くる者あることなし、隨意競爭なるものゝ意義は、先づ斯の如し、此の主義や我國萬事の遂行すべき原則たり

老人は頷きつゝ

「左もあらむ、左もあるべし、我が舊社會も亦た貴國と同様、隨意競爭を以て社會百事の安全なる常道と心得、是の主義に依賴したりき、然るに何ぞ圖らむ、其の隨意競爭なるものは人類の依賴し得べき安全なる常道にはあらざりしことを、此の事實の次第に我が社會に明白となるに從ひ、第一に恐惶を惹起せしは經濟學者等の研究にして、是れぞ我が舊社會が崩壞の端緒なりき

余と金尾氏は、是を聞きて互に顏を視詰め合ひたる外、亦た一言せず、知るべし、我々の胸中には一大疑問を生じたることを

老主人は、之を知るや知らずや、其童顏に微笑を漏らしつゝ

「兩君は、事物に、始、中、終、なる三種の狀態あるを知れりや、今百尺の高處より一の物體を落下せしめむに、其の墜ち始めたる時を指して之を始態と云ふ、其の墜ちつゝあるときを指して之を中態と云ふ、地上に落下して定著するときは之を終態と云ふ、終態は一定不變なれども、中態は不定なり、其の中態に在る物體は必ず歸著なかるべからず、天にも著かず、地にも著かず、上に懸る所なく、下に支ふるものな

くして、空中に物體の在り得べきものなりや、如何
「無論、中間に留まり得べからず
「然り、其通りなり、我が舊社會にて百事の大本と頼みし、隨意競爭なるものは、三態のうち、孰れに屬すべきや、往時の經濟學者すら、誤て之を終態と認め居たり、況んや社會一般亦た之を終態不變のものと思ひ居たるをや、然るに圖らざりき、兩君、此の隨意競爭なるものが、終態にあらずして、中態ならむとは
苟も天地間に、爭なるものありとせば、如何なる爭とても、終極を告げずして、永久千百年、爭ひつゝ持續し得べきものありや、試に之を人事に顧みられよ、貴國日本が太古草昧の時、陸地は樹木荊棘にて蔽はれ、人を通すべき道もなく、河海を渡るべき舟楫なき日に於て、小部落なる無數の酋長等は各地に割據して永く爭ひ得むも、其の稍ゝ開け來て、陸に車あり、水に舟あるとき、元龜天正、群雄割據の時勢が永久幾百年も繼續し得べきものなりや、倘ほ近く之を維新後の今日に顧みられよ、十時間にして、百里を行くの汽車あり、旬日を出でずして、千里に達するの汽船ある時、之を統一する者なくして元龜天正割據の爭態が幾百年も永續し得べきや如何、草昧太古は始態にして群雄割據は中態なり、中態の前途には必ず一國統一の終態あるなり
人智發達せず、事物進歩せざる時に於て、群雄割據は或は終態と見えしならむも、交通大に開くるや忽ち之を中態と變ぜしめたり、社會凡百の事、就中く生産世界も亦た此の天則を逃るゝ能はざるなり
と述べつゝ、我々の衣服を指さし
「假に、呉服に就て之を言はゞ、一都府の内にて呉服を安く賣る大店もあり、高く賣る小店もあり、互に競爭を爲し得るは交通不便の賜ものなり、買人が廉價の大店に到るには往復の費用あるが故に、聊か高價なりとも、手近の小店にて用を辨じ以て小店の存立を助く、交通の不便は斯く商賣の割據を許したりしも、次第々々に馬車電車鐵道の類が府内縱横に架設せられて往復の費用極めて減少するの日には、買人は手近の小店よりも安き大店に行きて漸々と小店の傾覆を促すべく、此理は一府内のみならず全國都鄙の間にても亦た同樣なり、又材料運搬の不便なる世には原料産出地に近き處に割據して小工場は各自製品に從事し得べきも、交通の費用を減ずるに從ひ十箇處の工場は五箇處に合併せられ、五箇處は二箇處に減じ行くも勢の免れ難き所なり、又、兩君に問ふべし、群雄割據の時に於て、大國に居り大兵を擁する者と、小郡に居り寡兵を養ふ者と、其の優劣如何、勝敗の通則によれば寡は衆に敵せず、大國は小郡を呑み、大郡は小郷を併すにあらずや
商賣、生産の事業も、亦た猶ほ此の如し、資本なき者は資本ある者に勝たず、資本少なる者は資本大なる者に敵せず、若し二個の工場、互に生存を爭はむに、雙方、共に製品の價を極度に引下げ、顧客を爭ふ場合に至り、大資者は久しきを支へ得べく、小資者は堪ふること能はずして廢業すべし、右は兩々故意に競爭をなすの例なれども、其他世間の事業が冥々の中に、知らず〱間接の爭を爲し居るは隱れもなき事實にて、其の相互の間に生じつゝある優勝劣敗の勢は實に此の有樣に外ならぬぞかし
其の無資者と有資者との爭ひ、小資者と大資者との爭ひは往時より絶ゆる時なく、甲起りて乙倒れ、甲亦た倒れて丙起り、社會混戰の有樣は勝者常に勝たざるが如く、敗者時としては起る者あり、數千萬の人衆が一國の内に蠢動して爭ひつゝある有樣を打眺めて、如何にも其爭が永續すべく見えしより往時の經濟學者等が之れを

終態と誤認せしも無理ならず、而て其の實は中態なるに氣付かざりしは何故ぞ、蓋し當時は交通不便にして、大小の諸事業とも、各地各街に割據し得べく、容易に統一し得られざるが如く見えたるに因るのみ

然るに人事の發達は、年を逐うて急進し、往時は好事業ありと聞くも、容易に行きて目擊し得られざりしに、今は之を目擊し得べく、彼此の狀況は千里、咫尺、且つ各人の意思を交換する利便も、亦た昔日の比にあらず、事既に茲に至り事業上の隨意競爭なるものが果してイツマデ永續し得らるべきぞ

又、人智の進むに從ひ、社會に於て勝を制するの道を悟ること亦た益々機敏に趣き、大資の小資を壓し得べきを知り之を實行すること亦た甚だ速度を加へ、或は同業者の多分を以て『トラスト』とも稱すべき組合を設け、組合外の小資本者を壓するの智恵は日に益々加はり來る、若し其の同業者全體を擧げて總て是に加はるとすれば、まだしも宜けれども、其の組合をなすは、多く少數なる强力者の間に限られ、他の無力者は加はり難きを例とす、何となれば、大資者相互に組合ふ時は、人數少く、煩ひなし、之に反して多數の小資者を加ふれば、煩ひ多く、事捗らざればなり、故に組合『トラスト』を企つる者は多く少數の有力者にして、力の劣る者は皆な概ね競爭場裡より追却けらる、但し今日の富者、必しも永久の勝者にあらず、今日の貧者、必しも永久の敗者にあらず、永續するあり、永續せざるあり、一個人に就て之を云へば其の起伏定らずと雖もツマリ何人か大に勝つ者あり、何人か敗るゝ者あり、人も變るべく、相手も定らざるも、其の傾向は一定す、何をか一定すと云ふ、勝者の數は減じて、其富は倍加し、敗者の數は增して、其貧は倍加するなり

斯くして我が社會の晚年に至ては、有資者の數を減じて無資者の數を增し、人民の多數は次第々々に生活下層の界に陷り、中資者は大資者に破られて亦た稍く下層に追込まれ、百年前に在ては、總人口、百分の割合に於て大資者は、十を占め、中資者は、四十を占め、無資者は、五十に居りたるものが、百年の終りに至ては、無資者は、百分の八十、中資者は、百分の十五、大資者は、百分の五となるの割合を見、社會資力の支配は擧て此の小數なる百分の五に歸せむとする傾向を示したり、而て是の傾向は益々進みて止まざらむとす

凡そ天下のもの、其爭を止めざる限りは、爭なるものは中態に止り得ずして、必ず統一獨占の終態に歸着す、且つ社會變遷の勢は、恰も重力『グラビテー』落下の天則に異ならず、若し前なる物體落下の例を假りて之を證すれば、百尺の上より物體を落下せば、地上に向て落つるほど其の速力を倍加す、九十尺の處に比すれば、八十尺の處の速力は倍加し、八十尺に比すれば、七十尺の處は倍加す、六十尺、五十尺、となれば益々急速と爲り、地上僅に八九尺に至れば、其の速力は又實に非常なり、社會の隨意競爭なる中態が統一獨占の終態に向て走るの速度は、亦た此の如く、其の終態に近寄るに從て、劇しく且つ大なりき、夫の隨意競爭の始態の遲徐なるを見たる者は、後世斯程までに非常なる速度を以て獨占統一の終態に佈くの恐ろしき者とは思はざりしならむ、兩君、人間の知慮ほど、實に淺墓なるものはなし、我が社會に於て、其初め經濟學者が、隨意競爭なる者を、安全の常道と、思居たりしことの淺ましさよ、社會百事の大本として萬世永續すべしと固信せる隨意競爭なるものは案外短かき夢なりしよ、古代に於て、政府又は諸侯が、其の愛好する者に、商賣、製造、の特權を與へ、自餘一般人民の、隨意營業を妨げたる、弊害を打破するの時世には、

經濟學者等が、隨意競爭を理財の本義とせしも、無理ならぬ次第にて、是れ亦た時宜に適するものとす、然れども彼等は、其時代の交通不便、人事未開の有樣を眺めて、隨意競爭なる者の末路に思ひ至らざりしのみ、故に之を以て、特權打破の利器と爲すは則ち可なり、之を以て、世事安全の常道と爲すは則ち非なり、始態は變遷の遲徐なるが故に、當時は之を永續の終態と誤認せるのみ、何は兎もあれ、實際に、隨意競爭が遠からずして、獨占統一に終らむとする我が舊社會の晩年に、經濟、政治、法律、道德、諸科の學士、仁人、識者が近き未來を想像して驚愕を始めたる有樣は如何なる筆も之を盡す能はざる程なりき、此時に當て我が社會の執るべき方策は唯だ下の三手段ありしのみ

第一　隨意競爭を、極度迄打捨て置き、全社會の財産を擧げて、之を極少數なる大資産家の掌握に歸せしめ、自餘、幾千萬多數の人民は、總て其命を仰いで生活せしむる歟

第二　『此の社會は、極少數者を利するが爲に造られたるものにあらず、社會全衆に幸福を得せしむる爲めのものなり』との本義に據り、獨占統一の極度に至るときは、少數者の大資産を奪取て、之を全社會に分配する歟

第三　既往の不平均は致方なしと諦め、其の不平均をば其儘に存し置きて、將來は社會の事物を全社會の幸福に用ゆるとし、玆に獨占統一の趨勢を遮斷して之を中途に豫防するの新組織を行ふ歟

右、三手段の中、其一を擇ばざるべからざる迄に切迫し來りしなり

第三回　舊社會の末路　下

主人の物語りの續き

「我が舊社會の晩年に、隨意競爭なる主義が斯く危險至極なることを、最初に發見せしは、慧眼なる二三の經濟學者なりしが、引續いて世上の識者學士が、此の問題に心を傾くるに至りし有樣は恰も十九世紀の末より近年に至り、歐米の諸學者が、此の問題に注意を始めたる如く、或る學者は之を目して『社會相殺す競爭』と稱し、又は『混亂なる競爭』と評し『相殺』又は『混亂』等の如き不祥なる形容詞をさへ隨意競爭に冠せしむるに至れり、又其間に於て、何とかして、社會の斯る不調子を和らげ、多數人民に幸福を得せしむるの組織あるべしと、攷究せし人々も多く、其方法も種々なりしが、一も十分の功を奏せしもの無し、唯、其中に就いて稍や世人を屬望せしめたるものは、彼のミル氏及びカイルネ氏等が極力賛成せし『コ、オペレーション』(Co-operation.)の仕組なりき

通例の事業は、資本家と勞役者と各別に分離するが故に、之を『力、資、分離』の仕組と稱すべく、資本家と勞役者とは全然分立するの仕組なり、然るに『コ、オペレーション』なるものは之に反し、資本家と勞力者と相結合して事業を組成するものにて、勞力者は半ば資本家の性質を有す、之を目して『力、資、結合』と稱するも可なり、此の仕組の要點は、勞力者の有する小資本を、資本家の資本に合し、漸々に其の利益を積立つるものにて、又無資本の勞力者と、資本家との間には、事業の利益の幾分を勞力者に配當するの約束をなし、勞力者は其の分配を受けたる利益を以て之を事業の資本中に加へ、次第に其の位置を高め、始めは單純なる勞力者なれども、右の如く得たる資本を事業資本に加へて增殖し、其の赤貧なる有樣より次第に資産を作り、遂に地步を、中層社會に入れしむるの工夫なり

此の組織は一見して有望なるが如く、其の實行の廣まるに於ては、社會の調和を圖る唯一の方

法なるが如きを以て、大に世の同情を惹き、各處に幾箇の『力、資、結合』組織の起るを見るに至りしが、不幸にも其の實驗を積むに及びて是の組織は迚も廣く行はれ難きものなることを示し、多數の經濟家識者をして落膽せしむるに至れり

其の仔細は世間普通の『力、資、分離』の仕組にては資本家は勞力者の賃錢を非常に極度まで値切り之を抑下るを得べきが故に利益少き場合にも其の純益が世間通例の金利に相當する程の程度までなれば滿足して其の事業を成立せしめ得べく、加ふるに金利以上の利益あるときは之を勞力者に分つの要もなければ尙ほ其懷を肥やすの利便あり、資本家に取ては資本の增殖非常に速かなること勿論なり、然るに『コ、オペレーション』の仕組は之に反し、資本家が金利以上の利益を得れば其の幾分を勞力者に配當するが故に自己の利益を減少し且つ勞力者に對しても無慈悲に賃錢を極度まで値切り得ざるの場合あり、故に『力、資、分離』と『コ、オペレーション』と兩々相對して世間に競爭するときは大なる引力は每に『力、資、分離』の方に一般の資本家を引着け『コ、オペレーション』に投資する者は其數を減ぜざるを得ず、故に普通利益を目的する外に、何等かの事情あるか、若くは慈善主義を有する資本家にあらざれば、『コ、オペレーション』に向ふ者少きも、亦た理勢の免れざる所

故に『コ、オペレーション』の仕組も、相應に成立つ可き性質の者には相違なきも、之を以て社會一般の不調子を救ひ得べしと依賴し得られざること明白にて、現在今日英國抔にても『コ、オペレーション』の仕組の都合好く行はれ居る場處あるにも拘はらず、全國資本の統計上にて、此の仕組に用ゐられ居る資本を、『力、資、分離』の資本に比すれば、僅に四百分の一に過ぎざるなり、則ち同國の資本は殆んど皆な『コ、オペレーション』に反する仕組に用ゐられ居れり、又獨逸に於ても、『コ、オペレーション』の仕組は、シウルチエ氏等の苦心經營に依て、一時各處に勃興せしにも拘はらず、之を普通の『力、資、分離』の仕組に比較すれば、其勢の微々たること、殆んど兩者を對照するの勞なき程なり、社會の天則は何れの國も同樣にて、今日英獨諸國に於て、此の仕組の、到底依賴し得べからざるを知りしが如く、我が舊社會に於ても、亦た此の仕組は世人を絕望せしむるに至り、遂に前に述べたる三種の手段の外迚も救治の道なしと決心せり

若し、我國の諸事業が、一國限りにて、外國に何の關係もなかりせば、其の心配も、左程にはあらざりしに、海外貿易の增加、歲を逐うて盛なるに從ひ、又茲に一種の大心配を生じたり、そは、他にあらず、貧富共に國內限りにて、或る少數者に偏倚するすら、尙ほ我が社會は非常の苦痛なるに、況んや、外國人が其の資本を我國に投下し、我が諸事業に携はるに至ては、富は外國人に偏し、貧は內國人に偏し、茲に一層の苦痛を生ずべき恐れを現出せるをや、無限なる隨意競爭の原則が、無資者の數を增して有資者の數を減じ、小資者の數を增して大資者の數を減ずべきものとすれば、若し外國の事業家にして、我が資本家よりも其の資本大ならむには、海を隔て競爭するも、世界の市場に於ては、我が事業家に敗亡の數あり、況んや我が內地の事業にさへ、外國の事業家が立入り、又は我が事業家と組合ふに至り、我の資本は小にして、彼の資本は大ならむには、勝敗の數に於て、知らず識らず、其の爲めに併呑せらるゝも、亦た免れ難きの數なり

故に世界の市場にて、我國の物產が、他國の物產と、首尾好く競爭せむと欲すれば、彼國の資本家に對して、我國の資本家の資本を大ならしめ

ざるべからず、又我が國內に入來る外國事業家と、競はしめむと欲すれば、我が事業家の資本を大ならしめざるべからず、然るに一個人の資本を比較すれば、歐米の事業家の資本は、我が事業家よりも大なり、又國內に入込む外國事業家の資本に比すれば、我が事業家の資本は小なり、孰れにしても捨て置き難し、左ればとて、大資なる外國の事業家に當るに足る程に、我が事業家の資本を多大ならしめむと欲すれば、國內の富を少數の資本家に偏有せしめざるべからず、然るときは社會の不調子は、尙ほ更に一層の度を高むべし、如何に之を處理すべきや、是れ亦た、我國の舊社會を變革せざる可らざらしめたる一の必要なりき

兩君、人間の智慧ほど淺ましきものはなし、其初め、他國と事業上の競爭を爲さんとの熱心より、我が國人は、唯國內に大資本家さへ出來れば、宜きものの如く喜びたりき、而て、其の裏面には多數の人民の富を少數者の手に移すの大勢が、日に月に増加し來るに氣付かざりしよ、國內の事業を盛ならしむるが爲めとて、外國事業家の內地に入込み大資本を下す者あれば、外資輸入、事業繁昌とて皆な歡迎せざる者なかりき、而て其の裏面には、我國の富が、外國人の手に偏倚して、我國の中資者は、是が爲めに無資者の中に驅込まれ、次第々々に、無資者の數を増しつゝあるに氣付かざりしよ、鐵道の抵當も外資輸入の爲めなりとて喜びしは、單に資本が一時に溢れ、株式相場の高まりて、賣買の間に利を得る投機者のみの利益にして、其の鐵道が抵當流れとなり、他國人の手に落つるに至ては、內地の富さへ、大資本家たる外人の手に握取らるゝをも覺らざりきよ、外人と『トラスト』を結ぶ者あれば、是も國內に資本を招くの手段とて、我も人も喜びたりしは、是れ唯一場の夢にして、今より思へば是等の事は、內地競爭者の資本を吞併し、多數なる彼等を下層の階級に追込むの道行きなりしに過ぎざりしよ、假令、自國人を下層に追落すも、自分のみは有力なる外人と組合ひ、攫得らるゝだけの利益を攫まむとするは、隨意競爭なる主義の獎勵する所にして、舊社會の組織と離る可らざる趨勢なりきよ、今より之を思へば身の毛の悚つほど恐ろしき事も、其の當時は左程にも思はざりし我々の淺ましさよ

但し、均しく外資輸入とは云ひながら、他國の資本を公債として借入るゝが如きは、社會の事業を他國人の手に渡すにもあらず、故に之を借て引合ふ可き元利仕拂の事業さへあらば、是等は左せる心配もなく、將來の助けと爲り得たれども、其の方法を擇まずして、漫に外資輸入を喜びたりしは、今更ら面目もなき次第なりき

余の物語は少しく岐路に入りしと思ふ、扨て理財學者が囑望せし『コ、オペレーション』の仕組すら、社會の不調子を防ぐに足らざるを發見せし上は、我が舊社會は前に述べたる三手段の孰れをか擇み行ふの外なし、隨意競爭を極度まで放擲し、社會の資產を舉げて極少數なる資產家の有に歸せしめ、自餘幾千萬なる多數の人民は、其命を仰いで生活するを甘んぜしむる歟、將た全社會は社會の爲めに造られたるものにて、少數者の私すべきものにあらず、との本義に依り、少數者の手より、社會の全資產を取戾して、之を一般に返還する歟、將た既往の偏倚は、其方なしと諦め、將來の幸福を圖るが爲めに、社會の仕組を一變する歟

此時金尾氏はたまりかねしと見え

「御主人の物語を遮るは無禮ながら、一國の富が、非常に偏倚すればとて、其の少數なる大資本家も、其の廣大なる資本を一身に私して、社會の多數を饑寒せしむる程の不仁者は無かるべし、貧富偏倚の極度に至らば、多數人民に對

いても、必ず衣を與へ、食を與へ、家屋を與へ、社會の多數をして、其の處を得せしむる位のことは、恐らく之を爲さゞる者なかるべし、貴國の資產家は、之をも爲さゞる程に、殘忍無慈悲の人々なりしや

老人は微笑しつゝ

「然り、決して無慈悲にあらず、彼等も必ず之を爲すことを欲したるならむ、然れども理財家、識者、學士、及び我が國人の論ずる所は、道理に在て慈善に在らず、貴客の主張せらるゝ所は、人の慈悲心に依賴するものにて、之を行ふは卽ち慈善より發すべきものたり、凡そ慈悲、慈善なるものは、自ら道理と別質なり、慈善なるものは爲しても可し、爲さずとも濟む、性質のものなり、又道理なるものは、是非とも斯く爲すべし、斯く爲さねばならぬ、と云へる性質のものなり、若し慈悲より言へば、社會の多數は富者の惠を仰いで、饑餓の憂なしとするも、我が社會の問題は則ち道理の點に在り、道理に於て、全社會の資產を、二三少數者の手に占斷すべきものなりや、又幾千萬多數の人は少數者に向て、慈悲を仰ぐべきものなりや、道理の點に於て、之を判斷するを要す、社會の法律は道理に基く、何れの國の法律たりとも、慈善事業を法律にて命令するものなかるべし、貴客が今若し社會の爲に法律を制し、道理を定むるものとせば、此の問題を如何にか解決せむと欲する

金子氏も、少しく行詰りて躊躇せり、老人は、又言葉を繼ぎ

「是等の問題は、人々の意見次第にて、貴客及び貴國人は、如何に之を考ふるや知らざれども、當時我國に在ては、第一の手段なる無限任放は、社會一般の非難する所となり、又第二の手段なる、貧富偏倚を極度に任放し、然る後少數者の資產を奪取て、之を社會に分配する程ならば寧ろ之を極度にまで進ましめず、中途に於て其の調和を圖り、社會の組織を一新するの優れるに如かずと云へる第三の手段に決着せり、是れ我が社會の新組織が、實行に就きたる起原なり

余は覺えず膝を進め

「扨て然らば、社會の新組織とは、如何なる方法なりや

「一口に、之を言へば、我が舊社會にて、人民各個の私業たりし、一國生產の諸事業は、其の九分通りまで、之を國家の手に移し社會の公業と爲したるなり

金子氏は假設け居たりしと見え

「御主人、我國などにて、從來官業となせし事業は、其數甚だ少からざりしが、一も好果を奏したるものなく、之を人民に拂下げ、其の私業に移して後、始めて成立したるもの多し、是れ我々三十餘年來の實驗なり、貴國の公業なるものは、果して都合好く行はれ居るや否や、余は大に疑なき能はず、縱し幸に辛じて行はれ居るとも、他國の事業の盛大なるに比較し得られざるにはあらざるか、願くは其說を聽かむ

老人、又微笑しながら

「我國が新社會に變じたりしは、余が二十餘歲の時にて、今を距ること五十餘年、其間、社會の生產は非常に增殖し、國勢は非常に發達し、人民は一般に非常なる愉快の生活をなし、余は他國に對して、何事も遙に超絕せりと誇るを憚らず、是れ實際の經驗なり

貴客の言はるゝ如き官業なるものは、我が舊社會に於ても、之を行ひしこと少なからず、而て其結果は、如何にも貴客の言の如く、貴國同樣の有樣なりき、然れども、能く熟考せられよ、我國の公業なるものは、所謂公業にして官業に同じからず、兩者の間、其の仕組にも異同あり、其の生氣にも大小あり、若し余が言に疑あらば、兩君とも明日より、我國の諸事業場を巡覽せられよ

と述べつゝ「ストーヴ」の上に飾付けたる置時計を眺め
「思はぬ長談に、夜を更かし。兩君も定めて疲れ給はむ、我が社會の新組織は、單純なるが如くにして複雜なる處あり、又複雜なるが如くして意外に單純なることあり、尙ほ明日も、貴客の爲めに其の詳細を說明し、新舊、兩社會の優劣を比較せむ
余等兩人は、話の盡くるを惜めども、長く老體の主人を累はすも氣の毒なりと思ひ、乃ち、主人が侍婢に命じて、導かしむるに隨ひ、豫て安排せる寢室に赴き、兩人各々其の定められたる臥床に入りぬ
余は寢に就きし後、如何にしても眠る能はず、余は玆に白狀すべし、余が胸中にて、是迄社會百事の大本と崇め、金城鐵壁と賴み居たる、隨意競爭の主義は、一朝にして老人の爲めに說破されたり、彼が物語を聽きし時の余が腦裏の混亂は、實に名狀すべからず、恰も極寒の曉に、百石の冷水を頭上より浴せ掛けられたるが如くなりき、凡そ人の良心は自己の固信する道理の上に安定す、若し其の道理にして撼搖すれば其の良心は忽ち定着する所を失ふ、余は少年の頃、一たび東洋の古說を信じて、良心の安處と定めたりしに、其後洋書を讀み、西洋新古の學說に出逢ひ、一たび其の道理を覆されて、良心の立場を失うたることあり、今や再び此の境遇に陷り、彼の物語を聽きつゝある間、秒一秒、分一分、社會に關する千百の疑問は余が腦裏に涌出したるもの、今臥床に入ればとて、何でう我腦が身體と共に休息すべきや、彼の物語は理ありと知るも、尙ほ之に關聯せる、社會諸般の問題は、涌くが如く起り來り、神經は冴えて眠る能はず、如何にかして今宵は休息し、更に明日、大考案を爲すべしと、思へば思ふ程、勉むれば勉むる程、眠り得ずして右に寢返り、左に寢返り、輾轉反側なる不眠の形容は、正に余が此時の狀態を描し盡せり、然るに、隣室なる金尾の部屋にても、何やら折々物音の聞ゆるは、彼も安眠し得ざるに相違なし、と思居る中、我が寢室の戸を、指先にて輕く敲く者あり、「入來れ」と應ふる言葉を待たず、入來りしは金尾
「如何に田美野君、余は眠る能はず
「余も御同樣なり
「君も眠られざるか、余は諸種の疑問に苦められ、如何に勉むるも眠り得ず、君の部屋にある『ブランデー』にても貰受けむと出掛けたるなり
「君は如何なる疑問ありてか
「イヤ、君の知らるゝ如く、余は二百萬圓餘の資産あり、一半は父祖の讓り物なれども、一半は我が利殖せしもの、今日の主人の物語を聽くに、如何にも今迄の所にては其中に眞理あるが如し、彼は社會の舊組織を變更し、百般の私業を公業に移せりと云ふ、其際に資産家の資産は之を如何に處置せしや、コハ差向き我身に取り、苦痛至極の問題なり、凡そ道理の世界にて勝ちたる主義は、遠からずして又實際に行はるべきものなり、若し主人の說く所にして、眞理ならば、行く〳〵は、我國にも實行せらるゝの時節あらむ、之れ我々の死活問題なり、之を思へば何とて眠らるべきや、瞼の上下は相合するも、我が眼球は尙ほ明かなり、田美野君、非常に心配なる事の起りしものよ
「ソハ、尤千萬なり、併し余は大資産家ならぬだけに、左程の心配もなし、其邊は君に比すれば、稍ゝ氣樂なり
「然らば君は、何の爲めに眠られざるか
「否な、余は理財學派に於て、君の知らるゝ如く舊派の信徒なり、余が本尊と崇め居たる、隨意競爭の本義は、主人の物語にて明かに傾覆せ

り、然れども、尚ほ其の一半は生活せり、其の仔細は、隨意競爭なるものあればこそ、各人各個、相競うて良質廉價のものを製造し、社會は之に依て、最少の勞力を施したる最良最廉の事物を使用し居らるゝにあらずや、然るに主人の説の如く、一切の私業を公業に變じなば、如何なる勵まし、如何なる誘ひありて吾人は社會に最良質、最廉價の事物を供給し得べきや、彼の説を聽きし當初より、此事は早く余の腦裏に在り、因て思ふに、此國の社會は、舊社會に於ける事物進步の程度を其儘に保存することは能し得べきも、我國及び歐米の如く、最新、最良、最便の事物が續々として社會に現はるゝ如き利益は、收め居るの途なしと考ふ、主人の説く所は單に隨意競爭の弊のみ、而も其利を説かず、其弊を去れば、併せて其利を失はざるべからず、利弊相伴ふは世事の常道、歐米及び我國にて、隨意競爭の主義を棄て得ざるものは、社會の進步を勵ますの大利あるを以てなり、此點に於て余は此國の社會が果して如何なるやを想像すれば、するほど、諸種の疑問は之に纏綿し、益々其疑を深くす、是れ余が惱まされ居る最大疑問なり

「如何にも、余も爾か疑はざるにはあらざりき、此の問題の解釋されざる中は、我々は浮と此の新社會に、敬服をば表し難し、併し差向きの必要は『ブランデー』なり

「左らば余も相伴すべし

と、互に一二盃を傾けて、復た各々寢に就きしが、如何に冴えたる我々の腦も、「アルコール」の魔力には敵し難く、恍惚と心地よく感ぜし其後の事は覺えず

第四囘　新社會の出現

我々は、覺えず時間を寐過し、慌てゝ起出で、待受けたる主人と、朝飯を與にす

「兩君とも、旅行の疲れに、定めて熟睡し給ひしならむ

「イヤ、どう致しまして

「ア、兎角、寢慣れぬ家に宿る時は、熟睡の出來かぬるものなり、世の諺にも、樂しきものは『ホーム』と言ふ、我家ほど、樂しきもの無し、如何に丁寧の取扱を受くるも何歟の便利は自宅に同じからず、況んや余が家は、見らるゝ如き一人住居ひ、昨夜も注意は致せしなれど、定めて寢心、惡かりしならむ、俄に取出せし寢具にて或は濕臭くは無かりし歟、蚤など居りはせざりしや

「イヤ、御注意申分なく、夫等の事は自宅同樣の心地せしが

「扨は、熟睡もせられざりしか

「イヤ

と、言ひつゝ我々は、互に顏を見合せたり、

余は金尾を冷かしやらむと

「金尾氏は、何か大に氣掛りの事あるやにて、余の如く熟睡し得ざりし由

「ソハ、また何事を考へられしや、貴國なる父母妻子の御身上に案ぜらるゝ事などの起りしか

「否な、決して左樣にもあらず

余は傍より、笑を含み

「御主人、金尾氏の心配は、貴國が新組織を行ひし時、資産家の財産を、如何に處分せしやの疑問なり

老人は忽ち笑を含み

「扨は、貴客も、大資産家にて御座すならむ、其の心配は尤千萬

「否な、小生のみならず、田美野氏も亦た、諸種の疑問の爲めに、實は終夜、眠り得ず、我々二人は貴說を聽きしより、千種萬樣の疑問、涌くが如く出來り、腦裏の混亂は實に甚し

「ソハ、無理からぬことなり、我が舊社會の晩年に、近づき迫る結局が顯然と遙かに見えたる

時は識者學士の恐慌すら相應に甚しかりき、然れども諸君の如く甚しくはあらざりき、斯く申さば失禮ながら、事物は常に、彼我、自他、前後を眺め居らざるべからず、假令自信の説ありとも亦た他の異説を知るを要す、斯くするときは利害を知ること速にして、大に迷ひ、大に驚くの恐れなし、兩君が昨夜俄に胸中の混亂を生ぜられしは、蓋し平生、經濟學界の或る一派の説のみに執着せられ、他の新説を全く聞かざりし過にはあらざる乎、カアル、ロッドベルチェス氏、及び、カアル、マルクス氏等の理論は研究せぬ迄も、手早く社會主義を知るに便なる、ダウソン氏の『獨逸ニ於ル社會主義』ウェッブ氏の『英國ニ於ル社會主義』米人エリー氏の『社會主義及ビ社會改良』等の諸書にても、繙き居られしならば、昨夜寢られぬ程に、我が物語を驚かれざりしならむ

凡そ事物に於ける大切の注意は、新説に對して容易に善惡邪正を速斷せざるに在り、人皆な持論なきはなし、若し他の新説に出會ふ時、先づ邪説として之を心に迎へなば、其の誤りや大なり、耶蘇の道、ソクラテスの德、マルチン、リュウタアの説、今日誰れか、之を尊び之を敬せざる者あらむ、然るを貴客、其の見慣れず、新しきが爲めに、猶太人は耶蘇を磔殺し、希臘人はソクラテスを鴆殺し、舊教僧侶は、リュウタアの死刑を宣告せしにあらずや、凡そ新たなる眞理が世に出現する時は、世人は第一に其姿の見慣れざるに驚き、又新説は必ず舊社會の何處にか牴觸すべきが故に、不利を感ずる一部分の者必ず之を迫害す、是れ古今歷史の常に繰返す所なり、凡そ眞理なるものは諸種の説と互に長短を爭ふより其眞理は愈々現はるゝものなり、然るを、新なるを以て最初より之を邪説と視做さば其の國人は今日と雖も亦た必ず耶蘇、ソクラテス、リュウタアを殺戮するならん、故に救世の新理を迎へんと欲せば、無心平氣に新舊兩説を比較攷究せられよ

「誠に、貴説の恭きを拜す、實に我々今日まで、喰はず嫌ひにて、社會主義を唯だ、外道、邪説と輕賤し、是が爲め一朝此の胸中の混亂を生じたり、爾來は深く注意すべし、扨て差向き伺ひたきは、新社會を造るの時に於て、貴國は資産家の財産を如何に處分せられしや

「夫に就ては、我國にても、當時實に諸種の議論あり、過激の極端論は沒收を主張するもありしが、一般多數の意見は、可成く個人の所有權を傷つけぬ樣に注意すべしとて、遂に之を買上ぐるに歸着せり、先づ最初に買上げたるは、個人所有の土地山林なり、第二に買上げたるは、諸製造所の固定資本なり、第三に買上げたるは各商店に仕入れある一切の商品なり、(但し商業の性質に依り、今も尚ほ私業に屬するものなきにあらず、夫等は後に詳說すべし)又買上の方法は、土地にせよ工場にせよ商店にせよ、一年の收納高、利益配當、賣上の純益等を公平に算出し、既往幾年間の平均を取り、又た將來の盛衰を計り、公平なる鑑査を遂げ、一割の利益ある者を六朱の利子に見積り、然る後公債の元金を割出し、内國人限り所有を許す据置公債證書として之を一般の持主に配付したり(此の公債は利拂のみにて元金は一定の仕拂を爲さず、國家の都合次第、永久に据置くものとす)

當時我國耕地の反別は、今の貴國と粗ぼ同じく、凡そ五百萬町歩にて、良田、下畑を併せ其の買上價格は平均一反歩、百圓位に當り、總額五十億圓なりき、又私有山林の價格は、十六億圓、諸工場の固定資本、(鐵道、鑛山、其他一切を籠めたるもの)に對し凡そ二十億圓、諸商店の仕入品に對し十八億圓、家屋宅地、四十六億圓、合計百五十億圓、を以て片付けたり、以上諸項の

買上高の明細を、此處に說明するは、本論を岐路に入るゝの恐れあるが故に、逐て詳說することとせむ

ナニ、我が公債の多大に驚かるゝとな、失禮ながら、ソハ日本人たる兩君に似合しからぬ小膽なり、現今英國公債の總高は何程なりや、現に六億九千萬磅にて、之を貴國の通貨に換算せば、則ち七十億圓に上るにあらずや、然らば我國の公債は、僅に其の二倍弱のみ、而も彼の公債は皆な不生產的にして、我が公債は生產的なり、故に我國は一百五十億圓の利子として、一ケ年九億圓の負擔あれども、右は買上げたる土地資本より生ずる利益を以て支辨するに差支なし、又人民の手に受取りたる此の巨額の利金は、如何に社會に働きつゝあるやも、後に至て分明ならむ

之を聞て、先づ安心の體なる金尾氏は

「御主人、資產家の財產と云ふも、元と是れ彼等が數代、若くは一世の苦心を以て、貯蓄せるものにて、其の所有權は動かし難きものと考ふ、如何に社會の爲めとは言へ、本人の好まざる所を强ひて、之を買上げても可なるの道理ありや、願くは高致を請はむ

「左ればなり、ソハ論もなき事と考ふ、試に貴客に問はむ、貴國にて、社會の爲め必要なる鐵道を作るに當り、其の線路が、資產家の所有地を經過せざるを得ざる場合に、貴國の政府人民は、遂に之を如何ともする能はざる歟、如何に之を處置し居るや

「結局は、土地收用法を用ゐて、之を買上ぐ

「其の本人が不同意を唱へて、抵抗せば如何

金尾氏、少しく行詰る、主人

「余は、貴國の法律に於て、無理にも之を買上ぐることを知れり、之を買上ぐると云ふも、其所有權を全滅するにあらず、相當と認むる代價を給するにて、言ひ換ふれば、資產の容を土地より金に變ぜしむる迄なり、又た社會一般の利益の爲めには、個人の利益の幾分を殺がざるを得ず、是れ貴國のみならず、現在歐米列國一般に異議なき所なり、左れば、我國が舊社會の弊害に堪へずして、一般の幸福を圖るが爲め個人の資產の形を變ぜしめ、或は聊かの減少を爲し、此より彼に容を更へしむるも、道理に於て一點の非難なし、とは是れ我國の定論なりき

是に至り金尾氏も默して言なし、余は主人の說を聽く中、直に胸中に起りし一疑問あり

「御主人、若し貴國の過激なる極端論の如く、個人の所有なる土地、工場、商品、一切を國家に沒收して、之を全社會の有とせば、其の產出品は、之を一般の社會に分つが故に、改革の效能あるべしと雖も、只今の物語の如く一切の物を買上ぐるとせば、假令其の事業は國家の事業たりとも、折角に之より生ずべき利益は公債の利子として、矢張り之を以前の持主たりし資產家に分配せざるを得ず、然るときは、是れ唯だ持主を變ぜし迄にて、國の資產を唯だ個人より國家に移せしに過ぎず、社會に果して何の效能かある、愚考にては、夫程に、世を騷がせ、事物を混雜せしめても、尙ほ行はねばならぬ程の利益なしと考ふ

老人は、容を改め

「善哉、君の問や、ソハ、第一に起るべき大切の疑問なり、若し之を解釋せむと欲せば、第一に、近年の社會は事物の發達、速かにして社會の生產力は、年一年より增加しつゝあるを思はざるべからず、故に買上以前の、貧富偏倚は其儘とするも、買上以後に於て社會に增加し來るの生產力を社會に分配するの大利益あり、若し新社會に變ぜずんば、未來永劫、貧富は益々偏倚し、社會に增加する生產力は徒に此の偏倚を助くるに過ぎざる筈なりしを、我國にては改革の時より之を打切り、其の以後の生產增加を全

社會の幸福に向くるの大利を得たるなり、改革後、僅に五十年なれども、我國一ヶ年の生產力の增加せしは、舊時に幾倍せり、況んや、將來幾百千年に增加する生產力を計算せば、其の富の高は、舊社會に偏倚し居りたる富の高に幾百倍することと疑なきをや、此の幾百倍の富は、則ち新組織に從て全社會の福利に歸すべき者なり、是を思はゞ、我が改革の功能も亦た至大なるを知らむ、過去舊社會の富の高には限りあり、將來永遠の富の高は量る可らず、此の無限の富を全社會の幸福に充てむと欲すること、我國改革の一大眼目なり

右の外に、尙ほ目前現在にも、新組織より生ずるの利益、頗る多々なり、其の間接に生ずる一般種々の大利益は、暫く措き、單に生產上より生ずる者を列擧せむ

例せば、製造工場に於ける、勞力者の賃錢を、一人一日七十錢と假定すべし、而て資本家は、是の賃錢の割合にて製品を賣捌き、世間普通の金利に相當する利益を得らるゝ場合にも、彼等は、尙ほ時として勞力者の賃錢を値切り、之を五十錢に推下げ、殘りの二十錢を、我が利益の中に收むる者少からず、勞力者は、一日も其の賃錢を得ざれば、則ち饑うるの不幸あるを以て、忍び得べきだけの少き賃錢にて、之を引受けざるを得ず、故に假に一圓の賣價ある製品にして、其の五十錢を工賃とし、三十錢を資本の金利として十分なるに、尙ほ殘りの二十錢をも之を資本家の懷に收むるの勘定なり、（勞力の供給、大に減ずるときは、資本家は是非とも、賃錢を引上げざるを得ず、供給、大に增せば、是非とも之を推下げざるを得ず、故に勞賃の高低は、世間の勞力の增減が、之を支配する者にて、資本家が私に之を高低せしめ得べき者にあらずと雖も、右は勞力の大增減の極度を論ずる理窟にて、大增減の極度に至らざる、中間、普通の時節には、資本家の手心にて、賃錢に多少の高低を爲さしめ居るは、實際の事實なり）然るに我が新組織にては、前の持主たりし資本家に、公債利子として拂ふべき高を、假に三十錢とすれば、此の三十錢を動かすべからざる目安とし、殘五十錢をば之を勞力者に與ふるが上に、尙ほ殘二十錢をも、間接直接の方法にて之を勞力者に與ふるを得るなり、況んや、社會の生產力增加して、一日に一圓二十錢の製品を作り得るに至るとすれば、國家の引去るべきものは、單に三十錢に止り、殘五十錢を賃錢とするも、尙ほ殘る所の四十錢を、直接間接に勞力者に分配するが故に、舊社會に比すれば彼等は茲に總計、九十錢を得るの幸福あり、斯くして漸次に其の極貧の地位を脫せしむるを得べし

又、農民とても同樣なり、通例彼等が地主と小作料を定むるには米何俵を納むると現物の數量を用ゐず、年の豐凶に依り總出來高の何割を納むると、割合を以て之を取極め置く者多し、故に一反に一石を得るとすれば、地主には五斗を納めて濟むべきに、若し我力にて穀種を選び、肥料を施し、一石五斗の增收を得るの場合には、五斗に加ふるに二斗五升を以てし七斗五升を地主に納むる譯に當る、然るに改革後は、國家が舊地主に拂ふべき利息だけを引去るに止るが故に（假に其高を五斗とすれば）此の二斗五升も、己れに歸し、總計一石は農民の有に歸すべきものなり、且つ自作農民は其の受取るべき土地買上公債の利子と、利子徵收と差引き此點には損得なしと雖も、尙ほ新組織より蒙るの大利は非常なり、漸次に其事明白ならむ

又、舊社會に於て、資本家は過當の利益を貪らざりしものとし、又、世の生產力は增加せざるものとせむも、尙ほ新組織より生ずる利益は實に種々あり

チヨト、貴客に問はむ、貴國にて最も成績よき

工場製造所は如何なる人々の所有なりや

「大資產家の所有せる工場ほど、成績好し

「ソハ如何なる理由なりや

「資力あるが故に、不景氣の時には製品を持越して辛抱し、景氣好き時まで持堪へて之を賣り、景氣、不景氣の損得を平均するの力あるを以てのみ、且つ何事の設備も完全なればなり

「然るべし、然らば若し其の資本家が國家ならば如何、全社會ならば如何、如何なる貴國の富豪家と雖も一個人にて我國の如く、百五十億圓の大資本を擁する者は有らざるべし、然らば我が社會の工場製造所が其の不景氣に堪へ、景氣を待ち、損得を平均するの力、及び設備の完全を貴國の大資產家に比せば、其の優劣、如何、是れ我が仕組の一大利益なり

諸事業を、社會の公業となす上は、其力、頗る強大なるが故に、長くも賣行きの見込ある製品は、假令不景氣の時にても、尙ほ製造して他年の爲め之を蓄ふるの力あり、故に他國の諸工場の如く、不景氣なればとて、俄に勞力者を解傭し、人を減じ、給金を減じ、一時の急を免れむとするが如き憂なし、故に我社會の事業は間斷なく、平均して行ふことを得、是れ幾千萬多數の人民に取て此上もなき非常の幸福なり

又舊社會に在ては、我國資產家の富も、之を歐米諸國の個人の資產家に比すれば、甚だ劣りしが故に、『小資者は大資者に勝たざる』天則の爲めに何事にも人後に落ち世界の市場に大敗のみ取り居たりしに、之を國家の公業となすに至ては其の大資力を結合せしが爲め着々勝利を制し、前に『我國の事業家は資本小にて外人に壓倒せらる』と歎きたることを今更ら愚の極なりきと考ふるのみ、斯く世界の市場にて外國の競爭に敵し得るのみならず今は却て之を凌駕するに至りしも是れ亦た新組織の賜なり

是迄の主人の說は、如何にも尤と考へたれども、尙ほ余が胸中に昨夜より橫はりし一疑問を、提出せざるを得ず

「貴國新社會の利益は、今迄承りし處にては、敬服の外なし、然れども、凡そ世間の有りと有らゆる事物は各人が利益を得むとする隨意競爭に依て銘々競て新工夫を廻らすが爲めに進步す、是れ爭ひ難き天則なり、貴國には果して此の缺點なき歟、是れ實は、昨夜も余をして眠る能はざらしめたる一問題なり、願くは高教を請はむ

「そも亦た尤千萬なり、我が新社會に於て、豈に其の仕組なくして可ならむや、唯だ舊社會と大に其趣を異にするのみ、余は續いて貴客の爲めに、是を說明するは易けれども、今朝より相も變らぬ問答の爲め、既に半日を過したり、アレ、見られよ、早や正午十二時を過ぎむとす、座談のみにては諸君の健康あしかるべし、又、我が社會の實物を且つ視、且つ聽かれなば余が言を費すを待たずして、理會せらるゝこともあらむ、先づ晝飯を喫せられ、夫より午後は首府の諸工場商店を巡覽せられよ、余は同伴したけれども避け難き用事あり、因ては余が名刺を與ふべし、之を持參せられれば、各處の見物は隨意なり、晩餐後に至らば復た諸君の爲めに敢て說明の勞を辭せじ

第五回　新社會に於ける工業、商業、

主客の問答

「今日は何れの場處々々を、御覽ありしや

「先づ、鐵工場、織物場、靴製造所、及傘製造所等、を巡覽せり

「實地の模樣を、如何に感ぜられし歟

「實に驚入たり、各工場の規模の廣大なる、英國のグラスゴー、マンチェスター、リバープール、の諸工場とても企て及び難し、又職工

の熟練と、勉強とは、殊に敬服の外なく、彼等が勉強の點に付ては能く注意熟覧せしが、實に申分なく覺ゆ、今歸途にて我々兩人其事を物語り、如何なる仕組なれば斯く勉強を促すやと嘆ぜし程なりき、全體工場の仕組は如何

「然り、一口に申さば歐米諸國に行はれ居る夫の『コ、オペレーション』『力、資、結合』の仕組に國家の資本を貸與し、一切の事業を勞力者自身の物の如く思はしむるのみ、則ち勞力者銘々が結合して事業を組立て、其利益を分配するが如きわけのみ、先きにも物語りし如く、利子六朱(舊持主に仕拂ふべきもの)を引去り殘餘の利益は悉く從事者に分配し得る者なり、兩君、夫の『コ、オペレーション』『力、資、結合』の仕組すら歐米にて能く行はれ得るを思はゞ我が新社會の諸工場が亦た如何に能く繁昌するやを悟るに難からざるべし、『コ、オペレーション』には大資本家も加り居りて、彼等に相應の利益を分配する後にあらざれば勞力者は利益の分配に與かるを得ず、然るに此仕組さへ倚ほ能く、好果を奏するに、況んや全體の資本は我物同様にて六朱の利子以外の利益は擧て之を己等に受取得べき仕組に於てをや、焉んぞ力限り根限り、勉強せざるの理あらむや

歐米諸國にて、大資本家の資本は、幾んど皆『力、資、分離の仕組』に吸込まれ、『コ、オペレーション』に反對せり、是の大敵を目前に扣へて、常に之と競爭するの苦境に立ちながら、倚ほ『コ、オペレーション』は都合よく行はれ居るを思はゞ、我が新社會の如く、一切『力、資、分離の仕組』なく極めて安全なる生産界に於て我が新組織が焉んぞ彼等を勵し彼等を熟練せしめざるを得むや、(現在、英國にて『コ、オペレーション』の仕組を行ひ居る會社の總數は、一千五百八十九ケ所、組合人員百二十萬人、資本高一億七千萬圓、一ケ年の賣上價格、四億八千萬圓なり、獨逸にては、三千四百ケ處なり)又我國の往時及び貴國今日の官業とは如何なるものぞ、官業なる者は果して勞力者に何等燬の利益を配當し居る乎、其監督者たる官吏は之に從事する勞力者ほど利害の關係、我身に切なる乎、決して然るに非ざるべし、其の然らざる以上は、官業なるものが常に好果なき、素より怪むに足ずして、『コ、オペレーション』以上に位する我が新組織の公業に、非常の、生氣あるは、多辯を竢たずして明かなり

併し、兩君、記憶せられよ、我が諸工場の勞力者とても、平等一様に賃錢利益を受くるにはあらず、各人技倆の巧拙に隨て、其賃錢に十餘種の等級あり、同一の時間を以て他人よりも餘計に物品を製出し又は他人の企及ばざる巧妙の技倆ある者は、之に應じて亦た他人よりも多量の賃錢を受取る、而して工場利益の分配は其幾分を等級の割合にて配當し、他の幾分を間接直接に平等に配與するものなり、決して各人に平等の賃錢利益を與ふるには非ず

貴國などにて、會社の監査役に當る我が工場長は、工務省の支廳より勤務すれども、他の重役とも稱すべき幾名の評議員は、皆な工場に從事する人民が之を選擧す、又副長とも云ふべき者は、其地方自治體の行政廳より選任し、地方との交渉に便にす、全國各地何れの工場も其組織は皆な大同小異なり

舊社會及び貴國の現社會などの工場と、我が新社會の工場とを比較すれば、我が工場は非常に、簡易單純なるものなり、舊社會の製造會社なるものは、何れとも皆な工商、二樣の事務に苦心せざるなし、例せば製造原料の買入には、時の相場を見計らひ非常の懸引を爲さゞるべからず、又製出せる物品を賣捌くにも、大なる懸引を要す、而して亦た一方には其製品を良質廉價に製造せざる可らざるの本業あり、故に一の

製造會社なれば必ず商、工、の二業を兼ね重役等の心痛云ふべからず、其の本業なる物品製造よりは、却て原料の買入れと、製品の賣捌きとに精力の過半を致さゞれば、忽ち會社の損益に大影響を生ぜざるなし、然るに我が新社會の製造工場は全く之に反し、單に良質廉價の物品を製出する心配のみに止まり、買入れ、賣捌きの商務には何の關係なし、故に其業務も亦隨て發達す、其の理由は下の如し

今茲に、新社會の政治官制を說くは、其處を得ずと考ふるが故に、單に生產に關する部分のみを語らむ、我が官制の中には、農務省あり、工務省あり、商務省あり、各省とも各地に其の直管の支廳を設け、其の區域內の事業を管理す、偖て、今我國にて一年度の事業に取掛ると假定せむに、商務省は、其の直管する全國各地の商店より、一年中に賣捌くべき物品の豫算報告を爲さしむ、是の報告を集めて全國一年中の諸物品の需要高を算定す、然る上にて商務省は工務省に向ひ、來年度中には何種の鐵物、何百萬個、何種の織物、何百萬反、內外國行き何品何千萬圓、何物何百萬圓と一一類目性質を分ち之を通知す、又農務省に向ては、米何千萬石、內上米何程、中米何程、下米何程、雜穀何品何十萬石、入用なる旨の通知を發す

然る時は、工務省は其物品を各地の製造場に割當て、農務省は之を各地の支廳に割當て、歲の豐凶に關せざるもの丶外は、其價額を上申せしめ、斯くして全國の諸物品の需要總高と供給總高と、其の品目性質との定まりたる上は、其通知を受けたる工場は、只だ單純に其製品を豫算通りに製出するの盡力を爲すのみ、其の製品に用ゆる原料は最寄々々の商務省支廳管轄の卸店より之を受取り、偖て物品製出の上は又最寄の商務省支廳に之を引渡す、是れにて製造工場の役目は濟むなり、舊社會の仕組に比すれば豈に簡易單純に非ずや、物品原料の仕入れ及び製品賣捌きは皆な商務省の受持にて、工場には何の關係も無ければなり

「扨て商店は、如何なる場所々々を、巡覽せられしや

「吳服店、舶來小間物店、烟草店、荒物店、等なりき

「如何に感ぜられしか

「製造場と同樣、其の規模の大いなるには驚入れり、又其の買人に丁寧なる、取扱の手早き、物品授受、帳簿記入などの整然として行屆くには敬服せり

「左樣なるか、我國の商店には卸店と賣店との二種あり、兩君の見られしは賣店なり、卸店の方は全く商務省支廳の直轄に屬し居れども、賣店は然らず、其の店長は支廳より命ぜられし監督者なれども、重役なる評議員は、商店の物品を購買する區域內の人民より選擧す、其他は雇人なり、是を我が賣店の仕組とす

賣店も舊社會に比すれば、實に簡易至極にて、舊時の商店商會なるものは先づ品物の仕入に、非常の懸引を要し、之を賣捌くにも亦た非常の苦心ありしに、今の賣店は然らず、先づ前年度の賣高を押へ、幾割の增減を見込て報告し置きたる豫算に從ひ、必要なる賣品をば其の最寄の商務省支廳直管の卸店より受取るに止まる、又賣捌くにも別に舊時の如く他と競爭の憂も無し、買人の來るに應じて物品を金と引換ふるに過ぎず、只だ其の注意とては、品物を丁寧に取扱ひ、手早く埒を明くると、買人に親切なるとの外は、何の技倆も入用なし、品物を賣上げたる代金は規定せる最寄の卸店に納め、店の品物入用の時は又直に、卸店より受取るに止まるのみ

又、我が商務省は、全國の販賣權を一手に握り居るが故に、萬事に都合好し、例を貴國に取

らば、東京市の商品が豫算より賣れ行き惡くして剩餘を生じ、一方にて大阪に不足を告ぐる場合あらむに、舊社會なれば、大阪の諸商人は俄に東京の品物を仕入れ、是が爲めには幾分の高價となり、之を大阪の買人に賣るには品切れを名として尙ほ其上にも高く賣捌くこと珍しからず、單に甲乙兩地の貨物の不平均の爲めに、東京の商人は意外の儲をなし、大阪の買人は意外の損をなす、貨物集散の不平均より、謂れもなく世間に於て得を取り損をなす者を生ず、左れど我が社會にては左ることなく、全國にて品物の不足する地あれば、忽ち剩餘ある地の貨物を振向け、其の盈虛融通、誠に自由自在なり

貴客、舊社會ほど各人の間に偶然なる損得と偶然なる勝敗を生ぜしものはあらず、世上が、景氣よく見ゆる時には、彼の會社も此の會社も、景氣を見込んで餘分の製造をなし、彼の商店も此の商店も、餘分の仕入れをなし、偖て其品々が、市場に出で來る時は、各人の思はく皆な同一なるが故に、大なる損失を來さゞるを得ず、品物を寢かし置けば庫敷を取られ、銀行に擔保とすれば日歩を取られ、結局は投賣をなし、一家破產の基となる、而て其根源を尋ぬれば唯だ需要供給の高を審にするの途なくして各人銘々思ひ思ひに見込を立てるに因るのみ、又不景氣の時も同樣にて、不景氣を見込み、銘々品物の製造仕入を差控ふれば、意外にも需要者多くして、直段上り、製造家、商人は、意外の儲をなせしとて喜ぶも、一方にて世上の買人は迷惑千萬にも、高價なるだけの損をなし居れり、凡そ是等は皆個人銘々、私業を營むの餘弊にて、其甚だしきは、世上に餘りし貨物の多くは時を經るに隨ひ、價値を損するもの鮮からず、折角に世の勞力を加へて製出せし物が幾分の損廢を來す以上は、卽ち世の勞力を無益に捨つるの道理にて、舊社會に於ける是等の不經濟は幾んど枚擧に遑あらず、意外の儲を爲す者も、意外の損を蒙る者も、謂はゞ僥倖のまぐれ當りのみ、之を目して、敵味方の差別なく當るを幸ひ薙立て合ふ一大混戰と言はむ乎、幾萬の盲人を一場に放て互に組討を爲さしむる如き戲劇と云はむ乎、其間に世の勞力は無益に費され各人には興廢損得の苦樂を生ず、今日の新社會より顧れば唯是れ一場の夢と言ふの外なし、思へば思ふほど、其のぶざまに呆れ果てざる可らず、萬物の靈などと自稱せる人類が、斯く迄も愚鈍なりしとは、新社會に成長する若者どもは、殆んど信じ得ざるぞかし、而も、人智を以て社會を整頓すれば爲し得られざる事にも非ざるに、唯だ面倒なるが故に之を爲さずと謂はゞ、是れ亦た一層の愚と謂ふの外なし、イヤ、是れはしたり、斯く言へば貴客等を嘲るやうにて、誠に失敬千萬ながら、這は只だ舊社會を歎ぜしまでのみ

此時には、余等兩人も、實に恥入りたり

「我が農務省の大略も、此處に工、商、二省と併せて略說し置かば、後の物語に便なるべし

農務省も工、商、二省の如く、各地に直轄の支廳あり、商務省より一年度中の需要通知を受けたる時は、之に對して米穀の種類と其高、木材の種類と其高、其他、林產農產の各種何萬石、何百萬石、と夫れ〴〵各地の支廳に割當て、之を通知し其產出を受負はしむ、然る時は支廳より之を管內の農家に通知し、來年は此地には、何穀何程、何品何程、との見込を通知す

農產は、歲の豐凶に關するが故に、人力にのみ依賴し難けれども、出來べきだけ、之に應ずを努む、扨て時節々々に至れば其の收穫物を農民より支廳に納め、支廳は之を商務省に引渡す（米國などにても近年に至り、農產物は總て州

政府に買上ぐべしとの論、行はれ來りしは嘉すべき事なり）倘ほ農事漁業に關しては、貴客も一應、田野山林の有様を巡覽せられよ、然る上にて物語る方、詳細を盡すを得べし

「如何にも承れば承る程、面白き仕組なり、只だ農産物は勿論、社會萬般物品の價格は如何にして之を定め給ふや、舊社會にては各人銘々の競爭賣り、競爭買ひなるが故に自然と物價の標準を生じ、其の高低も生ずる事なるに、貴國の如く社會が全國一手の販賣人たる上に、又社會が全國一手の製造人たる時は、何人が物品の價格を定むるや其點に疑なき能はず

「尤も千萬なる疑問なり、若し外國貿易なくして、一國限りの世界ならむには、最も簡便なる方法あれども、如何せむ今は海外取引ありて何億圓の貨物を外國に賣出し、何億圓の貨物を外國より買入れ、内外の取引き入組みて、複雜なる現狀と爲り、稍や煩雜を免れざれども、概するに我國の貨物の價格標準は總て之を外國の市場に取り其目安を定むるなり、而て内地限りの物品も亦其價を之れに關聯せしむ、今外國市場にて　生絲一梱の價が、九百圓ならむには、之を内地絹物の目安と定めざるを得ず、然らざれば皆外人に買去らるべし、　又是れより高むれば外國より輸入し來るべし、故に如何に一國一手の製造商賣なりとて、理財の天則をば破る能はず、常に物價の標準を海外の市場に取る、米穀雜穀の如きも亦た然り

「兩君、斯く海外貿易あるが故に、我仕組が複雜となれども、又其の懸引には隨分面白きことも多し、夫れ故に我國の商務省は、實に重要なる官省の一に數へらる、内地のみの商業ならば、單に統計を案じ、定まれる需要者定まれる買人に對して定まれる物品を賣捌くに止まるが故に、何の心配なしと雖も、外國貿易を管轄する以上は、常に諸物品の海外相場を油斷なく明かにし、賣買の懸引となさゞるを得ず、故に商務省よりは世界各地に派出員を置き、工務農務の派出員と組合はしめ、我商品を壓倒すべき新製造品の各地に起り來らざるや、我が新商品を擴むるの場所なきや、等に拔目なく注意せしめ、又他國に新發明の機械ありて我國に手早く之を採用する用意の爲めには、各國の「パテント」局に詰合の出張員もあり、若し其の大利あるものと見れば、直に大金を拂て、其使用權を分ち貰ひ、又は模倣して差支なきものは、直に之を模倣する用意を爲す等、世界の全市場、八方に眼を配らざるを得ず、然れども舊時に比すれば、外國貿易も亦た大に氣樂なる場合あり

舊時、個人の私業時代には、偶ま海外より巨額の註文品あるも、資本少なく、工場の力弱きが爲めに、一齊に揃うたる性質の註文品、幾百萬個を製造すること能はず、從て我商品は信用を失せしこと少なからず、註文の途も之が爲めに杜絶するの嘆ありしに、今や工場の規模が廣大に趣くに從ひ、如何なる品物をも多量に引受け得ざる事なく、又一國の工商業は全社會の公業なるが爲めに海外に對する契約品註文物など舊時の如き、不正濫造の弊なきを以て、諸國の信用を博せしこと、言ふ迄もなし、是等は我が事業を斯く迄、大に發達せしめし原因の一にも數ふべし

第六回　新社會に於ける農業及び創案局

「實物を觀つゝ、余が説明を聞かれなば、便宜多かるべきが故に、明日は兩君とも、我國の田地農産の有様を見られば如何に

我々は勿論同意にて

「然らば一日旅行すべきが、旅費の都合もあり、爲替を組度く思ふ、如何なる銀行が、最も信用

ありて便利なるや、願くは其名を聞かむ

「开は聞かるゝ迄もなし、我國には、只だ國家の設立する一大銀行あるのみ、他國の如く同一の業を營む種々様々の大小無數の銀行を設くる必要なし、我銀行は全國の各都各邑必要の地に悉く支店ありて、之を本店に總轄す、故に最寄の銀行にて爲替を組まれなば、何れの地にても受取り得べし、舊時の銀行營業なども誰、某の銀行は信用ありとか、無しとか、取引は危しとか、安全なりとか、最も簡易なるべき金貸營業すらも、種々様々の面倒ありしは、今より顧れば、實に無益の骨折なりき

又、國内一切の農業、工業、商業擧げて公業なるが故に、各地の農、工、商三省の支廳の間にては互に請取書にて物品の取引をなすに止り、我が事業世界には金圓を用ゆるの必要なし、只だ人民各個が貯金を爲し、又は旅行或は親友知人の間に送金を爲す位のことに過ぎず、舊社會にて一切の事業が、個人の私業なればこそ、百事の資本は、悉く銀行との取引を生じ、複雜多忙なりしかども、今は人民に對して銀行は、只だ貯金と爲替の事務を扱ふに過ぎず、それも事業上の金にはあらぬが故に、金高も亦多からず、併し定期當座の貯金は隨分に巨額なり、何となれば、何億圓に上る公債の利子仕拂は、一旦、人民の手に歸したる上にて、彼等が之を銀行に預け込むを以てなり

又、一國一銀行なるが故に、中央と各地支店との間に通貨の運用を速にするの便利あり、舊時に在ては、各地種々の事情より、甲地の銀行に通貨不足するも、乙地の銀行に餘りあるも、非常に迂遠の途を執り、廻り廻つて、辛じて平均を得たるものなりしに、今は各地の支店より、通貨の有餘不足の通告が、中央に來る時は、一電を以て直ちに之を平均し、其の融通の速なるは、二君も之を想像するに難からざるべし、(但し以上は人民の貯金預込み、引出し、爲替に就て之を云ふ)一國一銀行の仕組は、實に手數を省き、盈虚平均の速なる等、其の利便、勝げて數ふ可からず

「左らば、此際地方に赴くには、如何なる鐵道線如何なる會社のもの便利なるや

「イヤ、鐵道とても、我が社會は一切公有なり、貴國などの如く各社が斷れ〳〵の線路にて營業し居るの類に非ず、此の一國一鐵道の便は又非常なるものなり、舊時の如く、各線を人民の私業とすれば人民は先づ最も利益ある線路のみ選んで架設の免許を執らさるを得ず、然る時は其線路は非常に利益あらむも、利益少なき線路は何人も之を建設するものなし、故に全國各地に十分の發達は爲し得られざるなり、我國の如く一國の各線を一手に握る時は、甲線より生ずる非常の利益を以て乙線の損失を償ひ、全線の上にて其の利益を平均し得るが故に、薄利なりとも大抵の土地には、之を建設し得る譯なり

茲に於て、余等兩人は、尙ほ主人より種々の心得を聞き、旅裝を整へ、明日は地方に向て出立と定め、各々別れて寢に就けり

偖て、翌日、汽車にて旅行せしに、旅客の夥しき、驛吏、驛夫、車掌などの親切にして敏捷なるには敬服せり、是より、余等が目擊せし各地田野の狀況を概說せむに

我々は、最も視察に便なりと考へたる地に降り、近傍の視察に其日を暮せしが、要するに、田地、畑地、共に耕作の區域、極めて廣大にして、我國などの如く、僅か一畝、二畝、若しくは半段毎に皆な持主ありて箱庭様なる小區劃のものとは實に雲泥の相違あり、又種子の選び宜しき歟、地味を相すること當れる歟、或は肥料の行屆きし歟、全體の穀作、如何にも見事にて、又農夫の耕し居るを見るに大抵は馬耕牛耕の大農具を用ゐ、其勞力を省き居ること著しく、

又牛馬とも皆な選しき種にて、各村の最寄々々に組合を以て之を集め牧し居れり、農家が戸毎に必ず畜ひ居るは雞、豚、にて、其種類は、非常に能く選びたるものと見え、何れも見事なり

殊に注目すべきは、村々の農家の疎密の配置が、其當を得たるに在て、田畑少なき地には戸口をにし、多き土地には之を密にせり、又家屋の構造も、一様に揃うて堅固なり

山地に踏入り、樹木伐採の有様を見しに、十分の資本を下せしと見え、河出しなどの手配も皆な大仕掛にて頗る整頓せり

植林には最も注意せしと見え、四五十年以來の樹林は何れも能く行届き、苟も植樹に可なる山なれば伐されし儘なるは一箇處もなし、何れの山も皆な森々として樹林を冠せり、凡そ我々の巡歷して眼光の及ぶ所、何事も羨しからざるものなし、と云へる一語にて評し盡すべし

我々は尚ほ十分に巡覧したく思ひしが、他の事柄に尚ほ研究を要する廉多ければ、一先づ此日は歸宅せり

……………………………………

……………………………………

「御主人、何れの地方を見るも、敬服の外なし、農、林、業は如何なる仕組なりや

「イヤ、耕地山林、一切を買上げて國有となせし後は、農業は他に比すれば、思ひの外に手數なく、簡易に生産力を增加せり、先づ買上げたる土地は、舊持主の小區劃を撤去し、大農具を用ゐ勞力を省きて耕し得べき程の大區域に改めたるに過ぎず、而て農夫の家族の多少に依り、三軒又は五軒を組合とし、（但し此組合は、成るべく人數の少なきを主義とし、若し一人にして爲し得らるゝものは、一人に止め、共同し得べき限りの最少數を以て組合となし）各々其區劃を受持たしむ、斯くせざれば怠惰の者を生ずる恐ありしが故なり、又其組合にては、内輪にて互に監督し、業を休みし者は收穫分配の節に其休みたるだけを引去り、又朝、耕しに出で、暮に、家に歸る時等にも皆な内輪の申合せ内規ありて、互に勤怠を監督するの仕組あれども、夫等は煩はしければ說かず

舊時に於て、農界富實の發達を妨げしは、小資本の自作人、小作人等が薄資にして、十分の肥料を用ゐ得ざりしに在り、然るに、今は一村の組合を以て、農務省より各々肥料を借受け、又必要なる農具を借受け、之を年賦又は、出來秋に返納する等の制を設けしため、農家は夫等の心配なく、十分の力を竭すを得たり

又前にも說きし如く、舊時の小作料は米何俵金幾何と定めずして、只出來高の割合を以て規定せしに、今は卽ち然らず、公債利子に相當するだけを、農務省に納入すれば、其餘の嵩高は總て己に歸するが故に收益の增加せしことは意外なり

又、舊邦故國に於ける、戸口の增殖は、頗る不規則なる者にて、田畑多き地に、思ひの外、戸口の疎なるあり、田畑少なく地勢迫りたる場所に、意外に戸口の密なるあり、密なる場所は人あれども土地少なく、地價のみ非常に高まりて生産力は之に應ぜず、故に若し耕地の廣狹に應じて、全國農家の疎密を適宜に分配するを得ば、國の生産力は非常に增加すべきに、農家自身の力には限りあり、容易に甲地より乙地に家を移すこと能はずして、空しく其儘にて打過ぐること諸國　新殖民地を除くの外）皆然らざるはなし、然るに我國の新組織の後は、農務省の世話にて、此の戸口の平均分配を漸々に行ひしが故に、五十年の今日にては、耕地の廣狹と戸口の疎密は、殆んど其の釣合を得るに至れり、是れ亦大なる富貴の一原因なりき

又農隙に於ける農家の家族には、編物、縫繍、其

他自家にて爲し得らるゝ手工を教授し、一方には商務省にて其賣捌を引受くるの途を開きしより、農事以外の副業も、非常に發達を始めたり、又牛、馬、雞、豚、の種を研究し購求するは、無論農務省の職にて、良種を海外に求め之を各地に分配せしが故に、今にては見らるゝ如く繁殖せり、凡そ是等のことは、舊社會に在ても人々の氣付き居ることながら、當時の仕組にては、誰一人之を行ふを得ずして過ぎ來りしものが、今は悉く行はれ居れり

我國にては、農民の教育に殊に意を用ゐ、毎月一兩回は必ず各村に於て、學理に關する農學の教育演說を、農務省派出の教師になさしめ、其利害を研究するの途あり、斯の如きが故に、諸般の事相待て進み見らるゝが如き有樣となりしなり

商務省の豫算に據り、農務省より各地に通知せし割合に從ひ各地とも、本年は、米何石、大麥何石と產出を豫定し、農民が收穫する穀物、煙草、藺筵、麻、一切の物は收穫するに從ひ、之を最寄の農務省支廳に引渡し、金員を受取るを例とすれども、收穫までに餘儀なき事情あれば、支廳より前借を許し農民に融通を與ふることもあり、農產中にて貯藏し能はざる野菜、又は或る果物の類は、農家の私賣品とす、然れども柑橘、林檎、梨、桃、などの大產地に於ては、之を商品として商務省の手に取扱ふもあり

主人は又言葉を改め

「兩君の歸宅は早かりしが、何れの海濱に赴きて、我漁業の有樣を見られしか

「否な、之を見るに及ばざりき

「然らば、序に說明すべし、我國は環海の地勢にして、漁業も亦た大切の國產なり、輸出の金額も相應に大なり、此事業に於て、大仕掛の漁業は國家の資本を用ゐ、總て漁民の組合業とすること恰も他の事業に異ならず、舊時に、網方、網旦那、と稱へたる資本家の役目は、國家の手に移り、漁業は漁民の組合業に變じて、漁民中より取締を置き、又は農務省の都合にて監督者を置くもあり、概するに漁業は漁民自己の組合業として其資本は國家より貸與し、其利は之を組合に分ち漁民の富貴を助く

又小仕掛の漁業、例へば一艘の船にて營業する如き種類は、其資本を國家より貸付くるだけにて、之を私業とす、然れども日用の魚類を集賣する魚市場は、公業なり

沿海各地に於て、舊時は魚苗、貝苗、の保存甚だ不行屆なりしが、今は其制を嚴にするを得て、頗る利益あり、又沿海の山林を伐荒らせし爲め、海邊に蔭を失ひ、魚族の集りを減じて、不漁を起せし如き結果は、此の四五十年來漸次復舊して、魚族を集むるに至れり

一口に之を言へば、漁業民も舊時より其收入を增したるなり、大仕掛の漁業に資本の不足なきなり、國家の資本を用ゆるが爲めに、大仕掛の事をなす利益多きなり、尙ほ機會を得て我國漁業の實地を見られよ

今や兩君は、我國農、工、商業の大略を了せしならむ、此時に於て、嘗て田美野君の提出せられし疑問を解釋するの機熟せりと考ふ、同君は曩に予に向ひ、社會主義には人々各個、競爭の勵みなかるべしと問へり

前にも語りし如く、我工場の勞力者と雖も其技倆に應じて賃錢に等級あり、故に各人が技倆を磨き、成るべく多くの給料を得んと競ふの勵みは、舊社會と何の異なることなきに、加ふるに今は工場の利益を間接直接に受け得るが故に一層の勵みを增せり

農民には公債の六朱利子以外の產出を、己に歸せしむるの勵みあり、肥料農具に差支なく、土地の廣狹と戶口疎密の分配と、其當を得たる上は、今日、一日の勞は、昔時、一日半の勞よ

りも、其得る所を増したるの勵みあり
又漁民も同様、以前は網主、網旦那に歸したる利益も今は已等に分配するの勵みあり、然れば、農、漁、工の三業ともに、其の勵ましの、昔に少なくして今に多き、亦多言を俟たず
「如何にも各人個々の勵みが昔に優るの理は了解せり、然れども、开は只人民の日常從事する職業の上の勵みに止るのみ、余の疑問は他の點に在り、抑も社會に於て新工業を工夫し、又は新事物を發明し新組織を案出する等の利益は莫大のものにて是等は皆な隨意競爭の爲めに續々世上に生じ來る譯なるに、貴國にては、農、工、商務三省の事務員の外は之を工夫する者なきが如し、其事務員等が如何に之を工夫すればとて、迚も我社會などの如く、資本家人々自個の利益上より鵜の目鷹の目にて、隙間なく之れに注意し居るが如きには及ばざるべし、此點は如何
「貴問は如何にも、尤千萬なり、然れども、我が新社會に於て豈に之に應ずる仕組なくして叶ふべきや、抑も我國には農、工、商の三省に最も大切なる一局部ありて之を創案局と稱し、局中を機械、藥劑、發見、組織、の四科に分ち、苟も[illegible]き案を始め、其見込を立つる者あ、之を創案局に具申せしめ、之を試驗し之を實行し、果して社會に便なるものは、直ちに年金を與ふる仕組なり
例せば、今一の機械、器具を發明せし者あらむに、其圖案を具へ之を創案局に具申する時は、委員の檢査を經て、其實益ありや否やを評議し、又其果して新案とすべき性質なりや否やを判定し、若し施行し得べき新案と決すれば、直ちに試驗局に於て其雛形を作り、之を試驗するを例とす、而て實際に用ゐ、果して利益あるに於ては、其人に向て舊時の專賣特許權より得べき程なる相當の利益を年金として賞與す、此賞與の大なる者は其年額十萬以上のものあり、小なるは、百圓五十圓のものもあり
醫藥用、化學用、藥品類の創案は、藥劑科に屬し、諸鑛物の發見は、發見科に屬し、工場商店其他百種の組織に於ける新工夫は、組織科に屬す
若し創案局評議員が、不用と決議せしものにして、本人が不服なる時は、之を私製し之を販賣するの自由を與ふ、時としては斯かる者もありて、或工場に其使用を適當と認むるに至れば創案局にて更に評議を加へ、其賞金を定む、故に實利あるものを落第せしむるは、創案局に於て非常なる不面目、且つ譴責を受くべきが故に、同局にては極めて其審査を愼重にす
又夥しきは、發見科の創案なり、各地より金、銀鑛、銅鑛、石炭礦の發見を申請するもの絶ゆる事なし、其の良質良層を發見せし人は非常なる年金を受くる者あり、又諸商店の組織等の如きも時として適宜の場所を申請せる者あり、其仕組の改良を論ずる者あり、聊かなる改良にても聊かなる年金を受くるの望あるが故に人皆競うて意を用ゆ　我國に於て少しく、餘裕ある人士の苦心は、常に諸物の創案にあり、若し之を能くすれば、獨り世上の利益のみならず自身にも大なる利益、大なる名譽あるが故に、各人競うて意を創案に盡さゞるものなし
又織物、染物、其他器具調度類の製作には、工務支廳にて衆多の意匠家を雇入れ、彼等をして之を創案せしむ、而て其の賣行好きものには、特別の賞與を與ふ、是等の細事には皆な夫れ夫れ奬勵の仕組あり
「兩君、舊社會に於ては如何、一事一物を創案する者あれば、先づ資本家を見出すに苦み、偶々之を見出せば、其利益を分ち與へざるを得ず、又此事業を實地に起すに及んでは、他の事業と衝突して例の競爭をなし、互に死活を爭ひ、力を費したる極度に於て、一方を倒し一方を起す、其

一旦勝敗なる爭ひ、倒るゝ者の不幸は如何にぞや、故に舊社會の隨意競爭を目して我國の理財家は之を『インダストリアル、コムペシーション』と稱し、今の仕組を目して之を『インテレクチュアル、コムペシーション』と稱す、舊者は、實際に於て一方に敗者を作るの後に於て行はれ、今者は舊式の工場を變更してなるべく其世用をなさしむるを得（間ま舊物の不用に屬する事もあれども大抵は多少の模樣變へにて濟む者多し、諸事業の持主は、國家一手なるが故に此便宜は大なり）

兩君、我社會も競爭なきに非ず、只競爭の方法を斯の如く改善せしのみ、故に無益の苦痛者を生ぜしめずして新事物を利用すること速かなり

我國に於て、此創案局を設けしは實に非常なる良案にして、若し此仕組なかりせば、貴客の心配の如く、新事物の生出を遲徐ならしむるの弊ありしならん

予の如きも、先年某地の地形の便を察し、工場を設くべきの創案を申請して、遂に其地に設くることとなり、之れが爲めに今尙ほ五百圓餘の年金を受領し居れり、我が國人が創案に熱心なる一例を云はゞ、予が家に召使、兩君の見らゝ彼の下男が、兩三年前に、其村の或地に橋を架くるの便利なるを創案し、年金を要求して、落第し、大失望を爲せしことあり

余等覺えず失笑す

第七回　新社會に於ける人民一般の生活

「先日より、兩君が余の物語を聽かるゝ態度を察するに、兩君の胸中には、尙ほ舊社會の隨意競爭主義を常に捨てかぬるの未練あるに似たり、是れ余が論駁の不十分に因るとは雖も、畢竟は諸君の胸に、先入、主となり、執着の念、強きの致す所にて、其の謬見を根底より一掃するにあらざれば、新社會の利益を理會し盡さゞるの恐あり、因ては今簡單に兩君の爲め、舊社會に於ける隨意競爭の假面を引剝ぎ之を赤裸として其の醜惡なる相貌を遠慮なく露呈し、兩君をして愛想をつかさしめむ、今六七歲の幼兒と、二十五六歲の筋骨逞しき丁男とを一場に放ち、兩者をして相爭はしめ、之を隨意競爭と云うて可ならむか

「否な

一夫れ知識は、各人の成立に必要なる要素なり、然るに舊社會にては、教育を受け得べき有樣に生れ來りし仕合せ者もあり、又生れ落ちて生活さへ覺束なく、教育を得能はざる不仕合せの者もあり、此の無教育者と教育者とは、恰も幼兒と丁男との如し、然るに之を放て相鬪はしめ、之を目して隨意競爭と云ふべき歟、又資本は事業界に於ける競爭の利器なり、然るに舊社會にては、生れながらにして資本を擁するの幸を得たる者もあり、資本はおろか、生活さへ爲し得ざる不幸の有樣に生れたる者もあり、一方は資本の武器を擁し、一方は赤手にて躍出づ、之を放て鬪はしめ之を目して隨意競爭と云ふべき歟、又幸にして資本に近づき得べき有樣に在る者あり、到底資本を得られざる有樣に在る者あり、然るに兩者を放て鬪はしめ、之を隨意競爭と目すべき歟、舊社會に謂ゆる隨意競爭なる者の本體眞相を無遠慮に露呈すれば、兩君、實に此の如し、尙ほ是をしも、眞の隨意競爭と謂ふ可き歟、若し眞に隨意競爭を爲さしめむと欲せば、雙方の教育を一樣ならしめ、雙方の資本を一樣ならしめ、雙方が資本を得べき有樣を一樣ならしめて、而て後始めて之を眞の隨意競爭と云はんのみ、今我が新社會を見られよ、後にも說く如く、相當の程度迄は各人の教育皆な一樣なり、社會の資本は共同にして一個人の私

有にあらず、而て如何なる事物も之を發明する者あれば、直ちに之を試驗し之を實行し得るの仕組を設く、斯の如くにして後、人々始めて天賦の技倆を競ひ、互に相優らむことを勵むべし、是れ則ち人々の有様を一齊ならしめて而て後競爭せしむるものなり、若し世に隨意競爭なるものありとせば、之を眞の隨意競爭と云ふ、斯く說明しても尙ほ兩君は舊社會の隨意競爭を以て眞正無垢のものとするか

是に至ては、余等兩人も、覺えず低頭して、唯だ「然り〳〵」と挨拶せり

「舊社會に謂ゆる、隨意競爭の眞相を、無遠慮に暴露すれば、實に斯の通りなるが、又た隨意競爭に伴うて舊社會に行はれたる一の本義あり、之を『隨意契約』と稱す、是の主義が隨意競爭と並び行はるゝこと、恰も暹羅の孖生者の如く、夫の舊社會にて、强者の勝ち弱者の敗るゝ、貧富の偏倚する、皆な是れ人々各個の『隨意契約』の結果なりと唱ふ

然れども、其の眞相を窮むれば、亦た夫の隨意競爭なるものに同じ、試に問はむ、一方は大軍を以て孤城を圍み、圍中に在る者は、糧盡き弓折れ、一旦の命を全うするが爲めに、最後の場合、已むを得ず、圍兵に對して、不利の契約を取結ぶ、之を目して、隨意契約と云ふべき歟

「否な

「然らば、荒野に於て、過ちて深穽に陷り、助を呼ぶ者あらむに、一人あり之に趣く、之を救ふが爲めに、繩を下し、梯子を架するも、僅か二三時間の勞に過ぎざるに、人の不幸に乘じて、『我が爲めに十日間の仕事を約束せば、我之を救出さむ』と言はむに、窮苦者は其の要求の大なるを憎むとも、已むを得ざるの場合なれば、彼に對して十日の勞力を與ふることを約すべし、之を目して隨意契約と云ふべき歟、如何

「否な

「然り、何人も爾か答ふるの外なかるべし、兩君、舊社會の有樣は如何、玆に人あり、職を求めて得ること能はず、饑餓に瀕するに當ては、三度の食事を二度に減ずるの賃銀にても、人に助を求めざるべからず、此時に當り、勢の已むを得ざる爲め、纔に二度の食事を爲すだけの賃錢を甘んじて、以て人と之を契約する者あらば如何、之を目して隨意契約と云ふべき歟、其の表面は如何にも隨意契約なり、其の裏面は脅迫の契約なり、其人の窮乏は、我が之を作りしにはあらねども、其の窮乏に在るを利して、其の賃錢を値切り倒すが如きは、唯是れ形を變じたる强迫契約のみ、安くにか隨意契約の實ある、兩君、舊社會に於ける契約は、皆な之に類するもの多きなり

凡そ契約なるものは、雙方互に望む所ありて、之を交換するが爲めに生ずるに相違なし、故に已れに在ては賤しく、彼に在ては尊きものあり、兩々之を交換するは、社會の利益なること勿論なれども、已むを得ざるの勢より、泣く〳〵取結びたるが如き契約は、皆な其の本質眞性にはあらぬぞかし

今迄說きし如く、又後にも說く如く、新社會にては、各人の生活の狀勢が、窮乏の極度に在る者なきが故に、其間に行はるゝ隨意契約は、亦た是れ眞の隨意契約たるを得るなり

兩君、若し異議あらば、余は敢て說明の勞を吝まず、果して心中より、眞實に了解せられしや如何

「如何にも、此上は異議を容るべき地なし、顧みて我國のことを思へば、實に慚愧に堪へず

「偖て、農工業に從事する我が新社會の人民が、其の職業上、舊社會よりも利益多くして、又其の勵ましの大なることは、既に之を略說せり、尙ほ一般の仕組に於て舊社會に優る所のもの數種を說明せむに

第一に、新社會には、勞力者に對し其の集配を司る事務所ありて、全國に氣脈を通ず、甲地に職工農民其他雇人の不足ありて、乙地に其供給の餘ある時は、直ちに之を通知して、其の不足を補ひ、其の餘れるを他に移し、全國各地の人手を平均し、其の盈虛多少を平均す、是等は新社會に於ては、造作もなき仕組にして、利益も多き事ながら、舊社會に在ては、此の仕組なき爲め、常に各地に無職業者を生じ、人民に非常の苦痛を與へたり、一口に言へば舊社會とても、甲地に人手不足して、乙地に餘裕あれば、一方の賃銀騰貴し、一方の賃銀低落するが故に、乙地より甲地に趣くこと隨意なるべく見ゆれども、實際はなか〳〵、左る容易のものにあらず、其日の糊口にさへ差支ふる人民が、如何にして旅費を得べきや、如何にして容易に之を聞出し得べきや、其耳に入り、其の旅費を作る迄には、少なくとも二三箇月を要すべし、其間の苦痛は如何ぞや、「需要供給は之を平均す』と、理窟より言へば譯もなきことながら、實際にては、餘程に迂曲し、時日を經て後、始めて盈虛の平均を得るに至る、是れ舊社會の通弊なりき

第二に、新社會には、疾病に對し國家保險の制あり、勞力者より毎月賃銀中より五錢乃至十錢の掛金をなし、雇方の工場よりも同額の掛金をなし、國家よりも同額の補助掛金をなし、全國を通じて一大仕組とし、三日以上病氣の者には、幾分の食費を給し、又藥價診察料を給す

又負傷保險の仕組あり、全國の各工場を通じて、雇人一人に付き、工場費の中より積立金をなし、工場の爲め不慮の怪我をなせし者には、其の手當を給し、不具となりし者には養育料を給す

以上の如き仕組あるが故に、人民は職に就き、業を求むること容易にして、雇はれ口無きに苦しむ者なく、病みて食を得ず、醫藥にさへ苦しむ者なく、不幸の災害に罹り苦痛を訴ふる者もなし、且つ新社會には養老の仕組あり、七十以上の老齢者には、國家より扶助料を與ふ、貴國の明治三十一年に於ける統計の如く、我國にても、七十歳以上の老人は一百三十餘萬人に過ぎず、國費を以て之を給するも、左程の骨折を覺えざるが故に、此事には別に人民自身の掛金積立金を要することとなし

我國、人民一般の生活程度を說明すれば、我國人は、生活上にて之を三類に分つを得べし、其の一類は國家より受くる公債の利子と貯金の利子とにて餘裕ある生活をなし得る者、其の二類は半ば公債の利子貯金に賴り、半ば自己の給料を以て生活する者、其の三類は自己の勞賃を以て生活する者（但し第三類の民も、新社會となりしより既に五十年、稍や幾分の貯蓄をなし、貯金利子を以て勞賃の外に收入を得る者を增加し來れりとす

前にも說く如く、我が國家が、第一に買上げしは土地山林にて、其の次に買上げしは、各製造所なり、商品の買上は最後に行はれたり、故に初年に於て、人民の居宅家屋は、尚ほ多く私有に屬したり、然るに五十年來、社會に必要なる土地家屋をば漸次に買上げ更に新たなる貸家を建築し、出來得るだけ低價にて貸付くるの制に改めしが故に、次第に私有の土地家屋を減じ、今にては見らるゝ如く、市街の九分通りは、皆な公有に歸し居れり、又地方も、耕地の廣狹に依て、戶口の疏密を分配せし等の爲めに、農家も漸々と公有に歸せしもの多く、且つ情願に依り買上を願出るものを買取りしが故に、都鄙とも殆ど公有のみとなれり、故に此の首府にて、現今まで家屋宅地を私有し居るは、皆な舊社會の時の屈指の資產家のみにて、今や中流の人士

は皆な公宅を好むに至れり、是れ私宅は税重くして（別莊などは居宅より重きを例とす）一家經濟の上より打算し、公宅を好む者を增加すればなり

故に、生活第一類の人の資産は、家宅、公債證書、預金、及び家内の什寶とす、第二類なる中流人士の資産は、公債證書、預金、家内の什器調度なり、第三類も稍や同じ、故に我が社會に於ける一個人の資産と云へば、此の種類の外に、他の財産なし

余が此の住宅も、亦た公有にて、舊社會に比すれば、家賃も頗る廉なり、兩君、第三類の人々の公宅の最寄には、多く共同の賄所あり、其の小なる者も、三四十軒の家族を引受け、其の大なるものは、百軒以上を引受くるもありて、孰れも皆な公業に屬す、是等の賄所は、各人の住宅より往來するに便なる場處に設けられ、依賴人は三食ともに賄所に趣くものとす、但し自賄も隨意なれども、經濟上に於て、大賄所の方が廉價にして品物宜しきが故に、三類の人民は、自賄の者極めて少し、但し二類の人民に至ては、其の三四割は自賄の者多し、余の如きも、元と永く賄所の方に加入し居たりしが、最早や老體にて、食事場の往來に煩しかるべしとて、子供等の勸めに依り、見らるゝ如く今は自賄なり、又夫の一類の資産家に至ては無論自賄なり

此の都府にて、中等迄に位する諸處の料理屋は、多く公業に屬し、其の最上等贅澤なるものは、一二私業なるもあり、凡そ我が社會の仕組に於ては、何事をも、強て公業に移すにあらず、然れども私業のものは、營業者が、其間に相應なる利益を收めざるを得ずして、何事も高價なるが故に、公業に對して、毎に負けがちとなる、是れが爲め自然私業者を減ずる譯にて、舶來小間物店の如きは、改革後も、海外より安く仕入れて、私業を開く者なきにあらざりしが、到底公業の廉價なるに及ばず、孰れも永續せしものなし、凡て斯く私業を壓する程に廉價ならざれば、諸般の事物を公業となすの益なきなり

諸君も、町々にて見らるゝ如く、今も尙ほ私業に屬し居るものは、斬髮店、骨董屋、新聞屋、等の類に過ぎず、（但し印刷工場は公業なり）又公業鋪店に雇はるゝこともあり、雇はれぬこともありて、營業し得べき業體のものも多々あり、例せば醫者の如き、畫工、彫刻師、の如き則ち是れなり

兩君も、歸國迄に必ず一度は、此の首府の大賄所に到り見られよ、實に斯程愉快なる場處はあらず、近處近邊の家族が、一堂に趣き集り、互に談笑しつゝ食事をなし、子供は子供同士、大人は大人同士、食後には思ひ／＼の世間話、若しくは身の上話、舊社會の如く職を求めて得ざる者もなく、病んで醫藥を得ざる者なく、老齡に至れば養老給あり、不慮の災害には保險料あり、娯樂は求めて得ざるなし、此世の中に何の不平かあらむ、唯だ職業を勵み技術を磨き、尙ほ善きが上にも安樂の種を蒔かむとするのみ、彼等の集まる所は眞に一大家族の如し、其の賑かなること、其の面白さうなること、我々などには述べ盡し難し、新社會に生育せし人々は是の樂みを當然と心得、世の中は他國も皆な斯く樂しきものと思居る樣子なれども、一たび舊社會を經來りし我身などより見渡せば、實に斯くも世の中は、今昔の違ひあるものかと思ふのみ

人間の娯樂も、一人室内にて私に樂むべきものは甚だ少なく、大抵は人と與にすべき種類多きが故に、我國の娯樂は成るべく之を公共ならしめ、無代價に近き程の廉なる見料にて、社會を娯ましむるの仕組、頗る發達し、兩君の見らるゝ如く、出來得る限り處々に公園を設け、處々

に公館を造り、其内には名工の書圖、彫刻、又は古代名工の作品を並べ列ね、人民の目を娯ましめ、心を喜ばしむる場處を多くす、且つ市内の寄席の如きも、多くは公營に屬し、俳優、音樂師、諸藝人、等も皆な相應の給料を國家より受居れり、又自治制に巧みなる各地の都市にては、懸賞して、芝居の脚本を募り、又諸藝人を仕立つるなどの、贅澤をなすものあり

一口に之を言へば、一切の美術、書圖、彫刻より、音樂、演劇、輕業、手品、の類に至るまで、其妙を極むるものは、社會の公費にて相應の給料を得ざるなく、人民は殆ど無料に均しき見料にて、之を見物するを得べし、故に見らるゝ如く、我が國都の建物、彫刻、其他美術に屬するものは、蓋し世界に冠たるべし、夫の雅典の盛時はいざ知らず、今日にて都府の美麗なること、社會一般の和樂なること、諸事發達せること、よも、我國の如きはあらざるべし、又社會一般に和氣溢れ、人民の氣象、雍々愉々たること、我國の如きはあらざるべし、若し其實を知らむと欲せば、我が現社會を舊社會と比較せられよ、我が國人が農、工、商、業の生産上にて現實の大利益を受け居るの幸は、之を措き、社會一般の人々が[illegible]和[illegible]ること、是れ亦た一種の大幸福なり

舊社會を回顧すれば私業を營む人民の同業者は、何れも商賣敵ならざるはなく、彼の店が榮ゆれば我が店は衰ふるとて、他の繁昌は我が頭痛となり、苟も同業者なれば、相妬の念を暗に胸中に持たざる者なく、買人賣人の間柄は瞞しても敲かれても、金さへ握れば此方のもの、と云へる意氣込にて、瞞し得るだけ人を瞞し、附込み得るだけ人に附込み、不良品をも賣付けて逃げむとし、高價品をも附下げて取らむとし、世の中は鵜の目鷹の目、人の弱味を附睨ひ、其の弱りて斃れむとする頃を見濟まし、之に附入るを商賣の祕訣と公言し、利益のあることは、親子、兄弟、親類も、己れ一人駈して實行せむと工むもあり、世上一般表面の交際には、互に笑顏をなすものの、其實は胸中にて鎬を削る、又た雇主は被雇人の給金を値切り得るだけ値切り倒して契約せんとし、被雇人は亦た之に對して勞力を偸むの横着をなし、人々皆な當面には諛辭を述べ背面には舌を吐く、互に利益を、はむと、手を廻し力を盡す、是等の行態を一口に評すれば、舊社會は到る處、陥穽を以て充滿され、一歩を踏出すも油斷はならぬ、と言ふの外なし、而て其の原因種子を尋ぬれば、皆な是れ百事を各人の私業として、隨意競爭をなさしむるより生ず、然るに新社會の如く、土地資本が社會の公業に歸したる日には、如何にして斯る罪惡を行ふの必要ありや、新社會には此の罪惡を行ふの種子消滅せり、從て又た此の罪惡を行ふの必要なし、舊社會の人、必ずしも不善人にあらず、唯其の組織が彼等を驅て不善人たらしめ、彼等に迫て惡人たらしむるのみ、斯く申す小生とても、壯時には一たびは混濁なる舊社會の中に生存せし者なるが故に、其の世味をば十分に嘗め居れり、今日之を子供等に物語るも、彼等は唯だ其愚を笑ふのみ、確と耳にも留めざる樣子なり、却て兩君の如く、其身が舊社會に在らるゝ人々には、的切の感じも起り得べし

新社會となりて、殊に幸福なるは、第一類に屬する富豪家の人々なり、舊社會の晩年に趣くに從ひ、彼等に對する一般の人氣は、次第に險惡と爲り、其の邸内門前には、時として「ダイナマイト」「破裂彈など爆發するの恐ありしが、今に於ては何の心配もなく、自己の事業の損得盛衰を氣遣ふ必要もなく、此の愉々たる和氣充滿の社會に、何不自由なく、娯樂のみに世を送るは、實に仕合の人々と云ふべし

一貴國の富豪家は、實に羨し、定めて新社會の慈善事業などには、大金を喜捨し居らるゝならむ

「イヤ、新社會には、個人に對して殆んど慈善をなすの地なし、試に我が社會の有樣を瞑目沈思せられよ、如何なる處に不規則なる個人の救助を受くるの必要なる者ありや、饑うれば食あり、寒ければ衣あり、老いれば養あり、幼なれば教育あり、貴客は我國の何人に向て、如何なる救助を與へむと欲せらるゝ歟、如何にも第三類の人民中には、今も尙ほ時として、意外の不幸なる者なきにあらねど、そは皆な社會の手當ありて、不規則なる一個人の惠を煩はすの要なきなり、故に之を區別すれば、舊社會の慈善は人の窮を救ふに在り、新社會の慈善は人を樂ましむるより外なし、何となれば今は窮を救ふの地なければなり、是を以て我が富豪家の喜捨金は、寧ろ人を樂ましむる事柄に用ゐらる、或は美術館、圖書館、を設け、又は遊園を造り、人を樂ましむるの類に過ぎず

昔支那にて、鄭の子產が執政の時、途上にて寒中に水を渉らむとする者を見て氣の毒に思ひ我が車輿にて之を渡さしめしを聞き、孔子は之を非難し、子產の處置は仁惠とは言ふべきも、政治家には似合しからず、眞に政を爲すならば、寒中には橋梁の架設あるべきものなり、其の國人を悉く己れの乘輿にて渡し得らるべきものならむや」と評せし如く、我國にて、最大仁惠とするは社會の仕組を以て、世に貧苦の人なからしむるに在り、社會の組織を不完全の儘に打捨て置き、不規則なる慈惠を施すを喜ぶは是れ小惠なり、我國の志士仁人は、個人の小惠を行ふこと社會の仕組を改善するの大利に如かざるを知るが故に、此の新組織をも成就し得たるものなり

第八回　新社會に於ける法律、教育

「新社會の初年に、我々の驚きたるは、訴訟沙汰の皆無となりしことなり、舊時は今日の貴國と同樣、人民の訴訟は年々に增加し、貴國にて明治三十年、一ケ年に區裁判所の受理せる件數が、十二萬五千二百餘件に上りし如くなりしが、今は殆んど皆無なり、回顧すれば、舊社會の爭訟罪惡の種子は、皆な社會組織の不完全に起因せるものにて、百事個人の私業に屬すればこそ、萬種の事業は亂絲の纏れたるが如く錯雜し、相互の取組上より種々樣々の行違ひを生じ、訴訟裁判は絕ゆることなかりしに、今や人民の資產とては、公債證書、貯金、家、の外になく、全社會の事業が擧げて公業に歸したる日には、何處に爭訟行違ひの種子あるべきや、我が新社會は爭訟犯罪の種子たりし百事を皆無に歸せしめたるが故に、訴訟犯罪も亦た皆無に歸したるのみ、故に新社會に變じたる當座は、全國數百個所の裁判所の、閑暇無事なること夥しく、法官は日々出勤するも、新聞を見、煙草を喫し、欠伸をなすの外、殆ど爲すべきの事務なかりし、是に於てか忽ち裁判所の減數となり、法官を他の業務に轉ぜしむることとなり、今にては全國司訟の入費は殆んど舊時の十分一にも上らず

又舊社會に於ける幾千種の法律、條例は、舊時に於てこそ必要なりしのみ、今は鑛業條例も不用なり、會社法も不用なり、商法も不用なり、兩君、試に瞑目沈思せられよ、貴國の如く煩はしき條例法律にして、新社會に何の必要あるものかある、唯だ民法中の親族篇の如きものこそ入用ならんも、其他は有りとて無きにも同じ、我新社會の法律の簡易なること今更ら說明の要なかるべし

殊に可笑しきは「商賣」と云へる言葉が我國にて

不用となりしこと是れなり、我が社會にては、工務省、農務省にて生産せし物品を、商務省にて人民に分配するだけのことにて海外貿易の外は何の駈引もなし、昔時は『商賣』と云へば、非常の技術を要し、巧妙無比なる職業の如く言はれしものが、今は奇もなく妙もなく、製造せし物品に取扱の入費を掛け之を買人に引渡すに止まる、故に新社會にては『商賣』と云へる語は消滅して唯だ『受渡し』と云ふ語に變じたり、今の若者共に舊時は商賣と云ふ頗る面倒なるものありしと言ひ聞かすれば、唯、膽を潰すのみ、何條例とか何々法とか、千萬種の條例規則を發布しても、倘ほ其の取締に苦みたる舊時を思へば、人智の淺ましき、今更ら歎息の外なし

今の社會に存するものは、刑法訴訟法なれども、夫すら入用は甚だ稀なり、何となれば犯罪の生ずる原因は、民の衣食を得ざるに在り、今の社會には、人皆な衣食に苦まず、從て罪惡を犯すの要もなし、然れども爾君、世の犯罪者なるものは、必ずしも衣食の足らざるのみにあらず、其の多くは酒色の爲めに、得る所より費す所を增し、遂に惡事を働くに至る、必ずしも生活に苦まざれば犯罪せずとは言ひ難し、然れども初犯にて放免となるや、人皆な之と齒せず、假令過を悔い行を改めんとするも、衣食を得るに苦み、再犯以後は遂に眞の惡人となる、若し初犯のみにて、放免の後衣食を得るに苦まずんば、犯罪者の數は非常に減ずべきものなり、舊社會に於ける犯罪者は、多く再犯以上の者ならざるなし、然るに今の社會にては、不幸なる犯罪者も、初犯放免の後は直ちに之を收容して、衣食を得せしめ、職業を與ふ、是れ刑事に於ても犯罪者の數の大に昔より減ぜし所以なり

又、我が社會にて強竊盜を爲す者ありとも、其贓品を賣捌くの地なし、何となれば、商賣は人民の私業に屬せず、彼等は其の贓品を賣捌くべき處なければなり、故に金錢の外は盜むも益なく強竊盜は自然と減ず

人心を、善道に移らしめんことを勸むるも、必要の事ながら、大に罪惡を絶つの道は罪惡を行ふを得ざらしむる樣に外面より之を取締るに在り、人の內心を改良せしが故に罪惡を減少し得たる歟、將た罪惡を行はしめざる外部の仕組整備して人事が進歩せし歟、と問はゞ、其の手近きものは外部の仕組を整ふるに在り、我が社會の如き外部の仕組稍や完全に赴きたるが故に舊時に比すれば、殆ど、犯罪者なきを得るのみ、罪惡の本源たる組織を改めずして、唯內心の改善を勸むるものは、善事には相違なきも、其效は頗る遲し、苟も人の內心を改めしめむと欲するものは、亦た此の社會の組織を完全ならしむるに其力を致さゞるべからず

概言すれば我が新社會には、司法省の事務、舊時に比し、頗る閑散なり、商法は皆無なり、民事の爭も舊に比すれば殆ど之れ無し、唯時として稀に刑法に觸るゝ者あるのみ、舊時の法律百分の九十九までは新社會に不用と爲らざるものなし

……………………

「ハ、ア爾君、今日は諸學校を見て還られしとな、其の說明ですか

教育は我か國人が最も重きを置く所の一事なり、其の仕組を概說すれば、尋常小學あり高等小學校あり、夫より二派に分れ、一は職業學校にて止まり、一は中學となり高等學校となり、專門、大學に至て終る、其の仕組を明知せしむる爲め一寸其の系統を略記すべし

とて主人が紙筆を取出し、記したる所のもの左表の如し

尋常小學―高等小學―┬―職業學校
　　　　　　　　　└―中學―┬―豫科高等中學―醫科大學
　　　　　　　　　　　　　└―高等中學―┬―理科大學
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├―工科大學
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　├―文科大學
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└―美術大學

―以上を普及程度とす

右表中の横線以上に在る學業は何人にも修業せしむる普及教育の程度なり

全國の大小各種の學校、悉く皆な無教料にて如何なる者にも必ず横線以上の學業を修めしむ、而て其の高等小學を終りたるときは、之を分類して二種とし、專門大學迄進み得べき俊才をば、優等生より選拔して中學に移し、是より漸次專門大學に進ましむ、又其の學藝尋常の者は職業學校に入らしめ、農、工、諸職業に必要の學藝を習熟せしむ

生れて七歳を、就學年齡とし、尋常小學に三年、高等小學に三年、職業學校に三年を費すを通則とす、而て高等小學より、分れて中學に入る者は、尚ほ進んで專門各科の大學を卒業するものとす

此法を行ふが故に、全國の人民中より俊才を網羅し、之を最高等の大學迄進めしむるを得べし、夫の舊社會に於て、資產家の子弟のみ、獨り高等學校に入るを得るが如きの比にあらざるなり

然れども、資力ある子弟は、高等小學卒業の後も、情願に依り教料を納めて中學に移り專門大學迄進むことを得せしむ

凡そ教育は、其の教科と教法次第にて、大なる損得を生ずるは勿論なるが故に、我國にては極めて教法教科に注意す、同じく尋常小學なりとも、我國の尋常小學の生徒と失禮ながら貴國に於ける同樣の生徒とは、其力に大なる優劣あるやも知るべからず、又我が職業學校は極めて切實に、農工各種の事業に必要なる科目を教ふるが故に、其の學校も數多の種類に分たれたり、齊しく工業と稱するも、鐵工あり、紡績あり、又鐵工の中にても、船舶あり、機械あり、各々其の好みに從て之を教ふ、尋常、高等、小學併せて六年の後、尚ほ三年を職業學校に費し、十六歳よりは職業に就くも隨意なり

又工藝に關する高等學校あり、是等は多く技師技手を出すの用に供す、其他、諸藝に亦た各高等學校あり、教育の方針を述ぶれば專ら實用に適切なるものを先きにし、文飾に近きものを後にす、數學、物理、外國語學、の如きは最も重きを置く學科にして、文學に屬し文飾となるべき類は生徒の餘業として之を授くるに過ぎず

道德倫理の如きは　單純に其の本義を教ふるのみ、歷史上の類例などを多く引用するを爲さず、何となれば、舊社會の歷史上の事例などは、幾んど新社會に不必要なるのみならず、新社會の子弟に向て之を說くも、唯左る混濁なる時世ありしかと怪み疑ふのみにて、身を益すること少ければなり、其狀は、恰も貴國維新後の教育に於て、封建時代の舊事を教ふるの必要なきに同じ、故に歷史科は眞に生徒の餘業に屬し、小說を讀むと一般、唯だ過去の事歷を知るの用に供するに止まる

舊社會の複雜なる時代に、必要なりし法律政治も簡易なる新社會には不必要の者多くして、單に他國の政刑を察し、既往の事歷を尋ぬる、溫故の一學科と變化し、實際には入用なしと稱せらるゝに至れり、然れども尚ほ之を專門大學の中に存し置けり

普及教育程度の生徒は、學校にて一日に、朝飯晝飯の二食を給す、其以上高等の生徒に對しては、一切の衣食を給與す、故に彼等は其業を專修するの外、學資の窮乏を苦しみ、心力を餘事に惱ますが如き憂なし

斯る仕組なるが故に、我國教育費の莫大なるは一國の歳出中にて第一に位し、陸海軍費の二倍に上れり、然れども教育の組織を改めし以來、今に五十年間　農工生産力の増進實に意外なりき、チョト、勞力者が、荷車より一個の品物を揚卸しするにも、重力又は槓杆の物理を知居るが故に、力を致すこと少く、效を收むること多し、況んや少しく入組みたる仕事に於ては、皆な心中に物理數理を明らめ居るが故に、舊時に比すれば非常に敏捷にして無益の力を費さず、

凡そ一國の富實を謀る者は、先づ第一に資本の缺乏を憂ひ、第二には職工の不熟練を患ふ、然るに今や資本は一國共通にして不足の歎なし唯急にすべきものは生産に從ふ人民の働き方の巧拙に在るのみ、故に此點に於て、教育其法を得れば、彼等の熟練を増し、一國の生産を増すも、亦た理數の當然にて、兩君之を怪しむことなかるべし

我國の有識者は此理を明にし、世人も亦た目前に其の效能を見るが故に、教育に向て巨費を拋つも、一人の非難者あることなし、唯だ、今日に於て、注意に注意を加ふるは、教法教科の如何に在り、如何に大金を費すも、其の方法宜しきを失すれば、遂に空費に歸すべければなり

…………………………………………

一兩君、舊社會より新社會に移りし當座、我々の驚きしこと數多ありしが、其の一は舊社會にて商業に、無駄の人手を大に費し居りたるを發見せし事なり、此の一事は實に何人にも案外なりき、此の首府は、凡そ二百萬の人口を有し、其の戸數も四十萬に近く、舊時に於ては少くも其の半數、二十萬戸、口數、百萬人は皆な大小の鋪店を有し、相應に貨物を賣買し居りたるに、新組織を用ゐて、物品の授受が商務省の一手に歸せしや、非常に不用なる明手を生じたり、我が首府は八百八街と稱す、今日にて賣店の數は二三町に一個所、場所に依りては二町に一個所を設くるもあれば、其の總數は五百に過ぎず、大掛なる店、五百あれば何の差支もなく、全都の人々買物に一切不便不都合なくして、之に用ゆる雇人も一店に平均五十人なれば、其數は二萬五千人にて不足なく、如何に多く見積るも三萬人にて事足れり、之を思へば、舊時に於て、二十萬戸の鋪店が、貨物を列し、表面は都合好く暮し居りたる如く見えしも、其實は大半は　命辛々、纔に維持し居りしならむ、其の大店は相應に賣れ行きありたらんも、小店は大抵、込みとなり居たるもの多かりしならむ、新組織となりて此の驚くべき不用な人手は、皆な夫々の業務を與へしが、商業に明手の非常に生ぜしは、此の首府のみならず、他の各市も同樣にて、之を積算すれば、改革後に此の不用と爲りし勞力を、他の有益なる事業に用ゐ、世の生産を増したることも亦た夥し

一御主人、自動車又は大馬車にて、牛肉　青物などを街上に賣り巡り居る者あるが、彼等は尙ほ私なりや

一否な、公業なり、彼業の如きも亦た、商務省支廳に屬する雇人にて、都人士の自賄者多き市街に向て、朝暮、其の最寄を賣歩かしむるものなり

又諸荷物配達の如きも、總て公業にて、荷物車の製が一樣に、至便利なるも、其の公業に屬するが爲めにて　舊時の如く人民の私業ならむには迚も運送業者や、荷車人足等が調へ得べき物にあらず、運送の如きも全都府を一手にて大仕掛に爲すが故に其の便利も甚し

「御主人、新社會に變じて、尙ほ其外に、意外なることはなかりしか

一イヤ數々ありしが、如何にも我々の案外なりしは、新社會の初年に、鐵道收入の大に減少せ

しことなり、工務省にても大に訝りしが、能く能く取調ぶれば、舊時に於て鐵道を利用し、各地に往來せし者の三分一、若くは四分の二は、皆是れ商用なりしと見ゆ、或は會社用或は貨物の買出しに、或は賣掛けの取立に、或は相場の聞合せに、商用もて東西に奔走し居たるものと見ゆ、然るに物品の集配が公業に歸せし後は、全國貨物の集配は、其の主務省と支廳との間に一封の書面にて用を辨じ、別に多數の人を往復せしむる必要なきが故に、玆に乘客の數は忽ち俄に減少せし者と見ゆ、今にては無造作なる物品受渡しの事務さへ、舊時は之を商業と名け、無益なる人手を費し、無益なる往復を費し居りしなり

故に今日の鐵道乘客は、遠方の親族の訪問、又は遊覽、又は勞力者を甲乙各地の間に分配する、等のことに過ぎずして、昔時の如く、事務用の人は皆無なり、併し新社會の事物の發達と共に、貨物運輸高の增加せしことは、舊時に數倍す、又五十年來人民の富が增加するに從ひ、事業以外の乘客の數は漸次に上進して、今は遙に舊社會に過せり、然れども當初乘客の減少には皆な案外の思ひをなさゞる者なかりき

第九回　新社會に於ける政治、歳出入

「我が政治の組織ですか

突然と、我が官制組織を說明せば、異樣の感を起されん、先づ古今の政治の目的に、大なる沿革あるを知るを要す

何れの國にても、太古蒙昧、部落割據の時代は、之を政治沿革の世紀中に、加ふること能はず、假に之を草昧紀と稱せむ、而て其の政治らしく見えたる時代より以來、政治の目的に大なる變遷を生じ來れり

單に世の平和のみを目的とし、各人の暴力を禁じ、世の安寧を保つのみにて、其の裏面に於ける人民の營業には隨意を許さず、政府又は諸侯が其の愛する者に各種の特權を與へ、商賣事業に專有の株を許し、何商賣は誰某の外は營むを許さず、利益ある事業は其の愛する者共に受負はしめ、一般の隨意競爭を禁じたる時代は久し、此の政紀を名けて第一紀と云ふ

又安寧平和を保つことは、第一紀と同樣なれども、其の愛好する者に特權獨占を許さずして、何人にも働き次第、十分に營業せしめ、毫も干涉せざるの政紀を目して、之を第二紀とす、今の歐米諸國、及び貴國の如き、皆な此の第二紀に屬するものなり、但し此の政紀に於ける人民の營業は、第一紀に比すれば、大に優る所ありと雖も、其の裏面には倘ほ不公平なる事實ありて、種々の害惡を釀成し、混亂不調和の有樣にるは、余が嘗て說く所の如し

隨意競爭の有樣を改善して、不調子なる勝敗優劣なからしめ、社會一般に調子整ひ、一國の政治は人民の家事にして、人民の家事と國家と相密着拘合するものを目して之を第三紀と云ふ、政治の目的は是に至て極まる

故に我國の學者は第一紀の平和を目して之を偏私の平和(ピース、ウイッス、プレベレージ)とし第二紀の平和を目して、之を不調子の和(オンハーモニオース ピース)とし、第三紀の平和を目して、之を調子整ひたる平和(ハーモニカル、ピース)と云ふ

孰れの政治も其の目的は、太平無事の平和を得るに相違なきも、其の裏面には斯く三樣の不同あり、今の歐米各國の政治を理義(アブストラクト)とすれば我國の政治は現實(マテリアル)なり、彼れを法治(ポリチカル)とすれば我れは家事(ドメスチック)なり

故に、新社會に在ては、人民の家事則ち是れ政治

なり。一國の政治は則ち是れ人民の家事にて、人民の家事の外に政治あることなく、政治の外に人民の家事あることなし、是を政治の極致とす、苟も我が政治組織及び官制を知らむと欲せば、先づ此の本義を心得居らざるべからず

我國の政治組織は、中央政府と自治體の市町村あるのみにて、其外には郡役所なく縣廳なし、中央政府には宮內省、外務省、陸軍省、海軍省、司法省、文部省、農務省、工務省、商務省、遞信省、大藏省、內務省の十二省ありて、各省直轄の支廳を各地に設け、中央直管の仕組なること、恰も貴國の裁判所及び陸海軍が中央より各地の支廳を直管するが如し、中央主務省の直轄支廳は全國各地に跨り、他の官廳に關係せず、其の事務を行ふ、故に縣廳郡役所の必要あることなし

徵稅にも、舊社會の如く國稅、地方稅などの區別なし、一切之を中央政府に取立つ、例せば奢侈品稅を徵收するには、商務省は其の商店にて賣捌く品物に稅を掛け、其の賣上高より之を引去て、大藏省に引渡し、所得稅は國立銀行より仕拂ふ公債利子の中より、引去て之を徵收し、私有貯金に對しては其の預金利子を拂渡す時に之を引去る、故に我國の徵稅には、何の手數も面倒もなし、夫の舊社會に於ける如く、無數の徵稅吏を用ゐ、煩雜なる法律を布き、ヤレ犯則者、ソレ違法者とて、繁忙なるが如きことなし、社會の大本一たび改まるときは、百般の事物、皆な斯く簡易に行はれ得べきものなり、故に我が大藏省は極めて閑暇にて、諸稅を商務省より受取るに過ぎざるのみ

徵稅の仕組、斯く簡易にして、地方稅も無く郡費等もなし、一言すれば、我國は一國一稅なり、但し市町村は自治體なるが故に其地限りの事務の爲めに、幾分の徵稅を行ふ、但し舊時の如く人民の私業なきを以て、其の事務極て少なく、其の費用亦た少なし

一國一稅なるが故に、昔時の縣廳郡役所の事務は概ね中央政府の管轄に移りたり、其の一例を道路に取らば、國道は勿論、縣道、郡道、と稱すべきものも今は總て中央政府にて取扱ふなり、單に里道と稱すべき、各村內の小道路のみ、之を市町村に受持たしむ、治水費の如きも亦た同じ、昔時は國庫に仰ぐ所の補助少なくして重に其縣限りの力を用ゐしが爲め、不幸にして大河、巨川、ある縣民は皆な其の重稅に苦しみ、一縣內にて河川に利害なき、山地の人民迄も、是が爲め徵稅の苦みを免れず、一國に平均すれば左程にもなき治水費も、一縣に負擔すれば堪へ難き場合ありしに、今は一國の力を平均して、之を處置するが故に、斯る苦痛あることなし、一縣の人民の不心得にて生ぜしにもあらざる天生の厄介物（治水費）すらも、尙ほ其の縣內の獨力を以て專ら之を處理せざるべからざりしは、實に舊時の不公平なりしが、新社會にては絕て此事なし

我國にて、斯く一國一稅の法を用ゐるものは、上述せる理由の外に、或る一種の事情あるに因る、夫は他なし、土地が人民の私有たりし時は、各地の富豪家は其地を離るゝ能はざるが故に、其處に居住したれども、全國の土地が公有に歸し、彼等の資產は公債證書と變ぜし以來、彼等は最早や其の土地に何の緣故もなし、故に便利ある都邑に遷き、氣樂の生活をなすを樂しむの人情より、次第々々に資產家は都會の地に移り、舊時の如く富者が各地に居住するの仕組は茲に破れたり、而て我國の稅法は下にも述ぶる如く、重に所得稅、奢侈品稅、なるが故に、納稅者は多く都會に在りて、地方に尠なし、今日地方に生活するは唯だ耕作從事の農民のみにして、其の所得稅は甚だ多からず、然るに舊時の如く事務を地方に分ち、之を各地の銘々世帶と

なす時は其力の勝ふる能はざる不便あり、是れ亦た全國平均の行政上の止む可らざる所以なり

前にも述べし如く、我が稅法は簡易にして、其の稅源は二種に止まる、第一類は所得稅（公債利子の所得、及び給金、年金、其他の收益に課する者）にて、第二類は酒、煙草、及び絹織物、其他奢侈品に屬する間接稅なり、則ち第一類は直稅にして、第二類は間稅なり、而て皆な商務省の手にて取立て得べし、則ち所得稅は、國立銀行にて利子仕拂の時に之を差引き、第二類の稅は、販賣店の賣上高にて之を差引く

「然らば大藏省には、何の事務ありや

「全國の政費一體の割振り、公債の元利拂ひ、一國資本の盈虛等、尙ほ重要なる事務あり、但し舊時の如く些細煩雜の事柄なきのみ

「今迄聞く所は、總て是れ行政事務に屬す、我々が最先きに聽きたく思ふは、立法、行政、兩部の權衡、及び其の組織に在り

「然り、こは、最も大切の問題なれども、先づ上述のことを理會されざる間は、頗る說明に苦しむが故に之を後にせり

先づ我國は、立憲帝政なり、諸君は共和國ならんなどと誤解せらるゝこともあらむも、ソハ、大いなる謬見なり、若し帝王にして、常に人民の意見を容れ、民の心は是れ君の心、君の心は是れ民の心たらば、全社會の尊敬を受くる者、豈に帝王に越ゆる者あらむや、況や我國は開闢以來君民の間、誠に一家の如く、帝室は宗家にして、自餘人民は其の分家なるが如き過去の歷史を有し、其の親愛の情は他國に越えたり、且つ實際に於て、歷代の帝王、皆な聖明ならざるはなく、國人の之を仰ぐこと亦た慈父の如し、我が新組織を行ふと、立憲帝政と何の障はる所も無かりき

扨て、我國の立法組織は、直議制と代議制とを兼ねたる者なり、歐米の立憲國、又は貴國の如きは、是れ代議制なり、未だ直議制の緒を開かず

「直議とは、如何にも耳新しき名稱なり、如何なる字を用ゆべき歟

「直は直ちに、議は議すると記すべく、則ち人民自ら事を議するのものを言ふ、夫の代人を選び之を議せしむるの意義に反す

扨て、我が議員は、國內七十餘州より一名を選擧す、其數僅に七十餘人なり、其の任期を五ケ年とす、議院は每年開閉するものにあらずして、常設のものなり、卽ち五ケ年間は永續する常設の立法院と看て可なり、政府より議院に審議を求むる一國の重事に至ては、議院は之を討論するに止め、其決を採らずして此の議題を全國の町村に下付す、然るときは町村の人民は、議院に於る議員の討論を熟考し、各自に可否の投票をなし、町村より之を纏めたるものを議院に送付し、其の多數を以て之を決す、今日の如く電信電話の便ある世には之を行ふこと容易なり、故に我國の各町村には、人民の討論に備ふるが爲め、必ず三四名の政治顧問員なるものあり、議院より全國人民に議決を求むるときは、顧問員等先づ集つて之を討議し、其の意見を町村の人民に示す、人民は之を熟考せし後各自可否の投票をなす、各町村にて其の投票數を纏め、之を議院に轉送し、玆に國民の議決を採る

故に大事は則ち、國民の直議直決にして、其の以下の事は議院の決を用ゆ、是れ則ち直議制、代議制を兼ねるの仕組なり

議院の議決は、之を國帝に上奏せし上、若し當を誤まると思召されたるときは、之を再議に付するの慣習あり、（直議制なるが故に解散再選等の事を爲す能はず）再議の上、國民の意向、尙ほ前議の如くなるときは、帝室は玆に之を取捨せらる、又國帝より再議に付せられし時は人

民も熟考して其の意見を變ずる場合無きにあらず

各州より推選する議員は、必ずしも其州在籍の者に限らざれども、苟も其州より推選されたる者は、州民に對して其地の利害を代表する德義上の責任あり、今や全國一政區にして、萬事不都合なしと雖も、尙ほ時として一州一道の利害を主張するの必要なる場合なきにあらず、是れ其州を代表せしむる所以なり、尤も各地の利害を爭ふとて舊時の如きにはあらず、舊時にて一地方に何等かの事業を引着けむとするは、本と百事人民の私業なるが故のみ、其の大事業興起すれば、其邊の地價も上り、其地の商品も賣れ行くべく、因て以て私利を得むとするに外ならず、然るに、今や一地に一大事業を起す時は、工務省は他地の不急なる勞力を移して之に從事せしむるが故に、必ずしも其地の勞力に騰貴を來さず、又商品とても之を賣捌くは商務省の手に在るが故に、別に人民の私利となるべきことなく、土地は公有なり地價の騰貴を喜ぶの持主もなし、故に一地方の利害を主張するとて、舊社會の如き、私心私利の發動せるものにはあらず、然れども、尙ほ一國作業の力には限りあるに、之を甲地に先きにし、之を乙地に後にする等は、各地の間に、利害の爭ひなきにあらず、是れ議員の選出を各州に基けたる所以なり

「然らば貴國は、一院の制なりや

「然り、但し行政部に顧問府なるものあり、社會に經歷ある者、又は大資産家、又は貴族中より、其の議員を敕任し、之を行政顧問の府となす、是れ昔時の貴族院を、立法部より行政部に移したるものなり

「貴國にも、尙ほ貴族ありや

「然り、社會に功勞ある者は、何等かの表彰を與へざるべからず、或は金員を賞し、或は記念章を贈り、或は其の待遇を厚くす、是れ亦た一種の要具なり、故に我國の貴族には、百事に於て普通人民の權利を侵害するの特權は一もこれあることなしと雖も、尙ほ帝室の待遇に於ては、之を貴族に列し、其の功勞を表彰す、是れ亦た新社會の組織に差支あることなし

「貴國にては、一切の農産を農務省にて取扱ひ、一切の製造商業を工、商、務省にて取扱ふ、其の人員を用ゆるの夥しき、其の事務の多き、是等の長官に任ずる者は、或は非常なる威權を振ひ、不都合のことを行ふの弊なきや

「否な、左る心配あることなし、舊社會にて、各省の長官、其他高等官吏の威權ある者が、時として其の權勢を利用し、收賄沙汰などの起りしは、畢竟、萬般の事業が人民の私有たりしが故なり、我が私業に利益を得むと欲すればこそ、鐵道敷設の願にも袖下の進物あり、鑛山の開掘にも許可の遲速に進物ありしにあらずや、然るに百般の事業が公有に變ぜし上は、何人が賄賂を持來るべきや、賄賂を持來る人なきが故に、賄賂を貪るの人もなきのみ

「併し、重要の地位に多數の人を採用することは、其の權内に在るとすれば、其の採用に付て、賄賂の沙汰もあるべき筈なり

「否な、大抵の事業事務に從事すべき人の採用法は、多く皆な試驗にて、私を其間に插むべき餘地なし、加ふるに農、工、商業の取扱員は、下級より事務に熟練して、次第に勤上げたる者多く、或は時として非常の手腕家を要する事業事務には、臨時に採用の場合ありと雖も、我が社會には、輿論の力、大なるが故に、其過を摘發せらるゝの恐あるを以て、聊なる利益(採用を願ふ賄賂は、高の知れたる者なり)を得むとて、其の名譽を傷くるを恐はざるが如き長官なし、又議院には大なる彈劾の權力を有し、其の多數にて彈劾せられたる官吏は、帝室

と雖も亦た遺慮あらせらるゝを例とす、故に不評判の者あれば、帝室は輿論の攻撃に先ち常に之を任免せらる、故に貴客の心配せらるゝ如きことは、殆ど皆無なり

尙ほ我が政治の運用の一般を示さむが爲めに、余が記憶する本年度の歳入歳出の略表を示すべしとて、傍の紙片に記し、示したるもの、左の如し

三十五年度總豫算表

歳入

項目	金額
一 貨物取扱益金	六〇〇,〇〇〇,〇〇〇円
一 酒、及び莨收入	一三五,〇〇〇,〇〇〇
一 絹物、及び奢侈品收入	一五五,〇〇〇,〇〇〇
一 所得税	三〇〇,〇〇〇,〇〇〇
内譯 公債利子所得の分	二二五,〇〇〇,〇〇〇
内譯 相續税、貯金、給料の分	七五,〇〇〇,〇〇〇
一 海外貿易益金	三〇,〇〇〇,〇〇〇
一 海關税	二〇,〇〇〇,〇〇〇
一 雜收（鐵道、電氣、郵便、電話、其他、在上）	一五,〇〇〇,〇〇〇
合計	一,五四五,〇〇〇,〇〇〇

此表の第一項に、貨物取扱益金とあるは、舊社會の事物を買上げたる時に發行せる公債の利子拂に充つる爲め、商務省が物品の價に懸けたる益金なり、則ち、百五十億圓に對する六朱の利息九億圓を、產出品の賣上の價に割掛けたるものなり、又第三項は、絹物及び奢侈品の價に懸けたる收入なり

我が輸出貿易品の賣高は二億圓にて、之に一割五分の平均益金を收めしもの、即ち第五項の收入金なり

其他は説明の要なかるべし

歳出

項目	金額
一 公債一百五十億圓に對する利子拂	九〇〇,〇〇〇,〇〇〇円
一 宮内省	一〇,〇〇〇,〇〇〇
一 外務省	五,〇〇〇,〇〇〇
一 陸軍省	三八,〇〇〇,〇〇〇
一 海軍省	二五,〇〇〇,〇〇〇
一 文部省	一,〇〇〇,〇〇〇
一 農務省	二,〇〇〇,〇〇〇
一 工務省	三,〇〇〇,〇〇〇
一 商務省	二,〇〇〇,〇〇〇
一 遞信省	五〇〇,〇〇〇
一 大藏省	一,〇〇〇,〇〇〇
一 内務省	六,五〇〇,〇〇〇
一 司法省	一,五〇〇,〇〇〇
一 議院	一,〇〇〇,〇〇〇
一 顧問府其他行政諸衙	一,五〇〇,〇〇〇
計	九九八,〇〇〇,〇〇〇
一 陸軍臨時費	二〇,〇〇〇,〇〇〇
一 海軍臨時費	七〇,〇〇〇,〇〇〇
一 教育費	三四五,〇〇〇,〇〇〇
一 營舍及諸敎具費	一三,〇〇〇,〇〇〇
一 養老費及保險費	三三,〇〇〇,〇〇〇
一 創案試驗費	五,〇〇〇,〇〇〇
一 治水費	二五,〇〇〇,〇〇〇
一 道路橋梁費	三六,〇〇〇,〇〇〇
計	五四七,〇〇〇,〇〇〇
大計	一,五四五,〇〇〇,〇〇〇
歳入	一,五四五,〇〇〇,〇〇〇
歳出	一,五四五,〇〇〇,〇〇〇

凡そ、農、工、商務省にて、事業に用ゆる人員は、各々其の工場賣店等の取扱費と見做すが故に、三省の豫算に上らず、又遞信省の工事は、工務省にて取扱ひ、電信電話の事務は商務省にて取扱ふが故に、遞信省は是等事業の監督をなすに止まり、其の豫算費用は單に監督官吏の給料旅費等に過ぎずと知るべし、總て事業費は收支差引き其の益金のみを示す、故に此表なる各省の經費は、純粹なる行政事務に止まると知るべし

治水費、及び道路、橋梁費、の斯く多額なるは、舊時の地方事務を總て中央政府に引受けたるに

因る、今假に貴國の縣別に例すれば、治水費は四十府縣に平均して一縣、六十萬圓餘に當る、又道路橋梁費は一縣、九十萬圓餘に當るべし、先に我が官制を說きし時、大藏省の閑暇となりしを述べしが、內務省の如きも亦た然り、今は唯だ警察、衛生、土木、戶籍、寺社、を管轄するに止まるのみ、該省の經費の過半は、全國の警察事務費と知るべし

舊社會の府縣廳、郡役所、の事務の重なりしは敎育、治水、道路、堤防、橋梁、衛生、戶籍、等の外に出でず、然るに今や是等の事務は總て中央政府の直轄に歸し、教習は文部省に移り、養育は商務省に移り、道路、橋梁、堤防は工務省に、衛生、戶籍、は內務省に移りたる上は、府縣廳、郡役所、には何の爲すべき事務も無きなり

貴國明治三十四年度の統計を見しことありしが、府縣の收稅は四千七百六十萬餘圓、全國市町村の收稅は四千四百七十萬餘圓、合計九千二百三十萬餘圓なりき、我が舊社會の諸費も亦た稍や同額なりしが、其の費額は此の歲出表に記載する通り、皆な中央政府の支出と爲り居れり、又前にも述べし如く、町村會のみは自治體を存すれども、其の仕事は大に昔時と趣を異にせり

とて、主人は書齋に赴き、今日の新聞紙を持來り、「此の雜報を視られよ」とて、金尾氏に渡す、同氏は之を一讀するや、クス〳〵と失笑せし故、余は手早く請ひ得て、之を讀むに

新聞記事雜報の一項に

「昨日、郡部赤山町會にて、議員某氏より提議あり、近來本町の大賄所の食事の菜は、頗る不行屆にて、茄子、黃瓜の類のみを多く用ゐ、魚類、肉類は甚だ稀れなり、假令時節柄、不獵なるにもせよ、先月の如きも、筍、蕨、の如き品のみ多かりしは、甚だ不都合なるを以て、當地商務省支廳の賄長を彈劾すべし、とのことにて、全會一致可決せり、同村のみならず、當府內にても、近來の賄方は、稍や滋養物を缺くの傾きあり　其筋の人は注意あるべきものなり」

と讀み了り覺えず失笑せしに、老人は苦々しき顏色にて

「兩君は何を笑はるゝや、凡そ一國政治の本領は、社會人民の衣食住を滿足せしむるの外あることなし、舊社會にて、政治なるものを左も高尙らしく言做せしは、唯だ不完全複雜なる社會を治めむとて餘計なる骨折、無駄なる理窟、を並べたるに過ぎず、世間事物の眞容を露呈すれば、孰れも皆な我が村會の議事同樣のみ、抑も戰爭とは何物ぞや、露骨に云はゞ喧嘩のみ、大戰爭は大喧嘩のみ、關ケ原の大喧嘩に家が勝利を得しと言へば下品に聞ゆるを關ケ原の戰ひに云々と言へば、左も高尙らしく見ゆるのみ、一國の政治と云ふも、元と衣食の世話をなすに過ぎず、政府と云へば上品に聞ゆれども、其實は人民衣食の世話所なり、我が新社會にては、獨り村會のみならず、堂々たる一國の議院にてさへ、人民の衣食、賄費の高低は、其の議題に上り、國帝の御裁可を經る程のものなり、然れば、村會の此の議事が、何の可笑しきことかあらむ

と頗る不機嫌なるが故に、我々も唯「左樣左樣」と挨拶せり

…………………………

「兩君、我が歲出入表を一覽の上は　其の項目に付て、一二尙ほ說明を要することあり

「イヤ、御主人、其の說明を請ふ前に、チョト中言ながら、伺ひ置きたきことあり、貴國議院の直議、代議の仕組を說かれしが、選擧、被選

擧の資格を開くを忘れたり

一我國には、別に資格なるものなし、唯だ二十一歲以上の丁年の男子には、總て選擧、被選擧權、を有せしむるのみ、則ち「アデュールト、ソフレーヂ」なり

「納稅及び資産の多少には、一切關係なきや

「然り　曾て無し、抑も納稅を以て選擧權の資格となすは、其當を失するものにて、そは、唯だ立憲制治の論が專制獨裁の時代を破りし時の遺物のみ

凡そ我が社會は、丁年に達せし一個人を以て、一個數(ユニット)と看做し、何事も是より割出すを定則とす、苟も社會に生存する男子は、其の社會の一員たるが故に、何事にも發言權を有すべし、是れ何人と雖も爭ふべからざる事理なり、人或は、社會のことを行ふには其の入費を要す、故に入費を多く納むる者は、又多くの發言權を有すべし、と說く者ありしは、是れ往代の夢のみ、納稅の高を發言權の基礎とするは、甚だ謂れなきものたり、何となれば、一反の田地を有する者は社會より一反だけの小保護を受け、一里四方の田地を有する者は社會より一里四方だけの廣大なる保護を受く、其の保護を受くるは、即ち社會にそれだけ多くの手數を掛け居るものなれば、それだけ、多額の稅を納むるは當然のみ、無資産の一個人は、國家には一身保護の手數を煩はすに止り、一身の外に資産ある者は其の資産までの保護を累はさゞるを得ず、凡そ家屋にせよ、金錢にせよ、資産の形の如何を問はず、之を安全に享有するにはそれだけ國家の保護を受けざるべからず、其の保護を受くる分量を無資産の一個人に比すれば、頗る大なるにあらずや、勿論資産家にして幸に厄介を掛けざるものも、之れあるべしと雖も、ソハ、取除けの例にして、總ての社會は一樣に保護されて其惠を受くるものなるが故に、保護上の全體より言へば、資産多き者は多くの保護を受けながら、納稅多しとて多くの發言權を有すべき理ありや、若し無資産の一個人より言はば、社會の保護を受くべき高、少きが故に、それだけ納稅少きのみと主張すべし、資産家は資産相應に莫大の保護を受け、一個人より幾十倍の保護を受け居りながら、之に相當する稅を納むればとて、一個人より數倍の發言權を有するは、之を至當と云ふべき歟、我が社會にては、資産多き者は保護も亦大なる故に之に應ずるだけの納稅は至當の事とし、身體一個を以て一個發言權の基礎とす

唯だ、立憲の主義を以て、專制獨裁の弊を打破り、人民が國事に參政權を得むと盡力せし時代には、先づ苦情を唱へし者は納稅者なり、「我々は稅を納む、故に國事に發言權を有せざるべからず」との一本槍にて、人民は、遂に參政自治の權を得たるものなり、故に納稅を發言の基礎とするは　是れ專制獨裁の非理を破るの時世に於て必要なる口實にて、舊國には尙ほ昔時の遺傳物として、納稅を發言の基礎とするものなきにあらず、然れども見られよ、彼の國々も皆な年を逐うて、丁男投票に一歩々々を進めつゝあるにあらずや、納稅發言權基礎の說は、旭日に霜の融くるが如く、諸國に於て既に大半消滅し去りたるにあらずや、況や我が新社會をや

「然り〳〵、誠に貴諭の如し

……………………

「我が歲出入表に、公債百五十億圓とあり、今各項の小別を物語らむ

一　耕地、田畑、の買上費　五十億圓

則ち、山間の痩せたる畑地も、良好の水田も、打混じ、反、百圓の價格に當る、尤も上田は二三百圓のものもあり、然れども下畑は五十圓以下なるもあり、廣く全國に平均して、人民の

苦情なかりし價格は此の如し、貴國明治三十一年の統計の如く、當時我が田地は二百七十三萬四千町歩、畑地は二百二十五萬七千町歩、鹽田七千町歩合せて五百萬町歩、其の價右の如し

一　山林、原野、池沼、雜種地、買上價格　　十六億圓

右は一町歩、二百圓として、斯の如し、但し山林七百二十萬九千町歩、原野一百七十萬七千町歩、雜種地二萬町歩、合せて八百三十萬六千町歩、の價格とす

一　宅地買上價格　　六億圓

右は山村僻地の宅地迄、全國一切、貴國の如く三十八萬町歩の買上費にして、一坪平均五圓に當る、都會の地價は其の貴きもの、一坪、三四百圓なるもありと雖も、夫等は極めて狹き目貫の地處のみ、全國を平均して、此の相場に不服なかりき

一　家屋買上價格　　四十億圓

我が人口四千萬、戸數八百萬、一戸の買上費、五百圓に當る、然れども家屋は、當初一時に買上げたるにあらず、必要の地のみ買上げしが、追々に買上を出願する者多く、遂に今は九分通り買上げ、唯殘るものは、資産家の宅地別莊のみ、凡そ都會の戸數は限りある少數にて、全國の家屋の大數は、皆な地方に在り、加ふるに農民漁民の家屋は、一戸、百圓、五十圓位なるもの極めて多く、實際の買入費は、二十億に過ぎざりしが、舊を毀ち新を作り、成るべく舊家屋の材料の用ゐらるゝものは用ゐたるが故に、家屋新築の費用も減じたれども、尙ほ新築の爲めに二十億圓を費し、合計四十億と云へる巨額に上れり

一　製造工場、鐵道、鑛山、船舶等、固定資本に屬する一切の買上費　　二十億圓

之を前項の土地及家屋の買上高に比較せば、兩君或は其の少きを怪まるゝならむが、貴國の明治三十一年調を見るに、全國諸會社の總資本(固定資本のみならず流通資本迄を加へて)九億三千萬圓なるにあらずや、大製造は重に會社の手に在り、個人私業の資本は、とても會社の資本に及ぶべくもあらねども今假に個人營業のものを又其の倍數九億三千萬圓と見て、兩者を合するも尙ほ十八億圓に過ぎざるにあらずや、五十年前我國の工業が二十億圓にて國家に引受けられたるは、敢て少額にあらぬぞかし

一　貨物商品買上費　　八億圓

右は全國人民の商店、卸店、小賣店、及び製造原料、等の仕入れある品物を、一切國家に引受けたる高にて、其の貨物と引換に公債證書を付與せしもの斯の如し

兩君、世の進む程、製造力は增加するものにて、一國一年の製造高は、一年の入用高に超過し、每年多少の餘裕を生ずるものなり、此の年々の剩餘も、積累すれば知らず識らず大數に上るものにて、我が國家が個人の營業貨物を引受けたる時に於て、始めて之を知得たり、全國八百萬戸、一戸一年の消費高は、平均壹百圓より多からぬ割合にて、一年に賣上ぐべき貨物の高は八億圓内外なりしが、實際引受けたる貨物の總高は十八億圓なりき、即ち一年八億圓を消費するものとすれば、尙ほ一倍と二三割の餘裕あることを見出したり、故に每年八億圓の貨物を生じて八億圓を消費するものとするも、尙ほ社會には十億圓の蓄積せる諸貨物ある譯なり

一　特別新公債　　十億圓

是れ則ち蓄積貨物の價にして、後にも說く如く、我國は此の十億の物品を漸次少々づつ金に換ふるの工夫を求め、今日にては、貨物五億圓、貨幣五億圓を貯へ居るものなり、然れども之を公債の元金に支拂はずして、尙ほ國家に留存し置く

の大用は通貨の項に説くを見て知るべし

……………………………

「兩君は、我が議出中なる事業費の目に於て、教育費の三億萬圓には驚かるゝならむ、前にも述ぶる如く、我國の教育は眞の教育にて、之を教ふるのみならず、又之を養育するなり、故に其の費用の多きこと斯の如し、今三億萬圓の内譯を略説すべし

我國も貴國の如く、七歳より十五歳迄の兒童總計、男女合せて九百三萬七千餘人なり、右は國家より餐舍に於て一日に二食を給すべきものにて、其の食費は一切商務省にて取扱ひ、大仕掛に仕賄ふが故に、貴國などに比すれば、頗る廉價なるを得べしと雖も、尚ほ一人一日の食費二回分、八錢にして、假に一箇年を三十圓と見積るときは、九百餘萬人に對し、一年の費用

二億七千百十一萬圓

を要す、又貴國現今の小學教員は、公私諸學校の正員、雇員、合せて八萬人なれども、我國にては二十萬人を要す、其の給料一月一人、平均二十圓として

四千八百萬圓

となる、貴國にては高等學校以上の學生、僅に三四萬人の間に在れども、我國は殊に教育に意を用ゆるが故に、其數二十萬人に上る、右は一人に付き三食及び被服を給するものにて、一人一箇年の費用、平均百二十圓、此の總額

二千四百萬圓

を要す、又大學高等學校の教員一千人、一年一人平均二千圓の給料にて其の總高

二百萬圓

の入用あり、即ち合計

三億四千五百萬餘圓

となる

「然らば、七歳以上の男女は、其業に就く迄、貴國の父母は殆ど厄介なく、至極結構には思はるれども、凡そ世事には利弊相伴ふの常なり、多數の男女を産めば其の養育に骨折るの制裁あるが故に、諸人皆な夫々の心得をなし、自ら顧み自ら愼みてこそ、世間も都合好く調ひ居るなれ、若しも貴國の如くせば、無闇に子供を作り、社會は其弊に堪へざるの場合なきか、貴國には絶て是等の弊なき歟

「如何にも至當の氣付なり、余は兩君に説明するを忘れたり、我が社會にては、人々皆な社會の惠を受くるが故に、又社會の制裁を奉ぜざる能はず、故に是等のことに付き、一の制裁とも云ふべきは我國の法律にて、女子十九歳、男子二十一歳、以下にて結婚する者は、其の收入一箇月、三十圓以上なることを證明せざるべからず、男子にして此の收入ある者は、右年齢以下にても結婚自由なり、然らざるときは、男子は、十七歳より一人の賃錢一日最低度を五十錢と見積り、其の三分の一を、二十六歳迄積立てざるべからず、是等は皆な各工場各鋪店にて其の給金渡しの時に、之を引去り積立てしむるの制なり、故に男子は十箇年間の積立金、六朱利倍にて大凡そ九百八十餘圓、千圓近くを有し、女子は三百餘圓を所有する筈にて、是れ彼等が結婚後、其の育兒費に充つべきものとす、是等の制裁あるが故に、貴客の懸念せらるゝほどの弊なし

第十回　新社會に於ける通貨、事業、輸出入

「成る程、承れば承る程、貴國の新社會は萬事簡易にして、且つ整頓し、何事にも手數少なきは、驚嘆の外なし、主人の説かるゝ如く、農、工、商、業皆な國家の手に歸し居らば、貨幣などの必要もなく、唯だ國家の引換手形にて濟む譯なるべし、工場にて手形を職人に拂渡す

とし、職人は其手形を以て品物を買入るれば、手形は商務省の賣店より再び國家の手に歸し、世上にて別に通貨の必要なきが如し、其邊は如何、又國家の手形にて何事も障りなく通用するとせば、國家は如何なる事業を爲すも、自分が手形を發行して、之を行ふが故に、勝手次第に出來る譯にて、頗る羨しく思はる

「イヤ、假令、百事國家の手に在りとも、理財のことは自然の天則あるものにて、左る勝手次第のことの出來べきものに非ず、其の一例を擧げんに、世上一般の各事業とも、需要と供給との高は常に一定せしむべきものにて、一方に米四千萬石を作る者あれば、一方にそれだけを食ふ者あり、之を食ふには、それ相當の物品を産出し、其産物を以て米に換へざるべからず、故に世間の貨物は千樣萬態なりと雖も、商務省の目より見れば、一方の需要と一方の供給とは、キツシリと、出合ひ居るものにて、賣人と買人、製造と購買とが、悉く適合し居らざる時は、忽ち經濟界の不調子を生ず、一方には下駄百足を作り、一方には傘百本を作り、互に其價均しきものと假定め、又互に其の必要あるものと假定むれば、雙方の製造高にも、人手にも、有餘不足なくして茲に理財の調子を保ち居るに、若し故なくして、傘百十本を作り出さば、其十本だけは不用物となり、買人なき譯にて、詰り不調子を免れず、全國一年の所用高が、鐵具何萬圓、農産何萬圓、革具何萬圓、之に要する人手幾百萬人、鐵道に幾萬人、船舶に幾萬人と、人手の入用分配は悉く出合ひ居る仕組にして、更に大なる有餘不足はなき仕掛けなり、斯くすればこそ、世間に無駄物をも生ぜず、無駄骨をも折る者なき譯なり

然るに、今國家が卒然と思立ちて、鐵道を作り、二千萬圓の土工人夫を用ゆるとせんに、其の人手は何れの地より持來るべきか、年々一定して全國數千萬の人手は各々諸貨物の製造に、ソレ〳〵有餘不足なく計算し、算盤上より切詰め居るに、若し鐵道事業に用ゆべき土方を農業より取らば、それだけ耕作に人手の不足を見るべく、工場より取らばそれだけ製品に人手の不足を見るべく、忽ち生産界に需用供給の擾亂を生じ、茲に大なる不調子を來すべし、故に斯る事は爲して爲し得られざるにあらねども頗る不經濟なる結果を、世間に惹起すべき譯ならずや、故に勞力を役する手形の發行は我が手の物なりとて、國家も恣には之を用ゆること能はず、右は鐵道の一例ながら、其他も皆な斯の如し、但し或る既設の事業が其の製造高の幾割を増すが如きは、稍々成し易き場合あり、何となれば其使用する職工の既定の勞作時間を増し、其の割増の時間を以て幾分か餘計に製品を作るを得べければなり、然れども事業の種類に依ては、全く世の經濟を亂ること少なからず

我議院の大に意を用ひ、農、工、商、務三省の最も苦心するは、他國の豫算調製の時に於ける如く、各省が其の經費の分捕を競ふの難にあらずして、一國理財の調子を保ちつゝ生産力を増加し、且つ新事業を起さむと欲するに在り、凡そ經濟上のことは、我身に一て我物を取扱ふすら、其の天則に反し得られざることこそ畏けれ

又其外に、國家と雖も勝手に事業を爲し難き理由あり、雨君、今國家が鐵道の土工に、卒然として二千萬圓を仕拂ひしと假定めよ、其二千萬圓の手形は、土方職人が、長く懷中に持ち居るべからず、直ちに何品をか買入るゝならむ、然る時は世上の諸物品に對し、それだけ意外の需要を増す譯なり、本と一國の百貨は其需要供給の出合ふ程に切詰めて不用なく仕掛けあるに、俄に二千萬圓の品物が賣れ行かば、其の結果は如何、舊社會ならむには、ソレ景氣よしとて、物價騰り、商人製造家は思はぬ利益を得る

所なれども、我新社會にては需要の爲めに物品の値上を爲すにあらず、相當の價にて、物品を買人に引渡すことなる故に、其結果は或る品々の品切れとなり、早く先に買ひたる者は便を得て、遲るゝ者は買得ずと云ふに歸着すべし、左らばとて各工場の製造時間を増し、それだけの物品を作り出すとせむか、其の増高に仕拂ひたる工賃は、職人の手より又品物の増買をたすべく、結局何れの所にか賣品の品切れを見る譯なり

故に、卒然と事業を起すときは、第一、勞力に缺乏して、世間の調子を破り、第二に、需要を増加して、供給品の不足となり、非常なる不調子を惹起さざるを得ず

但し以上に說くは理論にて、國家と雖も勝手に理財の天則を破り得ずと云ふの例を、兩君に示すのみ、實際は又左る窮屈の者にあらずして、我が新社會には、一の仕組あり、世の需用供給の増減を護謨の伸縮する如く、巧に取扱ふの工夫あり、追て後に略說せむ

又、貴客の言の如く、百事政府の切手にて通用し、差支なしと雖も、此切手が粗造なるときは亦た僞造の弊なきに限らず、且つ諸物交換の標準を定むる爲めには、圓とか錢とか一定の名稱なかるべからず、故に我が新社會にても、矢張り精巧なる紙幣を用ゐ、手形のつもりにて之を通用せり、斯くせざれば物の價に目安なく、勞力の交換に不便なるを以てなり、故に舊時の紙幣は尙ほ流通せり

兩君、回顧すれば、舊社會の如く可笑しきものはなし、政府も人民も、金さへ有れば、忽ち事業に取掛るを常とし、需要供給の不調子の弊には、少しも頓着せず、一方には鐵道を起し、一方には築港をなし、公益とさへ言へば、金の有らむ限り遣ひ散らし、其方に引附くる勞力は、他方に於て國の生産を減じつゝあるに氣付かず、又其撒散したる金は物價を高め、不調子を起すをも問はず、假令其の事柄は如何に利益ある性質の者なればとて、世間の調子を破るものは、皆な世間に不利ならざるものなし、而て最も氣の毒なるは其不調子の間に儲けしとて喜び、損せしとて悲しむ、千萬種の人を生ずるの一事なり、今茲に鐵道を作り俄に三千萬圓も撒き散らすとせむに、此金を受取りし者の手より、市場に向て貨物の買入れと爲り、世間は大景氣とて諸物品は茲に騰貴すべし、偖て諸物品とも、一齊に時を同うして騰貴せば何人にも損得なき譯なり、傘屋の傘が一圓より一圓五十錢に騰りしとて、傘屋が買入るゝ品物が、亦た一圓五十錢に騰貴し居らば、何の喜ぶことかあらむ、若し世人が一夜睡りて、翌朝、眼を醒まし、世間の諸物價が皆な一齊に一圓五十錢に騰貴し居らば、賣る物の高まりし如く、買ふ物も亦た高く、物價の呼聲のみ變ぜしにて、其實は何人も身代を増したるにはあらず、然る處、實際は左樣にあらず、品物によりて騰貴するに遲速あり、需要早き物は速かに騰り、需要遲き物は之に後る。故に早く騰る品物を賣ひて、未だ騰貴せざる品物を買込む者は、即ち偶然に一圓に加へて五十錢の儲あり、氣の毒なるは之を買はれたる商人にて、我か品物の價は未だ騰らず、他品を買はむとすれば騰貴し居るが故に即ち五十錢の損失を受く、故に俄然たる需要増加の爲めに起りたる物價騰貴は、世の生産力を増すにもあらず、全社會に幸福を與ふるにもあらず、唯諸物價の騰貴に遲速の相違あるが爲めに、或者は不當の利を得、或者は不當の損を受くるのみ、舊社會より之を見れば、實に氣の毒と云ふの外なし

开は、言はでもよき舊社會の弊害のみ、扨て、予が前に說きし如くんば、國家は到底鐵道事業又は大土工など興し得られぬ譯にて、之を興せば何處にか不調子を生ずる譯ながら、ソコには、

我國にては又それ相應の仕組あり、本來生產に直接せざる治水堤防、又は臨時の事業に用ゆべき人手は、我國にては、必ず別に豫算を見込みありて、他の生產業以外の人手を年々五千萬圓內外は、必ず之に向け居れり、故に此の豫定せる人手を以て　常に是等の事業に用ゐ、甲の事業を本年度に起せば、乙の事業は來年度に起し、又其次は翌年になすと云へる如く、極めて順序能く事業を計畫し、一ヶ年度に、其の以上の事を爲さず、又不意に餘儀なき場合あれば、社會の最不急なる人手を繰合せて之に充つることとし、一般の需要供給をなるべく攪亂せしめざる樣に心懸く、故に國家の手形にて事業を起すは、隨意なりとて、決して一箇年內に過大の事業をなす事なし、是れ事業世界が、一國一統の仕組にして、百事需要供給の出合を知り得べきが故なり、舊社會には此便なし、人々銘々の見込次第に任せ、世間一體の需要供給を知る能はず、且つ髣髴と之を知る者ありとも、「人は、ともあれ、我こそは」と云へる心より、此の禁忌を犯すを免れず、概せば、世間に通貨、殖えたり、定めて景氣好くならむ、其極は物價騰らむ、我こそは、未だ物價の騰らざる前に、手早く事業をなさば、大儲あるべしとて、大急ぎに取掛る處、人智は概ね同じ、我が取掛るときは、人も取掛り、我こそ人に先だたんと焦れば、人亦た我に先だたんと焦る、窮極する處、辛じて其事業に著手し得たる時は、人も我も同樣に事業を起す始末と爲り、物價上りて建設費は豫算と喰違ひ、大怪我をなすに至る、舊社會の人々、決して皆な愚なるにはあらねども、如何せむ其仕組が、彼等を驅て、此の有樣に陷らしむるのみ

「貴國にては公債の利子、受取高にても、人民の手に一箇年九億餘圓を受取る譯なるが、貴國の通貨は幾許なりや

「稍や貴國に同じく、紙幣二億圓、外に引換準備とも名くべき正金も、一億圓ありて、入用ある人民國家の引換に應ず、二の通貨にては、不足なるが如く思はるべけれども、決して然らず、六億圓の利子は、毎月之を拂ひ出すが故に、一ヶ月に世間に落つる金高は大凡五千萬圓なり、而て少數なる富豪家の外は、大抵皆な日常の生活費に之を用ゆるが故に、直ちに買物をなし其金は一ヶ月を出でずして忽ち商務省の鋪店に吸收せらる、又人民の貯金する者は、之を國家の銀行に預込むべし、故に人民が使用すると、貯ふるとに論なく、今月に渡す五千萬圓は、今月中に國家の手に歸す、又利子六億圓の外、諸事業の雇人給料、職工賃錢の如きも巨額なれども、是等も皆な同樣、彼等が受取るや否や、再び銀行又は農商務の鋪店に歸入す、遊金も國家の手に在り、品物を買入るゝ金も國家の手に歸す、其流融の便利なること舊社會の比にあらず、且つ農、工、商業の仕入、仕拂は、各省の間にては、請取書にて之を辨じ、通貨を用ゆるの必要なし、故に通貨は二億圓にて、有餘あるも不足なし

「引換準備と言はれしが、貴國も亦た現金の必要ありや

「然り、必要あり、我が海外貿易は、輸出輸入、各々二億圓、不調子さへなければ、輸出入相當るものにて、二億の買入物あれば、又二億の賣物あり、取る金、渡す金、差引き茲に正金は不用となる譯ながら、時として輸出入一方の超過する場合あり、我が社會は調子整ひ居るが故に大抵は無暗に輸出入增加することなき譯ながら、時として海外の得意先より非常の註文入込み、輸出品の大賣れをなすことあり、さる場合には、輸出入差引き、茲に現金の入り來ることとあり、之に反すれば現金を支拂はざるを得ず、故に我銀行に貯へある正金は、輸出入

の差金だけの勘定を立つるの道具なること、猶ほ貴國の正貨準備の如し

「正金と、紙幣との間に、相場の差を生ずることなきか

「我國にては、銀行の正金準備は、紙幣に對して常に相場に高低あるの仕組なり、例せば輸出入不調子の爲めに輸入が一割勝ちとなり、二千萬圓の正金が國外に流出して、正金の在高が一億圓より八千萬圓に下れば、紙幣の引換には二割を下落せしむ、即ち正金は二割の價を高むるなり、然る時は商務省の店にて、舶來品は忽ち二割の相場を高め買入を減じ、又内地品は二割の相場を下落する理にて、外國商人は輸出品の買入に着手し、本國よりの註文亦た直ちに入込むを例とす、斯くして輸出増し、輸入減じ、二割の正金、再び國内に復歸したる時は、紙幣、正金の相場は平均す、又正金が増したる時は、紙幣の相場を上せて、内地品騰貴し、舶來品下落す、是が爲め輸入は勵まされて、正金次第に減じ、一億圓に至りて止む、我國にては斯く金楮の差を、其の盈虚に任せて、天然時々に高低せしむるが故に、正金は大に増減するの憂なし、減ずれば入り、増せば去る

國内に正金の[illegible]之を國内に引戻すには、他に一の方法あり、正金の減じたるだけ、通貨の高を減ずること是れなり、則ち正金二千萬圓を減ずれば、通貨の發行高を二千萬圓、減ずるなり、斯くしても、結局正金を引戻し得ざるにはあらねども、我國の第一法の如く、穩に且つ速に正金を引戻すこと能はざるの不利あり、何となれば、通貨を減ずれば、世間一般の貨物の需用供給に不調子を生ぜしめ、然る後にあらざれば舶來品の買入れを抑ふること能はざればなり、我國の方法に從へば、舶來品のみ先づ價上を爲すが故に、他の内地品には大なる影響なくして、直ちに正金を引戻し得るを以てなり、但し此法は國家の手形を正貨とし、正金をば副貨とする我國の如き者、獨り之を行ひ得べきのみ

兩君、實に海外貿易ほど、我國に厄介なるものは無し、若し百事國内限ならんには、百般の事物總て整頓し、一切何の不調子も起り得まじきに、只外國貿易のために、折々事業世界を紊されむとす、國内限にては、一方に異常の生産あらざれば、一方に異常の供給起らず、只歳を積み月を累ね、次第々々に生産力を増加し、農民は肥料の十分なると種穀の選び方と、農具の改良等にて、舊來一日の勞は、一升の米を生ぜしに、今は一升五合を生じ得、又一方にて靴屋は、一日に二足の靴を作りたるものが、今は機械の發明と熟練とに依り、三足を作り得るとすれば、農は一日の勞を以て靴三足を換へ得べく、工は一日の勞を以て米一升五合を換へ得べし、若し數量の多きを欲せざれば其質を良くして此の五割の増加に充て、需要供給、常に相伴ひ、曾て不調子を生ぜずして次第々々に其富を進めつゝあるに、外國貿易は然らず、先方の景氣不景氣より、突然として平年より二割増し若しくは三割増しの註文あることあり、又平年より二三割の賣行を減ずることあり、之がために我が生産界も非常に苦心せり、併し、物は熟練を積むに從ひ、都合好き方法も案出せらるゝものにて、我が公債の項にて諸君に示したる、特別新公債十億圓は、茲に至て非常なる調和の道具と爲り、間接に世の需要供給の伸縮を圓滑ならしむ

特別公債十億圓の中、五億圓は現金にて貯蓄し、アト五億圓は、内地及び輸出用の製品にて貯蓄せり、此の十億圓は本と品物のみなりしに、五十年來漸々に品物を打換へ、取換へて、終に斯かる所まで進みたり、此の貯蓄品は即ち一ケ年の需要供給の盈虚を彌縫する大切の機關と爲し

居れり、例へば今一の鉢に水を盛り、其盈虚を平均し、常に滿水を保たむと欲するときは、又別に一の鉢を置て豫備とし、前なる鉢の水が溢るれば、之を豫備鉢に蓄へ、不足すれば之を豫備鉢より補ふときは、前の鉢の水を平均して常に滿水ならしむるを得べし、我十億圓の中五億圓の貨物は卽ち此の豫備鉢にして、輸出品の一例を言はゞ、毎年の需要高以上に不時の註文あるときは、卽ち是の貯蓄より供給し、意外に賣行き惡しき年には、之を貯蓄して豫備とす、卽ち平年產出高の外に尙ほ若干の豫備品ありと見て可なり、右は輸出品のみならず、內地品に於ても亦た斯の如くす、而て此豫備品の本源は舊社會より新社會に變ぜし時、諸物品を買上げたる節に、國人が一年の生活に要する消費高よりも世の物品の高は其以上に在りしものにて、云はゞ、舊社會に蓄積せし餘剩品の變化し來りしものなり、若し盈虚を支配する此の準備法なくして、物品の需要供給が切詰め勘定ならむには、隨分不都合の場合のみ多からむ、而て此の貯蓄品と正金とは、國家の貯藏とし、通例の市場には關係せしめざる物と知るべし

人皆な曰ふ、輸出品の賣行き、例年より二割增せば、其增したる分は、又外國品の買入となり、雙方直ちに平均して、何の不都合もなしと、然れども是れは理論にして、實際は左る簡易なるものにあらず、何となれば賣れたる二割の輸出品の價を以て、人民が又た直ちに輸入品のみ買入るれば、如何にも都合好き譯なれども、如何せむ、彼等は單り輸入品を買ふのみにあらずして、又內地品をも購入す、故に外國品のみならず、內地品に對して、又增買者を生ずべし、自然の儘に抛擲すれば、結局は廻り廻りて、輸入品の增加に歸着するには相違なきも、其間の不調子は非常なるものなり、豈に盈虚を支配するの準備財品を設け、不時に備けたる金を以て、不時の不景氣を補ふの用とし、其盈虚を平均するの利あるに如かんや、是れ皆な五十年來の經驗より、我國に施行するに至りしものなり

「我國の如く、百事人民の私業なれば、事業の爲め互に資金の貸借あるを以て、自ら金利に高低を生ずる理なれども、貴國の如く百事國家の手に在るときは、人民に資金の入用なく、相互の貸借とては、單に活計上の過不足に止まるべきが故に、多額の金錢貸借もあるまじく、又私立銀行もなしとすれば、貴國の大銀行が人民に對する、貯金の金利は何を目安として之を定むるか

一如何にも其通りなるが、我國の外に外國なるものあり、我國は外國金利を以て目安とす、若し他國の金利より非常に貯金の利子を引下れば、我が國人は之を海外に放資して其の利息を收むるが故に、國內の金は玆に夫だけの流出を生ず、斯く言はゞ、兩君或は曰はむ、國家の事業は國家が手形を發して、之を行ふを得べし、故に金が國外に流出するとも事業上の運轉に資本缺乏の恐なからむと、幵は、其通りなるも、人民が海外に放資するには、國內の正金を引換へて之を海外に預込む譯にて、國內の準備正金に夫だけの不足を生じ、從て之に伴ふ不調子を生ず、故に前にも說く如く、理財の天則は我身にて我身之を勝手にするを得ざるものなり、必ず其の天則を重ぜざるべからず、故に常に海外市場の金利（未開國は利息高けれども、是等は目安とならず）を目安とし常に理財の天則を奉ぜざるを得ず（但し國內に於ける金利のことに付ては、一の攷究問題にて、『レーント』地代、『インテレスト』利息、『プロフキット』利益金、の三者に關し、余に一の理論を有すれども、此處に述ぶるは、其の時機にあらずと考ふ）

又一個人にて一年數十萬圓の利子を受取る大富

豪家に對しては、其の過半を公債證書にて下附するの制あり、斯くして、不規則に國内の資本の海外に走るを制限す

第十一回　新社會の未來、世界平和の保障

「モシ〳〵

庭の掃除をなし居たる下男、此方に進來りて禮をなし

「何ですか、今日はまだ御見物に御出掛になりませぬか、何か御用で

「イヤ、思はぬことから、皆さんの御厄介になりまして、大きに辱く思ひます、御主人は御獨棲のところに、我々が俄に押込で參り、嘸ぞ御迷惑でせう

「イヤ、極閑な御家ですから、何も御心配には及びませぬ

「アノ何ですか、失禮ながら此方の御主人樣は、元とどう云ふことをなすつた方です、あなた方は能く知つておいでゞせう

「ハイ私等も話に聞いてるだけですが、何でも今の世の中になる前は、まだ血氣壯んの頃であつたさうですが、其時は中々エラク働かれたさうで、今の世に變革するには、演說や議論で、さん〴〵世間を横行したさうです、夫で我國でも有名の人です、議員にも推されたこともあつたですが、どう云ふ積りか受けられませんでした、併し政府の顧問府には、大分久しく居られて、此の五六年前辭職して、それから樂隱居となられました

「さうですか、夫にしては、一向御宅に御來客も、ないやうですが

「アヽ夫れは斯うです、最早や御老體で、私宅に朝晩來客ありては迷惑だからとて、一切謝絕されて、每日時間を定めて、三時間位は懇意の人達と組合の倶樂部に行かれます、其處で皆な來客には面會されます、御存の通り每日、午後二三時間出掛けて行くのは、其倶樂部に往くのです

「御客さん、旦那は隨分綿密に氣の付く方ですが、又存外器量の大きな人で、誠に奉公は仕易いです

「御國には、創案局が有て、巧妙の創案をなす者には、年金を與へるさうですが、どうです、此頃妙案がありますか

「イヤどうも、我々の考へることは、いつでも人に後れるですから、とても駄目です、併し四五年前でした、實に惜いことをしました、若し採用せられると、千圓以上の年金は受合でした

「どこかの村の話ですか

「イヤ、それは駄目です

「それぢやあ何です

「ヘイ、其の惜しかつたのは、中々エラい工夫なんです、先づ皆樣御覽の通り、此の市内に、網の目のやうに出來て居る市内の電氣鐵道は、諸人が乘降するに、まだ切符を用ゐて居ます、どうもあれは無駄の手數のやうです、そこで私の考には、市内から輕い稅を取立て鐵道費を支拂ひ、市内の人民は無料で鐵道に乘る工夫でした

「ナアール程

「考へ付くと、直ぐ旦那に相談しましたが、ナニ、もう疾くに創案局に申出て居る人がありまして、それは今實行の工夫中だとのことで、是には失望しました

と物語る中、玄關に物音せしは主人の歸宅、下男は箒を手にし、掃除に掛り、我々も部屋に歸る

「金尾君、前日來、主人の樣子を視るに、如何に新社會の人とは言へ、何事を論ずるにも條理明白、人物寬大、若し彼にして尋常無名の士たらむには、此の國人全體は如何にエラき國人

なるや知るべからず、と疑ひ居たるに、今の物語にては果して一箇の人物なり
　然り、大に感服すべき所あり、併し主人の人物はそれとして、今の下界の話を聽くに、どうだ、市街鐵道を[illegible]守とは名案ならずや、且つ其實行も近しと聞く、之を思へば此國の現事物は、我々の眼に非常の進歩と見ゆれども、尚ほ將來一層の進歩をなしつゝあるは疑なし、然らば我々は、其の未來迄も一層研究し置くの必要あり
小婢、入來り
「御客樣方、旦那樣があちらに、御通し申せとのことです
……………………………………
「御主人、貴國の現事物は、我々に目新しく、耳新しきことのみなれども、尚ほ此上にも進歩しつゝあるなるべし、市街鐵道の如き、乘車切符の煩なき仕組なども案出せらるべし、此の新社會が尚ほ此上にも進歩すべき未來の大略を教示せらるゝことは叶ふまじきや
一如何にも、市街電車の其案は既に實行に近づきつゝあり、又市街鐵道のみならず、全國の鐵道全部、及び國內往來の大郵船の如き、亦た之を無料となし、用事ある者は勝手に乘込み往復せしむとの企は、久しき前より、議定せられつゝあり
　斯くなさば、無闇に乘客を增し、列車、船室、常に充滿して、出車、出船の度每に多數の乘後れ人を生じ、不便を來すやの恐あり、然れども能く〳〵調査せしに、如何に乘車が無料なればとて、用もなきに乘客のあるにもあらず、例せば名所舊蹟の遊覽、都會の見物、親族間の往來、就業者の旅行等に過ぎざるのみ、又乘客の俄に增加するは、無料の當初五六年に止り、いつまでも多數なるにあらず、且つ我が國人の勞働時間を他國に比すれば甚だ短くして一日の給料を得る割合なれども、兎に角、人々業務なきはなし、然るに用事もなきに業務を拋ち、無益に旅行をなすべきにもあらず、故に舟車無料の仕組を用ゆるとて、左程に乘客の數は增加せざるべしとの見込多し、又た今に比すれば多少、舟、車の數を增加するの必要あれども、其の入費は限あるものにて、左程のものにあらず、且つ日曜、祭日の類に限りては至當の料賃を收むることとせば、乘客過多の弊を抑ふることを得べく、又平日と雖も、先乘料を設け、至急の用事あるものは、此の先乘料を納むれば、他人に先だつことを得るとせむ、遊興其他不急の乘客は乘り後れても差支なき譯なり、船舶の方は餘程工夫を要すれども、汽車だけは此の方法、遠からずして行はるべし、何となれば、軌條等は今日の儘にてよく、唯列車數と發車の度數を增すに過ぎざればなり、故に其の費用は思ひの外多からず、而て之を全國に割當つれば稅の負擔も重からず、故に差向き是等は未來に行はるべき仕組なり、又遠き未來に於ては、電信、電話、郵便の類も全然無料の仕組と爲るべし
且つ家屋、衣服、食料の如きも其の限度を定めて、無料支給となすの仕組も考案中なり、之を詳言すれば、或る程度の家屋、及び或る程度の衣服、或る程度の食物は、無代價を以て各人に支給するものとし、而て此の支給を受くべき各人は、皆な社會の公業に從ひ居るが故に、一方にて其の給金を減ずるに在り、假りに世上の勞賃の最低限度を一日五十錢とすれば、其中の四十錢は、國家の供給する衣食住の費用に見込み、殘り十錢を小遣として給與す、則ち其時代の勞賃は十錢の小遣のみにて、他の四十錢は衣食住の費用として、之を差引くの仕組と見て可なり、卽ち一圓を受くるものは、四十錢を物品

にて受け、六十錢を現金にて受取るなり、而て此の限度の家屋に住せず、此の限度の衣服を着けず、此の限度の食事をなさゞる者には、幾分の割引をなし、此の五十錢を現金にて支給し、五十錢以上の給料を受くる者には之を其中に加算すべし、又中等以上の富者は、社會の爲めに義捐する積りにて、之を辭退するは勝手なり、一言すれば、社會より衣食住を給し、之を勞賃の前拂と看做して、少許の小遣を添へ與ふるの仕組なり、故に最低限度の勞力者は、衣食住の外に十錢の小遣を受取るも、熟練ありて日々に二圓の工賃を受取る者は衣食住の外に、尚は一圓五十錢の賃錢を受取るものと看て可なり、此法も遠からず施行さるべし

「尚ほ其他に進歩の方法なきや

「然り、丁年以上の婦人に、發言權を與ふることとならむ、既に『ニューゼーランド』の如く社會主義の最も行はるゝの稱ある國にては、現に婦人にも發言權を與へ、又北米各州の中、小區の地方事務には、婦人に發言權を與へ居る者ある程なれば、到底我國にも之を行ふことになるべし、我國にて是迄婦人の發言權を急がざる所以は、凡て丁年の婦人なれば、他に嫁せざる者なく、既に嫁したる者は、夫婦意見の一致せざる者稀れなり、故に婦人に發言權を與ふればとて、多くは男子の意見を、唯二倍にするに過ぎず、故に直接に婦人に關する問題以外に於ては、實際に於て女子有權の必要なしと考へたればなり、然れども社會の家事が國政となりし以來は、政治上にて追々に婦人のみに關する問題少からず、故に遠からずして、我が社會も亦た、女子に發言權を與ふることとならむ

「尚ほ其他に、進歩すべきものなきや

「先つ大抵は、之を極致とす、然れども若し眞に人事を窮めば、尚ほ大に進歩すべしと考ふる事物尠なからず、然れども今之を説明するは、其機にあらずと考ふ、何となれば胃腑の消化力には限りあり、若し一時に多量の食物を詰込むときは、唾液、胃液、膽汁、之に伴はずして必ず不消化を生じ、下痢を起すの恐あり、人類の腦漿が事物を理會するの力も、亦た斯の如し、若し一時に多量の問題を持込むときは、混亂を來すのみにて、之を消化する能はず、斯く言へば失禮なから、諸君の腦は僅々數日間に於て、無量に新奇の問題を持込まれたり、今少しく其の消化し了るを待たば如何

とて微笑し居たり

「我々、實は不心得にて、是れまで社會主義を攻究せざりしが故に、唯だ等閑に他人の説を聽き、社會主義とは、各人共同に働き共同に一家に生活するものと思居たりしが今貴國の實際を見れば、大に之に反し居れり

「イヤ、そは、社會主義を窮めざるの罪なり、貴客の説かるゝ所は、社會主義の別派にて、之を共同主義(コムムニズム)と稱し、萬事に共同の生活をなし萬事共同に働くの主義なり、然れども社會主義とは少しく其趣を異にす、我が社會主義なるものは、歐米の社會主義者の唱道する如く、人々一家に別居するも一大家屋に同居するも、各其の好みに從ひ、其の場合に應ずるを要とす、又私有財産を許すものにて、是れ大に『コムムニズム』と區別ある所以なり

「然らば貴國に行はるゝ社會主義の大眼目は、之を如何に定むべきや

「今の歐米諸國の社會主義各派の間にも、種々の小異あるに拘はらず、大同なる要點ある如く、之を略言するに難からず

第一　人類社會は少數者の爲めに造られたるものにあらず、社會全衆の利益を主とすべきものなり

第二　隨意競爭、個人主義の極端より生ずる弊害は國家社會の手を以て、之を禁

過すべきものなり

と、云ふ簡易なる本義のみ、而て土地資産を公有と爲すが如きは、是れ其の手段たるに過ぎず、故に國柄に因て土地資本を公有とせず之を私有と爲すとも、此の本義を行ひ得る者は、總て之を社會主義と稱す可し、然れども其の手段として、公有説を主張する者多く、唯是れを實行する方法は、人々各其説を異にし、極めて急激なるあり、極めて穩和なるあり、是れ今の歐米社會主義の有様なり、我國は實行の手段に於て其の急激なるものを排斥し、成るべく中正の方法を用ゐたるが故に、何人も大に資産を減ぜられたる者なく、唯資産の形を變じたるのみにて此の新組織を行ひ得たり

「如何にも貴説の如くんば、人生の幸福は甚だ大なる如く見ゆれども、唯だ我々が最初より貴國の仕組を危む所は、人々皆な勞力を避け厭ひ、安逸を貪り、次第に遊食懶惰の者を生ずる傾きを進め、結局社會の生産力を減じ、大なる不幸を引出すことなきやの一點に在り

「如何にも、尤千萬なる懸念なり、我が新社會に入りし初は、其の制裁を極めて嚴格にし、若し怠惰にして勞を怠り、單に全社會の御蔭にて衣食せむとする横着者に對しては、之を嚴罰するの法を設け、其の甚だしきは、入監就役せしめ、或は農具、種穀、家屋を給して之を邊鄙の未開墾地に逐り、自ら怠れば自ら饑うるの罰を與へたり（貴國と同く十一度迄の傾斜地にして未開墾に屬する土地は我國に尚ほ四百餘萬町歩あるを以てなり）自ら勞せずして社會の恩澤に浴せむとする者は、社會より之を排斥するの權利あるが故に、夫等に向ては嚴格の制裁を加へ、一方には教育上より、自ら勞し自ら食する人類の正義を親切に誨へたるが故に、年處を經過せし今日に於ては、最早や左樣の不心得を懷く者は皆無に歸したり、又農、工、商の三省にては全國の人手の過不足、事業の弛張、頗る明白なるが故に、偶ま遊食の明手を生ずるときは、忽ち何等かの事業を起し、之が爲めに手明き者を減じ、苟も誠實に働かむと欲する者は、毫も職業なきを憂へざるなり、唯だ當初は横着なる懶惰者を制裁したるに過ぎず

「歐米の社會主義には、八時間問題とて、勞力者の働き時間を、八時間に制限するの議論盛なりと聞きしが、貴國にて、此の問題は如何

我國にては、八時間問題に餘り重きを置かず、其の仔細は社會主義なる者は、本と其の根據を、理財主義に生ぜしが故に、其發達は亦た毎に理財主義と相伴はざるべからず、今理財上より之を言はむに、歐米の勞働者相互の如く、其の體力及び熟練とも、各國同樣ならむには、甲國も八時間を一日勞働の限度とし、乙國も之を限度とせば、玆に各國の賃錢は平均して、都合好く行はれ得べきも、體力に於て我が國人は、歐米諸國に讓る所あり、又熟練に於て及ばざる所あり、然るに、若し彼と同樣に勞働時間の限度を八時間と定めなば、我が事業世界にて、八時間内に生産する物品と、歐米諸國の同時間内に生産する物品と、を比較せば、我劣り彼優り、世界の市場にて我が物品は賣倒され、我が事業は衰ふるの恐なきにあらず

但し世界の文明諸國を通じて、何等かの標準を見出し、一日勞働の限度を定め、之を各國共通のものとし、勞力社會の衣食住の程度を定むるは、實に必要缺くべからざるものとす、今玆に十箇國ありて其中の八箇國の勞賃は、勞力者一日に三食を得せしむるの程度にして、假に之を三圓とせむに、若し他の二國に於ける勞力者が如何なる事情歟の爲め、一日二食を以て甘んじ、其の勞賃二圓なるときは、十箇國の物品が市場に競爭をなすに當て、八箇國の物品は二箇國に比し、一圓だけ高價なるが故に、其競爭を保た

むとすれば、國内勞力者の食を減じて之を二食に推下げ、其の賃錢を減ぜしめざるを得ず、斯る場合には、萬國聯合條約を以て、他の二國の勞賃を、一日三食を得るの限度に引上げ、其の勞賃を三圓とし、玆に各國の平均を保ち、勞力者の狀態を改善せしむるを得べし

唯其の標準は時間を以てすべき乎、金錢を以てすべき乎、時間も金錢も既に頼るに足らずとすれば他に何等かの標準を定めざるべからず、而て必ず之を定め得るの時あるべし、兎に角世界文明國の勞賃聯合問題は、現に歐米諸國に起り來り、其の適當なる標準を見出し次第に、必ず何れの國よりか、國際條約として之を持出すものあるべし、我國に於ても之を持出さむと、其の標準を攷究しつゝあり、又現に歐米の勞働者は近年に至り廣大なる組合を設け、各國聯合の歩武を進め、此の聯合國約を、各々其の政府に迫らむとしつゝあり

兩君、是に由て之を言へば、社會主義こそ、實に將來世界平和の堅固なる連鎖となるべき者なることを疑はず、何となれば、各國の社會に多數を占むる勞力者が、相聯合せざれば、其の勞賃を一定し、其の生活を高むること能はず、實際自家の身上に適切なる關係より、萬國聯合の必要を感じ、互に相助け相依るの勢は、年一年より强盛に赴きつゝあり、各國の多數民が相與に一大連約を爲す上は、戰爭あれば忽ち職を失ふ、何ぞ相戰ふを望むものあらむや

而て此の平和を愛する多數人衆の意見は、其國の和戰の決に大影響あること勿論なれば、彼等の大連約は期せずして平和の連約となるべきなり

今世界將來の大平和を生ずべき望みあるもの二あり、其一は、萬國平和協會にして、其の目的は慈善に出で、人類の相爭ふを歎じ、慈然主義より世界の戰を止めむと欲するに在り、右は誠に善事にして、何人も同意すべき事ながら、單に戰爭は人間の慘事なりとの理窟のみにて之を止めよと説くも、實際適切に平和を得べきの手掛りありとも見えず、又た其の二は列國勢力平均の權衡にて、謂はゆる衡縱の策略は、互に一國の異常なる强力を得るを妨げ、相制し相抑へて、辛じて平和を保つものながら、是れ亦大に依頼すべきにあらず、列國平和仲裁裁判の如きもの次第に出來して、往時に比すれば平和を保つの望み多けれども、何れの國家人民にも誇心なきものなし、故に時としては其の發情の趣く所、曲直を爭ふに當ては、直ちに戰端を開かずとも言ひ難し、是れ亦た世界大平和の保障とは依頼し難し、此時に當り、勞力の限度、萬國聯約の一事のみ實際に於て適實堅固なる世界大平和の連鎖と稱すべし、若し各國の勞力限度を一定するの國際條約を爲すの日あらば、世界の大平和は始て屬望の緒を開きたるものと云ふべし、之を思へば社會主義は、實に世界大平和の好機なるかな

「貴説は大に敬服なれども、各國勞賃一定の企は、容易に行はれ難きにあらずや、若し世界が、歐米七八箇國のみならむには、之を實行する難きにあらざれども、世界には印度の如きあり、支那の如きあり、皆な幾億の人口を有し、世界の生産に大關係を有す、若し世界の勞賃を一定するとし、單に歐米、日本、貴國のみ之に加はるとせむも、支那、印度の勞賃低下なる國々が之に加入せずむば、聯合國の物品は必ず此の不加盟國の爲めに破らるべし、支那、印度の如きは假令其の執政者が國際條約を結ばむと欲するも、其の社會混沌にして勞力の制限などの行はれ得べき有様にあらず、故に支那、印度には迚も手を着くるの途なし、兩國幾億の人民の生産に手を着くる能はずとせば、歐米、日本、亦た之を如何ともし難からむ

「イヤ其の問題は深く憂ふるに足らず、若し歐米諸國及び日本にて之を締盟せば、世界の文明國は總て同盟せるものと云うて可なり、世界の需要供給の全權を支配する國々は既に同盟せるものと見て可なり、然る時は未同盟の國々より來る輸入物に向ては、勞賃の一定限度までの重税を課することは容易なり、同盟列國の協力を以て、是等不同盟國の物品を制するは、頗る易々たる事柄のみ、尤も不當の税を課するに及ばず、唯々同盟列國の勞賃に相當すべきだけの税を課すれば可なるのみ、然るときは此事亦た憂ふるに足らず

「新社會の未來をさへ示教せられ、我々は其辱きを拜す、尚ほ最後に高教を乞ひ度き一事あり、如何にも貴説の如く、隨意競爭の極度に至れば、少數の大資産家が、各事業を獨占し、競爭者なきに乘じて、其の製品を不當の高價に賣り、不當の利益を得るも、之を制すること能はざるに至り、茲に隨意競爭の本義は消滅すべく、然る場合には止むを得ず、國家社會の手を以て、之を禁過し之を制裁するの外なきに至るは明白にて、之を思へば隨意競爭は、社會の依賴す可らざる者にて、決して安全の本義にあらざることも、眞實に了解し得たり、然るに尚ほ一大疑問なき能はず、抑も天地生物の自然の狀態を察するに、禽獸魚介に至る迄、凡そ生を此世に受くる者にして、弱の肉は強の食たらざるなく、優勝劣敗は不動の天則たり、然らば人世に於て、有資者が無資者を壓し、大資者が小資者を制するも、亦た天地の大則と見て可なるに似たり、獨り人事のみ優者の劣者に勝つを制し、成る可く均一の生存を保たしめむとするは、天地の理法と相反することなき乎

「若し貴客の言を以て正理とせば、人類は先づ天賦の腕力の強弱を縱にせしめ、暴力を以て他人の物を奪はしむるより始めざる可らず、然るに何故に、各國とも法律を設け、警察を嚴にし、此の優勝劣敗を防止するや、已に腕力の弱肉強食を防止しながら、何故に資本其他つ優劣勝敗を縱にせしむるや、甲を禁ぜば亦た乙を禁ぜざる可らず、乙を禁ぜずして甲を縱さぬは、是れ半呑半吐にあらずや、貴客の論理を一貫徹底せしめむと欲せば、先づ腕力の暴行を縱すの外なし、其れ豈に行ひ得べきの事ならむや

又一歩を讓り、假りに優勝劣敗は天地の大則とせむも、全社會の力を以て、少數の腕力者を制し、法律もて其の暴行を禁止し得るとせば、是れ腕力者は劣者なり、敗者なり、社會全衆は優者なり、勝者なり、又全社會の力を以て、少數の大資本家を制抑し、其の獨占を矯め得るとせば、是れ資本家は劣者なり、敗者なり、社會全衆は優者なり、勝者なり、貴客の所謂る天地の大則と、何の悖る所かある

又、他の生物なる禽獸草木と、人類とを、同一例の天則の下に置かむとするは、頗る不倫の論たるを知らざる可らず、今夫れ犬を見よ猫を見よ、皆な一個單獨の生活を爲して差支なき樣に進化し居れり、彼等は身體の仕組に於て、他の同類に仰ぐ所なく、自ら食し自ら動き、離群索居すとも何の不自由なし、人類は之に反し、同類と互に有無を交易すればこそ衣食住の便宜を得るのみ、試に貴客の着け居る、帽子、衣服、履等一切の物品を貴客自ら一人にて製造し着用するとせば如何、恐らくは、今着用し居るより幾百倍劣等の物すら、一人にては製し難からむ、然るを同類の間に、分業し製出し交換すればこそ、斯く精巧便利の物をも用ゐ得るなれ、若し人類が禽獸の如く離群索居するならば、汽車も電信も汽船も、此世に成立ち得べからず、唯夫れ群居して社會を爲せばこそ、百般の幸福をも得ることなれ、左すれば社會を組

成するは、人類幸福の大源にして、何事も社會の全員を目的とせざる可らず、爲群取樂の人類社會に向て、離群索居の禽獸の天則を應用せむとするは、所謂る平仄の合はざる論理にして、其の證例の不倫なる、之を咎むるの價値だに無き者なり

凡そ、人類の力が、天地の力に抗すること益々進む者を稱して、之を文明益々進む者とす、文明の進步とは、其の本體斯の如きに外ならざるなり、尙ほ之を云換ふれば、『初期の天然』より『次期の天然』に入ること益々深ければ、之を稱して益々文明に赴く者とす、何をか『初期の天然』と云ふ、天地の造り出せる最初の天然の狀態を其儘に存するもの是れなり、例せば、人類の雙脚が一日に三十里以上を行く能はざる、人類が海面を步する能はざる、坐して萬里の遠きに消息を傳ふる能はざる、赤手にて虎豹に敵する能はざる、の類是れなり、然るに人類は此の『初期の天然』を變更するの智力を有す、汽車一日に百里を行き、汽船旬日に千里の海を涉り、電信瞬秒に萬里の間を通じ、砲銃一發に猛獸を斃し、玆に『次期の天然』を現出せしむ、而て斯く『初期の天然』を變更し、『次期の天然』と爲すや、亦た必ず天地の力を利用す、則ち蒸氣膨張の天力を用ゆるなり、電氣傳感の天力を用ゆるなり、藥品爆發の天力を用ゆるなり、尙ほ之を云換ふれば、天地が人類に賦與せる智力を利用して、玆に『初期の天然』を變じ、之を『次期の天然』に改むるなり、人類對物の上に於る天然の變更の如く、人類相對の天然も、亦た猶ほ斯の如く變更す、其の腕力強き者が弱き者の所有物を奪ふは、是れ『初期の天然』なり、而て其の弊に勝へざるや、法を設けて暴を禁じ、敎を立てて心を改む、是に於てか稍く進んで『次期の天然』に入る、夫れ既に暴を禁じて強者を制するの知力あり、豈に遂に此處に止る可けんや、人類の智力は、尙ほ進んで有資者が非法に無資者を壓するを禁じ、隨意競爭の極度より生ずる害惡を防ぎ、新敎を布き人心を改め、全社會を利するの法を設けむとす、是れ豈に『次期の天然』ならずと云ふを得むや、是れ豈に文明の進步ならずと云ふを得むや、人類對物の上に於て、吾人は已に次期の天然に入る、人類相對の上に於て、亦た次期の天然に入らざるの理あらむや、兩君、天地は人類に賦與するに、初期の天然を變じて、之を次期の天然と爲すの智力を以てす、故に是の變更を勉むるは、則ち亦た天地の心に從ふ者 り、天地の法を奉ずる者なり

第十二回　新社會に入るの注意

「田美野君、先日から、此國の萬事を見るに付け、僕は如何にも羨ましく思ふ、富者は富者相應に快樂を得、自餘人民も他國の如き貧者なく、社會には相爭の種子なく、此國の人民が途中又は公會の場處にて互に出逢ふ有樣を見られよ、眞に同胞の情あるが如し、饑うれば食を得、病めば藥を得、老いれば養ひあり、子弟たる者は均しく敎育を得、外に對しては貿易振興し内に於ては人氣溫良、何一つ申分なく見ゆるにあらずや、僕は直ちに歸國して此の社會の組織を我國人に知らしめたき志望、勃々として止み難し、君は如何

「僕も同樣なり、僕は最初より其考にて、深く此國の事物に注意し居たり、君も同說ならば、諺に曰ふ、善は急げだ、直ちに歸國して此の組織の說法に一奮發なさむのみ、併し尙ほ、我々の耳目に漏れたる事物あるべければ、今日にも暇を告げ、是れより尙ほ此國各地の農、工、商、政治、敎育、法律、百事の詳細を取調ぶるとせば如何

「然り、大に然り

と、余等兩人の評議は決しぬ

……………

……………

「兩君、我が新組織を貴國人に吹聽せられむとな、幵は至極結構なり、凡そ事物が弊害の極に達するに及んでは、之を救ふ頗る難し、救ひ得られざるにはあらねども、其の難澁は實に大なり、我が舊社會も、あれほどまで貧富偏倚の極度に陷らしめずして、若し早く之を救ひしならば社會一般の幸福は又た一層大なりしならむに、人智の淺ましさは、事窮まり、勢ひ迫るに至らざれば、之を改むるの勇氣なし、今の歐米諸國も亦た稍や其の極に達しつゝあり、貴國の如きは是等の諸國に比すれば、貧富の偏倚、尙ほ甚しからず、各人皆な多少の財產あり、此時に及んで早く戒心する所あらしめなば、其の幸福は至大ならむ、凡そ社會の病は猶ほ個人の病の如し、假令致命の重症なりとも、之を救ふこと早ければ、常に復るの望あり、輕症なればとて打捨て置けば遂に不治の患に陷る、貴國人の戒心すべきは實に今日に在り

且つ新社會の組織は、是れ人類の(如何なる邦國を問はず)必ず結局は一たび到達すべき命運を有するものにして、『人間社會は全社會の幸福を以て百事の基礎とす』と云へる本義、及び土地資本は遂に社會の公有に歸すべしとの手段は、是れ萬國不易の大道にして、孰れの道よりするも、其の極まる所、之に歸着せざるべからず、ヨシ、今日の貴國人が如何に之を行ふを忌み避くるとも、到底一度は之を行はざるを得ざるの時節到來すべし、唯其の遲速如何と顧るのみ、社會主義の大勢を利導すること巧なれば利大にして弊害なし、之を利導せざれば至大なる不幸を見ること、火を睹るよりも瞭かなり

試に歐米諸國を見られよ、近年に於ける事物の改革、一として此の主義に向て走らざるものありや、之を譬ふれば、千山萬壑無數の溪流も、皆な集つて一川に注ぐが如く、其の趣く所は皆な此の主義にあり、英國に於ては都邑に社會主義を行ふの勢ひ進み、獨國にては一國仕組の社會主義を行ふの勢ひ進み、米國にては州政に發達し、瑞西にては村邑に發達し、白耳義にては市府に發達す、其趣は異なれども其の歸する所皆な此の主義ならざるはなし、又新國に於ては、新ゼーランドの如く、女子に發言權を與へ、八時間勞働の制を設け、駸々乎として此の主義を實行し居るもあり

歐米に於ても、社會主義は其の始め『ユートピヤ』(空理)と看做されしが、遂に變じて『サイエンス』(學理)に進み、理財學者其他有識の士は皆な實際に行ふ學理として之を研究するの勢となり、當初は之に抵抗せし學者も、年を經るに從て其の抵抗極めて薄弱となり、新進の諸學者等は皆な之を眞理と認識するまでに進みたり、現に英國の經濟學界に於て、碩學泰斗と目せらるゝジョン、スチュアート、ミル氏の如きも其の晩年に至るに從ひ、個人主義(インデビジュアリズム)より、次第々々に社會主義に傾き、遂に其の沒せし年に刊行せる自傳に於て、自ら社會主義者たることを明記するに至れり、又氏の社會主義の一論文は氏の沒後に世に公にせられたり、今日英國に勢力を占め居る社會主義共會の發起人に、氏の義女たるミス、ヘレン、テイロルの加はりたりしも、亦た乃父の遺志を繼承するの意志たらずんばあらず、然るに是等の沿革を思はずして、單に古學者の說を金科玉條と心得るは大なる不覺なり

先年貴國に、立憲政體を起せしや、人皆な之を危み、他國に起りし先例に鑑み、非常なる革命不序を惹起すべしと杞憂せし者甚だ多かりしは余も亦之を知る、然るに實際は如何、貴國人の聰明にして事理に通ずるや、何の支りもなく、

平穏に立憲政治を實行しつゝあり、故に社會の新組織に就ても余は深く懸念せざるなり

但し苟も新社會に入らむとするには、注意すべき條々多し、凡そ完全なる新組織を行ふには、先づ其の社會が完全なる本體を備へざるべからず、完全なる本體とは如何なるものぞ、則ち社會の全員が社會の事に對し總て發言權を有すること是れなり、衆人集つて一社會を組成す、其の組成分子にして悉く發言權を有せざるときは、其の社會は不具なり、不完全なり、社會全體の利弊を判斷する者は社會の全員ならざるべからず、若し其の半數が發言權を有し、半數が之を有せざれば、其の利害休戚に於て全數の意見を知るに由なし、又社會の事物を擧げて公有としながら、之を一部の人に委託するは有權者のみに過大の利器を與ふるに均しく、無權者は其の弊を被るの恐あり、故に此點は大に注意すべき事とす

昔時、舊社會の晩年に於て、社會の全員が未だ發言權を有せずして、社會が不具不完全なりし時代に當ては、余は嘗て、市內鐵道公有の議に反し、私設の方を主張せしことあり、是れ他なし、社會の事物が社會全員の有たらざる迄は之を公業となすとも、謂はゆる官業の弊に陷り易く、監督も行屆かず、取扱にも拔目多く、却て私業の利あるに及ばざる場合多ければなり、私業なれば各人の私益上より鞭たずして自ら進み、鐵道敷設も速かなるべきに、不具體なる社會なれば、之を建設するさへ、遲鈍にて、市民は其間に此の利便を失ふの恐あり、凡そ物、皆な之に類す、甲の時勢に利あるもの必ずしも乙の時勢に利ありとは限らざるなり

總て我が新社會の仕組は、社會の全員自ら之を監督し、自ら之を爲すの本義より生ぜしものにて、本人は何の意思もなきに、恩惠上より他人が社會主義に類する事柄をなすものは、之を目して『パテリナリズム』と云ふ、社會主義に類するの政事は、古より時として、或る部分に行はれたることあり、支那の井田法、又は常平法の如きもの是れなり、然れども決して永續せしことなく、中途にして腐敗する歟、若しくは、最初より少數者に私せしむる歟、其の全利を收得たるの例あることなし、是れ畢竟、其の本義を誤り、人民自治の氣象より之を致せしにあらずして、社會主義の鍍金を掛けたるものなればなり、故に事其物は必ずしも惡きにあらねども、其の本性凡び出處に於て、既に腐敗危險の分子を含むを如何にせむ

新社會に入るにも階段あり、卒然と飛躍するときは必ず事物の紛亂を生ず、固く之を愼むべし、唯、人事の逢着すべき極致を知り居らざる可らず、兩君が我が新社會の幸福なる狀況を見られしは、將來に非常の利益たるべし、天或は君等を導て之を示せしならむ、先づ貴國抔にて、差向き實行し得べき者は多數人民の狀態を改善し、極貧者の增加を豫防し、工場法を設け、負傷保險法を設け、尙ほ進んで左の條々を行ふに在り、之を行ふとも社會に些の紛亂を及ぼすの心配なくして多數の民衆を利するの大益あらむ

第一　四級團の人民が疾病の時は食料を得、醫藥を得るの法を設くる事

第二　地主、小作人、合意の場合には、土地を國家に買上げて國有となす事

第三　農民には肥料、農具、種穀を、漁民には漁具、舟船を、勞力者には其の器具機械を、國家より貸附け、及び取立つるの制を設くる事

第四　勞力者の集配取扱所を設け、全國各地を通じて其の需要供給を平均し、彼等をして職を求むるに窮せしめざるの法を設くる事

第五　簡易教育の法を設けて其の知識を開發する事

（歐洲學士の創案せる名稱に從ひ、貴族を一級、僧侶を二級、大資產家及び中產の中以上にある者を三級とし、其の以下を四級とし、此の四級人民を四級團と名づく）

（編者曰以上の方法は、矢野龍溪時事意見と題する書に詳かなるが故に之を略す、同書は明治三十五年三月刊行、東京表神保町東京堂發賣）

尙ほ最後に於て、社會主義に入るの注意二三を述べむに、第一は、及ぶべき丈け、個人の所有權を重んずること、第二は大資產家個人を嫉惡せしめざること是れなり、舊社會に大資產家の生ぜしは、元と其の仕組の不完全が之を致せしものにて、大資產家は知らず識らず自ら是に至りしのみ、社會幾千萬人、何人も皆な大資產家の爲す所を爲さむと心掛けたるに、唯幸運なる少數者が大資產家と云ふ富籤に取當てしのみ、然るに其の個人を咎むるは中正の所業と云ふべからず、又第三に大資產家は社會組織の不完全が、己れの富を與へくれたるの理を思ひ、己れ自ら抑損して、全社會を利するの仕組に對しては、常に幾分の退讓をなすことを心掛けしむべし、貴國の社會にして若し是の三者を能くせば、社會の改善、極めて圓滑にして、民衆の幸福は日を期して待つべし

……………………………

「兩君は尙ほ各地を巡覽せらるゝとな、其は極めて可なり、尙ほ注意を要すること種々あり、是非に再び當府に歸りて茅屋を訪はれよ、兩君の見聞の增すに從ひ、尙ほ說明を要すること多し、ア丶、今日より直ちに出發せらるゝとな、其は又餘りに性急なり、併し決心せられしとあれば、留め參らすも詮なし

と、是より我々は尙ほ旅裝を整へ、主人に暇を告げて立出れば、四五日の逗留ながら、馴染の重なりし故に、小間使、下女、下男、等も送り出で、堅く再會を契りつゝ、此家の玄關を立出しが、余の背後より

「兩君御機嫌よう

と、愛敬ある老主人の言葉、余は顧みて挨拶せむと、振向く機に、踏み滑りたる玄關の石段

「アッ

と、一聲叫ぶと思へば、覺來りし書室の裡、四邊寂として人なく、枕頭の置時計が、キッチキッチと誠實に進行しつゝある響と共に、遙に聞ゆるは曉月杜鵑の聲、復た殘夢を續くるに由なし

いのちにもまさりて惜くあるものは
見果てぬ夢のさむるなりけり

地上の理想國 瑞西(すゐつる)

安部磯雄

地上の理想國 瑞西

自序

常務の餘暇に匆々筆を採つたのであるから文章といひ材料の蒐集といひ甚だ不十分である。然し讀者諸君が此小冊子を以て單に瑞西てふ問題を借りて著者の理想を吐露したる一場の演說筆記と見給はゞ著者は大に滿足するのである。材料の蒐集に就きては一言して置きたい。一部は種々なる雜誌や地理書などから得たのであるが、大部分はヴヰンセント氏の「瑞西の政治」及びドウソン氏の「社會的瑞西」より拔萃したものである。始めの考では數年を費して緩々材料を蒐むる積であつたが、日露戰爭中に出版したいといふ希望が起つたから、終に大急ぎで筆を採ることになつた

明治三十七年五月　著者識

總論

瑞西は西部歐羅巴の中央に位する一小國で、其面積が一萬五千九百七十六萬方哩、人口が三百萬といふを以て見れば、殆んど我九州と匹敵すべき國である。然れども身體の偉大なるものが矮小なる智者に勝ること能はざるが如く、世界の强國は決して此一小共和國の前に立ちて誇ることは出來ない、南はアルプス山に包まれ西はジユーラ山に擁せられ、全土の半は高山峻嶺の占むる所であるにも拘はらず、到る處坦々たる道路を通じ、汽車走り電線懸り、電話電燈の便一として備はらざるはない。鐵道の全長二千三百六十二哩、電信線路四千二百八十六哩、電話交換局の數三百十八。郵便局數一千五百八十四、而して郵便局が毎年取扱ふ所の郵書が一億以上に達することを思はゞ、之を我九州に比して其差果して如何であるか。面積に對する鐵道延長の割合如何を見れば歐羅巴の諸國中一として瑞西に及ぶものはないのである。更に大學教育の事に說き及ぼさんか。彼の蘇格蘭及び白耳義が各四個の大學を有するは世界無比と稱せられて居るのであるが、瑞西は其面積に於て蘇格蘭の半であるに拘はらず六個の大學を有して居る。我九州に於て僅に一の醫科大學を見るに比すれば殆んど同日の論でない。中央政府の歲入一億一百三萬三千七百十六法(一法は我四拾錢)、地方政府の歲入七千九百十五萬二千法(千九百九十年の統計)、最近二年間に於ける輸入額十二億六百八十萬九千六百十一法、同輸出額八億九千四百八十九萬八千七百七十一法なるを見れば、財政の點に於ても敢て遜色ないのである。瑞西は外交社會に於て何等の勢力もない。今日の如き帝國主義の旺盛を極むる時代に於ては、恰も小兒が力士の格鬪を見物するが如くに、單に傍觀者たるより外はない。然れども平和の宣傳者たる天職を有する彼は屹然として紛々たる俗氣の上に立ち、世界を睥睨して居るの觀がある

戰時に於ける負傷者を如何に取扱ふべきやに付き萬國の委員が始めて集會したのはゼネバであつて時は千八百六十四年であつた。これが卽ち文明國の一大事業となつた赤十字社の起原

である。英米二國の間に起りたる紛擾を解かんとて千八百七十一年始めて仲裁裁判を開いたのも此ゼネバであつた。爾來萬國的集會の瑞西に開かれたるもの、亦其本部を此處に設けたる所の事業幾何なるか一々これを記するに遑ない位だ。萬國聯合郵便會を始め、電信、鐵道、版權等に關する萬國協同事業の本部は何れも此處に設けられて居る。萬國勞働者會議及び萬國社會主義者會議の如きも多くは此處に開かるるのである。他年一日世界萬國が各其委員を送りて萬國議會なるものを組織するの必要を感ずるに至らば、彼の清冽なるゼネバ湖畔に一大議事堂の建設せらるゝはあながち不當の想像ではなからう。聖書に『ユダヤの地ベツレヘムよ爾はユダヤの郡中にていと小さきものにあらず我イスラエルの民を救ふべき君其中より出でんとすればなり』といふ言がある。瑞西は決して小國として輕んずべきものでない。何となれば世界を支配すべき大思想大主義が其中に培養せられつゝあるからである

瑞西は富者の杖を曳くべき恰當なる避暑地である。海面を拔くこと千三百呎、而も山水の明媚なること世界無比と稱せられて居る。鑛泉は到る所に湧出して來客の使用に任せ、海拔四千呎の高處に建てられたる旅館のみにても無慮二百四十以上といふのであるから、病弱者の爲に適當なる治療所たることは言ふまでもない。每年旅客が瑞西にて消費する所の金額が一億二千萬法以上であるといふを見ても、如何に此一小國が世界萬國の爲に一大公園たるの職務を果しつゝあるかが分る。然し瑞西を以て單に物質的の樂園と見るのは未だ其眞相を穿つたものといふことは出來ぬ。彼には物質以上の大なる天職がある。屹然として立てる自由主義は彼のアルプス山よりも崇高に、整然として亂れざる社會組織はゼネバ湖よりも一層優美である。吾人が茲に紹介せんとする地上の理想國は山高く水清き瑞西にあらずして、自由、平等、平和の橫溢せる瑞西である

第一編　政治

第一章　聯邦組織

帝國にして聯邦組織を爲せるものの標本は獨逸である。共和國にして聯邦組織を爲せるものの標本は北米合衆國と瑞西である。十三世紀の頃瑞西の三州が攻守同盟を結びたるを始めとして爾來漸次に其數を增し、今は其數二十五となつた。鞏固なる中央政府を設け稍完全なる聯邦組織を見るに至つたのは千八百四十八年であつて、これを北米合衆國の聯邦成立に比すれば殆んど六十年後の事である。二十五の聯邦は其面積及び人口に於て非常の相違がある。其最も大なるものを擧ぐれば面積二千七百六十五平方哩、人口五十四萬二千、其最も小なるものを擧ぐれば面積十四平方哩、人口一萬三千である。且つ住民は獨逸、佛蘭西、以太利の三種に分れて居るのだから、國會には三種の國語を用ゆる必要がある。今人口の割合より言へば、獨逸人が七割一分、佛蘭西人が二割一分、以太利人が五分である。これを州の割合より言へば獨逸人が二十州、佛蘭西人が四州、以太利人が一州である。斯く三人種が一隅に割據しながら而も鞏固なる聯邦を組織して居るのは一の奇觀といふてもよい

已に聯邦といふ以上は各州が本位、あつて聯邦政府は各州より委任せられたる或一部の政治を行ふに過ぎないのである。而して如何なる程度までに聯邦政府の權力を强大にすべきかは重要なる問題である。故に州政府と中央政府の權力の釣合さへ見れば、其國の方針が中央集權

に傾いて居るか、將又地方分權に傾いて居るかを知ることが出來る。瑞西と北米合衆國とを比較すれば、前者が餘程地方分權に傾いて居ることが分る。勿論これは國土の大小に因つて定まることでもあらうが、亦米國が幾分か帝國主義の感化を受けて居るに反し、瑞西が純然たる民主主義の上に立つて居るにも因ることであらう

米國にせよ獨逸にせよ外國と條約を締結するに當りては中央政府が其責に任ずるのであるが、瑞西に於ては或事柄に關し州政府が直接に外國と條約を結ぶことが出來る。亦軍隊の事に關しても米國や獨逸と異なりて州政府が中央政府と事を共にすることになつて居る。兎に角中央政府と州政府との權力の間に明白なる區域がないのであるから、或場合には隨分撞着の起らぬでもない。例せば徵兵免除稅の賦課及び徵收は州政府で行ひ、其收入の半を中央政府に納むることになつて居るが、酒類專賣の事は中央政府之に任じ、其收益は一切州政府に與ふることになつて居る

要するに瑞西の政治は純粹なる民主主義にして其本位は人民である。州政府と雖も全く人民の代表者であつて、其政策は多數人民の意志の發現したるものである。瑞西人で用ゐつゝある選擧法及び直接立法權なるものを見たらば、何人にても眞正の自由民權が米國に於てよりも瑞西に於て多く發揮せられつゝあることを認むるであらう

第二章　立法

各州の立法部は其組織に於て二樣に分れて居る。即ち代議政を採れるものと、純粹なる民主政を採れるものとの二種である。民主政といふのは一州の人民が集會して法律を定むるをいふので、これは決して人口の多き州に適用することは出來ぬ。さて二十五州を此二種に區別すれば代議政を採るものが十九、民主政を採るものが六である。然し此分類は未だ十分とは言はれぬ、代議政を採れるものにても立法部の議員は割合に權力がない。即ち法律を採用するに當りて最後の判決は人民全體の投票に依ることになつて居るから、議員は討議の權を有するだけで投票權がないというても差支ない。尤も或州では人民全體の意向を問ふことは隨意になつて居るが、兎に角此「レフェレンダム」と稱する一種の直接立法權が行はれて居る以上はこれを民主政と言はねばならぬ、斯くなれば瑞西の中で眞正に代議政の行はれて居るのはフライブルヒといふ一州だけで、他の二十四州は民主政を行うて居るのである

投票權を有するものが悉く一場に會して政治を議するといふことは極端なる民主政であつて、昔はアゼンスなどに行はれて居たが、今はこれを瑞西の或州に於て見ることが出來る。前にも陳べたる通り斯る民主政は大なる團體には適用することが出來ないので、瑞西でも其人口最も少なき六州がこれを實行して居るのである。勿論此等の州に於ても人民が細大漏さず法律を制定するといふ譯にゆかぬから、他に常置委員の如きものが設けてある。然し重要なる事はなるべく一年一度若くは二度開かるゝ人民の總會に於て議することになつて居る。集會の期日としては每年四月若くは五月の日曜日を選定し、廣大なる空地を以て會場に充つるのである。昔は議員何れも黑色の制服を着け、劍を帶びて議場に列したさうだが、現今は役員のみが劍を帶ぶることになつた　議員數は殆んど一萬にも達することがあり、其外に婦人などの傍聽に出かくるものが多いから、其日は丸で祭禮であるかの如き觀を呈する、集會は如何にも嚴肅であつて、先づ始めに宗教的儀式を行ひ、

引續いて州長の演説がある。いよ〳〵議事に取掛れば議員は隨意に其意見を陳ぶる。往時は議員が其當日に議案を提出することも許したのであるが、今日は豫め役員の手に渡すことになつて居る。亦議員數の餘りに大なる議會にては討論を用ゐずして直に採決するといふことである。採決は舉手でなすこともあれば、議員の請求に依りて無記名投票を用ゆることもある。尙附言して置きたいのは此議會に於ては法律制定の事ばかりでなく、行政官の選定をもなすのである

代議政を用ゆる所の州に於ても、民主政を用ゆる州に於ても立法部なるものがある。勿論後者に於ては人民が直接の主權者であるから、立法部の權力は微々たるものであるが、前者に於ては幾分か趣を異にする所がある。さて立法部は各州何れも一院制を採りて、代議士は人口に應じて各地方より選出せらるゝことになつて居る。代議士の資格としては普通滿二十歳にして公民權を有するものと定めてあるが或州にては滿二十五歳と定めて居る所もある。任期は州によりて一年の所もあり或は六年の所もある。議員の報酬としては議會開會中一日僅に三法乃至六法を拂うて居るのだから、これが動機となりて選舉運動を爲す者は甚だ少ない。さて一名の議員は幾人の人民を代表して居るのであるかといふに、これ亦各州に依りて相違する所はあるが、オプバルデン州の百八十八人とベルン州の二千五百人は其兩極を現したものである。これを米國の千二百人乃至四萬人といふに比すれば、議員が人民を代表するといふ點に於て米國は遙に瑞西に劣つて居ると言はねばならぬ。且つ瑞西の立法部は全く自主獨立であつて行政官には之を解散するの權力がないのである。或州に於ては人民多數の意向にて立法部を解散することが出來ると憲法に制定してあるが、民主主義も玆に至りて其絕頂に達せりと言はねばならぬ

中央立法部は上院下院に分れて居る。下院の議員は各州より人口二萬人に付き一人の割合にて選舉するのであるが、目下百五十人の代議士がある。選舉は直選法で無記名投票で、滿二十歳の公民は何れも選舉權を有して居る、被選者の資格も選舉者の資格と同樣であるが、僧侶のみは被選權がないのである。議員の報酬は旅費の外に開會中毎日二十法と定めてある。上院の議員は各州より二名を選出するので其の數四十四名である（二十五州の中六州は面積人口餘りに小なるが故に一名の議員を出すことになつて居る）。選出の方法は直接人民の投票に依るものと、州立法部の選出に依るものとの二種ある。法律の制定に當りては兩院獨立に討議をなすけれども、中央行政官及び司法官を選定するに當り、若くは人民と中央行政官の衝突に對して司法的行動を爲すに當りては兩院の協議會を開くのである

第三章　選舉法

選舉法は各州に於て一定して居ない。亦州會議員の選舉と國會議員の選舉と同一の方法にて行はれては居ない。然し近時最も勢力を占めつゝあるものは比例選舉法と稱するものであつて、州政治にも市政治にも多く用ゐられて居る。選舉法の如何に依りては少數の者が政權を握りて多數者が代員を有せぬといふ樣な奇觀を呈することもある。比例選舉法は全く此弊を矯めんために案出せられたるもので、これに依れば何れの黨派も公平に其代表者を舉ぐることが出來る。各州に行はれて居る比例選舉法も其細目に於ては多少趣を異にして居るが其大要は先づ左の通りである。一選舉區よりは十人乃至十數人といふなるべく多數の議員を出す樣に選

擧區劃を定むること。投票は連記であつて、其選擧區にて出すべき議員の全數を一人にて投票すること。選擧者は何黨に屬するかを明白にすること。自黨より擧ぐべき候補者は一定せず、選擧者の意志に一任すべきこと。さていよ〳〵投票完了すれば總投票數を選出せらるべき議員數にて除し、其商を以て各黨派の得たる投票數を除し以て各黨派より出すべき議員數を定むるのである。今茲に一例を擧げて示さんに、選擧者六萬人を存する選擧區に於て三黨派ありと假定しよう。其中自由黨は三萬票、保守黨は二萬票、社會黨は一萬票を得、而して選出せらるべき議員數は十名だと假定しよう。さすれば六萬票を十人に除し、議員一人の所得が六千票になるのであるから、此六千票を以て自由黨の得票三萬票を除すれば五人の議員となり、同じ道理にて保守黨は三名、社會黨は二名を出すこととなる。此の如く各黨派より出すべき議員數が定まりたる上にて、其議員は何人なるべきかを知るには各黨派にて誰が最高點を得たるかを見るのである。抑も此選擧法が始めて瑞西にて採用されたのは千八百九十年で比較的近代の事であるが、或一部の人が之を主唱したのは十九世紀の半頃からであつた。或州の如きに於ては在來の選擧法に對する不平が終に政治的大騷亂を惹起すに至り終に鎭撫策として比例選擧法を採用することとなつた

瑞西は選擧法に於て非常の進歩をなして居る許りでない。選擧に對する思想は實に模範的である。何れの國に於ても政黨政治の結果として各黨派は勸誘買收等の手段を以て選擧者を誘引せんとするのである。然れども瑞西人は選擧者の意見に對しては十分なる尊敬を拂うて居るのであるから、强ひて彼の意見を變ぜしめんとするが如きことは此上もなき侮辱と考へて居る。それで選擧場裡に於ける態度の如きも極めて靜肅で、運動がましき所爲は少しも見ることが出來ない。今其一例として左の事實を陳べよう。ゼネバ大學の敎授ヴァリン氏は久しく比例選擧法を唱導し、十數人の同志と共に殆んど二十五年間も其宣傳に從事した。終に或州に於て此選擧法を採用すべきや否やが一問題となつて廣く州民に投票せしむることになつた。是れヴァリン氏に取りては千載一遇の好機會であつたのである。然るに或人が氏に問うて斯る場合に於ては氏及び氏の同志者は熱心奔走して選擧者を勸誘するならんと語りたるに、氏は斷じて否と答へた。如何となれば勸誘は却つて此主義の爲には不利益である。苟くも選擧者たるものが選擧場に臨むに當りては既に前日に於て其意見を定めて居る筈である。而も其意見を變ぜしめんとするが如きは其人を重んずるの所以でない。吾人は實に此意氣に敬服するのである

第四章　直接立法權と建議權

英語のレフェレンダムとは國會や州會にて制定したる法律に付き不服を申出でる者ある時はこれを選擧人全體の投票に任ずるといふ制度であつて、これを直接立法權と譯する人があるが、なる程人民が直接に法律の制定に容喙するのであるから斯く譯するのは適當であらう。イニシエチーヴとは人民の方から新に法律を設けたい希望がある時にこれを建議することの出來る制度であつて、これを假に建議權と譯して置かう。此方法は米國の如き民主主義の盛なる國に於ても單に市政の一部に應用するに過ぎないが、瑞西にては州政にも國政にも應用して居る。これを見ても瑞西が如何に民主的であるかが分る

此方法を採用するに付きても各州幾分か其趣を異にせる所がある。或州にては凡ての新法律に直接立法權を應用することが出來る樣

になつて居る。亦或州に於ては其應用が重要なる法律のみに限られて居る。何れの場合に於ても直接立法權を適用すべき法律が新に發布せられたる時若しこれに不服なるものがあれば三十日内に申出でねばならぬ。申出の人數は或州に於て五百人、或州に於て六千人なくてはならぬことになつて居る。さて州の行政部は其申出を受けたる日より三十日内に於て投票日を確定するのである。投票は多數決であるから、若し新法律に反對するものが賛成者よりも多ければ其法律は無效となるのである

建議權にも各州に依りて請願者の人數に一定の規則がある。若し規定の人數連署して或法律の新定を立法部に請願する時は、立法部は或一定の期間に於て十分の調査をなし、自らの意見をも附加して之を人民の投票に問ふのである。若し投票者の多數が賛成を表する時には行政部之を發布していよ〳〵新法律の確立を見るのである

中央政府に於て用ゆる所の直接立法權及び建議權も其原則に於ては前に述べたる所のものと異なる所がない。唯期限とか人數とかいふ點に於て幾分の相違がある許りだ。即ち中央立法部にて制定せられたる法律が發布せらるれば、人民は九十日内に直接立法權を請求することが出來る。請求者の人數は三萬人以上といふことであるが、若し八個の州政府が請求しても同じ結果となるのである。亦建議權の場合に於ては請願者の數が五萬人以上でなくてはならぬ

吾人は直接立法權や建議權を大國に於ても行ふことが出來るか否かに付きては此處に詳論せぬ。然し此二制度あるが爲に如何に瑞西人の政治思想が發達して居るかは明に見ることが出來る。如何なる國の政治を見ても法律制定の如きは殆んど全く法律家や政治家の手に一任せられて居るのであるが、瑞西に於ては選擧者悉く法律制定に參與することが出來る。彼等は必ずしも州會議場や國會議場に出入するの必要はない。日々其業を營みつゝ尙ほ法律制定に附き容喙することが出來るのである。彼の國に於ける民主主義が健全なる發達をなしつつあるは決して偶然の事でない

第五章　行政

州の行政官を選擧するに二種の方法がある。或州に於ては人民直接にこれを選擧し、或州に於ては立法部がこれを選擧することになつて居る。行政官の數は五名乃至十三名にして任期は一年乃至五年である。行政官は單に法律の執行を管理する許りでなく州全體の安寧幸福をも謀らねばならぬ。法律の制定は立法部及び個人たる人民に依つて爲さるゝのであるが、行政部も勿論必要と認むる所の法案を議會に提出して其制定を要求することが出來る。時には亦司法官となりて現行法律の解釋を爲すこともある。行政官の内一名を擧げてこれを州長と名くる。然れども州長は決して米國の州知事の如くに立法部の決議を否認することは出來ない。瑞西と於ては何ものよりも立法部の權力が強いのであつて行政部も司法部も殆んどこれに服從せねばならぬ。然し唯一つ立法部よりも強くて常にこれを支配して居るものがある。これは即ち投票權を有する人民である

州の下には更に郡とか地方とか稱すべきものがあつて、此處にも州政府を代表する所の行政官が居る。彼等は直接人民の投票に依りてか、或は州の立法部に依りてか、或は行政部に依りて任命せらるゝのである、其任命の方法は如何に異なるも彼等が中央政府を代表して其地方を治むるといふ點は同一である。或場合には地方會なるものありて此等の行政官に助言

を與ふることあれども、行政官は勿論これに服從するの義務はない

中央政府の行政官は七名にして下院の議員がこれを選擧するのである。近來は人民をして直接に行政官を選擧せしむべしとの說を唱ふる者漸次增加して來たが、將來如何になりゆくかは明言する譯にゆかぬ。行政官の任期は三年であるが、歐米に於ける政黨內閣の如く黨派の消長に依りて直に行政官を動かすことがないから、幾度にても再選せらるゝことになるのである。內閣は左の七省に別れて居る

政務省
內務省
司法警察省
軍務省
大藏省
農工商務省
遞信省

七名の行政官は各一省を主管することになり、其中の一人は擧げられて大統領となるのである。然し吾人は決して此大統領を以て米國の大統領の如くに解してはならぬ。米國の大統領は全く一人にて行政權を有して居るのであるから、他の內閣員は大統領に隸屬して居るものといふべきである。然るに瑞西の內閣員は大統領に依りて任命せらるゝものでもなく、亦免官せらるゝこともない。彼等は單に立法部に對して責任を負うて居るのである。七名の行政官は其地位より言へば恰も我國の大臣に相當すべきものであるが、彼等は殆んど祕書官をも有して居ないのであるから細大漏さず自ら其事務に當らねばならぬ。故に彼等は一人にして大臣と局長の職務を兼ね居るものというて差支はない。彼等の報酬は不十分であるのみならず、別に官舍とか護衞兵とか車馬とかいふ贅澤なる設備もないから、我國に於けるが如く大臣の位地を狙ふ野心家は少ないのである

第六章　司法

司法の事に關しては國と州との間に有機的關係がないというてもよい。何となれば聯邦裁判所なるものは決して我大審院の如くに地方裁判所より控訴院、控訴院より大審院と云ふ樣に最高の裁判所ではない。勿論州裁判所より終に聯邦裁判所に控訴するといふ場合がないでもないが、これは極めて稀である。故に裁判組織は先づ州の內で完全に出來て居ると云うてよい。司法の事も各州に於て多少其趣を異にして居るが、其共通點とも稱すべきは左の通りである。刑事と民事とに對しては別々に裁判所の設あること、小事件はなるべく控訴せざること、凡ての事件は先づ最低度の裁判所に訴へ出づべきこと。さて其最低度の裁判所と稱するものは如何なるものなるかといふに、往年我國に用ゐられたる勸解と同樣にして仲裁者たるものが原被兩者に對して懇々說諭を爲すのである。若し彼等にして其忠言に從はざれば、玆に始めて勸解者は法官の資格を以て判決を下すのである。此の如き裁判所は一小區域に設けられをるを以てこれを區裁判と稱することも出來よう

此上に來る所のものは地方裁判にして、此處には五人乃至七人の判官がある。彼等は人民の投票に依り擧げられたるものであつて、其任期は通常四年である。更に其上に州裁判なるものありて、法官は七名乃至十三名、任期は一年乃至八年である。彼等は普通州立法部に依りて選擧せらるゝことになつて居る。刑事の裁判は同じく區裁判より州裁判まで三階段に分れて居るのであるが、これには判官の外に人民より直接選擧したる陪審官なるものが列席するのである。其他商業上及び工業上の訴訟を判決す

るために或州に於ては特に裁判所を設けて居る所もある

聯邦裁判なるものは近年まで餘り重要なるものでなかつた。何となれば聯邦組織の不十分なりし時代には中央政府の發布したる法令は甚だ僅少であつたからである。よし亦法律の見解に付き異論の起りし場合にも、立法部や行政部が多く其責に任じたのであつたから、司法部にはこれといふべき仕事もなかつた。其處で司法部の範圍が確定し、其仕事の増加したのは千八百七十四年後の事である。今や聯邦裁判所はローザンヌに於て美麗なる建物を有し、十六人の法官と九人の補缺員は六年の任期を以て國會議員の投票にて選擧せらるゝの規定である。法官の俸給は一年一萬二千法、但し彼等は國會議員となることも、亦他に職業を營むことも出來ない。前に陳べたる通り聯邦裁判なるものは州裁判よりの控訴を受くる爲に設けられたるものではなくて、其目的は左の件々を取扱ふに在る。（一）聯邦と州との間に、若くは聯邦と個人或は會社の間に起りたる訴訟にして其金額三千法に達したる時。（二）州と州との間に、若くは州と個人或は會社の間に起りたる訴訟にして其金額三千法に達したる時。（三）公民權問題に關して甲州の一地方と乙州の一地方との間に訴訟の起りたる時。其他憲法に制定したる多くの場合をも含むのである。刑事上に關して聯邦裁判の取扱ふ事件は、（一）聯邦に對する叛逆。（二）聯邦の執政者に對する暴行。（三）萬國公法に對する犯罪等である

瑞西の聯邦裁判所は米國の其と大に趣を異にして居る。米國の高等法院が一たび新法律に對して其憲法違反なることを判決すれば、よし其法律は上下兩院を通過したるものであつても直に無效となるのである。然れども瑞西の聯邦裁判は決して此の如き權を振ふことは出來ぬ。全く立法部より指定せられたる範圍に於て行動するより外はない。更に吾人が附言して置きたいのは瑞西の法廷に於て辯護士を多く見ざることである。各人は自由に辯論することが出來るから代辯者の必要がないといふ理由なのであらう。法官も亦別に嚴然たる制服を着けない。但し法官を始め原被の兩者も辯護士も黑色の衣服を着けねばならぬといふ規定がある

第七章　財政

瑞西に付きて吾人の學ぶべき點は澤山であるが、殊に財政に於ては殆んど理想的であるといふも差支はない。瑞西は決して社會主義を標準として居る國ではないが、其財政上に見はれたる方針はよくも社會主義の說く所と符合して居る。若し人類が民主主義に依りて自由平等の大道を履まんとすれば結局社會主義の說く所に到達せざれば止まないのである

州政府の財源の重なるものは公有財產、獨占事業、及び課税である。公有財產とは森林、耕地、市街地市の造營物等であつて、其他に少からぬ資本金がある。此等の公有財產は州の財政上重要なる部分を占めて居るのである。瑞西の最大なるものとして知られたるベルン州には十四億六千三百八十五萬一千八百〇九法の價額を有する公有財產がある。亦人口僅に六萬五千を有するバーゼルランド州には尙ほ二百三十六萬二千七百三十六法の價ある公有財產がある。社會主義の吾人に敎ふる所は何であるか。私有財產の區域を制限して公有財產の領分を擴張しゆかば、其に比例して貧富の懸隔は減少し人民は自由平等の幸福を享くることが出來るといふのである。凡そ自治體に共有財產の必要なることは今更喋々論ずるまでもない。然るに文明國と稱せらるゝものゝ多分は土地、森林、鑛山等を擧げて個人の私有するに放任し

たるが故に今更これを如何ともすることが出來ないのである。これを瑞西の州政府及び中央政府が各々巨額の公有財產を有するに比すれば其差果して如何であるか

獨占事業なるものは私人の經營すべきものでないとは同じく社會主義の吾人に教ふる所である。然るに瑞西は多くの獨占事業を政府にて經營することにして居る。吾人は此問題を以て最も有益に且つ面白きものと思ふが故に冗長を厭はずして之を詳說することにしよう

第一は政府が酒類の釀造を自ら經營しつゝあることである。此事業は中央政府の直營であるけれども其より生ずる所の收入は州政府の所得となるのであるから寧ろ玆にこれを說くのが適當であらう。酒類の釀造が官業となつたのは千八百八十七年であつた。政府は千二百の酒類釀造所を買收する爲めに三百六十五萬法を費した。さて政府が釀造權を自らの手に收めたる以上は其釀造を內國人に託するも或は又外國人に託するも勝手であるが、內國人の不平を鎭むる爲に全量の四分の一は彼等に釀造せしむることを定めた。斯くて政府は其釀造せしめたる酒類を一手にて販賣するのであるから、一方には好箇の財源となり、一方には粗惡なる酒類を杜絕するの利益がある。これに依りて得る所の純益は前に陳べたる通り中央政府より州政府に渡すのであるが、玆に頗る面白き規定がある。即ち州政府は其得たる收入の十分の一を禁酒運動の爲に費さねばならぬといふのである。さて酒類の專賣より生ずる利益は每年六百萬法以上に達するが故に、各州が禁酒運動の爲に費すべき金は實に六十萬法である。或州にては大酒家の爲に設けたる病院を維持する爲に此金を使用して居る。或州にては救貧院、癲狂院、聾啞院等の爲に使用して居る。然れども下流を淸むるには先づ上流より始むべしとの理に從ひ、貧民學校の兒童に食物を供し、若くは貧民の食物を改善して、彼等が飮酒の惡癖に陷るを豫防することに盡力しつゝある所もある。其效果の見るべきものあるや否やに附きては玆に明言することは出來ないが、租稅の一部を割いて禁酒運動の爲に費すといふが如きは恐らく世界中に其比類を見ることは出來まい

第二の獨占事業は鹽であつて、製造は一個人に託して居るが販賣は州政府の一手にてやつて居る

第三は保險事業であつて、殊に火災保險は其重なるものである。二十五州の中十八州は火災保險を政府事業と爲して、私立會社の營業することを許さない。葡萄園の盛なる所に於ては雹害に對する保險法が設けられて居る、政府が自ら此等の保險事業を經營するのは必ずしも收利の目的ではなくて、全く公衆の利益を重なる目的として居るのである

第四は銀行事業である。多くの州に於ては政府の經營せる銀行が少くない。其目的は多少の利益を收むると共に人民に便利を與へんとするにある

次に政府の財源となるべきものは租稅であつて、中央政府は主として間稅に依り、州政府は主として直稅に依つて居る。或州にては地租を課する所もあるが、これは重要なる稅ではない。直稅としての重なる者には、先づ財產稅と所得稅を擧げねばならぬ。其他に人頭稅、遺產相續稅、兵役免除稅などがある。而して財產稅、所得稅、遺產相續稅などには累進法を用ゐて居るから、富者は常に貧者よりも多く租稅を負擔せねばならぬことになつて居る。勿論此累進法なるものは獨り瑞西に限りたることはない。何れの國に於ても多少此法を用ゐて居るけれども瑞西に於ては最も極端の度に於て之を應用し

て居るのである。彼の國には富者の進んで多くの負擔を爲すことを以て正當なる義務と考へて居る樣に見ゆる。これは慥に民主主義の結果である

中央政府の歳入は千九百○一年に於て一億二百二十四萬法であつた。今其財源を一々說明せんに、彼の州政府と同じく第一に來るべきものは公有財產である。千九百一年の統計に依れば中央政府の財產は一億八千六百七十三萬二千八百十法であつた。公債は九千二百四十二萬四千三百八十七法であるけれども、これを公有財產と差引すれば尙ほ澤山の餘剩があるのである。さて公有財產の次に來るべき財源は輸入稅であるが、これより生ずる收入は實に歳入の半を占めて居る。其他には郵便電信、火藥專賣事業より生ずる收入と、兵役免除稅の半額が財源となるのであつて、尙ほ不足額あれば州政府が其資力に應じて負擔する

之を要するに瑞西の財政は鞏固なる基礎の上に立つて居る。其歳出の割合もこれを他の强國に比すれば遙に少ないのである。これ軍備の負擔の少きにも因るであらうが、其主なる原因は瑞西人の實益を重んじて虛飾に流れぬ所にあると言はねばならぬ。米國が年々上下兩院の爲に四千五百萬弗以上の金を費すに反して、瑞西が議會の爲め五萬五千弗を費すは單に國の大小といふ理由のみにては說明することが出來ぬ。近年に至り都市改良事業が長足の進步をなしたる爲め公債額も俄に增加するに至つた。若し此上に鐵道國有を實行すれば更に七億二千五萬法の公債を增すであらうが、尙ほ歐米諸强國の公債に比すれば同日の論でない。まして鐵道の如きものは眞に利益を生ずるの事業であるから決して恐るゝの必要はない

第八章　軍備

瑞西は古來武勇を以て名ある國であつた。屢々墺太利と戰ひ、獨逸や佛蘭西の王侯に反抗したのである、彼のウヰルリヤム、テルの話の如きは實に善く瑞西人の氣風を現はしたるものと言うても善い。されば諸國の王侯は爭うて瑞西人を味方にせんことを勉めたのであつた。時に瑞西人が外國の雇兵となつて戰ひしが如きは餘りに賞讃すべきことではないが、亦以て如何に彼等が好戰國民であつたかを見ることが出來よう。然れども聯邦組織成立以前には各州は全く割據の情態に在つたので時に兄弟牆に鬩ぐの愚を演じたこともあつた。千八百四十八年始めて聯邦組織成るに及び中央政府にて軍隊を組織するの必要が起つた。然るに古來兵權を握り來りたる各州は中央政府の軍務省に兵權を一任することを危險なることに思ひ、今日も尙ほ權力の幾分を自己の手に保存して居るのである

瑞西は古來常備軍の制度を用ゐずして全く國民兵の組織を用ゐて居る。二十歳より三十二歳までの壯丁を以て現役となし、三十三歳より四十四歳までを後備とし、十七歳より五十歳までの者を國民兵と稱して居る。兵卒の訓練の如きも極めて簡單にして毫も彼等の職業を妨害するが如きことはない、現役に當れる者は第一年目に六週間兵學校に入りて訓練を受くるのである。其後は隔年に二週間だけ召集せられ、後備に入れば每年檢査の爲め一日間召集せらるゝのみで、訓練の爲には四年每に五六日召集せらるゝのである。然れども兵式的訓練は特り兵學校だけに限らるべきものでない。軍籍に在る者は怠らず射擊の稽古を爲さねばならぬ。故に日曜若くは祭日に於ては所々に銃聲を聽くのが常である。且つ小學生徒には十歳の頃より兵式體操を教ふるのであるから、軍事教育は割合に行屆いて居るといふことが出來る。斯くて一朝國

民が劍を揭げて起つの必要起れば、二十八萬の兵は忽ちにして集合するであらう。更に必要あれば五十萬の兵を動かすことも敢て難きことではない

瑞西人は武勇にして而も五十萬の兵を動かすことが出來る。然れども獨佛墺以の四大強國の間に立ちて果して其獨立を全うすることが出來るであらうか。これ單に瑞西の爲のみならず、歐洲の諸強國に取りて重要なる問題であつた。原來瑞西は天險の地で、一夫これを守れば萬夫も過ぐる能はずといふ國であり、且つ國民は武勇絶倫といふのであるから、先づ此國を味方にする者は歐洲に覇を唱ふることが出來るのである。瑞西人は早くより自己の地位を自覺して、外國の爭鬪渦中に投ずるの不利なることを知つて居た。故に十六世紀以後は常に中立を守りて外國の干渉を避くるの方針を採つた。玆に於て諸強國も瑞西の中立を認むるの利益なるを思ひ、千八百十五年パリ會議に於てこれを公認し、更にヴィーンの會議にてこれを確定したのである。瑞西政府は千八百五十九年の法令に於て明白に瑞西人が外國軍に投ずるを禁じ、亦外國人が瑞西にて募兵することを嚴禁した、亦瑞西の憲法には士官若くは兵卒は外國政府より年金、位階、勳章其他の贈物を受くべからずと規定してある

斯の如く瑞西は中立を布告し各強國も之を是認し居るにも拘はらず、尚ほ全く兵備を擲することの出來ぬのは何故であるか。瑞西にして一朝獨若くは佛と戰ふことあらんか、如何に天然の險を利用しても到底敵を拒ぐことの出來ざるは明である。然らば瑞西の運命は決して兵備の有無に依つて定まるものではない。寧ろ中立主義を貫徹する爲に全然軍備を廢するは策の得たるものである。然るに常備軍を存せざる瑞西は尚ほ二千八百五十五萬二千法の軍備を投じつゝある。これ全歳出の四分の一強にして、必ずしも輕き負擔といふべきではない。吾人は瑞西が未だ中立の恩澤を十分に享け得ざるを見て遺憾に堪へないのである。然らば瑞西は何が爲に今日も尚ほ兵備を存して居るのであるか。自衛の爲か。否々決して左樣でない。然らば何の爲か。吾人はこれを以て一の遺傳性に基くものと見るより外はない

瑞西人は愛國心に富める國民である。愛國心に富めるとは即ち其國の歷史を誇るのである。而して歷史を誇るものは勢ひ過去に愛着せざるを得ない。瑞西人が今日尚ほ兵備を存せるは即ち過去愛着の證として見るべきである。吾人は今彼等の愛國心が如何にして發現せらるゝか其一例を舉げて見よう。千六百二年十二月十二日の事であつたが、ゼネバの城壁に住せる一老婦は晩飯の用意をなさんとて羹汁を煮つゝ餘念もなかつた。然るに何心なく窓を開きて城外を眺めしに、豈に圖らんやサポイ公の兵卒暗に乘じて城壁を攀ぢつゝあるのを見た。老婦は忽ち敵の頭上に熱汁を注ぎ大聲を發して市民に警告した。玆に於て市民は首尾よく敵を撃退して幸に事なきを得たのである。爾來ゼネバ人は此出來事を忘るゝことが出來ない。毎年十二月に至れば十一日より十三日まで三日間市民は大騷をなしてこれを記念するのである。亦十二月三十一日はゼネバが瑞西の同盟に加入したる日であるから、これ亦嚴肅なる儀式を以て記念せらるゝのである。一月の十一日はペスタロジーの誕生日であるといふので學校の教師及び學生は盛にこれを記念する。これ獨りゼネバのみにはあらずして瑞西人民全體が多くの愛國的記念日を存することは實に著しき事實である。思ふに瑞西人は古來戰爭に巧にして、其建國も全く劍戟の力に因つたのである。恰も我日本の武士が廢刀の法律の爲に殆んど生命を

奪はれたるが如くに、瑞西人は過去の歷史を憶うて俄に兵備を撤するに忍びないのであらう。吾人は此外に瑞西に於ける兵備存在の理由を見ることが出來ぬ

世界の平和を來す爲には漸次中立國の數を增加するに如くはない。白耳義は千八百三十一年に中立國となつたのであるから、今や歐羅巴に於ては二個の中立國がある。近頃國際法學者として有名なるマーテンス氏は或雜誌に於て丁抹を中立國とするの利益を熱心に說いて居る。丁抹國を中立とすることは各國の利益であるのみならず、丁抹國民も大に希望して居るのであるから、これを成立せしむるには別段困難はない。若し丁抹の中立が行はるれば瑞典及び諾威もこれに倣ふに至ることは明白である。マーテンス氏は將來此等の中立國が世界の平和を來すべき動機となるべきことを論じ、中立國の受くべき利益に就きては左の如く言うて居る

中立國は勝利の思想とか政治的功名心とかいふものを棄てるのであるから、世界萬國と共に平和なる生活をなし、且つ其國民の道德的及び經濟的進步に全力を注ぐことが出來る。外交政策の如きは彼の關する所でない。彼の天職は唯平和と秩序的進步を宣傳するに在る。此永久的平和は歷史的經驗を基礎とするものであつて、實に近世國民の最高の希望である

これ國際法學者の中立國に對する意見である。瑞西の如き白耳義の如き未だ全く兵備を廢するの域に達しては居ないが、帝國主義に迷うて領土擴張を夢むることもない。亦敵國の爲に侵害を受くるの憂もない。故に外交上の事務は極めて閑散にして、外務長官の如きは單に一二の書記官と共に狹隘なる室にて事務を採るに過ぎないのである。瑞西政府が全權公使を送れるは獨佛墺以の四國のみであるを見ても其外交的關係の如何にも簡單なることが分る。然れども萬國に對する商業上の關係は頗る重大にして、每年の輸入額が十一億六千萬法、輸出額が八億萬法に達するのであるから、世界の要所には領事館を設立して居る。之を要するに瑞西は外交上に於ける勢力の極めて少なくして殆んど見るべきものはない。然れども一家の主人が交際場裡に幅をきかせつゝある間に、妻子眷族は飢餓の慘狀に陷りつゝあるといふは果して一家生存の目的に合うたるものといふべきか。吾人は寧ろ瑞西の如く交際上の華美を棄て、人民鼓腹の樂を採るに與せんと思ふのである

然れども外交上に於ける瑞西の勢力を皆無といふは決して適當でない。彼は自國の權利を擁護するに於ては一步も曲げぬのである。彼の外國政府の要求に應じて其亡命客を引渡すことを斷然拒絕したるが如きはこれを外交上の勝利と言はねばならぬ。瑞西は單に政治上のみならず思想上に於ても世界の志士論客の爲に自由の天地である。壓制政府の爲に放逐せられたる憂國者は茲に自由なる隱遁所を見出すべく、言論及び思想の自由を得ざる人は茲に來りて其言はんと欲する所を公にすることが出來る。獨逸政府が酷法を設けて社會黨の出版物に妨害を加へんとするや、社會黨は茲に來りて印刷物を調へ、陰にこれを本國に輸送して之を配布した。トルストイが其本國に於て其著書を公にするの難きを見るや、彼は原稿を茲に送りて印刷に附せしめた。噫自由の小天地！　國民に幸福を與へ自由平等を與ふ、これを外にして國家生存の目的果して何處にあるか。噫國家の榮譽何物ぞ、領土の擴張何物ぞ。世界の列國は宜しく此一小理想國の前に拜跪して羞死すべきである

第二編　教育

第一章　初等教育

凡そ一國の文明が如何なる程度にあるかを知らんと欲すれば先づ其教育の狀態に注目することが必要である。吾人にして若し瑞西の教育が如何に完全に行はれつゝあるかを知らば、彼の國が地上の理想國たる榮譽を負ふの決して偶然でないことを見るであらう。吾人は總論に於て如何に大學教育の盛なるかを示したが、今は初等教育の現況に就き少しく陳べて見たい

初等教育は無代價にて小兒に與ふべきものである。而して其教育は强制的でなくてはならぬ。是れ文明諸國に於て實行せられつゝある所のものにして、瑞西に於ては言ふまでもなくこれを原理として遵奉して居るのである。されば其憲法中にも、「初等教育は强制的にして公立小學校は無月謝なり」との明文がある。各州の憲法及び法令も此精神に基きて制定せられたるものである。勿論各州に於て初等教育の範圍に關する意見に多少の相違はあるけれども、小兒は何れも或年數間學校に行くべきものたることを規定し、各地に於て必ず校舍及び教員を備ふべきことを命ずるの點に於ては少しも異なる所がない。各州を若干の學區に分ち、各區に學務委員を設けて學事の管理をなすのである。學務委員は人民の選擧に據ることもあり、亦州の學務委員の任命に係るものもありて各州必しも同一ではない。各州の學務委員は州全體の學事を管理するものであつて、これ亦人民の直接選擧に據ることもあり、亦州立法部の任命に據ることもある

初等教育の經費は州と町村にて分擔することになつて居るが、其割合は各州同一でない。農業を主とする州に於ては町村が費用の大部分を負擔し、バーゼルシュタットの如き州に於ては州政府に於て殆んど經費の全部を支出して居る。若し全國を平均して言へば州の負擔は七分の二であつて、町村の負擔は七分の五である。而して吾人が玆に特筆せんと欲する所のものは法律の規定に依り各町村が教育基金なるものを備へ其利子を以て經費を補助しつゝあることである。既に前に陳べたる如く瑞西には多くの公有財産がある。これより生ずる所の利子を以て初等教育の費用を辨ずるは實に自由教育の目的に合へるものと言はねばならぬ。若し教育費の負擔が全く人民の肩に落ち來るが如きことあらば、彼等は時に近眼的政策を採りて教育費の削減を行ふことなしとも限らぬ。されば教育基金の爲に瑞西の初等教育が長足の進歩をなしつゝあることは決して爭ふべからざることである。さて其教育基金を有するものは獨り各町村のみならず、各州政府も亦少からぬ基金を有するが故に、教育の爲といへば惜氣なく多くの金を投ずることが出來る。勿論瑞西に於ける教育費の總額を他諸强國の其に比すれば敢て大なりとは云ひ難きも、これを人民の數に比例すれば其割合は慥に諸强國に勝りて居るのである

强制教育の年數は六年乃至九年であつて各州幾分か其規定を異にして居る。且教育の程度に關しても多少趣を異にして居るのである。小兒の年齡六七歲に至るに及びて始めて初等教育を受くるのである。幸にして瑞西には工場法の中に十五歲以下の小兒を工場に使用することを禁じてあるから、其年齡に達するまでは自然に教育を受けねばならぬことになつて居る

第二章　中學教育及び實業教育

初等教育を終りたる者の中には尚ほ進んで高

等なる普通教育を受けんとする者もあり、亦實業教育を受けて直に何等かの職業に就かんとする者もある。所謂中等教育なるものの年限は三年乃至七年にして恰も我中學教育に匹敵すべきものである。さて中學教育には二個の目的ありて、一は青年をして實際生活に入るの支度をなさしめ、他は彼等をして大學に入るの準備を爲さしむるのである。即ち前者は中學教育を以て終局となし、後者はこれを以て大學に入るの段階となすのだ。而して前者に屬する中學四十八にして、後者に屬するもの三十一といふを以て見れば、中等教育の盛なることは推して知ることが出來る。中學の外に補修學校といふのがある。これも小學卒業生の入るべき所であるが、其目的は何等かの職業に從事しつゝある青年をして進んで高等なる普通教育を受けしめ、或は文官試驗に應ずるの準備を爲さしむるのであるから、普通夜間に於て、或は日曜日に於て授業をなすことになつて居る。亦或州に於ては普通教育を修了せざる所の少年の爲に實業補習學校を設け、强制的に教育を施して居る所もある

近年瑞西が全力を注ぎつゝあるは實業教育であつて、其組織の完美せることは英佛獨の諸國も企て及ばぬ位である。職業學校及び工業學校の數合せて三百九十三。また商業學校十六。實業補習學校の數五十四であるといふを見ても其大を窺ふことが出來る。素より各州の政府が實業教育に力を致せしは古きことであつて、ゼネバに始めて工業學校の設立を見たのは千七百五十一年の事であつた。其後十一年を經てバーゼルに圖畫學校起り、續いてベルン及びツーリヒにも同種の學校を見るに至つた。然れども中央政府が精密なる調査を遂げたる結果、深く實業教育の必要を感ずるに至つたのは千八百八十四年の事であつて、爾來實業教育の爲には中央政府が十分なる保護を與ふることになつた。若し州政府或は團體或は個人にして此種の學校を設立し其費用の半額を辨ずるならば、中央政府は他の半額を補助すべしといふまでに奮發したのである。然し中央政府が此の如き補助を與ふるは決して州政府や地方政府の負擔を輕くせんとの趣意に出でたるものではなくて、益々學校の規模を擴張するにあるのだから、其補助金は重に標本の蒐集などに費して他の事柄に費さぬとのことを規定した。此補助法が一たび實施せらるゝや、在來の學校は殆んど皆其保護を受くることとなり、更に新しき學校が續々設立せらるゝに至つた。第一年に起りたる學校の數は九十二にして、其中六十一は實業補修學校、職工學校、圖畫學校であつた。さて中央政府の補助金は幾何であるかといふに、千八百八十四年には四萬二千五百法であつたのが、千八百九十四年には五十一萬五千法となつた。即ち十年間に十二倍强の增加である

實業教育の獎勵は單に學校の增設のみではなかつた。中央政府は更に進んで展覽會を設け、各學校生徒の製作品を蒐集して公衆の觀覽に供したのがある。第一回の展覽會は千八百九十年九月ツーリヒの高等實業學校にて開かれ、其費用は中央政府にて負擔した。ツーリヒの高等實業學校といへば、其學課の程度に於ても、諸種の設備の點に於ても頗る完全したるものであつて、これを獨佛の學校に比するも敢て遜色ない。第二回の展覽會は千八百九十二年バーゼルにて開き、第三回は千八百九十六年ゼネバにて開いたが、其度每に盛況を呈したのである。今や實業教育の設備は殆んど完全の域に達し、あらゆる職業にして其に適當なる學校を有せざるはなきに至つた。殊に吾人の注意すべきことは諸種の實業學校が地方々々の要求に應じて設立せられたることである。例せばノ

イシャテル、ゼネバの如き時計製造を以て有名なる所には時計製造の學校が設けられ、バットヴヰル、ヴヰップキンゲンに染織學校、ブリエンツ、ホフステーテンに彫木學校、フライブルヒに石工學校の設けられたる如き、何れも地方の要求を充たす爲である

吾人は今實例としてベルン市の徒弟學校に就き少しく陳べて見たい。此學校は千八百八十八年の設立であつて、以前盲者の爲に用ゐたる廣大なる建築物を今此學校の爲に使用して居る。其目的は靴製造、家具製造、錠製造及び錫細工の四職業に關し、青年に學理上及び實際上の教育を與へるのであつて、其生徒たるべきものは初等教育を終りたる者若くは數年間徒弟となりて實際上の修業をなしたる後尙ほ進んで學理上の教育を受けんとするものである。生徒は凡そ百名許にして半は寄宿し半は通學して居るのである。學校は別に月謝を徴收せざるのみならず、若し生徒にして規定以上の仕事をなす者あれば夫に對して相當の報酬を與ふるのである。即ち毎月末に其報酬の幾何なるかを計算し、其全額の五割乃至七割五分は直にこれを本人に渡し、其殘額を貯蓄して卒業の時にこれを與ふることとなつて居る。青年が其業を卒りて學校を出づる時に百五十法乃至二百五十法の貯金を受くることは少からぬ便宜を與ふるので、彼はこれを以て其職業に必要なる道具を購ふことも出來る。寄宿生は食料及び部屋代を拂ふことになつて居るが、其金額は甚だ少なくして殆んど實費を拂ふにも足らぬ位であるから、其代りに彼等は其仕事に對して一切報酬を受けぬことになつて居る。通學生は毎日無代價にて晝飯を供せられて居るが、これは秩序の爲時間節約の爲であつて決して慈善の爲めでない、修業時間は通常毎週五十七時間で、其中四十四時間半乃至四十七時間は實際的勞働に費し、三時間乃至九時間半は學問上の事に費すのである。學課として教ふる所のものは學理、圖畫、模型製造、算術、簿記等である。實際上の修業には熟練なる職工をして教師たらしめ、教師一人に就き六人乃至十人の生徒を教へしむるのであるから其結果は甚だよいのである。寄宿生は六時に起き六時半に朝飯を喫し七時に仕事を始め十二時に至る。十二時より一時半までは休息時間であつて、生徒は戶外に出でて遊ぶことが出來る。其より再び仕事を始めて七時半まで繼續し、其にて一日の業を終る。晩飯後九時十五分までは各自に讀書し、遊戲を試み、或は許可を得て市街に行くことも出來る。九時四十五分は臥床の時である。最後に學校の經費に就きて一言しよう。通常經費は十二萬五千法であるが、其内には製造品の原料をも含んで居るのであるから、製造品を賣却して得る所のもの五萬七千五百法を引去れば實際の經費は六萬七千五百法となる。此經費は中央政府、州政府及びベルン市にて各其三分の一を負擔して居るのである

第三章　大學教育

一國の文明の程度を量るには教育の情態を見るに如くはないが、殊に高等教育の程度が如何なる邊に在るかを見れば容易に其國の文明を知ることが出來る。瑞西は啻に初等教育及び中等教育に於て一頭地を拔いて居るのみならず、大學教育に於ても第一流に位して居るのである。左に揭ぐるは彼國の六大學校の統計である。

大學	學生	教員
バーゼル	五三一	九三
ツーリヒ	七〇三	一八〇
ベルン	一〇五五	一一一
ゼネバ	八六〇	一三七
ローザンヌ	六一八	七四

フライブルヒ　二九七　四八

此等の大學は其設立の年月よりいふも、設備の完全なる點よりいふも、これを諸强國の大學に比して遜色ないのである。バーゼル大學の設立せられたのは千四百六十年であつて、ゼネバ大學は彼の宗教家として有名なるカルヴヰンが千五百六十八年に興したのである。勿論ベルリン大學やヴヰーン大學等に比すれば到底企て及ぶことは出來ないが、彼のツーリヒ大學の如きはこれに高等實業學校や其他の學校を附加すれば、實に堂々たる一大學校にして、これを獨逸の諸大學に比肩せしむるも敢て差支ないのである。而して瑞西の諸大學が其所在の州政府に依りて維持せられつゝあることは殊に吾人の記憶せねばならぬ所である。特りツーリヒ大學のみは多く中央政府の補助を仰ぎ居れども、彼れゼネバ大學の如きは全く十一萬八千の人口より成れるゼネバ州に依りて維持せられつゝあるを思へば、强大を以て鳴る所の歐米諸國民は決して彼の瑞西の面前に於て誇ることは出來ない。古來大學なるものは獨り帝王の保護の下にのみ發達し得べきものと人々は考へて居た。素より帝王若くは豪族の庇保に依りて大學の發達したる例は決して少なくない。然れども吾人は瑞西の大學が民主政治の下に斯る發達をなしたるを見て、教育の發達は必ずしも富豪貴人の手を借るに及ばざるを感ずるのである

最後に一二の統計を掲げて瑞西の教育が如何に普及せるか、如何に彼等が教育の爲に惜氣なく金錢を投じつゝあるかを陳べよう。ヒックマンス氏が千八百九十七年に公にしたる處の統計表に依れば人口三百十五人に對して一の小學校があり、人口千人に就き百六十七人の小學校生徒がある。尤も徵兵檢査の時に調べたる所に依れば、瑞西に於ける無學無筆者の割合は瑞典獨逸よりも多いさうだ。これは瑞西の僻遠なる山地に於て生活の困難なるが爲め、教育の十分に行き屆かないに因るのであらう。千八百九十六年の統計に依れば、瑞西には一千三十二の新聞雜誌があつて、人口三千人に就き一個の新聞雜誌がある割合である。同年に於ける他國の有樣は如何であつたかといふに、合衆國は新聞雜誌一個に付き三千一百人、獨逸にては（千八百九十四年）四千七百二十七人、佛蘭西にては六千三百三十三人、英國にては七千八百人であつた。然し此の如き結果は全く教育に依りて得らるべきものであるから、吾人は更に進んで瑞西の教育費の幾何なるかを知るの必要がある。千八百九十六年の統計に依れば、諸種の教育の爲に州政府の費したるものが千八百九十二萬五千八百七十五法、地方政府の費せしものが二千一百六十六萬五千二百二十二法、之に中央政府の補助費百九十三萬九千九百二十七法を合すれば總計四千二百五十三萬一千二十六法となる。其内初等教育に費されたるものは二千三百五十五萬五千九百法であつて、これを小學校の兒童數に割り當つれば一人の教育費五十法となるのである

第三編　社會問題

第一章　工場法

社會問題として論ずべきことは數多あるけれども、吾人が茲に論ぜんとするのは勞働問題と慈善問題の二である。抑も教育なるものは一國文明の程度を量るに極めて適切なる標準であるが、更にこれに勝りて文明の情態を知るべき好箇の標準は社會問題の趨勢である。凡そ社會の進步が或程度に達すれば必ず教育なるものがこれに伴うて居る。故に教育は人類歷史の始まりたると同時に於て始まりたるものと言うて

も差支ない。之に反して社會問題は比較的近世のものであつて、社會の進歩が幾分か其勢力を閑問題に注ぐの餘力を生ずるまでは人々の注意を惹くことはないのである。吾人は決して社會問題を以て閑問題といふのではない。然れども社會が單に生存の事のみに汲々として居る間は慈善問題とか勞働問題の爲に力を及ぼすことは出來ぬ。殊に勞働問題の如きは社會が十分なる發達をなしたる後にあらざれば人々の注意を惹くものではない。試に我國の現狀に就て見るも吾人の言ふ所の正當であることが分る。我國が教育の爲に十分なる力を注ぎ居ることは事實であるが、慈善事業に至りては未だこれといふべき程のものがない。勿論近年に至り孤兒院養育院などの設立せられたるものは少くないが、これを歐米諸國の其に比すれば殆んど話にもならぬ。殊に勞働問題に至りては皆無であつて、工場法の如き最も初歩のものすら未だ制定せらるゝに至らない。吾人にして一たび瑞西の勞働問題が如何に滿足なる解釋を得つゝあるかを見ば、唯驚嘆と羨慕の念に打たるゝより外ないのである

工場法とは勞働者の爲に工場の設備を完全にし、勞働時間の制限をなし、殊に小兒及び婦人の勞働に對して十分なる保護を與ふることを目的とする所の法律である。瑞西の工場法は千八百七十七年に制定せられたるもので、其法律の適用せらるべき工場とは五人以上の勞働者を使役して其内には十八歲以下の勞働者を含めること、亦其勞働者に對しては生命にも亦衞生にも危害を與ふる如き事業を行ふ所を言ふのである。若し亦十八歲以下の勞働者をも使用せず、衞生上の危險もなき場合は勞働者十一人以上を使用せる處を以て工場と見做すのである。先年我國にて發表せられたる工場法案に於て二十五人以上の勞働者を使役する所を以て工場を認め居るに比すれば二者の間に少からぬ相違のあることを認むることが出來る。千八百九十五年の統計に依れば瑞西にて工場法の適用せらるべき工場數五千を超えて居た

工場の建築は勞働者の生命及び健康に危害を及ぼさぬ樣十分の注意を加へねばならぬ。即ち光線の照射、空氣の流通に關して滿足なる設備を爲すべきのみならず、火災の場合に於て勞働者が容易に逃れ得るの方法を備へねばならぬ。亦器械の周圍には柵を設けて危險を豫防するの策を講ずることが必要である。若し勞働者にして勤務中負傷し若くは死亡することあらんか、雇主はこれが報告を爲すべきは勿論にして、彼は亦其賠償の責に任ぜねばならぬ。よし其死亡が工場設備の不完全に原因せざるにせよ、若し支配人及び職工長などの怠慢に原因したるものならば雇主は決して其責を免るゝことは出來ぬ。萬一天災及び自己の怠慢の爲に勞働者が負傷若くは死亡する場合には幾分か賠償額を減ずることあるも、雇主が全く責任を免るることは出來ない

勞働時間は瑞西の工場法に十一時間と定めてある。但し土曜日は十時間である。若し勞働者にして已むなく夜業を爲すか、或は亦制限時間以上の勞働を爲す必要ある時は特別に認可を受けねばならぬ。普通日曜日を休日として居るけれども、若し職業の都合に依りて日曜日にも勞働するの必要あらば特にこれを許すことはあるも、隔日曜日には必ず休業せねばならぬことになつて居る。祭禮の日は毎年八日を超えざる範圍に於て勞働者は休業することが出來る。倘此以上に宗教的祭日ありて、若し勞働者が自ら休息せんと欲する場合には雇主はこれを拒む譯にゆかぬ

婦人及び小兒を保護するは工場法の主なる目的であるが、瑞西の工場法は此點に於て殊に

勝れて居るのである。婦人は如何なる場合に於ても夜業をなし若くは日曜日の勞働をなすことは出來ない。日の休息時間も男子は通常一時間であるが、婦人には一時間半の休息を與ふべきことが規定してある。これは勿論正午に於て三十分だけ早く退場すれば、女子は自宅に歸りて晝飯の支度をなすの便宜を得るが爲であるが、今一の理由は出來得るだけ婦人の勞働を輕くせんとするにあることは玆に喋々論ずるまでもない。亦婦人は出産の前後に於て各八週間休息せねばならぬことになつて居る。産後の休息は規定通りに行はれて居るが、産前の休息は實際に行はれ難き事情がある。婦人勞働者と雖も何れも賃銀を得ることに汲々として居るのであるから、休息中も賃銀の幾分を與ふるとの制度を設くるにあらざれば、彼等を休業せしむることは難いのである

滿十四歳以下の小兒には一切勞働を禁じて居る。亦十四歳より十六歳までの者にして未だ初等教育を終らざるものある時は、勞働の傍ら相當の教育を授くるの必要がある。故に勞働の爲に教育の時間を犠牲にすることは出來ぬことになつて居る。抑も滿十四歳以下の者に勞働を禁ずることは殆んど世界無比であつて、此點に於ても瑞西の如何に他文明國に凌駕して居るかが分る。千八百九十年獨逸皇帝の首唱に依り、萬國勞働大會議をベルリンに開くや、瑞西は他國を誘引して十四歳以下の小兒に勞働を禁ぜしめんとした。然れども大會の意向は滿十二歳といふことであつた。我日本の工場法案には十一　と定めてあるが、其瑞西に及ばざる甚だ遠しと言ふべきである。瑞西にては十八歳以下の者に夜業を禁ずとあるに對して我工場法案には十六歳未滿とある。尤も瑞西に於ても已むを得ざる場合に限り十四歳以上の者には夜業を許すことになつて居るが、我法案にては同樣の場合に十三歳以上の者に許すといふのである

勞働者の賃銀は之を他の諸強國に比すれば概して低廉である。時には賃銀增加を請求して其許容せられざるに當り勞働者が同盟罷工に訴ふることもある。瑞西には英國の如くに勞働組合の設立多くない、從つて其勢力も微々として振はないのであるが、一たび同盟罷工を企つれば多く成效する。或人はこれを聽いて頗る奇異の感を生ずるかも知れぬ。抑も勞働組合なくして同盟罷工を企つるは恰も兵器なくして戰ふが如きではないか。瑞西の勞働者が理に於て敗るべくして其實に於て勝利を占むるは何故ぞ。これ一應尤もなる疑であるが、若し一たび瑞西に於ける民主主義の勢力如何を知る人あらば必ずやストライキの成效する所以を悟るに相違ない。今實例を擧げて示さんに、千八百九十五年ソリュ ーといへる處に於て時計製造人の同盟罷工があつた。郡會は毎週五百法を支出して罷工者を補助すべきことを議決した。資本家は頗る不平に堪へないので終に州政府に訴へて郡會の議決を取消さしめんとした。所が州政府の返答が甚だ面白い。罷工者も衣食の缺乏の爲に窮して居るのであるから他の貧民と同樣に救助する必要がある。若し郡會が是迄貧民救助の爲に投じ來りたる經費さへ削減することなくば、其餘力を以て罷工者を補助するに就きては州政府はこれを制止する譯にはゆかぬと言つた。公費を以て罷工者を助くるが如き大膽なる事を爲す國が瑞西の外にあるであらうか

工場法實施の爲には中央政府と州政府と協力して居るのである。更に三人の工場視察員なるものを設け、全國を三區に分ちて各其一區の視察を爲さしめて居る。視察員は毎年一度若くは二三度其擔當區の工場を視察するのであるが、彼等の職掌は啻に視察のみではなく、

往々勞働者の顧問となりて其助言を與ふるに在る

第二章　勞働局

勞働問題を解釋するには先づ勞働に關する材料を得ねばならぬ。故に英國や米國の如きに於ては夙に勞働局の設ありて、勞働に關する有益なる材料を蒐集して居るのである。瑞西の勞働局なるものは其組織半官半民とでもいふべきで餘り他に其類を見ない。瑞西にはグリーテリー同盟と稱する勞働團體があつて、其歷史よりいふも、其會員數よりいふも第一位を占むべきものである。設立以來此團體は進步主義に依りて常に自由思想を鼓吹して居た。グリーテリーといふ名稱の起原に依りても此團體の抱負を窺ひ知ることが出來る。グリーテリーとはウリ州に於ける牧場の名であつて、千三百七年十一月七日の夜、諸州の代員三十三名相集まりて墺太利の官吏を國外に放逐することを決議したる所である。グリーテリー同盟は更に四級團の自由解放を目的として進み、今は全く社會主義を標榜するに至つた。瑞西の勞働局の設立を見るに至つたのは全く此團體の盡力に依つたのであつて、初めに此團體は中央政府に請願書を出し、勞働問題調査の目的を以て一人の專任書記を置くに就き、其俸給を中央政府の負擔にせんことを要求した。これ決して不當なる請求ではないので、其當時中央政府が私立團體の事業を奬勵する爲に書記の俸給を補助せし例は乏しくなかつたのである。玆に於て中央政府はグリーテリー同盟の請願を容れ其補助を與ふることになつた。他の勞働團體も其趣旨を贊して入會を申込むことになつたから、其計畫も漸次擴張せられ終に國家的性質を帶ぶるに至つたのである。中央政府は第一年に於て五千法の補助を與ふるの約束をなし、且つ左の條件に從ふべきことを命じた。第一勞働局の委員を組織するには各勞働團體の人數に應じて其代表者を出すべきこと。第二委員は書記を任命し書記は委員の命令に從つて活動すべきこと。第三農工商務省は其代員を委員會に列せしむるを得ること。而して其書記を如何にして任命せしかに就きては頗る注意すべきことがある。即ち新設の勞働局は如何なる活動を爲すべきかに就き廣く懸賞的意見を募つたのであるが、ツーリヒの有名なる統計學者ヘルマン、グロイリヒの説が最も適當なるものと認められたるがため第一期の書記に擧げらるゝことになつた。此同盟に加はりたる勞働團體の數は百四十二で、勞働者の數を以て言へば十萬人である。千八百八十七年の四月アールゴーといへる所に於て第一回の大會を開き、グリーテリー同盟の會長が議長に選ばれた。書記グロイリヒは此大會に於て正式に任命せられ、其任期は三年であつたが、彼は其後二度引續いて再選せられたのである。以上陳べたる所の勞働局設立の由來であるが、吾人は更に進んで其事業に就き少しく陳べて見たい。始めグロイリヒ氏が懸賞論文に於て其意見を公にしたる所に依れば、第一に爲すべき事業は完全なる勞働者負傷保險制度を設くるに在つた。然れども保險制度を設くる前に先づ爲さゞるべからざることは賃銀の統計を得ること、現存の保險制度が負傷の場合に幾何の扶助金を支拂ひつゝあるかを知ること、及び工場工業或は其他の工業に從事する勞働者の數を明にすることである。グロイリヒは各州の政府と氣脈を通じ、あらゆる工業、商業、農業の團體と其意見を交換し、終に第一着の著述として精密なる賃銀統計なる書を公にするに至つた。續いて千八百九十年より九十三年の間に於て全國に起りたる勞働者負傷の統計を調製した。斯の如く、書記の事業は全く科學的

にして事實其物を供給するに在る。故に政治的運動を爲すが如きは全く勞働局の關せざる所といつて差支はない

第三章　勞働裁判所

資本家と勞働者が各我意を突き通さんとすれば其結果同盟罷工となるか工場閉鎖となるより外はない。これが爲め兩者の損する處は非常なるもので其慘害は戰爭と異ならぬのである。若し戰爭は野蠻なりと説く人あらば、彼は亦同じく資本と勞働の衝突を以て恐るべき事實と認めねばならぬ。戰爭を全廢するは社會の理想であるが如く、同盟罷工を根絶せしむるは亦平和主義者の熱望する所である。若し仲裁裁判法が廣く諸强國の間に行はるゝに至れば最早戰爭をなすの必要はない。其と同樣に仲裁裁判を以て勞働上の紛爭を解くの途あらば、同盟罷工の如きは全く其跡を絶つに至るであらう。彼のニュージランドはストライキのなき國と稱せられて居る。蓋し彼處には完全なる仲裁裁判法が實行せられて居るからである。瑞西の勞働裁判所なるものも其目的は全く資本と勞働の無益なる衝突を避くるに在るので、此點に於ても世界の諸强國は大に瑞西に學ぶ所がなくてはならぬ

瑞西に於ける勞働裁判は全く各州の管理する所であつて中央政府は與り知らないのである。故に各州幾分か其趣を異にし、或ものは勞働裁判を强制的とし、或ものはこれを隨意的として居る。吾人は今バーゼル、ベルン、ゼネバの都市を標本として仲裁裁判の如何に實行せられつゝあるかを説かん

バーゼルの勞働仲裁裁判所なるものは千八百九十八年四月の法令に依りて生れ出で、爾來既に十有餘年の試驗を經來りたるものなれば、其成效に就きては最早疑を存するの餘地はないのである。其法令の示す所に依れば、若し資本家と勞働者の間に紛議を生じて其事件の關する處三百法を超えず、而も彼等が之を通常の法廷に訴ふることを好まざる場合に於ては、これを勞働仲裁裁判所に訴ふることが出來る。裁判所は工業の種類に依りて十部に分たれて居る。例せば織物業、建築業、裁縫業、印刷業、運漕業といふが如くにあらゆる職業を分類して十個としてあるので、一部毎に裁判官が設けられて居るのである。裁判官の數は各部十二人にして半數は資本家、半數は勞働者が選擧するのである。任期は三年にして、資本家たると勞働者たるとを問はず齡二十四歳に達すれば選擧權も被選擧權も得るのである。然し此等の判官が一々裁判事件に關するといふ譯ではない。裁判所には一人の裁判長なるものがあつて、これは普通の裁判所長の中より擧げられたるものである。此裁判長は一事件の生ずる毎に其所屬の部より豫て選擧せられ居る裁判官二名を擧げて其職に當らしむるのである。而して二名の裁判官は必ず一名が資本家、一名が勞働者でなくてはならぬ。且つ前に陳べたる通り各部に十二名の裁判官があるのだから、裁判長は交る〲彼等を擧げて其職に當らしむる樣せねばならぬ。吾人は裁判官といへば直に法服を着けたる官吏を聯想すれども、勞働裁判所の法官なるものは決して專任の官吏ではない。彼等は平常資本家として勞働者として働きながら、其事件の起る毎に法官の資格を以て其曲直を辨ずるのみである。亦裁判を開くに就きても勞働者に都合よき時間を選ばねばならぬのであるから、通常夜間に開くことになつて居る

千八百九十五年の統計に依ればバーゼルの勞働裁判所にて取扱はれたる事件が七百五十三

件でこれに前年より繼續せる事件五個を加ふれば合計七百五十八件であつた。其中普通裁判所に上告したのは僅に七件で其他は皆勞働裁判所にて裁判確定せられたのである。此制度の結果は全體に於て良好であるが、資本家側の不平を聞けば裁判所は勞働者に對して餘り同情があり過ぎるといふことだ。何にせよ民主國の勞働者は實に幸福なるものである

ベルン市に於て勞働裁判所を設けたのは千八百九十五年であつた。其前年州政府は裁判所の構造及び行動に就きて法令を公にしたのであるが、ベルン市はあらゆる商業團體及び勞働團體に就きて勞働裁判所を設立するの可否を問うた。此等の團體は啻に反對を唱へざりしのみか、速に斯る裁判所を設立すべしと返答した。茲に於てベルン市の事情を參酌して裁判所設立の案は起草されたのであるが、市民は百七十九に對する二千九百八十五の多數を以てこれを可決したのである。さればベルン市に於ける勞働裁判所は全く資本家及び勞働者の希望に依りて設立せられたるものと言うてよい。裁判所の組織はバーゼルの其と大同小異で、八部に分れ各部に十六人の判官を置き、其內半數は資本家半數は勞働者とし、三年每に選擧することとなつて居る。判官は裁判長一名と副裁判長二名を選擧するのであるが、彼等は必ずしも資本家若くは勞働者でなくてよい。其他に書記を置きてこれには千法乃至二千法の俸給を拂うて居る、裁判長及び副長は集會每に五法、其他の判官は三法を手當として受くるのである。凡そ四百法を超えざる所の事件は悉く此裁判所にて取扱ふのであるが、其判決に對して上告することが出來ないのである。但し被告が公判の通知を受けざるか、若くは自ら法廷に於て辯護するの機會を得ざりし場合には上告することが出來る。但し高等なる裁判所に上告するのではなくて單に勞働裁判所にて以前と異なりたる法官の前に再審を受くるのである。若し事件甚だ小にして金額百法を超えざる時は法官の數僅に三人であつて、裁判長と資本家及び勞働者各一名である。若し金額百法を超ゆれば裁判長の外に資本家及び勞働者各二名である

ゼネバの仲裁裁判所は一種特別の性質を備へて居る。其設立は千八百八十三年で、始めは工業及び商業上の紛爭のみに關係して居たのであるが、千八百八十九年には其範圍を擴張し、資本家と勞働者、雇主と被雇者、雇主と徒弟、主人と奴僕との間に起る紛爭に就き判決を爲すこととなつた。裁判官は資本家及び勞働者より各半數を出すことになし、必ず瑞西人たるべしといふ規定である。裁判は工業及び商業に關することと、農業及び個人に關することの二大部に分れて居る。各部に三十人の法官ありて半數は資本家、半數は勞働者より選ばるゝのである。而して其人々はなるべく各種の職業を代表するやうに選擧せらるゝことになつて居る。法官は互選を以て裁判長、副長、書記、副書記を擧げこれを委員と稱するのである。裁判長は資本家と勞働者とが交代にて勤むることとなり、亦彼等の勢力平衡を維持するが爲め、資本家より裁判長を出す場合には勞働者より副長を出し、書記及び副書記に對しても同樣の方針を採ることに定めてある。吾人は今仲裁裁判所が如何なる作用をなしつゝあるかを說明せん

第一は勸解局と稱すべきものにて一名の資本家と一名の勞働者が判官となり原被兩告に對して和解を試むるのである。若し彼等にしてこれに應ぜざれば判官は普通の意味に於ける裁判上の判決を下すのであつて、金額二十法を超えざる場合に於ては上告することが出來ぬのである。第二は純粹なる仲裁裁判にて裁判

長の外に三人の資本家と勞働者が判官となり、原被兩告は證據人を呼び出すことも出來る金額五百法を超えざる場合に於ては此裁判は最終と認められ上告することが出來ぬ。第三は控訴院とも稱すべきものにて金額五百法以上の事件に對する仲裁裁判の判決に不服なる時は控訴院に上告することが出來る。法官は裁判長の外に資本家及び勞働者各五人に依て組織せられて居る。第四は徒弟に關し若くは工場衞生に關して監督を爲す所の委員である

法官は集會毎に三法、裁判長、副長、書記、副書記は各五法の手當を受けて居る

仲裁裁判所を以て單に司法的のものと思ふのは誤謬である。其作用の一部は全く勞働局の如きものであつて常に勞働問題の大勢に就き注意を怠らぬのである。勞働上の紛爭を裁決することは素より主たる目的に相違なきも、工場衞生の取締を爲すが如き、或は徒弟の契約に就き監視を怠らざるが如き其活動の範圍頗る廣しと言はねばならぬ。さればゼネバ市民のこれに對する熱心は年々其度を高め、今や他の都市に對して好模範を示すに至つた。吾人は勞働問題解釋の一良法としてゼネバ市の實驗に對し大に學ぶ所があるのである

第四章　勞働者家屋問題

都市の人口膨脹するに從ひ家賃の漸次に增加することは著しき事實にして、少額の賃銀を得つゝある勞働者が、之が爲に大なる苦痛を感ずるは人々のよく知れる處である。故に大都會に於ては所謂貧民窟なるものありて、勞働者は狹隘なる而も不健康なる家屋に住居するのが常である。彼のロンドンやニューヨークの如き大都會に於ては近年貧民の爲に模範的長屋を建築し之を廉價にて貸與するの運動を見るに至つた。然るに瑞西の都會たるベルンやゼネバは其人口僅に五六萬を超えざるに拘はらず、既に此問題に對して愉快なる解釋を與へて居る。而も其解釋が彼の諸强國に於けるが如く、單に個人に依りて試みられつゝあるのみならず、都市自らの事業となり居ることは殊に吾人の大に注意せねばならぬ處である

ベルン市は其北方に當り市の中心よりは半時間を要すべき距離にあるワイラーフェルドと言へる所に百軒許りの住家を有して居る。四軒一棟となりて居るのもあれば一軒づつ一列に竝んで居るのもある。小さき家は廚、居間兼寢室、及び物置に分れてあるが、大なる家は二つ以上の寢室を有するのみならず、部屋も概して廣い。各住家の周圍には十分なる空地があるから果實や菜蔬などを栽培することが出來る。道路は廣濶にして兩側には果實樹が栽ゑてあるから、其より生ずる利益が收入の一部となつて居る。亦小兒の爲には殊に運動場などが設けてあるので眞に愉快なる一部落をなして居る。借家人は何れも其家財に對して保險を爲すことに定めてあるが、其保險料は極めて廉なるものである。斯の如く種々なる便利が與へてある代りに借家人は衞生上道德上の規律に從はねばならぬ　然し彼等が如何に此部落に生活することを好めるかは借家人の移轉の甚だ少なきを見ても分る。概して言へば借家人の多くは多人數の家族を有するものである。これは市が小家族の者よりも大家族の者に先づ借家人たるの權利を與ふるからであらう。誠に細事にまでも注意が善く行き屆いて居るのである。市會は近頃借家人の希望に應じ年賦を以て住家を賣渡さんとの計畫を爲しつゝあるといふことだが、若し此事が實行せらるれば勞働者の爲には一層便利を增すであらう

ゼネバ市に於ては勞働者家屋問題に對して二個の案が提出せられて居る。然しこれは數年前

の事であるから今は二案とも實行せられて居るかも知れぬ。第一案は市内の一部に在る舊家屋を取り拂うて茲に新しく勞働者の爲に長屋を建てるといふのである、第二案は社會主義者の提議したる所のもので、市外の一部を選びて模範的の家屋を建てんとするのである。今第二案に就きて概略を陳ぶることにしよう。經費の概算は十五萬法で、家屋數は三十、家毎の室數は三個乃至四個といふのである。家屋は勞働者の希望に依りて賣渡すことにもなつて居る。家賃は經費に對する百分の六を超ゆべからずとの規定である。然し經費に對する實際の金利は年三分五厘であるから、これを六分の家賃より引き去れば尚ほ二分五厘の餘剰がある。更に此二分五厘中より修繕費、租税、保險料、水道税、電燈料等を拂ひ去りて尚ほ幾分の餘剰にてもあらばこれは全く借家人の所得となるのである。若し勞働者にして借家を購はんと欲する場合には市は二十ケ年賦にてこれを賣渡すべし、萬一勞働者が全額の半を拂うたる後續いて年賦金を納むる能はざる場合には市は其拂込金に相當の利子を添へて返戻するのである。これ即ち第二案の設計であるが、其用意の周到なることに就きては今茲に喋々するの必要はない

瑞西に於ける家屋問題の解釋は單に市によりて爲さるゝのみでなく、個人の手によりて試みられつゝある場合もある、ノイシャテル市の製造家ズハード氏の如きは其一人であつて、彼は其雇人の爲に市外の或場所を選びて家屋を建築した。小き家は廚及び物置の外に三室を有し、大なる家は五室を有して居る、家賃は普通のものに比して殆んど半額であるが、小き家には毎月十七法半、大なる家には十八法半位を課して居る　二年毎には各家を檢査するのであるが、若し借家人の注意善く行屆きて少しも修繕費を要せざる時は、其修繕費として宛てたる金額を借家人の名義にて貯蓄銀行に預くるのである。ズハード氏の言ふ所に依れば此規定は大に借家人をして家屋を大切にするの念を强からしむるに效驗あるさうだ。各家屋の周圍には庭園の設あるのみならず、全村の爲に小き圖書館の備がある。毎週四晩は男子の爲に三晩は女子の爲に開かるゝことになつて居る

第五章　勞働者救濟所

失業者を如何に救濟すべきかは勞働問題を解する者の最も注意を要すべき所にして、以下數章に於て陳べんとするところは即ち失業者救濟の方法である。勞働者救濟所とは如何なることを目的とするのであるかといふに、失業者が職業を求めんとて旅行しつゝある時、食物或は宿泊の爲に拂ふべき金錢を有せざる場合に相當の扶助を與ふるに在る。勿論瑞西には同業組合の組織があるから組合員たるものは組合より多少の補助を受くることは出來るが、不幸にして數週間其職を得ること能はざる時は忽ち飢餓に陷らねばならぬ。これ勞働者救濟所の必要なる所以にして、救濟所は彼等の爲に晝飯を供し、若くは晩飯を與へて宿泊をも許すのである。此救濟制度は瑞西の專有ではない。獨逸に於ても盛に行はれて居るのであるが、其完全なる點に於ては幾分か瑞西に劣りて居る所がある

瑞西にて獨逸語を用ゆる州の内十一州は聯絡して救濟事業を行うて居る。其内六州にては州政府が自ら其事業を經營し、五州に於ては個人的事業になつて居る。千八百九十五年の統計に依れば十一州にて一年間に發したる晝飯券の數は四萬五千四百六十六で、晩飯及び宿泊の爲に發したる券數は十一萬七千四百四十四であつた。而してこれが爲め費されたる金額は十三萬法であつた。以て其大要を知ることが出來る。

勞働救濟所には必ず勞働記錄所なるものがある。其所には其地方の重なる雇主の姓名を記錄し、亦如何なる職業が行はれつゝあるか、或は被雇者中に缺員あるかを明記して備へてあるから、失業者は其媒介にて職業を得ることが出來る。現に千八百九十五年には二千四百二十六人許の失業者が斯くして職業を見出したのである。尚ほ附記して置きたいのは勞働記錄所は其の周旋料として一錢の報酬をも受けぬことである

、勞働者救濟所の實例としてはツーリーヒ州の規則を掲ぐるが最も適當であるから吾人は茲に其大略を陳ぶることにしよう。救濟を受けんとする所の失業者は兼て己が屬する所の同業組合より若くは市町村役場より證明書を得て置かねばならぬ。さて其旅行先にて救濟を受くるの必要ある場合には巡査の屯所若くは檢査官の所に至りて證明書を示し、更に彼等の證明を得て勞働者救濟所に至るのである。救濟所にては己が姓名年齡職業原籍等を記錄せねばならぬ。斯くて其手續を終れば食事も出來、宿泊も許さるゝのみならず、救濟所は彼の爲に職業を周旋し、若し亦必要あれば新しき衣服をも給するのである。但し失業者にして過去三ヶ月間全く職業に就かざりしとの確證あるか、若くは職業を與へてもこれを爲すことを欲せざる場合には斷然救濟所に受け入るゝことを拒絶することになつて居る。これ純然たる乞食を拒ぐのみならず、苟くも乞食根性を存する者を排斥するには必要なる規定である。更に乞食排斥を行ふ爲に左の如き規定がある。失業者は同一の救濟所に於て六ヶ月内に二度救濟を受くることを許さぬ。亦救濟を受けたる者は次の救濟所に至りて救濟を受くるまでには少くも二時間以上旅行したる者に限るといふ規定であるから、始終同所に止まりて數個の救濟所を食ひ廻るが如きは到底出來難い事である。而して救濟は單に中食を供するか、若くは晩食と宿泊を許すのであつて、中食より晩飯まで留まることを許さないのであるから、失業者は常に一の場所より他の場所に向つて動いて居らねばならぬ。これは乞食排斥の爲には最上の策である。中食は通常スープ、蔬菜、パンで其價が我十二錢位。晩飯と朝飯は珈琲にパンのみである。然し宿泊の費用をも加ふれば凡そ三十二錢位になる。ブランデーを用ゆることは嚴禁してある。若し宿泊中秩序を壞亂するが如きものある時は直にこれを警官に引渡すことになつて居る

以上陳べたる所は人口三十萬を有するツーリヒ州の制度であつて、其經營は全く州政府の手に在るのである。全州を十二區に分ち各區に四個の救濟所が設けてある。千八百九十四年中全州の救濟所にて供したる晝飯數は五萬五千八百八十三、宿泊數二萬一千七百三十七、其經費は二萬七千五百法であつた

勞働者救濟所は單に衣食住の供給を爲すのみではない、其組織には宗教的教育的社會的方面がある。故に此所に來つて宿泊するものは啻に飢渇の苦を免るゝのみならず、種々なる點に於て精神的の補助を受くるのである。救濟所の管理者を以て木賃宿の主人の如く見做すは大なる間違だ、彼等は勞働者の爲に親切なる友人且つ相談相手であるから遠慮なく彼等に來つて種々なる忠告を受くることが出來る。救濟所に於てはカルタ、球突、喧噪なる唱歌などが嚴禁せられて居るから、品行善良なる青年勞働者が宿泊することありても決して惡習に感染するが如きことはないのである。此制度あるが爲に勞働者は自己の品位と自重心とを傷くることなく、而も旅費の準備なくして安全に國内を旅行することが出來るのである。失業者の

爲には何たる大なる幸福であらうか
然し此制度が將來尙ほ發達の餘地を存して居ることは一言して置かねばならぬ。斯の如く半ば慈善的の性質を帶ぶる事業には統一といふことが甚だ必要である。然るに瑞西に於ける勞働者救濟事業は其一部政府事業となり他の一部は個人的事業となつて居るから、幾分か統一を缺くの恐がある。されば將來に於て全くこれを政府事業となすことは經營の點よりいふも效果の點よりいふも大なる利益があるに相違ない。今一は勞働團體との關係を密接にし、兩兩相待つて失業者の扶助を行ふことである。若し此二點に於て漸次發達を爲さば勞働者救濟所が失業者問題に對する有力なる解釋法となることは疑ふべくもない

第六章　勞働者殖民地

失業者を田舍の殖民地に收容して農業に從事せしむるの計畫は特り瑞西の專有でなくて、文明諸國には多少其實例がある。英國及び米國に於ては救世軍の事業として幾多の勞働者殖民地が設けられて居る。彼のテームス河口に在る救世軍の殖民地ハッドレーの如きは數萬町步の土地を有し、二百人以上の勞働者を收容して居る。獨逸に於ても千八百八十二年の頃工業上の大變動ありたる爲め二十萬人の失業者を生じたが、これが動機となりてデーボルシュヴヰンゲといへる宗教家がビーレフェルドといへる處に殖民地を設けたるを始めとし、今は其數三十以上に達し、此處に收容せらるゝものは殆んど十萬人に達して居るといふことだ。瑞西の殖民地は全く獨逸に學びたるもので、其數は僅に二ケ所である。其所に收容せられたる失業者の數も甚だ少ないのであるから、勞働者救濟所の如き大なる效果は見えぬけれども、これを看過するのも殘念であるから極めて其大略を記することにしよう

二の殖民地の內で舊く且つ重要なるものをタンネンホフ殖民地といふ。ノイシャテル州の首府より遠からぬヴヰツヴヰルといふ所にある。四十町步餘の耕地と少しの森林と二棟の建物と幾多の小屋がある。始め六萬法を投じてこれを購入し、更に畜類や新家屋の爲に三萬法を費した。資本は公費と私費とより成つて居るが、經營は全く個人の手に在る。殖民地の目的は失業者若くは感化院より出で來りたる者に臨時の職業を與ふるに在るので、決して永久に彼等を收容するのではない。故に冬時職業の少なきに際しては申込人非常に多く、時には滿員となることもある。然し夏時は之に反して殖民地に止まるものが甚だ少ない。これが爲め殖民地の經濟に大なる影響が來るのである。何となれば殖民地に於ける多忙の時は夏期にして、最も閑暇なるは冬期であるからである

殖民地に來りて勞働に從事するものは必要なるだけの衣食住を得ることが出來る。每日の規程は嚴重に制定せられてあつて、人々はこれに服從せねばならぬ、夏期は每日四時に冬期は五時に起床するのである。洗滌を終りたる後暫時宗敎的儀式を行ひ、其より直に勞働に取りかゝる。夏期は六時に冬期は七時に朝飯を食す。九時に至りて十分の休憩がある。其間にパンの一片を食す。晝飯は十二時であつて其後一時までは休息時間としてある。再び勞働して四時に至れば十分の休憩あり、午前と同じくパンの一片を食す。其より七時乃至八時まで勞働し、其後晚飯を食し、暫時にして就床す。これが一日の課程である

忠實に勤勞するものは幾分の貯金を爲すことが出來る。故に彼等が殖民地を去りて社會に出でんとする時には其必要に從つて衣服を新調することも出來、亦職業用の道具を購入すること

とも出來る。亦農業に從事すること能はざる不具者若くは虚弱者には裁縫、製靴等の職業を與へて居る。パン焼きも賄方も勞働者の中より勤むることになつて居るから、殆んど獨立の小部落を成せる觀がある。此小部落には通常三十五人位の住人があるけれども冬期に至れば五十人にも增加することがある、亦少なき時には十八人乃至二十人位に減ずることもあるさうだ。兎に角事業としては頗る微々たるものであるけれども、一方には瑞西に於ける失業者が割合少なくして斯る設備の不必要を證明して居るものと見ることが出來る

第七章　勞働者紹介所

瑞西の都會には勞働者紹介所なるものの設ありて雇主と被雇者の間に立ちて其融通を謀りて居る。若しこれを平く言へば雇人口入所であるが、其經營は市が爲すのであつて個人的營業でない。ベルン市の勞働者紹介所は千八百八十八年の創立で其效果は頗る良好である。紹介所は二部に分たれ、一部は工業及び商業の方面に、一部は奴僕や旅館の雇人などの方面に關して居る。殊に奴僕の紹介に於ては雇主及び被雇者の十分なる滿足を來して居る　これには種々なる原因もあらうが、個人的口入業に比して周旋料の廉價なることは其重なる理由であるに相違ない。周旋料は二種に分れて居るので、紹介を依賴する者の爲には甚だ便利である。即ち依賴を爲す時に申込料なるものを拂ひ、更に職業を周旋せられたる場合に手數料を拂ふのであるから、若し相當の働きを得ざる時には單に申込料を拂ふのみにて手數料を拂ふ必要はないのである。亦申込料及び手數料が何れも廉價なることは左の表にて分る

	申込料	手數料
戶外勞働者、石工、奴僕、旅館の雇人	十サンチーム	二十サンチーム
前同斷（但し賃銀每週二十法を超ゆるもの）	四十サンチーム	四十サンチーム
職工	三十サンチーム	五十サンチーム
徒弟	五十サンチーム	五十サンチーム
番頭、店員	八十サンチーム	八十サンチーム

（サンチームは一法の百分の一にして我四厘に當る）

勞働者紹介所には元來十一名の委員があつて其事務を管理して居たが近來は九名に減じた。三名は市會議員中より、三名は資本家の中より、三名は勞働者の中より選擧するのである。紹介所の經費は到底申込料や手數料にて辨ずることは出來ないから、其不足額は市にて補助することになつて居る。不足というても別段大したものではない。年々三千二百五十法許のものである

勞働者紹介所の規則に從へば勞働上の紛爭には一切關係してはならぬ。即ち同盟罷工の行はるゝ場合に於ては之に關係せる資本家の爲に勞働者の周旋をなし、若くは勞働者を他の職業に紹介することを斷然拒絕せねばならぬ。これは單にベルン市のみでなく他の都市に於ても實行されて居るのである。紹介所に於ては雇主の申込よりも被雇者の申込が何時でも多いので、これは世界の何所にても同樣であるから別段怪むには足らぬ。然れども最近數年の統計に依れば被雇者よりの申込數の半は其職業を得、雇主の申込の四分の三は其希望を達して居る。殊に下女の需要供給は殆んど相匹敵して居るので、雇主の方よりいふも被雇者の方よりいふも其要求は遺憾なく達せられて居るのである

バーゼル市の勞働者紹介所は千八百九十年に設立せられたのであるが、其費用は州政府が負擔するのである。委員としては資本家より三名、勞働者より三名を州の行政部が任命する

のである。女子部にも同じく六名の委員があつて、其一名は毎日紹介所に出勤することになつて居る。亦男子部及び女子部には各一名の專任支配人ありて實務を執つて居る。依賴者より徴收する所のものはベルン市に於けるが如く申込料と手數料との二に分ちてはない。唯手數料として雇主及び被雇者より徴收するのであるが、雇主の拂ふ所は何時も被雇者の二倍である。申込人の多數は熟練なき勞働者であるから其職を見出すには少なからぬ困難がある。然し勞働者紹介所の信用は頗る厚くして、爲に個人的の口入事業は殆んど其跡を絕つに至つた

勞働者紹介所の中にてもゼネバ市の其は最も完全なるものである。其創設は千八百九十五年であつて、經費の一部は州政府にて負擔し、其他は地方費の負擔となつて居る。紹介所の目的はベルン市やバーゼル市の其と同樣に勞働の需要供給を速に整理するにあることは別段陳ぶる必要もないが、ゼネバ市の紹介所は更に其區域を擴張して勞働者に種々なる便宜を與へて居る。即ち紹介所は勞働者の爲に便利なる集會の場所を備ふるのであつて、勞働者は屢此處に會して勞働上の討議をなし、或は國內に於ける職業と勞働者の比例を統計的に討究し、或は外國に至りて其職を求むるの可否に就き調査をなすのである。故に紹介所は單に職業の紹介に止まらず、人々が其子弟の爲に職業を選ぶ場合にも相當の助言を與へ、勞働者が負傷をなしたる時には如何にして損害賠償の訴を起すべきかを敎ふるのである。而も此等の助言に對しては些少の報酬をも請求せぬのである

紹介所を管理する委員は十一名にして其中より會長、副會長、會計、書記等を選ぶ。彼等は會合する每に些少の手當を受け、書記は他の役員よりも二法宛多く受くることになつて居る。書記は通信の事務を執る上に絕えずゼネバ市及び近隣の都會に於ける勞働市場の有樣に注意して居らねばならぬ。亦每週勞働上の有益なる報告をせねばならぬから、彼は役員中最も重要なる位地を占めて居るものと言はねばならぬ。ゼネバ市に於て勞働者紹介所の設立を見るに至つたのは社會黨の建議に負へる所が多いのである。元來州政府は商業會議所なるものに補助金を與へて居るのであるが、こは全く資本家の便益の爲に設けられたるものなることは何人も知れる所である。されば勞働者の利益を專一の目的とする所の紹介所に對して州政府が相當の補助を與ふるは、公平なる政策としても當に爲すべきことであるとは社會黨の議論であつた。保守黨、急進黨、加特力克黨も其議を至當として賛成したのであるから終に其實施を見るに至つた。吾人は將來に於て此事業が大なる勢力を有するに至らんことを信ずるものである

第八章　失業保險

英米の勞働組合にては疾病、負傷、老廢、失業等に對する保險の制度があるけれども全く任意的である。獨逸の保險法は強制的であるが、失業に對する保險制度がない。されば失業に對する強制的保險制度を實行して居るのは瑞西のみであるといふべきだ。尤も瑞西の全部に強制的失業保險が實行せられて居るといふのではない。ベルン市の如く任意的保險制度を用ゐて居る處もあるが、亦一方にはバーゼル市の如く強制的制度を採つて居る所もある。然し任意的のものも強制的のものも其組織に於ては大差がないのであるから、吾人は玆にバーゼル市の強制保險制度を說くことにしよう。尤もバーゼル市が此保險制度を採用することに決した

のは千八百九十六年であつて、吾人は其後の消息を聞かないけれども、茲には既に實施せられたるものと假定して說明を試むるのである

凡て勞働者は冬期に至りて其職を失ふことが多いので、これを救濟するに慈善事業のみを以てすることの出來ぬは明である。慈善事業は失業者以外に多くの不幸者を保護するの任務を有して居るのみならず、不具者若くは虛弱者ならざる所の勞働者を救濟することは却つて彼等の獨立心を傷くるの恐がある。故にバーゼル市は失業保險の必要を感じて其經營に着手し、內務長官はバーゼル大學敎授アドラー氏の立案を採用してバーゼル州にこれを實施することに贊同した。然れども餘りに規模を宏大にするは却つて失敗の原因となることもあれば、强制保險は先づ左記の勞働者にのみ限らるゝことになつた。卽ち第一は工場にて働く所の勞働者、第二は石工大工の如き建築業者である。此二種の勞働者は必ず保險をせねばならぬ規定であるけれども、左の條件に合ふものは例外として取扱はるゝのである。第一 每年の收入二千法以上に達するもの。第二十八歲以下の徒弟にして其收入每年二百法に達せざるもの。第三既に他の方法にて失業保險を爲せるもの。斯の如き例外を設けたのは至當であつた。每年二千法以上の收入ある者は多少の貯蓄を爲し得るのみならず、所謂一藝に達したる熟練職工であるから其職業を失ふの恐も甚だ少ないのである。十八歲以下の徒弟に保險を强制せぬのは彼等の多數が尙ほ父の保護の下にあるからである。第三の例外は已に任意的の保險を爲して居るものであるから、これに保險を强ふるの必要なきは明である

失業保險の二大原則ともいふべきは保險を强制的にすることと、萬已むを得ざる場合に其職業を失うたる者の外には一切補助を與へぬとの事である。若し失業保險を任意にする時には、失業の恐ある職業に從事する者のみが保險することとなり、其結果仕拂ふべき保險金は巨額に上るに相違ない。亦雇主が其勞働者を解雇するに當りても先づ失業保險を爲せるものより始むるは人情の然らしむる所であるから、到底僅少の掛金を徵收する位では保險制度を維持することは出來ない。故に失業保險の成效を期するにはこれを强制的にするが得策である

失業者にも多くの種類があるから、善く其失業の原因を調査したる上にて補助を與ふるにあらざれば保險制度は到底維持せらるゝものでない。故に左に記するが如き者は決して補助金を受くることが出來ぬ。第一賃銀に關する紛爭の爲に職を止めたる者。第二自ら好んで職を止めたる者。第三惡しき行爲のために解雇せられたる者。第四解雇せられたる者が他に職業を與へられたる時適當の理由なくして拒絕したる場合である

失業保險は大體の組織に於て獨逸の强制保險を學びたるものである。被保險人の掛金を以て經營し行くことは到底六ケ敷ことであるから、資本家と州政府が其一部を補助し、且つ個人的寄附金をも受くることになつて居る。被保險人は凡そ幾何を拂ひつゝあるか、其大略を左に示すであらう。被保者の內にも失業の恐れ多きものと少なきものがある。例せば工場內に働く者は寒暑おしなべて其職を有すれども、戶外に在りて建築に從事する者は冬期に至りて多く其職を失ふものである。されば失業の恐多き者には比較的多くの掛金を課するは最も公平なる所置と言はなければならぬ。其處でバーゼル州は被保人を三種に分ち第一建築業に從はざる勞働者(工場內に働く者を指す)第二建築業の中にて失業の恐少なき職業に從事する者

（家屋内にて勞働する者）第三戸外に在りて建築に從事する者となし、更に各級を賃銀の高低に依りて三種に分つ。左表は卽ち掛金の額を示したるものである

	每週の掛金
第一種	
（イ）每週の賃銀十五法を超えざる者	十サンチーム
（ロ）每週賃銀十五法以上二十四法以下	十五サンチーム
（ハ）每週賃銀二十四法以上	二十サンチーム
第二種	
（イ）	二十サンチーム
（ロ）	三十サンチーム
（ハ）	五十サンチーム
第三種	
（イ）	三十サンチーム
（ロ）	四十五サンチーム
（ハ）	六十サンチーム

被保人の掛金は雇主が其拂ふべき賃銀の内より引き去り、これに自ら寄付すべき所のものを加へて四週間每に保險事務所に納むるのである。雇主の拂ふべき金額は第一種の勞働者一名に就き每週十サンチーム、第二種及び第三種の勞働者に對しては二十サンチームである

州政府は失業保險の事務費を一切補助することになつて居る。故に被保人の掛金と雇主の寄附金は全く補助金として失業者に拂はるゝのである。州政府は事務費の外に每年二萬五千法の補助金を與へて居るが、これは積立金として年々積置くのである。若し每年の經費に餘剩あれば悉くこれを積立金の内に繰込むのであるが、將來其額が二十萬法に達すれば其時始めて其利子を經常費として使用することを許すのである。此時には被保人の掛金高を減少するか、若くは失業者に對する補助金を增加するか二者其一を選ばねばならぬ。これを決するのは州立法部の權內に在る

さて被保人が失業者となる時には幾何の補助金を受くるかといふに、被保人の收入如何に依り、亦係累者の有無に依りて其額を異にするのである。被保人の收入を標準としてこれを三種に分てば、既に前に陳べたる通り第一種は每週十四法以下、第二種は十五法以上二十四法以下、第三種は二十四法以上の收入あるものとなるのである。今被保人たる失業者が每日受くべき補助金額を表に示せば左の通りである

	第一種	第二種	第三種
(1) 獨身者 (2) 寡婦にして十四歲以下の子供なきもの (3) 既婚の婦人	八十サンチーム	九十サンチーム	一法
(1) 寡婦にして十四歲以下の小兒一人若くは二人以上を有するもの (2) 既婚の男子にして子供なきもの若くは十四歲以下の小兒唯一人を有する者	一法二十サンチーム	一法四十	一法五十
既婚の男子にして其妻も勞働し若くは被保人となり居る場合	八十サンチーム	九十サンチーム	一法
既婚の男子にして十四歲以下の小兒一人若くは二人以上を有する者	一法五十サンチーム	一法七十サンチーム	二法

失業者に補助を與ふる場合には彼等の獨立心を毀損せざる樣十分なる注意をなさねばならぬ。故に被保人が職業を失ふたる時には其第一の週間は何等の補助をも與へないのである。

亦一年間に十三週以上の補助を受くることは出來ぬといふ規定であるから、被保人が全く補助に依賴することの出來ぬは明である。吾人は以上陳べたる失業保險を以て未だ十分なるものと思ふのではない。其恩惠が唯一部の勞働者にのみ限られて居るが如きは甚だ遺憾であると言はねばならぬ。然れども是は單に試驗的であるといふことを考ふれば吾人は寧ろこれを以て滿足するより外はないのである

第九章　救兒事業

何れの文明國に至るも貧困なる小兒を救助するの設備なき所はない。然れども單に衣食住の供給のみを與へて其他を顧みざるは決して彼等を親切に取扱ふの途ではない。小兒を貧困なる大人と同居せしむるが如きは小兒の性質を害すること少なからぬが故に斷然これを避けねばならぬ。亦孤兒院の如く多數の貧兒を同居せしむるも決して得策ではない。貧兒を救濟するに最も注意すべきことは彼等をして我は慈善によりて養育せられつゝありとの感覺を抱かしめざるにある。然るに彼等が孤兒院の如き處に群居するに當りては其生活の模樣が全く普通の小兒とは違ふ。彼等に最も必要なる家庭的境遇は殆んど彼等から奪はるゝのである。能ふべくば斯る憐むべき小兒を群居せしめずして、彼等を一人づつ然るべき家庭に託することとなしたらば小兒の幸福は如何であらうか。彼等は必ず國家の保護や慈善家の慈悲に依りて養育せられつゝあることを感ぜぬであらう。從つて彼等は普通の小兒と同樣に自然の發達を爲すことが出來るに相違ない

瑞西には孤兒院が設立せられて居る。然れども救兒事業の重なる方法は是にあらずして家庭に託するのである。殊にツーリヒ及びベルンの諸市に於ては此方法を完全に應用して居る。若し貧兒を救濟するに當りて兩親尙ほ生存し居らば市は彼を救兒院に收容することはしない。寧ろ彼に相當の扶助料を與へて兩親の膝下に置くことを望むのである。これを見ても如何に家庭的生活の重んぜられて居ることが分るではないか。然れども不幸にして兩親の人物宜しからず、其子に不良の感化を及ぼすが如きことあらば、市は斷然其子を引取りてこれを善良なる家庭に託するのである。千八百九十四年ツーリヒ市が救濟せし所の小兒は二百九十三人であつて、其内四十六人は孤兒院や學校などにて養育を受けしも、殘り二百四十七人は家庭に託せらるゝか、若くは職工の家に徒弟として託せられたのである。養育料として市が每年家庭に拂ふ所のものは普通百五十六法であるが、二歲以下の小兒は其入費も多いのであるから每年二百三十四法である。被服料及び醫藥料は其以外にして、小兒が學校に通ふ場合には其入費も市にて支辨することになつて居る

貧兒の教育に就きては市が最も力を盡すのであつて、衣食住さへ與ふれば十分なりと言ふが如きは瑞西人の決して滿足せざる所である。されば貧兒が初等教育を終るや否や彼等は實業學校技藝學校等に入りて適當なる職業を學ばねばならぬ。これが爲め少なからぬ費用を要することは勿論であるけれども、彼等を獨立の人間となし再び市の補助を受くるが如きことなからしむるには十分なる教育を授くるより外はない。故に彼等が十四五歲の齡に達すれば進んで實業學校に入り若くは徒弟として職工の家庭に同居するのである。千八百九十四年には四十七人の男兒と二十七人の女兒は斯の如くして職工の家に託せられた。而して監督者は時々職工の家を巡視して彼等が果して徒弟に對して其爲すべき義務を果しつゝあるや否やを調査するのである

ツーリヒ市には亦完備せる孤兒院がある。此處は四歳以上十四歳以下の小兒を收容する所であるが、其小兒は必ずしも兩親を失へる孤兒のみではない。父或は母を失ひたる小兒若くは適當なる兩親の保護を受け得ざる小兒は入院することが出來るのである。孤兒の人數は百名を以て限としてあるから世話も十分に行屆いて居る。此處にも能ふだけ家族的思想を養はんことを目的として居るから、勉めて生活に變化を與へ、夏期には綠なす野邊に遊びて天然の美に接し、冬期には爐邊に集まりて朗讀、音樂等により歡を盡すのである。彼等の生活は衣食住の點に於て全く瑞西に於ける中等階級の生活を標準にして居る。彼の孤兒院を以て乞食の集會所と見做し、勉めて其生活を下等ならしめんとするの慈善家は宜しくツーリヒ市の孤兒院に就き學ぶ處がなくてはならぬ。今一つ吾人が特筆したいと思ふのは小兒を孤兒院に收容するに當り彼の親戚若くは知人は彼の爲に五十法の金を用意せねばならぬことである。これは少額の金に相違なきも、これを銀行に預け置けば他日其小兒が職業を習ひ得て社會に出づる時何等かの用を辨ずることが出來る。吾人は其用意の周到なるに感服するのである

バーゼル市にも孤兒院が設立せられて居るが、ツーリヒ市と同樣に貧兒を家庭に託することが盛に行はれて居る。ベルン市にては善良なる家庭若くは職工の家庭に託せられて居る者が八百人以上ある。貧兒を託するに當りては都會よりも田舍の方を選んで居る。何となれば田舍に於ける方が監督も行屆き、且つ小兒が惡しき習慣に陷ることも少ないからである。亦貧兒を託する前には善く家庭の有樣などを調査して其適否を定むるのであるから、貧兒の爲には眞に幸福であると言はねばならぬ。ゼネバ市にては市が直接に救兒事業に關係することはない。是は全く個人的事業になつて居るが然し中々盛なるものである。貧兒を家庭に託するの制度は他の諸市と同じく行はれて居るが、最も盛大なるは孤兒院である。此處には七歳以上の小兒を收容して十八歳の頃まで世話することになつて居る、教育の事には十分なる注意をなし、其職業を選擇するにも一に小兒の才能と嗜好の向ふ處に依りて定むるのであるが、若し一の職業に於て成功せざる場合には更に他の職業を選擇せしむるなど、其仕方は甚だ親切である。殊に當局者が十分勉めて居ることは孤兒の服裝を全く普通の小兒と同樣にすることであつて、或國に於けるが如く孤兒の爲に特別の制服を設くるが如きは斷然排斥する處である。これ救兒事業に從事する者の大に注意すべき所である

第十章　養老院

瑞西にて最も有名なる養老院を有するのはベルン市である。此處には二個の養老院があつて多少其組織を異にして居る。第一養老院は始め個人的事業であつて數名の老人の爲に退隱所を備へたのであるが、漸次其必要增加して今は市の事業となつて居る。入院者は何れもベルンの市民であつて其數男女合して百名許である。凡て六十歳以上の者で、多分は七十歳以上であるが、中には八十歳以上の者も少なくない。彼等は何れも此世の競爭場裡に立ちて奮鬪をなしたる者で、今は此閑靜なる休息所に來りて亦衣食住の爲に心を勞するの必要はないのである。入院者は決して仕事を強ひらるゝことはないから終日安逸を貪るも全く彼等の勝手である。然れども人性は決して怠惰を好むものではない。老人と雖も何等かの活動をなさざれば愉快を感ずることは出來ぬ。故に入院者の中男子は夏期畠に出でて耕作をやる、或者は薪を

切る、亦或者は作事場に至りて大工をやる。女子は裁縫、編物をなし、亦食事の手傳をなす。然し此等の仕事は全く隨意的であるから、氣の向いた時は爲し、厭になつた時は何時でもやめることが出來るのである

入院者の取扱は決して乞食や貧乏人に對するが如きではない。彼等は何れも市の公民であつた、唯不幸にして財産なく、子孫がない爲に此處に來つたのだから社會はこれを優遇するのは當然の事だ。彼等には書籍新聞雜誌が備へてある許りでなく、男子には煙草を與へ、女子には常に茶が備へてある。朝飯は七時で、九時に少許の葡萄酒を與へ、十二時に午飯、四時に珈琲、六時に晩飯といふ順序である。此の如き有樣であるから入院者は少しも貧乏人らしくない。亦憂鬱らしい處が見えぬ。彼等は丸で快活なる小兒の樣だ。さて養老院の費用は幾何であるかといふに、入院者一人に付き三百四十四法を要するのであるけれども、ベルン市の負擔は一人に付き百二十法位であつて、其他は寄附金によりて支へて居る

第二の養老院はこれを第一に比すれば其設立も古い。而して其經營は個人的團體の手に在る。此養老院には幸にして四百萬法の基本金があるので、年々院の爲に十三萬五千法を費すことが出來る。以て其規模の宏大なるを見ることが出來よう。入院者は三種に分れて居る。第一は普通の入院者で、これは全く院の爲に衣食を供給せらるゝのである。第二は特別入院者であつて、彼等の親戚朋友より毎年若干の入院料と衣服一襲を寄付するのである。第三は自費にて入院するのであるが、僅少の財産はあれども一家を構ふる程の資力なく、亦賴るべき親戚とてもない爲に、便宜上養老院に寄寓するのである。第三種の入院者は第一第二とは其取扱を異にし、其生活には十分の自由を與ふることになつて居る。此外に一時病人を入院せしむることがあるが、これは全く臨時の事であるから、改めて茲に話す必要もない。兎も角入院者が親切なる取扱を受け居ることは第一養老院と同樣である

ユーゴーが嘗て言うたことがある、老人の貧困に陷れるを見る程悲慘なことはない。孤兒は人がこれを見て憐みもする。亦自ら成長發達するの時機にあるから元氣がよい。然し貧困なる老人に對しては同情を寄するものがない。彼等も最早衰亡に近いて居るのであるから自ら奮ひ起るの勇氣もない。世の中にこれに勝りたる無情なことがまたとあらうか。實に其通りである。吾人はこれを思うて斷腸の思をなしたことが幾度もあつた。小兒は棄てて置いてもドーカコーカ成長することが出來るかも知らんが、七十八十といふ老齡に達したる人は扶助するものがなければ餓死するより外はない、彼等の中には少壯の時社會の爲に奮闘したものもあらう。不幸なる者の爲に一掬の涙を灑いだこともあらう。然るに今や落魄して人の助を乞はねばならぬ身となつた。彼等に一塊のパンを與へて其飢を救ふのは比較的容易なる事である。然れども彼等を乞食の如くに取扱ふのは餘りに無情なることではないか。戰士の戰場より還り來るや、社會は彼に與ふるに勳章を以てし年金を以てする。瑞西の養老院が男女の老人を迎ふるは恰も歸休兵を犒ふが如くである。吾人は何時我國に此の如き養老院の設立せらるゝかを憶うて轉た感慨の念に堪へぬのである

第十一章　救貧院

小兒の爲には救兒事業があり、老人の爲には養老院の設があるが、中年の者には救貧院なるものが設けられて居る。ベルン市の救貧院は今より十數年前に設立せられたので、其內に收容

すべき者は小兒でもなく老人でもなく、全く中年の男女である。即ち資産もなく亦自ら勞働して自活することの出來ぬ者、及び不行跡にして公衆の利益に害ありと認められたる者は其自ら希望すると否とに拘はらず入院を強ふることがある。故に入院者の多數は怠惰の爲に若くは飲酒の惡癖等に依りて貧困者となつたのである。中には全く身體の虚弱なるが爲に貧困に陷りたる者もあるが、これは比較的少數であるから、入院者には其選ぶ所に從つて職業を強ふるの必要がある。救貧院は六十町歩の土地を有し、其内には牧場及び耕地の備もあり、凡そ四百人を容るゝの家屋もある。現在の入院者は男女併せて三百五十名、これを二個所に配置して男女を全く隔離せしめて居る。彼等の職業は多種であつて、鍛工、車工、家具工、麥藁工、椅子工、麵包燒等は其重なるものである。院内にて使用するものは多く彼等の手にて製造せられたものださうだ

入院者の勞働より生ずる收益は經費の一部を支へて行くことが出來る。一年の純益一萬一千六百七十七法に達するのであるから、これを入院者數に割り當つれば一人の利益が粗三十三法半になる。而して一人に對する經費は百五十八法である

彼等の食物は敢て贅澤といふことは出來ないが、さりとて粗末といふことは出來ぬ。冬期は五回、夏期は四回の食事を爲すので、一回毎に百乃至百三十グラムの麵包及び半リートル（一リートルは我五合五勺）の牛乳を與ふるのである。其他にはスープ、菜蔬、雜炊などを常食とするので、一週二回肉類を供することになつて居る。故に入院當時は蓬髮垢顏如何にも營養の不足を示して居るものも暫時の間に見まがふ如き人間となるのである。然し入院者に對する取扱の親切なることは獨り衣食住の事のみではない。精神的方面に於ても其設備は行屆いて居る。啻に新聞、雜誌、書籍等の備付あるのみならず、院内に於て毎月一度宗教的の集會があり、亦二週間毎に僧侶が入院者を訪問することになつて居る

院内の規律は隨分嚴重である。飽くまでも規律に從はざる者あれば院内に設ある獄中に幽閉するのである。然し牢獄というても單に形式ばかりであつて決して恐ろしき所ではない。入院者は毎週一度數時間の外出を許さるゝので、これは團體を爲して監督が附き添ふことになつて居たが、餘り結果が善くなかつたから、今は各自別々に外出することが出來る樣になつた。然し若し外出中に不都合の事あれば遂に其權利をも剝奪せらるゝのであるから彼等は余程謹愼して居るといふことだ。救兒院と同樣に救貧院に於ても制服を用ゆるが如きことは斷じてない。入院者は何れも通常人と同樣の服裝をなして居るから市中を散歩する時にも人目を惹くが如きことは決してない。飽くまでも公民の品位を重んずるの遣り方であると言はねばならぬ

結論

吾人は章を重ねて地上の理想國たる瑞西の政治、敎育及び社會問題を一瞥した。これ眞に一瞥に過ぎないけれども彼の國民が如何に鼓腹の樂をなしつゝあるかを知るには十分であると信ずる。抑も人類の目的は何であるか。これを哲學的に解釋せんとするは蓋し容易の事ではあるまいが、若しこれを平易に言ひ現はせば吾人は人類多數の幸福てふことを以て人類生存の目的と信ずるのである。犧牲てふことは現社會の組織に於ては已むなき所のものであるが、吾人はこれを以て永遠に持續すべき道德と信ずることは出來ぬ。犧牲とは社會組織の一部と

一部とが矛盾し、甲の道德觀念と乙の道德觀念とが衝突する時に必要であるのだから、若し社會組織が全く調和的に行はるれば犧牲といふことは無意味にならざるを得ない。一家としては健全なる身體を有し、高等なる教育を受け、道德の念に厚く、衣食住に不自由を感ぜざる夫妻親子の團欒程幸福なるものはないのである。一國の理想も亦此の如きであつて、教育普及し、道念深く、政治上に於ては國民悉く平等の權を有し、財産の分配は公平に行はれて甚だしき富豪もなく亦貧困者もなく、思想の自由は十分に保障せられ、人々皆其好む所に從つて自然の發達をなすことが出來れば、これ實に吾人の理想の實現せられたるものではないか。斯る幸福は決して政府の名を以て、若くは國家の名を以て奪ふべきものでない。人類が社會を組織するも、政府を設立するも、國家てふ名の下に團結するも、其目的は全く此等の福祉を得んとするに在るのである。若し此標準に照して世界各國の優劣を比較するものあらば、誰か瑞西を以て最上位に置かぬ者があらうか。吾人の觀る所を以てすれば瑞西の政治程人民の利益を親切に謀りて居るものはない。亦彼の教育程善く人民の需要に適し且つ普及して居るものはない。殊に社會問題の解釋に至りては殆んど世界無比であつて、到底強國を以て誇る先輩國の及ぶべきものでない。若し今日の所謂強國中に瑞西の政治、教育、社會制度に勝れるものを有するものあらば、吾人は切にこれを聞かんことを希ふのである

瑞西の如き小國の事例を引用したりとて何程の利益がある。我日本の如きは全く彼と其位地を異にして居るではないかと難ずるものがあらう。然れども是は實に思はざるの甚しきものである。抑も我日本程瑞西に類似せる國が他にあるであらうか。瑞西が獨佛墺以の四大強國に挾まれて居るが如く、我國は北は露國に接し西は清國に隣り東は米國に對し南は濠洲に向つて居る。瑞西を以て我九州にも及ばざるの一小國と侮る勿れ、彼が獨佛墺以の面積に對する割合と我が露清米濠の面積に對する割合とを比較すれば彼必ずしも小國でなく、我必ずしも大國を以て誇ることは出來ぬ。瑞西は直に隣國と地を接し、我は隣國と隔つるに海を以てせりといふ勿れ。彼にはアルプス及びジューラの天險あつて敵を防ぐには自然の利益がある。我國が露清と相隔つるは一衣水であつて、米國の軍艦が太平洋の浪を超ゆるも何日を出でないのである、然らば攻守の便宜に於て瑞西と我日本の差は必ずしも大なるものでない。瑞西は嘗て武勇を以て歐洲に鳴り、獨佛の兵を敗り墺太利の軍を苦めしこと單に一再ではなかつた。彼にはウキルリヤム、テルの如き或はウキンケリードの如き小說的英雄を出した。實に瑞西は武を以て起り今も尚ほ武裝を解かぬのである。然れども彼は何時までも己が位置を自覺せぬ程の好戰國民ではなかつた。彼は一朝事あるに臨んで敵に一大打擊を加ふるだけの抱負はある。或は戰鬪的本能が時々彼等の心に湧き來ることがあるかも知れぬ。然れども彼等は幸にして強國と爭ふの愚を棄て、今や專心內治の爲に盡すこととなつた。其結果血雨腥き歐洲の天地に美麗なる花園を造り出したのである。嘗て西人の詩集を繙いてシャリー王が天使と物語れる一節を讀んだことがある。中に'Thou art a king, but I am an angel'といへる一句あるを記憶せるが、如何にも天使の眼より見れば王侯何かあらんである。瑞西は獨墺の如く王侯を以て天下に鳴るの野心を棄てた。然し彼は平和にして平和の宣傳者たる天使を以て任じて居るのである。想ふに我國の前途も亦瑞西の如くなるではないか。否斯くなさねばならぬのではないか。嚢き

に清國を撃ち今亦露國と兵を構ふ。これ恰も瑞西が佛を打ち墺を懲らしめたるが如きである。然れども四大國の間に介立せる我日本は軍神としてよりも寧ろ天使として東洋の平和を來すべき天職を有して居るのではないか。不幸にして我國は四隣の大國に加ふるに、清國に於て英獨てふ二個の競爭者を有して居る。然らば外國・に應接するの勢力を集めて專ら內政に傾注するの方針を採りたる瑞西は何等かの教訓を吾人に與ふるものではないか

瑞西の如き小國に於ては政治も教育も十分に行屆くが、是は到底大國に應用の出來ないことだといふ人がある。然れども吾人は先づ何故に大國に於て此の如き良制度を布くことの出來ぬかを究めねばならぬ。現今世界の大國は對外政策の爲に忙はしくて內政の爲に全力を注ぐことが出來ぬのである。所謂帝國主義を實行する爲には政權を中央に集注するの必要がある。然れども一たび對外政策の必要なきに至れば中央集權の勢も自ら消滅するに相違ない。抑も政權の分配は富の分配と同樣であつて、若し其公平を失すれば多數の人民は不幸に陷ることを免れ得ない。吾人は帝國主義の衰頹と共に地方分權の時代が到來することを信ずるが故に如何なる大國にも瑞西の如き良制度を布くの難からざるを思ふのである

瑞西の制度は純粹なる社會主義的のものではない。然れども社會の各方面に亙りて社會主義の思想が如何に普及せるかは誰も看取することが出來るであらう。吾人は先づ財政の上に於て之を見た。彼の獨占事業なるものは多く政府事業になつて居るではないか。且つ租稅は富者が負擔すべきものなりとは彼等が一般に考へ居る所であつて、遺產相續稅を徵收するが如き、諸稅に累進法を用ゆるが如き何れも社會主義の精神に從うたるものである。更に社會問題が殆んど全く政府の手にて解釋せられつゝあるを見れば、社會主義者の主張の幾分は慥に實行せられて居るといふても善い。彼の勞働局設置に於て失業保險法の制定に於て社會主義者が直接其動力となつたことは吾人が既に見たる所である。更に亦慈善事業なるものを見よ。其精神の高尙なることと、其方法の親切なることとは遺憾なく社會主義の主張を表現して居るではないか。昨年獨逸の社會黨は總選擧の時に際して宣言書を公にし種々なる要求を列べたが、其中に葬式は公費を以て支辨すべしといふことがあつた。然るに瑞西の或州にては已にこれを實行して居る。生者に貧富の差を許すのはまだしもであるがこれを死者にまで及ぼすのは忍びられぬことではないか。故に瑞西にては富者にも貧者にも公費を以て同樣の葬式をしてやるのである。尤も政府でこれを强ゆるのではないから、若し自費を以て葬式する人があれば各人の自由に任すのであるけれども實際に於ては公葬が一般に行はれて居るさうだ。歐洲諸强國にて時々有名なる人々の爲に國葬を行ふことがあるが、これを瑞西が各人の爲に國葬を行ふに比すれば殆んど兒戲に類して居る。瑞西には驚くべき程の富豪もないが、亦多くの貧人もない。これも社會主義の理想に合うて居る。然し吾人が此處に一言注意して置きたいのは、瑞西に於ける社會主義は勿論政黨として認められて居るけれども餘り勢力のあるものではない。これは決して怪むべきことでなくて寧ろ至當である。何となれば社會主義的の政策を大膽に實行する社會に於ては別段社會黨なる團體を設くるの必要を感ぜぬからである

吾人は我國民が日露戰爭に熱中するに當り、殊に此一小册子を公にして我親愛なる同胞に獻ずることを喜ぶものである

社會主義神髓

雜纂

幸徳秋水

社會主義神髓

自序

『社會主義とは何ぞ』是れ我國人の競うて知らんと欲する所なるに似たり、而して又實に知らざる可らざる所に屬す。予は我國に於ける社會主義者の一人として、之れを知らしむるの責任あるを感ずるが故に、此書を作れり。

近時社會主義に關する著譯の公行する者、大抵非社會主義者の手に成り往々獨斷に流れ正鵠を失す、其然らざるも或は僅に其一部を論じ、或は單に一方面を描くに過ぎず。而して浩瀚の者は却つて煩冗に過ぎ、短簡なる者、亦要領を得難きの憾み有り。是を以て予は本書に於て、勉めて枝葉を去り、細節に拘せず、一見明白に其大綱を了會し要義に透徹せしめんことを期せり。世間未だ社會主義の何たるを知らざるの士之に依て、所謂『鳥瞰觀』を做すことを得ば、幸ひ甚し。

蓋し著述の難きは徒に紙數を多からしむるに在らずして、實に次序の體を得せしむるに在り、材料を豐にするに在らずして繁簡の中を得せしむるに有り。本書固より區々の小册なりと雖も、而も稿を代ふること十數回、時を費す半年の久しきに及びて遂に意に滿つる能はず、慚愧何ぞ堪へん。但だ予の不才之を奈何ともするなくして、而して江湖の社會主義を知らんとする者、益々急なるを見て、忍んで剞劂に付するを爲せり。故に本書說く所に關し、反對の意見若くば疑問を以て質さるゝの人あらば、予は喜んで更に之が答辯說明の責に任ず可し。

本書執筆の際、參照に資せしは、

MARX, K. & ENGELS, F. Manifesto of the Communist Party.

MARX, K. Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production.

ENGELS, F. Socialism, Utopian and Scientific.

KIRKUP, T. An Inquiry into Socialism.

ELY, R. Socialism and Social Reform.

BLISS, W. A Handbook of Socialism.

MORRIS, W. & BAX, E. B. Socialism: its Growth and Outcome

BLISS, W. The Encyclopedia of Social Reforms.

等の數種也。初學少年の爲めに特に之を言ふ。

明治三十六年六月　著者

"Let the ruling classes tremble at a Communistic revolution. The proletarians have nothing to lose but their chains. They have a world to win. Working men of all countries unite!"

第一章　緒論

〇クロムウエルと言ふこと勿れ、ワシントンと言ふこと勿れ、ロベスピエールと言ふこと勿れ、若し予に質すに古今最大の革命家を以てする者

あらば、予は實にゼームス・ワット其人を推さずんばあらず。彼れ夫れ一たび其精緻の頭腦を鼓して、造化の祕機を捉來し、之を人間の眼前に展開するや、世界萬邦物質的生活の狀態は、俄然として爲めに一變を致せるに非ずや。嗚呼彼所謂殖産的革命の功果や眞に偉なる哉。

○蓋し今の紡績や、織布や、鑄鐵や、印刷や、其他百般工技の器、鐵道や、汽船や、其他百般交通の具、之を望めば恰も魍魎の如く、之に就けば恰も山嶽の如く然り。而して此等の機器の常に自在に驅使せられ、無礙に運轉せらるるもの、唯だ蓬々然たる蒸氣一吹の力に由れることを思ふ、其術何ぞ爾く巧にして其能何ぞ爾く大なるや。若し十八世紀中葉の人類を地下に起して以て今日を觀せしめば、應に呀然として駭絕驚倒すべきや必せり。況んや之に次ぐに電氣發明の奇と其應用の妙、刻々に新なるを以てするに至つて、人智の窮極する所、眞に測る可らざる者有り、予は萬物の靈長の語、於是て始めて驗有るを覺ゆ。

○然れども此等機器の發明及び其改善に由て打成せる、所謂殖産的革命の貴尙すべき所以の功果は、獨り其技の巧且つ妙なるに在らずして、實に其殖産の饒多に、其交換の利便なるに在らざる可らず。

○蓋し近時生産力發達の程度及比率は、其産業の種類の異なるに從つて差あるが故に、詳密精確の統計を得難しと雖も、而も機械が人力に代れるが爲めに、概して著大の增加を來せるや論なし。敎授イリーは曰く、或種の産業は爲めに十倍せり、或種の産業は爲めに二十倍せり、更紗の生産の如きは、優に百倍し、書籍版行の如きは優に千倍せりと。ロバート・オーエンは早く前世紀の初に於て公言して曰く、五十年前六十萬人の勞働を要せるの財富は、今や僅に二千五百人の力を以て生産し得べしと。而して爾後今日に至る迄百年間、更に幾層の進步ありしや、疑ふ可らず。某學士は亦曰く、近時の器械は一家五口の戶々に供するに、各々昔時六十人の奴隷の生産せしと同額の資財を以てするを得べしと。由是觀之、最近百餘年間に於て、世界の生産力が少くも平均十數倍の增加を爲せるは、何人も之を斷言するに躊躇せじ。

○而して是等饒多の財富が、世界各地に運輸され交換さるゝや、亦其自在と敏活とを極む。蛛網の如き鐵道航路は、以て坤輿を縮小すること幾千里、神經系統の如き電線は、以て萬邦を束ねて一體と爲す。濠洲に屠れる羊肉は直に英人の食膳に上る可く、米國にて作れる棉花は遍く亞細亞人の體軀を纏ふ。緩急の相依り、有無の相通ずる、有史以來實に今日より盛なるは莫し。

○嗚呼是れ實に所謂近世文明の特質也、美華也、光輝也。吾人生れて這個文明の民たるを得て、是等空前の偉觀壯觀を仰ぐ者、竊かに自ら慶し、且つ誇るに足る有るに似たり。

○然れども、吾人は近世文明の民たるに於て、眞に自ら慶す可き乎、眞に自ら誇る可き乎。否、是れ疑問也、然り大疑問也。

○試みに一考せよ、近時機器の助けあるが爲めに、吾人生産の力が十倍、百倍、時としては千倍せることは、即ち之れ有り。然らば則ち世界多數の勞働者は、殖産的革命の以前に比して、大に其勞働の時と量とを減じ得可きの理也。而も事實は之に反す、彼等は依然として永く十一二時間乃至十四五時間苛酷の勞働に服せざる可らざるは何ぞや。奇なる哉。

○又一考せよ、近時千百倍せる饒多の財富は、運輸交通の機關の助けあるが爲めに、世界の一隅より一隅に至る迄、自在敏活に分配貿易せらるゝことは、亦眞に之れ有り。然らば則ち世界多數の人類は、衣食大に餘り有りて、洋々太平を謳歌し得可きの理也。而も事實は之に反

す、彼の口糟糠だにも飽かずして、父母は飢凍し、兄弟妻子離散する者、日に益々多きを加ふるは何ぞや、奇なる哉。

○人力の必要は省減せり、而も勞働の必要は減少せざる也。財富の生産は增加せり、而も人類の衣食は增加せざる也。既に勞働の苛酷に堪へず、更に衣食の匱乏に苦しむ。故を以て學校の設くる多くして、人は敎育を受くるの自由を有せざる也、交通の機關便にして、人は旅行の自由を有せざる也、醫治の術進步して、人は療養の自由を有せざる也、多數政治の制ありて、人は參政の自由を有せざる也、文藝美術發達して人は娛樂の自由を有せざる也。而して所謂近世文明の特質や、美華や、光輝や、如此にして多數人類の幸福、平和、進步に於て、果して幾何の價値有りとする乎。

○言ふこと勿れ人は麵包のみにして生きずと。衣食なくして何の自由あることを得る耶、何の進步あることを得る耶、何の道德あることを得る耶、何の學藝あることを得る耶。管敬仲云へる有り、倉廩實而知禮節と、所謂人生の第一義は卽ち衣食問題也。而も近世文明の民たる多數人類は、實に衣食の匱乏の爲めに逭々たるに非ずや。

○言ふこと勿れ勞働は衣食を生ずと。見よ彼の勞働せる人の子を、彼や生れて八九歲の幼時より其老衰病死に至る迄、營々として牛馬の如く驅られ、兀々として蟻蜂の如く勞す、節儉にして勤勉なる、凡そ彼等に過ぐるは莫し。而して租稅滯納の爲めに公賣の處分に遭ふ者、年々數萬を以て算せらるゝ也。而して彼の衣食常に餘りある者は、常に勞働するの人に非ずして、却て徒手逸樂遊惰の人に非ずや。

○然れども其勞働の痛苦や、猶ほ可也、若し夫れ勞働す可き地位職業すら之を求めて竟に得ること能はざるに至ては、人生の慘事實に之より甚しきは莫し。彼や壯健の體軀を有す、彼や明敏の頭腦を有す、彼や有爲の技能を有す、而して其力能く衣食の生産に任じて餘り有る者にして、唯だ其職業を得ざるが爲めに、終生窮途に泣き溝壑に滾轉する者、世間果して幾萬人ぞ。

○好し高利に衣食せよ、株劵に衣食せよ、地代に衣食せよ、租稅に衣食せよ、今の所謂文明社會に處して然る能はざる者は、則ち長時間の勞働也、苦痛也、窮乏也、無職業也、餓死也。餓死に甘んぜずんば、則ち男子は強竊盜たり、女子は醜業婦たらんのみ、墮落あるのみ、罪惡あるのみ。

○然り今の文明や、一面に於て燦爛たる美華と光輝とを發すると同時に、一面に於て暗黑なる窮乏と罪惡とを有す。燦爛の天に翺翔する者は千萬人中僅に一人のみ、暗黑の域に滾轉する者は世界人類の大多數也。是れ豈に吾人人類の自ら誇るに足る者ならん哉。

○嗚呼世界人類の苦痛や飢凍や、日は一日より急に、月は一月より激也、人類の多數は唯だ其生活の自由と衣食の平等とを求むるが爲めに、一切の平和、幸福、進步を犧牲に供せずんば已まざらんとす。人生なる者は竟に如此き者耶、如此くならざる可らざる耶、耶蘇の所謂祖先の罪耶、浮屠の所謂娑婆の常耶。咄々豈に是れ眞理ならんや、正義ならんや、人道ならんや。

○嗚呼彼の偉大なる殖産的革命の功果は、竟に人道、正義、眞理に合す可らざる乎。所謂近世文明の世界は、遂に人道、正義、眞理を現ず可らざる乎。是れ個の問題や二十世紀の陌頭に立てるスヒンクスの謎語也。之を解決する者は生きん、否らずんば死せん、世界人類の運命は懸けて此一謎語に在り。

○誰か能く之を解決する者ぞ、宗敎乎、否、敎

育乎、否、法律乎、軍備乎、否、否、否。

○夫れ宗教や以て未來の樂園を想像せしむ、未だ吾人の爲めに現在の苦痛を除き去らざる也。教育や以て多大の智識を與ふ、未だ吾人の爲めに一日の衣食を産出せざる也。法律や能く人を責罰す、人を樂ましむるの具に非ざる也。軍備や能く人を屠殺す、人を活かしむるの器に非ざる也。嗚呼、噫、誰か能く之を解決する者ぞ。

以貨財害子孫。不必操戈入室。
似學術殺後世。有如按劒伏兵。

第二章　貧困の原由

○醫藥を投ずる者は、先づ其病源如何と診するを要す。借問す方今生産の資財乏しきに非ず、市場の貨物尠きに非ずして、而も吾人人類の多數は、何が爲めに爾く衣食の匱乏を感ずる乎。

○他なし之が分配の公を失せるが爲めのみ。其世界に普遍せられずして、一部に堆積せらるゝが爲めのみ、其萬人に均分せられずして、少數階級に壟斷さるゝが爲めのみ。

○英米兩國の若き、其産業の進歩と隆昌とは、古來類例なき所にして、世界萬邦の倶に感歎垂涎する所也、而も彼等が富の分配の情狀に至つては、却て酸鼻を値する者あり。

○トーマス・シアマンは算して曰く、米國の富の七割は、實に其人口の一分四厘の少數の占有する所たり、而して他の一割二分の富は、僅に九分二厘の人口の爲めに占有せられ、殘餘の人口即ち八割九分四厘の多數生民は、僅に一割八分の富を保つに過ぎずと。博士スパールが英國の富の分配を算するに曰く、英人二百萬の多數は僅に八億の財産を有するに過ぎざるに、一面に於て十二萬五千人の少數は、却て七十九億の巨額を占有す、且つ總人口の四分の三以上は全く無資産也と。而して是等兩國の窮民公費の救助を仰ぐ者、實に數百萬人の多きに及べり。

○是れ豈に驚く可きの偏重に非ずや、然れども唯に英米のみならんや、獨逸も然り、佛國も然り、伊國も然り、澳國も然り、彼等各々其大小高低の度と率とを異にすと雖も、而も現時の財富の一部に集中するは、世界萬邦倶に其趨勢を同じくせる所也。而して我日本に於ても亦然らざることを得ず。

○我國に於てや、凡そ何等の物と事とを問はずして、未だ精確の統計の信據す可きなきは遺憾の至也。然れども近時我國財富の分配が益々一部に偏重し、貧富益々懸隔するは爭ふ可らざるの事實也。見よ、土地は益々兼併せらるゝに非ずや、資本は益々合同せらるゝに非ずや。彼の資本、資本を吸ひ、息錢、息錢を生むや、國家人民全體の資産の額は甚だ增加を見ざるに拘らず、大資本家、大地主なる少數階級の資産は日に其膨脹を致すこと、恰も雪塊の一廻轉する毎に、自ら其面積を增大し來るに似たらずや。

○試みに思へ、若し近世物質的文明が、其精緻の器、巧妙の術に依り、年々産出する所の巨額の財富をして、多數人民公平に分配して、以て日用の消費に供するを得たりとせよ、何ぞ衣食の匱乏を嘆ずる今日の如きを要せんや。而も分配の公を失する如此く甚しく、其一部に堆積し、少數階級に壟斷せらるゝ如此く甚し。怪しむ無き也、世界の多數が常に飢凍の域に滾轉することや。

○於是乎、別に一問は提起せられざるを得ず、何ぞや。

○蓋し社會の財富や、決して天より降下するに非ず、地より噴出するに非ず、一粒の米、一片の金と雖も總て是れ人間勞働の結果に非ざるは無し。夫れ唯だ勞働の結果也、其結果や當然勞働者即ち之が産出者の所有に歸す可きの理に非ずや。而も多數の勞働者よ、何故に汝は汝の産出せる財富を自由に所有し、若くば消費す

ること能はざる乎。古詩に曰く「満身綺羅者、是匪養蠶人」と、何故に養蠶の人は却て綺羅を纏ふこと能はざる乎。

○他なし、彼等は一切の生産機關を有せざれば也。換言すれば即ち資本を有せざれば也、土地を有せざれば也。資本なき者は勞働すること能はざる也、土地なき者は勞働すること能はざる也。勞働せざれば即ち餓死せざる可らず。彼等は其餓死を免るゝに急なる丈け、夫れ丈け、生産機關を求むるに急ならざるを得ず。其生産機關を求むるに急なる丈け、夫れ丈け一切の利益幸福を擧げて之が犧牲に供せざることを得ず。而して彼等は實に資本所有者、土地所有者の足下に拜跪して、資本と土地との使用の許可を乞はざる可からず。而して此使用の許可を得るの報酬として、其生産の大部を資本家、地主の倉庫に獻納せざるを得ず。而して彼等が終歳、若くば生涯、營々たる勞役の功果は、憐れむ可し、唯だ其不幸なる生命を支ふるに過ぎざるのみ。

然り現時の小農及び小作人は實に如此きの狀態に在り、現時の職工は實に如此きの狀態に在り、土地と資本とを有するなくして、賃銀に衣食し、給料に衣食する者、皆な實に如此きの狀態に在り。

○試みに思へ、若し世界の土地と資本とをして、多數人類が自由に其生産の用に供するを得たりとせよ。彼等が多額の金利を徴せられ、法外の地料を掠められ、若くば低廉の賃銀を以て雇役さるゝの要なくして、其勞働の結果たる富財は直ちに彼等の所有として、自由に消費することを得たりとせよ。分配公を失して、貧富の懸隔する、何ぞ今日の如く甚しきに至らんや。而も彼等は唯だ勞働の力を有するのみ。土地と資本との兩者に至つては、全く少數階級の專有に歸して、其生産の大部を納むるに非ざるよりは、決して使用するを許されざる也。怪しむなき也、世界の多數が常に飢凍の域に滾轉することや。

○於是乎、更に一問は提起せられざるを得ず、何ぞや。

○夫れ土地や資本や、一切の生産機關は、人類全體を生活せしむる所以の要件也、之を壟斷し占有するは、即ち人類全體の生活を左右し、死命を制する所以也、彼地主資本家なる者果して之何の德あり、何の權利あり、何の必要あつて、之を壟斷し、專有し、增大して、以て多數人類の平和と進步と幸福とを蹂躙するや。

○他なし、僥倖のみ、猾智のみ、貪慾のみ。彼等地主資本家や、時に或は勞働に從ひ生産を扶くるなきに非ざる可し、勤勉なることなきに非ざる可し、節儉なることなきに非ざる可し。然れども彼等が勤勉なる勞働者、節儉なる生産者としての所得や知るべきのみ。而して彼等が地主資本家として擁する所の財富や、決して勤勉と節約とに依て得可き所の者に非ざる也。彼等の或者は即ち投機の勝利也。或者は即ち父祖の讓與也、或者は即ち利息の堆積也。然り今の富厚を重ぬる者、三者必ず其一に居らざるはなし。而して其富變じて資本となり、株券を買ひ、土地を併すや、彼等は一擧手一投足の勞なくして、飽暖逸樂以て多數人類勞働の結果を掠奪す。而して其掠奪せる富は、更に轉じて資本となり、再び多額の富を掠奪するの武器となる。如此にして轉々窮る所を知らずして、而して少數者の富益々富を加へ、多數者の貧益々貧に陷るに至れる也。故にプルードンは叫んで曰く、「財産は强奪の果也、資本家は盜賊也」と。然り道義的眼光より之を見る、彼等は實に自ら其盜賊たるを知らずして盜賊たる也。又何の德あり、何の權利あり、何の必要ある者ならんや。而も吾人は是等道義的盜賊を放養して、以て其專恣掠奪に任ぜるに非ずや。怪しむなき也、多數

人類が常に飢凍の域に滾轉せることや。

○於是乎吾人は現時社會の病源に於て、略ぼ知る所あるを信ず。何ぞや、曰く、多數人類の飢凍は、富の分配の不公に在り、富の分配の不公は、生產物をして生產者の手に歸せしめざるに在り、生產物をして生產者の手に歸せしめざるは、地主資本家なる少數階級の掠奪する所となれば也、地主資本家の掠奪する所となるは、土地や資本や一切の生產機關をして初めより地主資本家の手中に占有せしむれば也。

○果して然らば之が治療の術亦實に知るに難からざる也。予は即ち斷言せんとす、今の社會問題解決の方法は、唯だ一切の生產機關を、地主資本家の手より奪うて、之を社會人民の公有に移す有るのみと。

○然り、『一切の生產機關を地主資本家の手より奪うて、之を社會人民の公有となす』者、換言すれば、地主資本家なる徒手游食の階級を廢滅するは、是れ實に『近世社會主義』一名『科學的社會主義』の骨髓とする所に非ずや。

○於是乎世間社會主義を熟知せざるの士、啞然失笑して曰はんとす、何等の囈語ぞ、何等の妄想ぞ、思へ社會の生產は一に地主資本家の左右する所に非ずや、其分配は一に地主資本家の指揮する所に非ずや、農工商經濟は總て彼等に依て維持せられ、多數人類は總て彼等の手に養はる。曷んぞ能く之を廢滅することを得んや、假に之を能くせしむるも、若し彼等微りせば社會は暗黑ならんのみ。而も漫に之が廢滅を言ふ、社會主義なるもの、抑も何等の妄想囈語ぞやと。

○嗚呼囈語乎妄想乎、社會は永劫に地主資本家の存在を是認す可き乎、是認せざる可らざる乎。吾人は此等の言を爲すの人に向つて、先づ人類社會の組織し進化する所以に就て、一番の討查を請はざる可らず。

爭之難平也。天折地絕。亦無自屈之期。
報之不已也。鬼哭神愁。奚有相安之日。

第三章　產業制度の進化

○近世社會主義の祖師カルル・マルクスは、吾人の爲めに能く人類社會の組織せらるゝ所以の眞相を道破せり。曰く『有史以來何の時、何の處とを問はずして、一切社會の組織せらるゝ所以の者は、必ずや經濟的生產及び交換の方法、之が根底たらざるは無し。而して其時代の政治的及び靈能的歷史の如きは、唯だ此根底の上に建てる者にして、亦實に此根底よりして始めて解釋することを得べき也』と。

○然り、人の生れて地に落つ、先づ食はざるを得ず、衣ざるを得ず、雨露風雪を防がざるを得ず。夫の美術や、宗教や、學術や、唯此最初の要求の滿足せらるゝ有りて、而して後始めて發展することを得べきのみ、故に其人民が一たび生產交換の方法を異にするに至るや、其社會の組織、歷史の發展、亦從つて其狀態を異にせざるを得ず。

○見よ、太初の人類たる、縱鼻橫目、吾人の人類たるに於て、果して幾何の差異ありしとするぞ。而も彼等の血族相集り部落相結びて、共產の社會を成すや、其衣食や唯其社會全體の爲めに生產し、社會全體の需用に充つるのみ。又個人あるを知らざりし也、階級あるを知らざりし也、況んや地主なるものをや、資本家なるものをや。レウィス・モルガンは算して曰く、人類社會有つて以來、殆ど十萬年、而して其九萬五千年は實に共產制度の時代なりきと。吾人人類は實に此九萬五千年間地球上に點々散布せる血族的部落的の小共產制度の時代に於て、實に蠢爾たる野獸の域を脫却し、弓矢を製し、舟楫を製し、牧畜を解し、農業を習ふの進化變遷を經ることを得たりしなりき。

○夫れ文明の進歩は、石の地上に落つるが如し、落つる益々低くして、速度益々加はる。古代人口の漸く增殖し、團聚漸く繁榮し、衣食の需用亦漸く多大に、交換の方法從つて複雜なるに從つて、是等共產の制度は亦漸く傾覆の運に向へり。而して彼等が其曾て生擒し屠殺せる敵人を宥して、之を生產的に使役するや、卽ち奴隷の一階級を生じて、更に人類社會の歷史に於て、全く一大段落を劃し來れる也。

○嗚呼奴隷の制度、今や吾人の口にするだも憚づる所なりと雖も、而も當時に在てや、特り全社會產業の基礎たるのみならず、彼の埃及、アッシリアの智識や、希臘の藝術や、羅馬の法理や、其千載の歷史を照耀するを得たる者、實に是等愛々たる億萬奴隷が淋漓の膏血なりしと知らずや。然り當時の文明を致せる者は、是等產業の制なりき。而して當時の文明を覆せるも、亦實に是等產業の制なりき。花を催すの雨は是れ花を散ずるの雨たらざるを得ざりき。

○見よ、是等奴隷の膏血と其天然の富源も、亦一旦涸渇に至らざることを得ず。而して羅馬末年の莫大なる淫逸驕奢の資、遂に之に依て辨ずるに足らざるに及んで、四方の攻伐は次げり、領土の擴張は次げり、貢租の誅求は次げり、而して外正に叛くの時は、內旣に潰ゆるの日なりしに非ずや。

○於是乎羅馬に通ずるの大道は、荊棘の叢となれり、天下瓜分して產業全く委靡す。次で起る者は卽ち農奴の耕織ならざるを得ざりき、之を保護する者は卽ち封建の制度ならざるを得ざりき。然れども代謝は少時も休せず。經濟的生活の遷移すること一日なれば、社會の組織亦進化する一日ならざるを得ず。而して自由農工は生ず、城市の繁榮は次ぐ、農奴の解放は來る、交通の發達し、市場の擴大し、殖產の增加する、愈々急速を加ふ。而して地方的封建の藩籬は、遂に國民的及び世界的貿易の大潮流を抗制するに堪へずして、自ら七花八裂し去れる也。

○故にフリードリヒ・エンゲルも亦曰く『一切社會的變化、政治的革命を以て、其究竟の原因が、人間の頭腦に出ると爲すこと勿れ、一定不變の正義眞理の講究に出ると爲すこと勿れ、夫れ唯だ生產交換の方法の變化如何と見よ。然り之を哲學に求むる勿れ、唯だ各時代の經濟に見よ、若し夫れ現在の社會組織が非理たり、不正たり、昨日の正義が今日の非理となり、去年の正義が今年の罪惡となれるを見ば、卽ち其生產交換の方法漸く暗潛默移し去つて、當初に適應せる社會組織が旣に其用に堪へざるに至れることを知らん也』と。

○然り世界の歷史は產業方法の歷史のみ、社會の進化と革命は一に產業方法の變易のみ。誰か道ふ、今の產業制度は常住也と、誰か道ふ、今の地主資本家は永劫也と。

○然らば則ち現時社會の產業方法、マルクス以來所謂資本家制度として知られたる特種の產業方法は、果して何の處より來り、何の處に去らんとする乎。

○蓋し中世紀に在てや、今の所謂資本家なく、今の所謂大地主なし。而して其社會を支持する所以の產業は、常に一般勞働者の手に在りき。地方に在ては卽ち自由民若くば農奴の耕作なりき。城市に在ては卽ち獨立工人の手工なりき。而して彼等が勞働の機關たる土地や、農具や、仕事場や、器具や、皆な各個人單獨の使用に適する者なりしが故に、彼等は各個に之を所有して、自由に各自の生產を爲したりき。

○而して此等散漫にして小規模なる產業機關を集中し、擴大して、以て現代產業の有力なる槓杆と變ずるは、是れ產業歷史に於ける自然の大潮流なりき、所謂商工資本家の天職なりき。彼れ夫れ米國の發見や、喜望峰の廻航や、東印

度の貿易や、支那の市場や、世運の進歩は、産業の方法を鞭撻して、地方的より國民的に、國民的より世界的に促進せずんば止まざりし也。而して第十五世紀以來如何に是等の産業方法が、漸次に諸種の歴史的段階を通過して、以て所謂『近世工業』に達するに至れるかは、マルクスが其大著『資本』に細説せし所也。

○然れども一般の生産機關が猶ほ個人的方法の域中に彷徨して、未だ多數勞働者の協力を要すべき社會的方法を採用すること能はざるの間は、彼等資本家が直ちに是等生産機關を變じて、以て偉大なる産業的勢力を顯現するは到底不可能の事なりき。而も時節は到來せり、蒸氣器械の一たび發明せらるゝや、歴史は急轉直下の勢を以て、其『産業的革命』を成功せり。

○絲車は即ち紡績器械となれり、手織機は織物器械となれり、個人の仕事場は數百人乃至數千人を包容するの工場となり、個人的勞働は變じて社會的勞働となり、個人的生産物は變じて社會的生産物となる。見よ昔は個人各自に能く之を生産せる者、今や一綫の絲、一尺の布と雖も、總て是れ多數の勞働者が協力の結果に非ざるは無く、又一人の『是れ予の作る所、予一個の生産物也』と言ひ得る莫し。

○但だ吾人は知らざる可らず、産業的革命の功果や、彼が如く其れ顯著なりしと雖も、而も其初めに當つてや、彼等商工資本家は必しも其革命たる所以を承認する者に非ざりき。彼等の之を利導し助成する、單に其商品の増加發達を希ふに過ぎざりき、其商品の増加發達の爲めに、資本の集中、生産機關の膨大を希ふに過ぎざりき。唯だ此目的を達するに急なる、即ち個人的生産打壞の事に任じ、更に個人的生産を保護する所以の封建制度顚覆の事に任じて、不知不識の間に其歴史的使命を了せるのみ。

○夫れ唯だ生産の増加を希ふのみ、之が交換の如何を問はざる也、夫れ唯だ資本の集中を希ふのみ、之が領有の如何を問はざる也。是を以て其生産は即ち協同的となれるも、其交換は依然として個人的なるを免れざりき、製造工場の組織は既に新天地を現ぜるも、其領有は猶ほ舊世界の樣式を脱する能はざりき。於是乎矛盾は生ぜざることを得ず。

○生産の猶ほ個人的なるの時に於ては、其生産物の所有に關する問題は、決して起來することを無かりき。各個の生産や、皆な自家の技術を以てせり、自家の原料を以てせり、自家の器具を以てせり、而して彼れ及び彼の家族の勞働を以てせり。而して生産する所の結果が何人に屬す可き乎、言を俟たずして明かなるに非ずや。

○故に昔時生産機關を所有する者は、皆な其生産物を領有せり、而して是れ實に彼等自身が勞働の結果なるが爲めなりき。而して今の生産機關所有者も、亦其生産物を領有す。然れども見よ、其生産物や決して彼等自身の勞働の結果に非ずして、實に他人の生産する所に非ずや。然り今の勞働や協同的也、今の生産や社會的也、又一個の是れ予の生産物也と言ひ得るなし。而も是等の生産や、其生産者に依て社會的に共有せらるゝこと無くして、舊に依て唯だ個人の爲めに領有せらる、唯だ所謂地主資本家てふ個人の爲めに領有せらる。是れ豈に一大矛盾に非ずや。

○然り大矛盾也。而して予は信ず、現時社會の一切の害惡は實に這個の矛盾に胚胎し來れることを。

○其第一は即ち階級の爭闘也。「近世工業」の一たび隆興するや、瞬息の間世間萬邦を席捲して、到る處個人的小産業の壓倒し去らるゝ者、紛々落葉の如くなりしは、元より怪しむに足らず。而して從來個人的生産者や、全く其利を失はざる可らず、其業を失はざる可らず。彼等

は即ち其個人的小器械を棄て、社會的生產に從はんが爲めに、大工場に向つて趨らざる可らず、然れども其生產物や即ち資本家てふ個人の領有に歸せるが故に、彼等の得る所は、僅に一日の生命を支ふるの賃銀のみ。加ふるに封建の制度破壞せられて土地の兼併盛んなるに至るや、地方小農競うて都會に出で、賃銀に衣食せんことを求むるは、是れ自然の勢にして、而して工業の發達熾んなる丈け、夫れ丈け自由獨立の勞働者は漸く迹を絕ちて、所謂賃銀勞働者なる者、日に多きを致せり。於是乎社會は、一面に於て生產機關を專有して、盡く其生產を領有するの資本家てふ一階級を生ずると同時に、他面に於て、彼の勞働力の外何物をも有することなき勞働者の一階級を生じて、兩者の間判然鴻溝を劃するに至る。社會的生產と資本家的領有との間に生ぜる一大矛盾は、如此にして先づ其一端を、地主資本家と賃銀勞働者との衝突に現ぜる也。

○啻に之のみに非ざる也、個人的領有の結果は即ち所謂自由競爭ならざるを得ず、自由競爭の結果は、即ち經濟界の無政府ならざるを得ず。昔時個人的生產の時に於てや、其生產は主として自家の消費に供し、餘あれば則ち地方の小市場に輸するのみ。故に其商品の需用の豫知す可らずして、一般競爭の法則に支配せらるる、固より之れ無きに非ずと雖も、而も其範圍極めて狹隘にして、未だ其太甚なるに至らざりき。今や然らず、其作る所は決して生產者彼等自身の消費に充つるが爲めに非ずして、盡く是れ個人の商品として交換の利を競ふに在り。夫れ唯だ個人の競爭に一任す、生產力の增加し發達し、市場の擴大するに從つて、競爭益々激烈に、世界の經濟社會は全く無政府の狀態に陷り、優勝劣敗、弱肉强食、具さに其慘を極めり。如此にして社會的生產と資本家的領有の間に生ぜる一大矛盾は、更に組織的なる工場生產と無政府なる一般市場との衝突となつて顯現せる者に非ずや。

○然り矛盾の極は衝突也、衝突の極は即ち破裂に非ずや。今の資本家的產業の方法や、其根源に於て既に一大矛盾を以て其運行を始めたり、而して矛盾の發展する所、一は即ち階級の衝突となり、他は即ち市場の衝突となる。而して是等兩個の方面に於ける衝突や、互に巴字の如く相趁ひ、旋風の如く相追ふの間、其勢力漸次に激烈を致して、遂に現時の產業制度全體の大衝突大破裂に至らずんば已まざらんとするを見る也。何を以てか之を言ふ。

○經濟的自由競爭及び階級戰爭の久しきに彌るや、其結果は必ず多數劣敗者の其產を失ふ也、賃銀勞働者の增加也、資本集中の强大也、生產器械の改良を加ふる也。彼の器械の改良が年々勞働の需用を省減して已まざると同時に、勞働の供給が日々其增加を來すや、即ち多數勞働者の過剩は生ぜざることを得ず。エンゲルの所謂『工業的豫備兵』なる者是れ也。

○工業的豫備兵の現出や、近世工業の下に在て極めて哀しむべきの特徵なりとす。彼等は經濟市場の好況なるの時に於ては、辛うじて其職に就くを得ると雖も、一朝貿易の萎靡するに遇へば、數萬乃至十數萬の多數勞働者は、恰も塵芥を捨つるが如く、工場外に放擲せられて、道途に凍餒せざるを得ず、是れ實に現時歐米諸國の常態也。而して我國の如き其慘狀未だ如此きに至らずと云ふと雖も、而も社會の經濟が資本家的自由競爭に一任する以上は、到底免る可らざるの趨勢にして、餘す所は唯だ時日の問題のみ。

○而して多數勞働者彼等自身の競爭は之に伴うて激す。次で一般賃銀低落の勢ひは成る。一般賃銀の低落は、即ち勞働者をして其生命を支

へんが爲めに、長時間過度の勞働に從はざるを得ざらしむ。而して資本家の掠奪は實に此際に於て逞しくせらる。

○マルクスは蓋し謂らく、『交換は決して價格を生ずる者に非ず、價格は決して市場に於て創造せらるゝ者に非ず。而も資本家が其資本を運轉するの間に於て、自ら其額を增加することを得るは何ぞや。他なし、彼等は實に價格を創造し得る所の驚く可き力を有する商品を購買するを得れば也。此商品とは何ぞや、人間の勞働力是れ也。夫れ此力の所有者は其生活の必要の爲めに、之を低廉に賣却せざることを得ず、而して此力が一日に創造するの價格や、必ず其所有者が一日の生活を支持するの費用として受くる賃銀の價格よりも、遙に多し。例せば一日六志の富を創造し得るの勞働力は、一日三志を以て購買せらる、其差額を名けて剩餘價格と云ふ。彼等資本家が其資本を增加することを得るは、唯だ此剩餘價格を勞働者より掠奪して、其手中に堆積するが爲めのみ』と。

○然り『剩餘價格』の掠奪は、資本を增加せしめて已まず、資本の增加は更に器械の改良を促して已まず、改良の器械は、再び轉じて剩餘價格掠奪の武器となる。而して爾く轉々するの間に於て、社會の生產力は層々膨脹して底止する所を知らず。而も內國市場の膏血は既に彼等資本家の絞取し盡す所となつて、社會多數の購買力は到底之に應ずるに足らず。於是乎彼等資本家は百方生產力疏通の途を求むるや急也、曰く、新市場を拓開せよ、曰く、領土を擴張せよ、外國の貨物を掃蕩せよ、大帝國を建設せよと。然れども世界の市場も亦限りなきことを得ず、現時生產的洪水が無限の氾濫は、竟に壅蔽し得る所に非ざるの勢を示せり。

○而して來る者は即ち資本の過多也、資本家は之を投ずるの事業なきに苦しむ、生產の過多也、商品は之を輸するの市場なきに苦しむ、勞働供給の過多也、工業的豫備兵は之を雇使するの工場なきに苦しむ。今の文明諸國、苟くも近世工業を採用するの地、皆な此ヂレンマに陷り、若くば陷りつゝあらざる者なきに非ずや。於是乎『生產過多』の叫聲は到處に反響す。

○思へ資本家は銳意して、資本の集中、生產の增加を努めたり、而して今や彼等は却て生產の過多なるに苦しむ。器械の改良は人力の需用を省減せしめたり、而も多數の勞働者は却て衣食の匱乏に苦しめり。社會多數の人類は、多額の衣服を作れるが爲めに、却て赤裸々ならざるを得ず。是れ何等の奇現象ぞや。現時產業制度の矛盾衝突は、於是て更に大踏濶步し來れる者に非ずや。

○嗚呼『生產過多』の叫聲、是れ實に破裂の將に至らんとするを警むるの信號に非ずや。果然破裂は其端を恐慌の續出に發せり。

○恐慌の禍も亦慘なる哉、貿易は萎靡を極むる也、物價は俄然として暴落する也、貨物は停滯して動かざる也、信用は全く地を掃ふ也、工場は頻々として閉鎖せらるゝ也、多數の商工の破產は破產に次ぎ、多數勞働者の失業は失業に次ぎ、穀肉庫中に充ちて、而して餓孚却て途に橫ふ。如此き者數旬、數月、甚しきは痼疾數年に彌つて癒えざるに至る、フーリエーの所謂『充溢の危機』なる者即ち是れ也。而して此等恐慌や、其起るや決して偶然に非ず、其去るや亦偶然に非ず。彼一千八百二十五年の大恐慌以來、殆ど每十年、期を定めて以て其禍を被らざるなきを見ば、如何に現時經濟組織の根底が、深く馴致する所ありしかを知るに足らん。

○而して恐慌の至る每に、少數なる大資本家の能く此危機に堪ふるを得る者、常に多數の小資本家の破產零落に乘じて、併吞の慾を逞しくするは、自然の勢ひ也。加ふるに大資本家彼等

自身も亦相互の競爭の危險と、恐慌の襲來を憂慮して措かざるの極、漸次に領有交換に於ける個人的方法の範圍を讓歩して、社會的方法を採用し、以て矛盾衝突を緩和せんと試みたりき。株式會社の組織は之が爲めなりき、同業者大同盟の起るは之が爲めなりき。而して是等手段も亦彼等の運命を永くするに足らざるを見るや、彼等は卽ち現時のツラストなる牙城を築きて、以て最後の惡戰を開始せり。如此にして自由競爭の根底に立てるの資本家制度は、其進化發達の極、却つて自ら自由競爭を一掃し去りて、世界各國の產業は殆どツラストの獨占統一に歸せずんば已まざらんとす。

○然れどもツラストが猶ほ資本家階級の爲めに領有せらるゝの間は、現時の矛盾衝突をして、決して最後の解決を得せしめざるのみならず、却て一段を激進せしむるの具たらずんばあらず。何となれば今や彼等の事業は、唯だ生產の額を制限するに在れば也、價格を騰昂せしむるに在れば也、而して其獨占の暴威を利して、法外の剩餘價格を掠奪するに在れば也、社會全體の窮困匱乏を增大するに在れば也。於是乎社會人類の多數は唯だツラストを所有する少數階級の爲めに、其貪慾の犧牲に供せらるゝに至れり。資本家對勞働者の階級戰爭は、其進化發達の極、遂に變じてツラスト對社會全體の衝突となり了れる也。

○而して社會全體は何時迄か資本家てふ階級の存在を是認せんとする乎。彼の尨大なるツラストは、獨り無責任なる不規律なる個人的資本家の手に支配されざる可らざる乎、社會は之を公有して統一あり組織あり調和あり責任あるの產業と爲すことを得可らざる乎。從來唯だ資本の集中と生產の增加とを以て天職使命となせるの資本家てふ一階級は、此に至つて既に其天職使命を了せるに非ずや、其存在の理由を失へるに非ずや。今や彼等は單に財富分配の防礙物として存するのみに非ずや、獨り勞働者のみならず、實に社會全體と生產機關との間に於ける障壁として存するのみに非ずや。

○然り今や工場に於ける協同的、社會的生產組織の發達は遂に一般社會の無政府的自由競爭と兩立せざるの點に迄達せる也、小數資本家階級の存立を認許せざるの點に迄達せる也、換言すれば矛盾衝突は其極度に達せる也。一面に於ては資本家的個人領有の制度が、最早是等の生產力を支配するの能力なきを示すと同時に、他面に於て是等生產力夫れ自身も亦其無限膨大の力の威壓を以て、現時制度の矛盾を排除し盡さんとせる也、私有資本の域を遁脫し去らんとせる也、其社會的性質を實際に承認されんことを要求命令しつゝある也。是れ豈に一大轉變の運に向へる者に非ずや、一大破裂の時に瀕せる者に非ずや。是れ實に世界產業歷史の進化發達する所以の大勢にして、資本家階級億萬の黃金も又之を如何ともする莫き也。

○新時代は於是て來る。

聖賢不白之冤。託之日月。
天地不平之氣。託之風雷。

第四章　社會主義の主張

○現時の生產交換の方法、卽ち所謂資本家制度は今や其進化發育の極點に達せり。夫れ勢ひ極まれば變ず、花瓣は一日散亂せざることを得ず、卵殼は一日破壞せざることを得ず、唯だ散亂す、故に新果あり、唯だ破壞す、故に雛兒あり。社會產業の組織豈に獨り此理法を免るゝを得んや。

○而して之が進化の理法を說明し、其必然の歸趣を指示して、以て人類社會の向上を促す者、實に我科學的社會主義の主張ならずんばあら

ず。然らば則ち社會主義は吾人に向つて、果して何の新果と雛兒を將ち來さんとする乎。何の新時代を指示して、以て私有資本の舊組織に代へんとする乎。

○教授イリーは社會主義の主張を剖析して、四個の要件を包有すと爲す、言頗る當を得たり。所謂四箇の要件とは何ぞや。

○其一は、物質的生産機關、即ち土地資本の公有是れ也。

○方今社會百害の源が、實に社會的生産機關を揚げて個人の所有と爲せるに在るは、前章既に之を言へり。夫れ唯だ個人の所有に委す、是故に之が所有者は徒手遊食して以て社會生産の大部を掠奪し、多數人類は爲めに益々匱乏墮落に至れる者、實に吾人の永く忍ぶ能はざる所也。而して之が救治や、決して區々小策の能くする所に非ずして必ずや根底の矛盾を排除して、以て産業組織全體の調和を得せしめざる可らず、生産機關の公有豈に已むを得んや。

○夫れ土地や、人類未だ生ぜざるの時よりして之れ有り、獨り地主の製作する所に非ざる也。資本や、社會協同の勞働の結果也、獨り資本家の生産する所に非ざる也。其の在るや唯だ社會人類全體の爲めに在り、個人若くば少數の階級の爲めに存するに非ざる也。故に地主資本家獨り之を專有するの權元より有るの理なしと雖も、而も之を使用して、社會其惠に浴するの間は猶ほ恕す可し。若し夫れ彼等が一に之を以て社會全體の富財を掠奪し、其幸福を犧牲とし、其進歩向上を沮礙するの具に供するに及びては、社會が直ちに之を彼等の手より掠奪して、マルクスの所謂『是等掠奪者より掠奪す』るの至當なるは、言を俟たざる所也。

○故に近世社會主義は、社會人民全體をして、土地資本を公有せしむるを主張す、社會人民全體をして之より生ずる利益に與からしむるを主張す、而して更に從來經濟的意義に於ける地代及び利息の廢滅を主張す。

○之を以て甚だ奇異の感を爲すこと勿れ、見よ現時に於ても諸種の事業の既に公共の所有たる者尠しとせざるに非ずや。郵便電信は、米國を除くの外は、文明諸國皆な國有たり、鐵道も亦日耳曼、墺地利、丁抹の諸國之を國有と爲し、森林、鑛山、耕地の一部、煙草、酒精の販賣の事業等、國有と爲す者多きに非ずや。但だ今の所謂國有なる者や、往々にして中央政府の所有を意味して、未だ完全なる社會的公有の域に達する能はざる者ありと雖も、而も個人若くば少數階級の私利の壟斷を脱せるに至つては即ち一なるに非ずや。

○然り社會主義の主張や、決して中央集權を希ふ者に非ず、其機關と事業との性質如何に從つて、或は一國の有と爲す可く、或は郡縣町村の有と爲す可し。現時の公有産業にして、水道、電燈、瓦斯、街鐵等が都市の所有に屬せるが如き、即ち是れ也。要は個人の手より移して、一般公共の利益に供するに在り。

○現時の經濟學者に皆な曰ふ、彼の初めより獨占的性質を帶ぶるの事業は、之を國有若くば市有と爲すべし、然らざる者は即ち個人の競爭に委して以て其進歩を圖るに如かずと。然れども産業制度の進歩は、從來獨占的性質を帶びざる各種の事業をして、亦盡く獨占の事業と化せるに非ずや。彼の米國に見よ、製鐵も獨占となれるに非ずや、石油も獨占となれるに非ずや、石炭も紡績も、皆大會社、大ツラストの獨占として、他の競爭を許さゞるに至れるに非ずや。個人競爭の極は即ち資本の集中合同也、資本の集中合同の極は即ち各種の事業をして、盡く獨占の事業たらしめずんば已まず。經濟的自由競爭より生ずる進歩は過去の夢也、今や問題は、此等獨占の事業をして依然小數階級に私

せしむべきか、將た社會公共の所有に移して其統一を期すべきか、二者其一を擇ぶに在り。是れ社會進步の大勢にして必然の結果ならずんばあらず。而して社會主義の第一義は唯だ之を是れ指示せんと欲するのみ。

○要件の第二は、生產の公共的經營是れ也。

○生產機關たる土地資本、既に社會の公有に歸すと雖も、其事業の經營に至りては猶ほ個人の手中に在る者多し、例せば鐵道の如き、街鐵の如き、社會之を公有して而して其經營は即ち私設の會社に託し、酒精の如き、鹽の如き、煙草の如き、政府專占の事業となれる者にして、其生產若くば交換の一部は、依然個人の事業として存し、或は公有の耕地にして、私人に委して耕耘せしむる等の類是れ也。而して是等私人若くば私設會社の經營の目的や、常に彼等自身が市場の利益を趁ふに在り、彼等の利益一たび休せん乎、其產業は即ち廢棄せらる、是れ資本家制度の下に在て免る可らざるの狀態也。故に眞に社會の產業をして個人の利益の爲めにせずして、社會全體の消費に供し、市場の交換の爲めにせずして、社會全體の需用を滿足せしめんと欲せば、其經營や、決して私人の手に委す可らずして、必ずや公共の管理に待たざる可らず。社會は即ち獨り生產機關を公有するに止まらずして、公選せる代表者をして之を經營せしめざる可らず、而して是等の經營や、必ず社會全體に對して其責に任ぜしめざる可らず。

○或は曰はん、事業の經營や、唯私有として始めて能く其功果を揚ぐることを得んのみ、既に自家の私有に非ずとせば、誰か其職に忠なる者あらんやと。然れども見よ、今の三井家の主人は其事業の經營に於て、果して幾何の勤勞に服せる乎、岩崎氏の主人は其事業の管理に於て、果して幾何の技倆を現ぜる乎。生產機關の膨大し、事業の發達し、生產の增加すること高度なるに及んでや、其運用は到底個人の技量の能く堪ふる所に非ずして、遂に多數協同の手腕を要するに至るべし、況んや凡庸遊惰の資本家をや。現時諸種の大規模の產業に於て、其實際の經營管理は一として其所有者たる資本家に依て成さるゝ者なくして、却て所有者たらざる社員若くば雇人の技能に依て、能く其功果を奏しつゝあるに非ずや。社會主義は即ち是等世襲の所有者に代ふるに、社會公選の代表者を以てし、放逸の資本家に代ふるに、責任あるの公吏を以てし、私人の使役せる雇人若くば社員に代ふるに、公共の任命せる職員を以てせんと欲するのみ、而して其產業の進步は獨り所有者の利益たる者に非ずして、社會全體皆直ちに其惠に浴するを得べしとせば、予は未だ各人が今日に比して其職に忠ならざる所以を發見することを得ざる也。

○社會が如此にして一切の生產機關を公有し、一切の產業を管理するに至らば、社會人民全體は即ち其株主にして亦實に其勞働者也。社會は其適する所の職業を彼等に與へ、彼等は其勞働を以て社會に奉ず。而して其生產や既に市場交換の爲めに在らずして、社會全體の消費に在り、生產益々多くして、社會の需要は益々滿足せらるゝを得、又物價の低落を憂へざる也、又生產の過多を憂へざる也、而して勞働者の失業の問題亦全く解決せらるゝを得ん也。若し眞に生產の消費に過ぐるあらん乎、唯だ勞働時間の短縮にして足れり、豈に又一人の其所を得ざる有らんや。

○否な啻に失業の人なきのみならず、一面に於ては、萬人皆勞働に服せざる可らざることを意味す。公共的生產の下に在ては、利息なく地代なし、徒手逸居して以て他の勞働の結果を掠奪するの手段なければ也。フィフテ曰へる有り、『勞働せざる者は、即ち衣食の權利なし』と。是

れ眞理也、正義也、社會主義は眞理正義の實現せられんことを要求す。

○要件の第三は、社會的收入の分配是れ也。

○公共的生產の收入や、必ず社會公共の領有に歸すべくして、個人の擅まに占斷するを許さゞるは論なし。而して社會の公選せる代表者若くば職員は、先づ其の收入の一部を以て、生產機關の保持、擴張、改良及び備荒の資に充つるの外、他は總て社會全體に分配して其消費に供すべし。而して此等分配や之を生產する者特り之に與かるのみならず、老幼其他勞働の能力無き者と雖も、固より之を要求するの權利有る可し。何となれば其富や既に社會の領有たり、其人や實に社會を組織する所の一員たれば也。此點に於て社會主義の主張は完全なる相互保險也、社會主義制度の下に在ては、吾人萬人は其生れてより死に至るまで、獨り疾病、災禍、老衰に對するのみならず、敎育、娛樂其他一切の需用を滿足すべき保險を有する也。但だ勞働の能力あつて而も其義務に服するを嫌ふが如きは嚴に制裁を加ふべきのみ、否な社會の組織改善し生活の苦痛減少するに從つて、是等不德の徒亦自ら其迹を絕つに至るべきは、予の信じて疑はざる所也。

○於是て吾人は重大なる問題に逢着す。何ぞや、曰く、其分配の公正てふこと是れ也。然り公正の分配、是れ實に社會主義の唱道せらるる所以の最大の動機也、社會主義要件中の要件也、產業組織が進化發達する所以の主要の目的也。然らば即ち如何の方法標準が果して其公正を得べしとする乎。

○分配の標準に關して、社會主義者の企圖古今一ならずと雖も、凡そ四種に別つ可し。一は其分配する所の物件、量と質と兩つながら必ず均一ならんことを要する者、バボーフ此說を持せり。次は技能成績の短長に比例して、報酬に等差あらしめんとする者、サン・シモンの主張せし所也。次は唯だ各人の必要に準じて給與する者、ルキ・ブラン之を以て理想と爲せり。而して近時の社會主義者中、各人の分配額は其質に於てせずして其價格に於て平等ならしめんと唱道する者多し。

○夫れ各個の人、心身兩ながら皆な異ならざるはあらず、從つて生活の必要を異にし嗜好を異にす、強て其平等ならんことを求むるは、却て公正を缺くの甚しき者、分配の量と質との均一なる可らざるや論なし。

○技能の長短に應じて報酬に等差ある、稍や公正に近きに似たり。而も如此くなれば勞働の能力なき者は即ち餓ゑざる可らず、是れ豈に社會的道德の本旨ならんや。且つや技能の長短は必しも消費の多少に伴はず、例せば甲の成績は能く乙に二倍すと雖も、而も甲の食餌の量は必しも乙に二倍せざるに非ずや。啻に是のみならず、社會主義制度の下に在てや、其生產は多く社會的生產也、協同的生產也、甚だ個人特種の技能に待つある者に非ず。而して偶ま個人特種の技能に待つ有るも、是等技能や、亦實に社會全體の感化、敎育、薰陶、啓發の賜に非ざるはなし。既に社會に負ふ所多き者、亦多く力を社會の爲めに效すは當然の責務のみ、何ぞ特に物質的財富の多きを貪る可きの理あらんや。

○社會の生產分配の目的が、眞に社會萬民生活の需用を滿足せしめ、其進歩を促すに在りとせば、吾人は即ち其必要に應じて分配するを以て、最終の理想と爲さゞる可らず。爰に一個の家庭ありとせよ、而して父母たる者若し其子女を遇するに、此子は才能あり、美衣美食を與ふ可し、彼子は庸劣なり、惡衣惡食にして可なりといふ者あらば、吾人の良心は果して之に忍ぶ可き乎。夫れ一家の兒女、長幼強弱皆な各々異りと雖も、而も其衣食分配の標準が、決し

て技能成績の如何にあらずして、必ず其必要に應ずべきは、人間道德の命ずる所にあらずや。社會主義の主張は、社會を以て一大家庭と爲すに在らざる可らず、社會は其父母たらざる可らず、各人は皆な同胞たらざる可らず。而して父母の其兒女に向つて分配する所、先づ其尤も急なる者、例せば食餌、衣服、住居及び教育の資より始めて、漸次に其急ならざる者に及ぶ。其量と質とは固より大に異なるなきを得ずと雖も、而も各々十分に其生を遂ぐる所以に至りては、即ち一なるに非ずや。

○若し夫れ分配の價格を平等するの說や、自ら必要に應ずるの分配と其結果を同じくす可し。何となれば、此分配や決して物品の同一を意味する者に非ざるが故に、各人其價格の範圍に於て、自由に自家の必要と嗜好を滿足せしむるの物件を求め得可ければ也。但だ其價格の制定極めて困難なりと爲すのみ。

○要件の第四は、社會の收入の大半を以て個人の私有に歸すること是れ也。

○世人多くは曰く、財產の私有は、個人の自由を保持し智德を向上するが爲めに極めて必要の事と爲す、而も社會主義は之を禁絕せんとするに非ずやと。財產私有の必要なるは洵に然り、然れども社會主義が之を禁絕せんとすといふに至りては誣妄の甚しき也。否な之を禁絕するは却て現時の產業組織に非ずや。見よ、今の產業組織の下に在ては、社會の財富は常に一部の地主資本家の手に集中し、社會全體をして決して其自由を保持し智德を向上するに足るべき財產の所有を許さゞるに至れるに非ずや。而して彼等多數は漸次に無一物となり、其日暮しとなり、所謂『賃銀奴隸』の境涯に墮落しつゝあるに非ずや。

○社會主義の制度は即ち之に反す。社會的歲入の大半を以て各人に分配して以て之を私有せしむ。故に公共生產の發達し社會的收入の增加するに從つて、個人の私有亦益々富厚にして、各其所好に從つて消費し若くば貯蓄することを得、又其匱乏の爲めに他人に依賴することを要せず、他人の爲めに制せらるゝの憂ひなし。如此にして社會主義は實に財產私有の制を擴張して、以て萬人の自由を保障し、其向上を促進せんことを欲する也。

○但だ知らざる可らず、社會主義は私有の財產を增加すと雖も、此財產や實に各人の消費に充つるの財產にして、決して土地資本、即ち生產機關を意味する者に非ざることを。生產の機關が必ず公有たるべくして、其生產の結果が必ず一たび社會の收入たるべきは、固より前に言へるが如し。

○論者又曰く、夫れ私有の財產富厚なるに至れば、節儉なる者は之を貯蓄し、資本として使用する者あるに至らん、果して如此なれば直ちに資本家の階級を生じて、貧富の懸隔する舊の如くならんと。然れども產業の方法規模益々尨大なるに從つて、唯だ共同的經營に待つ可くして、決して個人の支持に堪へざるに至るべきは、現時の狀勢既に之を證せり。若し然らざるも、一切の生產機關既に公有となり、重要の產業が總て社會公共の手に管理さるゝの時に於ては、一個人は又其私有の財產を資本として投ずるの機會有ること無けん。假に些細の私業を企圖して、之に放資する者有りとするも、曷ぞ能く社會公共の大產業と競爭兩立することを得んや。眞に是れ鐵牛角上の蚊のみ、以て全體の組織を損傷するに足らざる也。

○更に知らざる可らず、吾人は社會的收入の「大半」を私有す可しと云ふ、其全部と云ふ者に非ざることを。社會生產の目的や、一に吾人需用の滿足に在りと雖も、而も吾人需用の滿足は、必しも之を私有することを要せざる者多し。

現時に在ても、學校、公園、道路、音樂會、圖書館、博物館の如き、共有の財産として、各人の必要と嗜好を滿足せしめんが爲めに、自由に之を使用することを許せり。將來經濟組織益々統一し、社會的道德益々發達することを得ば、社會的收入を公共的に使用し、以て公共の利益、進歩、快樂を圖るの風亦愈々盛んなる可きが故に、諸種の收入財産の共有として存する者、今日に比して更に著大の增加を見ん也。

○イリーの所謂社會主義の四個の要件は上の如し。予は之に依て略ぼ其主張の在る所を窺ふを得たるを信ず。然り社會主義は實に此等要件の實現を以て、社會產業の歷史的進化に於ける必然の歸趨と爲す者也。

○故にミルは定義して曰く、『社會主義の特質とする所は、生産の機關と方法を以て社會人員全體の共有と爲すに在り。從つて其生産物の分配も、亦公共の事業として、其社會の規定にする所に準じて行はれざる可らず』と。

○カーカップは『エンサイクロペヂヤ・ブリタニカ』に記して曰く、『現時私人の資本家が賃銀勞働者を役して經營せる所の工業は、將來に於ては聯合若くば共同の事業として、卽ち萬人共有の生産機關に依て行はれざる可らず。社會主義に於ける骨髓のプリンシプルとして承認さる可きは、其理論に見るも其歷史に徵するも一に是に外ならず』と。

○マルクスの女婿にして佛國マルクス派の首領たるパウル・ラフワルギュは曰く『社會主義は如何なる改良家の企畫にもあらず。唯だ現在の組織が既に重大なる經濟的進化の運に迫れることを信じ、而して此進化の結果や、卽ち資本私有の制は變じて勞働者團體の共同的所有之に代るべきことを信ずる人々の教義也。故に社會主義の特質は、其歷史的發見の點に在り』と。

○エンゲルは更に曰く『社會が生産機關を掌握するや、商品の生産は卽ち迹を絕つ可し、而して生産者は又生産物の爲めに制御せらるゝことなけん。社會的生産の無政府は一掃して、之に代る者は卽ち規律統一ある組織ならん、個人的生存爭鬪は消滅せん。如此にして人は初めて禽獸の域を脫して、眞個に其人たる所以の意義を全くすることを得可し』と。

○然り、果して如此くならば、資本家は卽ち廢滅せらる可し、勞働者は賃銀の桎梏を脫す可し、各人は社會の爲めに應分の勞働を供給して、社會は各人の爲めに必要の衣食を生產す。分配あつて商業なし、統計あつて投機なし、協同あつて爭鬪なし、豈に又生産過多あらんや、豈に又恐慌の襲來あらんや。人は決して富の爲めに支配せらるゝことなくして、能く富を支配することを得可き也。於是て現時產業組織の矛盾より生ずる百害は爲めに掃淸せられて、能く自然の調和を全くすることを得べき也。

枝底唯雲。囊中唯月。不勞關市之譏。
石筍羅書。池塘洗墨。豈供山澤之租。

第五章　社會主義の效果

○說て此に至らば、一團の疑惑は雲の如く、油然として直ちに衆人の心頭を衝て起る者あらん、何ぞや。

○曰く、古來人間の氣力奮揚し、智能練磨し、人格向上することを得る所以は、實に生存の競爭あるが爲めに非ずや。若し萬人衣食の慮る可きなく、富貴の進取すべきなく、賢愚强弱皆な平等の生活に安んぜざる可らずと爲さば、何物か又吾人の競爭を鼓舞せんや。競爭なきの社會には卽ち勤勉なけん、勤勉なきの社會には、卽ち活動進步なけん、活動進步なきの社會は、卽ち停滯、墮落、腐敗あるのみ。社會主義實行の效果は、唯だ如此きに止まらざる乎と。

○獨り庸衆の、這個の杞憂を抱けるのみならず、碩學スペンサーの如きすら亦曰く『社會主義の制度は總て奴隷制度也』と。ベンジャミン・キッドも亦其大著『ソシアル・エヴォルーション』中に論じて謂らく『個人の生存競爭は、啻に社會あつて以來のみならず、實に生物あつて以來、常に進歩の源たる者也、而も社會主義の目的は全く之を禁絶するに在り』と。而して今の地主資本家に阿媚して自ら利する者あらんとするの徒、亦此種の言説を誇張し、以て社會主義の大勢に抗する唯一の武器と爲すもの丶如し。

○夫れ社會主義の爲す所にして、果して個人の自由を奪ひ社會の進歩を休せしむる彼等の言の如くならん乎、其唾棄すべきや論なし。然れども是れ誤謬也、誣謗にあらずんば即ち讒誣也。

○思へ所謂生存競爭が社會進化の大動機たるは、豈に彼等の言を待て後知らんや。而も古來社會の組織が漸次其狀態を異にするに至るや、之を刺撃し活動せしむる所以の競爭其物も亦從つて其性質方法を異にせざることを得ず。腕力の競爭が智術の競爭となれるを見よ、個人の競爭が團體の競爭となれるを見よ、武器の競爭が辯說の競爭となれるを見よ、掠奪の競爭が貿易の競爭となれるを見よ、侵略の競爭が外交の競爭となれるを見よ、生存競爭の性質方法が、常に社會の進化に伴うて進化せるの迹を見る可らずや。

○而して見よ、現時の經濟的自由競爭が殖產的革命の前後に於て、世界商工の發達に與つて大に力ありしことは、予も亦之を疑はず、然れども此等競爭を必要とせし時代は既に過ぎ去れり。今や自由競爭は果して何事を意味すとする乎、唯だ少數階級の暴橫に非ずや、多數人類の痛苦に非ずや、貧富の懸隔に非ずや、不斷の恐慌に非ずや、財界の無政府に非ずや。是れ實に社會の進化に益なきのみならず、却て其墮落を長ずる者に非ずや。如此にして吾人は猶ほ其保存を希ふの理由ある乎。

○太初蠻野の時に於てや、暴力の鬪爭は社會進化の爲めに其唯一の動機たりき、而も今日に於ては直ちに一個の罪惡に非ずや。若し競爭は進歩に必要なるが故に、暴力も之を禁ずるを得ずと言はゞ、誰か其無法を笑はざらんや。今の自由競爭を以て必要となすの愚は實に之に類せずや。

○且つや眞個の競爭を試む、必ずや先づ競爭者をして平等の地位に立たしめざる可らず、其出發點を同じくせしめざる可らず。而も今の競爭や如何、一は生れながらにして富貴也、衣食足り、教育足り、加ふるに父祖の讓與せる地位と信用と資產とを以てす、他は貧賤の子也、凍餒窮苦の中に長じ、教育なく資產なく、地位なく信用なし、有る所は唯だ赤條々の五尺軀のみ。而して此兩者を直ちに競爭場裡に投じて長短を較せしむ。而して其勝敗の決を見て喝采して曰く、是れ優勝劣敗也と、是れ豈に殘酷なる虐待に非ずや、何ぞ競爭たるに在らんや。

○然り今の自由競爭や、決して眞個公平の競爭に非ざる也、今の禍福や決して勤惰の應報に非ざる也、今の成敗や決して智愚の結果に非ざる也。運命のみ、偶然のみ、富籤を引くと一般のみ。

○否な所謂自由競爭の不公なるのみならず、此等不公の競爭すらも、今や殆ど之を試むるの餘地なきに至らんとす。見よ、世界產業の大部は既に偶然を僥倖せる資本家の獨占となれるに非ずや、世界土地の大部は、既に運命の恩寵ある大地主の併有に歸せるに非ずや。而して資本を有せざる者及び土地を有せざる者は、唯だ彼等の奴隷たるの外なきに至れるに非ずや。然り自由競爭の名は美也、而も事實に於て經濟的競爭は竟に其迹を絶たずんば已まず。豈に特に社

會主義の之を廢絶することを待たんや。

○於是乎生存競爭の性質方法は、更に一段の進化を經ざることを得ず。社會主義は實に這個進化の理法を信じて、社會全體をして此理法に從はしめんと欲す。然り現時卑陋の競爭を變じて高尚の競爭たらしめんと欲す、不公の競爭を變じて正義の競爭たらしめんと欲す。換言すれば卽ち衣食の競爭を去て、智德の競爭を現ぜんと欲する也。

○試みに思へ、人生の進步向上にして、單に激烈なる衣食の競爭の結果なりとせん乎、古來高材逸足の士は必ず社會最下層の窮民中に出づべきの理也。而も事實は之に反す、人物が多く富貴の家に生ぜざると同時に、極貧者の中に出づること亦甚だ稀なるに非ずや。他なし富貴の階級や、常に佞媚阿諛の爲めに圍繞せられて、志驕り氣傲る、徒らに快樂の奴となり、窮乏の民や終生衣食の爲めに遑々として、唯だ飢凍に免るゝに急なれば也。

○然り高尚なる品性と偉大の事業とは、決して社會貧富の兩極端に在らずして、常に中間の一階級より生ずる者也。彼れ夫れ資財ありと雖も未だ彼等を腐敗せしむるに足らず、勤勞を要すと雖も、未だ彼等を困倦せしむるに至らず、猶ほ其智能を磨くの餘裕有り、心氣を奮ふの機會多ければ也。見よ封建の時に於て武士の一階級が其品性の尤も高尚に、氣力の尤も旺盛に、道義の能く維持せられたる所以の者は、實に彼等が衣食の爲めに其心を勞するなくして、一に名譽、道德、眞理、技能の爲めに勤勉競爭するの餘裕機會を有せしが爲めに非ずや。若し彼等にして初めより衣食のために競爭せざる可らざらん乎、直ちに當時の『素町人根性』に墮落し去らんのみ、豈に所謂『日本武士道』の光榮を擔ふことを得んや。

○基督は富人を嚴責するに、其天國に入り難きを以てし、貧しき者は幸福なりと曰へり。然れども知らざる可らず、當時の猶太の貧民は、漁農を務め、工藝を勵み、以て獨立の生を營めるの中等民族にして、決して今日多數の賃銀的奴隸と同視すべきに非ざることを。而して社會を擧げて是等中等民族と爲さんとするは、是れ社會主義の目的とする所に非ずや。

○爰に人あり、雇主の叱咤を恐るゝが爲めに非ず、財貨の報酬を望むに非ず、唯だ工作を愛するが爲めに建築に從事すとせよ、唯だ神來に乘じて其大筆を揮灑すとせよ。彼等の藝術は如何に其眞を得、善を得、美なるを得べきぞや。其他幽奧なる哲理の探討や、精緻なる科學の研究や、如此にして始めて大に其光彩を放つべきに非ずや。

○更に一面より見る、現時社會の墮落と罪惡の大半は實に衣食の匱乏に因す、金錢の競爭に因す。家庭の平和も之が爲めに害せられ、婦人の節操も之が爲めに汚され、士人の名譽も之が爲めに損せられ、而して一國一社會の風敎、道德之が爲めに壞敗せらる。見よ現時我國監獄の囚徒七萬人、而して其罪狀の七割は實に財貨に關する者也といふに非ずや。古人言ひ得て佳し、『金が敵の世の中』なりと。若し世に金錢の競爭なかりせば、社會人心は如何に純潔なる可りしぞ、少くも今の罪惡は其大半を掃蕩す可きに非ずや。而して能く吾人の爲めに、金錢てふ怨敵を滅絶し、衣食競爭の蠻域を脫せしむる者は社會主義に非ずや。ウイリアム・モリスは曰く『人が財貨の爲めに心を勞するなきに至るも、技藝、萬有、戀愛等は、人生に與ふるに趣味と活動とを以てす可し』と。是等の趣味と活動は、吾人の爲めに更に正義高尚なる自由競爭を開始して、以て社會の進化を促進するを得ん也。

○言ふこと勿れ、衣食の慮る可きなくんば、人

は勤勉することなけんと。人の勤勉を促す者、豈に唯だ財貨のみならんや、人間の性情は未だ如此く汚下ならざる也。見よ彼の深山大海の探險や、學術上の發明や、文學美術の大作や、其他各々好む所に從ひ適する所に向つて其技能を試むるに當つてや、心中獨り自ら愉悅に堪へざるもの無くんばあらず。況んや之に加ふるに多大の名譽光榮の酬ゆるありとせば誰か欣然として其勤勞に服せざる者あらんや。少年の學生が孜々として學ぶ者は、決して衣食の爲めにするに非ざる也、兵士の奮躍して死に趨くは、決して衣食の爲めにするに非ざる也。

○現時勞働者の大抵勤勞を厭うて、動もすれば安逸を貪るの狀あるは、予も亦之を認む、然れども是れ豈に彼等の罪ならんや。夫れ演劇を觀、角觝を樂む者と雖も、其長きに及べば卽ち倦怠を感ず。況んや惡衣惡食にして、一日十數時間の勤勞に服す、以て少壯より老衰に至る、何の希望なく、何の變化なく、何の娛樂なし。而して其事業や必しも其好む所に非ざる也、唯だ衣食の爲めに驅らるゝのみ。而して彼等が勤勞の功果や、其大部は卽ち他人の爲めに掠奪せられて彼等は僅に其生命を支ふるに過ぎざるに非ずや、之を如何ぞ疲勞厭倦せざることを得んや。然り今の勞働者が衣食の爲めに驅らるゝや、牛馬の如し、彼等の心身は既に其鞭笞に堪へざるに至れり。彼等が懶惰を以て其樂園と爲すに至れる者、一に現時社會組織の弊害之を致せるのみ。

○夫れ人は其勤勞の長きに堪へざるが如く、亦逸豫の長きに堪へず。試みに今日の勞働者に向つて、汝の衣食は給せらるべし、汝是より勤勞を要せずと言はゞ、彼等は初め喜んで其惰眠を貪らん。而も如此き者數日ならしめよ、十數日ならしめよ、數月ならしめよ。彼等は漸く其徒然無爲に飽きて、必ずや多少の事業を求むるに至るや明らか也。

○故に社會主義制度の下に處して、衣食あり、休息あり、娛樂あり、而して後其好む所、適する所に從つて、一日三四時乃至四五時、其强健の心身を勞して社會に奉ずるが如きは、却て是れ一種の滿足たらずんばあらず。苟くも人心ある者誰か敢て避躱せんや。『勞働の神聖』てふ語は、於是て初めて意義あることを得ん也。

○若し夫れ社會主義を以て個人の自由を沒却すといふに至つては、妄之より甚しきは莫し。予は先づ此言を爲すの人に向つて反問せん、現時果して所謂個人の自由なる者ありやと。

○宗教の自由は之れ有らん、政治の自由は之れ有らん、而も宗教の自由や、政治の自由や、凍餒の人に在ては、一個の空名に過ぎざるに非ずや。所詮經濟の自由は總ての自由の要件也、衣食の自由は總ての自由の樞軸也、而して今果して之れ有る乎。

○米國勞働者同盟第十三回大會に於けるヘンリー・ロイドの演說の一節は、答へ得て痛切也、曰く『米國獨立の宣言や、昨日は自治（セルフ・ガバーンメント）を意味せりき、今日は卽ち自業（セルフ・エンプロイメント）を意味す。眞個の自治は卽ち自業ならざる可らず。…而も今や勞働者が其爲す可き所を爲し得ず、其要する所を與へられざるは、滔々皆な然らざるなし。勞働者は勞働の八時間ならんことを欲す、而も彼等は十時間、十四時間、十八時間の勞働に服せざる可らず。彼等は其子女を學校に送らんと欲す、而も却て之を工場に送らざる可らず。彼等は其妻の家庭を治めんことを欲す、而も却て之を機器車輪の下に投ぜざるを得ず。彼等は病で靜養を欲するの時、猶ほ勞働せざることを得ず、勞働を欲するの時却て解雇の爲めに失業せざることを得ず。彼等は職業を乞うて得ざる也、彼等は公平の分配を得ざる也。彼等は他人の私慾若

くば野望の爲めに、彼等自身の、彼等の妻の、彼等の子女の、四肢體軀、健康、生命すらも犧牲に供せざることを得ず』と。豈に獨り工場の勞働者のみならんや、今の世に處して生産機關を有せざる者は、其生活の不安にして苦痛なる、皆な然らざるなし、而も彼等は呼で曰く自由競爭也、自由契約也と。是れ强制の競爭のみ、是れ壓抑の契約のみ、何の自由か之れ有らん。

○社會主義の主張する所は、實に這個の强制を脫せしめんとするに在り、這個の壓抑を免れしめんとするに在り。一八九一年エルフルト大會に於ける獨逸社會民主黨の宣言書の一節は曰く『這個社會的革命は、特に勞働者の解放のみならず、實に現時社會制度の下に苦惱せる人類全體の解放を意味す』と。思へ社會主義一たび實行せられて、天下雇主の爲めに驅使せらるゝの被雇者なく、權威に壓抑せらるゝの學者なく、金錢に束縛さるゝの天才なく、財貨の爲めに結婚するの婦人なく、貧窮の爲めに就學せざるの兒童なきに至らば、個人的品性の向上せられ、其技能の修練せられ、其自由の伸張せらるゝ果して如何ぞや。

○ミルは曰く『共産主義に於ける檢束は、多數人類に取て、現時の狀態に比して、明かに自由なる者あらん』と。彼の所謂共産主義は卽ち今の社會主義を意味する者也。

○然り宗教革命は吾人の爲めに信仰の桎梏を撤したりき、佛國革命は吾人の爲めに政治の束縛を免れしめき。而して更に吾人の爲めに衣食の桎梏、經濟の束縛を脫せしむる者は、果して何の革命ぞや。エンゲルは卽ち社會主義を稱して曰く、『是れ人間が必要の王國より一躍、自由の王國に上進する者也』と。

○夫れ唯だ『自由の王國』也。是を以て社會主義は國家の保護干涉に賴る者に非ざる也。少數階級の慈善恩惠に待つ者に非ざる也。其國家や人類全體の國家也、其政治や人類全體の政治也。社會主義は一面に於て實に民主主義たる也、自治の制たる也。

○今の國家や唯だ資本を代表す、唯だ土地を代表す、唯だ武器を代表す。今の國家は唯だ之を所有せる地主、資本家、貴族、軍人の利益の爲めに存するのみ。人類全體の平和、進步、幸福の爲めに存するに非ざる也。若し國家の職分をして如此きに止まらしめば、社會主義は實に現時の所謂『國家』の權力を減殺するを以て、其第一着の事業と爲さざる可らず。然り封建の時に於ては人類、人類を支配したりき、今の經濟制度の下に於ては、財貨、人類を支配せり、社會主義の社會に在ては、實に人類をして財貨を支配せしめんと要す、人類全體をして萬物の主たらしめんと要す。豈に奴隷の制ならんや、豈に個人を沒却する者ならんや。否な人生は此如にして初めて其眞價を發揚す可きに非ずや。

○社會主義は、現時國家の權力を承認せざるのみならず、更に極力軍備と戰爭とを排斥す。夫れ軍備と戰爭とは、今の所謂『國家』が資本家制度を支持する所以の堅城鐵壁とする所にして、多數人類は之が爲めに多大の犧牲を誅求せらる。今や世界の諸强國は軍備の爲めに、實に二百七十億弗の國債を起し、而して單に之が利息のみにして、常に三百萬人以上の勞働を要すといふに非ずや。加之幾十萬の壯丁は常に兵役に服し、殺人の技を習うて無用の勞苦を嘗めざる可らず。獨逸の如き、壯丁の多數は皆な兵士として徵集せられ、田野に耕耘する者は、半白の老人若くば婦女のみなりといふ。嗚呼是れ何等の悲慘ぞや。況んや一朝戰爭の破裂に會ふや、幾億の財幣を糜し、幾千の人命を損して、國家社會の瘡痍永く癒ることを得ず、贏す所は唯だ少數軍人の功名と、投機師の利益のみ。人類の災厄罪過豈に之に過ぐる者あらんや。

○若し世界萬邦、地主資本家の階級存するなく、貿易市場の競爭なく、財富の生產饒多にして、其分配公平なるを得、人々各其生を樂しむに至らば、誰が爲めにか軍備を擴張し、誰が爲めにか戰爭を爲すの要あらんや。是等悲慘なる災厄罪過は爲めに一掃せられて、四海兄弟の理想は於是乎始めて實現せらるゝを得可き也。社會主義は一面に於て民主主義たると同時に、他面に於て偉大なる世界平和の主義を意味す。

○故に予は玆に再言す。社會主義を以て競爭を廢止する者となすこと勿れ、社會主義は衣食の競爭を廢止す、而も是れ更に高尙なる智德の競爭を開始せしめんが爲めのみ。勤勉活動を沮礙すと云ふこと勿れ、社會主義の除去せんとするは、勤勉活動にあらずして人生の苦惱悲慘のみ。個人を沒却すといふこと勿れ、社會主義は却て萬人の爲めに經濟の桎梏を脫却して、十分に其個性を發展せしめんと欲するに非ずや。奴隷制度なりと云ふこと勿れ、社會主義の國家は階級的國家に非ずして、平等の社會也、專制的國家に非ずして博愛の社會也、人民全體の協同の組織を爲して、以て地方より國家に及び、以て國家より世界に及び、四海平和の惠福を享受せんとする者に非ずや。

○果して能く如此しとせば、誰か又社會主義的制度の下に在て、人間品性の向上、道德の作興、學藝の發達、社會の進步が今日に比して更に幾層倍なるを疑ふ者ぞ。

議事者。身在事外。宜悉利害之情。
任事者。身居事中。當忘利害之慮。

第六章　社會黨の運動

○曰く一切生產機關の公有、曰く富財の公平なる分配、曰く階級制度の廢絕、曰く協同的社會の組織、之が實行や洵に一大社會的革命也。然らば則ち社會黨は革命黨なる乎、其運動は革命的運動なる乎。曰く然り。

○然れども怯懦の貴族よ、小心の富家よ、輕躁の有司よ、乞ふ恐るゝ勿れ。今の社會黨は漫に爆彈を公等の車馬に投ぜんとする者に非ざる也、敢て鮮血を公等の邸第に蹀まんとする者に非ざる也、但だ公等と俱に與に大革命の德澤に沐浴せんと欲するのみ、恩惠に光被せんと欲するのみ。

○思へ古今何の時か革命なからん、世界何の邦か革命なからん、社會の歷史は革命の記錄也、人類の進步は革命の功果也。試みに思へ、當年の英國、クロムエルの起つに會はず、當年の米國獨立を宣するを得ず、佛國の民、共和の制を建つる能はず、日耳曼諸州聯合の業成らず、伊太利統一せらるゝを見ず、日本維新の中興なかりしとせば、世界人類は今や果して何の狀を爲すべき乎、現時の文明は果して何の處にか見るべき乎。革命を恐怖する者よ、現時公等が謳歌せる文明と進步とは、實に過去幾多の大革命が公等に賚賜せる所に非ずや。

○社會の狀態が常に代謝して已まざるは、猶ほ生物の組織の進化して已まざるが如し。而して其進化や代謝や若し一たび休せるの時は其生物や社會や卽ち絕滅あるのみ。永久の生命は必ず暗々裡に進化す、決して常住を許さゞる也、社會の狀態は必ず冥々の間に代謝す、決して不變を許さゞる也。而して這の暗冥なる進化代謝の過程に於て、每に明白に其大段落を劃し、新紀元を宣言する者、則ち革命に非ずや。之を譬ふるに歷史は一連の珠數に似たり、平時の進化代謝は其小珠也、革命は其數取りの大珠也、進化代謝の連續なると同時に亦革命の連續たる也。

○ラッサルは曰く『革命は新時代の產婆也』と。此語未だし也、予は將に曰はんとす、革命は產婆に非ずして、分娩其物也と。何となれば是れ偶然の出來事に非ずして、實に進化的過程の必

然の結果なれば也。而して舊時代老いて新時代を生み、新時代の長ずるや、更に他の新時代を生む、皆な革命に依らざるは無し。何ぞ彼の子々孫々の遞に分娩して百世窮極する所なきと異らんや。

○但だ分娩に難易あるが如く、革命にも亦難易なきを得ず。分娩が時に母體を切開するの要あるが如く、革命も時に暴動を現ずるの已むなきに至るあり。而も是れ決して希ふ可きのことに非ざるや論なし。

○故に母體の組織發達の如何を診し、之が健康を保ちて以て其分娩を容易ならしめんと期するは、產科醫及び產婆の職務也。社會の組織狀態の如何を察し、進化の大勢を利導して以て平和の革命を成さんと希ふは、革命家の識慮也。而して今の社會黨や實に這個社會的產婆科醫を以て、自ら任とする者に非ずや。

○夫れ然り、革命は天也、人力に非ざる也。利導す可き也、製造す可きに非ざる也。其來るや人之を如何ともするなく、其去るや人之を如何ともするなし。而して吾人人類が其進步發達を休止せざるを希ふの間は、之を恐怖し嫌忌すと雖も決して之を避く可らず、唯だ之を利導し助成し、以て其成功の容易に且つ平和ならんことを期すべきのみ。社會黨の事業や、唯だ如此きを要す、曷んぞ漫に殺人叛亂を以て、平地に波を揚げて快とする者ならんや。

○蓋し前世紀の初め、社會黨の陳吳として起てる者、英に在てはオーエン、佛に在てはカベー、サン・シモン、フーリエー、ルイ・ブラン、獨に在てはワイトリングの徒、其現時制度の害毒を指摘するや頗る痛切に、其理想の實行に着手するや極めて熱心なる者ありき。然れども當時社會主義の發達、日猶ほ淺く、研究未だ精なることを得ざりしが故に、彼等の企畫や遂に一種の空想、即ち所謂『ユトピア』たるを免れざりき。彼等が或は共同生產の工場を起し、或は共同生活の殖民地を拓くや、一に自己の模型に從つて直に社會を改鑄せんとする者なりき、一日一夜にして直ちに理想の世界を現出せんとする者なりき。彼等は人道の上に立てり、而も未だ科學の基礎を得ること能はざりき。彼等は建設を試みたり、而も未だ自然の進化に從ふ能はざりき。其前後相踵で失敗に歸せしは固より其所也。

○是を以て當時の歷史を瞥見する者、動もすれば曰く、社會黨の運動は一時の狂熱のみ、其企畫はユトピアのみ、到底不可能の事に屬す、其自ら消滅するは日を期して待つ可き也と。是れ一を知つて二を知らざる者のみ。夫れ狂熱は冷却すべし、空想は消散すべし、而も眞理は豈に永劫に死せんや。近世社會主義は實に是等ユトピアの死灰中より再燃し來れるに非ずや。

○一八四七年、マルクスが其友エンゲルと共に、有名なる『共產黨宣言書』を發表して、所謂階級戰爭の由來歸趨を詳論し、以て萬國勞働者の同盟を呼號してより以來、社會主義は嚴乎として一個科學的教義となれり、又舊時の空想狂熱に非ざる也。社會黨は既に社會が一種の有機體なることを解せり、又自己腦裡の模型に從つて之が改造を企つる者ある無き也。彼等は歷史の進化を信ぜり、決して一日にして其革命の成功すべきを夢みる者に非ざる也。

○彼等は單に一小組合の共同生活が、必ず社會全體の競爭の爲めに蹂躙さるべきを見たり、彼等は世界の形勢と隔絶して完全なる理想鄉を單に一地方に建設するの、到底不可能なることを驗せり。是を以て彼等は決して社會全體の調和を破壞することなくして、着々其主義勢力を擴張し、史的進化の自然に從つて徐々に其抱負政策を實行し、寸を得れば即ち寸を守り、尺を得れば即ち尺を保ち、遂に理

想の完成に達せんと欲するに至れり。而して彼等が之を爲すの術如何。

○他なし、彼等は無政府黨に非ず、個人の兇行は何物をも得べきに非ざるを知る、其運動や必ず團體的ならざる可らず。彼等は虛無黨に非ず、一時の叛亂が何事をも成すべきに非ざるを知る、其方法や必ず平和的ならざる可らず。然り彼等の武器や、唯だ言論の自由あるのみ、團結の勢力あるのみ、參政の權利あるのみ。於是乎萬國の社會黨は、皆な政治的方面に向つて其運動を開始せり。

○思へ、社會主義にして、果して世界の輿論となるを得たりとせよ、社會人民の多數は則ち社會黨員となれりとせよ、而して彼等は普通選擧の制に依て盡く參政の權利を得たりとせよ、而して社會黨代議士は各國議會の多數を占め得たりとせよ、其他市府行政の機關、町村自治の團體、皆社會黨に依て運轉し指導せらるゝに至るとせよ、彼等は自在に社會組織の改善に着手することを得べきに非ずや。

○但だ各國人文の程度、歷史の結果、社會の狀態を異にするに從つて、之が改造の順序方法亦自ら異ならざるを得ず。事の緩急、物の輕重、其時と人との宜しきに從ふ可きが故に、其細目は豫め之を決定す可きに非ずと雖も、凡そ參政の權利を多數人民に分配し、婦幼を保護し、教育を無料にし、勞働時間を制限し、勞働組合を公許し、工場の設備を完全ならしむるが如きは、第一着の事業ならずんばあらず。而して或は一部より、或は一地方より、或は資本に於て、或は土地に關し、漸次に少數階級の特占の權利、壟斷の利益を減殺して、之を社會人民全體の用に移すの政策を實行し、步は一步より、層は一層より、進んで而して已むことなくんば、一日一切の生產機關を擧げて、盡く社會の公有に歸する者、豈に難からんや。

○然り社會黨が運動の方針や如此し、而して其實際の功果成績に至りては、眞に刮目を値ひする者ある也。ラサールが『嗚呼此闇愚の勞働者は、何の時か其昏睡より醒む可き』と嘆息せしは、僅に四十年の前なりき。而して四十年後の今日に於て、獨逸の社會主義者は、既に二百五十萬人を以て算せられ、八十餘人の代議士を有する也。佛國の社會主義者亦實に百五十萬の多きに達し、四十餘人の代議士を有する也。英國の議會や、特に社會黨と自稱するの議員尙ほ少しと雖も、而も同國の二大政黨は近時競うて社會主義的政策を採用するに至れり。バーコート曾て議會に演說して『今や吾人は皆な社會黨也』と公言せる者、決して虛ならざるを見る。若し夫れ各都市の行政は、大抵社會主義者に依て指導せられざるはなき也。其他歐洲列國、北米諸邦、苟くも近世文明の在る處、曾て社會黨の生ぜざるはなく、社會黨の生ずる處、其勢力の發達は飛瀑の天より下るが如く、主義の擴張は猛火の原を燎くが如きを見ずや。

○夫れ文明の邦、立憲の治下に於て、社會の輿論一たび我に歸し、政治の機關、亦我手中に歸するに至らば、兵馬の力も之を如何せんや、警察の權も之を如何せんや、而して富豪の階級亦竟に之を如何ともすることなけん。社會主義的大革命が、正々堂々として、平和的に秩序的に、資本家制度を葬り去つて、マルクスの所謂『新時代の生誕』を宣言することを得るは、猶ほ水到つて渠成るが如けん也。

○嗚呼革命よ、如此にして來り如此にして去る。而して吾人に賚賜するに、平和と進步と幸福とを以てす。予は社會百年の爲めに其助成し歡迎すべきを見る、未だ嫌忌し恐怖すべきを見ざる也。

蒲柳之姿。望秋而零。

松柏之質。經霜彌茂。

第七章　結論

○果然、病源は發見せられたる也。謎語豈に解決せられざらんや。

○殖産的革命は社會組織進化の一大段落を宣告せり、産業の方法は、個人の經營を許すべく、餘りに大規模となれる也。生産力は個人の領有を許すべく、餘りに發達膨大せる也。故に彼等は其性質の社會的なるを承認されんことを要求す、其領有の共同的ならんことを强請す、其分配の統一あらんことを命令す、而も聽かれざる也。是を以て競爭となり、無政府となり弱肉强食となり、獨占となり、社會多數は是等獨占的事業の犧牲に供せらるゝに至る。

○故にエンゲルは曰く『社會的勢力の運動や、其盲目なる、亂暴なる、破壞的なる、毫も自然法の運動に異なるなし。而も吾人一たび其性質を理解するに及んでや、隨意に之を驅役して以て自家の用を爲さしむるを得る、猶ほ電光の通信を助け、火焰の煮炊に供するが如し』と。然り現時社會が生産機關發達の爲めに利せらるゝなくして、却て之が暴虐に苦しむ所以の者、一に社會進化の法則に悖反するが爲めのみ。若し一たび其性質趨勢を理解して之を利導せん乎、猶ほ人を震し人を斃くの電光火焰が吾人必須の利器となるが如けん也。

○今に於て怪しむ勿れ、學術の日に進んで德義の日に頽るゝことを、生産益々多くして、萬民益々貧しきことを、教育愈々盛にして罪惡愈々多きことを。嗚呼是れ一に現時の生産機關私有の制度之をして然らしむるのみ。個人をして、今の生産機關を私有せしむるは、猶ほ狂人をして利刃を持せしむるが如し、自ら傷け、人を傷けずんば已まず。

○而して其結果や即ち分配の不公となれり、分配の不公は即ち多數人類の貧困と少數階級の暴富となれり。暴富なるものは即ち驕奢となり、腐敗となり、貧困なるものは即ち墮落となり、罪惡となり、擧世滔々として江河日に下る、洵に必至の勢ひのみ。

○故に今日の社會を救うて其苦痛と墮落と罪惡とを脱せしむる、貧富の懸隔を防止するより急なるは無し。之を防止する、富の分配を公平にするより急なるは無し。之を公平にする、唯だ生産機關の私有を廢して、社會公共の手に移すに在るのみ。換言すれば即ち社會主義的大革命の實行あるのみ。而して是れ實に科學の命令する所、歷史の要求する所、進化的理法の必然の歸趣にして、吾人の避けんと欲して避く可らざる所にあらずや。

○嗚呼近世物質的文明の偉觀壯觀は、如此にして始めて能く眞理、正義、人道に合することを得可きにあらずや。眞理、正義、人道の在る所、是れ自由、平等、博愛の現ずる所に非ずや。自由、平等、博愛の現ずる所是れ進歩、平和、幸福の生ずる所に非ずや。人生の目的唯だ之れ有るのみ、古來聖賢の理想、唯だ之れ有るのみ。エミール・ゾーラ叫んで曰く『社會主義は驚嘆すべき救世の教義也』と。豈に我を欺かんや。

○起て、世界人類の平和を愛し、幸福を重んじ、進歩を希ふの志士、仁人は起て。起つて社會主義の弘通と實行とに力めよ。予不敏と雖も、乞ふ後へに從はん。

人生不得行胸懷。雖壽百歲猶夭也。

靑天白日處節義。自暗室陋屋中培來。
旋乾轉坤的經綸。自臨深履薄處操出。

自由黨を祭る文

歳は庚子に在り、八月某夜、金風淅瀝として露白く天高きの時、一星忽焉として墜ちて聲あり。嗚呼自由黨は死す矣。而して其光榮ある歷史は全く抹殺されぬ。

嗚呼汝自由黨の事、吾人之を言ふに忍びんや。想ふに二十餘年前、專制抑壓の慘毒滔々四海に横流し、維新中興の宏謨は正に大頓挫を來すの時に方つて、祖宗在天の靈は赫として汝自由黨を大地に下して、其呱々の聲を揚げ其閃々の光を放たしめたりき。而して汝の父母は實に我乾坤に磅礴せる自由平等の正氣なりき、實に世界を振盪せる文明進步の大潮流なりき。

是を以て汝自由黨が自由平等の爲めに戰ひ、文明進步の爲め闘ふや、義を見て進み正を踏んで懼れず、千挫屈せず百折撓まず、凛乎たる意氣精神、眞に秋霜烈日の慨ありき。而して今安くに在る哉。

汝自由黨の起るや、政府の壓抑は益々甚しく迫害は愈よ急也。言論は箝制せられたり、集會は禁止せられたり、請願は防止せられたり。而して捕縛、而して放逐、而して牢獄、而して絞頸臺。而も汝の鼎鑊を見る飴の如し、幾萬の財產を蕩盡して悔いざる也、幾百の生命を損傷して悔いざる也。豈是れ汝が一片の理想信仰の牢として千古渝ふ可らざる者ありしが爲めにあらずや。而して今安くに在る哉。

汝自由黨は此の如くにして堂々たる丈夫となれり。幾多志士仁人の五臟を絞れる熱涙と鮮血とは、實に汝自由黨の糧食なりき、殿堂なりき、歷史なりき。嗚呼彼れ田母野や、村松や、馬場や、赤井や、其熱涙鮮血を灑げる志士仁人は、汝自由黨の前途の光榮洋々たるを想望して、從容笑を含んで其死に就けり。當時誰か思はん、彼等死して卽ち自由黨の死せんとは。彼等の熱涙鮮血が他日其仇敵たる專制主義者の唯一の裝飾に供せられんとは。嗚呼彼の熱涙鮮血や丹沈碧化今安くに在る哉。

汝自由黨や、初めや聖賢の骨、英雄の膽、目は日月の如く、舌は霹靂の如く、攻めて取らざるなく、戰ひて克たざるなく、以て一たび立憲代議の新天地を開拓し、乾坤を斡旋するの偉業を建てたり。而も汝は守成の才に非ざりき。其傾覆は建武の中興より脆くして、直ちに野蠻專制の強敵の爲めに征服せられたり。而して汝が光榮ある歷史、名譽なる事業今安くに在る哉。

更に想ふ、吾人年少にして林有造君の家に寓す。一夜寒風凛冽の夕、薩長政府は突如として林君等と吾人を捕へて東京三里以外に放逐せることを。當時諸君が髮指の狀突然目に在り。忘れざる所也。而して見よ、今や諸君は退去令發布の總理伊藤侯、退去令發布の內相山縣侯の忠實なる政友として、汝自由黨の死を視る路人の如く、而して吾人獨り一枝の筆、三寸の舌のみあつて、尙ほ自由平等文明進步の爲めに奮闘しつゝあることを。汝自由黨の死を弔し靈を祭るに方つて、吾人豈に追昔撫今の情なきを得んや。陸游曾て劍閣の諸峯を望んで、慨然として賦して曰く、「陰平窮寇非難禦、如此江山坐付人」嗚呼專制主義者の窮寇禦ぎ難からんや。而も光榮ある汝の歷史は今や全く抹殺せられぬ。吾人唯だ此句を吟じて以て汝を弔す

るあるのみ。汝自由黨若し靈あらば髣髴乎として來り饗けよ。

平凡の巨人

巨人に二樣あり。一は其奇才と辣腕を揮ひ、非凡の活劇を演出して、以て一時天下の耳目を聳動し、江湖の喝采を博する是れ也。他は其行狀曾て常軌の外に逸せず、毫も他の奇あることなくして、而も其善を積み德を立つること高く、以て遂に一代の欽仰する所となる是れ也。吾人は假りに前者を呼んで非凡の巨人と曰ひ、後者を名づけて平凡の巨人と曰はんとす。

非凡の巨人は多く軍人政治家に之れ有り、平凡の巨人は稀れに學者、教育家、宗教家に生ず。有史以來、非凡の巨人は多しと雖も、其國家民人に利するや少なく、平凡の巨人は少しと雖も、其社會文明を益する多し。非凡の巨人は、譬へば奇岩怪石、奔湍飛瀑の人をして驚心駭魄せしむる如し。則ち驚心駭魄せしむると雖も、而も其巧果や徒らに文士騷客が彫蟲の技を競ふの材たるに過ぎざるのみ。平凡の巨人は、譬へば、一塊の土壤の積んで巍峨たる大山となり、一道の細流の集まつて汪洋たる江海をなすが如し。其事其物尋常と雖も、而も萬民實に之に依て生息し、衣食するを得るに非ずや。

然り二樣の巨人、一は暴力也、他は理義也。一は才智也、他は德行也。一は人爵也、他は天爵也。一は物質也、他は精神也。故に一は眼前にして他は不朽也。吾人は實に千百の非凡の巨人を出さんよりは、寧ろ一個の平凡の巨人在らんことを欲する也。而して見よ、維新以來、多くの非凡的巨人を出せりき。木戸や、西郷や、大久保や、岩崎や、皆な是れなりき。平凡の巨人に至つては、果して誰の在る有る乎。吾人は僅に一個の故福澤翁に於て、其髣髴たるを認めしのみ。

直言すれば吾人は平生、翁の所見に服せざる者多かりき。然れども翁が夙に泰西文明の學を講じて群英を教育し、一代の思想を革新して、以て現時の日本文明を打成せるの功業は、千古磨せざる所也。孔子曰く、管中微りせば我れ其れ袵を左にせんと。思ふに翁をして在らざらしめば、我國運の進步豈に能く此の如くなることを得んや。吾人の翁に負ふ所大也。

然れども是れ猶ほ末也。吾人の特に翁に傾倒する所以の者は、其學問文章に在らずして、其人物に在り、平凡の巨人たるに在り。翁や實に其平凡に安んじて、其非凡なるを希はざりき。彼の東都の戰塵漲るの當時に於て、從容として書を講ずるを得たる者實に之を以て也。四十年の久しき、所謂敎へて倦かざる聖者に似たるを得たる者、實に之を以て也。長く無爵の一平民として、富貴不能淫底の道德あり、威武不能屈底の操守を持して死に至る迄渝らざりし者、實に之を以て也。其一世の師表として、我思想界大革新の偉功を奏せるも亦實に之を以て也。然り翁が歴代の巨人たる所以の者は、唯だ其徹頭徹尾、平凡なる天職を行うて屈せざるに在り、平凡なる本分を盡して撓まざるに在り、非凡なるを希はざるに在り。而して今や此人亡し。吾人は千百の非凡の巨人あらんよりは、一個の平凡の巨人あらんことを欲す。而して今や此人亡し。惜む可らずや。

理想なき國民

建築工の煉瓦を積むや、其廻轉息まざる地上と直角の度を爲して微忽も違はざらんことは、固より期し難かるべしと雖も、而も可及的に其直角に近づかんことを求めざる可らざるが如く、人は直ちに其理想た達せんことは爲し

得可きに非ずと雖も、而も可及的之に近づかんことを力めざる可らず、とは是れカーライルが、其英雄經に說ける所に非ずや　然り國民の理想てふ者は唯だ其國民が精神的建築の準繩たるのみならず、亦其思想的衣食なり。故に理想なき國民程賴み少きはあらず。理想に近づかんと力めざる國民程憐れなるはあらず。彼等は直ちに準繩に合せざるの建築なれば也、衣食給せざるの窮民なれば也。

我日本が過去五十年間、振古未曾有の進步を爲せる所以の者は、實に我國民が遠大崇高の主義理想を持して、一に其指導に隨つて、勇猛精進不退轉なる爲めなりき。此主義理想や、一時は尊王攘夷と名づけられたりき、一時は開國進取と名づけられたりき、一時は民權自由と名づけられたりき。其時と處とに應じて、其發現する形を異にせりと雖も、而も皆遠大崇高なる理想の一貫して、東洋の一大文明國を建設せる所以にあらざるはなし。我國民が此主義理想に忠なるや、或は浪人として、或は國事犯として、或は政黨員として、或は商工業者として、水火を避けず威武に屈せず、生命を賭し財產を擲ちて、以て光彩ある明治歷史を編成することを得たりし也。而して今や如何。彼等此主義理想に忠なりしの國民は早く既に頽然として老い、又爲す有るに足らずして、之に次ぐの新國民即ち現時青年の腦中には、又高遠なる主義理想の片影を見ることなし。

見よ、今や天下を擧げて、永遠の理想なくして唯だ眼前の肉慾あるのみ、高崇の主義あるなくして唯だ卑陋なる利益あるのみ、是非を見るなくして利害を見るのみ、道義を見るなくして金錢を見るのみ。而して五十年來駸々として自由、平等、博愛に向つて進める日本は、今や却つて專制、階級、利己に向つて走れるを見るに非ずや。而して其極　即ち腐敗、即ち墮落、慨すべきの至りにあらずや。

吾人は既に半死の老人に向つて其主義理想を失墜せるを責むるの無用なるを知る。唯だ夫れ現時の青年が滔々として主義なく理想なく、醉生夢死の人たるに於ては、嗚呼誰と共にか天下を經營せんや。依て思ふ、エドマンド・バルク、年三十、尙ほ布衣の一書生として賣文僅に旦夕を支へしの時、會まハミルトン三百磅の年俸を給して刀筆に從はしめ、而して其著作を廢せよといふや、バルク憤然として曰く、我希望を阻礙し、我自由を剝奪し、永く我本領を沒せんとする乎と。直ちに交をハミルトンに絕てり。

嗚呼我國の青年、其希望自由と本領との爲めに、能く眼前の榮利を擲つバルクの如くなるを得るもの、果して幾何か有るや。吾人は理想の日本が全く物質の日本と墮落し了れるを見て、深く國家前途の賴み少きを思ふ。

義務の念

義務の念てふことは、其語甚だ陳しと雖も其意は極めて新たなるを知らざる可らず。何となれば是れ我國民に在て尤も缺乏せる所なれば也、否な皆無と稱するも可なる程なれば也。

思へ、現時我國の朝野上下萬般の社會に通じて、一人の能く正當に其義務を盡しつゝある者ありや、盡さんと心掛けつゝある者ありや。彼等は曰く、斷々するは我權利也、云々するは我利益也と、權利と利益の在る所には野猪の如く猛進し、鷙鳥の如く飛揚せんとするもの、一たび義務てふ題目に接しては、巧みに遁躱し推諉せんとせざるはなし。官吏は大に人民を叱り付くるの權利を振り廻して、而して其人民を保護し便益を與へざる可らずてふ義務の念は絕えて之れ有ることなし。商人は唯だ商品の代金請求の權利を振り廻して、而して其商品の

必ずや良好堅固ならざる可からずてふ義務の念は絶えて之れ有ることなし。株主は唯だ其利益配當を受くるの權利を振り廻して、而して其事業の繁榮に盡さゞる可らずてふ義務の念は絶えて之れ有ることなし。議員は唯だ豫算法律協贊の權を振り廻して、而して其施爲が國家人民の利益幸福ならざる可らずてふ義務の念は絶えて之れ有ることなし。選擧民も亦唯だ其選擧權を振り廻して投票を賣り、而して憲政完美てふ義務の念は絶えて之れ有ることなし。

夫れ眞正の權利が眞正の義務に伴はざる可らざるや言ふまでもなし。國家に對する義務を盡さゞる者は國民たるの資格なき者也。社會に對する義務を盡さゞる者は、社會の一員たるの資格なき者也。既に其資格なき者にして唯だ權利ある可きの筈なし。彼等が先づ其義務を盡さずして獨り其權利を主張し振り廻さんとするは、是れ權利にあらずして放恣也。個人に在つては即ち個人の墮落也、社會に在つては即ち社會の破滅也。孟子の所謂上下交利を征て國危しとは洵に此謂也。

佛國が大革命以後、革命に次ぐに革命を以てし、顛覆に次ぐに顛覆を以てし、政體を代ふる幾回なるを知らざるも、遂に堅固なる建設を爲し得ざりしものは、其智なきに非ず、識なきに非ず、勇なきに非ずして、實に彼等の社會の唯權利を見て義務を見ざれば也。夫れ唯だ權利を見て義務を見ず、其國家社會は、即ち墮落に非ざれば即ち崩壞也。若夫れ米國建國の初め、ワシントンをして、唯だ其權利と利益を主張して大統領たるを肯ぜしめば、吾人は今日の米國が必ずや恐る可き世襲專制の國たるか、然らずんば即ち革命に次ぐに革命を以てする、猶佛國の如くなりしを信ずる也。

知る可し、日本今日の腐敗墮落は、我國民中、義務てふ念の全く缺乏せるに出づることを。先づ義務を盡さずして獨り其權利と利益を主張するの弊毒たることを。故に今日の日本を拯はんと欲する者は、先づ我社會人民をして義務を重んじ義務を盡すの念を、喚起し養成するより急なるはなし。萬人各其義務を盡して怠らざれば、其權利、眞正の權利は自ら汝に來らん。現時青年一に之を以て心とせば、夫庶幾からん哉。

排流行論

予は甚だ流行なる者を憎む、輕躁浮薄、徒らに新を競ひ奇を衒へる流行なるものを憎む。彼れ流行なる者や、社會人生に在りて百害あるも一利なし。

事物の進歩改善せらるゝや佳し。彼れ其れ眞個に社會人生を便益し向上せしむれば也。然れども流行其物と進歩改善てふことは別物也。流行は唯だ人間虚榮虚誇の心を滿足せしむるのみ。

理性鈍くして感情強く、自信の念薄くして名利の心甚だしき者、虚誇虚榮に馳せ易し。彼の競うて流行を趁ふ者、一般に意志弱き人に在て多き、以て見るべからずや。流行の變轉が、男子の社會よりも婦人の社會に在て更に甚だしき、以て見るべからずや。

古來の大事業、若くは大發明、若くは大著作、若くは大革命を遂行完成したるの人は、決して流行を趁ふの人にあらずして、寧ろ保守愼重の人なりき、能辯なる交際社會の人にあらずして、寡默なる田舍漢に在て多し、風流都雅の貴族にあらずして、粗野質朴の平民に在て多し。大人物は時に流行を創始することあり、然れども決して他の流行を趁ふ者にあらず。

流行の變遷甚だしきは、人心輕薄の甚だしきを意味す。人心輕薄の甚だしきは、社會の腐敗甚だしきを意味す。見よ、巴里は流行の變

遷最も甚だしと稱す。而して社會風俗の腐敗尤も甚だしきは巴里にあらずや。佛國の偉大なるは、巴里の華奢なるが爲めに非ず。佛國の强盛なるは、巴里の風流なるが爲めに非ず。佛國は實に巴里の外に、極めて質朴勤儉なる地方勞働者を有す。是れ常に佛國をして世界に雄視せしむる最大要素なることは、識者の共に認むる所にあらずや。

均しくアングロサクソン人也、英國の保守愼重なる、米國の新を競ひ奇を衒ふ、其趣向を異にするの何ぞ其れ甚だしきや。吾人は米國の富の益々大なるを知る。殖産工業の益々發達するを知る。而してその國運の殆んど英國の上に凌駕せんとするを知る。而して是れ唯だ國大に、地廣く、自然の富源の豐なるを以てのみ、物質的發達の上に於てのみ。若夫れ精神的思想的に、偉大なる人物事業を生ぜんには、米國は餘りに躁進也、輕浮也、流行を趁ふに過ぐるを見る也。

世界人類の生活と思想とに、大革新を與へたる人物事業は、最も保守的なる英國、多く之を出せり。アダム・スミス是れ也、ダーキン是れ也、ゼームス・ワット是れ也、ニュートン是れ也、シェクスピア是れ也。競新衒奇に急なる米國、彼の大と富とを以てして、一人の能く彼等に比肩すべき世界的事業人物を成せることありや。獨り英國に比して及ばざるのみならず、一人の獨のシルレル、ゲーテに比肩すべきものありや、一人の露のトルストイ、ペーター・クロポトキンに比肩すべきものありや。マッキンレー靴に狂奔し、アリスブリエーに狂奔する社會には、最早ワシントン、リンコルンの偉大なる精神を生ぜざる也。予は思うて茲に至る、所謂流行なるものの甚だ恃むに足らざるを知る也。予は米國の流行が一月又一月、一年又一年變轉極まりなきを見て、米國社會の腐敗が月々年々に甚だしく成りゆきつゝあるを思はずんばあらず。

蓋し玆に一事一物の流行するや、其新事物は必ずしも舊事物よりも佳良なるにあらず。其流行し來る原因は、槪ね下の如き者あり。

其一は、今の貴族富豪の徒が、其安逸遊惰の時を消する道樂の爲めに、若くは其驕奢の心を滿たしめんが爲めに、或は其趣味の高きを示さんが爲めに、諸種の新奇なる考案を爲し、或は其左右の幇間的人物に命じて考案せしめ、之が爲めに多く其餘りある金錢を費して、以て交際社會に誇揚するを常とす。而して彼等の同階級亦た同一好奇虛榮の心より、先づ之に倣ひ、率いて多數人民亦之に倣ふを以て榮となし、遂に一世の流行を來すに至る。

其二は、名譽、若くは勢力を崇拜するの餘り、其名譽あり、勢力ある人物の行爲、嗜好等を模するより生ずる者あり。團十郎、菊五郎の名譽盛んなるの時は、東京兒女の衣服の色彩や、化粧品や、皆な彼等の使用せる者を使用せるが如き、東鄕大將の名譽盛んなるや、諸種の商品に東鄕の名を銘するが如き、軍人の勢力熾んなるや、小兒の衣服、盡く軍服に擬し、小兒の玩具、盡く武器に模したるが如き、皆な多數人心が其是非と善惡とを問ふの暇なくして、一代の名譽と勢力の在る所に拜跪し模倣するの趨向あるが故にあらずや。

而して第三には、自家の利益に機敏なる商人が、頻りに此等の貴族、富豪、名優、美人の名譽あり勢力ある者の姓名を利用して、以て月々年々に新たなる事物を流行せしめ、其貨品を販らんとするに出づ。昔時平賀源内が、一種の差櫛を發明して、先づ當時高名なりし吉原の遊女勝山をして之を裝はしめ、勝山櫛なる名稱の下に、一時の流行を來さしめたるが如き、其適例也。

故に知る、今の所謂流行なる者は、決して事

物の改善進歩を意味するものにあらずして、貴族富豪の驕奢より來り、世人の之に倣はんとする虛榮虛誇の心より來り、世人の弱點に乘ずる商人の射利の心より來る。換言すれば今の貧富懸隔したる社會組織、自由競爭の經濟組織より生ずる必要の結果也。

果して然らば、今の所謂流行なる者や、精神的には輕薄也、腐敗也、物質的には驕奢也、濫費也。十萬の貧民に衣食を給し得べき大金を、一個のブローチのために徒費し、百年の事業を建設し得べき研究の時間を、一時の服裝化粧のために徒費す。人間社會に禍する者、今の流行を趁ふより甚だしきはなし。予は甚だ今の流行なる者を憎む。而して米國に來つてより、屢々人の流行を說いて其流行を趁ふを勸めらるゝに逢うて、毎に嘔吐を催さずんばあらず。

然れども此流行も亦今の不正なる社會組織の弊害たるを知るが故に、予は社會主義者の一人として、益々今の社會組織改造の必要を感ずる者也。

(明治三九・四・一五日作)

婦人問題の解釋

婦人の性は皆な僻めりと斷じ、女子は養ひ難しと嘆じ、婦人は成佛せずと罵り、婦人を眼中に置くは眞丈夫の事に非ずと威張れるの時代に比すれば、近時婦人に關する研究論議の日に益々其盛を致し、甚しきは則ち專門婦人研究者の肩書を有せる文人をすら出せるが如き、喜ぶ可きの現象なるに似たり。而も仔細に其研究の目的方法を檢し來るに及んでは、未だ吾人の希望に副はざるもの多きを覺ゆ。吾人は婦人の生理的及心理的特性を剖析して微を穿ち細に入れる多くの文士と著作とを見たり。吾人は婦人平常の祕事陰事を爬羅剔抉して之に接するの感あらしむる多くの文士と著述とを見たり。吾人は婦人の短所缺點及び其罪惡を鳴して殆ど完膚なからしめたる多くの文士と著述とを見たり。吾人は婦人の運命の不幸と境遇の悲慘とを說いて一字一涙なるの多くの文士と著述とを見たり。而も彼等果して能く現時の所謂婦人問題を解釋せりと爲すを得べき乎。

見よ、吾人が彼等に依て學び得る所の者は、男子は如何にして婦人に愛せらるゝを得べきやてふ一事に非ずや、男子は如何にして婦人を玩弄し得べきやてふ一事に非ずや、如何に現時の婦人が猶ほ尊敬するに足らざるかてふ一事に非ずや、如何に現時の女學生が憎惡すべきものなるかてふ一事に非ずや、如何に女工を雇使せる工場主中殘忍暴虐の行を恣にせる者あるかてふ一事に非ずや。換言すれば彼等の吾人に示し得たる所の者は、婦人は玩ぶ可き者也、海老茶袴は癪に觸る者也、女工は憫れなる者也、此如き耳。然り唯だ此如き耳。是れ豈に女子養ひ難しと嘆ぜるの時代に比して、果して幾十歩を進め得たりとするか。二十世紀の婦人問題に於て果して幾分を解釋し得たりとするか。

現時に在つて多くの婦人は確かに男子の玩弄物たる也、確かに男子の寄生蟲たる也、確かに度し難く養ひ難き也。然れども婦人は永く此如くある可きか、あらざるべからざる乎。

否古來社會文明の進むに從つて、婦人が漸次に其地位を上進するは、是れ爭ふ可らざるの事實也。而して婦人が其社會組織に與つてより重要なるパートを働くの社會は、即ちより文明なる社會たるは亦是れ爭ふ可らざるの事實也。社會文明の改善と進歩は、實に層一層に段一段に婦人地位の上進を要請願求しつゝある也。而して今の婦人研究者の目的方法は果して此要求に副ふ者有る乎。

思へ、婦人が男子の玩弄に甘んずるは、其獨

立を得ざればなり。男子の寄生蟲たり、或は諸種の不德なる誘惑に魅せられ、或は悲慘の境遇に沈むもの、亦其獨立を得ざれば也。彼等は其知識に於て、其財產に於て獨立するを許されざれば也。而して是れ誰か之をして然らしむるや、先天乎後天乎。否社會の組織其者は、彼等を殘暴し凌虐して、人間を化して器械と化せる也、萬物の靈長を化して劣等の動物と化せる也。

從來の社會組織は婦人に敎育を與へざりき、婦人に財產を與へざりき、婦人の獨立を許さゞりき。婦人は男子の玩弄たり奴隷たり寄生蟲たらざれば活くべからざる者なりと宣告したりき。此の時に於て何ぞ婦人の性の僻めるを怪しまん、何ぞ其の脆弱なるを怪しまん、其の諸種の誘惑に勝ち得ずして、多くの敗德を出し、多くの悲慘なる境遇に陷ることを怪しまんや。

而して更に見よ、現時の社會は何が故に婦人を殘暴凌虐するの爾く甚しきや。是れ見易きの理也。何となれば今の社會や社會協同の社會に非ずして自由競爭の社會也、自他相愛の社會に非ずして弱肉强食の社會也。故に人々曰く、汝我を殺さずんば我汝を殺さんと。然り人は生きざるべからず。生きんと欲すれば競爭せざるべからず。競爭するの極、他を虐さゞるべからず、他を×はざるべからず。國と國との間然り、人と人との間然り、男子と男子と、女子と女子との間然り。何ぞ男子の女子を器械となし奴隷となすを怪しまん。兵士が××の犧牲たる如く、勞働者が×××の犧牲たる如く、女學生も女工も藝妓も、甚しきは細君も、皆男子が個々競爭の利益の爲めに犧牲に供せられずんば已まざるは、是れ今日の社會に於て、實に必至の勢ひならずんばあらず。故に二十世紀の婦人問題や是れ實に重大の社會問題也。而して之を解決する、先づ婦人をして其奴隷の境より救うて、彼等をして平等の人間たらしめざるべからず、其の知識と財產とに於て、平等の獨立を得せしめざるべからず。而して之を爲す、唯だ現時社會の自由競爭の組織を變じて社會協同の組織とするに在るのみ、他を犧牲とすることなくして獨立するを得るの組織となすに在るのみ。是れ則ち×××の實行なり。

吾人の社會主義を唱ふるや、或人曰く汝等土地財產の××を欲す、人の細君をも亦共有と爲さんとするかと。嗚呼是れ何の意ぞ。是れ亦、婦人を以て貨物と同視するの舊思想也。社會主義の理想は細君を以て多數の共有たらしめざると同時に、其良人の專有たるをも許さゞる也。人は平等也、婦人も亦平等の人間也、他人の所有物たる可らず。彼を所有するものは彼自身ならんのみ。而して彼も亦社會全體の知識財產の平等の分配にあづかつて以て其の個人性の獨立を全うせん。此如くにして婦人問題は始めて解決せらるゝを得べくして、決して彼の小說の賣れんことを求め新×雜の賣れんことを求むるに依つて、解釋するを得可らざる者也。

ドレフュー大疑獄とエミール・ゾーラ

近時世界の耳目を聳動せる佛國ドレフューの大疑獄は軍政が社會人心を腐敗せしむる較著なる例證也。

見よ、其裁判の曖昧なる、其の處分の亂暴なる、其間に起れる流說の奇怪にして醜惡なる、世人をして殆ど佛國の陸軍部內は唯だ惡人と癡漢とを以て充滿せらるゝを疑はしめたり。怪しむ勿き也。軍隊の組織は惡人をして其兇暴を逞しくせしむること、他の社會よりも容易に

して正義の人物をして癡漢と同樣ならしむるの害や、亦他の社會に比して更に大也、何となれば陸軍部内は××の世界なれば也、威權の世界なれば也、階級の世界なれば也、服從の世界なれば也。道理や德義の此門内に入るを許さゞれば也。

蓋し司法權の獨立完全ならざる東洋諸國を除くの外は此如き暴横なる裁判、暴横なる宣告は、陸軍部内に非ざるよりは、軍法會議に非ざるよりは、決して見ることを得ざる所也。

然り、是れ實に普通法衙の苟も爲さゞる所也、普通民法刑法の苟も許さゞる所也。

而も赳々たる幾萬の貔貅、一個の進んでドレフューの爲めに、其寃を鳴して以て再審を促す者あらざりき。皆曰く、寧ろ一人の無辜を殺すも陸軍の醜辱を掩蔽するに如かずと。而してエミール・ゾーラは蹶然として起てり。彼が火の如き花の如き大文字は、淋漓たる熱血を佛國四千萬の驀頭に注ぎ來れる也。

「當時若しゾーラをして默して已ましめんか、彼れ佛國の軍人は遂に一語を出すなくして、ドレフューの再審は永遠に行はれ得ざりしや必せり。彼等の恥なく義なく勇なきは、實に市井の一文士に如かざりき。彼の軍人的教練なる者是に於て一毫の價値ある耶。

孔子曰く、自らなして直くんば千萬人と雖も我往かんと。此意氣精神、唯、一文士ゾーラに見て、堂々たる軍人に見ざるは何ぞや。

或は曰く、長上に抗するは軍人の爲す可らざる事、且つ爲すを得ざるの事也。ドレフュー事件の際に於ける佛國軍人の盲從は、未だ以て彼等の道心缺乏を證するに足らずと。果して然る乎。

トルストイ翁の非戰論を評す

トルストイは一九〇四年六月二十七日の倫敦タイムス紙上に「汝曹悔改めよ」と題して、約十欄を塡むる長論文を公けにした。之れが即ち杜翁の日露戰爭論であつて、其全文は當時幸德堺兩君に依つて「週刊平民新聞」に譯載せられ、後更に單行本として文明堂から出版された。思ふにトルストイの非戰論が最も具體的に又最も纏つた形で現れたものは此日露戰爭論であらう。本篇は右の日露戰爭論に對する幸德の批評であつて、同じく「週刊平民新聞」に掲げられ、日露戰爭論の單行本の附錄となつたものである。（編輯者）

「一」

讀者は本紙前號（週刊平民新聞第二十九號）に記載せるトルストイ翁の日露戰爭論を讀んで、如何の感を生ぜしや。夫れ此如きの長篇が、今年七十七歲の老人の筆に成りてふことのみを以てするも、其精力の比なき、既に吾人の驚嘆に値ひするに餘あるに非ずや。況んや其勁健流麗の文、吾人の譯文の拙劣なる其筆致を傳ふる能はざるは深く遺憾とする所也）を以て崇高雄大の想を行る、言々肺腑より出で、句々皆な心血、萬丈の光彩陸離として火の如く、花の如く、人をして起舞せしめずんば已まざるの概あるをや。吾人は之を讀んで、殆ど古代の聖賢若くは豫言者の聲を聞くの思ありき。

「二」

而して吾人が特に本論に於て、感嘆崇敬措く能はざる所の者は、彼が戰時に於ける一般社會の心的及び物的情況を觀察評論して、露國一億三千萬人、日本四千五百萬人の且て云ふこと能はざる所を直言し、決して寫す能はざる所を直寫して寸毫の忌憚する所なきに在り。

見よ、彼の少年××の皆迷、學者の曲學、外交の譎詐、宗教家の墮落、新聞記者の煽動、投機師の營利、不幸なる多數勞働者の疾痛慘澹、而して總て是等戰爭の害毒罪惡より生ずる社會全體の危險を敍說するに於て、何者か能く翁の如

く其の眼光の精緻なるものあるか、其筆鋒の鋭利なるものある乎。何物か畫き得て彌く有力なるものある乎、彌く明白なるものあるか、彌く大膽なるものある乎。何物か彌く眞に迫り神に入ることを得るものあるか。然り是豈に吾人の前に一幅戰時社會の活畫を展開せる者に非ずや。

而して此活畫圖や、是れ現時の日露兩國の社會に於ける事實也。然り大事實也、較著なる大事實也。如何に戰爭を讃美し感歎し、主張し、助成するものと雖も、一面に於ては決して此等の罪惡、害毒、危險の存在を否定することを得可らず。何となれば是れ彼等が日夕、實際に目睹し居れる所なれば也。但だ彼等從來其の好戰的狂熱の爲めに、強て自ら良心を痲痺せしめ、是等の事實を看過し、默視し、甚しきは則ち之を隱蔽塗抹せんことを力めたりと雖も、而も今や翁の如く明白、有力、大膽なる描寫指摘に逢ふ。彼等は猶ほ豁然として自覺せざることを得るか、翻然として悔改せざることを得るか。

吾人は翁の大論文が、此點に於て實に世間多數の痲痺せる良心に對して、絕好の注射劑たり得べきを信ず。否注射劑たらしむべきを希ふ。吾人が本篇を譯述して江湖に薦めし所以の微意實に此に外ならず。

一三

然共吾人を以て、全然トルストイ翁の所說に雷同盲從する者となさば是大なる誤解也。吾人は元より翁が、戰爭の罪惡、害毒、及之より生ずる一般社會の危險を切言するを見て感歎崇敬を禁ぜずと雖も、而も、將來如何にして此罪惡、害毒、危險を救治防遏すべきかの問題に至りては不幸にして翁と所見を異にする者也。

翁が戰爭の起因と其の救治の方法を述ぶるや、滔々數千言、議論の巧、措辭の妙を極むと云へども、要は戰爭の起因は人々眞個の宗教を喪失せるが爲めなり、故に之が救治や、人々をして自ら悔改めて神意に從はしむべし、即ち隣人を愛し、己の欲する所を人に施さしむべしと云ふに在る者の如し。單に此の如きに過ぎずとせば、吾人豈に失望せざるを得んや。何となれば、是れ恰も「如何にして富むべきや」てふ問題に對して「金を得るに在り」と答ふるに均しければ也。是れ現時の問題を解決し得るの答辯にあらずして、唯だ問題を以て問題に答ふるものに非ずや。吾人は此點に於て、翁が一關未だ透し得ざる者あるを惜む。

吾人は必ずしも宗教を無用とし有害とするものに非ず。然れども人は麵包のみにて生くる能はざる如く、又聖書のみにて生くる者に非ず。靈なきの人が死なるが如く、肉なきの人も亦死なり。夫れ一飯にだも餐くこと能はざる者、安んぞ道を聞くに遑まあらんや。人は盡く夷齊に非ず。單に「悔改めよ」と叫ぶこと、幾千萬年なるも、若し其の生活の狀態を變じて衣食を足らしむるに非ずんば、其の相喰み相搏つ、依然として今日の如けんのみ。

吾人社會主義者が非戰論を唱ふるや、其救治の方法目的此如く茫漠たる者に非ず。吾人は此點に於て一貫の論理を有し實際の企畫を有す。吾人の所見に依れば今の國際戰爭はトルストイ翁の言へるが如く、單に人々が耶蘇の教養を忘却せるが爲めにあらずして、實に列國經濟的競爭の激甚なるに在り、而して列國經濟競爭の激甚なるは、×××××××××××××
×××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××

××××××。

之を要するにトルストイ翁は、戰爭の原因を以て個人の墮落に歸す。故に悔改めよと教へて之を救はんと欲す。吾人社會主義者は、戰爭の原因を以て經濟的競爭に歸す。故に經濟的競爭を廢して之を防遏せんと欲す。是れ吾人が全然翁に服するを得ざる所以なり。

「四」

吾人の翁と所見を異にする此如し。而も翁の言々實に肺腑に出で、句々皆な心血、直言忌まず黨議憚らず、露國皇帝も亦一指を加ふる能はずして、其所論は直ちに電報を以て、萬國に報道せらる。翁も亦一代の偉人高士なる哉。

自殺論

○日本で尤も哀しむべきことは、自殺者の多いことである。殺害せられる人間は毎年一千人餘であるが、自殺者は毎年七千人以上で、ドシドシ增加する傾きがある。三十一年には殆ど八千七百人に達した。

○日本では或る側から見れば、自殺が多少名譽を意味して居た時代もある。が今日の自殺は窮苦とか悔恨とかの餘りに出るものばかりで、詰り意思の薄弱を表するのだ。元來自殺を行ふ者には決して意思の強い者はない。自殺者の多い國は決して富強の國には成得ないのだ。自殺者が一年九千人近くに至るといふのは、國家の前途實に憂ふべき限りと言はねばならぬ。

○自殺者の多いのは、獨り精神的に國民の弱いのを表するのみでなくて、物質的に、經濟的に、國民の疲弊を表するものである。此現象は、政治でも、軍備でも、議會でも、療治は出來ぬ。道徳教育と商工業の二つの隆興に依賴するの外はない。

○チョイと興味のあることは、自殺者の中で首を縊つて死ぬ者が一番多いことである。自殺者の過半數は首縊りだ。其次が入水、其次が刃物で、劇藥往生とか鐵砲とかいふのは極めて少ない。此原因は無論、首縊りが一番手ツ取り早く出來るからであらう。入水も別に準備も入らぬ死方だけれど、是は冬向は餘り行はれぬから少ないのだ。今死ぬといふ身でも寒い日に逢ふのは嫌だと見える。劇藥は醫學生か職工の無理情死位ゐに限る。夫でも毎年百人内外はあるやうだ。

○自殺は確かに一種の病的作用であつて、自殺者を出すことの多い國民は、決して健全な國民でないのである。古の武士が義の爲めに自殺するといつて大層名譽の様に心得たが、是は全く不完全な教育の結果といふの外はない。自身の行つた不義理や罪惡が、自殺の爲めに消滅すると思ふのは大なる間違だ。間違でも左様信ずれば猶可だが、彼等の多くは唯だ自己の心の疚しきに堪へ得ないで煩悶の餘り發狂するか、或は發狂しない迄も、其苦痛を忘れる爲めに自殺するので、兎に角精神的に不健全な人間である。

○世には種々な病的作用が有つて、左程な理由がなくて死にたくて堪らない人がある。幾度も幾度も自殺を企てては、人の爲めに妨げられて生きて居るのがある。是れが世に言ふ死神に誘はれたのであらう。全體病的作用ほど不思議な者はないので、死神の外に竊盜病といふのもある、一種の好奇心で、他の物が盜んで見たくて堪らないさうだ。ルーソーが少年の時分に、別に自分に必要でもないのに竊盜をしたことが懺悔錄に書いてある。是も確かに病的作用に相違ない。又宴會に行つて盃とか德利とか其他種々なるものを、袖や懷へ忍ばせて來る者がある。是等も一種の好奇心が込上げて、殆ど病氣となつたのである。

○先日大隈さんが或新聞記者に向つて、伊藤さんの放蕩も病氣の故だといつたさうだが、我等の聞く所でも確かに左樣だ。伊藤さんが手當り次第に不行跡を極めるのは、今は生活の必要條件になつて居る。彼に酒と女を斷たしたならば、侯爵は一個の耄碌爺になつて仕舞ふ、と左る有名な醫者が話して居たと言つて居る。

○自殺が心理的に生理的に不健全な結果で、國家の爲めに憂ふべきことだとは斷言するが、併し自殺は道德上の罪惡であるやに至つては、研究すべき問題である。

○自殺は不道德である、とは文明がつた先生が頻に唱へる所であるが、此問題は歐米諸國でも何ほ論爭中なので、決定しては居ないのだ。孝經には『身體髮膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始めなり』とあるけれど、是は如何なる特別の理由があつても自殺は不孝といふ譯ではない。孔子は一方では斯く言ひながら一方では『身を殺して仁を成す』と。仁と孝とは相悖る道理はあるまい。

○西洋で、自殺を不德罪惡だといふ說が有力なのは、人間の命は神に貰つたもので、生死唯だ神さまの思召し次第に任すべきものだといふに在る。

○併し是は考へものだ。假に人生は神から授かつたものとしても、果して自殺が神意に違ふとは斷言出來ない。古來東西の宗教が、大抵自殺を奬勵して居る。舊約聖書にも新約聖書にも自殺を咎めた所は見えない。古代には耶蘇教徒の自殺は普通のことであつたのだ。

○夫から自殺罪惡論者は、自殺は人間の自然に背く、正當な考へのある人間ならば、誰も生を樂しみ死を悲しむべき筈だ、且つ社會に一人として生きて來た以上は、其社會の爲めに盡すべき應分の義務がある、之を果さないで擅まゝに自殺するのは不良いと論ずる。スルと反對論者は、人生は必ずしも自然に從ふべきものではない、例へば藥の進步の如きは自然に反對するの甚だしいものではないか、又生理的に或は心理的に不健全なるものは、社會の厄介物で、此等の自殺は却つて社會に對する義務を果すものだ、不治の病に罹つたものなぞは、サッサと早く自殺するが善いと論じてる。

○だから我輩は自殺を以て、神に對しても亦人に對しても、決して不道德の所行とは心得ないが、併し健全な優等な人間のすることでない。自殺者は、非常な懦弱か、非常な馬鹿か、若くは狂人かである。

○社會は競爭に依て進步する。優勝劣敗の自然淘汰が行はれるので進步するものだから、此競爭場裡に立つことの出來ない不具者は、サッサと自殺して仕舞ふのが社會全體の爲めなのだ。

○此不具者が、單に世襲の富とか位階とかで保護して貰つて、競爭場の外に安逸を貪つて居る者が澤山ある。こんな者が却て神に對し社會に對する罪人である。少なくとも裸體で押出して獨立自活の出來ない奴は死ぬ方が善いのである。

○日本に自殺者の多いのは、不健全な人間の多い證據で、悲しむべきではあるが、左りとて斯る者を強ひて生しても仕方がない。今から年々五六萬づつも自殺者が出來て、優等健全な人間ばかり殘つたら、日本も大に富強になるであらう。

雜纂 (中)

修身要領を讀む

福澤翁選する所修身要領、『今日の男女が今日の社會に處する道』を説いて、別に一隻眼を具し、尋常腐儒の決して企及し能はざる者あり。洵に近時敎育界に於ける貴重の産物たることを疑はず。而も吾人は一讀して甚だ隔靴の感をなし、再讀して悚然として恐るゝ有るを禁ぜざりき。何爲れぞ夫れ然るや。

修身要領第一條より第二十九條に至るまで、所謂獨立自尊の主義を以て一貫す。而して翁は此主義を解して曰く、『心身の獨立を全うし、自ら其身を尊重し、人たる品位を恥しめざるもの、之を獨立自尊の人といふ』曰く、『獨立自尊の人は自勞自活の人たるべし』曰く、『身體を大切にして健康を保つべし』曰く、『進取確守の勇氣あるべし』是れ即ち獨立自尊主義定義の大要なり。此如くんば吾人は獨立自尊に於て毫も間然する所なく、其個人の人格を全うするが爲めには極めて必要の物たる事を信ず。然り眞とに必要也。然れども『今日の男女が今日の社會に處する』果して獨立自尊を實にせりと云ふを以て、直ちに其本分を全うしたりといふことを得べき乎。

人集まりて國家を爲す。其人や即ち常に國民の一人たるを忘る可らざるが如く、人の社會を爲すや、其人や必ず常に自ら其社會の一分子たるを忘る可らず。若し夫れ井を掘りて飲み田を耕して食うて、又帝力の在る有るを知らざる太古の人ならば已む。文明の進歩は分業の世となり、分業の世は遂に人をして不具者たらしむ。商は決して商のみにして食ふ能はず、農は決して農のみにして衣る能はず、社會各人の相扶持するは猶狼と狽との相扶持するが如く、須臾も決して相離る可からざる事也。然り個人の獨立自尊や唯だ社會の一分子として、初めて獨立自尊を實にするを得るも、一度其社會組織と扞格し衝突し離叛するに於てや、其人は直に不具者たらざる事を得ず。故に人の此世に處するや個人としては其獨立自尊を全うすると共に、一面社會の一分子としては、其社會に對する平等調和を實にせざる可らず、即ち其社會に服從するの公德なかる可らず、其社會の爲めに盡力するの公義なかる可らず、更に進んでは、社會公共の福利の爲めに、個人の福利を犠牲とするの覺悟なかる可らず。此如くにして人は此社會に處して、初めて其人たる本分を全うせりと言ふ事を得べきに非ずや。今日文明社會の修身要領たる者、豈此重大事を等閑にして可ならんや。

而も福澤翁の修身要領や、一に重きを個人の獨立自尊に置きて、社會に對する平等調和及び公義公德を訓誨するに至つては、頗る冷淡に過ぐるを覺ゆ。其第十三條より第十九條に至るの間は、多少社會に對するの道を說くが如しと雖も、唯だ『健全なる社會の基は一人一家の獨立自尊に在り』と云ひ、『社會共存の道は相犯す事なく自他の獨立自尊を傷けざるにあり』と云ひ、『報仇は野蠻なり』と云ひ、『人に交るには信を以てす可し』と云ひ、『禮儀作法は交際の要具』と云ひ、『己れを愛するの情を擴めて他人に及ぼし、其疾苦を輕減し、其福利を增進するに勉むるは、博愛の行爲にして人間の美

德なり』と云ふに過ぎずして、而も是等皆獨立自尊の爲めなりとして、又個人が社會全般の福利增進の爲めに犧牲となるの本分、責務、德義たるを說く事なし。而して吾人は其第二十二條、二十三條、二十四條に於て、軍事に服し國費を負擔し、外患あれば生命財産を賭して敵國と戰ふべしと云ふを見て、寧ろ進んで、大に全社會民人の爲めに、身を殺して仁を爲す底の高尚なる道義を說かざりしを惜む也。夫れ如此く修身本領や、一に獨立自尊を重んじて、平等調和を輕んじ、唯だ個人の道德を見て、殆んど個人の社會に對する公道公德を見ず、是れ吾人が隔靴の感を生ぜしと爲す所以也。而して果して這樣の方針を以て今日修身の要領とせば、吾人は其結果に想到して憂惧に堪へざる者あり。

蓋し獨立自尊は、個人自由主義の骨髓樞軸たるもの也。吾人は歐洲列國が能く君主專制の桎梏を脫却して、十九世紀文明の光輝を發揚し得たる者、實に個人自由主義の賜なる事を知る。而して我國今日の文明や、亦福澤翁が個人自由の主義を傳へて、以て一代の思想を改革せしの功與つて大に力あることを知る。然れども世運は日に變轉す。干羽の舞は以て平城の圍みを解く可らず。個人主義的文明は果して何時迄か其光輝を保つ事を得べき乎。

楯に兩面あり、物に兩端あり。利弊は必ず到る處に相伴ふ。個人主義は一面必ず利己主義たるを免れず、貴族專制、封建階級の弊毒其極點に達して、人民殆んど奴隸の境に沈淪するの時に於てや、個人自由獨立自尊主義は實に世界の救世主なりき。福澤翁は實に此時に於て、此救世主を奉じて立ち、以て空前の偉功を奏せるが故に、此主義を持して渝らざる數十年、修身要領亦た之を以て骨子となせりと雖も、而も見よ、今や階級打破は秩序崩壞となり、自由競爭は弱肉強食となり、個人自由主義は更に利己主義の半面を現はして、其弊毒は實に四海に横溢せるの時、所謂獨立自尊を以て、否な單に獨立自尊のみを以て、人々修身の要領となす、危險ならずといふ事を得んや。

吾人は固より社會の爲めに個人を沒了せよと言はず。然れども社會の個人を沒する能はざるが如く、文明の社會に處しては、決して個人を先きにして社會を後にする事能はず。其修身の道、德の敎や、必ず一代の理想に從ひ、社會多數の福祉を以て其標準となすの公義公德ならざる可らず。社會に對する公義公德は必ずしも獨立自尊と相反する者に非ず。福澤翁の意、固より公義公德を罔する者に非ざるべしと雖も、其父、仇を報ずれば其子必ず刼を行ふ。獨立自尊は一變して利己主義となり、利己主義は多くの場合に於ては社會に對する背德となり了らずんばあらず。吾人深く之を惧る。若し幸にして利己主義とならずんば卽ち高蹈の隱者とならんのみ。伯夷も獨立自尊なりき、嚴子陵も獨立自尊なりき。司馬徽も獨立自尊なりき。而も是れ豈今日社會に希ふ可きの人ならんや。

修身要領も亦博愛と言へり。然れども唯「己を愛するの情を擴めて他人に及ぼすは美德なり」と云ふに過ぎず。然り愛己の情を他人に及ぼすを以て美德とするも、未だ利己の心を離るゝ能はざる也。「他人の權利幸福を尊重する」も、『人に交るに信を以てする』も、皆な「獨立自尊」の爲めなりと云ふ。盡く其利己心を推及するに非ざるはなし。是れ豈に眞個の道德といふを得可けんや。夫れ眞個人間の道德は、マジニーの言へるが如く、個々其社會に對して其責任を盡すに在り、其報償を望むに在らず。報償を望んでなすの人は、猶自己の影を趁うて走るが如きのみ。苟くも報償を望まず、其社會に對するの責任義務を全うせんが爲めには、一身

一家の幸福をも抛つ可し、財産生命をも擲つべし。此の如くにして初めて大君子も出でん、大改革者も出でん也。

故に獨立自尊の教は必ず調和平等の德に伴はざる可らず、自愛の念は必ず博愛の心に伴はざる可からず。若し夫れ調和平等の德之を制する事なく、博愛の心之に隨ふ事なからん乎、獨立自尊個人自由の主義は直ちに不德なる利己主義となり、厭ふべき弱肉強食とならずんばあらず。而して是れ實に今日の實情にあらずや。

然り今日の憂ひは實に個人主義の弊毒其極點に達せるに在り、利己主義の盛んなるに在り、自由競爭あつて、平等調和なきに在り、個人あつて國家なく、國家あつて社會なく、換言すれば社會に對する公義公德を以て、一身を律するなくして、唯だ一身の利害を以て、社會の福祉を左右せんとするに在り。此時に於て實に社會的調和平等、公義と公德を說かずして、個人的獨立自尊のみを訓ふ。是れ實に火を救はんとして油を注ぐ者、其結果や寒心すべき者あるを覺ゆる也。

吾人は世間曲學の人の如く、單に忠孝の二學なきを以て、漫に修身要領を非難する者に非ず。唯だ其眞個社會的觀念を以て、義勇奉公の心を奬勵するの條目なきを惜む。若し果して之れ有る事を得ば、忠孝は自ら其中に在らんのみ。

論文の三要件

僕自身の經驗に、諸先輩の教訓、諸友人の談話を參考して見ると、理想的論文、卽ち完全上乘の論文といふのは、如何しても下の三要件を具備せねばならぬと思ふ。卽ち第一、精神の充實、第二、理義の透徹、第三、文字の妥貼である。

論文の能事は、單に讀者を說服した丈けでは不可ぬ、更に感奮させねばならぬ。同情せしめた丈では濟まぬ、寧ろ魔醉せしめねばならぬ。稱贊せしめた丈けでは未だし、遂に同化するに至らねばならぬ。彼の聽衆が拍手喝采する間は、未だ演說の上乘なる者ではなく、雄辯の極致は辯士も聽衆も全く自他の別を忘れて一體となり、拍手もなく喝采もなく、滿場寂として水を打ちたる如くなるに在る。夫れと同じく論文の理想も亦讀者の眼中に最早紙なく文字なく、我を忘れて直ちに作者と一體となるの時に在らねばならぬ。文が此域に至るのは千百人中一人で、又其一人でも此の如き文が一生の間に一篇二篇有るか無きか位ゐのものである。但し我等は一寸でも一歩でも此域に近づくことを力めねばならぬ。而して是れ主として作者の意氣精神の充實の程度如何に在る。

如何に瑰麗な文字を以て、巧妙な議論を行つても、意氣精神の無い文章は死せる文章である、生命なき文章である。讀者は其瑰麗を賞しても、冷やかな石膏塑像の美を賞する以上に出でぬ、其巧妙を賛しても堅き鋼鐵機械の巧を賛すると同樣である、溫かく軟かき活ける血肉に接するの感あることは出來ぬ。眞氣惻々として人に逼るのは、必ずしも其文の奇なり妙なる爲めではなくて、直ちに作者の精神の披瀝されたる爲めである。諸葛亮の出師表が千載の下凜として生氣あるのは、其顯著なる一例である。文此に至れば人は決して文字の巧拙を問ふに遑なくて、直ちに淚襟に滿つるのである。左れば眞の生命ある文章を書かんと思へば、精神の充實が第一義である。

諸葛亮の如き千古一品の人物で、至誠を以て生涯を通せる人は、一言一行、精神充實せざらんと欲するも得ない、虛僞輕薄ならんと欲す

るも得ないのである。蓋し自ら其然るを知らずして然るものであらう。然し庸衆の人は常に左ういふ譯には行かぬので、多少の工夫勉強を要する、少なくとも其文を書く時其時だけでも正心誠意の人とならねばならぬ。一に其題目に向つて精神を籠めねばならぬ。鍛工が名刀を鍛ふに精進潔齋して鎚を取るの心でなければならぬ。

併し論文は詩歌小説美文とは違ふ。單に宛も無い感興を待つといふだけでは、十分に精神を籠めることは出來ぬ。作者は先づ其主張せんとする意見議論に對する信念が十分強くなければならぬ、而して文章を以て讀者を說服し感化せずんば已まずてふ決心も亦固くなければならぬ。此信念が益々強くなるに從つて、此決心も愈々固い。斯くて筆を取つて紙に臨むの時、此決心の爲めに一切の邪念妄念は驅除せられて、勇猛の氣力は充滿するのである。

僕は曾て宗敎界の名家某君の文章を讀み、其靈火に打たれ其神讃に醉うて感奮措かざること屢次であつた。而して其人に接するに及んで甚しく失望した。此の如き人にして彼が如きの文を作り得る乎と疑つた。併し是は不思議でも何でもなかつた。彼は平生容易く書くことを得なかつた。其信念の薄くして其決心の弱きが爲めに書くことを得ないで、常に苦辛煩悶して居る狀は目も當てられなかつた。而も一たび其信念決心を牽固ならしむべき、思想を得るや、猛然として机に向つた。此時の彼れは全く平生と異なつて、眞に敬虔眞率高尙偉大なる人物となるのである。彼れの頭腦は神の靈を以て充ちて居る、そして其文の感化力は實に較著なるものであつた。世人は彼れの人物と文とを比較して僞善者と罵るものもあつた。併し彼は僞善者でも何でもない。彼れが文を作るの時は正に尊敬すべき偉人であるのだ。

盛德の君子人は固より、案外な小人でも、斯る信念斷る決心で筆執ることの習慣を養へば、自然に文章を書く時だけでも正心誠意の人となることが出來る。後には左程の大問題、重要問題ならずとも、猶ほ婦人が紅白粉し、男子が禮服着けたる時に何となく心の改まる如く、紙に臨んで自然に精神の籠るやうにならうと思ふ。

此點に於ては、平生或る宗敎、或る思想、或る主義に對して熱烈なる信仰を有する人は、極めて幸福である。彼等の人物は平生如何なる小人でも、其信仰に關する文章は常に精神が充實する、多少の生命がある、活氣がある。之に反して氣の毒なのは所謂『筆のプロスチチュート』である。今の論說記者の多くは夫れだ。彼等は白紙で新聞を發行する譯には行かぬので、時間が來れば何事かを書かねばならぬ、讀者に嫌はれぬやうなことを書かねばならぬ。斯くては文章を書くではなくて單に文字を並べるのである。今の諸新聞の論說に材料の豐富なのもあれば文字の流暢なのもあるが、眞に讀者を感奮し靈化する力の極めて乏しいのは、之が爲めではあるまい歟。

然るに如何に精神は充實しても、更に理義の透徹しないのは、論文ではなくて放言である、漫語である。議論の文は理義が透徹しなければならぬ。

理義の透徹には明晰な頭腦を要する、該博な學問を要する。詩歌美文ならば無學な人でも雄篇大作を出すことが出來る。青年男女の繾綣の數分間を下宿屋の窓から寫生しても、其儘大文學たるを得るかも知れぬ。併し論文となれば左うは行かぬ。ヨリ多く理義の透徹せんと欲せば、ヨリ多く哲學的觀念と科學的知識を貯へねばならぬ。而して此觀念知識を基礎として更に經驗、觀察、歸納、推理、分析、總合を重

ゐて組織された整然たる論理が其文章に一貫して居なければならぬ。此文章や如何なる攻撃批評辯駁に遭うても一絲亂れざる陣立が無ければならぬ。是れがなくては自己の意見主張に對する強い信念は得られぬ筈である。自己すら信念なき意見主張に他人を説服し得べき筈がない。既に斯る學問知識を要すとせば、論文の雄篇傑作を出すに志ある青年は、如何しても一二外國語の素養が必要である。一外國語の新聞雜誌も讀めぬやうでは、到底今後の日本に於て論文家たる資格は無い。

併し論文に於て自己の知識學問を衒學的に陳列せんとする者あらば、是れ大なる僻事である。知識學問は只だ論理を明かにし理義を透徹するに用ゐる材料である。自己の腦中に於て是等多大の材料を用ゐて製造し蒸溜した生粹の製品のみを文字の上に顯はせば足るのである。而も世には精製品其物を提出しないで、徒らに其材料の多きを誇つて雜然之を陳列し以て大論文となさんとする者がある。彼の某君の如きは夫れである。某君は實に學者である、古今東西の學を究め、哲學、宗教、社會、人生、如何の問題にも通曉せざる所はない。而も其論著は首より尾まで萬國賢哲の姓名や圖書の解題、古今の格言を隙間もなく引用して、一見只だ其博學に驚かされるのみで、議論主張の眼目に至つては遂に何等の捕捉すべき所がない。少なくとも甚だ捕捉し難いのである。是れ彼れの論著を讀む者の均しく嘆息する所である。

論文を書くには、自己の衒誇の爲めにしてはならぬ。多數讀者の頭腦を標準として書かねばならぬ。即ち讀者の解し易きやうに、讀者の精力を多く費すことなくして、愉快に平易に解し得るやうに書かねばならぬ。スペンサーの文體論に所謂『精力の節約』を心掛けねばならぬ。此目的の爲めには、其排列、順序等の注意は元より、出來得る限り繁雜を避けて簡明に書く、枝葉を去り根本を示す、駄辯冗語を除いて大綱眼目を明かにするのが肝要である。殊に有效なのは、其理義を組立てるのに直ちに讀者其人の腦中に在る思想知識を取つて材料となすことである。讀者は斯る思想知識を其の腦中に有しながら十分明白に自覺し得ない、或は自覺しながらも之を表白するの言語を知らぬ、或は言語を有しながらも之を整然たる論理に組立てることが出來ぬ場合が多い。大抵の讀者中には一個の頭腦に國家主義の材料も、個人主義の材料も、有神論も、無神論も、工業論も、農業説も、其他千種萬樣、相異なれる、相反せる材料が堆積して居るのである。聰敏なる論文家は直ちに是等の材料中より自己の主張に都合の良いのを擇んで、以て整然たる論理を組織するので、讀者は容易に其理義を解することが出來る、獨り容易に解するのみでなくて、彼等は一唱三嘆して曰ふ、『我が心を得たり』『我が言はんと欲する所を言ふ』『他人心有り我れ之れを忖度す』是等の語は皆な唯材を讀者の腦中に取るに外ならぬのである。古來東洋の大文字中、孟子は最も其訣を得たものと思ふ。

但だ材料を讀者の腦中に取ると言つても、自己の材料の不必要な譯では決してない。自己の腦中にあればこそ讀者の腦中の物をも知り得るのである。千萬人の讀者の腦中の物を觀察し選擇し、且つ其不足を補足すべき學問知識は、缺く可らざる者である。獨り學問知識のみでなく、之を運用すべき經驗熟練は極めて貴重なものである。

言語なくして演説の出來ない如く、文字なくして文章は書けぬ。故に文字の妥貼といふことが更に完全な論文の要素たるはいふ迄もない。然るに幷を末技のやうに輕蔑して、良い加減に書きなぐつて省みぬ人がある。是れは大抵文字

に富まない、文字の適否を見別ける知識の乏しい人である。而して是等の人の文章は多く蕪雜極まるもので、大なる進歩は出來ぬのである。古來文章の大家は皆な實に一字の爲めに苦心した。一字の適否が文章全體の意義勢力を輕重すること甚だ大なる故である。左れば眞に文章に忠實なる者、意氣精神の充實を欲する者、其理義論理の透徹を欲する者は、決して文字を疎かにし得ぬのである。妥貼ならざる文字を存して安んずることを得ぬのである。中江兆民先生の如きは、此點に於て最も嚴しい人であつた。

一氣呵成、少しの推敲をも經ずして名文の出來ぬとも言へないが、併し是れは例外である。否な此名文に更に推敲を加へたならば、一層の名文、至文となるであらう。世間の多數は文人の苦心を知らぬ。平易流麗讀み易く解し易き文章を見れば、何の苦もなく書流したるが如くに考へ、佶倔聱牙な難解の文字を見れば却つて苦辛の作だと思ふ。曷んぞ知らん、是れ全く反對の想像である。讀者をして爾く愉快に容易に讀過し了解せしめんが爲めには、實に多くの推敲を費さねばならぬのである。故に僕は常に曰ふ、『讀むのに骨の折れない文は、書くのに尤も骨を折つた文だ』と。

文字の妥貼を得るの法は、兎に角多くの文字を知らねばならぬ、多く文字を使用せねばならぬ、換言すれば多く讀み、多く作らねばならぬ。而して多讀多作を重ぬるに從つて、即ち文字に富み、文字の使用に熟するに從つて、之に滿足することは出來ぬ。即ち精讀精作の時は來る、一字一句の推敲に苦辛慘憺の時は來る。此時あつて文章は益々進境を有するのである。

僕の作文に關する所見の大體は以上の如く、古人今人の既に言ひ古した所で、別に珍しい所もない。但し理窟は言ひ古したが、實際此理窟に協つた名人は、世間極めて稀れである。沼南、雪嶺二先生は老いたり。若し現代に於て僕の理想に近き者を求めば、僕は德富蘇峰、黑岩淚香の二君の文を推すに躊躇せぬ。有體に言へば僕は二君の主張意見に就ては、服し難い者甚だ多い。而も其文章に至つては、運筆の縱橫自在無礙なるの間に、論理極めて整然として理義能く透徹し、其才藻、常人の遠く及ぶ可らざる所である。啻だに是れのみでなく、時としては二君の意氣精神燃ゆるが如く蒸すが如く紙上に橫溢し、咄々人に逼るを覺えて、僕の爲めに猛然として感奮し、陶然として醉はしめられたこと一再に止まらぬ。但し淚香君の文には多少斧鑿の痕を見ること有るが、蘇峰君の字句の渾然として圓熟せるに至つては、眞に當代無比の老手と言はねばならぬ。僕は大に二君の文章で學ぶ所ありたいと思ふ。

翻譯の苦心

○翻譯で文名を賣る位ゐズルいことはない、他人の思想で、他人の文章に、左から橫に書いたものを、右から竪に器械的に引直すだけの勞だらう、電話機や、寫字生と大して相違する所はない、と語る人がある。少しも翻譯をしたことのない人、殊に外國文を讀まぬ人にコンな考へを持つ者が多い。

○是れ大なる謬りである。思想は別として、單に文章を書く上から云へば、翻譯は著述よりも遙かに困難である。少くとも著述に劣る所はない。少しく責任を重んずる文士ならば、原著者に對し、讀者に對し、其苦心は決して尋常のものではない。

○翻譯には第一に原文の意義を明瞭に理解せねばならぬ。然るに是が困難だ。外國で育つた

人の外は英米人自身が英文を解し、日本人自身が日本文を解するが如くに、完全に外國文が解される者ではない。非常な學者先生でも何處かに首を傾けねばならぬ個處に出會すのだ。初め一通り讀んだ時には立派に解つて居た積りでも更に筆を執つて一字一句と逐うて行くと、幾何も不安な怪しげな處が顯はれて來る。若し大部な書籍などになると、一字一句も誤謬なく完全に譯さるゝといふことは殆ど望む可らざることである。是れ予が洋學の素養不足の爲めに獨り斯く感ずるのみでなく、孰れの老大家でも同樣だと聞いて居る。然し夫だから誤謬は仕方がないとして許す譯には行かぬ。無論出來得る限りは一個の誤謬もなきことを力めねばならぬ。是れ第一の困難である。

○けれども兎に角翻譯を思ひ立つ以上、原文は十分に解し得られる、自國文を讀むが如くに咀嚼し得たものと假定しても良いが、扨て書き出すと、直ぐ今度は譯語選定の困難が來る。原文の意義は十分に解つて居ても、此意義を最も適當に現はし得る文字は、容易に見つかるものではない。餘程文字に富んだものでも嚢の物を探るやうには行かぬ。其苦心は古の詩人が推敲の二字に思ひ迷つたのと少しも異なる所はない。其處で負惜みの先生は、どうも日本語や漢語は、適當な熟語に乏しくて困るとつぶやく。其實熟語に乏しいのではなくて、其人の腹筍が乏しいのだ、と故兆民先生は語られた。故思軒居士や、鷗外君などの翻譯の自在なのは、彼等の文字に富むてふことが有力な武器であるに違ひない。

○普通に用ゐられる單語熟字で、譯語の一定して居るものは仔細ないが、或る專門語、術語などで未だ譯語の極まらぬ者に出會つた時の苦心は一通りでない。予が是れまで二三の社會主義書類を譯したのでさへ、隨分惱んだことがある。例せば彼の社會黨が多く使用するブールジョアジー（Bourgeoisie）てふ語の如き、是れ迄或は中等市民と譯し、或は資本家、或は富豪、或は紳商などと譯して見たが、如何しても社會主義者の所謂ブールジョアジーの意義を完全に顯すことが出來ぬ。予は數年前堺枯川と『共産黨宣言』を譯した時、兩人で種々に相談した末に、遂に『紳士閥』と譯することに折合つた。固より此に紳士といふのは、ゼントルマンの如き立派な意味ではなくて、日本語に所謂紳士、即ち旦那連の意味に過ぎないので、能く勞働者に對する中流以上の階級を代表し得たと思ふ。

○其他クラスコンシアスネス（階級的自覺）プロールタリアン（平民若くは勞働）エキスプロイテーション（資本家が勞働者に對する掠奪）エキスプロリエーション（勞働者が土地資本の收用）の如き、社會主義的に用ゆれば、特殊の意味を生ずるのが澤山ある。是まで一樣に勞働組合と譯された文字にも、ギルド、トレード・ユニオン、インダストリアル・ユニオン、レーボア・ユニオン、シンヂケートなど皆な夫々に別意義を有するので、別々に譯語を作らねばならなかつた。こんな種類を集むれば數ふるに遑もない。夫れにつけても明治初年から、箕作、福澤、中村などいふ諸先生が、權利とか義務とかいふ譯語や、其他哲學、理化學、醫學などの無數の用語を一定するのには、如何に苦心を重ねられたであらうと察する。

○適當な譯語が出來る。其を忠實に原文の字句を逐ひ一節、一段の順序に隨ひ器械的に並べて、翻譯は出來るのであるかといへば、是れでは文字を並べたのみで決して文章を爲すことは出來ぬ。完全な翻譯は其意義を明かにするのみでなく、其文勢、筆致をも寫さねばならぬ。其原文の輕妙なるは輕妙に、流麗なるは流麗に、

雅健なるは雅健に、滑稽なるは滑稽に傳へねばならぬ。然るに餘りに忠實に原文の字句を逐はんとすれば、筆端窘束して譯文は丸で其生命を失つて了ふ。譯文をして原文の如き文勢筆致を保たんとせば、原文の字句を勝手に增損し、前後を倒置するなどの必要を生ずる。是れ實に責任ある翻譯家の進退兩難とする所である。昔三藏法師も、經文の翻譯には餘程テコズつたと見えて、翻譯は猶ほ食物を嚙碎いて其子に食はせるやうなもので、美味は母親の舌に殘つて、子は糟粕ばかり食ふことになると嘆じたことがある。

○文勢筆致に注意しない人の翻譯は、文章晦澁にして殆ど讀むに堪へぬ、讀んで面白くないばかりでなく、實際其意義を解することすら出來ぬ恐れがある。文藝家とか小說家とかの翻譯にはマサかに左程なのはないが、科學者のには、博士學士の名を冠するのにも、往々文章にも何にもならぬのがある。是等は獨り讀者の迷惑のみならず、原著者に對しても實に不都合の極である。然るに之と反對で、文章は頗る流麗巧妙に出來てるが、其辭全く意義に取違へて居る、若くは意義を解し得ない處をば、ドシ〳〵省略し、或は勝手に改作して前後を繋ぎ合せて置き、原書と照し合さねば、少しも省略改作の痕跡が分らぬ程に、其文才で瞞化すのがある。是れは文藝家の中にも尠なくないといふことだ。翻譯は反逆なりといふ西人の言葉があるが、文章の晦澁なのも、原意を勝手に改作するのも、全く原著者に對する反逆と言つても良い。

○兆民先生は曾て、ユーゴーなどの警句を日本語に譯出して其文勢筆致を其儘に顯はさうとすれば、ユーゴー以上の筆力がなくてはならぬ、總て完全な翻譯は、原著者以上に文章の力がなくては出來ぬと語られた。兆民先生は斯く信ずるが故に、科學、理論の時は多く譯したけれど、文章に重きを置くべき文學の書には手をつけなかつた。

○併し文章を主としない學術理論の書でも、兆民先生は極めて雄健明快の文章を以て之を譯して、毫も斧鑿の痕を止めなかつた。之と同時に亦た原文の字句にも極めて忠實であつた。若し原語の意義にして少し明瞭を缺く所あれば、常に譯者不學にして解する能はず云々と一々明白に斷り書きして殘し置き、苟くも良い加減に糊塗して置くやうなことはなかつた。是れ翻譯家として元より當然の義務ではあるが、今日のペダンチックな才子連の到底爲し能はざる所である。

○予は文藝學術の書を譯するの力はないが、新聞雜誌に關しては、多少翻譯の經驗がある。予が初めて兆民先生の玄關番より一躍して自由新聞の翻譯掛となつたのは、二十三歲の時であつた。月給大枚六圓！　夫れで每日ルーター電報を譯することを命ぜられた。其當時は未だ府下の新聞で一つも直接に外國電報を取つて居るのはなく、皆橫濱のメールやガゼットなどから轉載するのであつた。國民英學會でマコーレーやヂッケンスやカアライルなどを讀んだのとは丸で趣きが違ふので、初めは大に面食つた。そして僅か三行か四行づつの電報に每日々々四苦八苦の思ひをして譯し出したが、翌朝他の新聞と比べて見ると無論誤譯だらけである。面目ないやら苦しいやらで殆ど泣出したくなつたことが屢々であつた。併し社では誤譯を責めもしなければ、放逐もしなかつた。月給六圓で完全な翻譯家の雇はれる筈がないので。

○一年半程して、日清戰爭の最中に、中央新聞に轉じた。此處でも電報の誤譯で大恥を搔く外に、英米の新聞雜誌を摘譯する。是が又頗る厄介である。固より文學物や議論と違つて、唯だ

事實の要點だけをサラ〳〵と短かく書けば良いのだが、澤山な新聞雜誌に一通り、目を通す、目ぼしい雜報を見つけ出す、夫をスッカリ讀了し、若くは讀了せずに要點を取るといふのが、素人では出來ぬ、可なり修練を要する仕事である。僅か十行二十行の雜報の爲めに三百行、五百行も讀まねばならぬこともあれば、三頁も五頁も讀んで見て、何にもならぬ時もある。日清戰役、三國干涉などいふ時分で、極東の外交、列國の意嚮などいふ問題は細大洩さず見なければならないのだ。こんなことを一二年やる間に、自分ながら新聞雜誌を讀む力は少しく進歩したやうに感じた。

○明治三十一年から六年間、予は萬朝報の厄介になつた。此社には當時黑岩君を始め內山、山縣、斯波、田岡、丸山（通一）、久津見などいふ洋學者が揃つたので、予は自己の力の乏しきことを感ずる事益々切に、發奮して書を讀むことを志し、盆暮に貰ふ賞與は、少しは吉原へも持つて行つたが多分は書物を買つて讀んだ。社會主義に關する書物は多く此間に讀んだのだが、社の飜譯をやる必要はなかつた。新聞雜誌を日ばやく通讀して、重要な珍事奇聞を拾ひ出して並べるのは、朝報社の斯波貞吉君が最も秀拔な技能を有して居る。是れ又一種の飜譯法である。

○三十六年の暮、日露開戰の前から、週刊平民新聞を出して、予は又た每週多くの飜譯をせねばならぬこととなつた。卽ち外國から來る十數種の社會主義、無政府主義新聞雜誌から、世界の重なる社會運動の狀況を每號の我が雜誌に譯載して、讀むのと書くのとで徹夜したのは每度であつた。然るに翌年の夏、倫敦タイムスにトルストイの日露戰爭論が出たとのルーター電報は世界を驚かした。程なく同新聞は日本に着いた。東京朝日の杉村楚人冠君が、本紙と切拔と二つあるから一つ分けよう、と言つて持つて來てくれたのが月曜日であつた。其夜から直ぐ堺枯川と共に飜譯に取掛つて、木曜日までに了つて日曜日發行に間に合さうといふことになつた。卽ち全篇を幾段にも切り分けて、第一段を予が譯する間に、枯川が第二段に取掛り、枯川が第二段を了らぬ間に予は第三段を始めて居るといふ風に、順次出來次第に印刷所に送つた。斯くて予も枯川も未だ全文を通讀しないで、中間を拔いては其先きを譯するのは、隨分無鐵砲な方法であつた。而も三日間、殆ど徹夜した爲めに其疲勞は甚しかつた。此論文を朝日新聞では杉村君が十數日に亙つて連載し、加藤直士君は一兩月の後、一部の書として發行したが、予等の飜譯が一番拙かつたやうだ。予は此時熟々飜譯の難事なること、推敲の必要なることを思つた。

○予は其後、又堺君と共に、共產黨宣言を譯した。是はマルクス名著傑作であつた。議論文章堂々として當る可らざる者があるが、扨て譯して見ると我ながら其佶屈聱牙なのに恥入つた。此の失敗は、斯る世界のクラシックとあつて、社會問題、經濟問題研究者のオーソリチーとする歷史的文書は、成る可く嚴密に譯さねばならぬといふ考へで、非常に字句に拘泥しのと、莊重の趣を保ちたい爲めに多く漢文調を混じた故である。昨年「總同盟罷工」に關する一書を譯し、今又た『麵包の略取』を譯して居るが、前に懲りて、極めて自由な言文一致にした。

○一篇の文章の中でも、言文一致で譯したい所と、漢文調が能く適する所と、雅俗折衷體の方が譯し易い所と、色々あるので、若し將來、言文一致を土臺として、之を程よく直譯趣味、漢文調、國語調を調和し得たる文體が出來たならば、飜譯は大にラクになるだらうと思はれる。

○『麵包の略取』は、露國社會黨首領クロポトキン翁の大著で、ゾーラが之こそ眞の詩だと嘆賞した名文である。極めて平易で讀み易く解し易いから、意義の誤謬は多く有る虞れはないが、扨て譯して見ると其文章の輕妙な、銳利な、皮肉な、痛快な妙味は殆ど失はれて了ふ。一節を譯する每に、著者に對する責任の輕からざるを思うて、吐息をつくのである。

○予の如きは文學藝術の人でなくて、翻譯は新聞雜誌の論文雜報と、社會主義傳道用の書籍に限るのであるが、夫れさへ甚く苦心だとすれば、美文小說などの翻譯の困難は實に想像に餘りあるのである。

○斯く苦心を要する割合に、翻譯の文章は誰でも其著述に比すれば無論拙い。世間からは案外詰らぬことのやうに言ふ。割の良い仕事では決してない。而も能く考へれば一方に於て非常な利益がある。夫は一回の翻譯は數十回の閱讀にも增して、能く原書を理解し得ること、從つて讀書力の非常に進步する事、大に文章の修練に益する事等である。是れ唯だ一身の上より云ふのであるが、社會公共の上より言へば、文藝、學術、政治、經濟、其他如何の種類を問はず世界の知識を吸收し普及し消化する爲めに、翻譯書を多く出さんことは、實に今日の急務である。從つて技倆勝れたる翻譯家は、時勢の最も要求する所である。

文士としての兆民先生

一

官吏、教師、商人としての兆民先生は、必ずしも企及す可らざる者ではない。議員、新聞記者としての兆民先生も、亦世間其匹を見出すことも出來るであらう。唯り文士としての兆民先生其人に至つては、實に明治當代の最も偉大なるものと言はねばならぬ。

先生、姓は中江、名は篤介、兆民は其號、弘化四年土佐高知に生れ、明治三十四年、五十五歲を以て東京に歿した。

二

先生の文は殆ど神品であつた、鬼工であつた。予は先生の遺稿に對する每に、未だ曾て一唱三嘆、造花の才を生ずるの甚だ奇なるに驚かぬことはない。殊に新聞紙の論說の如きは奇想湧くが如く、運筆飛ぶが如く、一氣に揮洒し去つて多く改竄しなかつたに拘らず、字句軒昂して天馬行空の勢ひがあつた。其の一例を示せば、

我日本國の帝室は地球上一種特異の建設物たり。萬國の史を閱讀するも此の如き建設物は一個も有ること無し。地心の熱度漸く下降し草木漸く萌生し那邊箇邊の流潦中、若干原素の偶然相抱合して蠢々然たる肉塊を造出し、日照し風乾かし耳目啓き手足動きて玆に乃ち人類なる者の初て成立せし以來、我日本の帝室は常に現在して一回も跡を斂めたることなし。我日本の帝室は開闢の初より盡未來の末迄緜に引きたる一條の金鐵線なり。載籍以來の昔より今日並に今後迄一行に書き將ち去るべき歷史の本項なり。初生の人類より滴々血液を傳へ來れる地球上譜牒の本系なり。之を人と云へば人なり、之を神と云へば神なり。政治學的に人類學的に宇內の最も貴重すべき一大古物なり。上無始に溯りて其以前に物あることなく、此宇內の最も貴重すべき古物をして常に鮮美淸麗の新物たらしめ下、無終に延きて其以後の物有ること無からしむること是れ豈我儕日本人民の至願に非ずや。此至願を成就せんと欲せば如何。帝室と內閣と別物たらしむるに在るのみ。

の如きである。東雲新聞、政論、立憲自由新聞、雜誌「經綸」「百零一」等は實に此種の金玉文字を惜し氣もなく撒布した所であつた。又著書に於て最も飄逸奇突を極めて居るのは「三醉人經綸問答」の一篇である。此書や先生の人物、思想、本領を併せ得て十二分活躍せしめて居るのみならず、寸鐵人を殺すの警句、冷罵、骨を刺すの妙語、紙上に相踵ぎ、殆ど應接に遑あらぬのである。

三

併し先生自身は、單に才氣に任せて揮洒し去るのに滿足して居なかつた。自分が作る所の日々の新聞論說は單に漫言放語であつて決して文章といふべき者ではないと言ひ、予が『三醉人』の文字を歎美するに對しては、彼の書は一時の遊戲文字で甚だ稚氣がある、詰らぬ物だ、と謙遜して居た。然り、先生は其氣、其才、彼が如きに拘らず、文章に對しては寧ろ頗る忠實謹嚴の人であつた。

先生は常に曰つた。日本の文字は漢字である、日本の文章は漢文崩しである、漢字の用法を知らないで文字の書ける筈はない、飜譯なぞをするものが、勝手に粗末な熟語を拵へるのは讀むに堪へぬ、是等は眞に適當な譯語が無いのではない、漢文の素養がないので知らないのだ云々。先生は實に佛蘭西學の大家たるのみでなく、亦漢學の大家として諸子百家窺はざるはなかつた。西洋から歸つて佛學塾を開き子弟を教授して居た後までも、更に岡松甕谷先生の門に入て漢文を作ることを學んで怠らなかつたのである。

故に其飜譯でも著作でも、一字一語皆出處があつて、決して杜撰なものでは無かつた。彼の『維氏美學』の如き『理學沿革史』の如き飜譯でも、少しも直譯の臭味と硬澁の處とを存しない。文勢流暢、意義明瞭で殆ど唐宋の古文を讀むが如き思ひがある。

抑も藝術の物たる其由て居る所果して安くに在る哉。蓋し吾人情性皆胸中一種の構造に繫る者にして、其庶物の觀に於けるや嗜む所あり嗜まざる所有り。而して庶物の形狀聲音是の如く其れ蕃庶なりと雖も之を要するに二種に出でず。即ち形態は人目を怡ばしむる者にして其の數萬殊なるも竟には線條の相錯はれると色彩の相雜はれるとに外ならず。聲音は人耳を怡ばしむる者にして其の種は千差萬別なるも竟に亦抑揚高下緩急疾徐の相調和するに外ならず。

是れ『維氏美學』の譯文の一節である。近時諸種の譯書に比較して見よ、如何に其漢文に老けたる歟が分るではない乎。而して其著『理學鉤玄』は先生が哲學上の用語に就て非常の苦心を費したもので、『革命前佛蘭西二世紀事』は其記事文の尤も精采あるものである。其他、碑銘等の金石文字に至つては、數回十數回の推敲を經て曾て倦むことなかつたのである。而して先生は殊に記事文を重んじた。先生曰く、事を紀して讀者をして見るが如くならしむるは至難の業である、若し能く紀事の文に長ずれば往くとして可ならざるなしであると。蓋し岡松先生の教に從つたのである。今先生の記事文の一節を掲げよう。

一日ルーソー歩してワンセンヌに赴く。偶ま中路暑に苦み樹下に憩ひ携ふる所の一新聞紙を披いて之を閱するに、中に載する有りチションの博士會一文題を發し賞を懸けて能く應ずる者あるを募る。其題に曰く學術技科の進闡せしをば人の心術風俗に於て益有りしと爲す乎將た害有りしと爲す乎と。ルーソー之を讀みて神氣俄に旺盛し、意思頓に激揚し自ら肺腸の一變し

て別人と成りしを覺え、殆ど飛游して新世界に跳入せしが如し。因て急に鉛筆を執りファブリシュースの一段を草して之を懐にし既にワンセンヌに至りヂデローを見るも猶ほ志氣奮湧し血脈發憤して自ら安んずること能はず。ヂデロー其此の如きを見て怪みて之を問ふ。ルーソー具に告ぐるに故を以てして且つ草する所の一段の文を出して之を示す。ヂデロー一誦して善しと勸めて更に敷演して一論を完結せしむ。ルーソー其言に從ふ、所謂非開化論なり。

而して先生は古今の記事文中、漢文に於ては史記、邦文では『近松』、洋文ではヴォルテールの『シャルル十二世』を激賞して居た。

四

先生の文章は其賣れ高より言へば決して偉大なる者ではなかつた。先生の多くの著譯書中、其所謂『生前の遺稿』なる『一年有半』及び『續一年有半』が翼なくして飛んだ外は、殆ど賣れたといふ程の者はない。彼の『一年有半』『續一年有半』すらも、若し死に瀕しての著作でなかつたならば、アノ十分の一も賣れなかつたかも知れぬ。

先生の文章は當世に賣らんが爲めには、寧ろ餘りに高過ぎた。先生の文章は曾て世間と伴はなかつた、曾て世間に媚びなかつた、常に世間に一歩を先んじた。先生の文章は先生の至誠至忠の人格の發露であつた。是れ先生の文章は常に眞氣惻々人を動かす所以であつて、而も陽春白雪和する者少なき所以である。而して單に其文字から言つても、漢文の趣味の十分に解せられない今日に於て、多數人士の愛讀する所とならぬは當然である。先生『一年有半』中に、

夫文人の苦心は古人の後に生れ古人開拓の田地の外、別に播種し別に刈穫せんと欲する所の處に存す。韓退之所謂務去陳言戛々乎其難哉とは正に此謂ひなり。若し古人の意を蹈襲して卽ち古人の田地に種穫せば是れ剽盜のみ。李白杜甫韓柳の徒何ぞ曾て古人を襲はん。獨り漢文學然るに非ず、英のシエクスピールや、ミルトンや、佛のパスカルや、コルネイユや、皆別に機軸を出さゞる莫し。然らずんば何の尊ぶ可きことか之れ有らん。

と記してあるのみならず、平生予に向つても、昔蘇東坡は極力孟子の文を學び、竟に孟子以外に一家を成すに至つた、若しお前が私の文を學んで、私の文に似て居る間は私以上に出ることは出來ない、誰でも前人以外に新機軸を出さねばならぬと誨へられた。先生の文章に於けるや、苦心常に此如きものがあつた。先生の文は決して賣らんが爲めに作るもので無かつた。其賣れると賣れないとは、毫も文士として先生の偉大を損するに足らぬのである。

綠雨に就て

○藝術の立場から綠雨の作物を批判するのは、專門の諸君が澤山ある　門外漢たる僕は只だ我が親友なりし綠雨其人の平生に就て一つ二つ話して見よう。

○綠雨といへば、ヒドく片意地な、僻んだヒネくれた交際ひ惡い人であつたかのやうに世間では噂した。が僕はソンナには思はなかつた。僕が彼と親しくしたのは三十一年頃からで、其以前の綠雨は知らぬが、其後の彼れは死に至るまで爾汝の交りが渝らなかつた。此方からマジメにさへ出れば彼れは極めて誠實で且つ親切な人であつた。

○成程彼れは多くの人を攻擊した、憎んだ、敵とした、交際を斷つた。僕の手許にも某々氏等を手痛く惡口した手紙も多少殘つて居るが、彼

の攻撃と憎悪には、いつも十分な道理を備へて居た。僕は彼れの喧嘩爭論に就て常に尤もと思はぬことは無かつた。

○彼れは自身極めて正直、眞摯、潔白であつたので、世の虛僞、瞞着、輕薄、山氣の多いのが癪に觸つてならなかつた。流行を趁ふこと、門戸を張ること、時好に投ずることを激しく嫌つた。若し斯る事柄に接し斯る人物に遭へば殆ど所謂衣冠を着て泥土に坐するの思ひが有つたらしい。雅量に乏しいと云へば云はれる。然し若し之を以て綠雨が今の文壇に多くの敵を作つた理由としたならば、僕は思ふ、是れ綠雨其人の恥辱でなくて、偶々以て今の文士社會が如何なる空氣に滿ちて居る歟が覗はれるではない乎。

○綠雨の文を作るのは、實に苦心慘憺たるものであつた。獨り其措辭の一字一句苟くもしないのみでなく、其材料も亦自分の十分に熟知し興會しないものは決して筆に上すことは無かつた。彼れは世間多くの小說家の如くに良い加減なゴマかし、間に合せ、知つた振りはしなかつた。要するに彼は知らざるを知らずとして恥ぢなかつた。其代り自身の熟知したことでは一歩も讓る所がなかつた。然し彼れの知らないことは尠なかつた。藝術以外、戀愛以外のことは何にも知らない人達とは聊か見識を異にして居た。彼の學問見聞は殆ど何れの方面にも亙つてゐた。僕等の如き藝術の門外漢が彼れと長日月の交際を爲し得たのは、全く彼れが嗜好と知識の多方面で、談話の材料に富んで居た爲めである。然り、彼は愉快な談話家であつた。口を衝いて出る奇語警句は實に應接に遑なかつた。

○綠雨は藝術家としての自家の技倆を琢き且つ伸ばすのに熱心であつたが、而も文壇に黨を樹て派を作り、一種の勢力を扶植し一種の覇權を振うて其文を賣るのを以て醜陋の極なりと信じて居た。藝術家は其技倆手腕に依て立つべきものである、學閥若くは文閥に夤緣すべきものではない、とは彼れの常に口する所であつた。左れば彼れは曾て其派其社の麾下にも參せざると同時に、自身も決して一黨一派を作ることをしなかつた。彼れは親切に後進を教授した、青年を引立てた。而も是等後進青年に對しても單に友人として世話するのみで、先生とか首領とかを以て自ら居らなかつた。彼れは何處までもマジメな獨立の藝術家たらんとし、政治家、策士外交家らしき行爲を潔しとしなかつた。是れ實に彼れが晩年落寞悲慘の境涯に陷り、其死後にも澤山の謳歌者を有しない、理由である。

○綠雨を語るに就て一つ殘念に堪へないのは、彼れが肺病に殺されたよりも寧ろ貧乏に殺された一事である。彼れにして多少の財產、若くは一二の保護者あつて、相應の療養を加へたならば、猶ほ若干の歲月を生延び、若干の作物を出すことを得たのは確かである。樗牛さんもエラかつた。紅葉さんもエラかつた。子規さんもエラかつた。梁川さんもエラかつた。死ぬまで寢床で書きつゞけられた。が彼等は兎も角寢床の上に安んじて居られるだけの月給若くは收入があつたさうな。綠雨は夫れすらなかつたのだ。三十七年の春寒く、北風身を切るやうな晩を、骸骨のやうになつて咳入りながら、本所の横網から有樂町まで、僅かの小遣ひを相談に來たのも幾度であつたらう。彼は其瞑目の三週間前まで、重體の病苦を忍んで米代を拵へに歩いたのだ。今思ひ出しても實に淚の種である。

人物

○想ふ、二十六年の夏、先生既に酒を禁ず。每夜晩餐の後、家人と緣側に踞して、古今を論じ

風月を談じ、或は庭中に歩して涼を納れ、常に午後九時十時の候に至るを例とせり。

○先生平生夜色を愛す。曰く、夜は雅にして晝は俗也、月は雅にして日は俗也、凡そ陰は雅にして陽は俗也、予の生れたる時より俗なるは莫く、人の死したる時より雅なるは莫し、予は多年思ふ、晝は一家皆な睡臥して、黃昏に至つて初めて起き、三度の飲食は之を夜中に於てし、或は散歩し、或は閒談して、以て二三旬を經、妙文を作つて之を記せば、興趣極めて多からんと。先生は實に多感多恨の詩人なりき。

○一夜月明に乘じて庭園を歩す。樹林蓊鬱として黑く、池水瀲灎として白し。先生俯仰する者久しくして、予を顧みて曰く、我れ此景に對する毎に、杜甫の「四更山吐月、殘夜水明樓」の句を想起せざることなし、絕唱なる哉と。

○先生の詩を論ずるや必ず杜甫を說き、醉へば常に「出師未捷身先死、長使英雄涙滿襟」の句を吟ぜり。李白に至りては即ち曰く、彼や眞に千古の一人也、而も少陵の眞氣惻々人を動かすが如くならず、少陵は慷慨の忠臣也、太白は無類の醉漢のみと。

○先生の杜詩を愛するは、獨り其詩を愛するのみならず、實に其人物の高きに拳々たりしが故也。而して其人物に拳々たりし所以の者は、實に夫子自ら第二の少陵たりしが故ならずんばあらず。

○先生の飄逸放縱、酒を被り世を罵るや、皮相より之を見る、頗る太白の遺風あるに似たり。然れども其一生を通じて凜乎たる操守あり、血性あり、慷慨の節あるは、宛然として少陵其人たりし也。而して其文や亦仔細に之を見る、冷嘲冷罵の間、自ら至誠至忠の痛涙を藏して蒼涼沈鬱、人を泣かしむる者、宛然として散文的杜詩に非ずや。而して其身世亦轗軻潦倒、宛然として明治の少陵其人に非ずや。

○然り先生は、太白に非ずして少陵なりき、司馬徽に非ずして諸葛亮なりき、本多佐渡に非ずして、眞田幸村なりき。

○予嘗て曰く、佛國革命は千古の偉業也、然れども予は其慘に堪へざる也と。先生曰く、然り予は革命黨也、然れども當時予をして路易十六世王の絞頸臺上に登るを見せしめば、予は必ず走つて劊手を擲倒し、王を抱擁して遁れしならんと。此一語以て如何に先生の多血多感、忍ぶ能はざるの人なりしかを知るに足る可し。

○然れども先生の敗るゝ、又實に之が爲めなりき。先生の多血多感なる、直情徑行を喜びて、迂餘曲折を惡むこと甚し、義理明白を喜びて曖昧模稜を惡むこと甚し。果決を喜びて因循を惡み、簡易を喜びて繁褥を惡み、澹泊を喜びて執拗を惡み、直言忌むなく、敢爲憚るなく、直ちに其理想を現實せんが爲めに、社會を敵として激鬪す。而して革命家に敗れ、政事家に敗れ、商人に敗れ、文壇も亦先生を容るの餘地なきに至れり。

○而して先生亦自ら其處世に拙なる所以を知れり。酒間笑つて予に謂つて曰く、今朝來訪せし所の高利貸を見よ、彼れの因循にして不得要領なる、人をして煩悶に堪へざらしむ、然れども彼れ甚だ富めり、處世の祕訣は朦朧たるに在り、汝義理明白に過ぐ、宜しく春靄の二字を以て雅號と爲せと。予曰く、生甚だ朦朧を憎む、乞ふ別に選む所あれ。先生益々笑うて曰く、然らば即ち秋水の二字を用ゐよ、是れ正に春靄の意と相反す、予壯時此號を用ゆ、今汝に與へんと。予喜んで賜を拜せり。屈指すれば匆々十餘年、眞に隔世の感有り。

○嗚呼先生は、多感の人のみ、多血の人のみ、仙人に非ず、畸人に非ず、狂人に非ざりき。德富蘇峰君「一年有半」を評するの文に又曰く、

　約言すれば、著者（先生を謂ふ）は著書より

も、品格に於て高く、人物に於て愛好す可きものあり。著者は眞面目の人也、常識の人也、夫として其妻に眞實に、父として其子に慈愛に、友として其交る所に忠なる人也。但だ皮下餘りに血熱し、眼底餘りに涙多く、腹黒きが如くにして、極めて初心、面皮硬きに似て、頗る薄く、自ら濁世の風波に觸るゝに堪へざる身を以て、强ひて之を凌がんと欲して克はず。爲めに、其自ら世と容れざる悶を排せんと試みたる時に酒を假り、時に奇言奇行を藉り、以てのみ。而して世人往々假を以て眞と爲し、眞に君を奇人視するに到る、是れ豈に君の知己なりと謂はん哉。

と、蓋し知言也。

○然り先生の時に酒を假り、時に奇言奇行を假りて悶を排するや、此如きものあり。但だ酒や醉醒あり、身漸く老い、氣稍や衰ふに至つて、更に自然の愛す可きを知る。謂らく、故らに醉を成さんと願ふ、是れ齡を促るの具にして、强て功を成さんと競ふ、唯だ生を傷ましむるに過ぎずと。而して酒を禁じ、行を愼み、一に自然と家庭と道義に向つて樂地を求めたり。故に見よ、先生の晩年其身を持するや、命に安んじ貧を樂み、流離敗殘の餘に處して、曾て天を恨みず、人を尤めず、悠然晏然として榮辱の外に自適し、死生の表に達觀せることを。

○蓋し古人言へり、「節義靑雲に傲り、文章白雪より高きも、若し德性を以て之を淘溶せずんば、徒に血氣の私、技能の末たらんのみ」と。先生は彌く多感多血なりしと雖も、而も徒らに血氣の私、技能の末に齷齪たる者に非ざりき。彼れ其れ實に德性を以て自ら之を淘溶し、以て其眞を保ち其道を全くするを得たりし也。

○先生『一年有半』の稿を起すの前、予其自傳を著さんことを勸む。先生哂つて曰く、我れ一寒儒の生涯、何の事功か傳ふるに足る者有らん哉、且つ夫れ自傳を艸する、勢ひ知人故舊の祕密を暴露せざるを得ず、彼のルーソーの如きは忌憚なきの甚しき者、是れ予の忍ぶ能はざる所也と。予其謙遜にして人情に厚きに服し、强ひて又請はざりき。

○嗚呼、正を懷き道に志すの士、或は玉を當年に潛め、己を潔くし操を淸くするの人、或は世を沒するまで以て徒に勤む、古よりして然り。先生の才之識にして、一生不遇にして老死せし者、却つて其人品の甚だ高きを見る可らずや。

雜纂（下）

世田ケ谷の繿縷市

年の市とは、似顔の羽子板とお飾とを賣る處也とのみ思へる都の坊様孃様は、去つて世田ケ谷の繿縷市に辛き浮世の機關の不思議なる半面を窺ひ見よ。

毎年十二月十五、十六の兩日未だ夜深き午前三時頃より六時まで、荏原郡は世田ケ谷宿に繿縷屑物の市ありて、一年中の賑ひを極む。都人の嫌がる雜踏を、自然の單調に饜ける近郷近在の老若は、市の風に吹かるれば無病息災、百難を遁るゝとて、三里五里の道を此處に集まり、穢なき繿縷屑物を買取るを無上の樂とはなす也。去れば此市の景氣は常に農家の購買力の高低を試驗し得べしとぞ。

先づ宿の街道に莚席敷列ねて小屋掛けせる店々兩側を合して其長さ千二三百間に亙るべし。品物は繿縷六分に、荒物三分、おでん、濁酒、鮓、駄菓子の飲食店、其外數種の見せ物興行、耳を劈する囃子の響き田舍者の荒肝を拉ぐ。

繿縷は足袋、股引、シャツ、手袋、手拭、袷、單物、前掛け、襦袢、羽織、袢纏、婦人の湯卷、手巾、靴下、絲屑にて、荒物は柄杓、硯箱、火鉢、茶盆、大小の桶や盥、下駄、雪駄、笊類、荒繩、小兒の便器、古板、机、鍬、鎌、鉈、斧、熊手、鶴嘴、鋤、篦、藥鑵、鐵瓶、明樽、明壜、米、麥、粟、蕎麥、豆類など數へも盡せず。

可笑しくも又憐れに感ずるは、此等の品物、穀類を除くの外は一として滿足なるはなく、破れたる足袋の左は十文、右は九文なるがあれば、穴あける靴下の右は黑にて左は白也。

宅には九文七分の足袋の右があるから左を買ひたしと選り分けて居る老媼あれば、コールテン鼻緒表付の左はあれど右がなければ似たものを下さいと古下駄を探す年増あり。殊に目立てるは青赤黃白黑樣々の混合せる絲屑の而も五寸と續けるはなきを二貫乃至三貫目一把にして十二三錢也。此屑の束把を右に左と擔ぎ廻る妙齡の婦人幾百人なるを知らず。如何にするにやと聞けば冬の夜長に絲を繫合せて蒲團に織るなりとぞ。又方一寸にも足らぬ布片の屑、繃帶の樣なる穢なき細長の布片を一貫五百目、二貫目と纏めて負ひ返る者も幾千人ありけん。是は孰れも河向ひの稻毛の人々にて、雪の日、雨の夜の內職に此布片を草鞋や草履の爪先と踵に作り込む也。全部藁の物よりも御値段・足に付五厘づつ高しと也。

雀、蛤となる例もあれ、眞逆に是はと思はるる代物の羽が生えて飛ぶ如くに賣行く有樣、實に世に用なき物とては無きぞかし。一面には屑え屑えの聲寒く每朝八百八町の路次々々を潛りて利用厚生の勞働を供する細民あれば、一面には貴重の天物を湯水と暴殄する遊民あり。樣々の浮世哉。

更に市の餘興を見れば、

一際目立ちしは小松の男女十三人組の改良劍舞(木戸大人三錢、小兒二錢)にて、上り高六十三圓七十錢、次は鳥娘とて親の因果の見せ物(大人二錢、小兒一錢)上り高十五圓三十二錢、次はカッパの見せ物(木戸大小一錢)上り高五圓八十錢、次は萬作踊(大三錢小二錢)にて僅に三圓六十錢、續て松井源水と永井兵助の居合拔き、孰れも二圓五十錢より三圓までの上り高

也しと。

其外、玩具、辻占、流行歌、繪草紙、扨は暦賣等。

商人の中にて尤も利益ありしは濁酒店にて、中には一戸にて五斗を賣盡せしもの二戸あり。二斗以上三斗までの者十五六戸もあり。之に伴ふおでん、煮締、煮肴など七八圓より十二圓までの純益ありしといへり。

初日の露店の數は七百三十餘、翌日は午後二時頃まで雨降りたれば百五十內外に減じぬ。左れど例年に比して遙かに上景氣なりき。一般の商ひ高は昨年は二千二三百圓に過ぎざりしに、本年は三千四五百圓に上れりとぞ。東京市中の年の市は二三割より三四割の不景氣なるに襤褸市の斯く繁昌せるは、秋の收穫の良かりし爲め多少農家の購買力を高めたればなるべし。是等の露店商人が初日に使用せる莚席數は千八百七十餘枚にて一枚一日の使用料は一錢五厘なれど、競爭の結果後には三錢まで躍り上げたり。一人にて最も多く使用せるは荒物店にて七枚より八枚を用ゐし者あり。又彼等が店借賃は莚席一枚につき十二錢と定まれるも棚分け又は部分と稱する者頭を張りて十五錢づつ取られしもあり。此棚稅は襤褸市事務所に納めし上、一部は世田ケ谷の教育衞生道路等の公共費に、一部は市場の基本財產とはなす也。露店使用の商人は、孰れも東京市內の屑屋荒物屋なるは云ふ迄もなし。

世田ケ谷の宿屋は木賃宿一戸、旅籠二戸のみにて市の開けし時は多くの商人此に詰込み、膝と膝、背と背を突合せ、窮屈を忍びて一夜を明す。

此時のみ木賃も旅籠も同じく朝と晩との二食一泊にて二十五錢より三十錢。朝も晩も獻立は違へど煮締と味噌汁のみにて魚の臭ひは藥にしたくもなし。

斯くても雨露は凌がるゝ也。腹は膨るゝ也。金の得難きことを思へば。

嗚呼襤褸市、羽子板の如く美しからず、お飾の如く上品ならねど、セチ辛き浮世の機關を吾等の前に開展して、如何に多くの教訓を與ふるよ。

東京の木賃宿

活地獄——木賃宿の異名——九千人のお客樣——一泊六錢——粕餅の雜居——雨の日の繁昌——三疊の六庭——千四百五十の世帶——櫺鉢は車輪と廻る——二錢皿の鮪——〆に落せし箸——連込みの客——鬼一口——安宿ごろつき——良人ある身——夫婦喧嘩の統計——十年前の大宗の遺流——お濁は如何——昇代の箸——丸裸の夫婦——是れにつきぬと

野山長閑に春霞、立ちつゞく道者笠は、農耕樵漁の暇ある折を、思ひ〳〵の阪東巡禮、四國遍路、肥後は熊本淸正公、日向の生目八幡宮、信濃の善光寺、讃岐の金比羅、扨は伊勢參り、京見物の善男善女を送り迎ふる、街道筋の木賃宿は、旅なれや恥は搔捨ての氣散じを旨として、必ずしも貧民のみの巣窟ならねば、世人の知る所也。同じ名ながら東京のは、夫とは趣き痛く異也。見るにも聞くにも、只々驚き恐るゝの外はなき別世界、黃泉にも斯る活地獄の有るべしや。

東京にては木賃宿をば、一般に安宿或は安泊と呼び做せど、其客となる人々の社會にては、ヤキ又はドヤとも呼び、又アンパク、ボクチンなど云ふ言葉もあり。

ヤキとは宿屋のヤの字と木賃のキの字を續けしにて、ドヤとは宿を倒しまに讀める也。アンパクは安泊、ボクチンは木賃を音讀せるは言ふまでもなし。勞働に忙しき人々は其言葉も簡單にて響き強く聞ゆるを便とすれば斯る符牒を用ゆるが多し。

斯る怪しき符牒もて呼ばるゝ宿屋、昔は市內

各所に散在せしが、去る明治二十二年の末、時の警視總監三島通庸は、市街の體面を保つが爲めにと、其が營業の區域を限りて一定の場處に移らしめぬ。現在營業の場所と數とは、

淺草區淺草町…………二十餘戸
本所區花町、業平町…………七十餘戸
深川區富川町…………六十三戸
四谷區永住町…………十八戸
芝區白金猿町(俗にエテ町)……七戸
麻布區廣尾町(俗に古川端)……十一戸
本郷區駒込…………二戸

にて、其お客樣をいへば歯代借の車夫、土方人足、植木人夫、其外種々の工夫人夫、荷車挽、縁日商人、立ン坊、下駄の歯入、雪駄直し、見世物師、料屋理の下流しなど、何れも其日稼ぎの貧民ならぬはなし。昨年末の調べにては是等の客人九千七百四十六人に及べりとぞ。扨も夥しき數なるかな。實に人の子は枕する所なしと言ひけん、世界に家なき九千七百の人の子の爲めには、二百の安泊は、一夜の雨露を防ぐべき唯一の賴みぞかし。理りや、彼等は其宿料を木賃とは言はずして、屋根代とぞ呼ぶ。

「御安宿、御一人前風呂附六錢、八錢、十錢、別間は十八錢より二十錢まで」と記せる長方形の角行燈、火影覺束なき軒端を潛れば、正面扨は横手の帳場に嚴然と控ふる、人足上りと見ゆる男は番頭なるべし。暮色蒼然として人顔わかずなる頃より、一人、二人、三人、五人、泥塗れの法被、破れし股引、切々の草鞋を穿ちて入來る客の、今晩はの聲も寒さに慄へて聞ゆめり。帳場の男、先づ客の住處、姓名年齡、職業と前夜の宿泊地を書取りて、「ヘイ屋根代を」と手を差出す。六錢の屋根代を受取れば立ちて四布蒲團一枚を小脇に抱へ『大廣間』に案内す。

木賃宿にての大廣間とは、雜居の客を容るべき室をいふ也。廣さと室數とは家々にて異也。六疊と四疊半となるものあれば八疊一室なるもあり、八疊と十二疊の二つを備ふるもあり。一泊六錢の客は皆な四布蒲團一枚を與へて、此處に追ひ込みて雜居せしむ。其定員は大抵一疊一人の割合也。

大廣間には合宿の客の雜談興盡きて、晝の疲れに睡氣ざせば、各々例の四布蒲團の『お柏』の中に潛る也。左れど漸く眠らんとすれば、後より入來る客の混雜に夢を破られ、稍や一騷ぎ治まりしと思へば、又もや後の客の騷ぎは起る。斯くて物音の全く絶ゆるは、毎夜午前二時前後なるべし。況して此頃の寒空に、仕入物の蒲團の短ければ、足を伸せば爪先出で、膝を屈むれば『お柏』開き、隙洩肌に透りて堪ふべくもあらず。寢覺がちなる夜の明放るれば、門口に備へし冷水の一擔桶を懇望し、儀式ばかりの手水を了へて、又も前夜の古法被、破れ股引、切草鞋!

斯る雜居の客をば、割込みといふ。割込みの屋根代は、

六錢(四布又は五布蒲團一枚)、八錢(三布敷蒲團一枚と四布の掛蒲團一枚)、十錢(同上、但し蒲團の體裁少しく上等)、十二錢(三布敷蒲團一枚、四布又は五布掛蒲團二枚)。斯る定めなれど實際は百人の中八十五人までは普通六錢の柏餠にて八錢以上を出し得るものは僅かに百人中十四五人に過ぎずとぞ。

割込みの客にも、翌日も猶ほ滯在せるが有り。前夜の屋根代のみにて、其翌晩の蒲團を借るまでは、別に滯在費を要せず。但し晝間も蒲團を用ゆるものは別に損料を徴する也。

翌朝床上げの後に猶ほ蒲團を借るものは三布一枚に一錢五厘、四布又は五布一枚に二錢の割合の損料を拂ふ也。

爰に注意すべきは雨の日の繁昌也。晴天の朝は早きは五時六時、遅きも七時八時には一同出拂ひ、寂寞として大風の迹のやうなれども、雨となればいづれも稼ぎの途なければ前夜のままに流連して濁酒、賭博、放歌、高論、泣く、笑ふ、四疊半、六疊の『大廣間』の混雜いへん方なし。偶々幾何かの錢餘れるは、縄暖簾に腹こしらへんとて出行けど、錢なければ終日食はずして寢る。

一夜泊りの割込みの客を送り迎ふるのみにては左ばかり驚き恐るべきにあらねど、安泊には大廣間の外に多くの別間といへる室あり。學者よ、富豪よ、大臣よ、警視總監よ、更に進んで此別間の裡を窺ひ見よ、玆に我等の同胞と呼び國民と呼べる人類の多くが、殆ど野獸にも均しき奇々怪々の生活を爲し居れるを見るを得べし。

いづれの木賃宿にも、四個又は五個の『別間』といふが有り。尋常ならば小座敷に數ふる四疊半の狹きをも、『大廣間』と名づけて、割込みの客入るゝ木賃宿の、別間となれば皆な二疊と三疊以下に限らるゝも宜也。

別間は大抵夫婦者、偖は親子連の借切にて、永住なるが多く、旅宿と言はんよりも、棟割長屋の猶ほ下等なる生活也。窮屈なる一室の、前に後に高く低く、幾つとなく麁末なる棚しつらへて、右の柱に帚木を吊す釘あれば、左の壁には手拭雜巾の掛れるあり。片隅に寄せたる膳椀の上に湯卷おしめの飜る中を、寢間也、食堂也、仕事場也、彼等が爲めには、一個の家庭の、天にも地にも唯一の慰藉の源ぞかし。中には親子五六人、或は六七人の一家族が、住めば住まるゝ三疊に重なり合ひて、雀燕の巢にだも劣れる樣、憐れ也。

斯くて二年三年、甚しきは五六年、八九年の長きをも同じ木賃宿に世帶を持ちて殆ど我家の如き思ひせるものあり。我が昨年十二月十一日より二十五日までの間に調査せる所にては、一戸の木賃宿にて斯る家族の住せる者多きは十二、少きも五を下らず、總計千四百五十有餘の家族あるを知り得たり。左れば一戸の木賃宿に平均七八の家族即ち七個の世帶ある譯也。我れ此調査半ばにして止めたれば、未だ全部に及ぶ能はざりしが、若し洩れなく調査せんには、更に驚くべき多數に達せしなるべし。

世帶持ちとはいへ、彼等の中に一通り日用の器具持てるはいと稀にして、多くは着のみ着のまゝなれば、鍋釜は愚か飯櫃、膳、椀、箸までも、入用の時のみ宿より借受くるを例とす。

我が調査にては前記の千四百五十有餘の世帶持ちの中にて、不完全ながらも一通りの器具ありて、月々の用を足すもの、僅かに三十有餘に過ぎざりき。左れば百の世帶中僅か二戸のみ、殘り九十八は無一物の割合也。

斯れば木賃宿の竈も釜も一切の炊事料理の道具は、常に數家族の共有となりて、毎朝臺所の混雜は言語に絶す。

亭主が早出の準備にとて、三時から起きし事夫の女房ザク〳〵と米研ぎにかゝれば、之に續くは立ン坊の嚊也。宵に仕掛けし竈の下を焼き付くる一把一錢五厘の木片の火移り惡く、烟家中に漲れば、朝寢の山の神、嚏しながら目を捺り、燻すにも程がある、何でそんなに早くから騷ぐんだらう、時計を見るが善い、との雜言。負けては居らず、早く起きようと遲く起きようと此方の勝手だ、お前さんばかりが客ぢやあるまい、とやり返す。何を生いきな、穴女郎、寢惚奴と二言めには喧嘩也。後詰の加勢は亭主が出る。戰ひ將に酣はならんとする時、何だお前たちは、朝ぱらから碌でもねえことを聞くと仲裁の寢惚顏は、楊枝銜へしデー〳〵の老爺にて、肩に置いたる手拭は三年醤油で煮染めし

如し。時刻移れば、一升足らずの南京米買つて歸る下駄の齒入の女房が、權さんのお神さん、貴女のお釜はあきませんかと尋ぬれば、一方には植木屋の女房が、其俎板が濟んだら貸して下さいと催促す。私も俎板が入るのですと口を掛ける傍から、摺木を何處へやつたと難詰する。いつ迄炊桶を使つてるんだらう、グヅ〳〵するぢやアないかと怒鳴るがあれば、此飯櫃の洗ひ様を見ろ、人間業ぢやアねえ、亭主の寢伽をすりやア女の役が濟むと思ふのか、と中こすりの高聲あたりに響く。數人の女豪傑の手から手に、一個の摺鉢、車輪と廻れば、一丁の庖丁電光と閃きて、目覺しなんど言ふばかりなし。一年三百六十五日、大抵朝は午前三時より七時頃まで毎日斯る混雜は繰返さるゝ也。

流し下の支度は朝のみにはあらず、職業柄によりては朝よりも夜の方忙がし。殊に十四日と晦日の兩日は多少に限らず、前借の殘りを懷中して歸れば、鮪の二錢皿に一把の大根、濁酒の二合も添へ得んには、一家團欒の晩餐、これや彼等が極樂なるべし。其日稼ぎの勞働者も同じく其日の勞銀にて晩食濟せ、殘れる冷飯は翌日の辨當に詰めて出掛くれば、朝は至つて無事なることあり。但だ夜は忙しくとも、銘々歸りの時刻の異なれば、朝の流し下の如き一齊射擊の戰爭にはあらず。

斯る家庭をつくれる價、卽ち『別間』の屋根代を聞くに、

十錢（二疊一室、四布蒲團一枚添ふ）十二錢（同上、三布蒲團一枚、四布蒲團一枚、合計二枚添ふ）十四錢（三疊一室、三布蒲團一枚、四布蒲團一枚、合計二枚添ふ）

とは何れの木賃宿にも行はるゝ長期貸切の定め也。此外、

十六錢、十八錢、二十錢、二十四錢の四種あり。是は一二泊の場合の屋根代也。其高下は蒲團の品柄、室の恰好、疊の良不良、出入の便不便等にて差ありと知るべし。又短期の宿泊には火鉢、土瓶、茶器の類を添へて貸渡し、此外豆らんぷと稱する小さき洋燈に石油をつぎて出すこともあり。別間の蒲團は貸切なれば晝夜を問はず自由に使用し、人員の制限もなし。五人にても七人にても一家族と見做して同一の屋根代を徵す。左れど借受約束濟みたる後に至りて人數增加すれば二錢又は二錢五厘の割增を取立つることあり。

實に彼等は僅かに二疊の一室を、月三圓より三圓六十錢、三疊のを四圓二十錢の賃出して借り居れるなり。一ケ月に四圓内外を拂ひ得る程ならば、長屋の一戸は優に借受け得べきを、如何なれば斯る不自由不便の生活に高き屋根代を取立てらるゝや。开は外ならず、彼等は唯だ一品の身につく物のなければ也。日用の家具だに新に求めんことの難ければ也。馬鹿々々しと知りながら、一たび此境界に墮し來れば、井に落せし簪の永劫浮む瀨なきぞ哀しき。

戀せぬ里はなし。永住の夫婦親子のみならで木賃宿の『別間』をば、變る枕の一夜妻が果敢なき契りの宿とすること近來の流行也。名づけて『連込み』又は『レコ附』といふ、連れし男を後に立たせて、今晩は、明間はありますかと訪ふ女の聲聞くと等しく、それ來た、レコ附がと喜ぶは主人也。『連込み』『レコ附』は屋根代殊に高ければ也。

斯る客をば宿屋は頗る優遇して、蒲團なども多少の注意を加ふより、屋根代も亦從つて高く、大抵は二十錢より二十四錢を徵す。

連込みの客多きは淺草の木賃宿にて、之に次ぐは深川、四谷、本所也。麻布には左まで多からず。淺草なるは上野停車場、扨は淺草公園などに、遠近のたつきも知らず、漂泊へる田舍娘が人惡き朦朧車夫に誘拐されて、鬼一口の憂目を

見るが多く、深川、本所は遠國より來れる工女が生活の困しさに、折々は堤の柳の露に濡れける内職の、是も進化歟、木賃宿に入込むもの多きに至れり。

此外裏店の車夫の女房が、同じ長屋の某と、小夜衣我妻ならぬ褄重ねあれば、晝は店頭の看板なる煙草屋の養女が、隣の職人の弟子に誘はれ來るもあり。牛屋、安料理、蕎麥屋の輕子、矢場、銘酒屋の曖昧女、宵に合圖の勞働者と、思ひ〱の媾曳の種類は勝て數へ難く、何處の家にも、毎夜二組三組の出來合夫婦を見ざるは無し。

殊に目立つは二十四より三十前後の世馴れし女の木賃宿を渡り歩き、相宿の者と馴染みて、女房氣取の逗留せるを、一般に安宿ごろつきと呼ぶ。

連込みの客の統計を聞くに、市内二百餘戸の木賃宿にて、一晝夜に少くも八百組乃至千二三百組はあるべく、此外安宿ごろつきといへる婦人五六百人の多きに及べり。

爰に哀れは夫ある身の情を鬻ぎて、其日の代の足とするものも尠からず。

本所松倉町邊に住む極貧者の妻は本所花町、業平町、深川の富川町、淺草の淺草町邊の木賃宿に出沒し、去年九月の中頃より大晦日まで貧民の生活の尤も苦痛を感ぜし時に、是等の内職著しく増加して其數七十餘人に及べりとぞ。斯くても彼等は僅に二十錢より五十錢位ゐを得るに過ぎずといへり。

戀と情の神聖も、金ありての上ぞかし。貧する身には唯だ一飯に饜かんが爲めとて、二貫、三貫の端錢に切賣の淺猿しさは、聞くさへ書くさへ忍びがたし。

扨又爰に去年一ケ年の間、深川の或木賃宿にて作りし夫婦喧嘩の統計あり。

合計　五百三十一件

内譯

癡情……………………百四十二件

生活の困難……………二百九十四件

小兒の處置……………七十五件

雜件……………………二十件

癡情の喧嘩は大抵年少き男女なれど、生活の不如意より起れる喧嘩は、何れの夫婦も已むときなし。小兒の處置といへるは連子なるに多く、又女の子よりも男の子なるに多し。去年中此宿屋に宿れる夫婦の數は、滯在と一二泊とを通じて二千五百九十三組なりしといへり。是等の夫婦朝に合ひては夕に離れ、西東する浮草のそれよりも猶ほ定めなき生活也。

金殿の裏、玉樓の上にも、色に濁る慾に飢うる紳士はあり。校堂の中、黌舍の窓にも、情を弄び戀に溺るゝ才女あり。左れば浮世の樂しみは酒と賭博と唯だ是れのみの貧民窟に、いかで風紀の正しきを望み得べき。一たび木賃宿の閾を跨がん程の婦人は、忽ち其身の汚されざるなし。宿の亭主が相宿の客を媒介して一回の周旋料五十錢の塵も積れば、いと多額の利益となる也。

あゝ世にも恥かしき禽獸の行ひも、馴れては恥かしからぬ迄に墮落の道行、聞けば生れながらの罪にはあらず。貧と不幸に身を攻められ、脅迫と誘惑とに心亂れて、泣きつ叫びつ悶え悶え、末は捨撥の安宿ごろつき。これが十年前の大家の孃樣とは、いかなお釋迦でも氣が付き玉ふまじ。

車夫、人足、立ン坊などの一日の勞働に疲れ果てて歸り來る木賃宿の帳場にて『お湯は如何です』の聲聞くは、天にも上る心地すべし。木賃宿にも亦風呂湯あり。

普通の旅宿には大抵風呂あれど、下宿屋にて風呂あるは、十中の二三に過ぎず。左るを流石に勞働者を客とする木賃宿には、麁末ながら

風呂桶を備へて、隔日又は三日目位に客人を入浴せしむ。四谷永住町の十八戸の木賃宿にては、此入浴の便を與ふること、殆ど競爭の如くなれり。麻布の木賃宿も皆な隔日に風呂を沸かせり。本所、深川にも風呂附あり。淺草には多く見かけず。

左れど、一泊六錢の客には、是とても名のみに過ぎず。熱き時は熱鐵を溶せし如く、冷き時は殆ど水の如し。熱しとて加ふる水なく、水ありしとて後の客の爲めにとて禁ぜらる。詮方なければ唯だ手拭を潤して、身軀と四肢を拭うて已むめり。

是は木賃宿の策略にて、湯熱くして全身を沒し難ければ、おのづから長湯するものなし。左れば込合ふ客を待たしむることなく、次ぎ〳〵に入代らしむるに尤も必要なりとぞ。

斯く熱き湯も限りあるコークス、限りある薪の、盡くれば其儘冷ゆるに任せて省みず。

風呂の蓋開は、大抵午後六時頃にて、先登第一は宿屋の主人、續いて屋根代を納むる順序にて風呂場に案內す。是も屋根代徵收の一種の餌也。

麻布の或木賃宿にて一人の客人、さる規則に心づかず、直ちに風呂桶に飛込みたるに、番頭追來りて、屋根代を入れて下さつたかといふ。イエまだですと言へば、早く納めなさいと促す。風呂から上つて納めますと斷るを、屋根代を納めねば、風呂に入ることは出來ませぬとて、強て引出し宿料を取立てし後、今度は公明なる案內にて入浴さしめたることあり。

去年の十二月半なりし、四谷永住町に宿泊せし一人の男の、三晩目に金なくなり屋根代の質にとて、半纏を脫ぎて帳場に預け、其儘風呂に入らんとせしに、コン畜生、屋根代も拂へぬ癖に、人間並に風呂に入りあがるとて、番頭に罵られて、面目なげに止めたるがありき。

屋根代の取立はいと嚴重也。新なる客は入口にて受取り、滯在の客は午後六時より八時頃迄に取立つ。馴染ならざる客には如何なることありとも猶豫せず。金なければ其所持品を預るを常とす。

職工其他常雇人夫の類にて、十四日と月末に勞銀の支給を受くるものには特別の契約を爲し、十四日と月末の二回に勘定すれど、是は少くも半年以上住居して、十分の信用あるものに限りて其例いと少し。

去年九月十三四日の頃なりき。本所の木賃宿に三日の間、何事をも爲し能はずして宿れる一組の若き夫婦、僅かの所持金を食ひ盡して、三日の屋根代積りて三十六錢を拂ひ得ず、宿の主人は夫婦の浴衣、單物と帶一筋、捨賣にしても六七十錢の物はありしを無殘にも剝取りて、男は襯衣一枚、女は襦袢と湯卷の儘にて逐出されしを見たり。是のみならず一日の屋根代滯りて、其所持品を盡く取上げられ、丸裸となりて逐出さるゝ者珍らしからず。

先頃二三の新聞に、貧民窟の棟割長屋、或は安宿の店賃、屋根代頻りに延滯せるより、家主等は其督促に、てこずれる由傳へしも、是は事情に遠き話也。木賃宿の中には心寛きものなきにあらねど、其八九分はいづれも强慾にして屋根代を延滯せしむるなど思ひも寄らず。男は裸として逐出し、女は賣淫をさせても之を取らずに置くことなし。

書くも憂し、書かぬも憂し、恐ろしく驚かるる別世界の生活の樣々は、是に盡きねど左まではとて。

新年の歡喜

樂しい哉新年。新年の樂しきは門松あるが爲めに非ざる也、門松なきの家も亦樂しめる也。

屠蘇あるが爲めに非ざる也、屠蘇なきの家も亦樂しめる也。金あるが爲めに非ざる也、美服を着くるが爲めに非ざる也、紅粉を粧ふが爲めに非ざる也、金なく美服なく紅粉なきの人も亦樂しめる也。

夫れ我と人と社會と其死に向つて一年を近づき、皆逝水の早きを感悟せざるものなきに拘はらず、而も彼等が嬉々として新年を樂しめる所以のものは何ぞや。他なし、此時や實に我と人と社會と倶に與に、直ちに正義也、直ちに自由也、直ちに平等たる事を得たれば也。

人は各兩端を有す。世に純乎たる善人なければ、亦純乎たる惡人もあらず。但だ平日に在てや、幾多の競爭、幾多の誘惑、幾多の感奮に際會するが爲めに、多く善を現ずるあるも亦多く惡を現ず。善惡常に相戰ひ利害常に相爭ふ。勞々として殆んど其生に堪へざる也。唯此競爭、此誘惑、此感奮や除夜百八の鐘聲と共に全く休止して、萬人實に虚心也、坦懷也。心廣く體胖にして利害の芥帶する所なく、是を以て其動靜し、思考し、聞睹し、云爲する所唯善あるのみ、正義あるのみ、天下亦一毫の不正と非議を現ずるなし。新年の樂しき豈宜ならずや。人と社會と既に正義也、豈自由ならざらんや。然り新年の天地程自由なるはなし。曉鷄一たび改暦を報じて一週日間、金錢の我を壓するなく、權勢の我を苦しむるなく、利慾の我を奪ふなく、頂天立地、縱横無礙大自在あるのみ。人と社會と此自由を得たり、新年の樂しき豈宜ならずや。

既に自由あり、平等なかる可けんや。千門萬戸唯だ門松の大小を見るのみにして、世界は實に平等なる也。主人の新年のみならずして、僕從も亦新年なる也。追羽根の墨を塗るはお三と令孃とを問はざる也。紙鳶の掛けくらは丁稚と若旦那とを問はざる也。階級は全く除かるゝ也、差別は全く存せざる也。一堂の上唯熙々雍々たるを見るのみ。一家の中唯融々洩々たるを見るのみ。此平等を得たり、新年の樂しき豈宜ならずや。

人生の目的は實に正義なるに在り、自由なるに在り、平等なるに在り。唯此三者を得ば人は聖人也、社會は天堂也。年々歳々人死に近づいて猶新年を樂しむ所以のものは實に之れ有るが爲めに非ずや。但だ之れ有らば新年ならずと雖も、亦新年の如く樂しきを得べけん也。而も嗚呼一年三百六十餘日、此週日を除けば、即ち正義なく自由なく平等なきの天地、勞々として生に堪へざる者、抑も誰の咎ぞや。

歌牌の娛樂

一少女に問ふ、新年に於て何者か最も樂しき。對へて曰く、歌がるたを取るなりと。之れ有る哉。我も亦少時甚だ之を好みて、兄に侍し姉に從ひて、食と眠とを忘るゝこと屢々なりき。依て想ふ、歌がるたの遊戲、何ぞ爾く樂しかりしやと。

人多くは曰ふべし、歌がるたの樂しきは、競爭にありと。或は然らん、然れども世の所謂競爭なる者を見るに、大抵悲痛勞苦の之に伴ふ多きが故に、人は皆之を厭ひ之を避けんとす。然り、歌がるたに在りて爾く樂しむ可しと爲す者、別に其故無くんばあらじ。曰く有り、歌がるたの競爭は諸種の點に於て、世の所謂競爭と頗る其選を異にする者也。

歌がるたの遊戲は、競爭の遊戲也。然れど此競爭や、直ちに人生の最高理想を現實す。何ぞや、自由、平等、博愛。

歌がるたの選爭は自由也。他人のために役せらるゝにあらず、境遇の爲めに馳らるゝに非ず。進まんと欲して進み、止まんと欲して止む。

唯我獨尊、縱横無礙、眞個の自由を享くる者に非ずや。

歌がるたの競爭は平等也。其一たび席を設けて陣を張るや、階級なく、門閥なく、金力なく、權勢なく、兄弟も姉妹も親子も主客も雇主被雇者も、皆な同等の地歩を占め、同等の權利を有して、以て遺憾なく其技能を伸べ、其力量を用せしむ――眞個の平等を樂しむ者に非ずや。

歌がるたの競爭は一面に於て多數の協同を意味する也。皆心を一にして相結び、排斥なく、離間なく、中傷なく隱謀奸策なく、極めて公明、極めて正義の運動を爲し、強、弱を扶け、智、愚を救ふ。勝敗一決すれば相看て哄笑す。嬉々たり、雍々たり。和氣掬するに堪へたり。所謂樂と偕に樂しむ者、眞個博愛の心の發揚する者に非ずや。

故に歌がるたの樂しきは、唯だその競爭なるが爲めにあらずして、其競爭が、此時此際一切世俗の習慣、束縛、迷信を蟬脱して、眞個の自由、平等、博愛を現ずれば也。孔子曰く、君子は爭ふ處なし、必ずや射乎、揖讓して昇り、下りて飲む、其爭ひや君子也と。歌がるたの爭ひや、誠に君子の爭ひ也。眞也、善也、美也、花也。花の如く天使の如き少女が、新年に於て、最も樂しとなすもの所以あり。

嗚呼、天下の競爭てふものをして、盡く君子の爭ひならしめば、自由平等博愛なること、眞也、善也、美なることを、彼の歌がるたの競爭の如くならしめば、如何に人生社會の樂しかるべきぞ。然れど見よ、人は生存競爭のために、却つて其自由を束縛せらるゝことあり、其平等を破壞せらるゝ也、其博愛の心を敗殘せらるゝ也。歌がるたの競爭は、少女も之を樂しめども、生存の競爭の悲痛と勞苦には、孟夏賁育も亦疲倦せざることを得ず。我等、豈に徒らに競爭を排せんや、萬民の生を遂げしめんが爲めに已むことを得ざれば也。

歌がるたを樂しめる少女よ、我も亦幼時甚だ之を好みて、兄に侍し姉に從ひて、食と眠と忘れしことは屢々なりき。今や此樂しみなし。嗚呼老いけるかな。顧みて憮然之を久しくす。

夏草

（泉州紀行）

予は泉州堺に滯在して居る恩師中江兆民先生の病を問ふべく、八月二日(明治三十四年)の夜汽車に乘り、翌日午前梅田に下りた▲回顧すれば予が先生に從つて大阪に居たのは、實に今より十三年の前である。當時恰も保安條例發布の後で、東京が一擧に人物の空虛となつたと同時に、大阪は忽ち政界の中心となり、幾多の志士論客が言論、集會、出版其他の運動の爲めに唯一の舞臺となつた。東雲新聞には中江、栗原、江口あり、關西日報には末廣、森本(駿)、矢部あり、大阪公論には織田純一、經世評論には柴、池邊といふ面々が、皆侃々諤々の筆を揃へて時の政府を攻擊し、其勢ひ中々盛んなものであつた▲夫が今では如何であらう。或は中道志を齎して鬼籍に入つた、或は全く專制政治家の奴隸となつた、予は梅田から中の島に至るの間に於て、深く『夏草や强者どもの夢の跡』の感に堪へなかつた▲併し形而下に於ての大阪の進步は、水道に於ても、電話に於ても、東京語の混和に於ても、下女の髮が昔の如く判別せられないに於ても、明かに認められる▲殊に梅田停車場の新築の規模宏壯なのと便利なのとは、確かに刮目すべき價がある。是に比べれば、新橋の停車場などは其見すぼらしい事、實に燐寸箱同然と言つてもよい▲午後に友人村松柳江君を朝日新聞に訪問した折、同社の建物

工場等を瞥見するの機會を得たが、總て設備の完全なのには、東京の諸新聞恐らく一も比すべきものはないと思つた。是れだけ完全な設備があつて、其割合には新聞の紙面が不完全なのは何故か、といふ疑問が直ちに起つたが、此疑問は直ちに解釋しない方が花かも知れぬ▲大阪の人力車の幅は依然として東京の半分しかない。是は市街の幅が非常に狹いからであらう。そして膝掛の幅が漸く女の前垂位、夫でも大抵は掛けずに敷いて置くやうだ。是は東京の如く塵埃が立たない故であらう▲兎に角市街の狹いのと、市中の家屋の一般に風通しの惡いのと、庭がないのと、樹木がないのとで、暑中は釜で蒸されるやうだ。だから普通の商家は、男は襦袢に褌ばかり。女は老若の區別なく一同に諸肌ぬぎで、平然として店頭に坐つて居る。東京ならば直ぐと風俗改良家の御厄介になるべき所だ▲御方便な事には、庭と樹木のない代りに、何處でも一歩を出れば直ぐに河岸地だ。五六十錢を投ずれば船一艘、船頭付で、夜十二時迄大川を漕ぎ廻らせる。是が大阪市民が暑中に於ける一條の活路である▲予も政友新聞の吉弘君、萬歲新聞の山本君に誘はれて、其夕一葉を浪華橋の邊に浮べたが、聞きしにも似ず、

川の面は意外に寂寥で、絲竹の音も物賣りの聲も甚だ尠い。時々打上げる烟火はあれど、喝采の拍手もない。是は今度の恐慌の結果で、腦中算盤ばかりの上方人は、納涼どころではないのださうだ。其雜鬧しないのが予等に取つては却て勿怪の幸で、清風明月の下、一壜の麥酒に陶然とすれば、實に羽化登仙の思ひがあつた。▲東雲新聞の盛んな頃に、曾根崎の中江の家へ出入した酒屋で小塚といふのが、今は中の島に旅店を開いて居る。予は取り敢へず其の家へ行つて見ると、樓上に兆民先生が、『氷霜皎潔』の四字を大書した額が掛つて居た▲是は予にも見覺えがある。憲法發布せられた際、先生が滋賀へ行つて故中井櫻洲君を京都の祇園町へ引張り出し、徹宵痛飲した擧句、歸宅すると其儘大醉の裡に揮洒したのである。書體如何にも飄逸俊邁、當時沖天の意氣が想はれる▲此家に予の同縣人宮崎夢柳君の詩が一二枚殘つて居る。彼の『自由の燈』に『自由の凱歌』といふ標題で、デューマのテーキング、バスチールを飜譯し、東都の文壇を風靡した一代の奇才も、今は殆ど何人の記憶にも存して居まい▲堺、市の町の兆民先生の寓居に汗を拭き〳〵駈込んだのは、四日の朝八時頃である。廣い縁側の毛布の上に、先

生兩膝を抱へて蹲踞まり、其切開した喉佛の處へ、令閨が布片を宛てて居る。予は見るから胸が塞がるのを禁じ得なかつた▲其容貌は去る三月の末に東京を發たれた時と、左程の變りは見えないで、元氣少しも衰へず、快談平生の如くであるが、頸部の腫物は既に氣管を壓して居る。呼吸は僅かに喉頸の切口から成されて居る。そして先生は莞爾として數帖の半紙の草稿を取り出し、是れが學者の本分として、社會と友人への告別、又は置土産だ。死んだら公けにしろと言つて示された▲二十一年の暮だつたか、先生が『茫茫守歲浪華津、買醫群中寄此身、酒腐肺腸氣還壯、論拘條例筆愈神、歐編漢籍課門客、鷄黍飯供老親、海內交遊近何狀、百年我是半閑人』といふ詩があつた。今や此炎暑に際し、此難病を抱き、座には一冊の參考書もないのに一たび紙に臨めば滔々として數千萬言、天馬の空を行く如くなるのは、眞に『筆愈神』なる者で、只嘆服の外はない▲扨て先生令閨及び十三になる令息との四人で、四方山の談話をなし、久し振りの晝餐を共にする事を得たのは、心配の中にも頗る愉快であつた▲午後に令息に伴はれて濱邊に赴き、海水に飛び込んで一時間ばかりジャブ〳〵やつて返

つて見たら、先生の前に菅野達親の名刺があつた。只だ今見舞に立寄つたとの事である。其翌日の大阪の新聞に、菅野が來たのは高島子との使のやうに書いてあつた▲先生の住居は中々廣く、庭には池あり、大木あり、花崗の燈籠あり、澤山の飛石があつて、そして全體に苔蒸して居る。今は餘程荒れては居るが、中々數寄を凝したものだ。所が面白いのは此家の床下に三匹の古狸が住んで居る▲此狸は堺近傍で有名なもので、牡は茂吉、牝はお三津、其子は梅若と名づけられて居る。冬は床下に引込んで居るが、夏は海水浴の旅館や料理屋が繁昌で、食物が澤山だから大抵海濱へ稼ぎに出で、時には濱寺邊迄ウロついて居るさうだ▲茂吉とお三津は既に三百年も經て居て眷屬も多いから、食物には窮せぬが、其子の梅若は年も若いから、食物をやつて吳れといふ賴みださうで、毎日緣の下へ食物を差し入れる。彼等は以前は隨分惡戲が激しかつたので、今でも下女などは、夜は自宅に歸つて寢る事になつて居る▲併し狸先生此頃は大抵不在で、時々返つて手水鉢の水を飮んで居る事など見受けるが、少しも惡戲はしなくなつた。予は令息に誘はれて離室の裏庭へ行つて見たら、小さな祠の前に茂吉大明神お三津大明神、梅若大明神といふ一尺ばかりの幟が幾本も立つて居たのは大愛嬌だ▲折角來たのだから、涼しい内に妙國寺でも見てお出でなさいと、令閨に勸められて、五日の朝、借着の浴衣を其儘に飛び出した▲堺の街衢は勿論狹いが、整然たる事碁盤のやうで、其軒並の善く揃つたのは、關西地方でも稀に見る處ださうだ。一見した所で、流石に足利織豐時代に於ける繁華の樣が想はれる▲妙國寺の緣起を今更說くでもあるまい。例の信長の我を折つたといふ蘇鐵も、目もなければ口もない、矢張り只の蘇鐵だが、成程古い、成程大きい。古いと大きいだけで名物たるの價値は有ると感心して、扨て小僧の案內で、種々の書畫骨董、換言すれば有難い寶物を拜觀した▲何時見ても氣持の善いのは、僧日蓮の肖像だ。彼が炎々たる俠焰覇氣は、實に其軒昂たる眉宇、烱々たる眼光に燃えて居る。其左右に在る日朗、日像の輩皆な走り、且つ僵るといふべき樣だ。此處の日蓮は日重の筆であつた▲日蓮は予が平生最も崇拜する所の一人である。見よ、彼の血性、彼の剛膽、彼の精力、彼の識見、彼れの才智、彼れの信仰は、眞に一代の改革者たるべき資格を十分に具備したものではない歟。彼の一天四海皆歸妙法の旗を掲げて念佛無間禪天魔を絕叫し、難戰苦鬪を續け〳〵て、遂に天下を風靡した歷史は、如何にも壯烈なものではない歟。併し茫々七百年の星霜は今や此血性の男兒と壯烈の歷史とを以て、一の骨董一の寶物と化して仕舞つた。妙國寺の玄關には、日蓮の弟子たる僧侶が、蘇鐵の葉を插した花簪を一本二錢で賣つて居る。提婆品の女人成佛の本願を遂げる爲めかも知れぬ▲本堂の橫手に出れば、一個の木標と數本の卒塔婆は、土州の志士箕浦元章君等が割腹の跡を示して居る。其向うの茶店には、彼等が用ゐた、所謂血染の三寶を並べて在る▲當時見物の洋人に投げ付けたといふ三寶は、緣がバラ〳〵に壞れた儘で、臟腑を摑み出して置いたといふのは一面に赤黑くなつて居る。其他大抵血潮の迸つた痕の斑々たるのは、如何にも淒愴の感を惹く▲予は一意洋人を憎惡した彼等を以て、英雄とも言はず、偉人とも呼ばぬ。併し彼等は眞面目なる志士であつた、至誠であつた、赤心であつた。そして其三寶に濺いだ淋漓の血潮は、確かに維新大業の幾部を培ひ成したのだ。然り、志士の血潮は古往今來、改革の絕好肥料で、是でなければ到底立派な改革は出來ないのだ▲松雲寺俗に所謂松寺で、秀吉遺愛の五葉の松を拜觀し

た。中々大きな盆栽だつた▲同伴した中江の令息が、餅を買ひたいといふので、大寺の名物餅屋に立寄つた。大寺といつても寺ではない。開口神社といふ神樣の境内で餅屋の店は、ちよいと淺草の紅梅焼といふ體裁である▲店の前には黒山のやうな客で、大勢の職人雇人は、餡や團子を拵へる傍から、竹の皮へ包んで投げ出して居る。眞に目の廻る忙がしさだ。左樣に古い家ではないが、味の美いのが呼物で、一日の賣上げは二百圓以上だといふ評判だ。だから堺の住民は、高野鐵道の收入は、大寺の餅屋にも及ばぬなどと言つて居る。有名な金物を除けば、蓋し此地で第一等の名物だらう▲此日の午後に堺を發つた。（下略）

手　柬

巣鴨の詩

病の床に横はつてから早や二十日餘り夢と過ぎた。先頃も何處からか風に任する櫻花の二ひら三片、鐵格子の前に落つるのを見て都門の春もいつしかに暮行くらむと哀れに覺えた。我等病氣は腸胃の加答兒とかで、消化の力が痛く衰へ、粥、くず湯、卵の類の外は攝取し得ぬので、體力の十分復するには、少しは長くかゝるであらうが、餘病さへ起らねば、決して心配すべき症では無いやうだ。幸ひに身には左せる痛みも苦しみもないので、心靜かに養生して居る。

養痾鐵窓底　趺座似枯禪
兵馬憐蠻觸　史書接聖賢
逍遙九萬里　上下二千年
一氣猶存我　名之曰浩然

莊子云、有國於蝸之左角、曰觸氏、有國於蝸之右角、曰蠻氏

兎に角幼より書を讀み道を聞ける有難さには、聊か天を樂み命に安ずる趣味も解して居るから蕭然たる一室に獨居しても、窓に映る星光、枕に通ふ蛙鳴、いづれか我友ならぬはない。夜々の夢もいと穩かである。母上樣にも御心配なきやう、よく御慰め申してくれ。

但し讀書は近來疲れの爲めに休みがちだが、其代り各地の兄弟姉妹からの手紙が此上なき樂みで、其同情厚き言葉を常に胸の中に繰返して居る。おん身の端書に、兆民先生今在さばとあつたが、我も實に其感に堪へぬ。何角につけて恩師のことが思ひ出される。

佛語だけは、どうやら今日まで縷の如く續けて來た。紙製の石盤で每日文法のエキザーサイスをやつて居る。枯川君は英文が嘸ぞ上手になつたであらう。

月一通と限れる手紙を先月は社に送つたから今月はおん身にあてる。讀了つたら直ぐ枯川君の方へ廻して呉れ。

昨夜東風細雨斜
階前春〃綠彌加
却憐昆谷原頭夕
人泣劉郎去後花

四月三十日朝、蓐上に認む。　秋水

千代子樣

少し參照且つ增訂したい個所があるから『神髓』と『ラサール』を郵便で送つてくれ。

幸德多治子氏へ

今日から面會も手紙を出すことも出來るやうになりましたから差上げます▲まこ

とに此度はトンだことで一方ならぬ御心配を相かけました。不幸のつみ何ともおわびの申しやうも御座いません。何事も私のおろかなる故と御ゆるしを願上げます▲御からだはいかゞですか。私は先々月すこし持病の腸で煩ひましたが、此せつは全くようなりました。あたゝかく着て、おいしくたべて、好きな本を讀んだり、詩を作つたりしてゐますから御氣遣ひないやうに願ひます▲人間のことはわかりません。又よいこともまゐりませうからなるべくからだを大切にして御まち下さいまし▲コンナ詩が出來ました。友衛にでもよませて御聞き下さいませ。

鳩鳥喚晴烟樹昏
愁聽點滴欲消魂
風風雨雨家山夕
七十阿孃泣倚門

堺利彦氏へ

二十九日夕の手紙有難う。僕の母は少しエライ處があるやうだが、ドウして僕のやうな豚児が出來たらう。馬鹿な子程可愛いと云ふから、涙は出さないで居ても餘程こたへるに違ひない。歸國してからキット病氣が出て居るだらうと案じられる。何しろ七十だからね。兎に角幾年か母の壽命を縮めたかと思ふと少なからぬ心の痛みも感じる▲僕の生落した草稿は爲子さんが抱いて還つて呉れたらう。月たらずで不具だ。第一、ページが少ないので一人前の單行本には甚だ困難だらうが、紙質の厚いのを擇むなり、組み方をアラ〳〵するなりして何とか宜しく賴む。アレが印刷されるのは今の僕にセメてもの樂しみの一つだ。良家の軒先に捨てた私生兒を拾ひ上げられて、蔭ながら其成長を樂しんでる親心はこんなだらう。察してくれ給へ▲僕の三疊の一室の前後左右を五寸角の柱十四本で圍んでる、孰れも枝を切落した節あとだらけだ。ボンヤリ半跏趺坐してると、此柱の、枝さしかはし、葉生ひ茂つた前身があり〳〵と目に浮んで、身は深林の中に在る思ひをする▲此植物も宮殿の棟梁とならずに、監房の堅めとなつて朽けて行く。不レ知何の因緣ぞ▲こんな事を考へると獄中も山中も殆ど何の異なるなし。樹下石上より今の方が、疊のあるだけ少し樂だ。

載酒江湖旣隔年
囚衣今日又因緣
個中消息有誰會
獄裡禪兼病裡禪

同じく

愈々四十四年の一月一日だ。鐵格子を見上げると青い空が見える。天氣が好いので世間は嘸ぞ賑かだらう。火の氣のない監房は依然として陰氣だ。疊も衣服も鐵の如く凍つて居る。毛布を膝に危く蹲まり、今は世に亡き母を懷ふ▲母の死は僕に取ては寧ろ意外ではなかつた。意外でないだけに猶苦しい。去十一月末、兄が伴うて面會に來た時に、思ふ儘に泣きもし語りもしてくれたなら左程にも無かつたらうが、一滴の涙も落さぬ迄に耐へて居た辛さは、非常に骨身に徹へたに違ひない。イクラ氣丈でも歸國すれば屹度重病になるだらうと察して、日夜に案じて居たのは先頃申上げた通りだ▲二十八日の正午の休憩時間に、法廷の片隅で花井君や今村君が氣の毒さうな顏をし

て、告げ知らせてくれた時は、扨こそと思つたきりで、ドンナ返事をしたか覺えぬ位だ。嘸ぞ見苦しかつたであらう。假監へ降りて來て辨當箱を取上げると、急に胸が迫つて來て數滴の熱涙が粥の上に落ちた。僕は始終粥ばかり食つてる▲君も知つてる通り、最後の別れの折に、モウお目にかゝらぬかも知れませんと僕が言ふと、私もさう思つて來たのだよと答へた。ドウかおからだをお大切にといふと、お前もシツカリしておいで、と言捨てゝ立去られた音容が、今もアリ〳〵と目に浮んで來る。考へて居ると涙が止らぬ▲其後僕が餘り氣遣ふもんだから、いつも健康だ健康だと言つて來た。訃報の來る二三日前に受取つた手紙も、代筆ではあつたが「お前の先途を見屆けぬ中は病氣などにはならぬから、ソンナ事を心配せずと本を讀んだり詩を作つたりして樂しんで居なさい」と書いてあつた。僕もマー病氣も出なかつたかと喜んで居た時だから、若し又自殺ではないかといふ疑ひがムラ〳〵と起つたのだ▲僕が日糖事件のやうな事で入獄したなら、假令輕罪でも、母は直ぐ自殺したかも知れぬ。今度の大罪にも無論非常の苦痛を感じたであらうが、併し是は僕の迂愚から起つた事で、一點私利私慾に出でなかつた事だけは母も諒してアキラメてくれたらうと思ふ。單に之を恥ぢたとか悲觀したとかで自殺する事のないのは、僕は善く知つて居る▲萬々一ホントに自殺したのなら、其理由は一つある。即ち僕をしてセメても最期を潔くせしめたい、生殘る母に心をひかされて女々しく未練らしい態度に出でないやうにとの慈愛の極に外ならないのだ。此理由に於ては或は刃に伏す事も藥を仰ぐ事も爲しかねない氣質であつた▲母の生家は郷士だか庄屋だかの家で、其父即ち僕の外祖父は可なり學問のある醫師であつた。十七にして僕の家に嫁し、三十三歳にして寡婦となり、殘された十三と五つの女の子、七つと二つの男の子の、四人の可憐な者の爲めに、固く再醮の勸めを拒んで、四十年間犧牲の生涯を送つたのだと云ふ。其時の二歳の子が即ち天下第一不孝の兒たる僕なのだ▲ア、何事も運命なのだ。悔いて及ばぬ事に心を苦しめ身體を損ふのは、最後まで僕をアベコベに慰め勵ましてくれた母の志にも背くのだから、力めて忘れよう〳〵として居る。が語るに友なき獄窓の下にポツ然として居る身には兎もすれば胸を衝いて來る。我ながら弱い男だ。詩が一つ出來た。

辛亥歳朝偶成

獄裡泣居先妣喪
何知四海入新陽
昨宵蕎麥今朝餅
添得罪人愁緒長

大晦日には蕎麥、今朝は餅をくれたのだ、丸で狂詩のやうだけれど實境だから仕方がない▲長々と愚癡ばかり並べて濟まなかつた。許してくれ。モウ浮世に心殘りは微塵もない。不孝の罪だけは僕は萬死に値ひするのだ。

漢詩

竹僧迷に贈る

春日倚高樓　却添心上秋

花飛人欲老　山水獨悠々
醉登歌舞樓　屈指幾春秋
今日山中客　不堪往事悠
（湯ケ原神雲樓より甲斐の國竹迷師に宛つ）

無題

江湖落託十年游　心似白雲身似鷗
半卷舊詩兒女涙　滿窓夜雨古今愁
長安雪月吾將老　大陸干戈事未休
同學群才投筆起　何人第一取封侯

甲辰孟春書懷

人欲仙

一痕涼月五更天　露氣透肌人欲仙
坐愛碧梧高百尺　婆娑影落臥床前

數落花

悟後樊川病更加　春光如夢鬢絲斜
茶煙今日無由覓　空倚鐵欄數落花

反則頻

石爲臥褥鐵爲衾　瘦骨難支反側頻
窓外覺音時斷絕　應知獄吏暗寬人

多清福

往時茫々總似煙　鐵扉固鎖絕塵緣
誰知此裡多清福　日出繙書日入眠

獄中書感

田中尊師へ

昨非皆在我　何怨楚囚身
才拙惟任命　途窮未禱神
死生長夜夢　榮辱太虛塵
一笑幽窓底　乾坤入眠新

堺利彦傳

堺利彦

堺利彦傳

堺利彦傳の序

ブランデスが、クロポトキンの自傳の序に、こんな意味の事を書いてゐる。

大人物の自傳に大體三つのタイプがあつた。(一)自分はこゝまで踏み迷つた。自分は斯くして眞の道を見出した(オーガスチン)。(二)自分はこれほど惡い事をした。然し誰が自分よりも善いと言ひ得るか(ルソウ)。(三)一個の天才が斯樣にしておもむろに內外から發展させられた(ゲーテ)。所が十九世紀の諸名士の自傳になると、兎かく斯ういふ傾きを示してゐる。

(一)自分はこんなに才能があつて、こんなに賞讚を博した。(二)自分はこんなに才能があり、こんなに美德を持つてゐたが、それでもサッパリ認識されないので、非常な努力爭鬪の後、初めて名聲を博するを得た。然るに今この自傳の著者(即ちクロポトキン)は、自分を語る事を好む人物でない。この自傳の中には、自分の姿繪を眺めるといふ趣きが少しもない。懺悔もない。感傷もない。惡たれもない。自分の罪惡も語らないし、自分の美德も語らない。彼は讀者に對して、卑陋な打解話をしない。彼はいつ戀に落ちたかを語らない。いつ結婚したかをも語らない。讀者は只だ事のついでに、彼が遂に結婚してゐる事を知るだけである。彼は自分の心理よりも、他人の心理を語り、自分の歷史よりも他人の歷史を語りたいのである。故に彼の自傳は、彼の生涯中に於けるロシヤの歷史であり、又最近半世紀に於ける歐洲勞働運動の歷史である。

聖者オーガスチン、天才ゲーテ、それらは固より私如き凡人の比類でない。さりとて私は又、ルソウのやうな赤裸々のさらけだしも到底出來ない。『十九世紀の諸名士』の眞似だけは、さすがに爲し得ないと信じてゐるが、氣高くアッサリしたクロポトキンの態度に至つては、是れ亦た到底及びもつかない。然し私は今、若し出來得るならば、幾分なりともクロポトキンの態度を學びたいと考へてゐる。

自分の繪姿を眺めるといふ甘い所も澤山あるだらう。好んで自分を語るといふ馬鹿な癖も屢々出るだらう。多少の懺悔、多少の感傷、多少の惡たれもあるだらう。卑陋な打解話も出て來ないとは限らない。それでゐて、僞善、修飾、辯解、隱匿の數々もあるだらう。然し私は、それらの總てにも係らず、猶此の自傳が、明治大正の社會史として、社會運動史として、多少の意義あれかしと望んでゐる。

(大正十三年十二月、『改造』所載)

* * * * *

私は『日本共産黨事件』の爲、禁錮十月(未決通算百二十日)の刑を受けるべく、今日入獄します。その前に、この自傳を全部書きあげる腹案でありましたが、ヤット前半だけしかまとまりませんでした。この前半は去年『改造』に連載したのを、多少訂正し

たり、増補したり、削除したりして、それに最後の一章を追加したものに過ぎません。

『故郷の七日』は、本文と重複する點も多いのですが、どうも棄て難い氣がして、附錄にしました。重複の點々を削らうかとも考へましたが、それも文章の組立を害するので、矢張り大體、元の儘にして置きました。（本集には之を缺く）

本傳の後半は出獄の上、成るべく早く書きたいと考へて居ります。後半は自然、社會主義運動史になるわけで、そこに意義もあると考へますが、前半は一體、何の爲に書いたのか、何の爲にそれを人樣に讀んで貰はうとするのか、恥かしくて堪らぬといふ氣もして居ります。（大正十五年六月二十日）

堺利彦

第一期　豐津時代（上）

堺利彦は貧乏士族の子であつた。明治三年十一月二十五日に生れ、明治十九年（十七歳）の春まで、福岡縣豐前國京都郡豐津で育ち、その間に『鄕黨の秀才』として、小學校、中學校を卒業し、それから『笈を負うて』東京に遊學した。彼の生涯の第一期の歴史は、要するにこれだけだ。

然し豐前國豐津！　それが彼に取つて、日本國中で只つた一つの、如何なる物にも代へがたい懷かしの故鄕である。十六年の春秋をそこに過して（ツイ淨瑠璃のさはりめいた文句が出たが）、彼は先づその性格體格の根本を、そこの環境から作りあげられた。彼は今、現在の私をして、恍惚たるエクスタシーの感を以て、敢てその當年の事物を回顧せしめる。

一　傳說的な故鄕

豐津といふ處を地理的に說明するなら、低い丘陵の一塊まりとでも云はうか。豐前國中第一の高山たる英彦山（俗に彥山）から流れ出る二つの川、今川（或は犀川）と、祓川（或は綾瀨川）とが、僅かの距離で相並んで流れてゐる其の中間に、彥山の山脚の一つが長く突出して、その尖端が痩松原で蔽はれた低い丘陵の塊まりになつてゐるのが、卽ち我が豐津である。それを海岸の方から見れば、今の行橋町から一二里ばかり引込んだ處の、低い山の上の野原である。

昔は此の豐津の地をナンギョウバルと呼んでゐた。バルは原の土音である。ナンギョウバルの晝狐といふ言葉が殘つてゐるので、其の荒涼たる野原の樣がしのばれる。旅人が辨當の握り飯を烏にさらはれるといふ話を、私が何かのついでに聞き覺えてゐるのも、このあたりの昔の樣を想はせるに足る。所が又、ニシキバル（錦原）といふ、打つて變つた別の名稱がある。或時ここに遊女めいた者の居た事があるといふ話も、私の小耳に殘つて居る。そこで此の錦原といふ美しい名稱も、晝狐といふ凄い文句も、同じく其の遊女屋に事寄せたものかも知れぬといふ解釋もある。更に遙かの昔に逆登つて見ると、こゝは穴居人種の住んでゐた一部落である。今は甲塚と呼ばれてゐる、尖端中の尖端たる一地域には、甲の形をした、丸い大きな土饅頭が、幾つも幾つも殘つてゐる。入口の塞がつてゐるのもあるが、中にはチャンと、石で閉ぢた、眞四角な、入口の開いてゐるのもある。當年の私等は、よく其の中にはひつて、焚火などして遊んだものだ。今は此の尖端から海岸まで一里餘りもあるが、昔は此の尖端まで海が灣入してゐたのだらうとも云はれてゐる。それは

豐津といふ名稱からも考へられるし、又甲塚の直ぐ下に大きな池が二つあつて、それが海の方へ長く延びてゐる樣子が、如何にも灣の名殘らしく見える處からも考へられる。被川の岸には土中から貝殼の出る處もある。さすれば此の豐津は、野蠻人の穴居部落であつた事もあり、又舟つきの一小村落であつた事もあり、又或時には、どうかした事情の下に、遊女のすだく野中の宿であつた事もある。

斯ういふ傳說的な我が豐津、——凡そ如何なる土地にも、このくらゐな傳說の無い處は無いのかも知れないが、自分の故鄕を成るべく多く傳說的にして見たいのが、私のささやかなロマンチシズムである。そこで、斯ういふ傳說的な我が豐津が、明治維新の際、偶然にも藩政の中心地、從つて我々士族の居住地となつた。

豐前六郡(今では四郡)十五萬石は小笠原家(今の長幹伯爵家)の所領で、小倉が其の居城であつた。然るに慶應二年、德川幕府の長州征伐の時、幕府の親藩として九州方面の先手を承はつた小倉藩は、戰ひ利あらず、城を燒かれて退却した。そして新たに地を豐津に相して、そこに城を築く事になつた。傳說的な我が豐津の瘦松原は、斯くて又一つの珍らしい大きな運命に遭遇したのである。所が、それから間もなく幕府が亡びて、慶應四年が明治元年と變り、引續いて版籍奉還、廢藩置縣となつたので、豐津の城下は未成品のまゝ、まだほんの荒ごなしのまゝ、新時代の風雨の中に放り出された。そこに豐津の特殊性がある。

二　松原の士族屋敷

堺家は元、十五石四人扶持といふ小士の家柄であつた。私の父は先づ御書院番、次に御鷹匠、それから檢見役、最後に御小姓組を仰付けられたと、系圖に書き殘してある。江戶にも二度出府してゐる。最初は御參勤御供として、二度目は品川御臺場詰としてだから私の父は、小祿とは云へ、正に一廉のサムラヒであつた。然し私の目が漸く少しづつ豐津の事物を見分けるやうになつた時、私の父は既にサムラヒでなかつた。腰に大小がさゝれてゐないのは勿論、頭に丁髷ものつかつてゐなかつた。之を歷史に徵するに、明治の新政府が士民に散髮、脫刀、立禮を許したのは、明治四年の事であるが、私の父は最も早く散髮した一人として、少し自慢らしく折々その事を話してゐた。

私の父が既にサムラヒでないと同じく、豐津は既に城下でなかつた。殿樣と呼ばれた舊藩主は既に此の地方を引揚げて、東京住居になつてゐた。お城は、——と云つても、子供の目に城といふ感じを與へるやうな、高い石垣もなければ、櫓のやうなものもない、只だ平地に建てられた、稍や大きな一構への御殿に過ぎなかつたが、——其のお城は、一部分は既に取り壞され、一部分は閉め切つた儘になつて居り、中程の一部分だけが仕切られて、小學校に使はれてゐた。

其お城のあたりを中心として、松原の間や谷あひに沿うて、士族の屋敷が或は群集し、或は散在してゐた。本來なら城下の屋敷町であるべき筈が、總て松原と谷あひとであつた。昔の山城を鷲の巢に喩へた話を聞いた事があるが、その格で行くと、豐津の士族屋敷は烏の巢と云つても善かつたらう。然し、お城の邊を頭として、それに續く一條の大通りは正に此の豐津の原の脊髓であつて、そこだけはさすがに少し城下の趣きを示してゐた。大通りの上手の部分は本町と呼ばれて、兩側には士族屋敷が規則正しく立ち並んでゐた。其の中には「松の門」或は『松の御門』と呼ばれた、御家老小笠原織衞殿の老松竹林に圍はれた、大きな奧行の深い屋敷も

あつたりした。本町に續いて錦町といふ町があつた。一丁目から七丁目までの、ほんの寂しい一筋町ではあつたが、それが兎にかく此の城下に於ける商工の群れであつた。そして此の錦町の七丁目が前に記した甲塚に續き、其の甲塚が行橋方面から豐津への、正面の入口になつてゐた。

堺家の屋敷は、錦町の西裏に當る、石走谷といふ淺い谷のほとりに在つた。家は玄關三疊、座敷六疊、臺所（茶の間）六疊、部屋四疊半、土間物置數坪の萱葺で、それに座敷の庭と、裏庭の花壇と、竹藪と、野菜畑とが附屬し、更に裏手には松山が附屬し、表には小道を隔てて小松原が附屬してゐた。近處の家屋敷も大體皆、さういつた風な烏の巣であつた。

三　歴史上の事跡

所で、私の幼い目が、この豐津の家を中心として、四方の空間を見渡した時、先づ西南の正面に、高い彦山の二つの峰が重なりあつて聳えてゐる。そして其の右左に、種々樣々の形をした遠近の山々、——中には人間が尻をまくつて見せて居る樣なのがあつたりして、——それが紺碧の色に連續重疊して、三角形に私の眼界を限つてゐた。總て陸地といふのは、必ずこんな風に、三方に山があつて、一方だけが海に開けてゐるものだと、幼い私は思ひこんでゐたらしい。私が初めて東京に出た時、どちらを向いても山といふ物が無いので、何だか締めくゝりのない、或は落ちつきのないと云つた樣な、不安らしい氣持を感じた事がある。

何しろ私に取つては、この三角形の眼界が自分の天地であつた。そして此の天地が樣々な歴史上の事跡を私に教へた。先づ神代の遺跡として、祓川の川口に『今井の祇園樣』と稱する神社がある。これはスサノヲの尊を祀つたもので、其の毎年の夏祭には、私等はいつもそこで、たらふく飴を食ふ事を樂しみにしてゐた。

次には等覺寺山の青龍窟がある。これは彦山の右翼の右端に聳えた高山の中腹に在る。其の高山は頂上が一里四方の平野になつてゐる事を以て有名な平峽野山である。或る國自慢の國學者は、この平峽野が高天原であることを論證して、『神代帝都考』といふ著述を爲し、以て大いに豐前國の國威を宣揚しようとした事がある。私はまさかそれ程の愛國者ではないが、それでも矢張り、平峽野の一里四方に秋草の咲きさかつた時などを想像して見るくらゐのアコガレを有してゐる。從つて文章上、可なりの脇道をしながら、平峽野の事を記す氣にもなつたのである。扨この平峽野の一里四方は、豐津から眺めた處、すこし右の方に傾斜して面白い恰好になつてゐる。そして其の左の一角の高く隆起した處を、龍が鼻と呼びなしてゐるが、等覺寺山は即ち其の龍が鼻の下の方に在る。そこで其の等覺寺山の青龍窟とは抑々何かと云ふに、昔そこに土蜘蛛が住んでゐて、景行天皇に誅伐されたと云はれる處である。私は其の窟の中で初めて鍾乳石といふ物を見た。

景行天皇の熊襲征伐の時、我が豐前の國は畏くも行在所であつた。京都郡といふ郡名も其の爲であり、御所が谷といふ地名も或る山間に殘つてゐる。又、築上郡の傳法寺村には天皇御手植と稱される楠の木が殘つてゐる。それは現に、日本有數の大樹として珍重されてゐるのださうだ。私はそれの見物に行つた時、五人か七人かの少年が手をつないで、やつと其の木を取り卷いた事を覺えてゐる。次には國分寺がある。これは豐津の直ぐ隣り村で、昔そこに國府の在つた事を思ひ、又聖武天皇云々の事を思ふと、何だか頻りに其の邊の土地が尊い樣に感ぜられるのであつた。次には椎田の濱の宮があ

る。こゝは菅原の道眞公が筑紫に流された時、漂着した處で、綱敷天神として祀られてある。其の頃の少年の間には、月の二十五日に天神講と云ふを催して、鬮書の競爭をする習慣があつた。次には平家蟹、平家の絲卷などいふ傳說がある。前者は、壇の浦で滅亡した平家の人々の怨みの相が、蟹の面に現はれたと云ふのである。如何にも、目を釣り、齒を食ひしばつた面影が見えてゐる。絲卷と云ふのは『入手』の事だが、さうすると之は、入水した女官達の化身ででもあらうか。我々少年は、馬刀貝の事を平家のちんぼとさへ呼んでゐた。

最後に戰國時代の事跡が色々ある。彥山の左翼の山々の間に『城の鄕』といふ處がある。そこは宇都宮公綱の居城であつたが、公綱が中津の黑田孝高にたばかられて、釣天井で殺され、其の爲に落城した彥山右翼の一部に馬ケ嶽と云ふがある。これは犀川のほとりにあつて、豐津からは最も近い、從つて私に取つては最も親しい山である。殊に山の形に、名に負ふ馬の駈けるが如き趣きがあり、ところ／＼斑に禿げたのも面白く、頂上のそぎ落した樣に見えてゐる城趾に、五六本松の村立のあるのが、誠に好い眺めであつた。（但し其の松はいつの頃か落雷に遭つて、今は一本もないと聞いてゐる。）此の山城は秀吉の九州征伐の時に落されたので、其の間道の水の手を寄手に知らせた百姓の家には、その後、代々片輪者ばかり生れるといふ話がある。その外、彥山左翼の香春嶽、障子が嶽など、皆な秀吉に落された山城である。私は友達と三四人連で馬ケ嶽に登つた時、其の村立の松の下から四邊の眺望を恣しいまゝにしながら、意氣豪壯、皆で盛んに詩吟をやつた事を覺えてゐる。而も其の詩吟の中に『大風起つて雲飛揚す』と一句のあつた事を、殊に明かに覺えてゐる。

かういふ歷史を經て來た豐前の國の人物と山川との間に、德川幕府の初年、小笠原氏が其の家來を率ゐて信州から移つて來た。堺家は小臣ながら信州以來の古い御家來なのだから、私は血統上、本當の九州人では無い筈である。然し數代の婚姻中には、いつか必ず色々の血が混入してゐるに相違ない。だから私は矢張、信州の武士の子孫である以外に、スサノヲ族の子孫でもあり、土蜘蛛の子孫でもあり、――の子孫でもあり、菅公および平家の子孫でもあり、處々の山城の武士達の子孫でもあると信じてゐる。又、血統の事は假りに別としても、私はかういふ歷史上の事跡を伴ふ山川草木からして、直接に種々雜多の感化を與へられた結果、そこに豐前人としての深い愛鄕心が兆してゐるのだと思ふ。

四　小士族の日常生活

扨、かうした歷史的の天地に於ける、傳說的の故鄕に於ける、松原の間の鳥の巢に於ける、小士族の日常生活から記して見る。

朝起きると、父は井戶端か畑の脇かに立つて、朝日に向ひ、かしは手を打つて禮拜した。それから藁の莖を折りまげて、それに鹽をつけて齒を磨いた。父の齒は白かつた。母は臺所で燧石をカチ／＼云はせてゐた。燧石の事は、今の若い人は知らないだらう。左の手に白い燧石のかけらを持ち、それにパンヤといふ、黑い綿屑の樣な、導火物を持ち添へ、そして右の手に持つた打金で其の石をカチ／＼カチ／＼と叩くと、赤い幽かな火の粉が飛び散つて、それがパンヤに移る。さうすると今度は、ツケギ（薄い長方形の木片の片端に硫黃をつけた物）でパンヤの火を燃えつかせる。それから其のツケギの火を竈の下の枯松葉につける。それが當時の、火を拵へる方法であつた。程なくマッチといふ便

利な物が輸入されて、初はスリッツケギ、或は唐人ツケギと呼ばれてゐた。

夜になると、行燈がとぼされた。丸行燈は臨時の座敷用で、角行燈が每晩の臺所用であつた。夫れ行燈とは、丸い、或は四角な、木のワクを白紙で張つて、其の內部に眞鍮か何かの皿を釣るし(或は据ゑつけ)、その皿に種油を入れ、その油に燈心の幾筋かを浸し、その燈心に火をとぼすのである。私等は其の角行燈のまはりで大きな字の本を讀んだりした。母は其のそばで針仕事をしたりした。行燈の紙の針の穴が模樣のやうに見えてゐたのが、今でも目に殘つてゐる。母は又よく行燈のそばでブーン〱と絲挽車を廻してゐた。これが又說明を要するだらう。夫れ絲挽車とは、――これを行燈の場合の如く、正確に說明する事は容易でないが、――先づ木製の臺があつて、それに竹製の輪車が取りつけられ、其の輪車と、別に左手にしつらへてある細い金屬製の錘との間に、調べ絲が掛けられてある。それから別に拵へてある綿のシノ(細長い管の樣な形の物)を左の手に持つて其の錘に輕くあてがひ、そして右の手で其の輪車の柄を廻すと、錘が迅速に廻轉するので綿の先がそれに卷きつく、そこで左の手を遠く左に延ばしながら綿のシノを輕く引くと、自然にそれが細い絲になる。私には今、精密な記憶が無いし、又その當時でも、精密には其の器械的作用を理解してゐなかつたのだから、こゝに十分な說明は出來かねるが、何しろブーン、ブーン、ブーンと車が廻されると同時に、母の左の手にズン〱ズン〱と絲が長く延びて行き、そしてそれが手の屆くだけ延び切つた處で、チョット車の回轉を戾すと、今度は忽ち其の延びた絲がクル〱〱と錘に卷きついて行くのが、如何にも面白く眺められてゐた。私は折々シノ作りの手傳ひをした。それは、一升桝を俯伏せにして置いて、左の手に箸を一本持つて其の上に置き、好い加減に千切つてある綿を取つて其の箸に當てがひ、それを右の手でゴロ〱と前後にころがし、そして其の箸を拔くと、前に云つた樣な、細長い綿の管が出來るのである。私は極めて不器用な生れつきであつたが、さうした簡單な作業だけは辛うじて出來るのを、母が笑ひながら譽めてゐた。

食事の時は、親子兄弟が銘々に小さい箱膳を控へてゐた。父の膳だけは抽出しが附いたりして、特に少し大きく、一番弟の私のは一番小さかつた。銘々が箱の中から茶碗と皿と箸を取り出し、仰向にした蓋の上に並べると、母が御飯とおかずを盛つてくれる事は、今日と變りがない。然しおかずは、朝は大抵、漬物ばかりであつた。蕪菜の葉の漬かり加減の奴に熱い飯を包んで食ふ時など、私等はそれを『蕪冠り』と呼んで嬉しがつてゐた。若し其の漬物の好きなのが無い時には、私はよく燒鹽をこさへて貰つた。茶碗の底に鹽を詰めて、其の上に炭火を載せ、暫らくしてポンと茶碗をはたくと、錢形の鹽の塊まりが落ちる。それが即ち燒鹽で、生鹽とは違ひ、既に一個のおかずになつてゐた。晝や晚には何か一品のおかずがあるが、それは大抵、味噌汁、湯豆腐くらゐの外 內の畑の野菜ばかりであつた 竹の子に唐豆(そら豆)などは、私の一番の好物であつた。魚を買ふ事は極めて稀で、折々口に入るのは雜魚か干鰯くらゐであつた。

五　正月と節分

次に正月の事を少し書いて見る。正月の準備は第一に餅つきで、餅つきは實に我々子供に取つて一年中の重大事件であつた。餅つきは每年、近處の村の百姓の若い者が組を作つて、士族屋敷を搗いて廻る習慣になつてゐたが、そ

れが私の家には、いつでも大抵、朝暗い中にやつて來るのであつた。ソラもう裏の中村で音がする、この次が向うの大池で、その次が內だと云ふので騷ぎはじめる。やがて暗がりの中に、どん／＼火の燃えてゐる竈を二つも三つも景氣よく擔いで來る。それだけでモウ子供等の氣分は緊張してしまふ。內では餅米を洗うて置くだけの準備がしてある。餅つきの人達は、直ぐに持つて來た竈と釜とこしきとで其の米をふかす。火の勢ひが盛んだから、譯なくこしきから湯氣が立登つて米がふかされる。すると人々は、直ぐにそれを臼の中に移す。寒い空氣の中に熱い湯氣が眞白にパッとあがる。臼の兩脇には二人の男が立ちはだかつてゐて、銘々に細長い杵を輕々と使つて、ホラサ、エンヤサと、其のふかした米を搗きにかゝる。今一人の外の男は、二つの杵の落ちて來る合間々々に、手をぬらしては臼の中を搔きまはす。其の早業が誠に見事な熟練で、それに伴ふ三人の間の掛聲の呼吸が又、ホラサ、エンヤサ、ドッコイ、エンヤサと云つた風に、子供の心を飛びあがらせるやうな快活さを感じさせる。やがて合の手の男が『ヨシ來た！』と云つた樣な掛聲を發すると二つの杵はピタリと止まつて、眞白い柔かい餅の塊まりが、つる／＼と臼の中から摑み出される。すると母は、白い粉を敷いた板の臺を緣側に置いて其の餅の塊まりを受取る。受取られた塊まりは直ぐに其の粉にまぶされて、片はしから小餅にちぎられる。それが又中々の早業である。其の小餅の恰好を直すくらゐの手傳は、我々子供もやらされた。其の間、父は何かの指圖をして、小餅が幾臼、のし餅が幾臼、外に豆入、青のり、東山などの味つけが幾臼、まだ其の外、ぼんせい、黍餅、粟餅などが幾臼と云つた風に、樣々の餅が出來あがる。餅つきの男たちは酢餅か何かで酒をあふつて、元氣よくドン／＼と歸つて行く。我々は先づ何は置いて、出來たてホヤホヤの牡丹餅を食ふ。

正月の第二の準備は、ユヅリ葉とモロムキ(裏白)とを取つて來る事で、それは我々子供の役目であつた。モロムキは何處にでも直ぐ近處の山にあるが、ユヅリ葉は滅多に無かつた。我々は每年それを宿見の山に取りに行つた。あの莖の赤い、肉の厚い、艷のよいユヅリ葉が無くては、正月が正月らしく感じられないのであつた。それでユヅリ葉とモロムキとが揃つて、輪かざりも拵へられ、大きな鏡が床の間に据ゑられ、その外、神棚、竈、臼などにも、それぞれ小さなお鏡が置かれると、スッカリ正月らしい氣分が浮んで來る。鴨居の上にある神棚の前に、二枚重ねの白紙が三並びも張られて、それが風に搖れてゐるのも、神々しく見えてゐた。

元日、二日、三日の雜煮のうまかつた事は云ふまでもない。雜煮と云つても、小倉風としては、只だ餅を柔かくゆでて、それに出し汁をかけ、青菜のゆでたのを添へ、花鰹を振りかけるだけの、極めて簡單なものであつたが、正式であることを信じ、又そのアッサリした味ひが眞の雜煮の味である事を疑はなかつた。そして我々子供は、めい／＼年の數だけ雜煮餅を食ふ事が原則になつてゐた。

正月の夜は誠にゆゝしいものであつた。ゆゆしいといふ古めかしい言葉でも使はないと、其の氣分が現はれない。私としては、清少納言あたりに眞似て、『いといみじ』とでも云ひたいくらゐである。先づ神棚に幾つかの燈明があげられる。私の子供心は其の煌々たる光に射ぬかれて、底の底まで淨化されるやうな氣持がした。それから床の間、竈、臼、井戸、便所など、家の內外數箇所にも燈明があげられる。但し此の燈明は、神棚のとは違つて、臨時の別製であ

る。即ち、大きな大根を一寸餘りの長さに切つて、其の片面を少しゑぐり取つて中をへこませ、そこに油をつぎ、燈心を入れ、そして火をとぼすのである。私は此の大根製の燈明を捧げ持つて、座敷に行き、竈に行き、臼に行き、便所に行つて、更に眞暗がりの中の井戸に行き、恭々しくそれを備へつけて來た時の、一種神祕な、莊嚴な感じを忘れる事ができない。又、臺所の室内に坐つて見まはす時、神棚の燈明を初として、座敷にも、竈にも、臼にも、到る處にキラキラとした光のあるのが、正にイルミネーションの感じであつた。

三日から十五日までの間、小豆粥、七草の粥、黄粉餅（あべ川）、煮入れ（汁粉など）、色々の餅の獻立が珍らしかつた。殊に小豆粥を木の股に塗りつけてあるくのが面白かつた。これは果物のよくみのるまじなひで、私等は茶碗に小豆粥を入れて左の手に持ち、右の手に箸を持つて、栗の木、柿の木、桃の木、梅の木、梨の木、枇杷の木などを歴訪して、「今年もようなつてくれいよ」と云ひながら、小豆粥の餅を少しづつ箸で千切つて、一々その木の股に捧げるのであつた。

節分の豆まきも面白い事の一つであつた。此の日には儀式として、ダラの木と、トベラの葉とが入用である。ダラと云ふのは、枝の一つもない、只だ一本の棒のやうな幹の先に、くしやくしやと葉のついてゐる木だが、其の幹の全面に恐ろしい刺が密生してゐるので、それが鬼はらひの役に立つわけだらう。儀式としては、其の幹を一寸づつくらゐに切つて、それを竹串に突きさして、家の出口入口にさして置くのである。トベラと云ふのは、臭い厭な匂ひのする木だが、其の葉を火で焚くと、パチ〳〵パチ〳〵と、爆竹のやうな音を立てる。其の音が矢張り鬼やらひの效を奏するわけだらう。所で、トベラの木は私の内の庭に一本あつたが、ダラの木は滅多にない。只だ一箇所、彦徳村の川岸にあつたので、私等は毎年そこへ切りに行つた。（此のダラの木を私は外の土地で見た事がなかつたが、ツイ先年、寶塚の道ばたに澤山はえてゐるのを見た。）で、ダラもトベラも私等の手で揃へた上で、母がいり豆を拵へてくれる。夕方になつて、私等が室内各處にそれを撒き、或は襖にはふりつけ、或は天井にブッつけて、例の『福ア内、鬼ヤ外』を怒鳴り散らす。それから夜になつて、皆で其の豆を拾ひ集め、めい〳〵に自分の年の數だけ紙に包み、其の紙包みでからだ中を撫でまはす。勿論、健康のまじなひだ。それで撫でまはしが濟むと、今度は其の紙包みを襟筋から背中へ入れて、尻から裾へストンと落す。それで厄が落ちるわけだらう。それから今度は、其の紙包みを皆な集めて、一年中使ひふるした火吹竹の中に詰め込む。そして其の火吹竹を棄てに行く。勿論それは私等子供の役だつたが、其の棄て方には面倒な條件があつた。第一、必ず四辻に棄てる事。第二、歸りに後ろを振向いてはならぬ事。私等は嚴重に此の條件を履行しつゝ、眞暗い四辻を跡にして脇目も振らず歸つて來るのであつた。

其の外、七夕の事、ちまきの事、大根引の事、芋掘の事など、書けば色々面白いと思ふ事もあるが省く。

六　私の父

私の覺えてゐる父は既に五十であつた。髪の毛などは既に稍や薄くなつてゐた樣に思ふ。『何さよ氣分に變りは無いのぢやがなア』などと、若やいだ樣な事を云うて居る事もあつたが、何しろ私の目には既に老人であつた。名は堺得司。

父の顏には可なり多く疱瘡の跡があつた。謂はゆるジャモクエであつた。然し其の顏立は尋

常で、寧ろ品のよい方であつた。體格は小柄で、而も痩せぎすであつた。サムラヒのたしなみとしては、劍術よりも多く柔術をやつたらしい。弓も少しは引いたらしい。喘息持でずゐぶん永く寢てゐる事もあつたが、ズット年を取つてからは直つてゐた。さういふ體質上、力わざは餘りしなかつたが、元來が器用なたちで、よく大工の眞似をやつてゐた。大工道具はすつかり揃つてゐて、棚を釣る、ひさしを拵へるくらゐの事は、人手を借らずにズン／＼やつてゐた。

學問は無い方の人で、四書の素讀くらゐはやつたのだらうが、つひぞ漢學なり國學なりの話をした事がなかつた。只だ俳諧は大ぶん熱心で、後には立机を許されて有竹庵眠雲宗匠になつてゐた。風俗文選などいふ本を態々東京から取寄せて、幾らか俳文をひねくつたりした事もあつた。碁も可なり好きだし、花もちよつと活けてゐた、私も自然、その三つの趣味を受けついでゐる。花の方は、別だん受けついだと云ふ程でもないが、「遠州流はどうもちつと拵へすぎた樣で厭ぢや。俺の流儀の池の坊の方が態とらしう無うてえゝ」といふ位の話を聞いてゐる。さういふ事は多少、私の處世上の教訓にもなつた樣な氣がする。碁について一つをかしい事がある。初めて私の家に碁盤が運びこまれた時、父はそれを餘所からの預かり物と云つてゐた。然し私等は、いつの頃からか、決してそれが預かり物でない事を知つてゐた。思ふに父は、私等に對して、望むだけの本など買つてやらないのだから、自分の娯樂の爲に金を費す事を遠慮したのだらう。然し私は、それについて何も云つた事は無いし、只むしろ父の遠慮に對して好い感情を持つて居た。

父の俳句に『夕立の來はなに土の臭ひかな』と云ふのがある。これなどは豐津の生活の實景で、初めてそれを聞いた時、子供心にもハハと思つた。豐津の原にはよく夕立が來た。暑い日の午後、毎日の樣に極つてサーッとやつて來るのが、如何にも好い氣持だつた。そして其の夕立の來はなに、大粒の奴がパラ／＼パラ／＼と地面を打つ時、涼氣がスウーッと催して來ると同時に、プーンと土の臭ひが我々の鼻を撲つのであつた。『かんざしの脚ではかるや雪の寸』などと云ふのも、私の子供心には別だん艶な景色とも思はず、只だ眼前の實景と感じてゐた。「百までも此の友達で花見たし」「菜の花や昔を問へば海の上」「日に立ちて春のふえるや柳原」など云ふのも覺えてゐる。系統としては美濃派だとか、支考派だとか云つてゐた。然し父の主張としては、「俺はもげた句が好きぢや」と云つてゐた、もげたとは奇拔を意味する。ついでに少し後の事だが、私は或る時、父から俳句で叱られた、「我が顏の皺を見て置け年の暮」これには實際ギクリと參つた。

これも後に、『明月や疊の上の松の影』といふ古人の句を初めて見た時、成るほどハハアと、私は心の中で手を打つた。曾て其の通りの景色が豐津の家にあつた。そしてそんな時、火を消して其の月影の間に寢ころぶと云つた樣な趣味を、自然に父から養はれてゐたのであつた。

然し父の最も得意とする所は、野菜つくりであつた。私が今、私の少年時代に於ける父の姿をしのぶ時、それは炬燵にあたつてゐる姿か、さもなくば畑いぢりの姿である。殊に、越中褌一つで、其の前ごをキチンと三角にして、すつぱだかで菜園の中に立つてゐる姿が、今も私の目の前に浮ぶ。五日に一度くらゐ働きにくる小六といふ若い百姓男を相手にして、父は有らゆる野菜物を作つてゐた。大根、櫻島、蕪菜、朝鮮芋(さつま芋)、荒芋(里芋)、豌豆、唐豆(そら豆)、あづき、さゝげ、大豆、なた豆、何んでもあつた。茄子、ぼうぶら(かぼち

や、人參、牛蒡、瓜、黃瓜など、固よりあつた。蕗もあり、めうがもあり、唐黍（唐もろこし）もあり、葱もあり、ちしやもあり、らつきよもあつた。

殊に水瓜は父の誇りであつた。あの大きな丸い奴が、或は青く、或は白く、朝の畑に露を帶びて轉がつてゐるのを、私はよく父の尻について檢分に廻つたものだ。苗の時から、花落ちの時から、いろ〳〵苦心して育てた奴が、一日々々に膨大して、たうとうこゝまで、一貫目以上もあらうと云ふ處まで大きくなつたのだから、父が上機嫌で破顏微笑するのも無理はない。私としても、蟲取の時から父の助手を勤めてゐるのだから、幾分か成功の光榮を分有する權利があるわけであつた。蟲取の時には、粘土を水でネバ〳〵にした奴を茶碗に入れて置いて、葉莖や若芽にとまつてゐる黑い小さい蟲を見つけては、其ネバ〳〵を附けた箸の先で、ソツト苗にさはらない樣にして取るのだつた。それから花落ちの時には、ツケギで立札をして、其の月日を記しておくのだから、凡そ何日間であつたか、それは忘れたけれども、大體成熟の日取になつて、父が小首を傾けながら爪の先で彈いて見る。コン〳〵カン〳〵と云ふやうな響の出る間は、まだ少し早い。『もうアサッテかシアサッテぢやらう』と云ひながら、毎日彈いてゐる中、少しボト〳〵といふ音がして來る。サアもうしめたと云ふので、それをちぎる。大抵の場合、私の主張は父の意見に依つて一日二日延ばされるのであつた。扨それからが大變で、それを食ふ日時が容易に決定されない。アシタにせよとか、アサッテにせよとか、毎日食うては惡いとかいふ親達の意見に依つて、兎かく私等の即時斷行說が阻止される。それからいよ〳〵日時が決定されると、其日の早朝、或は前夜、其の水瓜を細引でしばつて井につける。午後になつて、私等が學校から戻つて來ると、其の冷えきつた水瓜が井から引上げられて、先づ母の庖刀で眞二つに切られる。グウ、グウといふ音がして庖刀が水瓜の胴體に食ひこんで行く時、果してそれの赤いか否か一刻も早く見究めようとして、私等が息を殺して覗きこむ。『オ！赤いぞな！』と母が先づ希望の叫びを揚げる。やがてグウ〳〵、ザク〳〵と、其の胴體が二個の半球に切り割かれた時、『ほら！見事ぢやなう！』と父がサモ嬉しさうな感嘆の聲を發する。其の中、半球が更に二つに割かれて、ザクリ、ザクリ、赤い山形が續々と切り出される。私等は物をも云はずに、行きなりそれにかじりつくのであつた。只一つ私の不滿に堪らないのは、父母が馬鹿に念を入れた、腹下しの用心からして、つひぞ一度も、思ふ存分、食はせて吳れなかつた事である。

水瓜について一つをかしい話がある。お隣り――と云つても、裏の松山の間の小道を二十間ばかりも行つた處だが――其のお隣りの中村といふ家では、どういふものか水瓜を作らない。『あそこの嫁御は水瓜が大好ぢやちふのに一度も食べんで氣の毒ざや』と云ふので、或日の水瓜切りの時、母が其の嫁嬢を呼んで來た。嫁嬢は大喜びで散々食べて行つた。所が、其の嫁嬢、丁度臨月であつたのだが、其の晩、急に產氣がついた。サア私の內では大心配をした。水瓜が當つたのではあるまいか。若しかさうだとすると申譯がない。餘計の事をせねば好かつた！　殊に母は、氣が氣でなく騷いでゐた。然しお產は幸ひに無事で、好い女の子が生れたので、水瓜は却つて手柄をした。

父は又、野菜作りばかりでなく、屋敷內に竹林を作り、果樹をふやし、花物を植ゑつけ、接穗をするなど、いろ〳〵計畫を立てて實行した。茶の木も少しあつた。煙草の少し作られた事も

あつた。蓮池の計畫もあつたが、これは實現されなかつた。珍らしい物としては、甘茶の木だの、三叉の木などがあつた。桑の木の事は後に記す。

父は煙草も好き、酒も好きだつた。晩酌の一合ばかりを、い、い、ちしやの葉に味噌をくるんで頰ばつたりしながら、ちび〳〵やるのが餘程の樂しみであつたらしい。いよ〳〵飯の菜や酒の肴のない時には、い、い、いたら貝か何かに菜漬を入れて、鰹節を少し振りかけて煮るのが父の發明で、それを『煮菜』と呼んでゐた。『只の香物でも、かうして煮ると皆好くけえ、これは煮菜ぢやなうて煮ずきぢや』などと云つて面白がつてゐた。

父は律儀な人であり、正直な人であり、キチンとした小心の人であつた。そして多くの場合、機嫌の好い人であつたが、どうかすると可なり不機嫌の時もあつた。私としては、或る時、意外な事で叱られた事がある。それは、私より二つばかり年上の、少し裕福な家の友達が詩を作つてゐるのを見て、私も眞似したくなつて、たしかそれに關する雜誌が買ひたいとか何とか云ひだした處が、そんな事を見習ふほどなら、あんな友達とつきあふのをやめてしまへと、散々にきめつけられた。私としては、金が無いから買つてやれぬと云はれるのなら、少しも不平など起さぬ積りであつたが、友達とつきあふなと云はれたのが不平で堪らなかつた。然し父は其の後、東京に行つてゐる兄の處に云つてやつて、『作詩自在』といふ小さい本を取寄せてくれた。私は又、その事件のつゞきであつたかどうかは忘れたが、その頃、父から横面を平手で烈しくぶたれた事がある。私が餘ほど惡たれた事でも云つたからであらうが、私としては、悔しくて悔しくて、ずゐぶん永いあひだ泣いた樣に思ふ。そして一生涯、其の不愉快の感じが幾らか殘つてゐた。

又、私は父に對して斯ういふ滑稽な不平を持つてゐた。私は犬が好きで、途中で犬に會ふと、口笛を吹いてやつたり、頭を撫でてやつたりして、仲好しになつてしまふ。そして結局、内まで連れて歸つて來る。處が、せつかく内までついて來た奴に對して、何等の愛嬌をする事が私には出來ない。私はそれが堪らんほどつらい。私としては、餅の一片なり、飯の一塊まりなり食はせてやりたい。然しそれは父から禁じられてゐた。そんな癖をつけると、いつか其の犬が内の犬になつてしまうて困る、と云ふのであつた。貧乏士族の生活としては、犬一疋の食料も問題であつたに相違ない。だから私も勿論、犬を飼はうとは云はない。又必ずしも毎度飯をやらうとは云はない。そこで私は父と協定して、犬のお客のあつた時には糠を一にぎりだけやる事にしてゐた。所が、それすらも父は餘り喜ばなかつた。思ふに父は、糠一にぎりを惜しんだわけではなく、犬の愛に溺れさうな傾きのある私の性情を危んだのだらう。然し父も、毎晩の食事時に必ずやつて來る習慣になつてゐた隣家の犬に對しては、黑、黑と云つて、鰯の頭など投げてやつてゐた。

然し私は又、深く父の寛大に感じてゐる事がある。或る時、私の家に東京の親類から『鶴の子』といふ結構な菓子の箱が送られて來た。一つだけ貰つて食つた時、おそろしくうまかつた。その後も欲しくて堪らないが、中々貰へない。あんな結構な物をムザ〳〵食ふものではないと云つて、父はそれを部屋の高い棚に上げてしまつた。それから幾日たつた後の事か知らんが、父も母も何處かに行つて、私ひとり内に居た。フト惡心を起して、踏臺を持つて來て棚の上の鶴の子を取つた。勿論たつた一つだつた。露見するかどうかと窺つてゐたが、誰も何んとも云はない。さうかうする中に、又機會があつ

て一つ取つた。たうとう三つ取り、四つ取り、五つ取つた。もういよ／＼露見しない筈がない。幾ら年寄がぼんやりでも、五つも不足してるのに氣のつかん筈がない。困つた、困つたと思ひながら、又幾日も幾日も過ぎたが遂に誰も何んとも云はなかつた。結局、その事はそれきりで、年寄などといふ者は隨分馬鹿な者だくらゐに考へてゐた。そして、ズット後になつて、私が自分の淺はかさに思ひ當つて、今さら冷たい汗を流したのは、父も母も亡くなつてしまつてからの事だつた。

今一つ、私は父の机の抽出しから一圓紙幣を盜んだ事がある。その頃の一圓は少なくとも今の十圓の値打があつた。子供としては大金であつた。私は直ぐにそれを持つて町に行き、新店といふ店で、唐紙と白紙をたくさん買つた。たくさんと云つても五錢か十錢かだつたらう。そして釣がないからと云ふので、代は拂はずに歸つた。唐紙と白紙を買つたのは、その頃、少し文人風の書畫の眞似をやりかけて居たからであつた。所が二三日後の或日、母が私を連れて屋敷内を歩いてゐた。何か母が私に云ひたい事があるのだと直感された。私は非常におそろしくなつた。然し母の態度は平生よりも柔しかつた。竹藪の片わきの、梨の木の下に來た時、母はいよ／＼口を切つた。『利さん、ひよつとお前は――』サア來たと私は思つた。然し母は非常に柔しく、非常に遠慮がちに、『ひよつと』『ひよつと』を繰返して、さうならさうで仕方がない、決して叱りはせぬから、兎にかく素直にそれを出してくれと云つた。私は非常な慚愧を感じて、一も二もなく兜をぬいだ。父はそれについて、遂に一言も云はなかつた。

ついでに今一つ私の盜みを書きつけて置く。その頃、錦町の或る小間物店で、私は人のそばで遊んでゐる樣な振をして、柄のついた小さい蟲眼鏡を一つ盜み取つた。それを通して物を見ると、何んでも素晴らしく大きく見えたので、面白くて仕樣がなかつた。然しそれを友達に見せて自慢する事も、一緒に面白がる事も出來ないのが、非常に殘念だつた。同時に、若しか露見しやせぬかといふ恐怖が盛んに起つて來た。もうさうなると、只それを持つてる事だけが大變な苦勞で、毎日々々どうしたものかと心配してゐた。いつそ元の處に持つて行つて返さうと決心した。然し氣がつかれない樣に返すといふ事が亦た大變だつた。さうかうする中、幸ひな事には、或日何處かでその蟲眼鏡を落してしまつた。それを落したと氣がついた時、私は實にホツトして安心した。

七　私の母

私の母、名は琴、志津野氏、父より二つの年下で、父に取つては後添であつた。父の初の妻は小石氏で、私の長兄平太郎を殘して死んだ。其あとに私の母が來て、私の次兄乙槌と私とを生んだ。私の母が私を生んだのが四十二歲の時、兄を生んだのが三十八歲の時だつた筈だから、思ふに母は三十六七歲の時、堺家にとついだものだらう。

斯樣に母はずゐぶんの晚婚であつた。それには理由がある。尤も、そんな事は、私が大人になつてから獨りで自然に考へついた事で、誰に話を聞いたのでもなく、又少年の頃は全く何の氣もつかずに居た事である。母は甚だしいジャモクエであつた。その頃の人としては、『キンカ上品、ジャモ柔和』といふコトワザがあつた位で、一通りのジャモなら、一向問題にならなかつたのだが、母のジャモは可なりひどかつた。鼻の穴が片方は殆んど塞つて居り、鼻筋は全く平らに押しつぶされてゐた。女としてさういふ顏容になつた以上、先づ嫁入りは六かしい筈

である。只、私の父が女房に死なれて貧乏世帯に子供をかゝへて當惑した時、そこに略ぼ雙方の境遇が平均したものと考へられる。その外にどういふ事情があつたのか、私は少しも知らない。何んにもせよ、母の晩婚の理由がその容貌上の大弱點にあつた事は確かだと思ふ。然し、さういふ差引勘用の結婚が必ずしも夫婦の愛を害するものではなかつた。又さういふ見苦しい晩婚の女の腹から、二人の立派な（！　男の子が生れるのに、何等の差支がなかつた。又その生れた子供は、母に懐き、母にすがり、母を慕ひ、母を愛するのに、其の母の醜い容貌が何等の妨げにもならなかつた。實際、醜いと感じた事すらなかつた。

然しかういふ事があつた。或日、私が鳥わなの見廻りか何かに行つて來ると、内には母が只つた一人で炬燵にあたつてゐた。其の顔が餘程變に、私に見えた。白毛まじりの髪が亂れかゝつてゐる處など、物凄いやうな氣がした。若しかこれが、狸か何かが來て母を喰ひ殺して、其の代りに化けてゐるのではないかと、私は思つた。然し母がやがて笑ひを含んで話しはじめると、「そんな怪しみなど勿論すぐ消えてしまつた。私としては、若い美しい母などといふものは、つひぞ考へた事もなかつた。

母は平假名以外、殆んど文字といふものを書いた事がなかつた。然し耳學問は可成りに出來てゐた。里方の志津野家が少し學問系統の家であつたのと、三十幾つまで『行かず後家』の境遇にあつたのとの爲だらう、淨瑠璃とか、草艸紙とか、軍談とか云ふ樣な物には、大ぶん聞きかじりで通じてゐた。私等を教訓する時、よく淨瑠璃の文句が引き言にされてゐた。さういふ意味から云へば、私等は、父の方よりも、母の方からヨリ多く教育されてゐた。

母は又、憐みぶかい性質であつた。折々門に來て立つ乞食のたぐひなどに對して、いつも溫い言葉をかけてゐた。猫を可愛がる事も、私は母から教へられた樣な氣がした。母は不器用なたちで、風流と云つたやうな、氣のきいた點は少しも無かつたが、それでゐて自然の美に對する素朴なアコガレを持つてゐた。例へば、活花などといふ物に對しては、母は殆んど何の感興をも持つてゐなかつた樣だが、山や川などに對しては、『おゝえゝ景色ぢやなア』などと、覺えず感嘆の叫びを發したりする事があつた。そして、私は、母の感嘆の叫びに依つて、自分の目が開いたやうな氣がしてゐた。

母は又、すこしばかり和歌をやつてゐた。これは只、里方に於ける周圍から自然に養はれた事で、母にさういふ才能があつたとは思はれない。然し、父の俳句と、母の和歌とが、私の家庭に於ける一つの面白い對立であつた。或時など、母が俳諧味の取りとめなきを指摘すると、父は和歌に面白味のない事を非難するといふ、文藝的論爭が起つた事がある。

それから父は、俳諧の歌仙（つけあひ）の實例を擧げて、其の幽かな心持や面白味を懇々と說き立てたが、母にはたうとう何の事やら分らなかつたらしい。お蔭で私には初めて少し『つけあひ』といふものの味ひが分つた。然し又かういふ事もあつた。維新の際、小倉藩の志士何某が京都で讀んだといふ和歌に、『幾十度加茂の川瀬にさらすとも、柳は元の綠なりけり』といふのがあつた。所が和歌の先生は、上の句の『とも』に對して、下の句の結びは『なるらん』でなければ法に合はぬと云つて、左樣に添削したが、作者自身としては、たとひ將來のことは云へ、少しも疑ひのない堅い決心であるから、『なるらん』などといふ生ぬるい言葉はいさぎよくないと云つて、飽くまで『なりけり』を固持してゐた。父と母とが此の話をしあつた時、二人の意

見は全く一致して、深く作者の意見に同感してゐた。
　父と母とが面白くないと云ふよりは寧ろ滑稽な言ひ爭ひをしてゐたのを一つ覺えてゐる。母も煙草が好きで、よく長煙管でスパ〳〵やつてゐたが、例の不器用なたちとして、其の火皿に刻みを詰める時、指先でそれを丸める事が足りないので、長い刻みの尾が煙管の先にぶらさがつてゐる事が毎度であつた。或る時、父はそれを見るに堪へなかつたのだらう、如何にも憎々しさうな、嚙んで吐き出す樣な口調で、其のだらしなさを罵倒した。すると母もムッとして、それが自分の生れつきである事、五十年來の習慣である事、今さらそれを非難されても仕方のない事などを、すねた言葉でブツ〳〵と返答した。此の爭ひに對しては、私は子供心にも、深く南方に同情した。
　或年の春、つゝじの花の盛りの頃、裏の山の裾にござを敷いて、そこに夕めしのお膳を持ちだし、母の自慢のゑんどうまゝで、父は例の一合を樂しみつゝ、つゝじ見の小宴を催した事がある。それらは父がアヂをやるのであるか、それとも母の思ひつきであつたのか知らないが、兎にかく私には嬉しい一家の親しみであつた。
　又、父と母とは、ジャモクエの年寄夫婦にも似ず――私は無邪氣な年寄夫婦らしくと云つた方が却つていゝかも知れぬが――或時など、木箱に竹の棒を突きさして、それに紙を張り、絲をつけて、三味線のおもちやを拵へて見たりしてゐた。然し其のおもちやでは滿足が出來なかつたと見えて、後にはお隣りから本物を借りて來て、二人でツン〳〵云はせてゐた事もある。其の歌、「高い山から谷底見れば」「摺り鉢を伏せて眺めりや三國一の」などは敢て奇とするに足りないが、「芝になりたや箱根の芝に、諸國諸大名の敷き芝に、ノンノコセイセイ」「コチャエ、コチャエは今はやる、若い衆が、提灯雪駄でうとてゆく」などの古色に至つては、蓋し讀者の一粲を博するに足りるだらう。
　母は滅多に外出しなかつたので、たまに前の山に千振摘などに行く時、私等はそれを大變な珍らしい事の樣にして、其のあとについて行つた。母は千振を摘んでは蔭干にして置いて、毎朝それを茶の中に振りだして飮むのであつた。千べん振つてもまだ苦いと云ふのが恐らく其の名の出處であらう。私もいつか其の眞似をして、あの苦い味ひを、何か少し尊い物の樣に思つてゐた。後に私が人生の或る事件を批評する時、「苦味」といふ言葉を用ひた事があるが、それは千振の味に思ひ寄せたのであつた。又千振といふ草のツイ〳〵と立つてゐる姿、あのさゝやかな白い花の形などが、何とも云はれぬしをらしさを私に感じさせた。そして、それも恐らく、母から開かせられた目の働きであつたらうと思ふ。
　或日、母が珍らしく裏の山にナバ(茸)を取りに出た。兄と私とが嬉しがつて其の前後に飛びまはつた。すると猫も跡からやつて來て、手頃に高い松の木に駈けあがつたりした。「猫までが子供と一しよに湧きあがる!」と、母は面白さうに其の姿を眺めてゐた。湧きあがるとは、好い氣になつてふざけ散らすと云つた樣な意味。私は、前にも云つた通り、母に敎へられて大の猫好きであつたが、母が毎度話して聞かせた所に依ると、私の幼い頃、キヂといふ猫が居て、それが若樣に對する老僕と云つた樣な格で、一度私の手に掛ると、丸で死んだ樣になつて、叩かれようと、摑まれようと、引きずられようと、自由自在になつてゐた。然し次の猫は、それほどのおもちやにならなかつた。彼は冬になると、私の寢床で寢るよりも、母の寢床に寢る事を選んだ。けれども、私が是非とも彼を抱い

て寢る事を主張するので、母はいつも、彼を連れて來て私の寢床に入れて、蒲團の外から叩きつけるのであつた。すると彼も往生して、私の寢入るまでヂットそこで我慢し、あとでソウットト母の方に行くのであつた。

母は又、觀音樣信仰で、毎晩お燈明をあげては、口の中で觀音經か何かを誦しながら拜んでゐた。そして毎月十七日の晩には、必ず錦町の觀音堂に參つた。私も必ず其お供をした。その晩、觀音堂では、三十三體の觀音樣に一々燈明を供へて、如何にも有難さうに見えてゐた。私は、（後に記す通り）佛教に對しては餘り同情を持たなかつたが、母の故を以て觀音樣は少し好きだつた。

今一つ母についての思ひ出。これは餘ほどまだ私の小さい時の事。私が炬燵の中で、――母と私とが一緒に寢る廣い寢床の中で――目をさますと、母は既に起き出でて竈の前で飯を炊いてゐた。私が何か云ふと、「起きたかな、お目ざましをあげう」と云つて母は竈の熱灰の中に埋めて置いた朝鮮芋を取り出して、其の皮をむいて持つて來て呉れた。黄色い美しい芋の肉から白い湯氣がポカ／＼と立つてゐた。どうして、こんな光景が、特に私の記憶に殘つてゐるのか分らないが、恐らく其の蒸し燒の芋の味が特別にうまかつたのだらう。

今一つ、これは私が母に對する唯一の反感。或る時、私が何かの事で、さん／＼母にグヅつてゐた。母も大ぶん怒つて私を叱つてゐた。すると、母は丁度お膳ごしらへをしてゐたのだが、とつぜん醬油つぎを引つくりかへした。赤黑い醬油がたくさん疊の上にこぼれた。母は慌ててそれをツケギで掬ひ取るやら、其のあとを雜巾で拭くやら（恐らく父に內證にするため、大急ぎで）してゐたが、『こんな事になるのも、お前があんまり云ふ事を聞かんからぢや』と又私を叱りつけた。私は非常に不平だつた。私が云ふ事を聞かんのは惡いだらう。然し、醬油つぎを引つくりかへしたのは正に母のそさうである。自分のそさうの責任を私に塗りつけるのはひどい。私はそんな意味で大いに憤慨した。我が尊信する母、我が敬愛する母と雖も、腹立ちまぎれには、矢つ張りこんな事を云ふのかと。

考へて見るに、私は父と母とから、丁度半々づつくらゐ性質を遺傳したらしい。體質の方では、父も小さいし、母も小さいし、そして私も小さいのだから、文句はない。然し、私が小さいながら稍や頑丈な處があるのは、母の方から來たのかとも思ふ。母は弱いといふ方では無かつたが、母の弟たる「志津野のをぢさん」などは、ずゐぶん大きな、しつかりした體格であつた。性質の方では、私に多少の才氣があるのは父の方から來たのであり、幾らか學問好きで、そして少しゆつくりした樣な處があるのは、母の方から來たのだと思はれる。私は大體に於いて善良な正直な男だと信じてゐるが、それは正に父母兩方から來てゐる。若し私に、けちくさい、氣の小さい、小事にアクセクするといふ處が著しく現はれてゐるとするなら、それは父の方からの缺點である。若し又私に、不器用な、不活潑な、優柔不斷な處が大いに存在してゐるとするならば、それは母の方からの弱點である。

母の家には昔大きな蜜柑の木があつたが、その蜜柑が熟する頃になると、母の父（即ち私の祖父）は、近處の子供を大ぜい集めて、自分は蜜柑の木の上に登つて、そこから蜜柑をちぎつては投げ、ちぎつては投げ、そして子供が喜ぶのを見て面白がつてゐた。私はそんな話を、花咲爺の昔話と同じ樣に聞いてゐたのだが、又どこやらに只の昔話とは違つて、自分の祖父に

そんな面白い人があつたといふ誇りを感ずる點があつた樣に思ふ。

父方の祖父については、私は何の知る所もない。思ふにそれは、祖父が早く死んだので、幾許も父の記憶に殘つてゐなかつた爲だらう。父方の祖母は可なりシッカリした婦人であつたらしい。早く夫に別れて、年の行かぬ二人の子供を守り立てて行つたのは、容易な事でなかつたらう。その頃、江戸に行つてゐた私の父に對して、國元の祖母から送つた手紙が一通、私の手に殘つてゐるが、其の筆跡も中々達者だし、文句もずゐぶんシッカリしてゐる。又、祖母の妹（私の父の叔母、私の大叔母）は、私もよく知つてゐたが、これが中々只の女でなかつた。偏屈者、やかまし屋として、あちこちで邪魔にされた場合もあつた樣だが、私から見ると、ずゐぶん面白い所のある、好いをばさんであつた。この人が大阪から私の父によこした手紙が殘つてゐるが、『黄粉が食ひたうても臼がなうてひけぬ、今度來るなら臼を持つて來ておくれ、うんちんはおれが出す』と云つた調子である。明治二十二年に、八十に近いお婆さんが、大膽な言文一致體で手紙を書いてゐたのである。これらの事も、私に取つては、確かに多少の誇りであつた。

八　私の兄

長兄平太郎、これは私より十五の年長で、私に物心のついた頃には、モウ二十歳以上の大人であつた。私は彼に對して、自分と同列の子供といふ感じは持てなかつた。彼は『大けいアンニャアさん』として、私等とは時代の異なる人物であつた。彼と私等と、母を異にしてゐるといふ事を、いつ私が知つたのか、その覺えは少しもないが、兎にかく彼と私等とは何となく兄弟としての親しみが十分深くなかつた樣に思ふ。

それには氣風の違ひといふ事もあつたか知れない。彼は色の白い小男で、丸々と善くふとつてゐた。そして濃い髭を青々と剃つてゐた。小心で正直で、律儀で、キチャウメンな事は、よく父に似てゐた。學問とか文藝とかいふ方面は、殆んど彼に無かつた。それに比べると、色の淺黒い、少し野性のある、學問文藝を嗜む二人の弟は、大ぶん違つた柄であつた。小石のをぢさんといふ人がいつか私の内に來た時、私は其の大きい目と、丸い額とが、よく『大けいアンニャアさん』に似てゐると思つた。然し私等は長兄に對して少しも惡い感じなど持つてゐるのでは無かつた。母と兄との間柄も、繼母繼子らしい厭な所は少しもなかつた。

兄は早くから（多分明治十年頃）東京に出た。親戚の間宮のをぢさんが陸軍の會計吏をして居るのをたよつて、陸軍十六等出仕といふものになつたりしてゐた。それがどういふわけか、明治十五年頃には、國に歸つて來た。思ふに、長男として、家事を視るの責任を持たされたのだらう。其の時の事を私はハッキリ覺えてゐる。錦町の裏に人力車が一臺見えた。やがて客がそれからおりて車夫を連れて細い坂道を私の家の方に降つて來た。そこから私の家に來るには、淺い谷を降つて、そして又少し昇るのだから、車は通れない。その客は兄であつた。兄は紺飛白に絽の羽織か何かキチンと着て、麥藁帽をかぶり、駒下駄をはいて戻つて來た。そして座敷の緣側からヅカ／＼あがつて來て、先づ父に向つて『細かいのがあるなら』と云つて、何がしかの金を取つて車夫に渡した。彼は蓋し一文なしになつて辛うじて歸つて來たのであつた。

兄の歸國に依つて私は初めて少し東京の風に吹かれた。兄がはだかになつて、眞白いから

だにフンドシ一つで、初めて裏の菜園畑に出た時、『イヨウ！　大變によく出來てるなア』と云うた樣な、驚嘆の聲を發したが、其の『大變に』が私の耳に甚しく異樣に響いた。後に父も母も其の事を云つてゐた。私は又、香水と云ふ物を初めて知つた。それは燗徳利の細い樣な硝子壜にはひつた青い色の液體で、栓のコルクに細い竹の管がさしてあつて、其の管から中の液を少しづつ振り出して、頭の髪にかけるのであつた。プーンと好い匂であつた。私は又、レモン水（？）と云ふ物を初めて飲んだ。ブリキの鑵の中に、小さい壜と白い砂糖がいつてゐて、其の砂糖を水に溶かし、其の壜の液を二三滴入れるのだつたが、それらの甘酸い味が、何ともかとも云はれぬほどうまかつた。

兄は東京で簿記法を學んで來たと云ふので、直ぐに大橋（今の行橋）の銀行にはひつた。間もなく銀行の本店が小倉に移つたので、兄も小倉詰になつた　兄が小倉から豐津に歸つて來た時、私は父と母に指嗾されて、兄に一つ買物をねだつた。其の買物は何だと問はれて、私は干鰯と答へた。兄は餘ほど意外らしく、大笑ひをして早速承諾してくれた。實は、私の辨當のおかずが無いので、母が毎日困りきつてゐるのであつた。

兄は明治十六七年頃、結婚した。小倉の依田と云ふ士族の娘を貰つたのであつた。豐津に移つて來ない士族もずゐぶんあつたものと見える。婚禮の式は豐津の家で擧げられた。其の翌年、學校の夏休みに、私は暫らく小倉の兄の家に滯在した。昔の城下、都會らしい都會を初めて見た。川口に沿うた、石垣の嚴めしい城あとが、新らしい兵營になつてゐた。其の時、兄は私に少しばかり簿記法を教へてくれたが、私は町で『風來山人春遊記』といふ漢文の本を買つて來たりした。

次兄乙槌。私より五つの年長で、私は彼の事を『こまアンニャさん』と呼んでゐた。彼は私よりも餘ほど多く母方の血を遺傳してゐたらしい。彼には小心な謹直な所がなかつた。彼は少し疎大であつた。私はそれを多少の英雄式として子供心に崇拜してゐた樣に思はれるが、後にはそれが放縱な文人風にそれてしまつた。

私が山で兄と遊んでゐる時、紙がないのに大便がしたくなつて困つた事がある。すると兄は、帯に石をはさめと、私に教へた。帯に石をはさめばすぐになほると、彼は云つた。それが神功皇后三韓征伐の時の故事から來た、一種のまじなひである事は後に知つたが、さう云ふ場合、彼は多少、『權威ある者の如く』語るのであつた。少なくとも、私にはさう感じられた。その後、又同じ山で、今度は紙があつて用を足したが、手を洗ふ水のないのに困つた。手を洗ふといふ習慣を直ちに全く無視する事は、氣の小さい私に出來かねた。すると兄は、萱の葉を三枚重ねて、それを短かく千切つて撒けと教へた。さうすれば汚れが去つて清淨になると、彼は云つた。私は其通りにして、それで氣が濟んだ。

然し私は一度、兄と面白い爭ひをした事がある。私等は毎日學校から歸つて來ると、必ずカキモチを燒いて食ふのであつた。所が兄は兎かく、火おこしから燒方まで、私にばかり面倒を見させて、自分は何んにもせずに食はうとする。それを私が厭がつて、自分の燒いただけを嚴重に自分の物にして、彼に取らせない事にすると、彼は今度は仕方なく、私が燒いてしまふのを待つて、そろ〳〵其の跡の火で自分のを燒く事にした。私はそれを馬鹿らしく感じた。それで或日、私は改めて兄に談判した。どうせ二人で使ふ火だから、おこす時にも二人で一緒におこさうではないか、サア少し手傳つてくれ

と。然し兄は應じなかつた。俺は今日は食ひたくない、彼はさう云つた。仕方がないから私は矢張り、獨りで火を起して燒いた。すると、どうだらう、彼が矢張り、のこ〳〵やつて來て、其の跡の火で燒きかける。私は大いに憤慨して其の不正をなじつたが、彼は平氣で、火が棄ててあるから使ふのだと、濟ましてゐるので、仕方が無かつた。翌日、私は又、彼に火おこしの協力を求めた。母も口添をして、一緒におこせと彼に勸めた。然し彼は依然として應じなかつた。そこで私は決心した。默つて獨り火をおこして、自分の燒くだけ燒いてしまつて、其の跡の火に水をかけて消してしまつた。これは私の家では有名な事件で、後々まで母がよく、（兄弟二人の性質の差を示すものとして）其の話をしては笑つた。

或る時、私の家の近處の山で、子供連の間に、旗の取りあひの合戰があつた。兄が十五、私が十ぐらゐの時でもあつたらうか。先方の大將は誰であつたか忘れたが、私の方の大將は私の兄であつた。兩軍ともそれ〳〵本陣に旗を立てて置いて、先づ甲軍が乙軍を襲擊し、次に乙軍が甲軍を襲擊し、そして旗を取られた方が負けといふ一般方略であつた。そこで我々の方は甲軍として先づ乙軍を襲擊した。敵の本陣には、五色の紙を段々に繼ぎ合せた美しい長い旗が、小松の間に立ててあつた。私は小さいので組打をすれば誰にでも負ける。それでも相手には可なり大きな奴を選んだ。勿論すぐにねぢ伏せられた。然し、幾らねぢ伏せられても、下から其奴にしがみついてさへゐれば、私の力で一人の敵將を食ひとめる事になる。それが私としての戰略であつた。それで私は自分以外にどんな合戰が行はれたか丸で知らなかつたが、兎にかく味方は安々と敵の美しい旗を奪つてしまつた。それから今度は敵軍が我々の本陣に攻め寄せた。所が、我々の本陣には旗らしい物が見えない。敵は見當がつかないで困つてゐた。よく見ると、反古紙を引裂いた樣な物が、小高い木の上に結ひつけてある。敵は漸くそれを目がけてやつて來たが、木の上ではちよつと近寄れない。勇を鼓して其の木に登りかける奴があると、下から足をつかんで引きずりおとす。敵はたうとう我々の旗を取り得ないで、負になつた。かき餅の一件で腹が立つても、こんな事を見てゐると、『こまアンニヤさん』に對する私の尊信が湧かざるを得なかつた。

彼は數學にかけては丸で駄目であつた。代數も幾何も落第點ばかり取つてゐた。其の代り文章は得意だつた。彼は文章に於いて正に私の師であつた。彼は又、詩も作つた、歌もよんだ、字もうまかつた。字は文徵明を習つて、よく似せてゐた。蘭だの、菊だの、四君子だのと云つて、文人畫も少しはやつてゐた。中學校に演說の會があつたが、彼は其の演說の中で、黃鳥（校長）が黃い聲を出して云々といふ、不穩な言辭を弄した廉に依つて、演說停止の處分を受けた事がある。

明治十五年、彼は本吉家の養子になつた。本吉家は矢張り豐津の士族で、そこにはお浪さんと云ふ、器量よしの獨り娘があつた。但しお浪さんが十四、彼もまだ十八といふ歲だから、直ぐ結婚したわけではなく、彼は暫らくお浪さんの『おあにさん』であつた。

彼は中學校を卒業した後、英語を學ぶ爲に、福岡に行き、長崎に行つた。本吉家では彼を遠方に出す事を好まなかつたのである。若い者は旅に出たがる、老人はそれを出しともながる、それが其の頃の一般の有樣であつた。然し彼は結局、强ひて養家の許しを求めて、明治十八年東京に遊學した。

彼は其の以前、既にお浪さんと夫婦になつて

ゐた。お浪さんは『おあにさん』といふ呼方を改める事が出來ないで困つてゐた。其の婚禮の晩に一つの面白い事があつた。丁度、酒宴の央に、雨戸が破れるかと思ふほど、盛んに石が飛んで來る。總て婚禮にたいしては、石を投げるのが土地の習慣で、それがお目出たいとしてある。然し、それにしてもあんまり烈しすぎると云ふので、誰かが飛びだしてしかりに行くと、バラ／＼と若者の一群が逃げだす。逃げおくれた一人を引捕へて、ふざけ半分酒宴の席に引きずつて來ると、それは松尾と云ふ、兄の極く親しい友達であつた。それから大笑ひになつて皆が寄つてたかつて酒を強ひつけると、其の人は恐縮して、はふ／＼の體で逃げて行つてしまつた。

九　私の親類

次に私は堺家の主なる親類を略敍して見る。

廣瀨。これは父の弟が養子に行つた家。叔父の名は三津留。豐津から一里ばかり離れた、祓川の上流に沿うた、節丸といふ農村に住んでゐた。叔父は父と同じく脊は低かつたが、父とは違つて肩幅が廣く、甚だ頑丈に見えてゐた。父に比べると、遙かに粗野な、樸直な、いつも大きな口に齒を見せて機嫌よく笑つてゐる、好人物であつた。漢學のたしなみが少々あつたので、小學校の先生になつてゐた。小男には成るべく大きな女を女房に持たせんと、子供が小さくていけん、といふのが父の意見であつたが、父は自分にそれを實行する事が出來ないで、せめて叔父の爲にはと云ふので、色々苦心して奔走して、大女を嫁に貰つた。其の人は不幸にして早く死んだが、其の子供（私と同年のいとこ）は、私よりズット脊が高かつた。この叔父が又、父に宛てた手紙のうちに、折々片假名で『アリマス』などとやつてゐた事を思ひ出す。昔でも卒直な氣持の人は、しぜん言文一致になつてゐたものと見える。

浦橋といふ家に娘が三人あつて、それが堺と、森友と、間宮とに嫁いでゐた。堺に嫁いだのが卽ち父の母（私の祖母）で、森友に嫁いだのが卽ち前に書いた父の叔母である。それで此の四家は親類であつた。私の物を覺えた頃、浦橋家は既に大阪に移つてゐた。浦橋のをぢさんは大阪で役人になつてゐると聞いてゐた。同時に、間宮のをぢさんは（前にも記した通り）東京で陸軍に務めてゐると聞いてゐた。或る日、私が間宮に行くとその子供が、東京のお父さんから送つて來たと云つて、靴だの、帽子だの、色んな物を　せたのが羨ましかつた。

森友家については、いろ／＼話がある。父のいゝとこになる當主の力藏といふ人が、何か藩の勤め向の事で切腹した。餘つぽど思ひつめたものと見えると、父が後に話してゐるのを聞いた。私は此の切腹の話を非常に壯烈に感じて、見たこともない力藏といふ人を非凡人として想像してゐた。私の内に、力藏さんの、唐詩選を書いた習字手本が一冊あつたが、私は其の雄健な高邁な書體に對して、敬慕の念を禁じ得なかつた。力藏さんの弟は猛と云つて、これは浦橋家の養子となつて居り、猛さんの姉はおきのさんと云つて、同苗森友に嫁いでゐた。當時は親戚間の重緣がずゐぶん多かつた。此のおきのさんといふをばさんは折々私の内に遊びに來たが、何處となくシッカリした人で、炬燵にあたりながら私に八犬傳の話などしてくれたりした。此の人が、私の少年時代に接觸した、一番教養ある婦人だつた。森友のおばあさん（父の叔母）は、後におきのさんの處に行つてゐたが、そこは豐津と大ぶん離れた、昔の支藩と云つた樣な處だつたので、おばあさんは折々、私の内に泊

りがけでやつて來た。其の度に、いつも麥饅頭の竹皮包をみやげに持つて來てくれたのが嬉しかつた。それに私はこのおばあさんが、福々しい顏をして、そして何となく、世間並でない處のあるのが好きで、いつも力藏さんの墓參りのお供をするのを喜んでゐた。

　母の里方の志津野。こゝは母の弟の範雄といふをぢさんが家を繼いでゐた。母は此のをぢさんの事を『群三々々』と呼んでゐた。元、群三が通り名で、範雄が名乘であつたのを、明治になつてから範雄を本名にしたのだらう。（ついでに、父の名は得司だけども、實印には正隆といふ名乘が彫つてあつた。長兄には正民といふ名乘があつた。又、廣瀬のをぢさんの事を、父はいつも『半之丞』と呼んでゐた。これは幼名だらう。）志津野のをぢさんは、口數の少い、ドツシリした人で、鼻の兩側に深いひだがついてゐたのが目についてゐたが、冒險的な事業をはじめて大失敗をやつた。其の事は後に話す。

　外に今一軒、志津野があつた。前の志津野は錦町一丁目の裏に在り、後の志津野は二月谷といふ處にあつた。この二月谷志津野の當主は母のいとこで、通稱は拙三、名乘は範興であつた。このをぢさんはそこひといふ眼病に罹つて、厚い玉の眼鏡をかけてゐたが、氣節のある先輩として、若い者から志津野先生と呼ばれてゐた。維新後しばらくは藩の參事か何かを勤めてゐたらしい。多分その頃の事だらうと思ふが、役所から月俸を貰うて來ると、それを其のまゝ床の間に放り出して置いて、若い連中の持つて行くに任せてゐたと云ふ話を、私は母から聞いてゐる。私はこのをぢさんを特にエライ人として眺めてゐた。『花熊や花も紅葉も枯れはてて名のみ殘れる松の村立』これはこのをぢさんが前に記した馬ケ嶽を詠じた歌。花熊とは、馬ケ嶽の麓の村の名だが、思ふに昔、この山城の城下として多少繁昌した處なのだらう。歌人としても此のをぢさんは有名であつた。此のをぢさんは酒が嫌ひで、親類の會合などの時、もう飯にしようと、頻りに催促するのが癖だつたと、よく母が話してゐた。又此のをぢさんの煙草入の汚ない事は評判で、皮は磨り切れて破れてゐるし、紐は切れたのをコヨリでつないであつた。そんな無頓着な點は、廣瀬のをぢさんがコヨリを羽織の紐にしたのと一對で、私の内では二つともよく笑ひ話の種になつてゐた。私は此をぢさんから南木誌といふ本を讀まされたり、大阪の大東日報といふ新聞を讀まされたりした事がある。後、拙三さんは大阪に移り、住吉神社の禰宜として死んだ。當時、維新の志士先輩で、多少の學問があつて實務の才のない人物が、何かの因緣に依つて神官といふ地位に祭りこまれるのは、よくある事だつた。大阪府知事建野鄕三といふ人は、拙三先生の後輩であつた。

　母の妹の嫁いでゐた篠田。こゝは醫者の家で、をぢさんの名は蒼安と云つた。髮の眞白い、眉の長い老人であつた。杖が好きで、鳩の杖だの、五三竹の杖だの、籐の杖だの、いろ〳〵な杖が十本も二十本も、杖さしにさしてあつた。家は錦町一丁目の角に在つた。これも名高い歌よみであつた。假名文字が上手でよく短册など書いてゐた。歌の名は本坦と云つた。『劍太刀身は無きものと思ひてぞ、初めて仇は斬るべかりける』『立ちあれし波の行方を今朝見れば、只靜かなる水にぞありける』『鬼となる伏見の土を來て見れば、佛を作るいさごなりけり』などいふ、悟りめいた歌があつた。それかと思ふと、夜中に蚤をさぐる事を長歌に作つて、夜が明けて見ると、『垢と思ひし蚤は逃げて、蚤と思ひし垢ぞ殘れる』と云つた樣な、滑稽味をやつてゐる事もあつた。蒼安さんは又酒が好きで、醉がま

はると色々面白い話をして聞かせた。――李白といふ詩人は、大層な酒飲みぢやつた。『長安の市上、酒家に眠る』といふ句があるが、あれは讀み方が違つて居る。酒家に眠るではなく、酒家眠るが本當ぢや。アレ向うから李白さんが來なさる、李白さんに舞ひ込まれては大變ぢや、夜の明けるまで飲まれるも知れん、サア早う戸を締めて寢よう寢よう。酒屋が皆さう云うて店をしまうた。そこで長安の市上、酒家眠る。――こんな樂天家らしい老人に悲劇があつた。をぢさんにはお清さんといふ娘が只つた一人あつた。（それは私の叔母の生んだのではなかつた。）それでをぢさんは養子をした。養子は東京に行つて修業して醫者になつた。をぢさんはお清さんを連れて東京に行つた。養子はお清さんを嫌つた。をぢさんはすご〱お清さんを連れて歸つて來た。私はお清さんが肺病になつて死んだ事を覺えてゐる。その最後に近い頃、赤い絹のきれで拵へた、小さい丸い玉に水を浸して、わづかにそれを吸つてゐたのが目に殘つてゐる。篠田家については、猶ほ後に話す事がある。

十　士族、百姓、町人

私の親類は大抵みな小士であつた。中で、二月谷志津野だけが少し格式が高かつたさうだ。小倉藩では百石以上をお歴々と稱したが、二月谷志津野は即ち其お歴々の最低位であつた。然し志津野が百石で、堺が十五石だから、志津野は堺の六七倍の收入があつたといふ譯ではない。百石以上はそれだけの領地を持つてゐるといふ名義で、實收は四十石に過ぎなかつた。然るに堺家あたり（多分切米所と云ふのだらう）の十五石は其まゝ實收入で、それに四人扶持（一人扶持はたしか一石五斗）がついて合計二十石以上になるのであつた。

私は藩内の御大家について、殆んど知る所がない。只だ前に記した御家老の松の御門だけは知つてゐる。そこの若さんの『安三郎さん』と云ふ人とは心易くなつてゐた。細い髮毛の美しく縮れてゐる處と、温和な上品な顏付をしてゐる處とが、我々とは少し違つてゐた。兄の乙槌は其の人と同年の友達で、安三郎さんの事を『三郎安』などと呼んでゐた。そこに又、目のすゞしい可愛らしいお孃さんが三人あつたが、私等はそれを『お女郎さん』『小女郎さん』『ちひ小女郎さん』と呼んでゐた。或る時、私はどうかした事で、そこの裏庭にいつてゐて、××院樣といふ御後室から話しかけられた事がある。その時××院樣が、『お前の内では――』と云はれたので、成るほど身分が違ふのだなと思つた。但しそれを不快に感じたのでは勿論なかつた。

その外、父や母が、××さんとさんづけにして呼ぶ家柄が折々あつた。又、輕蔑するといふ程ではないが、何となく少し見くだすといふ態度であしらふ家柄もちよい〱あつた。そして大抵は相對のつきあひで、子供等は一樣に『坊んさん』『孃さん』と呼ばれてゐた。私は『小ぼん』『小ぼんさん』『ぼんけい』などと呼ばれてゐた。

前に云つた通り、豐津は既に城下ではなかつた。舊藩主忠忱公は既に東京住居になつてゐた。然し『御住居』若しくは『御内家』にはいつの頃までか、係りの人々が毎晩宿直するのであつた。私は其の宿直に行く人達から、そこのお倉に積んである千兩箱の話を聞いた。兄の乙槌が養子に行つた本吉家は、この御内家の元の長局に住んでゐた。

私の内の床の間には、『仁』の字を大きく書いた掛物が掛つてゐた。それには『忠忱』と署名してあつた。忠忱公が東京に行かれる時、仁義禮智信の五字の中を一書して、それを記念として士族中に頒たれたものである。舊主と舊臣との間には、まだ〱暖かい親しみがあつた。或る

時、忠忱公が久しぶりで東京からお歸りになつた事がある。其の時、私は本町のはづれの或る店家で遊んでゐて、丁度『お通り』に出くはした。我々の履物がお目に觸れてはならぬと云ふので、店の閾の内にうづくまつて待つてゐると、向うから洋服の殿樣が葉卷といふ煙草を吹かしながら、ブラ〳〵とお出でになつた。丸々と善く肥えた、若い立派なお方だつた。今の小笠原長幹さんは父君に善く似てゐられる。

明治九年、豐津の原に重大な一事件が起つた。筑前秋月の藩士今村百八郎外二百名の者が豐津に押寄せて來て、育德館を圍んだ。曩に西鄕隆盛その他が征韓論の爭ひで政府を退いてから以後、西南諸藩の間に不平の氣が醞釀されて、續々として爆發する形勢であつたが、秋月藩士の來襲も其の小爆發の一つで、彼等は豐津藩士を說き落して相共に小倉縣廳を襲擊しようと云ふのであつた。育德館を圍んだのはどういふわけであつたか善く知らないが、育德館は元の藩學であり、後の中學校の前身であつて、そこより外に豐津藩士の集合所(若しくは中心點)が無かつたのだらう。サア戰爭だと云ふので、豐津一體は大變な騷ぎになり、女子供はそれ〴〵便宜の場所に避難した。私等の近處では、道路から少し離れた山の中の凹地を選んで、そこに筵を敷き、胡蓙を敷き、家具も少しづつ持出して、數家族が一塊まりになつてゐた。私等には何が何だか丸で譯が分らなかつたけれども、父だの、平太郎兄だの、近所のをぢさん達だのが、大小を腰にさして行つたり戾つたりするのが、怖くもあり面白くもあつて、何だかサムラヒの世の中が跡戾つて來た樣な氣がした。然し間もなく小倉から鎭臺兵がやつて來て、賊は譯もなく追ひ散らされた。その時、私は初めて鎭臺兵といふものを見た。彼等が饅頭帽をかぶり、ランドセルを負ひ、鐵砲をさげて、丁度わたしの家の前を橫ぎつて、小腰をかゞめながら進んで行く姿を、實に珍らしく眺めやつた。それから、戰爭はもう終つて、賊の死傷者がそこゝに橫たはつてゐると云ふので、皆がそれを見に行つた。私も錦町一丁目の橫町の處まで行つて、戶板の上に轉がされてゐる、血まぶれの怪我人を一つ見てゾツトした。それから當分の間、每ばん暗い緣側を傳つて便所に行くのが恐ろしくて困つた。

其の翌年、西鄕の戰爭があつた。さすが近處の事で、子供の耳にも色々の噂がはひつた。やがて戰爭の繪草紙が出來た。私等は錦町の山口屋で何枚かそれを買つて貰つた。賊軍が熊本城を圍んで大砲を打ちかけたりしてゐる畫を今も思ひだす。陸軍少將桐野利秋、篠原國幹等は、たしか陸軍の軍服を着てゐた。村田新八郎が袴をはいて白鉢卷をしてゐるのが、殊に勇ましく見えてゐた。私等の目の中には 賊軍の將士が總て英雄化されてゐる、畫の作意その者が既にさうであつたのだ。然し籠城側でも、谷少將など大變な英雄になつてゐた。殊に、城中と來援の官軍との連絡を初めて取つた奧少佐が小倉出身であつたのは、豐津人の誇りであつた。

昔のサムラヒを思ひ出させる樣な事はそれきりであつたが、それでも豐津の士族はまだ暫らく特殊の地位を保つてゐた。それが經濟上から崩れて行つた。次第は後に話すが、こゝには大體上、先づ士族と百姓と町人との關係を少し書いておく。

豐津の士族、その周圍の村々の百姓、錦町の町人、これが當時の其の地方に於ける、社會の三階級であつた。彼等はそれ〴〵に、可なり違つた言語風俗を持つてゐた。士族には前に云つた通り信州以來の文化があつた。馬ケ嶽や、香春嶽や、城の鄕の落武者の末孫が、小笠原家

に召し抱へられたのも勿論少くないだらうが、それにしても、豐前の土人とは違つた、一種の武士的文化を作り出してゐた。豐津の町人は、小倉の町人の移つて來たのが多かつただらうと思ふが、小倉の町人は、其の町人たる地位からしても、又その地理的事情からしても、豐前の土人とは大ぶん違つてゐた。小倉は狹い海峽を隔てて長州の下の關と相對してゐる。九州の一部に位してはゐるが、交通の便利は中國の方に多い。殊に山口や下の關の繁華が多大の影響を及ぼしてゐる。現に、豐津錦町の一番大きな店(吳服店兼雜貨店)は山口屋であり、二軒の料理屋の中、大きい方は關屋であつた。豐前の町人は九州的であるよりも寧ろ中國的であつた。豐前の士族についても、幾分それと同じ事が云へるかも知れない。所が、農村に於ける生粹の豐前土人たる百姓は、容貌、言語、風俗等に於いて、如何にも土蜘蛛の子孫、スサノヲ族の子孫、或は熊襲族の子孫らしい所があつた。

扨この三階級が謂ゆる『四民平等』になつた筈だが、實際には中々さう行かない。士族には矢張り一段高い階級の心持があり、百姓町人の方では又、内心士族を小馬鹿にする場合、或はそれに反抗する氣味合になる場合がありながら、猶ほ習慣的に大なり小なり卑下した態度を棄て得なかつた。

『此ごろ百姓が途中で行き會うても馬から降りんやうになつた』と、いつか父が笑ひながら母に話してゐた事がある。私等(即ち士族の子供等)は又、農村に屬する山に行つて、栗を取つたり、藤の花を取つたり、竹の子を拔いたり、その外いろ〳〵山を荒しまはるので、どうかすると、村の人達からひどく叱りつけられたり、追つかけられたりする事もあつた。左樣に百姓達の態度が少しづつ變りかけてゐた。然し私等の眼中に於ては近處の村々から馬や牛を引いて、米や薪や炭を賣りに豐津の丘に登つて來る百姓達の姿が、どうしても異人種の樣に感じられた。私の內に折々、懇意な百姓の甚之助といふ人が來てゐたが、『マア足を洗うて暫らく上んなさるとえゝ』と母がいろ〳〵勸めても、『ハイヘイ』『ハイヘイ』と馬鹿に恭々しい返事ばかりして、どうしても草鞋をぬがず、上り口に腰かけたまゝで茶漬など食うて歸るのであつた。

錦町の人々を私等は『町の者』と呼んでゐたが、これは百姓に對するほど見くだす心持になれなかつた。勿論、士族は町人以上である、私等は町の子供と友達にはならなかつた。けれども、町の者は田舍者(即ち百姓)と違つてゐた。彼等は稍優等人種であつた。

錦町には、前に話した吳服屋の山口屋、料理屋の關屋などの外、大抵の店屋は一應揃つてゐた。宿屋も明石屋といふのが、一軒あつた。そこの親爺は、いつまでも丁髷を結つて威張つてゐるので有名だつた。葉茶屋の主人に山田瓢舟といふ俳諧の宗匠があつて、父はそこに遊びに行つてゐた。若い大工の何某君が士族の娘さんと駈落して評判になつた事がある。士族の娘と大工さんとの戀は、當時にあつては、どうしても駈落せねば收まらぬ程の珍事であつた。

私は町の子供等から多少の威壓を感じさせられてゐた。彼等はいつも善く團結してゐた。そして甚だ不作法であつた。或る時、石走谷を中に挾んで、彼等の數人と私等の二三人とで、石の投げあひをした事がある。彼等が多數で、私等は負けた。かういふ關係は、子供等の間ばかりでなく、士族全體と町人全體との間にもあつたかも知れない。

猶、階級の關係を示す實例として斯ういふ事

がある。錦町の裏に、それこそ本當に鳥の巣の様な家を竹藪の中に作つて住んでゐる、杉山某といふ日傭稼があつた。私の内に米搗に來た事もある。所が此の人、御變動の際、奇兵隊といふ臨時の新軍隊に召募されてゐたので、後士族の格に列せられてゐた。そこで我々は彼の事を呼び棄てにせず、『杉山さん』と呼んでゐた。

　それとは反對に、私の家と何か因緣のある小倉在の農家、──後に村長になつた程だから可なり裕福な家だつたらうと思ふが、──其の農家に私の家から苗字を分けてやると云ふので、酒井と名乘らせた。後に父が『酒井は餘り有りふれた字で氣の毒だつた。せめて坂井にしてやればよかつた』と云つてゐた。なぜ堺にしてやらないのかと思つたが、そこまでは父にどうしても考へられなかつたと見える。

第一期　豐津時代（下）

一　士族の商法

　堺家の祿たる十五石四人扶持が公債證書に替へられた時、何んでも其の金額が七百圓ばかりだつたと聞いてゐる。そしてそれが七歩利付きだとすれば、年に五十圓足らずの利子となる。私の小耳に挾んでゐた所に依れば、當時、私の家で、月に五圓あればどうやらかうやら暮しが立つといふ事であつた。若し其の通りの計算だとすれば、年に十圓以上の不足となるわけである。

　當時の貨幣の價値は今日の十倍、もしくはそれ以上だつたとは云へ、一家の生活が月五圓とは、ずゐぶん簡單なものであつた。然し、それはその筈で、家はある、山はある、畑は次第に擴げて行く、野菜物は何でも總て出來る。是非とも買はねばならぬ物は、米、炭、薪、油ぐらゐに過ぎなかつた。味噌も醬油も内で作つた。酒も少しやつて見たやうだが、それは失敗したらしい。私の記憶には甘酒の事だけが殘つてゐる。魚は滅多に買はないし、菓子といふ物も殆んど買はない。私等はよく、近處の家や親類の家に行つた時、黑砂糖を一かたまり手のひらに塗りつけて貰つたものだ。白砂糖は茶菓子として客に出すより以外に使はれなかつた。私等の散髮は大抵、父がチョキ〳〵やつてくれたし、足袋は勿論、紐つきの奴を母が拵へてくれた。シャツといふ物がはやつて來た時にも、母が何かのキレでそれを拵へてくれた。衣服の材料として多少の反物類は買つてゐた樣に思ふが、我々の着物の多くは手織であつた。絲挽の事は前に話した通り、そして大抵の家には機があつた。然し私の内には、それが無かつた。母の健康がそれに堪へなかつたのだらうかと思ふ。それで私の内の織物は、主として母の里の志津野や、母の妹の篠田で出來たやうに思ふ。茸とり、土筆つみ、蕨とり、魚つり、ワナかけなどは、娯樂が主であつたか、實用が主であつたか分らない。兎にかく、學校の戻り道に、蕨を取つたり、茸を取つたりする時、私等の心の中に、明日の辨當の菜を拵へるといふ考へがあつた。私は山芋をすりこんだ味噌汁が大好きで、よく山芋を掘りに行つた。鮎つりの獲物や、ワナの獲物の小鳥などは、我々の稀な肉食の材料であつた。

　かういふ質素な、原始的な、自足的な生活すら、ウッカリしてゐては迚も維持しきれないと云ふので、士族の殿原が皆な騷ぎだした。先祖代々からの祿扶持はなくなつた。有るものは只公債證書ばかり。然しそれを後生大事に守つてばかり居るのでは、次第弱りになるより外はない。そこで一方には『官途に就く』事、一方には『士族の商法』が始まつた。

私が物心のついた頃には、私の家の近所に『屋敷跡』が幾つもあつた。それらは皆、官途に就くか、或は何かの職業を求めるか、或は何かの商法をやるかして、一家を擧げて他鄕に引移つたのであつた。私の親戚中では、前に云つた通り『間宮のをぢさん』は陸軍に勤め、『浦橋のをぢさん』は大阪府に勤めてゐた。『廣瀨のをぢさん』が小學校教員になつた事、兄の平太郎が間宮のをぢさんの『引き』で『陸軍十六等出仕』になつた事も、前に云つた通りである。父も初め暫らく田川郡あたりに行つて戸長か何かやつたらしい。

斯樣にして、他國に出る者は續々として出て行つたが、豐津の原に殘る者は、皆何かの『商法』を考へた。本町の鈴木といふ家は桶屋をやり出し、寺山といふ家は雜穀屋をやり出した。それが私等の子供に、士族が『町の者』になつたといふ風に考へられた。里見といふ家が錦町の一丁目で郵便局をやつてゐたが、それは私等に、『町の者』らしく感じられなかつた。少し後になつて、本町の上の方で、或る若い人が煎餅屋を開業した時、大變な奮發として評判になつた。私の內の直ぐ近所の向井といふ家には、(そこは大ぶん工面が好かつたと見えて)白壁の倉を建てて酒つくりを始めた。其の倉の棟上式の時、棟の上から餅まきがあつて、私等はそれを拾ひに行つた。御家老樣の松の御門にすら、いつの頃からか眼藥『精錡水』の看板が掛かつてゐた。『二月谷の志津野さんのをぢさん』が、大阪からマッチをいかいこと(たくさん)買ひ込んで來たが、皆んな濕つて役に立たなんだといふ話は、當時有名であつた。世事には最も疎い拙三先生までが、商法氣を出した所に面白味がある。私の母など、毎度をかしさうにその話をしてゐた。

私の叔母の內の篠田と同苗の家が甲塚にあつた。そこで、前者は上篠田、後者は下篠田と呼ばれてゐた。其の下篠田のをぢさんなる者が非常に滑稽な人物だつた。丸い大きい頭のツルツルに禿げた工合から、短かいおとがひの上に白い鬚のある一の字の脣を踏ん張らせた所など、江戸言葉の謂ゆる『とつちやん小僧』の概があつた。此の人は私の父の友達で、碁も打ち、俳句も少々はやるのだつたが、殊に『冠り句』の點者として知られて居た。或る時、私等が冠り句をやり出して、其の選を此のをぢさんに賴んだ時、『ビックリ』といふ題に對し、撰者の句として卷の終りに、『曲り角からバアアア』とあつたのが、ひどく私を感心させた。最も平凡な、最も有りふれた趣向を大膽卒直に云つてのけた所がエライ、と私は思つた。所が、この滑稽な老人の商法氣が、如何にも著く其の特質を發揮してゐた。彼は先づボケの木をたくさん山から掘つて來て自分の畑に植ゑた。『そんな面白うもない花をどうなさるのかな。』人が怪んで問ふと、老人は得意らしく、鼻を一つクンと鳴らして、『マア見ておいで、今に接穗をすると、これが皆んな海棠になる。海棠は値の高い植木ぢや。』この計畫はどんな結果になつたか、それを私は聞いた覺えがない。然し篠田老人の考案はそのくらゐに止まらなかつた。モット空想的な、モット詩的な、モットろまんちつくな商法を思ひついた。彼は鶴嘴を肩にして馬ケ嶽に水晶掘に出かけた。馬ケ嶽は斑らな禿山で、水晶が出ると云はれてゐた。篠田老人は何んでも只、奇拔な思ひつきを種にして、元の掛らぬ金まうけをしようと云ふのであつた。然し折角の此の名案は、辨當持の二三日の徒勞の結果、全く絶望に歸したのであつた。

私の內の押込(おしいれ)の隅に、何か器械の様なものがしまつてあつた。あれは煙草を刻む道具だと、母が私に說明してくれた事を覺えて

ゐる。然し自分達の飲料を刻む爲に器械を買ふ程の事は無い筈だから、案ずるにこれは、ボケの栽培と類似した程度の、父の思ひつきであつて、同じく實效を奏せぬ商法計畫であつたらしい。

士族の商法の氣運がこんなに盛んである間に、公債證書を金にしてムザ〳〵使ひすてた話もある。小寺といふ家では、『夫婦とも揃ひも揃うて好え氣なもので、今日は鯛にせう、明日はコチにせうと、毎日々々サカナを買うては、飲んだり歌うたりしとるさうな』といふ評判が高かつた。果して、それから間もなく此の家は沒落して豐津を立退き、近隣の農村に小屋掛か何かして、親子で天生田川で網打をして食うとるさうぢやと傳へられた。其の子といふのは私より一つか二つの年上であつたが、それが學校もやめて、さうした生活に落ちてゐると聞いた時、私は大ぶん變な氣持だつた。××といふ家では、年寄が無くなつてしまつて、若い男の子が二人だけになつたが、其の兄の青年が毎日ブラ〳〵遊んでゐて、不斷に博多の帶を締めとる』といふ評判だつた。間もなく此の家も沒落した。然し其の博多の帶を不斷に締めてゐた人は、ズット後に何處やらで警察署長をしてゐると聞いた事もある。

豐津に於ける、幾らか事業らしい事業としては、紅茶の製造、養蠶および製絲、金貸の會社、この三つであつた。豚を飼ふといふ話も聞いた事はあるが、實現されたのを見た事は無かつた。私等の小學校――それは前に云つた通り、元のお城の一部分であつたが――其の小學校に續く建物の中で、或る時、急に若い人達が大ぜいやつて來て、何か忙がしさうに働きだした。私等小學生は、それを珍らしい事に思つて、皆が寄つてたかつて見物した。折しも夏の事で、若い人達は皆フンドシ一つになつて、大きな平たい竹籠の樣な物を兩手にかゝへて、其の中に入れてある茶の葉を篩うてゐた。それが即ち紅茶會社の新事業であつた。私の家から二月谷に行く道に、可なり廣い茶園のあつた事を覺えてゐるが、それは多分、この會社の時に出來たものだらう。この會社については、志津野の拙三をぢさんが私の父にも勸めに來たさうだが、父はその話に乘らなかつたらしい。事情は知らないが、その會社は間もなく消え失せた。私は只、右の茶篩ひの光景を見た時、士族の若い人達に似合はしくない仕方だと感じてゐた。つまり筋肉勞働は、士族の面目でないと感じてゐた。

二　養蠶と金貸し

養蠶は一時、可なり盛んになつて居た。豐津の士族で、大なり小なり蠶を飼はぬ家は無いと云つていゝ程だつた。後には住居の外に蠶室を新築するほど、稍や大仕掛にやつてゐる家もあつた。開墾社といふ會社の樣なものが出來たが、それは桑畑を作る事を目的としてゐた。何處の家でも多少の桑畑を持つてゐないのはなかつた。私の叔父の志津野の家など、道から家まで半町ばかり、丈の高い桑の木の下を潛つて行くのであつた。初めの間、桑の木はそれほど大きく育てられてゐた。私等はよく、志津野の畑で高い桑の木に登り、あの紫色の苺を貪り食つた。私の家には初めのほど、井戸ばたに四五本の大きな桑の木があるばかりだつた。蠶はほんのおもちやに飼ふのだつた。兄の分だの、私の分だの、別々に小さな箱に入れた蠶があつた。私はよく、大きく成長した蠶を口に入れて嘗めずつたりした。あの滑らかな皮膚が口の中でツル〳〵して好い氣持がするのであつた。然し私の内でも、後には前の山を少し開墾して、新らしい桑畑を作り、少しは用に立つだけの蠶を

飼うた。それでも精々二年か三年くらゐのものだつたらうが、私が初めて拵へて貰つた博多織の帯は、たしかに内の繭から取つた絲で織つたのであつた。

兄の養子に行つた本吉家は、大ぶん本式に養蠶をやつてゐた。こゝではモウ、竹籠を持つて、頬冠りをして、孃さん達が桑の葉を摘みに行くといふ悠長な遣り方でなく、總て刈桑式になつてゐた。それで蠶の盛り時になると、家の殆んど全部が蠶室になつて、丸で戰爭の光景を呈してゐた。おかあさんがエライ元氣の働手で、來合せるほどの人々をつかまへては、皆んなに桑の葉むしりか何かの手傳ひを强制するのだつた。本吉家では更に絲取りから博多織までやつてゐた。お浪さんは絲取りが上手で、おかあさんは機織が自慢だつた。私の帯も本吉で織つて貰つたのだつた。

所が、この養蠶事業に随伴して、一つの悲劇が發生した。製絲會社といふほどのものであつたかどうか知らないが、杉生十郎といふ人の經營で、製絲工場の設けられた事がある。そこには士族の孃さん達が大ぜい呼び集められてゐた。この杉生といふ人は私の長兄あたりと同年配で、少し家柄であり、そして豪傑的の人物らしく聞いてゐた。然るに其の事業は全く失敗した。孃さん達は只ばたらきになつてしまつた。『杉生さんもあんまりぢや。御自分はそれで仕方があるまいが、せつかく羽織の一枚も拵へようと、それぱかり樂しみにして永いあひだ働いた孃さん達が可愛さうな。』さういふ批判が私の母などの口から出てゐた。然し杉生さんは無責任でなかつた。彼は遂に自殺した。

からいふ蹉躓はあつたものの、兎にかく豐津の原は、桑畑と、養蠶と、製絲とに依つて、せめて幾許かの經濟的基礎を得るだらうといふ望みが生じかけてゐた。しかしそれも夢で、それから幾年かの後、豐津の養蠶事業は全く亡びてしまつた。其の樣子については、私は何も知らないが、兎にかく地味か何かの關係上、桑が育たなくなつたのだと聞いてゐる。

小さな金貸會社は幾つも出來てゐた。現に私の内の座敷も、しばらく三成社の事務所になつてゐた。三成社には關さんといふ若い人が毎日辨當持で通つて來て、父と二人で何か頻りに帳面をいぢくつてゐた。この關さんといふ人は、『廣瀨の叔父さん』と懇意で、同じ節丸村に住んでゐた。その關係上、關さんと父との共同事業が成り立つたのらしい。叔父が其の事業の出資者の一人であつたかどうかは、私に分らない。金を借りに來るのは大抵、近村の百姓達であつた。それで貸付は出來るけれども、回收は中々出來ないといふ話だつた。そんなら抵當の田畑を取るかと云ふに、取つたところで、それをこちらで作るわけにも行かず、どうにも仕方がないと云ふ話だつた。半季か年末かの決算の時だつたらうと思ふが、一度三成社で御馳走があつた。何んでも鰤飯が大そう旨かつた事を覺えてゐる。然し三成社が成功したか失敗したか、私は全く知らない。只いつの間にか、關さんが來なくなつて、三成社は消えてしまつた。その後、父はしばらく小倉に出て、何か小さな事業をやつてゐた。それは三成社の事業の繼續、もしくは變形であつたかどうか、それも私は善く知らない。只、或る時、父が母の晴着用として、茶縞の絹地の羽織を一枚持つて歸つた事がある。それは新調でなく、古着であつた。父の事業は質屋であつたかも知れない。そしてその茶縞は流れ物であつたかも知れない。然しそれも長くは續かなかつた。

金貸會社の中で『海山社』は大きくもあり、有名でもあつた。母の里の志津野が（すぐ後に話す通り）田川の方に移つて行つた後、其の家が

海山社になつてゐた。志津野のをばさんは松崎家から來た人で、その松崎家は志津野の隣りにあつた。又、松崎の弟の宮田の家も、志津野の隣りであつた。つまりそこには、兄弟つゞきの三軒家が桑畑の中に並んでゐたわけだ。そして海山社は主として、松崎と宮田との事業であつた。しかし社長には福與慶茂さんといふ家柄の人が擔がれてゐた。志津野のをぢさんがどの程度まで海山社に關係してゐたか、それは私に分らない。然し叔父は田川の炭坑を目につけて、一家を擧げてそこに移つて行き、海山社も炭坑に手を出してゐたと云ふ事だから、必ず何か關係があつたものと考へられる。それは兎もあれ、海山社は一時盛んにやつてゐたが、忽ち何かの破綻を生じて行き詰つた。松崎氏は其の責に任じて切腹した。さすがに立派だといふ評判だつた。宮田氏は行方知れずになつてゐたが、數日の後、或る山の中の池から其の死體が發見された。『福與さんはお氣の毒な、何んにも御存じで無かつたさうぢや』と云ふ話だつたが、然し責任上、止むを得ない、身代限りか何かの始末になつた。杉生事件と云ひ、海山社事件と云ひ、士族の商法が頻々として悲劇を生み出したのであつた。

三　志津野家の沒落

其の前に今一つ、モット直接に、私等の周圍に悲劇があつた。志津野のをぢさんは、前に云つた通り、寡言沈默の、ドッシリした、體格も可なり大きな人だつたが、早く炭坑に着眼した所を見ると、よほど大志があり、よほど冒險的であつたと思はれる。然し先驅の冒險者が無殘な失敗を遂げるのは通例の運命である。

叔父が赤池炭坑に移つてから後、私の母がよくこんな事を云つてゐた。『範雄が、商賣といふものは面白いものぞな面白いものぞなと云うとるが、赤池の方はよつぽど好えと見える。』然しそれは暫らくの間の事だつた。叔父の事業は忽ち蹉躓を來した。そして叔父は有らゆる金策に窮した末、コレラに罹つて死んでしまつた。跡には子供が四人あつた。松崎から來たをばさんは、それより少し以前に亡くなつて外から後妻が來てゐたが、其の人は此の大變で直ぐに里方に歸り、四人の子供だけが親なしで豐津に戻つて來た。

子供達と共に赤池から戻つて來た多少の荷物を親族中で片づけてゐる中、書類の間から數通の料理屋のツケが發見された。それが藝妓の揚代など少なからぬ金額であるので、皆が呆れてしまつた。『そんな物ばかり殘しといて何になるか！』と母は吐きだす樣に憤慨してゐた。『もうズット前から、ヤケになつてしまうとつたのぢやらう』と父は寧ろ同情的に批評してゐた。然し父は又、『範雄が俺に反古をつかませた』と云つて、苦笑ひをしてゐた。叔父が沒落の少し前、豐津に金策に來て、何かの株券か地券かを抵當にして父から五十圓かの金を出させて行つたが、其の抵當が無價値の品である事が後に分つたのだつた。然し『初めから欺すつもりでも無かつつらう。金さへ持つて來て返せば事は濟むといふ積りぢやつつらう』と、母はさすがに弟を辯護してゐた。

私の内の損害はそれくらゐで濟んだが、篠田家の打撃はひどかつた。篠田のをぢさんは公債證書の大部分を志津野のをぢさんに預けてゐたのであつた。尤も、篠田のをぢさんは蒼安老として醫者といふ職業を持つてゐたので、それがため全く食へないわけで無かつたが、然し先きには養子に背かれ娘には死なれ、そして又この災難に遭つたのだから、よほどこたへたものと見える。その時の歌『泡となりて返らぬせにや我が爲せし過ぐ世の罪の浮きて流れん』『せ

い に』は『瀬に』と『錢』とをきかせたのだと聞いてゐた。その後、私の子供心の思ひなしかも知れぬが、篠田のをぢさんの顔に憂ひの色が深くなつたやうな氣がしてゐた。前に云つた李白の話などする時には、如何にも面白さうな老人だつたが、それがどうかすると、ひどく沈んで見えるやうになつた。年に似合はず可なり房々した白髪を稍や長く延ばしてゐたが、私は唐詩選の『白髪三千丈、憂に依つて個の如く長し』といふのを、何となく此の人に思ひ寄せたりした。をぢさんが毎晩、食後に、佛壇に向つて法華經か何かを誦讀してゐるのを見る時など、殊に氣の毒な樣な氣がしてゐた。

扨、志津野の親類中では、範雄の不都合、不始末を幾ら責めて見た所で、死んだものを何んとも仕方がない、只だ兎もかくも、四人の孤兒の振方をつけることが眼前の急務であつた。四人の孤兒、――姉がヨシ、通稱およさん。私と同じ年で、その時が幾つであつたかシッカリ分らないが、私は此の人の昔の事を思ひだすたびに、髮を男髷に結らてゐた十か十あまりの小さい姿が目に浮んで來る。あとが男三人、郎、又郎、海彦。そこで親類會議の結果、篠田家に子供が無いのだから、およさんを養女にして貰ふ事とし、あとは郎を松崎に、又郎を二月谷志津野に、海彦を堺と篠田とに半分づつ引取る事となつた。此の半分づつと云ふのは、どうした話あひの結果であつたか知らぬが、ずゐぶんをかしなわけで、私は、半月のあひだ私の内に居た海彦がねまきを持つて篠田に行くのを、送つて行つた事を覺えてゐる。其の本人としては、さぞ落ちつかぬ心持だつたらうと察せられる。

それでも兎にかくそんな事で一應の話はついたが、それから暫らくして海山社の事變が起つた。赤池炭坑の失敗と海山社の破産との間に、どんな關係があつたか、私には分らない。郎は又も家を失うてその後は篠田家に引取られた。海彦は幸ひにして、錦町の平野といふ古道具屋に養はれた。又郎は、二月谷志津野が大阪に移つた時、更に堺家に引取られた。何しろ志津野家の沒落は大事變であつた。

四　小學校

私は多分、七ツの春から小學校に行つたと思ふ。小さな子が學校に行くと云つて、評判されたと母がよく後に話してゐた。年弱の七ツ、而も年の割に小さくて、よほど目に立つたらしい。

小學校では、先づ『いと、いぬ、いかり』などと書いた、畫入の掛圖で教へられた事を覺えてゐる。それから間もなく『小學讀本』で、『神は天地の主宰にして、人は萬物の靈なり』『酒と煙草は養生に害あり』などいふ事を教へられた。猶その讀本には、怠惰な子供が學校には行かないで、道ばたの石にもたれて遊んでゐる話だの、久しぶりで故郷に歸つた人が自分の家の燒けて無くなつてゐるのに驚く話だの、『狼來れり、狼來れり』と譃を云つて人を驚かした惡少年が、本當に狼の來た時、誰にも助けられなかつたといふ話だのがあつた。總てがアメリカの讀本の直譯だといふ事を、後に英語を學んだ時初めて知つた。又、『地理初步』といふ本には、劈頭第一、『マテマチカル・ジョーガラヒーとは……』といふ驚くべき外國語の新智識があつた。然し私等は、決してそれは變だとも不思議だとも思はず、只だ何んとなく語呂が好いので、面白がつて諳誦してゐた。

然し、一面にはよほど歐化的でありながら、他の一面には、よほどまだ漢學的であつた。私は卒業前に漢文の『國史略』を讀まされた。それに似た事は學校にもあつた。私は學校にはひる

前、既に福澤諭吉の「世界國づくし」を諳誦してゐた。「世界は廣し萬國は、多しと云へど大凡を、五つに別けし名目は、亞細亞、亞非利加、歐羅巴、南北亞米利加、五大洲」と云ふのであつた。然るに一方、或る年の夏休みには、近處の或人の處に通うて、四書五經の素讀をやつた。「故」の字を「かるがゆゑに」と讀むのはどういふわけだらうかと不審に思うてゐたが、素讀の事だからそんなわけは聞きもしなかつた。「ヘイヒタルカンドウ、キルコトナカレ、オルコトナカレ」といふ詩經の文句を覺えてゐるが、今では既に其の字を忘れてゐる。

つい先頃の事、或人が私に、あなたの時代の小學校は腰掛でしたかと聞いた。そんな事が問題にならうとは、私は思ひもそめなかつた。何しろマテマチカル・ジョーガラヒーを教へるほどの新式の學校だもの、腰掛でなくてどうするものか。然し校舍は、前に云つた通り、元のお城の一部分であり、學校の名稱も、後には豐津小學校になつたけれども、初の内は「裁錦小學校」と云つたくらゐで、色々古風な處も勿論あつた。雨の日の休みの時間などには、いつも廊下で組打ばかりやつてゐた。私はからだが小さいのでよく馬に乘せられたが、その代りいつでも組み敷かれてばかりゐた。

「利さんは學校で大かた毎日泣かされてばかりおいでる」と、志津野のおよさんか誰かが告げ口をしたので、私は兩親の手前、甚だ面目なく感じた事がある。實際、私はよく泣かされた。それと云ふのは、からだの小さいのが第一、而も年の割に級が上で、おまけに口が達者と來てゐるので、力の強い大きな友達の目からは、よほど生意氣に見えたのだらう。大體、先生からは可愛がられたが、それでも何かの罰で閾の上に直立を命ぜられて、ひどくなさけなかつた覺えもある。

十三の春、私は豐津小學校を優等で卒業した。そして大橋（今の行橋）の郡役所に呼び出されて、輿地誌略と日本外史とを御褒美に貰つた。

五　中學校

元は藩學育德館、私のはひつた時には縣立豐津中學校。臺ケ原といふ平野の一隅にある宮殿式の（實は粗雜な）建物で、高い竿の上にホラフが揚つてゐた。私は入學願書を持つて初めてそこに行つた時、實に堂々たるものだと思つた。「何でも此ごろは二百人から生徒があるさうぢや」と、母などが驚きがほに話してゐた。當時、豐前の國（舊小倉領）に只一つの中學校だつた。

育德館時代には、カステルといふ異人の教師がお雇ひになつてゐた程の新式であつた。本町にその教師の住宅として建てられた異人館があつた。私等の物を覺える頃には其の家には志津野肇さんの一家が住んでゐた。この志津野は、他の志津野と區別する爲、異人館志津野と呼ばれてゐた。カステルが蘭學であつたか、英學であつたか、それは知らないが、何しろ此の山の中まで西洋人を引張つて來た處に當時の意氣込が窺はれる。從つてマテマチカル・ジョーガラヒーも決して不思議でない。然し私等の入學した中學校は、まだほんの初期で、藩學としての長所は無くなつて、新制度としての發達は極く幼稚だといふ狀態であつた。

私は中學校に畫學といふ科目のあつたのに驚いた。小學校にはそんなものは無かつた。畫と云へば、芝居の寺小屋で見てゐる通り、子供として先生に叱られる筈の遊び事だと考へてゐた。それを學校で教へるとは何事だらうと思つた。然し別だん不平を鳴らすほどの事でもなかつた。殊に初めの中先生が黒板に白墨で手本の

畫を書いてくれて、それを我々が眞似するといふ位の程度のもので、實際ほんの遊び事であつた。只、私は天性の不器用で、どうしても畫らしい畫はかけなかつた。學校以外でも、四君子といつて、蘭、竹、梅、菊などをかいたりする、文人畫の流行があつて、それは私にも高尚な一風流と感じられて、幾らか眞似をして見た事もあるが、どうしても畫らしい恰好のものにならなかつた。

體操といふ事も中學校で初めて教はつた。これも何んだか馬鹿々々しくて厭だつた。殊に私は脊が低くて、いつでも列の最後になるのが厭だつた。卒業間近になつて、兵式體操が初めて行はれた時にも、可なりの反感を覺えた。

ついでに、當時はまだ總ての學校に唱歌といふものが無かつた。後に、學校で唱歌を教へると聞いた時私は變な事だと思つた。私の心持としては、畫も體操も唱歌も、皆な同じく、學校で教ふべき學問では無いのであつた。然し後になつて考へて見ると、それは一面には、私が自分の性質および體質に適しないものを嫌つたのであつたらしい。私の耳は、現に今でも、音樂に對して全くキクラゲ同樣である。尤も、子供の時、少しなりとも小學校で修練されてゐたら、これほどではなかつたかも知れない。

簿記、經濟學などいふ科目も私は厭だつた。私は、卒業近くなる頃には、將來、政治家もしくは學者になる積りだつたので、さういふ町人らしい學科が自分に必要だとは考へられなかつた。數學もあまり好きではなかつた。只だ幾何は少し面白く感じた。物理學、化學、生理學などには非常な興味を持つた。動物、植物、地理などは、味の出る處まで行かなかつた。それには、教科書の惡いといふ事もあり、受持教師の惡いといふ事も大いに關係してゐた。歷史では日本外史、十八史略など、漢文では文章軌範、論語、孟子など、これらは皆な熱心に學んだ。和文の土佐日記は餘り好きでもなかつたが、ちよつと珍らしいので面白いと思つた。

日本外史や文章軌範の受持に緒方先生と云ふ人があつた。號を清溪と云つて、善く詩を作つた。ヤギの樣な顎鬚があつたと思ふ。先生の中で一ばん年若で、一ばん生徒に好かれてゐた。幾ぶん生徒を友達扱ひにする處が、受のいゝ原因だつた。私は或る夏休みに、此の先生の處に通つて史記の列傳の講義を聞いた。唐宋八家文も少し教はつたかと思ふ。私の漢學は其の位の程度に過ぎない。

論語の受持の島田先生は、薄あばたのある、小柄な、極く靜かな人だつたが、緒方先生とは違つて大へん、丁寧な言葉で我々を大人扱ひにしてゐた。私はそれをこそばいい（クスグッタイ）樣にも感じたが、又一面には、少しく愉快にも感じてゐた。例へば、かういふことがあつた。

論語の中に、――（私は今、手元に論語を持つてゐないので、ウロ覺えのまゝで書く。少し間違つてもゐるだらうが、其の方が却つて面白いかも知れない）――子貢、子路、冉有、曾點、公西華などいふ孔子のお弟子さん達が侍坐してゐる時、孔子が『何ぞ各々其の志を言はざる』と、彼等の意見を求める所がある。そこを島田先生が大へん力をこめて、如何にも面白さうに講義してくれられた。元氣者の子路や、氣取屋の子貢などが、それ〳〵得意になつて、政治家としての大抱負を述べる。その他の連中も皆な謙遜はしながら相當大きな望み事を云ふ。然るに曾點が最後に、彈いてゐた琴を靜かにやめて、莞爾として、『私の志は大ぶん諸子のと違ひまする。卽ち、暮春には春服既になり、冠者五六人、童子六七人を連れて、溫泉にでも行つてブラ〳〵遊びたいと思ひます』と云つた樣な返事をしたので、孔子が『我は點に與せ

ん』と云はれた。島田先生の講義が此の曾點のくだりに入る時、先生自身も莞爾として、『堺さんあたりの定めてお好きになりさうな處ですが』と云つて、そして暮春 春服云々の講義に移られた。私は驚いた、そして恥かしかつた。然し嬉しくもあつた。そして何となく大人らしい自尊心を感じた。但し、其の時の私に曾點と共鳴しさうな性質が現はれてゐたらうとは考へられない。一體、私の何處をどう觀察して、島田先生はあんな事を云はれたのだらうかと、その後、幾度も思ひだして考へたりした事だつた。

孟子の白河先生は馬の嘶く樣な咳拂ひをする人だつた。或る日、物理の加瀨先生の家に私が遊びに行つてゐた時、白河先生もそこに來てゐられた。加瀨先生が鷄の御馳走をするといふので、私と誰か今一人の少年とが命を受けて、庖刀で其の鷄の首を斬り落した。すると、それを見てゐた白河先生が六かしい顏をして『あんた方は實に殘忍なことをするなア』と云はれた。私は先生が冗談にさう云ふのだと思つたが、直ぐに笑ひだしもしないので意外だつた。そして私が、殺すのが殘忍なら、食ふのは猶ほ殘忍だといふ意味の事を云ふと、『それぢやから君子は庖廚を遠ざくといふ事がある』と、先生は矢張り六かしい顏を續けてゐられた。此の先生の眞意は今以て私には分らない。作文の試驗の時、『雨中看插秧』といふ此の先生の出題に對し、私は大ぶん得意な一文を作つた。其の結句は今でも覺えてゐる。『淵に臨んで魚を羨まんよりは、退いて網を結ぶに如かず、家に歸つて書を讀む。』所が採點を見ると、それがヤット三十五點。そして先生は『少し善く出來過ぎた』と云はれた。つまり剽竊と目されたのであつた。私は非常に不平だつたが、遂に辯解もしなかつた。然し後になつて考へると、或はそれが、自分に氣のつかない、自然の剽竊であつたかと思ふ。俳句や歌の場合には、折々それに似た事があつた。けれども又、幾許も讀書をしない少年が記憶した他人の文章を、無意識の間に、其のまゝ自分の物として考へだすといふ事が有り得るだらうか。これは今でも多少不愉快な疑問として、私の心中に殘つてゐる。

赤壁の賦を講義して貰つた、西玄理といふ老先生があつた。何んでもモウ八十くらゐで、頭には毛がなく、口には齒がなく、そしてその大きな顏には皺と斑點とがあつた。然し此の老先生が、『夜中に一羽の鶴が、ツルン、コロンと鳴いて……』などと詩的な講義の仕方をすると、私等は何とも云はれぬ樣な尊さを感じた。私は此の先生に、極く短かい十行ばかりの作文(その頃の作文は總て漢文)を出した時、其の餘りに短かい故を以て叱られる事を豫期してゐた。所が、どうだらう。初から終まで全部に朱丸の圈點がついてゐた。私は一體、文章を短かくし過ぎる癖がある。それは技巧上の癖でもあらうが、根本にさういふ頭の癖があるらしい。(稿料を稼ぐには餘ほど損な質だ。尤も、此の『傳』は餘り簡潔でもない。)

數學の先生吉村破凝六さんは酒豪であつた。教場でも我々に酒くさい息ばかり吹きかけてゐた。あの先生の息に火をつけるとキット燃えると云はれてゐた。兎にかく生徒中に數學の不得手な者が多いばかりでなく、又屢々數學無用論が唱へられたりするので、吉村先生は盛んに數學の效用を宣傳してゐたが、惜しいかな數學は測量や建築などに必要だと云ふに過ぎなかつた。私は其の後、東京に於いて、數學は實際上の應用は別として、一般に頭を論理的に鍛錬する效果があるといふ話を聞かされた時、非常に深遠な道理に接した樣な氣持がした。若し中學校で其の深遠な道理に接してゐたなら、モット數

學が好きになつてゐたかも知れない。吉村先生は或る時、私に『代言人』といふ仇名をつけた。今の辯護士の事を其の頃は『代言人』と云つた。私のおしやべりは餘ほど著しかつたものと見える。

以上の諸先生は皆な國の士族であつた。他國から來た人の中、稻垣先生は病身でもあつたが無性な人で、椅子に腰かけたまゝ、からだを半分うしろにねぢむけて、ものうさうに黑板に字を書くといふ風で、快活な少年に好かれる筈がなかつた。從つて私は、先生の受持なる經濟學と簿記とが一層厭だつた。

前にチョト記した加瀨先生は理化學と數學とを受持つてゐたが、よく大きな、赤い表紙の、フランス語の本を教場に持つて來たりしてゐた。此の人は酒好きで、其の豪放な無邪氣な所が、私等を喜ばせてゐた。自分の設計で理化學の教室を新築させたほど、教授上には熱心だつたが、私は或る時、先生から其の實驗室に引き止められて、砂糖水にアルコールを入れたのを飲まされた事がある。私は此の人に於いて、初めて少し常規を逸した、愉快な人物に接觸したのであつた。

英語が初めて學科目に這入つた時、私等の嬉しさは喩へるに物が無かつた。先生には、大澤友輔といふ、脊のスラリとした、鼻の高い、髮の美しく縮れた、若い氣の利いた、どうしても豐津あたりの人間と種の違ふ人が來た。初めは餘ほど暫らく、スペルリングばかりをやつた。ベー、ビー、バイ、ボー、ビュウ、バイからやりだして、イン・コム・プレ・ヘン・シ・ビ・リ・チーといふ最も長い綴りの字まで、ずゐぶん面白くない事を、さも珍しさに釣られて、大聲で稽古した。此の先生はどういふわけか間もなく罷めて歸つたが、ズット後で新聞で其の名を見た時には、『大詐欺師』の肩書がついてゐた。

今ひとり花見先生といふのがあつた。これは豐津出身の人で、ズイ(The)ソン(sun)イズ(is)オップ(up)といふ調子で教へてくれた。その頃、私が母に、英語ではおかあさんの事をモーザアと云ふと話したら、母が、厭な事ぢやなアと答へた。其の次に須田辰次郎といふ先生が來た。これは口髭の綺麗な、洋服の着こなしのキチンとした、立派な紳士で、慶應義塾出身だと云ふ事だつたが、英語の教へ方はホンの通り一遍で、サッパリ面白くなかつた。この人はたしかに後にエライ實業家になられた筈だ。

最後に理學士松井元治郞さんが來た時、私は初めて少し本當に英語を學んだ。松井先生は純正化學が專門で、大學を出たてのホヤ〳〵で、瀟洒たる青年であつた。大學の卒業證書を教場に持つて來て、笑ひながら拜む樣な眞似をして、私等に見せたりした。何しろ年は僅二十四五で七十圓からの月給を取るのだから、大變なものだつた。七十圓と云へば、どんなに安く見積つても、今日の五百圓には相當する。前に話した異人館志津野は豐津の學務委員などした人だが、松井先生の來た時、一度わざわざ訪問して其の人物を鑑定した。曰く『學士も矢張り只の人間で、別だん角も生えちや居らん。』私に取つては、松井先生は化學の先生たるよりも英語の先生で、其のお蔭で私は、豐津中學卒業の水準よりは、少し高い英語の力を養はれてゐた。松井先生は後に京都の高等中學の教授になられた事もあり、大阪の製糖會社の技師長とか社長とかしてをられた事も聞いたが、今はどうして居られるか知らない。其の弟の慶四郞さんは外務大臣まで立身されたが。

六　士族の子と有產者の子

中學校の諸先生の事を話して、校長の事を話さないのは少しをかしい樣だ。然し話す事がな

い。校長は入江淡といつて、エライ學者だと云ふ事ではあつたが、我々生徒とは直接何の關係も無かつた。叱られた事もなければ、譽められた事もない。要するに私は、入江校長から何等の感化をも受けなかつた。

　その他、私の中學生活は誠に無事だつた。只だ私は『才子』——その頃、さう云ふ言葉が流行してゐたが——その才子の一人に數へられ、幾らか好い氣になつて『一番』で卒業した。但し同期の卒業生は僅かに十人足らずで、一番も二番も大して問題ではなかつた。實際、私は勉强らしい勉强をした事もなく、學科の重荷とか、競爭の苦しさとかを感じた事は、少しも無かつた。其の點では、近年の學生などに比べて、幸福だつたと思ふ。

　然し私は中學校で、初めて士族以外の人間に接觸して、少し世の中を知りはじめた。豐津の町の者は、一人も中學校には來なかつた。豐津の者で中學校にはひるのは皆な士族であつた。豐津中學校は藩學育德館の後身として、士族の學校たるかの觀があつた。町の者や、田舍の者（農村の住民を指す士族の言葉）には、高等の教育を受ける資格が無かつた。私にはそんな風に思はれてゐた。所が實際は必ずしもさうで無かつた。私は初め、町の者と云へば錦町の人々、田舍の者と云へば馬や牛を引いて米や薪を賣りに來る人々より外には知らなかつたが、町人の間に富豪があり、農村に地主があり資產家がある事を漸くにして學び得た。中學校には、それらの地主、資產家、富豪の子弟が入學してゐた。そしてその少年等は、言葉や風俗に於いて、多少は士族の嘲笑を招くに足るものがあつたに係はらず、種々の點に於いて能く士族の子を凌駕し威壓するに足るものがあつた。即ち彼等の或者は、其の粗野剛健の風に於いて、士族の子のグヅ共と比べものにならなかつた。又彼等の或る者は、其の俊敏な素質に於いて遙かに士族の子の凡くらに立ち優つてゐた。更に又、彼等の或者は、其の富裕な生活から生じた氣品に於いて貧乏たらしい士族の子を見下すに足るのであつた。或る大庄屋の息子や、或る大町人の息子などは、溫和らしい貴族的の容貌や風采に於いて、貧弱なる下級士族の子等と類を異にするの感があつた。然し種々な點を差引いた所で、我々士族の子と、それら有產者の子とは、ほゞ平均する地位にあつたものと考へられる。亡び行く階級と、勃興しつゝある階級とが、暫らくそこで行き違ひに机を並べたわけである。

　この對立は、大體上、通學生と寄宿生との對立として現はれてゐた。寄宿生と通學生との間に反目を生ずるといふ程ではなかつたが、自然、多少、氣風の相違があつた。つまり寄宿生は亂暴であり放縱であつた。それだけ元氣であり、活潑であつたとも云へる。或る雪の積んだ日、晝休みの事だつたらうと思ふが、寄宿生の一群が運動場に出て來て、何か頻りに騷いでゐた。私は教場の窓からそれを見降して、ツイ思ひ浮んだまゝ『奴輩勞す！』と大きな聲で呼びかけた。それは、その前日かに讀んだ日本外史の中の、木下藤吉が部下の者をねぎらつた時の言葉で、緒方先生がそれを面白をかしく講義したのであつた。すると、寄宿生群の間にゐた內野辰次郎といふアバレ者が、行きなり教場に飛びあがつて來て、私を引ッつかまへて運動場に引ずりだし、雪の中に押し仆して、私の目から口から耳にかけて、散々雪の玉をブッつけた。內野は大きな男でもあり、年も一つ二つ私より上なので、私は滅茶々々に成敗されたのだつた。このアバレ者が、今は豫備の陸軍中將で衆議院議員になつてゐる。

　その頃、生徒の中にはまだ靴をはく者も、洋

服を着る者もなかつた。上草履といふ物も全く無かつた。梅雨の頃などには、――豊津は赤土で殊に道が悪いので、――私など毎日ハダシで通つた事もある。私は元來、よく下駄の緒を切らしたり、歯を缺かしたりするので、それを父に叱られるのが辛くて、それほどならイッソ下駄なんど無くてもいゝといふ意地もあつたのだつた。さういふ野蠻な生徒等の間に、或日、突然、洋服を着て靴をはいた一人の生徒が現はれた。本人もよほど極りわるさうにして、遠慮らしく靴をギュウ／＼鳴らせたりしてゐたが、外の生徒等は大變な囃し方で、丸で先生のやうな生徒だといふ事に批評が一致した。其の生徒は、私も至極心安くしてゐたのだが、椎田の町の大きな商店の息子で、錦町の新店といふ雑貨店が親類なので、そこを宿にして、通學してゐるのであつた。

私と一緒に卒業した者の中、私が今思ひだせるのは六人だけだが、其の内四人が士族、二人が平民だつた。士族連では、青木、生石、小石。小石榮治君はその頃から既に頬髯の剃りあとを青くしてゐるほど大人らしい人で、いひなづけがあるとか云つて冷かされたりしてゐたが、卒業後、全く消息を聞かない。青木（舊姓井村）健彦君は小學校からの親友で、非常に利口な才物だつたが、九州鐵道の驛長を勤めたりして、不幸にして早く死んだ。生石久間太君も鐵道に勤めたりしてゐたが、今はどうして居るやら。（生石君や青木君については、まだ外に書くべき機會があると思ふ。）平民側では大森昇太君、どつしりした人物でもあり、學問もよく出來たが、後に小學校の校長をしてゐた事を聞いたきり、消息に接しない。恐らく今では、地方の有力者に成つて居るだらう。最後に杉元平一君、神崎といふ酒造家の二男だが、兵役の關係上、他家を繼いだ形になつてゐた。私はこの杉元君と二人一緒に東京に遊學した。後に色々話がある。この杉元君は今、神崎姓に復して、三井家の有力な人物になつてゐる。

ついでに杉元君の兄さんの神崎勳君（今の衆議院議員）も、其の頃、をかしい事には、私等より下の級に居た。多分これも、兵役の關係上、もと／＼中學校などには行かぬ事にしてゐた人が、急に後ればせに入校したのだらう。其の頃はまだ色々の意味から中學校に行かない人達があつた。芝尾喜多夜叉君は私などより少し先輩だが、これはお父さんが偏屈な漢學者であつた爲に、中學校には來ないで『稗田の塾』にはひつてゐた。稗田の塾は有名な村上佛山の開いた、維新前からの學塾で、末松謙澄さんもそこの出身である。井伊大老の櫻田門の變を詠じた佛山の詩、『落花紛々雪紛々、雪を踏み花を蹴つて伏兵起る、白雪斬り取る大臣の首、落花紛々雪紛々』は人口に膾炙してゐた。そんな事からして、私等は何だか其の塾の事を床しく思つてゐた。あそこの塾生は皆な銘々、米をかついで行くのださうだとか、あそこでは皆な二食で勉強するのださうだとか、そんな事まで何だか大へん有りがたい様に噂したりしてゐた。豊後の廣瀬淡窓の塾の事なども、折々噂に聞いてゐた。

七　神道、儒道、自由民權

斯様な私は、一方には佛山塾の名殘、一方にはホヤ／＼な青年理學士と云つた風に、新舊両面の感化を受けて育つて來た。そして思想の系統としては、儒教と、神道と、自由民權主義とを注入されてゐた。

神道といつて、別にそれを信仰したわけでもないが、維新前後の排佛毀釋の風が大ぶんそこらに殘つてゐて、幾らかその感化を受けた。國史略の中に、木下藤吉が小僧にやられた時、僧

は乞丐の徒なり、學ぶに足らずと云つて飛びだしたといふ話がある。その外、國史略や皇朝史略には敬神排佛の字句が到る處にあつた。それから村上昇平といふ若い辯者が豐津に來て盛んに佛法を罵倒し、遂に錦町のお寺の坊さん達と問答をやつた事がある。私等子供達は村上崇拜で、問答の席上、村上のうしろに坐つて、聲援したものだつた。然し私は其の後、その同じ寺で、大内青巒氏の、『非有非無』といふ題の、佛教演說を聞いて、ひどく感服した事もある。私の家は元禪宗だつたさうだが、父は早く斬髮になつたのと同じ樣な氣持で、その頃、神道になつてゐた。それで折々神主とも坊主ともつかぬホウジ ウ（方丈？）といふ者が、大きな琵琶を持つてやつて來て、神棚の前で其の琵琶を彈きながら、何かノリトの樣なものをあげてゐた。そんな譯で、私は神社に對しては、相當の崇敬心を以て禮拜したが、佛寺佛像に叩頭する事は屑よしとせぬ氣分があつた。

儒教と云つても、たかぐ〜論語孟子あたりの感化のだが、修身齊家治國平天下などいふ考へ方は、士族の子の頭には入り易いものであつた。私は自分の家の貧乏なことは善く知つてゐたが、さうかと云つて直接、衣食に不自由をさせられた事はなし、只だ學校の教科書――それは大部分、學校から貸與されたが其中の或部分――を買ふ時、父が容易に承諾してくれなかつたり、或は其結果、教科書なしで濟ましたりした位が、唯一の苦勞だつたのだから、自分の將來を考へるについても、衣食の計などといふ事は天から問題でなかつた。そこで、修身齊家と云ふのも固より總て道德的の意味であつて、つまり治國平天下が士人たる者の目的であつた。孝經も少し讀まされたが『身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざる、孝の始なり、身を立て、道を行ひ、以て父母の名を現はす、孝の終なり』といふ樣な事が、餘ほど實際的の指導になつた樣に思ふ。そこで中學校を卒業した時の私の希望は、政治家になるか、學者になるかであつた。そして學者と政治家とが、そんなに違つたものでなく考へられてゐた。島田先生は折角、曾點を以て私に擬してくれたけれども、私は寧ろ子貢子路であつた。子貢ほどの自惚や氣取は無かつたらうが、子路の卒直と正直とを學ぶ樣な氣分があつたかと思ふ。

それから自由民權の思想。これはどういふ順序で私の頭の中にはひつて來たかよく分らない。長兄が東京にゐた時、朝野新聞を送つてくれたのは、蓋し可なりの感化力であつたらうと思ふ。福澤諭吉さんの物も、前記の世界國盡し以外に、何を讀んだか記憶がない。中學校の先生の中には、この方面で智識を與へてくれた人も、感化を與へてくれた人もない。只、兄（本吉の兄）が其の方面に於ける唯一の指導者であつた。が、それとても大した事はない。福岡日々新聞を何時頃から讀んだか、どうもハッキリした記憶がないが、何處かで多少は必ず讀んでゐたに相違ない。兎に角私は當時、漠然ながら自由民權主義の追隨者であつた。同級の（前記の）青木などと演說會や討論會の眞似事をやつた時、『一院制と二院制との可否』といふ題目で論議した事を覺えてゐる。ついでに、兄などの時代には、中學校で演說會をやらせてゐたのだが、私等の時にはヤメになつてゐた。それだけ學校が進歩して、保守的になつてゐた。それで私等は御内家の空部屋を借りて、そんな會合をやつてゐた。何しろ國會の一院制と二院制との可否を討論するほどの少年共だから、自由黨の運動などについて、大體の智識は持つてゐたに相違ない。板垣退助さんが刺された時、板垣死すとも自由は死せずと叫んだ事など、少年の心を刺激せずには置かない筈である。それで

當時私等が崇拜の中心とした先輩は、征矢野半彌さんであつた。征矢野さんは育德館出身の秀才として有名であつたが、亦た國會開設請願運動の卒先者として有名であつた。私はその頃まだ、直接、征矢野さんに會つた事は無かつたが、豐前に於ける自由民權の代表者として、常にその德風を想望してゐた。

斯くて私の儒教から來た政治家志願は、自由民權運動と一致する事になり、政治家となる事は卽ち國會議員となる事だとも考へられてゐた。

八　東京遊學

中學校の卒業生は大抵皆な東京に遊學することを望んでゐた。舊藩主小笠原家の補助と、舊藩出身先輩の寄附とで設立された育英會といふ團體があつて、官立學校への入學志願者は、多くはその貸費生にされてゐた。國の先輩には、小澤武雄、奧保鞏、小川又次、その外、陸軍の軍人として出世してゐる人が多かつたので、士官學校志願が大いに奬勵されてゐた。私等の同期卒業生の中で、青木、生石の二君は初め其の志願で上京した。杉元君と私とは、內々で少し軍人志願を輕蔑して、大學を志願した。それは一つには、二人ともチビで、第一、體格が軍人向でなかつたのに依るかも知れない。

是より先、その前年、私は稗田の中村といふ家から養子に貰はれた。後で聞けば、豐津中學校第一等の秀才を選拔したのだつたさうだ！　それで私は、忽ちにして中村利彥となり、其の養家の便宜に依つて、安々と東京に遊學する事が出來た。育英會の貸費生となるにしても、少々は其の外に足しが入るので、堺家の財產では迚もそれに堪へられない筈であつた。

斯くて私の前途は苦もなく自然に切り開かれた。運命は常に私の爲に笑つてゐるかの樣な心持がせぬでもなかつた。兎に角私は意氣揚々として故鄕を出た。時に明治十八年春四月。十七歲。

*　　*　　*　　*

以上、私の豐津時代をずゐぶん亂雜に、前後の次第もハッキリさせずに書きなぐつた。それは記憶が正確でないからでもあるが、又必ずしも精密に年月を追ふ必要はあるまいと考へたからでもある。然し行燈の事を書いて置いて、それの進化を書き落したなどは本當でない。行燈の第一進化は、種油の皿が石油のカンテラに取換へられた點に在つた。光度は大いに加はつたけれども、行燈としての外形は元の儘であつた。それから第二の進化として釣ランプが來た。これで燈火の外形が全く變化した。そして其の釣ランプのブリキの笠の下に、三分心の小さい黃色い火のとぼれてゐるのを、何といふ明るさだらうと感嘆したのであつた。

ランプと牛肉と、どちらが早かつたか分らないが、兎にかく私は豐津で牛肉の味を知つてゐた。臺ケ原に屠牛所が作られてゐた。中學校の晝休みに、そこの屠殺を見に行つて、目かくしをされた牛が、額の眞正面を鐵の槌で打ちおろされ、ゴト〳〵と足踏みをしてドタリと仆れたのを見て、非常に厭な氣持がしたが、それでも矢張り肉はうまかつた。

第二期　東京學生時代

一　上京の途中

明治十九年四月、私は初めて生國豐前の地を離れて東京に「遊學」した。その頃、東京に「遊學」するのは、今日、ヨーロッパに「留學」するのと、殆んど同じくらゐの珍しさを感じたの

で、昂奮、緊張、歡喜、勇躍、十七歳の少年は洋々たる前途の希望に燃えた、

所が、其の希望に燃えた、得々たる田舎少年の姿は、さぞ見すぼらしかつた事だらう。年弱で十七で、而も小柄で、要するに貧弱なチビで、それが土色(もしくは煤色)の顔をして、手製のシャツを着て、まだ帽子といふ物をかぶる事も知らずにゐた。連の杉元平二君、今の神崎平二君(三井信託副社長!)も同年で、同じくチビで、私より少し色の白いのが僅かの取りえくらゐなもので、大抵おなじやうな貧弱さだつたらう。而も其の少年が、私の養父と養母と、外に二人の同行者とに交つて、立派な田舎者の一行を作りあげてゐた。

この田舎者の一行が小さな汽船に乗つて神戸の港に着いた時、彼等はそこで初めて電氣燈といふものを見た。神戸の船宿で朝早く目が覺めて、ポオー、ポオー、といふ汽笛の音が碇泊の船々から幾つも幾つも引き續いて聞えた時、それがどんなに珍しく私の心をそそつたか。私は今でも折々、寢ざめに汽笛の音を聞く時、薄靄のかゝつた神戸の港の景色を思ひ浮べる。

斯くて、貧弱な二秀才を交へた田舎者の男女一行は、初めて汽車といふものに乗つて神戸から大阪に出で、京都を見物し、大津から小蒸汽で琵琶湖をわたつて伊勢に参宮し、四日市から汽船に乗つて横濱に着いた。その頃、東海道にはまだ汽車が全通してゐなかつた。私は船に弱くて、遠州灘あたりで、ヘドの吐きつゞけだつたが、それでも船室の丸い小さい窓から、遙かに雪の富士を浪の上に望んだ時、神戸のポオーに劣らないほど、珍しさの昂奮を感じた。

一行は横濱から汽車で新橋に着き、それから人力車で市ケ谷に向つた。私は其の車の上で、久しく戀ひこがれてゐた東京が、大して『花の都』とも見えないのに、先づ失望した。只一つ、途中の濠ばたで見かけた人々の中に、春の高い、袴をはいた、二十餘りの學生らしいのが、饅頭の上に房の玉をつけたやうな帽子をかぶつて済まして行くのが、極めて異樣に感じられた。

二　同人社、神樂坂

一行の車がおろされたのは市ケ谷砂土原町馬場素彦邸であつた。これは私の養父の弟で、陸軍中佐、徴兵課長として陸軍省に出仕してゐる人であつた。中佐と云へば、今日では安つぽく聞えるが、その頃の佐官は大したもので、馬場邸は可なり堂々たる邸宅であつた。

私の養父母は間もなく歸國した。私は馬場の叔父の監督の下で、近處の下宿屋に杉元君と一緒に下宿して、小石川の同人社に入學した。同人社はスマイルスの『自助論』の譯者として有名な中村正直氏の創立した英學塾で、江戸川のほとりにあつた。私は初めて東京の櫻を江戸川で見た。同人社では、坪内雄藏さんのクライヴの講義が、軍談か講釋を聞く樣で面白いといふ評判だつたが、私の級ではまだそれが聞かれなかつた。私は只、そこで初めて西洋人から英語の會話を教はつたが、嬉しくて堪らなかつ。初めての會話の時間に、其の西洋人がゴールド・フィッシュと云ふのを聞いて、ハハア金魚の事だなと思つたほど、それほど私は聰明だつた。

同人社には、私等の外に、同鄕の友人がまだ數人ゐた。私は初め主としてそれらの人達とばかり交はつてゐた。その頃では、同鄕人といふ事に餘ほど深い親しみが感じられてゐた。あの男は他縣人とばかり交際してゐるなどと、多少非難らしく噂される人もあるくらゐであつた。殊に私等は、小笠原家と豐前出身諸先輩との保護の下に在る、育英會の貸費生であつたので、其の育英會關係者の間には、自然一種の親し

みがあつた。

育英會では、官立學校の生徒、若しくはそれの志望者に限つて貸費するのであつた。それで大體貸費生は士官學校を志望する者と、帝國大學その他を志望する者の二種に別れ、前者は成城學校に入り、後者は同人社その他に入つてゐた。前にも云つた通り、國の先輩には軍人が多かつたので、士官學校志望者が大いに奬勵されてゐた。馬場の叔父なども、私の大學志望を餘り喜んではゐなかつたらしい。殊に私が何かのついでに、國會議員になりたいと云つた時、叔父は餘ほど不興であつた。軍人を志望しないまでも、せめて官吏を志望して欲しかつたのだらう。

私の東京生活の最初の半年間は、神樂坂を中心としたものであつた。下宿は三四回もかはつたが、皆な神樂坂の近處だつた。初めて寄席を聞いたのも神樂坂だつた。初めてアンパンを買つたのも神樂坂だつた。初めて蕎麥屋にはひり、初めて牛肉屋にあがつたのも、皆な神樂坂だつた。今でも私は神樂坂を通るたびに、變に懐かしいやうな、センチメンタルな氣持がする。

それもその筈だらう。初めて父母に離れ、初めて故郷に離れて、大都會の間に下宿生活をしたのだもの。如何に前途は洋々でも、まだ子供氣の失せない少年の心は寂しかつた。或る日の夕暮、私は下宿の二階の窓から西方の空を眺めて、何とは知らず泣きだした事がある。

三　共立學校

其の年の夏、私は第一高等學校の入學試驗を受けたが落第した。その時、同鄕者の間で及第したのは私等より少し先輩の大森藤藏君一人だつた。そのお祝として私等五六人は本鄕の越知勝で牛肉をおごられた。(大森君は今、故鄕の豐津中學の校長をしてゐる。)

其の秋から私と杉元君とは神田淡路町の共立學校(後の開成中學)に轉じた。同人社は有名な學塾であつたけれども、實質上には既に衰運に向つてゐる事が發見されたのであつた。それで或者は東京英語學校(後の錦城中學)に行き、或者は共立學校に行つた。共立學校の校長は鈴木知雄といふ人で、高等中學の英語の教師だつた。從つて共立學校から高等中學への入學率が最も多いといふ評判だつた。然し實際の入學率は、東京英語學校と伯仲で、兩校が丁度同じほどの人氣を持つてゐた。

或日、鈴木校長が、腹の馬鹿にふくれた、チョット西洋人らしい所のある、大きな紳士を私等の教室に案内して來て、これは高橋是淸さんと云つて、本校の爲に色々世話をして下さる人ですとか何とか紹介した。あの人がこの學校の金主ださうだと、あとで皆が噂をしてゐた。又あの人は非常な冒險家で南アメリカに行つて奴隷に賣られた事があるさうだといふ噂も傳はつた。それが後に總理大臣になる人だとは、思ひもよらなかつた。

共立學校の先生には大學の學生が多かつた。後の文學士長澤市藏さんはトドハンターの代數を教へてくれた。僕は哲學が專門だけれど、數學も中々出來るんだよ、などと云つてゐた。非常に好人物だといふ感じが殘つてゐる。後にニューヨークの總領事か何かになつてゐた宮岡恒次郎さんは、スキントンの文法を教へてくれた。宮岡さんは好男子で、發音が好かつた。(私は先年來、折々宮岡さんを丸の内あたりで見かける。今ではたしか辯護士をやつてゐられるやうに聞いた。今でも好男子で、キチンとした洋服姿だが、髭だけは白くなつてる。)今どこやらの大使か何かになつてゐる日置益さんは、英語を教へてくれた。讀み方の氣取つてるのが

評判だつた。楠崎さんといふ先生か、寒くなつてからも夏服の金ボタンでやつて來るのが、又一つの評判だつた。それが多分、大阪で有名な辯護士になつてる人だらうと思ふ。西洋人の先生のミスターコックスは、いつも呆れた樣な顔をした、實に愉快な好人物だつた。

學生の中には、淸野長太郎君（今の神奈川縣知事）、小原騂吉君（前の內匠頭）、桑木嚴翼君（今の文學博士）などがあつた。先年何處やらで桑木君に出會つた時、昔の話をして見たが、桑木君は私を記憶してゐなかつた。然し私の方では、當時まだ東京に來て間のない田舍者として、東京育ちらしい、活潑な可愛らしい桑木君を、羨ましいくらゐに思つてたのだから善く覺えてゐる。小原君は、その頃はまだ男爵では無かつたけれども、頗る貴族的であつて而も野蠻な、我儘であつて而も無邪氣な坊つちやんで學生仲間には「專公」として有名だつた。彼の當時の名は、騂吉でなく、專吉だつた。馬場孤蝶君も丁度その頃、この學校にゐたさうだが、級が違つたものか、お互ひに記憶がない。（尤も、その時の私は堺姓でなく、中村姓だつた。）

其年の秋、國から犬塚武夫、横山直樋の二友人がやつて來た。私は半年ばかりの先輩として、二君の引纏し役を勤めた。二君も共立學校にはひつた。それで前記の杉元君と私と、四人ながら皆んな脊ひくだつた。横山君だけがほんの少しばかり高かつた。（犬塚君は後に不動銀行の重役になり、今はたしか東京府民銀行といふのを經營してる。横山君は何んでも久しく朝鮮の銀行に居ると聞く。杉元君は前にも云つた通り、先には三井銀行に居り、今は三井信託にゐる。當年の私の相棒は、どういふわけか、斯くて皆な銀行屋になつてゐる。）

共立學校はずゐぶん汚ない學校だつたが、然し、私等は非常に愉快だつた。何しろスヰントンの萬國史、マコレーのクライヴ傳、グードリッチの英國史、アーヴィングのスケッチ。ブックなど、いろ／＼六かしい英語の本を讀むのが嬉しくて堪らなかつた。ロビンソンの算術、トドハンターの代數、ジョーヴネーの幾何など、總て英語でやるのが、それが亦非常に嬉しかつた。或時、學校の記念日か何かに、或る先生が演說をやつて、「今にこの共立學校の塵埃の間から幾多の人傑が輩出する」と云つたので、私は其の後、敎室にほこりの多いのが餘り厭でないやうな氣がした。

私等の生活舞臺は斯うして牛込から神田に移つた。駿河臺鈴木町の崖の上の下宿屋から九段の方を見晴した景色は本當によかつた。その頃、すぐ崖下の三崎町一圓はまだ練兵場だつた。或日、降りつゞいた雨の中に其の景色を見晴らしてゐると、崖に茂つた樹木の青葉に、大小の蝸牛が無數に這ひずつてゐるのが、非常に面白く私の目にとまつた事を覺えてゐる。

翌年の春頃には錦町の武藏屋といふ新築の大下宿屋の六疊の一室に、例の四人が一緒にはひりこんだ。六疊に四人は勿論少し窮屈だつたが、それで無くては、三圓五十錢の豫算で此の新らしい堂々たる下宿屋にははひれないのであつた。

或時、共立學校で、或る學生が「ソワレーに行く」といふ話をしてゐるのを聞いて、其の「ソワレー」が何の事だか分らなかつた。あとで聞くと、夜會といふ事だつた。丁度その頃、政府の當局が條約改正に骨を折つてゐた時で、歐化主義が盛んに奬勵され、鹿鳴館の假裝舞踏會などいふ事が流行してゐた。其の流行の波の一端が、私にソワレーといふ言葉を覺える機會を與へたのであつた。

又或時、同じく共立學校で、或る學生が「一里

半なり一里半』といふ歌を歌つてゐたのが私の注意を引いた。あとで聞けば、その頃、帝國大學の外山正一氏の主唱で『新體詩』といふものが試作されてゐた。そして右の『一里半』は卽ち其の一つで、イギリスの詩の反譯だと云ふので、何だか無性に有りがたくなつた。それから學生間にそれの原詩が流行して、『ユアース、ナット、ツー、リーズン、ホワイ』『ユアース、バット、ツー、ヅー、エンド、ダアイ』などと得意になつて諳誦してゐた。

四　當時の物價

當時の下宿料は三圓五十錢內外が普通だつた。私が杉元君と一緒に初めてはひつた牛込の下宿を二圓六十錢だつたが、それは破格で、思ふに、馬場家から我々の爲に然るべき下宿を探してやる事を命ぜられた人が、出來るだけ安いのを然るべきと解釋して、忠義顏に最下等の處を擇んだのだつたらう。

當時の物價の標準としては、蕎麥と湯とが各一錢三厘だつた。然し、それを今日に比べると、前者は約八倍、後者は約四倍の騰貴だが、どういふわけのものだらう。

私が初めて西洋料理といふものを食つた時、それが一人前十七錢だつた。それでもスープ、パン、コーヒー、ケーキの外に、二品か、三品かの皿があつた。紺足袋が一足十八錢には驚いたが、眞黑い紺足袋をはかないでは書生の體面に關するので、奮發して買つてゐた。

小川町で五錢五厘で食へる牛屋があつた。肉が一人前四錢、飯と新香が一錢五厘だつた。或時、例の四人組が其の牛屋でたらふく食つて歸らうとする時、勘定方を受持つてゐた犬塚が、何か譯ありさうに早く早くと頻りにせき立てるので、皆がドン〳〵梯子段を降りて、下足を待ちかねて表に出ると、犬塚はドン〳〵眞先きに走り出して、駿河臺の方に行つてしまふ。何だか譯が分らないが、我々も其あとについてドンドン走つて行つた。すると、戶田の邸の塀まで行つて、モウ大丈夫だと云つて犬塚が話すのを聞けば、三十幾錢かの勘定に對して五十錢銀貨を出したら、女中が二十幾錢かの釣を持つて來たと云ふのであつた。つまり四人で十錢まうかつたので、向うの奴の氣のつかない內に姿を消したわけだつた。

その頃、學資は月七圓ぐらゐが標準で、私は育英會から五圓づつ貸與され、外に二圓、或は二圓五十錢、馬場家から貰つてゐた　それを君はらくだと云つて、或人からは羨まれた事すらある。實際、五六圓でやつてゐる者もあつた。

私が國を出る時、實家の母が、まさかの時の用心にと云つて一圓札を一枚くれた。私はそれを內證金として、後生大事に持つてゐた。所が或日、神樂坂で友達が四五人よつて、ぜひ牛肉が食ひたいと云ひだした時、たうとうそれが『まさかの時』になつた。私の大事な一圓が忽ちにして半分以上、飛んでしまつた。

五　寂しい心

學校と、下宿屋と、飮食店以外に於て、私が人の家にはいる機會は幾許も無かつた。

第一は云ふまでもなく馬場家。こゝは叔父の家で、而もそこの娘の一人が（まだ僅かに七八歲ではあつたが）、私の將來の妻になる筈で、國元に連れて歸られてゐるといふ關係であつたが、然し幾人もの書生が世話になつて出入する家の事だから、それらの釣合上、私をも他の書生並に取扱ふといふ申渡しがあつて、私は叔父さんに對しても、別だん深い親しみを感ずる事が出來なかつた。私は馬場家に於いて家族的に飮食させられた事は滅多になかつた。馬場家の

人々の中で、只ひとり私が親しみを感じたのは玄關番の竹中清君であつた。（竹中君は後に大阪毎日新聞の有名な記者として久しく神戸に働いてゐた。）

奧保鞏さん（今の元帥、そのころ少將）は私の養父の甥に當つてゐた。これも牛込に大きな邸があつて、私も幾度か行つた事がある。或時、をばさんが御病氣だと云ふので、私は其の見舞に行つた。病室に通されたが、外に幾人も見舞客はあるし、極りが惡くて、私は只一つお辭儀をしたばかりで、何も云へなかつた。結局、無言のまゝで、又一つお辭儀をして引下つた。ここにも何等の暖か味が無かつた。

間宮家は麹町の番町にあつた。をぢさんは陸軍の監督（大佐相當）で仙臺の師團に行つて居り、をばさんが其の留守をして居るのであつた。こゝには私の大をば（父のをば）も居り、多少の親しみを感じたが、それでも毎度出入りする程の關係には成らなかつた。外に一二の親族つづきもあつたが、それも大して心安くなれなかつた。

小笠原伯爵家に對しては、まだ何となく特別な敬愛を捧げる氣持であつた。市谷河田町の邸に御年始に伺候して、大勢の同藩人と共に伯爵の謁見を賜はり、其あとで膳部を下されたりしたのは、大へん嬉しかつた。

本吉の兄は慶應義塾に來てゐた。彼は英語を學ぶべく、長崎に行き、福岡に行きしてゐたが、矢張りどうしても東京で無ければ駄目だと云ふので、强ひて內の許しを得て上京したのであつた。其の時にはもうお浪さんと結婚してゐた。私は折々兄を慶應義塾に尋ねたが、日比谷の練兵場を横ぎつたりして行く道がずゐぶん遠かつた。然し兄と一緒に食ふ、塾の寄宿舍の暖かい飯はいつもうまかつた。兄は間もなく國に歸つた。家庭の事情が永く遊學を許さないのであつた。

自分にはハッキリ氣がついてゐなかつた樣だけれども、その頃の心は寂しかつた。

六　第一高等中學校

二十年の夏、私は第一高等中學校の入學試驗に及第した。その頃、例の四人組は本郷あたりに分散して、私は元町の下宿にゐたが、入學試驗の成績を發表される日、早朝から見に行くのも餘り慌てた樣で殘念だと云ふ氣持もあつただらう、ゆつくり朝飯を食つてブラ／＼出かけると、水道橋の邊で、たしか犬塚が向うから來るのに會つた。どうだと云ふと、君の名と杉元の名はあつたと云ふ。さうかと云つて平氣な顏はしたが、實は先づ善かつたと大きに安心した。實際、その時の心持は、意外な樣でもあつたし又當り前の樣でもあつた。

その時、國の者で及第したのは、杉元君と私と、外に小關雅樂君と加來源太郎君とであつた。小關君は豐津中學で私より大ぶん先輩で、秀才として有名な人だつた。前にかいた異人館志津野は即ち小關君の家だつた。私が漢詩の本で父から叱られたのも、小關君の眞似をすると云ふわけであつた。小關君は私に取つて、半ば崇拜の目的物だつた。私が共立學校にはひつた時、小關君は既に東京英語學校の最上級だつた。ナゼ小關君が其の前年に、大森君と共に及第しなかつたかを、私は不思議に思つてゐた。加來君は同國人ではあるが豐津中學の出身でなく、東京では三田英學校にゐたのだつた。加來君は珍しく少し其の額にアバタがあつて、性質も極くおとなしく、才氣の現はれないヂミな人だつたが、それだけに英語の「學力」などは出來てゐるのだつた。私は加來君が、兩方の袂に手先を入れて殊勝らしく歩いてゐるのを見て、其の古風な作法に驚いた事がある。

斯様に小出君の様な秀才が一年二年も遅れて及第する、加來君のやうなチミな人が存外及第する、又杉元君や私の様な比較的年少者が打揃つて及第する、試驗は迚も當にならないと思はれた。それで私等より多少年長で、駿河臺鈴木町の下宿に一緒に居たりした人達は、方面を轉じてしまつた。即ち堀富太郎君は高等商業學校に、中野徳一君（後に柏井姓）は札幌農學校に向つた。犬塚、横山の二君も矢張り高等商業に向つた。第一高等中學と高等商業とは、一ツ橋外に向ひあつて、當時の少年が志望する、最も人氣のある二つの登龍門であつた。（堀君は後に八幡の製鐵所で失敗をやつた人で、當時新聞紙上に『元兇』だと歌はれてゐたが、私には矢張り懐かしい舊友だ。柏井君は近ごろ福岡縣あたりの中學校にゐる事を聞いた。）

第一高等中學校は即ち大學豫備門であつて、當時日本に只つた一つの『大學』に進む、只つた一つの道だつた。だから何しろ、そこにはひれたと云ふ事は、大變な誇りとなり、大變な羨みを受ける事だつた。私は勿論、非常に得意だつた。早速、橘の徽章を買つて來て麥藁帽子につけた。實は其の徽章のついた帽子をかぶつて國に歸りたかつたのだが、それは馬場家で許されなかつた。それで其の夏休み中、少々ヤケ氣味で、犬塚とふたり毎日碁を打つて暮した。初めて少し碁がわかつて來た。或時は、ゑんどう豆のゆでたのをウンと買ひ込んで、二人で上野公園に行つて、木蔭の草原でそれをムシャ〳〵食つたりした。又、この夏休みに、私は初めてヂッケンスの小說『オリヴァ・トヰスト』を少し讀んだ。初めて學校の制服を着た時の心持は、何とも云はれぬ昂奮狀態だつた。鼠色の木綿のジャケツで、色も艶もない物だつたが、初めてそれを着て神保町あたりを歩いた時、人が皆な自分一人を見てゐる様な氣がした。

九月になつて學校が始まつた時、大きな堂々たる建物の中に、それを自分の物としてズンズンはひつて行くのが得意だつた。然し又、建物が餘り廣くて、幾つもの廊下、幾つもの梯子段で、道に迷つたりしさうなのに、少々氣おくれがしないでもなかつた。

學校の課程は五年で、豫科が三年、本科が二年であつた。中學卒業生は初から上級に這入れる筈になつてゐたのだけれども、實際上、英語の學力などが足りないので、私等は矢張り豫科一年にはひつたのだつた。豫科一年がＡＢＣの四組に別れて各組が五十人ばかりだつた。學科は總て中學校の繰返しで面白くなかつた。只、數學とか、地理とかいふものを英語でやるのが少し嬉しかつた。今さら十八史略など讀まされるにはウンザリした。英語としては、スマイルスのセルフ・ヘルプ、ジョンソンのラセラス、チェンバアの第五讀本などがあつた。ラセラスは非常に面白いと思つた。初めて少し深遠な思想に接したやうな氣持がした。學科の中で一ばん困つたのは圖畫だつた。二時間もかそこらで粗末なのが出來あがる。それ以上、どうにも念の入れ様がない。殘る一時間半をマゴマゴして、手持無沙汰で過すのが非常な苦痛だつた。

先生の中では、今記憶に殘つてるのが幾許もない。校長は古荘嘉門。古苔のはえた岩のやうな如何にも熊本人らしい、頑固親爺だと思つた。漢文の先生の岡本監輔さんは、田舍親爺のやうな好々爺に見えたが、あれで大變えらい人ださうだと云はれてゐた。幾何の先生の小林好古さんが、レット、アス、ドロウ、ツー、パラレル、ラインス、ＡＢ、アンド、ＣＤ、などと日本流の英語で、ゆつくり〳〵やつてくれるのが　兎にかく善く分つて嬉しかつた。英語の

先生では、また若い星野僊三さんが、『さうぢや無いです』と、我々の[illegible]を斷乎として退け、極めて明瞭な講解をして呉れるのが、非常に頼もしかつた。會話の先生のミスターストレンジは、『アッテンション！　ボーイス』などと我々をボーイ扱ひにするのが甚だ癪だつた。それについて思ひ出す事がある。ストレンジ先生が出席簿を讀みあげる時、我々は銘々『プレゼント！』と答へ、缺席者があれば、其の隣席者が『アブセント！』と答へるのだつたが、私の隣席の末延直馬君は大のどもりで、右の手で膝頭を叩きながら、プ、プ、プ、プとやりかけるが、どうしても『プレゼント』が出て來ない。そこで私が見かねて、『プレゼント』の代辯をやると、サア先生が承知しない。ナゼ本人が返事をしないかと云ふ。本人はどもりですと辯解したいのだけれど、其の『どもり』といふ英語が分らないで非常に困つた。

七　一ツ橋の寄宿舎

私は學校が始まると直ぐ寄宿舎にはひつた。寄宿舎の生活は珍しかつた。第一、椅子テーブルが嬉しかつた。二階の寝室のベッドも嬉しかつた。賄料は下宿屋より少し高かつたが、日曜日に一度は牛肉を食はせるのが嬉しかつた。日曜にはパンと玉子を辨當に呉れるのも嬉しかつた。冬になつてストーヴの薪が足りないので、夜ふけてからよく盗みに行つたものだつた。便所が西洋風で、四角な箱の上に丸い穴のあいてるのも、珍しくて嬉しかつた。

寄宿舎の一室には八九人づつ入れられてゐた。私の室には、菊地忠三郎、西加二太、末延直馬、加來源太郎、高田采松、横井實郎、里村欣吉、柴野是公、などの諸君がゐた。

菊地君は水戸の産で、肉づきのいゝ、ドッシリした、馴れやすい人だつた。（後に後藤新平氏の秘書官になつてゐた。今は何處やらの保險會社の社長さんだと聞いてゐる。）西君は胃弱で痩せてゐたが、『ひてい、ふつか』などといふ廣島辯が私の記憶に殘つてゐる。後に久しく夕張炭山の技師長か何かになつてると聞いたが、近年の事は知らない。）末延君はどもりの愛嬌者で、大きな額の大きな鼻をうごめかしてどもりながら一口淨瑠璃をやつたりしてゐた。彼は土佐人で、末延道成氏の弟だつた。彼はよく、これからベルリン會議を開くのだと云つて、ストーヴを赤くして皆を其の周圍に呼び集め、自分は英國の全權アール・オヴ・ビーコンスフィールドを氣取つてゐた。（今は北海道で然るべき役人をしてゐる筈。）加來君は前に云つた私の同國人で、温厚な長者だつた。（久しく檢事や判事を務めてゐたが、現在は知らない。）高田君は脊の高い上品な人、横井君は八字眉の可愛らしい人だつた。（二人とも消息を知らない。）里村君は岐阜の人で、貧家に生れた秀才だと云ふ事で、醫科の志望で、少し出つ齒の、おとなしい、好い人だつたが、中途で病沒したと聞いてゐる。柴野君は二年ばかり上級生だつたが、何かの都合で私等の室に來てゐた。笑ふ時には愛嬌もあるが、默つてる時には恐ろしい様な、六かしい顔の人で、折々醉ばらつて歸つて來ては、私等の椅子やテーブルを放り投げたりした。たしか西君と同じ廣島人だつた。（これが今の東京市長中村是公君だ！）

他室の同級生では、例の小原專吉君を初とし、清野長太郎、俵孫一、池内卓三、松田三彌等の諸君を善く覺えてゐる。小原君は戸田伯爵家の元の家老といふ家柄で、後に男爵になつたほどの小貴族であるに係はらず、前記『專公』の尊稱の外、更に『インデヤン』の敬稱を有してゐた。蓋し色が黑いからであつた。俺は大學を卒業したつて、エライ者なんかになりたくは

ない。俺は只、鐵砲をかたげて獵をして歩きたいのだと云ふのが彼の抱負だつた。或時、岡本先生から「梅」といふ作文の題を出された時、小原君は、「予が祖父鐵心、梅を愛す」といふ書きだしで、大いに家系を現はし、岡本先生を驚かしたと云つて大ぶん得意だつた。小原鐵心と云へば、維新の際、國事に功勞のあつた一英雄であつたさうだ。淸野君は共立學校で、小原君や私などより上級生で、物が出來るといふ評判だつた。たしか宇和島の藩士で、舊藩主の貸費生だつた。我々同級生の間では一ばん老成の方で、多くの者から兄分あつかひにされてゐた。俵君は色の白い、然しながらニヤケ氣味のない好男子で、淸野君等と共に最も有望な人物と目されてゐた。（果して、彼は、後に北海道長官に出世し、近ごろ山陰道から代議士に出で、政務次官になつてゐる。）池内君は强度の近眼で、非常に善良な、溫厚な、親しみいゝ人だつた。たしか淸野君と同國で、淸野君を崇拜する樣にしてゐた。池内君は何んでも僕のする通りを眞似るので困つてしまふと、淸野君が云つてゐた。僕がセルフ・ヘルプを讀むと、池内君もセルプ・ヘルプを讀む。僕がアルゼブラを始めると、池内君もアルゼブラをやりだすと云つて、淸野君が笑つてゐた。それほど池内君はまじめで人がよかつた。（彼はたしか、後に宇和島の中學校の校長になつてゐたが、今は知らない。）松田君は私の二倍もあつたらうかと思ふほど脊の高い人で、これが又、無類の好人物だつた。何んでも、婚約の人の事について頻りに可愛らしい煩悶をして、生まじめな顏で淸野君あたりに相談を持ちかけてゐた。（彼は後に立派なお醫者になつてゐたが、今はどうしてゐるやら。）今一人。杉山君といふ、おとなしい人を思ひ出す。杉山君は色の靑い、肉體的にも、精神的にも、如何にも弱々しく見える人だつた。性質の善良な事は、池内君松田君よりも又一層で、馬鹿にするのも氣の毒なと云ふ程だつた。所が或日、その杉山君が只つた一人で、室内に勉强してゐる時、誰のいたづらだつたか知らないが、野良猫をつかまへて來て、それに赤いんきをぶちかけて、如何にも大怪我をしてゐるかの樣に見せかけ、それを杉山君の室に放りこんで、善良な杉山君がどんなに驚いて其の猫を憐れむかを見ようといふ計畫を立てた事がある。それが何處まで實行されて、どういふ效果を示したかは覺えてゐないが、兎にかく當時、我々の間で有名な話になつてゐた。その外、同級生の中で覺えてゐるのは、老成な三好愛吉（後に有名な教育家になつた人）、鼻眼鏡の川村金五郎（後に宮内次官になつた人）、美少年の林春雄（後の醫學博士）、櫻色の好男子田中舘（？）（後の工學士）、田丸兄弟（欣哉および卓哉）、小野塚喜平次（今の帝大教授、これは其の古風な名前で記憶してる）の諸君であつた。

八　運動、遊戲、心の寂しさ

暫らく居て見ると、學校はサッパリ面白くなくなつた。英語以外には一つも樂しみになる學科がなかつた。末延君のベルリン會議に列席した事、上級生の企てた賄征伐に參加した事、折々神保町の川竹亭に圓朝を聞きに行つた事などが、せめて其の頃の慰みだつた。但し、圓朝の出る頃には、いつも門限が切迫するので、滅多に聞く事は出來なかつた。

運動や遊戲は餘りやらなかつた。兵式體操は最も嫌ひだつた。例の脊ひくで、私より左側に並ぶ者は只つた二人しかなく、而も其の一人は既に不具と目される人だつた。自分が僅かに不具たる事を免れてゐるのだと自覺するのは、餘り嬉しいものでなかつた。何處かへ行軍の催しのあつた時、私は教室のボールドに「アンチ・コ

ーグン・リーグ」(行軍反對同盟)と英文で書いてゐる處を、先生に見つけられて大いに弱つた。それはアンチ・コーン・ロウ・リーグ(英國の穀物條例反對同盟)をもぢつて見たのだつた。勿論、私は行軍に加はらなかつた。器械體操も少しはやつて見たが、餘り善く出來ないので、好きにはならなかつた。テニスがはやつて、大森藤藏君などがやつてるのを善く見かけたが、あれはどうせ女の遊び事のやうな氣がして厭だつた。只すこし好きなのは大弓とボートだつた。ボートで言問の團子を食ひに行くのは非常に面白かつた。

或る冬の夜、只つたひとり學校の庭にたゝずんで、澄みわたつた星の空を眺めた事を覺えてゐる。宇宙の絶大、人間の微小などといふ事を初めて痛感して、非常にセンチメンタルな氣持になつた。その頃同級生の中に、日曜毎に教會に行く人のある事を聞いて、非常に羨ましく感じた。耶蘇教といふものに就いては少しの智識もなかつたが、只だ教會に行く人達は、地位とか年齢とか性とかを論ぜず、皆な親しい友達になるのだと聞いて、それが無上に羨ましかつた。私の心は誠に寂しかつたのである。それで若し其の頃、何かの機會があつたら、私も他の多くの青年と同じく、少くとも一時は、殊勝なクリスチャンになつてゐただらうとさへ考へられる。私の一面には、さういふ處もある。

九　飲む事と遊ぶ事

明治二十一年、十九歳の春、私は既に飲む事と、遊ぶ事とを覺えてゐた。私の體質は發育のおそい方で、十七八にはまだ殆ど子供の姿であつたが、十八の冬から十九の春にかけて、初めて少し丈も延び、稍や大人らしい骨組になつて來た樣に思ふ。從つて又、酒色の欲が丁度その頃から發達した。

たしか十八の冬であつたらうと思ふが、忘れもせぬ、眼鏡橋のそばの牛肉屋に、杉元君と横山君と三人で行つた時、彼等二人はいつの間にか既に吉原の智識を持つてゐて、その晩、私を其の惡事仲間に誘ひこむ計畫を立ててゐた。私は不安を感じながらも、敢て親友の勸告を拒絶するものではなかつた。つまり、それから遊びといふ事を覺えた。四人組の中、犬塚君だけは用心ぶつて(或は臆病で、當分はこの仲間に加はらなかつた。あいつは話にならんと云ふのが、三人組の結論だつた。

それから三人の間に「英學雜誌」を發行しようといふ、人眞似の計畫が立てられた。これも横山、杉元兩先輩の智慧から出たもので、蓋しそれに依つて遊びの費用をまうけださうと云ふのであつた。私は無論、直ちに贊成して、それには寄宿生活は不便だと云ふので、三人一緒に美土代町に下宿した。そして金策などは主に兩君がやり、編輯には私が幾分の才能を現はした。兩君としても、正に三つ子の魂であつた。それで兎にかく薄つぺらな雜誌が出來て、市内の雜誌店に並べたのを、ソット見に行つた時の心持は、恥かしいやうでもあり、恐ろしい樣でもあつたが、何しろ大膽な、無茶な仕事だつた。勿論、その結果は多少の收入を飲んでしまつて、大ぶんの負債を殘したに過ぎなかつた。

こんな事からして、私等の酒飲み癖と、遊び癖と、金使ひ癖とがついた。杉元君と私とは、最下等の成績で辛うじて二年級に進んだが、學校の成績などはもう二人とも問題にしてゐなかつた。二年級からは將來の分科を定めて、それに依つて第二外國語を獨逸にするか、佛蘭西にするかを決する事になつてゐたので、杉元君も私も、政治科で獨逸語といふ事にした。然し其

の頃はもう缺席がちで、殊に獨逸語の最初の時間をはづしたので、非常に困つた。それで其の頃、私の得た獨逸語の唯一の智識は、イヒ、カン、ニヒト、フェルステーエン（私には獨逸語は分らない）といふ事だけだつた。

十　立派な放蕩者

其の年の夏休には國に歸る事を許された。國では、實家の堺家は豐津を引きあげて、小倉に移つてゐた。平太郎兄は小倉の銀行の簿記係として、可なりの地位になつてゐたらしかつた。家も中々立派で、父と母は二階の四疊半の小座敷を居間にして、御隱居樣らしく暮してゐた。本吉の乙槌兄も豐津から來て、兄弟三人が久しぶりで落ちあつて、盛んに飮んだ。私も既に一人前の飮み手になつてゐた。平太郎兄は眞白い皮膚の、まる〳〵と太つたからだを、越中褌ひとつになつて、上機嫌で私等に飮ませた。

私はその時、乙槌兄と二人で、門司から馬關へかけて一日遊びあるいたが、その時の門司はまだ一面の鹽濱で、四五軒の藁屋があるばかりだつた。乙槌兄は國に歸つてから、福岡日々新聞に小說を書いてゐた。蓋し彼は坪内逍遙さんの「小說神髓」の隨喜渴仰者であつた。

養家（雛田の中村家）では、酒ずきの父が毎日、肴の趣向に苦心して、晩酌を唯一の樂しみにして私にも其の相伴をさせた。然し父は年のわりに健康が衰へて、私の學校卒業が待ち長いと云つて嘆息してゐた。馬場から連れて來た小さい娘のお力さんは小學校に通つてゐた。其の小學校の先生に、私と同期で豐津中學を卒業した大森君がゐた。父は大森君を招いて、一夕、小宴を開いた。お力さんの可愛らしい東京言葉が田舍言葉に變つてしまふのが惜しかつたと、大森君が話してゐた。

私はそんな事よりも何よりも、東京に拵へてある借金の事が心配になつてゐた。何とか口實を設けて、少しばかり臨時の金を貰つて行かねばならぬのであつた。思ひやりのある平太郎兄が來て口添をして吳れたりして、ヤット幾らか貰ふには貰つたが、それだけでは杉元横山二君の手前、誠に面目ないのであつた。

それで東京に歸つて來ると、いろ〳〵な焼け氣味で、忽ち又た遊ぶ癖が募り、年末の頃までには、正に立派な放蕩者になつてしまつた。金ぼたんの外套を嬉しがつたりしたのは昔の事で、今は寒空に夏服を着て、ズックの破れ靴をはいて吉原の廓内をさまよひあるいたりした。

國で母が丹精をして拵へてくれた博多の帶も、奉書の羽織も、絲入の袷も、悉く質屋にまげられてしまつた。

末延君も酒好きで、私は此の先輩からも其の道の指導を受けた。末延君の同鄉の友人に川村藤吉君と云ふのがあつた。それが末延君に、寄宿舍に誰か語るに足る人物があるかと云つたのに對し、末延君が私の名を擧げて答へたと云ふので、私は川村君の下宿に連れて行かれた。

この川村君は私より二つばかり年上で、既に何處かの法律學校を卒業し、今辯護士の試驗を受ける爲に勉强してゐるのだつた。然し彼は、飮む事と遊ぶ事とに於いては既に多大の經驗者で、末延君と私とを指導するには十二分の資格を備へてゐた、殊に彼は、强情我慢、小男ではあるが精悍の氣が眉宇の間に溢れて、人を威壓するに足るものがあつた。私は彼を一代の英傑だと信じてゐた。彼が盃洗で酒をあふる時、私も亦それに倣はずにゐられなかつた。彼が路傍の鍋燒饂飩の屋臺店を蹴とばしたりする時、私は一面にその亂暴を厭ふ氣持がありながら、一面には亦た其の豪快を喜ばずに居られなかつた。末延君と私とは全く彼の追隨者になつてしまつた。

十一　除名、離縁、歸國

明治二十二年二月十一日、憲法が發布された。その日、私は川村、末延の二君と共に、小川町の牛肉屋で、雪か雨かの中に大盃を擧げて祝意を表してゐた。川村君は土佐の自由黨氣分を多量に持つた人で、苟しくも憲法發布の日に、飲まずにはゐられないのであつた。所がそこに文部大臣森有禮暗殺の號外が來て、我々の醉は悲壯淋漓の感を漂はした。

その時、私は既に、月謝不納の故を以て學校から除名されてゐた。そして馬場家からは離縁の申込を受けてゐた。私は馬場さんに對して、中村家が私を東京に遊學させたのだから、離縁するなら私を國に歸すが當然だと云ふ理窟を云つて、歸國の旅費を請求した。馬場さんは止むなく旅費として金十圓を出し、玄關番の竹中君をして私を新橋停車場まで送らせて、私の出發を見屆けさせようとした。然し竹中君は、私に對する同情からか、或は恐怖からか、兎にかく其の任を果し得る見込がないと云つて斷つた　私は直ちに其の十圓を飲んでしまつた。

實家の父からは、叱責と嘆息との手紙が幾度も來た。利彥さんについて惡評が多いと、間宮から云つて來たと云ふのであつた。父としては「惡評」といふ言葉に甚大の苦痛を感じたのであつた。その時、母は、道樂も仕方がない、學校をしくじるも仕方がないが、若しや困つた餘りに、ツイ、盜みでもしはしまいかと、そればかり氣遣つたといふ話を、後に聞いた。

からいふ間に、或日、國から電報が來た。平太郎急病死去、直ぐ歸れと云ふのだ　理由も何も分らないが、私は間宮家で旅費を貸して貰つて、早速出發した。但し、間宮家では(馬場家と同じく)私が素直に歸國するか否かを危んで、長男の直道さんが、私を橫濱まで送つて來てくれて、私の乘船を見屆けた。

然るに私は、船が神戸に着いた時、船の醉が餘りに苦しいといふ理由で、船の碇泊中、上陸して宿屋にとまつた。その結果、下の關に着いた時には、小倉までの小蒸汽船の賃錢が不足で、止むなく又下の關に一宿し、郵便を出して迎への者をよこして貰つて、それでヤット小倉の家に歸つた。

此の歸國の月日がどうもハッキリ分らないが、まだ少し寒かつたと思ふ。私は或る友人から貰つた絲入れの單物を着て、其の上に川村君から貰つた雙子の袷羽織を着てゐた。そして懷には、尾崎紅葉の『二人比丘尼、色懺悔』を一冊入れてゐた。

十二　學校以外の讀書

紅葉の『二人比丘尼』を只一冊持つて歸國した程の私であるから、當時の文學熱に十分感染してゐた事は無論である。紅葉君等が硯友社を起して『我樂多文庫』を發行した時、その紅葉が自分と同じ第一高等中學校の一二年上級の生徒であると聞いて、殊に興味を持たされ親しみを感じさせられた。

坪內逍遙さんの『書生氣質』は、もちろん愛讀した。大學生といふものを學生生活の最高の理想としてゐる少年が、『書生氣質』の魅力に捕へられない筈がない。『妹と脊かゞみ』の薄い分册を神樂坂の麓の雜誌店で買つた事を特に覺えてゐる。『小說神髓』に依つて、新しい小說といふものの性質を教へられた事も無論である。

雜誌『國民之友』が初めて文藝附錄をつけた時の珍らしさは今に忘れない。山田美妙齋の言文一致の短篇小說、殊にその口畫の、若い武者と裸體の美人との配合が、如何に新奇に我々少年の目に映つた事よ。

『國民之友』は新思想の雜誌として學生必讀であつた。德富蘇峰および民友社一派に對する我々の崇敬と愛慕は殆んど絕對であつた。インスピレーションといふ言葉を初めて此の雜誌から敎へられ、その幽玄な意味が『天來』といふ譯語に依つて僅かに髣髴し得べきことを敎へられた時、我々少年は忽ち何か『天來』の妙音を感得した如くであつた。然し『日本人』が『國民之友』と對立の形を以て出現した時、我々は又三宅雪嶺を尊崇した。文學に於いて、紅葉の艷麗でも、露伴の豪宕でも一緒くたに貪り讀んだと同じく、政治社會評論に於いて、平民主義の蘇峰でも、國粹主義の雪嶺でも、皆な同じく丸吞にしたわけであつた。

さうした新人物のもの以外、中江篤介の『三醉人經綸問答』矢野龍溪の『經國美談』島田沼南の『開國始末』など皆な手當り次第に亂讀した。末廣鐵腸の政治小說『雪中梅』『花間鶯』も亦た大に愛讀した。東海散史(柴四郎)の『佳人の奇遇』は其の長篇の漢詩の故を以て殊に愛誦した。『月は大空に橫はつて千里明かに、風は金波を動かして遠く聲あり。夜寂々、望渺々。船頭何ぞ堪へん今夜の情』などといふ吟聲は、當時、下宿屋の到る處に聞かれてゐた。西村天囚の『屑屋の籠』鈴木天眼の『獨尊子』などいふのも、一種の新人の、奇警な新著述として歡迎した。明治二十三年に開かるべき國會の『未來記』も幾種か讀んだ。

その頃はまだ、貸本屋といふものが大きな風呂敷包を背負つて、下宿屋などを廻つてゐた。我々は主としてその貸本屋から新著を供給された。然しそれは必ずしも新著ばかりでなく、『梅暦』『春告鳥』などいふ古い艷めいた物も供給してくれた。

新聞では『改進新聞』が書生間に多く讀まれた。須藤南翠の『新裝の佳人』といふ小說を記憶してゐる。

政治上の事は幾許も印象がない。來島恒喜の大隈狙擊ほどの大事件も、『二人比丘尼』には比ぶべくもない。

第三期　大阪時代(上)

一　長兄の死

放蕩の子、墮落の子、失敗の子を、老いたる父母は矢張り喜んで迎へてくれた。その時、主人たる兄(平太郎、三十五歲)を失つた小倉の堺家には、六十四歲の父と、六十二歲の母と、二十幾歲の未亡人と、外に十四歲の志津野又郎がゐた。そこに二十歲の利彥が悄然として歸つて來たのであつた。

兄の病氣は急性腹膜炎であつた。非常な苦痛を訴へて一夜の間に悶死したと云ふのであつた。死後、全身處々に紫色の斑點を見たと云ふのであつた。あの雪のやうに白かつた皮膚に紫色の斑點を想像した時、私はゾットせずにゐられなかつた。父はおもむろに語つた。兄のこの急死には頗る怪しむべき節があつた。兄みづからも疑つてゐた。兄はその日、銀行の重役の家に行つて重大な事件の相談にあづかつて來たが、特に自ら注意して、茶一杯の外、何等の飲食もしなかつたと云ふのであつた。然し醫者は急性腹膜炎と診斷した。大酒家にはありがちな病氣だと云ふのであつた。兄は實に大酒家であつた。殊に近來、銀行の問題について鬱々たる餘り、平生の大酒がいよいよ大酒になつてゐた。病氣はその結果とも見られるのであつた。いづれにしても事は既に過ぎた。致し方はないと云ふに決してゐた。

銀行の問題は、矢張り海山社事件を大きくした樣なものであつたらしい。この銀行はたしか

第八十七國立銀行で、一時の威勢は素晴しいものだつた。私は曾て兄に連れられて其の建物の內部を見せて貰つたが、それが私の初めて見た西洋館であつた。重役は松田・齋藤といふ兄弟で、矢張り士族だつた。この兄弟殊に松田さんの豪奢な生活振はエライ評判で、四季折々の庭園の作り、殊に綺羅びやかな菊の花壇を前にした盛宴の趣きなどが、嫉妬と羨望とをこきまぜて語り傳へられてゐた。何でも金まうけは銀行に限るさうだと云はれてゐた。然るに堺平太郎はさういふ重役の下に簿記係を務めてゐた。彼は小心者であつた。簿記係として帳簿を正直につけるより外の事を知らなかつた。彼は恐らく種々の誘惑を受けただらう。彼は敢然として重役に反抗するほど大膽な男ではなかつたらしいが、然し又、さういふ誘惑に乘るほど不正直な男ではなかつた。そこで彼が邪魔物になつて來たのであつた。兄が死んでまもなく、二人の重役は行方を晦まし、銀行は破產してしまつた。これも矢張り、士族の間からブルジョアを出さうとした、そのモガキの一つであつた。

何しろ兄は死んだ。これは大變だと云ふので、隱居の父が鉢卷をして元氣を出した。然し父にはもう何事も出來なかつた。私は中村家から堺家に復籍して兄の家督を相續した。そして兄の未亡人には記念の懷中時計を一つ持たせて里方に歸つて貰つた。私の相續した家督は、豐津に殘してあつた家屋敷と、先祖の位牌と系圖と、その外、多少の雜品だけであつた。負債は大抵、兄の死と共に消滅してしまつた。豐津の家屋敷は月五十錢で人に貸してあつたが、後に七十圓で賣れた。その內、無盡の掛金か何かに二十圓だけ引去られて、五十圓だけ受取つたが、當時の我々としては、それがチョット大金だつた。

それから私の身の振方について、豐津の友人からは、村役場に世話しようと云つて來てくれたが、それは餘りになさけなくて厭だつた。その時、次兄の乙槌は大阪に行つて『花かたみ』といふ小說の雜誌を出したりしてゐた。彼はそれより以前、坪內逍遙の『小說神髓』で洗禮を受け、欠伸といふ號をつけて、福岡日々新聞に續き物の小說を書いたりしたのだつた。それで私もその緣故をたどつて、兎にかく大阪に出る事に方針を極めた。實は私自身も、紅葉の『二人比丘尼』を懷中して歸國したくらゐで、みんごと小說志願の文學青年になりおほせてゐたのである。そして又、早くも短篇小說を一つ書いて『福日』に送つたところが、早速それが同紙に連載されるといふ不幸に遭遇したのであつた。

二　英語の先生

明治二十二年の夏、私は大阪土佐堀湊橋南詰の何とかいふ宿屋の一室に私自身を見出した。そこには兄の乙槌(欠伸)と、芝尾喜多夜叉君(入眞)とがゐて、文學修業をやつてゐた。芝尾君は兄と私との中間ぐらゐの年配で、前に記した佛山塾の漢學書生だつたが、それが矢張り坪內氏の文學洗禮を受けたのであつた。そこで私も『福日』に連載された『處女作』を兩先輩に示したりして、得々として小さな文才に誇るといふ氣障を極めた有樣であつた。

然し私は何か別に職業を求めないでは居られなかつた。それには先づ英語の先生より外にあるまいと云ふのだつたが、それが結局、天王寺高等小學校の教員と極まつた時、前に豐津の村役場を勸められたと同じなさけなさを感じた。けれども仕方がない。私は每日、土佐堀から天王寺に通つた。その夏の記憶の中に、宿屋が每度鮓を食はせるのに困つた事と、通勤の途中、町の辻に出してある接待の麥湯の

嬉しかつた事とが殘つてゐる。

　斯樣にして私は初めて職業に就いた。小學教員といふ事は如何にもなさけなかつたが、それを『英語の先生』といふ所で僅かに自ら慰めてゐた。月給は八圓五十錢。それを初めて全部五錢の白銅貨で貰つた時、ずゐぶん澤山あるものだつたと思つた。

　先生として初めて生徒を扱つた時の心持はずゐぶんへんだつた。何しろこちらはまだヤット二十歳の少年で、生意氣ではあるが體は小さいし、大人らしく生徒を叱るなどといふ事は氣恥かしくて出來ないし、さうすると生徒が我儘を始めて騒ぎだすし、それを取り鎭めて行くだけの氣轉もなく、毎度教場がワイ〳〵と湧き立つて、どうにもかうにも仕樣がないで困つてしまつた。そんな、隣室の受持教員がこちらを覗きこんで、騒ぐ生徒達を叱つてくれるので、わづかに一時の鎭靜を見るのが、私としては如何にも面目なくて辛かつた。然しそれは一年級二年級の事で、三年四年となると、生徒の數も少ないし、年もとつて物も分つてゐるので、不慣れな教師を馬鹿にするよりも、寧ろ其の實力を認めるのであつた。それで私は段々に、英語の先生から數學の先生ともなり、歴史の先生ともなり、作文の先生ともなつた。その頃の天王寺はまだ半分ゐなかで、生徒の中には、屑絲織の着物に金絲入のビロードの襟をかけてゐる樣な古風な娘もあつた。そしてさういふ娘は、『先生』の事を『お師匠はん』と呼んでゐた。

三　豐津士族の大阪移住

　秋の初、私は天王寺の東門外に一軒の古家を借りた。それは農家の隱居處で、元來は相應な建築なのだが、今はずゐぶんと荒れてゐた。然しそれが丁度わたしに似合つてゐた。家賃は一圓二十錢だつた。私はそこに國の父母を迎へた。志津野又郎も一緒にやつて來た。

　斯くて私の一家は、丸で空中からでも落された樣に、ポツリと天王寺の片ほとりに置かれた形であるが、然しそれには色々の因緣があつた。前にも云つた樣に、大阪府知事建野郷三氏は豐前人であつた。それに連れて多くの豐前人が大阪に來てゐた。浦橋家が早くから大阪に出た事も既に記した。二月谷志津野の拙三さんが住吉神社の禰宜になつた事も既に記した。然るに拙三さんは程なく身まかり、その跡に直文君といふ養子が來て、それが東成郡役所に務めてゐた。私を天王寺小學校に世話してくれたのは即ちこの直文君であつた。(この人は後に阪鶴鐵道に關係したりして、一かどの實業家に出世した。)そこで私は天王寺に來ても、直ぐ近處に二軒の親戚(浦橋と志津野)を持つて居た。要するに、豐前の士族が生活を求めて續々と國外に出る時、その一部は相率ゐて大阪に向ひ、そして本吉の兄にせよ、芝尾君にせよ、皆その跡を追うたわけである。

　所が、堺の一家が斯樣にして大阪に移ると同時に、篠田の一家も同じく大阪に移つた。篠田家にはその後、恒太郎君といふ養子が出來てゐたが、これもいよ〳〵豐前では法が立たないので、矢張り大阪を目ざした。そして江戸堀邊に小さな藥種店を出した。堺家の移住に志津野又郎が附屬してゐたと同じ樣に、篠田家の移住には志津野郎が附屬してゐた。つまりこれで志津野家も同じく大阪へ移つたわけであつた。

　然るに堺家が私の月給八圓五十錢で立ち行かないと同じく、篠田家の藥種店も立ち行かなかつた。八十幾歳の蒼安老が遂に窮迫の中で死んだ。「來て見れば花も紅葉もなには潟、只身を盡す處なりけり」と云ふ辭世があつた。それから間もなく、又郎君は橫須賀の親戚の許に走つて海軍工廠の職工となり、郎君は大阪で何かの

工夫になつた。斯くて士族の子の一部は勞働者となりつゝあつた。（篠田恒太郎君は近來まで静岡縣廳の官吏であつたが、今は同地に隱居してゐられるよし。）

四　天王寺の塔を中心

それから三年ばかり、私の教員生活、天王寺生活が續いた。今でも天王寺は私に取つて最も懷かしい場所の一つである。

あの天王寺の高い塔に幾度登つて四方を見晴した事か。私の目に映つた大阪は、今でもあの天王寺の塔を中心として、總てが展開してゐる樣な感じがする。

天王寺の西門の石の鳥居を出て逢坂を西に降ると、左手に一心寺がある。その直ぐ前に浦橋家があつた。小さい石垣の上に建つた家でその石垣の片隅に夾竹桃が毎年美しく咲いてゐた。（今では勿論、家はスッカリ變つてゐるが、夾竹桃だけが殘つてゐる。）浦橋には男女の子供が五人もあり、お婆さんが二人もあり、ずゐぶん賑かな家であつた。主人の儡さんは、その頃は遊んで居られたが、元は河內邊の郡長など務めた人であつた。父はこの儡さんの夫婦といとこである關係上、よく遊びに出かけては晩酌の馳走になるのを樂しみにしてゐた。私もずゐぶんよく出入りして厄介をかけた。

逢坂を降りて今宮を出ると、今の『新世界』のあたりが一面の畑だつた。只その間に『商業俱樂部』といふ一郭の遊園地があり、又一心寺のすぐ下の處に『丸萬』といふ料理屋が新しく出來てゐた。逢坂の下には綺麗な清水があつて、浦橋の娘達や子供達がよくそれを汲みに行くのであつた。夏の夕暮など私は殆んど毎日その邊を散步してゐた。

天王寺から谷町筋を北に何町か行くと、生魂神社、高津神社などがある。その邊までの處が私の天王寺生活の、云はゞ繩張內であつた。生魂神社の前を少し東に行つた梅が辻の邊に志津野直文君の家があつた　そこのをばさんや、ねえさんは、勿論、二月谷以來のなじみであつた。

道頓堀にも、心齋橋筋にも、中の島公園にも、固より毎度行くには行つたが、それらは只だ大阪の町であり名所であつて、特に自分の親しみを感ずる土地ではなかつた。後に兄が靱の大阪日々新聞社にはひつた時、下町の中で、そこだけを少し懷かしく感じた。

私の家の裏は直ぐ畑であつた。大部分は綿畑であつた。そしてそれで河內一面、生駒山の麓まで續いてゐる樣に思はれてゐた。夏になると、其の廣い綿畑の到る處に在る深い井から、丈の高いハネツルベで毎日せつせと百姓達が水を汲みあげては、その畑を濕してゐるのが、大變な骨折に見受けられてゐた。それが謂ゆる河內木綿の原料であつた。然るに其の綿畑も、河內木綿も、いつの頃からか全く消え失せてしまつた。そして天王寺東門外の一帶が市中になつてしまつた。

五　天王寺の小學校

天王寺小學校は天王寺の北手につづく空地の間に在り、尋常校と高等校との二棟から成る粗末な平家建であつた。村役場も直ぐそのそばに在つた。總ての樣子が如何にも都會の町はづれといふ感じであつた。

校長の野村隼彥君は三十五六でもあつたらうか、非常に元氣な、よくさばけた、然しながら可なり我儘で强情な、謂ゆるヤリ手であつた。私が東京の學生生活の失敗者だと云ふ所に同情してくれて、大へん可愛がつてくれた。この人が總ての教員中で、幾らか書生風を帶びた只一人であつて、私に對して君だの僕だのといふ

言葉使ひをしてくれたので、私も好い氣になつて、十幾つかの年長者に對して君だの僕だのとやつてゐた。それが嘸ぞ生意氣に聞えたたらうとは、よほど後になつて初めて氣がついた。野村君は江州人で、あちこち渡りあるいて教員生活をして來た人だつた。大の酒好きで、少し耳が遠くなつてゐた。

主席の訓導は生田君と云つて、『上の宮』の神主さんであつた。色の白い好男子で、俳諧の方では『南水』と云つて宗匠株であり、歌も作り、畫もかき、書もうまし、オルガンもひけるといふ、多才多藝の人であつた。上の宮の在る處が昔の百濟野に當ると云ふので、百濟と云ふ號もつけてゐた。社内の樗の木があるので『樗の舍』とも號してゐた。私はこの生田君から『風流』の事について色々の教育を受けた。生田君の家の茶室で、中板を挾んで靜かに酒を汲んだ事、古い瓦の置き棄ててある間に秋海棠のゆかしく咲いてゐた小庭の景色などが思ひ出される。生田君の風流は又、色町の方面にも及んで、南地の『蘆邊踊』の歌なども作つたりしてゐた。（南水君は今尙ほ健在で、大通人として大阪に有名だと聞いてゐる）

常石健君は土佐の人で、針を並べたやうな短かい髮、金蕉の塊まりのやうな大きな顏が、子供達を恐れしめるに足りた。これで大の酒好きで、醉ふと存外、無邪氣な笑ひ顏を見せるのであつた。美しい小柄の細君に煙草店を出させてゐた。森田金三郎君は鳥取の人で、脊の高い、鼻の高い、瘦せられるだけ瘦せた人だつた。平生は全く火の消えた樣な人だが、醉ふと昔の火が發作的に燃えあがるといふ風で、この人も（其の燃えあがつた時の火で）非常に私を愛してくれた。中尾勇三郎君は土地の人で天王寺の東門外（私の借宅の直ぐ前）に家があつて、富裕を以て知られてゐた。私は當時、中尾君に幾らかの負債をしたが、今日に至るまで返濟して居らぬ。伯水義順君はまだほんの青年で、たしか眞宗寺の息子さんだつた。その外、もうこれ以上に年を取つた先生はあるまいと思はれる老先生や、もうこれ以上に若い先生はあり得ないだらうと思はれる若先生など、まだ數人の教員があつた。校番の『おつさん』は可なりヨボ〳〵した、目のしよぼついた老人だつたが、そのおかみさんは存外若かつた。

野村校長はよく田舍の學校にゐた時の話をして、教員室の窓から釣竿を出して裏の池の魚を釣つたりするので、『丸で無茶や』などと笑つてゐたが、それだけ現在の天王寺校の整頓してゐるのを誇りにしてゐた。然し一面には、飲み會の多い事、歌の會、碁の會のはやる事など、ずゐぶんノンキなものだつた。

村長は橋本善右衛門氏で、まる〳〵とよくふとつた其の風采からして、如何にも土地の物持らしい人物だつた。（後に衆議院議員になつたりした。）私は何かの時、少しこの人に突つかかつて、あぶなくその爲に免職されかけた。助役の赤田瑳一君はまだ若くて、頗る私を愛してくれた。或時、私が割前の拂へない斷りをすると、『遊ぶに勇にして拂ふに怯なる、之を眞の遊興と云ふ、意とする勿れ意とする勿れ』と大いに腹のふとい所を示した。（この人はたしか現衆議院議員である。）

その頃の男女の生徒の中に、まざ〳〵と私の記憶に殘つてゐる人達が少なくない。それらが皆、今どうして何處に居るやら。多少、消息を傳へ聞いたのもあるが、大部分は私にわからない。人生は左樣にわからない。然し只一つ、最も著しい人物がある。それは竹林男三郎、即ち後の野口男三郎君である。彼は當時、たしか古本屋の息子として、可愛らしい生徒であつた。（私は後に彼と、獄中で最後の交りをした。）

六　俳句、和歌、花見、月見

私の文學熱はまだ小説熱となる機會を得なかつた。俳句熱、和歌熱、古文熱、德川文學熱、それらが當時の私の思想生活であつた。

俳句の方ではもちろん、南水君が中心だつた。然し南水君は宗匠ぶらずに、矢張り外の連中と一緒に初心顔をしてやつてゐた。野村君は何でも自分に出來ないものは無いといふ調子で、無茶苦茶に作つてゐた。『僕は檀林派だ』などと云つて威張つてゐた。檀林派は當時の素人仲間に大流行だつた。兄の欠伸も折々はこの仲間に加はつてゐた。後には父も眠雲宗匠として點者の一人になつてゐた。父の無聊はよほどそれに依つて慰められてゐた。私が『枯川』といふ號をつけたのはその頃の事だつた。『かれ野』『かれ川』などいふ俳諧趣味から來たので、『涸川』と書いた事もあるが、『禿山枯川』といふ字面を見つけ出してから、それに極めてしまつた。當時の私の句の一つ。「白壁にブツつけて見る熟柿かな」

歌の方では小菅秀治君といふが中心だつた。これは天王寺から大ぶん東の方の鶴橋小學校の先生だつたが、家は逢坂の下の、安居天神のそばに在つて、相當の資産家だつた。入口に藤棚のある、二階の廣い、落ちつきのよい家で、よくその二階で歌の會が開かれた。そこのおかあさんは切髪の品のよい人で、如何にも歌よみらしく見受けられた。選者は大江神社の神主の石橋さんだつたが、堅くるしい事は少しも云はないで、例の野村君や私はずゐぶん無茶を通してゐた。眞劍に歌をよむといふよりは、むしろ皆が寄つて遊ぶと云ふ方が主であつた。

然し私は自然に歌に關する色々な本を讀んだ。『百人一首一夕話』『和歌麓の塵』などいふ俗本から、『古今』『新古今』『萬葉』『山家集』『金槐集』など、大抵のものにはひとわたり目を通した。それから更に私の趣味は、古い和文書類に向つて行つた。例の竹取、つれ／″＼、枕の草紙など、一通りの物が濟むと、今度は『源氏物語』を讀破しようといふ野心を起した。果して讀破したのかどうかは分らないが、兎にかく『湖月抄』を皆な讀んだ。それから更に惡い癖がはじまつた。一面には擬古文を書きだし、一面には古文法崇拜をやりだした。本居宣長の『詞のやちまた』だの『玉霰』だのを熱心に讀みおぼえて置いて、それにのつとつて『ぞるこそれ』流の文章を書いてみたのだから堪らない。然し私はまだまだ自分の文章を活字にする機會を持たなかつた。

和文熱、文法熱の次には德川文學熱が來た。それは主として近松の浄瑠璃であつた。馬琴、三馬、種彦なども少しは讀んだ。八犬傳は既に豐津で讀み、梅暦、春告鳥の類は東京で讀んでゐた。西鶴は世間の流行に係はらず、私は初から餘り好きでなかつた。

かうした讀書は、私に取つて皆な面白い遊びであつた、和歌や俳句は固より遊びであつた。碁の遊びも少しはやつた。まだその外に、花見、月見などの遊びもあつた。桃の頃に桃山の花を見るべく、親戚の人達を招き集めて、銘々に辨當を持寄つて、掛茶屋で半日を遊んだ事もある。私はそんな事が好きだつた。或る仲秋の夜、浦橋の一家と私の一家とで、安居天神の内で賑かな月見をした事もある。滅多に外出しない私の母なども、そんな時には出かけるのであつた。安居天神は今でもある樣だが、桃山は總て町になつてしまつた。

遊びと云へば、私は其の頃、學校の若い教員二人（伯水君と萩君）と共に、月夜に暗がり峠を越えて奈良に徒歩旅行した事がある。又何かの拍子に獨りで嵐山の花見に出かけて、歸りに

汽車賃が無くなつて、それを借りる積りで松井先生――先に豊津中學の先生だつた人で、今は京都の第三高等中學の教諭――の處に行つたが、久しぶりに善く來たと云つて歡迎されたので、たうとう一ばんとめて貰つて、金なんどの事は迚も云ひだされず、翌日五錢の金を握つて、京都から大阪までテク〳〵歩いて歸つた。その時の句、「十三里、錢は菜の花の中の旅」

七　不平と飲酒癖

かういふ風に書くと、大阪教員時代の時は、只のんきな、おとなしい、無事平穩な男の樣であるが、實は決してさうでなかつた。相應な野心を持ち、自惚を持ち、希望を持つた青年が、たとひそれが一度飲酒遊蕩に身を持ちくづした、失敗の後であるとは云へ、東京の學生生活から一轉して、忽ち老父母を奉じた極小の月給取生活に落ちたのだもの、それが不平でなくてどうするものか。

然し何と云つたところで、養はねばならぬ老父母が眼前にある。兄は木吉家に養はれた人である。堺家を相續したのが私である。私は父母と共に一家を支へて行くより外に道はない。それに母は既に老いて毎日の水仕事が出來かねる。私が妻を持つか、女中を置くかせねばならぬ。前者は差當り出來さうな事でないので、後者を取つた。月給は八圓五十錢から少し上つた。府廳の檢定試驗を受けて、英語科專科正教員といふ資格がついてから後、十圓、十一圓まで昇給された。志津野又郎はまだ少年ながら、かういふ有樣の間に居候をしてゐるのが辛くなつて飛びだしたが、それでも親子三人と女中とが十圓や十一圓で生活するのは容易でない。只、父母が豊津以來、質素の生活に慣れてゐるのと、女中が少し愚かなくらゐ正直で、よく忠實に働いてくれたのとで、家の中は存外無事に過して行かれた。然し金はどうしても足りない。兄が少しは助けてくれる事になつてゐたが、それも約束どほりに實行はされなかつた。

然しそれだけならば、只だ少し足りないといふだけで、大した困難には落入らない筈であつたが、東京以來の私の酒飲み癖が改まらなかつた。酒を飲まないほどの意氣地なしは人間の數に入らないといふ位の時勢であつたので、生來酒の好きな、見え氣味の少なくない青年が、貧の爲に克己的な生活をする事など思ひも寄らない。否、それどころではない、失意の境遇にある彼利彦としては、その失意をごまかして、己れを欺く爲に、わざとでも滿醉淋漓として人前に氣を吐くといふ趣きであつたから堪らない。而もそれが酒ばかりではなかつた。酒は自然に女遊びを伴つてゐた。

八　飲み仲間、東京の友人、新聞記者

酒飲み仲間は第一に學校の職員達であつた。野村校長が率先して飲みあるくのだから、多くの者がそれに附き從つた。私は殊によく近處の料理屋などを連れて歩かれた。清水の八百松、逢坂下の丸萬、生魂の夜櫻など、さうした思ひ出は數々ある。天王寺の北門脇に『金剛』といふ小さな料理店があつたが、そこは學校に辨當を持つて來たりする家で、職員達が皆ななじみで、私もずゐぶんよく飲みに行つたが、或る月の夜に、野村校長が醉つぱらつた勢ひで、その娘に料理と酒とを持たせて學校の運動場に連れだし、運動用の高い臺の上に小宴を開いて『月見』をした事がある。ずゐぶん亂暴な先生達であつた。或時は又職員達が總出で、南地あたりに押しかける事もあつた。村役場の書記に植田定一君と云つて、私の同鄉人がゐた。豐津

中學の知り合か偶然こんな處で落ち合つたのだから、忽ち無二の友人になつてしまつて、ずゐぶんよく二人で遊びに出かけた。

東京の友人が折々は私を尋ねて來てくれた。それが私に取つては、懷かしくもあり、羨ましくもあり、そして又、恥かしくもあつた。犬塚君は高等商業學校にはひつて、或る夏、横笛一本を携へてやつて來た事がある。この人だけは品行方正であつたので、一緒に今宮の商業倶樂部を散歩して、月下に横笛を弄しただけで別れた。小林助市君は白金の明治學院をやめて、先輩であり親戚である岩崎小次郎さんが滋賀縣の知事をしてゐるのをたよつて、暫らく大津にゐると云つて遊獵者姿で鐵砲を持つてやつて來た。川村藤吉君はまだ辯護士にもなれないので、暫らく國に歸ると云つてやつて來た。末延直馬君も學校をしくじつたといふ話を聞いた。杉元平二君は私と一緒にしくじつたが、更に慶應義塾にはひつたと聞いた。川村君と私と會つて、もちろん飲まないではゐられなかつた。小田雅樂君もやつて來た。これは首尾よく高等中學に居るには居たが、寧ろ文學的な人物が工科を志願して、圖を引く事など僕には迚も出來ないんだといつてムシヤクシヤしてゐた。ムシヤクシヤはお互ひなので、ずゐぶん盛んに二人で飲んだ。その時、小關君の私に示した詩をよく覺えてゐる。「衫上 酒痕舊時態。十年 遊子又逢春。」小關君は迚も學校を卒業しないだらうと思はれた。

私は東京の友人に會ふ度に、今の生活のみじめさをつくづく感じた。友人達が必ずしも皆な得意ではなかつたけれども、私の樣な困難の地位に居る者は一人もなかつた。東京に對するあこがれ、小學校の先生たる身の上、私はジレジレして堪らない氣持になつて來た。その間に、只すこし私を慰めるのは、兄を通じての新聞記者方面の交りだつた。

その頃、芝尾君は既に國に歸り、兄は大阪日々新聞といふ小さな新聞の記者になつてゐたが、私もその緣故で、たまには少しくらゐ何かの雜文を其新聞に載せて貰つたりして、漸く其の方面に希望を持ちはじめた。勿論まだ、例の「ぞるこそれ」を大いに發揮する所までは行かれなかつたけれども、いつかは自分も新聞記者になれさうだと思はれた。そして同時に又新聞社の人達が皆だらしのない放縱な生活をしてゐるのが、何か大へんエライ、脱俗的な事のやうに思はれたりして、自然にそれを眞似る氣持になつた。そんなやうな事からして、新町、松島などの夜景にも大ぶん親しんだ。

或る時、新聞社の人達と一緒に堺の大濱に遊んだ。新聞社の人達と一緒にブラブラ遊んで歩くと云ふ事が頻りに嬉しく感じられた。所がその歸り道に、皆が連れ立つて天王寺の前から谷町を北に向ふ時、ちやうど私の學校の前を通つた。こゝが僕のゐる學校だ」と私が云ふと、「ハハア、これが君のプリズンか」と一人の新聞記者が云つた。私は突然に「プリズン」(牢屋)といふ言葉を聞かされて、内心深くヒヤリとした。

九　土佐落ち

かういふ私の放縱な生活は私の身邊を借金だらけにした。或日、今日こそはどうしてもせめて五十錢でも何處かで借りだして持つて歸らないでは、父や母に申譯がない　申譯はどうでも好いとして、實際、年寄二人を干ぼしにする事になる。と云つて何處の誰にすがりつかう樣もない。すがりつけるだけの處には既にすがりついてある。私は進退きはまつて、たうとう道ばたの石に腰かけて、永いあひだ途方に暮れてゐた事がある。

さうした當惑の結果、或る月の末に、私は月給を貰つたまま、それを旅費にしてフイと土佐に走つた。川村君が國に歸つてゐるのだから、それにすがりついて見ようと考へたのであつた。これは後に考へて見ると、川村君にこれ〳〵の金策をして貰つて、それを持つて歸つて借金の片付をしようといふ風に、ハッキリ見込をつけ、方策を立てたわけではなく、むしろ只、しばらくでも、苦しくて苦しくて堪らない現在の立場を、どうにかして逃れたいといふ一心であったかと思はれる。

たしか秋の事だつたが、私は飄然として土佐の高知に着いた。高知から川村君の家（安藝郡井の口村）まで又十里以上もあつたらう。途中の山畑に蕎麥の花が白く咲いてゐた事を覺えてゐる。川村君は近ごろ細君を迎へて、暫らく國に落ちつく積りで、鑛山か何かの事業をやりだしてゐる所だつた。そこに、東京の惡友、大阪の道樂者が尋ねて來たのだから、それが親達から歡迎される筈はなかつた。それでも遠方からたよつて來たものを突き放すわけにも行かず、おつかさんが色々と世話を焼いてくれ、殊に若いお嫁さんがずゐぶんと心配してくれた。川村君も少々持て餘したに相違ないが、そこは親分肌で心よく引受けてくれた。それで凡そ一月たらず、或は一月あまりも、私は川村君の家にゐたり、或は川村君について近處の土地を歩きまはつたりした。

或時は、蛇の多いといふ山を、夜中に松火を振り照らして越えた事もある。或時は高岡の宿屋にとまつて長曾我部だの香曾我部だのの昔話を聞いたりして、『旅あはれ、晝は機音、夜は砧』などやつた事もあつた。何處かの茶店で、大きな鰹のおかずで晝飯を食つた時、その代が二錢だつた。何しろ鰹は盛んに食はされた。例のタタキがうまかつた。安藝の町では、謂ゆる料理屋（實は曖昧屋）でずゐぶん飲んだ。この邊では、女郎や淫賣婦に士族の娘が多いと聞いて、少し變な氣持がした。井の口村は岩崎彌太郎、彌之助等の出生地だと聞いて、何だか非常に特別な土地柄のやうな氣がした。我が川村君がその土地の生れとして、或はそれと同じやうな大成功をするのではないのかとさへ、私は空想した。私は又、井の口村の彼方に聳えてゐる高い山の昔話を非常に面白く聞いた。昔そこに山城があつたが、それが豐臣勢か何かの爲に攻め落された時、そこの奥方やお姫さまや女中達が、火のついた高い御殿の上から、その直ぐ裏の深い古い池の中に、皆んな飛びこんで死んでしまつた。

私は長い滯在で川村君（殊に若い細君）に厄介をかけただけでも濟まないのに、まだその上に何程かの助けをして貰つて、神戸行の汽船に乘つた。その頃の高知の港はまだ古風なノンキなもので、川村君は二三の友人と、一二の女とを連れて、ハシケで私を汽船まで送り、汽船の今出るといふまで、ハシケの中でチャン〳〵三味線を鳴らしながら飲むといふ騷ぎだつた。土佐の高知の播磨屋橋で、盲が目がねを買ひよつたり、坊んさんがカンざしを買ひよつたりする、例のヨサコイ節を無茶苦茶に繰返すのが、何とも云はれず無邪氣で面白かつた。

十　教員生活の足抜

然し大阪に歸つて見ると、中々そんなノンキな話どころでは無かつた。堺はもう歸つて來ないかも知れない。利彦は若しか死んだのではあるまいかといふ騷ぎだつた。然し苦勞人の野村校長は私の爲に色々と取りつくろつて、私の地位を繋いでおいてくれた。而も不在中の月給もスッカリ貰へるやうにしておいてくれた。それで私は諸方面に對して極りの惡い思ひはしな

がら、矢野」引續いて「先生」を勤めた。けれども私の家の財政は、もうどうしても其のまゝではやつて行かれなかつた。それでいよいよ仕様がないので、差當り、暫らくの間、私の一家を擧げて兄の家に同居する事になつた。兄はその頃、朝日新聞に入社して、大分工面も善くなつたので、國から妻子を呼び寄せて、家を持つてゐたのであつた。それで私が兄の家に同居したといふのは、モット適切に云へば、兄の家に轉がりこんだのであつた。

兄の家は初め清堀に在り、後桃谷に在つた。兄と私とは兄弟でもあるが、友人でもあつた。共に飲み、共に語る事は、二人の最も愉快とする所であつた。私が兄の家に轉がり込んだと云つて、兄は厭な顔をするでもなし、私がしよげた顔をするでもなかつた。只、兄嫁(お浪さん)と父母との間には、雙方、遠慮や苦勞の多かつた事と思ふ。然しその頃の若い私は、まだ大してそんな事の思ひやりもなく、從つて何等のヒガミもなく、又そのお姉さんなる人が如何にも温順な好い人であつたので別段何事もなくて濟んだ。

或る時、清堀の家で、兄と私と、箕面の若葉を見物に行くと云ふので、草鞋をはき、檜木笠をかぶつて、大變な身支度をした。所が、表に出てから歩いて見ると、餘り懐中が寂しすぎる。いつそこれは宿車に乘つて行く事にしよう、それなら月末拂で濟むからと、草鞋檜木笠が二臺の車を連ねて箕面まで往復した。そんなフザケた眞似もあつた。然し桃谷の家になつてから、私はどうしても私の酒に制限をつけねばならぬ事を痛感した。然し全く禁酒もなし得ないので、一月に一回、月給を貰つて來た日だけ、一升でも二升でもウンと飲む。その外は一寸も飲まぬと極めた。そんな事がいつまで實行されたか覺えないが、何でも兄と二人で、家内の人達を皆寢せてしまつてから、玄關の三疊で夜明まで飲みつゞけたりした事もある。

その頃から私もいよ〳〵新聞方面、文學方面との縁故が深くなつて、ヤットの事で教員生活から足拔をする事が出來た。私は初めて新聞記者といふものになつた。ずゐぶん怪しい、小さな新聞ではあつたが、とにかくその雜報記者になつた。何しろこれは私の生涯にとつて、一つの發展であつた。小學教員から新聞記者への立身出世であつた。月給も十五圓に昇つた。所が、その立身出世の新しい地位は、僅か二ケ月ばかりで免職になつた。それは新聞社の經濟上の事情にも依る事だつたらうが、一つには、堺は生意氣でいけないといふ事だつたらしい。今では其の新聞の名も忘れてしまつた。

その以前私はヤット兄の家を出て、直ぐ其のそばの小さな家に移つてゐた。五軒長家の一軒で。ガサ〳〵の二階建だつた。私はその小さい城郭に立てこもつて、新聞社免職後の浪人生活をやる事になつた。まさか再び教員生活に跡戻らうといふ氣持はしなかつた。それが明治二十五年、私が二十三歳の時だつた。

十一　中江、征矢野、末松

大阪に於ける三四年の間、私は文藝癖と遊蕩癖との爲に、政治上の事には頗る冷淡であつた。然し間接ながら自由民權思想の洗禮を受けて來た青年として、全く其の方面の情熱が無くなる筈はなかつた。保安條例で東京を逐はれ、大阪に來て新聞を出してゐた中江兆民の奇矯な逸話などは、ずゐぶん私の心を刺激した。兆民先生は或時、半纏股引の職人姿で演説をやつた。兆民先生は又、自ら好んで西濱の××を代表して議會に出た。兆民先生は毎晩、盛んに飲み、盛んに談ずるが、コロリと横になる

と忽ち鼾聲雷の如く、傍若無人に眠つてしまふ。それかと思ふと、翌朝早く行つて見ると、いつの間にかチャンと其日の新聞の論說が出來てゐる。兆民先生は又、金の煙管を持つてゐるが、氣焔の吐くついでに、それを滅茶々々に叩きつぶして、ペチャンコにしてゐる。兆民先生は或時、さんざん醉つぱらつてエライ勢ひで何處かの遊廓へ押し出したが、フト途中で母親の事を思出したと云つて、忽ち車の向きをかへてサッサと家へ歸つてしまつた。そんな樣な話が無數に傳はつてゐた。（その時、幸德秋水が兆民先生の玄關番をしてゐたのださうだ。これは後に聞いた話。）

第一回の衆議院議員の選擧の時（卽ち明治二十三年）、私の非常に失望した事が一つある。豐前の國からは、我々の尊信する先輩、征矢野半彌さんが、勿論出る事だとばかり思つてゐたのに、それが末松謙澄との競爭になつて、たうとう末松が當選してしまつた。末松と云へば佛山塾出身の先輩ではあるけれども伊藤博文の婿として藩閥官權の代表者である。それが多年民權自由の功勞者たる征矢野さんを壓倒するとは何事だらう。殊に、行事、大橋邊の富豪等が皆な末松方に傾いたので、金力のない征矢野さんが遂に負けたのだと聞くに至つては、自由黨びいきの青年として、實に堪らない氣持がした。實際その時には、末松謙澄が憎くて堪らなかつた。

十二　一つのまじめな戀

お前は自分の戀愛について少しも書かないぢやないか。遊びをした、放蕩をしたといふ樣な、抽象的の事ばかり云つて、婦人との關係を一つも具體的に白狀しないぢやないか。かういふ批評が何處からか出さうな氣がする。如何にも御尤もです。

然し私は餘りさういふ事を書きたくない。一つには、現に其人、若しくは其人の近緣者が生存してゐる時、それの迷惑を思はず、それの感情を憚らないで、自分の勝手な事を書き散らすに忍びない。又一つには、兎にかく私はさういふ恥を書くのが恥かしい。それも大した惡事と感じてゐる事なら、恥を忍んでも告白を爲し、懺悔を爲す必要があるかも知れないが、ありふれた小さな戀愛事件を何も仰々しく書き立てるには及ばないだらう。有のまゝに書くのが自傳の精神だといふ說もあるだらうが、恥かしい事を恥かしいとして置くのも、また自然の行き道ではあるまいか。懺悔と稱し、告白と稱し、有のまゝを書くと稱して、實は自らの戀物語に我知らず有頂天になつてゐる場合も、世間にはある樣に見受けられる。それも無邪氣な、人間の弱みだとすれば、別だん咎めだてをする程の事でもないが、それが爲に、他の人が恥かしがる心持をおしつけて、强ひて自分の流儀に從はせようとするのは、少し無理だと思ふ。

私にも勿論、多少の戀愛事件がある。豐津の少年時代にも、幾分かの匂ひ、何程かの接觸はあつた。（九州の土地柄として男色事件も勿論あつたが、それは猶さら恥かしくて話されない。）東京の學生時代には、只だ吉原の無茶な遊びがあつただけで、戀愛らしいものは一つも無かつた。つまり、それまでの所、私の性的生活は極めて平凡な、物質的なものであつた。

大阪では一つのまじめな戀があつた。それが私の初戀だと云つてもいゝ。然しそれは失戀に終つた。そして彼女は程なく死んだ。私は彼女に對して深い知己の感を持つてゐた。私が貧弱な教員生活をして何ら將來の希望も示してゐない時に、彼女は堅く私を信じてくれた。彼女は、私が他日必ず、何らかの方面に多少の頭角を現はすべき事を期待してゐた。それも、愛

を感じた男に對する、若い女のありふれた心持だと云つてしまへば、誠に只それまでのものだが、當の男としては矢張り感激せざるを得ないのだつた。

私は彼女と手を觸れあつた事すらもない。其の交りは極めて古風な、極めて堅くるしい、或は極めて幼稚な、或は極めて臆病なものだつた。一面に於いて、飲酒遊蕩の亂暴狼藉を演じてゐる男が、他面に於いて、どうしてそんな道德的態度を取つたのだらう。それは女の理智的な氣品に壓せられたのだと解釋する事も出來る。然し又、それが卽ち私の性質の一方面だと見る事も出來る。更に又、私が一面に物慾を恣まにしてゐた結果、一面に精神的であり得たとも考へられる。

何にせよ、彼女は情を矯めてゐた。そして只、私の理解を求めてゐた。彼女は家庭の事情に身を殉じてゐた。然しながら飽くまで私の面目を傷つけない事を誓つてゐた。彼女は私と結婚する事なしに、如何にしても私の面目を保たしめる積りだつたらう。所が、その疑問は無用になつた。彼女は早くから既に病に罹つてゐた。そして間もなく死んだ。『螢一つ、闇に呑まれて消えにける』

第三期　大阪時代(下)

一　西村天囚

私の大阪時代の前半期が天王寺の塔を中心としてゐたと同じ樣に、その後期は朝日新聞を中心としてゐた。朝日新聞には西村天囚氏がゐた。朝日新聞を中心としてゐたと云ふのは、むしろ西村天囚氏を中心としてゐたのだつた。

西村天囚(時彥)氏は、私の學生時代、既に東京で名聲を擧げてゐた。『屑屋の籠』といふ、時事を諷刺し評論した奇拔な新著が、忽ちこの青年の文名を高からしめた。東海散史(柴四郞)の『佳人の奇遇』も、その一部分は天囚氏の手に成つたのだといふ噂であつた。その『佳人の奇遇』の中にある長篇の漢詩、『月は大空に橫はつて千里明かに、風は金波を動かして遠く聲あり。夜寂々、望渺々。船頭何ぞ堪へん今夜の情。……』といふのは、當時の青年書生が殆んど皆な喜んで諳誦してゐたのだが、それも實は天囚氏の作だと云はれてゐた。私はその頃から天囚氏に惚れてゐた。

或時『國民之友』に天囚氏の寄稿が載つてゐた。それは『屑屋の籠』にも似ず、『佳人の奇遇』とも違つた物で、『秋の夜は長いものとは眞丸な……』といふ俗謠を、感慨ぶかい筆致で評釋したものであつた。天囚氏は大學古典科の卒業で、漢文が專門だと聞いてゐた。然るにその一面には、かうした和文的な、而も俗謠的な、且は風流的な所がある事を知つて、私はます〱天囚氏が好きになつてゐた。そして猶それと同時に、この文名を擧げた天囚氏が實は盛んに飮み且つ遊んだ結果として、重野安繹先生から破門され、都を去つて放浪の旅に上つたといふ話を聞いて、私は更に又、竊かにその豪放濶達の風を欽慕したのであつた。

然るに私の身が大阪の地に吹き寄せられて見ると、そこの大新聞『朝日』に名聲嘖々たる天囚氏があつた。そして私の先輩たる芝尾入眞氏や、兄の欠伸などは、既にその門に遊んでゐた。然し私が天囚先生に接近する事を得たのは、それから二三年後であつた。そして初めて直接その人に會つた時、私は更に、又深い感銘を受けた。

天囚氏は偉大なる體格と、颯爽たる風姿とを持つてゐた。私のやうな、餘り風采の揚らない、小さな男は、その前に於いて威壓を感ぜずには

居られなかつた。然し天囚氏は又、絶えず其の身邊に暖かい情味を放射してゐる人であつた。一面には「豪俠不羈」の人であり、一面には「忠厚惻怛」の人であつた。私はスッカリこの先輩を崇拜する氣持になつて、それから絶えず其の門に出入した。

天囚氏は私より五歳の年長で、私の兄とは同年であつた。兄は天囚氏に引立てられて朝日新聞に入社したのだが、同年だけに略ぼ對等の友人として交つてゐた。私としては、五年の違ひくらゐの事ではなく、大先輩に對する遙かな後進の關係であつたが、それでも私は天囚氏を「先生」と呼ぶ程の素直さを持つてゐなかつた。心では十分「先生」にしてゐたのだが、口ではどうもさう呼べなかつた。

天囚氏は初め暫らく清堀に住んでゐた。そして直ぐその側に兄が家を持つた。そして前に云つた通り、私がそこに轉げこんだ。程なく天囚氏は桃谷に移つた。兄も又すぐその側に移つた。そして私もすぐその側の長家にはひつた。そこらから見ても、兄は天囚氏の衞星であり、私は兄の衞星であつた。その頃、桃谷には、同じく『朝日』の小説家として有名な渡邊霞亭氏が住んでゐた。桃谷は正に文士町であつた。

二 浪華文學會

東京では文學界が非常な賑ひを示し、「硯友社」「都の花」「早稻田文學」「柵草紙」「逍遙」對「鷗外」「紅露二家」などいふ形勢であつたが、大阪では天囚氏を中心として、明治二十五年に『浪華文學會』といふ團體が起つた。そして雜誌『なにはがた』『浪華文學』などが出た。それらと前後して、他に幾つもの小文學雜誌も出た。大阪の文學界も可なり賑かだつた。

浪華文學會には天囚氏の外、朝日新聞の小説家として渡邊霞亭、加藤紫芳、本吉欠伸等の諸氏があつた。紫芳氏は既に老を示しかけて居たが、霞亭氏は正に賣り出しであつた。そして欠伸が漸く頭角を現はす所であつた。私はその頃、何かのついでに、天囚氏を蘭に、霞亭氏を桃、に、欠伸を茄子に喩へた事がある。それから少しおくれて、須藤南翠氏が東京から朝日新聞に下つて來た。浪華文學會はこの小説大家を迎へて大いにその賑ひを增したわけだが、實を云へば、若い連中が寄つてたかつて此の老先生をいぢめた形であつた。南翠氏は櫻の宮に住んでゐて、客があれば必ず「鯛卵」の料理を取り寄せて御馳走すると云ふので、若い連中は全く、それを目的で押しかけたりした。甚だしきは晝と晩と二度續けて其の膳部にありつきながら、却つて南翠先生の見え坊を嘲笑した者すらあつた。それから又少しおくれて美文の名手として東京に知られてゐた堀紫山氏が同じく『朝日』に降つて來た。勿論これも浪華文學會に加はつた。私は頗る紫山氏と善かつた。

小説家以外の朝日記者として、藤田天放、長野圭圃の二氏があつた。圭圃氏は超然たる先輩であり、天放氏は殆んど唯一の英學者であつた。私は天放氏の手から朝日社の藏書たるデッケンス、サカレーなどを借りて、少しづつ讀んだ。

大阪はえぬきの小説老大家として宇田川文海氏があつた。若い連中はそんな人を小馬鹿にするのを自慢の樣にしてゐた。生意氣な私は或時文海先生を訪問して、餘り長く玄關で待たされたので、たうとう大の字になつて一睡した事がある。岡野半牧氏も大阪はえぬきの古い小説家であつた。これは溫厚な人で、若い連中とは殆んど何等の交渉がなかつた。

大阪出の新しい文士としては、武田仰天氏があつた。同氏はたしか官吏出身であつたが、急に小説家として賣出し、早く東京に行つてし

まつた。高安月郊氏も既に多少の名聲を馳せてゐたが、浪華文學會には幾許の關係もたかつた。朝日記者以外に於ける浪華文學會の花形は、木崎好尙、磯野秋渚の二氏であつた。二氏は共に大阪の小學校敎員であつたが、好尙氏は西鶴張の美文などが得意であり、秋渚氏は和文と漢詩とに長じてゐた。秋渚氏は又、書に於いて一家をなし、殊に假名文字が麗はしかつた。「なにはがた」の表題など大抵同氏の揮毫であつた。私はこの二先輩と常に善く交つた。殊に好尙君とは、善く談じ、善く飲み、善く遊んだ。

或時、好尙、秋渚の二君と私と、三人が坂口德二郎君の家に招かれた。坂口君は河內蛇草の人で、好尙君の舊門人であつた。私は天王寺時代に敎員同志として相知つてゐたが、文學趣味に於いても相通ずる處があつた。それで或日の夜、大阪から蛇草まで、四人が月を踏んで步みつゞけ、語りつゞけ、そして夜ふけに坂口君の家に着いて、鷄を割いて貰つて徹夜の小宴を催した。秋渚君詩あり、「水田漠々　不知處。星三　點亂蛙鳴。」さういふのが當時に於ける文士交遊の趣きであつた。

天囚氏の家に客となつてゐる人に、大谷是空君といふ人があつた。これは帝大行の半途失敗者で、英文を讀む事に於いて浪華文學會中の一異彩であつた。私は是空君の持つてゐた本で、初めてゾラの小說(レデース、パラダイス)のかじり讀みをした。或時天囚氏が、伊勢物語の一節の、漢譯と英譯を作つて見ようと云ひだして、天囚氏が漢譯を作り、是空君と私とが英譯を作つた。その英譯がほんの眞似事に過ぎなかつた事は云ふまでもない。然し天囚氏は絕えずそんな事で後身の勉學を勵ましてゐた。或時は又、天囚氏の宅で心理學の輪講會を開いた事もある。

天囚氏の親友に山內愚仙といふ油畫師があつた。これは東京で天囚氏と共に飲み過ぎて、天囚氏と共に大阪くだりした人で、その飄然たる趣きが如何にも『愚仙人』であつた。『鬼の念佛、娘のかけとり』と題した畫は、當時我々の間に評判だつた。浮世繪師としては、年峰、年恆、年信等の諸君があつた。

その外、浪華文學會に多少の(或は間接の)關係を持つてゐた人々。哲學者を以て任じてゐた久津見蕨村君。大阪のぼんちを代表した武富瓦全。君大和の人關如來君(今有名な音樂家關鑑子さんのお父さんで、梟が鶯を產んだと云はれてゐる人)、對馬の產、畑島桃蹊君、紫芳氏の弟、加藤眠柳君、上司小劍君。小劍君は最も年少で、只だ折々天囚氏の門に出入するといふに過ぎなかつた。然し私とは可なりに交りが深くなつて、或る夏の夜、二人が一緒に中島公園で夜を明した事などもあつた。小劍君が初めて私の家に來た時、私には極めて珍らしい奈良人形を持つて來てくれた事を覺えてゐる。

今一人。奧泰輔君といふがあつた。これは坪內逍遙さんの門弟子で、『早稻田文學』に鄭澳生といふ名を出したりしてゐた才人だが、何か女に關係する事で逍遙先生から破門され、東京に居られなくなつて大阪に來てゐたのであつた。私とは丁度同年で、ずゐぶんよく一緒に不平の酒を飲んだ。或時、日淸戰爭に關する美談逸話を集めて編輯しろと天囚先生から命じられて、奧君と私とが私の家の二階で、一升德利を抱へながら二晩か三晩か徹夜した事がある。所が、その原稿が、本屋の違約に依つて一文にもならなかつた時、サア又二人が飲んだ！飲んだ！

その頃、巖谷漣山人が京都の日出新聞に聘されて來てゐたので、それが連鎖となつて、私等は尾崎紅葉君等の硯友社一派と多少の關係

を持つた。堀紫山君が尾崎君と親しい間柄であつたのも、それに導く一つの因緣であつた。私は勿論、浪華文學會の會員であつた。斯樣にして全くの文學青年となり、例の『ぞるこそれ』調の文章を得意にして、小說や隨筆を書いてゐた。英語はまだ本當には讀めなかつたけれども、アーヴィング『肥えた旦那』を反譯したりした。その反譯からヒントを得た『隔墻物語』といふ短篇が、鷗外先生の『柵草紙』に採錄された時など、內心ずゐぶん得意だつた。私の文章が東京で印刷されたのは、それが最初であつた。

三　浪人生活、文士生活

私が初めて新聞記者になつた時、それは矢張り天囚氏の口入であつた。そしてそこの主筆格たる人に中西牛郎君があつた。中西君は熊本で德富蘇峰と並び稱せられた大秀才で、學問文章共に素晴らしいものだといふ評判だつた。然しこの秀才、實は非常に放縱無賴な、箸にも棒にも掛らぬほど、だらしのない秀才だつた。そして新聞社その者が又、ずゐぶんグラシのない、エタイの知れない小新聞だつた。私は其の社と人物とに親しむ暇もなく、二三個月で退社を命ぜられた事は前に話した通りである。

小學校敎員から一躍して、折角新聞記者に立身したが、今度は忽ち無職の浪人に成りさがつた。然し私としては、その無職の浪人が寧ろ誇りで、文學者もしくは小說家と云つたやうな資格で、極つた勤め先もなくブラ〳〵して暮してゐるのが、少なくとも小學校敎員以上と考へられてゐた。それから一年か一年あまり、私はずゐぶん苦しい原稿料生活をやつた。天囚氏や兄の世話で鹿兒島の新聞や神戶の新聞に小說を書いた。それらは大抵、英文の小說の燒直しであつた。その頃まだ英文の小說が本當に讀めたわけではないが、どうせ自由自在に燒直すのだから、本當に讀めねばならぬ必要はない。大體の筋さへボンヤリ分れば、それを種にする事が出來る。そんな風で、私は無茶苦茶に英文小說を亂讀したが、お蔭でその間に、自然相當の讀書力が養はれた。

その頃、心齋橋に駸々堂といふ有名な本屋があつた。ずゐぶん安つぽい本屋ではあるが、商賣の規模は小さくなかつた。從つて我々は、何かと云ふとそこに出かけて、幾らかの金をねだる樣にして取るのだつた。然し『なにはがた』や『浪華文學』は、そんな品のわるい本屋にやらせてはいけないと云ふので、大日本圖書會社から出してゐた。それで私等は又、何かと云ふとそこの武田といふ番頭を口說き落して、幾らかの金にするのが常習であつた。

そんな間にも、私の飮む事、遊ぶ事は殆んど間斷なしであつた。從つて私の家の經濟は無茶苦茶だつた。『もう八木が無いぞよ』と、よく父が云つたりした。八木とは米の事だつた。その米を掛買にしてゐる時でも、それが月末に拂へないと(實際、大抵の月は滿足に拂へなかつたのだが)、父はやかましく私を責めた。父の考へでは、我々は米屋の仕送に依つて活きてゐるのであつた。然るに其の代金を拂はないのは、非常な不義理、不道德であつた。米といふものは、父に取つては、主君から頂戴するのでも、商人から買ひ取るのでも、同じやうに神聖な物に感じられてゐたのではないかと思はれた。それで私は、米屋から經濟的に責められるのと、父から道德的に責められるのと、內外兩面の敵に當る事になつてゐた。私は折々、その意味に於て父と論爭し衝突してゐた。然し私は又、兎にかく武士の生涯を送つて來た謂ゆる小廉曲謹の老父をして、晚年にさうした貧苦を嘗

めさせる事を非常に濟まない、非常に氣の毒だと感じてゐた。けれども私は又、それが爲に飲酒遊蕩の悪癖を改め得る者ではなかつた。私はその一家貧苦の間に在つて、猶ほ且つ先輩の尻につき、友人の先に立つて絶えず遊びあるき、飲みまはつてゐた。

或時、母が私に向つてしみ〴〵と斯う云つた。お前も嘸ぞつらい事であらう。若い身空で年寄の親を負はせられてゐるのだから、それを思へば、わたしは氣の毒でたまらぬ。お前が毎日出て行く時、わたしはいつも其のうしろ姿を見送つてはさう思うてゐる。お前も萬ざらの馬鹿とは見えぬ。人並に劣るほどの男とは思はれぬ。だから若し、親のわたし達が居らぬなら、何とでもして相當の立身をするであらうに、只わたし達がその妨げになつてゐる。それを思ふと、いつそ死んでやりたうなつて短刀を取り出して見た事も何度かある。けれども、年を取つては自害する氣力もない。それに矢張り、可愛いお前を跡に見棄てて死にたうは決してない。…母は遂に啜り泣をはじめた。これには私も心の底から驚かされた。母は子に自由を與へる爲に死なうとした！ 然るに其の子は、それでも矢張り飲み且つ遊ぶ事を止め得なかつた。

四　吉弘茂義、高橋健三

さうする中、私等の雑谷時代が過ぎて、曾根崎北野時代が來た。天囚氏が曾根崎に移り、欠伸もすぐその側に移つた。霞亭氏、紫芳氏等も皆な其の邊に居た。そして私も北野の長家に住んだ。北野にはその頃、「鶴の茶屋」だの、「九階」だのといふ遊園地があつたりして、面白い郊外の土地だつた。

その、「九階」の、枝垂柳の多い園の内に吉弘茂義(白眼)君が住んでゐた。吉弘君は「文士」ではなかつたが、新聞だの雑誌だのの計畫屋で、兄だの私だのとは自然懇意になつてゐた。色の白い、綺麗な痩せぎすな小男でありながら、吉弘君には何となく親分肌があつた。ちよか〳〵した才子の様で、而も、大膽な、機敏な、親切な、熱心な所があつた。自分が親と妻子とを養ひかねて居りながら、困つた文士連を庇護するといふ態度を忘れなかつた。私とは近所でもあり、同年でもあり、直ぐに大の仲好しになつてしまつた。その頃わたしは、春先になつ　羽織といふものを持つてゐなかつたが、吉弘君の只一枚の飛白の袷羽織が、少々肩行は合はないながら、屢々私の背にも着られてゐた。つまり吉弘君と私と、二人で一枚の羽織を使用してゐたのであつた。吉弘君と私とは又、米の使用に於いても常に共通であつた。即ち、吉弘君が米の一斗も買つて居れば、私が直ぐに行つて其の中から二三升も借りて來る。さうかと思ふと又、私の家に米が五升しかない時、吉弘君が來て其の中から一二升も持つて行くのであつた。(この吉弘君が今は大阪に有名な新聞社長であり、大紳士である。)

右は多分、明治二十七年(私の二十五歳)の春だつたと思ふが、その時、私は計らずも新聞記者の地位を得た。今度も矢張天囚氏の世話だつた。而も天囚氏は其の話をまとめてくれて、いよいよ明日、社長の藪廣光氏に會ひに行けと云つてくれた。と同時に、紬の袷羽織を一枚、私の家に持たせてよこしてくれた。それは私がねだつたわけでも何でもないが、吉弘君との共同使用物以外、私が羽織といふものを持つてゐない事を天囚氏が知つてゐて、その前晩、奥さんを古着屋にやつて、わざ〳〵私の爲に買はせてくれたのであつた。

この新聞は「新浪華」と云つて、前に記した新聞の後を繼いで、其の同じ家屋機械を使用したものではあつたが、經營者は全く別であつた。

社長の藪廣光氏は熊本人で、佐々友房氏の子分であつた。つまり『新浪華』は國民協會の機關紙であつた。

その頃、朝日新聞には高橋健三氏が新たに主筆として赴任してゐた。高橋氏は元と官報局長の地位に在り、後に松方內閣の書記官長になつた人で、氣節と學識とを以て聞えてゐた。東京では日本新聞の陸實氏、大阪では朝日新聞の高橋氏、正に東西相呼應する、日本主義、國粹主義の鼓吹者であつた。朝日新聞は頓に活氣を呈して來た。川邊貞太郎君が日本新聞から朝日に轉じて來たのも目についた。又、高橋氏の門下に、後に有名になつた內藤湖南君が潛んでゐた事も、人の噂に登つてゐた。天囚氏は其の氣質から云つても、薩州人たる因緣から云つても、正にこの系統に屬する人で、氏に取つては自然・得意の時代が來たわけであつたらうと考へられる。そして『新浪華』も亦同じ保守的傾向の國粹主義系統に屬するものであつた。天囚氏が私をそこに世話する事の出來たのも、その因緣からであつた。斯くて私はいつの間にか、この保守系統の一小分に成されてゐた。

天囚氏は新文學興隆の時代に際して、浪華文學界の中心勢力になつたりしたものの、實は偉ゆる文學者ではなかつた。固より坪內流でもなく、鷗外式でもなく、露伴紅葉とも全く異質であつた。朝日新聞に書いた小說でも、「老女村岡」などといふ教化的の物語が其の本色であつた。さもなければ、表題は忘れたけれども、或る豪傑の一群が一艘の船を家として海外に發展を試みるといふ、冒險的英雄譚に其の感興を寄せるのであつた。福島中佐がシベリヤ橫斷の騎馬旅行をやつた時、天囚氏がその記事に於いて特殊の精彩を發揮したのなどは、正に其の處を得たものであつた。然るに今、天囚氏は、新たに高橋氏一派を朝日新聞に迎へ得て、そこで初めて政治的の態度を定め、その活動を開始する機會を得たわけであつた。そして私が又、自然に其の波動の中に卷き入れられたのであつた。

私は初めて高橋さんに會つた時、深く其の氣品に打たれた。痩せた、綺麗な、弱々しい、そして底に强味のある恰好が、恰も篠の鞭と云つた樣な感じであつた。又、高橋さんが扇面に細字で般若心經を書いた其の書風が、如何にも勁拔で好きだつた。私は高橋さんから、「社會科學叢書」の中の「ダアキニズム、エンド、ポリテクス」(進化論と政治)を反譯して見ろと云はれて非常に嬉しかつた。然しやつて見ると、迚も駄目だつた。不審の個所を質問に行くと、高橋さんは善く面倒を見て教へてくれた。反譯の英語の原稿は半分ばかり出來るには出來たが、結局、物の役には立たなかつた。然し私は、それで初めて英語の論文物(小說以外の書物)に接觸したのであつた。

「條約勵行」といふ事が、歐化主義者に對する國粹主義者の其の頃のモットーで、そのモットーに依る示威的の大宴會が大阪で開かれた。『朝日』も、『新浪華』も、皆それに聲援を與へた。私も袴をはいて出席した。天囚氏から指圖されて、私は席上で何かの挨拶をやつた。そんな事は私として初めての經驗だつた。堺はやれさうだと、天囚氏があとで評してゐた。そんな事で、私はいつか、國粹主義者の一雜兵になつてゐた。

五　新浪華

『新浪華』の社長藪廣光氏は色の黒い、髭の濃い、國言葉の著しい、生粹の熊本人だつた。「條約勵行」は藪氏の口に於いて「ジョウヤク・デイコウ」と發音されてゐた。主筆格としては、熊本の「九州日々新聞」の主筆山田珠一君が「當分」

手傳ひに來てゐた。山田君は肥後の生れであつたが、若くから佐々友房氏に育てられて、殆んど總ての點に於いて熊本人になつてゐた。小柄ではあつたが、かつちりした、堅實味の多い、質朴な人物だつた。（この人が後に、九州憲政會派の有力な人物になつた事は、特に記すまでもあるまい。）その外、社中に二三の熊本人があり、社外にも熊本出身の先輩（例へば辯護士芳賀貞賢氏など）が顧問格の地位に立つてゐた。どういふ關係か善くは知らなかつたが、「浪人」として名望のある廣瀨千磨氏なども折々社に顏を見せてゐた

編輯局は僅かに十人あまりで、幾らか記者らしいのは、少し後れて入社した月輪望天君と私とぐらゐのものだつた。外勤連の中には、後に何處かから代議士に出た加賀宇之吉君などがあつた。私の月給は矢張り十五圓だつた。そしてそれが（山田君を除いては）最高であつた。月輪君も私と同格だつた。所がその月給の拂ひ渡しが時としては翌月の初めになる事があり、甚だしきは二月分一緒になる事もあつた。そこでをかしい事には、編輯局内に金貸業者が出現した。それは相場係の記者で、少々工面がいゝものだから、月給受取の委任狀に對して、一割か二割かの天引で貸付をした。編輯局員の殆んど全部が大なり小なり皆この人の手に掛つてゐた。社の會計も實はそれを便利として寧ろ奬勵してゐた。

私は小說を書いたり、論文を書いたり、隨筆を書いたり、雜報を書いたり、たまには論文を書いたりした。私は記者として便利だと云ふばかりでなく、天内氏からの推薦として人間の素性が知れてゐるので、頗る藪社長から愛された。藪氏の家には新たに國元から奥さんと子供達とが引越して來た。奥さんは五尺三寸もあらうかといふ大女で、氣質も甚だ濶達であつた。若い時には馬にも乘り、游ぎもしたといふ、熊襲的婦人であつた。「そぎやん事おつしやつたちが、いさぎゆう」などといふ生粹の國言葉が面白かつた。子供達はお父さんお母さんの事を「テェさん、ダアさん」と呼んでゐた。私はこの一家の人達と極めて親しく交はつた。

私の月給が十五圓で、それが社中の最高だつたと云ふのは、今ではよほどをかしく聞えるだらうが、その頃では、十五圓あれば、どうやらかうやら小さい一家の暮しは立つのだつた。私の北野の家は二圓十錢の家賃で、父母と下女と四人暮しであつた。米が一升幾らであつたか忘れたが、普通の酒が十八錢で、二十三錢も出せば飛切りだつた事を覺えてゐる。私は煙草も吸つてゐたが、いよ〳〵金のない時、『百日十錢の煙草も飲めば飲まれるものなり』と日記に書いた事がある。普通は十五錢か二十錢もしたのだつたらう。だから、若し私が放縱の癖を改める事が出來たら、そんなに父母を苦しめないで濟んだ筈である。所が實際には、例の八木の缺乏を來す事が屢々であつた。

その頃、私が父に變な土耳古帽を一つ買つてやると、これは面白い形だと云つて、父は喜んでそれをかぶつてゐた。然し父は、年寄があまり見苦しいナリをしては步かれぬと云つて、滅多に親戚などにも行かなかつた。その頃、間宮四郎さんは陸軍の役を罷めて、灘の住吉に新宅を構へて隱居してゐたので、父に宿りがけで遊びに來いといふ毎度の案內があつた。そこには父の叔母もまだ生き殘つてゐたし、父も行きたいのは山々であつたが、例の『見苦しいナリ』を見せるのが厭さに、たうとう一度も行かなかつた。父のスキヤの夏羽織の折目がすりきれて、それを父が糊で裏打をしてゐた事を思ひだす。母の前齒が久しく缺けて て、それを手細工で、桐の木の入齒をしてゐた事も思ひだされる。

六　日清戰爭、廣島臨時議會

明治二十七年の夏、朝鮮の變亂について、遂に清國に對する宣戰の公布となつた。特に國粹主義者でなくても、青年の血が湧かずには居られなかつた。私はその時『新浪華』に無邪氣な小說を書いてゐたが、いよ〳〵戰爭が始まると、もうどうしても、そんなノンキらしい物を書いてゐる氣がしないので、その續き物を中止にして、その代りに戰爭美談を載せた事を覺えてゐる。

或日、私は梅田停車場のそばで、第四師團の兵が出征するのを見送つた。道の兩側の群集が歡呼すると、軍隊中の騎馬の將校が擧手の禮をする。私はその光景に痛く胸を打たれて、頻りに涙を垂らしてゐた。それほど私は愛國者であつた。

秋になつて廣島大本營に臨時議會が開かれた。私は、『新浪華』記者としてその傍聽に出かけた。然し今考へて不思議なのは、その臨時議會に關する記憶が少しもない。淺野侯の園遊會に招かれた事や、吳の造船所を見た事などは覺えてゐるが、議場の光景などは少しも覺えてゐない。

私は國民協會所屬新聞記者として、東京から來てゐた朝野新聞の杉田藤太（天涯）君、中央新聞の水田榮雄君、それから前記の、九州日々新聞の山田珠一君などと共に、協會で準備した合宿所に宿つてゐた。その中で、私は殊に杉田君と親しくなつた。杉田君の朝野新聞は川村惇氏の經營であつたが、私の『新浪華』と同じ程度の貧弱さであつた。外の新聞記者が旅費や電報料を豐富に持つてゐる間に立つて、見すぼらしい服裝をした、そして文章自慢の二青年が、忽ちにして、意氣投合したのは誠に自然であつた。杉田君は二十四歲であり、私は二十五歲であつた。杉田君は古ぼけた背廣を着て居り、私は怪しげな羽織袴を着て居た。

他の新聞記者には、私は一人の知己も持たなかつた。然し日本新聞の古島一雄などが記者仲間で幅を利かせてゐるのを見たり、又議員である末廣重恭（鐵腸）氏が、僕も君等の仲間だよと云つて記者の會合に來たのを見たりした。議員では、國民協會の佐々友房、古莊嘉門などの諸氏に會つた。古莊さんは以前に高等中學の校長として知つてゐたが、只だ岩の塊まりの樣な人間だと思つた。佐々さんには初めて會つたが、色の白い、丸顏の、少し額に皺のある、如何にも先輩らしい人物だつた。音に聞えた策士といふ感じよりも、寧ろ溫厚の長者といふ風が見えた。少し頭痛がすると云つて、橫になつて人に頭を揉ませながら、我々青年に對して諄々と說き、懇々と敎へる所が　さすがに佐々先生だなと思つた。

七　六年ぶりの東京

その年の暮、私は久しいあこがれの東京に向つて出發した。大阪生活の五六年間、大阪言葉には少しも親しむことが出來ないで、半熟の東京言葉を誇りとする形であつたが、それだけ絕えず東京に對するあこがれが強く、いつかは東京へ、東京へ、只そこにこそ人生の希望はあるのだと考へてゐた。凡そ大阪へ來る他國人で早く大阪言葉を使ひなれる者（卽ち早く大阪に同化する者）でなくては、成功は駄目だといふ話があるが、それは確かに當つた所がある。浪華文學會の連中で、渡邊霞亭君は程なく少しづつ大阪言葉を使ひはじめてゐたが、果して久しく大阪の『大家』として繁昌した。勿論一がいにそんなことは云へないが、私は兎にかく大阪で榮えさうに思はれなかつた。

私ばかりでなく、兄も大阪で失敗した。兄は

それまで幾許も東京を知らず慶應義塾の生活も一年には滿たなかつた位で、大阪こそ彼にとつての、むしろ初めての世間だつた。そしてその大阪で早く西村天囚といふ知己を得て、程なく『朝日』といふ大有力な社會機關の一部となつたのだから、云はゞ意外の成功であつて、本吉欠伸の名は世間には相當知られたのであつた。そして妻子を呼び寄せて、可なりな家に住んで可なりな生活をしたのであつた。所が、放縱の癖は文士の常(むしろ誇り)で、それが兄のはずゐぶん徹底したもので、流連荒亡歸るを知らずと云つた趣きが、よほど永く續いた。その結果は負債の堆積となり、家庭の不和となり、國元の養家との不折合となり、遂に細君のお浪さんが子供を連れて國元に引揚げた。兄は、妻子を取られたる身の上』などと云ふ皮肉な言葉で自分の境遇を嘲つてゐたが、それからの放縱は一層甚だしくなつた。その次の結果は『朝日』の退社であつた。或時、兄は病氣に罹つて長堀の病院にはひつてゐたが、私が見舞に行つて見ると、新町あたりの安つぽい藝妓が來て、その病室に宿つてゐるといふ亂暴な始末であつた。要するに兄は大阪に居られなくなつた。そしてはふはふの體で東京に流れて行つた。然し私としては、兄が兎にかく東京へ行くといふ事が羨ましかつた。それほど東京に對するあこがれが強かつた。兄が東京へ着いて直ぐよこした手紙には、東京の女の言葉を聞くのが第一の樂しみだと書いてあつた。

そんなわけで、私もどうかして東京へ行きたい行きたいと考へてゐる中、支那へ出征した軍隊に對する酒保の仕事をやりたいといふ人達が、天囚氏の處に來てその事を相談してゐた。そして天囚氏が私をその人達に紹介した。私の親戚の間宮氏、灘に隱居してゐた人が陸軍の監督として就任してゐるので、そこに賴みこむ何かの便宜が得られるだらうと云ふのであつた。私としては、如何にも柄にない仕事であつたが、東京にさへ行かれる事なら何でも構はないと云ふので、大喜びで承諾した。

斯くて私は六年ぶりに再び東京の土を踏んだ。私は早速、酒保計畫の人達を連れて間宮氏を尋ねてみたが、それはもう時機が後れて全く駄目になつた。私はむしろそれを喜んだ。私は只だ東京に來られた事が嬉しかつた。私は兄の居る有樂町の下宿にはひつて、文士兼新聞記者連の小さな一群に加はつた。先頃まで大阪に放浪してゐた一奇人の畑島桃蹊君が、今は『めざまし新聞』の記者になつて、そして此の下宿に陣取り、而もそこの働き手の年増の娘と何かの關係を持つてゐたので、そこが自然に我々の根城となり、倶樂部となつた。そこに遊びに來る人達の中には、『めざまし』の小林蹴月、『讀賣』の關如來などの諸君があつた。私は『新浪華』の記者として議會の傍聽に行くといふ事にして、當分滯在の計畫を立てた。『新浪華』が滯在費を出して吳れる程の力のない事は無論だが、留守宅に私の月給だけを運んで吳れるといふので、私は何かこちらで稼ぎながら議會の傍聽記を書いて送る事にした。それには、せめて一着の袴が必要だと云ふので、牛込の佐々友房氏を尋ねて無心した。佐々氏は私を引見して金十圓を吳れた。私は早速、神樂坂で袴を買ひ、ついでに下宿の娘に贈るべき襦袢の袖か何かを買つて歸つて來たが、その晩に火事があつて其の下宿が丸燒になつた。

何しろ一味の根城が落ちたわけで銘々離散するより外はなかつた。私は兄と共に、大晦日の夜、靈岸島から船出して房州に落ちのび、明治二十八年一月一日、那古船形から少し奥にはひつた多々良といふ所の田舍宿に陣取つた。そしてそこから『めざまし』へ約束の原稿を書いて送

る事にした。暫らくすると蹴月が來る、桃蹊が來る、そしていづれは飲んで騷ぐのであつた。甚だしきは、或日、桃蹊と兄と私とが、クル／＼と頭を剃つて、三個の靑坊主を揃へたといふ程の馬鹿な眞似までした。
　たしか其の時、岐阜名古屋の大地震があつて、それが房州にも可なり響いたのだが、丁度その時刻、私は酒に醉つぱらつて、ヒョロ／＼と步いてゐたので、丸で地震を感じなかつた。そんな馬鹿な日を送つてゐる所に、『ハハキトク』といふ電報が大阪から來た。私はあわてて東京に歸り、間宮氏に驅けつけて旅費を借り、蹴月の綿入羽織を外套がはりにして、せめて母の死に目に會ふべく大阪に歸つた。

八　母の死、大阪立退

　母はまだ生きてゐた。篠田のをばさんが來て介抱してくれてゐた。お醫者さんは親戚の木下愛水さんが來てゐてくれた。『乳房にぶらさがつた奴等を一人も見せずに死なせるのはあんまりだと思つてゐたが、貴樣が戾つたのでモウ云ふことはない』と、父が喜んでくれた。母は半睡半醒の狀態であつたが、それでも私の顏を見て安心したらしかつた。
　二三日おくれて兄も歸つて來た。それから兄と私と、毎晚交代で徹夜の看病をした。二人とも大變な孝行者になつた。母の病氣は永びいた。或日、木下さんが母の背中に注射をしてくれると、母は夢うつつで變な事を云ひ出した。『永わづらひをしてお前達も嘸ぞ迷惑ではあらうが、それかと云うて、そんな事までしては、篠田のをばさんの手前もあらうに、……』私等は全く驚いた。早く死なせる爲に注射をするものと母は感じたらしい。それと云ふのも、貧乏の苦勞が骨までしみてゐたからの事だつたらう。
　然しその時、私等は經濟上案外らくだつた。兄が房州に居る時から『朝日』に小說を書く約束をしてゐたので、それを兄と私との合作で（たしかこれも西洋小說の飜案で）やりだしたから、差當り必要なだけの費用は容易に得られたのであつた。
　二月二十四日、母は遂に死んだ。六十八であつた。『凍てる夜の明くるも待たぬ別れかな』これが父の句であつた。その前年あたり、父はよく氣紛らしに、『又すこし足をもんで吳れぬか』と母に賴んでゐた。すると母は、『わたしもモウ自分のからだだけを持てあつかうて居るのぢやから』と云ひながら、それでも別だん厭な顏もせずに揉んでゐた。老いた夫婦の間柄は思ひのほか濃やかだつた。
　それから暫らくして、兄は又東京に行つた。そして間もなく都新聞に入社した。所が私の方では『新浪華』が沒落した。何の事件であつたか忘れてしまつたが、藪社長外一二名の社員が未決監に入れられた。新聞は出なくなつた。社は自然に解散した。然し私は獨り踏止まつた形で、どこまでも藪一家の世話をしてゐた。藪の奧さんは賢夫人振を發揮して、每朝水垢離を取つて夫の無事歸宅を祈ると云ふ風であつた。佐々友房氏が京都に來たと聞いて、私は藪夫人と二人で救助を求めに行つた。佐々氏は金が無いと云つて、時計の金ぐさりをはづして藪夫人に與へた。私は深くその心意氣に感じた。後にその事を人に話すと、そこが佐々の老猾なところさといふ批評であつた。
　藪氏は豫審免訴か何かで首尾よく歸つて來たが、再擧の見込はなかつた。私は前川虎造氏の『阪城週報』を編輯したりしてゐた。それも天囚氏の周旋であつた。そこに東京の兄から好い知らせがあつた。兄が都新聞にはひつたのは、昔長崎で知合つてゐた田川大吉郎君が『都』の

主筆をしてゐたからであつた。然るにその田川君が今度、新たに新聞をやると云ふので、兄が私を推薦した。それには『阪城週報』が私の文章の見本として提出された。そして田川君が私を呼んで呉れる事になつた。

田川君は私とも以前東京で知合つてゐた。その頃、田川君は同郷の先輩岩崎小二郎氏の家に書生をしてゐた。或時、前に記した小林助市君が私を岩崎家に引張つて行つて田川君に會はせた。小林君としては自分の友人たる一秀才を、他の同じく友人なる一秀才に引合せたわけであつた。私はその時、正に高等中學の入學試驗に及第したばかりの、聊か得意の時代であつた。田川君は私より一つ二つ年上でもあり既に早稻田專門學校の學生であつた。然るに今、私は大阪に落魄し、田川君は東京で新たに新聞を主宰する地位に在り、そして自分の下に私を呼んで働かせようと云ふのであつた。私は知己の感を抱いて直ちに上京した。

とは云へ、私の上京はそんなに容易でなかつた。私はいろいろ手段を盡して北野の家を片づけ、多少の荷物を荷車に積んで、父とふたり人力車に乘つて梅田停車場に向はうとする時、家主があたふたと驅けつけて、滯つた家賃を其のまゝにして立ちのくとは怪しからんと云ふので、エライ權幕で蒲團を積んだ一車を差押へてしまつた。

第四期　二度目の東京時代

一　産婆の二階

明治二十八年九月二十一日、二十六歳の私は七十歳の父を奉じて、大阪から東京に着いた。丁度その前後一二個月の事を書きつけた兄欠伸の日記が殘つてゐる。その二十日の項に『夜枯川より電報來る、曰くアス一バンタツと、濱松の宿屋より發したるなり、老體の疲れ玉ひて彼地に休らひ玉へるならん』とある。文體、用語、態度、總べて善く其の時代を示してゐる。そして兄欠伸の態度は即ち亦た弟枯川の態度であつた。二十一日の項には『四時に汽車着す、二人の健康なる姿は我が前に現はれぬ、相伴うて宿に歸り久しぶりに骨肉相酌む』とある。

宿は京橋南紺屋町（今、實業之日本社の在る處）の「梅が枝」といふ産婆の家であつた。石造のガッシリした家で、表に碧梧が二本立つてゐた。二階に部屋が三つあつて、その一つに兄が下宿してゐた。私と父とは其の隣りの部屋にはひつた。今一つの部屋はあいてゐた。つまり我々が二階全部を占領したわけであつた。下には七十幾つになる主人の老婆と、十二三になる低能兒の孫と、顏立は惡くないが、色の蒼白い、氣の拔けた、たまに寂しい笑ひ方をする女中とがゐた。ずゐぶん陰氣な家だつた。

『二十二日、午後二時頃より空少し晴れたれば父上の案内して枯川小林も同道にて淺草に遊び一直に飮む』『二十三日、雨をおかし夜出で枯川と共に蕎麥を食ふ』『二十六日夜、父上枯川同道にて寄席に行く』『二十九日、蹴月枯川と京橋の角に飮む』『二日、夜父上のお供して寄席に行き女義太夫を聞きぬ』父子三人の當分の生活の見本がこれ。

兄はその時、都新聞の小說記者で、小說を書かぬ時には雜報（謂ゆる艷種）を書いてゐた。月給はたしか三十圓であつた。日記の初めには『九月一日、晴、此日舊曆盂蘭盆會に當る、今年は母上の初盆なれば下宿住居の身ながら心ばかりの魂祭せんとて』などと殊勝な事が書いてあるが、その全般の生活は放縱を極めてゐた。文人らしい一面を擧げれば、『小林と倶に日比谷の原に蟲を聞く、月明かにしてをかしさ

限なし、其より二人は愛宕下の牛肉屋にて、一盃……蟲鳴くや兵士どもが足のあと、あれも聞く人か木か草か蟲の聲』などとある。その頃、日比谷はまだ練兵場であつた。又『三日、晴、陰暦中秋、觀月の企もありたれど何れも不景氣にて成立たず、……下谷に友を訪ひて日を暮し夕ぐれより同行して淺草に遊び其處にて一盃かたむけ、醉に乘じて吾妻橋を渡り月夜の面白さに不知々々堤を歩して梅若塚に至りそれより引きかへして竹屋より三谷に渡り眞如の月を見て歸る、初て墨江の明月を觀て快極りなし、月の秋さくらは葉さへなかりけり』かういふ事をここに書きつけるのは、それがそのまゝ、當時に於ける私の趣味を示し、私の態度を示すものだからである。

更に放縱の甚だしい一面を擧ぐれば、『夜十時過、早や寢床に入りたる處へ電報來る、何事ぞと見ればスグコイとばかり記して淺草角町蹴月よりとあり、行きて大いに飲み、眠らずして明す』『八日、ふつたり照つたり、遂にぶん流して午後五時歸途に就きしが途中平野にて痛飲、興に乘じて引返し遂に又一泊、近來の狂態なり』……それより宿に歸り湯に行き終日をぶらつく、其の後の事は記すに堪へず、余は行方不分明となりぬ』『十九日、晴、あつし、昨夜より此の日の夕ぐれまで余の行方は猶ほ不分明なり、……夜に入りて余は何處よりとなく歸り來れり、宿に入つて世を隔てたる思せり』『三十日、晴、此日は勘定日なれども金大に足らず……午後・時宿を出でたるまゝ處々をぶらつき、夜ふけ宴々静まりて後歸らんと思ふ中、途中にて我と同じく家に歸りかねたる男に出逢ひ、其の結果遂に又行方不分明となりぬ』これらが又、私自身の日記としても一向差支のない事ばかりである。

現にかういふ一項が保存してゐる。『四日、曇、朝のほど未だ臥戸を出でぬ處へ、昨夜歸らざりし枯川きまり惡く歸り來り怪しき男をさへ伴れたり、如何ともせんすべなければ老妻を説きて辛くも其の男をかへしやりぬ』この時私の共犯は白河次郎(鯉洋)であつた。彼は豐津中學以來の有名な秀才で、この時には帝國大學の文科にゐた。年は私より四つ下。

この日記に現はれた人々の名前を見ると、小林蹴月君のが一番多い。それから畑島桃蹊、『外に行き處なし死にでもせねばならぬと云ふ事情の如し』とある。關如來君の名も幾度出てゐる。『早朝關嚴次郎來る、彼は例の如く女郎買の歸なりと號す』とある。坂口德二郎君は、『人夫の頭になつて威海衞に行かんと云へり』とある。その外、筒井年峰、久津見蕨村、磯矢廉などの諸君、(蹴月君を除いては)皆な大阪以來の知友である。都新聞の人々としては、遲塚麗水、葉山菊醉、岡本甚吉などの諸君の名がある。『都新聞の社長盧來訪、下らぬ事を云うて歸る』は大いに振つてゐる。

それから田川大吉郎君の名が屢々出てゐる。田川君は新たに新聞を出すについて、兄を相談相手の一人と爲し、都新聞には内證で小説を書かせる事にしてゐた。私がその因緣からして此の新聞に關係する事になつた次第は、前に記した通りである。

かういふ間に、今一つ兄の身の上に事件があつた。『十一日、……妻より手紙來る、悲しさやる方なし』『十六日、……妻の旅費にとて五圓だけこさへたれど、あとの五圓どうしても調はず、此の三四日甚だ焦慮、彼はさぞ待ち詫びてあらん、グヅ〳〵して居ては此五圓も甚だ危し、今度こそは神に誓うて費すまじ』然し其の誓は破れて五圓の金は果して無くなつたが、私が上京してから、二人相談の上、ヤットの事で十圓の爲替を國元に送つた。要するに、彼女は親の許

を拔けだして來ようといふのであつた。所が、豐津の郵便局がその祕密を彼女の親に漏したので、計畫はスッカリこはれてしまつた。

二　實業新聞

田川君の新聞の表題は『實業新聞』といふ事に極まつた。日清戰爭が大勝利に終つて、實業熱が勃興しかけてゐた折柄、新らしく發行される新聞の名として『實業』の二字が選ばれた事は、如何にも當然であつたらう。然し私はまださういふ時勢を感じてゐなかつた。そして『實業』の二字を如何にも無趣味だと感じた。私は稍や失望した。然し大阪の落魄の中からヤット這ひだして來て、兎にかく此の新らしい東京の新聞に籍を置く事の出來たのは、私として頗る得意で無い事もなかつた。而も月給は二十五圓、それも惡い方ではなかつた。

實業新聞は、たしか改進新聞の跡を繼いだもので、社は京橋南鞘町に在つた。持主や何かの關係は善く知らなかつたが、何しろ私としては只だ田川君との關係であつた。田川君は主筆であつた。庶務の方には桐原捨三君などがゐた。桐原君と云へば、改進黨の名士の一人として私の記憶に存してゐた人だが、曾つて見ると、至極貧弱な、何らの趣味のない人物らしく、そして別だん手腕家とも見受けられなかつた。編輯局には古顏の記者として、硬派の井土靈山君、軟派の三品藺溪君などがあつた。藺溪君は耳が大ぶん遠くて、小さい喇叭の樣な物を素早く耳にあてがつては話をしてゐた。藺溪君の部下と云つたやうな地位に岡本狂綺堂君がゐた。岡本君は後の有名な劇作家綺堂君だが、その時はまだほんの若い、そのくせ頗る老成じみた、小紋の羽織などを着て取りすました、一個の小劇通に過ぎなかつた。それから經濟部には平野君、北川君などといふ腕利が揃つてゐた。田川君の直屬らしい人物としては、廣告部に楠虎臣君があり、編輯部に森一兵衛君と私とがあつた。森君はまだ二十かそこらの、極めて無邪氣な、善く笑ふ大男であつた。その外、政治方面の外勤(その頃の謂ゆる探訪)に如才のない龜谷天尊君があつた。(それが後に龜谷聖馨などといふエライ名前で、いろ〳〵佛教めいた著述をしたり、何やら中學の校長さんになつたりしたのは、私に取つては誠に意外な事だつた。)今ひとり警察方面の探訪に森戸鈜太郎君と云ふ、一見安つぽい人物のあつた事を覺えてゐる。それが後にエライ株屋になつたと聞いたのも、同じく大なる意外であつた。

田川君は年の割に成熟した才人で、品行方正のクリスチャンでもあり、勤勉力行の事務家でもあつた。文章にも著しい特色があり新味があつたが(それは一つには、彼が長崎の外國語學校で支那語を學んだ結果ではないかと私には考へられたが)、それよりも寧ろ、彼の本當の技倆手腕は、新聞全體の編輯計畫の上に在つた。實業新聞は確かに新らしい編輯振を以て出現した。私としては、例の文藝趣味からして、餘りそれに感服したわけではなかつたが、然し其の新らしい味には打たれざるを得なかつた。實業新聞發刊の月日は記憶しないが、多分十月半の事だつたらう。

私は田川君に對する知己の感を以て熱心に働いた。然し私のかいた小說は、一般の俗受もせず、文藝品としても認められず、如何にも中途半端な、生煮えの物であつたと思ふ。それが終つた時、田川君が『嶄拔』の二字を以てそれを評したのは、それが全く、譽めもくさしもならぬ難物であつた事を想像せしめるに足る。その小說の插畫が又、新らしくもあり奇拔でもあつたが、餘り受けもしなかつた。筆者は誰あらう(と云つても、當時はまだ大して有名でもなか

つた）寺崎廣業君。
小說の外、私は雜報をかいたり、編輯をやつたりしてゐたが、一つ面白いと感じたのは、每日、各新聞の論說の大要を三行か五行かに書き縮める仕事だつた。それは少し人からも譽められたが、自分でも幾らか善く出來ると思つた。それについてをかしい事は、各新聞の論說といふ以上、橫濱の英字新聞のを除外するわけには行かない筈で、私はずゐぶんそれに苦勞した。出來ないと云ふのは殘念で、平氣な顏をして引受けたが、ほんの短かい時間に長い英文を讀みこなして、その要點を摘むのは容易でなかつた。然し私は見えと負惜みとでそれをやり通した。お蔭で英語讀書力を進める爲には、餘ほどの效果があつた。私は又、英照皇太后の靈柩を送るといふ感想文的の記事を書いて、或る人々から大いに譽められた事がある。それほど私はセンチメンタルな皇室尊崇者であつた。

然し私はどうしても實業新聞が好きでなかつた。一體の空氣が面白くなかつた。八尾新助といふ人が折々社に來てゐた。どういふ關係の人だと聞いた事はないが、多分、出資者の一人、若しくは主なる出資者だつたのだらう。或は社長だつたのかも知れない。然し私としては直接その人と何の關係があるではなし、只だ本屋の主人として名を聞いた事があるだけなのだから、いつも知らん顏をしてゐた。それにその人の、厭にブク〳〵ふくれた薄あばたの顏、無遠慮に大あぐらをかいたりする野蠻な傲慢な態度も嫌ひだつた。所が或日、その野蠻な、傲慢な、そして無智らしい男が、『オイ〳〵君』と編輯局の或人を呼びかけて、その名前が分らないので、『オイ、そこのその立つてゐる新聞記者！』とぬかした。成ほど新聞記者には相違ない。殊に安つぽい新聞記者には相違ない。然し『オイ新聞記者！』と呼ばれるのは堪らない。私は覺えずムカ〳〵とした。非常な侮辱を感じた。然し自分が呼びかけられたのではないから、食つてかゝるわけにも行かなかつたが、私はモウこんな處に居たくないと思つた。つまり、近來の言葉で云へば、成上り者のブルジョアに對する小インテリゲンチャの反感であつた。

それから間もなく、田川君と誰かとの折合が面白く無くなつた樣子で、多少ゴタ〳〵する氣配が見えてゐたが、そんな事は私に關係がなかつた。然るに或日、田川君が默つて歸つた跡で、井土君か誰かから、『都合あつて田川君は罷められたが、他の諸君はこれまで通り働いて下さい』と云つた樣な披露があつた。私はそれを聞くと、何か書いてゐた筆を直ぐに投げ棄てて、『僕は田川君と約束してこゝに來てゐるのだから、田川君が罷めたのなら僕も罷めるだけだ』と云つて、そのまゝズイと席を立つて歸つてしまつた。『そんなら僕も歸る』と云つて、森君も出て來た。好い氣持つたら無かつた。それから又話が跡戻つて田川君も私等も出る事になつたが、然し壞れかゝつた社の大勢は迚も駄目で、たうとうジリ〳〵弱りに弱つて潰れてしまつた。それが多分、明治二十九年の一月の末から二月の初に掛けての事だつたらう。

田川君と私との間には餘ほどソリの合ひにくい所があつた。田川君が事務的であつたのに對して、私は文藝的であつた。田川君が謹嚴であるのに對して、私は放縱であつた。田川君がクリスチャンであつたのに對して、私は無信仰であつた。田川君が少年時代から大のスマイルス黨で、自助主義、勤勉主義、努力主義の塊まりであつたのに對して、私は學校の教科書の中で、アーヴィングのスケッチブックに一番惚れこんだほどのセンチメンタリストであつた。田川君が曾て歷史上の愛好人物として智謀家竹中

半兵衛を擧げたのに對し、私は曾て論語の中の子路を擧げた事がある。そんな風に、田川君と私と可なり反對の素質を持つてゐた。然し又、何處かに何か一致する點もあつた。實業新聞時代、田川君と、森君と、私と、外にまだ誰かゐたかもしれないが、折々田川君の家に會合してカーライルの『ヒーロー・ウォーシップ』の輪讀をやつたりした。而もそれはたしか私の提案が實現されたのだつた。要するに、田川君と私との交りは、決して新聞社だけの事ではなかつた。

その頃、田川君は又、私を植村正久さんの處に連れて行つた事がある。『可なりな論客です』と、田川君は私を紹介した。植村さんは私に讃美歌の本を見せた。『可なりな論客』に對して讃美歌の本は少しをかしいのだが、植村さんの心持は分らない。兎にかく植村さんは、精神とか靈魂とかいふ事について善く考へて今一度來いと云はれた。然し私は再び行くだけの興味を感じなかつた。

三　落葉社

實業新聞以外、大阪關係以外に於いて、私の新らしく得た第一の友人は杉田藤太（天涯）君であつた。彼と私が廣島臨時議會の時、貧寒なる年少の二記者として初めて相知つた事は前に記した。その時、彼は東京への歸途、大阪に寄つて私の北野の家に一宿したが、後に彼はその一宿についてよく人に語つてゐた。『枯川の家に宿つて『環堵蕭然』たる二階の六疊に寢せられたが、朝になると、年を取つたおつかさんが味噌汁を拵へてくれて、「サア何んにも御座んせんがと云つてね、僕はほんとにホロリとしたよ』と、さう云ひながら彼は既に又、少しく鼻をつまらせてゐるのであつた。あゝ天涯、彼は實に人情に厚い涙もろい、美しい心持の青年であつた。

私は東京に來て直ぐに深く彼と親しんだ。彼は、文章は上手だつたけれども、文人型ではなかつた。寧ろ志士型であつた。彼は栃木縣小山の產として、大いに意氣を尙ぶといふ風があつた。一夜、彼と私と二人、芳原に遊んだ。彼は幾許も酒を飲まず、又常習的の遊蕩者でもなかつた。然し彼と私とは、廣島に於いても、東京に於いても、共に足を遊里に入れる事に依つて特にその親しみを增した。その翌朝早く、二人は上野公園の摺鉢山に立つてゐた。彼等は秋風落葉を捲くといふ光景の間に、悲痛な顏色をして人生を語り、世事を談じた。天涯は例の鼻をつまらせた聲になつてゐた。枯川も頻りに胸の迫るを覺えた。その時以後、私と彼と、何か生涯の約束をした氣持になつてゐた。それが二青年の相許した交りであつた。

杉田君は永島今四郎（永洲）君の家に同居してゐた。彼等は共に慶應義塾の出身で、今は同じく朝野新聞の記者であつた。私は直ぐに永島君と親しくなつた。永島君は我々より二三年の年長で、『溫厚の長者』といふ風があつた。その蒼白い顏と、瘦せた細い弱々しいからだとに係はらず、彼は常に友人間の先輩であつた。私は間もなくして深く彼の德風に推服した。永洲、天涯、私はこの二友人を得た事に依つて大いなる力を感じた。

さうした交りの中からして、自然に落葉社といふものが生れた。この社名はたしか私がつけたので、摺鉢山の朝景色に取つたのであつた。落葉社は一つの文藝團體であつた。或は寧ろ一つの俳句會であつた。折々集會して皆がフザけながら俳句を作つてゐた。然し必ずしもそれが主眼ではなかつた。茶を飲み、酒を飲み、飯を食ひ、雜談して相親しむ、その方が寧ろ主眼であつた。つまり一つの友人團體であり、社交俱樂部であつた。私は何かさうした、團體らしい

人もあつた。小千代夫人は五尺二寸ばかりもあらうといふ見事な體格で、それが五尺未滿の痩せぎすの永島君と面白い反映を爲してゐた。或夜、猷柳君と私と、永島家で遊んでの歸り道に、どこかの町の角で鍋燒うどんを立つて食ひながら、盛に小千代夫人に對して蔭ながらの讚辭を呈した。猷柳君は昂奮してしまつて、天下に永島ほどの果報者は無いと云つて、悲憤慷慨するほどの始末だつた。猷柳も私もまだ獨身だつた。

然し私には緣談が生じた。それは必ずしも悲憤の結果ではないが、父をいつまでも下宿にほつたらかして置くわけに行かないのであつた。それで私は、私のこの境遇を知つて、父の世話をしてやらうといふ女があるなら、どんな人でも構はないといふフレを出した。但しそれは決して、冷淡な、棄鉢な、無責任な態度ではない。一たび結婚した以上、どんな女でも一生涯の妻として必ず深く愛するといふ覺悟である。それが私の論旨であつた。すると友人間で、わけもなく其の候補者を見立ててくれた。それは堀紫山君の妹であつた。紫山君には二人の妹があつた。姉は美知子、妹は保子。そして先づ姉の方から片づけたいと云ふので、それを私に嫁する事になつた。この話は主として猷柳君と紫山君との間に成り立つたので、他の諸友人が皆それに賛同し、そして私に早速それを批准した。私は美知子、保子の二人が並んで立つてゐる寫眞を貰つて來て父に見せると、父は大へん喜んで云つた。『ほう、これは中々美しい嫁ぢや。俺もこの分なら孫の顏を見るまで生きられるかも知れんぞ』

所が、それから間もなく、或日、井土靈山君が遊びに來て、父と碁を打ちだした。私は風邪を引いて寢てゐた。父は機嫌よく、何かおどけた事など云ひながら碁を打つてゐたが、急に考へこんで默つてしまつた。變だなと思ふ中、バタリと横に打ち倒れた。卒中であつた。それから翌日の明け方まで、父は只だ大いびきをかいて昏睡してゐた。足の底にカラシを塗つたり色々したが駄目だつた。私はその父の床にはひつて最後まで一緒に寢た。父の死は明治二十九年二月二十八日であつた。年七十一。遺骸は深川の靈巖寺と云ふに埋葬した。これが封建制度の沒落に遭遇した、一武士の生涯の最後であつた。

この時、實業新聞は既につぶれて、私は無職であつた。それでも丁度、紫山君の世話で讀賣新聞に『望鄕臺』といふ隨筆ものを書いてゐたので、それの稿料を貰つて來て僅かに急場の凌ぎをつけた。落葉社の人々は種々の方法を以て葬式その他の費用を分擔してくれた。初七日の晩、落葉社の人々が集まつた。靈前に唐紙を展べて寄せ書をした。私は先づ筆を取つて『不孝兒』の三字を題した。せめてそれを以て父に謝罪した心持であつた。

五　結婚

去年母を失ひ、それから丁度一年で父を失つた。さしも放縱な私の心も、少し性根づかずにゐられなかつた。悔悟、慚愧の念が頻りに起つた。父の葬式の時、私が外の會葬者と同じ樣に、人力車に乘らうとしてゐると、矢野俊彦君が行きなり私の腕をつかんで『オイ枯川、子たる者が父の柩を送るのに、車に乘るといふ法があるか』と私を叱りつけた。私はひどく恐縮して、徒歩で柩の後についた。良心が既に強い痛みを覺えてゐる折柄、さうした詰責は烈しく私にこたへた。この矢野といふ男は熊本人で、龍谷と號し、日本新聞の記者で、杉田、永島等を通しての知合であつた。さすが熊本人にはマジメな

エライ處があると、私は深く彼を尊敬する氣になつてゐた。然し間もなく彼がホラフキの似せ豪傑である事が、友人間に暴露した。その後、彼は無錢飮食の常習犯になり、ツイ先ごろ死んでしまつた。存外罪のない人物だとも云へる。

然し矢野龍谿の人物はどうであらうとも、私に對する詰責は道理至極であつた。私はこれらの事を機會として漸く一身の行ひを改めようとする心持になりかけた。そこに丁度結婚が私を待つてゐた。父の爲に求めた結婚が、父の死後直ちに實現される事になつた。美知子は既に父の葬式にも列してゐた。雙方の心の準備は既に全く整うてゐた。只だ私が家を借りて住み込むといふ經濟上の準備が出來にくいのであつた。そこに意外な好音が齎らされた。

築地の二丁目の表通りに石造りの大きな家があつた。それは茨城の人、日辻保五郎君の所有で、日辻君は折々上京してそこに宿るが、平生は書生一人が留守をしてゐるのであつた。そしてその家を私に貸してやらうといふ話が傳はつて來た。それはどういふわけかと云ふに、日辻君と同鄕の人に相島勘次郎君があつた。相島君は大阪毎日新聞記者として、議會の傍聽か何かのため東京に滯在してゐたが、永島君、杉田君とは極めて親しい間柄で、從つて私とも親しくなつてゐた。さうした關係から相島君が私の爲に日辻君を說いた所、日辻君は固より世話好の愉快な人物の事とて、宜しい、書生を食はせてくれて、そして俺が上京中、飯の世話をしてくれるなら、ロハでこの家の大部分を貸さうと云つてくれたのであつた。

そんなウマイ話は又とない。何しろ表二階が十疊、四疊、三疊の三室、外に裏二階に六疊の一室といふ、ずゐぶん手廣い家である。渺たる堺枯川の新婚の住居としては、チト似合はしからぬ屋臺骨であつた。然し大は小を兼ねるといふ格言に從つて、私は平氣でその大家屋に住みこんだ。得意想ふべしである。家さへ出來れば、お嫁さんは何時でもと云ふので、早速、黃道吉日を選んで結婚の式を擧げた。父の葬式が落葉社の葬式であつたとするならば、この結婚式は落葉社の結婚式であつた。そして私は忽然として、生れかはつた樣な幸福の人となつた。

堀家は日本橋濱町に在つた。大人は堀直竹と云ひ、その昔常陸國下館の藩士で、今は蠣殼町に大弓場を持つてゐるのであつた。紫山君はその長男で、二人の妹の外に二人の弟があつた。家政は豐かといふ程ではなかつただらうが、別段不自由のない暮しだつたらう。そこの姉娘、年は二十四だがまだ初婚、これまで長し短かしで片づきかねてゐたのを、ヤット極つて見れば、其の相手は無職無收入の小文士と云ふのでは、蓋し聊か心細かつたらう。尤も、兄の紫山は恐らく、非常に有望な秀才として私を推薦したのだらうが、それにしても花嫁たる者が、來る早々、質を置いて米を買はねばならぬと云ふのでは、少しく辟易せずにゐられなかつたらう。然し彼女は、豫て紫山が云つた通り泰然として、そんな事には一向平氣らしく、只だ溫良な善き妻であつた。私としては初から、どんな人でも構はない筈であつた。實際、少しの不滿もなかつた。寧ろ十分滿足した。

これで何か新らしい職業の口さへ見つかれば、私の生活は正に一新面目を呈すべき所であつた。然し新婚の幸福に醉うた私は、只だ茫然として日を過してゐた。所が、そこに又以外な話が一つ持込まれた。征矢野半彌さんが芝佐久間町の旅館信濃屋から手紙をよこして、會ひたいから來てくれといふ事であつた。少年時代から深く敬慕してゐながら、そしてまだ直接には會つた事もない先輩から、かうした招きを受けたのは、私としてどんなに嬉しかつたか知れ

ない。早速行つて見ると、福岡日々新聞の記者として福岡に行かないかと云ふのであつた。征矢野さんは同社の社長であつて、今は衆議院議員として滞京してゐるのであつたが、めざまし新聞や讀賣新聞で私の書いた物を見て、そこは矢張り同郷のよしみで、私を連れて歸りたいと考へてくれたのであつた。私としては、今東京を離れたくはないのだけれども、何しろ眼前の窮迫を逃れる道として、殆んどあいた口に牡丹餅の感もあるので、直ぐに承諾して行く事に決めた。

妻も、あいにく里の母親が重い病氣に罹つたので、東京を離れたくなかつたのだが、然し又一面には、この自然の新婚旅行に對する興味もあつた。落葉社の人々は又集つて私の行を壯にしてくれた。例の寄せ書の第一に、永洲が『蜜月行』の三字を大書した。永洲の書は流麗であつた。

第五期　福岡時代

一　蜜月行

『蜜月行』は、東海道の汽車に始まり、大阪に於ける親しき家々の歴訪となり、それから瀬戸内海の汽船に移つた。東海道の富士の裾野も私にはまた二度目の珍らしさであつたが、既に六度目の瀬戸内海も、矢張り珍らしい、そして懐かしい船旅であつた。あの静かな海、あの澄みきつた海の水、あの美しい島々、船の甲板から手の届きさうなあの島々の眺め。船に弱い私は、どうかすると播磨灘や周防灘の荒れにさへ吐き苦しむのであつたが、さすがに『蜜月行』は平穏無事で、新郎新婦御機嫌うるはしく下の關についた。その頃はまだ、山陽鐵道は三田尻あたりまでしか開通してゐないのであつた。

これまでの旅行には、いつも下の關から小蒸氣で小倉にわたつたのであつたが、この度は直ぐ對岸の門司にわたつた。僅かに數年前まで、鹽濱と小さな漁村との外に何もなかつた門司が、今は既に繁昌の港となつてゐた。その變化は九州鐵道開通の結果であつた。

門司から九州鐵道の汽車に乘つて、懐かしい小倉を過ぎて博多に着いた。土地不案内の貧弱な若紳士とその妻とは、人力車夫に案内されて、博多の松島屋といふ大きな旅館の三階に上げられた。早速、福岡日々新聞社から主幹の濱池氏が來てくれた。そして福岡の榮屋といふ、これも立派な旅館へ移された。榮屋が自由黨方の定宿なのであつた。

福岡と博多とは川の兩岸にある二つの町で、福岡は昔の城下の屋敷町であり、博多は商人町であつたのだらうが、今はそれが一つの福岡市になつてゐた。そして今でも矢張り、福岡は主として官廳地域、博多は商業地域であつた。

福岡の橋口町、橋のすぐ袂の川添に福岡日々新聞社の木造の洋館が立つてゐた。そのすぐ近くに縣廳があり、市役所があつた。榮屋も半町ばかりの距離にあつた。私はその夜、博多の中洲の料理屋で福日社の歡迎を受け、醉うて戻つて榮屋の二階の柔かい夜具の上に身を横たへて、それで『蜜月行』の終りをつげた。

二　福日社

丁度、天神町の芝尾入眞君の隣りに空家があつて、私は早速そこに入れられた。家賃は僅かに三圓だつたが、私に取つては堂々たる大邸宅であつた。天神町は縣廳前の綺麗な靜かな大通りで、それに沿うた私の借宅は、昔のサムラヒ屋敷でもあつたらうか、門内が廣々とし玄關先に野菜畑があり、その片隅には大きな

梅の木があり、內紫といふ夏蜜柑の大木もあり、門から玄關までの道の兩側には茶の木の生垣があつたりした。家は可なりに古い平家であつたが、それでも八疊の座敷、六疊の茶の間、三疊の玄關、外に三疊、四疊などの小間もあつた。粗末ながら湯殿もあつた。妻は至極滿足して主婦振を樂しんでゐた。

福日社に出勤して見ると、一階の事務室に六七人、二階の編輯室に八九人の人達がゐた。事務室には濱池氏が主幹として控へて居り、編輯室には高橋光威氏が主筆として君臨してゐた。社長の征矢野さんは折々編輯室に來るが、いつも立ちながら話してゐた。私の同僚としては先づ芝尾入眞君があつた。芝尾君が私に取つて同鄕の先輩である事は前に記した通り。又彼が欠伸と共に大阪で西村天囚氏の門に出入してゐた事も前に記す通り。私は征矢野さんに招かれて福日社に來り、編輯局では芝尾君と椅子を並べ、住宅も芝尾君のと相隣りしてゐたから、知らぬ土地へ初めて來た者の樣な心持ではなかつた。その時、芝尾君は、筑前の或る山城の城主『高橋紹運』の事跡を小說に書いてゐた。文章は既に老熟してゐた。彼は編輯局中第一の故參であつたが、權勢を振ふでもなく、不平を抱くでもなく、默然として日々の事務に服し、只だ時として醉餘の放言大笑に氣焰を擧げ、そして翌日は更に默然と坐するのであつた。

次に中野啞蟬君。これも豐前の人で、私とは直ぐに親しんだ。小男で少し藪睨みで、貧弱な風采で、云はゞ文學癖の田舍少年と云つた位の男であつたが、その文才には一種の鋭い閃きがあつた。私が早速それを認めて激賞すると、征矢野さんは其の筈だと云つたやうな微笑をしてゐた。私は野あるきの道ばたに、色は淡いが香りの高い菫の花でも見つけた樣な氣がしてゐた。然し彼の才は後に餘ほど違つた方面の、謂ゆる『新聞記者』として發揮されたらしい。

海妻猪勇彥君と云ふは筑前の人で、政治經濟方面の、筆の記者ではなく、むしろ口と足との記者らしく見受けられたが、私が行つてから間もなく、足を洗つて實業家に成りすました。『探訪』と云はれた側の人々には先づ八字眉に愛嬌のある小河敏郎君を思ひ出す。朝から編輯局のゆかの上にブツ仆れてゐるのが毎度の事で、それは前夜の飲過の結果であつた。小河君の相棒に、年はまだそれほどでもないのに、禿頭の聳え立つた、好人物の（ツイ名を忘れた）某君があつた。小河君はたしか數年後に卒中で若死をしたと聞いた。禿頭氏の其後は知らないが、恐らく好人物通有の運命だつたらう。今ひとり原田德二郎君と云ふのは、古風な博多の商人とでも云つた樣なヂミな性好で、如何にも溫厚篤實な人物だつたが、これはズット後に營業部の有力な働き手になつてゐた。

それから、私より少しおくれて入社した人々に、橫岡蘆舟、森半佛、池元呦鹿庵、×××などがあつた。蘆舟君は上方生れの畫かきで、まだ二十あまりの靑年でありながら、頭は全部ツル〳〵であつた。それが此の人に取つては却つて一つの大きな、愛嬌といふ武器になつてゐた。暫らく私の家に同居した事もあるが、柳町から美しい女が尋ねて來たりした。半佛君は熊本の人で、赤く焦げた樣な顏に眞黑い口髭が澁く、ドッシリした體格、重々しい物の言ひぶり、何處から見ても一個の快男兒であつた。呦鹿庵はその庵號に似ず、まだホンの靑年で、標本的の福岡士族の子だらうと私に思はれた。その呦鹿庵が後に東京の區會議員か何かになつてゐたのはチョイト意外だつた。半佛君には定めし面白い運命があつたらうと思はれるが、全く消息に接しない。蘆舟君は近ごろ京都に居て、自ら『勞働畫家』と稱してゐる。最後の×××へ

君は、その綺れた妻と、愛嬌のある目とが、今わたしの頭の中に浮んでゐながら、名前がどうしても思ひ出されない。——(こゝまで書いて、『江口』といふ姓であつたかといふ氣もするが、それにしても名の方が分らない。)——彼は慶應義塾卒業のホヤ〳〵でやつて來たのだつたが、初めて私等に引合はされた時、『どうぞ御手柔かに』と笑ひながら挨拶した。その如才なさが、さすがに慶應出身だと思はれた。彼が後に鐘淵紡績に居た事だけは私の記憶にある。恐らく今は然るべき實業界の紳士だらう。

高橋光威君は新潟縣の人で、同じく慶應義塾の出身であつた。年は私より幾つか上だつたが、塾では私の昔の相棒だつた杉元(神崎)平二君と同期だつたさうだ。先づ幾らか好男子の部類に屬する恰好で、その細長い顔と痩せぎすの骨格とが、敏捷な事務家たる事を示してゐた。文章の技倆は言ふに足りなかつたが、社交の手腕は素晴らしいものだつた。思ふに、日清戰後の實業勃興時代に於いて、福岡といふ土地柄の新聞主筆としては、文章の技倆などよりも社交の手腕の方が必要であつたのかも知れない。少なくとも本人自身に取つては、その方が出世の絲口だつたのだらう。何しろ私に取つては、高橋君の第一印象が既に餘り面白くなかつた。高橋君は確かに遣り手であり、才人であつたに相違ない。然し私を引きつける樣な、志士的な所も、君子的な所も、學者的な所も、全く缺けてゐた。

然し私は征矢野さんの下に居るといふ事が何よりの愉快で、高橋君の存在には頓着なく、稍や勝手に振舞つてゐただらうと思はれる。私は主として小說を書き、隨分雜錄樣の物を書き、柔かい雜報を書いてゐた。小說は例の通り、恐らく獨りよがりのずゐぶん齒の浮く樣な所のある、變な物だつたらうが、それでも何しろ東京新下りの文學者と云ふわけで、「枯川」の名が多少の評判になつてゐた。東京を立つ時、尾崎紅葉君が『これなどはチョット面白い』と云つて餞別に與れた英文の小說も、飜案の役に立つた。その頃、私の崇敬してゐた小說家は、紅葉、露伴、一葉の三人であつた。征矢野さんが小說好で、よく新しい小說の噂などをするので、私は征矢野さんに向つて、現時の文壇、右の三人の外、恐るゝに足る者は無いなどと氣焔を吐いたりした。私は恥かしながら、いつか必ず小說家として賣りださうといふ『大望』を持つてゐた。

三　自由黨の進化

第一議會の選擧に、征矢野さんが吏黨の末松謙澄氏との競爭に負けて落選した時、私はひどく失望を感じた事は前に記した。然るに今、自由黨は既に伊藤內閣と提携し、そして征矢野さんが末松氏に代つてゐた。自由黨は漸く政友會になりかけてゐた。私は少年の時にあこがれた自由黨に、初めて今接觸したのだが、それはもう昔の自由黨ではなかつた。

その頃、福岡縣から出てゐた自由黨の代議士では、多田作兵衛、藤金作の二氏が名物であつた。殊に多田氏は『百姓議員』として『ツクルベエ』と仇名された愛嬌者であつた。つまり二氏は地主階級の代表者であつた。それに對し、我が征矢野さんは士族階級の代表者で、全國的には餘り有名ではなかつたが、內部では最も多く推重された先輩であつた。その後、前二氏は程なく隱退して、資本家階級の色彩を帶びた新人物が追々に現出して來たが、征矢野さんは猶ほ永く福岡政友會の中心人物として殘存してゐた。そして征矢野さんが亡くなつた時、士族の代表が亡びると共に、自由黨の正統が亦全く亡びたのであつた。

私はその頃、福日社で野田卯太郎氏のあの偉大な風采を見た事がある。彼は確かに自由黨の正統であつた。然し彼の實質は既に變化してゐた。彼は既に三井系統の實業家であつた。即ち資本階級の色彩を帯びた新人物であつた。彼が後に有力な議員となり、福岡政友會の代表となり、内閣員中の名物男となり得たのは、決して自由黨の正統なるが故ではなかつたらう。

私は又福岡で永江純一氏を見た事がある。豐肉短軀の溫良な一紳士。同じく自由黨の先輩として知られてゐたが、同じく又三井系統實業家であつた。後議員に當選した。私は又福岡で富安保太郎氏と多少の交りをした。富安氏は明治學院の卒業で、まだ一個の青年紳士であつた。彼は地主出身ではあつたらうが、その時すでに製油會社の社長であつた。彼も亦た一個の實業家として、後に福岡政友會から議員に選出された。私は當時又、征矢野さんあたりから、豐前の炭坑主（坑夫から成り上つた一豪傑）として藏内次郎作の名をチラ〳〵聞いてゐた。それが後に征矢野さんの選擧區から選出されて、石炭議員の英名を天下に馳せた。現在、その選擧區から酒造家たる神崎勳氏が選出されてゐる事は、前にも記した通りである。これらが凡そ、福岡縣に於ける自由黨の進化、政友會の發達の足跡である。

私は當時、さうした進化發達の意味を理解してはゐなかつた。只だ何となく自由黨の意氣精神の喪失に不滿を感じてゐた。そしてひたすら征矢野さんの淸高な人格に寄りすがると云つた樣な心持であつた。それが小說家志願の文學青年たる私の他の一面であつた。

四　征矢野さん

征矢野さんは政治家と云ふよりも寧ろ君子人であつた。『酒色』といふ英雄豪傑の資格は全く缺けてゐた。小說が好きと云ふのがをかしく感じられるほど一切の道樂氣がなかつた。字が非常に下手で、葉書一枚も滅多に書かなかつたのも、一つの特色であつた。殺風景と云ふのは當らないが、ずゐぶん沒趣味であつた。家は豐前の片田舍に置いたまゝで、福岡では榮屋に宿屋住居をしてゐた。その方が便利でもあり、安上りでもあると云ふのであつた。只だ征矢野さんは柿が好きで大きな柿を女中にむかせて大きな鉢に山盛りにして、盛んにそれを貪り食ひながら、人にも食へ食へと勸めるのであつた。

然し私は、征矢野さんにそれほど推服してゐながら、一面に何處か物足りなさを感じてゐた。或る夜、榮屋の二階で外に來客もなく、征矢野さんと私と二人きりで、シミ〴〵とした話になつた時、私は征矢野さんに質問した。あなたが、これだけの地位經歷を持ちながら、大いに世に現はれると云ふ處まで至らないのは、どういふわけでせうと。すると征矢野さんは、聊か憮然たる形であつたが、私には子分が無いからぢやらうなアと云はれた。現に福日社の内部に於いても、芝尾君と、中野君と、私とを目して、豐前派などと呼ぶ場合も無いでは無かつた樣だが、征矢野さんは小さな豐前派を作るほどケチな首領ではなかつた。つまり征矢野さんには個人的の權勢慾が殆んど無かつた。子分を偏愛して朋黨を作るといふ、そんな賤しい事の出來ないほど、美しい人物だつた。財物の私慾などは全く無かつた。それで自由黨が政友會に進化し發達して行く間に、征矢野さんは只だ自分一個の淸高を守つて、そこに自負と滿足とを感じながら、全體に於ては矢張り大勢に引きずられて行くといふ姿であつた。

然し私は征矢野さんに接する時、幾分なり古い自由黨の風氣を感ずるのが嬉しかつた。征矢

野さんの徹底したデモクラシイの考へ方などには、當時の私を驚かせるほどのものがあつた。それを思ひ出すと、その後に於ける政黨の態度の保守的逆轉が著しく感じられる。

五　福日と福陵、筑前と豐前

當時福岡日々新聞と對立して福陵新報（後に九州日報）があつた。福陵新報は有名な玄洋社の系統に屬するもので、保守主義、國粹主義の立場であつた。福日社の人達は憎惡と侮蔑との傳統的感情を以て福陵社の人達に對してゐた。私にはそんな感情がないので、機會があれば平氣で彼等とも交つた。或る時私が大阪時代の、高橋健三さんとの關係、國民協會との關係などを話すと、福陵派の一人は云つた。「そんなら君は、本當はコッチの人だい。」さう云はれると、私は又厭な氣持がした。實際わたしは、本當はドッチの人だつたのか。

或る時、福陵新報が、不敬よばはりをして猛烈に『福日』を攻撃した。それは大祭日の『福日』の紙上に、祝意を表した文字が一つもないと云ふのであつた。これには高橋主筆が少々狼狽して、いろいろと辯明や反駁をやつてゐた。その頃の自由黨には、儀式ばつた、態とらしい忠君振などは、まだ生じてゐなかつたのだが、然し日清戰爭後の國威發揚時代に於いて、政友會に進化しかけてゐる自由黨として、不敬よばはりの攻撃を受ける事は、よほどつらかつたものと見える。

福日と福陵の對立には無理解な私も、筑前と豐前との關係は全く冷淡であり得なかつた。筑前、筑後、豐前の三國が福岡縣を成してゐるのだが、私は福岡縣人と呼ばれる事が餘り嬉しくなかつた。何だか筑前の附屬になつた樣な氣持のするのが少し厭だつた。福岡縣といふものは、私に取つて、故鄕でない。故鄕は只だ豐前ばかりである。私は何處までも豐前人でありたい。但し豐前の中でも、北部の六郡（今では四郡）の元小倉領だけに親しみがある。それほど私の頭の中には舊藩時代の傳統的感情が殘つてゐた。私の征矢野さん崇拜には、固よりその感情が交つてゐた。私はずゐぶん『愛國者』であつた。

六　縣會、共進會、克己趣味

福岡に於ける私の生活は無事平穩であつた。高橋君との折合が妙でないといふ一事を除いては、社の仕事は總て愉快であつた。

私は縣會の傍聽にも行つた。「由布惟義君、議長席に就く、威儀端然たり」と書いた時、それが意外の評判になつたのに驚いた。「威儀端然たり」が如何にも好いと云ふのであつた。實際、由布君のキチンとした、品のいゝ議長姿は、今でも私の目に浮ぶ樣だ。由布君は後に衆議院議員にもなつたと聞いたが、遂に再びその端然たる姿を見るの機會を得ない。

長崎に九州聯合共進會があつた時、私は出張を命ぜられた。たしか武生まで汽車で、それから先は歩いた。途中、疲れた足を引きずつて嬉野の温泉にたどりついた時の嬉しさは今だに忘れない。長崎では丸山の繁華も見た。「うんだが青餅」の歌も聞いた。然しそんな事よりも何よりも、強く私の心を刺激した一事件があつた。共進會に集つてゐた官吏達の中に、一ツ橋時代の私の舊友が幾人もゐて、意外の邂逅を樂しんで一緒に飲んだ。一人は小原騂吉君、一人は俵孫一君、その他は忘れた。彼等は今高等官になりたてのホヤ／＼であつた。俵君はたしか沖繩縣の參事官であつた。年少得意、談論風發で盛んに飲む彼等を見ると、私の心は寂しかつた。飲む事にも、喋る事にも遜色はないが、貧弱な一小新聞記者は何となく彼等の得

私は又、豊津中學校と小學校とを訪問した。中學校には緒方先生と、島田先生など、昔の先生方も居られ、大森藤三、柏井德一などいふ友人達も教員になつてゐた。小學校には昔の横山先生がそのまゝ校長で、古い友人の中村君がその下にゐた。その夜、錦町の關屋で私の爲に小宴が開かれた。私と中學校の同期の卒業生たる生石久間太君と井村健彦君とも來た。生石君は九州鐵道に勤めてゐたが、今罷めて歸つてゐる所であつた。井村君は一時博多の驛長か何かで可なり幅を利かせてゐたが、近來病氣の爲保養かた〲小さな雜餉驛に引込み、ツイその近所の二日市の溫泉に住んでゐるのであつた。そしてこの晩は何かの用事で丁度故郷に歸りあはせてゐる所であつた。私の故鄕熱はこれで大いに滿足された。

又或る時、行橋町に豐前人の懇親會が開かれた。その席上で私は珍らしい人にふたり會つた。一人は老壯士の勝平八郎さん。私の少年時代、或日、私の家の前をドテラ姿で通つて行く、豪傑らしい大きな人があつた。父と顔を見合せて、久しぶりの挨拶をして行き過ぎた。あとで父があれは勝平八郎といふ中々エライ人だと私に話した。その勝さんは今人々から揮毫を求められて、「自由の棲處是吾家」と大書した。そこに昔の自由民權運動の面影がしのばれた。今一人は豫備陸軍大佐馬場素彦さん。これは前に記した通り、私が東京の學生時代に世話になつた、私の養家先の叔父に當る人で、その娘のお力さんが私の妻になる筈であつた。然し私の放蕩の爲、私は中村家から離縁されたのであつた。それから七年、今では私の元の養父は死去し、椎田の中村家は無くなり、馬場さんがその因緣からして椎田の町に退隱して居られるのであつた。私はひたすら懷かしい心持で馬場さんに挨拶した。馬場さんも大へん嬉しさうにして、ぜひ遊びに來いと云はれた。それから暫らくして私は椎田に馬場家を訪問した。叔母さんも懷かしさうにして、こんな田舍の住居の寂しい事など話された。お力さんは十八ばかりの美しい娘になつて、元氣らしく笑つてゐた。これも「不思議」な訪問に相違ないが、私としては本吉家の訪問と共に、非常に愉快な跡片付であつた。

九　福岡引揚

兎かくする中、高橋君と私との不和はいよいよ增大した。細かい成行は忘れてしまつたが、紙面の或る部分の編輯を獨立させて、それを私に任せてくれとか、それは出來ないとか云つた樣なモツレがあつて、それらの事について編輯會議を開くとか開かぬとかいふ論爭を生じて、編輯局の全體にかなりの動搖を來した。然し結局の所、云はゞ私の我儘から起つた事なので、私が退くより外に道の無い事は分りきつてゐた。私は征矢野さんからも、他の總ての社員からも、惜しまれたり氣の毒がられたりして、退社した。一般の送別會あり、外に高橋君と富安君と私と三人だけの小さな別宴もあつて、私は機嫌よく福岡を出發した。それが明治三十年の春の事で、私の福岡にをること正に一年であつた。（この高橋君が今の世間に時めく政治家である事はいふまでもない。）

それより前、妻が妊娠したらしいといふ事を征矢野さんに話した時、征矢野さんは、「誰しも若い時、女房を持つだけではそれ以前と別段の變りはないが、子供が出來ると大いに心持が違つて來る。それに餘程善く氣をつけないと、兎かく引込思案に陥る恐れがある」と警告してくれた。それから幾許もなく、私は早くも自分の地位を擲つてゐた。征矢野さんは、私の引込思案に陥らない事を喜んでくれた筈だ。

その時、私に今一つ大問題があつた。兄が東

京で血を吐いたといふ知らせがあつた。そして數日の後『病氣は肺結核といふ事に相成、前途絶望に候』といふ手紙が來た。そして猶『社にては歸國せよと申し候へども、歸國したとて家も妻子もなき身の上なれば、矢張り東京を死處と覺悟し、出來るだけ養生して生きのびられるだけ生きのびて見る積りに候』とあつた。これは私に取つて大いなる打撃であつた。私はその爲にも、早く東京に歸りたいといふ氣がしてゐた。

然し兄は、私の東京に歸る事に反對した。さすがに少し私よりは年を取つてゐるだけの事もあつて、兄は私の身の上の將來を功利的に考へてゐた。自分の身の上は甚だしく無計算に處置して來た男として頗るをかしな言分だが、要するに兄の意見は斯うであつた。東京に立戻つて多少の文名など得たところで、それが幾許の手柄でもない。それよりは折角、手がかりの出來た今の地位にヂット辛抱して居れば將來の運命は必ず自然に開けて來る、と云ふのであつた。私も萬ざらそれを考へないではなかつた。文學ばかりが私の志願の全部ではなかつた。元來政治家志願、代議士志願であつた。高等中學では政治科を選んでゐた。そして福岡の今の地位は、其の方面の事に對して正に兄の謂ゆる『手がかり』であつた。然し私の若い心は矢張り最も多く東京の生活にあこがれてゐた。

然し私の福岡出發には、經濟上の困難があつた。征矢野社長と濱池主幹との立會で、何分にも勤務期間が短かいので仕方がないといふ事で、それに前借の殘りもあつたりして、八十圓だけの退社手當を下附された。然るに私の家には色々の小負債があつた。妻は幾度も質屋に通つてゐた。東京育ちの奧さんは違つたもので、質屋がよひに恥かしさうな顔もせず、人力に乘つたりして平氣で行かつしやる、と笑はれた位であつた。それで結局、質物などはその儘に殘して置いて、それでも猶ほ足りないので、私は豐津に行つて生石君に無心した。生石君はニヤニヤ笑ひながら、默つて二十圓ほど出してくれた。それでヤット私の福岡引揚が出來た。

第六期　毛利家編輯時代

一　征矢野さんと末松さん

丁度一年間、福岡に『蜜月行』をやつて、再び東京に戻つて來た彼等若夫婦は、先づ芝公園の或る寺の離れに小家屋を作つた。そこは赤羽橋に近い、鏡が池に向つた處で、六疊と二疊に緣側のついた、綺麗な小ちんまりした、好い家であつた。家賃は忘れたが、多分三圓くらゐだつたらう。（明治三十年夏。）

住居は出來た。次は職業だ。彼は征矢野半彌氏からの紹介の名刺を持つて末松謙澄氏の邸を訪問した。彼は別に、征矢野氏から末松氏に返戻すべき書籍一冊を託されてゐた。それが名刺よりも餘計に紹介の力を持つやうに思はれた。

末松邸はお成門の直ぐ内にあつた。男爵邸は云ふまでもなく堂々たるものであつた。彼は直ぐに應接間に通された。陰鬱な、がつしりした、抑へつけられるやうな西洋間だつた。彼は生れて初めてこんな大邸宅を訪問したのであつた。小さな自分の體が一層小さくなつたやうな氣がした。

末松謙澄！　少年の堺は、郷黨の先輩として久しく此の人の盛名を聞いてゐた。然し征矢野さんに對する尊信と敬愛とには、比較すべくもなかつた。征矢野さんは士族であつた。末松さんは大百姓であつた。征矢野さんは豐津中學の前身たる育德館の出身だつた。末松さん

は京都郡の佛山塾の出身だつた。征矢野さんは絶えず郷里に在つて自由民權の運動をやつてゐた。末松さんは長州の伊藤博文の婿になり、そして官吏になつた。豐津の少年士族に取つては、前者と後者と、その親しみに大差がある。況んや衆議院の第一回選擧に於いて、自由黨の征矢野が、吏黨の末松に蹴落されたのである。その時、堺が深く末松を憎んだ事は、前に記した通りである。

然るに其の征矢野と末松とが、今は和睦し、提携してゐる。そして彼れ堺は、其の征矢野さんの紹介に依つて其の末松さんに會はうとしてゐる。彼れの心中には、もう末松を憎む感情はないが、どこかに少し變なクスグツタイやうな氣持はあつた。然し又一面には、ケンブリツヂ大學のマスタ・オブ・アーツの學位を持ち、日本の文學博士、法學博士の二學位を持つ末松青萍先生なるものは、微々たる一文學青年に取つて、確かに一個の威壓であつた。

青萍先生は大きな體軀をゆるがせて應接室に現はれた。少しダラシのない日本服の着振と、眠たいやうな眼付と、ボヤ〳〵した言葉付とが、先づ堺の氣持を安易にした。威壓が去つて親しみが生じた。

青萍先生は今、政界の閑暇を利用し、毛利家の歴史事業を引受けてゐるので、その編輯員の一人に堺を使つてやらうと云つた。堺は意外にも、斯くて早速、生活の道を得たのであたつ。青萍先生は好い人だと思つた。

それから堺は毎日、三田の通りから聖坂を登つて、白金猿町の毛利家編輯所に通つた。月給は三十圓、後に四十圓まで昇つた。これで芝公園の小家屋は圓滿幸福、そして色の白い、大柄な、丸髷の細君美知子のお腹が、段々に目立つて來た。

然し、この新たなる生命の芽ぐみと同時に、一方には他の生命が枯れつゝあつた。堺欠伸は或る日、この小家屋の縁側に寢ころんで、獨りごとのやうに、『俺は、この夏、死ぬるかも知れない』と云つた。弟はそれに對し何かグヅ〳〵と答へた。『そんな事があるものか』と云ふやうな、ハツキリした言葉は出ないのであつた。欠伸もそれきりで、程なく歸つて行つたが、雪駄を引きずつて歩いてゐる、その薄羽織の痩せた後ろ姿が淋しく見えた。

二　欠伸の死

欠伸はその頃、都新聞を出されて、別に定まつた職業もなく、神田淡路町の或る宿屋の二階に只ひとり下宿してゐた。去年、血を吐いてから後、『酒のんで見しよ去年は今日の月』『月に向ひ花に向ひて恥かしや、命惜しと酒飲まぬ我』などと、文人らしい感慨を漏らしてゐたが、例の『妻子は奪はれたる身』の、不秩序な、不攝生な生活ばかり續けて、僅かな月日の間に、甚だしく衰へてしまつた。

然し或る時、彼は弟に葉書を送つて、『いたつきに身は枯れゆけど村肝の心は花の盛りなりけり』といふ一首の歌を示した。歌はまづいし、古めかしいが、彼は實に『花の盛り』を感じてゐた。芳原龍崎樓の福壽といふのが、深く彼を愛してゐた。彼は時としてそこに半月ばかりも流連してゐた。そんな事はます〳〵彼れの身を枯れさせた。

或る日、弟が淡路町の宿に彼を見舞つた時、彼はもうどうしても獨りでゐられる容體でなかつた。それでも彼は、荷物も道具もない寂しい部屋に、小机を只一つ置いて、浴衣の下から竹の筒のやうな足を出して、淺黒い顔をしてポツネンと柱にもたれてゐた。弟は兎にかく彼を駿河臺の或る病院に入れた。

それから弟は急に、高輪の大木戸の外の、

少し廣い家に引越した。家賃は七圓で少し高いが、そんな事に構つてゐられなかつた。そして兄をそこに連れて來た。『今日は二人で歌でもよまうか』などと、弟は態と平氣らしく、兄の枕元に坐つたりした。『ウンよからう』などと、欠伸も云つたりした。

それから二三日たつた或る日、弟は十錢の金もなくなつて、麻布市兵衛町の永島永洲君の處に幾らか借りに行つた。そしてついでに永洲君と碁を打つてゐると、宅から迎への人が來た。兄がいよ〳〵惡いと云ふ。大急ぎで歸つて見ると、もう駄目だつた。痰が喉にからまつて、何の事もなく息が絶えたと云ふのだつた。いつも碁がいけない。年三十三。白金三光町重秀寺に埋葬。

放縱なる一文人の死。只それだけである。社會に取つては何の損益する所もない。然し彼れの弟に取つては、實に無限の寂寞であつた。『駒なめて文の林を兄弟、行かばやとこそ思ひしものを』そんな事も云つて見たりした。然し實際は、文の林など、どうでもいゝ。只だ欠伸、枯川、二人が折々、相對して語り、相對して飲みたいのであつた。これより數年前、欠伸が大阪から東京に行く時、枯川はそれを送つて、『夜もすがら見よや百里の冬の月』と云つたが、枯川は今それを思ひだして、最後の送別をした。『とこしへに見よや幾千歳の秋の月』

欠伸が病を發した時、既に全く離婚の手續を濟ましてゐた元の妻のお浪さんが、又逃げて行かうかと内々で云ひだした。『彼等の愚なる、涙の種に候』と欠伸は枯川に書を送つた。『涙の種』であるだけ、それだけ欠伸は嬉しかつたらう。又欠伸の死後、或る日、福壽が、不自由な廓の中から、新造に連れられて、わざ〳〵墓參にやつて來た。枯川は福壽を案内して重秀寺に詣でた。死後にも『花の盛り』があつた。欠伸の只ひとり娘民子は、その時やつと十ばかりであつた。

三　防長回天史編輯所

堺は大木戸の家から、毎日泉岳寺の中を拔けて、白金猿町の毛利家編輯所に通つた。泉岳寺の裏は、林の間に墓地があつて、落葉の頃などは殊に面白い散歩道であつた。

編輯所は清楚な新築の平家建で、それに煉瓦作りの文庫が一棟、附屬してゐた。庭だの、野菜畑だのが可なり廣く、門の左右には五六軒の役宅があつた。

所員は、古くからゐる毛利家の舊臣達が五六人、外に青萍先生の新たに入れた人達が六七人、二十疊敷ばかりの部屋に机を並べて、二列に向ひあつて着坐してゐた。これでもザット、内閣の法制局くらゐの人數はあると、前法制局長官たる青萍先生が云つてゐた。然し編輯所總裁たる青萍先生は、法制局長官のやうな威嚴を示さず、皆と同じ小机を前にして一方の上座に着席し、ふとつた體をもてあましてあぐらをかいたりしてゐた。『青萍先生の金玉』は一向珍らしくなかつた。

新編輯所の首席は山路彌吉、愛山と號す、民友社出身の秀才。次は笹川種郎、臨風と號す、ホヤ〳〵の文學士、同じく文學士齋藤清太郎。新聞記者出身の黑田甲子郎。末席が堺利彥。舊臣連には筆頭の中原邦平翁、會計の佐伯翁、司籍の時山君、その外、市川君、××翁など。まだその外、黑田君の助手、豫備陸軍中尉荒川衛次郎、速記者伊内太郎、英文反譯掛久能某の諸君があつた。そして舊臣連は多く役宅に住み、他はそれ〳〵近傍に住んでゐた、

毛利家では、既に久しい前から舊藩歷史、主として維新史）の編纂事業が行はれて、材料の蒐集整頓は可なりに出來あがつてゐたが、それを

今回、青萍先生の手で取りまとめ、「防長回天史」として公刊しようと云ふ計畫であつた。それにつき、末松は伊藤侯の婿とは云へ、他藩人である、その外、山路某は舊幕人であり、笹川、齋藤、黒田、堺など、皆な他藩人である、何故、他藩人の手に依つて我が防長史を編纂せねばならぬかといふ、保守黨の反對論もあつた。然し、全權を委託された末松總裁の意見は斯うであつた。防長回天史は毛利家の私乘でなく、公けの日本歴史でなければならぬ、公正なる事實の記錄は自然に毛利家の功績を顯彰する事になる、編輯者には只だ技倆のあるものを取る、他藩人の編輯は却つて其の編輯の公正を示す所以であると。

斯くて青萍先生以下「他藩人」六名が編輯の主體となり、中原翁以下舊臣連が顧問となり、案内者となり、說明者となり、それで編輯を進めて行くのであつた。

堺としては、歴史の知識があるではなし、編輯の經驗があるではなし、只多少の文才を恃みとするに過ぎなかつたが、それでもどうやらお茶は濁せた。最初は舊臣連中の監視なり、嫉妬なりが、小姑らしいうるささを見せるのではないかと、少しは氣遣はれもしたが、暫らく經つて見ると、そんな事は跡形もなかつた。

舊臣連はいづれも浮世ばなれのした人達で、この別天地に悠遊して、只その日を暮せばよいのであつた。編輯本業が進捗するよりも、寧ろ永久に延引することが望ましかつたかも知れない。朝に晩に、お家流の古記錄ばかり繰りひろげてゐる此の世界は、山中暦日なしの趣きで、如何にも天下太平であつた。

この別世界、この別天地を、如何にも善く象徴するものとして、新參の外來連を讃嘆せしめた一事實があつた。即ち文庫に收めた編纂資料の中に、近來書肆から發行された活版本の寫本が幾つもあつた。こゝの人達の考へ（或は心持）としては、苟くも編纂資料たるものは、總て肉筆物もしくは筆寫物でなければならぬ、活版の印刷本などは卑俗であり、不體裁であり、假りの物である。そこで活版本を買入れるには買入れるが、更にそれらの筆寫本を作つて、それを正本として備へつける事にする。さうした心理ででもあつたらうか。

かうした空氣の中に包まれて、中原翁、佐伯翁、××翁などと同じく、三十四歳の愛山翁も出來、二十八歳の臨風翁・枯川翁も出來たりして、總てが和氣靄々の形であつた。

四　副總裁問題

然し外來連の間には、一つ折合上の問題が起つた。前に愛山君を編輯の首席と云つたが、別に首席として任命されたわけでもなかつた。只、年齢に於いて、名聲に於いて、從つて青萍先生の待遇の仕方に於いて、又大體に月給順を示してゐるらしい座席順に於いて、事實上、愛山君が首席の地位にあつた。その次は史學專攻の文學士たる笹川、齋藤の二君。二君とも同年であり、同期の大學卒業であつたが、笹川君は才人肌であり、齋藤君は朴訥の人であり、それに入所の順序からしても、自然に笹川君の方が一枚上たつた。黒田君は士官學校に居た事のある人で、その關係上、戰爭方面の事だけを編輯する役目であつたので、年齢なり、入所の順序なりからして、所員としての地位は稍や高い方であつたが、編輯員としては自然別物であつた。さうすると、殘るは堺で、これは年齢に於いて笹川君等と同等であるが、學歴はなし、入所の順も一番おそいし、何から見ても最下位であつた。そして此の四人の間の關係について、ちよつと一騷動が起つた。

その前、堺の地位について猶ほ一言して見よ

う。誠にケチくさい話で恥かしくもあるが、新編輯所としての最初のお盆の時、所員に對してそれ〳〵金一封の御下賜があつた。堺は入所してまだ間のない事でもあり、御下賜は僅かに五圓だつた。他の諸先輩は大ぶん澤山御下賜を受けたものと見え、山路、笹川、齋藤、黑田の四君が會計を持つて、皆で懇親會を開くといふ話になつた。大體上、外來連が舊臣側に敬意を拂ふ、或は租稅を拂ふと云つたやうな氣味合であつた。そこで堺が變な地位に立つた。堺は奢る方にも屬してゐなかつたが、奢られる方にも屬してゐなかつた。

兎にかく宴會は高輪通りの、昔からの毛利家御用である「萬清」で開かれた。皆が着席した時、舊臣側の人達は、招待された客人として、改めて一應の挨拶をした。堺は變な氣持で、僕は自分で勝手に飮みに來てゐるのだと宣言した。一座は多少、白け氣味であつた。世話人の黑田君など、殊に不快な顏色をした。そこに女中が入浴を勸めに來た。愛山君が堺を促して浴室に行つた。愛山君は先輩らしく、湯の中で頻りに堺をなだめた。堺は却つて好い氣になつて、さん〴〵湯の中で氣焰を吐いた。これが堺と愛山君との親しくなる第一の機會だつた。

翌日、堺は世話人に對して、强ひて昨夜の割前を支拂つた。それから以後、兎にかく堺も末席ながら山路、笹川、齋藤等の諸君と略ぼ同列の格式になつたらしく見えた。

所が、暫らくすると、愛山君が編輯副總裁になるといふ噂が傳はつた。それはたしか、明治三十一年一月、伊藤内閣が新たに出來て、末松さんが大臣になつた時の事だつたらうと思ふ。すると、一番に不平を云ひだしたのは笹川君で、副總裁設置反對論をやりだした。溫厚な齋藤君もそれに贊成した。堺も贊成した。すると今度は、誰かが山路君に告げた。笹川、齋藤、堺の三人が山路排斥の運動を起したと。そこで山路君は堺に云つた。君も官學派に屬するかと。この詰責は堺に取つて意外だつた。山路君は此の爭ひを、官學派と私學派との衝突と解してゐた。成るほど、民友社出身の史學者と、帝大出身の二文學士との間に不和が起つたのだから、官學私學といふ風に考へるのも、一應道理があるに相違ない。然し實際はそれどころでなく、愛山君が年齡、名聲、閱歷、才力、及び殊には青萍先生の御覺えに於いて、迚も他と比較にならず、從つて現に、總裁の政治的活動の留守中、副總裁に据ゑられようとする勢ひであつた。そこで堺は愛山君に答へた。それは間違つてゐる。僕は只、弱い者の聯合に依つて、强い者に對する力の權衡を作らうとしたに過ぎないと。愛山君は堺を理解した。二人はいよいよ親しくなつた。そして副總裁說はそれきり立消になつた。

その後の編輯所は、總裁は大臣の方が忙がしくて滅多に來ず、副總裁もないので仕事は進行せず、いよ〳〵以て和氣靄々たる、そして惰氣滿々たる、一個の隱居所になつてしまつた。皆が自由に出て來ては自由に歸つて行く。雜談をして、辨當を食つて、ゐねむりをして、少しばかり書類をいぢつて、それから散步をする。さうした日課の間に、不和も衝突も起り樣がなかつた。

五　青萍、愛山、臨風、其の他

青萍先生は誠に好い人であつた。自ら青萍迂人と稱した、その迂の字の面白味が可なりにあつた。第一、大きな體がブヨ〳〵と肥えて、顏にも言葉にも茫漠とした趣きがあつた。豐前なまりを少し出して、大きな聲で笑ふ所は、甚だ無邪氣に見えた。青萍先生の居間に、一人至誠無徒』と書いた春畝山人の額面が、掛つ

てゐるのを見たが、その教訓を服膺したわけか、青萍先生の人物全體は薄濁つた感じであつた。と云つて、腹黒いといふ悪い意味は少しもなく、太つ腹といふ頼もしげもなかつた。俊敏でもないが、豪放でもなく、粗野な所はあるが、細心のところもあつた。折々愚癡つぽい小言を聞かされたりする時には、餘り有りがたくない氣持がしたが、總てを差引して見ると、要するに好い人であつた。「青萍先生は少し人偏に谷の字だね」などと云つて、愛山君が大笑ひした事もあつた。

「こちらは我輩の専門の方の本だ」と、青萍先生が應接間の本棚を指したりした事がある。それは法律書であつた。先生としては、法律が専門で、文學は餘技であつたらしい。堺は先生の餘技の方の文庫から、源氏物語の英譯や、佛山詩鈔、健馬樂などを借りて讀んだ。その應接間には、青萍先生の師、村上佛山の書額もあつた。堺としては、何かにつけて同郷の先輩といふ親しみもあつた。

青萍先生が初めて郷里から東京に出て來た時には、數人の書生と共に、例の志津野拙三先生に率ゐられて來たのであつた。

「我輩でもこれで、死ぬる時には薨ずるのだぜ、ワッハヽヽ」と、或る時、青萍先生が何かのついでに上機嫌で話された。先生は從三位であつた。それから後、青萍先生の「金玉」が「從三位の金玉」になつた。

青萍先生が遞信大臣になつた時、我々一同、生子夫人から「お茶」に招待された事がある。先生は何かの病後であつて、看護婦が來てゐたが、その看護婦が小間使然として先生に向ひ、「大臣はお菓子を召しあがりますか」などと、半分ふざけて云つてゐるのが、我々には馬鹿くさく見えた。然し我々は、この大臣、この男爵が、『御前』と呼ばれるのを聞いた事がなかつた。矢張り『旦那樣』であつたらしい。

山路愛山君は、肥滿の短軀で、大きな輕石のやうな顏に、口髭と鼻毛とがよぢれあつてゐた。笑ふ時には齒くそだらけの大きな黄色い齒が齒並わるく現はれた。晝飯を食ふと堪らぬほど眠くなる癖があると云つて、青萍先生の眞向ひで、机に額をうつぶせてグウ／＼鼾を立てたりした。チョット傍若無人の振舞に見えたが、然し又中々そこに愛嬌もあつて、「どうもこれは私の病氣でして、アハヽヽヽ」と頭を搔いて笑ひながら、「甚だ失禮ですが、どうぞ御免下さい、ほんの五分間ばかりで好いんですから」などと云ふので、青萍先生も笑つてゐるより外はなかつた。

愛山君は饒舌多辯で、無遠慮な大笑ひをしながら、兎もすれば『天下を取る』話をしてゐた。然しこれも粗野は甚だしいが、豪放といふ柄ではなかつた。酒は飲まず、煙草は吸はず、一面はむしろ謹嚴力行の人であつた。堺が田川大吉郎君の話をすると、愛山君はクリスチャンづきあひで彼を知つてゐたが、「田川の氣取屋には蟲唾が出る」と罵倒してゐた。堺が田川君に愛山君の話をすると、田川君の方では、或る時、何かの會で皆が藝盡しをした時、愛山君の番になると、いきなり飛びだして仰向にひつくりかへり、大きな聲で「大の字！」と怒鳴つたのに感服したと云つてゐた。（後になつて、愛山君は田川君の新聞に何か書いたりしてゐた事がある。）

笹川臨風君は新婚早々であつたが、伊皿子坂の上に獨りで二階借をして、土曜日曜だけ本郷西片町の自宅に歸るのだつた。愛山君も澁谷に自宅を持つてゐたが、一時そこを引きあげて全家を猿町の近所に移してゐた。その頃の交通機關では、さうする必要があつた。臨風君は好男子でもないが、ヤサ形の若紳士で、稍や江戸兒

氣取だつた。愛山君が民友社といふ背景を持つてゐるのと同じ樣に、臨風君は當時、支那文學大綱』といふ叢書などを編纂してゐた新學士の一群に屬してゐた。その一群の中に堺の舊友白河次郎（鯉洋）があつた。鯉洋は尋津中學に於ける有名な秀才の一人であつた。そんな事も、堺と臨風君とを親しくする因緣になつた。

臨風君について特に思ひだす事が一つある。それを後に臨風君自身が次の如く書き記してゐる。『久し振で堺君に逢ふ時は、よく十餘年前の昔話が出る。伊皿子、高輪、白金猿町あたりのことが話題に上る。すると、いつもみいちやんのことが聯想される、と云つて、二人で一笑する。みいちやんと云ふのは、泉岳寺の茶店の娘で、當時十四五位でもあつたらうか、愛嬌はないが、一寸した淸楚な子である。僕が堺君と貸間を探しに行つた時、こゝの茶店の媼さんが骨を折つてくれた、其緣故で、此子は時々遊びに來たものだ。其後、此娘がどこか遠くへ往くと云ふ時に、お名殘のつもりか、僕の座敷の花瓶に梅の枝を插して往つた。一葉のたけくらべのみどりを思つて一寸可笑しかつた。其後のことは能く知らぬ　何でも餘り香ばしくない噂を風の便りに聞いた』

こんな情趣を語りあつたりするのは、編輯所で臨風君と堺とだけだつた。愛山君と臨風君との間は、色々の意味からしてどうも十分に面白く行かなかつた。はたから見ても、愛山君の粗野な大笑ひと、臨風君の少し鼻にかゝつた話し振とは、調和しにくいものに見えた。堺としては、臨風君とみいちやんを語るにも適し、愛山君と天下取りを談ずるにも適してゐた。つまり愛山君とは新聞記者氣分を以て交り、臨風君とは文藝家氣取で交るのだつた。

齋藤淸太郎君は岡山人で、大崎の池田侯爵邸内の小さな家に住んでゐた。國から細君が來るについて、色々世帶道具を買はねばならぬと云ふので、堺はその買物の介添役をした事がある。齋藤君は口數の少ない、才氣の現はれのない、ヂミな、質樸な、堅實な人物であつた。然し齋藤君は稍や酒を飮んだ。齋藤君は片方の腕に赤い大きなアザがあつて、それで朱菴といふ號をつけてゐたが、醉つて來ると其のアザの赤味が著しく鮮になり、同時に平生の無口が大いに綻びて來るのだつた。或る時、堺は齋藤君に、『君のやうな木念仁も、只だ飮を解する事に依つて、稍や語るに足る』と語つた事がある。堺は飮むこと以外に於いて、齋藤君と稍や相許すに足るだけの一面をも持つてゐる。愛山君と親しみ得ず、臨風君とも十分に親しみ得ない齋藤君が、堺とは頗る善く親しみ得たのである。

中原邦平翁は、靑年時代にロシヤ語を學んだといふ程の經歷を持つてゐたが、當世には全く望みを斷つた一個の酒仙で、飮中八歌仙の中の一人物かと思はれた。『知章が馬に騎るは船に乘るに似たり。眼華、井に落ちて水底に眠る』などは最も善く翁の趣きに似てゐた。白髮といふ程ではないが、兩鬢が白く、額が禿げあがり、そして貧寒その者のやうな綿服を一着した處、洵に洒々然たる老書生であるが、それが若い者の間に伍して、といふよりは寧ろ大抵若い者の一群を率ゐて、『飮むことは大鯨の百川を吸ふが如く』『赭顏を振り立てて』『高談雄辯四筵を驚かす』のであつた。『昨夜、どうして歸つたものか知らないが、今朝目がさめてみると、どろまみれの着物と、もみくちやの羽織を着たまゝで寢てるといふ始末さ。すると、倅奴が學校に行く時、玄關で大きな聲を出しやがつて、「老いて益々壯んなりと謂ふべし」と怒鳴りくさる。イヤハヤどうも…』これは當時、有名な話だつた。

翁はよく井上侯のところに出入してゐたが、いつも侯を手玉に取りながら、たらふく飲んで來るらしかつた。青萍先生の如きは、翁の眼中に於いて全く一個の坊つちやんだつた。愛山、臨風以下の徒に對しては、其の博識を以て諄々と語り、其の剽逸を以て淡々と交はるのであつた。要するに毛利家編輯所は、只この大長老のあるが爲に、從來せめて一道の生氣を保ち得たのであつた。

黑田君、及び同君の助手、荒川中尉については、別に云ふことがない。只だ荒川夫人が『春風派』の旗頭と目されてゐたことを記憶する。當時、同僚中の諸細君を品評して、『春風派』と『秋風黨』に大別してゐたが、荒川夫人玉子は其の滿月の如きかんばせを以て、實に春風駘蕩派の第一位に擬せられてゐた。秋風蕭殺黨の首領としては、云ふまでもなく青萍夫人生子の方が之に擬せられた。謂ゆるガラ／＼屋の山路夫人多年子は、愛山君自身が之を秋風黨に列し、『おとなしい』といふ定評の堺夫人美知子は、もちろん春風派に編入されてゐた。ついでに、堺本人は忘れてゐたが、前に引用した臨風君の文章の中に、『當時、愛妻居士と渾號された堺君も』云々とある。

六　不二彦、今里の家

欠伸の死んだ高輪の家で、その年の秋、堺の初めての子が生れた。男であつた。不二彦と名づけた。『不二山に對ひ立ちてもふさはしき男の子になれと祈るなりけり』などといふ古風な心持であつた。不二彦は色の白い、頭の大きい、少し弱々しい子であつた。然し親共は、それを謂ゆる『二なき者』に思つて、丁度その頃はやりはじめた安物の乳母車を買つて來て、よくそれに乘せて連れてあるいた。乳母車は子供の頭に響いて善くないといふ話も聞いたが、やはり乘せて見たかつた。美知子は、何は置いてもと云つて、不二の宮參りに袖の長い紋付の着物を拵へてやつたりした。それほど古風な奥さんだつた。

不二彦が生れてから間もなく、堺は編輯所の命を受けて防長二州に出張した。故老を訪うて毛利家の財政および民政の事を聞いたり、吉田松陰の兄君たる杉民治翁に案內されて、松下村塾の舊跡を見たりした。歸り道には大阪に立寄つて、謂ゆる御銀主と毛利家との關係も少しばかり調査した。

この旅行から得た堺の隨筆が一つ殘つてゐるが、その一節にチョット面白い所がある。「山口より萩に出づるに二路あり。一は十四五里ありて人力車を通ずべし、一は八九里にして峻坂を越えざる可からず。われは好奇心に勵まされて後者を取りぬ。荷持の男を伴ひて行く。先づ一の坂といふを越ゆ、甚だ嶮也。荷持の男、年老いて苦しげなり、我そぞろに氣の毒に覺えて、「我等如き若き者の荷を、老いたる卿に持たするは逆樣事なるかな」など曰へば、「さにあらず旦那、持たせて下さるが御慈悲なり、此坂の爲に日々口を糊するもの幾人あるか知れず」と曰ふ。苦しげなるが如くなれど、此男案外に老健なる也。之を話の端緒として老人さまざまの事を語る。米の高き事、貧者は益々貧にして富者は益々富なる事、轉じて福島中佐の事、進んで三國干渉の事、將來の日露戰爭の事、此老人決して只の荷持にあらずと思はしむるものあり。我れ言葉を改めて老人の壯時を問へば、曰く、前原樣に少し御加勢を致しまして、それで百日ばかりぶちこまれましたよ」

高輪の家について思ひだす事共。表の通りを鐵道馬車が通つてゐて、ずゐぶんやかましかつた。丁度、家の前にとまつた馬車の中から、品川へ遊びに行く醉つぱらひの友人が、大きな聲で

堺を呼びかけて話をしたりした。その頃、堺は毎晩蚊帳の中で、ユーゴーのミゼラブルの英譯を讀んで、頻りに感奮してゐた。さうかと思ふと、一面には、源氏物語の野分の巻を讀んで、源氏の君が野分の翌朝、諸嬪を歴訪する光景に感動して、その感想を書いて『讀賣』に寄書したりした　土肥春曙君が堀紫山君と一緒に遊びに來て、少し醉つたまぎれに、美しい聲で『長恨歌』を吟じたのが、堪らぬ程善かつた。

高輪の家をあけたのはいつであつたか、ハッキリした記憶がないが、兎にかく明治三十一年には、白金今里町の家に住んでゐた。この家は二棟になつてゐて、一棟は藁屋、一棟は瓦葺、そしてそれが多くの樹木に包まれて、堺としては勿體ないくらゐ。然し家賃は五圓に過ぎなかつた。藁屋の方は一間を食堂、一間を寢室に使ひ、瓦葺の方は一間を座敷、一間を書齋に使ふといふ有樣で、堺家が急に御大家になつた樣な氣がした。

その頃、今里は一體に、町と云ふよりは寧ろ山林の間に家があるといふ形で、堺の宅から編輯所までの間は殆んど總て林間の道であつた。堺の家と裏向ひになつてゐた邸には、加藤眠柳君が住んでゐた。そこは久しい前からの、眠柳君の親達の住居で、大崎方面の低地を見晴した其の眺望は、實に絶景であつた。堺の家の隣りにはいつの頃からか上司小劒君が來てやも め暮しをしてゐた。美知子の妹の保子も來て堺の家に住んでゐた。斯くて堺の家の今里の生活は、編輯所關係を別にしても、甚だ賑かだつた。

この賑かな、そして靜かな住居で、不二彦は段々成長した。夏の庭の涼しい木蔭を、不二がヨチヨチ歩いてゐると、小犬がうしろから行つて其の兵兒帶の結び手を輕くくはへる。不二は立往生をしてワーッと泣きだす。そんな光景が堺の目に殘つてゐる。

それと同時に、一つ堪らんほど不快な、厭な、苦しい記憶が堺にある。或る日、堺は藁屋の方の茶の間の縁側で不二を遊ばせてゐた。うつかりしてゐる中に、どうしたハズミか、不二が縁側からドサリと落ちた。ワーッ！　といふ烈しい泣聲が起るのを待つまでもなく、堺は飛び降りて抱きあげたが、大ぶんひどい打撲であつたらしい。それまでにも低い縁側から落ちた事は二三度あるが、いつも大して泣く程でもなかつた。こいつは頭が大きいものだら、體の平均が取れないのだ、などと云つて笑つて濟んでゐた。然るに今度は、縁が高いのと、それに惡い事は、地面に敷石があつたのとで、大きな頭が餘ほどひどくやられたらしかつた。然し間もなく泣きやんで、案じた程の事もなかつたかと思はれたが、後になつて思ひ合せると、堺は深く自分の責任を感ぜずに居れなかつた。

七　日記のぬきがき

堺は大阪生活を始めてから以後、とぎれとぎれではあるが、大體年々の日記を殘し、それが明治三十五年まで續いた。然るに或る時、餘ほど後になつてから、こんな物を殘して置くのは恥かしいといふ氣持になつて、スッカリ燒いたり、破つたりしてしまつた。然し、そこに變な未練が出て來て、其の中から只た一册だけ、最後の分を殘して置いた。それが今でも殘つてゐる。それは『三十歳記』と題して、明治三十二年一月から始まり、同三十五年三月まで續いてゐる。卷頭に『芝白金今里町百四十九番地に於て』と記してある。日本紙の罫紙の綴本で、もちろん筆と墨で書いてある。文體は前半が文語體。後半が口語體になつてゐる。表紙の裏に一首の歌、『更にまた今年いかなる恥を知りて我れ三十にならんとすらん』以下、その日記からあちこち抄

錄を試みる。

編輯事務の進行。「數日前、笹川、齋藤、山路、及び我、四人して青萍を訪ひ、編輯事業の始末につき談ずる所あり、要領を得ず。歸途愛宕山に上り、四人一書を裁して青萍に送れり、青萍未だ答へず。我等の案によれば、來る五月或は七月にて切上げんとする也』(三月十日)。『早く編輯を終りたき哉、まだ〳〵隨分澤山いやな取調をせねばならぬ、……勉強々々』(三月十一日)。「此頃編輯に勉強す、五月までに成功するには非常の勉強を要す』(三月十八日)。「春やうやう深くして勉強出來ず、仕事がいやで〳〵たまらず、されど兎も角も五月中には成功せざる可らず、無責任なるものを作る譯にも行かず、苦しき春也』(四月二十日)。『編輯事業いよ〳〵今月中旬を以て一段落を爲さんとす、我等の分擔も略ぼ卒業せり。多少の取調殘り無きにあらねど、そは追々にやるの約束也』(六月二日)。『編輯物修正いやでたまらず、さりながら是れ任務也……』(六月三日)。『編輯は齋藤先づ卒業し、笹川も次いで了り、山路も兎にかく一應の脫稿をなせり、我のみ獨り殘れり、怠惰の結果。不愉快甚だし』(六月十二日)。『昨日より大いに勉強して編輯物の修正をなす、二三日中にいよ〳〵脫稿の積りなり、猶多少の調べ殘しあれど、そは追々に修正して可なり』(六月十四日)。

伊藤・板垣、大隈、井上。『來る四月二日、笹川、齋藤、山路等と共に伊藤侯を滄浪閣に訪はんとす。今日の大人物、果して如何ならん』(三月二十八日)。『二日、大磯に行き伊藤に會ひたり。案外打解けて心地よき老人也。氣品は少し。只若きに敬服す。酒を飲んで氣焰を吐く處、流石と思はしむるものあり。三日夜は我等の宿せる群鶴樓に來りて遊べり。高歌放吟する所、書生の如し。我等を(滄浪閣の)二階の書齋に案內したるは春畝先生大得意なるべし。曰く、是れマグナカルタの寫し也。曰く、是れビスマルクがアルサス・ローレンを取るの圖也。曰く、是れカブールの肖像なり。曰く、是れ皇太子御來遊の室也。曰く、是れ予が萬卷の書也。一々指點して微笑す。細君梅子の方は案外若し。勇吉君が若旦那然たるに不思議はなし。二日午後、板垣伯、滄浪閣に來る、應接間に待たされてゐるを見たり。三日午時、大隈伯來る。松原づたひに枝折戶をあけて夫婦して入り來る。板垣、大隈、二人の異なる所を見るべし。×××も來て居たり。其の阿諛の態、嘔吐を催さしむ。大橋乙羽も寫眞機を持ちて來てゐたり、是は案外見苦しき男にあらず』(四月九日)。『昨日、井上伯を訪ひたり、邸宅の美人を驚かしむるに足るものあり。伯が刀痕ある顏面、稍殺氣あり、春畝の洒々たるに似ず。されど我等に接するには和氣靄々たり。當年の事を語りて意氣軒昂たる時、聞太の癇癖を想見せしむ』(四月十二日)。

交友一斑。『今日、征矢野を訪うて又遇はず』(一月二十六日)。『十八日、征矢野を訪ふ。征矢野不平の氣を吐く、高潔の君子なる哉、增税案の時、自由黨を脫し洋行する心算なりきとぞ、われ實に此人を敬慕するを禁ずる能はず』(二月二十日)。『風雨の日也、西鄕の銅像を見たるにつき征矢野に一書を寄す』(二月二十四日)。『犬塚と小林と鷄を携へて來る』(二月五日)。『上司來る、鷄をさげて來る、晝飯を食うて歸る』(五月三日)。『昨日午後、永島を訪ひぬ、永島休日にて家に在り、圍碁、雜談、夜に入りて雨ふる、終に宿す』(一月二十九日夜)。『天涯、病院の春雨を如何にか見たる、往きて訪はんと欲すれども機を得ず』(三月一日)。『昨、杉田を(赤十字病院に)訪ふ、相變らずの容體也、我を引とめて話せよといふ。さま〳〵昔話などするに、あはれなる事共多かり。……』(三

月二十四日)。『一昨日、眠柳と我と蹴月を訪ひ、三人して天涯を訪ひぬ、此日天涯熱四十度、特に疲勞の體也、嗚呼々々是も亦夏を過し得ざらんか』(四月二十八日)。『杉田此のごろ獨り病室に在るに堪へず、是非誰にても居てくれよといふとぞ、……小千代子能く杉田の爲に病を看る、友人の交、杉田と永島の如きは稀也』(五月一日)。『黑岩よりの歸途、杉田を訪ふ、永島夫妻恰も來あはせたり、杉田やうやく衰ふ、されど四人の閑談猶甚だ興あり』(六月十二日)。

『一昨日、天囚と藪と我等夫婦と雜司谷鬼子母神に會し燒鳥を食うて語りぬ、藪も多分大阪の中學校長になれるらし、故き交は樂しきものなり』(三月十日)。『一昨夜、藪廣光を金虎館に訪ふ、自ら究狀名狀すべからずといふ、人は皆究せる時、尤も親しむべき也』(三月一日)。

『二十二日、笹川、久津見、林田の三人を本鄉に訪ひぬ、夜は林田が宿にとまりぬ、久津見景氣よし、久津見の家にて萬朝報社の高木鋭堂、齋藤綠雨にあひぬ、綠雨は病に衰へながら皮肉の言を吐くに苦心せり』(二月二十四日)。『……嗚呼綠雨、……才ありて病あり、獨身下宿屋に寂寥の生活を爲す。僅に蕨村の家庭に依りて慰藉を得るが如し、我は亡兄欠伸の末路に似たるものあるを見るが故に特に同情を寄する也』(四月二十八日)。

遊び事。『堀父上、弓もて來ます(昨日)、われこれよりは弓を試みんとす』(三月二十二日)。『午後、弓を試む、今日は頗るよくあたる、此頃大てい每日試む、よき運動にしてよき慰み也』(四月二十三日)。『昨日加藤と共に新しき的を作りたれば今朝早起射を試む、我はトントあたらず、加藤はよく中る、我は少し正しく射んと欲して却つて中らぬ事となれり』(五月三日)。『每日弓をひく、稍蔗境に入るの感あり』(五月八日)。『靑葉の間に每日射を試む、快甚だし、此頃はよほど上達せるを覺ゆ』(五月二十四日)。今朝、晴、弓の的を作る、心地よきもの也』(六月四日)。『二三日前、眠柳と競射を爲す、百五十本の中にて我は五十一本中てたり、眠柳は四十本ばかり中てたり、我勝なり、今夜柳眠牛肉と酒とを驕らんとす』(六月十日)。

『昨日、山路、笹川と共に齋藤の家に筍飯をくひたり、晩には我家にて山路荒川と共にとろろ飯をくひたり、亦好興』(三月二十二日)。『今日は歌舞伎座見物也、美知、保、朝早くより起きてさわぐ、志津野留守番也、曇天なるが氣遣はし、鶯なく、(午前七時記)』(三月二十六日)。『二十六日、歌舞伎座面白くもなし』『われは團十菊五を始めて見し也』『脚本について云へば……支離滅裂、……矢張り芝居は婦人小兒の見る物として恰當なり』『歸途風雨、小林の宿にとまりぬ』(三月二十八日)。『昨夜荒川の俳句會、……馬鹿げた俗興も亦惡しからず。窓にあたる若竹の節の二三本。獨りゐて蚊の聲を聞く夕かな。五月雨をかやぶきの屋根新しく』(六月四日)。『近來又落葉社俳句會あり。木造の洋館はげてかたつもり。行春を月琴乞食むれて行く。行春を賄賂に驕る住居哉』(五月八日)。

美知と不二。『不二彥四五日來病氣にて困る、少し食はせすぎて腸を傷けたる也、元來丈夫な兒にあらず、色白くして我が子に似ず、頭の形も甚だ奇也、行末氣遣はしき事也』(三月十五日)。『不二彥よく歩む、靴をはきて或ははだしにて歩む、此頃牛乳も飲む、めしも多く食ふ、ランプ、マッチなど言葉も二つ三つ言ふ』(四月二十日)。『不二今日はじめて單衣の浴衣を着たり、追々いたづら盛なり、皿茶碗などこはさぬ日なし、言葉はトント出來ず』(六月六日)。『美知胃腸を損じたること甚だし、今日醫者に往かしむ、不二も下痢す、母の病はよいが、願はくは母子健康なれ、妻病み子泣かば……』(四

月十二日。「美知頗る衰ふ、胃腸の病なりといふ、斷然たる養生も爲し得ず、綿不二に乳を飮ましむ、かくて長く此儘に過す可らず、……不二も亦甚だ强からず、關心之に過ぎたるはなし」(四月二十八日)。「美知今日又胃痛にて寢て居り、困りもの也、到底、姑息の治療にては全快せざらんか……」(六月十四日)。「美知の病、如何になるらん、夫妻、親子、家を成すは苦か樂か、永島と共に之を疑ふ。……」(七月五日)。

八　編輯終了、萬朝報入社

斯くして我々の編輯事業は六月の末を以て終了した。(編輯の結果は、その後數年間に、『防長回天史』十二卷として順次出版發行された。)日記には斯う書いてある。「六月二十六日、毛利元照公我等を招き晝餐を供す、井上伯、杉子、毛利男、小早川子等陪席す、青萍先生も出席す、此日我は慰勞として金千圓頂戴したり。」

その頃の千圓は、(我々には今でもだが)可なりの大金であつた。そんな大金を持つた事は、もちろん生れて初めてだつた。誠に『立寄らば大木の蔭』であつた。愛山君その他四五人と連れだつて、小切手を懷中して日本橋の銀行に行き、それを現金と引きかへて、五圓札百枚宛の二束を、背廣の內がくしの右と左とに一束づつ入れて、好い心持で銀座あたりをぶらついた時の事を思ひだす。臨風君が頻りに金ぶちの眼鏡を買へと勸めてくれたが、堺は僅かに鐵ぶちの懷中時計を買つた。彼が懷中時計なるものを持つたのは、それが最初であつた。それより以前、五月の末、堺は初めて洋服なるものを着たのであつた。

一千圓の內、堺は先づ一百圓を妻に與へた。蓋し彼女が福岡で質に入れて、そしてそのまゝ東京に戻つて來て、遂に流失の厄に遭つた所の、その晴着の一揃ひを復興せしめんが爲であつた。次に彼は、大阪、福岡、豐津、その他に於ける總ての借金を返濟した。それが百圓あまり。次に彼は、彼の周圍なる友人親戚に少々づつ分配した。それが又百圓あまり。その外彼自身の衣服等が(前記の洋服をも合算して)矢張り百圓ばかり。猶その外、飮んだり食つたり本を買つたりの費用も百圓やそこらはあつたらう。何しろそれで、『堺は千圓貰つたさうだ』と、友人、知人、親戚等の間に大評判であつた其の千圓が、忽ちにして半分消えてしまつた。

扨、それはそれで一かたづきとして、堺の次の仕事はどうなつたか。日記の一月二十六日には『わが將來』として一面には新聞記者、一面には文學界と書きつけてある。又『樂しき空想』として『日本廻國の事』が擧げてある。三月十六日には『內村鑑三の獨立雜誌を讀む、……我は此人の文を讀むを好む』とあり、明らかに其の影響を受けてゐる。そして次に『我が將來につきて此頃さまざまに思ひわづらふ』と書き、『政治家、教育家、文學者、いづれをか撰むべき』と疑ひ、『純文學者』は『何となし不滿足』であり、『謂ゆる政治家』は『望ましく』ないので、『此頃にては教育家といふことを少し考』へてゐるが、それも『學閥』などの話を聞けば『厭な心地』がすると結んである。そして猶その次に『教育文學者、道義文學者、宗教文學者』などといふ言葉が記されてある。そこに矢張り內村先生の影響が見える。

四月九日には『山路愛山は信濃每日新聞に往くの約成れり、笹川臨風も亦新聞に入らんとの望みあり、齋藤は大學院にでも入るなるべし、彼は洋行、博士、教授といふ段取の人なり』とある。齋藤、笹川の二君には、別に中學教師の話のあつた事も記憶する。これら諸君の將

來の計畫が堺に影響を與へた事も無論である。殊に愛山右の影響が種々の點に於いて甚だ多かつたと思はれる。

何しろ實際問題として、地位を求めるには新聞社より外なかつた。金のある間、一二年引込んで讀書するといふ案もあつたが、それも實行不可能であつた。そこで新聞社と云へば、報知新聞か萬朝報かであつた。前者には田川大吉郎君が主筆をしてゐたので、頼めば入れて貰へさうにあつた。後者にも色々の因緣があつた。先づ杉田天涯が（病氣ながら）そこの記者であつた。杉田および永島永洲君を經て、朝報社の元老たる小林天龍君とも知合になつてゐた。久津見蕨村君が朝報にはひる時、堺が幾らか其の話の取持をしたといふ因緣もあつた。そんな事からして朝報社の幸德秋水、鈴木省吾等の諸君とも知合になつてゐた。堺としては、當時、特殊の色彩を發揮してゐた萬朝報が好きで、殊に杉田から色々内部の頼もしい話を聞かされてゐたので、出來るものならそこにはひりたいといふ氣が早くからあつた。福岡から歸つた當座、芝公園の宅の前で遊んでゐると、赤羽橋の方から五六人づれの洋服の一群が、何か盛んに談論しながらサッサと大股に歩んで來た。フト見ると其の中に杉田がゐた。杉田は立ちどまつて堺と二こと三こと話して、直ぐに一群の跡を追うて走つて行つた。その時、杉田が堺に云つた、「あれは内村さんと、社の人達だ」堺はそれを聞いて羨ましい氣がした。杉田が内村さん其の他の一群に立ち交つて、あんなに談論しながら、あんなに足早に歩いて行く。自分は世の中に取殘されたやうな氣がした。そんなわけで早くから萬朝報に念がけてゐたので、いよ／＼編輯所の仕事が片づく頃、「報知」よりも先づ其の方を頼んで見た。すると永島永洲君が小林天龍君に話して、わけもなく入社の手順を運ばせてくれた。日記の六月十二日には次の如く記してある。『今朝、黒岩周六を訪ふ、洋館の應接間甚だ美なり、黒岩は一癖あるべき面魂の男なり、されど談話け頗る鄭重に頗る明晰にして不快を感ぜしめず、新聞の俗務なるを說き、其俗務を厭ふこと勿らんを我に望み、追々我に適すべき職務を選ぶべきに依り、氣を永くして其の處を得るを待たれよと言へり』

斯くて堺は七月一日から朝報社に出勤した。金はあるし、新らしい地位は得たし、彼の得意想ふべし。然し一面には、妻の病氣が肺尖カタルらしいと云ふので、せめて夏中、轉地療養する事となり、永島夫人千代子、その長女文ちやんと同行し、妹の保子と不二彥とを連れて、七月八日、鹽原の温泉に赴いた。その時の日記。『我は直ちに家を片づけ、荷物を加藤にあづけ、午後永島の家に引越す、當分永島の家に居候なり』

九　發憤、自重、得意

毛利家編輯時代の二年間は斯くの如く過ぎ去つた。世間から隔離して無爲無欲な生活を送つたやうな氣がして、不愉快で堪らない時もあつたが、然しそれが自然に、次の新らしい生活の準備であつた。

堺は兎にかく維新史に關する多少の知識を得た。又この期間に於いて、政治、法律、經濟等に關する一般の知識を吸收した。多年の文學青年が、普通の新聞記者としての資格を作るに努めた。英語もどうやらかうやら一通りの本が讀めるだけにはなつた。それらの事の爲には、山路、笹川、齋藤等の諸君が大なる刺激になつた。

新聞記者として、或は文士著述家として、愛山君ほどの有力な先輩と、親しく爾汝の交はりを爲し得た事は、何ほど堺の爲に發憤自重の種になつたか知れない。又齋藤、笹川、二君に

對しては、別に一種の感慨を催すものが堺にあつた。

　笹川君は堺と同年であり、齋藤君はたしか一歳の弟であつた。そして二君は共に文學士であつた。二君はたしか京都の三高出身であつたが、二君がそこにはひつたのは、堺が一中にはひつた翌年であつた。實際その頃までの堺としては、自分が行きかけて行きそこなつた『大學』といふものに對するあこがれを、ほんとに文字どほり夢寐にも忘れ得なかつた。謂ゆる『登龍門』を踏みはづしたといふ失望の心持、それをどうにかして取返さうとするイラ／＼した心持、それが屢々夢の中に現はれた事がある。然るに堺は今、齋藤、笹川二君の如き、順調の成功者と机を並べて、ほゞ同列の地位に立つて居るのではあるが、そこに又色々のヒケメが感じられるのであつた。それが一面には發憤の刺激ともなり、一面には自重の原因ともなるのであつた。そんな意味からして、愛山君の官學私學論も、堺の耳に一種の響きを持たないではなかつたが、然し堺は二君と對抗するなどといふ氣持よりは、只だ二君と親しみ交はる事を喜んでゐた。

　要するに堺は、毛利家編輯所に於いて、可なりに多くの得る所があり、そして幾分得意の形で新らしく新聞記者生活に移つた。

十　上卷の總括

　以上、堺利彦は自分で自分の半世三十年間の事を語つたが、一體それに何の意味があり、何の面白味があるか。

　あゝ堺利彦よ。君の半世の如何に平凡にして、そして如何に主我的なることよ。君は士族の子として、少年時代から謂ゆる『立身出世』を夢みてゐた。小學、中學、高等中學と、頗る順調に行きかけて失脚した。その後、小學教員となり、新聞記者となり、文士小說家の眞似事をして、世の中を泳ぎまはつた。而もそれが矢張り、少しなりとも自分の生活の程度を高め、社會的の地位を進めようとするモガキに過ぎない。謂ゆる『立身出世』の信條は依然として少しも變つてゐない。それから君は、兎かくしてゐる中、世間並に妻を持ち子を持ち、甚だしく貧乏でない生活を送り得る境遇となつた。そして最後に萬朝報といふ稍や人目を引くに足りるだけの舞臺に登つた。それが即ち君の『立身出世』であつた。それが即ち君の半世のアコガレの實現であつた。

　あゝ堺利彦よ。君には多少の才氣があつたに相違ない。その才氣が君をして、放蕩無賴の生活の間に、猶よくそこまでの立身出世をさせた。そこで若し君の『立身出世』が、若しくは、それの將來に於けるヨリ以上の見込が、可なりに君の野心を滿足させるに足るものであつたなら、君は多分、その『立身出世』を享樂しつゝ生涯を送るといふ運命を持つただらう。若し又君が最初の順調を繼續して大學を卒業してゐたなら、恐らく君は高等官となり、敕任官となり、知事となり次官となるくらゐの『立身出世』をなしてゐたかも知れない。それなら猶更の事、君は社會主義者なんどになる氣遣ひは毛頭なかつたのである。

　あゝ堺利彦よ。幸か不幸か、君は『登龍門』から失脚した。そして多少の苦勞を嘗めた。そして再び別の道から『登龍門』にはひりかけたが、その門は狹かつた。幸か不幸か、君の『立身出世』は甚だ哀れであつた。思ふに君の心の底には、少なくともそれ以上の『野心』が橫たはつてゐた。『野心』と云つても、功名富貴手に唾して取るべしといふ漢學の英雄主義は、恐らく餘り深く君を捕へてゐなかつたらう。それよりも君は寧ろ儒教の精神に捕へられてゐた。儒教の

『身を立てる』といふ事が、謂ゆる『立身出世』主義になるわけでもあつたらうが、然し儒教には『身を立てる』と同時に『道を行ふ』といふ理想があつた。それが又一種の英雄主義になるわけではあらうが、然し『功名富貴、手に唾して取るべし』とは大ぶん違ふ。況んや、幾ら手に唾して見ても、ろくな功名富貴が得られないとすれば、『道を行ふ』の精神が反抗的に動いて來る事になる。それから君は又、君の柔らかい頭に自由民權の新思想を吹き込まれてゐた。然るに君が社會に出て見た時、その新思想が與へた美しいマボロシは既に全く消えてゐた。そこにも不平の氣が生じないでは居られなかつた。君は多少の才氣を持つて生れたと同時に、稍々正直な素質を持つて生れてゐた。君には自由民權の思想を守り、儒教の精神を貫かうとする、可なり正直な心があつた。そこに君の『野心』が生じた。謂ゆる政治家を望まず、單純なる文學者に滿足せず、只の新聞記者でも物足らず、何か少し別にやらねばならぬといふ、少なくとも小さな『立身出世』以上の『野心』があつた。

あゝ堺利彦よ。君の平凡にして主我的なる半世にも、この『野心』の潛在的（若しくは半潛在的）發展の經路として多少の意義があるだらう。

君の後半世に於ける萬朝報時代は、即ち右の如き、士族出身の、半獨學の、中流知識階級者としての君が、個人的の立身出世思想から中流階級本位の社會改良主義に移り、更にそれから一轉して社會主義者になるまでの、四年間の過渡時代である。

（そこで此の自傳の下卷は、右の過渡時代から始めて、社會主義運動時代に入り、最後は何處まで行くか分らないが、兎にかく書けるだけ書く積りである）

改版

火の柱

木下尚江

改版 火の柱

序に代ふ

是れより先き、平民社の諸友切りに「火の柱」の出版を慫慂せらる、而して余は之に從ふこと能はざりし也、

三月の下旬、余が記名して毎日新聞に掲げたる「軍國時代の言論」の一篇、端なくも檢事の起訴する所となり、同じき三十日を以て東京地方裁判所に公判開廷せらるべきの通知到來するや、二十八日の夜、余は平民社の編輯室に幸德、堺の兩兄と卓を圍んで時事を談ぜり、兩兄曰く君が裁判の豫想如何、余曰く時非なり、無罪の判決元より望むべからず、兩兄曰く然らば則ち禁錮乎、罰金乎、余曰く余は既に禁錮を必期し居る也、然れ共幸に安んぜよ、法律は遂に余を束縛すること六月以上なる能はざるなり、且つや牢獄の裡幽寂にして尤も讀書と默想とに適す、開戰以來草忙として久しく學に荒める余に取ては、眞に休養の恩典と云ふべし、兩兄曰く果して然るか、君が「火の柱」の主公篠田長二を捉へて獄裡に投じたるもの豈に君の爲めに讖をなせるに非ずや、君何ぞ此時を以て斷然之を印行に附せざるやと、余の意俄に動きて之を諾して曰く、裁判の執行尚ほ數日の間あり、乞ふ今夜直に校訂に着手して、之を兩兄に託さん、入獄の後、之を世に出せよ、斯くて九時、余は平民社を辭して去れり、何ぞ知らん 舞臺は此の瞬間を以て一大廻轉をなさんとは、

余が去れる後數分、警吏は令狀を携へて平民社を叩けり、嚴達して曰く「嗚呼增稅」の一文、社會の秩序を壞亂するものあり、依て之を押收すと、

四月一日を以て余は判決の宣告を受けぬ、四月二日を以て堺兄の公判は開廷せられぬ、而して其の結果は共に意外なりき、余は罰金に處せられたり、堺兄は輕禁錮三月に處せられたり、而して平民新聞は發行禁止の宣告を受けたるなり、平民社は直に控訴の手續に及びぬ、

其の九日の夜、平民社演說會を神田の錦輝館に開けり、出演せるもの社内よりは幸德、堺、西川の三兄、社外よりは安部兄と余となりき、演說終つて後、堺兄の曰く、來る十二日控訴の公判開かれんとし、花井、今村の諸君辯護の勞を快諾せられぬ、然れ共我等同志が主義主張の故を以て法廷に立つこと、今後必ずしも稀なりと云ふべからず、此際我等の主張を吐露して之を國權發動の一機關たる法廷に表白する、豈に無益のことならんやと、一座贊同、而して余遂に其の選に當りて辯護人の位地に立つこととなれり、

十二日は來れり、公判は控訴院第三號大法廷に開かれぬ、堺兄に先ちて一青年の召集不應の故を以て審問せらるゝあり、今村力三郎君辯護士の制服を纏ひて來り、余の肩を叩いて笑つて曰く 君近日頻りに法廷に立つ、豈に離別の舊妻に對して、多少の眷戀を催すなからんやと、誠に然り、余が辯護士の職務を抛つてより既に八星霜、居常法律を學びしことに向て遺憾の念な

きに非ざりしなり、今我が親友の爲めに目志を代表して法廷に出づるに及び、余が不快に堪へざりし辯護士の職務が、決して無益に非ざりしことを覺り、無限の歡喜禁ずべからざりし也、

既にして彼の青年の裁判は終了せり、而して堺兄は日本に於ける社會主義者の代表者として「ボックス」の中に立てり、

判事の訊問あり、檢事の論告あり、辯護人の辯論あり、而して午後二時公判は終了を告げぬ、

越えて十六日、判決は言ひ渡されぬ、堺兄は輕禁錮月にに輕減せられたり、而して發行禁止の原判決は全然取り消されたり、

吾人は堺兄の爲めに健康を祈ると共に、『發行禁止』の悪例の破壞せられたることを深く感謝せずんばあらず、

櫻花雨に散りて、人生恨多き四月二十一日、堺兄は幼兒を病妻に託して巣鴨の獄に赴けり、而して余は自ら「火の柱」の印刷校正に當らざるべからず、是れ豈に兄が余に出版を慫慂し、而して余が咄嗟之を承諾したる當夜の志ならんや、只だ「刑餘の徒」たるの一事のみ、兄と余と運命を同うする所也、

（堺兄を送れるの日、毎日新聞に掲ぐ）

石川三四郎兄へ寄す

木下尚江

石川君。

僕も長いこと新聞記者の生活をしたので、隨分手當り次第に書き散らしたが、然し文筆は僕に取て、常に第二の武器であつた。相當に自惚もあつた僕だが、文章と云ふものに對して自尊心を抱いた覺えは嘗て無い。

僕の著作が、官權の手に依て死罪に處せられたことは、僕實に中心から感謝して居る。あんな物が本屋の店頭に晒されて居ることは、無限の恥辱で、言ひ樣の無い不愉快なことであつた。

僕の著作が禁止されたのは決して著作其物の爲めでは無い。僕と云ふ人間が、所謂危險人物の餘臭の、當時尚ほ濃厚であつた結果である。爾來殆ど二十年。世狀の變化の劇烈な上に、僕と云ふものが御覽の如く鹹味を失つた鹽同然、一個老朽の敗殘者である今日、其の古い文章などに何の意義がある。

君が再三、舊作の再刊を勸誘して呉れた時、僕は其の都度、言下に拒絶した。『此の目玉の黑い中は駄目だ』とさへ言うたことを覺えて居る。腐敗の屍骸を、街頭など引き廻されて、堪るものでは無い。然るに今度、君が重ねての勸誘に對し、脆くも服從したことは、我ながら實は不思議に思ふ。僕は最早「恥辱」と云ふ執着さへも、消え失せてしまつたのだ。

刑場の白骨を拾ひ集めて、小さな五輪の塔でも建てて呉れる、此の導師には、僕の舊友中、君が一番の適任者だ。是れで僕も、古い前世界の垢穢から綺麗に解脱が出來る。

◇

僕今六十の坂に立つて回顧する。此の生死海を游泳する人間に、豪健の人と纖弱の人と、二つの種類がある。豪健の人は堂々と、何も考へずに禽獸の如くに行く。纖弱な人は考へる。苦惱の渦中に陷ちる。生を欲して死を急ぐ。是れは、魔の神の手に二種の原型が在るものらしい。

青年期と中年期。僕のやうな鈍根劣機の者が、此の二大難關を辛くも通過し得たことを考へると、時代々々に必ず犧牲の贖罪者が居る。青年期に見たのが北村透谷で、中年期に見たのが幸徳秋水だ。透谷は僕に一年の長者で、幸徳は二歳の弟だ。

◇

我を生める父母の恩。我が眼を開ける師の恩。

僕は生まれて四十二歳、始めて「我師」と云ふものを見た。其の瞬間、僕の一生は舊と新とに劃然と區分された。年少の師に先き立たれた僕は、再び天涯孤獨の漂泊兒に落ちぶれたが、然し孤獨は、畢竟我が相應の生活らしい。

舊知の中には、其後の僕の生涯に就て、心に懸けて下さる方々もあるらしく、然うした話を傳聞する毎に、心中多大の感激を催す次第である。僕は今自分の世界の名も知らない。自分の行路の方角も知らない。唯だ老の既に到れるをも思はず、全然無學の蠻勇に立て還つて、極めて多忙に勉強して居る。此の機會に、此の手を藉て、此の一事を報告申上げる。

◇

自ら省るに、全く非力無能、世に生存權と云ふものを持たぬ僕の如きものが、餓ゑも凍えもせず、氣隨氣儘に六十年を過ごしたと云ふことは、悉く是れ父母師友の恩澤で、只だ慚愧と感謝の外は無い。諸君の前にと云ふこととなく、低頭默念するのみだ。君幸に諒察せよ。

昭和三年六月四日　　木下尚江

木下君へ呈す

木下老兄。

長い年月の間、暗黒の蔭の中に固く密閉せられてゐた大兄の諸勞作を、そして多くの出版業者の幾百度を踏んでの出版許諾の懇願を悉く拒絶して來たその勞作を、今度、僕の懇請に遭つて、ぽつりと我を折られ、一切の處置を僕に一任されることになつたのは、僕にとつて甚だ感激に堪へない處だ。そして其責任の甚だ重大なことを痛感する次第だ。

日本社會運動黎明期に於ける第一人者たりし老兄、社會主義者中第一の雄辯家たりし老兄、今日のプロレタリア文藝、當時の社會文藝の第一人者たりし老兄が、多くの書店の懇請をも斥けて、日本の文藝史上、社會思想史上に、高い一地位を占むべきその諸勞作を悉く闇に葬り去らうとする心情は、僕に於ても略ぼ了解してゐる積りだ。

二十數年以前、『火の柱』や『良人の自白』を世に送り出して、當時の青年達の血を沸かした老兄は、心身ともに脂ぎつてゐた。今日の老兄から見たら隨分幼稚でもあつたらう。齒が浮く樣に感じられる點もあつたであらう。けれども其れが人生ぢやなからうか。少年は少年らしい處に眞實と自然美とがある。少年が老人らしかつたら其れは却て病的ではなかつたらうか。當時の社會運動、社會思想、其ものが、今日から見れば甚だ幼稚であつたに相違ない。生れながら老人の赤兒が無い如く、どんなものでも初發は皆幼稚なものだ。併し幼稚には幼稚の價値があり、老年には老年の特色がある。純情に溢れてゐた初期社會運動の事を今日のそれに較ぶことが出來ないのは是非もないことだ。此意味に於て大兄の諸勞作は實にかけがへの無い尊い文獻と言は

なければならない。

大兄は曾て僕の小著『哲人カアペンター』に序して『文章を書くことは脱糞する樣なものだ』と言はれた。今僕はその大兄の脱糞の始末を一任された譯だが、其脱糞たるや、假令些か不良糞でも、不消化糞でも、長い時間を經た今日は既に良くかれてゐる。何んな耕作に用ゐても良肥料となるに定まつてゐる。心配せずに野にぶちまければ可い。

たしか良寛の言葉だつたと思ふ。『裏を見せ表を見せて散る紅葉』といふのがある。表裏ありのまゝを無邪氣に生活しなくては此世の中が窮屈になる。だが、よく考へて見れば、人間は誰でも硝子張の中で一生を終るのだ。幾ら飾つても、幾ら衒つても、正味は常に明白に暴露してゐるものだ。假令、千萬人の眼を詐き得るとしても唯一無邊光を欺き得ないのを、どうしよう。また假令十年百年を糊塗し得るとしても、無限の一刹那を胡麻化し得ないのを、どうしよう。どんなに世俗的に大運動を試みても、どんなに世間の拍手喝采裡に一生を終つても、その一刹那の前、その一遍照光の前に於ける價値如何となると、それは全然別問題だ。

三十年以前に於ける大聲叱呼の青年木下尙江が偉かつたか、沈默靜座の今日の老兄が偉くないか、それは無限の無邊光が行ふメンタルテストでなければ判らない。今此木下尙江集に收むる處は、唯だそのメンタルテストの第一回分に過ぎないのだ。老兄後半生の分に至つては、勿論更らに別樣の大分野が開けてゐる筈だ。

からした觀點から本集を見るならば本集は大兄の創作集であると同時に大兄の自敍傳でもある。少くとも大兄の精神生活の記錄だ。大兄から見たら僞があるかも知れないが、僕から見れば僞り隱すことの出來ない眞實の告白だ。ジャン・ジャック・ルソオの懺悔錄はあれほど大膽に書かれてゐるが、それでも多分に隱された點があるといはれる。けれども又、既にさう世人から言はれるだけ、ジャン・ジャック自身は僞られてゐないのだ。自敍傳なぞ殊更書かなくても、誰にでもそれぞれの傳記が出來てゐる。ピエル・クロポトキンや、エドワアド・カアペンタアは、自敍傳を記いて能く自分を示現してゐるが、自分の事なぞ書くものぢや無いと言つて、少しも自己の記錄を遺さなかつた。ルクリュ兄弟の如きは、矢張り立派な記錄を事實の上に遺して往つた。自ら書かうが、書くまいが、眞實は一分も虛飾し得ず、一厘も抹殺し得ないものだ。

此意味に於て本集は大兄の立派な自敍傳であるが、更らに僕の見て重大性を存するとなす所以のものがある。それは、本集が實に日本社會運動の黎明期を物語る見事な思想史、精神史だからである。種々なる系統の社會思想が混沌たる狀態を以て醱酵し漲つてゐたあの時代の精神記錄として、本集に優るものは、また他に存在せぬであらう。

木下兄。

今日は、單に日本ばかりでなく、世界に於ける社會思想、社會運動が一大回轉を行つて、總てが新らしい方向に歩を進めようとしてゐる時だ。此時に當つて、斯の道の第一人者であつた老兄の前半全集を世に送り出すことは、種々なる意味に於て、今日の青年に稀有の良き道案内を提供するものだと僕は思つてゐる。それ故、僕は是等の勞作

の出版を強ひて老兄に求めた譯だ。本集の編纂に際して往日を回顧し、僕の心にも無量の感激が海の如く湧いて來る。靜座沈默の老兄、夫れ其床上、自ら熱潮の洪水に驚くこと勿れ。

石川三四郎　識

一の一

時は九月の初め、紅塵繚る街頭には尙ほ赫燿と暑氣の殘りて見ゆれど、芝山内の森の下道行く袖には、早くも秋風の涼しげにぞひらめくなる、

「ムヽ、是れが例の山木剛造の家なんか」と、石造の門に白き標札打ち見上げて、一人のツブやくを、伴なる書生のしたり顏、「左樣サ、陸海軍御用商人、九州炭山株式會社の取締、俄大盡、出來星紳商山木剛造殿の御宅は此方で御座いサ」

「何だ失敬な、××××××××××

×××、、×、×××××、××××××

××××××」

「ハ、、、、君の樣に悲觀ばかりするものぢや無いサ、天下の富を集めて剛造輩の腹を肥すと思へばこそ癪に障るが、之を梅子と云ふ女神の御前に獻げると思や、何も怒るに足らんぢや無いか」

『貴樣は直ぐ其樣卑猥なこと言ふから不可んよ」

「是れは恐れ入つた、が、現に君の如き石部黨の旗頭さへ、彼の女神の爲めには隨喜の涙を垂れたぢや無いか」

『謔言ふな』

「謔ぢや無いよ、僕は之を實見したのだから辯解は無用だよ」

「謔言へ」

『剛情な男だナ、ソレ、此の春上野の慈善音樂會でピヤノを彈いた佳人が有つたらう、左樣サ、質素な風をして、眼鏡を掛けて、雪の如き面に、花の如き脣に、星の如き眸の、――彼女が卽ち山木梅子孃サ」

「貴樣、眞實か」

と彼の書生は、木立の間なる新築の屋根を顧みつゝ、「何うも不思議だナ、僕は殆ど信ずることが出來んよ」

「懷疑は悲觀の兒なりサ、彼女芳紀既に二十一――三、未だ出頭の天無しなのだ、御所望とあらば、僕卿か君の爲めに月下氷人たらんか、ハ、、、、」

『然し、貴樣、剛造の樣な貪慾無情の惡黨に、彼いふ令孃の生まれると云ふのは、理解すべからざることだよ」

「が、剛造などでも、面會して見れば、案外の君子人かも知れないサ」

『そんなことがあるものか』

丸山の塔下を語りつゝ、飯倉の方へと二人は消えぬ、

客去りて車轍の迹のみ幾條となく砂上に鮮かなる山木の玄關前、庭下駄のまゝ枝折戸開けて、二人の孃の手を携へて現はれぬ、姉なるは白きフラネルの單衣に、漆の如き黑髮グルグルと無造作に束ね、眼鏡越しに空行く雲靜かに仰ぎて、獨りホヽ笑みぬ、

今しも書生の門前を噂して過ぎしは、此の女の上にやあらん、紫の單衣に赤味帶びたる髮房々と垂らしたる十五六とも見ゆるは、妹ならん、去れど何處ともなく品格いたく下りて、同胞とは殆ど疑はるゝばかり、

「ぢや、姉さんは何方が好だと仰しやるの」と、妹は姉の手を引ツ張りながら、面顰めて促すを、姉は空の彼方此方眺めやりつゝ、

『あら、芳ちやん、私は好も嫌も無いと言つてるぢやありませんか』

『けれど姉さん、何方かへ嫁くとお定めなさらねばならんでせう、兩方へ嫁くわけにはならないんだもの』

『左樣ねエ、ぢや私、兩方へ嫁きませうか』と、姉は振り返つて嫣然と笑ふ、

『酷いワ、姉さん、からかつて』と、妹は白い眼して姉を睨みつ、ぢつと身を寄せて又た取り縋り、『ね、姉さん、松島樣の方にお定めなさいよ、私、松島さん大好きだわ、海軍大佐ですつてネ、今度露西亞と戰爭すれば、直ぐ少將におなりなさるんですと――ほんたうに軍人は好いわ、活潑で、其れに陸軍よりも海軍の方が好くてよ、第一綺麗ですもの、其れでネ、姉さん、昨夜も阿父と阿母と話して在らしつたんですよ、早く其樣決めて松島樣の方へ挨拶しなければ、此方も困るし、大洞の伯父さんも仲に立つて困るからつて』

『芳ちやんは軍人がお好きねエ』

『ぢや、姉さんは、あの吉野とか云ふ法學士の方が好いのですか、驚いたこと、彼樣ニヤけた、頭ばかり下げて、意氣地の無い』

『左樣ぢや無いの、芳ちやん』と、姉は靜に妹を制しつ、『私はネ、誰の御嫁にもならないの――ほんたう』

妹は眼を圓くして打ち仰ぎぬ、

一の二

折柄門の方に響く足音に、姉の梅子は振り返りつ、

『長谷川牧師が光來しつてよ』

色こそ褪せたれ黑のフロックコート端然と着なしたる、四十恰好の淺黑き紳士は莞爾として此方に近づき來る、是れ交際家として牧師社會に其名を知られたる、永坂教會の長谷川某なり、

妹の芳子は頰膨らし、『厭な奴ッ』とツブやくを、梅子は『あら』と小聲に制しつ、

牧師は額の汗拭ひも敢へず、

『これは〳〵、御揃ひで御散步で在らつしやいまするか、お、「黑」さんも御一緒ですか』と、芝生に横臥せる黑犬にまで鄭重に敬禮す、是れなん其仁、獸類にまで及べるもの乎、

『エ、本日罷り出でまする樣と、御父上から態々のお使に預りまして』と、牧師は梅子の前に腰打ち屈めつ、『甚だ遲刻致しまして御座りますが、御在宅で在らせられまするか』

妹孃は默つて何處へか去つて仕舞ひぬ、

『御光來を願ひましたさうで御座いまして、誠に恐れ入りました』と、梅子の言ふを、

『イエ、なに、態々と申すでは御座りませぬ、外に此の方面へ參る所要も御座りまする、其れに久しく御父上には拜顏を得ませんで御座りまするから』

牧師は身を反らしてニヤ〳〵と笑ひぬ、

梅子に導かれて牧師は壯麗なる洋風の應接室に入りぬ、

待つ間稍々久しくして主人は扉を排して出で來りぬ、でつぷり肥りたる五十前後の頑丈造り、牧師が椅子を離れての慇懃なる挨拶を、輕くも頤に受け流しつ、正面の大椅子にドッかとばかり身を投げたり、

『御來宅を願つて甚だ勝手過ぎたが、少し御注意せねばならぬことがあるので』と、葉卷莨の烟多く棚引かせて、『他でもない、例の篠田長二のことであるが、近頃何か頻りに非戰論など書き立てて居るさうだ、勿論彼奴等の「同胞新聞」など言ふものは、我輩などの目には新聞とは思はないので、何せ狂氣染みた壯士の空論、元より齒牙に掛ける必要もないのだが、然し此頃

娘共の話して居た所を聞くと、近來教會に於ても、耶蘇教徒は戰爭に反對せにやならぬなど、無法なことを演說すると云ふことだが』

牧師は恐る〳〵口を開き、『さ、其件に就きましては私も一方ならず、心痛致し居りまするので』

と辯ぜんとするを、剛造は莨の灰もろ共に拂ひ落しつゝ『其に梅子などは何やら其の僻論に感染して居るらしいので、大に其の不心得を叱つたことだ。特に近頃彼女の結婚に就て相談最中のであるから、萬一にも社會黨等の妄論などに誤らるゝ様なことがあらば、其れこそ彼女ばかりでは無い、山木一家に取つて由々しき大事なのである、で、今日君を御呼び立て致したのは、社會黨を矢張り教會に入れて置かるゝ御心得か如何を承つて、其上で子女等を教會へお預けして置くか如何を決定したいと思ふのである』

牧師は俯して沈默す、

剛造はジロリ其を見やりつ、『苟も山木の家族が名を出して居る教會に、社會黨だの、無政府黨だのと云ふバチルスを入れて置かれては、第一我輩の名譽に關することで、又た彼の樣な其筋で筆頭の注意人物を容れて置くと云ふのは、教會の爲めにも不得策だらう、彼樣亂暴な人物も耶蘇教信者だと云ふので、無智漢の信用を繫いで居るのだから』

一の三

牧師は僅に頭を擡げぬ、

『御立腹の段は誠に御尤で、私に於ても一々御同感で御座りまする、が、只だ何分にも篠田が青年等の中心になつて居りまするので』

『さ、其のことである』と、剛造は吻を容れぬ、『危險と言ふのは其處である、卵の如き青年の頭腦へ、社會主義など打ち込んで如何する積であるか、ツイ先頃も私が子女等の室を見廻ると、長男の剛一が急いで讀んで居た物を隱すから、無理に取り上げて見ると、篠田の書いた「社會革新論」とか云ふのだ、長谷川君、少しは考へて貰ひたいものだ、教會へは及ばずながら多少の金を取られて居る、而して家庭へ禍殃の種子を播かれでも仕ようものなら、我慢が出來るか如何だらう』

牧師は頻りに額の汗を拭ひつ、

『御尤で御座りまする』

『元來を言へば長谷川君、初め篠田如き者を迂濶に入會を許したのが君の失策である、如何だ、彼の新聞の遣り口は、政府だの資產あるものだのと見ると、事の善惡に拘らず罵詈讒謗の毒筆を弄ぶのだ、彼奴が歸朝つて、彼の新聞に入つて以來、僅か二三年の間に彼の毒筆に負傷したものが何人とも知れないのだ、私なども昨年の春、毒筆を向けられたが――彼奴等の言ふ樣な人道とか何とか、其樣單純なことで坑夫等の統御が出來るものか、少しは考へて見るが可いのだ、石炭坑夫なんてものは、熊か狼だ、其れを人間扱ひにせよと云ふのが間違つて居るぢや無いか、彼の時にも君に放逐する樣に注意したのだが、自分のことで彼此云ふのは、世間の同情を失ふ恐があるからと君が言ふので、其れも一理あると私も辛抱したのだ、今度は、君、少しも心配するに及ぶまい、日露戰爭に反對するのだから、卽ち賣國奴と言ふべきものでは無いか』

牧師は額押へて謹聽し居たりしが、やがて少しく頭を揚げつ、『――一々御同感で御座りまするので――が何分にも御承知の如き尋常ならぬ男なので御座りまするから、執事等も蔭では皆な苦慮致して居りまするものの、誰も言ひ出しかねて居るので御座ります……――如何で御座りませう、御足勞ながら貴方から一言教會へ

直接に御注意下さりましては、多分一同待ち望んで居ることと思はれまするので――』

『私が教會などへ行つて居れると思ふか』と、剛造は牧師を睨みつ、『私は體の代りに黄金を遣つてある筈だ――イヤ、牧師ともあるものが左樣に優柔不斷ならば、私の方にも心得がある、子女等も向後一切教會へは足踏みもさせないことに仕よう』

『ア、山木さん、御立腹では恐れ入りまする』と、牧師は周章しく剛造をなだめ『宜しう御座りまする、私も豫て其の心得で居りましたのですから、早速執事等とも協議の上、至急御挨拶に及ぶで御座りませう』

『ウム、ぢや、早速左樣云ふことに』

剛造の面和ぎたるに、牧師もホとばかりに胸撫で下しつ、

『ツイ失念致し居りまして御座りまするが、京都育兒慈善會から貴方へ厚く御禮申上げて呉れる樣にと精々申して參りました、澤山に義捐を御承諾下さいましたので、京阪地方の富豪を說くにも誠に好都合になりましたさうで、我國でのモルガン、ロックフェラアと言ふべきであらうなど、非常に貴方を稱讃して寄越しまして御座りまする』

『なに、ロックフェラアか、いや、ロックフェラアも近頃の不景氣では思ふ樣に慈善も出來ない』と、剛造は反り返つて呵々と大笑せり、

牧師も愈々笑傾け、『新聞で拜見致しましたが、今回九州地方の石炭會社の同盟して露西亞へ石炭販賣を禁止なされたのも、貴方の御發意と申すことで、實業界から斯かる愛國の手本が出ますると云ふのは、實に近來の快事で御座りまする』

『ハ、、、、』と剛造は一きは高笑ひ、『商賣にしてからが、矢ッ張り忠君愛國と言つたやうな流行の看板を懸けて行くのサ』

剛造はやをら立ち上りつ、

『長谷川君、傳道なども少し融通の利くやうに賴みますよ、今も言ふ通り梅子の結婚談で心配して居るんだが、信仰が如何の、品行が如何のと、頑固なことばかり言うて困らせ切つて仕舞ふのだ、耶蘇でも佛でも無宗教でも構ふことは無い、男は畢竟人物にあるのだ、さうぢや無いか、一夫一婦なんてことは、日本では未だ時期が早いよ――ぢや、君、今の篠田の一件を忘れないやうに、是れで失敬する、家内の室ででも悠然遊んで行き給へ』

莨の煙一抹を戸口に殘してスラリ〳〵と剛造は去りぬ、

牧師は獨り思案の腕を組みつ、

二の一

夜は十時を過ぎぬ、二等煉瓦の巷には行人既に稀なるも、同胞新聞社の工場には今や日も眩ふばかりに、運轉する機械の響轟々として、明日の新聞を吐き出しつゝあり、板敷の廣き一室、瓦斯の火急し氣に燃ゆる下に寄り集うたる配達夫の十四五名、若きあり、中年あり、稍々老境に近づきたるあり、剝げたる飛白に縄の樣なる角帶せるもの、何がし學校の記章打つたる帽子、阿彌陀に戴けるもの、或は椅子に掛り、或は床に踞り、或は立つて徘徊す、印刷出來を待つ間の徒然に、機械の音と相競うての高談放笑なか〳〵に賑はし、

三十五六の剽輕らしき男、若き人達の面白き談話に耳傾けて居たりしが、やがてボンと煙管を拂ひて、『書生さん方、お羨ましいことだ、同じ配達でもお前さん達は修業金の補充に稼ぐだが、私抔を御覽なせい、御館へ歸つて見りや、豚小屋から臂の來さうな中に御臺所、御公達、御姫樣方と御四方まで御控へめさる、是で私が

脚氣の一つも踏み出したが最後、平家の一門同じ枕に討死ッてつた様な幕サ、考へて見りや何の爲めに生れて來たんだか、一向合點が行かねエやうだ

躁んで居たる四十恰好の男、「さうよ、でも此の新聞社などは少し毛色が變つてるから、貧乏な代りに餘り非道も遣らねいが、外の社と來たら驚いちまはア、さん〴〵腹こき使つた擧句、體が惡くなつたからつて逐つ拂ひよ、チョッ、誰の爲めに體が惡くなつたんだ」

フカリ〳〵煙草を吹かし居たる柔順やかなる翁、「年増しに世の中がヒドくなるよ、俺の隣に砲兵工廠へ通ふ男があつたが、――なんでも相當に給料を取つてるらしかつたが、其れが出しぬけにお拂函サ、外國から新發明の機械が來て、女でも間に合ふからだと云ふことだ」

彼の剽輕なる男、『ウム、ぢやア逐々女が稼いで野郎は男妾ッたことになるんだネ、難有い――そこで一つ都々逸が浮んだ、「私や工場で黒汗流し、主は留守番、子守歌」は如何だ、イヤ又た一つ出來た、今度は男の心意氣よ、「工場の夜業で嚊が遲い、餓鬼はむづかる、飯や冷える」ハ、、、、是れぢや矢ッ張り遣り切れねい」

「所が、お前、女房は產後の肥立が良くねえので床に就いたきり、野郎は車でも挽かうッて見た所で、電車が通じたので其れも駄目よ、彼此する中に工場で萌した肺病が惡くなつて血を吐く、詮方なしに煙草の會社へ通つて居た十一になる娘を芳原へ十兩で賣つて、其も手數の何のッて途中へ消えて、手に入つたのは僅たお前、六兩ぢやねいか、燒石に水どころの話ぢやねエ、其處で野郎も考へたと見える、寧そ俺と云ふものが無かつたら、女房ゃ赤兒も世間の情の蔭で却て露の命を繼ぐこと〻も出來ようッてんで、近所合壁へ立派に依頼狀を遺して、神田川で土左衞門よ」

『成程、そんな新聞を見た覺もある』と誰やらが言ふ、

「あんな大した腕持つてる律儀な職人でせエ此の始末だ、さうかと思や、惡い泥棒見たいな奴が立身して、妾置いて車で通つて居る、神も佛もあつたもんぢやねエ」

秋の夜の更け行く風、肌に浸みて一座肅然たり、

『だから貴樣達は馬鹿だと云ふんだ』突如落雷の如き怒罵の聲は一隅より起れり、衆目驚いて之に注げば、未だ二十歳前らしき金釦の書生、默誦しつゝありし洋書を握り固めて、突ッ立てる儀鋭き眼に見廻し居たり、漆黑なる五分刈の頭髮燈火に映じて針かとも見ゆ、彼は一座怪訝の面をギロリとばかり睨み返せり、『君等は苟も同胞新聞の配達人ぢやないか、新聞は紙と活字と記者と職工とにて出來るものぢやない、我等配達人も亦た實に之を成立せしめる重要なる職分を帶びて居るのである、然るに君等は我が同胞新聞の社會に存在する理由、否た、存在せしめねばならぬ理由をさへ知らないとは、何たる間抜けだ、……人生の目的がわからぬとは何だ、――神も佛も無いかとは何だ其の疑問を解きたいばかりに、同胞新聞はこゝに建設せられたのぢやないか、吾々は世の醉夢に覺醒を與へんが爲めに深夜、彼等の枕頭に之を送達するのぢやないか――馬鹿ッ』彼は胸を抑へ、情を呑みて、又其の脣を開けり、『君等には、篠田主筆の心が知れないか、先生が……先生が貧苦を忍び、侮辱を忍び、迫害を忍び、年歯三十、尙獨身生活を守つて社會主義を唱導せらるゝ血と涙とが見えないか――』

二の二

『君、さう泣くな、村井』とポンと肩を叩いて宥

めたるは、同じく苦學の配達人、年は村井と云へるに一ツ二ツも兄ならんか、「述懷は一種の慰藉なりサ、人誰か愚痴なからんヤダ、君とても口にこそ雄いことを吐くが、雄いことを吐くだけ腹の底には不平が、渦を捲いて居るんだらう」

少年村井も首肯きつ、「ウム、羽山、まあ、さうだ」

「それ見イ、僕は是れで三年配達を遣つてるが、肩は曲る、血色は減くなる、記憶力は衰へる、僕はツク／＼夜業の不衞生——と云ふよりも寧ろ一個の罪惡であることを思ふよ、天は萬物に安眠の牀を與へんが爲めに夜テフ天鵞絨の幔幕を下し給ふぢやないか、然るに其の時間に勞働する、即ち天意を犯すのだらう、看給へ、夜中の勞働——賣淫、竊盜、賭博、巡査——巡査も劍を握つて嚴めしく立つては居るが、流石に心は眠つて居るよ、其間を肩に重き包を引ツ掛け驅け歩くのが、ア、實に我等新聞配達人樣だ、オイ村井君、君の崇拜する篠田先生も紡績女工の夜業などには、大分八ケ間敷鋒を向けられるが、新聞配達の夜業はドウしたもんだ」、他の目に在る塵を算へて己の目に在る梁木を御存じないのか。矢ツ張り、耶蘇教徒等人ばかりを博愛しツてなわけか、ハ、、、、、」

「是りや羽山さん、出來ました」村井さん如何です」ハ、、、、、」

隣れる室の閾に近く此方に背を見せて、地方行の新聞に帶封施しつゝある鵜川と云へる老人、ヤヲら振り返りつ、「アハ、村井さん、大分痛手を負ひましたナ、が、御安心なさい、此頃も午餐の卓で、主筆さんが社長さんと其の話して居られましたよ」

「ドゥだ、羽山、恐れ入つたらう」と村井は雲を破れる朝日の如く笑ましげに、例の鋭き眼を輝かしつ、「僕は僕の配達區域に麻布本村町の含まれてることを感謝するよ、僕だツて雨の夜、雪の夜、霙降る風の夜などは癇癪も起るサ、華族だの富豪だのツて愚妄奸惡の輩が、塀を高くし門を固めて暖き夢に耽つて居るのを見ては、暗黑の空を睨んで皇天の不公平——ぢやない其の卑劣を痛罵したくなるンだ、特に近來仙臺阪の中腹に×菱の奴が、婿の松×何とか云ふ奴の爲めに煉瓦の建築を創めたのだ、僕は其前を通る毎に、オ、×××××××××××××
×、×××××××××××××
×××××と言つて呪つてやるンだ、けれどネ羽山、それを上つて今度は藥園阪の方へ下つて行く時に、僕の惱める暗き心は忽ち天來の光明に接するのだ」

羽山は笑ひつゝ喙を容れぬ、「金貨の一つも拾つたと云ふのか」

「馬鹿言へ、古き槻が巨人の腕を張つた樣に茂つてる陰に、「篠田」と書いた瓦斯燈が一道の光を放つてるぢやないか、ア、此の戶締もせぬ自由なる家の裡に、彼の燃ゆるが如き憂國愛民の情熱を抱いて先生が、暫しの夢に息んで居られるかと思へば、君、其の細きランプの光が僕の胸中の惡念を一字々々に讀み上げる樣に畏れるのだ」

「一寸お待ちなせェ、戶締の無い家たア隨分不用心なものだ。何れ程貧乏なのか知らねいが」と彼の剽輕なる都々逸の名人は冷罵す、

「君等に大人の心が了つてたまるものか」と村井は赫と一眄せり、「泥棒の用心するのは、畢竟自分に泥棒根性があるからだ、世に惡人なるものなしと云ふのが先生の宗教だ、家屋の目的は雨露を凌ぐので、人を拒ぐのでないと云ふのが先生の哲學だ、戶締なき家と云ふとが、先生の××××の立派な證據ぢやないか」

「××××××××ツて云ふのは一體何のことかネ」と剽輕男は問ふ、

村井は五月蠅と云ひげに眉を顰めしが、『そりや、其のあれだ、手短に言へば××××××××××××、×××、××××××、××××××××××——』

『ヘエー、其奴ア便利だ、電車の三錢どころの話ぢやねいや』

頭を臺灣坊主に食はれたる他の學生、帽子を以て腰掛を叩きつゝ、「だが、我輩は常に篠田さんが何故無妻なのかを疑ふよ』

突然異様の新議案に羽山は眞面目に首を傾けつ、「何でも先生、亞米利加で苦學して居た時に、雇主の令嬢に失戀したとか云ふことだ、先生の議論の極端過ぎるのも其の結果ぢや無いか知ら』村井は首振りつ、『僕は必ず社會革新の爲めに、一身の歡樂を犧牲にせられたのだと思ふ』

時に例の剽輕男、ニューと首を延して聲を低めつ、『嚊も矢ツ張り××××ッた様な一件ぢや無いかナ』

一座思はずソアッとばかりに腹を抱へぬ、鵜川老人は祕藏の入齒を吹き飛ばせり、

折から矢部と云ふ發送係の男、頓驚なる聲を振り立てて、新聞出來を報ぜしにぞ、『其れッ』と一同先きを爭うて走せ出せり、村井のみ悠々として最後に室を出で行けり、

三の一

『先生、在らつしやいますか』と大きなる風呂敷包を抱へて篠田長二の臺所に訪れたるは、五十の阪を越したりとは見ゆれど、ドコやら若々とせる一寸品の良き老女なり、男世帶なる篠田家に在りての玄關番たり、大宰相たり、大膳大夫たる書生の大和一郎が、白の前垂を胸高に結びて、今しも朝餐の後始末なるに、『おヤ、まア大和さん、御苦勞様ですこと——先生は在らつしやいますか』

松が枝の如きたくましき腕を伸べて茶碗洗ひゝありし大和は、五分刈の頭、徐ろに擡げて鐵縁の近眼鏡越に打ちながめつ、『あア、老女さんですか、大層早いですなア——先生は後圃で御運動でせう、何か御用ですか』

『なにネ、先生と貴郎の衣服を持つて來ましたの、皆さんの所から纏らなかつたものですから、大層遲くなりましてネ、——此頃は朝晩めつきり冷つきますから 定めて御困りなすつたでせうネ』

『ハ、、、、僕も先生も未だ夏です、では其の風呂敷の中に我家の秋が包まれて居るんですか、どうも有難う』

『大和さん、男は禮など言ふもんぢやありません、皆さんが喜んで張つたり縫つたり、仕事して下さるんですから』

『しかし老女さん、そりや先生の爲めにでせう、僕は御禮申さにやなりませんよ』

『まア、貴郎は今時の書生さんの様でもないのネ』

目を擧げて見れば、遠く連れる高輪白金の高臺には樹々の梢既にヤヽ黄を帶びて朝日に匂ひ、近く打ち續く後圃の松林には未だ蟲の聲々殘りて宛ら夜の宿とも謂ひつべし、碧空澄める所には白雲高く飛んで何處に行くを知らず、金風そよと渡る庭の面には、葉末の露もろくも散りて空しく地に玉碎す、秋のあはれは雁鳴きわたる月前の半夜ばかりかは、高朗の氣骨に徹り清幽の情肉に浸む朝の趣こそ比ぶるに物なけれ、今しも仰いで彼の天成の大畫に雙眸を放ち、俯して此の自然の妙詩に隻耳を傾け、樹の間をくゞり芝生を辿り、手を振り體を練りつゝ篠田は靜かに歩みを運び來る、市に見る職工の筒袖、古書に見る豫言者の頬髯、

『先生、渡邊の老女さんがお待ちなされてです』

と呼ばれる大和の麓に、彼は沈思の面を揚げて、『其れは誠に申譯がありませんでした』

『イヽエ、先生、どう致しまして』と老女は縁の障子を開けぬ、

彼は書齋へ老女を招致せり、新古の書卷僅に膝を容るゝばかりに堆積散亂して、只だ壁間モーゼ火中に神と語るの一畫を掛くるあるのみ、

『毎度皆樣の御厄介に成りまするので、實に恐縮に存じます』

老女は手もて之を遮り、『なんの先生、貴郎に奥さんのお出來なさる迄は婦人會の方で及ばずながら御世話しようツて、皆さんの御氣込ですから――』

『しかし老女さん、最も良き妻を持つ世界の最も幸福なる人よりも、私の方が更に幸福の樣に思ひますよ』彼は茶を喫しゝ斯く言ひて輕く笑ふ、

『飛んだこと、何んなダランの無い奥樣でも、まさか十月になる迄、旦那樣に單衣をお着せ申しては置きませんからネ』とハッヽヽヽと老女は笑ひ興ず、

『クスヽヽ』と隣室に漏るゝ六和の忍び笑に、老女は驚いて急に口を掩ひ、『まア、先生、御免遊ばせ、年を取ると無遠慮になりまして、御無禮ばかりして自分ながら愛想が盡きましてネ』

言ひながら、ツイと少しく膝乘り出し、聲さへ俄に打ちひそめて、『ほんとにまア、先生、大變なことに成つて仕舞ひましたのねエ、――昨夜もネ、井上の奥さんが先生の御羽織が出來たからッて持つていらつしやいまして、其の御話なんです、私はネ、そんなことがあるもんですか、今先生をそんなことが出來るもんですかツて申しました所が、井上の奥樣がさうぢやない、是れ是れの話でツて、私なぞには解らぬ何か六ケ敷事仰しやいましてネ、其れでモウ内相談が定まつて、來月三日の教會の二十五年の御祝が濟むと、表沙汰にするんだと仰しやるぢやありませんか、井上の奥さんは彼ア云ふ氣象の方なもんですから大變に御腹立でしてネ、カウ云ふ時に婦人會が少し威張らねばならぬのだけれど、會長が何しても山木さんで、副會長が牧師の奥さんと來て居るんだから、手の出し樣が無いツて、涙を流して怒つて在らつしやるのです、私も驚いてしまひましてネ、明日は早朝に參つて先生の御量見を伺ひませうツてお別れしたのです、先生、まア何うしたら可いので御座いませう』

懸河滔々たる老女の能辯を鬚を捻しつゝ聽き居たる篠田、『老女さん、其れは何事ですか、私には毫もわかりませぬが、』

『先生、何です、御わかりになりませぬ――まア驚いたこと――先生、貴郎を教會から逐ひ出す相談のあるのを未だ御存じないのですか』

『あア、其れですか』と篠田の輕く首肯くを、老女は默つて穴の開くばかりに見つめたり、

三の二

渡邊の老女は不平を頬に膨らして、『あア其れですかどころぢや有りませんよ、先生、貴郎が今嚴乎して下さらねば、永阪教會も二十五年の御祝で死んで仕舞ひます、御祝だやら御弔だやら譯が解らなくなるぢやありませんか、貴郎ネ、井上の奥樣の御話では青年會の方々も大層な意氣込で、若し篠田さんを逐ひ出すなら、自分等も一所に退會するツてネ、井上樣の與重さん抔先達て相談最中なさうですよ、先生、何うして下さる御思召ですか』

篠田は僅に口を開きぬ、『私の故に數々教會に御迷惑ばかり掛けて、實に恥入る次第であります、私を除名すると云ふ動機――其の因縁は知りませぬが、又たそれを根掘りするにも及び

ませぬが、しかし其表面の理由が、私の信仰が間違つて居るから教會に置くことならぬと云ふのならば、老女さん、私は殘念ながら苦情を申出でる力が無いのです、教會の言ふ所と私の信仰とは慥に違つて居るのですから——けれど、老女さん、教會の言ふ所と私の信仰と、何らが神樣の御思召に近いかと云ふ段になると、其を裁判するのは只だ神樣ばかりです、只だ御互に氣を付けたいのは、斯樣な紛擾の時に眞實、神の子らしく、基督の信者らしく、謙遜に柔和に、主の榮光を顯はすことです——私の名が永阪教會の名簿に在ると無いとは、神の臺前に出ることに何の關係もないことです、教會の皆樣を思ふ私の愛情は、毫も變ることが出來ないです、老女さんは何時迄も老女さんです、」

老女は何時しか頭を垂れて膝には熱き涙の雨の如く降りぬ、

良久くして老女は面押し拭ひつ、涙に赤らめる眸を上げて篠田を視上げ視下せり、「どうしたら、貴郞のやうな柔和いお心を持つことが出來ませう——其れに就けても理も非もなく山木さんの言ふなり放題になさる、牧師さんや執事さん方の御心が、餘り情ないと思ひますよ——私見たいな無學文盲には六ケ敷事は少しも解りませぬけれど、あの山木さんなど、何年にも教會へ御出席なされたことのあるぢや無し・それに貴郞、酒はめしあがる、藝妓買はなさる、昨年あたりは慥か妾を圍つてあると云ふ噂さへ高かつた程です、只だ當時黄金がおありなさると云ふばかりで、彼樣汚れた男に、此の名高い教會を自由にされるとは何と云ふ怨めしいことでせう」

老女は又も面を掩うてサメ〴〵と泣きぬ、

老女は鼻打ちかみつ、「けれども先生、山木さんも昔日から彼樣では無かつたので御座いますよ、全く今の奧樣が惡いのです、——私は毎度日曜日に、あの洋琴の前へ御坐りなさる梅子さんを見ますと、お亡りなさつた前の奧樣を思ひ出しますよ、あれはゼームスさんて宣教師さんの寄進なされた洋琴で、梅子さんの阿母さんの雪子さんとおつしやつた方が、それをお彈きなすつたのです、丁度今の梅子さんと同じ御年頃で、日曜日にはキッと御夫婦で教會へ行らつしやいましてネ、山木さんも熱心にお働きなすつたものですよ、——拍子の惡いことには梅子さんの三歳の時に奧樣がお亡りになる、それから今の奧樣をお貰ひになつたのですが、貴郞、梅子さんも今の奧樣には隨分酷い目にお逢ひなさいましたよ、ほんたうに前の奧樣はナカ〳〵雄い、好い方で御座いました、御容姿もスッキリとした美しいお方で——梅子さんが御容姿と云ひ、御氣質と云ひ、阿母さんソックリで在らつしやいますの、阿母さんの方が氣持ち身丈が低くて在らしつたやうに思ひますがネ——」

老女の心は、端なくも二十年の昔日に返りて、ひたすら懷舊の春にあこがれつゝ、

「先生、其頃まで山木樣は大藏省に御勤めで御座いましてネ、何でも餘程幅が利いて在らしつたらしかつたのです、スルと、あれはかうッと——左樣々々十四年の暮で御座いましたよ。政府に何か騷が御座いましてネ、今の大隈樣だの、島田樣だのッてエライ方々が、皆ンな揃つて御退りになりましてネ、其時山木樣も一所に役を御免になつたのです、今まで何百ッて云ふ貴い月給を頂いて在らつしやいましたのが、急に一文なしにおなりなすつたのですから、ほんとに御氣の毒の樣で御座いましたがネ、奧樣が、貴郞、嚴乎して、丈夫に意見を貫させる爲めには、假令乞食になるとも厭はぬと云ふ御覺悟でせう、面は花の樣に御美しう御座いましたが、心の雄々しく在らしつたことは兎ても男だつて及びませんでしたよ、山木さんの辭職なされた

のも、つまり奥様の御勸だと其頃一般の評判でしたの、――其れから奥様は學校の教師をなさる、山木様は新聞を御書きになつたり、演説をして御歩きになつたりして、奥様はコンな幸福は無いッて喜んで在らつしやいましたが、感冒の一寸こじれたのが基で敢ない御最期でせう――私は尋常ならぬ御恩に預つたもんですから、おしまひ迄御介抱申し上げましたがネ、先生、其の御臨終の御立派でしたこと、四十何度とか云ふ高熱で、普通の人ならば夢中になつて仕舞ふ所ですよ、――山木様の御手を御握りになりましてネ、何卒日本の政道の上に基督の御榮光を顯はして下さる様、必ず神様への節操をお忘れなさるなと仰しやいましたが、山木様が決して忘れないから安心せよと御挨拶なさいますと、ネ、奥様は世に嬉しげに莞爾御笑ひ遊ばしてネ、先生、私は今も彼の時の御顏が目にアリ〳〵と見えるのです、其れから今度は梅子をと仰しやいますからネ、未だ頑是ない三歳の春の御孃様を、私がお抱き申して枕頭へ參りますとネ、細ウいお手に、楓の様な可愛いお手をお取りなすつて、梅ちやんと一聲遊ばしましたがネ、お孃様が平生の様な未だ片言交りに、母ちやんと御返事なさいますとネ、――ヂッと凝視めて在らしつた奥様のお目から玉の様な涙が泉の様に――

「まア、思へば、先生、」と老女は涙押し拭ひつ、「未だ昨日の様で御座いますが モウ二むかし、其の時此の姿のお抱き申した赤兒様が、今の立派な梅子さんです、御容姿なら御學問なら、御氣象なら何れ阿母さんに立ち勝つて、彼様して世間の花とも、教會の光とも敬はれて在らつしやるに 阿父の御様子ッたら、まア何事で御座います、臨終の奥様に御誓ひなされた神様への節操が、何所に殘つて居りますか」

老女は急に氣を變へて、打ちほゝ笑み、「まア、先生、朝ッぱらから此様愚癡を申して濟みませぬが、考へて見ますと、成程女と云ふものは惡魔かも知れませぬのねエ 山木様も奥様のお亡りなされた當分は、我家の燈が消えたと云つて愁歎して在らしたのですよ、記念の梅子を男の手で立派に養育して、雪子の恩に酬いるなんて吹聽して在らつしやいましたがネ、其れが貴郎、あの投機師の大洞利八と知り合におなりなすつたのが抑で、大洞も山木様の才氣に目を着け、演説や新聞で飯の食へるものぢや無い、是れからの世の中は金だからツてんでネ、御馳走はする、贅澤はして見せる、其れは貴郎 鰥と云ふ所を見込んでネ、丁度俳優とドウとかで、離縁されてた大洞の妹を山木さんにくつ付けたんですよ、ほんたうにまア、ヒドいぢやありませんか、其れが、貴郎、今の奥様のです、だから二言目には此の山木の財産は己の物だつて威張るので、あんな高慢な山木様も、家内では頭が上らないさうです、――先生 外國人は矢ッ張り目が肥えて居りますのネ、ゼームスつて彼の洋琴を寄附した宣教師さんがネ、米國へ歸る時、前の奥様に哭々も仰しやつたさうですよ、山木様は餘り悧巧だから、貴女が常に氣を付けて過失の無い様にせねばならない、基督の御弟子の中で一番悧巧であつたものが、主を三十兩で賣り渡したイスカリオテのユダなのだからッてネ、ほんとに先生、さうで御座いますよ、――何の蚊のと角ばつたことは申しますがネ、もう女の言ふなり次第なものです、考へて見ると世の中に、男ほど意氣地の無いものは御座いませんのねエ」

是れは飛んだことをと、言ひ放つて老女は、竊と見上げぬ、

『實に御辭の通りです』と篠田は首肯き、『けれど老女さん、眞實我を支配する婦人の在ることは、男兒に取つて無上の歡樂では無いでせ

うか』

老女は只だ怪訝顔、

四

山木剛造は今しも晩餐を終りしならん、大きなる熊の毛皮にドッかと胡坐かきて、仰げる廣き額には微醺の色を帶びて、カン〳〵と輝ける洋燈の光に照れり、

茶をすゝむる妻の小皺著き顏をテカ〳〵と磨きて、忌しき迄艷裝せる姿をジロリ〳〵とながめつゝ、『ぢやア、お加女、つまり何するツて云ふんだ、梅の望は』

妻のお加女はチョイと拔き襟して『どうするにも、かうするにも、我夫、てんで譯が解つたもンぢやありませんやネ、女がなまなか學問なんかすると彼樣になるものかと愛想が盡きますよ、何卒芳子にはモウ學問など眞平御免ですよ、チョッ、親を馬鹿にして』

『何だか少しも解らないなア』

『其りやお解りになりますまいよ、どうせ彼にも知らない繼母の言ふことなどを、お聽き遊ばす御孃樣ぢや無いんですから、――我夫から直にお指圖なさるが可う御座んすよ、其の爲めの男親でさアね』

剛造の太き眉根ピクリ動きしが、溫茶と共に癇癪の蟲グッと呑み込みつ、『ぢやア、松島を亭主にすることが忌だと云ふのか』

『忌なら忌で其れも可う御座んすサ、只だ其の言ひッ振が癪に障りますさアネ――ヘン、軍人は私は嫌です、軍人を愛するつてことは私の心が許しませぬから――チャンチャラ可笑しくて』言ひつゝ剛造を横目に睨みつ、『是れと云ふも皆な我夫が、實母の無い兒〳〵ツて甘やかして、ヤレ松島さんは少し年を取り過ぎてるの、後妻では可哀さうだのツて、二の足踏むからでさアネ、其れ程死んだ奧樣に未練が殘つて居るんですか』

『何を言ふんだ』と剛造は小聲に受け流して横になれり、

お加女はポン〳〵と煙管叩きながらの獨り言、『吉野さんの方はどうかと聞けば、ヤレ私が貧乏人の女であつても貰ひたいと仰しやるのでせうかの、假令急に惡病が起つて恥かしい樣な不具になつても、御見棄てなさらぬのでせうかの、フン、言ひたい熱を吹いて、何處に今時、損徳も考へずに女房など貰ふ馬鹿があるものか、――不具になつても御厭ひなさらぬか、へ、自分がドンなに別嬪だと思つて居るんだ、彼方からも此方からも引手數多のは何の爲めだ、容姿や學問やソンな詰まらぬものの爲めと思ふのか、皆な此の財產の御蔭だあネ、面の艷よりも今は黃金の光ですよ、憚りながら此の財產は何某樣の御力だと思ふんだ、――其の恩も思はんで、身分の程も知らないで、少しばかりの容姿を鼻に掛けて、今に段々取る歲も知らないで、來年はモウ二十四になるぢやないか、構ひ手の無くなつた頃に、是れが山木お梅と申す卒塔婆小町の成れの果で御座いツて、山の手の夜店へでも出るが可い、どうせ耶蘇などだもの、何を仕散かして居るんだか、解つたもンぢやない』

ジロリ、横はりて目を塞ぎ居る剛造を一瞥して、『我夫、假睡などキメ込んでる時ぢやありませんよ、一昨日もネ、私、兄の所で松島さんにお目に掛かつてチャンと御約束して來たんです、念の爲めと想つたから、我儘育で、其れに耶蘇だからツて申した所が、松島さんの仰しやるには、イヤ外國の軍人と交際するには、耶蘇の嬶の方が却て便利なので、元々梅子さんの容姿が望だから、耶蘇でも天理教でも何でも仔細ないツて、ほんたうに彼樣竹を割つた樣なカラリとした方ありませんよ、それに兄の言ひま

すには、今此の露西亞の戰爭と云ふ大金儲を目の前に控へてる時に、當時海軍で飛ぶ鳥落す松島を立腹させちやア大變だから、無理にでも押し付けて仕舞ふ樣にツて精々傳言つて來たんです、我夫、私の顏を潰しても可いお積ですか」

剛造の假睡して返答なきに、お加女は愈々打ち腹立ち、『今の身分になれたのは、誰の爲めだと云ふんだネ、──それを梅子のことと云へば何んでも擁護して、亡妻の乳母迄引き取つて、梅子に惡智慧ばかり付けさせて──其程亡妻が可愛けりや、骨でも掘つて來て甞つてるが可い』

『何だ、大きな聲して──幾歳になると思ふ」と云ひさま跳ね起きたる剛造の勢に、

『ハイ、今年取つて五十三歲、旦那樣に三ツ上の婆アで御座います、決して新橋あたりへ行らつしやるなと嫉妬などは燒きませんから』

『ナニ、ありや、已むを得ん交際サ』

『左樣ですつてネ、雛妓を落籍して、月々五十圓の仕送りする交際も、近頃外國で發明されたさうですから──我夫、明日の教會の親睦會は御免を蒙ります、天長節は歌舞伎座に行くものと、往年から私の憲法なんですから』

奥殿の風雲轉た急なる時、襖しとやかに外より開かれて、「島田髷の小間使慇懃に手をつかへ、「旦那樣、海軍の官房から電話で御座います る』

五の一

十一月三日、天は青々と澄みわたりて、地には菊花の芳香あり、此處都會の紅塵を逃れたる角筈村の、山木剛造の別莊の門には國旗翩飜たる下に『永阪教會二十五年記念園遊會』と、墨痕鮮かに大書せられぬ、

數寄を凝らせる奥座敷の緣に、今しも六七名の婦人に圍まれて女王の如く尊敬せらるゝ老女あり、何處にてか一度拜顏の榮を得たりしやうなりと、首を傾けて考一考すれば、ア、我ながら忘れてけり、昨夜芝公園は山木紳商の奥室に於て、機敏豪放を以て其名を知られたる良人をば、小僧同樣に叱咤操縱せるお加女夫人にてぞありける、昨夜の趣にては、年に一度の天長節は歌舞伎座に蓮歩を移し給ふこと何年ともなき不文憲法と拜聽致せしに、如何なる協商の一夜の中に成立したればか、耶蘇の會合などへは臨席し給ひけん、

今日を晴れと着飾り塗り飾りたる長谷川牧師の夫人は、一きは嬌笑を裝ひて、「奥樣が今日御出席下さいましたことは教會に取つて、何と云ふ光榮で御座いませう、御多用の御體で在らつしやいますから、兎ても六ケ敷いことと一同斷念めて居たので御座いますよ、能くまア、奥樣御都合がおつきなさいましたことネ──山木家は永阪教會に取つては根でもあり、花でもありなので御座いまする上に、此の稀な記念會を御家の御別莊で開くことが出來、奥樣の御出席をも得たと云ふ、此樣な嬉しいことは覺えませぬので、心から神樣に感謝致すので御座いますよ、ホヽヽヽ」

お加女夫人は例の拔き襟一番、「教會へもネ、平生參りたいツて言ふんで御座いますよ、けれども御存じ下さいます通り家の內外、忙しいもンですから、思ふばかりで一寸も出られないので御座いますから、孃等にもネ、阿母は兎ても參つて居られないから、お前方は阿母の代りまで勤めねばなりませんと申すので御座いますよ、ほんとに皆樣の御體が御羨しう御座いますことネ、ですから、貴女、婦人會の方などもネ、會長なんて大した名前を頂戴して居りましても何の御役にも立ちませず、一切皆樣に願つて居る樣な始末でしてネ、ほんとにお顏向け

も出來ないので御座いますよ、オホヽヽ・』
『アラ、奥樣勿體ないこと、奥樣の信仰の堅くて在らつしやいますことは、良人が毎々御噂申上げるので御座いましてネ、お前などはホンとに意氣地が無くて可けないッて、貴女、其の爲に御小言を頂戴致しましてネ、家庭の能く治まつて、良人に不平を抱かせず、子女を立派に教育するのが主婦たるものの名譽だから、兎ても及びも着かぬことではあるが、チト山木の奥樣を見倣ふ樣にッて言はれるんですよ、御一家皆な信者で在らつしやいまして、慈善事業と言へば御關係なさらぬはなく、ほんたうにクリスチャンの理想の家庭と言へば山木樣のやうなんでせう、――ねエ皆さん』
一同シナを作つて、『ほんたうに長谷川の奥樣の仰しやいます通りで御座いますよ、オホヽヽホヽヽヽ』
驚いて、更に視線を轉ずれば、太き松の根方に設けたる葭簀の蔭に、しきりに此方を見ては私語しつゝある五六の婦人を發見せり、中に一人年老れるは則ち先きに篠田長二の陋屋にて識る人となれる渡邊の老女なり、『井上の奥樣、一寸御覽なさい、牧師さんの奥樣が、きつと又た例の評判を並べ立ててるんですよ、それに輕野の奥樣、薄井の嬢樣、皆樣お揃ひで』
井上の奥樣と呼ばれたる四十許りの婦人、少しケンある眼に打ち見遣りつ、『申しては失禮ですけれど、あれが牧師の細君などとに信者全體の汚瀆です、なにも山木樣の別莊など借りなくとも、親睦會は出來るんです、實に氣色に障りますけれどネ、教會の御都合だと思ふから忍んで參つたのです――夫れはサウと、老女さん、篠田樣は今日御見えになるでせうか、ほんとに、御氣の毒で、私ネ、篠田樣のこと思ふと腹が立つ涙が出る、夜も平穩と眠られないんです、記念式にも昨夜の演説會にも彼の通り行らしつて、平生の通り聽いてらツしやるでせう、自分が逐ひ出されると内定つて、印刷までしたプログラムから辯士の名まで削られたんでせう、普通の人で誰がソンな所へ行くものですか、先頃も與重が青年會のことで篠田樣に何か叱られて歸つて來ましてネ、僕は篠田先生の爲めなら死んでも構はんて言ふんです、――教會も最早駄目です、神樣の代りに、黃金を拜むんですから』

五の二

何萬坪テフ庭園の彼方此方に設けたる屋臺店を、食ひ荒して廻る學生の一群、
『オイ、大橋君、梅子さんが見えぬやうぢやないか』
『又た井上の梅子さん騷ぎか、先刻一寸見えたがナ、僕は何だか氣の毒の樣に感じたから、挨拶もせずに過ぎたのさ、彼女でも成るべく人の居ない方へと、避けてる樣子であつたからナ、山木見たいな爺に梅子さんのあると云ふは、君、正に一個の奇跡だよ』
『ほんたうに左樣だネ、惡魔と天女、まア好絕妙絕の美術的作品とはアレだらうか、僕は昨夜も演説會で、梅子さんの爲めに、幾度同情の涙を拭いたか知れないのだ、彼の美しき歌も震を帶んで、洋琴は全く哀調を奏でて居たぢやないか』――嚴肅に坐つて謹聽してる篠田先生の方を、チョイ〳〵と看て居なすつたがネ、其胸中には何等の感想が往來してたであらうか、――先生は是れ罪なき犧牲の小羊、之を屠る猛惡の手は則ち自分の父』と語り來れる井上は、俄に聲を荒らげて、『見給へ、剛一は愈々奸黨に定まつたよ、僕等でさへ先生の誠心に動かされて退會の決議を飜し、今日も滿腔の不平を抑へて來た程ぢやないか、剛一何物ぞ、苟も己が別莊で催さるゝ親睦會であつて見れば、一番に奔走斡旋するのが當然だ、然るに顏さへ出さぬ

とは失敬極まるツ―

大橋は首打ち振り『否な、彼の今日來ないと云ふのが、彼の我黨たる證據だよ、彼は爺の非義非道を慚愧に堪へないのだ、彼は今や小松内府の窮境に在るのだ、今頃は、君、自家の書齋で涙に暮れて祈つてるヨ』

『左樣か知ら』と井上は首を傾けしが、俄にノゾき込んで顏打ちひそめ、『君、僕は昨夜からの疑問だがネ、梅子さんの胸底には若し、戀が潛んでるのぢや無からうか』

大橋は莞爾と打ち笑み、『勿論！　彼女の心が戀愛の聖火に燃ゆること、抑も一朝一夕の故に非ずサ、遂に石心木腸なる井上與重の如きをして、物や思ふと問はしむる迄に至つたのだ、僕の如きは疾の昔から彼女をして義人を得、彼をして才色兼備の良婦を得せしめ給はんことを祈つて居るんだ』

『成程、さうか、何卒早く其れを見たいものだネ』

『所が、君、一通のことで無いので、作者頗る苦心の體サ――さア行かう、今度は彼の菊の鮨屋だ、諸君決して金權黨の店に入るべからずだヨ』

既にして群集の眸子、均しく訝しげに小門の方に向へり、『オヤ、アラ、マア』

篠田長二の筒袖姿忽然として其處に現はれしなり、

『先生來』と學生の一群は篠田を擁して躍り行きぬ、

お加女夫人は遙に之を見て顏色忽ち一變せり、『まア、何と云ふヅウ／＼しい奴でせう、脅喝新聞、破廉恥漢』

長谷川夫人も顏打ちひそめつ、『ほんとに驚いて仕舞ふぢや御座いませんか』

庭樹の茂に隱れ行く篠田の後影ながめ遣りたる渡邊老女の瞼には、ホロリ一滴の露ぞコボれぬ、『きつと、お暇乞の御積なんでせう』

篠田はやがて學生の群と別れて、獨り沈思の歩を築山の彼方、紅葉麗しき所に運びぬ、會衆の笑ひ興ずる聲々も、いと遠く隔りて、梢に來鳴く雀の歌も閑かに、目を擧ぐれば雪の不二峰、近く松林の上に其頂を見せて、掬はゞ手にも取り得んばかりなり、心の塵吹き起す風もあらぬ靜邃閑寂の天地に、又た何事の憂きか殘らん、時にふさはしき古人の詩歌など思ひ浮ぶるまに／＼微吟しつ、岸の紅葉、空の白雲、映して織れる錦の水の池に沿うて、やゝ東屋の近づきぬ、見れば誰やらん、我より先きに人の在り、聞ゆる足音に此方を振り向きつ、思ひも掛けず、ソは山木の令孃梅子なり、

五の三

赧らむ面に嫣然として、梅子は迎へぬ、

『梅子さん、貴孃が此邊に在らつしやらうとは思ひ寄らぬことでした』と篠田は池畔の石に腰打ちおろし、『どうです、天は碧の幕を張り廻し、地は紅の筵を敷き連ね、鳥は歌ひ、雲は舞ふ、美妙なる自然の傑作を御覽なさい』

『けれど、篠田さん、何故人間ばかり此の樣に、罪の心に惱むのでせう』

『左樣、何人か罪の惱を抱かぬ心を有つでせうか』と篠田は飛び行く小鳥の影を見送りつゝ、『けれど、惱はやがて慰に進む勝利の標幟ではないでせうか』

『ですけれど、私はドウやら惱に惱んで到底、救の門の開かれる望がない樣に感じますの』梅子は只だ風なくて散る紅の一葉に、層々擾れ行く波紋をながめて、

『ハア、貴孃は遽に非常なる厭世家にお化りでしたネ』

『私は篠田さん、此頃ツク／＼人の世が厭になりました』

「奇態ですネ――此春の文學會で貴孃が朗讀なされた遁世者諷刺の新體詩を、私は今も何ほ面白く記憶して居りますが――』

『今年の春』と梅子は微かに吐息洩らして、『淺墓な彼の頭を私はほんたうに恥かしく思ひます、世を棄て人を逃れた古人の心に、私は、篠田さん、今始めて眞實同情を寄せることが出來るやうになりました』

篠田は仰げる眼を轉じて、斜に彼女を顧みたり、「私は意外なる變化を見るものです――梅子さん、貴孃の信仰は今實に恐るべき危機に臨んで居なさいます――何か非常なる苦悶の針が今貴孃の精神を刺してるのではありませぬか』

梅子は答へず、

「貴孃の心は、今正に生死二途の分岐點に立つて居なさる樣です、如何です、甚だ失禮でありますが、御差支なくば貴孃の苦痛の一端なりとも、御洩らし下さい、年齡上の經驗のみは、私の方が貴孃よりも兄ですから、何か智慧の無いとも限りませぬ」

俯ける梅子の頰には二條三條、鬢のほつれの只だ微動するを見る、

「篠田さん、貴郞の高い御心には』と、梅子は良久して僅に面を上げぬ、「私共一家が、何程賤しきものと御見えになるで御座いませう、――私は神樣にお祈するさへ、愧かしさに堪へないので御座いますよ――』

『それは何故です――』

梅子は又た頭を垂れぬ、長き睫毛の露の白玉貫ける見ゆ、

『梅子さん、私は未だ貴孃の苦悶の原因を知ることが出來ませぬが、何れにも致せ、貴孃の精神が一種の暗雲に蔽はれて居ると云ふことは、唯に貴孃御一身の不幸ばかりではなく、教會の爲め特に青年等の爲め、幾何ばかりの悲哀でありませうか』

『否、私の苦悶が何で教會の損害になりませう、篠田さん、私の苦悶の原因と申すは、今日教會の上に、別けても青年の人々の上に降りかかつた大きな不幸悲哀で御座います』

『其れは何ですか』

「篠田さん――貴郞の除名問題で』

「私は今更に自分の無智を恥かしく思ひます』

梅子は又た語を繼ぎぬ、「私は今日迄、教會は慥に世の光であると信じて居りました、今始めて既に惡魔の巢であつたことを見ることが出來ました、――而も其惡魔が私の父です――今日の會合は二十五年の祝典では御座いませぬ、光明を亡す惡魔の祝典です、――我父の打ち壞す神殿の滅亡を跪いて見ねばならぬとは、何と云ふ恐ろしき刑罰でせうか』

『其れは貴孃の誤解です』と篠田は首を振りぬ、『是れは新に驚くべきことでは無いのです、失禮ながら貴孃の父上は、神の教會を攪亂する力を有つて居なさらぬ、梅子さん、私が貴孃の父上に向つて攻擊の矢を放つたことは昨日今日のことではありませぬ、貴孃も常に其を御讀み下すつたでせう、又た御聞き下すつたでせう、けれ共私は今日に至る迄、貴孃との友誼の上に何の障礙をも見なかつたと思ふ、是れは規定の祈禱會や晩餐會に勝りて、天父の嘉納ましまオ所では無いでせうか、是れは神の殿がエルサレムでも無く、羅馬でもなく、永阪でもなく、青山でも本鄕でも無いと云ふ我々の實驗ではありませぬか、――社會の富が日々に殖えて人の飢うるものが愈々增す、富めるものと貧しきものと諸共に、肉體の爲めに靈魂を失ふ、是れが神の國への路でせうか、ケレ共何處の教會に此の暗黑界の燈火が點いて居りますか、今若し基督が出で來り給ふならば、そして富める者の天國に入るは駱駝の針の穴を出づるよりも難しと說き給ふならば、彼を十字架に懸けるものは果

して誰でせう、××××××××皆な盃を擧げて笑つて居ませう、けれ共××××××××××の傲慢と罪惡とに媚びて、縷の如き生命を維いでる教會は戰慄します、決して之を容赦致しませぬ』

篠田は正面に聳ゆる富岳の雪を指しつ、

『日本國民は此雪を誇ります、けれ共私は未だ我國民によりて我神意を發揮されたる何の產物をも見ない、彼等は兵力を誇ります、是れは神の前に恥づべきことです、萬國は互に競うて滅亡に急ぎつゝあるのです、私共は彼等を呼び留めますまい、寧ろ××××××××××××××××』

彼は又た梅子を顧みつ、『貴孃は特に青年の爲めに御配慮です、乍併今日の青年は、牧者の杖を求むる羊と言ふよりは、母雞の翼を賴む雛であります、――枕すべき所もなき迫害の荒野に立ちて基督の得給ひし慰は、單り天父の恩愛のみでしたか、否な、彼に扈從せる婦人の聖き同情は、彼が必ず無量の獎勵を得給ひたる地上の惠與であつたと思ふ、梅子さん、秋の霜、枯野の風の如き劇烈なる男兒の荒涼か、春霞の如き婦人の聖愛に包まれて始めて和樂を得、勇氣を得、進路を過たざることを得る祕密をば、貴孃は必ず御了解なさるでせう』

恍然と仰ぎたる梅子の面は日に輝く紅葉に匂へり、

『御孃樣！　どんなにお探し申したか知れませんよ』と忽如として現はれたるは乳母の老女なり、『奥樣が梅子は何處へ行つたかつて、御癇癪で御座います』

『アヽ、左樣でせう』と言ひつゝ、篠田はヤヲら石を離れたり、

去れど梅子は起たんともせず、

六

十一月中旬の夜は既に更け行きぬれど、梅子は未だ枕にも就かざるなり、乳母なる老婆は傍近く座を占めて、我が頭にも似たらん火鉢の白灰かきならしつゝ、梅子を怨みつかき口說きつ、

『でも、お孃樣、今度と云ふ今度は、從來のやうに只だ厭だばかりでは濟みませんよ、相手が名に負ふ松島樣で、大洞樣の御手を經ての御緣談で御座いますから、奥樣は大洞と山木の兩家の浮沈に關はることだから、無理にも納得させねばならぬと、彼の通りの御意氣込み、其れに旦那樣も、梅も餘り選り嫌ひして居る中に、年を取り過ぎる樣なことがあつてはと云ふ御心配で御座いましてね、此頃も奥樣の御不在の節、私を御部屋へ御招になりまして、雪の記念の梅だから、何卒天晴な婿を取らせたいと思ふんで、松島は少し年を取過ぎて且つは後妻と云ふのだから、梅にはチと氣の毒ではあるが、何せよ、今海軍部内では第一の幅利き、愈々露西亞との戰爭でもあれば少將か中將にもならうと云ふ勢、梅の良人として決して不足が有るとは思はれぬ、其上大洞にせよ自分にせよ、一通ならぬ關係があるので、懇望されて見ると何分にも嫌と云ふことが言はれないハメのだから、此處を能く吞み込んで承知して欲しいのだと、此婆に迄頭を下げぬばかりの御依賴なんで御座います――此婆にしましてが、亡奥樣にお乳を差上げ、又た貴孃をも襁褓の中からお育て申し、此上貴孃が立派な奥樣におなり遊ばした御姿を拜見さへすれば、此世に何の思ひ殘すことも御座いません、寧そ御決心なされては如何で御座ります』

梅子は机に片肘もたせしまゝ、繙ける書上に、空しく視線を落せるのみ、

『それとも、お孃樣、外に貴孃の思ひ込みなされた御方が御ありなさるので御座りますか、

貴嬢も十九や二十歳とは違ひ、亡奥様は貴嬢の御年には、モウ、貴嬢を膝に抱いて在らしつたので御座いますもの、何の御遠慮が御座いませう、是ればかりは御自分の御氣に協うたのでなければ末始終の見込が立たぬので御座いますから、――奥様は何と仰しやらうとも、旦那様は彼の様に貴嬢のことを深く御心配遊ばして在らつしやるので御座いますから、キッと婆から良い様に御取りなし致します、御嬢様、ツイからと婆にお洩らし下さりませぬか』

梅子は依然言なし、

『御嬢様、其れは餘りでは御座いませぬか、婆や〳〵といたはつて下さる平生の貴嬢の様にも無い――今日も奥様が例の御小言で、貴嬢の御納得なさらぬのは私が御側で悪智慧でも御着け申すかの御口振、――こんな口惜いことは御座いません、此儘死にましては草葉の蔭の奥様に御合せ申す顔が無いので御座います』

老婆は横向いて鼻打ちかみつ、

『婆や、ほんたうに申譯がないのネ、お前が其様に心配してお呉れだから、私の心を打ち明けますがネ、私は決して人選びをして居るのぢやないのです、――私は疾うから生涯、結婚しないと覺悟して居るのですからネ』

『いゝえ、お嬢様、其様なこと仰しやつても、此婆は聴きませぬ、御容姿なら、御才覺なら何一つ不足なき貴嬢が、何の御不満で左様なこと仰しやいます、では一生、剛一様の御厄介になり遊ばして、異腹の小姑で此世をお送り遊ばす御量見で在らつしやいまするか』

『婆や、さうぢやありませぬ、私は現在の様に何も働かずに遊んで居るのを何より心苦く思ふのでネ、――どうぞ貧乏町に住まつて、あの人達と同じ様に暮らして、生涯其の御友達になりたいと祈つて居るのです』

『ヘエ――』と老婆は暫し梅子の顔打ちまもりつ、『それは、お嬢様、御本性で仰しやるので御座りますか』

『何で虚欺を言ひませう』と、梅子は首肯き、『婆やの親切にホダされて、ツイ、心の祕密を明かしたのです――で、婆や、なんだか生意氣らしいこと言ふ様だがネ、誰でも人は胸に燃え立つ火の塊を藏めて居るものです、火の口を明けて其を外へ噴き出さぬ程心苦しいことはありませぬ、世の中の多くは其れを一人の男に獻げて満足するのです、けれど、若し其がならぬ場合には、最も悩んでる多くの兄弟姉妹の上に分配るのが一番道に協つた仕方かと思ふのでネ』

『ぢや、お嬢様も其れを一人の男にお上げなされば可いぢや御座いませんか』

『さア――』と、梅子は行きなやみぬ、

『どうも、お嬢様、貴嬢のお胸には何某殿か御在りなさるに相違御座りません、――御嬢様、婆やの目が違ひましたか』

梅子は差しうつむきて復た無言、

『お嬢様、貴嬢は婆やを其れ程までにお隔てなさるので御座りますか、お情ないことで御座ります、あゝ、お情ないことで御座ります』

梅子は唇かみしめて、胸を押へつ、

『婆や――私も――女性だよ――』

固く閉ぢたる瞼を溢れて、涙の玉、膝に亂れつ、――霜夜の鐘、響きぬ、

七の一

數寄屋橋門内の夜の冬、雨蕭々として立ち並ぶ電燈の光さへ、ナカ〳〵に寂寞を添ふるに過ぎず、電車は燈華燦爛として、時を定めて出で行けど、行人稀なれば、發車の鈴鳴らす車掌君の顔色さへ羞恥げに見ゆめり、

今しも闇を衝いて轟々と還り来れるは、新宿よりか兩國よりか、一見空車かと思はるゝ

中より、ヤガて降り來れる二個の黒影、合々傘に行き過ぐるを、此方の土手側に宵の程より客待ちしたりける二人の車夫、御座んなれとばかり、寒さに慄ふ聲振り立て丶、『旦那御都合まで』『乘つて遣つて下せイ』と追ひ掛け來る、二個の黒影――二重外套と吾妻コート――は石像の如くして銀座の方へ、立ち去れり、チヨッと舌打ちしつ丶元の車臺へ腰を下したる車夫、『あ丶今夜もまたあぶれかな』『さうよ、先刻打つたのが服部時計臺の十一時の樣だ』

『時に、オイ、熊の野郎め久しく顏を見せねエが、どうしたか知つてるかイ、何か甘い商賣でも見付けたかな』

『大違エよ、此夏脚氣踏み出して稼業は出來ねエ、嚊は情夫と逃走する、腰の立たねエ父が、乳の無い子を抱いて泣いてると云ふ世話場よ、そこで養育院へ送られて、當時頗る安泰だと云ふことだ』

『ふウむ、其りや、野郎可哀さうな樣だが却て幸福だ、乃公の樣にピチ〳〵してちや、養育院でも引き取つては呉れめエ――、ま、愈々となつたら監獄へでも參向する工夫をするのだ』

雨一しきり降り增しぬ、

『そりや、貴樣のやうな獨身漢は牢屋へ行くなり、人夫になつて戰爭に行くなり、勝手だがな、女房があり小兒がありすると、さう自由にもならねエのだ』

『獨身漢々々々と言つて貰ふめエよ、是でもチヤンと片時離れず着いてやがつて、お前さん苦勞でも、どうぞ東京で車を挽いててお呉れ、其れ程人夫になりたくば、私を殺して行かしやんせツて言やがるんだ、ハ、、、、、、そりやサウと、オイ、昨夜烏森の玉翁亭に車夫のことで、演説會があつたんだ、所が警部の野郎多衆巡査を連れて來やがつて、少し我連の利益になることを云ふと「中止ッ」て言やがるんだ。其れから後で、辯士の席へ押し掛けて、警視廳が車夫の停車場に炭火を許す樣に骨折つて欲しいつて頼んでると、其處へ又警部が飛込んで來やがつて「解散を命ずるツ」てんよ、すると何でも早稻田の書生さんテことだが、目を剝き出して怒つた、つかみ掛りサウな勢だつたが、少し年取つた人が手を抑へて、斯樣警部など相手にしても仕方が無い、斯うしなければ警察官も免職になるのだから、寧そ氣の毒ぢやないかツてんで、僅々收まつたが、――一體政府の奴等、吾達を何と思つて居やがるんだ』

『そんな大きな聲して巡査にでも聞かれると惡イ、が俺も二三日前に小山と通つてツク〴〵思つた、××××の、××××のツて、×××物は高くなる、食ふの食へねエので毎日苦んで居るんだが、×大臣の邸など見りや、裏の土手へ石垣を積むので、まるで御城の樣な大普請だ』

『今日も新聞で見りや、媽の正月の頸の飾に五千圓とか六千圓とか掛けるのだとよ、ヘン、自分の媽の首せエ見てりや下民の首が回らなくても可いと言ふのか、ベラ棒め』

『何れ一騷動なくば收まるめエかなア』

銀座街頭の大時計、眠む氣に響く〳〵、

『オ、もう十二時だ、長話しちまつた』

『でも未だ平民社の二階にや燈火が見えるぜ――少し小降になつた樣だ。オ、、寒い〳〵』

七の二

平民週報社の樓上を夜深けて洩る丶燈火は取り急ぐ編輯の爲めなるにや、否、燈火の見ゆるは編輯室にはあらで、編輯室に隣れる社會主義俱樂部の談話室なり、

燈下、卓上を圍んで椅子に掛れる會員の六七名、

直に目に映るは鬚髯蓬々たる筒袖の篠田長

二なり、『では、差當り御協議したいと思つたことは、是れで終結を告げました――少し時間は後れましたが、他に御相談を要する件がありますならば――』

外國通信委員渡部伊蘇夫は卓上に堆積せる書類の中より一片紙を取り上げつゝ『露西亞のペテルブスキイ君から今日、倶樂部宛の書面が來ました、順々御覽下さいませうか』

煙草燻らし居たる週報主筆行德秋香、『渡部さん、恐れ入りますが、お序にお讀み下さいませんか』『其れが可い』『どうぞ』

『ぢや、讀みませう』渡部は起てり、

主義に於て常に相親交する、未だ見ぬ日本の兄弟諸君、

余は今露西亞に於ける同志に代りて之を諸君に書き送らんとするに際し、憤慨の情と感謝の念と交々胸間に往來して、幾度か筆を投じて默想に沈みしことを、幸に諒察せよ、

今や日本政府と露西亞の政府とは戰場に向て急ぎつゝあり、露西亞國民の或者は日本を以て一個の狡狼と見做しつゝあり、思ふに日本國民の多數も亦た露西亞を以て暴熊視しつゝあらん、諸君、ア丶、我等は何等の多幸多福ぞや、獨り此間に立ちて曾て同胞の情感を傷害せらるゝことなきなり、啻に是れのみならず、彼等の嫉妬、憎惡、奪掠、殺傷の不義非道に煩悶苦惱するを觀て、愈々現在立國の基本社會組織の根底に疑ふべからざるの誤謬あることを正確に證明せり、

歐米列國は日本に黨せん、去れど獨逸は露西亞の友邦なるべしとは、殆ど世界の各所に於て信ぜらるゝ所なり、然れ共諸君よ、我等は此際分析を要するに非ずや、敢て問ふ、謂ふ所の獨逸とは則ち何ぞや、彼等は輕忽にも××××を指して獨逸と云ふものの如し、氣の毒なる哉××××よ、汝は今夏の總選擧に於て全力を擧げて戰鬪せり、曰く社會黨は祖國に取つて不俱戴天の仇敵なり、一擧にして之れを全滅せざるべからずと、多謝す、ア丶××××よ、汝の努力に依て我獨逸の社會黨は、忽然八十餘名の大多數を議會に送ることを得たりしなり、獨逸社會黨の勝利は主義に繋がるゝ全兄弟の勝利なり、××××、彼は憐むべき一個の驕慢兒なるのみ、

世の露西亞を言ふもの、亦た一に露西亞の××を見、宮室を見、貴族を見、軍隊を見て足れりとなす、何等の不公平にして又た何等の淺學ぞや。露西亞には不幸にして未だ眞正なる民意を發表すべき國民的機關なきが故に、之を公然證明すること能はずと雖も、××××××××××××××××××、既に社會の裏面に普及しつゝあるかは時々喧傳せらるゝ學生、農民、勞働者の騷擾に依りて、乞ふ其一端を觀取せられよ、

陸軍大臣クロパトキンの名は日本國民の記憶する所ならん、然れ共彼に取つて目下の最大苦心問題は滿洲占領に非ず、日本との戰爭に非ずして、露西亞の軍隊に在り、彼等が砲劍に依て外國侵略を計畫しつゝある時、看よ、××××××××××××××××××××××××××、平和主義の故を以て露國教會はトルストイを除名せり、××××××××、×××××××

××××××××××××××××××

×××××××××、×××××××××

××××××、

渡部の聲は激動せり、其面は赤く輝けり、冷茶一喫、彼は其の溫情なる眼を再び紙上に注ぐ、

露西亞には我等社會民主黨の外に社會革命黨あり、彼はバクニンの系統に屬するものなり、我等は今日に於て未だ兩者の融和を見る能はざるを悲むと雖も、其の漸次接近親和すべきは疑を要せず、蓋し今日に於て×××××狙ふが如きは、×××を了解せざるの甚しきものなればなり、我等は露西亞××に對して深厚なる一種の情感を有す、彼は尊敬に非ずして憐憫なり、××××××××××××××××××××××、×××××××、××××××××××××、

露西亞が議會を有せんこと、餘り遠き將來に非ざるべし、諸君を羨むの間も、蓋し暫時ならんか、

狂犬をして血に吼えしめよ、

去れど我等は兄弟なり、

渡部は椅子に復せり、拍手は起れり、

『けれど、普通選擧を得ざる我等と露西亞と、何の相違がある』と行德はツブやきぬ、

七の三

『最早、虛無黨の御世話になる必要は無いよ、クルップの男色を發いてやれば、忽ち頓死するし、伊太利大藏大臣の收賄を素破拔いてやれば直に自殺するしサ、爆裂彈よりも筆の方が餘ッ程力があるよ、僕は彼奴等の案外道義心の豐かなのに近來ヒドく敬服して居るのだ』揶揄一番、全顏を口にして呵々大笑するものは、虛無黨首領クロパトキン自傳の愛讀者菱川硬次郎なり、其の頓才に滿座俄に和樂の快感を催せり、彼は炭を投じて煖爐の燃え立つ色を見やりつゝ、『何の運動でも、婦人が這入つて來る樣になればメめたものだ、虛無黨でも社會黨でも其の恐ろしいのは、中心に婦人が居るからだ、日本でもポツ〳〵其の機運が見えて來た』

『婦人と云へば、篠田君』と行德は體を轉じて、『僕はネ、君が永阪教會を放逐されたと聞いて、ホッと安心したのだ』

菱川は大きなる鼻に皺よせて笑ひつ、『無神無靈魂の仲間が一人殖えたと云ふわけか』

一座復び哄笑、

行德も、微笑を洩らしつ、『君等は直ぐ左樣云ふからこまる――今迄篠田君の身邊には一抹の妖雲が懸つて居たのだ、篠田君自身は無論知らなかつたであらうが――現に何時であつたか、勞働協會の松本君の如きも、篠田君は山木剛造の總領娘と結婚するさうぢやないか、怪しからんことだと云ふから、君達は未だ其れ程までに篠田君が解らないのかと冷笑してやつたのだ』

一座の視線、篠田の面上に注がれたり、

『ハア、左樣いふことがあるんですかなア』と篠田は首を傾けぬ、

『なアに』と菱川は口を開きつ、『婦人なんてものは、極く思想が淺薄で、感情の脆弱なものだからナ、少し氣概でもあつて、貧乏して居る獨身者でも見ると、直きに同情を寄せるんだ、實にクダらんものだからナ』

『では、菱川君の如きは、差向き天下第一の色男と云ふ寸法だネ』と行德は槍を入れぬ、

『ハヽヽハヽヽヽヽ』と流石の菱川も頭を掻けり、

『然し、篠田君、山木の梅子と言ふのはナカ〳〵の閨秀ださうだネ』と談話の新緒を開きしは家庭新誌の主幹阪井俊雄なり、『文章などナカナカ立派なものだ』

『左樣、餘程意志の強い女性らしいです――何でも亡母が偉かつたと云ふことだから』と篠田は言ふ、

『では母の遺傳だナ、山木の樣な奴には不思議だと思つたのだ』

『否や、左樣ばかりも言へないでせう、現に高等學校に居る剛一と云ふ長男の如きも、數々拙

せへ參りますが、實に有望の好青年です、父親の不義に慚愧する反撥力が非常に強いで、自己の頭分として、軍事と二重の義務を負んでるのだからと懺悔して居る程です、思ふに我々の播ける種子を培ふものは、彼等の手でせうよ』
『ナァ、赤門にせよ、早稲田にせよ、一生懸命社會主義を研究して居るに拘らず、講堂の內面では却て盛に其の卵が孵化されて居るんだから、實に多望なる我々の將來ぢやないか』と渡部は豐かなる顏に笑波を漲へぬ、
『ヤ、君、最早一時だ』と阪井は時計を手にしながら、『是れから淀橋まで歩くのか』
『けれ共、君、幸に雨は止んだ』
『オヽ、星が照らして居るわ、我々の前途を』

八の一

築地二丁目の待合「浪の家」の帳場には、女將お才の大丸髷、頭上に閃く電燈目掛けて煙草一吹き、長へに囁きつゝ、『議會の解散、戰爭の取沙汰、此の歳暮をマア何うしろッて言ふんだねエ』
折柄バタ〳〵と走せ來れる女中のお仲、『松島さんがネ、花吉さんが遲いので、又たお株の大じれ込こ、大洞さんがネ、女將さんに一寸來て何とかして貰ひたいッて仰しやるんですよ』
お才は美しき眉の根ピクリ顰めつ、『チョッ、松島の海軍だつて言はぬばかりの面して、ほんとに氣障な奴サ——其れに又花ちやんも何うしたんだネ』
「いゝえネ、滿月の送別會とかへ行つてるので、未だ貰へないんですもの』
『しやうが無いネ、今夜あたり其樣所へ行かなくッても可いぢやないか』
『オホヽヽ、だつて女將さん、其れも藝妓の稼業ですもの』
お才も心得顏を見せつゝ、『だがネ、彼妓の強情にも困つて仕舞ふのねエ、口の酸つぱくなる程言つて聞かせるに、松島さんの妾など眞平御免テ逃げッちまふんだもの』
『そりや女將さん、假令藝妓だからつて可哀さうですよ、當時流行の花吉でせう、それに菊三郎と云ふ花形俳優が有るんですもの、松島さん見たいな頓栄眼の酒喰は、私にしても厭でさアね』
『だつて、妾にならうが、奥樣にならうが、俳優買ひ位のことア勝手に出來るぢやないか』
『さう言やマア、さうですがね、しかし能くまア、軍人などで藝妓を落籍させるの、妾にするのッて、お金があつたもンですねエ』
お才は煙管ポンと叩いて、ホヽヽと冷笑ひつ、『其ンな大洞さんの御贔屓だアネ——あれでも、まア、大事なお客樣だ、日本一の松島さんになこと言つて、煽ててお置きよ、馬鹿々々しい』

* * * *

奧の二階の一室に對坐せる二客、軍服の上へムク〳〵する如き絲織の大褞袍フハリ被りて、がぶり〳〵と麥酒傾け居るは當時貫禄的海軍大臣と新聞に謳はるゝ松島大佐、其れに向へる白髮頭の肥滿漢は東亞汽船會社の社長、五本の指に折らるゝ日本の紳商大洞利八、
大洞は滿面に笑の波を漲らしつゝ、『で、松島さん、私共は此際ですから、決して特別の御取扱を御願ひ致す次第では御わせん、只だ郵船會社同樣に願ひたいので——本來を申せば郵船會社の如き、平生莫大の保護金を得て配當を多くして居ると云ふのも、一朝事ある時の爲めでは御わせんか、然るにこの露西亞との戰爭と云ふ時に及んで、私共の船は一噸三圓五十錢平均で御取上げ、郵船會社の方が却て四圓乃至四圓五十錢と申すのは、餘りに公平を缺きまする樣で——第一に國家の公益で無い樣に思ひま

すこいて』

『國家の公事！　ハヽヽヽ、其れに大洞、君等の言ふべき口上ぢや無からう、兎に角一旦取り定めたものを、ナウ容易く變更することもならんからナ』

『併し、松島さん、萬事貴下の方寸に在ることでは御わせんか』

『假令方寸に在らうが、國家の公事ぢや、君等は一家の私事さへもグヅ／＼して居るぢや無いか』

大洞の雖か解し兼ぬると言ひたげなる面を松島はヂロリ、一瞥しつ、『一體、君は山木の娘の一件を何うするんだ、山木に直接に言ふのは造作もないが、兎も角妻にするものを、其れも餘り輕蔑した仕方と思つたからこそ、君を媒酌人と云ふことに頼んだのだ、最早彼此、半歳にもなるぞ、同僚などから何時式を擧げると聞かれるので、其の都度、實に軍人の體面に泥を塗られる樣に感ずるわイ、人を馬鹿にするも程があるぞ』

『イヤ、もう、其事に就きましては絶えず心配致して居りますので、――何分當人が、少し變物と來て居りますので』

『馬鹿云へ、高が一人の婦人ぢやないか、其樣ことで我の權力が何處に在る――それに大洞、吾輩は今日、實に怪しからんことを耳に入れたぞ』滿々たる大盃取り上げて、グウーッとばかり傾けたり、

八の二

『はアーと、訝る大洞の面上目懸けて松島は酒氣吹きかけつ、『君、山木は彼の同胞新聞とか云ふ木葉新聞の篠田ッて奴に、娘を呉れて遣る内約があるんださうぢやないか、失敬ナ、篠田――彼奴、社會黨ぢやないか、國賊と緣組みして此の海軍軍人の面に泥を塗る量見か、――此方にも其覺悟があるんだ』

大洞は始めて安心したるものゝ如く、兩手に頭撫で廻しつゝカンラ／＼と大笑せり、

『何が可笑しいッ』盃取りなほして松島は打ちも掛らんずる勢、

『戯談仰しやつちや、困りますぜ、松島さん、貴下、其樣馬鹿げたこと、何處から聞いておいでになりました』

『今日も省内の若漢等が、雜談中に切りと其事を言ひ囃して居つた』

『ハヽヽヽ、イヤ何うも驚きました、成程、さすが明智の松島大佐も、戀故なれば心も闇と云ふ次第で御わすかな、松島さん、シッかり御頼申しますよ、相手が兎に角露西亞ですぜ、日清戰爭とは少し呼吸が違ひますぜ』

大洞は小盃を松島に差しつ、『私も篠田と云ふ奴を二三度見たことがありますが、顏色容體全然壯士ぢや御わせんか、假令山木の孃が物數寄でも、彼樣男へ嫁かうとは言ひませんよ、よし、娘が嫁かうとした所で、松島さん、山木も未だ社會黨を婿に取る程狂氣にはなりませんからな、マア／＼御安心の上、一日も早く砲火を切つて私共に儲けさして下さい』

『しかし大洞、山木の娘も篠田と同じ耶蘇だと云ふぢやないか』

『松島さん、貴下の樣に氣を廻しなすつちや困る、山木も篠田には年來の怨恨がありますので、到頭教會から逐ひ出させたと、妹の話で御わしたが、女敵退散となつた上は、御心配には及びますまい、ハヽヽヽヽ』

『ウム、其れは先づ其れとしても、君、山木が早く取定めないのは不埒極まる、今日まで彼を庇護して遣つたことは何程とも知れたもンぢやない、彼の砂利の牛肉罐詰事件の時など新聞は八釜しい……』

と言ひ掛くるを、大洞あわてて押し留めつ、

「松島さん そんな舊傷の洗濯は御勘辨を願ひます、まんざら御迷惑の掛け放しと云ふ次第でも無かつた樣で御わすから」

それから彼の靴の請負の時はドウだ、糊付けの跡が雨に離れて、水兵は繩梯から落ちて逆巻く濤へ行方知れずになる、艦隊の方からは劇しく苦情を持ち込む、本來ならば、彼時山木にしろ、君にしろ、首の在る筈が無いのぢやないか』

『御尤至極、であればこそ、松島大明神と斯く隨喜渇仰致すでは御わせんか——ドウしたのか、花吉、ベラ棒に手間が取れる』

今は大洞受太刀となつて、シドロモドロの折こそあれ、襖スウと開いて顔を見せしは、——女將のお才、「どうも松島さん、御氣の毒樣ですことねエ、是も流行妓を情婦にした刑罰ですヨ、——待つ身のつらさが御解りになりましたでせう、ホヽヽヽヽ」

九の一

松島海軍大佐をして愛妓花吉を待つに堪へざらしめたる湖月亭の宴會とは、何某と言へる雜誌記者の、歐米漫遊を壯にする同業知人の送別會なりけり、

五ツの座敷ブチ拔きたる大筵席は既に入り亂れて盃盤狼藉、歌ふもあれば跳ねるもあり、腕を撫して高論するもの、妓を擁して喃語するもの、彼方に調子外れの淨瑠璃に合はして、絃をあやつる老妓あれば、此方にどたばた逐ひまくられて、キヤッと玉切る雛妓あり、玉山崩れて酒煙濛々、誠に是れ朝に筆を呵して天下の大勢を論じ去る布衣宰相公が、夕の御本體なりける、

一隅に割據したる五六の猛士、今を盛りの鯨飲放言、

「だが、君、今夜の最大奇觀とも謂べきは、篠田長二の出て來たことだ、幹事の野郎も隨分人が惡いよ、餅月と夏本の兩ハイカラの眞中へ、彼の筒袖を安置したなどは』

『所が當人、其を侮辱とも何とも感じないのだから恐れ入るんだ』

『人間も彼程に常識を失へば氣樂なものサ』

『見給へ、彼奴未だ四角張つて何か言つてるぜ』

『ヤ、相手が珍報社の丸井隱居ぢや、是こそ天然の滑稽ぢや』

折柄、ツッと小急ぎに行き過ぐる二十一二の藝妓を、早くも見て取つたる一人拳振り上げ、「其れへ打たせ給ふは、烏森に其人あり・知られたる新春野屋の花吉殿ならずや、

呼ばれて藝妓は振り向きつゝ「オヽ左言ふ貴殿は河鰭氏』と晴やかなる眼に笑を含めて、きッと宜しく睨まへれば、「『よウ菊三郎ウ』と、何れも手を打つてザンザめく、

「あら、可う御座んすよ、たんと御なぶり遊ばせ」と、忽ち碎けて群に加はる花吉を、相好崩しての包圍攻撃、

『近來又た海軍の松島を捕獲したッてぢやないか』『花吉の凄腕眞に驚くべしだ』『露西亞に對する日本の態度の曖昧なのも、君の爲めだと云ふ噂だぞ』『松島君に忠告して早く戰爭する樣にして呉れ給へ』『露西亞との軍費を捲き上げて、之を菊三郎への軍費に流用する所、好個の外務大臣だ』誠や筆を執つては鷺を烏となし、灰吹から龍をも走らす記者諸君を、只だ三寸の鶯舌もて右に左に叩き伏せ、有難がらせて餘ある所、好個の外務大臣とも言ふべかりける、「時に」と、河鰭は眞赤に醉うたる顏突き出し、「是ツ非、花ちやんに御依賴の件があるのだが』とササやくと、

『身に協ふことならば——』、花吉は芝居懸りに行く、

『否や、戲謔ぢやない、今度は眞面目の話だ——ソレ彼の向うに北海道土人の阿房拂宜しくと

云ふ怪物が居るだらう、サウ〳〵、あの丸井の禿顱と話してる、――彼奴誠に人情を解せん石部黨で、我々同業間の面汚しなのだ、其處で今夜彼奴の來たのを幸に、我黨の人にして遣らうと思ふんだ』
『河鰭さんの我黨などにはならない方が可う御座んすよ』
『オイ〳〵、飛んだことを言ふ――デ、彼奴に一杯、酒を飲ませて遣らうと思ふんだが、我々の手では駄目だから、是に於てか花吉大明神の御裾にお縋り申すのだ』
妙案〳〵、賛成〳〵など何れも叫ぶ、
『人がましくも、殿ガが頭を下げての御依頼とあるからは、そりや隨分火の中へも這入りませう、してお名前は』
『篠田ツて言ふのだ、同胞新聞の篠田』
『ヘエ、篠田さん、ぢや、あの、自由廢業をおやりなすつた方でせう』
『さうだ〳〵、其のとほりの野暮天なんだから、是非花ちやんの濟度を仰ぐのだ』
『其に彼奴は非戰爭論者で松島君の仇敵なんだ』と叫ぶもあり、
『花ちやん、一つ松島君を操縦するの餘力を以て』と河鰭の言ふを、
『そんな、お弄りなさるなら、否や』とツンとスネる、
『眞平〳〵、是れだ〳〵』と手を合はすを、
『驚いたことねエ、河鰭さん』と微笑みつゝ花吉は、小盃を手にしてスーと起てり、

九の二

一隅の數名は、何れも醉眼を上げて視線を花吉に注ぎつゝあり、三々五々と入り亂れたる會衆の間を縫ひつゝ花吉は、ヤガて篠田が座を占めたる他の一隅にぞ進みける、花吉は顧みて河鰭等と遙に目くばせしつゝ、ピタリ座に着きて膝を進めぬ、『篠田さん――河鰭さんから』
談話に餘念なかりし篠田は、始めて顏を上げぬ、看よ、一個の佳人、慇懃に盃を捧げつゝあり、
篠田は膝に手を置きて、『私は酒を用ひませぬから』
『お手にだけなりともおとり遊ばせ』
『イヤ、私は一切、用ひませぬから』
丸井老人ニュウと禿顱突き出しつ、『花ちやん、篠田先生は御禁酒だから無駄でげすよ、と云うて美人に使命を全うせしめざるも、心なき業なり、斯かる時局切迫の調和機關、中立地帶とも言ふべかる丸井玉吾、一つ先生の代理と行きやせう』言ひつゝヒョイと猿臂を延ばして、彼女の手より盃を奪へり、
『アラ』
『げに、酒は美人に限ること古今相同じでげす』と丸井玉吾既に一盞を傾け盡しつ、『イヤ、どうも御禁酒の方の代理と云ふ法も無いわけでげす、先生、飛んだ失禮を――』と、彼は綺麗に光る禿顱を燈下に垂れて、ツル〳〵と撫で上げ撫で下せり、花吉は絹巾に失笑を包みて、竊と篠田を見つ、
『今もネ、花ちやん』と丸井老人は眞面目顏、『例の藝妓殺――小米の一件に就て先生に伺つて居た所なんだ』と言ひつゝ盃差し出す、
花吉は是非もなげに酌をしつ、『オンとに米ちやんは氣の毒なことしましたよ、彼の晩もネ、香雪軒の御座敷で一所になりましてネ、世の中がツク〴〵厭になつたなんて、さんざ愚癡を言ひ合つて別れたんですよ、スルと丸井さん、其の歸路にヤラれたんですもの――けれど、男の方にも何か深い事情があるんですツてネ』
『サ、其の男の方を此の篠田先生が能く御存じなので、色々御話を承つて居たのだがネ』
丸井は火鉢の上に身を屈めつゝ、『ぢや、先

生、其の兼吉と云ふのは、戀の協はぬ意趣晴しツてわけでは無かつたでげすナ』

『左樣です、彼は決して嫉妬などの爲めに兇行に出でたのではありません、――畢竟、自分の最愛の妻――假令結婚はしないにせよ――を、姦淫の罪惡から救はねばならぬと云ふのが、彼の最終の決心であつたのです、彼の此の愛情は獨り婦人に對してのみで無いのです、彼が平生、職業に對し、友人に對し、事業に對する觀念が皆な其れでした。成程、其の小米と云ふ婦人も、今貴女の（と花吉を一瞥しつゝ仰しやる通り實に氣の毒でした、然し彼女が彼の如くして生きて居たからとて、一日と雖も、一時間と雖も、幸福と云ふ感覺を有つことは無かつたでせう、兼吉が執つた婦人に對する最後の手段は、無論正道をば外れてたでせう、が、生まれて此の如き清淨な男兒の心を得、又た其の高潔なる愛情の手に倒れたと云ふことは、女性としての滿足なる生涯では無いでせうか』

『ナ、成程』

花吉は默つて篠田を凝視せり、

九の三

『多くの新聞には、兼吉が是れ迄も數々小米と云ふ婦人に金の迷惑を掛け、今度の兇行も、婦人が兼吉の無心を拒絕したから起つたかの如く、書かれてありましたが、あれは丸井さん、兼吉の爲めに氣の毒の至極です』と、篠田は其談を繼續しぬ、『兼吉と云ふ男は決して其樣な性格の者ではありませぬ、石川島造船會社でも評判の職工で、酒は飮まず、遊蕩などしたことなく、老母には極めて孝行で、常に友達の爲めに借金を背負はされて居た程です。何うも日本では今以て、鍛冶工など云へば直に亂暴な、放蕩三昧な、品格の劣等の者の如く卽斷致しますが、今日の新職工は決してソンなものでは無いですからな、――今春他の一人の職工が機械で左腕を斬り取られた時など、會社は例の如く殆ど少しも構はない、已むを得ず職工同志、有りもせぬ錢を出し合つて病院へ入れたですが、兼吉は、此儘にしては、二十世紀の工業の恥辱であると云ふので、其の腕を携へて、社長の宅へ面談に參つたのです、風呂敷から血に染つた片腕を出された時には、社長も顏色を失つて、逃げ掛けたサウですが、其裾を捉へて、悲慘なる勞働者の境遇を說き、資本家制度の殘忍暴戾を淚を揮つて論じたのには、サスガの楠澤君も一言の答辯が無かつたと云ふことです、一言に盡したならば、兼吉の如きは新式江戶ッ子とでも言ひませうか』

『しますると、兼吉と小米との交情は如何致したと申すのでげすナ』

『御尤です、新聞には大抵、小米と申すのが、未だ賤業に陷らぬ以前、何か兼吉と醜行でもあつた樣にありますが、其れは多分小米と申すの實母から出た誤聞であります、兼吉と彼の婦人とは幼少時代からの許嫁であつたのです、然るに成人するに及んで、婦人の母と云ふが、職工風情の妻にしたのでは自分等の安樂が出來ないと云ふので、無殘にも藝妓にして仕舞つたので――其頃兼吉は吳港に働いて居たのですが、歸京つて見ると其の始末です、私も數々兼吉の相談に與かつたのです、一旦婦人の節操を汚したるものを娶るのは、卽ち男子の道義をも自ら破壞することになるか如何と云ふのです、私は彼に質問したのです、――君は彼女の節操破壞を以て自己の心より出でたるものと思つてるか如何――所が彼の言ひまするには、私は決して左樣は思ひません、全く母親の利慾に壓制されたので、柔順なる彼女は之に抵抗することが出來なかつたのであることを疑はないと云ふのです』

『ほんたらに小米さんの樣な溫順い人はありませんでしたよ』と、花吉は、吐息を漏らしぬ、

『左樣であつたとのことですナ』と篠田は首肯き、『然らば君、少しも憚る所は無い、速に彼女を濁流より救ひ出して、其愛情を全うするが可いと、忠告致しました、所が彼は躊躇して、けれど彼女は千圓近くの借金を背負つてるのでと悶えますから、何を言ふのだ、靈魂を束縛する繩が何處に在ると勵ましたのです』

『へ、、、先生、御得意の自由廢業でげすな』と、丸井はツルリ禿頭を撫でぬ、

『左樣です、不道德なる負債は、辨償の義務がありません、否な、辨償を迫る權利がありません、――それで婦人も非常に喜んだサウです、所が何とか云ふ貴族院議員が――』

と篠田は暫し其氏名を思ひ出し得ざるに、花吉が、『あの、金山伯爵でせう、――小米さんも嫌がつて居たんですよ、頭の禿げた七十近い老爺さんでしてネ』

『花ちやん、頭の禿げたなどは特別恐れ入りやしたわけで』と丸井は赤光の腦天ポンと叩いて首を縮む、

『御氣の毒樣でしたワねエ』と花吉も口を掩うてホ、、と笑ふ、

九の四

『大事な所を禿顱で、花ちやんにケチを付けられて仕舞つた、デ、篠田先生、其れから何なりました、全で小說の樣でげすなア』と、丸井玉吾は煙草に點火しつ、後を促す、

『所で、今貴女の仰せられた金山と言ふ大名華族の老人が、其頃小米と申す婦人を外妾の如く致して居たので、雇主――其の藝妓屋に於ては非常なる恐慌を喫し、又た婦人の實母からは、獨斷に廢業などして、小千圓の負債の爲めに兩親が訴へられても顧みない量見かと云ふ樣な脅迫に及ぶ、婦人も實に進退谷まつて、最後の書狀を俺吉へ送り越したのです、――到底自分は此の苦境を逃れることの出來ぬ何等過去の業果と思ふから、此の肉體をば餓鬼の如き男子の飜弄に一任するが、然し郎君を良人と思ふ心に嘗て變動を見たることの無いのは、神佛の前に誓言することが出來る、で、此の心が何時か肉體を分離したる未來世に於ては、幸に、我妻と呼んで呉れよと云ふ意味を、縷々認めてありました、言々是れ淚、語々是れ血と云ふのは多分此の如きものであらうと感じたのです』

『して、其の手紙は今も何處にか殘つて居ませうか』と流石三面記者の丸井老人、直ぐ種取的の質問、

『左樣、俺吉は大切に深く懷中に納めて居ましたから、今は必ず監獄署に預かつて居るでありませう――彼は其手紙を握り締めて眞に血淚を絞りました、遊惰なる富民の獸慾の爲めに、淸淨無垢なる少女の節操の蹂躙せらるゝのを却て喝采歡喜する社會は果して成立の理由があるかと憤慨して、彼は實に泣きました、丸井さん、日本では切りに××××××××××、××××××××××××、××××××××××××××××××――私も百方慰め勵まして、無分別のこと仕ない樣に注意して、丁度、夜の十時過、老母が待つてるからと、歸つて行きましたが、翌朝新聞を見ますと、職工の藝妓殺と云ふ二號題目の二版がある、――ア、何故無理にも前夜一泊させなかつたかと、實に悔恨の情に堪へませんでした』

篠田は暫らく瞑目しつ、『昨日も監獄へ參つて面會致しましたが、彼れも實に夢の樣であると申して居ました、――何でも西本願寺邊まで來ました時が、既に十二時近くであつたさうですが、何れの家も寢靜まつた深夜の、寂寞の月を踐んで來るのが、小米である、ハタと行き當つ

たので、兼吉の方から名を呼びかけると、婦人はイ、エ、米ではありません、米は最早死んで仕舞ひました、是れは迷つてる米の幽靈です」と云つて面をそむけて仕舞つたさうです、兼吉の言ひますに、其れ迄は記憶して居るが、後は何したか少しも覺えない、不圖氣が付いて見ると、自分は左腕で血に染つた小米の屍骸を仰けに抱いて、右手に工場用の大洋刀を握つて居たと云ふのです』

チッと聽き居たる花吉は竊と涙を拭ひつ身を顫はして、『彼晩は貴下、香雪軒で桂さんだの、管禰さんだのッて大臣さん方の御座敷でしてネ、小米さんが大盃でお酒をグイ飲みするんですよ、あんなことは今まで一度も無いのですから、何したんだらうッて皆な不思議がつて居ましたの、少し醉つたから風に吹かれた方が可いッて、無理に車を返しましてネ、一人で歩いて歸つたんですよ、――きつとあれから門跡樣へ參詣したのです、何事も前世からの約束ですワねエ』

『承れば先生、兼吉の老母を御世話なされまするさうで、恐れ入りました御心掛で』

『イヤ、世話致すなど申す程のことも出來ませんが、此際先づ男の家と、女の家を調和させたいと思ひましたが、丸井さん、實に不思議ですなあ、小米の父親は涙に暮れまして、是れと申すも手前共の惡かつたからで、聊か兼吉を怨む筋は無いと悔いて居りまするが、母親の方は非常な劍幕で、生涯樂隱居の金蔓を題無しにしたと云ふ立腹です、――女性と云ふものは果して此の如く殘忍酷薄なものでせうか』

丸井玉吾は鹿爪らしく首傾け、『成程――花ちやん何でげすな』

『丸井さん、ほんとに女性の方が酷いんですよ』

篠田は首打ち振りぬ、『其れが女性の本來でせうか――竟畢女性を鬼になしたる社會の罪では無いでせうか』

丸井は禿顱を撫でぬ、『御尤で』

襟かき合はせて花吉は、目を閉ぢぬ、

十

烏森は新春野屋の長火鉢を中に、對坐したる主婦のお六と藝妓の花吉、

『ぢや、花吉、お前何するッて云ふんだ』と、お六は簪もて頭搔きつゝ、額打ちしかめ、『濁水稼業をして居る身の、思ふ男に添ひ遂げることの出來ない位は、お前だつて、百も承知だらうぢやないか、是れが松島さんの奧樣になれッて云ふなら野暮な軍人の、おまけに昔氣質の姑まであるッてエから、少し考へものなんだが、お前、妾なら氣樂なもんだあネ、厭になつたら、何時でも左樣ならとキメるまでサ――大洞さんもサウ仰しやるんだよ、決して長くとは言はない、露西亞の戰爭が何方とも定まるまでの所、厭でもあらうが花ちやんに、松島の機嫌を取つて貰はにやならないのだからッて――私だつて、赤兒の時から手鹽にかけたお前のことだもの、厭だつてもの無理にと言ひたかないやね、けれど平素利益になつてる大洞さんのお依賴と云ひ、其れにお前も知つての通りの、此の歲暮の苦しさだからこそ、カウやつて養女の前へ頭を下げるんぢやないか、お前是れでも未だ解らねえのかエ』

花吉はガツくり島田の寢卷姿、投げかけし體を左の肱もて火鉢に支へつ、何とも言はず上目遣ひに、低き天井、斜に眺めやりたるばかり、

お六は煙草燻らしつゝ『一昨日の晩も、浪の家』から電話ぢや能く解らないッてんで、態々使者まで來たぢやないか、何が面白くて湖月などにグヅついてたんだ、歸つたと思や、頭痛がするッて寢て仕舞つてサ、昨日も今日も御飯もたべ

ず、頭が痛えか、腰が痛えか知らないが、一體まア、何思つて居るんだ』

去れど花吉は答へんともせず、

ポンと、お六は灰吹叩きつ、『花吉ッ、耳が無いのか、お前の目にや、私と云ふものが何と見えるんだ、——何處の者とも知れねエ乞食女の行倒の側に、ヒイ〳〵泣いてる生れたばかりの女の兒が、餘り可哀さうだつたから拾ひ上げて、乳の世話から萑尿の世話、一人前に仕上げる迄、何程の苦勞だつたとも知れたもんぢやない。チョッ、新橋の花吉が一人で出來たとでも思ふのか、オイ花吉、此の生命は誰のお蔭だよ』煙管取り上げて、花吉の横顏、熱き雁首にて突ツつきぬ、

花吉は瞑目して頭を垂れぬ、『其の御講釋なら、養母さん、最早承はるに及びません、何の因果でお前の手などに拾はれたものかと、前世の罪業が思ひやられますのでネ』

『何だ』といきまく養母の面、ジロリ横目に花吉は見やりつ、『ハイ、乞食の母の懷で、其時泣き死に死んだなら、藝妓などになり下つて、此様生恥曝さなくとも濟んだでせうにねエ』脣嚙み〆めて、ツと面を背向けぬ、

『ナニ、藝妓になり下つたト、——餘りフザけた口きくもんぢやない。乞食の女でも××だの、大臣さんだのの席へ出られると思ふのか』

『大臣が何だネ、養母さん、お前は大臣なんてものが、其様に有難いのかネ、——私に取つちや一生忘れられない仇敵なんだよ、——あゝ、思うても慄とする、三月の十五日、私の爲めの何たる厄日であつたのか』

『三月十五日が、何したと云ふんだ』

『お前が私を拾つて下すつたのは、今から二十年前の師走の二十五日、雪のチラつく夕間暮と能くお言ひだが、たッた五年の昔、三月十五日の花の夜、十六の春の一人の處女を生きながら地獄へ落しなすつたことは、モウ疾くにお忘れだらうネ』

花吉は、養母の尖脣を怨めしげに一瞥しつ、『養母さん、私を食つた其鬼が、お前の有難がる大臣サ、總理大臣の×藤ッて人鬼サ、——私もネ、其れ迄は世間なみの温順い孃だつたことを覺えてますよ、それが官位の棒で押へられ、黄金の鎖に縛られて、恐ろしい一夜を過ごした後は、泣いてもワメいても最早取り返しは付かず、女性の靈魂を引ッ裂かれた自暴女、蕾で散つた昔の遺恨を長き記念の花吉と云ふ、一生の戀知らずが、養母さん、お蔭樣で一匹出來上りましたのサ——ヤレ侯爵の殿樣だの、大勳位の御前だのと、聞くさへも穢はしい、彼様狒見たいな狂漢に高い祿遣つてフザけさせて置く奴も奴だが、其れを拜み奉る世間の馬鹿も馬鹿だ、侯爵が何だ、大勳位が何だ、人をツケ——』

頰にかゝれる鬢の亂れ、ブツリ嚙み切つて壁に吐きぬ、

『聞いた風なことホザきやがる、錢取り道具と大目に見て居りや、菊三郎なんて大根に逆せ上つて、……』

『オホヽヽ、養母さん、逆上つて丈は取消にして下さい、外聞が惡いから——そりや、猩々花吉と異名取る程、酒を吞みますよ、俳優買では毎々新聞屋の御厄介にもなりますよ、養母さん、酒でも吞んで氣でも狂はせずに、片時なりと此樣馬鹿げた稼業が勤まりますか、俳優々々と八釜敷言ふもんぢやありません、まア考へても御覽なネ、毎日毎夜是れ程男の玩弄になつて居りながら、此世で仇讐の一つも討つて置かなかつたなら、未來で閻魔樣に叱られますよ、黄金で叩られた怨恨だから黄金で叩り復して遣るのさネ、俳優の樣な意氣地なしでも、男の片ッ端かと思や、養母さん、ちッとは癪も收りまさあネ、あゝ、何卒一日も早く此樣婆婆は御免

蒙りたいものだと思つてネ』
『ヘン、其様に死りたきや、小米の様に殺してでも貰ふが可いや』
『養母さん、可哀さうにも花吉にはネ、釜さんとか云ふ様な、實意の男が無いんですよ、何せ藝妓町などへウロつく奴に、眞人間のある筈が無いからネ――あゝ、ほんたうに米ちやんが、羨ましい――』
チリヽンと格子戸開きて、『只今』と可愛い聲してあがり來れる未だ十一二の美しき少女、只ならぬ其場の様子に、お六と花吉との顔暫し默つて見較べつ、狹き梯子ギシつかせて、狐鼠々々低き二階へ逃げ行けり、其の後影ながめ遣りたる花吉、『彼の兒の壽命もコヽ二三年だ――養母さん、最早罪造りも大抵にお止しなねエ』言ひ棄て起ち上りつ、お六の叫ぶ『畜生』をフハリ聞き流して、ツイとばかり緣端へ出でぬ、
『――ア、、いやだ〳〵』

十一の一

冬枯の庭園の輝く日さへ一しほ荒寥を添ふるが中を、彼方此方と歩を移すは、山木と梅子と異母弟の剛一なり、
剛一は洋杖もて庭石打ち叩きつゝ、『だから僕は不平だと言ふんです、姉さんは少しも僕を信用して下さらんのだもの』
梅子はいとも莞爾に、『剛さん、可笑しいのねエ、私が何時貴郎を信用しなかつたの、私は貴郎の様な學問も品性も優等の弟のあることを、お友達にまで誇つて居る程ぢやありませんか』
『虚僞ッ、若し其れならば、姉さん、貴孃の苦悶を私に打ち明けて下すつても可いぢやありませんか、秘密は即ち不信用の證據です』
『秘密？ 剛さん、私、何の秘密もありやしないワ』
云ふ顔、剛一は打ちまもりつ、『其れ御覽なさい、其の通り姉さんは僕を信用なさらぬぢやありませんか、僕は能く貴孃の胸中を知つてます』
赤く枯れたる芝生の上に腰をおろして、剛一は、空行く雲を眺めやりつ、『姉さん、今春でしたがネ、僕は學校の運動場で、上野の森を見下しながら、藤野と話したことがありますよ』
突然の新談緒に、『藤野さんテ、彼の華嚴瀧でお死になすつた操さんですか』
『左様です、世間では彼が自殺の原因を、哲學上の疑問に在る如く言ひ囃しましたが、あれぢや藤野の靈も浮ばれませんよ、――僕は能ウく彼の秘密を知つてますからネ』
『ぢや、剛さん、何か深い原因があつたのですか』
『左様です、人生の不可解が若し自殺の原因たるべき價値あるならば、地球は忽ち自殺者の屍骸を以て蔽はれねばなりませんよ、人生の不可解は人間が墓に行く迄、片手に提げてる繼續問題ぢやありませんか、其様乾燥無味な理窟で、彼の多感多情の藤野を殺すことは出來ませんよ』
『剛さんとは兄弟の様に親しくて、私のことも姉さんと呼んで下すつたので、ほんたうにお可哀さうだと思つてネ』
『姉さん、藤野は實に可哀さうでした――彼の自殺は失戀の結果なんです』
『エ、――失戀？』
『左様です、彼の「巖頭の感」は失戀の血涙の記念です、――彼が言ふには、我輩は彼女を思ひ浮べる時、此の木枯吹きすさぶが如き荒涼の世界も、忽ち春霞靄々たる和樂の天地に化する、彼女を愛することに依て我あるを知ることが出來る、――彼女は即ち我が生命であると自

白して居ましたよ、そして僕に向つて、山木、君は果して理想の佳人が無いかと詰問しますからね、僕は言つて遣つたのです、――山木剛一にも理想の佳人があるツ』

『アラ、剛さん』

『では其人は誰かと聞きますから、僕は藤野に言つたのです――僕の理想の佳人は家の姉さんである――』

『剛さん、マ、何を貴郎』と梅子はサッと、面を紅めぬ、

『姉さん、本當です、――すると藤野も非常に感動して、君は實に幸福だと言ひました、左樣です、僕は實に幸福です、御覽なさい、藤野の佳人は忽ち他に嫁いで仕舞つたのです、藤野の生命は其時既に奪はれたのです、華厳瀧へ投げたのは、空蟬の如き冷たき藤野の屍骸です、去れど姉さん、貴郎が獨身で居なさらうとも、又結婚なさらうとも、僕は永久に貴孃を姉さんと呼ぶことが出來るぢやありませんか』

默して目を閉ぢたる姉の面を見上げたる剛一、「姉さん、僕は實に此の如く貴孃を敬ひ、貴孃を慕ひ、貴孃を信じて、何事をも隱さないものを、姉さん、貴孃は何故、僕を信用して下さらないですか』

十一の二

「姉さん、僕は貴孃が母の異つてる爲めに、僕を疎遠になさるとか、惡き母より生れたる僕の故を以て……』

梅子は、急ぎて弟を遮りつ、『剛さん、貴郎は何を仰しやるんです』

『姉さん、言はせて下さい、何卒十分に言はせて下さい――僕は常に母の不心得を、假令無教育の爲めとは言ひながら實に情ないことと思ふのです、大洞の伯父――全で不義貪慾の結塊です、父さんの如きも何ですか、薩長藩閥と戰つて十四年に政府を退き、改進黨の評議員となつて、自由民權を唱へなすつた名譽の歷史を、何と御覽なさるでせう、――其れが何です、藩閥政府の末路の奴等に阿媚して、國民の膏血を分けて貰つて、不義の榮耀に耽り、其手先となつて、昔日の朋友の買收運動をさへなさるとは、姉さん、まア、何と云ふ墮落でせうか』

剛一は姉の側に膝押し進めつ、「姉さん、僕は、此の如き人の兒と生まれ、此の如き人の姪と言はれることを恥かしくて堪らないのです、然るに姉さん、世間の奴等は何と云ふ破廉恥でせう、學校の校長でも教員でも、山木剛造の兒であり、大洞利八の姪である爲めに、僕に對して特別の取扱をするんです、彼等と雖も父や伯父の不義を知らんことは無い、只だ黃金に阿諛諂佞するんです――姉さん、貴孃は僕に比ぶれば餘程幸福です、貴孃の實母さんは實に偉い方であつたさうですし、父さんも未だ墮落以前の人であつたんだから――けれど其の爲めに姉さんが僕を輕蔑したり、何かなさる人でないことを確信してるから、嬉しいんです』

『剛さん、其樣なこと言ふものぢやありません、何うぞ其樣こと言はないで下さい』

『けれど、姉さん、何うぞ僕に言はせて下さい、――一體僕の家は何で食つて居るんです、何で此樣贅澤が出來るんです、地代と利子と、賭博と泥棒とぢやありませんか――否や、姉さん、少しも酷い言ひ分ぢやありません、正直のことです、――實直に働いてるものは家もなく食物もなく、監獄へ往つたり、餓死したり、鐵道往生したりして、利己主義の惡人が其の血を吸つて、榮耀榮華をするとは何事です――父さんは九州炭山の大株主で重役だと云ふので、威張つて居なさる、僕等は其の利益で斯く安泰に生活して居るけれど、僕等を斯く安泰ならしめてる彼の炭山坑夫の狀態は何うです、――現に父さんでさ

へ、彼等を熊の如き有樣だと言うて居なさるぢやありませんか、然し彼等は熊ぢやありません、人間です、同胞兄弟です、僕は彼の煖爐に燃え盛る火焔を見て、無辜の坑夫等の愁訴する、怨恨の舌では無いかと幾度も驚くのです、僕は今朝『同胞新聞』を見て實に胸を打たれたです——父さんは同胞新聞を家へ入れることを禁じなさるけれど、僕は每朝買つて見て居るんです——九州炭山の坑夫間に愈々同盟が出來上らんとして、會社の方で鎭壓策に狼狽してると云ふ通信が載つてたのです、——僕は端なくも篠田さんが曾て「勞働者中尤も早く自覺するものは、尤も世人に輕蔑されて、尤も生活の悲慘を盡してる坑夫であらう」と豫言された演說の一節を、思ひ浮べました、姉さん、篠田さんは曾て此事を豫言なされたのです』

剛一は『篠田』の一語に力を籠めて姉の面を見たり、

ベンチに腰打ち掛けたるまゝ梅子は無言なり、

剛一は少しく聲をひそめつ、『僕は姉さんが松島の野郎の緣談を斷然拒絕なされたと聞いて、實に愉快で堪らんのです、彼奴の家を御覽なさい、彼の放蕩を御覽なさい、軍艦のコムミツシヨンと、御用商人の賄賂ぢやありませんか、——貴孃を妻に慾しいと云ふのも、決して貴孃の學識や品性を重んじて言ふのぢや無い、只だ貴孃の特別財產を見込みのだ、實に失敬ナ——けれど姉さん、僕は貴孃に一つの疑問があるのです』

『疑問て、剛さん』

「姉さん、貴孃がほんたうに僕を愛し、僕を信じて下さるなら、何卒僕に打ち明けて安心させて下さいませんか、僕は姉さんの獨身主義と云ふのが解らないのです、其れは主義から出た結論でなく、境遇から來た迫害だと僕は思ふのです、——其れは貴孃の持論に似合はぬ甚だ卑怯なことだと思ふのです』

『卑怯ッて何です』

『其れは、少しく言葉が過ぎたかも知れませんが、然し姉さん、舊思想の黑雲を誰か先づ踏み破る人が出なければ、世に改革の曙光を見ることが出來ないと云ふのが、姉さんの主張ではありませんか、——今貴孃は啻に舊思想のみならず、現時の不正なる勢力の裡に取り圍まれて居なさるのです、何故、姉さん、貴孃は之を打ち破つて、幾百萬の姉女子を奴隷の境遇から救ふべき先導をなさいませんか、神聖なる愛情を殺して、獨身主義などと云ふ遁辭を作りなさるのは、僕は實に大不平です』

『剛さん』

『いや、姉さん、僕は貴孃の理想の丈夫を知つて居ます、貴孃の理想の丈夫は卽ち僕の崇拜して居る所の丈夫です、僕は實に嬉しくて堪らんのです、——僕が此の父の罪惡の家に在りながら、常に心に光明を持つことの出來るのは、姉さん、貴孃の純潔なる愛の爲めです、——此上に貴孃の理想の丈夫の口から「我が弟よ」と呼んで貰ふことが出來るならば、僕は世界に於て外に求むる所はありません』

剛一はムンズとばかりに梅子の手を握りつ、

『姉さん、僕は常に篠田さんの寫眞に向て「兄さん」と小聲で呼んで見るんですよ』

梅子の手は震ひぬ、

『姉さん、僕は今でも絕えず篠田さんの敎を受けて居るんです、篠田さんに敎會放逐と云ふ侮辱を與へたものは僕の父です、父の利己心です、無論其等の事を意に介する樣な篠田さんぢやない、——井上でも大橋でも脫會の決心を飜したのは、篠田さんに懇々說諭されたからでもありますが、姉さん、篠田さんの居ない敎會に、寂しく殘つて居なさる貴孃を見棄てるに忍びないと云ふのが、尤も著しき彼等の動機

なんでしたよ』
　良久ありて、梅子は目をしばたゝきつ、『剛さん、輕卒なことを仰しやつてはなりません、貴郎は篠田さんを誤解して居なさるから――』
『誤解？　誤解とは何です―』
『いヱ、慥に貴郎は誤解して居なさいます、剛さん、貴郎は篠田さんが常に洗禮のヨハネをお説きになつたことを御聽きでせう、又た實に殆どヨハネの如く生活して居なさることも御覽でせう、家庭の歡樂と云ふ如き問題は、最早や篠田さんのお心には無いのです、勿論彼の樣なる莊嚴の御精神に感動せざる女性の心が、何處にありませう、けれど剛さん、若し自分一人して其の愛情を獲たいと思ふ女があるならば、其れは丁度、申しては失禮ですが、私共の父上や貴郎の伯父上が、自分の手一つに社會の富を占領したいと思召すのと、同じ罪惡です』
　夕ばえの富士の雪とも見るべき神々しき姉の面を仰ぎて、剛一は腕拱きぬ、
　鳥の群、空高く歌うて過ぐ、

十二

日露兩國の間、風雲轉た急を告ぐるに連れて、梅子の頭上には結婚の回答を促すの聲、愈々切迫し來れり、
　繼母の權威さへ遂に梅子の前に其光を失ふに及びて、今は父剛造自ら頭を垂れて哀願せざるべからずなりぬ、
　此夜彼が『梅子、相變らずの勉强か』と、いとも柔らかに我女の書齋を訪れしも是れが爲めなり、
　あらゆる威嚇、甘言、情實、誘惑に對する彼女の防禦方法は、只だ沈默と獨身主義とのみ、流石の剛造も今は殆ど攻めあぐみぬ、
『デ、梅子、私は決してお前が篠田などと關係があるの何のと思やせぬ、私はお前が其樣馬鹿と思やせぬから少しも氣には留めぬが、大洞が切りに其事を言ふので、誰が言うたか松島大佐も其れが爲めに甚く感色を惡くして居たと言ふのだから、――篠田も最早教會を除名した上は、風評も自然立ち消えになるであらうが、兎世角間は五月蠅ものだから、一層氣を付けてナ――其れに其の新聞にもある通り』と剛造は梅子の机上にヒロげられたる赤新聞を一瞥しつ、『篠田の奴、實に怪しからん放蕩漢だ、藝妓を誘拐して妾にする如き亂暴漢が、耶蘇信者などと澄まして居たのだから驚くぢやないか』
　剛造は低頭ける我女の美しき横顏チラと見やりて、片膝起てつ、『ぢや、梅子、私は明朝一番汽車で九州まで行つて來るから――是れも皆な篠田の仕業だ、坑夫共を煽動して、賃錢値上の同盟などさせるのだ、愈々日露開戰になれば石炭が上ると云ふ所を見込んでの惡策だ、――歳暮ではあり、東京の用事も手を拔く譯にならぬけれど、今日も長文の電報で、直ぐ來て呉れねば何なことになるかも知れぬと云ふのだから據處ない――實に梅、惡い奴共の寄合だ、警視廳へ掛合つて社會黨の奴等片端から牢へでもブチ込まんぢや安心がならない、――其れで一週間程で歸る積だから、其間に松島との緣談、能く考へて置いて呉れ、私は決してお前の利益にならぬ樣なこと勸めるのぢやない、――豫てお前は別家させる積で、小石川の地所も公債の二萬圓と云ふものも、既にお前の名義に書き換へて置いたのだが、嫁に行くも婿を取るも同じことだ、――今こそ未だ大佐だが、薩州出身で未來の海軍大臣とまで望を屬されて居る松島だから、梅子、別段不足もあるまいぢや無いか――モー九時過ぎた、是りや梅子、飛んだ勉强の邪魔した』
　剛造はノサノ＼と出で行けり、

* * * * *

徐ろに眼を開きたる梅子の視線は、いつしか机上に開展されたる赤紙の第三面に落ちて、父が墨もて圓く標せる雜報の上をたどるめり、

⦿社會黨の艶福、花吉の行方

婀娜たる容姿は陽春三月の櫻花をして艶を失はしめ、腕の凄さは嚴冬半夜のお月様をして面を掩はしめたり、新橋雨畔の美形雲の如き間に立ちて、獨り嬌名を專らにせる新春野屋の花吉が、此の頃俄に其の影を見せぬは、必定箱根の湯氣蒸す所か、大磯の濤音冴ゆる邊に何某殿と不景氣知らずの冬籠り、嫉ましの御全盛やと思ひの外、實に驚かるゝものは人心、氣の知れぬと古人も言ひける、麻布は本村の草深き篠田長二のむさくろしき屋臺に大丸髷の新女房……………義理もヘチマも借金も踏み倒しの社會主義自由廢業の一手專賣、耶蘇を棄てて妻を得たとの大涎、筒ツぽ袖には拭き盡せまじ…………彼が積年の僞善の假面をば深くな咎めそ、長二君とて木から生まれた男ではごんせぬ、

梅子は胸を押へて復た目を塞ぎぬ、『―――本當だらうか』

十三の一

麻布本村の坂を上り行く牛乳屋の小僧と八百屋の小僧、

『其處の篠田さんナ、彼樣不用心な家見たことが無いぜ、暗いうちに牛乳を配るにナ、表の戸を開けて裡へ置くのだ、あれで能く泥棒が這入らねエものだ』

『ナニ、年中泥棒に遭つてるんださうナ、これから廣尾へ掛けて貧乏人の巣だから、堪つたもんぢやねエやナ、所がお前言ひ分が面白いや、書生の大和ツて男が言ふにやネ、誰も好んで泥棒などするのでは無いだから、餘つてるものが在るなら、無いものに融通するのは人間の義務で、他人が困つてるのに自分ばかり榮耀してるのが、ほんたうの泥棒だとよ』

『ふウム、一理あるナ、―――所で近來素敵な別嬪が居るぢやねエか、老母付きか何かで』

『母子ぢや無いよ、老婆の方は月の初めから居るが、別嬪の方はツイ此頃だ、何でも新橋あたりの藝妓あがりだツてことだ』

『ヘイ、筒袖先生、マンざら袖無ェばかりでも無いと見えるナ』

『所が言葉の使ひツ振から察しると、其樣らしくも無い、馬鹿丁寧なこと言ひ合つてるよ』『どうも此の界隈にや、渡邊國武だの、澤田仙だの、矢野二郎だの、安藤太郎だのツて一風變つた連中のお揃ひだナ』『何れ麻布七不思議ッてなことになるのだろ、ハヽヽヽ』

* * * *

小僧等の目をさへ驚かしたる篠田方の二個の女性、老いたるは藝妓殺を以て滿都の口の端に懸りたる石川島造船會社の職工兼吉の母にて、若きは近き頃迄烏森に左褄取りたる花吉の變形なり、

夕日斜に差し入る狹き廚房、今將に晩餐の準備最中なるらん、冶郎蕩兒の魂魄をさへ繫ぎ留めたる緑滴らんばかりなる丈なす黑髮、グルグルと引ツつめたる無造作の櫛卷、紅絹裏の長き袂、しごきの縮緬裂いて襷凛々敷あやどり、ぞろりとしたる裳面倒と、グルリ端折つてお花の水仕事、兼吉の母は彼方向いて竈の下せゝりつゝあり、

『考へて見ると老女さん、ほんとに世の中は面白いものねエ、かうした處でお目に懸つて、此樣なお世話さまにならうなどとは、夢にも思やしないんですもの、此頃中の私の心と云ふもの

は、老母さん、昨夜もお話した樣なわけでネ、自分ながら思案に暮れましたの、どうせ泥水商賣してるからにや、普通の女の樣なこと思つたからとて、詮ないことなんだから、寧そ松島と云ふ男の所へ行つて、思ふ存分我儘を働いて遣らうかなどとも迷つたりネ、自暴になつて腹ばかり立つて、仕樣も模樣も無かつたのですよ、スルと湖月の御座敷で始めて此家の先生樣にお目に掛りましてネ、兼吉さんと米ちやんとのお話を承つてる中に、私の心が妙な風に成つて來ましてネ、假令女性の節操を潰したものでも、其が自分の心から出たのでないならば、咎めるに及ばぬと仰しやつたお言葉が、ヒシと私の胸を刺しましたの、して見ると私などでも餘り世間を怨んで、ヒガミ根性ばかり起さんでも、是れからの心の持ち樣一つでは、人樣の前へ顏出しが出來るやうになれるかと不圖思ひ浮びましてネ、其れから二日二晩と云ふもの考へ通しましたけれど、如何したら可いのか少しも方角が付かぬぢやありませんか、一つ篠田樣にお願申して見る外無いと思ひましてネ、二日目の夕方、プラリと出て新聞社へ參つたの、すヨ、——先生樣が、凝と私の顏を見つめなすつて、『貴女の御一身は私が御引き受け致しました、御安心なさい』と仰しやつた御一言が、森と骨にまで浸み徹りましてネ、有難いのやら、嬉しいのやら、譯なしに涙が湧き出るぢやありませんか』

言ひつゝ彼女は襦袢の袖もて竊と眼を拭ひつ、『それから老女さん、燈が點いて後、此家へ連れて來て戴いたのですがネ、あの土橋を渡つて烏森の方を振り返つて見た時には、こゝに二十一年暮らしたのかと思ふと、怨めしい樣な、懷かしい樣な、何とも言へない氣がして胸が張り割ける樣でしたの、ア、此處の爲めに生まれも付かぬ賤しい體になつたのだと思ひついて、そして先生樣の後姿をお見上げ申すとネ、精神が鞏固して、籠を出た鳥とは、此のことであらうと飛び立つ樣に思ひましたよ——』

『ほんとにねエ』と、兼吉の老母も烟に咽びつ、

十三の二

『それからネ、老女さん』と、お花は明朝の米かしぐ手を暫し休めつ、『歩きながらのお話に、此頃湖月で話した兼吉の老母が家へ來て居ると先生樣が仰しやるぢやありませんか、老母さん、私どんなに嬉しかつたか知れませんよ、お目に懸つた方でも何でも無いんでせう、けども米ちやんのお姑さんだと思ひますとネ、何うやら米ちやんにでも逢ふやうな氣がするんですもの、——私は斯う云ふお轉婆、米ちやんは彼の通りの温柔やでせう、ですけども、何うしたわけか能く氣が合ひましてネ、始終往來して姉妹の樣にして居たんですよ、あゝ云ふことになる晩まで、一つお座敷で色々語り合つた程ですもの——其の緣に繋がる老母さんに圖らぬお世話樣になると云ふのも、ほんとに米ちやんの引き合せぢや無いかと思はれましてネ』

小米と聞けば直ちに一粒種の我子のこと思ひ出づる老婆は、セキ上ぐる涙を狹き袖に抑へつ、『あゝ云ふことになると云ふも、皆な前世からの約束事と諦めてネ——それに斯うやつて此方の先生樣が御親切にして下さるもんですから、せめては兼吉が生の父にも增して賴にして居た先生樣の、御身のまはりなりと御世話致したら、牢屋に居る伜も定めて喜ぶことと思ひましてネ』

『ほんとに老女さん、何うしたら篠田樣のやうな御親切な御心が持てませうかネ——私ネ老母さん、男なんてものは、皆な我儘で、道樂で、虛つきで、意氣地なしのものと思つてたんですよ、——先生樣で私、驚きましたの、一寸お見受け申すと、何だか大變に怖さうで、不愛想

の樣で在らつしやいますが、心底に溫柔い可愛らしい所がおありなすつて、彼れが威あつて猛からずとでも云ふんでせうかねエ――籍の方の話も落着したから、明日の何とか、サウ〱、クリスマスとか云ふが濟んだなら、大久保の慈愛館とやらへ行くやうにと、今朝もお話し下さいましたけどもネ、老母さん、私、何うやら此家が自分の生まれた所の樣に思はれて、何時までも老女さんと一所に居たい樣な氣がして、堪りませんの』

『花ちやん、其樣に柔しく言うてお呉れだと、何だかお前さんが米ちやんの樣に思はれてネ』

『老母さん、私も左樣ですよ、始めて此方へ上つて――疲れたらうから早くお寢みッて仰しやつて下すつて、老女さんの傍に寢せて戴いた時――私、ほんとに母の懷へ抱かれでもした樣な氣がしましてネ、五體が延びりして、始めてア、世界は廣いものだと、心の底から思ひましたの、――私、老女さん、二十年前に別れた母が未だ存へて居て、丁度廻り合つたのだと思つて孝行しますから――私の樣なアバずれ者でも何卒、老女さん、行方知れずの娘が歸つて來たと思つて下さいナ』

老婆は涙にムせびつゝ、首肯くのみ、

『オヽ、嬉しい』と、お花は涙一杯の美しき眼に老婆を仰ぎつ、『ぢや、今から阿母さんと言つても可う御座んすか――何だか全で夢の樣ですのねエ――昨日までの邪慳な心が、何處へか去つて仕舞つたの――私ヤ、すつかり生れ變りましたわねエ――阿母さん、――』

＊　＊　＊　＊

障子一重の次の室に、英文典を復習し居たる書生の大和、兩手に頭抱へつゝ、涙の霰ポロリポロリ。

十四の一

十二月二十五日の夕は來りぬ、寒風枯草を吹きて、暗き空に星光る樣、そゞろに二千年前の猶太の野邊を偲ばしむ、

篠田長二の本村の家には戶障子明け放ちて正面の壁には耶蘇馬槽に臥するの大畫を青葉に飾り、洋燈カン〱と輝く下には、八九歲より十二三歲に至る少年少女二十餘名打ち集ひて喧々囂々、銀吉の老母、お花、書生の大和など切りと其間を周旋しつゝあり、小急ぎに訪ひ來れるは渡邊の老女なり、

篠田は自ら出で迎へつ、『オヽ、老女さん、能う來て下さいました、今夜は近所の小兒等を招きまして、基督降誕祭を營むことに致しまして、――其上、十二月二十五日と云ふ日に特別の關係ある婦人の新客がありますので、旁々御光來を願ひました、

『何の、先生、昨夜はネ、教會の降誕祭で御座いましたが、今年は先生の御顏が見えず、面白い御話を御聞きすることが出來ないッてネ、去年の時のことばかり言ひ出して、皆樣寂しい思ひをしたので御座いますよ、今晚は先生の御宅の御祝に御招を受けましたので斯樣嬉しいことは、御座いません』

今や式は始まりぬ、少年少女何れも呼吸を殺し眼を圓くして、訝しげに見遣る、

大和一郞が得意の美音を振り立てて讃美歌の獨吟あり、

『ひとにはみめぐみ　地にはやすき
かみにはみさかえ　あれとうたふ
あまつつかひらの　きよき聲は
しづかにふけゆく　夜にひゞけり』

『いまなほみつかひ　つばさをのべ
つかれしこの世を　おほひまもり
かなしむみやこに　なやむ鄙に
なぐさめあたふる　うたをうたふ』

『おもにをおひつゝ　世のたびぢを
ゆきなやむ人よ　かしらをあげ
よろこばしき日を　うたふうたの
いとたのしきこゑ　きゝていこへ』
みつかひのうたふ　平安きたり
よゝのひじりらの　ましし國に
エスを大君と　たゝへあがめ
あまねく世のたみ　たかくうたはん』

篠田は起つて聖書を讀み、祈禱を捧げ、扨て今宵の珍客なる少年少女に向つて勸話の口を開けり、

『貴所等と私とは長く御近所に住つて居りますが、今まで仲よく一所に遊ぶ樣な機會がありませんでした、今晩は能くこそ來て下さいました、――今晩貴所方をお招申したのは、耶蘇基督と云ふお方の御誕生日を、御一所にお祝ひ致さうと思つたからです、貴所方も皆な生れなすつた日がある、其日になると、阿父さんや、阿母さんが、今日は誰の誕生日だからと、何かお祝をして下さるでせう』

『アイ、二十日が俺の誕生日だつて、阿母が今川燒三錢買つて、父の佛樣へ上げて、あとは俺が皆な食べたよ』と、突如に返事したるは、覺束なき賃仕事に細き烟立て兼ぬる新後家の倅なり、

クス〳〵笑ふものある中に篠田は首肯きつゝ、

『丁度其れと同じく、基督の御誕生日には私共一同、日本人ばかりでは無い、世界中の人が神樣へ御禮を申し上げるのです、基督のことは、今歌を歌ひなされた、大和先生から段々御聞きなさい、私が差當り一つ御話して置くのは、――貴所方が忘れない樣に聞いて置いて頂きたいのは、――二千年昔時にお生れになつた外國人の基督が、何時までも〳〵世界中の人に、誕生日を祝つて貰ふと云ふ不思議な理由です、――基督と云ふお方は極々貧乏な家へお生れになつたのです、此の壁に懸けてある畫にある樣に、旅の宿屋の馬小屋で馬の秣桶を、臥床になされたのです、阿父は貧しい大工で、基督も矢張り大工をなされたのです――能く御聽きなさい、貧乏と云ふことは左まで恥かしいことではありません、私も貴所方も皆な汚穢い着物でせう、私も貴所方も皆な貧乏人です、けれど、貧乏や着物の汚穢いのを氣にしてはなりませんよ、汚穢い心を持つて、綺麗な衣服を着て居る人があるなら、其人こそ眞正に恥かしい人です』

お花は孰れも木綿の揃の中に、己れ獨り忌はしき記念の絹物纏ふを省みて、身を縮めて俯けり、

篠田は語り繼ぐ、『人間の尤も恥かしいのは、虛言を吐くことです、喧嘩することです、懶けることです』

忽ち座敷の一隅に聲あり、『お虎さんは、今日俺に鉛筆呉れるなんて虛言を言つたぜ』

『ウソ、熊吉さんが私に石を打つけたもの』とて早くもメソ〳〵と泣く、

彼方の一隅には、『松公ン所の父は朝から酒飲んでブウ〳〵ばかり言つてるぢやねエか』

『何だ手前の母は每晩四の橋へ密賣に出るくせしやがつて……』

お花の目には涙ありき、

十四の二

少年少女は何れも基督降誕祭の贈物貰ひたれば、歡喜の聲振り立て歸り行けり、

『アヽ、實に今年は愉快なクリスマスを致しました』と篠田は喜色、面に溢る、

『それに先生、お花さんとやらに、老女さんに、お二人まで在らつしやるので、何程お賑かとも知れませんよ、殿方ばかりのお家は、何處となくお寂しくて、お氣の毒で御座いましてね』渡邊の老女はホヽ笑みつゝ、『大和さん、貴郎もマ

ア、お勝手の方を御役御免におなりなさいましたのねエ

なあに、老女さん、花さんは夜が明けると大久保の慈愛館へおいでになるんだから、明日から僕が又た術職するんです』と大和は笑ふ、

お花は俯きて何やら氣の進まぬ體、

『何だか私も花ちやんにお別れするのが厭でなりませんの』と、兼吉の老母もつぶやく、

『老母さん』と篠田は渡邊の老女を顧みつ、『花さんは大切な體です、將來に大きな事業をなさらねばならぬ役目を負んで居られますので、又た花さんの性質に極く適當した役目であると思ひますので、矢島の老女史や、島田の奥樣に能くお話して御依頼しましたが、何れも快く引き受けて下さいましたから、當分慈愛館で修業なさるのです』

『ですけども先生』とお花は纔僅に擡げつ、『私の様なものは兎ても世間へ面出しが出來なからうと思ひましてネ、寧そ御迷惑さまでも、お家で使つて戴いて、大和さんや、老母さんに何か教へて戴きたいと考へますの――』

『花さん、何時の間に貴女は其様な弱き心にお化りでした、――先夜始めて新聞社の二階で御面會致した時、貴女と同じ不幸に陷つてる女、又陷りかけてる女が何千何萬とも限らないのであるから、其を救ふ爲めの一個の證人にならねばならぬと申したれば、貴女は身を粉に碎いても致しますと固く約束なされたでせう』

と篠田はお花を奬ましつ、『誠に世の中は不幸なる人の集合と云うても差支ない程です、現に今爰へ團欒てる五人を御覽なさい、皆な社會の不具者です、渡邊の老女さんは、旦那様が鹿兒島の戰爭で討死をなされた後は、賃機織つて一人の御子息を教育なされたのが、愈々學校卒業と云ふ時に肺結核で御亡り、――大和君の家は元と越後の豪農です、阿父さんが國會開設の運動に、地所も家も打ち込んで仕舞ひなすつたので、今の議員などの中には、大和君の家の厄介になつた人が幾人あるとも知れないが、今一人でも其の遺兒を顧るものは無い、然し大和君は我も殆ど乞食同様の貧しき苦痛を嘗めたから、同じ境遇の者を救はねばならぬと、此の近所の貧乏人の子女の爲め今度學校を開いたので、今夜のクリスマスを以て其の開校式を擧げた積りなのです、――兼吉君のことは花さん、既に御聞になつたでせう、兼吉君の阿父さんが、自分の財産を擧げて、保護の義務を果すと云ふ律儀な人で無かつたならば、老婆さんも今頃は鬻問屋の後 室で、兼吉君は立派な米さんと云ふ方の良人として居られるのでせう、――私自身を云うて見ても、秩父暴動と云ふことは、明治の舞臺を飾る小さき花輪になつて居るけれ共、其犧牲になつた無名氏の一人の遺兒が、父母より讓受けた手と足とを力に、亞米利加から歐羅巴まで、荒き浮世の波風を凌ぎ廻つて、今日こゝに同じ境遇の人達と隔なく語り合つて居るのです、私の近き血縁を云へば只つた一人の伯母がある、今でも訪ふ人なき秩父の山中に孤獨で居る、世の中は不人情なものだと斷念して何しても出て來ない、――花さん、屈辱を言へば、貴女一人の生涯ではない、只だ屈辱の眞味を知るものが、始めて他を屈辱から救ふことが出來るのです』

一座しんみりと頭を垂れぬ、

『御覽なさい、救世主として崇敬はるゝ耶蘇の御生涯を』と篠田は壁上の扁額を指しつ、『馬槽に始まつて、十字架に終り給うたではありませんか』

十五

多事多難なりける明治三十六年も今日に盡き

て、今は其の夜にさへなりにけり、寺々には百八煩惱の鐘鳴り響き、各教會には除夜の集會開かる、

永阪教會には、過般篠田長二除名の騷擾ありし以來、信徒の心も離れ〳〵となりて、日常の例會もはか〴〵しからず、信徒の希望なる基督降誕祭さへ極めて寂寥なりし程なれば、除夜の集會に人足稀なるも道理なりけり、

時刻には尚ほ間あり、詣で來し人も多くは牧師館に赴きて、廣き會堂電燈徒らに寂しき光を放つのみなるに、不思議や妙なる洋琴の調、美しき讃美歌の聲、固く鎖せる玻璃窓をかすかに洩れて、暗夜の寒風に慄へて急ぐ憂き世の人の足をさへ、暫し停めしむ、

洋琴の前に坐したるは山木梅子、傍に聽き惚れたるは渡邊の老女、

『今度は老女さんのお好きな歌を彈きませう』と、梅子が譜本繰り返すを、老女はヂッと見やりて思はずも酸鼻りぬ、

『何うかなさいまして、老女さん』

老女は袖口に窃と瞼拭ひつ、『何ネ、――又た貴孃の亡母さんのこと思ひ出したのですよ、――斯樣立派な貴孃の御容子を、一目亡奥樣にお見せ申したい樣な氣がしましてネ、――』

答へんすべもなくて、只だ鍵盤に俯ける梅子の横顏を、老女は熟く〴〵とながめ、『何して、梅子さん、貴孃は斯うまで奥樣に似て在らつしやるでせう、さうして在らつしやる御容子ッたら、亡母さん其儘で在らつしやるんですもの――此の洋琴はゼームス樣が亡母さんの爲めに寄附なされたのですから、貴孃が之をお彈きなされば、奥樣の靈が何程喜んで聽いてらつしやるかと思ひましてネ――オホヽ、梅子さん、又た年老の愚癡話、御免遊ばせ――』

『アラ、老女さん、そんなこと――此の教會で亡母のこと知つてて下さるのは、今は最早老女さん御一人でせう、家でもネ、乳母が亡母のこと言ひ出しては泣きます時にネ、きッと老女さんのこと申すのですよ、私、老女さんに抱いて戴いて、亡母と永訣の挨拶をしたのですとネ、――私、老女さん、此の洋琴に向ひますとネ、何うやら亡母が背後から手を取つて、彈いてでも呉れる樣な氣が致しましてネ、不圖、振り向いて見たりなどすることがあるんですよ、――私ネ、老女さん、此の教會を棄てることの出來ないのは、こればかりなんです――』

『まア、貴孃、飛んでも無いこと仰しやいます、此上貴孃が退會でもなさろものなら、教會は全で闇ですよ、篠田さんの御退會で――』

思はず言ひ掛けて、老女は俄に口に手を當てぬ、

『ほんとに老母さん、篠田さんのことでは私、皆樣にお顏向けがならないのです、――老女さん近く篠田さんに御面會なさいまして――』

『ついネ、此の二十五日には參上つたのですよ、御近所の貧乏人の子女を御招びなすつて、クリスマスの御祝をなさいましてネ、――其れに餘りお廣くもない御家に築地の女殺で八釜しかつた男の母だの、自由廢業した藝妓だのッて御世話なすつて在らつしやるんですよ、ほんとに感心な方ですことネ――』

『其の藝妓のことで、老女さん、新聞などには大層、篠田さんの惡口が書いてあつたぢやありませんか』梅子の聲は低く震へり、

『左樣ですッてネ、貴孃、篠田さんが自分の妾になさるんだとか何とか書きましたつてネ、餘り馬鹿々々しいぢやありませんか、ナニ、皆な自分の心で他を計るのですよ、クリスマスの翌日、彼の慈愛館へ伴れておいでになりましたがネ、――貴孃、私の倅が生きてると丁度篠田樣と同年のですよ、私、彼の方を見ると何時でも涙が出ましてネ』

梅子はホッと面赧らめつ、『何と云ふ失禮な新聞でせうねェ』
　此時、ベンチにはボツ／＼人の顏見えぬ、長谷川牧師は扉を排して入り來れり、淺き微笑を頬邊に浮べて、

十六の一

午後五時三十分、東海道の上り汽車、正に大礒驛を發せんとする刹那、プラットホームに俄に足音急はしく、驛長自ら戰々兢々として、一等室の扉を排けば、厚き外套に身を固めたる一個の老紳士、平たき面に半白の疎髯ヒネリつゝ傲然として乘り入る後ろより、未だ十七八の盛裝せる島田髷の少女、肥滿なる體をゆぶりつゝ笑傾けて從へり、
　發車の笛、寒き夕の潮風に響きて、汽車は「ガイ」と一動りして進行を始めぬ、驛長は鞠躬如として窓外に平身低頭せり、去れど車中の客は元より一瞥だも與へず、
　未だ座には着くに至らざりし彼の少女は、突如たる汽車の動搖に『オヽ、怖』と言ひつゝ、老紳士の膝に倒れぬ、
　紳士は其儘かき抱きて、其の白きもの施せる額を恍惚と眺めつ、『どうぢや、濱子、嬉しいかナ』と言ふ顏、少女は媚を湛へし眸に見上げつゝ、『御前、奥樣に御睨まれ申すのが怖くてなりませんの』
『ハヽヽヽヽ、何奥が怖いことあるものか、あれは梅干婆と云ふのぢやから、最早嫉くの何うのと云ふ年ぢや無いわい、安心しちよるが可い、――其れよりも世の中に野暮なは、其方の伯父ぢや、昔時は壯士ぢやらうが、浪人ぢやらうが、今は兎に角藝人の片端ぢや、此頃の亂暴は何うぢや、妾を賣つて權門に諂ふと世間に言はれては、新俳優の名譽に關はるから、其方を取り戻すなどと、イヤ、飛んだ活劇をし居つたわイ、第一其方の心中を察しない不粹な仕打ぢや、ナ、濱子』
『あの時は、御前、何うなることかと私、ほんとに怖う御座いましたよ、けども御前、伯父も本心から彼樣こと致したのでは御座いませぬでせうと思ひますの、御前の御贔屓に甘えまして一寸狂言を仕組んで見たので御座いますよ』
『ウム、其方の方が餘程物が解つちよる、――アヽ、僅かの間でも旅と思へば、濱子、誰憚らず、氣が晴々としをるわイ、ハヽヽヽ』
『ほんたうに左樣で御座いますのねェ、ホヽヽホ』
　人なき一室を我が世と樂みて、又た他事もなき折こそあれ、「バタリ」響ける物音に、何事と彼方を見れば、今しも便所の扉開きて現はれたる一客あり、陽春三月の花の天に遽然電光閃けるかとばかり眉打ち顰めたる老紳士の面を、見るより早く彼の一客は、殆ど匍はんばかりに腰打ち屈めつ、
『是れは／＼×藤侯爵閣下――』
　×藤と呼ばれし老紳士は、膝より濱子を下しつゝ、『ウム、山木か――』
『閣下、久しく拜謁を見ませんでしたが、相變らず御盛なことで恐れ入りまする』
『山木、隱居役になると、貴公等には用が無くなるからナ』
　と侯爵の冷かに笑ふを、山木剛造は額撫でつゝ、『是れは閣下、決して左樣な次第では御座りませぬが、――併し今日は誠に可い所で拜謁を得ました、實は是非共閣下の御權威を拜借せねばならぬ儀が御座りまして――』
　空嘯ける侯爵、『金儲のことなら、我輩の所では、山木、チト方角が違ふ樣ぢや――新年早々から齷齪として、金儲も骨の折れたものぢやの』
『閣下、實は舊冬から九州へ出掛けましたので

――或は新聞上で御覽になりましたことかとも愚察仕りまするが、此度愈々炭山坑夫の同盟罷工が始まりさうなので御座りまして――』

『ふウむ』と侯爵は葉巻の煙りも淡々しき鼻挨拶、心は遠き坑夫より、直ぐ目の前の濱子の後姿にぞ傾くめり、

濱子は彼方向いて、遙か窓外の雪の富士をや詮方なしに眺むらん、

十六の二

『閣下、近來社會黨がナカ〳〵跋扈致しまして、今回坑夫の同盟なども全く、社會黨の煽動から起つたので御座ります、此分では將來何の事業でも發達上、非常な妨碍を蒙りまするわけで、何卒此際嚴重に撲滅策を執らるゝ樣、閣下より一言、政府へ御指圖下さる儀を懇願致しますので――』

×藤侯爵は空吹く風と聞き流しつ、『二三の書生輩の空理空論を、左迄恐るゝにも足らぬぢやないか、況して勞働者などグヅ〳〵言ふなら、構はずに棄てゝ置け、直ぐ食へなくなつて、先方から降參して來をらう』

『所が閣下、何うやら亞米利加の勞働者などから、內々運動費を輸送し來るらしいので御座りまして、――若し外國の勢力が斯樣なことから日本へ這入つて來るやうになりませうならば、國體上容易ならぬ儀かと心得まするので』

『ナニ、山木、別段不思議無いではないか、勞働者が勞働者の金を輸入するのと、君等實業家連が外資輸入を遣り居るのと、何の違ひもあるまいではないか』

『では御座りまするが、閣下』と、山木は額を撫でつ、『探知致しましたる所では、近々東京に勞働者等の大會を開いて、何か穩かならぬ運動を企てまする樣子で、何うせ食ふことが出來ぬ亂暴漢の集りで御座りますから、何事が出來せんも圖られませぬ次第で――それに新聞と云ふ程のものでも御座りませぬが、兎に角同胞新聞など申す毒筆專門の機關を所持致し居りまするから、無智無學の貧民共は、ツイ誘惑されぬとは限りませぬ、尤も警察が少し確乎して居りまするならば彼等程のものに別段心配も御座りませぬが、何分にも閣下が總理の御時代とは違ひまして、警察の方なども緩慢極つて居りまするから――』

薄き眉ピリと動くと共に、葉巻の灰震ひ落したる侯爵、『山木、其の同胞新聞と云ふのは、篠田何とか云ふ奴の書き居るのぢやないか』

『ハ、篠田長二と申すので、閣下、御存じで御座りまするか』

『否や、顏は見たことないが、實に怪しからん奴ぢや、我輩のことなど公私に關はらず、攻擊を――』

と言ひさして、濱子を見やれば、濱子は艶かしく仰ぎ見つ、『御前、あの私のこと惡口書いた新聞でせう、御前、何卒讐討つて下さいな』

『ウム』と首肯きたる侯爵、『先年、彼等が社會民主黨を組織した時、我輩は末松に命けて直に禁止させたのぢや、我輩が憲法取調の爲め獨逸に居た頃、丁度ビスマルクが盛に社會黨鎭壓を行りをつた、然るに現時の內閣の者共が何も知らないから、少しも取締が屆かない――可矣、山木、早速桂に申し付けよう』

『閣下、誠に有難う御座ります』と山木は足の爪先まで兩手を下げつ、『イヤどうも、政府の大小、御世話なされまするので、御靜養と申すこともお出來なされず、御推察致しまする』

『ウム、何かと云ふと、直ぐ元老が呼び出されるので、兎てもかなはん――只だ美姬の幸に我勞を慰するに足るものありぢや、ハヽヽヽ、なア濱子』

汽車は早くも大船に着けり、一海軍將校、鷹

揚として一等室に乘り込みしが、忽ち姿勢を正うして、『侯爵閣下』

徐ろに顧みたる侯爵、『やア、松島大佐か――何處へ』

『横須賀からの』

十六の三

『松島さん』と慇懃に挨拶する山木剛造を、大佐は輕く受け流しつ、×藤侯爵と相對して腰打ち掛けぬ、

夕陽は尙ほ濃き影を遠き沖中の雲にとゞめ、汽車は既に淡き燈火を背負うて急ぐ、

ポケットより卷莨取り出して大佐は點火しつ、『閣下、又た近日元老會議ださうで御座りまして、御苦勞に存じます』

『松島、實に困らせをるぞ、權兵衞に少し確乎せいと云うて呉れ』

『閣下、其れは私共の方で申上げたいと存じまする所です、ヤ、モウ、先刻も横須賀へ參れば、艦隊の連中からは、大臣が弱いの、軍令部が腰拔だのと勝手な攻擊を受けます、元老方からは樣々御註文が御座りまする、民間からは出法題な非難を持ち掛ける、斯樣割の惡い役廻りは御座りませぬ』言ひつゝ、煙草の煙の間より、濱子の姿をチラリ〳〵と、横目に睨む、

大佐の目遣ひに氣づきたる侯爵、『や、松島、玆に居る山木は君の舅さうぢやナ、――先頃誰やらが來て切りに其の噂し居つた、彼の樣子では兎ても傘氏を長追ひする勇氣があるまいなどと嫉妬し居つたぞ、非常な美人さうぢやな、何時ぢや合衾の式は――山木、何時ぢや、我輩も是非客にならう』

山木は頭掻きながら、『ハ、未だ何時と確定致す所にも運びかねて居りまする樣な次第で――何分にも時局の解決が着きませぬでは――』

『ハヽヽヽ、時局と女とは何の關係もあるまい、戰爭の門出に祝言するなど云ふことあるぢやないか、松島も久しい鰥暮ぢや、可哀さうぢやに早くして遣れ――それに一體、山木、誰れぢや、媒酌は』

『ハ、表面立つた媒酌人と申すも、未だ取り定めたと申す儀にも御座りませぬ、何れ其節何殿かに御依賴致しまする心得で――』

『フム、其りや幸ぢや、我輩一つ媒酌人にならう、軍人と實業家の緣談を我輩がする、皆な毛色が變つて面白からう、山木、どうぢや』

『ハ、閣下が御媒酌下さりまするならば、之に越したる光榮は御座りませぬが――』

『松島、君の方は何ぢや』

苦笑しつゝ煙吹かし居たる大佐、『御厚意は感謝致しまするが、其れは最早御無用です』

『ナニ、無用ぢや、松島』

大佐は冷かに片頰に笑みつ、『はア、閣下、山木には無骨な軍人などは駄目ださうです、既に三國一の戀婿が内定つて居るんださうですから』

『フウ、外に在るのか、其りや一きは面白い、山木、誰ぢや、君の戀婿と云ふのは』

剛造は額中撫で廻して、『閣下、其れは松島さんのお戯れで、決して外に約束など有る儀では御座りませぬが――』

殆ど困却の山木を、松島は愉快げに尻目に掛けつ、『然らば閣下、山木の戀婿をば自分から御披露に及びませう――日本社會黨の領袖、無政府主義の張本、同胞新聞主筆篠田長二君と仰せられるのださうでッ』

『ヤ、松島さん』と色を失つて周章する剛造を、侯爵は稍々垂れたる目尻にキッと角立てて一睨せり、

『閣下、其れを御信用下されましては、遺憾千萬に御座りまする、全く松島樣の誤解で御座りまするから――』

『松島、事實相違ないか、何うぢや』

大佐は冷然たり、『閣下、私も帝國軍人で御座りまする』

『フム』と輕く首肯きて侯爵は又た山木の面を睨めり、

『閣下、其れは餘りに殘酷なことで御座りまする、私が社會黨などに娘を遣ることが出來ますものか出來ませぬものか、少し御賢察を願はしう存じまする、――近い御話が、閣下、今回炭山の坑夫同盟でも明かでは御座りませぬか、九州の方へは菱川だとか何だとか云ふ二三人の書生を遣つて奇激な演說などさせて、無智朦昧な坑夫等を煽動させ、自分は東京に居て總ての作戰計畫をして居るので御座りまする、皆な篠田長二の方寸から出でまするので――非戰論など唱へて見ても誰も相手に致しませぬ所から、今度は石炭と云ふ唯一の糧道を絕つ外ないと目星を着けて、到底相談のならない法外な給料增加の請求を坑夫等に敎唆し、其の請求の貫徹を圖ると云ふ口實の下に、同盟罷工を行らせると云ふのが、篠田の最初からの目的なので御座りまする、惡黨とも國賊とも、名の付けられた次第では御座りませぬ、――閣下、何して私が其樣なものへ娘を遣ることが出來ませう――其れで坑夫共の生活を支へる爲めに亞米利加の社會黨から運動費を取り寄せる手筈をする、其ればかりでは駄目ぢやと申すので、近々東京に全國勞働者の大會を開く計畫する、何れも其の張本は彼の篠田で御座りまする、左ればこそ先刻も、閣下、彼奴等の取締に就て、御盡力を嘆願したでは御座りませぬか――』

『ウム』と思案せる侯爵、『成程――何うぢや松島、山木の言ふ所道理至極と聞かれるでは無いか』

松島は莨くゆらしつゝ、『然し、閣下、御本尊が嫁きたいと申すものを、之を束縛する親の權力も無いでは御座りませぬか』

山木は顏突き出し、『其れは閣下、全く松島樣の御聞き誤りで御座りまする、先頃迄は娘共の參る敎會に篠田も居たので御座りました、其れで何かとあらぬ風評を致すものもあつたらしいで御座りまするが、彼の樣な不都合な漢子を置くのは、國體上容易ならぬことと心着きまして、私から敎會へ指圖して放逐致した次第で御座りまする――承りますれば、彼奴等平生、露西亞の虛無黨などとも通信し合つて居るさうに御座りまするし、其れに彼奴、敎會を放逐された後は、何でも駿河臺のニコライなどへ出入するとか申すので、警視廳でも、露西亞の探偵ではあるまいかなど、內々注意して居られるとか聞きまして御座りまする』

侯爵は切りに首肯きつ、『左樣ぢやらう、松島、別段疑惑する點も無いでは無いか――何うぢや、我輩が圖らず斯かる話を聞くと云ふも何かの因緣ぢやらうから、一つ改めて我輩が媒酌人にならう、山木、貴公の娘にも必ず異存あるまいナ』

十六の四

山木剛造は平身低頭、『御念には及びませぬ、閣下、是迄の所、何を申すも我儘育ちの處女で御座りまする爲めに、自然決心もなりかねましたる點も御座りましたが、舊冬、私出發の前夜も能く利害を申聞け心中既に理會致して居りまする、兎に角私歸宅の上、挨拶致す樣にと猶豫を與へ置きましたる樣の始末、歸京次第今晩にも判然致す筈で御座りまして――特に閣下が表面御媒酌下さると申聞けましたならば、一身の名譽、一家の光榮、如何ばかり喜びませうか』

『ハヽヽ、松島と篠田、こりや必竟帝國主義と社會主義との衝突ぢや、松島、確乎せん

となら んぞ』と侯爵は得意満面に松島を見やりつ、『然し松島、才色兼備の花嫁を周旋する以上は、チト品行を愼まんぢや困るぞ、此頃は切りと新春野屋の花吉に熱中しをると云ふぢやないか』

濱子は侯爵の顏さしのぞき、『御前、其の花吉と申す藝妓は先頃廢業したさうで御座んすよ』

侯爵は打ち驚き、『オヽ、廢業をつた――新聞に在つたと、濱子、其方は能う新聞を見ちよるな、感心ぢや――松島、其の根引き主は、貴公ぢや無いか、白狀せい』

松島の苦り切つたる容子に、山木は氣の毒顏に口を開きつ、『――實は、閣下、其れも矢張篠田の奸策で御座ります』

『ナニ、花吉を篠田が落籍せをつたと――フム、自由廢業、社會黨の行りさうなことぢや――彼女には我輩も多少の關係がある、不埒な奴、松島、篠田ちふ奴は我輩に取つても敵ぢや、可也、此上は山木の嬢は何事があるとも、必ず松島へ嫁らねば、我輩の名譽に係はるわい』

意氣軒昂、面色朱を濺ぎたる侯爵は忽然として山木を顧みつ、『然し山木、君もナカ／＼酬い男ぢやぞ、何うぢや、ぽん子は相變らず綺麗ぢやろナ、今を蕾の花の見頃と云ふ所を、突如に横合から根こぎにするなどは、亂暴極まるぢやないか、松島のは社會主義に對する帝國主義の敗北、我輩のは金力に對する權力の失敗ぢや』

頭掻きつゝ山木の困却の態に、侯爵は愈々興を催しつ、『何程花婿が放蕩して、大切な娘が泣きをつても、苦情を申入れる權利があるまい、ハヽヽヽヽ、山木、君の樣な爺の機嫌取つて日蔭の花で暮らさせるは、ぽん子の爲めに可哀さうでならぬぢや』

剛造は只だ赤面恐縮、

大佐はニヤリ濱子を一瞥しつ、『が、閣下、山木は閣下に比ぶれば、未だ十幾つと云ふ弟ださうですよ』

剛造ほッと一道の活路を得つ、『大きに松島樣の仰の通りで、ヘヽヽヽヽ』

侯爵も頭撫でて大笑しつゝ、『ヤ、松島、最早舅の援兵か、餘り現金過ぎるぞ』

『品川々々』と呼ぶ驛夫の聲と共に汽車は停りぬ。

『オヽ、もう品川ぢや、濱子』と侯爵は少女の手を採りて急がしつ、『今夜は杉田の別莊に一泊するから失敬する』言ひ棄てたるまゝ悠然降り立ちて、闇の裡へと影を沒せり、

窓に凭りて見送り居たる松島は舌打ちつ、『淫亂爺の耄碌ッ』

十七の一

麹町は三番町なる清風女學校には、今日しも新年親睦會、

校友の控所に充てられたる階上の一室には、盛裝せる丸髷、束髮のいろ／＼居並びて、立てこめられたる空氣の、衣の香に薫りて百花咲き競ふ春とも言ふべかりける。

中央の椅子に懸りたる年既に五十にも近からんと思はるゝ麥澤教授、小皺見ゆる頰邊に笑の波寄せつ、『皆さんが立派な奧樣におなりなすつたり、阿母さんにおなりなすつた御容子を拜見する程、私共に取つて樂は御座んせんのね、之を思ふと私などは能くまア腰が屈つて仕舞はないと感心致しますの――否エ、此頃は、もう、ネ、老い込んで仕樣がありませんの、自分ながら愛想が盡きる程なんですよ――斯う御見受け申した所、夏野樣の旦那樣は内務の參事官、秋葉樣のは衆議院議員、冬田樣のは日本銀行の課長さん、春山樣のは陸軍中尉、蓮池樣のは大學教授、何殿も國家の大任ですねエ、櫻井

様のは留學中で御歸朝の後は醫學博士、松村様のは辯護士さん――』

と、次第に讀み上げ行きしが、偖其次席に列なれる山木梅子が例の質素の容子を見て、暫し躊躇ひつ、『山木様は獨立で、婦人社會の爲めに御働きなさらうと云ふ御志願で、殊に阿父は屈指の紳商で在らつしやるのですから』

と、相當なる理由を發見して頌徳表を呈したる時、春山と呼ばれたる陸軍中尉の妻女、『あら、麥澤先生、山木様は疾くに御約束で、最早近々に御輿入れになるんですよ』

と、黄色な聲して嘴を容れぬ、

『左様ですか』と、麥澤女教授は圓くしたる眼を、忽ち細くして笑みつくろひ、『山木様、まア、お目出度御座います、存じませんでしたもんですから、ツイ、失禮致しましてネ、――シテ、春山様、何殿』

『先生が御存じ無かつたとは驚きましたねエ』

と春山は容子つくろひ、『あの、海軍大佐の松島様へ』

『オヽ、あの松島さんへ』と女教授は驚きしが、『實權海軍大臣などと新聞で拜見する松島さんへ――左様ですか、山木様、貴嬢にはほんとに御似合の御縁組ですよ』

一座の視線は皆な沈默せる梅子の面上に集まりぬ、

松村と言へる辯護士の妻女は、獨り初めより怪しげに打ち目もり居たりしが、『先生、私も山木様の御縁談の御噂をお聞き申しましたが、只今の御話とは少し違ふ様ですよ』

『エ、松村様、ぢや何殿と仰しやるのです』、

松村は梅子の顔恐る〳〵見やりながら、『間違ひましたら山木様、御免下さいな――あの、同胞新聞社の篠田様へ――』

麥澤教授は反齒剥き出してハツハと打ち笑へり、『松村様、何を仰しやる、――山木様が何で彼様男の所などへお嫁でになるもんですか、私も何時でしたか、何かの席で篠田と云ふ人見ましたがネ、貴女、彼は壯士ですよ、何して彼様貧乏人と山木様が御結婚出來ますか』

『いゝえネ、先生、只だ私は山木様の教會と關係のある人から聞いたのですから――』

と松村の穩かに辯疏するを、彼の春山はシャちやり出でつ、『私は良人から聞きましたのです、現に松島様が御自分で御披露になりましたさうで、軍人社會では誰知らぬものも無いので御座います』

曰く松島自身の披露、曰く軍人社會の輿論、而して之を言ふものは、現に陸軍中尉の妻女、何人か又た之を疑はん、『山木様はタシカ軍人はお嫌の筈でしたがネ』『獨身主義の御講義を拜聽した様にも記憶致しますが』『オールド、ミスも餘り立派なものでありませんからね』など、聞えよがしの私語も洩れぬ、

梅子が餘りの沈默に、一座いたくシラけ渡りぬ、

扉開かれて、歷年の老小使、腰打ち屈めつ、『山木様――菅原の奧様が五號室に御待ち受けで御座います』

之を機會に梅子は椅子を離れつ、『失禮』と一揖して溫柔に出で行けり、

十七の二

第五號教室のピヤノの側に人待ち顔なる大丸髷の若き婦人は、外務書記官菅原道時の細君銀子なり、扉しとやかに開かれて現はれたる美しき姿を見るより早く、嬉しげに立ち上りつ、『オ、梅子さん』

『銀子さん』

相見て嫣然、膝つき合はして椅子に坐せり、

『梅子さん、ほんとに久濶ですことねエ、私、貴嬢に御目に懸りたくてならなかつたんです

よ、手紙でとも思ひましたけれどもネ、其れでは何やら物足らない心地しましてネ—今日も少し他に用事があつたんですけれども、多分、貴孃が御來會になると思ひましたからネ、差繰つて參りましたの』

『私もネ、銀子さん、此頃切りに貴女が懷かしくて堪らないで居ましたの、寧そお邪魔に上らうかと考へましたけれどネ、外交のことが困難いさうですから、菅原樣も定めて御多用で在らつしやらうし、貴孃にしても矢張り御屈託で在らつしやらうと遠慮しましてネ』

『あら、梅子さん、いやですことねエ、——結婚すると御友達と疎遠になるなんて皆樣仰しやるんですけれど、貴孃まで矢張り其樣事を仰しやらうとは思ひも寄りませんでしたよ』

『銀子さん、左樣ぢやありませんよ』

銀子は熟々と梅子の面打ちまもり居たりしが、『梅子さん、貴孃ほんとに御憔悴なすつたのねエ、如何なすつて——』

『否、別に如何も致しませんの』

『けども、何か御心配でもおありなさらなくて』

『否——心配と云ふ程のこともありませんがネ——』

『心配と云ふ程で無くとも、何か御在りなさるでせう』

と銀子は顏差し付けて聲打ちひそめ、『私、貴孃に御聽きせねば安心ならぬことがあるんですよ——梅子さん、貴孃、ほんとに彼の海軍の松島樣と御約束なさいまして——』

梅子は目を閉ぢて無言なり、

『梅子さん、私ネ、其を道時から聽きましても、貴孃から直接に聽かなければ安心が出來ないんですもの』

『銀子さん、貴女まで其樣風評を御信用下さるんですか——』涙ハラ〳〵と膝に落ちぬ、

銀子は梅子の手を握れり、『梅子さん、貴孃は私が、其樣風評を信用するものと御疑ひ下さいますの——』

梅子は握られし銀子の手を一きは力を籠めて握り返しつゝ、『否、銀子さん、私は學校に居た時と少しも變らず、貴孃を眞實の姉と懷つて居るんです』

『梅子さん、有難う——何うしたわけか、初めて入學した時から貴孃とは心が會つて、私が一つ年上ばかりに貴孃の姉と呼ばれる樣になつたことは、何程嬉しいとも知れないのです、道時が何か私の非難など致します時には、併し私の妹に山木梅子と云ふ眞の女丈夫が在りますよと誇つて居るのです——丁度昨年の十月頃でしたよ、外交問題が八釜敷なり掛けた頃と思ひますから——道時が晩餐の時、冷笑ひながら、お前の御自慢の梅子さんも、到頭海軍の松島の所へ行くことに成つたと言ひますからネ、私は斷然之を打ち消したのです、梅子さんも御自分で是れならばと信じなさる男子を得なすつたならば、進んで御約束もなさらうし、又た強ひても御勸め申すけれど、軍人は人道の敵だとまで思つて居なさる梅子さんが、殊に不品行不道徳な松島樣などに御承諾なさる筈が無い、又た若し其れが眞實ならば必ず梅子さんから、御報知がある筈だと頑張つたのですよ、スルと憎らしいぢやありませんか、道時が揶揄半分に、假令梅子さんからの御報知は無くとも、松島の口から出たのだから仕樣が在るまい抔と言ひますからネ、彼樣松島樣などの言ふことが何の證據になりますと拒絶けて遣りましたの、其ッきり道時も何も言ひませんでしたがネ、昨日ですよ、外務省から歸りましてネ、服も更めずに言ふんです、梅子さんの結婚談も愈々進んで、×藤侯が媒介者となられ、近日中に式を擧げらるさうだと、大威張に言ふぢやありませんか、私には如何しても解らないのです、相手が松島

樣で、媒介が×藤侯と云ふんでせう、梅子さん、貴孃が地獄の子にでも生れ變つて來なすつたのを見た上でなくては、私は假令道時の言葉でも、信用することが出來ないんです』

『銀子さん、姉さん、──有難う──』梅子は目を閉ぢて涙を堰きぬ、

十七の三

『けどもネ、梅子さん』と銀子は容を改めつ、『貴孃は飽く迄も獨身主義を遣り徹さうと云ふ御決心なの』

梅子は只だ首肯きつ、

『私ネ、梅子さん、貴孃の獨身主義には、心から同情を持つてるんですよ──貴孃の家庭の御事情は私も能く存じて居るんですからネ──けれど私、梅子さん、怒りなすつちや厭よ、日常さう思ふんですの、貴孃の深い心の底にほんとに戀と云ふものが無いんだらうかと──學校に居た頃の貴孃のことは私、能く知つててよ、貴孃の御心は、只だ亡き阿母を懷ふ麗はしき聖き愛に溢れて、外には何物をも容れる餘地の無かつたことを──皆さんが各々理想の男を描いて泣いたり笑つたり、鬱したりして騷いで居なさる時にでも、眞正に貴孃ばかりは別だつたワ──他人樣のことばかり言へないの、私だつてもネ、梅子さん、笑つちや厭よ、道時のことでは何程貴孃の御世話樣になつたか知れないワ、私、貴孃の御恩を忘れたこと有りませんよ──彼頃の貴孃の御面は全く天女でしたのねェ──けれど梅子さん、今貴孃を見ると、何處とも無く愁の雲が懸つて、時雨でも降りはせぬかの樣に、憂鬱の色が見えるんですもの、そりや梅子さん、貴孃ばかりぢやない、誰でも、齡と共に苦勞も增すに定つて居ますがネ、只だ私、貴孃の色に見ゆる憂愁の底には、女性の誰も免れない愛情の潛んで居るのぢや無からうかと思ふんですよ──私などは斯樣輕卒なもんですから、直ぐ擧動に顯はして仕舞ひますがネ、貴孃の樣に強意した方は、自ら抑へるだけ、苦痛も一倍酷いだらうと察しますの──』

俯ける梅子に、銀子は身をスリ寄せつ、『若し、梅子さん、御氣に障つたなら赦して頂戴な、私只だ氣になつて堪らないもんですから、心の有りたけを言ふのですよ──私だつて道時のことでは何程恥かしいことでも皆な打ち明けて、貴孃に御相談したでせう、其れでこそ始めて姉妹の契約の實があると言ふんですわねェ──梅子さん、後生ですから貴孃の現時の心中を語つて下さいませんか』

『銀子さん』と良久ありて梅子は聲顫はしつ、『四年前の貴女の苦痛を、今になつて始めて知ることが出來ました──』

『能く言うて下さいました、梅子さん』と銀子は嬉しげに、『今度は私が先年の御恩返しに何樣奔走でも致しますよ──梅子さん、ツイ、御名を知らして下さいな』

「銀子さん、貴女の御親切は御禮の申しやうもありませんが、到底事情が許さないのですから、只だ此れだけは私に取つて祕密の一ツに許して下さいませんか──貴女に打ち明けないと云ふのは、私も何樣に心苦しいか知れないのですけれど──』梅子は脣を嚙んで聲を呑みぬ、

銀子は暫し思案に暮れしが、獨り心に首肯きつ、『──梅子さん、私知つてますよ』

梅子は愕然として銀子を見たり、

『若し梅子さん、間違つてたなら勘辨して下さいな──あの、篠田長二さんて方ぢやありませんか──』言ひつゝ銀子は凝乎と梅子を見たり、梅子は胸を押へて復た只だ俯きぬ、

『梅子さん、私、それを或る方から聞いたのですよ──ほんとに不思議なものですねェ 自

分では夢にも洩らしたことの無い祕密を、世間が何時か知つてるんですもの――慥に宇宙の神祕なのねエ――私、梅子さん、此の風說は心に信じたの、何故と云ふに篠田さんて方の御性質や其の御行動が、如何にも貴孃の嗜好に適合してるんですもの――梅子さん、私は未だ篠田さんをお見掛け申したことが無いのです、けども私それと無く道時に尋ねて見ましたの、道時は是れ迄も能く御目に懸るさうでしてね、大層讃めて居りましたの、恐るべき偉い人物であると敬服して居るんですよ――けれど梅子さん、私何程一人で心を痛めたか知れないワ――、貴孃の阿父は篠田さんを敵の如く憎んで在らつしやるんですとねエ――まア、何うしたら可いんでせう――梅子さん』

『銀子さん――皆樣は私の獨身主義を全然砂原の心かの樣に思つて下さいますけれど、――凡ては神樣が御承知です』梅子はハンケチもて眼を掩ひつ、『銀子さん、貴女とお別れして三年の心の歷史を、私の爲めに聞いて下さいますか』

十七の四

『梅子さん、何卒聽かして頂戴』

梅子は暫し心に談話の次序整へつ、『學校時代の私は、銀子さん、貴女能く御存じ下さいますわねエ――彼の一時バイロン流行の頃など、貴女を始め皆樣が切りに戀をお語りなさいましたが、何したわけか私には、其の興味を感ずることが出來ませんでしたの、貴女に疑はれたことなども私能く記憶して居りますよ――私も折々自分で自分を怪しんだこともありますの、私の心が不健全であるのでは無からうか、愛情と云ふものを宿さない一種の精神病のではあるまいかと――けれど私は只だ亡き母を懷ひ、慕ひ想像する以外に、如何にしても生の心を轉ずることが成らなかつたのです――皆樣能く男子の集會などへ行らつしやいましたわねエ――あら、銀子さん、貴女のこと言ふのぢやなくてよ――けれど私の樂は日曜に、青山の母の墓に參詣して、其れから永阪の教會へ行つて、母の彈いた洋琴の前に坐ることの外は無かつたのです、私の文章も歌も何時も母のことばかりなんですから、貴孃の思想は餘り單調だと、先生にお叱を受けましたの――其れから學校を卒業する、貴女は菅原樣へ嫁らつしやる、他の人々も其れ〳〵方向をお定めになるのを見て、私も何が自分に適當した職分であらうかと考へたのです――貴女に御相談したことがあつたでせう――貴女も贊成して下すつたもんですから、私は貧民の兒女を教育して見たいと思ひましてネ――亡母の日記などの中にも同じ教育を行るならば、貧乏人の兒女を教へて見たいと云ふことが澤山書いてあるもんですからネ――其れを父に懇願したのです、けれど銀子さん、貴女も御承知の如き私の家庭でせう、父は私が實母の顏さへ知らないのを氣の毒に思つて居ます所から、餘程私の願ひに傾いて呉れましたけれど……後には父から私に賴む樣にして、其れを思ひ止まつて呉れよと言ふのですもの――私は、銀子さん、其時始めて世の中に失望と云ふことの存在を實驗したのです――』

『銀子さん』と梅子は語を繼ぎつ、『其頃私は貴女の曾ての傷心に同情しましたの、何時でしたか、貴女は夜中に私の寄宿室に來らしつて仰しやつたことがありませう、――若し如何しても菅原樣へ嫁くことが出來ないならば、私は一旦菅原樣へ獻げた此の聖き生命の愛情を、少しも破毀らるゝことなしに抱いた儘、深山幽谷へ行つて終ふ心算だつて――』

『あら梅子さん』と銀子は面赧らめつ、『貴女も思ひの外、人が惡くつてネ――』

『左樣ぢやありませんよ』と、梅子も思はず片頰

に笑みつ、『只だ私も其時始めて、貴女と同じ様な痛苦を感じたと云ふ迄のことお話するんぢやありませんか――それで銀子さん、私は全然沙漠の中にでも居る様な寂寞に堪へないでせう、而すると又た良心は私の甚だ薄弱であることを責めるでせう、墓所へ詣りましても、教會へ参りましても、私の意氣地ないことを叱る様な亡母の聲が聞えるぢやありませんか、あゝ寧そ死んだならば、斯様不愉快な苦境から脱れることが出來ようなどと、幾度思ひ浮んだか知れませんよ――斯う云ふ厭な月日を送つて、夜も安然に夢さへ結ぶことなしに思ひ惱んで居た時、私は――銀子さん――何とも知れない一種の感動に打たれましたの――』

言ひ澁る梅子の容子に銀子は嫣然一笑しつゝ、

『篠田様に御會ひなすつたと仰しやるんでせう』手を擧げて思ふさま、ピシャリと梅子の膝を打てり、

梅子は眞紅になりて俯きぬ、

十七の五

『それから梅子さん、如何なすつて』

と銀子はホヽ笑みつゝ促すを梅子は首打ち振りつ、『私、いや、貴女はお弄りなさるんだもの――』

上氣せる美しき梅子のあどけなき面を銀子は女ながらに惚れ／＼と眺め、『私が惡かつたの、梅子さん、何卒聴かして下さいな』

『何だか可笑しいのねエ』と、梅子は羞かしげにホヽ笑みつ、『一昨々年の四月の初め、丁度櫻の咲き初めた頃なの、日曜日の夜の説教をなすつたのが――銀子さん、私、何だか――』

と面背くるを、銀子は聲低めて、『其方が篠田様であつたんでせう』

梅子は俯目に首肯きつ、『左様なんです、長く米國に留學なされた方で、今度永阪教會へ轉會なされたと云ふんでせう、何様な人であらうと思つて居ますとネ、やがて講壇へお立ちになつたのが、筒袖の極めて質朴な風采で、彼の華奢な洋行歸の容子とは表裏の相違ぢやありませんか、其晩の説教の題は、「基督の社會觀」と云ふのでしてネ、地上に建つべき天國に就て、基督の理想を御述べになつたのです、今の社會の組織は全く基督の主義と反對の、利己主義を原則とするので、之を根本から破壞して新時代を造るのが、基督教の目的だと仰しやるのです――初め私は、現在の社會の罪惡を攻撃なさる議論の餘り恐ろしいので、殆ど身體が戰慄へる様でしたがネ、基督の平和、博愛、犠牲の御精神を、火焔の様な雄辯でお演べなすつた時には、何故とも知らず聴衆の多くは涙に暮れて、二時間許の説教が終つた時には、滿場只だ醉へる如き有様でした、――彼の時の説教は私、今でも音樂の如く耳に殘つて居ますの――其晩は私、一睡もせずに考へましたの、そして基督の十字架の意味が始めて心の奥に理解された様に思はれましてネ、嬉しいとも、勇ましいとも譯らずに、心がゾク／＼躍り立つて、思ふさま有りたけの涙を流したんですよ、インスピレーションと云ふのは、彼様した狀態を言ふのぢやないか知らと思ひますの、其れからと云ふもの、昨日迄の無情の世の中とは打つて變つて、慥に希望のある樂しき我が身と生れ替つたのです、――そして日曜日が誠に待ち遠くて、教會が一層懷かしくて――彼人の影が見えると只嬉しく、如何かして御來會なさらぬ時には、非常な寂寞を感じましてネ、私始めは何のことも氣が着かなかつたのですが、或夜、何でも五月雨の寂しい夜でしたがネ、餘り徒然の儘、誰やらの詩集を見てる時不圖、ア、私ヤ戀してるんぢや無いか知らんと、始めて自分で覺りましたの、――』

涙に滿てる梅子の眼は熱情に輝きつ、ありし心の經過一時に燃え出でて恍然として夢路を辿るものの如し、

銀子も我が曾ての實驗と思ひ較べて、そゞろに同情の涙堪へ難く、『梅子さん、貴孃の御心中は私能く知ることが出來ますの』

『けれど銀子さん』と、梅子はうな垂れつ、『其の心の裡の喜びも束の間で、苦痛の矢は忽ち私の胸に立つたのです、其れは貴女も御聞き及びになりましたやうに、私の父と篠田樣とが、仇敵の如き關係になつたことです、けれど――銀子さん、私は篠田樣の御議論が至當だと思ひました、私は常に父などの營利事業に不愉快を感じて居たのです、決して道理にも德義にも協つたことゝは思ひませんでしたが、篠田樣の御議論を拜見して、始めて能く父等の事業の不道理不德義なる、說明を得たのでした、其れで私は、彼人を良人にすると云ふことは事情の許さないものと思ひ諦め、又た一つには、私の樣な不束な者が、彼樣な偉い方の妻となりたいなど思ふのは、身の程を知らぬものと悟りましてネ、其れに彼人は既に家庭の幸福など云ふ問題は打ち忘れて、只だ偏に主義の爲めに御盡しなさるのを知りましたものですから、私は心中に理想の良人と奉仕いて、此身は最早や彼人の前に獻げましたと云ふことを憖に神樣に誓つたのですよ』

彼女は心押し鎭めつ、『ですから銀子さん、私の心は決して孤獨ではありません、――節操は女性の生命ですもの、王の權力も父の威力も、此の神聖なる愛情の花園を犯すことは出來ません、――此頃父が九州からの歸途で、×藤侯と同車したとやらで、侯爵が媒酌人になられるからと、父が申すのです、まア何と云ふ穢はしいことでせう、×藤侯と云ふものは我々婦人に取つては共同の讐敵ではありませんか、銀子さん 私が松島樣の申込を拒絕する爲めに、假令私の父が破產する如き不幸に逢ひませうとも、私は決して節操を潰すやうな弱い心は起しません、父の財產は不義の結果です、私は富める不義の家に惱める心を抱いて在るよりも、貧しき清き家に樂しき團欒を望んで居るのです――銀子さん、何卒安心して下さいな』

梅子の美しき面は日の如く輝けり、

銀子は袖かき合はせて傾聽しつ、『――梅子さん、貴孃ほんとに幸福ネ――私 羨しいワ』

其の語尾の怪しくも曇を帶ぶるに、梅子は眸を凝して之を見たり、

十七の六

『銀子さん、私の何處に羨ましいことがありますか、貴女こそ婦人中の最も幸福な方だと、私 眞實思ひますよ』

答なき銀子の長き睫毛には露の玉さへ貫くに梅子はいよ〳〵怪みつ、『貴女、何かおありなすつて――』

『梅子さん』と銀子は始めて涙を呑みつ、『――男と云ふものはほんとに厭なものだと思ひましてネ、そりや女の方に足らぬ所がありもしませうけれど――』

『けれど銀子さん、道時さんに何もおありなさるんぢや無いでせう』

『梅子さん、私、貴孃だから何も角もお話ししますがネ――欠點有るんですよ つまり、私の不束故に、良人に滿足を與へることが、出來ないのですから、罪は無論私にもありますけれど、――男も亦た餘り我儘過ぎると思ひますの――梅子さん、是れは世界の男に普通のでせうか、其れとも日本の男の特性なのでせうか』

『けれど銀子さん、道時さんが不品行を遊ばすと云ふ樣なことでは無いでせう』

銀子は俯きて首を振りぬ、

良久ありて銀子はホッと吐息しつ、『梅子さん、ほんとに幸福と思つたのは、結婚後の一年許でしたの、私の心が靜實に連れて、次第に私を輕蔑する樣になるんですよ──折々はネ、私の爲めに餘儀なく此樣結婚をして一生不幸を見たなんて、殘酷いことさへ言ふんですよ、──言はれて見れば私にも弱點があるから、言ひたいこともヂッと耐へて居ますけれども、餘り身勝手過ぎるぢやありませんかネ──それにネ、着物だの、何だのも、此頃は斯樣云ふのが流行だなんて自分で註文するんですよ、何處の流行かと思へば、貴孃、皆な新橋邊のぢやありませんか──婦人は矢張り日本風の溫柔いのが可いなんて申してネ、自分が以前盛に西洋風を唱へたことなど忘れて仕舞つて、私にまで斯樣丸髷など結はせるんですもの、私恥かしくて、口惜しくて堪りませんの──』

銀子は落つる涙拭ひつゝ、『それに梅子さん、他の方の細君など不思議だと思ひますよ、男子の不品行は日本の習慣だし、殊に外交官などは其れが職務上の便宜にもなるだからなんて、平氣で在らつしやるんですよ──梅子さん、私は嫉妬心が强いと云ふのでせうか』

『嫉妬心──』と梅子も覺えず、顏紅らめつ、『如何なる人でも境遇に打ち克つと云ふことは餘程困難ですから、私は日本の樣な不道德な社會に在る婦人は、とても男子から報酬を望むことは斷念せねばならぬと思ひますの、愛くるよりも與ふるが寧ろ幸福ぢやありませんか、貴女が全心を擧げて常に道時さんを愛して居なさるならば必ず慚愧して、昔日に優る熱き愛情を貴女に與へなさる時が來るに違ありません』

『ア、梅子さん、其れが眞理なんでせうねエ──』

『銀子さん、ほんとに貴女こそ幸福ねエ──何故ツて？──貴女は愛に成就なされたぢやありませんか、現今の貴女は只だ小波瀾の中に居なさるばかりです、銀子さん、何卒、私を可哀さうだと思つて下さい、──私の全心が愛の焔で燃え盡きませうとも、其を知らせる便宜さへ無いぢやありませんか、此のまゝ焦がれて死にましても、ア、氣の毒なことしたとだに思つて貰ふことがならぬではありませんか──何と云ふ不幸な私の鼓膜でせう、「我は汝を愛す」と云ふ一語の耳語をさへ反響さすることなしに、墓場に行かねばなりませんよ──』

『梅子さん』突如銀子は梅子の膝に身を投げ出し、涙に濡れたる二つの顏を重ねつ、『梅子さん──寄宿舍の二階から閃く星を算へながら、「自然」にあこがれた少女の昔日が、戀しいワ──』

ワッと泣き沈る聲を無理に制せる梅子は、ヒシとばかり銀子を抱きつ、燃え立つ二人の花の唇、一つに合して、暫し人生の憂きを逃れぬ、遠音に響くピヤノとヴァイオリンの節面白き合奏も、神の御園の天樂と聽かれて、

十八の一

國民の耳目一に露西亞問題に傾きて、只管開戰の速かならんことにのみ熱中する一月の中旬、社會の半面を顧れば下層劣等の種族として度外視されたる勞働者が、年々歲々其度を加ふる生活の困苦慘憺に、漸く目を擧げて自家の境遇を覺悟するに至り、沸騰せんばかりの世上の戰爭熱も最早や、彼等を痲醉するの力あらず、彼等の心の底には、戰爭に全勝せよ、去れど我等は益々苦まん』との微風の如き私語を聽く、去れば九州炭山坑夫が昨秋來增賃請求の同盟沙汰傳はりてより、同一の境遇に同一の利害を感ずる各種の勞働者協同して、緩急相應ぜんとの要求日に益々激烈を加へ、四月三日を以

て東京市に第一回勞働者大會議を開くべきこととはなりぬ、

其の中堅は社會主義倶樂部にして、篠田長二の同胞新聞は實に其の機關たり、

齒牙にも掛けずありける九州炭山坑夫の同盟罷工今や將に斷行せられんことの警報傳はるに及んで政府と軍隊と、實業家と、志士と論客と皆な始めて愕然として色を失へり、聲を連ね筆を揃へて一齊に之を讒謗攻擊して曰く『軍國多事の隙に乘じて此事をなす、先づ賣國の奸賊を誅して征露軍門の血祭せざるべからず――』

＊　＊　＊　＊

勞働者の大會準備の爲めに、今宵しも上野鶯溪なる鍛工組合事務所の樓上に組合員臨時會開かれんとするなり、寒風膚を裂いて、雪さへチラつく夕暮より集まりたるもの既に三百餘名、議長の卓上には書類堆く積まれて開會の鈴を待ちつゝあり、

此時階下の事務室、扉を鎖して鳩首密議する三個の人影を見る、目を閉ぢて沈默する四十五六とも見えて和服せるは議長の浦和武平、眉を昂げて咄々罵る四十前後と覺しき背廣は幹事の松本常吉、二人を對手に喋々喃々する未だ二十六七なる怜悧の相、眉目の間に浮動する青年は同胞新聞の記者の一人吾妻俊郎なり、

松本は拳を固めて卓を打ちつ、『實に怪しからん奴だ、其事は僕も豫め行德君に注意したことがあつたが、行德君は無造作に打ち消して仕舞つた――八ツ裂きにしても此の怨は霽れない』

『然し、松本君、餘りに意外な報告なので私は何分にも信用出來ませぬで――』と、浦和は瞑目のまゝ思案に沈めり、

『イヤ、浦和さん』と吾妻は乘出で、『信用なさらぬのは御道理です、斯く云ふ僕が最初は如何しても出來なかつたですから、――御承知の如く僕は從來篠田を殆ど崇拜して居たんでせう、彼の祕書官の如く働くので、社員中に大分不平嫉妬の聲が盛なのです、けれど一身の毀譽褒貶の如きは度外に措きて、只だ篠田の爲めに一臂の勞を執ることを無上の滿足として居たのです――然るに段々彼の內狀を詳にすると、實に其の裏面に驚くべき卑劣の野心を包藏することが聊か疑ないので――御兩君、僕は實に失望落膽の爲め殆ど發狂するばかりに精神を痲めたです――乍併更に退て考へると、是れは徒らに愁歎して居るべき時でない、僕の篠田を崇拜したのは其の主義に在るのだ、彼が主義の假面を被つて、却て我等同志を賣ることを目的として居る賣節漢、否な最初からの間諜であると知つた以上は、斷然我が主義の爲めに之を斬らねばならぬと決心したです、故に僕は今夜敢て兩君に密告して、鍛工組合の名を以て此の賣節奴を制裁せらるゝことを希望するです』

明朗なる音聲もて滔々述べ來れる吾妻は、悲憤の淚を絞りつゝ、『兩君――篠田が山木剛造の娘に戀着して、其の二萬圓の持參金に眩惑して、資本黨の門に降參したことは、最早や一點の疑もない――彼は今度の勞働者大會を內部から打ち壞して、其れを結納として結婚式を擧げるのだ――彼は我々勞働者に取つて獅子身中の蟲であるツ――』

『僕は吾妻君を信ずる、僕は初めから彼を疑つて居たのだ、――今夜もヅウ／＼しく來て居るのだ、――可也』

と言ひ棄てて起ち上らんとする松本を、暫しとばかり浦和は制しつ、『失禮の樣ですが私には未だ理解が出來ません』

十八の二

『僕が篠田の諷告でもすると云ふんですか』と、吾妻は憤然として浦和に詰め寄る、

一否や、譴告など申すのぢやありませんがネ』と浦和はしとやかに、『随分誤解と云ふこともあるものですから――篠田様が主義を賣つて山木の娘と結婚なさるなどとは何分にも想像が着きませんよ、第一、篠田様は山木の為めに教會の方を除名されなすつた程ですからナ』

『サ、其れが』と吾妻はセキ込み、『君、魂膽の在る所です、其れ程に仕組まねば我が同志を欺くことは出來ないのだ、現に見給へ、既に除名と定まつて居る教會の親睦會へ、而も山木の別莊で開いた親睦會へ出席したのは何故であるか、特に其日山木の娘の梅子と云ふのと密會したのは何故であるか、其上に山木の長男の剛一と云ふのなどは常に篠田の家へ出入して居るでは無いか――特に君等は知らぬであらうが、彼が表面非常な貧窮と質素とを裝ふに拘らず、其の實は驚くべき華奢贅澤をして居るのだ、彼を指して道徳堅固な君子だなど思ふのは、其の裏面を知らない者の買ひかぶりである、僕の如きも現に欺かれて居た一人のだ、そりや君、酒は飲む放蕩はする、篠田の僞善程恐るべき者は無い、現に其の掩ふべからざる明證の一は、彼の藝妓の花吉を誘拐して內々自分の妾にしたのでも判つて居るぢやないか』

『左樣だ〳〵、毫も疑ふ所は無い』と松本は愈々激昂しつ、『現に今度の九州炭山の一件でも知ることが出來る、本來ならば篠田が自身に出掛けて大に煽動せにやならないのだ、然るに自分は東京に寢て居て、少しばかり新聞でお茶を濁してるんぢや無いか、僕は最初から彼奴が嫌ひだ、耶蘇ばかり振り廻しやがつて――』

浦和は眼を閉ぢて沈默す、

吾妻は聲を打ちひそめて、『君、新聞社內では既に篠田の賣節を誰一人疑ふものは無いのだ、只だ餘り目立たずに彼を放逐しなければ社其物の名譽に關するから、非常に苦心してるのサ、――彼が內々消費する金錢のことを考へるに、尋常のもので無いことは明白だ、多分露探ぢや無からうかと云ふ社內の輿論だがネ、――浦和君、僕の心事は君も知つて居るぢやありませんか、僕が何を好んで我が先輩たり恩人たる彼の不利を圖るもんですか、大抵推察して呉れ給へ――』

『モウ、判つたよ、是れ程の證據があれば十分だ、吾妻君、若し君が無かつたならば、我黨は非常な運命に陷る所であつた』と、松本は昂然として席を離れ、『浦和君、時間が餘程過ぎた』と急がしつ、ガチリ、錠を解きて廊下に出でぬ、

浦和は腕拱きたるまゝ其後を追へり、

＊　＊　＊　＊　＊

やゝ待ち倦みたる會員は急霰の如き拍手を以て溫厚なる浦和議長を迎へたり、議長は徐ろに開會の辭を宣して、今や書記をして今夜の議案を朗讀せしめんとする時、『議長ッ』と、大聲に叫びて幹事松本常吉は起ち上りつ、『本員は議事に入るに先ちて、一個の緊急動議を提起せねばなりませぬ』

彼は梟の如き鋭き眼を放つて會衆を一睨せり、滿場の視線は期せずして彼の赤黒き面上に集まりぬ、

松本は咳一咳しつ、『我が鍛工組合の評議員篠田長二君の身上に就て、一個の動議を提出するんですから、先づ同君に向て暫時退席を要求致します』

議席は騷だてり、『我々は眞實を以て交はる者なれば、他の議會に見る如き忌避或は祕密等の厭ふべき慣例を用ゐざるべしとの議論盛なりしが、篠田はやがて起ち上りつ、

『我輩も實に其議論の主張者でありますが、既に發議者よりの要求ある以上は、發議者をして十分に言はんとする所を盡さしめん爲め、謹で自ら退席致します』一揖して出で去れり、

其の後影を一睨したる松本、『諸君――我組合が尊敬して評議員の名譽をさへ與へたる篠田長二君が、何ぞ圖らん、却て私利私慾の爲めに我々の權利と幸福を賣つて資本家黨に降服したる證據を提へたのである』

松本は議席を見廻せり、

會衆は再び騷ぎ立てり、『畜生』『馬鹿野郎』『除名せよ』『斬つて仕舞へ』等の聲は一隅より囂々と起れり、『誣告』『中傷』『證據を示せ』等の聲は他の一隅より喧々と起れり、

『御指揮に及ばず、其證據を御覽に入れるのです』と松本は手を揚げて之を制しつ、『彼は愈々山木剛造の長女梅子と結婚の内約整ひ、×藤侯爵が其媒酌人たることを承諾したのである、彼は九州炭山坑夫同盟の眞相を悉く大株主にして其重役なる山木に内通して、豫防策を講ぜしめ、又た政府の狗となつて社會主義倶樂部及び我が組合の運動消息をば、一々政府へ密告して居るのである、今幸にして彼の内狀を最も詳にする、尤も信用すべき人の口より其の報道を得たのは、天實に我々勞働者の前途を幸ひするものと信ずるのである、依て此の如き獅子身中の蟲を退治せんが爲めに本組合先づ直に彼を除名することの決議をして貰ひたい――緊急動議の要旨は是れである』

松本は昂然會衆を見廻して、自席に復せり、滿場相顧みて語なし、

議長浦和は徐ろに其席に起てり、『松本君の動議は實に驚くべき問題でありまして、自分に於ては大に心を苦めて居りますが、就きましては――』

議長の言尙ほ央なるに、『議長』と呼んで評議員席に起立したるは、平民週報主筆行德秋香なり、彼は先刻來憤怒の色を制して、松本を睨視しつゝありしが、今は最早や得堪へずして起ちたりしなり、滿場呼吸を殺して彼を見たり、

『松本君の只今の御說明は、我々の耳には何等の證據をも與へたるものとは聞えない、我輩も篠田君の親友で、恐らく滿場の諸君よりも同君の內狀に詳いであらうと思ふ、我輩は最も親交ある篠田君の一友人として、松本君の指摘されたる事實は、盡く無根の捏造說であることを斷言します――抑も此の誣告を試みたる信用すべき人物とは、何物でありますか』

松本は猛然として、起てり、『行德君は僕を誣告者と言はれた、怪しからん、――諸君、僕が誣告者であるか否は、公明正大なる諸君の判斷に一任します、僕は只だ良心の命ずる所に從つて此事を言ふのである』

『證人の名を言へ』と呼ぶものあり、

聲する方を松本は睨みつ、『證人の名を言ふに及ばぬ、若し諸君が僕を信用するならば、敢て證人の姓名を問ふに及ばぬではないか』

紛々たり、擾々たり、

『審判なしに宣告を下すことは如何なる野蠻の法律も許さぬ』と一隅に叫ぶものあり、

松本はニヤリと冷笑を浮べつゝ滿場を見渡せり、『諸君は證據を要求せらるゝが、證據を示さぬのは必竟彼に對する恩惠だ――諸君は彼を道德堅固なる君子と信仰せられる樣だ、恐ろしい君子があつたものだ、藝妓買を行つて、自由廢業をさせて、借金を踏み倒さして、自宅へ引きずり込んで、其れで道德堅固な君子と言ふんだ、成程耶蘇教と云ふものは偉いもんだ』

ヒヤ〳〵、大ヒヤなど頓狂なる叫喚は一隅に湧き上れり、

笑聲ドッと四壁を動かしつ、

十八の三

此の光景を看て取つたる松本常吉、『議長、滿場別に異議ないやうです、採決を願ひませう』

憂色、面に現然たる議長が何やらん唇を開かんずる刹那、否ッと一聲、巨鐘の如く席の中央より響きたり、看よ、菱川硬二郎は夜叉の如く口頭より焔を吐きつゝ突ッ起ちてあり、

『君等は眞面目に其樣ことを言つとるのか――勞働者は無智で輕忽で、離間者の一言で起しも臥かしも出來るもんだと云ふことを發表しようとするのか――我々の周圍には日夜探偵の居ることを注意し給へ――否な、我々の間にも或は探偵が潛伏しとるかも知れないのだ』

『誰を探偵だと云ふのか、菱川君』と松本は疾呼大聲す、

『僕が其を答へる前に、松本君、君は倚ほ辯明の義務を負んどるぢやないか、君は誰の言を信じて篠田君を探偵と云ふのだ、賣節漢と云ふのだ』

『イヤ、其問題は既に經過した、其れとも君は此の松本を指して虚言者と云ふのか』

菱川の太き眉は釣り上れり、『其れが果して日本の勞働者の言語なのか、日本の勞働者は三百代言にも劣つた陰險な心を持つとるのか、――君は必ず或者から固く名前を祕する樣に賴まれたのだらう、君が信用する或者とは、必ず憎むべき探偵であるに相違ない』

松本は沸騰する怒氣に口さへ利かぬばかり、

行德は靜に言ふ、『諸君は少し考へたならば、篠田君が果して我々同志を賣るものか如何か知れるではないか、――同君が賤業婦人を救ひ出すのは珍らしいことではない、加之、諸君は之を稱讚して麗はしき社會的救濟事業と認めて來たでは無いか、又た四月の大會の爲め、九州炭山坑夫の爲め、經費募集のことの爲めに苦心焦慮して居らるゝことは、諸君も御承知の筈では無いか――』

『彼が募集し得た金を握つて敵陣へ降參する魂膽に、注意して貰ひたい』と松本は遮りぬ、

『君等は猜疑心の爲めに自殺するのか』流石に行德も遂に赫怒せり、

頭を振りつゝ松本は躍り上つて叫ぶ、『諸君は宜しく自ら決斷せねばならぬ、諸君は果して僕を信ずるか、信じないか』

『勞働者諸君、諸君は共和民主々義を棄てゝ擅制君主主義に從ふのか』と、手を振つて菱川は號叫す、

『勿論、我々勞働者は社會主義の空論を排斥するのである、非戰論なんて云ふ書生論に捲き込まれるものとは違ふのである、我々鍛工の多數は現に鐵砲を造り軍艦を造つて飯を食つて居るものである』

松本は絶叫せり、拍手喝采の響は百雷落下と疑はれぬ、

今は議長も思ひ決めて起ち立れり、『議長におきましては、此の重大問題を即決致しまする ことは、少しく輕卒の樣にも考へます、依て五名の調査委員を舉げて、一應調査することに致し度く存じます、御異議が無くば――』

松本が周章て起たんとする時贊成々々の聲四隅に湧出して議長の意見を嘉納し了せり、

『あゝ、大事去れり』と行德は涙を揮つて長大息せり、

菱川は髮逆立てて怒號せり、『我が勞働者未だ自覺せず』

* * * * *

階下の一室に兀坐せる篠田は、俄に起る階上の拍手に沈思の眼を開きぬ、

隙洩る雪風に燈火明滅、

十九

正午には倚ほ間のあり、

同胞新聞の樓上なる、編輯室の煖爐の邊には、四五の記者の立ちて新聞を讀むあり、椅子

に凭りて手帳を繙すあり、今日の勤務の打ち合はせやすらん、

足音あわたゞしく驅け込み來れる一人、『諸君、──實に大變なことが出來した』

其聲は打ち顫へて、其面は色を失へり、彼は吾妻俊郎なり、

『何だ、君、そんな泥靴のまゝで』と、立ちて新聞を見居たる一人は眉を顰めぬ、『電車でも脫線したと云ふのか』

『馬鹿言つてちや困る、我社の危急存亡に關する一大事のだ、我々は全然、篠田の泥靴に蹂躙されたのだ──』吾妻の兩眼は血走りて見えぬ、

『ナニ、篠田樣が如何なされたと云ふんだ』と、居合せる面々、異口同音に吾妻を顧みたり、

吾妻は目を閉ぢ、齒を嚙締めて、得堪へぬ悲憤を強ひて抑へつ、『諸君、僕は實に諸君に對する面目が無いです、──從來僕は篠田先生に阿媚するとか、諂諛するとかツて、諸君の冷嘲熱罵を被つたのですが、僕は只だ先生を敬慕する餘りに、左樣な非難をも受くることになつたのです、然るに諸君、僕は全く欺かれて居ました──』吾妻はハンケチもて眼を蔽ひつ、『僕が諸君の罵詈攻擊をさへ甘んじて敬愛尊信した彼は──諸君、──賣節漢であつた、疑もなき間諜であつた』

『間諜ッ』と一人は吾妻を睨めり、

『馬鹿ッ』と他の一人は冷然微笑せり、

一同の吾妻の言に取り合はざるに、彼は悄然として落涙せり、『ア、、諸君、──僕の言を信用なさらぬは、必竟僕が平素の不德に依るですから、已むを得ないです、が、先生を間諜と認めたのは、僕の觀察では無い、先生とは最も密接の關係ある鍛工組合が、調査の結果、昨夜の臨時總會に於ては滿場異存なかつた決議です──』

『ナニ、鍛工組合が決議した──』吾妻、又た虛言吐いちや承知せぬぞ』

『騷いぢや可かん、──彼の松本が例の猜疑と嫉妬の狂言なんだらう、馬鹿メ』

吾妻は目を舉げて、『左樣です、若し松本等の主張ならば、僕も驚きは致しませぬ、然るに彼の溫良なる、寧ろ溫柔の嫌ある浦和武平が、涙を揮つて之を宣言したのです、餘程正確なる證據を握つて居るらしいです、昨夜は兎に角、調査委員を選んで公然之を審判すると云ふことにして散會したさうですが──聞く所に依れば、先生も昨夜は眞ッ青になつて、一言の辯解も無かつたさうです、僕は斯かる不祥を聽かねばならぬことを、我が耳の爲めに悲しむです──』彼は面を掩うて歔欷したり、

一同瞑目せり、拱手せり、沈思せり、疑團の雲霧は漸く彼等の心胸に往來し初めけるなり、

階子に足音聞ゆ、疑ふべくもあらぬ篠田の其れなり、彼は今此の疑雲猜霧の裡に一歩々々靜に足を進めつゝあるなり、

皆な眸を扉に集めぬ、

扉は開かれぬ、

篠田は入り來りぬ、

一同期せずして一歩遠ざかりつ、脣を結べるまゝ冷やかに目禮せり、

* * * * *

翌朝の都下新聞紙には左の如き同一の記事を掲げられぬ、何人が通信したりけん、

●社會黨と露探　同胞新聞主筆篠田長二が、外に淸貧を假裝しつゝ、內實奢侈放逸に耽れることは其筋に於て注意する所なりしが、鍛工組合に於ても內々調査したりし結果、一昨夜を以て臨時總會を開き、彼に露探の嫌疑十分なりとの故を以て審判委員五名を選定せり、

「机の塵」「隣の噂」など云へる戯文欄に於て揶揄、冷評を加へしも少からず、「基督教徒の非國家的思想」テフ大標題を掲げて、基督教は賣國教なる所以を痛論せる佛教主義の新聞もあり、

二十

山木剛造の玄關には二輛の腕車、其の轅を揃へて、主人を待ちつゝあり、

化粧室なる大玻璃鏡の前には、今しも梅子の衣紋正して立ち出でんとするを、其の後姿仰ぎてありし老婆の聲濕ませつ、「では、お嬢樣、何でも行らつしやるので御座いますか――斯樣こと申したらば、老人の愚癡とお笑ひ遊ばすかも知れませぬが、何となく今日に限つて胸騒ぎが致しましてネ――」

梅子は玻璃鏡に映れる老婆の影をながめて微笑しつ、『婆や、私だつて、今日此頃外へ出るなど少しも好みはしませんがネ、折角母樣がお誘ひ下さるのだから、御伴するんです――けれど、婆や、別に心配なこと無いぢやないかネ』

『いゝえ、お嬢樣、上野淺草へ行らしやるのを、心配とも何とも思ひは致しませんが――歸途に大洞樣の橋場の御別莊へ、お寄りなさると仰しやるぢや御座いませんか』

「左樣よ」

『サ、それが、お嬢樣、何となく心懸りなので御座います』

『何故――婆や』

老婆は垂頭れて語なし、良久ありて、『近頃、奥樣の御容子が、何分不審なので御座いますよ、先日旦那樣が御歸京になりました晩、×藤侯が圖らずも媒酌人に爲つて下さるからとのお話で、大勳位の御媒酌なんて有難いことは無いと、奥樣も大層な御歡喜で在らしつたで御座いませう、其れをお嬢樣、貴孃がキッパリ御斷になつたもんですから……御兩所の彼の御立腹は如何で御座いました、旦那樣は隨分他人には酷くお衝りになりましても、貴孃ばかりには一目置いて在らしたのが、彼の晩の御劍幕たら何事で御座います、父子の縁も今夜限だと大きな聲をなすつて、今にも貴孃を打擲なさるかと、お側に居る私さへ身が慄ひました――それに奥樣の惡態を御覽遊ばせ、恩知らずの、人非人の、何の角のと、兎ても口にされる譯のものでは御座いませぬ、私でさへ彼の脣を引ッ裂いてあげたい程に思ひましたもの、貴孃能く御辛抱なされました――其れがマア、不審では御座いませぬか、一週間經つや經たずに、貴孃をお連れなすつての御寺詣り――貴孃をお伴れ遊ばして奥樣の御遊山は、私初めてお見受け申すので御座いますよ、是れはお嬢樣、上野淺草は託で、大洞樣の御別莊が目的に相違御座いません、今夜の橋場が、私、誠に心懸りで――何やら永い訣別にでもなる樣な氣が致しまして――」

梅子はヂッと瞑目してありしが、『婆や、其れ程迄に思つてお吳れのお前の親切は、私、嬉しいとも忝ないとも言葉には盡されないの、けれど私、何も今日死に行くと云ふぢやなし』

聊か躊躇せる梅子は、思ひ返してホヽと打ち笑み、『そりや、婆や、お前が日常言ふ通り、老少不常なんだから、何時如何なことが起るまいとも知れないが、然し左樣心配した日には、家の中にも居られなからうぢやないかネ、――多分遲くならうと思ふから、婆や、何卒先きに寢てお吳れよ、寒いからネ』

老婆は歔欷して言語なし、

開きかゝりてありし襖の間より下女の丸き赭面現はれて、『お嬢樣、奥樣が玄關で御待ちかねで御座んす』

『オ、左樣でせうネ』と急ぎ行かんとする梅子の袂に、老婆は縋りつ、『――お嬢樣、お愼深い

貴嬢へ、申すもクドいやうで御座いますが――何卒お氣を着けなすつて下さいまし――御待ち申して居りますよ――』

仰ぎたる老婆の面は、潸々たる涙の雨に濡れぬ、

輕く首肯きたる梅子も、絹巾に眼を掩ひぬ、

＊　＊　＊　＊　＊

二輛の腕車は勇ましく走せ去れり、

二十一の一

上野なる東照宮の境内を遠近話しながら歩を移す山木のお加女と梅子、

『ネ、梅子、左樣でせう、だから餘ッ程考へなけりやなりませんよ、何時までも花の盛で居るわけにはならないからネ、お前さんなども、何かと言へば、最早見頃を過ぎた齢ですよ、まア、縹緻が可いから一ツや二ツ隱しても居れやうがネ――私にしてからが、只だお前さんの行末を思へばこそ、斯してウルさく勸めるんだアね、惡く取られて、たまつたものぢやありませんよ』

『阿母さん、勿體ない、惡く取るなんてことあるものですか』

『けれど言ふことを聽いてお呉れでなきや、惡く取つておいでとしか思はれませんよ』

樹間隱れに見ゆる若き夫婦の盛裝せるが、睦ましげに語らひ行く影を、ツク／＼とお加女は見送りながら、『梅子、あれを御覽なさい、まアほんとに可愛らしい、雛人形の樣だよ――私も早くお前さんの彼した容子を見たいと、其ればつかりが、親の樂だァね、大きな娘を何時までも一人で置いては、世間體も惡し、第一草葉の蔭のお前の實母さんに對して、私が顏向けなりませんよ――まア御覽なネ、あの手を引き合つて、嬉しさうに笑つて、――男でも女でも彼が一生の極樂世界と云ふもんですよ――羨ましいとは思ひませんかネ』

ジロリと、お加女は横目に見やれり、

梅子は他方を眺めつゝあり、

『あゝ、恐ろしいお孃樣だこと――』お加女は目に角立てて獨言しぬ、

二人は無言のまゝ長き鋪石を、大鳥居の方に出で來れり、去れど其處には二輛の腕車を置き棄てたるまゝ、何處行きけん、車夫の影だも見えず、

『何したつてんだねェ――日がモウ入りかけてるのに、仕樣があつたもんぢやない、チョッ』とお加女は打ち腹立てて、的もなく當り散らしつつあり、

通りかゝれる職人體の三人連、

『イヨウ、素敵な別嬪が立つてるぢやねエか――池の端なら、辨天樣の御散歩かと拜まれる所なんだ』

『束髮で、眼鏡で、大分西洋がつたハイカラ式の辨天樣だ、海老茶袴を穿いてねい所が有難い』

『見ねイ、辨天樣の御側に三途川原の婆さんも御座るぜ』

『何れ一度は御厄介になりますが聞いて呆れらア、ハ、、、、』『ハ、、、、、』

お加女は額を顰めつ、『車夫は何處へ行つて仕舞ッたらう』

日は既に森蔭に落ちたる博物館前を、大きなる書籍の包、小脇に抱へて此方に來れるは、まがふべくもあらぬ篠田長二なり、圖書館よりの歸途にやあらん、

梅子は遙に其れと見るより、サと面を赧らめつ、

折柄竹の臺の方より額の汗拭ひも敢ず、飛ぶが如くに走せ來れる二人の車夫を、お加女はガミガミと頭から罵りつ、ヤヲら車に乘り移り

しが、宛も其前に來れる篠田は、梅子と相見て慇懃に默禮し、又たスタ〳〵と歩み去る、

『梅子、早くおしなネ』と言ひつゝ、お加女のチョイと振り向く時、篠田の横顏、其目に入りしにぞ、『惡黨ッ』と口の裡にツブやきつ、恍然立てる梅子を、思ふさまグイと睨み付けぬ、

二十一の二

都會の紅塵を離れ、隅田の清流に枕める橋場の里、數寄を凝らせる大洞利八が別莊の奥二階、春寒き河風を金屛に遮り、銀燭の華光燦爛たる一室に、火爐を擁して端坐せるは、山木梅子の母子なりけり、

珍客接待の役相勤むるは大洞の妻のお熊、黑く染めたる頭髮を脂滴るばかりに結びつ、『加女さん、今年のやうに寒じますと、老婆の難澁ですよ、お互樣にネ――梅子さんの時代が女性の花と云ふもんですエ――』

『でも姉さんは一寸も御變なさいませんがネ、私ッたら、カラ最早仕樣が無いんですよ、芳子などに終始笑はれますの――何時の間に斯う年取つたかと、ほんとに驚いて仕舞ひますの』とお加女は目を細くして强ひて笑ひつ、

『お客來の所へ參りまして、伯母さん、飛んだお邪魔致しましてネ』と梅子の氣兼ねするに『ほんとにねエ』とお加女も相和す、

『何の貴女』と、お熊は制しつ、『日常來らつしやるお客樣でネ、家內同樣の方なんですから、氣兼も何もありやしませんよ、山木の御家內なら、寧そ同席に御馳走にならうつて仰しやるんですよ、梅子さん、磊落な方ですから、何卒御遠慮なくネ』

カラ〳〵と打ち笑ふ男の聲聞えて、主人の利八と物語りつゝ、階子上り來るは、今しもお熊の噂せる其人なるべし、

襖手荒に開かれて現はれたる一丈夫、其の衣の身に合はず見ゆるは、大洞のをや假り着せるならん、旣に稍々酒氣を帶びたる面を燈火に照らしつ、立ちたるまゝ、『ヤア、山木の內君――新年先づ御目出たう』

『まア、何殿かと思ひましたら、貴所ですか――姉さん、酷いことねエ、知らして下さらぬもんですから、飛んだ失禮致したぢや御座んせんか』と、お加女はホヽと笑傾け、『あら、私としたことが、御挨拶も致しませんで――どうも舊年中は一方ならぬ御世話樣に預りまして、何卒相變りませず』

『イヤ、左樣固く出られると大に閉口する――お互樣ぢや』と、客は無頓着に打ち笑ひ、『知らぬ方でもないので、御邪魔に來ました』

『さア、何卒是れへ』とお加女が席をゐざりて上座を讓らんとするを、『ヤ、床の置物は御免蒙らう』と、客は却て梅子の座側に近づかんとす、

お熊も興がりて、『其の方が可御座んす、どうせ、貴所は家內の人も同樣で在らつしやるんですから』と言ふを、『成程、其れが西洋式でがすかナ』と利八も笑ふ、

梅子の左側に客はドッかと座に就きぬ、『令孃、失禮致します』

梅子は只だ慇懃に默禮せるのみ、

『オヽ、梅子』とお加女は顧み、『お前さんは未だお初に御目に懸るんでしたネ、此方が阿父の一方ならぬ御厚情に預る、海軍の松島樣で――御不禮無い樣に御挨拶を』

偖はと梅子の胸轟くを、松島は先づ口を開きつ、『我輩が松島と云ふ無骨漢です――御芳名は豫て承知致し居ります』

去れど梅子は只だ重ねて默禮せるのみ、

如才なき大洞は下婢が運べる盃取つて松島に差しつ、『ぢや、貴所からお始め下さい』

『梅子、お酌を』と、お加女は促しつ、

二十一の三

『御酌を』と促されたる梅子は、俯きたるまゝ、微動だにせず、

再び促されても、依然たり、

『何したんだねエ、此の女は』と、お加女の耐へず聲荒らぐるを、お熊はオホヽと徳利取り上げ、

『なにネ、若い方は兎角恥かしいもんですよ、まア其の間が人も花ですからねエ――松島さん、たまには、老婆さんのお酌もお珍らしくて可う御座んせう』

『老女の方が實は怖いのサ』と、松島の呵々大笑して盃を擧ぐるを、『まア、お口のお惡いことねエ』とお熊も笑ひつ、『何卒松島さん お盃はお隣へ――』

『左樣ですか、――然し失禮の樣ですナ』と、美しき梅子の横顏、シゲ〳〵見入りつ、『では、山木の令孃』と小盃をば梅子に差し付けぬ、

『梅ちゃん、松島さんのお盃ですよ』と徳利差し出して、お熊の促すを、梅子は手を膝に置きたるまゝ、目を上げて見んとだにせず、

『梅子、頂戴しないのかね』と、お加女は目に角立てぬ、『かう云ふ不調法もので御座いましてネ、誠に御不禮ばかり致しまして』

『なにネ、お加女さん、御婚禮前は誰でも斯うなんですよ』と、お熊はバツを合はして、『ぢやア梅ちゃんの名代に、松島さん、私が頂戴致しませう』

『こりや綺麗な花嫁が出來ましたわイ』と利八は大笑す、

『あら、旦那、何ですねエ』と、お熊は手を揚げて、叩くまねしつ、『是れでも鶯鳴かせた春もあつたんですよ』グッと飲み干してハッハと笑ふ、

何れも相和して笑ひどよめく、

梅子の眉ピクリ動きつ、帶の間より時計出して、ソと見やるを、お熊は早くも見とめて、『梅ちゃん、タマに來て下すつたんだから、何卒寛裕して下さいナ、其れに御遠方なんだから、此の寒い夜中にお歸りなさるわけにはなりませんよ、最早、其の心算にして置いたのですから、一泊りなすつてネ――ねエ、お加女さん、可いでせう』

『ハア、遲くなつたら泊りますからツて、申しては來ましたがネ』

『ぢや、大丈夫ですよ』と、早くもお熊は酒が言はする上機嫌、『暫く振りで梅ちゃんの琴を聽かせて頂きませう――松島さん、梅ちゃんは西洋のもお上手で在らつしゃいますがネ、お琴が又た一きはで在らつしゃるんですよ』

『左樣ですか、――是非拜聽致しませう』と松島は盃を片手に梅子に見とるゝばかり、

酒次第に廻りて、席漸く亂る、

『旦那』と小聲に下婢の呼ぶに、大洞は暫しとばかり退り出でぬ、

お熊の目くばせに、お加女も何やらん用事ありげに立ち去りぬ、

お熊は松島の側近く膝を進めつ、『ほんとにねエ、さうして御兩人並んで在らつしゃると、如何に御似合ひ遊ばすか知れませんよ――梅ちやん、貴孃も嬉しくて在らつしゃいませう』と、醉顏斜めに梅子を窺ひ、徳利取り上げて松島に酌がんとせしが、『あら、冷えて仕舞つたんですよ』と、ニヤリ松島と顏見合はせ、其儘スイと立つて行きぬ、

微動だもせで正坐し居たる梅子、今お熊さへ出で行くと見るより、直に立つて後を追はんとするを、松島、忽如猿臂を伸ばして袂を捉へつ、『梅子さん』

『何遊ばすッ』振り回りたる梅子の面は憤怒の色に燃えぬ、

グイと引きたる男の力に、梅子の袂ビリ、破れつ、

二十一の四

『何あそばすッ』

と再び振り向く梅子を、力まかせに松島は引き据ゑつ、憤怒の色、眉宇に閃きしが、忽にして强ひて面を和らげ、

『梅子さん、貴孃、餘り殘酷ではありませぬか、成程今夜の始末、定めて御立腹でもありませうが、少しは御推察をも願ひたい――私の切情は、梅子さん、疾く御諒承下さるでせう、貴孃は、私を御存じありますまいが、私は能く貴孃を存じて居ります――私は前年先妻を亡つた時、最早や終生獨身と覺悟致しました、――梅子さん、假にも帝國軍人たるものが、其の決心を打ち忘れて、斯かる癡態を演ずると云ふ、男子が衷情の苦痛を、貴孃は御了解下さらぬですか』

松島は梅子の袂をシカと握れるまゝ、ヂッと其面ながめ遣り、『斯く御婦人に對して御無禮を働きまするも――幾度も拒絶されたる貴孃に對して、恥辱を忍んで御面會致すと言ふも、人傳てにては何分にも靴を隔てて痒を搔くの憾に堪へぬからです、今日に至ては、强ひて貴孃の御承諾を得たいと云ふのが私の希望では御座いませぬ、只だ貴孃の御口から直接に斷念せよと仰しやつて下さるならば、私は其を以て善智識の引導と、嬉しく拜聽致します、不肖ながら帝國軍人です、匹夫野人の如く飽くまで纏綿つて貴孃を苦め申す如き卑怯の舉動は、誓つて致しませぬ、――何卒、梅子さん、只だ一言判然仰しやつて下さい』

梅子はワナなく身を耐へて瞑目す、

松島は一きは聲ひそめつ、『梅子さん、今に至て考へて見れば、我ながら餘りの愚蒙と輕忽とに呆れるばかりです、私は初め山木君――貴孃の父上の御承諾を得ました時、既に貴孃の御承諾を得たるが如く心得、歡喜の餘り、親友知己等へも吹聽したのです、御笑ひ下さるな、戀は大人をも小兒にする魔術です、――去れば今日、貴孃から拒絶されたと云ふことが知れ渡つたものですから、同僚などから殆ど毎日の如く冷笑される、何時結婚式を擧げるなど揶揄はれる其度に、私は穴にも入りたい樣に感じまするので、寧ろ自殺して此の痛苦から逃れようかなど考へることもありまするが、併し是れ一に私の罪なので、誰を怨むる筈も無く、親の權力が其子の意思を支配し得ると云ふ野蠻思想から、輕忽に狂喜した我が愚を慚愧する外はありませぬ――併し其の爲めに貴孃の御名を汚すが如き結果になりましては、何分我心の不安に堪へませぬので、――海軍軍人は婦人を侮辱するものと言はれては、是れ實に私一人の恥辱のみでは無いのでありますから、今晩は此の罪をも謹で貴孃の前に懺悔し、赦したと云ふ一言の御言葉を得たいと思ふので御座いまする――』

瞑目せる梅子の心中には、今日しも上野公園にて、圖らずも邂逅せる篠田の面影明々と見ゆるなり、再昨年の春の夜始めて聽きたる彼の說教は、朗々と響くなり、彼を思うて人知れず絞れる生命の涙、身も魂も捧げて彼を愛すと誓へる神前の祈禱、嬉しき心、辛き思、千萬無量の感慨は胸臆三寸の間に溢れて、父なる神の御聲、天に在ます亡母の幻あり〱と見えつ、聞えつ、何故斯かる汚穢の塗に坐して、狼の甘き誘惑に耳を假すやと叱り給ふ、

松島は膝を正して手を拱けり、『何卒我が過去の罪は梅子さん、お赦し下さい』

梅子は面を揚げぬ、『松島さん、貴所は必ず女性の貞節を重んじて下さいませうネ』

松島は訝しげに梅子を見ぬ、『――、其れは勿論です――』
松島さん、感謝致します――私には既に誓つた良人があるので御座いますから――』
梅子の頬は珊瑚の如く紅く輝きぬ、

二十一の五

『何ですッ』松島の血相は忽ち變れり、『良人があると』
『ハイ』梅子も嚴然として松島を睨み返せり、
『フム、其りや始めて承はる』と、松島は滿面輕蔑の氣を溢らしつ、『何時結婚なされた』
『否、結婚は致しませぬ』
『然らば、何時約束なされた』
『約束も致しませぬ』
『然らば御尋ね致すが、御兩親も承諾されたのか』
梅子はホヽ笑みぬ、『親の權力も子の意思に關渉することの出來ないのは、貴所、只今御説明なされたでは御座いませぬか』
グッと詰まりし松島は、ヤガて冷笑一番、『ウム、婦人の口から野合を自白するんだナ』
『何を仰しやる――』
梅子のキッとなるを、松島笑つて受け流し、
『左樣だらう、未だ結婚もしない、公然約束もしない、父母の承諾を得たでもない、其れで良人があるとすれば、野合の外ならう』
『――貴所は愛の自由と神聖とをお認めになりませぬか』
『神聖も糞もあるかい』
梅子の柳眉は逆立てり、『軍人の思想は其樣に卑劣なものですか』
『何ッ』松島は猛獅の如く躍り上りつ、梅子の胸を捉へて仰けに倒せり、『女と思つて赦して置けば増長しやがつて――貴樣の此の榮耀を盡すことの出來るのは誰のお蔭だ、貴樣等を明日乞食にしようと、餓死させようと、我が方寸にあることを知らないか――軍人の卑劣とは聞き棄てならぬ一言だ――貴樣の大事な篠田の受賣だらう、見とれ、篠田の奴も決して安穩に許しては置かぬぞ、貴樣等の爲めに帝國軍人の名譽を毀けてなるものか』
力を極めて押し付くるを、梅子は絶えなんばかりの聲振り絞りつ、『――人道の敵ッ』
黒髪バラリと振り掛れる、蒼き面に血走る雙眼、日の如く輝き、怒に震ふ朱唇白くなるまで噛みしめたる梅子の、心決めて見上げたる美しさ、只凄きばかり、
炎々たる情火に松島は、氣狂ひ、心悶えて眼さへに眩くなれり、
『――復讐――』
今や心狂ひたる軍人の鐵腕に擁せられたる、纖細なる梅子の身は、鷹爪に捉はれたる雛雀とも言はんか、假令聲を限りに叫べばとて何處より、援助來らん、一點の汚塵だも留めたるなき一輪の白梅、あはれ半夜の狂風に空しく泥土に委すらんか、
押へられたる儘、梅子は瞬きもせで睨み詰めたり、
松島は梅子を引き起しつゝ、其の纖弱き雙腕をばあはれ背後に捉へんずる刹那、梅子の手は雷火の如く閃けり、
『キャッ』と一聲、松島の大なる軀はドウと倒れぬ、

* * * * *

襖を隔てて窺ひ居たるお熊は、尋常ならぬ物音に走せ出でぬ、
看よ、松島はヒシと左眼を押へて悶絶す、手を漏れて流血淋漓たり、
梅子はスックと立ち上れり、其の右手には汚血を握りつ、
『來て下さい』

絶叫したるまゝ、お熊は倒れぬ、

何事やらんと驅け上りたる大洞も、お加女も、流るゝ血潮に驚きて、只だ梅子の面を見つめしのみ、

梅子は始めて脣を開きぬ、『警察へ引き渡して頂きませう――私は血を流した罪人です』

死力を籠めたる細き拇指に、左眼抉られたる松島は、痛に堪へ得ぬ面、僅に擡げつ、

『――祕密――祕密に――名譽に關はる――早く醫者を、內密に――』

『名譽ッ？』梅子は突つ立てるまゝ、松島を睨めり、『名譽とは何事です、誰の名譽に關はるのです、殺人と掠奪を稼業にする汝等に、何で人間の名譽がありませうか、――女性全體の權利と安寧との爲めに、必ず之を公にして、社會の制裁力を試驗せねばなりません』

梅子の視線はお加女の面上に轉ぜり、『繼母、貴女は嘸ぞ御不滿足で御座いませう、貴女の女は、世にも恐ろしき流血の重罪を犯しました、けれど繼母、貴女のお望の破操の大惡よりは、輕う御座いますよ――』

彼女の眼光は電火の如く大洞の顏を射れり、

『處女の神聖を瀆さん爲めに準備せられた此の建物が、野獸の汚血に塗れたのは、定めて殘念なことでせう――傷けるものの爲めには醫師を御招きなさい、けれど、犯罪者の爲めに、何故早く警官をお呼びなさらぬ』

大洞は、色を失つて戰慄するお加女の耳に近きつ、『少し氣を靜めさして今夜の中に密と歸すが可からう――世間に洩れては大變だ』

＊　＊　＊　＊　＊

ヒユウ〳〵と枝を鳴らせる寒風も、今は收まりて、電燈の光寂しき芝山內の眞夜中を、山木剛造の玄關には、何處にか行かんとすらん、一子剛一の今自轉車に點火せんとしつゝあり、

側には一人、彼の老婆の身を縮めて、『剛樣、今夜は又た一きは寒う御座んすから何卒、御氣を着け遊ばしてネ――貴郎が行つて下さるので、如何程安心で御座いませう』

『婆や、一飛びだ――何せよ、場所が場所だからナ、僕ア心配で堪らぬのだ、大洞の伯父だの伯母だのツて、婆や、人間の面してる畜生なんだ、姉さんの身上に萬一のことでもあつて御覽、何の顏して人に逢はれるか』

早や彼は車を運びて、門の方へ進み行く、

此時忽ち轆轤たる車聲、萬籟死せる深夜の寂寞を驚かして、山木の門前に停まれり、

剛一は足をとゞめてキツとなれり、

小門、外より押されて數名の黑影は庭內に顯はれぬ、先きなるは母のお加女なり、中に擁されたるは姉の梅子なり、他は大洞よりの附け人にやあらん、

『姉さんですか』剛一は自轉車を投じて走せ寄れり、

梅子はヒシと抱き着きぬ、『剛さん――』

彼女は弟の溫き胸に頭をよせて、呼吸も絕えなんばかり、

剛一は緊と抱きて聲勵ましつ、『凜乎なさい――』

老婆は只だ淚なり、『――お孃さま――』

二十二

寢床の上に起き直りたる梅子の枕頭には、校服のまゝなる剛一の慰顏なる、

『ナニ、姉さん、左樣氣をいら立てずと、最少し休んで在らつしやる方が可いですよ』

『けれどネ、剛さん、彼樣猛惡な心が、此の胸に潛んで居るのかと思ふと、自分ながら恐ろしくて堪りませんもの、――私は剛さん、綺麗に死ぬことを覺悟して居たんです、彼樣亂暴しようとは、夢にも思やしませんよ、如何した咄嗟

の心の變化か考へて見ても解らないの、矢ッ張り私の心が、怨と怒に滿たされて居たので、其れで彼した卑怯な舉動に出たのですねエ――今朝からネ、一人で聖書を讀んだり、お祈したりして居たんですよ、私もう――怖くて〳〵神樣の御前へ出られないんですもの――』

梅子は身を顫はして面を掩へり、

剛一も目を閉ぢて暫し言葉なかりしが、『――姉さん、篠田さんも其ことを心配してでしたよ』

『エ』と梅子は頭を擡げつ、『貴郎、篠田さんにお逢ひになつて――』其顏は赧くなれり、

『ハア、折角の日曜も姉さんの行らつしやらぬ教會で、長谷川の寢言など聞くのは馬鹿らしいから、今朝篠田樣を訪問したのです、――非常に憤慨してでしたよ』

『私の舉動をでせう』

『左樣ぢやないです』と剛一は頭を掉りつ、『假令世界を舉げても、處女の貞操と交換することの出來ない眞理が解らぬかッて、憤慨して居られました、何でも彼の翌日と云ふものは、警察の手を以て彼のことの新聞へ出ない樣に、百方奔走をしたんださうです、日本軍隊の威信と名譽に關はるからと云ふんでネ――實に怪しからんぢやありませんか、今の社會が言ふ所の威信とか名譽とか言ふのは何を指すのです、僕は此の根本を誤つてる威信論や名譽論を破壞し盡さぬ間は、到底道義人情の精粹を發揮することは出來ぬと思ふです』

『ア丶、剛さん、――世間からは毒婦と恐れられ、神樣からは惡魔と賤しめられて忌な生涯を終らねばならんでせうか――私、此の右手を切つて棄てたい樣だワ――』

『姉さん』と剛一は膝を進めぬ、『篠田さんの心配して居なさつたのは其處なんです、貴孃の一生の危機は、先夜の危難の際では無く、虎口を脫れなすつた今日に在ると仰しやるんです、――姉さん、貴孃は今始めて凡ての束縛から逃れて、全く自由を得なすつたのです、親の權力からも、世間の毀譽褒貶からも、又た神の寵愛からさへも自由になられたのである、今こそ貴孃が眞正に貴孃の一心を以て、永遠の進退を定めなさるべき時機である、――愛の子か、詛の子か――けれど君の姉さんが此際、撰擇の道を過つ如き、弱く愚なる人で無いことは確に信ずると篠田さんは言うてでしたよ、――姉さん、篠田さんは貴孃を斯くまで篤く信じて居なさいますよ』

梅子は枕に倒れて、咽び入りぬ、『――神樣――何卒　お赦し下さいまし――』

二十三の一

ハイ――と警むる御者の掛聲勇ましく、今しも一輛の馬車は、揚々として霞門より日比谷公園へぞ入り來る、ドッかと反り返りたる車上の主公は、年齒疾くに六十を越えたれども、威風堂々として尙ほ鞍に據つて顧眄するの勇を示す、三十餘年以前は西國の一匹夫、今は國家の元老として九重雲深き邊にも、信任淺からぬ侯爵何某の將軍なりとか、

陪乘したる清洒なる當世風の年少紳士、木立の間に逍遙する一個の人影を認むるや指しつゝ髯をヒソメ、『閣下、彼處を革命が步いて居りまする』

『ナニ、革命』侯爵は身を起して彼方を睨みつ、『あの筒袖着た壯士の樣な男か』

『ハ、閣下、彼が先刻も談柄に上りましたる、社會黨の篠田と申す男で御座ります』

『フム、松島の一眼を失つたものも、彼の男の爲めか』

『ハ、尤も松島の負傷に就ては、少し事情もある樣に御座りまするが――』

『イヤ、假令如何なる事情があらうとも、此の

軍國多事の際、行爲の將校に重傷を負はしむると云ふは容赦ならぬ」と、言ひつゝ、將軍は頽に篠田の後影を睨みつ、「何して居る、何れ善からぬ目算致して居るのであらう」

「ハ、多分今晩演說の腹案でも致し居るものと思はれまする」

「ナニ、演說——何處で」

「ハ、神田の青年會館と申すで、非戰論の演說會を」

『怪しからんこと』と將軍の眉は動けり、「戰爭のことは上御一人の御叡斷に待つことで、民間の壯士などが彼此申すは不敬極まる、何故內務大臣は之を禁じない——ナニ——だから貴樣等は不可と言ふのだ、法律などに拘泥して大事が出來るか、俺など皆な國禁を犯して維新の大業を成したものだ、早速電話で言うて遣れ、俺の命令だと言うて——辇轂の下をも憚らず不埒な奴等だ」

將軍は昂然たり、

若紳士は唯々として頭を垂れぬ、

馬車は夕陽を浴びつゝ迂廻して、やがて悠々華族會館の門を入りぬ、

＊　＊　＊　＊

神田美土代町なる青年會館の門前には、黑山の如き群集の喧々囂々たるを見る、

「何故入場を許さない」「集會の自由を如何にする」「壓制政府」「警察の干渉」「僕は社會主義に反對のだから入れて呉れい」「ヒヤ〈〜」ノウノウ」「馬鹿野郎」「ワツハヽヽ」「ワアイ〈〜」

星影まばらに風寒き所、壓しつ壓されつ動搖するさま、怒濤の闇夜寄せつ碎けつするに異らず、

鐵門は既に固く鎖されたり、只だ赤煉瓦の塀に、高く掲げられたる大巾の白布に、墨痕鮮明なる「社會主義大演說會」の數文字のみ、燈臺の如く仰がれぬ、

幾十となき警官の提灯は、吠えたける人濤の間に浮きつ沈みつして、之を制止する聲却て難船者の救助を求むる叫喚の如くぞ響く「最早立錐の地が無いのだ」「コラ、垣を越えては不可ん」「押すな〈〜」「提灯が潰れるワ」「痛い痛い」

「ヤア〈〜」

同じく入場し得ざる爲め、少しく隔りて觀居たる數名、

『日本も偉いことになつて參りましたナ、此の戰爭熱の最中で、非戰論の演說を行らうツんですから」

「左樣、其れを又た聽きたいてんで、此の騷なんですからナ」

『而も貴所、十錢傍聽料を拂ふんだから、驚くぢやありませんか」

『正直な所、誰でも戰爭など有難いもんぢやありませんのサ、——大きな聲ぢや言はれませんがネ」

二十三の二

立錐の地なしと門前の警官が、絶叫したるも宜なりけり、左しもに廣き青年會館の演說場も、只だ人を以て埋めたるばかり、爛々たる電燈も呼吸の爲めに曇りて見えぬ、一見、其異に驚くは警官の嚴重に排置せられしことなり、

演壇の右側には一隊警視の劍を杖きて、辯士の橫顏穴も穿けよと睨みつゝあり、三名の巡査は俯して速記に忙殺せらる、

今演壇には、背廣の洋服、垢づけるを一着なしたる青年が、手を振り聲を張上げて騷々擾々たる聽衆と鬪ひつゝあり、行德、坂井、松下、菱川、柴等の面々は皆な既に演じ終りたるなりと云ふ、否な、何れも五分十分にて中止を命ぜられしなりと云ふ、特に最も滑稽なりしは、菱川が登壇開口、「戰爭で第一に金儲けするのは誰だか、諸君、知つてますか」の一語未だ終

らざるに、早くも『中止』の一喝に逢ひしことなりとぞ、是れには二階の左側に陣取れる一群の反對者も、手を拍つて哄笑せしにぞ、警視は頬を脹して暫し坐りも得ざりしと云ふ、

青年辯士は水ガブ／＼と飲んで又た手を振り始めぬ、『諸君が露西亞討たざるべからずと言ふけれ共ダ、露西亞の何物を討つと言ふのです』

『露西亞帝國を征伐するんだ』と叫ぶものあり、辯士は聲せし方に向て、『果して然らば僕は、我輩は――』

一隅の聽衆ワア／＼と冷笑す、

『我輩は諸君の態度が可笑しいと思ふです、即ち諸君は自家撞着です』

『何故自家撞着だ――馬鹿、小僧、引ッ込め』と例の階上の左側より騒ぐ、

一主戰論者は『其通り無識背德だ』と階下より見上げて應戰するもあり、

辯士は額の汗拭ひつ、『看給へ、露西亞帝國政府の無道專制は、露西亞國民の敵ではありませんか、然れ共獨り露西亞政府のみでは無いです、各國政府の政策と雖も、其の手段に露骨と陰險の相違はあるか知れませぬか、其の精神は皆な露西亞と同じ侵略主義ではありませぬか』

喝采湧くが如くにして階上左側の妨害を埋沒する刹那、警視は起てり、『辯士、中止』

『見ろやアイ』『民主主義萬歲』など思ひ／＼の叫喚沸騰して、悲憤の涙を揮びたる青年辯士の降壇を送れり、

聽衆の少しく靜まるを待つて、司會者の椅子を離れたる渡部伊蘇夫は、澄み渡る音聲に次の辯士を紹介す、『篠田長二君――演題は社會黨の……』

皆まで言はさず、喝采の聲、堂を動かせり、篠田は既に演壇に立てり、

絕叫の聲は拍手の間に響けり、滿場既に醉ひぬ、

反對者の冷笑熱罵もコヽを先途と沸き上れり、『露探』『露探』『山木の婿の成りぞこね奴』『花吉さんへ宜しく願ひますよ』

彼は徐ろに口を開きぬ、『諸君――』

此時、聽衆の頭上を飛ぶが如くに駈け來れる一警部が、演壇に飛び上つて、何事か警視に耳語せり、

警視は倉皇、椅子を蹴つて起てり、『解散――辯士――中止』

滿場總立となれり、警官力を極めて制すれ共、かばこそ、『××』『××』『××』

良久見てありし篠田は、右手を伸ばしぬ、

『靜に』

群衆は舌を留めて篠田を見たり、

『火に油注ぐ者の火傷は、我等の微力に救ふこと出來ませぬ』

彼は一揖して去れり、

滿場再び湧き返れり、玻璃窓の碎くる響凄まじ、

二十四の一

中仙道熊谷を、午後の六時二十分に發したる上武鐵道の終列車は、七時二十六分に波久禮驛に着きぬ、

秩父の雪の山颪、身を切るばかりにして、戶々に燃ゆる夕食の火影のみぞ慕はるゝ、

『馬車が出ます／＼』と、爐火を擁して踞りたる馬丁の濁聲、闇の裡より響く、『吉田行も、大宮行も、今直と出ますよ』

都の巷には影を沒せる圓太郞馬車の、寂然と大道に傾きて、瘦せたる馬の寒天に俯して藁を食めり、

二臺の馬車に、客はマバラに乘り込みぬ、去れど御者も馬丁も悠々寬々と、爐邊に饒舌を鼓

しつゝあり、
『オーイ、馬丁さん、早くしてお呉れよ、軀がちぎれて飛んで仕舞ひさうだ——戯謔ぢやねえよ』と、車の裡なる老爺は鼻汁すゝりつゝ呼ぶ、
『まア、飛ばねえやうに、縄でも縛つて置いてお呉れなせえ、此方の軀もちぎれねえやうに、今一杯行つてくからネ』御者は又た濁酒一椀を傾けつ、『べら棒に寒い晩だ』と星晴れたる空を仰ぎながら、ノソリ〳〵と打ち連れて車臺に上りぬ、
月は出でぬ、
雪の峰、玲瓏と頭上に輝き渡り、荒川の激湍、巖に吠えて、眼下に白玉を碎く、暖き春の日ならんには、目を上げて心醉ふべき天景も、吹き上ぐる川風に、客は皆な首を縮めて瞑默す、御者の鼻唄も暫し途斷れて、馬の背に鳴る革鞭の響、身に浸みぬ、
吉田行なる後なる車に、先きの程より對坐の客の面、其の容體、訝しげに眺め入りたる白髪の老翁、やがて慇懃に禮を施し、『旦那、失禮なこと伺ふ樣ですが、矢つ張り此の山の人で在らつしやりますか』
對坐の客は首肯きつ、『ハイ、山の男ですが、只今は他郷に流浪致し居りまするので』
『して、山は何の邊で在らつしやりますか』
『粟野で御座います』
老人は良久思案の態なりしが、『——若し篠田樣——の御縁家では——』
『ハイ、篠田の一族で御座います』
『篠田長左衞門樣の——』
『左樣です、長左衞門の伜で』
『左樣で御座りまするか』と老人は膝の下まで頭を下げつ、『先刻からお見受け申す所が、長左衞門樣生寫で在らつしやるから、若し左樣では在らつしやるまいかと考へましたので』
老人は早くも懷舊の涙に得堪へぬものの如し、『私は小鹿野の奧の權作と申しますもので、長左衞門樣には何程御厚情を蒙りましたとも知れませぬ、彼の騷で旦那樣は彼した御最期——が、百姓共の爲めにお果てなされた長左衞門樣の御恩を忘れてはならねえと、若い者等に言うて聽かせることで御座りまする——ちやあ、貴郎は慥に長一樣と仰しやりました坊樣で、イヤ、どうも立派な男に御成りなされました、全然先旦那樣に御目に掛るやうで御座りまする』
『左樣でありましたか』と篠田はうなづき、『幼少で飛び出しましたので、誠に知人が少ないです、故郷の山、故郷の水、故郷の人、事に觸れ時に從ひて、故郷程懷かしきものはありません』
『伯母御樣は御達者で在らつしやりまするか、永らく御目通りも致しませぬが——』
『ハイ、御蔭樣に別狀も無いやうですが——私も久しく無沙汰致しましたから一寸見舞にと思ひまして』
『成程』
『デャ、與太、吉田屋の婆さんに能く言うて呉れよ、何れ近日返金するつてツたつてナ』と前車の御者は喚きつゝ、大宮行の馬車は國神宿に停車せり、
『どうせ、貴樣から返金して貰へるなんて思つちや居ねえッて言つたよ——其れよりかお竹の阿魔に、泣かずに待つてろッて傳言頼むぞ、忘れると承知しねえぞ』と後車の御者は答へつゝ、篠田と老人とを乘せたる一輛は、驀地に孤り奔せぬ、
『旦那、此界隈もヒドく寂れましたよ』と老人は歎息ちつ、

二十四の二

雪の坂路を、馬車は右に左にガタリ〳〵と搖

れつゝ上り行く、馬の吐息氷りて煙の如し、

夜は既に十時に近からんとす、

『最早丁度、十年――二十年になりますナ』と老人は首傾け、『イヤ、どうも月日の經つと云ふは早いもので、未だほんの昨日の樣な氣が致して居りまするが』長大息を漏らして彼は篠田の面をシゲ〲見入りたり、『土地のことも知らねえ、言葉さへ譯らねえ樣な役人が來て、御維新は己が成たと言はぬばかりに威張り散らす、稅は年増しに殖える、××××××××××、一つでも可いことは無えので、其處で長左衛門樣の御先達で朝廷へ直訴と云ふことになつたので御座りましたよ、其れを村の巡査が途方も無い譃ツぱちを吹聽して、騷動が始まるなんて言ひ振らしたので、氣早の連中が大立腹で闇打を食はせる、憲兵が遣つて來るワ、高崎から鎭臺が押し寄せるワ、到頭長左衛門樣は鐵砲に當つて、彼したことにお成りなされましたので――』

老人は暫し目を塞ぎて心に浮ぶ當時の光景を偲びつ、『其れから皆なして遺骸を、御宅へ擔いで參りましたが、――御大病の御新造樣が態々玄關まで御出掛けなされて、御丁寧な御挨拶、すると旦那、貴郎だ、其時丁度十二三の坊樣が、長い刀を持ち出しなされて、父ちゃんの復讐に行くと言ひなさる、其れを今の粟野に御座る伯母御樣が緊乎抱き留めておすかしなさる――イヤもう、皆な御庭に坐つて泣きましたよ――』

老人は聲曇らせて月影に面を背向けぬ、

『御老人』と篠田もソゞろ懷舊の感に打たれやしけん、

袂より取り出せる襤褸もて老人は鼻打ちかみ、『其れから間もなく御新造樣は御亡り、貴郎は伯母御樣に手を引かれなさつて、粟野の奥へ行かしやる、――何でも長左衛門樣の讐討たんぢやならねエと言ふんで、伯母御樣の所から逃げ出しなすつて、外國迄も行つて修業なすつて、偉い人にならしやつたと云ふことは薄々聞いて居りましたが、――どうも思ひ掛けねエ所で御目に掛りまして、昔時のことかアリアリと目に見えるやうで御座りやす』

『御老人、貴所の樣に、長い目で御覽になりましたらば、世の變遷が能く御見えになりませうが、偖て自分一身を顧みますると、實にお恥かしい次第でありましてナ、亡き父などに對しても、誠に面目御座いません』

『いや〲、左樣で無い、何でも偉い人に成らしやつたと云ふ取り沙汰で御座りまする』と、老人は首打ち振り、『が、先旦那樣も偉い方で御座りましたよ、二十年前に心配しなすつた通りに、今は成り果てて仕舞ひました、何だ角だと取られる稅は多くなる、獲れる作物に變りは無い、其れで山へも入ることがならねい、草も迂濶刈ることがならねい、小兒は學校へ遣らにやならねい、借金が出來る、田地は段々に他の物になる、旦那今此の山中で、自分の田を作つて居るものが幾人ありますかサ、――其上に厄介なものがりますよ、××××××××××××、×××××××××××××××、×××××××××××××××××××、××××××××××××××××××、×××××、××××××××××××××、××××××××××××、――××××××××××××、××××××××××、××××××××××、×××××××××××××、××××××××××××、――×××××××××××××××、×××××××××××××××××、×××××××××××、×××××××××××××、×××××××、×、×××××、×××××、××××××××××××、一人息子に死なれた年老つた兩親は、稼人が無くなつたので、地主から、田地

を取り上げられる、税を納めねいので、役場からは有りもせぬ家財を賣り拂はれる、抵當に入れた馬小屋見たよな家は、金主から逐つ立てられる、到頭村で建てて呉れた自分の息子の石碑の横で、夫婦が首を縊つて終ひましたよ、爺と婦の情死だなんて、皆な笑ひましたが、其時も私、長左衛門様の御話して、斯うなることを見透して御座つたと言うて聽かせましたが、若い者等は、へイ其樣人があつたのかなと驚いて居ましたよ、最早村の奴せえ御恩を忘れて居ります樣なわけで――』

老人は鼻汁すゝり上げつ、『どうせ私などは明日にも死ぬ身だから、關やせぬやうな物で御座りますが、子供等が可哀さうでなりませぬ、何卒、旦那――長一樣、一つ長左衛門様の魂魄を御繼ぎなされて、此の百姓共を救つて下さりまし――』

石にや乘り上げけん、馬車は顚覆せんばかりに激動せり、

『畜生、何をフザけやがるッ』御者は續けざまに鞭を鳴らして打てり、

『オゝ、可哀さうだ、餘り酷くしなさるナ』と、老人は御者をなだめつ、

馬車はやがて吉田に着きぬ、

『では、御老人、お別れ致します』篠田は老人の手をシカと握りて斯く言へり、

權作翁は幾度も何か言はんと欲して遂に言ふこと能はざりき、粟野の方へ雪踏み分けて坂路を辿る篠田の黑影見えずなる迄、月にすかして見送りぬ、涙に霞む老眼、硬き掌に押し拭ひつゝ、

二十四の三

權作老人と立ち別れて篠田は、降り積む雪をギイ〳〵と脚下に踏みつゝ、我が伯母の孤り住む粟野の谷へと急ぐ、氷の如き月は海の如き碧き空に浮びて、見渡す限り白銀を延べたるばかり、

老夫の懷舊談に心動ける彼は、仰いで此の月明に對する時、伯母の慈愛に負きて、粟野の山を逃れたる十五歳の春の昔時より、同じ道を辿り行く今の我に至るまで、十有六年の心裡の經過、歴々浮び來つて無量の感慨抑ふべくもあらず、只だ燃え立つ復讐の誠意、幼き胸にかき抱きて、雄々しくも失踪せる小さき影を、月よ、汝は如何に哀れと觀じたりけん、焦がるゝ如き救世の野心に五尺の體軀徒に煩悶して、貧き手腕、其百萬の一をも成すこと能はざる恥かしさを、月よ、汝は如何に甲斐なしと照らすらん、森々として死せるが如き無人の深夜、彼はヒシと胸を抱きて雪に倒れつ、熱涙混々、誰憚らず聲を放つて泣きたりしが、忽ちガバと跳ね起きつ、足を踏みしめ手を振つて、天地も動けと呼ばはりぬ、

翠の帳、きらめく星　白妙の牀、かゞやく雪　宏なる哉、美しの自然　誰が爲め神は、備へましけむ、

峰の嵐は、眠りたり　谷の流は、夢のうち　隈なき月の冬の影　嚴かにこそ、靜なれ、

眼閉づれば遠く近く、何處なるらん琴の音聽ゆ　頭揚ぐれば氷の上に　冷えたる軀、一ツ坐せり　兩手振つて歌唄へば　山彦の末見ゆ、高きみそら、

感謝の聲の天のぼり　琴の調に入らん時　歌にこもれる人の子が　地上に罪の響きなば　彈く手とゞめて天津乙女　恥かしの色や浮ぶらめ、

父の正義のしもとにぞ　潰れし心ひれ
伏さむ　母の慈愛の涙にぞ　罪のゆ
るしを求め泣く　御神よ我を逐ふ勿れ
神よ汝が子を逐ふ勿れ、
神の心を模型の　人てふ旨を忘れてき
神の御園の海山を　血しほ流して爭へ
り、
萬象眠る夜の床　人に逐はれし人の子
の　天地を恨む力さへ　涙と共に涸
れはてて　空く急ぐ滅亡を　如何に
見給ふ我神よ、
天の御國の地の上に　建てんと叫ぶ我
が舌に　燃ゆれど盡きぬ博愛の　永
久の焔惠みてよ、
熟睡の窓に束の間の　罪逃れにし人の
子を　虚無の夢路にさゝやきて　聖
き記憶を呼びさませ、
星の帳、雪の牀　くしく宏なる準備か
な　只だ頽廢の人の心　悲しくも住
むに堪へざるを、
彼の面は嬉々と輝きつ、髯の氷打ち拂ひて、
雪を蹴つて小兒の如く走せぬ、伯母の家は彼の
山角の陰に在るなり、

二十四の四

樹の間より燈影の漏るゝ見ゆ、伯母は未だ寢
ねずあるなり、
細き橋を渡り、狹き崖を攀ぢて篠田は伯母の
軒場近く進めり、綿絲紡ぐ車の音微かに聞ゆ、
彼女は此の寒き深夜、老いの身の尙ほ働きつゝ
あるなり、
『伯母さん』篠田はホト〳〵戶を叩けり、
車の音止みぬ、去れど何の答もなし、
篠田は再び呼べり、『伯母さん』
『誰だエ』と伯母は始めて答へぬ、
『伯母さん、私です』
『オ、――長二ぢやないか』倉皇として起ち來
る音して、歪みたる戶は、ガタピシと開きぬ、
『まア――』と驚きたる伯母は、雪に立ちたる
月下の篠田を、嬉しげにツク〴〵と見上げ見下
せり、『能く來てお呉れだ、先頃の手紙に、忙
しくて當分行くことが出來さうも無いとあつた
ので、春暖かにでもならねばと思つて居たの
に、――嘸ぞ寒かつたらう、今年は珍らしい大
雪での、さア、お入り、私ヤ又た狐でも呼ぶ
のかと思つたよ』
『狐と間違へられては大變ですネ』と、篠田は
莞然笑傾けつ、框に腰打ち掛けて雪に氷れる
草鞋の紐解かんとす、
『お前が來ると知つて居りや、湯も澤山、沸か
して置いたのに』と伯母が爐上の茶釜をせゝる
を、『なに、伯母さん、雪路だから、足も綺麗です
よ』と、篠田は早くも上りて爐邊に坐りぬ、
昔ながらの松明の覺束なき光に見廻せば、
寡婦暮らしの何十年に屋根は漏り、壁は破れて、
幼くて我引き取られたる頃に思ひ較ぶれば、い
たく頽廢の色をぞ示す、
『まア、長二、お前ほんとに吃驚させて、斯様
嬉しいことは無い』と、山の馳走は此れ一つの
みなる榾堆きまで運び來れる伯母は、イソイ
ソとして燃え上る火影に凜然たる姪の面ながめ
て、『何時も丈夫で結構だの、餘り身體使ひ過
ぎて病氣でも起りはせぬかと、私ヤ其ればか
りが心配での』と言ひつゝ見遣る伯母の面は、
何時もながら若々として、神々しきばかりの光
澤漲れど、流石に頭髮は去年の春よりも又た一

きは白くなり増りたり、榾の煙は「自然の香」なり、篠田の心は陶然として酔へり、『私よりも、伯母さん、貴女こそ斯様深夜まで夜業なさいましては、お體に障りますよ』

『なんの、長二』と伯母は白き頭振りつ、『身體は使ふだけ健康だがの、お前などのは、心氣を痛めるので、大毒だよ――今ではお前も健康の様だが、生れが何せ、脆弱い質で、五歳六歳になるまでと云ふもの、全で薬と御祈禱で育てられた軀だ――江戸の住居も最早お止めよ、江戸は塵と埃の中だと云ふぢや無いか、其様中に居る人間に、何せ満足なものの在る筈は無い、今直ぐと云ふわけにもなるまいが、何卒伯母の健康な中に左様しなさい、山姥金時で、猿や熊遊んで暮らさうわ、――其れは左様と、今度は少し裕然泊つて行けるだらうの――』

篠田は頭掻きつゝ、口ごもりぬ、『――先日も手紙で申上げたやうな次第で、當時差し懸つた用事がありますので、殆ど足を抜くことが出來ないのですが――何だか無闇に貴女が戀しくなつたもんですから、今日不意に出掛けて参つたやうな始末でしてネ――』

伯母は怪訝な目して良久篠田を見つめしが、『――又た明日ゆつくり話しませう、疲れたらうに早くお寢み、例の所にお前の床がある、――氣候が寒いで、風邪でも引かれると大變だ』

『貴女こそ早くお寢みなさい』と篠田は笑ひぬ、

『何の、私は寢たよりも醒めてる方が楽だ――此の綿を紡いで仕舞はんぢや寢ないのが、私の規定だ、是れもお前の袷を織る積なので――サア、早くお寢み』

『左様ですか』と篠田は噴涙を呑んで身を起しつ、『誠に、恐縮に御座ります』と襖開きて、慣れたる奥の一室に入れり、

伯母は膝に手を組んで頭を垂れぬ、『――何か只ならぬ心配があると見える――此の私を急に戀しくなつたと云ふのは――彼の剛情な男が――』

二十四の五

『長二や、大層早起の、何時起きたのか、ちつとも知らなかつたよ』と言ひつゝ伯母は内より障子開く、

縁端には篠田が悠然と腰打ち掛けて、朝日の光輝く峰の白雪眺めつゝあり、『そりや、伯母さん、私の方が早く寢ましたからネ――が、伯母さん、どうも實に閑靜ですねエ、全く別天地です、此の節々が延々しますよ』

『だから、江戸の様なせゝこましい所で、無駄な苦勞せずに、早く先祖代々の故郷へお歸りと云ふのだ――頼朝様よりも前から住んで居るので、何殿に頭を下げにやならぬと云ふ様な心配もなしさ』

『然し、伯母さん』と篠田は笑みつ、『猿や狐の友達も可いが、人間は矢張り人間の相手が無ければ、寂しくて堪りませんよ、私は又た伯母さんが、能く斯して孤獨で居なさると不思議に思ふですよ、何です、一つ江戸住と改正なされたら』

『オヤ、飛んだことを、何の長二や、寂しいことがあるものか、多勢寄つて來るので、夜も寢るのが惜い程賑かだ』

『ヘエ、何處から其様に人が參りますか』と篠田の訝るを、伯母は事も無げに首肯きつ、『私の知つとる程の人が、皆な寄つて來るよ、――お前の阿父も來る、阿母も來る、祖父も祖母も來なさる、――其れに、長二、私の許嫁で亡つた、お前の義伯さんも來るの、其れに斯うしてお前も偶には來て呉れる、斯様嬉しいことがありますか』

『ハヽヽ』と思はずも篠田は笑ひつ、『ぢや、伯

母さん、私も佛様の御仲間入するんですネ』

『左様サ』と伯母は首肯き、『神様か佛様か知らないが、矢ッ張り人間の樣だよ、妙なもので、人は生きて居た時よりも、死んだ後の方が皆な善くなるよ――生きてた時分には、怒り合つたこともあらうし、怨み合つたこともあらうが、一度死ぬと、悪い所は皆な墓場へ葬つて、善い所だけが靈魂に殘るものと見える、其れに死んだ人は、羨ましいことに、年と言ふものを取らないので、誰も彼も皆な若いよ、お前の阿父でも阿母でも皆な若いよ、――私の亭主も丁度二十歳で亡つたが、其時の姿の儘で目に見える、私の頭が斯様に白くなつたので、どうやら恥かしい様な氣がして、最早何時にも鏡と云ふもの見たことが無いよ――』

ほツほツと片頰に寄する伯母の淸らけき笑の波に、篠田は幽玄の氣、胸に溢れつ、振り返つつて一室に煤けたる佛壇を見遣れば、金箔剝げたる黑き位牌の林の如き前に、年經て朧氣なる一個の寫眞ぞ安置せらる、是れ此の伯母が、未だ合衾の式を擧ぐるに及ばずして亡き數に入りたる人の影なり、

伯母もチヨと其方を見やりつ、『いつであつたか、彼の寫眞が判らぬ様になつたので、大きな油繪とやらに書き代へようと親切に、お前が言うて呉れたが、ナニ、決して其れには及びませぬよ、寫眞の顏などは見えなくなる程が可いよ、――そりやお前、繪姿なんてものは、極り切つた顏して居るばかりだけれど、此の心に映る姿は、物も言へば、步きもする、怒りもすれば笑ひもする、斯様自由自在なものは有るまいよ』

『成程』と、篠田は瞑目して、伯母が言葉の端々深く味ひつ、

伯母はほツほと獨り笑ひつ、『私ヤ、まア、勝手なことばかり云つて居たが、長二や、其れよりもお前の嫁の決らないのが、誠に心懸りだよ、何だエ、未だ矢ツ張り心當りが無いか、――江戸あたりの埃の中には、お前の氣に協つたものは有るまいが、ト云つて山の中にも無しの、ほんに困つて仕舞うたよ』と首傾けて屈託の態なりしが、『ほう』と一つ己が膝叩きつ『どうだエ長二、お前、亞米利加とかで大層お世話になつた婦人があるぢや無いか、偉い女性だとお前が言ふのだから、大した人に相違なからうが、一つ其婦人を貰ふわけにやなるまいか、異人でも何でも構やせぬよ、其れに御亭主の無い婦人だとお言ひぢやないか、エ、長二』

篠田は腹を抱へて噴飯せり、

『イエ、本當の話だよ』と伯母は益々眞面目也、

『伯母さん、豫てお話した通り、偉い女性に相違ありませぬがネ、――伯母さんより十歲も上のお婆さんですよ』

『何だエ』と伯母は眼を圓くし、『其様豪い婦人で、其様歲になるまで、一度もお嫁にならんのかよ――異人てものは妙なことするものだの』

『別に不思議はありませんよ、現に伯母さんも左様ぢやありませんか』

『ナニ、私ヤ、是れでもチヤンと心に亭主があるのだよ』

『其れならば、伯母さん、御安心下さい、私もチヤンと花嫁がありますよ』

篠田は晃々たる雪の山々見廻して、歡然たり、

『オヽ、お嫁があるとエ』と伯母は驚くまでに打ち喜び、『して、其れは何時きめました、早く知らせて呉れゝば可いに』

『なに、伯母さん、改めてお知らせする程のことも無いのです、最早疾くの昔時のことですから』

『ほツほ、何を長二、言ふだよ、斯様老人をお前、弄るものぢや無いよ、其れよりも、まア、何様婦人だか、何故連れて來ては呉れないのだ』

『伯母さん、最早、貴女にも御紹介した筈ですよ』

『虚言うて』と伯母は口開いてカラ〳〵と打ち笑ひ、『私がお前のお媽さんを忘れて可いものかの』

『サ、伯母さん、私の花嫁と云ふのは、其の「おかみさん」のことですよ』

『其のお媽さんの名は何と言ふのだの』

『おかみさんと云ふのです』

『長二や、お前、何を言ふだ』と、伯母は又も聲高く笑ふ、

『伯母さん、本當の話です、神様が私の花嫁のです、――父とも母とも花嫁とも、有らゆる一切です』

『ヘエ』と、伯母は良久言葉もなく、合點行かぬ氣に篠田の面を目もれり、『お前の神様のお話も度々聞いたが、私には何分解らない、神様が嫁さんだなんて、全然怪物だの』

『怪物ぢや無い、人ですよ、人の大きいのです、必竟、人が神様の小さいのと思や可いですよ』

『左様云ふものかの』と伯母は思案の首傾けつ、

『現に伯母さん、貴女の所へ私の兩親も來る、貴女の旦那様も來ると仰しやつたでせう――怪物でも、不思議でもありませんよ』

『だがの、長二や、其れは皆な私の知つて居る人達だが、お前の嫁の其の神様には、お前、お目に掛つたことがあるかの』

『左様ですねエ――思ひに惱む時、心の寂しい時、氣の狂ほしい時、熟と精神を凝らして祈念しますと、影の如く幻の如く、其の面も見え、其聲も聽ゆるですよ、伯母さんのと格別違ありますまい』

『其れは長二や、未だお前には早過ぎるやうだよ』と伯母は頭を振りぬ、『私も結句孤獨の方が好いと、心から思ふやうになつたのは、十年以來くらゐなものだよ――今だから洗ひ漈ひ言うて仕舞ふが、二十代や三十代の、未だ血の氣の生々した頃は、人に隱れて何程泣いたか知れないよ、お前の祖父が昔氣質ので、假令祝言の盃はしなくとも、一旦約束した上は、後家を立て通すが女性の義務だと言はしやる、當分は其氣で居たものの、まア、長二や、勿體ないが、父を怨んで泣いたものよ――お前は今年幾歲だ、三十を一つも出たばかりでないか、お前がどんな偉い人になつたにしても、マサか仙人では有るまいわ、近い話が、何か身動きもならぬ程に忙しい中を、斯様何の相談對手にもならぬ私を戀しがつて、急に思ひ立つて來ると云ふも、神様の嫁御では、物足らぬからではあるまいか、エ、長二、お前が何程物識でも、私の方が年を取つて居りますぞ』

篠田は腕拱きて深思に沈みつ、

子を伴へる雌雄の猿猴が、雪深き谷間鳴きつつ過ぐる見ゆ、

二十五の一

篠田の寂しき臺所の火鉢に凭りて、首打ち垂れたる兼吉の老母は、未だ罪も定まらで牢獄に呻吟する我が愛兒の上をや氣遣ふらん、折柄誰やらん訪ふ聲に、老母は狹き袖に涙拭ひて立ち出でつ、『オヽ、花ちやん――お珍らしい、能くお入來だネ、さア、お上りなさい、今もネ私一人で寂しくて困つて居たのですよ――別にお變りもなくて――』

『ハア、――老母も――』と、嫣然として上り來れるお花は、頭も無造作の束髪に、木綿の衣、キリヽ、着なしたる所、殆ど新春野屋の花吉の影を止めず、『大和さんは學校――左様ですか、先生は不相變御忙しくて在らつしやいませうねエ――今日はネ、阿母、慈愛館からお聽が出ま

してネ、御年首に上つたんですよ、私、斯様嬉しいお正月をするの、生れて始めてでせう、是れも皆な先生の御蔭様なんですからねエ――其れに阿母、兼さんから消息がありましテ、私、始終氣になりましてネ』

老母の目は復た忽ち涙に曇りつ、『――豫審とやらは此頃やうやく濟んださうですがネ――』

『左樣ですツてネ――其事は私も新聞で見ましたの、――六ケ敷文句ばかり書いてあるので、能くは解りませぬでしたが、何でも兼さんに、小米さんを殺すなんて惡心が有つたのでは無いと云ふやうに思へましたよ、矢ツ張り裁判官でも人ですから、少しは同情があると見えますわねエ、だから阿母、餘り心配なさらぬが可う御座んすよ』

『有難うよ』と老母は瞼拭ひつ、『此程も倅のことを引受けて下すつた、辯護士の方が來らしつたんでネ、先生樣の御友達の方で、――御兩人で種々御相談なすつて在らしつたがネ、君是れ程筋が立つて居るのに、若し兼吉を無罪にすることが出來ないならば、辯護士を廢めて仕舞へと、先生樣が仰しやるぢやないか、すると其方もネ、可しい、約束しようと仰しやるんだよ、花ちやん、私嬉しくて〳〵……』

『本當にねエ、阿母』と、お花はブル〳〵と身を震はしつ、『何と云ふ御親切な方でせう、――私、考へる毎に――』と、面忽ちサと紅らめ、『彼の樣にお忙しい中で、私共のことまであれも是れもとお世話下さるんですもの、何して阿母、世間態や人前の表面で、出來るのぢやありませんわねエ――近頃、又戰爭が始まるとか、忌な噂ばかり高い時節ですから、夜分お歸りも嘸ぞ遲くて在らつしやいませうねエ』

『左樣ですよ、おつちりお寐みなさる間も無くて在らつしやるので、御氣の毒樣でネ、ト云つて御手助する譯にもならずネ――其れに又た何か急に御用でもお出來なされたと見えて、昨日新聞社から直ぐに御郷里へ行らしつたのでネ』

『あらツ』と、お花は驚き顏、『ぢや先生は御不在なんですね――まア――何時御歸宅になるんですの』

『端書で言うて御遣しになつたのだから、詳しいことは解りませんがネ、明日の晩までには、お歸宅になりませうよ、大和さんが左樣言うてらしたから、だから花ちやん、丁度可い所へ來てお吳れだわネ、寂しくて居た所なんだから』

『私、まア――ぢや、私、お目に掛ること出來ないんですか――』

『そんなに急ぐのかネ、花ちやん、たまのことだから、少しは遊んで行つても可いでせう、外の處ぢや無いもの』

默つてお花は頭を振り、『明日の正午までには是非歸館らねばなりませんの』

ガラリ、格子戸鳴りて、大和は歸り來れり、『やア、花ちやん、來らつしやい、待つてたんだ、二三日、先生が御不在ので、寂しくて居た所なんだ』

『貴郎までが、――そんナ――』とお花は泣きも出でなんばかり、

二十五の二

晩餐も果てて、三人燈下に物語りつゝあり、

「何だか、阿母、先生が御不在と思や、其處いらが寂しいのねエ」と、お花は、篠田の書齋の方顧みつゝ、

『ほんとにねエ、在らしつたからとて、是れと云ふ別段のことあるでも無いのだけれど』と、兼吉の老母も首肯きつ、

『本當に私、申譯ないと思ひますワ』と、お花は急に思ひ出したるらしく、『先生が私を御世話なすつて下さるのを、世間では彼此申すさうぢやありませんか、私ヤ、何うせ斯樣した軀な

んですから　ちつとも關やしませぬけれど、其れぢや、先生に御氣の毒ですものねエ』

『なアに、花ちやん』と、大和は番茶呑み干しつつ、事も無げに笑ひて、『其樣ことは先生に取つて少しも珍らしく無ないのだ、此頃は尙だ酷い風評が立つてるんだ——山木の梅子さんて令孃と、先生が結婚しなさるんだツて云ふんでネ、是れには先生も少し迷惑して居なさる樣なんだ、皆な先生を毀けようとする者の卑劣な策略なんだから、花ちやん、左樣心配しなさるに及ばないよ』

『左樣でせうか』

『けれど大和さん』と老母は顏差し出し、『ツイ此頃も、其の山木のお孃樣とやらの弟御さんが御來でになつたで御座んせう、チラと御聞きしたゞけですから能くは解りませんけれど、其の御姉さんが何してもお嫁に行かないと仰しやるんで、トヾ、何か大變なことでも出來したと云ふ樣な御話で御座んしたよ』

『ウム、彼の松島の一件か』と、大和は例の無頓着に言ひ捨てしが、忽ち心着きてや兩手に頭抱へつ『ヤツ』と言ひつゝお花を見やる、

『何しなすつたの』と、お花も、松島と云ふ一語に顏赧らめぬ、

『なアに、花ちやんの爲めにも矢張り敵なんだよ、彼の松島大佐がネ』と大和は茶受ムシヤ〳〵と嚙み込みつ、『彼が餘程以前から、梅子さんを貰はうとしたんだ、梅子さんの實父も、繼母の兄と云ふのも、皆な有名な御用商人なんだから、賄賂の代りに早速承諾したんだ、所が我が梅子孃は何しても承知しないんだ、到頭梅子さんを誘ひ出して、腕力で侮辱を與へようとしたもんだから、梅子さんも非常に怒つて、松島を片眼にしたんださうな、其れを宅の先生が何か關係でもあつて、左樣させたやうに言ひ觸らして、先生の事業を妨害する奴があるんだ、或は梅子さんが先生を戀して居なさるかも知れんサ、大分世間で其の評判だから、けれど先生は御存じ無いんだ、戀愛は其對手が承諾を與へた場合に始めて成立する、所謂雙務契約なんだからなア』と、戀愛法理論を講釋したる彼は、グッと一椀、茶を傾けつ、『何うも美人てものは厄介極まる、僕は大嫌ひだ』

老母もお花も轉がつて笑ひつ、

『それは、屹度、其のお孃樣も左樣で在らつしやいませうよ』と、老母はやがて口を開きて、『先生樣のやうに、口數がお少なくて、お情深くて、何から何まで物が解つて在らしつて、其れでドッしりとして居なさるんですもの、其ヤ、女の身になれば誰でもねエ』

『まア、厭な阿母』

『否エ、本當ですよ』

お花はランプの光眩し氣に面を背向けつ、

『けれど、其のお孃樣など、お幸福ですわねエ、其樣した立派な方なら、假令浮名が立たうが、一寸も男の恥辱にもなりや仕ませんもの——』

大和は眼を圓くして、襟に頤埋めて俯けるお花の容子を、マジ〳〵と見つめぬ、

此夜お花は眠らざりき、

二十六

『今日は又た曇つて來た、何卒降雪ねば可いが』と、空眺めながら伯母は篠田を見送りの爲め、其の後に付いて、雪の山路を辿り來りしが、『さう云ふ次第で、長二や、氣を着けてお呉れよ、此世に只だ伯母一人姪一人と云ふのぢや無いか、——亭主には婚禮もせずに逝かれる、お前の阿父は彼の樣な非業な最期をする、天にも地にも賴るのはお前ばかりのだ——まア、之を御覧よ』と、眼下に白き雪の山里指しつ、『お前の阿父は此の秩父の百姓を助けると云ふので鐵砲に撃た

れたのだが、お前の量見は其れよりも大きいので、如何災難が湧いて來ようも知れないよ、——斯樣年老つた上に、逆事など見せて呉れない樣にの——』

篠田も何とやらん後髮引かるゝやう、『伯母さん、何卒心配せんで下さい、重々御苦勞を御掛け申して來た今日ですから——其れに私も既三十を越したんですから、後先見ずのことなど致しませんよ、父にも母にも爲ることの出來なかつた孝行を、貴女御一人の上に盡したいのが、私の精神ですからネ」

伯母は涙堰きも敢ず『——長二や、——私や、斯してお前と歩いて居ながら、コックリと死にたいやうだ——』

ハヽヽと篠田は元氣克く打ち笑ひつ、『何を伯母さん、仰しやる、今若し貴女に死なれでもして御覽なさい、私は殆ど此世の希望を亡して仕舞ふ樣なもんですよ、何卒ネ、お軀を大切にして下さい、其のうちに又た時を都合して參りますからネ』

『忙しからうがの』と伯母は小さき袂に溢るゝ涙押し拭ひつ、『何卒さうしてお呉れよ、年增しにお前が戀しくなるので、——其れに、復た言ふ樣だが、私の一生の御願だでの、一日も早く嫁を貰ふことにしてお呉れよ、——女房が無いで身締が何の角のなどと其樣心配は、長二や、お前のことだもの少しも有りはせぬが、お前にしてからが何程心淋しいか知れはせぬよ、女など何の役にも立たぬ樣に見えるが、偉い他人でも其の眞心には及びませんよ、——諄いと思ふだらうが、お前の嫁の顏見ぬ間は、私は死にたくも死なれないよ』

篠田は答へんすべも無し、

＊　＊　＊　＊　＊

顧み勝ちに篠田は獨り下山り行く、伯母が赤心一語々々に我胸を貫きつ、

神に祈れど得も去らぬ、寂し心のなやみ
をば、戀てふものと伯母君の、昨日ぞ諭
し給ひたる

花の姿の美しと、乙女を見たる時もあ
れど、慕はしものと我が胸に、影をとゞ
めしことあらず、

地上の罪の同胞に、代る犧牲の小羊と、
神の御前に獻げたる、堅き誓の我なるを、

不信の波の何時しかに、心の淵に立ち初
めて、底の濁を揚げつらん、今日まで知
らで我れ過ぎぬ

汝を戀ふるばかりに、柔しき處女の血にさへ汚れしを知らずやテフ聲、忽ち如處よりか矢の如く心を射れり、山木梅子の美しき影、閉ちたる眼前に瞭然と笑めり、

『おのれ、長二ッ』と篠田は我と我が心を大喝叱咤して、噏とばかり眼を開けり、重疊たる灰色の雲破れて、武甲い高根、雪に輝く、

二十七の一

濠水に映る星影寒くして、松の梢に風音凄く、夜も早や十時に垂んたり、立番の巡査さへ今は欠伸ながらに、爐を股にして身を縮むる鍛冶橋畔の暗路を、外套スッポリと頭から被りて弓町の方より出で來れる一黑影あり、交番の燈火にも顏を背向けて急ぎ橋を渡りつ、土手に沿うて、トある警視廳官舍の門に沒し去れり、

彼の黑影はヤガて外套を脱して、一室の扉を押せり、室内は燈光明々として、未だ官服

のまゝなる主人は、燃え盛る煖爐の側に安然と身を大椅子に投げて、針の如き頬髯撫で廻しつゝあり、

扉の開かれし音に、ギロリとせる眼を其方に轉じつ、「やヤ、吾妻」

彼の黒影は同胞新聞の記者吾妻俊郎にぞありける、

吾妻は其の敏慧なる眼に微笑を含みつゝ、輕く默禮せる儘、主人と相對して椅子に坐せり、

『川地課長、やうやく捜し出しましたよ』

言ひつゝ彼は裏なるポケットより一個の紙包を取り出して、主人に渡せり、『今一日後れりや、屑屋の手に渡る所なんで――大切な原稿を間違へて、反古の中へ入れちやつたてなことで、屑籠を打ちあけさせて、一々撰り分けて、本當に酷い目に逢ひましたよ』

主人は默つて其の紙包を開けり、中より出でしは皺クチャになれる新聞の原稿なり、彼は膝頭にて稍々之を押し延ばしつ、口の裡にて五六行讀みもて行けり、

……彼の主戰論者の聲言する所を聞くに日露兩國の衝突は、自由と擅制との衝突にして、又た文明と野蠻との衝突……と云ふ、吾輩謂へらく決して然らず、是れ只だ專制壓制帝國の衝突のみ、專制野蠻政府の衝突のみ…………財産の特權、貴族の遊食、…………總ゆる罪惡一に×××を假りて辯疏……

川地は目を揚げて吾妻を見つ、『慥に篠田の自筆か』

「左樣です、間違ありませんよ」

『御苦勞々々』と川地は首肯きつゝ己がポケットの底深く藏め、『是れが在れば大丈夫だ、早速告發の手續に及ぶよ、實に不埒な奴だ、――が、彼奴、何處か旅行したさうだが、逃げでもしたのぢや無からうナ』

吾妻は微笑みつ、『なに、郷里へ一寸歸つただけのです、今晩あたり多分歸京つた筈です、で、罪名は何とする御心算ですネ』

『左樣さナ』と主人は頬撫でつゝ、『先づ不敬罪あたりへ持つて行くのだ、吹つ掛けは成るべく大きくないと不可からナ』

『エ、不敬罪ですつて』と吾妻は聲やゝ打ち顫へり、

主人は鋭き眼して睨みぬ、『何だ』

『なに、何もしやしませぬがネ』と吾妻は心押し靜めつ、『何の道、大至急願ひたいものです――僕は最早篠田の面を見るに堪へないですからネ』

吾妻の額には恐怖の雲懸る、

『何をビク〳〵するんだ』と、主人は吾妻を一睨せり、『其樣ことで探偵が勤まるか――篠田や社員の奴等に探偵と云ふことを感付かれりや爲なかろな』

『なアに、外の奴等は感付く所か、僕が餘り篠田に接近すると云ふので、却て嫉妬して居る程です、ですから僕の流言が案外社員間には成效して、陰では皆な十分に篠田を疑つて居るですがネ――』言ひ淀みたる吾妻は、側なる小卓に片肘を立てて、悩まし氣に頭を支へぬ、

『其れが何したと云ふのだ、篠田の方は何したと云ふのだ』

『――課長』吾妻の聲は震へり、『川地さん、――然し篠田は覺つて居るらしいのです、慥に覺つて居るらしいのです』

『けれど吾妻、覺つて居ながら、探偵を近づけて居る理由もなからう――特に彼云ふ惡黨が』

『所が、其れが大間違ひのです』と、吾妻は姿正を正して吐息をつけり、『川地さん、正直に言ふと、彼は偉い男ですよ、彼は慥に僕を探偵と知つてるのです、其れで僕と差向の時には、必ず僕に說教するのです、彼は全然坊主ですナ、

其眞實の言葉が、此の心の隅から隅まで探燈で照らし渡る樣に感じて、怖くて堪らない』

彼は瞑目して暫し胸裡の激動を制しつ、『――ト云うて、貴官の方へは、彼の罪迹を何か報告せねばならぬでせう――イヤ、其樣せねば貴官の御機嫌が惡いでせう――けれど實を言ふと、僕には彼の罪惡と云ふものを發見することが出來ないんですもの――』

川地の眼はキラリ輝けり、『ぢや、吾妻、今日まで報告した彼奴の祕密は、虛事だと云ふのか』

『――悉く虛報と云ふでもありませぬが――悉く眞實と云ふ事も困難です――』

『ぢや、吾妻、彼奴が山木の娘を誘惑して、其の特別財產を引き出す工夫してるといふのは、ありや眞實か何だ』

『――あれは少し違つてる樣でした――』

『花吉を妾にして居ると云ふのは』

『あれも――少し違つて居ります』

川地は憤怒の聲荒々しく、『九州炭山の同盟罷工教唆も虛報と云ふのか』

『イヤ、全然虛報と云ふでもありませぬが――實は篠田は、同盟罷工に反對して、靜肅なる手段を講ることを熱心に勸告したのです、其の往復書信など僕は能く知つて居ますが、けれど勢ひ已むを得ないと云ふことになつたもんですから、然らば坑夫等を無慘の失敗に終らしめてはならぬと云ふので、最も困難な兵糧方に廻つたのです、だから彼が教唆したと云ふのは、少し眞實に遠い樣でもありますが、彼が無かつたら坑夫の同盟も、今度の勞働者團結も成立つことでありませんから、彼が教唆したと報告したのも、結果から言へば全然虛報とは言はれぬ樣にもなる次第のです』例の快辯に似もやらず、吾妻は汗を拭ひつゝ辯疏せり、

『吾妻、全で貴樣は政府を欺いて、我等を欺いて、機密費を盜んで居たのだ』

『けれど』と、吾妻は少しく椅子を後に退け、『其ヤ課長、無理ですよ、初め僕が同胞社に這入り込んだ頃、僕は報告したぢやありませんか、外で考へると、內で見るとは全く事情が違つて、篠田と云ふ男、實に敬服すべき君子だと申上げたでせう、スルと貴官は大變に立腹して、其樣等がない、何かあるに相違無い、政府の方針は飽く迄も社會黨撲滅と云ふことであるから、若し其に好都合な申告を爲ないと、今度は警察の無能と云ふんで、我々の飯の食ひ上げになる、だから何でも可いから持つて來い、虛誕を組立てて事實を織り出すのが探偵の手腕だと――』

『馬鹿ッ』

『馬鹿ぢやありません、今度も左樣です、松島が負傷したに就て、軍隊や元老の方からも八釜しく言うて來て困る、是非何とかして、篠田を引ッ縛らねばならぬからと言ふんでせう――其りや成程、僕が最初篠田と山木の孃と、不正な關係がある樣に虛誕を報告して置いた結果で仕方ないですが――』

川地は再び大喝せり、『馬鹿ッ』

二十七の二

吾妻のワナ〳〵と顫へる面を、川地課長は冷かに眺めて、『其の態は何だ、吾妻、貴樣も年の若いに似合はず役に立つ男と思つて居たが、案外の臆病だナ、其れでも警察の飯を食つて居るのか』

吾妻は頭抑へつゝ、『――其りや僕も、爺の脛を食ひ荒して、斯んな探偵にまで成り下つたんだから、隨分慘酷なことも平氣でやつて來たですが、――篠田には實に驚いたのです、社會黨なんぞ、どうせ陰險な亂暴なものだと思つて這入り込んだのだが、祕密と云ふものが殆ど無いのです――以前始めて社會民主黨を組織するツ

てた時も、左樣でしたよ、メシか土橋だと思ふが、彼の渡部と云ふ男の所へ出掛けて行くと、先方が却て歡迎して起草しかけて居た宣言書を見せて、一々講釋をされたので、社會主義ッてものは、實に可いものだと感服し切つて來たが、僕も本當に左樣思ひますよ、川地さん、貴官は篠田を惡黨だの何のと言ひなさるけれど、試に一度逢つて御覽なさい、乾度從來の誤解を慚愧なさるに相違ありませんよ――僕は斯う云ふ好人物を毀けねばならぬかと思ふと、如何にも自分ながら情なくなつて、寧そ自分の探偵と云ふことを白狀して、本當の子分にして貰はうかと思つたことが、幾度とも知れませんよ、近來は最早怖くて堪らぬから、逢はぬやうに〳〵と、篠田を避けて居るんだ』

川地は大口開いてカラ〳〵と笑ひつ、『吾妻、貴樣もエラい善根があるんだナ、感心だよ――假令斯樣になつても、未だ人間には相違無いからネ』と、吾妻は首肯き、『然し、もう斯うなるからは、何卒篠田に面を見られない樣にして貰ひたいのだが、其の論文にしても、何も不敬罪とは覺束ないからナ、裁判は警視廳や内務省が爲るんで無いからナ――何程牽強附會をした所で、官吏侮辱位のものだ、二月か三月の重禁錮だ、――僕ア外國へ逃げでもしなけりや、安心が出來ませんよ』

『非常な心配だナ』と、川地は冷笑しつゝ、『其れなら我輩も一ッ善根の爲めに、貴樣を救けて、篠田を一生娑婆の風に當てないやうにして遣らう』

『笑談言つちやいけませんよ、何程意氣地の無い裁判官でも、警視廳の命令に從ひはしませんからネ』

『馬鹿だなア』と川地はポカリ煙草を喫しつ、『裁判官は只だ法廷で、裁判するだけの仕事ぢやないか――法律なんて酌子定規に拘泥して、惡黨退治が出來ると思ふか――フヽム』

吾妻は暫し川地の面ながめ居りしが、忽如、蒼く化りて聲ひそめつ、『――ぢや、又た××××××××××と云ふんですか――』

川地は默つてスイと起ちつ、『吾妻、居室へ來給へ、一盃飲まう――骨折賃も遣らうサ』

去れど吾妻は悄然として動きもやらず、『――考へて見ると×××、社會の安寧を壞るものは有りませんねエ、泥棒する奴も惡いだらうが、捉へる奴の方が尚ほ惡黨だ』

『社會の安寧？』と川地は苦笑しつ、『何も、×××××サ』

吾妻は低聲獨語しぬ、『×××、――×××』

二十八

大洞別莊の椿事以來、梅子は父剛造の爲めに外出を嚴禁せられて、殆ど書齋に監禁の樣なり、繼母の干渉劇しければ、老婆も今は心のまゝに出入すること能はず、妹芳子が時々來りては、父母が梅子に對する惡感情を、傲りがに傳達しつゝ、又た姉の悲哀の容態をば尾鰭を付けて父母に披露す、芳子は流石にお加女夫人の愛兒なり、梅子の苦悶を見て自ら喜び、姉を讒訴して、母を喜ばしむ、只だ前よりも一層眞心を籠めて彼女を慰め、彼女を奬まし、唯一の楯となりて彼女を保護するものは剛一なりける、

剛一は千葉地方へ遠足に赴きて二三日、顏を見せざるなり、雨蕭々として孤影寥々、梅子は燈下、思ひに惱んで夜の深け行くをも知らざるなり、

『アヽ、剛さんは如何なすつたでせう、今夜はお歸りの日取なんだが、今頃までお歸りないのは、大方此の雨でお泊りのでせう、お一人なら雨や雪に頓着なさる男ぢやないけれど、お友達と御一所では、左樣もならないからネ』

彼女は机上の置時計を見て獨語せり、

「ほんたうに剛さん、私や、貴郎に感謝してますよ、貴郎の樣な男らしい男を弟と呼ばせ給ふ神樣は、何と云ふ恩惠深くて在らつしやるでせう、私の嬉しく思ふのは、天では神樣、そして地では、剛さん、貴郎ばかりです――」

彼女は忽ち眼を閉ぢて俯けり、『――左樣ぢや無い、――私は慥に身も心も獻げた尊き丈夫が在るのです、けれど篠田さん――貴方は少しも私の心、此の涙に浸せる我心を少しも知つては下さいません――其れを御怨み申しは致しません、けれど何と云ふ情ない世の中でせう、此の純潔な私の戀が――左樣です、純潔です、必ず一點の汚濆もありません――貴方の爲めに禍の種となるのです、――篠田さん、我が夫、何卒御赦し下さいまし、貴方の博大の御心には泣いて居るのです、私は既う決心致しました、私は父から全く離れました、家庭からも全く離れました、敎會からも離れました、私は天の神樣をのみ父とし母として、地に散在する憐れなる兄弟と大きな家庭を作ることに覺悟致しました、そして此世を神樣の敎會と致します、――篠田さん、貴郎は私の此の決心を、叱つて下さいま[illegible]んでせうねエ――』

彼女は恍惚として夢の如く、心に浮ぶ篠田の面影に縋りて接吻せり、

「姉さん」と黄色の聲して芳子は走せつゝ入り來れり、

梅子は遽然我に返りつゝ『あら、芳ちやん、喫驚しましたよ、何なすつて』

『姉さん、私、可いこと聽いたワ』芳子は姉の面打ち眺めて笑ふ、

梅子は又た何か面白からぬ我が噂なるべしと思へば、取り合はん心もあらず、

去れど芳子は一向無頓着に、大勝利を報告する將軍の如くぞ勇める、「姉さん、私、今可いこと聽いてよ、篠田さんは到頭縛られて、牢屋へ行きなさるんですと」

巨砲もて打たれたらん如き驚愕を、梅子は熱と制しつ、『――左樣ですか――誰にお聽きなすつて――』

「今ネ、何處からか電話で、――何でも警視廳とか云つてでしたの――報して來たんです、阿父が阿母に話して在らしつてよ、是れで漸く松島さんへ、お詫が出來るつて、ほんとに左樣だわねエ」

「ヘエ、そして芳ちやん、既う牢屋へ行らしつたのですか」

『否え、明日ですつて』

「左樣ですか――」

梅子は强ひて平然と裝へり、去れど制すべからざるは其顏なり、看よ、其の凄き蒼白を、芳子は稍々豫算狂へるが如く、訝しげに姉の面見つめて居たりしが、芳子々々と、ケタゝましく呼ぶ母の聲に、飛ぶが如くに默つて走せ行けり、

梅子は聲を吐んで瞠と伏せり、

二十九の一

宵の雨も何時しか雪と降り替れり、

麻布本村町の篠田が玄關には、深け行く寒き夜を、大和一郎の尙ほ兀々と勉學に餘念なし、

雪バラ／＼と窓を打ちて、吹き入る風に身を慄はしつ、『オヽ、寒い、最う何時かナ、未だ十二時にはなるまい……』

顧る臺所の方には、兼吉の老母が輾轉反側の氣はひ聞ゆ、彼女も此の雪の夜の物思ひに、既に枕に就きたるも、容易くは夢の得も結ばれぬなるべし、

篠田が書齋の奥よりは、洋紙を走るペンの音、深夜の寂寞を破りて漏れ來ぬ、

大和は襟掻き合はしつゝ「アヽ、先生は未だお寢みにならんのか、何か書いて在らつしやる樣た、——明日の社說かナ、否や、日常お寢の時間に仕事なさるのだから、他に何か急用の書き物がおありなさるのであらう、手紙かナ、平民週報の寄書　ナ、ア、左樣だ、露西亞の社會民主黨へ贈りなさる文章に相違無い——兩國の侵略主義者が嫉妬猜忌して兵火に訴へようとする場合に　我々同志者は相應じて世界進步の爲めに、平和の福音を鼓吹せねばならぬと言うて居られたから——が、先生も實にお氣の毒で堪らぬ——」

大和は瞑目して大息せり、

「——敎會を除名されなすつたなどは、別段先生の損失でもなく、寧ろ敎會の愚劣と僞善を表白したに過ぎないのだが、驚いたのは鍛工組合の擧動だ——先生が梅子さんと結婚なさる爲めに、主義を抛棄なさるとは、何と云ふ破廉恥な言ひ草だ、嫉妬深い松本の暴論も、老實な浦和の主張で未だ決議には至らぬさうだが、其れが彼の吾妻の奸策だとは何事だ、尤も彼奴、嫌な奴サ、先生の前ではヒヨコ〳〵頭ばかり下げて諂諛ばかり並べて、——誰か何時やら、政府の狗ぢや無いかと注意したつけが、何も先生は既に左樣と知つて居られるらしかつたよ、彼時の御返事を見ると——彼程敏慧な頭腦を邪路から救ひ出して遣るものが無ければ、啻に一人の兄弟を失ふのみならず社會は何程毀損されるかも知れないと、——先生を殺すものは、必竟先生の愛心だ——アヽ」

藥園阪下り行く空腕車の音あはれに聞ゆ、「ウム、車夫も嘸ぞ寒からう、僕は家に居るのだけれど」大和は机の上に兩手を組みつゝ、頭を俯して又た更に思案に沈む、

『本當に左樣だ、先生を殺すものは先生の愛心だ、花ちやんを救ふ、すると直ぐ其れが先生に禍するのだ、其れに梅子さん——何も不思議だ、何故社會は虛誕を傳へて喜ぶのだらう、が、煙の立つ所必ず火ありとも云ふぞ、——然し僕が若し婦人ならば矢張り左樣思ふかも知れない、僕が先生を斯く思ふの情、是れが女性の心に宿れば戀となるのかナ——アヽ、何卒先生に思ふ存分、腕を伸ばさして上げたいナ』

風又た吹き加はりぬ、雪の音はげし、

門戸に低く人の聲す、

大和は耳を聳てぬ、戸を叩く音なり、

何人の何等緊急事ならん、此の寒き雪の深夜に——大和は訝りつゝ立つて戸を開きぬ、

吹き巻く雪中、門燈を背にして、黑き影一個立つてり、

二十九の二

「何殿です」と、大和が雪明にすかして問ふを、門前の客は袖の雪拂ひも敢ず、ヒラリとばかり飛び込めり、

東コートに御高祖頭巾、——アヽ、是れ婦人なり、

大和は眼を圓くして怪しげに見つめぬ、

「大和さん」婦人の聲に、大和は愕然として一歩退けり、「ア、貴孃ですか」

「あの、御在宅でいらつしやいますか——是非御面會せねばならぬことが御座いますので」

深夜の雪道に凍えてや、婦人の聲の打ち震ひて聞えぬ、

「暫くお待ちを願ひます」と、大和は急ぎ篠田の書齋へと走せぬ、

「先生——」驚愕と怪訝とに心騒げる大和の聲は甚くも調子狂ひたり、

既に文書認め了りし篠田は、今や聖書繙きて、就寢前の祈禱を捧げんとしつゝありしなり、

彼は靜かに顧みぬ、「大和君、何です」

『——只今、あの、山木の梅子さんが御光來に

なりました』
『ナニ、梅子さんが――』篠田も首傾けぬ、『お一人ですか』
『左樣です、何か至急の御要件ださうで御座いまして、是非御面會をと云ふことです』
『ウム、此の雪中を御光來は尋常のことでは有るまい ――早速に』
梅子は大和に導かれて篠田の室に入り來りぬ、肉やゝ落ちて色さへ甚く衰へて見ゆ、彼女は言葉は無くて只だ慇懃に頭を下げぬ、
『良久御目に掛りませぬでした』と、篠田も鄭重に禮を返して、『此の吹雪の深夜御光來下さるとは甚だ心懸に存じます、早速承るで御座いませう』
梅子は僅に頭を擡げぬ、『――篠田さん――私、貴所に御逢ひ致しまする面目が無いので御座いますけれど――今晩容易ならぬことを、耳に致しましたものですから――』
彼女は逡巡ひつゝ、竊と傍の大和を見やりぬ、
容易ならぬことゝの一語に、危殆の念愈々高まれる大和は、躊躇する梅子の樣子に、必定何等の祕密あらんと覺りつ、篠田を一瞥して起たんとす、
篠田は制しぬ、『何事か知りませぬが、梅子さん、少しも御懸念に及びませぬ、是れは私の弟ですから――』
大和は又た坐りてホと吐息を漏らしぬ、
『否ェ、篠田さん、大和さんに御遠慮申したのでは御座いませぬが』梅子は言はんと欲して言ひ能はざるものの如し、
『何でありまするか』と篠田は問ひぬ、『何か私の一身に關係しました凶事でも御聞き込みになりましたので――』
『ハイ』と、僅に梅子は首肯きぬ、
大和は拳を固めぬ、
『如何なる件でありまするか、御遠慮なく仰しやつて下さい』篠田は火箸もて灰かきならしつつあり、
『篠田さん』と、梅子は涙呑み込みつ、『是れは貴郎の少しも御關係ないことです、けれど今の世の中は、貴郎を――拘引する奸策を廻らして居るのです、冷かな手は黑き繩もて貴郎の背後に迫つて居りますよ――』
梅子は涙輝く眸を揚げて、始めて篠田を凝視せり、
『やッ』と、思はず聲を放つて、大和は膝を進めぬ、
『はゝア――イヤ左樣したこともありませう』と篠田は聊か怪しむ色さへに見えず、雨戸打つ雪の音又た劇し、
堪へずやありけん、大和は口を開きぬ、『先生――御心當りがお有りなさるのですか』
『否や、別に心當りも無いが、災厄と云ふものは、皆な意外の所より來るのだから』
大和は復た沈默せしが、やがて梅子の方に膝を向けぬ、『山木樣、何時、先生を拘引すると申すのです』
『――明朝――』
『明朝――』とばかり大和は殆ど色を失ひしが、『そして、何れから御聽き込みになつたので御座います――甚だ差出がましう御座いますが――』
梅子は悄然頭を垂れぬ、
『――何ぞ、篠田さん、御赦し下さいまし――警視廳から愚父へ內密の報知がありましたのを、圖らず耳にしたので御座います、御恥かしいことで御座いますが、愚父なども內々警察へ依頼致したのに、相違無いので御座います――篠田さん、――私は貴所の前に一切を懺悔致さねばならぬことが御座いますので、御輕蔑をも顧みず罷り出で　したので御座いますが――

疊に兩手支きたるまゝ、聲は震へて口籠りぬ、

大和は徐と立ちて室を出でぬ、不安の胸に腕拱きつゝ、

『梅子さん、決して御心配なさるには及びませぬ』と、篠田は微笑せり、『我々の頭上には絶えず政府の警戒が嚴酷なので、何時何事の破裂するか、豫測することが出來ないのです、是れは日本ばかりではありませぬ、萬國に散在する私共の同志者は、皆な同一の境遇に在るのです――ですから、貴孃に謝罪して頂くと云ふ樣な必要は無いと思ひます』

良久して彼女は思ひ切て口を開きぬ、『――貴所の御同志が政府の憎惡を受けて居なさいますことは、豫々承知致して居りまするが、貴所の御一身にのみ、不意の御災難が降り懸ると云ふのは、其處に特別の原因がありまするので――そして其の機會を生み出しましたのは――私の――心の弱いからで御座います』

『――何と、篠田さん、御詫致して可いのか』と、はふり落つる涙を梅子は拭ひつ、『心亂れて我ながら言葉も御座いません――只だ一言懺悔させて下さいませう、……』

『喜んで御聽き申すで御座いませう』

……………………

『何卒、篠田さん、御赦し下さいまし――貴所の、御災難の原因はと申せば、――私が貴所を御慕ひ申したからで御座います――』梅子は疊に伏せり、歔欷の音、時に微に聞ゆ、

梅子は面を擡げぬ、『――定めて厚顏ものと御蔑みも御座いませうが、篠田さん、――私如きものが貴所を御慕ひ申すと言ふことが、貴所の御高德を毀けることになりまするのは能く存じて居りまするから、只だ心の底の祕密として、曾て一語半句も洩らした覺のありませぬことは、神樣が御承知下さいます――其れを、結婚の申込を悉く謝絶致します所から、人を疑つて喜ぶ世間は種々の風評を立てまして――貴所の御名譽に關係致しまする樣な記事を、數々新聞の上などでも讀みまする每に、何程自分で自分を叱り、陰ながら貴所に御詫致したで御座いませう――けれど我が心に尋ねて見ますれば、他の傳說を、全く虛妄とのみ言ひ消すことが出來ませぬので、必竟、貴所に此の最後の――縲絏の恥辱を御懸け申すのも、私の弱き心からで御座います』

梅子は袖を嚙み締めて聲立てじと悚へぬ、

『何も仰しやつて下さいますな』と篠田は目を閉ぢつ、『現社會の基礎に×を置きつゝある私共が、其の反撃に逢ふのは、毫も怪むに足らぬことで御座います』

『けれど、篠田さん、貴所は今御自愛なさらねばならぬ御體で御座いませう』梅子の一語には滿身の力溢れて聞えぬ、

『自愛致すとは』と、篠田は訝る、

『此儘篠田さん』と梅子は却て怪みつ、『貴所は入獄なさるので御座いますか』

『左樣です、力を以て來るものには、只だ溫順を以て應接する外無いでせう』

『けれど――從來、愚父などの話に依りますれば、貴所のやうな方は、×××で不測の災禍にお罹りなさる恐があると申すでは御座いませんか、出過ぎたことでは御座いますが、暫く日本を遠のきなさいましては――外國には隨分他國に身を逃れると云ふ例もあるやうで御座いますから』

『梅子さん、御厚誼は謝する所を知りません、けれど私の一身には一人探偵が附けてあるのです、取分け既に拘引と確定しましたからは、今斯くお話致し居りまする私の一言一句をさへ、戸の外に筆記して居るものがあるも知れないです、――若し私一己の野心から申すならば、今

空しく牢獄に囚はれて、殊に只今御話の如き暴行は、随分各國の獄裡に實驗せられた所ですから、私も決して喜んで行かうとは思ひませぬ、乍併、私共同志者の純白の心事が、斯かることの爲めに、政府にも國民にも社會一般に說明せられまするならば、眇たる此一身に取て此上なき榮譽と思ひます、實は我々の同志者と言はれて居る間にさへ、尙ほ心術を誤解して居るものが尠くないので御座いますから——』

篠田は語り來つて 急に言葉を更め、「餘り自身のことを語り過ぎましたが、其よりも貴孃の將來こそ問題でせう、實は先頃剛一君とも一寸御話致したことでありましたが』

梅子の面は眞紅を染めぬ、「有難う御座います、貴所の溫和の御精神をお聽致すに就け、何と云ふ私の恐ろしい心で御座いませう、——私は、篠田さん、ほんたうに懺悔致しました、そして決心致したので御座います、私は豫て愚父から多少の地所と財產とを讓り受けて居りまするので、所詮不義の結果の財產のですから、一には贖罪の爲め、此の身と併せて貧民教育に貢獻したいと考へて居たので御座いますが、今度愈々着手致すことに決心しまして御座います、申す迄もなく、只だ貴所の御指揮をと其れのみ心頼で御座いましたものを、——』

「ア、其れで安心致しました』と篠田は晴々と微笑を洩らせり、『梅子さん、誠に良き御計畫で御座います、若し私が自由の身で在りませうならば、十分御協議致しまして、聊か理想を實行して見たいのでありますが——然し決して御心配なさいますな、社會主義倶樂部の諸君は、無論滿腔の尊敬と同情とを以て、貴孃の御事業を贊助致しませう』

篠田の面は輝き來れり、『梅子さん、教會の爲めの宗教は未練なくお棄てなさい、原因を治めなさい慈善事業は僞善者に御一任なさい、富の集中、富の不平均、是れが單一なる物質的問題とは何事です、富資が年々增殖して貧民が歲々增加する、是れ程重大なる不道德の現象がありますか、御覧なさい、今日の生活の原則は一に掠奪です、個人は個人を掠奪して居る、國は國を掠奪して居る、刑法が言ふ所の竊盜、彼は兒戲です、神の看給ふ竊盜とは即ち、今日の社會が尤も尊敬して×××××××、×××××××、×××××××××、××××××××、而も是れが爲めに尤も惱んで居るものは、梅子さん、實に女性でありますよ、社會主義とは何ですか、一言に掩へば神の御心です、基督が道破し給へる神の御心です』

彼は机上の一册を右手に捧げつ、『何卒、梅子さん、呉々も是の御研究をお忘れないことを望みます、人生の奧義は此の些かなる新約書の中に溢れて、汲めども盡くることは無いでありませう——ア、、梅子さん、何卒我國に於ける、社會主義の母となつて下さい、母となつて下さい、是れが篠田長二畢生の御願であります』

梅子は涙堰きも敢へず、

隣房の時計、二ツ鳴りぬ、ア、、

『最早、二時』と、梅子は頭を垂れぬ、警吏の向ふべき日は、既に二時を經過せるなり、曙光差し來るの時は、即ち篠田が暗黑の底に投ぜらるべきの時なり、三年の煩悶を此の一夜に打ち明かして、柔しく嬉しく勇ましき丈夫の心をも聽くことを得たる今は、又た何をか思ひ殘さん、いざ、立ち歸りなんか、——歸りとも無し、胸も張り裂けんばかりの新しき苦惱を集中して、梅子は凝乎と篠田を仰ぎ見ぬ、

兩個相見て言葉なし、

良久して、熱涙玉をなして梅子の頰を下りぬ、

彼女は脣を嚙んで俯きぬ、

突如 溫き手は來つて梅子の右掌を緊と握れ

り、彼女は總身の熱血、一時に沸騰すると覺えて、恐ろしきまでに戰慄せり、額を上ぐれば、篠田の兩眼は日の如く輝きて直ぐ前に懸れり、

篠田は一倍の力を加へつ、『梅子さん——此れは未だ曾て一點の汚だも見ざる純潔の心です、今始めて貴孃の手に捧げます』

梅子は左手を加へて篠田の右手を抱きつ、一語も無くて身を其上に投げぬ、

風も寢ね雪も眠りて夜は只だ森々たり、

既にして梅子は涙の顏を擡げぬ、『篠田さん、お叱りを受けますかは存じませぬが、暫時御身を潛めて下さることはかなひませぬか——別段御恥辱と申すことでも御座いませんでせう——犬に眞珠をお投げなさらずとも——』

篠田は首打ち掉りつ、『如何なる場合に身を棄つべきかは、我等が淺慮の判別し得る所ではありませぬ』

『篠田さん、最早決して弱き心は持ちませぬ』と梅子も今は心決めつ、『何時と云ふ限も御座いませぬから、是れでお別れ致します、只今の御一言を私の生命に致しまして——で、御一身上、私が承つて置きまして宜しいことが御座いまするならば、何卒仰しやつて下さいませんか——』

篠田は暫し首傾けつ、『では、梅子さん、一人御紹介致しますから』と、彼は大和を呼んで兼吉の老母を招きぬ、

聲を吞んで泣き居たる兼吉の老母は、涙の聲を揚げも得ずして打ち伏しぬ、

『梅子さん、此の老女を勞つて下さい、是れは芥頭藝妓殺と唄はれた、兼吉と云ふ私の友達の實母です、——老母、私は、或は明日から他行するも知れないが、少しも心置なく此の令孃に御信頼なさい、兼吉君は無論無罪になるのであるから、少しも心配なく、其れに若し兩個が相許すならば、花ちやんと結婚したらばと思つて居るのです、元より强ふることは出來ないですが』

篠田は梅子を顧みつ、『只今慈愛館に居りまするが、花と云ふ婦人が在るのです、元と藝妓でありまするが、餘程精神の强固なのですから、將來貴孃の御事業の御手助となるも知れませぬ』

梅子は思はず赧然として愧ぢぬ、彼女の良心は私語けり、汝曾て其の婦人の爲めに心に嫉妬てふ經驗を嘗めしに非ずやと、

兼吉の老母は正體なき迄に咽び泣きつ、

『其から梅子さん、私一身上の御依賴が御座いますが』と、篠田は悄然として眼を閉ぢぬ、

『私に一人の伯母があるのです、世を厭うて秩父の山奧に孤獨して居ります、今年既に七十を越して、尙ほ矍鑠としては居りますが、一朝私の奇禍を傳へ聞きませうならば——』語斷えて涙滴々、

梅子は耐へず膝に縋れり、『御安心下さいまし——、何卒御安心下さいまし——』

篠田は梅子の肩、兩手に抱きて、『心弱きものと御笑ひ下さいますな——ア、今こそ此心晴れ渡りて、一點憂愁の浮雲をも認めませぬ、——然らば梅子さん、是れでお訣別致します』

『——心は永久に同住で御座います』

『勿論』

* * * * *

空は何時しか晴れぬ、陰曆の何日なるらん、半ば缺けたる月、槻の巨木、花吹きたらん如き白き梢に懸りて、顧み勝ちに行く梅子の影を積れる雪の上に見せぬ、

三十

窓白く雪の夜は明けんとす、

篠田は例の如く早く起き出でて、一大象牙盤

とも見るべき後園の雪、いと惜しげに下駄を印しつゝ逍遙す、日の光は尙ほ遙か地平線下に隠ひぬれど、夜の神が漉し成せる清新の空氣は、靜かに來り觸れて、我が呼吸を促す、目を放てば高輪三田の高臺より芝山内の森に至るまで、見ゆる限りは白妙の帷帳の下に、混然として夢尙ほ圓なるものの如し、

篠田の雙眸は不圖、圓山の高塔に注がれて離れざるなり、靜穩なる哉、芝の杜よ、幽雅なる哉、圓山の塔よ、去れど其の直下、得も寢で悲み、夜を徹して祈れるもの一人あり、美しき雪よ、彼女の目より涙を拭へ、淸しき風よ、彼女の胸より愁を拂へ――アゝ我が梅子、汝の爲めに祈りつゝある我が愛は、汝が心の鼓膜に響かざる乎、――父なる神、永遠に彼を顧み給へ、彼女に聖力を注ぎて、爾の聖旨を地に成さしめ給へ、篠田は歩を轉じて表の方に出でぬ、

雪を蹴つて來るものあり『先生――お早う御座います』言ひつゝ彼は、一葉の新聞を篠田の手に捧ぐ、

『オ、村井君ですか、御困難ですネ』と、篠田は新聞受け取りつゝ、『何か昨夜あつたと見えますネ、少し遲れた樣ですが』

『ハ、夜中に長い電報が參りましたので、印刷が大層遲くなりました――先生、到頭戰爭を爲るのでせうか――』

『サア、左樣なりませうネ』

『何卒、先生、主義の爲めに御奮鬪を願ひます』

慇懃に腰を屈めたる少年村井は、小脇の革嚢緊と抱へて、又た新雪踏んで驅け行けり、

中學の校帽凛々しく戴ける後姿見送りたる篠田は、やがて眸子を昨日己が造れる新紙の上に懷かしげに轉じて『勞働者の位地と責任』と題せる論文に一わたり目を走らせつ、心は今しも村井が告げたる二面の夜中電報に急げり、

『日露外交の斷絶』テフ一項の記事と相並んで、篠田の眼を射りたるものは、『九州炭山坑夫同盟の破壞』と題せる二號活字の長文電報なり、篠田の心は先づ激動せり、

……憲兵巡査の强迫は正面より來り、黄金の魔術は裏面より行はれたり……

首領株三十名今夕突然捕縛せられたり、憲兵巡査等の亂暴甚しく、負傷少からず、其の多くは婦人小兒なり……是れ買收政略の到底效果なきより來れるものと知らる……維持費盡く、

『首領の捕縛』『公權の亂暴』『婦女小兒の負傷』而して噫、『維持費盡く』

新聞右手に握り締めたるまゝ、篠田は切齒して天の一方を睨みぬ、

白雪一塊、突如高き槻の梢より落下して、篠田の肩を健か打てり、

午前七時半、警官來れり、

今や篠田の身は只だ一片の拘引狀と交換せられんとすなり、大和は其の胸に取り付きて、鏡の如き涙の眼に、我師の面を仰ぎぬ、

篠田は徐ろに其背を撫しつ『君、忘れたのか――一粒の麥種地に落ちて死なずば、如何で多くの麥生ひ出でん――沙漠の旅路にも、晝は雲の柱となり、夜は火の柱と現はれて、絕えず導き給ふ大能の聖手がある、勇み進め何を泣くのだ』

轍の迹のみ雪に殘して、檻車は遂に彼を封じて去れり、

自叙傳

日本脱出記

大杉榮

自敍傳

一　最初の思出

一

赤旗事件でやられて、東京監獄から千葉監獄へ連れて行かれた、二日目か三日目かの朝だつた。始めての運動に、一緒に行つた仲間のものが皆んな、中庭へ引き出された。半星形に立ちならんだ建物と建物との間の、可なり廣いあき地に石炭を一面にしきつめた、草一本生えてゐない殺風景な庭だ。

受持の看守部長が名簿をひろげて、一列にならんでゐる皆んなの顔と其の名簿とを、しばらくの間見くらべてゐた。が、やがて急に眉をしかめて、幾度も幾度も僕の顔と名簿とを引きくらべながら、何か考へてゐるやうだつた。

『お前は大杉東と云ふのの何かかね。』

部長はちよつと顎をしやくつて、少し鼻にかかつた東北辯で尋ねた。

名簿には僕の名の右肩に、『東長男』とある事は知れきつてゐる。それをわざ〳〵から云つて訊くのは、いづれ父を知つてゐる男に違ひない。其の三十幾つかの年恰好や、監獄の役人としては珍しい快活さや、殊に其の僕に親しみのある言葉の調子で、僕はすぐに越後あたりのどこかの聯隊で下士官でもやつてゐたのかなと思つた。

『先生、親爺の名と僕の前科何犯とをくらべて見て、驚いてるんだな。』

僕はさう思ひながら、返事のかはりにたゞにやにや笑つてゐた。それに、こんなところで父を知つてゐる人間に會ふのは、少々きまりも惡かつたのだ。

『東と云ふ人を知らんのかね。あの軍人の大杉東だ。』

部長は不審さうに重ねて又尋ねた。

『知らないどこの話ぢやない。それは大杉君の親爺さんですよ。』

それでもまだ僕が、たゞにや〳〵してたまゝ默つてゐるので、たうとう堺が横あひから答へてくれた。

『ふうん、やつぱりさうか。……あの人が大隊長で、僕はその部下にゐた事があるんだが……あの精神家の息子かね……』

部長はちよつとの間感慨無量と云つたやうな風で、ひとり言のやうに云つてゐたが、やがて自分に歸つたやうになつて、『其の東と云ふ人は第二師團で有名な精神家だつたんだ。其の人の息子がどうして又こんなところへはひるやうになつたんだか……』

と繰りかへすやうに附け加へた。

此の精神家と云ふのは、軍隊での一種の通り言葉で、忠君とか愛國とかの謂はゆる軍人精神のおかたまりを指すのであつた。十分尊敬の意味は含まれてゐるんだが、しかし又、戰術がへただとか融通がきかないとか云ふそしりの意味もない事はなかつた。

僕が陸軍の幼年學校から退學させられて家に歸つた時にも、『お父さんはあんなに音なしい方だのに……』

と、よくいろんな人に不思議がられた。そして其のたびに、僕の家の事をもつとよく知つて

ゐるらしい誰れかが、

『それや、あなたはお母さんをよく知らないからですよ。』

と僕のために辯解してくれた。

實際僕は父に似てゐるのか、母に似てゐるのか、よく知らない。尤も顏はたしかに母によく似てゐたらしい。

『そんなによく似てゐるんですかね。でも私、こんないやな鼻ぢやないわ。』

母はよく僕の鼻をつねつては、人にかう云つてゐた。

母は綺麗だつた。鼻も、僕のやうに曲つた低いのではなく、まつすぐに筋の通つた、高い、いい鼻だつた。

父が近衞の少尉になつた時、大隊長の山田と云ふのが、自分の細君の妹のために婿選びをした。そして二人候補者が出來たのだが、遂に父の手にそれが落ちたのださうだ。

其の當時母は山田の家にゐた。なか／＼のお轉婆娘で、よく山田の出勤を待つてゐる馬に乘つては、門内を走らして遊んでゐたものださうだ。

一此の母方のお祖父さんと云ふのが面白い人だつたんださうですね。大阪で米はんにいろ／＼聞いたんだが、あんまり面白いんですつかり忘れちやつた。が、兄さんなんかは此のお祖父さんの血を受けてゐるのかも知れないね。』

いつか次弟の伸といろ／＼近親のものの話をした時、弟がかう云つて、切りに折があつたら米はん（從兄）に其の話を訊いて見るやうに勸めた。

それまで僕は、母方の親戚では、山田の伯母と、其のすぐ次ぎの妹の米はんのお母さんと、それからお祖母さんとだけしか知らなかつた。そして此のお祖父さんに就いては何んにも聞いた事もなく又考へて見た事もなかつた。お祖母さんが妙に下品な人だつたので、母の家と云ふのも、ろくな家ぢやなかつたらう位にしか考へてゐなかつた。

それに此の米はんが大阪の或る同志と知つてゐて、其の同志との間によく僕の話をすると云ふ事も聞いてゐたので、多少なつかしくも思つてゐた折だつた。で、其の翌年であつたか、もう二三年前になるが、大阪へ行つたついでにしばらく目で米はんを訪ねて見た。米はんはお祖母さんの家を繼いで、淀屋橋の近くで靴屋をしてゐた。僕はちやうど二十年目で米はんと會つた。

『僕誰れだか分る？』

僕は店にゐた米はんにいきなり聲をかけた。尾行をまいて行つたので、店のものに僕が誰れだかが分つても面白くないと思つたからでもあつた。

『分らんでどうするものか、そんな目はうちの一族のほかにはどこにもないよ。』

米はんは僕よりももつと大きな目を見はりながら、大げさにかう云つて、奥へ導いて行つた。

お祖父さんは楠井力松と云つた。和歌山の湊七曲りと云ふところにあつた、可なり大きな造り酒屋だつたさうだ。子供の時から腕力人にすぐれて、惡戯がはげしく、十二の時に藩の指南番伊達何んとか云ふ人に見出されて、其の弟子となつて、十八で免許皆傳を貰つた。劍道、柔道、槍術、馬術、行くとして可ならざるはなく、殊に柔道は其の最も得意とするところであつたさうだ。後、其の指南番の後見のもとに、町道場を開いて、門弟五百人、内弟子百人あまりも養つてゐた。身の丈六尺四寸、目方四十貫と云ふ大男で、三十三で死んだのだが、其の時でも三十五貫餘りあつたさうだ。

或時、多分お祭りの時だつたらうと思ふが、何んでもない事にまで侍と町人と、待遇があんまり違ふので怒り出して、たうとう大勢の侍を相手に大喧嘩をやつて、それ以來いつも侍を敵にしては町人のために氣を吐いてゐたんださうだ。そしてそんな事で、たうとう家をつぶして了つたんだね。」

お祖父さんに就いての米はんの話は、隨分長くもあり、又雄辯でもあつた。が、僕もやはり弟と同じやうに、それがあんまり面白いんで大がいは忘れて了つた。

父の家は、名古屋を距る西に四里、津島と云ふ町の近くの、越治村大字宇治と云ふのにあつた。今では、其の越治村が隣り村と合併して、神守村となつてゐる。父の家は代々其の宇治の庄屋を勤めてゐたらしい。

大杉と云ふ姓も、邸内に大きな杉の木があつて、何んとか云ふ殿様が鷹狩りか何かの折に立ちよられて、「大きな杉ぢやなあ」と御感遊ばされたとか云ふところから、それを苗字にしたのださうだ。あんまり當てにはならない話だが。そして今でもまだ、街道から目印になるやうな、大きな杉の木がそこに立つてゐる。

父が日清戰爭で留守の間に、宇治のお祖父さんが死んだと云ふので、一日無理に學校を休ませられた事があつた。が、此のお祖父さんに就いては、權九郎とか權七郎とか云ふ名のほかには、何んにも聞いた覺えがない。

清洲の近くにゐた丹羽何んとか云ふ老人が、此のお祖父さんの弟で、少しは名のある國學者だつたやうに聞いてゐる。其の形身の硯や水入れが家にあつた。そして僕が十五の時、幼年學校にはひるんで名古屋へ行つた時、第一に此の老人に會ふやうにと父から云ひつけられて行つた。

父には二人兄があつた。長兄は猪と云つて、宇治の家を繼いで、村長などをやつてゐた。次ぎのは一昌と云つて、名古屋にゐたが、そして僕が幼年學校にゐた間は隨分世話にもなつたが何をしてゐたのか僕には分らなかつた。折々裁判所へ出かけて行くらしいので、僕は高利貸かなとも思つてゐた。

お祖父さんにはどの位財產があつたのか知らないが、其の死ぬ時に、此の二人の伯父と父との間にそれが分配されたらしい。そして父の分は猪伯父が管理してゐたのだが、伯父がいろんな事業に手を出して失敗して、自分のは勿論父の分までも無くして了つた。

「あれがあれば、お前達二人や三人の學費位は樂に出るんだつたがね。」

母はよくかう云つては愚癡つてゐた。

多分そんな事からだらうと思ふが、父は猪伯父の事をあまり面白く思つてゐなかつたらしい。一昌伯父に就いてもやはり同じやうだつた。

そして父や母がほんたうに親戚らしくつき合つてゐたのは、山田の伯母一家だけらしかつた。そして又、僕が多少の影響を受けてゐるのも、此の山田一家からだけらしい。僕の名の榮と云ふのも此の伯母の名のよみを取つたものだ。

しかし肉親と云ふものはさすがに爭はれない。猪伯父も一昌伯父も吃つた。丹羽の老人も吃つたやうだ。父も少し吃つた。そして僕が又吃りだ。

二

父には學歷はまるでなかつた。

たゞ子供の時から本を讀むのが好きで、丹羽の老人のところから本を借りて來ては讀んでゐた。そして其の土地の習慣で、三男の父は一時お寺にはひつて坊主になつてゐた。が、西南戰

爭が始まつて、始めて青雲の志を抱いて、お寺を逃げ出して上京した。

そして先づ教導團にはひつて、一たん下士官になつて、更に又勉強して士官學校にはひつた。

父は少尉になると間もなく母と結婚して、丸亀の聯隊へやられた。そしてそこで僕が生れた。

町の名も番地も知らない。戸籍には明治十八年五月十七日生とあるが、實際は一月十七日ださうだ。當時尉官は殆んど結婚を禁ぜられてゐたやうなもので、結婚すると三百圓の保證金を納めなければならなかつた。父はそれが出來ないで、母の姙娠が確定するまで結婚屆が出せなかつたのださうだ。そしてその順送りに僕の出生屆も遅れたのださうだ。

が、父は又すぐに近衛に歸つた。

そして僕が五つの時に、父と母とは三人の子供をかゝへて、越後の新發田に轉任させられた。父は此の新發田に其後十四五年もくすぶつて了つた。僕は十五までそこで育つた。從つて僕の故郷と云ふのは殆んど此の新發田であり、そして僕の思出も殆んど此の新發田に始まるのだ。

尤も其の以前東京にゐた時の事も少しは記憶してゐる。

家は番町のどこかにあつた。門の兩側に二軒家があつて、父の家は其の奥にあつた。そして門のそばのどちらかの家に、たしかお米さんと云ふ名の、僕より一つ年上の女の子があつた。僕は其のお米さんと大仲好しだつた。

お米さんはもう幼稚園へ行つてゐた。僕はまだだつた。お米さんは學校で唱歌を教はつて來ては家へ歸つて大きな聲でそれをおさらへした。歌を何んにも知らない僕はそれが癪にさはつて堪らなかつた。そして向うで何か歌ひ出すたびに、僕はせい一杯の聲で、たゞ

雨こん〳〵

雪こん〳〵

とだけ、幾度も繰りかへしては怒鳴りつゞけてゐた。

が、五つの春から、僕も幼稚園に行くやうになつた。そして毎日お米さんと手をひいて、富士見小學校へ通つた。

しかし、其の幼稚園が果して、富士見小學校附屬のであつたかどうかは、實は斷言する事が出來ないんだ。たゞ、いつかふいと其の前を通つたら、どうも見覺えがあるので、中にはひつて見た。するとそれが長い間僕の頭の中にあつた幼稚園其儘なんだ。で、僕はそれが此の富士見小學校附屬のだと、ひとりで決めて了つたのだ。

此の幼稚園での事は殆んど何んにも覺えてゐない。たゞ、一度女の先生に叱られて、其の顔に唾をひつかけてやつた事があるやうに思ふが、これは其後母が話したのを覺えてゐるのかも知れない。

唾では、其後も一度、小學校の女の先生にひつかけて泣かした事があつた。

父が勤めてゐた聯隊は青山練兵場の奥の方にあつた。父は折々週番で歸つて來なかつた。或日、多分其の週番が三日目四日目と進んで大ぶさびしくなつた頃だらう、例のお米さんを連れ出して竊と青山に出かけて行つた。練兵場にはひつた頃に、お米さんはもう歩けないと云つて泣き出す。そこへ犬が吠えついて來て僕も泣き出す。しまひには二人で抱き合つて聲を限りに泣いてゐた。そして通りかゝつた兵隊になだめられて、漸く父のところへ連れて行かれた。

新發田の聯隊へ送られるのは、多くは何かの

しくじりがあつて、島ながしにされるのだと聞いた事があつた。新發田ばかりではない、遠い地方の田舍へやられるのは、多くはさうであつたのかも知れない。

もう餘程後の事であるが、家に大勢士官が集まつた。父は其の士官等に、山田の伯父から送つて來た葉卷をご馳走した。しかし其のお客の中で、此の葉卷を滿足に吸つたものは殆んど一人もなかつた。皆んな太い方を口へ持つて行つて、とがつた先きにマッチの火をつけようとした。新發田と云ふのはそんな田舍だつたのだ。

しかし僕は父が何んの失態で新發田へ逐ひやられたのか知らない。週番で宮城につめてゐた時、何かの際に馬から跳ね飛ばされて、お濠の中に落つこちて、泥まみれになつて上つて來た、それを陛下がご覽になつて、「猿ぢや猿ぢや」と笑ひ興ぜられた事があつたさうだ。しかしこれは父の光榮であつて決して失態ではなからう。實際父はちよつと猿のやうな顏をしてゐた。

（　）

が、とにかく父は新發田に逐ひやられたのだ。

父は、やはり同じ近衛から新發田へやられるもう一人の士官と一緒に、東京を出た。僕は其の旅の中で、碓氷峠を通る時の事だけを覺えてゐた。碓氷峠にはまだアプト式の鐵道も布かれてなかつた。そして其の海拔幾千尺か幾里かの峠を、僕等は二臺のガタ馬車で走つた。一臺には父の同僚の家族が乘つてゐた。親子三人のやうだつた。もう一臺には僕等が乘つてゐた。父と母とは各々一人づつの妹を抱きかゝへてゐた。僕は一人でしつかりと何かにしがみついてゐた。折々馬車が倒れさうに搖れる。下を見ると、幾十丈だか知れない深い谷底に、濃い霧が立ちこめてゐる。僕は幾度膽を冷やしたか知れない。

僕は此の自敍傳を書く準備をしに、最近に、二十年目で新發田へ行つて見た。其の間には、もう十幾年か前に鐵道がかゝつて、そこに停車場も出來てゐる。殆んど面目一新と云ふ程に變つて居るだらうと期待して行つた。殆んどどこもかも、まるで二十年前其儘なのに驚かされた。

停車場の附近が變つてゐる事は論はない。そして僕はそこを出るとすぐ、また新しい華奢な監獄のやうな製絲場が聳えてゐるのを見て、こゝにもやはり產業革命の波が押しよせたなとすぐ感じた。しかしそれは譃だつた。其後、町のどこを歩いて見ても、其の製絲場以外には、工場らしい工場一つ見つけ出す事は出來なかつた。新發田の町はやはり依然たる兵隊町だつた。兵隊のお蔭で漸く食つてゐる町だつた。

製絲場は大倉喜八郎個人のもので、大倉製絲場の看板をさげてゐた。そしてこれは喜八郎の營利心を滿足させるよりも寧ろ其の虛榮心のためのものであるやうだ。喜八郎は新發田に生れた。何かで失敗して、近所ぢうに借金を殘して天秤棒一本持つて夜逃げしたんださうだ。が、あの通りの大富豪になり、殊には男爵になるに及んで、其の鄕里に此の製絲場と、其のすぐそばの諏訪神社の境內に自分の銅像を立てたのであつた。

けれども、こゝにもやはり、道德的にはもう資本家主義が漲れて來てゐた。喜八郎が自分の銅像を自分で建てる事は喜八郎一人の勝手だ。しかし此の喜八郎の肖像が、麗々しく小學校の講堂にまで飾つてあるのだ。

父の家は十幾軒か引越して歩いた。そして其の中で三四軒火事で燒けたほかには、殆んど皆な昔の儘で殘つてゐた。僕は其の家の前を、殆

んど其の引越し順に、一々廻つて見た。

最初の家は燒けて無かつた。しかし此の家に就いては何の記憶もなかつた。

其の次ぎの家も燒けて無かつた。小學校へは此の家から通ひ出したのだから、七つか八つまでの頃だと思ふ。隣りに大川津と云ふ大工がゐて、そこに僕よりも一つ二つ年上の男の子と、やはり其の位年下の女の子とゐた。僕は其の二人と友達だつた。

が、僕がそこで思ひ出したのは、此の二人の友達の事ではなかつた。それは、もう一人の、そこから四五町離れたところにゐた女の友達の事だつた。此の友の事は、こんごも幾度も出て來るだらうと思ふが、かりに光子さんと名づけて置く。

光子さんとは學校で同じ級だつた。僕は何んとなく光子さんが好きで仕方がなかつた。しかしお互の家に交際があるのではなし、近所でもなし、ちよつと近づきになる方法がなかつた。そして學校では、ぶつかりさへすれば、何かの仕方で意地惡をしてゐた。

或日僕は、家にゐて、急に光子さんの顏が見たくて堪らなくなつた。そしてそとにゐた大川津の妹の顏をいきなり毆りつけて其頭にさしてゐた朱塗りの櫛をぬき取つて、それをしつかと握つたまゝ光子さんの家の方へ駈けて行つた。光子さんはうまく家の前で遊んでゐた。僕は握つてゐた櫛をそこへはふりつけて、一目散に又逃げて歸つた。

三番目の家は、三の丸と云ふ町のつき當りの、小學校のすぐそばだつた。學校は改築されてすつかり變つてゐたが、其の家はもう大ぶ打ち傾きながらも三十年前其儘の面影を保つてゐた。

僕はしばらく門前にたゝずんで、玄關のすぐ左の一室の窓を見つめてゐた。それが僕の室だつたのだ。

窓の障子はとり拂はれてゐて、其の奧の茶の間までも見えた。此の茶の間と僕の室との間にも障子があつた筈なのだ。そして僕の思出は此の障子一つに集まつた。

何をしたのかは忘れた。が、多分マッチで何か惡戲をしてゐたのだらう。母にうんと叱られて、其の口惜しまぎれに障子に火をつけた。障子は一度にパアと燃えあがつた。母は大聲をあげて女中を呼んだ。そして二人であわてて障子を押し倒して消して了つた。

此の家から道を距てたすぐ前は、尋常四年の時の教室だつた。僕は其の教室のあつたあたりを慄へるやうにして眺めた。

受持の先生は島と云つた。まだ二十歳前後だつたのだらう。ちんちくりんの癖に、いつも妙に口もとを引きしめて、意地惡さうに目を光らして、竹の根の鞭で机の上をぱち／＼鳴らしてゐた。何かと云ふとすぐにそれで打つのだつた。僕は殆んど毎日のやうに此の鞭の下に立ちすくんだ。そして僕は、其の事情はよく覺えてゐないが、此の先生のお蔭で算術が嫌ひになつたやうな氣がする。

其後五六年して僕が幼年學校にゐた頃、暑中休暇に、ふと道で東京で此の先生と出つくはした事があつた。昔と同じやうに口もとを引きしめて意地惡さうな目つきはしてゐたが、僕よりもずつと脊の低い、みすぼらしい風をした、小僧のやうな書生つぽだつた。

此の學校の先生で覺えてゐるのは、もう一人、齋藤と云ふもういゝ加減な年の先生だつた。二年か三年の時の先生だ。いつも大きな口をあけてげら／＼笑ひながら、いやに目尻をさげて女の生徒とばかり遊んでゐる先生だつた。よくい

やがる光子さんなどを抱きかゝへては、キャッキャッと云はしてゐた。そして何か惡戯をすると、きつと其の罰に、女の生徒の教室に立たして、教壇の上にあがらして、一杯に水を盛つた茶碗を兩手に持たして、皆んなの方に向かして立たした。僕は先生の方から見えないのを幸ひに、いつも舌を出したり、目をむいたりして皆んなをからかつてゐた。

此の教室の向うに教員室があつて、其の又向うに物置きの土藏があつた。僕は其の教員室に幾度とめ置きを食つたか知れない。そして時々は其の眞暗な土藏の中にも押しこまれた。そこには古い机や椅子が積み重ねてあつた。だんだん目が馴れて來ると、鼠が其の間をちよろ〳〵するのがよく見えた。あんまり長く置かれると、退屈して、よくそこに糞をたれてやつた。

が、生徒の面倒をよく見てくれたのは、それらの先生ではなくつて小使だつた。脊の低い、いつもにこ〳〵したのと、脊の高い、でこぼこの恐い顔のと、二人ゐた。二人とも、ひまがあると、小使室で、大きな爐の中の大きな鐵瓶の前で、繩をすいてゐた。僕はよく先生に叱られては此の小使室へあまえに行つた。そして小使の云ふ事は僕もよく聞いた。

三

からして僕は毎日學校で先生に叱られたり罰せられたりしてゐた間に、家でも又始終母に折檻されてゐた。母の一日の仕事の主な一つは、僕を怒鳴りつけたり打つたりする事であるやうだつた。

母の聲は大きかつた。そして其の大きな聲で始終何か云つてゐた。母を訪ねて來る客は、大がい門前まで來るまでに、母がゐるかゐないか分ると云ふ程だつた。其の大きな聲を一そう大きくして怒鳴りつけるのだ。そして其の叱りかたも實に無茶だつた。

「又吃る。」

生來の吃りの僕をつかまへて、吃るたびにかう云つて叱りつけるのだ。せつかちの母は、僕がぱち〳〵瞬きしながら口をもぐ〳〵させてゐるのを、默つて見てゐる事が出來なかつたのだ。そして『たたた……』とでも吃り出さうものなら、もうどうしても辛抱が出來なかつたのだ。そして此の「又吃つた」ばかりで、横つ面をぴしやんとやられた事が幾度あつたか知れない。

『榮。』

と大きな聲で呼ばれると、僕はきつと又何かの惡戯が知れたんだらうと思つて、おづ〳〵しながら出て行つた。

『箒を持つておいで。』

母は重ねて又怒鳴つた。僕は仕方なしに臺所から長い竹の柄のついた箒を持つて行つた。

『ほんとに此の子は馬鹿なんですよ。箒を持つて來いと云ふといつも打たれる事が分つてゐながらちやんと持つて來るんですもの。そして早く逃げればいゝのに、其の箒をふりあげてもぼんやりして突つ立つてゐるんでせう。猶癪にさはつて打たない譯には行かないぢやありませんか。』

母は僕の頭をなでながら、やはり軍人の細君の、仲好しの谷さんに云つた。

『でも、箒はあんまりひどいわ。』

谷の小母さんもやはり家の母と同じやうに大勢の子持だつた。そしてやはりよく其の子供を打つた。しかし母に此の抗議をする資格は十分にあつたのだ。

『それや、ひどいとは思ひますがね。もうかう大きくなつちや、手で打つんではこつちの手が痛いばかしですからね。』

谷のお母さんは、優しい目で『でも、ひどいわ

ね」と云ふ意味を僕に見せながら、それでもやはりこれに同感してゐたやうだつた　そして話はお互の子供の腕白さに移つて行つた。

　が、僕は母の云ふ此の「馬鹿なんですよ。」に少々得意でゐた。そして腹の中で竊かにかう思つてゐた。

「箒だつてそんなに痛かないや　それに打たれるからつて逃げる奴があるかい。」

　父はちつとも叱らなかつた。

「あなたがそんなだから、子供がちつとも云ふ事聞かないんですよ。」

　母はよく父を歯がゆがつて責めた。そして日曜で父が家にゐる時には、今日こそは是非叱つて下さいと迫つた。

「今日は日曜だからな、あしたうんと叱つてやらう……うん、さうか、又喧嘩をしをつたのか……何、勝つた?……うん、それやえらい、でかした、でかした……」

　父は母が迫れば迫る程呑氣だつた。

　母はたべ物に随分氣むづかしかつた。殊に飯にはやかましかつた。

「僕のもめつかちだよ。」

　母が飯の小言を言ふと、僕もすぐそれについて雷同した。

「心が曲つてゐると、めつかちのご飯が行くんだ。お父さんのなんか、それやおいしい、いゝご飯だ。」

　僕は父がかう云ふんで、ほんたうかしらと思つて、無理に父の茶碗の飯を食つて見た。しかしそれは、勿論、やはりめつかちだつた。

　父はこんな風で、女中達にも小言一つ云つた事がなかつた。

　父は家の事も子供の事もすつかり母に任しきりにしてゐたのだ。それで、小言も云はない代りに家の事や子供等とはまるで沒交渉でゐたのだ。朝早く隊へ出て、夕方歸つて來て、夜は大がい自分の室で何か讀むか書くかしてゐた。で、子供等は朝飯と夕飯の時のほかは、めつたに父と一緒の事はなかつた。

　それでも父は僕を軍人に仕こむ事だけは忘れなかつたやうだ。父が日清戰爭に行く前の事だから僕がまだ九つか十の時だ。父は毎日他の士官等と一緒に、家のすぐ前の練兵場の射的場で、ピストルの稽古をした。それにはきつと僕を連れて行つた。そして僕にもピストルの撃ちかたを教へて撃たして見た。

　僕が父の馬に乘るのを覺えたのも、やはり其の頃の事だつた。

　又、其の日清戰爭から歸つて來てからは、一里ばかりある大寶寺と云ふ、ほんたうの實彈射撃をやる射的場へ連れて行つた。そしてそこでは、ピウ〳〵頭の上へ彈丸が飛んで來る、的の下の穴の中へ連れて行かれた。

　十四か五の時には刀劍の見かたを教はつた。刀屋が刀を持つて來ると、僕もきつと其の席に出しやばつてゐた。そして無銘の新刀を一本貰つて、藁の中に竹を入れて束ねたのを試し斬りをやらされた。スパリ〳〵と氣持よく斬れた。

　幼年學校にはひつてからは、暑中休暇に是非一度、佐渡へ地圖をとりに連れて行くと云つてゐたが、これは父の方にひまがなくつて果されなかつた。そして一二度、一二泊の近村への演習に連れて行かれた。

　それと、幼年學校にはひる前に父からドイツ語を少し教はつたほかには、僕は子供の時の父との親しい交渉をあまり覺えてゐない。

　日清戰爭前には、僕の家は、今云つた練兵場に沿うた、片田町と云ふのにあつた。四番目の

家だ　これも燒けて無かつた。

其頃の僕の遊び場は練兵場だつた。

射的場と兵營のお濠との間に障害物があつた。これは、二三百米突ばかりの間に、灌木の藪や、石垣や、濠や、獨木橋や、木柵などをならべ立てたもので、それを兵隊が競走するのだつた。僕はそこで毎日猿のやうに、藪を飛び、濠を越え、橋を渡つて遊んでゐた。兵隊が競走してゐるそばへ行つて、それと一緒に走り出しても、大がいは僕が先登だつた。それが飽きると、と云ふよりも寧ろ、もう夕方近くなつて兵隊が皆な隊に歸ると、僕はよく射的場の彈丸をほりに行つた。

大寶寺の方の彈丸は鉛の細長いのだつたが、こゝのは丸かつた。昔の單發銃のだから隨分大きかつた。僕はそれを四十も五十も拾つて來ては、それを溶かして、いろんな形をこしらへて喜んでゐた。

此の彈丸をほる事は一つの冒險だつた。時々衞兵が見廻りに來た。衞兵でない兵隊もよくそこを通つた。で、普通は、夜暗くなつてからでなければ取りに行かなかつたのだ。

が、僕の此の例を見て、仲間が大ぶ増えた。そして其の仲間等は、僕が一緒にゐれば見つかつて捕まつても大事はないと思つたのか、いつも僕を誘つては取りに行つた。僕は此の仲間の中にはひつて妙な事を發見した。それは、皆んな、彈丸を一つにまとめて、ジャン拳で番をきめて、どこかへそれを賣りに行くのだつた。そして歸りには何かの菓子を買つて來た。僕も一度其の仲間入りをした。尤もジャン拳だけは遁れた。それがどうした譯だつたか、其の一度きりで僕は又仲間はづれになつて了つた。此の仲間と云ふのは、町はづれの、ちよつと貧民窟と云つたやうなところの子供等だつた。

此の家の裏に廣い竹藪があつた。栗だの、柿だの、梨だの、梅だのの、いろんな果物の木もあつた。

そして其の竹藪には、孟宗のほかに、細い、其の竹の子をおもちやにしてポン〳〵吹いて鳴らす竹があつた。やはりどうかした拍子に急に會ひたくなつて、僕は一度、其の竹の子を持つて光子さんのところへ行つた事があつた。

しかし此の竹藪はそんな優しい事ばかりには使はれなかつた。

新發田は新發田町と云ふのと、新發田本村と云ふのと二つに分れてゐた。町と云ふのは昔の町人町で、本村と云ふ、は侍屋敷のあつたところだ。今でもやはりさうだが、其の當時もやはり大體さうなつてゐた。小學校も尋常小學校は別々にあつた。そして此の町と本村では、風俗にも氣風にも大ぶ違ふところがあつた。

町の子が練兵場に遊びに來ると、彼等は障害物も何も出來ないので僕等はよく彼等をからかつたり苛めたりした。そんな事がいろ〳〵と重なつて、たうとう町の子と僕等との長い間解けなかつた大喧嘩となつた。

僕等の方は十二三の子が十人程ゐた。士官の子は僕一人で、あとは皆な土地の子だつた。そして僕は十で一番年下だつた。町の方は二十人位から三十人位までゐた。年はやはり十二三が多いのだが、十四五のも三四人まじつてゐた。

戰爭は大がい片田町から町の方の仲町と云ふのに通ずる竹町で行はれた。いつも向うから押しよせて來るので、僕等はそれを竹町の入口で防いだのだつた。竹町と云ふのは、割りに道はばも廣くそれに兩側に家がごくまばらだつた

ので、暗默の間にそこを戰場ときめて了つたのだ。

僕は家の竹藪から手頃の竹を切つて來て皆んなに渡した。手ぶらで來た敵は、それでもう第一戰で負けて了つた。

次ぎには彼等もやはり竹竿を持つて來た。しかしそれは、多くは、長い間物ほしに使つたのや、或はどこかの古い垣根から引つこぬいて來たのだつた。接戰がはじまつて、兩方でパチパチ叩き合つてゐるうちに、彼等の竹竿は皆なめちやくちやに折れて了つた。

二度とも僕は一番先登にゐたんだが、向うでもやはり二度とも同じ奴が先登にゐた。そいつは仲町の隣りの下町の、或る豆腐やの小僧で、頭に大きな禿があるので、それを隱すためにちよん髷を結つてゐた。もう十五六になつてゐたんだらうが、喧嘩がばかに好きで、一錢か二錢かで喧嘩を買つて歩くと云ふ男だつた。此の時にもやはり幾らか出して敵の仲間に入れて貰つたのだ。僕はそいつが氣味が惡いのと同時に、憎らしくつて堪らなかつた。で、どうかしてそいつを取つちめてやらうと思つてゐた。

三度目の時は石合戰だつた。兩方で懷にうんと小石をつめこんで、遠くからそれを投げ合つては進んで行つた。どうしたのか、敵の方が早く彈丸がなくなつて、そろ／＼尻ごみしはじめた。僕はどし／＼詰めよせて行つた。敵は總敗北になつた。が、ちよん髷先生たゞ一人、ふみ止まつてゐて動かない。たうとう皆んなでそいつをおつ捕へて、さん／＼に蹴つたり打つたりして、そばのお濠の中へはふりなげて、凱歌をあげて引きあげた。

四

僕はこんな喧嘩に夢中になつてゐる間に、益々殺伐なそして殘忍な氣性を養つて行つたらしい。何んにもしない犬や猫を、見つけ次第になぐり殺した。そして或日、例の障害物のところで、其時には殊更に殘忍な殺しかたをしたやうに思ふが、とにかく一疋の猫をなぶり殺しのやうにして家に歸つた。自分でも何んだか氣持が惡くつて、夕飯もろくに食はずに寢て了つた。

母は何んの事とも知らずに、心配して僕の枕もとにゐた。大ぶ熱もあつたんださうだ。夜なかにふいと僕が起きあがつた。母はびつくりして見守つてゐた。すると僕が妙な手つきをして、『にやあ』と一聲鳴いたんださうだ。母はすぐにすべての事が分つた。

「ほんたうに氣味が惡いの何んのつて、私あんな事は生れて始めてでしたわ。でも私、猫の精なんかに負けちや大變だと思つて、一生懸命になつて力んで、『馬鹿ッ』と怒鳴ると一緒に平つ手でうんと頬ぺたを毆つてやつたんです。すると、それでもまだ妙な手つきをしたまゝ、目をまんまるく光らしてゐるんでせう。私もう堪らなくなつて、もう一度、『意氣地なし、そんな弱い事で猫などを殺す奴があるか、馬鹿ッ』と怒鳴つて、又頬ぺたを一つ、ほんたうに力一杯に毆つてやつたんです。それで、其儘横になつて、ぐう／＼寢て了ひましたがね。ほんたうに私、あんなに心配した事はありませんでしたよ。』

母はよくかう云つて其時の事を人に話した。そして僕は、其時以來、犬や猫を殺さないやうになつた。

やはり片田町の其の家にゐた時の事だ。

正月に下士官が多勢遊びに來た。父はしばらく其のお相手をしてゐたが、やがて奥の自分の室にはひつて寢て了つた。父は酒が飲めないんで、ほんの少しでも飲むとすぐに寢て了ふん

だつた。

下士官等はまだ長い間座敷で飮んでゐた。が、其のうちに、誰れか一人が『副官がゐないぞ』と怒鳴り出した。

『怪しからん、どこへ逃げた。』

『引きずつて來い。』

『來なけれやこれで打ち殺してやる。』

へべれけに醉つた四五人の曹長共が、長い劍を拔いて立ちあがつた。僕は其の次ぎの室で、母や女中と一緒に、どうなる事かと思つてはらはらして聞いてゐた。

『奧さん、副官をどこへ隱した？』

曹長共は其の間の襖を開けて母に迫つて來た。僕は母にぴつたりと寄り添つてゐた。女中は青くなつて慄へてゐた。

『どこへも隱しやしません。宿も又どこへも逃げかくれはしません。さあ、私がご案内しますからこちらへいらつしやい。宿は自分の室でちやんと寢てゐるんです。』

母はかう云ひながら突つ立つて、

『榮、お前も一緒においで。』

と僕の手をとつて、さつさと父の室の方へ行つた。そしてそこの襖を開けて、

『さあ、皆さん、此の通りこゝに寢てゐるんです。突くなり斬るなり、どうなりともお勝手になさい。』

と、きめつけた。僕も母の此の元氣に勢ひを得て、どいつでも眞つさきに此の室へはひつて來る奴に飛びついてやらうと、小さな握拳をかためて身構へてゐた。

が、曹長共は母のけん幕に飮まれて、うしろの方から一人逃げ二人逃げして、たうとう皆んな逃げ出して了つた。そして匆々にして歸つて了つた。

翌日、其の下士官共が一人づつあやまりに來た。僕は母と一緒に玄關に出て、其の悄氣かへつた樣子を見て、痛快でもあり、又可笑しくて堪らなかつた。

父が日清戰爭で出征するとすぐ、竹町とは反對の方の片田町の隣りの、西ケ輪と云ふ町に引越した。齋藤と云ふ洋服屋の裏の小さな家だつた。そして父がまだ宇品で御用船の出帆を待つてゐる間に、母に男の子が生れた。父から『イサムトナヅケロ』と電報が來た。三の丸では次弟が生れた。片田町では三番目の妹が生れた。そして、これで僕は三人の妹と二人の弟との五人の兄きとなつた。母は此の六人の子と一人の女中と都合八人で、二階一間下三間の、庭も何んにもない小さな家にひつこんだのだ。片田町の家は七間か八間あつた。そして出來るだけの儉約をして貯金を始めた。

母は假名のほかは書けないので、手紙の上封は皆な僕が書かされた。中味も、父と山田の伯母へやるのほかは、大がい僕が書かされた。母が口で云ふのを候文になほして書くんだが、まだ學校で教はらないやうな用事ばかりなので閉口した。母は隨分もどかしがりながらも、其の出來あがるのを喜んで、自慢で人に見せてゐた。しかし僕は、それよりも、よそから來る手紙を母に讀んで聞かせる方が、よほど得意だつた。

或日僕は學校から歸つて來た。そしていつもの通り『たゞ今』と云つて家にはひつた。が、それと同時に僕はすぐハッと思つた。母と馬丁のおかみさんと女中と、それにもう一人誰れだつたか男と、長い手紙を前にひろげて、皆んなでおろ／＼泣いてゐた。僕はきつと父に何かの異狀があつたのだと思つた。僕は泣きさうになつて母の膝のところへ飛んで行つた。

「今お父さんからお手紙が來たの。大變な激戰でね、お父さんのお馬が四つも大砲の彈丸に當つて死んだんですつて。」

母は僕をしつかりと抱きしめて、赤く脹れあがつた大きな目からぼろ／＼涙を流して、其の手紙の内容をざつと話してくれた。

場所は威海衞だ。父の大隊は海上に二艘日本の軍艦が浮んでゐるので、安心して海岸の方へ廻つて行つた。すると其の軍艦が急に日章旗をおろして砲撃を始めた。それが鎭遠定遠だとか云ふ事だつた。父の大隊は驚いて逃げだした。するとこんどは其の逃げ出すさきの丘の方から、味方の軍艦が盛んに鐵砲を打ち出した。多分、日本の軍艦から砲撃されるんだから敵の軍隊だらうと思つたんだらう、と云ふ事だつた。父の大隊は敵と味方とに挾みうちされて進退きはまつた。

大隊の副官であつた父は、すぐに大隊長と相談して、其の味方の軍隊まで傳令に行つた。敵の砲彈は益々花火のやうに散る。味方からの彈丸も益々霰のやうに飛んで來る。父は其の間を一人の騎兵を連れて駈けて行つた。が、其の一人はすぐに倒れて了つた。そして父の馬も又續いて倒れて了つた。そして父は仕方なしにもう一人の騎兵をそこに殘して、其の馬を借りて又駈け出して行つた。

「それで首尾よく任務は果したんださうだがね。可哀さうにお馬は、お腹と足と四つも彈丸を受けて、其の場で死んで了つたんですとさ。お父さんのお身代りをしたんだわね。」

母はかう云つて又大きな涙をぼろ／＼と流した。馬丁のかみさんも女中も又一緒になつて泣いだ。しかし僕はあの馬が父の身代りをしてくれたのかと思ふと、何んだかから非常に勇ましいやうな氣がして、どうしても泣けなかつた。

父が凱旋して來てから、或日家で、其の當時の同じ大隊の士官連が、集まつて酒を飲んだ事があつた。

「奥さん、此の男が其時に即死の電報のあつた男ですがね。其の筈ですよ。今でもまだこんな大きな創が殘つてゐるんですからね。」

もう大ぶ酒がまはつた頃に、一人の士官がもう一人の士官の肩を叩いて云つた。そして、

「おい、貴樣はだかになれ。何、構ふもんか、名譽の負傷だ。ね、奥さん。」

と云ひながら、無理に其の士官をはだかにさせて了つた。酒に醉つて眞赤になつてゐる背中の、左の肩から右の腋の下にかけて、大きな創あとの溝がほれてゐた。

「此の通り、腕が半分うまつて了ふんですからな。」

最初の士官が腕を延ばして、それを其の溝の中へ當てがつて見せた。實際其の腕は半分創あとの中にうまつてゐた。

さすがの母も『まあ』と云つたきり顏をそむけてゐた。僕も少し氣味が惡かつた。

父の馬も此の士官と同じやうに、一旦即死を傳へられた後に生き返つて、ちんばになつて歸つて來た。父は母と相談して、生涯飼ひ殺しにしたいと云つてゐたが、さうも出來ないものと見えて其後拂下げになつて了つた。

父は此の功で金鵄勳章を貰つた。

僕は今まであちらこちらの父の家が燒けて無くなつてゐたと書いて來た。それは、此の日清戰爭で留守の間に、與茂七火事と云ふ大きな火事があつたのだ。

幾月頃か忘れたが、もう薄ら寒くなつてからの事のやうに思ふ。或る夜、十一時頃に、火事が起きた。僕のゐた西ケ輪は新發田の殆んど西の端で、其の火もとは東の端だつた。で、一時間

ばかりは、家で其の火の手のあがるのを見てゐた。が、火は容易に消えさうもなかつた。益々火の手が大きくなつて近所へ燃え移つて行くやうだつた。

僕はすぐ走つて見に行つた。そして一時間ばかりあちこちで見物してゐた。或時には火のすぐそばまで行つて見た。と云ふよりも寧ろ、火にすぐそばまで追つかけられて來た。火事場から四五町も遠くで見てゐたつもりなのに、うつかりしてゐるうちにもう火がすぐそばまで來てゐた。火焰の舌が屋根を舐めるやうにして走つて來るのだ。そして、僕は、さうかうしてゐるうちに、火事場へ走つて行く人は殆んどなくなつて、火事場の方から逃げて來る人ばかりなのに氣がついた。

長い間天氣が續いて、薄い板の木つ葉屋根がそり返る程に乾ききつてゐた。火は此の屋根の上を傳つて、あちこちの道に分れて、しかもそれが皆な飛ぶやうにして走り廻るのだ。遂には消防夫すらも逃げて歸つた。

僕もあわてて家の方へ走つた。そして二三町行つた頃に、今まで其のそばに見てゐた鬼子母神と云ふ寺に火のついたのを見た。茅ぶきの大きな屋根だ。それが其の屋根一ぱいの大きな火の柱になつて燃え出した。

火はまだ僕の家からは七八町のところにあつた。しかし僕はもう當然それが僕の家まで燃えて來るものと思つた。僕は家に歸つてすぐ母に荷物を出すやうにと云つた。近所でももう皆な荷ごしらへにかゝつてゐた。

『見つともないからそんなにあわてるんぢやない。』

母はかう云つてなか〳〵應じない。しかし火の手はだん〳〵近づいて來る。僕はもう一時間としないうちにきつと火がこゝまで來ると思つた。そして母に、せめては荷ごしらへでもするやうにと迫つた。

『荷物は近所で皆な出して了つてからでも間に合ひます。あんまり急いで、あとで笑はれるやうな事があつてはいけません。まあ、もう少しそこで見ていらつしやい。』

母はかう云ひながら、しかし女中には何か云ひつけてゐたやうだつた。そしてしばらくして僕を呼んだ。

『もういよ〳〵あぶないから、お前は、子供を皆んなつれて立ちのいておくれ。練兵場の眞ん中の、あの銀杏の木のところね。あそこにぢつとしてゐるんだよ。いゝかい、決してほかへは行かないやうにね。』

母はふろしき包みを一つ僕に持たしてから云つた。そして、すぐの妹に一番下の弟をおんぶさした。

西ケ輪を眞つすぐに行けば、三四町でもう練兵場の入口なのだ。練兵場にはもうぼつ〳〵荷物が持ちこまれてあつた。僕等は母の云ひつけ通り銀杏の木の下を占領した。

此の銀杏の木は前に云つた射的場ともとの僕の家の間にあつた。そして其の家にはやはり軍人の秋山と云ふのが住んでゐた。母は其の「秋山さんの小母さんに皆んなが銀杏の木の下にゐる事を知らしてお置き」と注意してあつた。

秋山家ではのん氣でゐた。裏は廣し、近所は離れてゐるし、どんな事があつても大丈夫だと安心してゐた。が、僕が其の家を出て銀杏の木の下に歸るか歸らないうちに、僕は大きな火の玉のやうなものがそこの屋根へ落ちたのを見た。そしてアッと思つてゐるうちに、それがパッと燃えあがつた。

母と女中が少しばかりの荷物を持つてやつて來た。僕は蒲團にくるまつて寢て了つた。

火は晝頃まで續いて、新發田の謂はゆる町の殆んど全部と本村の一部分の、二千五百戸ばか

りを焼いて了つた。

與茂七火事と云ふのは、其の幾十年か前にも一度あつたんださうだ。與茂七と云ふのが無實の罪でひどい拷問にあつて殺されて了つた。其のたゝりなんださうだ。そして現に、今云つた秋山家の家は、當時其の拷問をした役人の一人の家だつたさうだ。それで近所は皆な焼け殘つたのに、特にその家だけが焼けたのださうだ。僕の見た火の玉と云ふのもほかに見たと云ふ人が多勢あつた。他にもまだ、大ぶあちこちにさう云つた家があつた。尤もそれは、秋山家をはじめ殆んど皆な、大きな茅ぶきの古い家だつた。僕のゐた其の家のあとは、いまだに、まだ家も出來ずに廣いあき地になつてゐる。

大倉喜八郎の銅像が立つてゐる諏訪神社の境内に、與茂七神社と云ふ小さな社がある。これは其後與茂七を祀つたものだ。

二　少年時代

一

焼け出されの僕等は、翌日の夕方、やはり軍人仲間の大立目と云ふ家に同居する事になつた。練兵場に沿うた、小學校の裏の家だつた。

そこにも子供が六七人ゐた。其の一番上のが明と云つて、學校も年も僕より二年上だつた。僕は其の明の少しぼんやりなのをふだんから輕蔑してゐた。そして引越し早々喧嘩を始めて、其の翌日、家の前の溝の中に叩きこんで了つた。

明は泥だらけになつて泣いて歸つた。そして其のお母さんから、「年上のくせに負けて泣く奴があるか」と叱られて、着物を着かへさせられる前に二つ三つ頬をなぐられた。

母は珍らしく大して僕を叱りもせずに、すぐ何處かへ出かけて行つた。そして其の翌日の朝早く、八軒町裏と云ふ町の、小學校の或る女の先生の家に引越した。玄關とも入れて三室ばかりの家の六疊の座敷を借りたのだ。先生は一人で其の次ぎの室にゐた。

『お前が喧嘩なんぞするもんだから……』

母はかう云つてちよつと僕をにらみながら、こんどは何か荷物を片づけてゐる女中の方に向いて、

『ほんたうに此の子が少し負けてくれゝばいゝんだがね……』

と眉をしかめて見せながら、それでも

『こんどは喧嘩をしてもお相手が先生なんだから……』

と笑つてゐた。

半月程其の家にゐるうちに、四五軒先きの小さな家があいて、そこへ引越した。

大きな一郭の中に、三つ建物があつて、其の一つが二軒長屋になつてゐた。其の一軒に横井と云ふ多分軍屬がゐて、もう一軒の方に僕等が住んだのだ。一番大きな建物には石川と云ふ少佐の家があつた。其の家は、ほかの二つの建物とは裏合せになつて、特に塀で區別されて、八軒町と云ふ町の方に向いてゐた。もう一つの僕等の方と隣りの建物には、山形と云ふやはり少佐か大尉かの家があつた。僕の父も其頃は戰地で大尉になつてゐた。

山形の家には、僕よりも二つ三つ上のを頭に四五人男の子がゐた。其の一番上の太郎と云ふのは、會津の中學校にはひつてゐて、滅多に家には歸らなかつた。其の次ぎの次郎がちやうどいゝ僕の友達だつた。石川の家にも男の子が二人ゐた。其の上の四郎と云ふのは山形の一番上のと同じ年恰好だつた。横井の家にも僕と同じ年頃の男の子が一人ゐた。それともう一人、石

川の家の筋向ひの、大久保と云ふ大尉の家の子供と、それだけがすぐに友達になつて了つた。尤も横井の『黄疸』だけは僕のほかの誰れも相手にしなかつた。そして其の僕もいぢめる事のほかにはあまり相手にしなかつた。

しかし皆んなはあまり仲のいゝ友達ではなかつた。喧嘩はしなかつたが、お互に輕蔑し合つてゐた。石川と大久保とは古くから向ひ合つて住んでゐて仲が善かつた。僕は此の二人のレファインされたお坊ちやんらしさが氣にくはなかつた。二人は僕の野生的なのを馬鹿にしてゐたやうだつた。山形の次郎もお坊ちやんだつた。が、彼れは長い間町の方に住んでゐて、町の小學校に通つてゐたところから、石川や大久保とは違つたレファインメントを持つてゐた。從つて其の二人とほんたうに親しむ事は出來なかつた。僕は其の山形の中にも多分の野獸性が潜んでゐるのを見てゐた。しかし其の町人らしいレファインさは堪らなくいやだつた。彼れは多くは其の弟を相手に遊んでゐた。僕は大がい横井の『黄疸』をいぢめて暮らしてゐた。營養不良らしい其の黄色な顔から、僕等は彼れをさう呼んでゐたのだ。横井は其の妹の、やはり痩せた黄色い顔をしたのと、さびしさうに遊んでゐた。

お互の母同士の間にも親しい交際はまるでなかつた。

其の山形の家からお化が出た。

夜なかに、臺所で、マッチを磨る音がする。竈の火の燃える音がする。まな板の上で何かを切る音がする。足音がする。戸棚を開ける音がする。茶碗の音がする。話聲がする。さうした騷ぎが一時間も續くのだ。

或る晩、山形の小母さんと云ふのが、便所へ行つた歸りに、手を洗はうと思つて雨戸を開けた。まんまるい大きな月が庭の松の木の間に引つ懸つてゐるやうに見えた。庭は其の月あかりで晝のやうに明るかつた。小母さんは手洗鉢の方へ手をやつた。鉢の中の水にもまんまるい月が映つてゐた。が、其の水を汲まうとすると、急にバラ〳〵と大粒の雨が降つて來た。可笑しいなと思つて顔をあげると、雨も何んにも降つてゐないで松の木の間にはやはりまるい月があかあかと光つてゐた。小母さんは再び手洗鉢の方へ手をやつた。すると、急に又、バラ〳〵と降つて來た。小母さんは恐ろしくなつて、其儘、寢床へ逃げて歸つた。

翌晩小母さんは又夜遲く目がさめた。そして又便所へ行きかけた。障子をあけた小母さんの足もとに、何んだか重さうなものがパタンと落ちた音がして、それが向うの方へころ〳〵と轉がつて行つた。小母さんは氣味惡ながら、暗をすかして其の轉がつて行くのを見てゐると、それが眞暗な中にはつきりと大きな人の首に見えた。小母さんは其儘キャッと叫んでそこに倒れて了つた。

それから二日目か三日目かの晩に、小母さんは、こんどは大入道が突つ立つてゐるのを廊下で見た。

山形家は大騷ぎになつた。もとゐた家の近所の、町の若衆が四五人泊りに來た。皆んなは樫の棒を一本づつ横に置いて夜ぢう飲みあかした。それで二晩三晩はお化が出なかつた。が、其の若衆連が歸ると、すぐ又お化が出た。

そんな事が幾度も繰返されてゐるうちに、最後に、山形の小母さんがふだんから信心してゐる或る坊さんが祈禱に來た。そして其の坊さんは幾晩か泊つて行つたやうだつた。

其の祈禱のおかげでお化が消えてなくなつたかどうかは今よく覺えてゐない。しかし此の坊さんと云ふのがどうもくせ者だつたやうだ。

石川や大久保の家では此のお化の話をてんで相手にしなかつた。そしてそれを、要するに其の坊さんを泊りこませたい、何等かの策略のやうにうはさしてゐた。山形の小母さんと云ふのはちよつと意氣なところのある人だつた。

それからやはり其頃の事だが、戰勝の祈禱と各自の夫の無事を希ふ祈禱との、夫人連の會があつた。其の祈禱にはやはり今こゝに問題になつてゐる坊さんが出たのだつた。そして其の席上で、どことかの奥さんが、其の坊さんの肩にしがみついたとか、どうとかしたと云ふ話もあつた。又、其の坊さんのお寺と云ふのは、新發田から三里ばかりある菅谷と云ふ山の中にあるのだが、そこまでわざ／＼お參りに行つた奥さんもあつた、と云ふやうな話もあつた。

が、此のお化は僕の家にもたつた一度出た。母は何かの病氣で一週間ほど何處かの溫泉へ行つてゐた。其の留守の或る晩に、僕のすぐの妹と女中とが夜なかにふと目がさめて、どうしても眠られずにゐる間に、臺所の方で例のカタカタコト／＼が始まつた。二人は物も云はずに慄へてゐた。が、それと同時に、横井の家の小さな飼犬が盛んに吠え出した。そして僅か二三分の間にお化は逃げ出して了つた。

しかし下の弟妹等と隣りの室に寝てゐた僕とは何んにも知らずに眠つてゐた。そして翌日其の話をされた時にも僕は『馬鹿な』と云つて笑つてゐたが、女中は恐いのと心配なのとで、母に電報を打つてすぐ歸つて貰つた。母は『お母さんとお兄さんとがゐれば大丈夫だ』と云つて皆んなを慰めてゐた。そして實際母は何んにも心配してゐるやうに見えなかつた。

其後四五年して、名古屋の幼年學校で山形の太郎と會つた時、太郎は、僕は此の耳で其の音を聞いたんだから、どうしてもあのお化を信ずると云つてゐた。山形は僕よりも二年前に幼年學校にはひつてゐたのだ。

お化は又、戰死した軍人の家にも出た。

或る若い細君が、夜なかにふと自分の名を呼ばれたやうな氣がして、目をあけた。すると其の枕もとに、血だらけになつた夫が立つてゐた。

そして其の細君は、翌朝、夫の名譽の戰死の電報を受けとつた。

二

二三ケ月其の家にゐたあとで、二軒町と云ふ隣町の、高等小學校のすぐ前に引越した。そして、そこで始めて、十の年の暮れに、僕は性の遊びを覺えた。

同じ焼け出されの軍人の家に川村と云ふのがあつた。其のお母さんと娘とがすぐ近所に間借りをしてゐた。母とそのお母さんとは兄弟のやうに親しくしてゐた。僕も其のお母さんは大好きだつたが、それよりも僕は、其の娘のお花さんと云ふのがもつと大好きだつた。

お花さんは僕とおない年か、或は一つ位年下だつた。殆んど毎日僕の家に遊びに來た。そして大抵は、妹等と遊ばずに、僕とばかり遊んでゐた。

皆んなで一緒に遊ぶ時には、よく皆んなが炬燵にあたつて、花がるたかトランプをして遊んだ。そんな時にはお花さんはきつと僕のそばに座を占めた。お花さんの手と僕の手とは、折さへあれば炬燵の中でしつかりと握られてゐた。或は竊とお互に指先きでふざけ合つてゐた。そして二人でお互にいゝ氣持になつて、知らん間にそれをほんたうの××びに使つてゐた。

が、お花さんも僕も、それだけの事では滿足が出來なかつた。二人は二階の僕の室で、よく二時間も三時間も暮らした。そしてそこでは、

誰れに憚る事もなく、大人のやうな事をして遊んでゐた

其頃僕にはもう一人の女の友達があつた。それは、やはり近所に住んでゐた、千田と云ふ軍人の娘だつた。

或日僕は、どんないたづらをしたのか忘れたが、母に「あやまれ」と云つて迫られた。が、迫られゝば迫られるほど、益々あやまる事が出來なくなつた。

夕飯が濟んでから、母は「もうこんな強情な子の世話は出來ないから、東京の伯母さんのところへ行つて了ふ」と云つて、女中や子供等皆んなに着物を着かへさして、小さな行李を一つ持つて皆んなで何處かへ出かけて行つた。僕は東京へ行くと云ふのは譃だらうと思つたが、其のやりかたが大げさなので、實際何處かへ行つて了ふのぢやあるまいかと心細くなつた しかし、何んだつてあやまるものかと思ひながら仕方なしに一人で床を敷いて寢てゐた。

二三時間して、玄關へどや／＼と多勢はひつて來る聲がした 母を始め出て行つた皆んなと、千田のお母さんと娘の禮ちやんとが來たのだ。

「小母さんがあやまつてあげるから、もう決してしないつて仰しやいね。」

千田のお母さんは僕の枕もとに來て切りに僕を說いた。が、それが母と相談の上だと思ふと、猶僕はあやまりたくなくなつた。

「ざま見ろ。たうとう皆んな歸つて來たぢやないか。」

僕は竊かにさう思ひながら、默つて蒲團を頭からかぶつてゐた。

「あの通り強情なんですからね……」

母はさう云ひながら、又何か嚇かす方法を相談してゐるやうだつた。

「あなたも亦いゝ加減に馬鹿はお止しなさいよ。」

千田のお母さんは母をたしなめて、此のまゝ默つて寢かして置くやうにと勸めてゐた。

其の間に禮ちやんが僕のそばへやつて來た。そして竊と其の手を蒲團の中に入れて僕の手を握つた。

「ね、榮さん、わたしがあやまつてあげるわね。いゝでせう、もう決してしないから勘辨して下さいつてね。わたしが代りにあやまつてあげるわ。ね、いゝでせう、もうあやまるわね」

禮ちやんは蒲團をまくつて、ぢつと僕の顏を見ながら、「ね、ね」と幾度も繰返して云つた。

僕の堅くなつてゐた胸が、それでだん／＼和らいで行つた。そしてたうとう僕は默つてうなづいて了つた。

お花さんは町の方の小學校に通つてゐた。で、其の學校での事はちつとも知らなかつた。禮ちやんは僕よりも一年下の級だつた。そして光子さんは僕と同じ級だつた。

禮ちやんの級では、禮ちやんが一番評判の美人だつた。學科の方でもやはり一番だつた。光子さんの級では、光子さんは一番出來がよかつた。しかし綺麗と云ふ點の評判では、有力な一人の競爭者を持つてゐた。それは細川玉子さんと云つた。

玉子さんは退職軍人の娘だつた。まる顏の、頰の豐かな、目のまるい、可愛らしい子だつた。しかし僕は、其の何處かしら高慢ちきなのが、氣に食はなかつた。着物はいつも綺麗なのを着てゐた。そして妙にそり返つて、ゆつたりと足を運んで步いてゐた。今考へても、ちよつとから、小さな公爵夫人と云ふやうな氣がする。

光子さんは衞戍病院のごく下級な藥劑師か何かの娘だつた。彼女の着物はいつも垢じみてゐた。細面で、頰はこけてゐた。そして、玉子

さんのやうに色つやのいゝ赤味ではなく、何んだかから下品な赤味を帯びてゐた。目は細く切れてゐた。

或日僕は玉子さんを道に要して通せんぼをした。彼女は何んにも云はずに、たゞ頬を脹らして、ぢつと僕をにらめてゐた。僕はさうした彼女の態度が大嫌ひだつたのだ。それが若し光子さんであれば、彼女はきつと『いやよ』とか何んとか叫んで、僕の手を押しのけて行かうとするのだ。そしてそれを望みで僕はよく彼女を通せんぼした。

美少年の石川や大久保は、玉子さんびいきだつた。それで僕は猶更玉子さんを嫌つて光子さんびいきになつた。

二軒町の其の家の隣りに、吉田と云ふ、近村のちよつとした金持が住んでゐた。

僕はそこのちやうど僕と同じ年頃の男の子と友達になつた が、直ぐに僕は、其の男の子と遊ぶのをよして、其のお母さんと遊ぶやうになつた。

此の小母さんは、火事で火の子をかぶつたのだと云つて、髪を短かく切つてゐた。どちらかの眉の上に大きな疣のやうなほくろのある、餘り綺麗な人ではなかつた。

小母さんは其の子と僕とにちよい〱英語や數學を敎へてくれた。そしていつも僕が覺えがいゝと云つては、其の御はうびに、僕をしつかりと抱きかゝへて頬ずりをしてくれた。僕は其の御はうびが嬉しくて堪らなかつた。

『私はね、こんな家へお嫁に來るんぢやなかつたけど、だまされて來たの。でも、今に又こんな家は出て行くわ。』

小母さんは其の子供のゐない時に、いつもの御はうびで僕を喜ばせながら、そんな話までして聞かした。そして實際、其後暫くして出て行つたらしかつた

此の家の裏は廣い田圃だつた。そして雨のしよぼしよぼと降る晩には、遠くの向うの方に、狐の嫁入りと云ふのが見えた。

提灯のやうなあかりが、一つ二つ、三つ四つづつ、あちこちに見えかくれする。始まつたな、と思つてゐると、それが一列に幾町もの間にパッと一時に燃えたり、又消えたりする。さうかと思ふと、こんどはそれが散り〲ばら〱になつて、遠くの田圃一面にちら〱きら〱する。

吉田の小母さんは、『これはきつと硫黄のせゐよ』と云つて、或る晩僕等がまだ見た事のない蠟マッチを持ち出して、雨にぬれた板塀に人の顔を描いて見せた。青白い、ぼやけた輪郭の、ぼつ〱と燃えてゐるやうなお化がそこに現はれた。僕は面白半分、恐さ半分で、小母さんの云ひなり次第に指先きでお化の顔をいぢつて見た。するとこんどは僕の指先きから青白い光が出た。それを僕はお化の顔のまはりのあちこちに塗りつけた。そして其の塗りつけたあとが皆んな青白い光になつて　つた。

『よく恐がらずにやつたわね。又いろんな面白い事を敎へてあげませう』

小母さんは僕を抱きあげて、頬の熱くなるど頬ずりをしてくれた

此の狐の嫁入りに就いては、あとで、次ぎのやうな傳説をきいた。

昔何んとか云ふ大名と彼んとか云ふ大名とがそこで戰爭をした。何んとかの方は攻め手で彼んとかの方は防ぎ手だつた。防ぎ手ほとても眞ともではかなはない事を知つて、或る謀りごとをめぐらした。それは此の邊が一面の沼地で、ちよつと見れば何んでもない水溜りのやうに見えるのだが、過つてそこへ落ちこめばすぐ

からだが見えなくなつて了ふほど深い泥の海のやうなものだつた。此の沼の中へ案内知らない敵を陷しこまうと云ふのだ。味方は皆な、雪の上を歩く『かんじき』と云ふのをはいた。そしてわざと逃げて此の沼地の上を走つた。敵はそれを追つかけて來た。そして皆んな泥の中にはまつて姿が見えなくなつて了つた。其の亡靈があした人玉になつてまだ迷つてゐるのだと。

實際其の邊の田からは、其頃でもまだ、よく人の骨や槍や刀や甲などが出て來た。

三

父が戰爭から歸つて來る少し前に、家は又片田町の、前のとは四五軒離れたところに引越した。そしてそこから僕は二年間高等小學校に通つた。

學校の出來はいつも善かつた。尋常小學校の一年から高等小學校の二年まで、三番から下に落ちた事はなかつた。高等小學校では、町の方の尋常小學校から來た大澤と云ふのをどうしても拔く事が出來ずに、二年とも大澤が級長で僕と大久保とが副級長だつた。大久保は僕よりも一つ年が多く大澤は二つ位多いやうだつた。

高等小學校にはひつてからは、學校のほかにも、英語や數學や漢文を敎はりに私塾に通つた。英語は前にゐた片田町の家の隣りの速見と云ふ先生に就いた。どんな學歴の人か知らないがハイカラで道樂者のやうに見えた。生徒は朝から晩まで殆んど詰めきりで、いつも三四十人は缺かさなかつたやうだ。數學と漢文とは、其の英語の先生がゐなくなつてから敎はり出したやうに思ふが、最初の先生は名も顏も全く忘れて了つた。が、たゞ其の家が外ケ輪と云ふ兵營の後ろの町にあつた事だけを覺えてゐる。

二度目の漢文の先生は監獄の看守だつた。背の低い、青い顏をした、隨分みすぼらしい先生だつた。それに其の家も隨分みすぼらしい家だつた。先生は朝早く役所へ出かけるので、僕はいつもまだ暗いうちに先生の家へ行つた。生徒は僕とも二三人だつた。

僕は冬、三尺も四尺も雪が積つて、まだ踏みかためられた道も何んにもないところを、凍えるやうになつて通つた。行くと、先生のお母さんが寒さうな風をして、小さな火鉢に粉炭を少し入れて來て、それをふう〳〵吹いて火をおこしてくれた。僕は先生の此のお母さんが可哀さうな氣がして母に其の話をした。母はすぐに馬丁に炭を一俵持たしてやつた。先生のお母さんは涙を流してお禮を云つた。そして其の翌日からは大きな炭でカッカと火をおこしてくれた。

僕は此の先生に就いて、謂はゆる四書の論語と孟子と中庸と大學との素讀を終へた。

先生はまだ二十四五か、せいぜい七八の年頃で、其の風采は少しもあがらなかつた。しかし其のお母さんは風は汚なかつたが、何處かしらに品のある顏をしてゐた。が、さうした士族の落ちぶれたやうなのは僕にはちつとも珍らしい事ではなかつた。

僕は其後幾度も囚人として監獄にはひつて、其の度にいつも此の先生の事を思ひ出した。生徒の僕等に何か物を云ふんでさへ少々はにかんでゐたやうな音なしい先生だ。きつと先生は囚人などとは直接に交渉のない、内勤の方の何かの事務を執つてゐたのに違ひない。とても囚人を叱る事の出來るやうな先生ではなかつた。

それから又、やはり其頃に、四五人の友人を家に集めて、輪講だの演説だの作文だのの會を開いた。すぐ一軒置いて隣りの西村の虎公だの、町の方の杉浦だの、前に其のお母さんの事を話した大谷だのが、其の常連だつた。虎公と杉浦

とは僕よりも一年上の級だつたが、一緒に近所の柴山と云ふ老先生の私塾に通つてゐたので、虎公が杉浦を連れて來たのだつた。大谷は僕よりも一年下だつた。

本讀みの僕はいつも皆んなの牛耳をとつてゐた。僕は友人の殆んど誰れよりも早くから『少年世界』を讀んでゐた。そして或る妙な本屋と知合になつて、そこからいろんな本を買つて來て讀んでゐた。修身の逸話を集めた飜譯物のやうなのも持つてゐた。又誰れも知らない四五冊續きの大きな作文の本も持つてゐた。さうした雜誌や書物から竊と持つて來た僕の演說や作文は皆んなの喝采を呼ばずにはおかなかつた。

新發田から三四里西南の水原と云ふ町に、中村萬松堂と云ふ本屋があつた。そこの小僧だか番頭だかが新發田に來て、或る裏長屋のやうなところに住んでゐた。それをどうして知つたのか、僕が多分殆んど最初のお客となつて、何かの本を買ひに行つた。店も何んにもなくて、たゞ座敷の隅に數十冊の本を並べてあつただけだつた。しかし、それまで本屋と云ふもののまるでなかつた、たゞ或る一軒の雜貨屋が敎科書と文房具との店を兼ねてゐるだけの新發田では、それでも十分豐富な本屋だつたのだ。僕はひまがあると其の本屋へ遊びに行つて、寢ころんでいろんな本を讀んで、何か氣に入つたものがあると買つて來た。小使錢と云ふものを一文も貰はなかつた僕は、文房具でも本でも、要るだけのものは母に默つてでも何處かの店から月末拂で持つて來る事が出來た。其の拂ひが少し嵩むと、母はこれからは豫めさう云ふやうにと注意はしたが、決して叱る事はなかつた。其後すぐ此の本屋は上町に店を持つて、やはり萬松堂と云つてゐた。そして僕はそれから三四年經つて新發田を去るまで、そこの店の一番いゝお客の一人だつた。

此の夏新發田へ行つた時、僕は第一番に、尤もそれが宿のすぐ近くであつたからでもあるが、此の店を訪ねた。主人はやはり昔の主人だつた。

『僕誰れだか分るかい？』

僕は默つて僕の顏を見つめてゐる主人に尋ねた。

『えゝ、確かに見覺えはあるんですけれど、どなたでしたかな。』

『もうちやうど二十年になるんだからね、分らんのも無理はあるまいが……』

『いや、其のお聲で思ひ出しました。これやほんたうに暫くめですな。』

主人は小僧にお茶を入れさした。そして僕は昔の友人の行方をいろ／＼と此の主人から聞いた。新發田の中學校を出たものなら、主人は殆んど皆なよく知つてゐた。

友人等との會の話が本屋の事にそれて了つた。もう一度話をもとに戾さう。

此の會での一番大きな問題は、遼東半島の還附だつた。僕は『少年世界』の投書欄にあつた臥薪嘗膽論と云ふのを其儘演說した。皆んなはほんたうに涙を流して臥薪嘗膽を誓つた。

僕は皆んなに遼東半島還附の敕諭を諳誦するやうにと提議した。そして僕は每朝起きるとすぐそれを聲高く朗讀する事にきめてゐた。

虎公は高等小學校を終へるとすぐ北海道へ小僧にやられた。そして其の數年後に全く消息が絕えて了つた。谷は僕よりも一年遲れて幼年學校にはひつた。今は多分少佐位になつてゐるだらう。杉浦は、其の家が何をしてゐたのか當時は知らなかつたが、そして其の家の相應な構へなのにも係らず馬鹿にけちだつたところから、後では高利貸かとも想像してゐたが、こんど行

つて開いて見ると新發田第一の大地主だつた。今は當主でぶら〳〵遊んでゐる。

一ほかではどうか知らないが、少なくとも此の越後では農民運動は決して起りませんよ。地主と小作人とが全く主從關係で、と云ふよりも寧ろ親子の關係で、地主は十分小作人の面倒を見てゐますからね。』

杉浦君は先日會つた時、室のあちこちにある神棚のあかりを手際よく靜かに團扇で消して、其の農民との關係を詳しく話してくれた。

四

そんな風で、其頃は隨分よく勉めもしたやうだが、しかし又隨分よく遊びもしたやうだ。

遊び場は、前の片田町にゐた時とは違つて、もうすぐ前の練兵場ではなくなつてゐた。前にも云つた大寶寺の射的場のバッタ狩り。其の後ろの丘の茸狩り。昔殿樣の遊び場であつた五十公野山の澤蟹狩り。又、昔々、何んとか云ふ大名が城を圍まれて、水路を斷たれて、うんと貯へてあつた米を馬の背中にざあ〳〵流して、敵に虚勢をはつて見せたと云ふ城あとの加治山。そこではまだ、頂上の狹い平地の赤土をちよつと掘ると、黑く焦げた燒米が出て來た。綺麗な水の加治川。それらは皆な、子供の足にはちやうどいゝ遠足の一里前後のところにあつた。

或る夏の日、僕は虎公と一緒に加治山へ遊びに行つた。山百合が眞つ盛りだつた。

虎公は百合の根を掘りはじめた。虎公は其の家の裏に廣い畑があつて、よく其の年とつたお婆さんの手傳ひをしていろんなものを作つてゐたところから、そんな事に就いての知識を持つてゐたのだ。僕も一緒になつて掘りはじめた。收穫は大ぶ多かつた。が、僕はそれをすつかり虎公にやつて了つた。

『虎公のうちは貧乏なんだから……』

僕はさうきめてゐたのだ。虎公は又釣が好きで、よく朝の三時頃から連れ出されたが、そんな時にもいつも僕は全收穫を虎公にやつてゐたのだ。

が、歸りがけに僕は、母が何かちよつとした病氣で寢てゐる事を思ひ出した。そして百合の花をおみやげに持つて歸る事に氣がついた。僕はあちこち驅け廻つて、なるべく大きさうな、そして幾つもの花のついてゐる、十幾本かを集めた。

二人とも大喜びで歸つた。そして僕はすぐに離れの母が寢てゐる室へ行つた。

『根の方を持つてくればいゝのにね。ほんとにお前は馬鹿だよ。そしていつも虎公にそんな目に遭つてゐるんだらう。』

母はもう大ぶしをれた花にはろくに目もくれずに、僕が虎公に百合の根をやつて了つた事を非難した。

僕はこれ程悲しかつた事はなかつた。涙も出ずに、たゞ胸がそく〳〵と迫つて來るやうな悲しさだ。そして僕は其のわけを母に話す事も出來ずに、と云ふよりは寧ろ、そんな氣は少しも起らずに、しを〳〵として自分の室に歸つた。

これが僕の、尤も其のわけさへ話せば母は自分の過言をあやまつて僕をほめてくれたに違ひないとは思ふものの、母に對するたゞ一つのしかし大きな悲しみの思出だ。

けれども僕はやはり母は好きだつた。

其の夏の或る晩に、皆んなで座敷で涼んでゐた。ふと、次ぎの妹が庭先を見つめながら、『あれえ』と叫び出した。皆んなはびつくりして庭の方を見た。暗い隅の方に何んだかぴか〳〵と光る大きな目玉のやうなものが一つ見えた。子供等は皆な「あら」と云つたまゝおびえて了つ

た。
　母はすぐに立つて庭下駄をはいて下りて行つた。僕等は默つてそれを見送つてゐた。
『さあ、皆んなこゝへお出で。何んにも恐い事はありません。お化の正體はこんなものです。』
　母は皆んなをそこへ呼んで、其の謂はゆるお化の正體を見せた　それは何かのブリキの鑵が一つ轉がつてゐたのだつた。

　けれども、又、多分僕のいたづらが年と共に益々はげしくなつたせゐであらうが、母の折檻も益々ひどくなつた。僕は母と女中と二人に、荒繩でぐるぐるからだを卷きつけられて、さんざんに打たれたことを覺えてゐる。母の留守に女中の云ふ事を聞かなかつたと云ふのが其のもとだつたやうだ。母は多勢の子供をほつたらかして、半日も一日も、近所のやはり軍人仲間の奧さんのところへ行つてよく遊んでゐた。そして子供等の上には、女中に絶對の權力を持たしてゐた。

　喧嘩もよくした。
『自分の事ではまだ人にあやまつたやうな事はないんだが、此の子のためにだけはしよつ中あやまり通しですからね。』
　母はよくから云つて、喧嘩の尻を持つて來られる愚痴をこぼしてゐた。そして僕は、父や母がたゞあやまるだけでは濟まないやうな事までも幾度も仕出來かした。
　高等二年の時だ。同じ級の、しかし多分違ふ組の、西川と云ふのと何かの衝突をした。僕が甲組第一のあばれ者で、彼れは乙組第一のあばれ者だつたのだ。僕は其の日の歸り路があぶないと思つた。そして竊かに、習字の紙の壓へにする鐵の細長い『けさん』と云ふのを懷に入れて、何食はん顏をして學校を出た。果して西川は僕のあとについて來た。彼れの家は僕の家とあべこべの方向にあつたのだ。そして彼れのあとには其の仲間の七八名がついてゐた。
　僕はいつものやうに、衛戍病院の構から練兵場にはひつた。そしてそこへはひるとすぐ右の手を懷に入れて用心してゐた。今まで大ぶ離れてゐた皆んなが、がやがや云ひながらだんだん接近して來た。惡口の挑戰がはじまつた。なぐつちやへ、なぐつちやへ、などと云ふ聲もすぐ後ろに聞えた。僕に誰れかが驅け寄つて來るのを感じた　僕はけさんを握つて、止まつて、後ろをふり返つた。西川が拳をあげて今にもなぐりかゝらうとしてゐるのだ。僕はいきなりけさんを振りあげた　西川はちよつと後ろを向いた。其の拍子に彼れの頭から血がほとばしり出るやうに出た。皆んなはびつくりして西川を取りまいた　僕は多少の心配はしながら、それでも意氣揚々と引きあげて歸つた。
　西川の頭には其後二寸ばかりの大きな禿が出來てゐた。

　それから餘程經つてからの事であるが、或日、父が聯隊から歸るとすぐ、僕は其の室に呼ばれた。父と母とが心配さうな顏つきをして向ひ合つてゐた。
『此頃お前は學校で誰れかの肩をなぐるか蹴るかしやしないか。』
　父が嚴かに、しかし不安さうに、尋ね出した。
　父の顏には太い筋が見えてゐた。
　父がこんな裁判をするのは始めての事だつた。で、僕も何か非常な大事件のやうな氣がしたが、そんな覺えは少しもなかつた。僕は默つて考へてゐた。
『それでは何んとか云ふ子を知らないかい。』
と、こんどは母が尋ねた。

僕は其の子は知つてゐた。同じ級のたしか同じ組だつた。親しい友達でも何んでもないが、とにかく學校で知つてゐた。けれどもそれが此の妙な事件と何んの關係があるのか、僕には益々分らなくなつた。しかし知つてゐると云ふ事だけは答へた。

『其の子の肩をなぐるか蹴るかしやしないかい。』

母は僕の返事を待つて更にかう尋ねた。

『いゝえ。』

僕にはそれは益々覺えのない變な事だつた。

母はそれで漸く安心したやうになつて、事の顚末を詳しく話して聞かした。

八軒町に岡田と云ふ少佐がゐた。父が前に副官をしてゐた大隊長だ。そこの馬丁か從卒かが門前を掃除してゐると、學校の子供が一人通りかゝつて、それがフラ〳〵右左によろめきながら幾度も前の溝の中に落ちかけた。妙だな、と思つて肩をつかまへて聞くと、

『それが君んとこの子供の仕業だと云ふんださうだ。それでとにかく其の家まで送り屆けさして置いたさうだがね。醫者は頸の根のところは急所で、ちよつと針でさしても死ぬ位だが、これは治つても多分馬鹿になつて了ふだらう、と云つてゐたさうだ。』

と云ふ岡田少佐の話だつたんださうだ。

さう云はれると僕は思ひ出した。其頃學校では毎日『隅取り』と云ふ遊びをしてゐた。それは雨天體操場の二つの隅に各々一隊づつ陣取つて、其の陣屋を守つてゐるものを押しのけくゞり拔けて、それを占領する遊びだつた。が、尋常の押しのけくゞり拔けてゐるんでは、いつ勝負がつくか知れない。それで、先づ第一の攻撃隊にそれをやらして置いて、敵の陣容の大ぶくづれかゝつた時に、一人か二人の勇者をそこへ飛びこませるのだつた。この勇者等は、組打ちをしてゐる敵味方の肩の上から陣屋のなるべく奧へ飛びこんで、一擧にして其の一番奧の隅を占領するのだ。僕はいつも此の勇者の役目がお得意でゐた。其の飛びこむ時に、何んとか云ふ子の肩の急所を蹴つたのぢやあるまいかと。

僕は父と母とに其の話をした。そして三人できつと其時の事だらうときめて了つた。父と母とはすぐに見舞に行つた。が、向うでは、それをひどく恐縮して、何んでもない事にして了つた。

其後其子がどうなつたかよく覺えてゐないが、目つきがちよつと藪にらみのやうになつて、いつも何んにも云はずに默つてゐるのを見たやうにも思ふ。

三 不良少年

一

高等小學校の二年を終る少し前の事だつた。其或日先生から、大澤と大久保と僕と三人に、其晩先生の下宿を訪ねるやうにと云はれた。

『何んの用だらう。』

三人は心配した。先生に自分の家へ來いなぞと云はれたのは始めてだつた。が、いくら三人が首をあつめて見ても、それが何んの用だかは、どうしても見當がつかなかつた。それだけ三人は猶心配した。

三人はどこかで待合せて、びく〳〵しながら地藏堂町の先生の下宿へ一緒に行つた。

先生はにこ〳〵してゐた。そして自分でお茶を出してくれて、かしこまつてゐる僕等に無理無理にあぐらをかゝした。

『こんど此の土地に中學校が出來るんだがね、どうだ、皆んなはひつて見ないか。』

先生は眞黒な顏の中に白い齒を見せながら切りだした。中學校が出來ると云ふうはさは僕等もうす〳〵聞いてゐた。しかし、それがまださうはつきりした話でなかつたやうなのと、高等二年を終へれば直ぐはひれるなぞとは知らなかつたのとで、僕等は大してそれを問題にしてゐなかつた。三人はどう返事していゝのか分らんので、暫くの間默つてたゞ顏を見あはしてゐた。

『高等二年を終へれば直ぐはひれるんだがね。ほかのものはとにかく、君等三人だけは僕が保證するから是非はひつて見ないか。家へ歸つて先生がさう云つたからと云つて、よくお父さんやお母さんと相談してごらん。』

僕等は急にうれしくなつた。そして、もう中學校へはひつたやうな氣になつて『しかし此の事はほかのものには話しないやうにね。』と云ふ先生の注意もうはの空で、大喜びで家へ歸つた。

先生は、僕等には多分始めての師範出の若い先生だつた。それまでの先生は、尋常四年の時の島先生を除けば、皆ないゝかげん年とつた先生ばかりだつた。そして先生は、僕等とほんたうに友達になつて遊んでくれた始めての先生だつた。「僕」なぞと云つたのも先生だけだつた。

先生は來ると直ぐ高等一年の僕等の組を受持つた。先生の眞黒な顏は、最初僕等にあまり受けがよくなかつた。ちよつとこはさうに見えたのだ。が、此の先入見は、唱歌の時間に直ぐ毀されて了つた。今までは女の先生ばかりがやつてゐた唱歌までも、先生が受持つたのだ。それだけですら既に先生の上に、或る人望と好奇心とが加はつた。そして其の最初の時間は實に奇觀なものだつた。

兵隊のやうにからだのいゝ、胸を前につき出して、眞黒な顏の先生がオルガンの前に腰かけた。僕等は其のオルガンからどんな音が出るだらうと待ち構へてゐた。オルガンの音は優しい顏の女の先生のと別に變りはなかつた。が、其のやはり眞黒な、毛もしやくしやの、大きな指が、少しもぎごちなくはなく器用にそして活潑にキイの上を走るのが、先づ皆んなを愉快がらした。

やがて先生が歌ひ出した。眞黒な顏一ぱいに廣がつた大きな口から、教室ぢうに響き渡る、太いバスが出て來た。おちよぼ口をして、聞えるか、聞えないやうな聲を出してゐる、女の先生の聲ばかり聞いてゐた僕等は、それですつかり先生が好きになつて了つた。そして皆んなは非常に愉快になつて、出來るだけ大きな口を開けて、出來るだけ大きな聲で歌つた。

そして、これは特筆大書しなければならん事だが、僕は此の先生にだけには、たゞの一度も叱られた事がなかつた。それだのに、どうだらう、僕はかうして二年間も隨分可愛がつてもらつた此の先生の名さへも忘れて了つてゐるのだ。

先生から中學校行きを勸められた事は、堅く口どめされてゐたのにも拘はらず、直ぐに皆んなの間に擴がつた。そしてそれと同時に中學校が出來ると云ふ事も確實になり、高等二年を終へたものは直ぐにはひれると云ふ事も知れ渡つた。僕等と同じ級からの入學志望者も大ぶ出來た。そしてそれらのものから僕等三人は一種の憎しみの的となつた。

四月のはじめに、僕は中學校の假校舍になつてゐた何んとか寺へ入學願書を持つて行つた。受付の事務員が、暫らくの間それを讀んでゐたが、やがて『あんたは年が足りないから駄目です』と云つてそれを突つ返した。僕は泣きさうになつて家へ歸つた。

學校の入學規則には滿十二年以上とあつた。そして僕の願書には滿十一年十一月とあつた。一ケ月足りないのだ。僕はくやしくて堪らなかつた。父も母も『そんなに急ぐには及ばんから來年の事にするさ』と云つて慰めてくれるんだが、僕はどうしても思ひきる事が出來なかつた。皆んなが『ざまあ見ろ』と云つてあざ笑つてゐるのが、直ぐ目の前に見えたのだ。

僕は滿十一年十一月と云ふのを十二月となほして、もう一度中學校の事務所へ行つて見た。

「よく勘定して見ると十一ケ月ぢやないんです。十二ケ月です。十二ケ月なら都合十二年になる譯なんだから、それでいゝでせう。」

僕は一生懸命になつて、自分の生れた月の五月から始めて六七八九……一二三四月と十二まで指を折つて見せて其の確かに十二ケ月になる事を力說した。

事務員は笑つてゐたが、「とにかく相談して見ませう』と云つて願書を受けつけてくれた。僕は其の翌日又行つて見た。そして要するに、一學期間は皆んな假入學を許して、九月からほんたうの生徒になるんだからと云ふので、僕は入學を許される事となつた。

中學校には僕等三人のほかに同じ級から二十名近くはひつた。が、僕等のほかは、其の半分は本入學の時に篩ひ落され、あとの半分も大部分は二年へ行く時に落されて了つた。そして其の殘りの一人か二人も三年に登る時に落されて了つた。

二

此の十三の春は、からだの上にも心の上にも大きな變化を僕に齎らした。

或日、偶然僕は僕のからだの或る一部分に、うぶ毛ではない黑い毛の密生して來てゐる事を發見した。僕はそれは非常に恥かしかつた。これは僕と同じ年の友達には勿論、一つ二つ年上の友達にもまだ見ない事だつたのだ。僕は幾度も、或は便所で、或は自分の室で、窃とそれを××××××××した。が、いつの間にか又それが前よりも、もつと××××して來るのだつた。

それと殆んど同時頃に、僕はほんたうの自慰を覺えた。前にお花さんとやつたほんの遊びが、こんどは××××××××××××なつたのだ。

それ以來僕は机の前に長い間坐つて本を讀む事が出來なくなつた。一時間も坐つてゐると、×××××して來て、どうしてもぢつとしてゐる事が出來なかつた。そして一日に二度も三度も自慰に走つた。

勉强家だつた僕はすつかり怠けものになつて了つた。

僕は父や母が少しでも猥りがましい事をしたり、そんな話をしてゐるのを見た事も聞いた事もなかつた。

從卒や馬丁が女中とふざけてゐるのはよく見た。馬丁はほかから通つて來るのでそれ程でもなかつたが、從卒は書生か下男同樣に泊りこんでゐるので始終女中とふざけ合つてゐた。從卒の室へはひつて行つて、從卒と女中とが今相撲を取つてゐるのだと云ふところを見た事もあつた。又、女中が眞赤な顏をして、息をきらしながら着物の前を合せ合せ從卒の室から飛び出て來るのにぶつかつた事もあつた。やがて此の女中は其の從卒の子を孕んで宿にさがつた。

僕等がゐた片田町の裏の小人町と云ふのは淫賣町だつた。片田町の一方のはじの、西ケ輪に近い部分も、やはりさうだつた。日曜の夕方そこを通ると、きつと酒に醉つぱらつた兵隊が、眞白な女の頸にかじりついてゐるのが見られた。

一度、馬丁に連れられて、西ケ輪の何んとか温泉と云つたお湯屋へ行つた。眞白な顔の女が大勢はひつてゐた。男も二三人まじつてゐた。馬丁は僕に待つてゐろと云つて、自分一人其の中へはひつて行つた。男と女とが湯船の中に入りまじつて、キャッ／＼と云つて騒いでゐた。僕はいやになつて、馬丁がとめるのも聞かずに、一人で家へ歸つた。

が、僕は女の友達とはだん／＼に遠ざかつて行つた。

學校が別になつてめつたに會ふ機會のなくなつた光子さんは、折々其の小さい弟を連れて、夕方近くの練兵場へ散步に來た。彼女はたしかに僕に會ひに來るのに違ひなかつた。其の弟を連れて來たのもそとへ出る口實に違ひなかつた。僕は彼女の姿を見ると直ぐに練兵場へ走つて行つた。二人は一二間そばまで近よつてかすかな微笑を交せば、それでもう事は十分に足りるのだつた。彼女はそれで滿足して歸つた。

光子さんと僕との間は要するにたゞこれだけの事に過ぎなかつた。僕は光子さんと交したたゞのひと言も覺えてゐない。と云ふよりも寧ろ、お互に言葉を交したと云ふ程の事も嘗てなかつた。それでも二人は、少なくとも僕の心の中では立派な戀人同士だつたのだ。

其後、僕は彼女がどうなつたか知らない。彼女の姉さんは、やはり彼女と同じやうに美しかつたが、貧乏の子の秀才が勉强するには其のほかに方法はなかつた、新潟の師範學校にはひつてゐた。彼女もやはり其の姉さんと同じ運命に従つたやうに聞いてゐる。

光子さんの姿が見えなくなつたあとで、或はやはり其頃であつたかも知れないが、其の小さな妹を連れて、やはりたしかに僕との單なる微笑を交すために、練兵場へ散步に來た女の子があつた。警察署長の娘だつた。

やはり僕はたゞの一度も言葉を交した事はなかつた。そして彼女と向ひ合つたのはたゞ次ぎの場合の一度だけだつた。

僕は父の使ひで署長の官舍へ手紙を持つて行つた。玄關で取次ぎを乞ふと、ふと彼女が出て來た。彼女も僕も眞赤になつて何んにも云ふ事が出來なかつた。僕は默つて手紙をさし出し、彼女も默つてそれを受取つて奧へ走つて行つた。

彼女は脣の厚くて赤い子だつた。

僕は彼女といつどこでどうして知つたのか覺えてゐない。そしてたゞこれだけの間柄に過ぎなかつたのに、不思議にもまだ其の名は覺えてゐる。

お花さんも禮ちやんもいつの間にか僕の頭の中から消えて了つた。

お花さんはどうしたのか覺えてゐないが、禮ちやんは柏崎へ行つて了つた。其のお父さんが、金鵄勳章の敍勳にもれたのに不平を云つて、柏崎の聯隊區に左遷されたのだつた。

此の禮ちやんに就いてだけはまだ後日談がある。

中學校にはいろんな種類の人間がはひつて、僕等を一番の年少者として、もう三四年も前に高等小學校を終へて自分の家の店に坐つてゐた二十近いものまでもゐた。もうすつかり農村の若い衆になりきつてゐるものもはひつて來た。新潟や長岡の中學校の食ひつめものもゐた。

それらの年長者がいろんな事を僕等の間に輸入した。學校が始まつてから間もなく、寄宿舍にゐる二三の年長者等が、十三四の七八人の生徒を連れて、女郎屋へ遊びに行つた。これは

直ぐ學校に知れて其の年長者等は退校になつた。それ以來、さうした方面の事は全くなくなつた。

そして生徒の間に直ぐに一番の勢力を占めたのは、他の中學校を流れ歩いて來たごろつき連中だつた。此の連中は皆な一人づつごく年少のそして顏の綺麗なのを其の新しい友人に持つた。彼等はお互に指を切つて、其の血をすゝり合つて、義兄弟の誓ひをした。

一年の間は僕もまだそんな事は知らなかつた。が、二年の末頃になつて、やはりそれを覺えて、指を切つたり血をすゝつたりはしなかつたが、一人の弟を持つた。

此の風習は其後二年も三年も僕につきまとつた。

三

煙草を吸ふこともやはり其頃に覺えた。

父がいつも吸つてゐる中天狗と云ふのをちよいちよい盜んでは吸ひ覺えた。そしてしまひには父が大事にしてしまつてゐる葉卷までも盜みだして吸ふやうになつた。

中學校にはひつたのと同時頃に、高等小學校の坂本先生と云ふのが、主として軍人の間から寄附金を募つて、講武館といふ柔道の道場を建てた。

軍人の子は大がいそこにはひつた。石川もはひつた。大久保もはひつた。又、前に云つた威海衛の戰爭の時に一週間山の中にかくれて出て來なかつたと云ふ評判の、そして凱旋すると直ぐ非職になつた脇川と云ふ大尉の子もはひつた。脇田は僕なぞと同じ級で年は二つ程多く、からだも大きかつたが、僕等は其の親爺のせゐで馬鹿にしてゐた。が、或時彼れ自身の口から、彼れのほんたうの父は何んとか云ふ金澤人で、大久保利通を暗殺した一人で、しかも其の××を見舞つたのだと聞いて少し彼れを尊敬したい氣になつた。勿論僕も講武館にはひつた。

此の才道は隨分よく勉强した。午後と夜と代る代るあつたのだが、僕は殆んど一日も缺かした事がなかつた。殊に寒稽古には三尺も積つた雪の中で亂どりをやつた 成績も非常によかつた。そして一年半か二年もしてからは、そこでの餓鬼大將になつて了つた。

毎年秋の諏訪神社のお祭には、各々の町から山車が出た。そして其の山車と山車とがよく喧嘩した。鍛冶町の鍛冶屋連が此の喧嘩に負けて、翌年の復讐を期して、十人ばかりが入門した。皆んな僕なぞの足くらゐもある太さの、恐ろしいほど瘤や筋の出ばつた腕を持つた、二十前後の若い衆ばかりだつた。先生は僕を其の相手に選んだ。ちよつと彼等に握られると、腕の骨がくだけるかと思ふ程に痛かつた。が、彼等の腰と足とは子供のやうに弱かつた。僕はそれにつけこんで彼等をころ〳〵轉がしてやつた。皆んなは喜んで先生の代理にしてゐた。そして折々小刀なぞを作つて持つて來てくれた。

そこでは又棒も教はつた。繩も教はつた。棒は殊にお得意だつた。今でもまだ棒が一本あれば二人や三人の巡査が拔劍して來たところで敢て恐れないくらゐの自信がある。

幼年校にはひつてからの第一の暑中休暇に、坂本先生の其の先生の森川と云ふお爺さんから、或る傳授をするから一週間ばかり泊りがけで來いと云ふ迎ひが來た。

お爺さんは新發田から二里半ばかり距つた次第濱と云ふ海濱にゐた。で、僕は海水浴がてら行つて見た お爺さんはもと通りちよん髷を結つて、もう腰がすつかり曲つてゐた。それでも行くと直ぐ、前にも道場でよくやつたやうに棒

の相手をさせられた。お爺さんが木太刀を持つて、僕が棒を持つてそれに向ふのだ。お爺さんのかけ聲はこつちの腹にまで響くやうに氣合がこもつてゐた。そして其の太刀で棒を壓へるやうにして、じり〳〵進んで來られると、僕はちよつと自分の棒を動かす事が出來なかつた。

お爺さんは目がわるくて自分で書けないからと云つて卷物になつてゐる「目錄」を持つて來て僕に寫さした。東方の摩利支天、西方の何んとか、南方の何んとか、北方の何んとかと、云ふやうな事があつて、呪文めいた片假名の何んだか譯のわからん事の書きつゞけられた妙なものだつた。そして其の最後は、此の『目錄』を傳へられた人の系圖のやうなもので、源の何んとかから藤原の何んとかに、と云ふ十幾つか二十幾つかの名が連ねられてあつて、其の最後の人からお爺さんにあてて源の何んとか森川何兵衞殿へとしてあつた。そしてお爺さんは、此の系圖のおしまひに自分の名をいれて、其のあとへ大杉榮殿へ、と書くやうに云つた。

片假名の呪文は何んの意味だかちつとも敎へてくれなかつた。が、人が見てはいけないと云つて、裸で土藏の中にはひつて、あて身や何かを敎へてくれた。

其後此のお爺さんは、父のところへ來て、兵隊に玉除けのまじなひをしたいからと云つて、大ぶ手こずらしたと云ふ事であつた。

此の柔道は荒木新流と云ふ、實はもう古い流儀のものだつた。

其後坂本先生は、僕が最初の入獄を終へて始めて家を持つた時、こんど上京したからと云つて訪ねて來た。これは後で間接に聞いた事であるが、實は父と相談して僕を說得しに來たのださうだ。が、そんな事は少しもなしに、今でもまた折々訪ねて來ては昔ばなしをして行く。

『どうしたつて、そんな病氣になる筈はないんだがね……』

僕が肺の悪い事を聞いて先生は不思議がつてゐた。そして先生發明の曲伸法と云ふ運動方法を勸めてくれた。最近に僕は此の曲伸法で獄中で大たすかりをした。

先生はもう五十を餘程越してゐるのだらうが、昔僕が知つてゐる三十幾つかの頃の、小造りであるがまんまると太つた、色つやのいゝ顏の先生其儘である。そして今でも、小石川の其の修養塾のそばに道場を造つて柔道の先生をし、又夏は子安邊で水泳の先生をして、毎年の冬隅田川で寒中水泳を催してゐる。

此の柔道から少し遲れて、擊劍も敎はりに行つた。晝の柔道の時間を其の方へ廻したのだ。流儀の名は忘れたが、先生は今井先生と云つた。

先生は大兵肥滿の荒武者で、大きな竹刀の中に電線ほどの筋がねを三四本入れてゐた。一種の國士と云つたやうな人で、昔星亨が遊說に來た時、車ごと川の中へはふりこんだとか云ふ話もあつた。最近にも大倉喜八郞の銅像の除幕式の時、そこへ飛びこんで行つて大倉をなぐるのだと云つて意氣ごんでゐたさうだが、皆んなにとめられて果さなかつたさうだ。

僕はそこで荒つぽい、竹刀の使ひかたの大きな擊劍を敎はつたので、其後幼年校にはひつて、おもちやのやうな細い竹刀でほんのこて先だけでチャン〳〵やるのが實にいやだつた。

學校では器械體操と野球とに夢中になつてゐた。そして、かうして一日とび廻つては、大飯を食つてゐた。

十三の正月から十四の正月までに、脊が五寸延びた。さうして十四から十五までに四寸

延びて五尺二寸何分かになつた。元日に室の柱のところに立つて、其の柱に傷をつけて計つて見たのだ。

四

中學校の校長は、先年皇子傳育官長になつて死んだ、三好愛吉先生だつた。

僕等は先生を孔子樣とあだ名してゐた。それは先生が孔子樣のやうな髯をはやしてゐたばかりでなく、何かと云ふと直ぐに孔子樣孔子樣と先生が云つてゐたからでもあつた。先生は眞面目な謹嚴其者のやうな顏をしてゐた。そして主として論語によつて倫理の講義をしてゐた。

たしか二年の始め頃だつた。或日先生が、倫理の時間に、皆んなの理想し崇拜する人の名を尋ねた。秀吉も出た。家康も出た。正成も出た。清麿も出た。そしてだん〳〵順番が廻つて僕の番になつた。

僕にはまだ、實は、理想し崇拜すると云ふ程の人はなかつた。それにいゝかげんに誰れかの名を云ふにしても、人の云つた名を又云ふのはいやだつた。誰れにしようか、と考へて見てもちよつと新しい名が浮んで來なかつた。そこで僕の番が來たのだ。僕はすつかり困つて了つた。

が、とにかく立ちあがつた。するとふいに、最近に買つて讀んだ、誰れだかの西鄕南洲論を思ひだした。僕はいゝ見つけものをしたつもりで、『西鄕南洲です』と答へた。

先生は一廻りして了つたあとで、皆んなの答へたそれ〴〵の人に就いての批評をした。

『なるほど西鄕隆盛は近代の偉人だ。或は日本の近代では一番の偉人であるかも知れない。が、彼れは謀叛人だ。陛下に弓をひいた謀叛人だ。そして此の謀叛人であると云ふ事は、よしそれがどんな事情からであつたにしろ、又ほかにどんな功勞があつたにしろ、到底許される事は出來ない。況んや其の謀叛人を理想し崇拜するなぞとは、以てのほかだ。』

先生の僕の答に對する批評は大たいこんな意味だつた。そして最後に先生は、皆んなの理想し崇拜しなければならぬ人物として例の孔子樣をあげて大いに其の德を稱した。

僕は此の批評が非常に不平だつた。僕が讀んだ本では彼れの謀叛は陛下に弓をひいたのではない。謂はゆる其の何んとかの下にかくれてゐる姦臣共を逐ひ拂ふための謀叛だとあつた。僕もさう信じてゐた。しかし先生にかう言はれてからは、そんな事はもうどうでもよくなつた。許されようが許されまいが、そんな事はもう問題ではなくなつた。とにかく彼れは偉かつたんだの一點ばりになつた。そして家へ歸つて又西鄕南洲傳を讀み返して、彼れをすつかり好きになつて了つた。

此の西鄕南洲傳は更に僕を吉田松陰傳や平野國臣傳に導いた。そして其のどんなところが氣に入つたのかよくは覺えてゐないが、多分其の何人にも先んじて兵を擧げたと云ふところから、平野國臣は非常に好きだつたやうだ。

三好先生は深田先生といふのを敎頭に連れて來た。小柄の綺麗な顏に頰髯を一ぱいにはやした先生だつた。

先生は一年の時の倫理と英語を受持つた。倫理には、長い間續けて郡司大尉の千島行の話を聞かされた。先生の英語は、聲が綺麗で、今までの小學校や私塾の英語の先生のとはまるで違つた、いゝ發音だつた。

博物や理化の先生もやはり學士であつたが、意地わるなので、僕等は其の理科に興味を持つ事が出來なかつた。

お爺さんだつた習字の先生は、いつも僕に、よく手本を見て書けばうまく書けるのだから、

ぞんざいに書いてはいけないと云つて注意してくれた。後、幼年學校にはひつてからも、やはり同じやうな事をよく習字の先生から云はれた。が、僕には、どうしてもお手本の一點一劃を其の通りに見て書く事が出來なかつた。そして此のぞんざいのお蔭で、今でもまだろくに字の恰好をとる事が出來ない。

圖畫は最初は鉛筆畫で、あとで毛筆畫になつたが、一年から二年までの間に、數へるくらゐしか描いたことはなかつた。まるで描けないし、それに大嫌ひだつたのだ。

學校の勉強はまるでしなかつたが、成績は英語が一ついつでもいゝくらゐなもので、あとは皆な乙ぞろひだつた。そして三分の一程の席順にゐた。

僕が一年から二年へ越える時に、虎公が高等小學校を終へた。

虎公の家は、虎公とお婆さんと二人きりで、どうして食つてゐたのか知れないが、相變らず貧乏だつた。虎公はしきりに中學校へはひりたがつてゐたが、どうしても駄目らしかつた。僕は虎公が可哀さうで堪らなかつた。そしてたうとう一策を案出してそれを虎公に謀つた。それは僕が使つた本は皆な虎公にやるから、虎公は其の伯父さんから月謝だけ出してもらつて、學校へ行くがいゝと云ふのだつた。

虎公は非常に喜んで、直ぐそれをお婆さんに話して、伯父さんに相談に行つた。伯父さんと云ふのは典獄を勤めてゐた。

が、虎公の運命はもう、其の餘程以前にきまつてゐたのだつた。彼れは伯父さんの家から泣いて歸つて來た。中學校へはひりたいなぞと云ふ非望を叱られて、近々に函館の或る商店へ小僧に行くやうにと命ぜられて來たのだ。

僕は虎公の此の運命はどうすることも出來なかつた。二人は相抱いて泣いた。そして僕は大將になるから、君は大商人になり給へと云つて、永久の友情を誓つた。

虎公と僕とは記念の寫眞を撮つた。そして僕は母にねだつて、暖かさうなフランネルのシャツとズボン下とを作つてもらつて、それを餞別に送つた。

僕は大將にはなりそこねたが、虎公は果してどうしてゐるか。彼れの本名は西村虎次郎と云つた。

虎公が行つて了つてから直ぐ僕は幼年學校の入學試驗を受けた。そして虎公にも誓つたやうに、自分の寫眞の裏には未來の陸軍元帥なぞと書いてゐたが、試驗のための勉強はちつともしなかつた。そして見事に落第した。

五

其の夏始めて一人で旅行に出た。

最初は東京までのつもりで、十圓もらつて出かけたのだつたが、それが名古屋までとなり、大阪までとなつて、大旅行になつて了つた。

越後はまだ直江津までしか鐵道がなかつたので、新潟から船でそこまで行つた。汽船や汽車に乘つたのは勿論、そんなものを見たのもそれが覺えてから始めての事だつた。

山田の伯父がゐた。威海衞で戰死した大寺少將の邸を買つて、其のあとを普請したばかりのところだつた。伯父は大佐で近衞の何聯隊かの聯隊長をしてゐた。

『よく一人で來た。』

伯父は僕の頭を撫でて、父でもめつたにしてくれない程の可愛がりかたをしてくれた。伯母も『榮、榮』と云つて自分のそばを離さなかつた。

從兄が二人ゐた。弟の哲つあんは病氣で學

習院の高等科を中途でよして、信州の方へ養蠶の實習に行つてゐた。女中共は此の哲つあんの事を若樣と呼んでゐた。兄の良さんは中尉になつたばかりで、綺麗な花嫁のお繁さんと一緒に奥の方の離れにゐた。士官學校の教官をして、陸軍大學校の入學準備をしてゐたのだ。

女中共は僕を越後の若樣と云つた。そして僕が何かするたびに、何か云ふたびに、袂で口を蔽うては笑ひこけてゐた。お繁さんは其のたびに美しい目で女中共をにらみつけてゐたが、やはり其の可笑しさを隱しきる事は出來なかつた。

洋食の御馳走が出た。越後の若樣はどうしてそれをたべていゝか分らなかつた。新發田にはまだ洋食屋もなく、家ででも洋食なぞをたべた事がなかつた。で、皆んなのする通りにビフテキか何んかを漸くの事でナイフで切つて、それを口に入れたが切りかたが大きすぎたので口の中で一ぱいになつて、どうともすることが出來なかつた。皆んなは笑つた。そしてお繁さんだけは、いつまでもいつまでも、僕の顔を見ては思ひ出すやうにして笑つてゐた。

僕はお繁さんを日本で一番の美人だと思つた。お繁さんの姉さんも綺麗だつた。そして此の姉さんは、田中と云ふ騎兵大尉の、陸軍大學校の學生のところに嫁いでゐた。

僕は來年は必ず幼年學校の試驗に及第してうんと勉強して陸軍大學校にはひるんだときめた。

お繁さんの里の、板倉の末川と云ふ家へも行つた。山田の家の心地よさに醉うてゐた僕は、末川家の更に幾倍もの贅澤に少々驚かされた。

家は上と下とに二軒あつた。下は妾宅、上は本宅だつた。長男が一人本妻の子でしかもそれは馬鹿で、あとは皆な男も女も綺麗な、もと烏森とかにゐたとか云ふ妾の子だつた。お繁さんも其の姉さんも勿論此の妾の子だつた。お繁さんの下にもまだ女の子が二人ゐた。そして下の家には妾とそれらの女の子とだけがゐた。皆んなは其の妾を、自分のほんたうのお母さんを、繁ちやんと呼んでゐた。

食事時には、ふだんは男ばかりゐる上の家へ皆んなが集まつた。僕も行けばきつと此の上の家の、西洋室の應接間にはひつて、ソファの上に横になつてゐた。

僕は此の家で始めて電話と云ふものを知つた。又、お繁さんの姉さんの所で始めてピアノと云ふものの音を聞いた。僕は此の家の皆んなが、其の綺麗でそしてお上品な中に、どこかしら冷たいものを持つてゐる事に氣がついた。が、それでもやはり、其の贅澤な生活を味ひに、時々遊びに行かない譯には行かなかつた。

末川家は鹿兒島の家老の家柄で、其の主人はもと海軍の主計監とかをしてゐたと聞いた。そして其頃は實業に關係してゐたやうだつた。山田家では最初此の家との縁談があつた時、妾の子ではと一時躊躇したのださうだが、川村大將とか高島中將とかが中にはひつて、無理にもらはして了つたのだとかと聞いた。其後、今の皇太子や皇子達が川村大將の家にゐた頃、良さんの子供等はよくそこへ遊びに行つて、熊だの象だののおもちやをもらつて來た。

良さんは今少將でどこかの旅團長を勤めてゐる。そしてお繁さんの姉さんの方の田中は、中將になつてワシントンの太平洋會議に陸軍代表の主席として出てゐる。ついでに云ふが、山田の伯父は、とうに中將で豫備になつて、今は和歌山に隱居してゐる。

名古屋と大阪とでは、名古屋では父方の親戚

を、大阪では母方の親戚を歩き廻つた。が、其のどちらでも、商業や農業ばかりなので、そしてつましい家ばかりなので、一向面白くなかつた。そして直ぐ東京に歸つて、一ケ月あまり遊んでゐた。

六

その旅行は僕に金を使ふ事を覺えさした。それまで僕は、小遣錢と云ふものは一文ももらつた事がなく、いるものは何んでも通で持つて來たのであつた。しかしもうそれでは濟まなくなつた。

中學校は新發田から五十公野へ行く途中の、長い杉並木の間に新しい校舍が出來た。そして其の並木路の入口にある小料理屋の蛇塚屋と云ふのが、僕等不良連の間にスネエクと呼ばれて、皆んなの遊び場でもあり又いろんな惡事の本據地でもあつた。皆んなはよく學校をエスケエプしてはそこへ行つた。

僕は母の財布から金を盜み出す事を覺えた。母はいつも財布をどこかへ置きつぱなしにしてゐた。そしていり用のたびにあちこちとそれを探してゐた そんな風で、自分の財布にいくらはひつてゐるのかもよくは知らなかつたやうだつた。僕はそれをいゝ事にして、二三十錢から五十錢くらゐまでをちよい／＼と盜んだ。

が、だん／＼、そんな事ではとても追つつかなくなつた。そしてたうとう僕は父からもらつた時計を賣つて了つた。それは父が長い間持つて居た、銀側の大きな時計で、鍵を眞ん中の穴に入れてギイ／＼と廻す、ごく古い型のものだつた。

それがどうしてか母に知れた。

「時計を持つてお父さんのお室へおいで。」

僕は持つて行く時計はないのだから、仕方なしにたゞうんと叱られる決心だけを持つて、父の室へ行つた。

父の裁判がはじまつた。僕は賣つたと答へた。が、其の金の行方に就いては、どうしてもはつきり云ふ事が出來なかつた。それは、若しスネエクの事を云へば、そこでいろんな惡事、殊に例の義兄弟の事などが知れる恐れがあつたからだ。

僕は父と母とにうんと責められた。うんと叱られた。しかし、云へない事はやはりどうしても云へなかつた。

其の冬、次の不良連の親分の、其頃の最上級の四年と三年とのものから一大事を聞いた。それは三好校長が組合會議から排斥されて、不信任案の決議をされると云ふ事だつた。

僕等の中學校は、新發田町外四十何ケ村の組合立で、其の組合の會議と云ふのがあつたのだつた。此の組合會議が、往々其の職分の經營の事を超えて、教育方針にまで差出口をすると云ふ事は聞いてゐた。そして其のたびに校長がそれを峻拒したと云ふ事も聞いてゐた。

僕等は組合會議がどんな差出口をしたのかも少しも知らなかつた。又、其の不信任案と云ふものの内容も少しも知らなかつた。そして又、其の間にわだかまるいろんな事情と云ふやうな事も少しも知らなかつた。が、とにかく組合が不埒だときめて了つた。そして校長擁護の一大運動を起す事にきめた。

翌日直ぐ、長徳寺と云ふのに學年大會が開かれて、二年三年四年の全生徒は校長と運命を共にすると云ふ滿場一致の決議をした。一年生はまだ何んにも譯が分らんものとして、わざと仲間に入れなかつたのだ。

此の騷ぎは學年試驗を前に控へて一ケ月ばかり續いた。そして最初の同盟休校と云ふのが同

盟退校の決議にまで進んだ。

もうこんな學校に用はないと云ふので、ガラス戸は滅茶苦茶にこはされた。そして生徒控室にあつた机や椅子は、殆んど全部火鉢の中のたき木になつて了つた。

或る先生は、組合と内通してゐると云ふので、夜、車で練兵場を通るところを袋たゝきにされた。

或日父と母とは茶の間の火鉢のそばへ僕を呼んだ。

「此頃お前はちつとも學校へ行かんで騷いでゐるさうだが……」

父の話は、組合から生徒の父兄に送つて來たものによつて、多少校長を非難して、明日からでも學校へ出ろと云ふやうな事であつた。

『いやです。』

僕はたゞ一言さう云つたきりで、席を蹴つて起ちあがつた。

『あの子は一たん何か云ひだしたら、何があつても聞かんのですから、どうぞ其儘にはふつて置いて下さい。』

母はしきりに父をなだめて、懇願してゐるやうだつた。

しかし此の騷ぎは、組合で不信任案を取消すと云ふ事と、校長が辭職すると云ふ事とで治まつて、生徒は校長の懇請で漸く學年試驗を受ける事になつた。

三好校長は深田教頭と一緒に、長野の中學校へ行く事となつた。其の送別會が仲町の何んとかと云ふ料理屋の廣間で開かれた。校長は大酒家であつた。皆んなに一合ばかりの酒がついた。校長は始めから終りまで其の四角な顏をにこにこさせてゐた。教頭はお得意のいゝ聲で、其の郷里の白虎隊の詩を吟じた。

そして校長がいよ〳〵出發する時には、全校三百餘の生徒が、校長の橇を眞ん中にして降り積る雪の中を七里の間、新潟まで送つて行つた。

其のあとへ、廣田一乘と云ふ、名前から坊主臭いしかしハイカラな新しい文學士が來た。が、此の新校長は、來る早々校友會の席上で記憶術の實驗か何かをやつて、却つて生徒の評判を惡くして了つた。そして、生徒が皆な素足ではひる習慣になつてゐた、御眞影を安置してある講堂へ、校長が靴ばきのまゝはひつたとか云ふので、危く排斥運動が起りかけさへした。

其の春、僕は二度目の幼年學校の入學試驗を受けた。

そして其の最初の日に、もう少しで身體檢査ではねられるところだつた。去年はよく見えた檢査の符號のやうなものが、下の二三段のほかは皆なぼんやりして、上があいてゐるのか下があいてゐるのかよく分らなかつた。

若い軍醫は首をかしげて奧の方の室へはひつて行つた。そして、僕が子供の時から何かの病氣の際にはいつも世話になつてゐた、平賀と云ふ二等軍醫を呼んで來た。

「これはことしはどんな事があつても入れなけやならないんだ。」

平賀軍醫はさう云ひながら、僕の目の檢査をし直した。そして暗室へ連れて行つたり、いろんな眼鏡をかけさして見たりして、要するに合格にして了つた。

學科の方は別に何んの勉強もしなかつたのだが、高等小學校程度の試驗なんだから、やすやすと出來た。

そして官報で及落が發表される少し前に、山田の伯父から、

『サカエガフカクシュクス』と云ふ電報が來た。

四　幼年學校時代

一

幼年學校は、東京に中央幼年學校といふのがあつて、そして、當時の六個の各師團司令部所在地に地方幼年學校といふのがあつた。中央は本科で地方は豫科だ。或る師團、たとへば第一師團の管轄に本籍を持つてゐるものは、其の師團司令部所在地の、即ち東京の地方にはひつた。そしてそこで三年間謂はゆる軍人精神を吹つこまれて、各地方のものが皆んな東京の中央に集まるのだつた。

僕は僕の本籍地の名古屋の幼年學校にはひつた。

父は、後に僕が社會主義者になつたのを、僕のフランス語のせゐにしてゐた。フランスは革命の國だと云ふごくぼんやりした理由からだ。僕もそれは、もつと細かなそしてもつと込みいつた理由から、部分的に承認する。が、僕の其のフランス語と云ふのは、此の幼年學校で、しかも命令的にはじまつたのだつた。

東京の地方にはフランス語とドイツ語とがあつた。が、其他の地方には、フランス語とドイツ語とロシア語とがあつた。そして入學志願者は、其の願書の中に、其の中のどれか一つを希望語學として書き入れて置くのだつた。

僕は、フランスはもう舊い、これからは何んでもドイツだと云ふので、ドイツ語を選んだ。そして、父を覺束ない先生にして、一ケ月ばかりかゝつて、たしかヘステルの第一讀本をあげてゐた。

名古屋へ行く途中、東京で、一二年前から上京してゐた大久保を訪ねた。彼れも去年は落第して今年は東京の地方に及第したのだつた。彼れもやはりドイツ語を希望してゐた。そこへ、熊本の地方の先輩である石川が、休暇で東京に遊びに來てゐて、一緒に落ち合つた。彼れはやはりドイツ語で、しかもそれが非常にお得意らしかつた。彼れはフランス語をさん〳〵にけなした。大久保と僕とは、何が書いてあるんだかちつとも分らない龜の子文字の彼れの本をいぢくり廻しながら大いに彼れをうらやんだ。

が、學校にはひつた其の日の第一番目の出來事は、五十名の新入生が擊劍場でせいの順に並ばされた事で、そして其の次ぎがそれに續いて直ぐ皆んなの語學を決定された事であつた。希望者はフランス語よりもドイツ語の方が遙かに多かつた。そして學校の方針はそれを公平に二分する事であつた。即ち五十名の新入生を二十五名づつそれ〳〵ドイツ語とフランス語とに分けることであつた。

「尤も、今までドイツ語をやつてゐたものは、希望通りドイツ語をやらせる。しかしそれは、單にアベチェを知つてゐるとか、エス・イスト何んかを知つてゐるとか云ふんでは駄目だ。試驗をする。」

せいの高い、胸とお尻のうんと張り出た、ドイツ士官のやうな大尉が、左の手を其のお尻の上に乘せ、右の手でねぢ上つた髭を更にねぢ上げながら、其のエス・イスト何んとかと云ふのを非常に流暢にやつた。此のエス・イスト組は僕の外にも五六人あつたやうだつた。が、皆んな『試驗をする』と云ふのにおどかされて默つて了つた。そして其の大尉は、恐らくは氣まぐれに、直ぐ其場でドイツ語とフランス語の二組をつくつて了つた。

僕の名はフランス語の方にあつた。僕はがつかりした。しかし、命令でさうきめられて了つ

た以上は、もうどうともする事が出來なかつた。それに、元來語學の好きな僕はフランス語も直ぐに好きになつた。そして、他の科目はすべて中學校でやつた事の復習のやうなもので、僕は此のフランス語に全力を注いだ。

本はアメリカで出來たフレンチ・ブックとか云ふので、英語でフウト・ノオトがついてゐた。僕はまだ碌に發音も出來ないうちから、其のノオトと大きな佛和辭書と首つ引きで、一人で進んで行つた。そして二學期か三學期かの始めに、原書の辭書を渡されてからは、先生の云ふ通りに分つても分らんでも其の原書の辭書ばかり引いてゐた。先生は又、此の辭書と同時に、向うの子供雜誌の古いのを折々分けてくれた。『分つても分らんでもいゝ、とにかく讀んで行け』と云ふのが先生のモットオだつた。僕は忠實に貰つた雜誌の始めから終りまで讀み通した。ちつとも分らんのを二度も三度も讀み通した。そして、さうかうしてゐる間に、原書の辭書の方もいゝ加減分るやうになり、子供雜誌も當てずつぽうに判讀するやうになつた。

學校にはひつた幾日目かの最初の土曜日に、それまでいろんな世話をしてくれた三年の或る生徒から、あしたは『國』の下宿に集まるやうにと云はれた。

元來僕には此の『國』と云ふ感念が少しもなかつた。讃岐の丸龜に生れてそこを少しも知らず、尾張に本籍があつてそこも碌に知らず、そして『國』と云ふやうな言葉も餘り聞いた事がなかつた。今までゐた新發田では、殆んど皆んなが新發田か或は其の附近の人であつた。僕はそれ等の人と一緒に自分を北越男子などと云つてゐた。しかし其の越後に對しても『國』と云ふやうな感じはまるでなかつたのだ。

で、此の『國』の下宿と云ふのも、よくは其の意味が分らなかつた。しかし、上官の云ふ事、古參生の云ふ事はよく聞かなければならないとは、何よりも先きに敎へられた事であつた。そして此の古參には、敬禮は勿論の事、ちよつと物云ふのでも不動の姿勢をとらなければならなかつたのだ。僕は氣をつけの姿勢の儘『ハア』と答へた。

『國の殿樣がつくつてくれたんで、皆んな日曜日にはそこへ行つて遊ぶんだ。』

其の古參生は僕が堅くなつてゐるのを慰め顏に云つた。が、僕には又、此の『殿樣』と云ふのが妙に響いた。これも感情の字引の中にはない言葉だつた。なるほど新發田には殿樣があつた。殿樣と云ふ言葉もよく聞いた。が、其の言葉の中に盛られてゐる感謝や崇拜の感じは、少しも僕に移つて來なかつた。そして一二年前に、何んとか三十年祭とか云ふんで、其の殿樣夫婦が東京からやつて來た時、僕は彼等の通つたあとの麝香か何かの馬鹿に強い香に鼻をつまんだ。其のいやな感じがあるだけだつた。しかし其の殿樣のお蔭で、日曜日の遊び場があると云ふのは、うれしかつた。

其の下宿と云ふのは學校から近い或るお寺だつた。其の本堂の廣間に古參生と新入生と四五十名集まつた。

『君等は先づ國の者同士の堅い團結を形作らなければならない。そして其の團結の下に將校生徒としての本分を發揮して行かなければならない。斷じて他國のものの辱かしめを受けてはならない。』

山田と云ふ、小作りのしかし巖乘なからだの、左肩を右肩よりも一尺も上にあげた男が『訓戒』し出した。僕はそれを聞きながら、新發田で僕が一番えらいと思つてゐた不良連の首領の、井上と云ふのを思ひ出した。そして『こゝにも仲間がゐるな』と僕は直ぐ感じた。

山田の『訓戒』も、それに續いたまだ四五人の『訓戒』も、要するに皆な此の『斷じて他國のものの辱かしめを受けてはならない』と云ふ事に歸着した。第一期生卽ち當時の三年生は、愛知縣人と石川縣人とがいづれも十名ばかりづつで互に覇を爭つて來た。第二期生では愛知縣人の方が少し數が殖えた。そして僕等の第三期生では、愛知縣人卽ち國の者が二十六名と云ふ絕對多數を占めたのであつた。が、頭數が殖えたからと云つて、油斷は出來ない。又、こんなに多い頭數をかゝへてゐて、それで負けては猶更見つともない。そこで團結を堅くしなければならない、と云ふんだ。

僕は何んで石川縣人と愛知縣人とがさうして爭はなければならないのかは分らなかつた。しかし、誰れ一人知つてゐるもののない中にはひつて、かうして『國の者』と云ふ特別な友人が直ぐ出來たのは、何よりもうれしかつた。そして此の友人等の敵になる石川縣人が譯もなく憎らしくなつた。

『訓戒』が濟むと菓子が出た。菓子屋の箱に山のやうに盛つた餅菓子が出た。それを食つて了ふと、こんどはちよつとした肴に酒が出た。本當の牛飲馬食だ。もと〳〵餘り酒は飲めない僕も、皆んなの勢ひに煽られて、多少の盃を重ねた。そして山田等の詩吟につれて、皆んなの驚きのうちに『宗次妙齡佳成童』などと吟じ出した。それで僕はすつかり山田等の『仲間』になつて了つた。

二

第一期生は、最初の後輩である第二期生に對しては、隨分ひどくいぢめた。が、第三期生の僕等に對しては、隨分あまくしてくれた。そして僕は、多分そんなのは僕一人だつたらうと思ふが、直ぐに此の先輩から『仲間』として可愛がられるやうになつた。

最古參生たる第一期生の『仲間』には、學校の中では、どんな惡い事でも無事にやれた。たとへば煙草は、若し見つかれば、營倉物だつた。しかしそれも、彼等だけには、安全な場所があつた。國の先輩は僕をそこへ連れて行く事は最初遠慮してゐた。が、他國の先輩、殊に東京から來た先輩が、直ぐに僕をそこへ連れて行つた。

又、これは見つかれば輕くて重營倉、重くて退校の處分に遇ふのだが、夜皆んなが寢靜まつてから左翼の方の寢室へ遊びに行く事も、やはり東京から來た先輩に敎はつた。『仲間』の仕事と云ふのは、これが一番重な事だつたのだ。

此の東京から來た先輩の中には、尤も『仲間』ではなかつたが、乃木將軍の息子もゐた。からだは第一期生ぢうで一番大きかつたが、學科は一番出來なかつた。そしていつも大きな口をにやにやと微笑ましてゐた。

が、そんな『武士道の迷行』へばかりでなく、僕は又本當の武士道へもまじめに進んで行つた。何んとか云ふ文學士の敎頭が、倫理の時間に、武士道の話をした。それは、死處を選ぶと云ふ事が武士道の神髓だ、と云ふのだつた。

僕は其の話にすつかり感服した。そして僕の武士道を全うするためには、僕自身の死處を豫め選んで置かなければならないと決心した。それ以來僕は古來の武士の死にかたをいろ〳〵と研究し出した。何かの本を讀んでは、これはと思ふ武士の死にざまを、原文のまゝ寫し取つた。そして其の寫しはたしかに一卷の書物位になつてゐた。

其のいろんな死にざまの中で、僕の心を一番動かしたのは、戰國時代の鳥井强右衛門のはりつけだつた。と云ふよりも寧ろ、其のはりつけの圖に題した、誰れだかの『慷慨赴死易、從

容就死難」と云ふ文字だつた。
「よし、俺れも從容として死に就いて見せる。」
僕は腕を扼して自分で自分にさう誓つた。

やはり此の教頭の話で、もう一つ覺えてゐる事がある。それは、遼東半島還附の敕語の中の「報復」と云ふ言葉の解釋に就いてであつた。其の言葉の前後は今は何んにも覺えてない。多分「臥薪嘗膽して報復を謀れ」と云ふやうな文句だつたらうと思ふ。此の「報復」と云ふのは、表むきは何んとかの意味だが實は復讐の事だ、と云ふんだつた。そして僕は其の表むきの意味が何んであつたかは今でも思ひ出す事が出來ない程、其の謂はゆる本當の意味を有りがたがつた。

何月か忘れたが、多分初夏の頃だつたらうと思ふ。平壤占領記念日と云ふのがあつた。

僕は其日の朝飯に、始めて粟飯と云ふものを食はされた。ちよつと甘い味がしてうまいと思つた。おかずは枝豆と罐詰の牛肉が少々とだつた。名古屋の第三師團全部が、其の朝は此の御馳走だつたのだ。

當直の、前にも云つた北川と云ふ大尉が、食堂で此の御馳走のいはれを話した。平壤を占領した晩だか朝だかの、これが咄嗟のお祝ひの御馳走だつたのださうだ。

食事が濟むと皆んなは講堂に集まつた。そこには、正面に大きなアジア地圖が掛つてゐて、支那の遼東半島が日本と同じ赤い色で色どられてゐた。學校ぢうの武官と文官とが左右にならんだ。そこで今云つた教頭の「報復」の話が始まつたのだつた。

教頭の講演が濟むと、こんどは名古屋の東の町はづれにあたる、陸軍墓地へ連れて行かれた。北川大尉を始め學校の他の士官等は、其の多くの戰友の墓をこゝに持つてゐた。そして彼等は其の墓の一つ一つに就いて、其の當時の思出を話して聞かした。

「これ等の忠勇な軍人の靈魂を慰めるためにも、吾々は是非とも報復のいくさを起さなければならない。」

士官等の結論は皆な、謂はゆる三國干渉の張本であるロシアに對する、此の弔ひ合戰の要求であつた。僕等はたぎるやうに血を沸かした。

間もなく僕は始めての暑中休暇で新發田へ歸つた。

或日ふと父の机のひき出しを開けて見たら、「××」と云ふ字の印を押した、状袋が出て來た。封が切つてあるので僕は直ぐ披いて見た。それは、當時の參謀本部の總長か次長かの何んとかの×××から各師團長及び各旅團長に宛てたもので、××××××××××××××、其のつもりで將校や兵の教育をしろ、と云ふ命令風のものであつた。

僕は直ぐに指を折つて數へて見た。×××と云へば、僕がちやうど少尉になる頃の事だ。僕は躍りあがつて喜んだ。

父の机の上にはロシア語の本だの、黒龍會の何んとか云ふ雜誌だのが幅をきかしてゐた。

(が、こゝまで書いて來て、此の記憶が或は幼年學校入學以前の事でなかつたかと云ふ疑ひが出て來た。それはこれが片田町の家の、父の室での出來事であつたやうに思はれるからである。其頃から父は旅團副官をやつてゐた。幼年學校にはひる其の年か前年から、僕の家は尾上町に引越した。どうも此の尾上町での事ではなかつたやうだ。すると、ロシアに對する報復と云ふ事を敎へられた時にそれを思ひ出して、そして其の思出が却つて後の事實のやうに記

憶されて來たのかも知れない。しかし、僕が其の×××を見て、少尉になつてからの事だと喜んだのは、確かに事實である。そして僕は、此の『××』と云ふ事に就いて既に何か知つてゐたものと見えて、其の喜びを自分一人の胸の中にたゝみ込んで、嘗て誰れにも話した事がなかつた。」

三

十幾番かではひつた僕は、學年試驗の結果七八番かに席順があつた。

が、此の學科の上で席順を爭ふと云ふ事は、中學校以來僕にはまるでない事だつた。一番とか二番とか云ふ奴は、氣のきかない、糞勉强の、馬鹿だときめてゐた。『なあに、實力では遙かに俺れの方が上だ』と竊かに威張つてゐた。七八番でも十分滿足してゐた。で、學科は、前にも云つたやうに好きな語學に耽るほかは、殊更に勉强する必要もなく又碌に勉强もしなかつた。

しかし腕力とか暴力とか、又はそれに基づく勢力とかの上では最初から決して人後に落ちなかつた。尤も單なる腕力では、せいの順で右翼から十四五人目の僕は、とても一番とは行かなかつたらう。が、暴力とか勢力とか云ふ事になれば、それは大ぶ趣きが違つて來る。それに僕には愛知縣と云ふ絶對多數の背景があつた。

古參生等の『仲間』にはひつた僕には、先づ同期生等の間で傍若無人の振舞をした。僕と同じ寢室のものの中へははひりこまなかつたが、よく遊びに行つた左翼の寢室のものからは、何んの苦情も出なかつた。が、中の寢室のものの中に、中村と云ふ男がゐた。東京から來たもので、口先きばかりでなく、眞から元氣のいゝ男だつた。そいつが、僕がそいつの隣りの何んとか云ふ男のところへ遊びに行くのを、愚圖々々云ひ出した。まだ外にも二三人それに同ずるものがあつたやうだつた。或晩僕は、何かの事から其の中村を、そいつの寢室の皆んなの見てゐる前でなぐりつけた。奴は腕まくりしながら默つて、なぐられて笑つてゐた。それでそいつとは直ぐ友達になつて了つた。此の中村は其後肺を惡くして死んだ、そして其の弟の彜と云ふのが第五期にはひつて來た。西洋畫のあの中村彜君がそれだ。

又、同じ寢室で、僕よりも右翼に佐藤と云ふのと河野と云ふのとがゐた。どちらも、武揚學校と云ふ名古屋での陸軍豫備校から來たもので、其の友達が多かつた。國の名古屋のものは、大たがい其の友達だつた。中にも、僕よりも右翼にゐた濱村と云ふのと坂田と云ふのとが餘程親しかつた。其の佐藤と河野とがちよい〳〵僕に敵意を見せだした。そして濱村や坂田は、そんな時には、僕の敵だか味方だか分らん變な態度を取つた。其の中のどの一人でも僕には强敵なのに、かう多勢で組んで來られてはとても堪らなかつた。早速僕は濱村と坂田とを呼んで「佐藤と河野との二人と決鬪するが、君等の態度をはつきりきめろ」と云つた。二人は中立を誓つた。で、僕は直ぐに、先づ大きな方の佐藤を呼び出した。同期生ぢうで一番大きな男で、擊劍も一番うまかつた。器械體操場の金棒の下へ連れて行つて、そこでいきなり毆りつけた。げんこは眼にあたつた。彼はぼろ〳〵涙を流して默つて其の眼を押へてゐた。そこへ濱村と坂田とが心配して見に來た。そして二人の中へはひつた。河野は直ぐに好意を見せて來た。そして五人は、五人組をつくつて、何んでもの惡い事の協同者となつた。

四五年前に、ふと此の佐藤が訪ねて來た。子供の時の友達だと云ふので、誰れかと思つて玄

門へ出て見たら、昔のまゝのせいの高い顏一ぱい濃い髯の彼れだつた。聯隊長とかと喧嘩して豫備になつたんださうだが、今になつて止される位なら、あの時分一緒に退校されるんだつたなあなどと、職業の世話を頼みながら今の僕をうらやんでゐた。其後南米行移民の監督か何かに有りついたとか云つてゐたが、どうしたか。そしてついうつかりして、昔僕が殴つた眼の中の赤い疵のあとが、まだ殘つてゐるかどうか見落して了つた。

撃劍は佐藤の次ぎが僕だつた。器械體操は佐藤と河野と僕とが相伯仲してゐた。が、駈足は僕が一人圖抜けて早かつた。僕等の班長をしてゐた河合と云ふ曹長が、これも駈足をお得意としてゐたが、いつも口惜しがりながら僕のあとについて來た。

學科の濟んだあとで、毎日そんな遊戯をやらされてゐたが、其のほかによくフウトボオルや綱引をやつた。そして此の二つの遊びでは、班長が組を分けるのに困つて了つた。最初前列と後列とに分けた。すると幾度やつても僕のゐる前列が勝つた。で、こんどは、僕一人だけを後列の方の組に廻して見た。後列が勝つた。フランス語の組とドイツ語の組とに分けても見た。が、それでもやはり僕のゐるフランス語の方が勝つた。仕方なしに班長は「君はそばで見てゐろ」と云つて、僕を列の中から出して了つた事もあつた。

が、困つたのは游泳だつた。

最初の夏は、伊勢のからすと云ふ海岸へ游泳演習に行つた。

先生は觀海流の何んとか云ふ有名なお爺さんで、若い時には伊勢から向う岸の尾張の知多半島までよく泳いでは味噌を買ひに行つたと云ふ話のある人だつた。學校には此の伊勢出身で、觀海流の三里や五里と云ふ游泳に及第したものもゐた。殊に佐藤などは一番の名人だつた。其他にも、名古屋出身のものは大てい皆な此の觀海流を泳いだ。

子供の時からよく川遊びや海遊びはやつたが、ぼちや〳〵騒ぎ廻る外にまるで泳げなかつた僕は、實に閉口した。そして第一日目の試驗に力一ぱいで漸く二三間泳いで、一番下の丙組へ編入された。

古參生や同期生の助手達が、僕等の足頸を握つて、蛙のやうな泳ぎかたの其の觀海流と云ふのを教へた。が、僕はそれを教へられるのが癪なのと、足頸を操られるのがいやなのとで、いつも逃げ廻つては我流の犬泳ぎで泳いでゐた。

それでも一週間目の第二回の試驗には、僕は其の犬泳ぎで千メエトル泳いで、甲組にはひつた。そして二週間目の最後の試驗には、やはり其の犬泳ぎで最大限の四千メエトル泳いで、來年は助手と云ふ事になつた。

其の來年には知多半島の大野へ行つた。僕は名は助手でも、觀海流も何も教へる事は出來なかつた。そして自分の受持つた丙組の幾人かをたゞ勝手に遊ばして置いた。が、二週間目の最後の試驗の時には、其の中から一人、やはり我流の犬泳ぎで四千メエトル泳ぎ通したのが出た。それは僕が可愛がつてゐた第四期生のまだほんの子供で、途中で泣きだしさうになるのを絶えずそばから激勵して、無理やり引つぱつて行つたのだつた。そして其の子は、本當のゼロから出立してそこに到達した、其の年のたつた一人として好成績を歌はれた。

最近、汽車の中で此の男に會つたが、參謀肩章なぞをさげて立派な士官になつてゐた。はじめ僕は直ぐ前にゐるのにそれと氣がつかなかつたが、向うで名刺を出して見せて、「御存じでせ

うな』と云はれたのでやつと分つた。やはり昔のやうに、

『ハア、ハア、何んとかであります。』と上官に物云ふやうに話してゐた。其時にはまだ大尉だつたが、此頃ではもう少佐になつたらう。

四

僕の腕白は二年になつて益々ひどくなつたが、それと同時に又僕の頭を壓へる奴が出て來た。それは第一期生が出て行つたあとで始めて其の頭をあげた第二期生だつた。

僕は第一期生の『仲間』と一緒に、外套を頭からかぶつて、第二期生の左翼の寢室を襲うた事もあつた。又第二期生の『少年』をちよい／＼からかつた事もあつた。そんな事は古參生たる第二期生共には非常な憤慨であつたに違ひない。そして其の少年の一人のゐた石川縣人共が、先づ僕を目の仇にしだした。

彼等は僕の『生意氣』な事實をいろ／＼と擧げて、國の第二期生等に僕の處分を迫つた。國の第二期生には淺野といふ『仲間』の首領がゐた。が、彼れにもそれをどうともする事が出來なかつた。又、國の第二期生の中にも竊かに僕を憎んでゐる奴等があつた。其の結果僕は屢々毆られた。多勢で取り圍んで、氣をつけの姿勢をとらして置いて、ぽか／＼毆るんだ。石川縣の奴等もよくかうして毆つた。

此の制裁には一切手を出す事が出來なかつた。古參生には反抗する事が出來ないのだ。僕はたゞ倒れないだけの用心をして默つて打たれてゐた。倒れると、蹴られる恐れがある。が、げんこで毆られるだけなら高が知れてゐる。そして僕は、出來るだけ落ちついて、其のげんこの飛んで來るたびに一つ二つと腹の中で勘定してゐた。

其の勘定の出來る間は、どんなにひどく打たれても我まんが出來た。が、どや／＼と多勢が一ぺんにのしかゝつて來てどいつがどう毆るんだか分らなくなると、我まんが出來なくなつた。殊に、後ろや横から竊と蹴る奴があつたりすると、そしてこれは實によくあつたのだが、もうどうしても我まんが出來なかつた。が、氣をつけの姿勢のまゝ手出しをする事の出來ない僕は、たゞ默つてそいつを睨みつける事のほかに仕方がなかつた。

前に班長と云ふ言葉を使つたが、これは下士官で、生徒監の士官を助けて、生徒の監督をしてゐた。それが一級に曹長一人と軍曹一人とゐた。

河合曹長は僕を可愛がつて、大がいの事は大目に見てくれた。よくいろんな犯行を見つけたが、いつも大きな聲で怒鳴るだけで、めつたにそれを生徒監に報告する事はなかつた。

が、間もなく此の河合曹長が轉任になつて、何んとか云ふばかに長つ細い曹長が來た。此の曹長はよく妙な手帳をひろげては、自習室を廻つて皆んなの顏とそれを見くらべてゐた。或時僕は竊と其の手帳をのぞきこんで見た。そこには、勇敢とか粗暴とか寛仁とか卑劣とか云ふやうな言葉がならんでゐて、其の下に二三行づつ其の說明らしい文句がついてゐた。曹長はきつと、此の手帳の中にある二字づつのどれかの言葉によつて、皆んなの性格をきめてゐたのだ。

曹長は來ると直ぐ僕を變な目で見だした。又此の曹長が來ると同時に、それまで僕等が坊ちやん軍曹だとかガルソン軍曹だとかあだ名してゐた程おとなしかつた、もう一人の班長の稻熊軍曹が、急に意地惡くなり出した。そして二人で僕のあとを嗅ぎ廻つては、何やかと生徒監に報告した。

其の結果は殆んどのべつ幕なしの外出止めとなつた。一週間にたつた一日の日曜の外出を止められるんだ。それも、汚れた靴下を戸棚の奥に突つこんであつたとか、晝寝臺に腰かけてゐたとか、其他、今ちよつと思ひ出せないやうな馬鹿々々しい事ばかりでだ。

二階の僕等の寢臺の向ひに下士官等の室があつた。僕等はよくそこへ、煙草がなくなると、夜盗みに行つた。夜は週番の下士が一人其の下に寢てゐた。

或日、皆んなの煙草が切れて了つた。河野が一番に盗みに行つた。其の次に僕が行つた。が、僕は其の室へはひつて行つて机の引き出しに手をかけた時、『コラ』と云つて捕まつて了つた。それは週番の稻熊軍曹だつた。

僕は當直の生徒監の室へ引つぱつて行かれた。

『實は數日前から、尤も其の以前にもちよいちよいあつたのですが、下士室で皆んなの煙草がよくなくなりまして、殊にきのふは私の金が少々なくなつたのです。で、けふは是非其の犯人を取りおさへようと待ち構へてゐましたが、果して此の大杉が室へ忍びこむのを見まして、今取りおさへて來ました。』

軍曹は勝ちほこつたやうにして吉田中尉に報告した。中尉は僕等第三期生の受持で、國の出身で、そして僕を可愛がつてゐた唯一の士官だつた。中尉は青くなつた。そして軍曹には詳しい報告書を書いて來るやうにと云つて、其の出て行つたあとで僕を訊問し出した。

『煙草なぞ盗つた事はありません。金も勿論の事です。けふはズボンのボタンが一つなくなつたので、今晩ぢうにつけて置かうと思つてそれを取りに行つたのです。』

僕は飽くまで泥棒の事實は否認した。

『其のズボンと云ふのはどのズボンか。』

『今はいてゐる此のズボンです。』

僕はさう云つて、軍曹に引つぱられて來る途中に豫め引きちぎつて置いた、ボタンのあとを見せた。

『うん……』

中尉はかうらなづいたまゝ暫く默つて何か考へてゐた。金でも煙草でも、とにかく盗んだとあれば、勿論退校だ。又、單にボタンを取りにはひつたとしても、夜無斷ではひるべからざる室へはひつたのだから、重營倉は免れない。それに、たゞさうとして處分して置いても、下士からの報告の嫌疑は免れない。それでは本人の將來にもかゝはる。又自分の責任にもなる。

中尉は軍曹を呼んだ。そして斯う云つた其の考へを、僕にも聞かせるやうにして話して、本人の將來のために其の報告書を破つてくれないかと賴むやうに云つた。

軍曹は不承々々に承知した。

が、それ以來軍曹や曹長の目は益々僕の上に鋭くなつた。

五

第二期生附の何んとかと云ふ中尉は、自分の受持でない僕に對しては、殆んど無關心だつた。が、第四期生附の北川大尉は、其のまだ第一期生附であつた頃から、妙に僕を憎んでゐた。

學校の前庭で彼れに會ふ。僕は其頃の停止敬禮といふのをやる。一間ばかり前で止つて、擧手の禮をするのだ。すると彼れはきまつて暫く僕を睨みつけて、帽子のひさしに當てた指先の位置がどうの、掌の向けかたがどうのと、何かの小言を云つた。そしてうまく上衣かズボンのボタンでもはづれてゐるのを見つければ、直

ぐ其の次ぎの日曜日は外出止めと來た。又、めづらしく今日は外出が出來ると喜んでゐると、銃器の檢査だとか清潔檢査だとか觸れて寢室にはひつて來て、銃の手入が足りないとか靴に埃がかゝつてゐるとか云つて、折角服まで着換へてゐるのを外出止めにした。

　或日大尉は、夕飯の時に、けふの月は上弦か下弦かと云ふ質問を出した。

「大杉！」

　僕は自分の名を呼ばれて立つた。それが下弦だと云ふ事は勿論僕は知つてゐた。けれども僕には、其の『か』と云ふ音が、どうしても出來なかつた。吃りにはか行とた行、殊にか行が一番禁物なのだ。況んや、更に其の下にもう一つか行の『げ』が續くのだ。

『上弦でありません。』

　仕方なしに僕はさう答へた。

『それでは何んだ？』

『上弦でありません。』

『だから何んだと云ふんだ？』

『上弦でありません。』

『だから何んだ？』

『上弦でありません。』

『何？』

『上弦でありません。』

　問ひ返されゝば益々言葉の出て來ない僕は、軍人らしく卽答するためには、どうしてもさう答へるより仕方がなかつた。それを知つてゐる皆んなはくす／＼笑つた。

『よろしい、あしたは外出止めだ。』

　大尉はさう云ひ棄てて、『直れ！』の號令で皆んなが直立不動の姿勢をとつてゐる間を、さつさと出て行つて了つた。

　吃りの事のついでに、僕の吃りをもう少しここに書いて見よう。

　母はそれを小さい時に大ぶひどくわづらつた氣管支のせゐにしてゐた。が、父方の親戚に多勢吃りのある事は前にも云つた。生れつきの吃りであつたらしい。そして小學校の頃には半分啞のやうだつた事を記憶してゐる。その吃るたんびに母に叱られて毆られた事もやはり前に云つた。

　父はそれを非常に心配して『吃音矯正』と云ふやうな藥や本を何かの廣告で見ると、きつとそれを買つて來て僕にためして見た。が、いつも其の效は少しもなかつた。

　から云ふとよく人は笑ふが、僕にはごく内氣な、恥かしがりのところがある。ちよつとした事で直ぐ顏を赤くする。人前でもぢ／＼する。これも生れつきではあらうと思ふが、吃りの影響も決して少なくあるまいと思ふ。又、云ひたい事がなか／＼云へないので、じり／＼する。いら立つ。氣も短かくなる。又、人が何か笑つてゐると、自分の吃るのを笑つてゐるのぢやあるまいかと直ぐ氣を廻す。邪推深くなる。と云ふやうな精神上の影響が可なりあるやうに思ふ。

　が、もう一度北川大尉の話にもどる。

　或晩、學校の直ぐ裏の裁判所から火事が出た。僕等は不時呼集の訴へるやうな喇叭の聲で目がさめた。學校の敎室と塀一つ隔てて隣り合つた登記所が燃えてゐた。

　三年生は直ぐポンプを出して消防に當つた。

　二年生はあちこちの警衛に當つた。

　當直の北川大尉は、それ／＼の命令を終ると、『大杉！』と僕を呼んで、更に五人組の他の四人とほかに一二名呼んで、直ぐ御眞影を前庭へ持ち出して、其の警護をするやうにと命じた。僕等はそれを非常な光榮と心得て、喜んで飛んで行つた。

そこへ、暫くして不時呼集で駈けつけた何んとか云ふ聯隊長が來て、僕等の立つてゐる植込のそばで小便をしようとした。

『聯隊長殿、こゝに御眞影があります。』

僕は大きな聲で怒鳴りつけた。聯隊長は恐縮して、敬禮して、立ち去つた。僕等は非常に緊張した心持で、朝まで其の御眞影のそばに立ち盡した。そして僕は、其の間、北川大尉に對するふだんの反感をまるで忘れてゐた。

又、其後、と云つても僕が幼年學校を退校した後の事であるが、僕よりも一年上だつた田中と云ふ男が、喧嘩で中央幼年學校を退學させられて、僕の下宿にたよつて來た。田中は北川大尉と同國の伊勢だつた。田中のおやぢさんは心配して北川大尉を訪ねた。

『大杉と一緒にゐるんですか。それならちつとも心配は要りません。』

田中のおやぢさんは、大尉の此の言葉で安心して、息子のところへ學費を送つて來た。

僕は田中のおやぢさんの此の手紙を見た時、どう云ふつもりなのか、北川大尉の氣持がちつとも分らなかつた。

下士官共の僕に對する追窮は益々殘酷になつた。そして遂に、もう一度、あぶないところで退學されかゝつた。

四月の中ば頃に、全校の生徒が修學旅行で大和巡りに出かけた。奈良から橿原神宮に詣でて、雨の中を吉野山に登つて、何んとかと云ふお寺に泊つた。第二期生だけがほかの宿で、第四期生と僕等とが一緒だつた。

修學旅行や游泳演習の時には、それが殆んど毎晩の仕事であつたやうに、『仲間』のものは左翼や下級生の少年を襲うた。其晩も僕等は、坂田と一緒に、第四期生の寢室に押しかけた。

其の途で僕は、稻熊軍曹が其の室のふすまの隙間から、僕等を窺つてゐるやうなのを感じた。が、さうした場合によく、なるやうになれと云ふ氣になる僕は、構はず目ざす方へ進んで行つた。

暫くすると、廣い室の向うの障子が少し開いて、そこから軍曹らしい顔が見えた。僕は或る少年の×××××××××ゐたところであつた。軍曹の顔が引つこんだ。まだ其の邊をうろついてゐたらしい坂田は、急いで反對の方の側の障子から逃げた。僕は默つて軍曹の引つこんだあとを見てゐた。

軍曹は曹長を連れて來た。そしていきなり僕を引つぱつて行つた。

其晩はそれつきりで何んの事もなく過ぎた。

翌日は多武峯を裏から登つて、向うの麓の櫻井に降りた。僕等は同期生の右翼だけでそこの小さな宿屋に泊つた。おはちを三度ばかり代へさせたりして大いに騷いだ。が、まだ何んの事もなかつた。僕等は處分なしかなとか、學校へ歸つてからだらうとか話しあつてゐた。

其の翌日は長谷の觀音から三輪神社に出た。そして此の三輪神社の裏の森の中で、たうとう來なければならない事が來た。校長の山本少佐が、全生徒に半圓を畫かせて、嚴かに僕に對する懲罰の宣告を下した。罰は、重營倉十日のところ、特に禁足三十日に處すると云ふのだ。

六

僕は此の懲罰がどうしてあんなに僕を打擊したのかよく分らない。僕は生れて始めて、そして恐らく絕後であらうと思ふが、本當に後悔した。三十日間の禁足を殆んど默想に暮した。そして從來の生活を一變する事に決心した。

先づ煙草をよした。そして、今まで暴れ廻る事に費してゐた休憩時間を、多くは前庭の植

物園で暮した。

學校の前庭は、半分が器械體操場で他の半分が立派な植物園だつた。溫室も大きいのが一つと小さいのが一つとあつた。そして其の間に、僕等が「天文臺」と呼んでゐたものが立つてゐた。實際そこには、氣溫、氣壓、風力、雨量などを計る可なり精巧な器械や、地震計などが備へつけられてあつた。

中學校の三四年程度までしかやらない初等學校で、こんな設備のあるのは、恐らくは今でも他にはあるまいと思ふ。だが、この設備は、生徒のためではなくつて先生のためのものだつたやうだ。博物と理化の先生が校長とよく知つてゐて、最初學校を建築する時に、其の先生が設計したのだと云ふはさがあつた。先生は一人の若い助手と一緒に、いつも、やはり此の學校の分には過ぎた立派な設備の理化學實驗室や此の天文臺や植物園で暮してゐた。が、生徒にそれを利用する事は少しも敎へなかつた。そして僕等が學校を出てからどこかから其の非難が起つて、此の天文臺は師範學校とかへ賣られて了つた。

僕は此の植物園の中を、小さな白い板のラテン語の學名や和名などを讀みながら、歩き暮した。そして絶えず今までの生活を顧みながら考へてゐた。

此の反省は更に、僕を改心と云ふよりもほかの、他の方向へ導いて行つた。

それは僕が果して軍人生活に堪へ得るかどうかと云ふ事であつた。吉野事件では、將校會議で僕の退校處分を主張した士官もあつたさうだが、そして北川大尉の代りに來た國の津田大尉と受持の吉田大尉とのお蔭で漸く助かつたのださうだが、實際僕は退校する方がいゝのぢやあるまいかと考へだした事だ。

下士共の僕に對する犬のやうな嗅ぎまはりは、僕の改心に何んの頓着もなく續いた。そして時々やはり、何かの落度を見つけた。僕は先づ、果して此の下士共の下に辛抱が出來るかと思つた。彼等を上官として、其の下に服從して行く事が出來るかと思つた。尊敬も親愛も何んにも感じてゐない彼等に、其の命令に從ふのは、服從ではなくして盲從だと思つた。

そして此の盲從と云ふ事に氣がつくと、他の將校や古參生に對する今までの不平不滿が續々と出て來た。

僕は始めて新發田の自由な空を思つた。まだほんの子供の時、學校の先生からも遁れ、父や母の目からも遁れて、終日練兵場で遊び暮した事を思つた。

僕は自由を欲しだしたのだ。

かうした氣持は又讀書によつても餘程誘ひ出された事と思ふ。

學校では、學校で渡す教科書や參考書のほかは、一切讀書を嚴禁してあつた。しかしいろんな書物が竊かに持ちこまれた。

もう人の名もよくは覺えてゐないが、たとへば大町桂月とか鹽井雨江とか云ふやうな當時の國文科出身の新進文學士や、久保天隨とか國府犀東とか云ふ漢文科出身の新進文學士が、切りに古文もどきや漢文もどきの文章を發表した時代だ。僕はそんなものを切りに耽讀した。

僕が今こゝに鹽井雨江と云ふ名を擧げたのは、其の人の何んかの文章の中に『人の花散る景色面白や』とあつたのが、當時の僕の讀んだものの中で今でも覺えてゐるたつた一つの文句だからである。誰れの何がどんな影響を僕に與へたかは何んにも記憶しない。

しかし多分、それらの本の中には、恐らくは幼稚なしかし自由で奔放な、ロマンティズムが

流れてゐたのではなかつたかと思ふ。

そんな讀書の影響であらうが、僕も其頃から擬古文めいたものを書いてゐた。これは三年になつてからの事であるが、離宮拜観記と云ふものを書いて、四宮憲章と云ふ漢文の先生から、『才多からざるに非ず、文巧みならざるに非ず、只だ柔弱、以て軍人の文とす可らず』と云ふ批評を貰つた事を覺えてゐる。其の文句まで覺えてゐるところを見ると、其の前半がきつと餘程のお得意で、そして後半が餘程の不平だつたのだらうと思ふ。

が、二年の時の何んとかと云ふ國語の先生は、僕の此の『才』を大いに愛してくれた。そして或る雪の日の作文の時間に、こんな日の練兵は『豪快』でもあらうが、しかし又何んとかでもあらうと云つて、其の何んとかと云ふ熟字を教へてくれた。僕は早速僕の文章の中に其の熟字を使つた。

それから數日して、僕は生徒監に呼ばれて、本當にさう思つたのかと尋ねられて、よし本當でもそんな事は書くものではないと叱られた。あとで聞くと、先生もそんな字を教へるんぢやないと叱られたさうだ。

僕は先生の家へ一二度遊びに行つた。先生はさうした×××しさや、先生が判任官なので曹長や軍曹等と一緒に食事しなければならない事などを、切りにこぼして聞かした。

『君はいゝ時に出た。僕もたうとう出されちやつたよ。何か仕事はないかね。』

其の後五六年たつて、ふと駿河臺あたりで先生と出會つた時、先生はさびしさうに笑ひながら云つてゐた。

其の夏僕は、訓育(實科)では未曾有の十九點何分(二十點滿點)で一番、學科では十八點何分で二番、操行ではこれ又未曾有の十四點何分で下から一番、平均して三十五番か六番かと云ふ成績表を持つて、今までの僕にはなかつた陰鬱な少年となつて新發田へ歸つた。そして此の陰鬱は其後隨分長い間僕につきまとつた。

七

僕を佐渡へ旅行にやつたりして私かに慰めてゐてくれたらしい父は、僕が又名古屋へ歸る前の晩に、始めて一晩ゆつくりと僕の將來を戒めた。母は何んにも云はずに、大きな目に涙一ぱい浮べてそばで聞いてゐた。僕はそれで多少氣をとり直して新發田を出た。

が、東京に着くとフランス語のある中學校の、學習院と曉星中學校と成城學校との規則書を貰ふ事は忘れなかつた。そして別に東京遊學案内と云ふ本をも買つた。

まだ其時には幼年學校を退校する決心はなかつた。もう自由を欲するなどと云ふはつきりした氣持ではなく、たゞ何んとなく憂鬱に襲はれて仕方がなかつたのだ。そしてぼんやりとそんなものを手に入れて、それを讀む事によつて輕い夢のやうな滿足を感じてゐたのだ。

學校に歸つてからも、暫く、そんな憂鬱な氣が續いた。そして一人で、夜前庭の植物園の中のベンチに腰をかけてしく／＼泣いてゐるやうな事も屢々あつた。

が、直ぐにこんどは、兇暴な氣持が襲うて來た。鞭のやうなものを持つては、第四期生や新入の第五期生をおどして歩いた。下士官共にも反抗しだした。士官にも敬禮しなくなつた。そして無斷で學科を休んでは、一日學校のあちこちをうろつき廻つてゐた。

軍醫は腦神經衰弱と診察した。そして二週間の休暇をくれた。

學校の門を出た僕は、以前の僕と變らない、

たゞ少し何か物思ひのありさうな、しかし快活な少年だつた。そして其の足で直ぐ大阪へ行つた。

大阪には伯父が旅團長をしてゐた。僕は毎日、辨當と地圖とを持つて、攝津、河内、和泉と、所定めず歩き廻つた。どうかすると、劍を拔いて道に立てて、其の倒れる方へ行つたりもした。

そして、すつかりいゝ氣持になつて學校へ歸つた。

が、歸ると又、直ぐ病氣が出た。兇暴の病氣だ。氣ちがひだ。

其の間に、何がもとだつたのか、愛知縣人と石川縣人との間にごた〳〵が持ちあがつた。石川縣人は東京や其他の縣の有力者に助けを求めた。

其頃僕はいつも大きなナイフを持つてゐた。或時はそれでそばへ寄つて來ようとする軍曹共をおどしつけた。皆んなはそれを知つてゐるので、敵の四五名も其のナイフを研ぎだした。

夕方僕は味方の四五人と謀つて、敵に結びついた東京の一番有力な何んとかと云ふ男を、撃劍場の前へ呼び出した。彼れは來ると直ぐナイフを出した。味方の四五名は後しざりした。僕はナイフを出さうかと思つて一たんポケットに手を入れたが、思ひ返して素手のまゝ向つて行つた。僕の研いだばかりのナイフを出せば、きつと彼れを殺して了ふだらうと思つたのだ。

僕はナイフを振り上げて來る彼れの腕をつかまへて、彼れを前に倒した。彼れは倒れながら、下からめつた打ちに僕を刺した。

僕は全身が急に冷くなつたのと、左の手が動かなくなつたのとで、格鬪をやめて起きあがつた。彼れも起きて來て、びつくりした顔をして僕を見はつた。そこへ八九人の敵味方が來た。そして皆んな、びつくりした目を見はつて僕を見つめた。僕はからだぢう眞赤に血に染つて立つてゐたのだ。

『これから醫務室へ行かう。』

僕はさう云つて先きに立つて行つた。醫務室には年とつた看護人が一人ゐた。皆んなで僕を裸にして傷をあらためた。頭に一つ、左の肩に一つ、左の腕に一つ、都合三つだが、どれもこれも淺くはないやうだつた。

『どうだ、君が内しよで療治は出來ないか。』

僕は看護人に聞いた。

『とても駄目です。大變な傷です。』

看護人はとんでもない事をと云ふやうに顔をあげて答へた。

『それぢや仕方がない。直ぐ軍醫を呼んでくれ。』

僕はそこへ横になりながら云つた。そして彼れの名を呼んだ。

『仕方がない。二人で一切を負はう。』

僕は彼れのうなづくのを見て、そのまゝ眠つて了つた。

二週間ばかりして、僕が漸く立ちあがるやうになつた時、父が來た。

父は最近の僕の行狀を聞いて、『そんなに不埒な奴は私の方で學校に置けません』と云つて、卽座に退校屆を出して僕を連れて歸つた。

が、歸つて暫くすると、『願の趣さし許さず、退校を命ず』と云ふ電報が來た。

彼れも同時に退校を命ぜられた。

新發田にはもう雪が降り出した十一月の末だつた。

五　新生活

一

父に連れて歸られた僕は、病氣で面會謝絕

と云ふ事にして、毎日つい近所の衛戍病院に通ふほかは、もと僕の室にしてゐた離れの一室に引籠つてゐた。

此の面會謝絶と云ふ事は僕自身から云ひだしたのだが、父と母とはそれをごく廣い意味に採用して了つた。離れには八疊と六疊とあつて、奥の方の八疊は父の室になつてゐたのに、父はまるで其の室にはひつて來なかつた。母も僕の室に來る事はめつたになかつた。そして、女中共は勿論妹共や弟共にまでも堅く云ひつけて、決して離れへはよこさなかつた。

『兄さんは少し氣が變なんだからね、決して離れへ行くんぢやないよ。』

これはあとで聞いた話なんだが、母は皆んなにさう云つてゐた。そして小さな妹共や弟共は、其の恐いもの見たさに、よく竊と離れに通ふ緣側まで來ては、何かにあわててばた／＼と逃げだして行つた。

ていのいゝ座敷牢に入れられたのだ。

が、飯だけは母家の方へ行つて皆んなと一緒に食つた。皆んなは默つてじろ／＼僕の顏を見てゐるし、僕も默つて食ふだけ食つて自分の室へ歸つた。

僕の頭の中にはもう、學校の士官の事も下士官の事も、學友の敵味方の事も、何んにもなかつた。從つて又、それに附隨して起つて來る兇暴な氣持もちつとも殘つてゐなかつた。幼年學校の過去二年半ばかりの生活は、又其の最近の氣ちがひじみた半年ばかりの生活は、ただぼんやりと夢のやうに僕の後に立つてゐるだけであつた。そして其の夢がまだ幾分か僕を憂鬱にしてゐた。が、僕の前には、新しい、自由な、廣い世界がひらけて來たのだ。そして僕の頭は今後の方針と云ふ事に就いて充ち滿ちてゐた。

學校での僕のお得意は語學と國漢文と作文とだつた。そして最近では、學課は大がいそつちのけにして、前にも云つたやうに當時流行のロオマンティクな文學に耽つてゐた。そして僕は其の作物や作者の自由と奔放とかに竊かに憧れてゐたのだ。

『君等は軍人になつて戰爭に出たまへ。其時には僕は從軍記者になつて行から。そして戰地で會はう。』

僕は軍人生活がいやになつた時、よく學友等とそんな話をした。が、あながち新聞記者にならうと云ふのではなく、たゞぼんやりと文學をやらうと思つてゐたのだ。そして戰爭でもあれば、從軍記者になつて出かけて行つて、一人の花散る景色面白や』と云ふやうな筆をふるつて見たいと思つてゐたのだ。

僕は先づ高等學校にはひつて、それから大學を出ようと思つた。そして其の前に、どこかの中學校の上級にはひつて、其の資格を得なければならないと思つた。が、それには、もう英語を殆んど忘れて了つた僕は、どこかフランス語をやる中學校を選ばなければならなかつた。そして其の中學校は學習院と曉星中學校と成城中學校との三つしかない事を知つてゐた。

僕は其の夏東京で買つた『遊學案内』をひろげて見た。そしてそれらの中學校の上級にはひるためのいろんな豫備學校のある事が分つた。中學校の五年の試驗を受けるには僕の學力はまだ少し足りなかつた。で、僕は先づ上京して、どこかの豫備學校にはひつて、そして四月の新學年にどこか都合のいゝ中學校の試驗を受けようと思つた。

うちへ歸つて二三日の間に、これだけの事はすつかりきまつた。あとはもう、時機を見て、それを父に話すだけの事だ。

僕は其の時機が直ぐに來るだらう事も、父がきつとそれを承知するだらう事も、樂觀して、

默つて其の時の來るのを待つてゐた。そして終日、離れの一室に籠つて、近い將來の東京での自由な生活を夢みながら、自分の好きらひには構はずに、一人で一生懸命に、いろんな學課の勉強をしてゐた。

が、其の間にも、此のごく平靜な氣持を亂すたつた一つの事があつた。それは、母家の方がいつもよりは餘程客の出はひりが多くて、そして妙に賑やかにざわついてゐる事であつた。母は、出來るだけ僕の氣にさはらないやうに自分にも又皆んなにも勤めさせて、僕にはごくやさしくしてくれながらも出來るだけ口數は少なくしてゐる位だのに、其の顏には憂ひの暗い色よりも寧ろ喜びの明るい色の方が勝つてゐた。

そして其のお客とはしやぎ騷ぐ聲がよく離れにまで聞えた。僕はうちに何かあるんだなと思つた。そして、ふと、或日、母とお客との話の間に『禮ちやん』と云ふ言葉を聞きとめた。

『禮ちやんがうちからどこかへお嫁へ行くんぢやあるまいか。』

僕は直ぐさう直覺した。さう云へば、いろいろ思ひあたる事もある。汽車で柏崎を通過した時、見覺えのある丈の高い頰から顎に長い鬚をのばした禮ちやんのお父さんが軍服姿で立つてゐた。

『どうした。一緒に連れて來なかつたのか。』

『うん。ちよつと都合があるんで、少しのばして、親子一緒にやる事にした。』

父と禮ちやんのお父さんとの間にそんな會話が交された。僕は何んの事とも分らない、此の親子一緒と云ふのにちよつと心を動かされながら、父の大きな黑いマントで白い病衣のからだを包んで、默つて禮ちやんのお父さんを盜み見してゐた。名古屋からどこへも寄らずに、かうして汽車の中を父と二人で默つて通して來た僕には、此の會話が多少氣になりながらも、發車したあとでそれを父に問ひたゞす事は出來なかつた。

それから、いよ〳〵うちへ着いた時にも、やはりそれと關係のあるらしい或る事があつた。

『おや、一緒に連れて來なかつたんですか。』

僕等の俥が玄關に着いた時、あわてて出て來た母が、父と僕とを見てがつかりしたやうな風で云つた。僕のほかに父が誰れを連れて來る筈だつたのか、其時には、僕はこれと柏崎での事とを結びつけて考へる事が出來なかつた。

しかし、もう事は明白になつた。きつと近いうちに禮ちやんがうちに來るのに違ひない。そしてうちからどこかへお嫁に行くのに違ひない。僕はさう思ふと急に胸がどき〳〵して來るのを感じた。もう長い間まるで忘れて了つたやうに思ひだしもしなかつた禮ちやんの事が、わく〳〵と胸に浮んで來た。そして、どうしてもこれを確かめなければならないやうな氣持になつて、飯の時のほかはめつたに行く事もない母家の母の室へ行つた。

母はどこかの女のお客と話しながら、親子で女中してゐた一人の女に手傳はして、何んだか知らないが綺麗な模樣のある蒲團に綿を入れてゐた。そして『ほんとに綺麗な模樣ですわね』とか、『こんないゝ蒲團で寢たらどんなにいゝ氣持でせう』とか云ふやうな事を其の女中達が云つてゐた。

『誰れの蒲團？』

僕がはひつて行つた事にはまるで無關心のやうな顏つきをしてゐる皆んなの中へ、僕は誰れにともなくから問ひかけた。皆んなが異常な親しみをもつて其の話題にしてゐる此の蒲團が、誰れのために、何んのために造られてゐるのか、實際僕にはちつとも見當がつかなかつた。

『お前、千田さんの禮ちやんを知つてゐるね。こんどあの子がお嫁に行くの。そして此のお蒲

團はね、其時禮ちゃんが持つて行くの。あしたはきつと禮ちゃんがお母さんと一緒に、うちへ來るでせう。』

母の此の返事は一ぺんに僕の顏を眞赤にして了つた。僕は其の赤い顏を人に見られないうちにと思つて、急いで、自分の室へ逃げて歸つた。そして室へはひると直ぐ、机の上に兩肱を立ててしつかりと頭を押へながら、今見て來た蒲團のはでな色を遠のけようと思つて目を閉ぢてゐたが、其の目からはいつの間にかあつい涙がぼたり〳〵と落ちてゐた。

『一人の戀人をうちで世話してよそへやるのもひどいが、人の目の前で其の結婚の時の蒲團を縫つて見せるなんて實にひどい。』

ついさつきまではもう二三年も思ひだしもしなかつた、ほんの幼友達の事を、かうして僕はまるで自分の戀人のやうに考へだしたのだ。そして、それを今よそへ取られるのだと云ふやうな氣持にまでもなつたのだ。

しかし其の翌日、果して禮ちゃん親子がやつて來てからは、此の失戀に似た妙な氣持よりも、現に彼女と一つ家に生活してゐると云ふ喜びの方が、餘程强くなつた。

彼女等は僕の室から二間程の庭を隔てた向うの座敷を其の室にあてがはれた。其の窓からでも、彼女等の顏は、向うの障子のガラス越しに見えるのだ。彼女は來ると直ぐ、いづれ母から何んとか注意があつただらうにも構はずに、僕の室を訪ねてくれた。そしてひまさへあれば、と云ふよりも、寧ろ彼女のお母さんの隙を窺つては、僕の室へ遊びに來た。

彼女は今直ぐ嫁に行くのだと云ふやうな顏はちつともして見せなかつた。僕がそんな方へ話を持つて行つても、直ぐ僕の口をおさへるやうにして、話をほかへ移して了つた。彼女はただ、もう殆んど治つた僕の傷だけを、始終氣にした。そして學校を退學された事に就いては、『いゝわ、軍人よりももつとえらい人になりさへすればね』と云つただけで、却つて僕の將來を祝福してゐるやうにすら見えた。僕も彼女には僕の將來の方針を打ちあけた。

『あたしなんか、學校の先生も師範學校へはひれつて勸めて下さるし、わたしもさうしてもつと勉强する氣でゐたんだけれど、もう駄目だわ。あなたなぞは、これからが本當の勉强なんですもの。』

彼女はかう云つて僕を勵ましては、僕の少年時代の才能を賞めたてて、無邪氣ないろんな追憶に移つて行つた。僕も彼女が直ぐ結婚するんだと云ふ事も殆んど忘れて、戀人とでも話するやうな甘い氣持になつて、彼女と一緒に其の追憶に耽つてゐた。

或日僕は、彼女の室で、彼女親子と母とが、何事か切りにさゝやき合つてゐるのにきゝ耳を立てた。

『どうして、をばさん、氣が變などころぢやあるもんですか。あたし、しよつちう遊びに行つてお話してゐるんですけれど、そんなところこればかしでも見えませんわ。そして、これからが本當の勉强だと云つて、一生懸命になつて勉强していらつしやるんですもの。』

『さうかね。わたし又、夜いつ目をさまして見ても、きつと離れの方で本の紙をめくる音がして、はゞかりへ行くたんびにかん〳〵あかりが點つてゐるので、何んだか氣味がわるかつた位よ。』

『えゝ、さうして毎晩遲くまで勉强していらつしやるんだわ。そして近いうちに東京へいらつしやりたいのですつて。これからの方針も何もかも、もう自分一人でちやんときめていらつしやるんだわ。ね、をばさん、本當にしつかりし

ていらつしやるんだから、わたし榮さんに代つてをばさんやをぢさんにお願ひしますわ。早く榮さんのお望み通りに東京へ出しておやんなさるといゝわ。』

『まあ、そんなに勉强してゐるんですかね。わたしは又、うちで少し氣が變だなんて云ふから、どんなに心配してゐたか知れないの。そして默つて見てゐるんだけれど、別にこれと云つて變なところもなしね、却つて變に思つてゐた位ですわ。禮ちやん、本當に有りがたうよ。わたし、それですつかり安心しました。』

僕は此の話聲を聞いて、本を閉ぢて、一人でしく〳〵泣きだした。どんな事があつても、うんと勉强して、彼女のためにだけでもえらい人間になつて見せると一人で誓つた。

其晩は珍しく禮ちやんが夜遊びに來た。が、其日の話に就いては、彼女も何んにも云はなければ、僕も何んにも云ふ事が出來なかつた。僕はたゞ默つて、心の中でだけ彼女に感謝してゐるほかはなかつた。そして彼女はいつもと同じやうに僕を慰め勵まして、幼物語に夜を更かして自分の室へ歸つて行つた。

其の翌日は、朝早くから、うちぢうが總がかりでごた〳〵騷いでゐた。そして夕方は、女中共や子供達を殘して、皆んなが出て了つた。僕はいよ〳〵禮ちやんがお嫁に行つたのだなと思つた。禮ちやんが何んにも云はずに行つて了つた事は隨分さびしかつたが、もう戀人を人にとられたやうな妙な氣持はちつともしなかつた。そして、たゞ彼女の上に幸あれと思ふほかに、きのふ一人で彼女に誓つた言葉を又一人で繰返してゐた。

二

それから四五日經つて、或晩僕は父と母との前に呼ばれた。父の顏にはもう僕を名古屋へ迎ひに來て以來の、難しさうな筋が一つも出てゐなかつた。母も僕がはひつて行つた時にいつもちよつとやる、其のはひつて行つたのを知らないやうな顏つきはよして、にこ〳〵して迎ひ入れてくれた。

『これからどうするつもりだ。』

父は出來るだけ優しく、しかし簡單にたゞこれだけの事を云つた。僕は一人できめてゐたただけの事をはつきりと、しかしやはり簡單に答へた。

『文學はちよつと困るな。』

父は僕の言葉を聞き終ると、ちよつと顏をしかめて首を傾けた。

『文學つて何んですの。』

母は心配さうに父の顏をのぞいた。

『それ、あの桑野の息子がやつたやうなものさ。』

『あの、大學を卒業して、何んにもしないで遊んでゐる、あの方？』

『うん、あれだ。あんなんぢや困るからな。』

『さうね。』

僕は其の桑野の息子と云ふのがどんな男か知らなかつたが、母もさう云はれゝば、父に贊成するほかはないらしかつた。

『とにかく東京へ出して勉强はさせてやるつもりだが、文學と云ふのだけはもう一度考へ直して見てくれ。お前も七八人の兄弟の總領なんだからな、醫科とか工科とかの將來の確實なものなら、大學へでもやつてやるがね。どうも文學ぢや困るな。』

父は又顏をしかめて首を傾けた。

『でも、折角さうときめたことを今直ぐ考へ直すと云ふわけにも行きますまいし、もう一日二日考へさして見たらどうでせう。』

母は父にさう云つて猶僕にも附けたして云つた。

『お父さんも東京へ出してやると仰しやるんだから、今晩はもうこれで室へ歸つて、もつとよく考へて見て御覽。』

僕はそれでもう僕の目的の七八分は達したものと思つて喜んで室に歸つた。

其の翌日は、多分父に賴まれたのだらうと思ふが、醫學士で軍醫の平賀と云ふのが來て、切りに醫者になれと勸めて行つた。これは前にも云つたやうに、子供の時から僕が始終世話になつてゐる醫者で、幼年學校の入學試驗の時にも僕の目の悪いのを强ひて合格にしてくれた人だつた。が、僕にはどうしても醫者になる氣はなかつた。其後外國語學校を出た時にも、今の平民病院長の加治ドクトルが、其の息子の時雄君の連れとなつてフランスへ行つて醫學をやつたらどうかと勸めてくれたのだが、やはりどうしても醫者になる氣はなくつて斷つて了つた。そして更に其後、自然科學に興味を持つやうになつてから、いつその事あの時に醫者になつてゐればよかつたと、時々に、そして今でもまださう思ふ事がある。

が、そこへ、もう一人、ちやうどいゝ妥協論者が出てくれた。それは父が大ぶ目をかけてゐた森岡と云ふ若い中尉だつた。父は此の中尉にきつと僕の事を相談したに違ひなかつた。中尉は僕のところに來て、友達のやうにして相談に乘つてくれた。

『お父さんはどうしても文學は困ると云ふんだが、ほかに何か方法はないものかね。』

中尉はうちの財政上の事からいろんな話をして、僕に再考を求めた。

『そんなら語學校へ行つてもいゝです。』

僕は大學が駄目ならかうと云ふ、僕の第二案を打ちあけた。

『それやいゝ、それならきつとお父さんも贊成する。よし不贊成でもきつと僕が贊成さして見せる。』

中尉は、僕が語學校と云ひだしたので、急に元氣づいて贊成した。

當時陸軍では、殊に田舍の軍隊では、再歸熱のやうに時々起る語學熱が流行つてゐた。陸軍大學へはひれなくつても、多少語學が出來さへすれば、洋行を命ぜられたり要路に就かせられたりして、出世の見込が十分についた。森岡中尉も、やはり幼年學校出身で、フランス語をやつてゐた。そして其のフランス語を大成さすべく、切りに東京へ出て語學校へはひりたがつてゐたのだ。禮ちやんの花婿の隅田中尉と云ふのも、これは中學校出身で英語がお得意なので、やはり何んとかして東京へ出て語學校へはひりたいと云つてゐた。父も、以前にはフランス語をやつたりドイツ語もやつたりしてゐたが、其頃は新しく又ロシア語をやりだしてゐた。

そんな時なので、語學校を出れば何んになれるのかと云ふ事などはごくぼんやりと考へただけで、中尉も父も直ぐ僕の第二案に贊成してくれた。が、僕は、語學校を出れば直ぐ大學の選科にはひれ、其の選科からは更に普通學の試驗を受けて本科に移れる事をよく承知してゐたのだつた。

とにかく僕は、直ぐにも上京する事を許された。そして自分で元日の朝早く出發する事にきめた。

が、此の元日には俥屋が行かうと云はないので、仕方なしに翌二日に延ばした。

元日の朝は暖いゝ天氣だつた。それが晝頃から曇り出して、夕方にはもう霏々として降る大雪の模樣になつた。其晩の十二時少し過ぎだ、もう三四尺積もつてゐる雪の中を、僕は橇に乘つて二人の俥夫に引かれてうちを出た。

『まあんなに喜んで行く。』

母は一人で玄關のそとまで僕を送りだして、自分も矢張り嬉し泣きに泣いてゐた。

町はづれまではまだよかつた。が、町を出るともう橇は一歩も進む事が出來なかつた。俥屋のお神は、豫めさうと知つて、ゆうべの間に一度とめに來たのだ。しかし僕がどうしても聞かないので、仕方なしに一番屈強な男を二人選んで寄越したのだが、町を出ると、雪ですつかり埋もつてゐる道は、其の俥夫の一歩々々の足を腿まで食ひこんだ。そんな事で橇が引けて行けるものではない。それに、橇の上に乘つて、僕が其の中に坐つてゐる籠は、時々横合ひから強い風を受けてひつくり返りさうになる。たうとう俥夫等は立ちどまつて『もうとても駄目です』と云ふ。

『それぢや歩いて行かうぢやないか』と僕は云ひ出した。『君等の中の一人が眞先きに歩くんだ。其の足あとを傳つて僕が眞ん中になつて行く。其のあとへ又、君等の一人が殿になつて僕の荷物をかついで行く。そして先頭のものと殿のものとは時々交代するんだ。僕だつて、時には先頭に立つたり、殿になつて荷物を持つたりしたつていゝよ。』

俥夫等は此の提案を喜んだ。

『わしらだつて、うちのお神さんや奥樣とお約束して、なあに大丈夫でさあつて引受けて來たんですからね。今更とても駄目でしたつておめおめ歸れもしませんよ。』

そして彼等は急いで其の橇を近所のどこかへ預けて、僕の云ふ通りにして歩きだした。

が、道は遠いのだ。北越線の一番近い停車場の新津へ出るのに、新發田からは七八里あるのだ。そして其の間には、半里も一里もの間家一軒もない、廣い野原を幾つも通り抜けなければならんのだ。雪は降る。眼前數歩の先きは何んにも見えない程に、細かい雪がをやみなく降る。降るばかりならまだいゝ、時々強い風が來ては、足もとの雪を顔に吹きあげる。そんな時には、たゞしつかりと踏みとゞまつて、顔を押へて其の風の行つて了ふのを待つてゐるほかはない。そして又、たゞほかよりは少し小高くなつてゐる道をあてに、一歩々々腿まで埋まりながら重い雪靴の足を運んで行くのだ。

ちやうど新發田と新津との中間の、水原と云ふ町の向うの、一里ばかりの原に通りかゝつた時には、三人とも疲れと餓ゑとでへと／＼になつて了つて、幾度其の原の中で倒れかゝつたか知れなかつた。そして五歩歩いては休み十歩歩いては休みして、漸く其の原の眞中の一軒家に着いた時には、皆んなもうまるで死んだもののやうだつた。

しかし、其の一軒家で大きな圍爐裡に火をうんともして、一時間程其のまはりに轉がつて寢て、そして、あつい粥を七八はい掻つこんだあとでは、すつかりもとの元氣になつてゐた。

そして夕方近い頃に、一番の汽車に間に合ふ筈であつた新津に、漸く着く事が出來た。

東京に着くと直ぐ、僕は牛込矢來町の、當時豫備か後備かになつてゐた退役大尉の、大久保のお父さんを訪ねた。上京のたんびに僕は此の大久保のうちへ遊びに行つて、其の直ぐ向ひに下宿屋のある事を知つてゐたので、大尉の監督の下にそこへ下宿するやう、父に申し出てあつたのだつた。

若松屋と云ふ其の下宿には、幸ひに、奥の方に四疊半の一室があいてゐた。そして僕は、正月の休みの間に探し歩いた、猿樂町の東京學院へ（今はもうないやうだが）、中學校五年級受驗科と云ふのにはひつて、毎日そこから通ふ事となつた。そこでは僕は自分の學力の足りないと思つた數學や物理化學に特に力を入れ

て勉強した。そして同時に又、或は四月頃になつてからだとも思ふが、夜は、其頃四谷の簞笥町に開かれた佛蘭西語學校と云ふのに通つた。これは、庄司（先年勞働中尉と呼ばれたあの庄司何んとか君の親爺さんだ）と云ふ陸軍教授が主となつて、やはり陸軍教授の安藤（其後早稻田の教授をしてゐた）だの、ジロオと云ふ高等學校の先生のフランス人だのが始めた學校だつた。

かうして僕は、東京に着く早々、何もかも忘れて夜晝たゞ夢中になつて勉強してゐた。

が、何よりも僕は、僕にとつての此の最初の自由な生活を樂しんだ。直ぐ向ひには監督であり保證人である大尉がゐるのだが、これはごくお人好の老人で、一度でも僕の室をのぞきに來るでもなし、訓戒らしい事を云ふのでもなし、又僕の生活に就いて何一つ訊いて見ると云ふのでもなかつた。僕は全く自由に、たゞ僕の考へだけで思ふまゝに行動すればよかつたのだ。

東京學院にはひつたのも、又佛蘭西語學校にはひつたのも、僕は自分一人できめた。そして大尉や父にはたゞ報告をしただけだつた。僕が自分の生活や行動を自分一人だけで勝手にきめたのは、これが始めてであり、そして其後もずつと此の習慣に從つて行つた。と云ふよりも寧ろだん／＼それを增長させて行つた。

僕は幼年學校で、まだほんの子供の時の、學校の先生からも遁れ父や母の目からも遁れて、終日練兵場で遊び暮した新發田の自由な空を思つた。其の自由が今完全に得られたのだ。東京學院の先生は、生徒が覺えようと覺えまいとそんな事にはちつとも構はずに、たゞ其の教へる事だけを敎へて行けばいゝと云ふ風だつた。出席しようとしまいと敎授時間中にはひつて行かうと出て行かうと、居眠りしてゐようと話してゐようと、そんな事は先生には何んの關係もないやうだつた。そして佛蘭西語學校の方では、生徒が僕のほかは皆な大人だつたので、先生と生徒とはまるで友達づき合ひだつた。一時間の間膝にちやんと手を置いて不動の姿勢のまゝ瞬き一つせずに、先生の顏をにらめてゐる幼年學校と較べればまるで違つた世界だつた。僕はたゞ僕自身にだけ責任を持てばよかつたのだ。そして僕は此の自由を樂しみながら、僕自身への責任である勉强にだけたゞ夢中になつてゐた。

三

けれどもやがて、此の自由を憧れて樂しむ氣持が、たゞ自分一人のぼんやりした本能的にだけではなく、更にそれが理論づけられて社會的に擴張される機會が來た。ごく偶然に其の機會が來た。

僕は其頃の僕の記憶の一斷片に就いて、嘗て『乞食の名譽』の中の一篇『死灰の中から』の中に書いた。

――僕が十八の年の五月頃だつた。（或はもう二三ケ月か、もつとあとの事かも知れない。）まだ田舍から出たてのしかも學校の入學試驗準備に夢中になつて、世間の事なぞはまるで知りもせず、又考へても見ない時代だつた。僕は牛込の矢來に下宿してゐた。或る寒い日の夕方、其の下宿にゐた五六人のW（早稻田）大學の學生が、どやどやと出て行く。そとにも大勢待つてゐるらしいがや／＼する音がする。障子をあけて見ると、例の房のついた四角な帽子をかぶつた二十人ばかりの學生が、てんでに大きなのぼり見たいな旗だの高張提灯だのを引つかついで、わい／＼騷いでゐる。

——「もう遲いぞ。駈足でもしなくつちや間に合ふまい。」

——「あゝ、しかし其の方が却つていゝや。寒くはあるしそれに此の人數でお一二、お一二で走つて行けば、隨分人目にもつくだらう。」

——「さうだ。駈足だ！ 駈足だ！」

——皆んなは大きな聲で掛聲をかけて元氣よく飛んで行つた。其時の『Y(谷中)村鑛毒問題大演說會』と筆太に書いたのぼりの間に、やはり何か書きつけた高張りの赤い火影がゆらめいて行く光景と、皆んなの姿が見えなくなつてからもまだ暫く聞えて來るお一二、お一二の掛聲とは、今でもまだはつきりと僕の記憶に浮んで來る。これがY村と云ふ名を始めて僕の頭に刻みつけた出來事であつた。そしてそれ以來僕は其頃僕がとつてゐた唯一の新聞のY新聞(萬朝報)に折々報道され評論されるY村事件の記事を多少注意して讀むやうになつた。

——Y村問題は直ぐに下火になつた。今考へて見ると、ちやうど其頃が此の問題に就いて世間が大騷ぎした最後の時であつたのだ。從つてY村に就いての僕の注意も一時立消えになつた。しかし此の問題のお蔭で、僕はY新聞のD(幸德)やS(堺)、M(東京每日)新聞のK(木下尙江)、W大學のA(安部磯雄)などの名も知り、同時に又新聞紙上のいろんな社會問題に興味を持つやうになり、殊にDやSなどの文章に大ぶ心を引かれるやうになつた。そして其の翌年の春頃には、學校で『貧富の懸隔を論ず』などと云ふ論文を書いて、自分だけは一ぱしの社會改革家らしい氣持になつてゐた。

——僕ばかりぢやない 更に其の翌年、DとSとが其の非戰論のためにY新聞を出て一週刊新聞(平民新聞)を創めて、新しい社會主義運動を起した時、それに馳せ加はつた有爲の青年の大部分は、此の鑛毒問題から轉じて來たものか、或は此の問題に刺戟されて社會問題に誘ひこまれたものであつた。

これは谷中村の鑛毒問題に就いて書いたものの中の一斷片だ。從つて、勿論其の中には噓はないのだが、多少一切を鑛毒問題の方へ傾けすぎた嫌ひはある。それを今は、此の行を書いてゐる際中の自由と云ふ氣持の記憶の方へ、もう少し傾け直さなければならない。其の方が、少なくとも今は、本當だと思ふのだ。

僕はたゞ一番安いと云ふ事だけで萬朝報をとつた。田舍者でしかも最近數年間は新聞を見るのを嚴禁されて、世の中はたゞ軍隊の生活ばかりのやうに考へこまれてゐた僕は、其のほかにどんな名のどんな新聞があるのかも碌には知らなかつた。其の數年間の世間の出來事に就いても、僕が今覺えてゐるのは、皇太子(今の天皇)の結婚と星亨の暗殺との二つ位のものだ。皇太子の結婚は僕が幼年學校にはひると直ぐだつた。僕等は二人が伊勢へお參りするのを停車場の構內で迎へて、二人のごく丁寧な答禮にすつかり恐縮し且つ有りがたがつたものだ それを思ふと、これは全くの餘談ではあるが、山川均君などは恐ろしい程の先輩だ。彼れは既に其頃キリスト敎主義の小さな雜誌を出してゐて、此の結婚に就いての何かを批評して、そして不敬罪で三年九ケ月とか食つてゐるのだ。星亨の暗殺は僕が幼年學校を出る年の事だつたが、僕はそれを學校の庭で、暫く星の家に書生をしてゐたと云ふ一學友から聞いただけだつた。

そしてそれに對してはたゞ、劒客伊庭某の腕の冴えに感心した位のものだつた。星がどんな人間でどんな悪い事をしたかと云ふやうな事はまるで知らなかつた。

　此の盲の手をほんの偶然に手引してくれたのが萬朝報なのだ。僕は此の萬朝報によつて始めて軍隊以外の活きたいろんな社會の生活を見せつけられた。殊に其の不正不義の方面を目の前に見せつけられた。

　しかし其の不正不義は、僕の目には、たゞ世間の單なる事實として映り、單なる理論としてはひつた位の事で、それが僕の心の奥底を沸きたゝせると云ふ程の事はなかつた。それより僕は其の新聞全體の調子の自由と奔放とに寧ろ驚かされた。そして殊に秋水と署名された論文のそれに驚かされた。

　彼れの前には、彼れを妨げる、又彼れの恐れる、何物もないのだ。彼れはたゞ彼れの思ふままに本當に其の名の通りの秋水のやうな白刃の筆を、其の腕の揮ふに任せてどこへでも斬りこんで行くのだ。殊に其の軍國主義や軍隊に對する容赦のない攻撃は、僕にとつては全くの驚異だつた。軍人の家に生れ、軍人の間に育ち、軍人教育を受け、そして其の軍人生活の束縛と盲從とを呪つてゐた僕は、たゞそれだけの事ですつかり秋水の非軍國主義に魅せられて了つた。

　僕は秋水の中に、僕の新しい、そしてこんどは本當の『仲間』を見出したのだ。が、たつた一つ癪にさはつたのは、僕が水のしたゝるやうな刀を好きなところから竊かに自ら秋水と號してゐたのを、こんど別に秋水と云ふ有名な男のある事を知つて、自分の其の號を葬つて了はなければならない事だつた。

　それと、もつと近くにゐて僕の目をあけてくれたのは、同じ下宿の直ぐそばの室にゐた佐々木と云ふ男だつた。彼れはもう二三年前に早稻田を出て、それ以來毎年高等文官の試驗を受けては落第してゐる、三十位の老學生だつた。いつも薄ぎたない着物を着て、頭を坊主にして、秋田あたりのズウ〳〵辯で愛嬌のある大きな聲をだして女中を怒鳴つてゐた。其の顔も厳めしさうな八字髭は生やしてゐたが、兩頬に笑くぼのある、丸々とした愛嬌面だつた。友達のない僕は直ぐ此の老書生と話し合ふやうになつた。彼れは議論好きだつた。そして僕のやうな子供をつかまへても議論ばかりしてゐた。僕も負けない氣で、秋水の受賣りか何んかで、盛んに泡を飛ばした。

　それから、此の佐々木の友人で、佛蘭西語學校で同じ高等科にゐた小野寺と云ふのと知つた。これもやはり、二三年前に早稻田を出て、其頃は研究科でたつた一人で建部博士の下に社會學をやつてゐた。少し出齒ではあつたが、からだの小さい、貴公子然とした好男子だつた。

　或晩、學校からの歸りに、同じ生徒の高橋と云ふ輜重兵大尉が、彼れに社會學と云ふのはどんな學問かと尋ねた。

『たとへば國家と云ふものが、又其の下にあるいろんな制度がですね、どんな風にして生れて、そしてどんな風に發達して來たかと云ふやうな事を調べるんです。』

　小野寺は得意になつて、やはり佐々木と同じやうに少々ズウ〳〵辯ながら、多少演說口調で云つた。

『それや面白さうですな。』

　士官學校の馬術の教官で、縫絲を一本手綱にしただけで自由に馬を走らせると云ふ馬術の名手の高橋大尉は、本當にうらやましさうに云つた。

　社會學と云ふのは、又それがどんなものかと云ふ事は、これが僕には初耳だつた。そして僕

も、高橋大尉と一緒にこんな學問をしてゐる小野寺をうらやましがつた。そして小野寺や佐々木に賴んで、社會學の本だの、其基礎科學になる心理學の本だのを借りて、まるで分りもしないものを一生懸命になつて讀んだ。多分早稻田から出た遠藤隆吉の社會學であつたか、それとも博文館から出た十時何んとか云ふ人の社會學であつたか、それとも其の兩方であつたかを讀んだ。又、金子馬治の最近心理學と云ふ心理學史のやうなものも讀んだ。そして次いでに、同じ早稻田から出てゐる哲學の講義のやうないろんなものも讀んだ。

小野寺は又僕に佛文のルボン著『群衆心理』と云ふのは面白い本だから讀めと云つて勸めた。それも僕は、字引を引き〳〵、しかもたうとう碌に分らないながらも讀んで了つた。

學習院は缺員なしでだめ、曉星中學校もだめとあつて、其の四月に、僕はあとたつた一つ殘つてゐる成城中學校へ試驗を受けに行つた。が、願書を出す時には外國語をフランス語として出して受けつけたのが、いよ〳〵試驗の日になつて『こんどの五年にはほかにフランス語の生徒がないから』と云ふので無駄に歸されて了つた。

そして僕は九月まで待つて、どこか英語の中學校の試驗を受けなければならないはめになつた。それで僕は急に英語の勉強を始めた。そしてユニオン讀本の四が讀めさへすればどこへでもはひれると聞いて、ほかの學科の方は止して、其のユニオンの四を近所の何んとか云ふ英語の先生のところへ敎はりに行つた。もう幾年かまるで英語の本をのぞいても見なかつたので、始めからユニオンの四にぶつかるのは實に無茶な事だつた。しかし僕は先生のところで其の講義を聞いて來ては、更にうちへ歸つて字引と獨案內とを首つ引きにして、それこそ本當に一生懸命になつて勉强した。そして一月二月するうちには其のユニオンの四も大した苦にはならなくなつた。

すると七月か八月の幾日かに、突然僕は『母危篤直ぐ歸れ』と云ふ父の電報を受取つた。

六　母の憶出

一

父の家は尾上町の直ぐ近所の西ケ輪と云ふ町の、練兵場の入口の家に引越してゐた。もと谷岡と云ふ少佐が住んでゐて、僕は其の息子と中學校で同級だつたので、前からよく知つてゐる家だつた。谷岡は幼年學校や士官學校の試驗にいつも失敗つて、たうとう軍人になりそこねて、後、慶應にはひつて、今はどこかの新聞の經濟記者になつてゐると聞いた。そして其の家の裏には、先年社會主義思想を抱いてゐると云ふので退校された、松下芳男中尉が住んでゐた。勿論まだ當時はほんの子供で僕の弟の友達だつた。

玄關にはひると、僕は知つてゐる人達や知らない人達の多勢が皆な泣きながら、あつちへ行つたりこつちへ行つたりしてうろ〳〵してゐるのを見た。僕は母はもう死んだのだと思つた。しかもたつた今死んだばかりのところだと思つた。そして其のうろ〳〵してゐる人達の一人をつかまへて『お母さんはどこにゐます』と訊いた。が、其の女の人はちよつと大きく目を見はつて見て、何んにも答へないで、わあと聲を出して泣いて、逃げるやうにして行つて了つた。僕は又もう一人の女の人をつかまへた。が、やはり又、前と同じ目に遭つた。

仕方がないので、どこか奥の方の室だらうと思ひながら、先づ先きの人達の逃げこんだ玄關の直ぐ次ぎの室にはひつた。其の室と其の奥の座敷との間の襖は取りはづされて、其の二つの室一ぱいに多勢の人達が坐つてゐた。僕がはひつて行くと、皆んなは泣きはらした目をやはり先きの人達と同じやうに大きく見はつて僕の顏を見つめてゐたが、僕が又『お母さんはどこにゐます』と訊くと、其の中の女の人達は又わあつと聲をあげて泣きだした。そして誰れ一人僕の問ひに答へてくれる人はなかつた。僕は變な氣持になりながら、仕方なしに、又襖をあけて玄關の奥の一室にはひつた。そこは母の居室になつてゐたものと見えて、箪笥だの鏡臺だのがならんでゐるだけで、誰れもゐなかつた。僕はそこに突つたつたまゝ、一體どうした事なんだらうと思ひながら、ぼんやりしてゐた。

そこへ、それが誰れだつたかはもう忘れて了つたが、とにかく母と親しくしてゐたそして僕も好きだつた或る軍人の細君がはひつて來た。

『あなたはまあどうしたんです。お先にいらつしたんですか。』

彼女もやはり目を泣きはらしながら、しかししつかりした口調で叱るやうに云つた。僕は其の『お先に』と云ふ言葉が何んの事だか分らなかつた。しかし、とにかく、

『いや、僕は今東京から來たんです。』

とだけ答へた。

『それぢやあなたは新潟へはいらつしやらなかつたんですか。』

『え、行きません。母は新潟にゐるんですか。』

『あゝ、それぢやあなたは何んにも知らないんですね。まあ……』

と云ひながら彼女はほろ／＼と涙を流した。

『母はもう死んだんですか。』

『えゝ、きのふ新潟病院でおなくなりになりました。そして、けふ、もう直ぐ皆さんでこちらへお歸りの筈です。』

僕はさう聞くと、成程、うちのものは誰れもゐないと氣がついた。そして同時に又、始めて自分で電報と云ふものを受取つた僕が、其の差出人のところはちつとも見ずにたゞ中の『母危篤直ぐ歸れ』と云ふのだけを見て、驚いて向ひの大久保から旅費をかりて上野の停車場へ駈けつけた事を思ひついた。

『お着きです。』

と云ふ聲がして、皆んなが玄關へ出て行くのが聞えた。

『さあ、お着きださうです。』

彼女はぼんやりと考へてゐる僕を促すやうに云つて、玄關へ出て行つた。僕も其のあとに隨いて行つた。

棺の前後に父や弟妹等や其他四五人の人達が隨いて、今車から降りたばかりのところだつた。

あとで聞くと、さつき僕が車から降りた時にも、やはり『お着き』だと思つて多勢出て來ためだが、僕がたつた一人でしかもうろ／＼しながら『お母さんはどこにゐます』なぞと訊くもんだから、これやきつと氣でも變になつたんぢやあるまいかと、皆んながさう思つたんださうだ。

母は卵巣膿腫、即ち俗に云ふ脹滿で死んだのだ。

其の少し前に、九人目の子供を流産してからだを悪くしたので、暫くどこかの温泉へ行つてゐたのだが、歸つて直ぐ手術すると云つて新潟へ出かけたのださうだ。しかも、『なあに、二週間もすれば、ぴん／＼したからだになつて歸つて來ますよ』と云つて、大元氣で出かけたのださうだ。

『そんな風でしたし、それにお母さまは榮は今

試驗前で勉強で忙しいんだから心配さしちやいけないと仰しやつて、どうしてもあなたのとこへお知らせするお許しが出なかつたんですよ。』

母の死骸が着い晩、三の町のお嬶と云つて、昔僕の家が新發田へ行つた其日から母の髪結さんとして出入りして、そして其後髪結をよしてからもずつと母の一番親しいお相手として出入りしてゐた女が、お通夜をしながら僕に話しだした。僕が去年の夏、此の自敍傳を書く準備に二十年目で鶴と新發田へ行つた時にも、僕が最初に訪ねたのはもういゝ婆さんになつた此のお嬶さんだつた。

『すると、三四日もしないうちに、危篤と云ふ電報なんでせう。で、私、お子さん方を皆さんお連れ申して參つたんですけれど、それやもう大變なお苦しみでね。注射でやつと幾時間幾時間と命をお止め申してゐたんです。時々、「榮はまだかまだか」と仰しやいましてね、そしてあの氣丈な方がもう苦しくて堪らないから早く死なしてくれ死なしてくれと仰しやるんです。それでも、私がもう直ぐお兄さまがいらつしやいますからと云ふと、うん／＼とお頷き遊ばして默つてお了ひなさるんですもの。それや、どんなにかあなたをお待ち遊ばしたんですが。幾度も早く死なして死なしてと仰しやるんですけれど、其のたびに私があなたの事を申しあげると、頷いては、默つてお了ひになるんですもの。』

お嬶は一晩ぢう、殆んど此の話ばかり繰返して云つて聞かしては、自分も泣き又僕をも泣かした。

『それに、お母さまは、お嬶丈夫になつて直ぐ歸つて來るからねと大きな聲で仰しやつてお出かけなすつたんだけれど、實はご自分でも覺悟をしていらつしたんですよ。私、お子さん方をお連れして行く時に、お召物を出しに箪笥をあけて見ますと、お母さまのお召物に何んだか妙な札がついてゐるんです。よく見ますと、それが皆んな春とか菊とか松枝とかとお孃さん方のお名前が書いてあるんでせう。私、腹が立ちましてね。何もそんな覺悟までして、わざ／＼新潟くんだりへ手術なぞしにいらつしやらなくてもよささうなものだと思ひましてね。私、其の事はお母さまに存分お怨みを申しあげましたわ。』

お嬶は又こんな話もした。そして、母の死は實は醫者の過失なので、手術後腹が痛み出して又切開して見たら中から絲が出て來て、大變な膿を持つてゐたなぞとも話した。これは、そこに立會つた人達が皆んな非常に憤慨して話して、病院へ何んとか掛合はなければならんなぞと云つてゐたが、父は悲痛な顔をしながら、『いや、濟んだ事はもう仕方がない』と一人あきらめてゐた。

そんなお通夜が二晩か三晩續いて、大阪にゐたお祖母さん（母の母）と僕の直ぐ妹の春とが到着すると直ぐ、葬式が出た。

ちやうど新發田の町の殆んど端から端までの一番賑かな大通りを通つて、僕が位牌を持たせられて、寶光寺と云ふ舊藩主の菩提寺まで練つて行つた。新發田にもう十幾年もゐて、それに母はそとへ出ると新發田言葉で大きな聲で會ふ人毎に挨拶して歩くと云ふ程だつたので、見送りの人も隨分多かつた。そして殆んど通りの町ぢうの人がそとへ出て見送つてくれた。

『あんなご立派なお葬式はまだ見た事がありません。』

と云つて、三の町のお嬶なぞは今でもまだ、其の人並すぐれた小さなからだを搖すりながら、おかめを皺くちやにして自慢にしてゐる。

葬式が濟んでから、母の棺を六人ばかりの人

足にかつがして、僕と弟の伸とが引きつゞいて、五十公野山と云ふ僕等がよく遊びに行つた小さな山の奥の方へ火葬に行つた。人足共は其の場所まで行くと、先づ藁を敷いて、其の上へあたりの松の枝を折つて來ては積み重ねて、そして其の上へ棺を乘せて又松の枝を積み重ねた。そして、自分等はそこから二三間離れたところに蓆を敷いて、車座になつて、持つて來た大きな德利だの重箱だのを幾つか並べたてた。かうして朝まで飮みあかしながら、死骸がすつかり骨になつて了ふまで待つんだと云ふ。

僕は其の人足共の云ふまゝに、一束の藁に火をつけて、其の火を棺の一番下に敷いてある藁の層に移した。藁は直ぐに燃えあがつた。其の火は更に、其の上の松の枝や葉に燃え移つた。そして僕は其の焔々として燃えあがる炎の中に、ふだんのやうにやはり肉づきのいゝ、たゞ夏のさ中に幾日も其儘に置いたせゐかもう大ぶ紫色がかりながらも、眠つたやうにして棺の中に横はつてゐる母の顏を見た。僕は其の棺箱が燒けて、母の顏か手か足かが現はれて出たら、堪らないと思つた。それでも僕はぢつとして其の炎を見つめてゐた。

人足共の一人は急いで僕等兄弟をわきへ連れて行つて、直ぐ歸るやうにと勸めた。もう日も大ぶ暮れてゐたのだ。そして、僕は其の場所へ行つたら直ぐ歸るやうにと豫め云ひつけられて來たのだ。僕等は其の人足に送られて山の麓まで出て、そこから車に乘つて歸つた。

二

母の死體がうちへ着いた時に、僕は其の棺のそばに暫く忘れたやうになつてゐた禮ちやんが立つてゐるのを見た。禮ちやんも二三日前から新潟の母の所へ行つてゐたのだ。たしか其の晩だつたと思ふが、夜遲くなつてから、お通夜をすると云ふのを無理やりに皆んなに歸れ歸れと勸められてうちへ歸つた。そして高級副官の父のもとにやはり旅團副官をしてゐた何んとか云ふ中尉の細君が、それはまだ若い、さうして聯隊ぢうで一番綺麗な細君で、僕は前から隨分親しくしてゐたのだつたが、竊と僕の肩をつゝいて、しかし高い聲で、僕に禮ちやんを送つて行くやうにと勸めた。ほかの人達もそれと一緒になつて、同じやうに僕に勸めた。僕は急に胸をどき／＼させながら、ちよつとためらつた。禮ちやんはもぢ／＼しながら、にこ／＼して、僕が座を立つのを待つてゐるやうだつた。綺麗な細君もやはりにこ／＼して、僕の顏を見てゐるやうだつた。僕は此の二人の若い細君の微笑みに妙に心をそゝられた。

僕は直ぐ提灯を持つて、禮ちやんと一緒にうちを出た。そとは眞暗だつた。禮ちやんと僕とは殆んどからだを接せんばかりに引つついて行つた。二人がこんなにして歩くのはこれが始めてだつたのだ。僕はもう母が死んだ事も何もかも忘れて了つた。そして提灯のぼんやりした明りを二人の眞ん中の前にさし出して、益々引つついて歩いて行つた。二人は何か聲高に話しながら笑ひ興じてゐたやうだつた。

『あら、齋藤さんぢやありませんか。』

二人は向うから軍服を着て勢よく歩いて來る男にぶつかりさうになつて、禮ちやんは其の男の顏を見あげながら叫ぶやうにして云つた。それは禮ちやんのうちと同僚の齋藤中尉だつたのだ。此の中尉は、僕が幼年學校にはひる前、彼れがまだ見習士官だつた頃から、僕もよく知つてゐた。が、中尉の方ではちよつと僕等が分らないらしかつた。

『君は何んだ。』

中尉は禮ちやんの方へ食つてかゝるやうに怒鳴つた。

『いや、僕ですよ。』

僕は禮ちやんをかばふやうにして一足前へ出て云つた。中尉はぢつと僕の顏を見つめてゐたが、

『やあ、君でしたか。これはどうも失禮。僕は又……いや、これからお宅へ行くところなんです。どうも失禮。』

と、多少言葉は和らげながらも、まだぷりぷりしたやうな樣子で行つて了つた。

『まあ、ほんとにいやな齋藤さん。お酒の臭ひなぞぷん〳〵さして。』

禮ちやんはもう大ぶ行つて了つた後ろをふり返りながら呟いた。

『でもきつと、僕らがあんまりふざけて來たもんだから、此邊の何かと間違へたかも知れないね。』

僕は少々氣がさして云つた。僕等が歩いてゐる西ケ輪の通りと云ふのは其の裏の小人町と一緒に、主として軍人をお得意とする魔窟だつたのだ。

『さうね。けれど、これぢやあんまり失禮だわ。』

禮ちやんはまだ多少憤慨しながらも、しかし自分を省みない譯ではなかつた。

二人は暫く默つて、しかし相變らず殆んど接觸せんばかりに引つついて歩いて行つた。

『ねえ、榮さん、私お嫁に行つて隨分つらいのよ。』

禮ちやんはしんみりした調子で口を切つた。

『どうして？』

『おしうとさんがそれやひどいよ。お母さんの方はまださうでもないんですが、お父さんがそれや難しい方でね。本當に箸のあげ下ろしにもお小言なんだけれど、そんな事はまだ何んでもないわ。私がちよつとうちを留守にすると、其の間に私のお針箱から何やかまで引掻き廻して何か探すんですもの。私もうそれが何よりもつらいわ。』

『へえ、そんな事をするんかね。』

僕は驚いて彼女の顏を見た。彼女は默つてうつむいてゐた。が、僕にはそれ以上何んと云つて話していゝのか分らなかつた。僕も仕方なしに默つて了つた。

道は川のそばだの、あまり家のこんでゐないところだので隨分寂しかつた。それでも二人は又暫く默つて、引つつき合つて歩いて行つた。

禮ちやんは又口を切つて、東京での僕の學校の樣子を訊いた。僕は去年の暮れに、此の禮ちやんのためだけでも偉い人間になつて見せると私かに決心した事を思ひ出した。が、そんな事を話さうとも思はず、又よし思つたとしても話する事は出來ずに、たゞ禮ちやんの訊くまゝに受け答へしてゐた。そしてたうとう禮ちやんのうちの直ぐ近くまで行つた。

僕はもう歸ると云ひだした。禮ちやんは、ぜひ、ちよつと寄つて行けと引きとめた。

『僕はいやだ。さつきの齋藤さんのやうに、又隅田さんに變に思はれるかも知れないからね。』

僕はそんな事を云ふつもりでもなく、ふいと戲談のやうに云つて了つた。

『あら、いやな榮さん。それぢやいゝわ。』

禮ちやんは手をあげて打つまねをしながら、ちよつと僕をにらんだかと思ふと、其儘ばたばたと駈けだしてうちへはひつて了つた。

僕はぼんやりしたやうになつてうちへ歸つた。

翌日、禮ちやんは又うちへ來た。そして其後も、毎日、日に一度はきつとやつて來た。

母の死骸がうちにあつた間は、二人とも顏を見合はしても先夜の事などはまるで忘れたやうにしてゐた。そして又實際いろんなほかの人達

と一緒に母の死に就いての歎きに胸を一ぱいしてゐたが、葬式が濟んだ翌日からは、二人とも顏さへ合せれば、もう母の死の事などは忘れたやうになつて、そしてまだほんの子供のやうな氣になつて、先夜二人で門を出た時と同じやうに一緒に笑ひ興じたり騷いだりばかりしてゐた。

例の綺麗な細君も殆んど每日のやうに見舞ひに來た。そして二人のそんな風なのをそばで默つてにこ〳〵しながら見てゐて、時々、本當にお二人は仲善さうね、なぞとからかつてゐた。

お祖母さんは苦々しさうにして、いつも顏をしかめてゐた。

此の綺麗な細君は、其後、日露戰爭の留守中に何か不都合な事があつたとかで離緣になつたと云ふやうに聞いたが、そしてそれから間もなく一度銀座でたしかに其の人らしい顏をちよつと見たのだが、どこにどうしてゐる事か。

しかし、學校の入學試驗を直ぐ目の前に控へてゐた僕は、いつまでもさうしてゐる事が出來なかつた。母の葬式が濟んでから一週間目位で、僕は又上京した。そして又、母の事も禮ちやんの事も綺麗な細君の事も何もかも忘れたやうになつて、勉強しだした。

三

十月の始めになつて、僕は東京中學校(今はもうないやうだ)と順天中學校との五年の試驗を受けた。

今はどうか知らないが、其頃の東京の私立のへぼ中學校では、殆んど每學年每學期に各級の入學試驗をやつた。そして其の每學期の始めに二三回生徒募集をして、其のたびに試驗を受けさしては受驗料を儲けるのを例としてゐた。東京中學校のも順天中學校のも其の最後の第三回目の生徒募集の時だつた。

僕は其のどつちかにどうしてもはひらなければならないと思つた。が、其の試驗は二つとも殆んど同時に行はれるのだつた。僕はもう自分の學力には自信があつた。しかし、萬一の時にはと思つて、少し早くから始まる東京中學校のは自分で受けて、順天中學校のは換玉を使ふ事にきめた。それには、ちやうどいゝ下宿の息子の友達で僕もそれを通じて知つてゐた早稻田中學卒業の何んとか云ふ男があつた。

ところが僕自身が受けた東京中學校の方は、僕の大嫌ひな用器畫が三題ともちつとも分らないで、其れでもう落第となつた。換玉の方はうまく行つて、了ひまで通過して行つて、及第となつた。そして僕は其のお蔭で順天中學校の五年級にはひつた。

しかし僕は、かうして話を年代通りに進めて行く前に、さつきの禮ちやんの事が少し氣にかかるのだ。と云ふのは、あんな甘いしかも蜜も何んにもない初戀の話の續きを今後まだあちこちに挾んで行くのは少し氣が引けるので、少々年代を飛ばして、今こゝで話しついでに其後のいきさつをも一思ひに皆んな話して了はうと思ふのだ。そしてこんどは、禮ちやんの夫の隅田が死んだ時の二人の關係の場面になつたのだから、前の話のいゝ對照にもなると思ふので、猶更それを先づ書きたいのだ。

禮ちやんとは其後三度會ふ機會を持つた。

最初の一度は、殆んど一度とも云へない位なので、其後四年ばかりして、僕が外國語學校を出て社會主義運動に全く身を投じようとした頃の事だつた。堺君や田川大吉郎君や故山路愛山君なぞが一緒になつて、卽ち當時の社會民主主義者や國家社會主義者なぞが一緒にな

って、電車の値上反對運動をやつた。そして日比谷で市民大會と云ふのを開いて、そこで集まつた群集の力で電車會社や市會なぞへ押しかけた。其の前日だ。僕は堺君の家からあしたの市民大會のビラを抱へて、麴町三丁目のあたりからそれを撒き歩きはじめた。其時僕はふと禮ちやんらしい姿を道の向う側に認めた。ただそれだけの事なのだ。

が、あとで聞くと、それは本當に禮ちやんだつたので、僕が其の市民大會の直ぐあとで兇徒聚集と云ふ恐ろしい罪名で未決監に入れられた時に、禮ちやんが僕の留守宅に見舞ひに來てくれたさうだ。其頃僕は僕よりも二十歳ばかり上の或る女と一緒に下六番町に住んでゐたのだ。

其の次の二度目は、それから又二三年してからの事と思ふが、彼女と其の夫とを東京衛戍病院に訪ねた。どうして彼女等がそこにゐる事を知つたのか、又隅田がどんな病氣でそこにゐたのかも忘れて了つたが、僕が其の病室にはひるといきなり禮ちやんはそとへ飛びだして行つて暫く姿を見せなかつた。そして隅田はマッサアジをやらしてゐた。

「はあ、奴、知らないお客だと思つて逃げ出したんだ。」

隅田は笑ひながらさう云つて、其のマッサアジ師に彼女を呼びにやつた。

彼女は「まあ」と云つて、びつくりしたやうな顔をしてはひつて來た。

其時隅田は、前に東京へ出て英語を勉強したいために憲兵になつて、憲兵何んとか云ふ學校にはひつてゐたが、其後どこかへ轉任して、今病氣で東京に歸つてゐるんだと云ふやうな話をしてゐた。そして僕が社會主義者になつてもう二三度入獄してゐる事に就いても、困つたものだがしかし　の性格上仕方があるまいと云ふやうな事を云つて、禮ちやんはそれに「ええ、あんまり出來すぎるからだわ」と辯解して附け加へてゐた。

が、其時には僕は三十分ばかりで歸つて、其後又彼女夫婦がどうなつたかは暫くちつとも知らなかつた。

・

すると、それから又四五年して、僕が例の神近や伊藤との複雜な戀愛關係にはひり始めた頃の事、最後の三度目に、又突然と禮ちやんが現はれて來た。

或日僕は、僕がフランス語の講習會をやつてゐた牛込の藝術倶樂部へ行つた。そして僕が借りてゐた一室のドアを開けると、そこの長椅子に禮ちやんが一人しよんぼりと腰をかけてゐるので、實にびつくりした。

「隅田は大變肺を惡くしましてね、熊本の憲兵隊長をしてゐたのをよして、今はこちらに來てゐるんです。そして寢たつきりでゐるんですが、あなたが前に肺が大變惡かつたのに今はお丈夫だと云ふ事を聞きましてね。ぜひあなたにお會ひして、あなたの肺のお話を聞きたいつて云ふんですの。お醫者もいろんな事を云つてちつとも分りませんし、隅田ももう長い間の病氣ですつかり弱りこんでゐるんです。」

禮ちやんがいろ〳〵と詳しく話してゐるうちに、もうフランス語の時間が來て、生徒も二三人やつて來た。

「え、それぢや明日お宅へ參ります。」

と云つて、僕は禮ちやんを入口まで送り出した。

翌日行つて見ると、隅田の病氣は話で聞いたよりよほど惡いやうに見えた。今まで僕が見た、肺で死んだ幾人かの人の、もう末期に幾ばくもない時のやうないろんな徴候を持つてゐた。僕はこれやもう一月とは持つまいと思つた。そ

れでも、僕が惡かつた時の容體やそれに對する手當などをいろ〳〵と訊かれるので、僕も詳しくいろんな話をして、何大丈夫ですよなぞと慰めた。が話してゐるうちにだん〳〵咳がひどくなるので、僕はあんまり長く話してゐてはいけまいと思つて、皆んなが切りにとめるのも聞かずに、禮ちやんにだけ竊と僕の思つた通りの事を話して、いゝ加減に切りあげて歸つた。

其後も折々見舞はうとは思つたのだが、僕は伊藤の行つてゐる九十九里の御宿へ行つたり來たりしてゐて、其のひまがちつともなかつた。そして、さうかうしてゐるうちに、禮ちやんから隅田死亡と云ふ知らせを受けとつた。

早速行つて見ると、隅田の死骸のそばでは多勢の男女が集まつて、大きな珠數のやうな綱のやうなものを皆んなでぐる〳〵廻しては、ナムアミダー、ナムアミダー、と夢中になつて怒鳴つてゐた。下のほかの室にも僕の知らない多勢の人がゐた。禮ちやんは直ぐ僕を二階へ案内して行つた。

僕は今でもまださうだが、死んだ人の家へ行つてどうお悔みを云つていゝか知らなかつた。で、默つてたゞお辭儀をした。

『やつぱりあなたの仰しやつた通りでしたわ。』

禮ちやんはすつかりやつれて泣顔をしながらも、それでもいつもの生々とした聲で話しだした。

『私、こんな事を云つちやいけないんでせうけれど、隅田のなくなる事はもうとうから覺悟してゐましたし、今ぢや隅田のなくなつた悲しみよりも私の是からの身體の方が餘ッ程心配なんですの。』

僕は來る早々意外な事を聞くものだと思つた。

『經濟上の心配ぢやないんです。それはどうとかしてやつて行けます。けれど、隅田がなくなつて方々から親戚のものが集まつて來てから、私、今までまるでいぢめられ通しでゐるんです。そしてこれからも多分一生いぢめられ通しで行くんだと思ふんです。』

僕は益々意外なことを聞くものだと思つた。そしてやはり默つたまゝ聞いてゐた。

『隅田の國の方の人が來ると直ぐ、私をつかまへて、おやお前はまだ髪を切らずにゐるのかい、と云ふんでせう。私、今時まだこんな事を云ふ人があるのかと思つて、何んとも返事が出來なかつた位ですわ。するとこんどは、壁にかけてあるヴァイオリンを見つけて、あゝこれは何んとかさんに直ぐあげてお了ひ、後家さんにはもう鳴物なぞ一切要らないんだから、と云ふんですもの。私、髪なんか切る事は何んとも思ひませんわ。又、ヴァイオリンなぞもちつとも欲しくありませんわ。けども今そんなにして、皆んなの云ふやうに本當の尼さんのやうになつたところで、それがいつまで辛抱出來るかと思ふと、自分でも恐ろしくなりますの。私今まで軍人の奥さんで、殊に日露戰爭の間に、旦那が戰死して直ぐ髪を切つた方を澤山知つてゐますわ。そしてそれが四五年かしてどうなつたかもよく知つてゐますわ。其儘立派な未亡人で通した方はまるでないんですもの。そして本當の尼さんのやうな生活にはひつた人ほど、それがひどいんですもの。』

僕はたゞの平凡な軍人の細君と思つてゐた彼女が、これほどはつきりと、謂はゆる未亡人生活を見透してゐるのに驚いた。

『それであんたにはどうしても其の辛抱が出來ないと云ふんですか。』

僕は彼女がそれに就いてどこまで決心してゐるのかを問ひたゞさうと思つた。

『いゝえ、どこまでも辛抱して見るつもりです。今私は隅田の御里に歸つて、世間との一切の交

渉を斷つて、たゞ一人の子供を育てあげる事と、隅田の位牌を守つて行く事との、本當の尼さんのやうな生活をするやうに、毎日皆んなから責められてゐます。しかしそれも辛抱して見るつもりです。どこまでこれが辛抱出來るか知りませんが、とにかく出來るだけどこまでも、辛抱して行きます。』

『けれども其の辛抱が出來なくなる恐れがあるんでせう。其時にはどうするつもりなんです。』

『え、それが心配なんですの、恐ろしいんですの。けれど、やつぱり、どこまでも辛抱しますわ。』

『で、あなたの方のお父さんやお母さんはどう云つてゐるんです。』

『私には可哀想だ可哀想だと云つてゐますが、やはり一旦隅田家へやつた以上は、隅田の云ふ通りにしなければならんと云つてゐます。』

『あなたがさうまで決心してゐるんなら、それでもいゝでせう。しかし、出來るだけやはり辛抱はしな方がいゝです。辛抱はしても、もうとても出來ないと思ふ以上の事は決して辛抱しちやいけません。それが墮落の一番惡い原因なんです。』

こでも、それでも辛抱しなきやならん時にはどうしませう。』

『いや、辛抱しなきやならん理窟はちよつともないんです。そんな場合には、もう一切をなげうつて、飛び出すんです。直ぐ東京へ逃げていらつしやい。僕がゐる以上は、どんな事があつても、あなたを勝たして見せます。』

『えゝ、有りがたう御座います。私本當にあなたをたつた一人の兄さんと思つてゐますわ。けれど私、どうしても辛抱します。どこまでも辛抱します。たゞね、本當に榮さん、私あなたをたつた一人の兄さんと思つてゐますから、どうぞそれだけ忘れないで下さいね。』

僕は彼女と殆んど手を握らんばかりにして、又近いうちに會ふ約束で分れた。

其の翌日、隅田の葬式があつたのだが、僕は着て行く着物も袴も何んにもなし、又借りるところもないので、わざと遠慮して、そこから餘り遠くない麻布の神近の家で一日遊んで暮した。

それから幾日目だつたか、或日、禮ちやんが麹町の僕の下宿に訪ねて來た。

いよ〳〵あすとかあさつてとか、隅田の郷里に歸るので、牛込の或る親戚へ用のあつたのを幸ひに、内緒で立ち寄つたとの事だつた。話はやはり、いつかの彼女の家での話を、も少し詳しくして繰返したに過ぎなかつた。が、さうして彼女と話してゐる間に、僕は幾度彼女の手を握らうとする衝動に驅られたか知れなかつた。

しかし、彼女もいつまでさうしてゐられる譯でもなく、又僕もう藝術倶樂部へ行く時間が迫つてゐたので、下宿を出て一緒に倶樂部の直ぐ近くまで行つた。そして無事に、お互に『ご機嫌よう』と云つて分れて了つた。

四

順天中學校と云ふのは、尤もほかにもそんなのが幾つもあつたのだらうが、ちよつと妙な學校だつた。

僕のはひつた五年は三組で二百人か二百五十人かゐた。四年は二組で百五十人、三年は百人、二年一年は四五十人と云ふやうに、級がさがるに從つて生徒の數が減つてゐた。わざわざこんな學校に一年や二年からはひるものはないんだ。そして大がいは直ぐと四年か五年かへはひるんだ。

僕等の組には、哲學院(東洋大學の前身)を出たものだの、早稻田を出たものだの、其他いろん

な專門學校を出たものがゐた。そんなのは何かの必要からたゞ中學校卒業の免狀だけを貰ひに來たのだ。又、顏を見ただけでも秀才らしいまだ年少の、或はぼんやりとした年かさの、獨學の人も可なりゐた。それから又、僕なぞと同じやうに、どこかの學校で退學させられた不良連も隨分ゐた。そして、僕と同じやうに、換玉ではひつたのも此の不良連の中に多かつた。

僕と一緒に此の順天中學校へはひつた友人に登坂と云ふのがゐた。やはり僕と殆んど同時頃に、男色で、仙臺の幼年學校から逐はれて來たのだつた。

此の登坂とは、其の年の一月、即ち僕が東京へ出て來ると直ぐ、市ケ谷の幼年學校の面會室で出遭つた。そして彼れから、新發田での舊友で同時に幼年學校へはひつた谷と云ふ男ともう一人とがやはり彼れと一緒に退學させられた事を知つた。四人は直ぐ友達になつた。ほかにもまだ、やはり同時頃に同じやうな理由で大阪の幼年學校を退學させられた島田と云ふのともう一人と、どこかで落ち合つて、これも直ぐ友達になつた。皆んな、名古屋仙臺大阪と所は違ふが、同じ幼年學校の同期生だつたのだ。

皆んなは其の名譽恢復のためと云ふので、互に戒めて勉强を誓つた。そして其の年の九月十月には皆んなどこかの中學校の五年にはひつた。

其の中でも登坂と僕とは、最初に出遭つた關係からか、又お互に文學好きで露伴と紅葉との優劣を論じ合つたりしてゐたせゐか、一番近しくなつて、殊に一緒に順天中學へはひると直ぐ、本鄕の壹岐坂下に一室をかりてそこに一緒に住んだ。

二人とも、學校の方もよく勉强したが、小說も隨分よく讀んだ。坂上にちよつとした貸本屋があつて、そこから借りて來るのだが、暫くの間に其の貸本屋の本を殆んど皆な讀んで了つた。

後には島田も此の下宿に仲間入りした。島田は擊劍がお自慢で、眞黑な顏をした巖乘なからだの男で、いつも僕等が小說なぞを讀むのを苦々しさうにしてゐた。そこで、登坂と僕とが一策を案じて、其のいやがるのを無理押しつけに、『不如歸』を借りて來て讀ました。先生、最初の間はむづかしさうな顏をしてペエジをめくつてゐたが、だん〳〵眉の間の皺をのばして來て、たうとう了ひには其のさゞえのやうな握拳でほろ〳〵と落ちる淚をぬぐひ始めた。『それ見ろ』と云ふので、其後二人は島田の喜びさうなものを選んでは讀ましてゐたが、島田は浪六の『五人男』がすつかりお氣に召して、『俺れは黑田だ、大杉、貴樣は倉何んとかだ』と云ふやうな事を云つて一人で喜んでゐた。

浪六物や弦齋物はとうの昔に卒業して、紅葉露伴のものまでももう物足りなくなつてゐた僕等は、島田のそんな話にはまるで相手にならなかつた。しかし僕は、其の『倉何んとかだ』と云はれたのが、内心は餘程の不平だつた。

『成程、僕は今倉何んとかのやうに、一面にはごく謹嚴着實に濟ましてゐる。しかし、それだけ他のもう一面には、黑田のやうな豪放が私かに燃えてゐるんだ。貴樣なんかのえせ豪放が何んのあてになるもんか。』

僕は自分で自分にさう叫んで、『今に見ろ』と腹の中で一人で力んでゐた。

其頃、僕よりも一期上でやはり名古屋出身田中と云ふのが、中央幼年學校から逐ひ出されて、これも僕等の下宿にころがりこんだ。其他にも、登坂の仲間の何んとか云ふのと、島田の仲間の何んとか云ふのと、これも一時僕等の下宿に來たが、此の二人は僕等の謹嚴着實な

生活に堪へきれないで、直ぐほかへ出て行つて了つた。

又、僕等よりもやはり一期上で、そして僕等よりも一年程前に仙臺を出た箱田と云ふのが、其の年に高等學校へはひつて、ちよい／＼僕等の下宿に遊びに來た。僕等よりも一期二期あとの、其後に退校させられた二三のものも、學校や其他のいろんな事に就いて、僕等のところに相談に來た

からして、幼年學校の落武者共が、殆んど皆な僕等の下宿を中心にして集まつた。そして其の次の年には、皆んな無事に中學校を終へて、僕と島田とは外國語學校に、登坂と田中とは水産講習所に、谷は商船學校に、皆な可なりの好成績ではひつた。

谷は今郵船の船長をしてゐる筈だ。田中はどこかの縣の技師になつてゐると聞いた。島田は、もう大ぶ古い頃に、どこかの田舍の聯隊の將校集會所でドイツ語を教へてゐると云ふ話だつた。登坂は一時水産で大ぶ儲けて、山陰道のどこかで土地の藝者を二人ばかりかこつてゐたと云ふ程の勢だつたさうだが、十年ばかり前に失敗してアメリカへ行つた。そして今でもまだ失意の境遇にゐるらしい。箱田は朝鮮で檢事かをやつてゐる。

僕は又、壹岐坂上の貸本屋のほかに、神保町あたりの或る貸本屋のお得意にもなつてゐた。そこには、小説本のほかに、いろんな種類のむつかしい本があつた。僕は矢來町の下宿にゐた時から引續いて、そこから哲學だの宗教だの社會問題だのの本を借りて來ては讀んでゐた。矢野龍溪の『新社會』は矢來町時代に、丘博士の『進化論講話』は壹岐坂下時代か或は其の少し後かに、幾度も繰返しては愛讀した。

『新社會』は少し早く讀みすぎたせゐか、其の讀後の感興と云ふ程のものは今なんにも殘つてゐない。しかし『進化論講話』は實に愉快だつた。讀んでゐる間に、自分のせいがだん／＼高くなつて、四方の眼界がぐん／＼廣くなつて行くやうな氣がした。今までまるで知らなかつた世界が、一ペエジ毎に目の前に開けて行くのだ。僕は此の愉快を一人で樂しむ事は出來なかつた。そして友人には皆な、強ひるやうにして、其の一讀をすゝめた。自然科學に對する僕の興味は、此の本で始めて目覺めさせられた。そして同時に、又、すべてのものは變化すると云ふ此の進化論は、まだ僕の心の中に大きな權威として殘つてゐたいろんな社會制度の改變を叫ぶ、社會主義の主張の中へ非常にはひり易くさせた。

何んでも變らないものはないものだ。舊いものは倒れて新しいものが起きるのだ。今威張つてゐるものがなんだ。直ぐにそれは墓場の中へ葬られて了ふものぢやないか。

しかし、僕にはまだ、何かの物足りなさがあつた。母が死んで、と云ふやうな事をも殆んど忘れたやうにはしてゐたが、次意識の中では餘程さびしかつたに違ひない。又、禮ちやんの事はやはり同じやうに忘れたやうにはしてゐたが、幾年も續けて來た同性の謂はゆる戀を全く棄てた僕は、其の方面でも餘程さびしかつたに違ひない。友人と云へば、さつき云つた幼年校の落武者連だけだつたが、それもたゞ同じ境遇から互に勵み合つたと云ふ程の事で、本當に打解け合つた親しい間柄ではなかつた。

多分そんな饑ゑを充たすためだつたのだらう、僕はよく飯倉の親戚の家へ出かけた。從兄の山田良之助(今陸軍の少將で憲兵司令官をやつてゐる)の細君の家だ。山田は當時陸軍大學校の學生で、此の飯倉の小さな家に住んでゐ

た。僕はそれらの人のしんみな親しみの中にもひたりたかつた。其の邸の可なり贅澤な満位な生活の中にもひたりたかつた。そして又、そこのいろんな綺麗な女の人達の笑顔も見たかつた。しかし、そこの人達は皆な、男も女も綺麗ではあつたが、其の顔も心も冷たかつた。殊に僕が幼年學校を逐ひだされてからは、猶更さうのやうな氣がした。僕よりも二つ三つ年下の何んとかさんと云ふ娘なぞは、僕の幼年學校時代には隨分よく一緒に遊びもしふざけもして、僕は心中竊かに『僕が任官したら』と云ふ望みをすら持つてゐたのだつたが、もう大ぶ娘らしくなつてツンと濟ましてゐた。

そんな寂しさがきつと主になつて、そして其のほかにもまだ、新しい進歩思想を求める要求なぞが手傳つて、順天中學校を終る少し前から僕はあちこちの教會へ行き始めた。そして下宿から一番近い、又其のお說教の一番氣にいつた、海老名彈正の本鄉會堂で踏みとゞまつた。

海老名彈正の國家主義には氣がついたのかつかなかつたのか、それともまだ僕の心の中に多分殘つてゐた謂はゆる軍人精神とそれとが合つたのか、それは分らない。とにかく僕は先生の雄辯にすつかり魅せられて了つた。まだ半白だつた髮の毛を後ろへかきあげて、長い鬚をしごいては、其の手を高くさしあげて、『神は…』と一段聲をはりあげる其のいゝ聲に魅せられて了つた。僕は他の信者等と一緒に、先生が聲をしぼつて泣くと、やはり一緒になつて泣いた。

先生はよく『洗禮を受ける』事を勸めた。『いや、まだキリスト教の事がよく分らんでもいゝ。洗禮を受けさへすれば、直ぐによく分るやうになる』と勸めた。僕は可なり長い間それを躊躇してゐたが、遂に洗禮を受けた　其の注がれる水のよく滲みこむやうにと思つて、わざ〳〵頭を一厘がりにして行つて、コップの水を受けた。

此のキリスト教は、僕を『謹嚴着實』な一面に進めるのに、大ぶ力があつたやうだ。しかしそれも長くは續かなかつた。

五

僕は外國語學校の入學試驗に及第すると直ぐ、父のゐた福島へ行つた　父は其の少し前に、部下の副官の何かの不しだらの責を負うて、旅團副官から福島聯隊區の副官に左遷されたのだつた。

其後父の兄から聞いた話ではあるが、其頃父は師團長と喧嘩してゐたのださうだ。旅團長の比志島義輝が師團長の誰れとかと仲が惡くて、と云ふよりも寧ろ其の師團長に憎まれてゐて、副官たる父はいつも旅團長を擁護する地位に立たなければならなかつた。比志島は以前にも借金のために休職になつたのだが、日淸戰爭で復活して、又以前のやうに盛んに借金してゐた。そして父は、表向きの副官であるよりも、より以上に比志島家の財產整理のために忙がしかつた。旅團長は又幾度ゝ休職になりかゝつた。父は其のたびに仙臺へ行つて、旅團長のために辯解して、師團長と激論した。

そんな事から、旅團長の出す進級名簿の中からは、いつも師團長の手で父の名が削られた。そして遂に比志島は休職となつて、其のあとへ師團長のそばにゐた何んとか云ふ參謀長がやつて來た。其の結果が父の左遷となつたのださうだ。

更に其後、これは父が誰れかに話してゐるのを聞いたのだが、比志島は日露戰爭で又復活して、戰地から一萬圓二萬圓と云ふやうな金を幾度も其の債權者　もとに送つて、歸る頃には借金を全部濟ました上に、猶可なりの財產までも

つくつてゐたさうだ。

父は聯隊區司令部の直ぐそばの、僕等がまだ住んだ事もない程の、小さな汚ない家にゐた。そして女中も置かずに、僕の直ぐの妹に學校をよさして、多勢の弟妹等の世話や其他の一切をやらしてゐた。

が、僕の驚いたのは、それよりも父の甚だしい變りかただつた。年はまだ四十三四だつたのだらうが、急にふけて、もうたしかに五十を幾つもこえた老人のやうになつてゐた。そして以前には、うちの事は一切を母に任して金の事なぞはつい一ことも云つたのを聞いた事がなかつたのに、妙にけちんぼな拜金宗になつてゐた。

尤も、以前からごく質素で、自分で自分の小使錢を持つてゐた事もなく、又恐らくは金の使ひ道も知らなかつた程なので、其の由來のけちんぼが少しもそとに現はれなかつたのかも知れない。が、母が死んで、自分でうちの細かい會計までやつて見るとなると、之れが急に目立つて來たのかも知れない。

とにかく父は、月給や勳章の年金だけではとてもやつて行けない、と云つてゐた。そして、どうして母が今よりもずつとはでな生活をしてゐて、それで毎月幾らかづつ殘して行つたのかと不思議がつてゐた。父はそんな心配や、母のない多勢の子供等のための心配なぞで、急に年がふけたのだ。急に金の有りがた味を感じだしたのだ。

それで、父の兄の話を本當だとすると、父はもう軍人生活に見切りをつけて、實業界へでも鞍がへするつもりでゐたらしかつた。毎朝新聞を見るのにでも、きつと相場欄に目を通してゐた。そして僕にもそこを讀むやうに勸めて、其の讀みかたなどをいろ〳〵と講釋までしてくれた。僕はいつの間に父がそんな事を知つたのだらうと怪しんだ。が、此の實業熱も新聞の相場欄に對する熱心も、實は其の先生があつたのだ。或日、聯隊區司令官の何んとか云ふ中佐か大佐のうちへ遊びに行つたが、僕は其の司令官から父の講釋其儘の講釋を又聞かされた。

僕は父が急にふけて見すぼらしくなつたのは傷ましかつたが、しかし其の心の變化には少しも同情が出來なかつた。寧ろ父を賤みさへした。そして父の先生が其の司令官であつたのを見て、軍人が皆なそんなさもしい心になつたのぢやないかと憤慨し且つさげすんだ。

從つて、暫く目の僕の歸省も大して愉快ではなかつた。そして一ケ月ばかりして又東京に歸つた。

外國語學校ははひつて見て直ぐがつかりした。幼年學校で二年半やつて、更に其後もつい數ケ月前まで佛蘭西語學校の夜學で勉强しつゞけて、もう分らんなりにも何かの本を讀んでゐたフランス語も、又アベセの最初から始めるのだ。

たゞ、一ケ月ばかりしてから、佛人教師のジャクレエの心配で、卒業の時には本科卒業として出すと云ふ約束で全科目選修の選科生として二年へ進級したが、其の二年も素より大した事ではなかつた。そして此の二年へ行つてから氣がついたのだが、先生のまるきり無茶なのに驚かされた。フランスに十年とか十五年とかゐたと云ふ先生が、二年生の出來のいゝものよりももつと出來ないんだ。そして本一ぱいに鉛筆で何か書きつけて來て、それを拾ひよみしながら講義して、それ以外の事には何一つ生徒の質問に答へる事が出來ないんだ。そして出來る二人ばかりの先生は、怠けもので隨分よく休みもし、又出て來てもほんのお義理にいゝ加減に教へてゐた。そして其の多勢の先生の教へるものの間に、殆んど何んの聯絡もないんだ。

たゞ一人、ジャクレエ先生だけが、實に熱心に、一人で何もかも毎日二時間づつ教へた。僕は此の先生の時間だけ出ればそれで十分だと思つた。そしてそれ以外の先生の時間は出來るだけ休む事にきめた。

ちやうどその頃だ。日露の間に戰雲がだんだんに急を告げて來た。愛國の狂熱が全國に漲つた。そしてたゞ一人冷靜な非戰的態度をとつてゐた萬朝報までが、急に其の態度を變へだした。幸徳と堺と内村鑑三との三人が、悲痛な『退社の辭』をかゝげて、萬朝報を去つた。

そして幸徳と堺とは、別に週刊『平民新聞』を創刊して、社會主義と非戰論とを標榜して起つた。

それまで僕は、それらの人々とは、たゞ新聞の上の議論と、時に本鄕の中央會堂で開かれた演說會での雄辯とに接しただけで、直接にはまだ會つた事がなかつた。しかし此の旗上げには、どうしても一兵卒として參加したいと思つた。幸徳の『社會主義神髓』はもう十分に僕の頭を熱しさせてゐたのだ。

雪のふる或る寒い晩、僕は始めて數寄屋橋の平民社を訪うた。毎週社で開かれてゐた社會主義研究の例會の日だつた。

玄關をはひつた直ぐ左の六疊か八疊の室には、まだ三四人の、しかも內輪の人らしい人しかゐなかつた。そして其の中の年とつた一人と若い一人とが切りに何か議論してゐた。僕は默つて、そこから少し離れて、壁を背にして坐つた。議論は宗教問題らしかつた。年とつた方は安坐をかいて片肱を膝に立てて頭をなでながら、切りに相手の青年をひやかしながら無神論らしい口吻をもらしてゐた。青年の方はきちんと坐つて、兩手を膝に置いて肩を怒らしながら、眞赤になつて途方もないやうなオオソドクスの議論に、文字通りに泡を飛ばしてゐた。そして其の間に、ちよい〳〵ともう一人の年とつたのが、それが堺である事は始めから知つてゐた。先きの男ほど突つこんでではないがやはり其の青年を相手に口を入れてゐた。

僕は其の青年の口をついて出る雄辯には驚いたが、しかし又、其の議論のあまりなオオソドクスさにも驚いた。僕も彼れとは同じクリスチヤンだつた。が、僕は全然奇蹟を信じないのに反して、彼れは殆んどそれをバイブルの文句通りに信じてゐた。僕は神は自分の中にあるものと信じてゐたのに反して、彼れは萬物の上にあつてそれを支配するものと信じてゐた。僕はこんな男がどうして社會主義に來たんだらうとさへ思つた。そして無神論者らしい年とつた男の冷笑の方に寧ろ同感した。

此の年とつた男と云ふのは久津見蕨村で、青年と云ふのは山口孤劍だつた。

やがて二十名ばかりの人が集まつた。そして、多分堺だつたらうと思ふが、『けふは雪も降るし、大ぶ新顏が多いやうだから、講演はよして、一つしんみりと皆んなの身上話やどうして社會主義にはひつたかと云ふやうな事をお互に話しよう。』と云ひだした。皆んなが順々に立つて何か話した。或る男は、『私は資本家の子で、日清戰爭の時、大倉が罐詰の中へ石を入れたと云ふ事が評判になつてゐるが、あれは實は私のところの罐詰なんです。尤もそれは私のところでやつたんではなくつて、大倉の方で或る策略からやつたらしいんではあるが』と云つた。

『それぢや、やはり大倉の罐詰ぢやないか。どうもそれや、君のところでやつたと云ふよりは大倉がやつたと云ふ方が面白いから、やはり大倉の方にして置かうぢやないか。』

から云つたのもやはり堺だつたらうと思ふ

が、皆んなも「さうだ、さうだ、大倉の方がいゝ」と賛成して大笑ひになつた。其の資本家の子と云ふのは、今の金鶏ミルクの主人邊見何んとか云ふのだつた。

もう殆んど最後近い頃に僕の番が來て、僕も、『軍人の家に育ち、軍人の學校に敎へられて、軍人生活の虛僞と愚劣とを最も深く感じてゐるところから、此の××××××のために一生を捧げたい』と云ふやうな事を云つた。

そして最後に又堺が立つて、『こゝには資本家の子があり、軍人の子があり、何んとかがあり、何んとかがあり、實に吾々の思想は今や天下の有らゆる方面にまで擴がつてゐる。吾々の運動は天下の大運動にならうとしてゐる。吾々の理想する社會の來るのも決して遠い事ではない』と云ふ激勵の演說があつた。

僕はさう云はれて見ると、本當にそんなやうな氣がして、非常にいゝ氣持になつて下宿へ歸つた。其日、幸德がそこにゐたかどうかはよく覺えてゐない。

それ以來僕は每週の研究會には必ず缺かさずに出た。そして、それ以外の日にもよく遊びに行つたが、殊に下宿を登坂や田中のゐた月島に移してからは、殆んど每日學校の往復に寄つて、雜誌の帶封を書く手傳ひなぞをして一日遊んでゐた。

六

平民社は幸德と堺と西川光二郎と石川三四郎との四人で、石川を除くほかは皆な大の宗敎嫌ひだつた。尤もそとから社を後援してゐた安部磯雄や木下尙江は石川と共に熱心なクリスチャンだつた。そしてそこに集まつて來た靑年の大半も、やはりクリスチャンだつた。當時の思想界ではクリスト敎が一番進步思想だつたのだ。少なくとも忠君愛國の支配的思想に背く最も多くの分子を含んでゐたのだ。

幸德や堺等は可なり辛辣に宗敎家を攻擊もし又冷笑もした。そして研究會ではよく宗敎の問題が持ちあがつた。しかし幸德や堺等は、宗敎は個人の私事だと云ふドイツ社會民主黨の何かの決議を守つて、同志の宗敎には敢て干涉しなかつた。

石川は本鄕會堂での僕の先輩だつた。が、其頃にはもう敎會と云ふものにあいそをつかして、殆んど敎會に行く事もなかつたらしい。僕も平民社へ出入りするやうになつてからは、皆んなの感化で、先づ宗敎家と云ふものに、次ぎには宗敎其者に、だん〲疑ひを持ち始めた。そして日露の開戰が僕と宗敎とを綺麗に緣を切つてくれた。

僕は、海老名彈正が僕等に敎へたやうに、宗敎が國境を超越するコスモポリタニズムであり、地上の一切の權威を無視するリベルタリアニズムだと信じてゐた。そして當時思想界で流行りだしたトルストイの宗敎論は、益々僕等に此の信念を抱かせた。そして又僕は、海老名彈正の『基督傳』やなんとか云ふ佛敎の博士の『釋迦牟尼傳』の、クリスト敎及び佛敎の起原のところを讀んで、やはりトルストイの云ふやうに、原始宗敎卽ち本當の宗敎は貧富の懸隔から來る社會的不安から脫け出ようとする一種の共產主義運動だと思つてゐた。

然るに、戰爭に對する宗敎家の態度、殊に僕が信じてゐた海老名彈正の態度は、盡く僕の此の信仰を裏切つた。海老名彈正の國家主義的大和魂的クリスト敎が、僕の目にはつきりと映つて來た。戰勝祈禱會をやる。軍歌のやうな讚美歌を歌はせる。忠君愛國のお說敎をする。『我れは平和を齎さんがために來れるに非ず』と云ふやうなクリストの言葉を飛んでもないところへ引合に出す。僕はあきれ返つて了つた。そ

して、海老名彈正だの、當時よくトルストイ物を飜譯してゐた加藤直士だのと數回議論をしたあとで、すつかり教會を見限つて了つた。そして又同時にうつかりはひりかけた『右の頰を打たれたら左の頰を出せ』と云ふ宗教の本質の無抵抗主義にも疑を持つて、階級闘爭の純然たる社會主義にはひることが出來た。

戰爭が始まると直ぐ、父は後備混成第何旅團かの大隊長となつて、旅順へ行つた。

僕は父の軍隊を上野停車場で迎へた。そして一晩驛前の父の宿に泊つた。

僕は父が馬上で其の一軍を指揮する、こんなに壯烈な姿は始めて見た。ちよつと涙ぐましいやうな氣持にもなつた。しかし、何んだか僕には、父の其の姿が馬鹿らしくもあつた。『何んのために、××××××××××と思ふと、父のために悲しむと云ふよりも寧ろ馬鹿馬鹿しかつたのだ。

宿にはひつてからも、父や其の部下の老將校等は皆な會ふ人ごとに『これが最後のお勤めだ』と云つて、たゞもう喜び勇んでゐた。僕は又それが益々馬鹿々々しかつた。

父は僕にたゞ『よく勉強しろ』と云つただけで、別に話したい樣子もなく、たゞそばに置いて顏を見てゐればいゝと云ふやうな風だつた。

七　獄中生活

一　市ケ谷の卷

東京監獄の未決監に『前科割り』と云ふあだ名の老看守がゐる。

被告人共は裁判所へ呼び出されるたびに、一馬車(此頃は自動車になつたが)に乘る十二三人づつ一組になつて、薄暗い廣い廊下のあちこちに一列にならべさせられる。そして其處で、手錠をはめられたり腰繩をかけられたりして、護送看守部長の點呼を受ける。『前科割り』の老看守は一組の被告人に普通二人づつつく此の護送看守の一人なのだ。いつ頃から此の護送の役目についたのか、又いつ頃から此の『前科割り』のあだ名を貰つたのか、それは知らない。しかし、少なくとももう三十年位は、監獄の飯を食つてゐるに違ひない。年は六十にとゞいたか、まだか、位のところだらう。

被告人共が廊下に呼び集められた時、此の老看守は自分の受持の組は勿論、十組あまりのほかの組の列までも見廻つて、其の受持看守から『索引』をかりて、それと皆んなの顏とを見くらべて歩く。『索引』と云ふのは被告人の原籍、身分、罪名、人相などを書きつけた云はゞまあカアドだ。

『お前は何處かで見た事があるな。』

しばらく其のせいの高い大きなからだをせかせかと小股で運ばせながら、無事に幾組かを見廻つて來た老看守は、ふと僕の隣りの男の前に立ちどまつた。そして其の色の黑い、醜い、しかし無邪氣なにこ〳〵顏の、如何にも人の好ささうな細い眼で、じろ〳〵と其の男の顏をみつめながら云つた。

『さうだ、お前は大阪にゐた事があるな。』

老看守はびつくりした顏付きをして默つてゐる其の男に言葉をついだ。

『いや、旦那、冗談云つちや困りますよ。わたしや、こんど始めてこんなところへ來たんですから。』

其の男は老看守の人の好ささうなのにつけこんだらしい馴れ〳〵しい調子で、手錠をはめられた手を窮屈さうにもみ手をしながら答へた。

『うそを云へ。』

老看守はちつとも睨みのきかない、直ぐにほ

ほゝゑみの見える、僕の細い眼をちよつと光らせて見て、

『さうだ、たしかに大阪だ。それから甲府にも一度はひつた事があるな。』

と又獨りでうなづいた。

『違ひますよ、旦那、全く始めてなんですよ。』

其の男はやはり切りともみ手をしながら腰をかゞめてゐた。

『なあに、白つぱくれても駄目だ。それから其の間に一度巣鴨にゐた事があるな。』

老看守は其の男の云ふ事なぞは碌に聞かずに、自分の云ふだけの事を續けて行く。其の男も、もうもみ手はよして、圖星を指されたかのやうに默つてゐた。

『それからもう一度何處かへはひつたな。』

『へえ。』

たうとう其の男は恐れ入つて了つた。

『何處だ？』

『千葉でございます。』

竊盜か何かでつかまつて、警察、警視廳、検事局と、いづれも初犯で通して來た其の男は、たうとうこれで前科四犯ときまつて了つた。そして、

『實際あの旦那にかゝつちや、とても遣りきれませんよ。』

と、さつきから不思議さうに此の問答を聞いてゐた僕にさゝやいて云つた。

本年の三月に僕がちよつと東京監獄へ行つた時にも、やはり此の老看守は、其の十二年前のやはり三月に僕が始めて見た時と同じやうに、まだ此の前科割りを續けてゐた。

『やあ、又來たな。こんどは何んだ。大分暫く目だな。』

老看守は其の益々黑く、益々醜くなつた、しかし相變らず人の好ささうな顏をにこにこさせてゐた。

僕は今、此の老看守に向つた時の懷しい、しかし恐れ入つた心持で、僕自身の前科割りをする。

と云つても、實は本當にはよく覺えてゐないんだ。つい三四ケ月前には、米騷動や新聞の事でたびたび検事局へ呼び出されていろいろ訊問されたが、其の時にもやはり自分の前科の事は滿足に返事が出來なかつた。そしてたうとう、

『あなたの方の調べには間違ひなく詳しく載つてるんでせうから。』

と云ふやうな事で、検事にそれを讀みあげて貰つて、

『まあ、そんなものなんでせう。』

と曖昧に濟まして了つた。ところが、あとでよく考へて見ると、検事の調べにも少々間違ひがあつたやうだ。何んでも前科が一つ減つてゐたやうに思ふ。

當時の新聞雜誌でも調べて見れば直ぐに判然するのだらうが、それも面倒だから、今はたゞ記憶のまゝに罪名と刑期とだけを掲げて置く。何年何月の幾日にはひつて、何年何月の幾日に出たのかは、一つも覺えてゐない。監獄での自分の名の『襟番號』ですらも、一番最初の九七七と云ふたつた一つしか覺えてゐない。これは僕ばかりぢやない。ためしに堺（利彦）にでも、山川（均）にでも、山口（孤劍）にでも、其他僕等の仲間で前科の三四犯もある誰れにでも訊いて見るがいゝ。皆んなきつと碌な返事は出來やしない。それから次ぎに列べた最初の新聞紙條令違犯（今は新聞紙法違犯と變つた）の刑期も、ほんのうろ覺えではつきりは覺えてゐない。

一、新聞紙條令違犯　（秩序紊亂）　三ケ月

二、新聞紙條令違犯　（朝憲紊亂）　五ケ月

三、治安警察法違犯（屋上演説事件）　一月半
四、兇徒聚集罪（電車事件）　二ケ年
五、官吏抗拒罪 治安警察法違犯（赤旗事件）　二年半

　これで見ると、前科は五犯、刑期の延長は六年近くになるが、實際は三年と少ししか勤めてゐない。先日ちよつと日本に立ち寄つた革命の婆さん、プレシュコフスカヤの三十年に較べれば、其の僅かに一割だ。堺も山川も山口も前科は僕と同じ位だが、刑期は山口や山川の方が一二年多い筈だ。僕なんぞ仲間のうちではずつと後輩の方なんだ。

　初陣は二十二の春、日本社會黨（今はこんなものはない）の發起で電車値上（片道三錢から五錢にならうとした時）反對の市民大會を開いた時の兇徒聚集事件だが、三月に未決監にはひつて其の年の六月に保釋で出た。そして其のほかの四つの事件は、此の兇徒聚集事件が片づくまでの、二年餘りの保釋中の出來事なんだ。一から三までの三事件九ケ月半の刑期も此の保釋中に勤めあげた。

　斯うして一ケ月かせい〴〵六ケ月の日の目を見ては、出たりはひつたりしてゐる間に、たうとう二十四の夏錦輝館で例の××××の赤旗をふり廻して捕縛され、それと同時に電車事件の方の片もついたのであつた。そして當時の有りがたい舊刑法のお蔭で、新聞紙條令違犯の一件を除く他の三件は併合罪として重きによつて處斷すると云ふ事で、電車事件の二ケ年も又既に勤めあげた屋上演説事件の一月半も、すべて赤旗事件の二ケ年半の中に通算されて了つた。云はゞまあゼロになつちやつたんだ。

　檢事局では地團太ふんでくやしがつたさうだ。さうだらう。保釋中に三度も牢にはひつてゐるのに、保釋中だと云ふ事をすつかり忘れてゐたんだ。しかし僕の方ではお蔭さまで大儲けをした。が、其の年の十月から今の新刑法になつて、同時に幾つ犯罪があつても一つ一つ嚴重に處罰する事になつたから、もう二度とこんないゝ儲けはあるまい。

　それで二十七の年の暮れ、丁度幸徳等の逆徒共が死刑になる一ケ月ばかり前に、暫く目で又日の目を見て、それ以來今日までまる七年の間ずつと謹愼してゐる。

　だから、僕の獄中生活と云ふのは、二十二の春から二十七の暮までの、ちよいちよい間を置いた六年間の事だ。そして僕が分別盛りの三十四の今日まだ、危險人物なぞと云ふ物騷な名を歌はれてゐるのは、二十二の春から二十四の夏までの、血氣に逸つた若氣のあやまちからの事だ。

　尤も、其後一度ふとした事からちよつと東京監獄へ行つた事がある。しかしそれは決して血氣の逸りでも又若氣のあやまちでもない。現に御役人ですら、どうも相濟みません、と云つて謝まつて歸してくれた程だ。それは本年の事で、事情はざつと斯うだ。

　三月一日の晩、上野の或る仲間の家で同志の小集があつた。その歸りに、もう遲くなつてとても龜戸までの電車はなし、和田の古巣の涙橋の木賃宿にでも泊つて見ようかと云ふ事になつて、僕の家に同居してゐた和田、久板の二人と一緒に、三輪から日本堤をてくつて行つた。此の和田も久板も今は初陣の新聞紙法違犯で東京監獄にはひつてゐるが、本年の二科會に出た林倭衞の『H氏の肖像』と云ふのは此の久板の肖像だ。

　吉原の大門前を通りかゝると、大勢人だかりがしてわい〱騷いでゐる。一人の勞働者風の

男が酔つぱらつて過つて或る酒場の窓ガラスを毀したと云ふので、土地の地廻り共と巡査とが其の男を捕へて辨償しろの拘引するのと責めつけてゐるのだつた。

其の男はみすぼらしい風態をして、よろ〳〵よろけながら切りに謝まつてゐた。僕はそれを見かねて仲へはひつた。そして其の男を五六歩わきへ連れて行つて、事情を聞いて、其處に集まつてゐる皆んなに云つた。

『此の男は今一文も持つてゐない。辨償は僕がする。それで濟む筈だ。一體、何か事のある毎に一々そこへ巡査を呼んで來たりするのはよくない。何んでもお上には成るべく御厄介をかけない事だ。大がいの事は、斯うして、そこに居合はした人間だけで片はつくんだ。』

酒場の男共もそれで承知した。地廻り共も承知した。見物の彌次共も承知した。しかしたゞ一人承知の出來なかつたのは巡査だ。

『貴樣は社會主義だな。』

始めから僕に脹れつ面をしてゐた巡査は、いきなり僕に食つてかゝつた。

『さうだ、それがどうしたんだ。』

僕も巡査に食つてかゝつた。

『社會主義か、よし、それぢや拘引する。一緒に來い。』

『それや面白い。何處へでも行かう。』

僕は巡査の手をふり拂つて、其の先きに立つて直ぐ眼の前の日本堤署へ飛びこんだ。當直の警部補はいきなり巡査に命じて、僕等のあとを追つて來た他の二人までも一緒に留置場へ押しこんで了つた。

これが當時の新聞に『大杉榮等檢擧さる』とか云ふ事々しい見だしで、僕等が酔つぱらつて吉原へ繰りこんで、巡査が酔ひどれを拘引しようとする邪魔をしたとか、其の酔ひどれを小脇にかゝへて逃げ出したとか、いゝ加減な譃つぱちをならべ立てた事件の簡單な事實だ。

そして翌朝になつて、警部が出て來て切りにゆうべの粗忽を謝まつて、『どうぞ默つて歸つてくれ』と朝飯まで御馳走して置きながら、いざ歸らうとすると、こんどは署長が出て來て、どうした事か再び又もとの留置所へ戻されて了つた。

斯くして僕等は、職務執行妨害と云ふ名の下に、警察に二晩、警視廳に一晩、東京監獄に五晩、とんだ木賃宿のお客となつて、

『どうも相濟みません。どうぞこれで御歸りを願ひます』と云ふ挨拶で歸された。

元來僕は、酒は殆んど一滴も飲めない、女郎買ひなぞは生れて一度もした事のない、そして女房と腕押しをしてもいつも負ける位の實に品行方正な意氣地なしなのだ。

それから、これは本年の夏、一週間ばかり大阪の米一揆を見物して歸つて來ると、

『ちよつと警察まで。』

と云ふ事で、其の足で板橋署へ連れて行かれて、十日ばかりの間『檢束』と云ふ名義で警察に泊め置かれた。

しかしそれも、何も僕が大阪で悪い事をしたと云ふ譯でもなく、又東京へ歸つて何かやるだらうと云ふ疑ひからでもなく、たゞ時が時だから暴徒と間違はれて巡査や兵隊のサアベルにかかつちや可哀想だと云ふお上の御深切からの事であつたさうだ。立派な座敷に通されて、三度三度署長が食事の註文をきゝに來て、そして毎日遊びに來る女をつかまへて、

『どうです、奥さん。こんなところで甚だ恐縮ですが、決して御心配はいりませんから、あなたも御一緒にお泊りなすつちや。』

などと眞顏に云つてゐた位だから多分僕もさうと信じ切つてゐる。當時の新聞に、僕が大

阪で路傍演說をしたとか拘引されたとか、ちよいちよい書いてあつたさうだが、それは皆んなまるで根も葉もない新聞屋さん達のいたづらだ。

其他、斯う云ふ種類のお上の御深切から出た『檢束』ならちよつとは數へ切れない程あるが、それは何も僕の惡事でもなければ善事でもない。

とにかく、僕の事と云ふと何處ででも何事にでも誤解だらけで困るので、先づこれだけの辯解をうんとして置く。

『さあ、はひれ。』

ガチャ〳〵とすばらしい大きな音をさせて、錠をはづして戸を開けた看守の命令通りに、僕は今渡された蒲團とお膳箱とをかゝへて中へはひつた。

『その箱は棚の上へあげろ。よし、それから蒲團は枕をこつちにして二枚折に疊むんだ。よし。あとは又あした敎へてやる。直ぐ寢ろ。』

看守は簡單に云ひ終ると、ガタン〳〵ガチャガチャと、室ぢうと云ふよりも寧ろ家ぢう震へ響くやうな恐ろしい音をさせて戸を閉めて了つた。

『これが當分僕のうちになるんだな。』

と思ひながら僕は突つ立つたまゝ先づあたりを見廻した。三疊敷ばかりの小綺麗な室だ。まだ新しい緣なしの疊が二枚敷かれて、入口と反對の側の窓下になるあと一枚分は板敷になつてゐる。其の右の方の半分のところには、隅つこに水道栓と鐵製の洗面臺とがあつて、其の下に箒と塵取と雜巾とが掛つてゐて、雜巾桶らしいものが置いてある。左の方の半分は板が二枚になつてゐて、其の眞ん中に丁度指をさしこむ位の穴がある。何んだらうと思つて其の板をあげて見ると、一尺程下に人造石が敷いてあつて、其の眞ん中に小さなとり手のついた長さ一尺程の細長い木の蓋が置いてある。それを取りのけるとブウンとデシンらしい強い臭ひがする。便所だ。早速中へはひつて小便をした。下には空つぼの桶が置いてあるらしくジャ〳〵と音がする。板をもと通りに直して水道栓をひねつて手を洗ふ。窓は脊伸びして漸く目のところが届く高さに、幅三尺高さ四尺位についてゐる。ガラス越しに見たそとは星一つない眞暗な夜だつた。室の四方は二尺位づつの間を置いた三寸角の柱の間に厚板が打ちつけられてゐる。そして高い天井の上からは五燭の電燈が室ぢうをあか〳〵と照らしてゐた。

『これなら上等だ。コンフォルテブル・エンド・コンヴェニエント・シンプル・ライフ！』

と僕は獨りごとを云ひながら、室の左側の隅の下に横へてある手拭掛け棒に手拭をかけて、さつき着かへさせられて來た青い着物の青い紐の帶をしめ直して、床の中にもぐりこまうとした。

『が皆んなは何處にゐるんだらう？』

僕は四五日前の市民大會當日に拘引された十人ばかりの同志の事を思つた。そして入口の戸の上の方についてゐる『のぞき穴』からそつと廊下を見た。さつきもさう思ひながら左右をきよろきよろと見て來た廊下だ。二間ばかり隔てた向う側にあの恐ろしい音を立てる閂様の白く磨ぎ澄まされた大きな鐵の錠を鼻にして、其の上の『のぞき穴』を目にして、そして下の方の五寸四方ばかりの『食器口』の窓を口にした巨人の顏のやうな戸が、幾つも幾つも並んで見える。其の目からは室の中からの光りが薄暗い廊下にもれて、其の曲りくねつた鼻柱はきら〳〵と白光りしてゐる。しかし、厚い三寸板の戸の内側を細く削つた此の『のぞき穴』は、そとからうちを見るには便宜だ　うが、うちからそとを

窺くにはまづかつたので、こんどは蹲んで、そつと「食器口」の戸を爪で開けて見た。僕の巨人の顔は前よりも多く、此の建物の端から端までのが皆んな見えた。しかし其の二十幾つかの顔のどの目からも豫期してゐた相當の人間の目は出て來なかつた。そして皆んなこつちを睨んでゐるやうに見える巨人の顔が少々薄氣味惡くなり出した。

「もう皆んな寢たんだらう。僕も寢よう。皆んなの事は又あしたの事だ。」

僕はそつと又爪で戸を閉めて、急いで寢床の中へもぐりこんだ。綿入一枚、繻袢一枚の寒さに慄へてもゐたのだ。

すると、室の右側の壁板に、

「コツコツ、コツコツ、コツコツ。」

と音がする。僕は飛びあがつた。そしてやはり同じやうに、コツコツ、コツコツ、コツコツと握拳で板を叩いた。ロシアの同志が、獄中で、此のノックで話をする事はかねて本で讀んでゐた。僕はきつと誰れか同志が隣りの室にゐて、僕に話しかけるのだと思つた。

『あなたは大杉さんでせう?』

しかし其の聲は、聞き覺えのない、子供らしい聲だつた。

「え、さうです。君は?」

僕も其の聲を眞似た低い聲で問ひ返した。知らない聲の男だ。それだのに今はひつて來たばかりの僕の名を知つてゐる。僕はそれが不思議でならなかつた。

「私は何んでもないんですがね。たゞお隣りから言ひつかつて來たんですよ。皆んなが、あなたの來るのを毎日待つてゐたんですつて。そいで、今新入りがあつたもんですから、きつとあなただらうと云ふんで、ちよつと訊いてくれつて頼まれたんですよ。」

「君のお隣りの人つて誰れ?」

僕は事の益々意外なのに驚いた。

「××さんと云ふ燒打事件の人なんですがね。其の人と山口さんが向ひ同士で、毎日お湯や運動で一緒になるもんですから、あなたの事を山口さんに頼まれてゐたんです。」

「其の山口とはちよつと話が出來ないかね。」

「え、少し待つて下さい。お隣りへ話して見ますから。今丁度看守が休憩で出て行つたところなんですから。」

暫くすると、食器口を開けて見ろと云ふので、急いで開けて見ると、向う側の丁度前から三つ目の食器口に眼鏡をかけた山口の顔が半分見える。

「やあ、來たな。堺さんはどうした? 無事か?」

「無事だ。きのふちよつと警視廳へ呼ばれたが、何んでもなかつたやうだ。」

「それや、よかつた。ほかには、君のほかに誰れか來たか。」

「いや、僕だけだ。」

と僕は答へて、ひよいと顔を引つこめた山口を『おい、おい』と呼び出した。

「ほかのものは皆んな何處にゐるんだ、西川(光二郎)は?」

『シツ、シツ。』

山口はちよつと顔を出して、斯う警戒しながら、又顔を引つこまして了つた。コトン〳〵と遠く　方から靴音がした。僕は急いで又寢床の中へもぐりこんだ。靴音はつい枕許まで近く聞えて來たが、又だん〳〵遠くのもと來た方へ消えて行つた。

「コツコツ、コツコツ、コツコツ。」

と又隣りで壁を叩く音がした。そして此の隣りの男を仲介にして、其の隣りの××と云ふ男と、暫く話した。西川は他の二三のものと二階に、そして此處にも僕と同じ側にもう一人

ゐる事が分つた。
　僕はもう面白くて堪らなかつた。きのふの夕方拘引されてから、始めての入獄をたゞ好奇心一ぱいに、こんどはどんな處でどんな目に遭ふのだらうとそれを樂しみに、警察から警視廳、警視廳から檢事局、檢事局から監獄と、一歩々々引かれるまゝに引かれて來たのが、これで十分に滿足させられて、落ちつく先のきまつた安易さや、仲間のものと直ぐ目と鼻の間に接近してゐる心強さなどで、一枚の蒲團に柏餅になつて寢る窮屈さや寒さも忘れて、一二度寢返りをしたかと思ふうちに直ぐ眠つて了つた。
　翌日は雨が降つて、そとへ出て運動が出來ないので、朝飯を濟ますと直ぐに、三四人づつ廊下で散歩させられた。
　僕は例の食器口を開けて、皆んなが廊下の周りを廻つて歩くのを見てゐた。山口と一緒のゆうべ隣りの男を仲介にして話した男とも目禮した。そしてもう一人の同志と一緒にゐるのが、當時有名な事件だつた寧齋殺しの野口男三郎だと云ふ事は、其の組が散歩に出ると直ぐ隣りの男から知つた。男三郎も、其の連れから僕の事を聞いたと見えて、僕と顏を合せると直ぐ目禮した。
　男三郎とはこれが縁になつて、其後二年餘りして彼れが死刑になるまでの間、碌に口もきいた事はないのだが大ぶ親しく交はつた。其の間に僕は、出たりはひつたりして二三度暫くここに滯在し、其他にも巢鴨の既決監から餘罪で幾度か裁判所へ引き出されるたびに一晩は必ずこゝに泊らされた。そして殊に既決囚になつてゐる不自由な身の時には、隨分男三郎の厄介になつた。男三郎自身の手から或は雜役と云ふ看守の小使のやうになつて働いてゐる囚人の手を經て、幾度か半紙やパンを例の食器口から受取つた。僕もそとへ出たたびに何かの本を差入れてやつた。
　男三郎は獄中の被告人仲間の間でも頗る不評判だつた。典獄はじめいろんな役人共に切りに胡麻をすつて、其のお蔭で大ぶ可愛がられて、死刑の執行が延び〳〵になつてゐるのも其のためだなぞと云ふ話だつた。面會所のそばの、自分の番の來るのを待つてゐる間入れて置かれる一室、二尺四方ばかりの俗にシャモ箱と云ふ小さな板圍の中には、「極惡男三郎速かに斬るべし」と云ふやうな義憤の文句が、あちこちの壁に爪で書かれてゐた。
　僕なぞと親しくしたのも、一つは、自分を世間に吹聽して貰ひたいからであつたかも知れない。現にそんな意味の手紙を一二度獄中で貰つた。其の連れになつてゐた同志にもいつもそんな意味の事を云つてゐたさうだ。
　要するに極く氣の弱い男なんだ。其の女の寧齋の娘や子供の事なぞを話す時には、いつも本當に涙ぐんでゐた。子供の寫眞は片時も離した事がないと云つて、一度それを見せた事もあつた。又、これは自分が描いた女と子供の繪だと云つて、雜誌の口繪にでもありさうな彩色した繪を見せた事もあつた。どうしても何かの口繪をすき寫ししたものに違ひなかつた。しかし繪具はどうして手に入れたらう。餘程の苦心をして何かから搾り取つて寄せ集めでもしたものに違ひない。が、何んの爲めにそれだけの苦心をしたのだらう。しかもそれは、自分の女や子供の繪ではなく、全く似てもつかない他人の顏なのだ。
　寧齋殺しの方は證據不十分で無罪になつたとか云つて非常に喜んでゐた事があつた。又、本當か譃か知らないが、藥屋殺しの方は別に共犯者があつて其の男が手を下したのだが、うまく無事に助かつてゐるので、其の男が毎日の食

事の差入や辯護士の世話をしてくれてゐるのだとも話してゐた。そして或時なぞは、何か其の男の事を非常に怒つて、法廷ですつかり打ちあけてやるのだなどといきごんでゐた事もあつた。

　其後赤旗事件で又未決監にはひつた時、或日その運動場で散歩してゐると、男三郎が二階の窓から顔を出して、半紙に何か書いたものを見せてゐる。それには、

『ケンコウヲイノル。』

と片假名で大きく書いてあつた。僕は默つて頷いて見せた。男三郎もいつものやうににやにやと寂しさうに微笑みながら、二三度お辭儀をするやうに頷いて、暫く僕の方を見てゐた。

　其の翌日か、翌々日か、たうとう男三郎がやられたと云ふうはさが獄中にひろがつた。

　出歯龜にもやはりこゝで會つた。目立つ程の出歯でもなかつたやうだ。いつも見すぼらしい風をして背中を丸くして、にこ〳〵笑ひながら、ちよこ〳〵走りに歩いてゐた。そして皆んなから、

『やい、出歯龜。』

なぞとからかはれながら、やはりにこ〳〵笑つてゐた。刑のきまつた時にも、

『やい、出歯龜、何年食つた？』

と看守に訊かれて、

『へえ、無期で。えへゝゝ。』

と笑つてゐた。

　それから、やはりこゝで、運動や湯の時に一緒になつて親しい獄友になつた三人の男がある。

　一人は以前にも強盜殺人で死刑の宣告を受けて、終身懲役に減刑されて北海道へやられてゐる間に逃亡して、又強盜殺人で捕まつて再び死刑の宣告を受けた四十幾つかの太つた大男だつた。もう一人は、やはり四十幾つかの上方者らしい優男で、これは紙幣僞造で京都から控訴か上告かして來てゐるのだつた。そして最後のもう一人は、六十幾つかの白髪豐かな品のいい老人で、詐僞取財で僕よりも後にはひつて來て、僕等の仲間にはひつたのだつた。

　強盜殺人君はよく北海道から逃亡した時の話をした。一ケ月ばかり山奥にかくれて、手當り次第に木の芽だの根だのを食つてゐたのださうだが、

『何んだつて食へないものはないよ、君。』

と入監以來どうしても剃刀を當てさせないで生えるがまゝに生えさせてゐる粗髯を撫でながら、小さな目をくる〳〵させてゐた。

　そして、

『どうせ、いつ首を絞められんだか分らないんだから……』

と言つて、出來るだけ我儘を云つて、少しでもそれが容れられないと荒れ狂ふやうにして亂暴した。湯も皆なよりは長くはひつた。運動も長くやつた。お蔭樣で僕等の組のものはいろいろと助かつた。此の男の前では、どんな鬼看守でも、急に佛樣になつた。看守が何か手荒な事を囚人や被告人に云ふかするかすれば、此の男は仁王立ちになつて、ほかの看守がなだめに來るまで怒鳴りつゞけ暴れつゞけた。其の代り少しうまくおだてあげられると、猫のやうにおとなしくなつて、子供のやうに甘えてゐた。

　或時なぞは、窓のそとを通る女看守が、其の連れて來た女の被告人か拘留囚かがちよつと編笠をあげて男共のゐる窓の方を見たとか云つて、うしろから突きとばすやうにして叱つてゐるのを見つけた彼れは、終日、

『伊藤の鬼婆あ、鬼婆あ、鬼婆あ！』

と聲をからして怒鳴りつゞけてゐた。看守の

名と云つては、誰れ一人のも覺えてゐない今、此の伊藤と云ふ名だけは今でもまだ僕の耳に響き渡つて聞える。何んでも、もう大ぶ年をとつた、脊の高い女だつた。其の時には、丁度僕も、雜巾桶を踏臺にして、女共の通るのを眺めてゐた。

仲間のものには極く人の好い此の强盜殺人君が、たつた一度、紙幣僞造君を怒鳴りつけた事がある。僞造君は長い間滿洲地方で淫賣屋をしてゐたのださうだ。そして其の度々變へた女房と云ふのは皆んな内地で身受けした藝者だつたさうだ。僞造君はそれらの細君にもやはり商賣をさせてゐたのだ。

『貴樣はひどい奴だな。自分の女房に淫賣をさせるなんて。此の馬鹿ツ。』

と殺人君は運動場の眞ん中で、恐ろしい勢で僞造君に食つてかゝつた。それを漸くの事で僕と詐欺老人とで和めすかした。

『俺れは强盜もした、火つけもした。人殺しもした。しかし自分の女房に淫賣をさせるなぞと云ふ惡い事はした事がない。君はそれでちつとも惡いとは思はんのか。氣持が惡い事はないのか。』

漸く靜まつた彼れは、こんどはいつものやうに『君』と呼びかけて、僞造君におとなしく詰問した。

『いや、實際僕はちつとも惡い氣もせず、又惡いとも思つちやゐない。まるで當り前のやうにして今までさうやつて來たんだ。それに僕の女房はいつでも一番澤山儲けさしてくれたんだ。』

僞造君はまだ蒼い顔をして、おづ〳〵しながら、しかし正直に白狀した。品はいゝがしかし何處か助平らしい、いつも十六七の女を妾にしてゐると云ふ詐欺老人は『アハヽヽ』と大きな口を開いて嬉しさうに笑つた。殺人君は呆れた奴等だなと云ふやうな憤然とした顔をしながら、それでも矢張りしまひには詐欺老人と一緒になつてにこ〳〵笑つてゐた。

僞造君と詐欺老人とは仲善く一緒に歩いてゐた。二人は『花』の賭け金の額を自慢し合つたり、自分の犯罪のうまく行つた時の儲け話などをしてゐた。僞造君は前にロシヤ紙幣の僞造をして、隨分大儲けをした事があるんださうだ。詐欺老人のは大抵印紙の消印を消して賣るのらしかつた。そして老人は、

『こんど出たら君がやつたやうな寫眞で僞造をして見ようか。』

と云ひながら、切りに僞造君に、寫眞でやる詳しい方法の說明を訊いてゐた。

僕は折々差入の卵やパンを殺人君に分けてやつて、其の無邪氣な氣焰を聞くのを樂しみにしてゐた。

殺人君は宣告後三年か四年か無事でゐて、多分證據が十分でなかつたのだらうと思ふが、其後又死一等を減ぜられて北海道へやられたさうだ。

二　巢鴨の卷

巢鴨行きと云へば、世間では、電車は別として多少氣の觸れた人間の事を指すが、僕等の間では監獄行きの事になる、だが、此の僕等と云ふ奴等は、世間からは隨分氣違ひ扱ひされてもゐるのだから、どつちにしても要するに同じ事になるのだらうが。

此の巢鴨へは都合三度行つた。と云つても實は二度で、最初の新聞紙條令違犯で食つてゐるうちに、二度目の新聞紙條令違犯がきまつて、前のが滿期になると直ぐ引續いてあとのを勤めた。次ぎが治安警察法違犯。

多分鍛冶橋のだらうと思ふが、古い謂はゆる

牢屋が打ち壞されて、石と煉瓦との新しい監獄がこゝに出來た時、其の古い牢屋の古木で、古い牢屋其儘の建物が一つこゝの一隅に建てられた、と云ふ話だ。そして此の建物は、めくらだとかびつこだとか、足腰のろくに利かない老人だとかの、片輪者や半病人をいれる半病監みたやうなものになつてゐた。僕は二度とも此の建物の中の廣い一室をあてがはれた。

始め東京監獄からこゝに移されて、冷たい暗い一室の中にはふり込まれた時には、實は少々心細かつた。春ももう夏近い暖かい太陽のぽかぽかと照る正午近い頃だつた。それだのに、室へはひると、急に冷たい空氣にからだぢうをぞつと打たれる。四方の眞白に塗つた煉瓦の壁や、入口の大きな鐵板の扉は、見るからにひいやりとさせる。試みにそれに手をあてて見ると、そこからぞく／＼と冷たさが身にしみて來る。それに、窓が伸びあがつてもとゞかない上の方に小さく開いてゐるので薄暗くて陰氣だ。座席として板の間に敷いてある一枚のうすべりまでが、べと／＼と濕つてゐるやうな氣がする。

命ぜられたまゝ、扉に近く扉の方に向いて此のうすべりの上に坐つてゐたが、其の扉は上下が鐵板で其の間が鐵の格子になつてゐて、しかも僕の室の直ぐ眞ん前に看守がテエブルを控へて突つ立つてゐるので、絶えず監視されてゐると云ふ不愉快が、其の看守の大して意地惡さうでもない平凡な顏をまでも妙に不愉快にさせる。「石の家は人の心を冷たくする」と云ふロシアの諺が思ひ出されて、ちよい／＼竊み見するやうにして僕の方を見る其の看守を、此の男はきつと冷たい心を持つてゐるに違ひないなぞと思はせる。

やがて、暫く廊下でガタ／＼騷がしい音がすると思つてゐると、看守が扉を開けて「出ろ」と云ふので出て見ると、二十人ばかりの囚人が向ひ合つて二列にコンクリイトの上のうすべりに坐つて、兩手を膝に置いて膳に向つてゐる。僕も其の端に坐つた。

「禮！」

始めての僕にはちよつと何んの意味だか分らない、大きな聲の號令がかゝつた。皆んなは膝に手を置いたまゝの形で首を下げた。僕はぼんやりして皆んなのする事を見てゐた。

「喫飯！」

又何んの事だか分らない、たゞぱあんと云ふのだけがはつきりと響く、大きな聲の號令がかかつた。皆んなは急いで茶碗と箸とを手に持つた。そしてめい／＼別な大きな茶碗の中に圓錐形の大きな塊に盛りあげられてゐる飯を、大急ぎに、餓鬼道の亡者と云ふのはこんなものだらうと思はれるやうに、掻きこみ始めた。どんぶりから茶碗へ飯を移す、それを口に掻きこむ、呑みこむ。又掻きこむ、呑みこむ。其の早さは本當に文字通りの瞬く間だ。僕は呆氣にとられて見てゐた。

「何千何百何十番！」

看守が又大きな聲で怒鳴つた。僕はびつくりして其の方を向いた。

「何をぼんやりしてるんだ。早く飯を食はんか。」

看守は僕に怒鳴つてゐるんだ。僕は自分の襟をうつむいて見て、其の何千何百何十番と云ふのが自分のけふからの名前だと云ふ事に始めて氣がついた。そして急いで茶碗をとりあげた。が、僕が其圓錐形の塊の五分の一位を漸くもぐ／＼と飲みこんだ頃には、もう皆んなは最初のやうに其の膝に手を置いてかしこまつてゐた。

其後も始終見た事ではあるが、囚人等の飯を食ふのの早いのは實に驚く程だ。まるで齒なぞと云ふものは入用のないやうに、たゞ掻きこん

では呑みこむ。

『どうも仕方がないんです。いくらからだに毒だからと云つても、どうしてもあゝなんです。しかし其の云ひ分を聞くと、隨分無茶な事ではあるが、多少の同情はされるのです。よく噛んでゐた日にや、直ぐに消化れて腹が空つて仕方がないと云ふんですな。』

坊さんは坊さんらしく、或時敎誨師と其の話をしたら、眉を顰めながらにこ／＼してゐた。

僕は此の上もぐ／＼やるのも、きちんと正坐して待つてゐる皆んなに相濟まず、自分でも少々きまりは惡し、それにもみ澤山の南京米四分麥六分と云ふ謂はゆる四分六飯に大ぶ閉口もしてゐたのだから、其のまゝ箸をおいた。

皆んなはめい／＼の室に歸された。いゝ加減心細くなつてゐた僕は、此の喫飯で、又例の好奇心滿足主義に歸つた。そして僕等の仲間たちで其の數年前に始めてこゝへはひつた堺の話のやうに、はひつて直ぐ身體檢査をされる時、裸體のまゝ四ん這ひになつて尻の穴をのぞかれたり、歩くのに兩手を腰にしつかりとつけて決して振つちやいけないと云ふやうな事が、今ではもう廢止されてゐるのが却つて物足りなく思へた。

其の翌朝、僕は先きに云つた半病人や片輪者の連中の方に移された。今までゐたところは、新入りや、翌日放免になるものや、又は懲罰的に獨房監禁されたものなどの一時的にゐる、特別の建物であつたのだ。

石川三四郎と山口とは既に、矢張り新聞紙條令違犯で、其の一室を占領してゐた。山口、石川、僕と云ふ順で、僕は其の隣りの室へ入れられた。十疊か十二疊も敷けようと思はれる廣い室だ。前後が例の牢屋風の格子になつてゐて、後の格子には大きな障子がはまつてゐて、其の障子を開けるとそとには直ぐそばに大きな桐の木が枝を擴げてゐた。前の格子は、三尺ばかりの土間を隔てて、矢張り障子と相對してゐた。此の障子の向うにも矢張り桐の木が見えた。室の左右は板戸を隔てて他と同じやうな室と續いてゐた。土間には看守がぶら／＼してゐる。

『はあ、此の格子だな、例のは。』

と僕は、土間に近い一隅にうすべりを一枚敷いて、其の格子の眼の前に坐つた時、堺の話を思ひ出した。堺が前にはひつた時にも矢張りこゝに入れられたのだ。そして堺は敎科書事件の先生や役人と一緒に同居した。小人で閑居してゐればそんな不善はしないのだらうが、大勢でゐると飛んだ不善な考へを起すものと見える。皆んなは此の格子を女郎屋の格子に見立て、又髯つ面の自分等を髯女郎の洒落でもあるまいが、とにかく女郎に見立てて、そして怪しからん事には看守をひやかし客に見立てて「もしもし眼鏡の旦那、ちよいとお寄りなさいな」と云ふやうな惡ふざけをして遊んださうな。

僕も此の髯女郎になつてからはすつかり氣が輕くなつた。室は明るい。そとは可なり自由に眺められる。障子は妙にアト・ホオムな感じを抱かせる。直ぐ隣りには仲間がゐる。看守も相手が片輪者や老人の事だから特に佛樣を選んであるらしい。

其の室へ移されてから、一時間ばかりしてからの事だ。ふいと、僕の室の前に突つ立つて、切りに僕の顏を見つめてゐる囚人がある。僕も見覺えのある顏だとは思ひながら、ちよつと思ひ出せずに其の顏を見てゐた。

『やあ！』

と漸く僕は思ひ出して聲をかけた。

『うん、やつぱり君か。さつきから幾度も幾度も通るたんびに、どうも似た顏だと思つて聲を

かけようと思つたんだか。一體どうして斯んなところへ來たんだ。」

其の男は悲痛な顏をして不思議さうに尋ねた。しかし僕としては、僕自身がこんなところへ來るのは少しも不思議な事ではなく、却つてこんなところで其の男と會ふ方が餘程不思議であつたのだ

「僕のは新聞の事なんだが、君こそどうして來たんだ。」

「いや、實に面目次第もない。君はいよ〳〵本物になつたのだらうけど。」

其の男の自分の罪名を訊かれると、急に眞赤になつて、斯う云ひながら、

「失敬、又會はう。」

と逃げるやうにして行つて了つた。

彼れと僕とは嘗て同じやうな理由で陸軍の幼年校を退學させられた仲間だつた。彼れは仙臺の幼年校、僕は名古屋の幼年校ではあつたが、もう半年ばかりで卒業と云ふ時になつて、殆んど同時に退校を命ぜられた。そして二人とも直ぐ東京に出て來て偶然出遇つた。彼れには猶一緒に仙臺を逐ひ出された二人の仲間があつた。其の一人は小學校以來の僕の幼友達だつた。斯くして四人の幼年校落武者が落ち合つた。そしてそこへ又、大阪や東京の落武者が寄り集まつて、八九人の仲間が出來た。皆んなは退校處分と云ふ恥辱を雪ぐ爲めに、互に助け合つてうんと勉强する誓ひを立てた。皆んなは直ぐにあちこちの中學校の五年へはひつた。が、彼れとももう一人の仲間とが中途で誓ひを破つて遊びを始めた。皆んなは憤慨して數回忠告した。そして遂に絶交を宣告した。翌年他の仲間の皆んなはそれ〴〵專門學校の入學試驗に通過した。しかし其の二人だけは何處でどうしてゐるのか分らなかつた。皆んなは絶交を悔いてゐた。

丁度それから四五年目になるのだ。僕の入獄は彼れから見れば『いよ〳〵本物になつたのだ』らうが、彼れ自身の入獄は當時の絶交と思ひ合して「實に面目次第も」なかつた事に違ひない。しかし僕としては、僕等が彼れに申渡した其の絶交が、今になつて猶更に悔いられるのであつた。

彼れは早稻田邊で或る不良少年團の團長みたやうな事をしてゐたのださうだ。そして其の團員の强盜と云ふ程でもないほんの惡戲から、彼れは强盜教唆と云ふ恐しい罪名が負はせられたのださうだ。そして嘗て仙臺陸軍地方幼年學校の一秀才であつた彼れは、今此の巣鴨監獄で、他の囚人に食事を運んだり、仕事の材料を運んだりする雜役を勤めてゐるのであつた。

彼れは僕が二度目に來て滿期近くなるまで、此の建物の中に雜役をしてゐた。何處でどうして手に入れて來るのか知らないが、或時なぞは、殆んど毎日のやうに氷砂糖の塊を持つて來てくれた。そして毎月一度面會に來る女房を何處でどうして知つて來るのか、『君、奧さんが來てるよ、もう直ぐ看守が呼び　來るだらうから用意して待つてゐたまへ』なぞと知らしてくれたりした。

或日急に彼れの姿が見えなくなつ。た其の日の夜或る看守の手を經て『あす假出獄で出る、君が出れば直ぐ會ひに行く』と言つた紙きれを受取つたが、それつきり彼れとはまだ一度も會はない。

此の男と一緒に矢張り雜役をしてゐた、もう六十を越した一老人があつた。矢張り僕が二度目の滿期になる少し前に放免になつたのだが、何んでも二十五年目とか六年目とかで日の目を見るのだと云つてゐた。

「電車なんてものはどんなものだか、いくら話に聞いても考へても分りませんや。何しろ電燈

だつて初めてこゝで知つたんですからな。』

或時彼れは夢見るやうな目つきで電燈を見あげながら云つた。

看守がそばにゐて、一緒になつて話する時には、彼れはよくいろんな事を話した。しかしさうでない時には、雑役としての用以外には、殆んど一言もきかない。自分の監房にゐる時でも矢張りさうだ。皆んなが看守のすきを窺つてはいろんな悪戯やお饒舌をする時にも、彼れだけは一人黙つてふり假名つきの何かの本を讀んでゐた。話しかけられても返事をしない。雑役としての用をする時にも、餘程意地の悪い看守よりも、もつと一刻者だつた。

『おい君、こんなきたない着物ぢやしやうがないぢやないか。もつと新しいのを持つて來てくれたまへ。』

僕は一度此の老人に其の持つて來た着物の不足を云つた。

『贅澤云ふな。』

老人は斯う云ひ棄てて隣りの室の方へ行つた。

『おい、君、君！』

と僕は少し大きな聲で呼び歸さうとした。看守はそれを聞きつけてやつて來た。そして一應僕の苦情を聞いて、

『新しいのを一枚持つて來てやれ。』

と老人に云ひつけた。老人はぶつくさ云ひながら又取りに行つた。

これは此の老人の一刻者らしいいゝ例ではないが、とにかく總てが此の調子だつた。他の囚人の苦情なぞは一切取りいれない。毎日半枚づつ配つてくれる落紙ですら、腹工合が悪いからもう一枚くれと云つても、決して餘計にくれた事はない。時には、いゝから何んとかしてやれなどと云ふ看守に、獄則を楯にして食つてかゝる事すらあつたが、此の獄則を守る點では、先きにも云つたやうにまるで裏表のない、獄則其者の權化と云つてもいゝ位だつた。數年前の規則其儘に、歩く時には手を少しも振らないやうに、五本の指をぴんとのばして、腰にしつかりと押しつけてゐた。賞標の白い四角な片も三つほど腕につけてゐた。

最初殺人で死刑の宣告を受けたのを、終身に減刑され、其後又何かの機會に減刑又減刑されて、遂に放免になつたのださうだ。一刻者は最初からの、しかし正直者と云ふ程の意味で一刻者であつたらしいが、入獄以來其の一刻から出た犯罪を後悔すると共に、其の一刻をたゞ獄則嚴守の事にのみ集中させて、益々妙な一刻者になつたものらしい。

隣りの室には十人ばかり片輪者が同居してゐた。其の中に、七十幾つかの老人と、森の中にでもゐればどうしてもチンパンジイとしか思へないやうな顔つきの若い大男と、尻が妙に出つぱつてびつこをひいて歩く少年とがゐた。チンパンジイは盲と云ふ程でもないが兩眼ともよく見えなかつたらしい。高い眉の下にひどく窪んだ細い眼をいつもしよぼ〳〵させてゐた。此の男は僕がゐる間に一度ちよつと出て又直ぐはひつて來た。皆んなほんのこそ〳〵泥棒らしかつた。

此の少年はへうきん者で、一日皆んなを笑はせては騒いでゐた。誰れかがブッと屁を放る。すると此の少年は、『うん、うん、よし〳〵』なぞと、赤ん坊でもなだめかすやうな事を云ふ。一日に幾度とちよつとは數へ切れない程皆んなはよく屁をひつた。そして其のたんびに此の少年はこんな事を云つては皆んなを笑はしてゐた。

隣りで聞いてゐる僕も時々吹き出した。

仕事がいやになると皆んなはよく便所へはひつて一休みした。

『いつまで便所にはひつてるんだ。』時々は看守も二三度廻つて來てまた同じ人間が便所に やがんでゐるので小言を云ふ。すると少年は『どうも難産で』と云ひながら『うんうん』と唸つて見せる。皆んなはどつと笑ふ。看守も仕方なしに『い丶加減にして出ろ』と云ひ棄てて行つて了ふ。

此の隣りの笑ひ聲で、どれ程僕は、長い日の無聊を慰められたか知れない。

僕の生活は、毎朝起きると先づ此の廣い室のふき掃除をして、あとは一日机に向つて讀み書き考へてさへゐればい丶のだつた。

本は辭書の外五六册づつ手許に置く事が出來た。そしてそれを毎週一回新しいのと代へて貰ふ事が出來た。ペンとインキとノオトとは特別に差入を許された。

其の頃の生活を當時の氣持其儘に見る爲めに、獄中から出した手紙の二三を次ぎに採錄して見る、いづれも最初の時のものだ。

『暑くなつたね。それでも僕等のゐる十一監と云ふ所は獄中で一番冷しい所なだのさうだ。煉瓦の壁、鐵板の扉、三尺の窓の他の監房とは違つて、丁度室の東西がすべて三寸角の柱の格子になつてゐて、其の上南面とも直接に外界に接してゐるのだから、風さへあれば兎も角も冷しいわけだ。それに十二疊ばかりの廣い室を獨占して、八疊づりの蚊帳の中に起きて見つ寢て見つなどと古く洒落れてゐるのだもの。平民の子としては寧ろ贅澤な住居だ。着物も殊に新しいのを二枚もらつて、其の一枚を寢卷にしてゐる。時に洗濯もしてもらふ。

『老子の最後から二章目の章の終りに、甘其食、美其衣、安其所、樂其俗、隣國相望、鷄犬聲相聞、民至老死、不相往來と云ふ、其の消極的無政府の社會が描かれてある。最初の一字の甘しとしたゞけが些か覺束ないやうに思ふけれど、先づ僕等の今の生活と云へば、正にこんなものだらうか。妙なもので、此頃は監獄にゐるのだと云ふ意識が、或る特別の場合の外は殆んど無くなつたやうに思ふ。(堺宛)

此の蚊帳で思ひ出すが、或る夜、暑苦しくて眠れないので、土間をぶら〳〵してゐる看守に話しかけた。

『少し位暑くたつて君等はい丶よ。僕はさつきから蚊帳の中に寢てゐる君等を見ながらつ、づく思つたんだ。斯うして格子を間にして君等の方を見てゐると、實際どつちが本當の囚人だか分らなくなつて來るよ。』

看守は笑ひながらではあるが、しみ〴〵とこぼして云つた。

それから暫くして幸德に宛てた手紙を出した。

『暑かつた夏も過ぎた。朝夕は冷しすぎる程になつた。そして僕は「少し肥えたやうだね」などと看守君にからかはれてゐる。

『此頃讀書をするのに甚だ面白い事がある。本を讀む。バクニン、クロポトキン、ルクリユス、マラテスタ、其他どのアナアキストでも、先づ、卷頭には天文を述べてある。次ぎに動植物を說いてある。そして最後に人生社會を論じてゐる。やがて讀書にあきる。顏をあげてそとを眺める。先づ目に入るものは日月星辰、雲のゆきき、桐の青葉、雀、鳶、烏、更

に下つては向うの監舍の屋根。丁度今讀んだばかりの事を其儘實地に復習するやうなものだ。そして僕は、僕の自然に對する知識の甚だ淺いのに、いつも〳〵恥ぢ入る。これからは大いに此の自然を研究して見ようと思ふ。

『讀めば讀む程、考へれば考へる程、どうしても此の自然は論理だ。論理は自然の中に完全に實現されてゐる。そして此の論理は、自然の發展たる人生社會の中にも、同じく又完全に實現せられねばならぬ。

『僕は又、此の自然に對する研究心と共に、人類學や人間史に強く僕の心を引かれて來た。こんな風に、一方にはそれからそれへと泉のやうに學究心が湧いて來ると同時に、(中略)

『兄の健康は如何に。「パンの略取」の進行は如何に。僕は出獄したら直ぐ多年宿望のクロの自傳をやりたいと思つてゐる。今其の熟讀中だ。』

それからもう出獄近くなつて山川に宛てた手紙を出した。其の中に法廷に出る云々と云ふは、あとの方の新聞紙條令違犯の公判 時事だ。

『きのふ東京監獄から歸つて來た。先づ監房にはひつて机の前に坐る。本當にうちへ歸つたやうな氣がする。

『僕は法廷に出るのが大嫌ひだ。殊に裁判官と問答するのはいやで〳〵堪らぬ。いつその事、ロシアのやうに裁判しないで直ぐシベリヤへ逐ひやると云ふやうなのが、却つて赤裸々で面白いやうにも思ふ。貴婦人よりは淫賣婦の方がいゝ。

『裁判が濟めば先づ東京監獄へ送られる。門をはひるや否や、いつも僕は南京蟲の事を思つて戰慄する。一夜のうちに少なくとも二三十ケ所は嚙まれるのだもの。痛くてかゆくて、寸時も眠れるものぢやない。僕が二三日して巢鴨に歸ると、獄友諸君から切りに痩せた〳〵と云ふお見舞を受ける。

『たゞ東京監獄で面白かつたのは鳩だ丁度飯頃になると、窓のそとでばた〳〵羽ばたきをさせながら、妙な聲をして呼び立てる。試みに飯を一かたまり投つてやる。十數羽の鳩があわたゞしく下りて來て、瞬く間に平らげて了ふ。又投つてやる。面白いもんだから幾度も〳〵續けざまに投つてやる。飯を皆な投つて了つて汁ばかりで朝飯を濟ました事もある。あとで腹がへつて困つたが、あんな面白い事はなかつた。

『巢鴨に歸る。「大變早かつたね、裁判はどうだつた」などと看守君はいろ〳〵心配して尋ねてくれる。何んだか氣も落ちつく。本當にうちへ歸つたやうな氣がする。

『しかし此のうちにゐるのももう僅かの間となつた。久しいイナクティブな生活にもあきた。早く出たい。そして大いに活動したい。此の活動に就いては大ぶ考へた事もある。決心した事もある。出たらゆつくり諸君と語らう。同志諸君によろしく。』

出て一ケ月半ばかりして、こんどは堺や山川や其他三人の仲間と一緒に、例の屋上演說事件で又入れられた。既決になると、其他三人と云ふのが東京監獄に殘されて、堺と山川と僕とが巢鴨へ送られた。

『やあ、又來たな。』

と看守や獄友諸君は歡迎してくれる。

『又やられたよ。しかしこんどは、まだ碌に監獄の氣の拔けないうちに來たのだから、萬事に馴れてゐて好都合だ。』

僕は當時吾々の機關であつた日本平民新聞の編輯者で、其後幸德等と一緒に死刑になつた森近運平に宛てて、こんな冒頭の手紙を書いて送つた。

山口は何かの病氣で病監にはひつてゐた。山川はたしかほかの建物へやられたやうに思ふ。石川、僕、堺と云ふ順で、相ならんでゐた。

堺はもう格子につかまつて『ちよいとお爺の旦那』をやる當年の勇氣も無くなつてゐたが、石川と僕とは盛んに隣り合つていたづらをした。運動の時にそとで釘を拾つて來て、二人の室の間の壁に穴をあけた。本やノオトに飽きると其の穴から呼び出しをかける。石川が話してゐる間は僕は耳をあててゐる。僕が話をする間は石川が耳をあてる。ところがこれがなか〳〵うまく行かない。時々二人で口をあて合つたり耳をあて合つたりする事がある。どうしたのかと思つて、耳をはづしてのぞいて見ると、向うでも耳をあてて待つてゐる。ちよつと議論めいた事になると、お互ひにこんどは俺がしやべるんだからお前は聞けと云ひ合つて、小さな穴を通して唾を飛ばし合ふ。時とすると、『暫くそこで見てをれ』と云つて、室の眞ん中へ行つて踊つて見せたりする。

こんな事をしてふざけながらも、石川は二千枚近い西洋社會運動史を書いてゐた。これは後に出版され、發賣禁止になつた。堺と僕とは當時堺の編輯で平民科學といふ題で出してゐた叢書を飜譯してゐた。山川も矢張りそれをやつてゐた。

そして丁度此の飜譯が一册づつ出來あがつた頃に、堺と山川と僕とは滿期になつた。

『可哀想だが丁度鬼界ケ島の俊寛と云ふ格だな。しかしもう少しだ。辛抱しろ。』

堺と僕とは石川に斯う云ひながら、

『おい、俊寛、左樣なら。』

とからかつて其の建物を出た。

三　千葉の卷

が、又半年も經つか經たぬ間に、こんどは例の赤旗事件で官吏抗拒治安警察法違犯と云ふ念入りの名で、其の事件の現場から東京監獄へ送られた。同勢十二名、内女四名、堺、山川、荒畑なども此の中にゐた。女では、巡査の證言のまづかつた爲めにうまく無罪にはなつたが、後幸德と一緒に雜誌を創めて新聞紙法違犯に問はれ、更に又幸德等と一緒に死刑になつた、彼の菅野須賀子もゐた。

と同時に、二年前に保釋出獄した電車事件の連中も、一審で無罪になつたのを檢事控訴の二審で又無罪になり、更に檢事の上告で大審院から仙臺控訴院に再審を命ぜられ、そこで初めて有罪になつたのを、こんどはこちらから上告して大審院で審議中であつたのだが、急に保釋を取消されて矢張り東京監獄に入監された。此の連中が西川、山口などの七八名。僕は此の兩方の事件に跨がつてゐた。

東京監獄は仲間で大にぎやかになつた。しかし、やがて女を除く皆んなが有罪にきまつた時、東京監獄ではこれだけの人數を一人々々獨房に置くだけの餘裕も設備もなかつた。僕等は一種の惡傳染病患者のやうなもので、他の囚人と一緒に同居させる事も出來ず、又仲間同士を一緒に置く事は更に其の病毒を猛烈にする恐れがある。そこで皆んなは、最新式の建築と設備とを以て模範監獄の稱のある、日本では

唯一の獨房制度の千葉監獄に移されることになつた。

千葉は東京に較べて冬は溫度が五度高いと云ふのに、監獄は其の千葉の町よりもう五度高いと云ふ程の、そして夏もそれに相應して涼しい、千葉北方郊外の高燥な好位置に建てられてゐた。

『あれが皆んなの行くところなんだ。』

汽車が千葉近くなつた時、護送指揮官の看守長が、丁度甥共を初めて自分のうちへ連れて行く伯父さんのやうな調子で（實際此の看守長は最後まで僕等にはいゝ伯父さんだつた）、いろいろ其の自分のうちの自慢をしながら、左側の窓からそとを指さして云つた。皆んなは頸をのばして見た。遙か向うに、小春日和の秋の陽を受けて赤煉瓦の高い塀をまはりに燦然として輝く輪奐の美が見えた。何も彼もあの着物と同じ柿色に塗りたてた建物の色彩は、雨の日や曇つた日には妙に陰鬱な感じを起させるが、陽を受けると鮮かな輕快な心持を抱かせる。

『鰯がうんと食へるさうだぜ。』

僕は直ぐそばにゐた荒畑に、きのふ雜役の囚人から聞いた其儘を受け賣りした。幾回かの入獄に、僕等はまだ、鹽鱒と鹽鮭との外に何等の魚類をも口にした事がなかつたのだ。で、此の話を聞いた僕には、それが唯一の樂しい期待になつてゐたのだ。

『それやいゝな。早く行つて食ひたいな。』

荒畑も、そばにゐた他の二三人も、嬉しさうに微笑んだ。

着いて見ると、成程建物は新築したばかりでいかく光つてゐる。室は四疊半敷位の、南向きの明るい小綺麗な室だ。何よりも先づ窓が低くて大きい。東京のちよつとした病院の室よりも餘程氣持がいゝ。

が、第一に先づ役人の利口でないのに驚かされた。着くと直ぐ、皆んな一列にならべさせられて、受持の看守部長の訓示を受けた。

『こんどは皆んな刑期が長いのだから、よく獄則を守つて、二年のものは一年、一年のものは半年で出られるやうに、自分で心掛けるんだ。』

と云ふやうな意味の事を繰返し繰返し聞かされた。僕等はあざ笑つた。こんなだましが僕等にきくと思つてゐるんだ。又、よし本當に好意でさう云つてくれたものとしても、僕等に假出獄なぞと云ふ謂はゆる恩典があるものと思ふのも、餘りに間が拔けてゐる。まるで僕等を知らないんだ。それだけならまだいゝ。此の訓示が濟んで、一行八人（電車事件の方は一足先きに來た）が別々に隣り合つた室へ入れられた時、こんどは受持の看守が、

『つまらん事で大ぶ食つたもんだな。一度はひると大ぶ貰へると云ふ話だが、こんどは皆んな幾らづつ貰つたんだ。』

と云ふ情ないお言葉だ。政黨か何かの壯士扱ひだ。さすがの堺を初め皆んなは顏見合はせて苦笑するの外はなかつた。たゞ、ふだんは神經質に爪ばかり嚙つてゐるやうに見えたのが、入獄以來其の快活な半面を切りに發揮し出した荒畑が、『アハハア』と大きな聲を出して笑つた。看守はけげんな顏をしてゐた。

上典獄を始め下看守に至るまでが殆んど總て此の調子なのだからやり切れない。

それに、第一に期待してゐた例の鰯が、夕飯には菜つ葉の味噌汁、翌日の朝飯が同じく菜つ葉の味噌汁、晝飯が澤庵二切と胡痲鹽、と來たのだから益々堪らない。

加ふるにこんどは今迄の禁錮と違つて、懲役と云ふのだから、一定の仕事を課せられる。しかも其の仕事が、東京監獄では樂で綺麗な經木あみであつたのが、南京麻の堅いのをゴシゴ

シもんで柔らかくして、それで下駄の緒の心をなふのであつた。手があれる。だけなら未だしも、下手をやると赤むけになる。埃が出る。可なり骨が折れる。それを晝の間十時間位やつて、其の上に又夜業を二三時間やらされる。始めの一日でうんざりして了つた。

三日目か四日目の事だ。毎日の此の仕事に疲れ果てて、少しでも仕事の手を休めてゐると、うと〳〵と眠つて了ふ。坐りながら幾度か眠つては覺め、眠つては覺めしてゐるうちに、たうとう例の胡麻鹽の晝飯後の三十分か一時間かの休憩時間に、いつの間にか居眠りのまゝ横に倒れて了つた。

『こら、起きろ！』

と云ふ聲にびつくりして目を覺ますと、僕は自分のそばに疊んである蒲團の上に半身を横たへて寢てゐた。

『横着な奴だ。はひる早々もう眞つ晝間から寢たりなんぞしやがつて。貴樣は監獄の規則なんぞ何んとも思つてないんだな。』

看守は、貴樣のやうな壯士が何んだといふ腹を見せて、威丈高になつて怒鳴りつゞけた。

暫らくして典獄室へ呼びつけられた。僕はみちみち、甚だ意氣地のないことだが馴れない仕事に疲れてつい、と有りのまゝの辯解をするつもりで行つた。ところが、典獄室にはひつて一禮するかしないうちに、

『貴樣は社會主義者だな。それで監獄の規則まで無視しようと云ふんだらう。減食三日を仰せつける。以後獄則を犯して見ろ、減食位ぢやないぞ。』

と恐ろしい勢で怒鳴りつけられた。

『えゝ、何んでもどうぞ。』

と僕は、外國語學校の一學友の、海軍中將だとか云ふ親爺の、有名な氣短屋で怒鳴屋だと云ふのを思出しながら(典獄は此の學友の親爺と云つてもいゝ位によく似てゐた)、其のせりふめいた怒鳴り方の可笑しさを噛み殺して答へた。

『何！』

と典獄は椅子の上に上半身をのばして正面を切つたが、こちらが默つて笑顔をしてゐるので、

『もういゝから連れて歸れ。』

と、こんどは僕のうしろに不動の姿勢を取つて突つ立つてゐる看守に怒鳴りつけた。僕は幼年學校仕込みの『廻れ右』をわざと角々しくやつて典獄室を出た。これは幼年校時代の叱られる時のいつもの癖であつたが、此の時は皮肉でも何んでもなく、思はず此の古い癖が出たのだつた。

幼年校時代の癖と云へば、もう一つ、妙な癖を矢張り此の監獄で發見した。

これは其後餘程經つてからの事だが、矢張り何か叱られて、看守長室へ呼ばれた事があつた。其の看守長はせいの低い小太りで猫脊の、濃い口髭の、そしていつも顏中髯だらけにして其中から意地の惡さうな細い眼を光らしてゐる男だつた。僕等は此の男を『熊』と呼んでゐた。

はひると、いきなり、

『そこへ坐れ。』

と顎で指さした。見ると、足下にはうすべりが二枚に折つて敷かれてゐる。僕は默つて知らん顏をしてゐた。煉瓦造りの西洋館の中で、椅子テエブルを置いて、しかも向うは靴をはいて其の椅子に腰掛けながら、こちらには土下座をしろと云ふのだ。僕は殆んどあきれ返つた。

『なぜ坐らんか。』

『いやだから坐らない。』

『何がいやだ。』

『立つてゐたつて話が出來るぢやないか。』

『理窟は云はんでもいゝから坐れ。』
『君も坐るんなら僕も坐らう。』
と云ふやうな押問答の末に、さつきから其の濃い眉をぴく／＼させてゐた看守長は、決然として起ちあがつた。
『命令だ！ 坐れ！』
僕は此の命令と云ふ聲が僕の耳をつんざいた時に、其の瞬間に、僕のからだ全體が『ハツ』と恐れ入る何物かに打たれた事を感じた。そしてそれを感じると同時に、其の瞬間の僕自身に對する反抗心がむら／＼と起つて來た。
『命令が何んだ。坐らせるなら坐らせて見ろ。』
さつきまでの冷笑的の態度が急に挑戰の態度に變つた。そして此の時も矢張り、前の典獄室に於けると同じやうに、其儘自分の室へ歸された。叱られる筈の事には一言も及ばないうちに。
此の命令だと云ふ一言に縮みあがるのは、數千年の奴隷生活に馴れた遺傳のせゐもあらうが、僕には矢張り大部分は幼年校時代の精神的遺物であらうと思はれる。
僕は元來極く弱い人間だ。若し強さうに見える事があれば、それは僕の見え坊から出る強がりからだ。自分の弱味を見せつけられる程自分の見え坊を傷つけられる事はない。傷つけられたとなると默つちやゐられない。實力があらうとあるまいと、とにかくあるやうに他人にも自分に見せたい、強がりたい。時とすると此の見え坊が僕自身の全部であるかのやうな氣もする。
こんどは犯則があれば減食位では濟まんぞと云ふ筈のが、其後三日間と五日間との二度減食處分を受けた。一度は荒畑と運動場で話したのを見つかつて二人ともやられた。もう一度のは何をしたのだつたか、今ちよつと思ひ出せない。
荒畑も僕と同じ樣によく叱られてゐたが、或晩あまり月がいゝので、窓下へ行つて眺めてゐると、
『そんなところで何をぼんやりしてゐる。……何、月を見てるのだ？ 月なんぞ見て何んになる？ 馬鹿！』
とやられたと云つて、あとで其の話をして大笑ひした事があつた。
要するに僕等は監獄に入つてこれ程の扱ひを受けるのは始めてだつた。然し僕等は、先方の扱ひ如何に拘はらず、一年なり二年なりの長刑期を何んとかして僕等自身に最も有益に送らなければならない。
僕は其の方法に就いて二週間ばかり頭を惱ました。方法と云つても讀書と思索の外にはない。要はたゞ其の讀書と思索の方向をきめる事だ。
元來僕は一犯一語と云ふ原則を立ててゐた。それは一犯毎に一外國語をやると云ふ意味だ。最初の未決監の時にはエスペラントをやつた。次の巣鴨ではイタリイ語をやつた。二度目の巣鴨ではドイツ語をちよつと噛つた。こんども未決の時からドイツ語の續きをやつてゐる。で、刑期が長い事だから、これがいゝ加減ものになつたら、次ぎにはロシア語をやつて見よう。そして出るまでにはスペイン語もちよつと噛つて見たい。と先づきめた。今までの經驗によると、ほゞ三ケ月目に初歩を終へて、六ケ月目には字引なしでいゝ加減本が讀める。一語一年づつしてもこれだけはやられよう。午前中は語學の時間ときめる。
斯う云ふと、僕は大ぶえらい博言學者のやうに聞えるが、實際又此の豫定通りにやり果して大威張りで出て來たのだが、其後すつかり怠け且つ此の監獄學校へも行かなくなつたので、今

ではまるで何も彼も片なしになつて了つた。

それから、以前から社會學を自分の專門にしたい希望があつたので、それを此の二ケ年半に稍々本物にしたいときめた。が、それも今迄の社會學のではつまらない。自分で一個の社會學のあとを追つて行く意氣込みでやりたい。それには、先づ社會を組織する人間の根本的性質を知る爲めに、生物學の大體に通じたい。次ぎに、人間が人間としての社會生活を營んで來た徑路を知る爲めに、人類學、殊に比較人類學に進みたい。そして後に、此の二つの科學の上に築かれた社會學に到達して見たい。と今考へると誠にお恥かしい次第だが、ほんの素人考へに考へた。それには、あの本も讀みたい、この本も讀みたい、と數へ立てて、それを讀みあげる日數を算へて見ると、どうしても二ケ年半では足りない。少くとももう半年は欲しい。

斯うなると、今まで隨分長いと思つてゐた二ケ年半が急に物足りなくなつて、どうかしてもう半年增やして貰へないものかなあ、なぞと本氣で考へるやうになる。

仕事はある。しかしそれは馴れさへすれば何んとでもなる。一日幾百足と云ふ規定ではあるが、其の半分か、四分の一か、或はもつと少なくてもいゝ。何んと云はれてもこれ以上は出來ませんと頑張ればいゝ。皆んなで相談して、竊かに或る程度にきめれば更に妙だ。現に此の相談は殆んど最初から、自然に出來あがつてゐる。とにかく、出來るだけ仕事の時間を盜んで、勉强する事だ。

斯うきめて以來は滅茶苦茶に本を讀んだ。仕事の方は馴れるに從つて益々早くやれるやうになる。それに、下等の南京麻ではない上等の日本麻をやらしてくれる。益々益々仕事はし易い。しかし仕事の分量は最初から少しも增やさない。たゞもう看守のすきを窺つては本を讀む。

斯くして僕は、嘗て貪るやうにして掻き集めた主義の知識を殆んど全く投げ棄てて、自分の頭の最初からの改造を企てた。

一方に學究心が盛んになると共に、僕は僕の食慾の昂進、と云ふよりも寧ろ食つ氣のあまりにさもしい意地ぎたなさに驚かされた。

最初の東京監獄の時は辨當の差入れがあるのだから別としても、其の次ぎの巢鴨の時にも、二度目の巢鴨の時にも、刑期の短かかつたせゐかそれ程でもなかつたが、こんどは自分ながら呆れる程にそれがひどくなつた。好き嫌ひの隨分はげしかつたのが、何んでも口に入れるやうになつたのは結構だとしても、以前には必ず半分か三分の一か殘つた、あのまづかつた四分六の飯を本當に文字通り一粒も殘さずに平げて了ふ。おはちの隅にくつついてゐるのも、おいやもにくつついてゐるのも、落ちこぼれたのでさへも、一々丁寧にほじくり取り、撫で取り、拾ひ取る。ちやんと型に入れて、一食何合何勺ときまつてゐる飯の塊りを、けふのは大きいとか小さいとか云つて竊に喜び又は呟く。看守が汁をよそつてくれるのに、ひしやくを桶の底にガタ／＼あてるかどうかを、耳をそばだて眼を圓くして注意する。底にあてれば、はひつて來る實が多いのだ。それも茶碗を食器箱の蓋に乘せてよそつて貰ふのだが、其の蓋の中にこぼれた汁も、蓋を傾けてすゝつて了ふ。特に殘汁と云つて、一廻り廻つた殘りを又順番によそつて步く事がある。其の番の來るのがどれ程待ち遠しいか知れない。

小說なぞを讀んでゐて、何か御馳走の話が出かゝつて來れば、急いでペエジをはぐつて、其の話を飛ばして了ふ。とても讀むには堪へないのだ。さうかと思ふと、本を讀んでゐる時でも、

何か考へてゐる時にでも、又はぼんやりしてゐる時でも、何んでもない事がふと食物と聯想される。

折々何か食ふ夢を見る。堺もよく其の夢を見たさうだが、堺のはいつも山海の珍味と云ふやうな御馳走が現はれて、いざ箸をとらうとすると、何かの故障で食へなくなるのださうだ。堺はひどくそれを殘念がつてゐた。然るに僕のは、しるこ屋の前を通る、いろんな色の餅菓子やあんころ餅などが店先にならべてある、堪らなくなつて飛びこむ、片つ端から平げて行く、滿腹どころか滿のどにまでもつめこんでうんうん苦しがる、と云ふやうな頗る下等な夢だ。そして妙な事には、苦しがつて散々もがいたあげく、ふと眼をさますと腹工合が變だ。急いで便所へ行くと一瀉千里の勢で跳ね飛ばす。さうでなくても翌朝起きてからきつと下痢をする。まるで嘘のやうな話だ。

然らば色慾の方はどうかと云ふに、是れ亦頗る妙だ、先きの東京監獄や巣鴨監獄では時々妙な氣も起きたが、こゝへ來てからまるでそんな事がない。

僕は子供の時には、色慾を絶つた仙人とか高僧とか云ふものは、非常に偉いものと思つたゐたが、稍々長じてからは、そんな人間があるとすれば老耄の廢人位に考へてゐた。しかしそれはどちらも誤まつてゐた。僕のやうな夢にまで鱈腹食つて覺めてから下痢をすると云ふ程の淺ましい凡夫でも、時と場合とによれば、境遇次第で、何んの苦心も修養も煩悶もなく、直ちに聖人君子となれるのだ。

或る夜など、自分が不能者になつたのかと思つて少々心配し出して、わざといろんな場面を回想若しくは想像して見た。が、遂に其の回想や想像が一つとして生きて來ない。僕は殆んど絶望した。●

一ケ年の刑期のものはとうに出た。一ケ年半のものも出た。二ケ年の堺と山川ももう殘り少なくなつた。そこへ突然檢事が來て、今お前等の仲間の間に或る大事件が起つてゐるが知つてゐるかと云ふお尋ねだ。何か途方もない大きな事件が起きて、幸徳を始め大勢拘引されたと云ふ事は薄々聞いてゐた。其の知つただけの事を、又どうしてそれを知つたのか、監獄の取締上一應聞いて置きたいと云ふのだ。うろん臭いのでいゝ加減に答へて置いた。

すると數日經つて、不意に、恐ろしく嚴重な警戒の下に東京監獄へ送られた。そして檢事局へ呼び出されて、こんどは本式に、謂はゆる大逆事件との關係を取調べられた。

「此の事件は四五年前からの計畫のものだ。お前等が知らんと云ふ筈はない。現にお前等も其の計畫に加はつてゐたと云ふ事は、他の被告等の自白によつても明らかだ。」とくど／＼と嚇されたりすかされたりするのだが、何分何んにも知らない事はやはり知らないと答へるより外はない。

監獄では典獄を始めどの看守でも、切りに、氣の毒さうに同情してくれる。

「こんな事件にひつかゝつたんでは、とても助かりつこはない。本當に氣の毒だな。」

と明らさまに慰めてくれる看守すらある。皆んなで僕等を大逆事件の共犯者扱ひするのだ。

最初はそれを少々可笑しく思つてゐたが、此の同情が重なるに從つてだん／＼不安になり出して來た。監獄の役人がこれ程まで思つてゐるのだから、或は實際檢事局で僕等を其の共犯者にして了つてあるのぢやあるまいか、と疑はれ出して來た。まさかと打消しては見るが、どうしても打消し得ない或者が看守等の顏色に見

える。さうなつたところで仕方がない、とあきらめても見るが、さうなつたのかならぬのか明らかにならぬうちは、矢張り不安になる。

やがて堺は無事に滿期出獄した。それで此の不安は大部分をさまつた。しかしまだ役人等の僕に對する態度には少しも變りがない。僕自身ももう滿期が近づいたのだから、出獄の準備をしなければならぬと思つて、一ケ月に一回づつしか許されない手紙や面會の臨時を願ひ出ても、典獄や看守長はそんな事をしても無駄だと云はんばかりの事を云つて、一向とり合つてくれない。たゞ氣の毒さうな顏色ばかり見せてゐる。どうかすると僕一人があの中に入れられるのかな、と疑へば疑へない事もない。が、其後少しも檢事の調べがないのだから、と又それを打消しても見る。

其の間に僕は大逆事件の被告等の殆んど皆んなを見た。丁度僕の室は湯へ行く出入口のすぐそばで、其の入口から湯殿まで行く十數間のそと廊下をすぐ眼の前に控へてゐた。で、すきさへあれば、窓から其の廊下を注意してゐた。皆んな深いあみ笠をかぶつてゐるのだが、知つてゐるものは風恰好でも知れるし、知らないものでも其の警戒の特に嚴重なのでそれと察しがつく。

或日幸徳の通るのを見た。

『おい、秋水！　秋水！』

と二三度聲をかけて見たが、さう大きな聲を出す譯にも行かず(何んと云ふ馬鹿な遠慮をしたものだらうと今では後悔してゐる)、それに幸徳は少々つんぼなので、知らん顏をして行つて了つた。

たうとう滿期の日が來た。意外なのを喜ぶ看守等に送られて、東京監獄の門を出た。そとでは六七人の仲間が待つてゐた。皆んなで手を握り合つた。

僕は出た日一日は盛んに獄中の事なぞのお饒舌をしたが、翌日からはまるで啞のやうになつた。殆んど口がきけない。二年餘りの間殆んど無言の行をしたせゐか、出獄して不意に生活の變つた刺戟のせゐか、とにかくもとからの吃りが急にひどくなつて、吃りとも云へない程ひどい吃りになつた。

で、其後まる一ケ月間位は殆んど筆談で通した。うちにゐるんでも、そとへ出掛けるんでも、ノオトと鉛筆を離した事がない。

『耳は聞えるんですか。』

とよく訊かれたが、勿論耳には何んの障りもない。それでも知らない人は、僕がノオトに何か書いて突き出すので、向うでも同じやうに其のノオトに返事を書いて寄越したりした。

これは僕ばかりではない。其後不敬事件で一年ばかりはひつた仲間の一人も、やはり吃りであつたが、出た翌日から殆んど啞になつて了つた。そして矢張り僕と同じやうに、一ケ月ばかりの間筆談で暮してゐた。

又少々さもしい話になるが、出る少し前には、出たら何を食はう、彼を食はうの計畫で夢中になる。しかし出て見ると、殆んど何を食つても極りなくうまい。

先づあの白い飯だ。茶碗を取り上げると、其の白い色が後光のやうに眼をさす。口に入れる。歯が、丁度羽蒲團の上へでも横になつた時のやうに、氣持よく柔かいものの中にうまると同時に、强烈な甘い汁が舌のさきへほとばしるやうに注ぐ。此の白い飯だけで澤山だ、ほかにはもう何んにも要らない。

『あれを思ひ出しちや、とても牢ばひりはやめられないな。』

前科者同士がよく、出獄當時の思出話をしな

がら、斯う云つては笑ふ。實際日本飯の本當の味なぞは、前科者ででもなければ到底味へない。

八　葉山事件

一

僕が九つか十の時、或日猫を殺して、夜中にふと起ちあがつて、ニャアと猫の泣くやうな聲を出して母を驚かした事は、前に話した。又、十一か十二の時、隣りの家に毎晩お化が出て、それが一晩僕の家にも出たさうだと云ふ事も、前に話した。

が、こんどは僕自身が、しかも最近になつて、お化を見た話だ。現にまだ生きてはゐるが、しかし確かに怨靈であるだらう女の姿を、眞夜中に、半年も續けて見た話だ。

種子を割つて了へば何んでもない事であらうが、それはほかでもない、神近の怨靈だ。葉山の日蔭の茶屋の一番奥の二階で、夜の三時頃、眠つてゐる僕の咽喉を刺して、今にも其の室を出て行かうとする彼女が、僕に呼びとめられて、ちよつと立ちどまつて振り返つて見た、其の瞬間の彼女の姿だ。其の姿が其後ほゞ半年もの間、伊藤と一緒に寢てゐる僕の足もとの壁に、ちやうど其の時刻にはつきりと現はれて來るのだ。毎晩ではない。が時々、夜ふと目がさめる。すると、其の目は同時にもう前の壁の方に釘づけにされてゐて、そこには彼女の其の姿が立つてゐるのだ。一晩の間にこんなにもやつれたかと思はれる、其の死人のやうに蒼ざめた顔色の上に、ふだんでも際だつて見えた、そして、びつくりしたやうに見ひらいた其の目には、恐怖と、憐れみを乞ふ心とが、一ぱいに充ちてゐた。

『許して下さい。』

彼女は振り返つて、僕が半分からだを起してゐるのを見て、泣き出しさうに叫びながら逃げ出した。

『待て。』

と、其の前に僕は彼女を呼んだのだ。そして立ちあがつて彼女を押へようとしたのだ。

が、そんな前後の事は一切斷ち切られて、ただ彼女が振り返つて見た其の瞬間の姿だけが現はれて來るのだ。

僕は、それが夢か現なのかよく分らない事が、よくあつた。が、確かにそれが夢でないと思はれた事も、幾度もあつた。そして、其のいづれの場合にも、僕が自分に氣のついた時には、おびえたやうに慄へあがつて、一緒に寢てゐる伊藤にしつかりとしがみついてゐるのだつた。が、それも又ほんの一時の事で、僕は又更に本當の自分に歸つて、手を伸して枕もとの時計を見た。時計はいつもきまつて三時だつた。

『又出たの?』

『うん。』

と、伊藤はそれを知つてゐる事もあつた。が、ぶる〳〵慄へたからだにしがみつかれながら、何んにも知らずに眠つてゐる事もあつた。そして、よしそれを知つてゐても、僕のおびえが彼女にまでも移る事は決してなかつた。彼女はいつも、

『ほんとにあなたは馬鹿ね。』

と、笑つて、大きなからだの僕の頭を子供のやうに撫でてゐた。

實際僕は、此のお化の時ばかりではない、何か恐い夢を見ると、きつと同じやうにおびえるのだつた。そして其の慄へが、どうかすると、目をさましてからもまだ暫くの間續く事があつた。

『ほんとにあなたは馬鹿ね。』

と、そんな時にもよく、僕は彼女に笑はれた。僕はきつと心は非常に臆病者なのだ。それと

も、僕の心の中には、無知な野蠻人の恐怖が、まだ多分に殘つてゐるのだ。

が、そんなにして、話を野蠻人のところまで引きもどす必要はない。僕は、今こゝで、僕が女の怨靈を見るに至つた僕の心理の、科學的說明を試みようとしてゐるのではないのだから。

しかし、單に此の怨靈を見たと云ふ事實の話をするだけにしても、話は大ぶ其の以前に遡らなければならない。少なくとも、どうして其の女が僕を刺すに至つたかの、彼女と僕との關係の過去に遡らなければならない。

(僕は今、先きに數回、改造に連載した自敍傳の續きとして、其のあとを數回飛ばして此の一節を書きつゝあるのであるが、其の飛ばした數回、殊に此の一節の前回に就いては、何をどう書からかと云ふ腹案がまだちつとも出來てゐないのだ。たゞ、暫く怠けてゐたあとの筆ならしに、直ぐ書けさうに思はれた此の題目を選んで書き出して見ただけの事なのだ。從つて、こゝまで書いて來て、さて何處まで遡つて話したらよからうかとなると、まるで見當がつかない。仕方がない、已むを得ずんばそもそもの始めからでも書からか、と云ふ事にまあきめたのだが、それにしても話の順序として大ぶ困る事が多いやうだ。が、とにかくまあ書いて行かう。)

二

其の餘程以前から、僕は日蔭の其の室を僕の仕事部屋にしてゐた。文債がたまると、と云ふよりも寧ろそれをいゝ口實にして、よく一週間そこへ出かけて行つては遊んでゐた。實は、今はもう其の名も忘れて了つたが、よく僕の面倒を見てくれた女中も一人ゐたのだ。

其の女中は、もう一年程前に、嫁に行つてゐなかつた。が、お寺か田舍の舊家の座敷のやうな廣い十疊に、幅一間程の古風な大きな障子の立つてゐる、山の直ぐ下の其の室だけでも、まだ僕を引きつけるには十分だつた。

長い間いろ〳〵と苦心してゐた雜誌の保證金が、漸く手にはひつた。其の金がどうして手にはひり、又それまでそれを得るためにどんなに苦しんだかに就いては、又あとで話する機會があらうと思ふが、とにかく當時の僕には、新しい小さな雜誌を一つ創めると云ふ事が、殆んど唯一の當面の問題だつた。二ケ年間續いて來た『近代思想』を自ら廢刊して、新たに月刊『平民新聞』を起し、それが殆んど半ケ年發賣禁止を重ねて、更に又もとの『近代思想』に歸り、そしてそれが又發賣禁止の連續を喰つて倒れてから、僕等はもう半年あまり僕等の運動の機關を持たなかつた。當時では此の機關がないと云ふ事は、同時に又殆んど運動がないと云ふのと同じ事だつたのだ。僕は僕の戀愛問題が此の事に少なからざる責任のある事を感じてゐた。

しかし、いよ〳〵雜誌を始めるのには、もう少し金がいる。それに、其の前に、古い文債も一まづ始末して置かなければならない。となつて、單行本の飜譯を一つと雜誌の原稿を二つ抱へて、一ケ月ばかりの計畫でいつもの通り葉山へ出かける事になつた。

一時は隨分此の雜誌の創刊に熱中してゐた神近も、其頃では、もう大ぶ熱がさめてゐた。僕が彼女にばかりではなく、猶伊藤にもいろ〳〵と雜誌の相談をしかけて、伊藤が其の保證金の奔走をしたりするやうになつてからは、彼女は寧ろ僕等の計畫に對して多少の反感をすら持つてゐるやうだつた。そして、自分は別に宮島(資夫)の細君の麗子君と一緒に、何かやらうなどとも云つてゐた。しかし、それも麗子君にはあまりよく贊成されず、又竊かに賴みにしてゐた青山菊榮君(今の山川夫人)からは態よく拒られ

て、彼女は半ばそれを斷念すると共に、其の口惜しさのあまりを僕等の計畫の上に反感として向けもしたやうだ。そして其の上に彼女は、僕等の計畫の上に、又僕や伊藤の上に、どうしてそんな金が出來るものかと云ふ侮蔑や冷笑も持つてゐた。

實際僕等は隨分困つてゐた。そして僕や伊藤が困りきつてゐる時には、いつも神近が助けに來てくれてゐた。そんな場合の十圓か二十圓の金すらも工夫の出來ない僕や伊藤に、數百圓と云ふまとまつた金の出來る筈のない事を思ふのも、彼女としては當然の事であつた。そして、今から思へばかうも邪推されるのであるが、彼女はそれを知りぬいてゐて、郷里まで金策に行くと云ふ伊藤に二度までも旅費をかしたのであつた。

僕は神近に、雜誌の保證金が、それがどうして出來たかと云ふ事は云はずに、たゞ出來たと云ふだけの事を話した。そして當分葉山へ行くと云ふ事を話した。

『葉山へは一人で？』

保證金の方の事は彼女には大して興味がないやうだつた。が、彼女には、此の『一人で』かどうかが餘程氣になるらしかつた。

『勿論一人だ。皆んなから逃げて、たつた一人になつて仕事をするんだ。』

彼女は此の『たつた一人に』と云ふ事に切りに贊成した。そして、ゆつくりと、うんと仕事をして來るやうにと切りに勸めた。

當時僕は、女房の保子を四谷の家に一人置いて、最初は番町の或る下宿屋の二階に、そしてそこを下宿料の不拂で逐ひ出されてからは、本郷の菊坂の菊富士ホテルと云ふやはり下宿屋に、伊藤と二人でゐた。二人とも、二人一緒にゐる事は、決して本意ではなかつたのだ。二人とも、同じやうに家を棄てて出て、一人つきりになる事を渇望してゐた。だが僕は、女房とまだ緣が切れずにゐる上に、神近や伊藤との關係があつた。伊藤は、家と共に其の亭主とも緣は切れてゐるが、新たに僕との關係があつた。そして、かうした厄介な關係の上からのみでも、二人とも一緒にゐるうるさい生活に堪へられなかつたのだ。

伊藤は最初から其のつもりで、家を出ると直ぐ、赤ん坊を抱へて下總の御宿へ行つた。そこは、嘗て彼女の友人の平塚らいてうが行つてゐて、彼女には話なじみのところだつたのだ。彼女は當分そこで、ほんたうの一人きりになつて、勉强する覺悟だつた。

僕は伊藤の此の覺悟さへ續いたら、卽ちいろんな事情がそれを續ける事を許しさへしたら、僕等の三角關係と云ふか四角關係と云ふか、とにかくあの複雜な關係がもつと永續して、そしてあんなみじめな醜い結果には終らなかつたらうと、今でもまだ思つてゐる。が、其の覺悟を毀したのは何よりも先づ經濟問題だつた。そして、どんな事がどこへどう祟つて行くか分らない一例證として、ちよいと其の話をして見よう。

伊藤は其の以前と同じやうにやはり原稿生活をして行くつもりだつた。そして第一に先づ、其の家出の事を書いて、それを當時彼女が續きものを書いてゐた大阪每日に賣る豫定だつた。彼女はそれを大每の菊池幽芳氏に交涉した。幽芳氏は彼女の其のものに可なり大きな期待を持つて、激勵と同時に承諾の返事を寄越した。それで、伊藤は落ちついて、御宿の或る宿屋に腰を据ゑる事になつた。

ところが、其の原稿が、幽芳氏の非常な稱讚の辭がついて、送り返されて來たのだ。其時、ちやうど僕は御宿へ遊びに行つてゐた。と云ふよりも、彼女や僕が持つて行つた僅かの金も費ひ

果たして、彼女は宿料の支拂を迫られる、僕は歸る旅費もなしと云ふやうな始末になつて、二人でもう三日も四日も大阪から送金を待つてゐたのだつた。二人は、それが駄目と分ると、あちこち、金をかしてくれさうなところへ手紙や電報を出した。が、それはまるで返事がなかつたり、來てもいゝ返事は一つもなかつた。

其の間に僕は、神近も其の生徒の一人だつた、フランス語の講義の日を缺かした。そして宮島が其の子供の誕生日の祝ひとして、其の三人の先輩の宮田修氏と生田長江氏と僕とを招いた、其の御馳走をも缺かした。此の馳走には神近も連なる筈だつた。神近や宮島には、僕等二人が御宿でどんなに困つて　るかは分らなかつた。神近はそれをいろんな意味で怨んだ。そして、殊に酒でも飲めば、非常に人と同感し易い宮島は、僕が其の招待を缺いた事によつて其の人一倍強い自尊心を傷つけられた上に、益々神近に同情した。僕は神近への宮島の同情がこれによつて始まつたなぞとは決して云はない。しかし、神近と宮島とが、同じ一つの事に就いて、僕等二人に對する怨みと云ふか憎しみと云ふかを合致させたのは、ほゞ此の邊からぢやなからうかと思ふ。

そして、もう百方金策盡きてゐるところへ、神近から金を送らうかと云つて來た。

『あなたが困るも私が困るも同じ事だ。野枝さんが困つ　、其のためにあなたが困れば、私も又やはり其のために困るのだ。だから、誰れのため彼れのためと云ふ事は一切云はずに、お送りしませう。』

神近がかう云つて來る腹の中には、僕に早く歸つて欲しいと云ふ一念がある事は明らかなのであるが、しかし彼女にはかう云つた寛大な姉さんらしい氣持が多分にあつた事も同じやうに明らかだつた。そして僕は今はもう此の寛大によるほかに道はなかつた。

神近からは何んでも二十圓ばかり送つて來た。そして僕は、宿屋の方の多少の拂ひをして、僕一人急いで東京に歸つた。神近から少しでもまとまつた金をかりたのはこれが始めてなのだ。

伊藤はたうとう困りぬいて、子供を近村のものに預けて、僕の下宿にころがりこんで來た。そして二人は、もう四五ケ月の間、益々困窮しつゝ、一緒に愚圖々々してゐた。が、いよ／＼こんどの僕の葉山行きを期　して、二人の別居を實行する事にきめたのだつた。

神近は僕等の此の別居の計畫を非常に喜んだ。しかし彼女にはまだ、其の葉山では、僕と伊藤とが一緒にゐるのではあるまいかと疑はれたのだ。

『いつ立つ？　二三日中？　それぢや、たつた一つ、かう云ふ事を約束してくれない？　あなたが出かける時、私を誘ふ事。そして一日、葉山で一緒に遊ぶ事。』

漸く疑ひの晴れた彼女の願ひは何んでもない事だつた。が、其頃の僕の氣持では、彼女が事ごとにしつこく追求したり要求したりする事が、大ぶうるさくなつてゐた。そして、こんな何んでもない願ひでも、其のあとに、『ね、あなた、いゝでせう、いゝでせう、いゝでせう』と云ふ、其の『いゝでせう、いゝでせう』がうるさくて堪らなかつた。が、それを拒絶すれば事が益々うるさくなるのだし、仕方がないから、たゞ『うん、うん』とばかりいゝ加減な返事をして置いた。

三

『私、平塚さんのところまで行きたいわ。』

いよ／＼出かける日の前日になつて、ふいと伊藤が云ひだした。らいてうは、其頃、奥村君

と一緒に茅ケ崎にゐた。
　伊藤は其の家を出る時既に有らゆる友人から棄てられる覺悟でゐた。しかし、長年の友情を自分から棄てる事も出來なかつたものと見えて、其の家を出た日に野上彌生君を訪ひ、そしてらいてうにハガキを出した。が、其後此の二人の友人が悪罵に等しい批評を彼女の行爲の上に加へてゐるのを見て、彼女も全く其の友情を棄ててゐたやうだつた。けれども又、長い間の親しい友人に背くと云ふ事はさびしい。彼女はよく彼女等との古い友情をなつかしんでゐた。
「よからう。それぢや茅ケ崎まで一緒に行つて、葉山に一晩泊つて歸るか。」
　僕は彼女の心の中を推しはかつて云つた。しかし、らいてうの家では、僕等はひる飯を御馳走になつて二三時間話してゐたが、お互に腹の中で思つてゐる問題にはちつとも觸れずに終つた。
「いゝわ、もう全く他人だわ。私もう、友達にだつて理解して貰はうなどと思はないから。」
　彼女は其の家を出て松原にさしかゝると、僕の手をしつかりと握りながら云つた。彼女は其の友人に求めてゐたものを遂に見出す事が出來なかつたのだ。
　葉山に泊つた翌朝は、もう秋も大ぶ進んでゐるのに、ぽか〳〵と暖かい、小春日和となつたやうないゝ日だつた。
「けふ一日遊んで行かない？」
　僕は朝飯が濟むと彼女に云つた。
「えゝ、だけど、お仕事の邪魔になるでせう。」
　もう歸る支度までしてゐた彼女はちよつと意外らしく云つた。
「なあに、こんないゝ天氣ぢや、とても仕事なぞ出來ないね。それより、大崩れの方へでも遊びに行つて見ようよ。」
「ほんとにさうなさいましな。折角いらつしたんですもの。こんなに直ぐお歸りぢやつまりませんわ。」
　年増の女中のおげんさんまでも、そばから切りと彼女に勸めた。
　大崩れまで、自動車で行つて、そこから秋谷邊まで、半里程の海岸通をぶら〳〵と歩いた。其邊は遠く海中にまで岩が突き出て、其の向うには鎌倉から片瀨までの海岸や江の島などを控へてゐて、葉山から三崎へ行く街道の中でも一番景色のいゝところだつた。それに、もう遲すぎるセルでもちよつと汗ばむ程の氣持のいゝぽかぽかする暖かさだつた。僕等二人は、實際、溶けるやうな氣持になつて、其の間をぶら〳〵と行つた。正午には一旦宿に歸つて、こんどはおげんさんを誘つて、直ぐ前の大きな池のやうな靜かな海の中で舟遊びをした。そして、いゝ加減疲れて、歸つて湯にはひつて、夕飯を待つてゐた。
　そこへおげんさんが周章てゝはひつて來て、女のお客樣だと知らせた。そして僕が立つて行かうとすると、おげんさんの後にはもう、神近がさびしさうな微笑をたゝへて立つてゐた。
　伊藤はまだ兩肌脱いだまゝ鏡臺の前に坐つて、髪を結ひなほすかどうかしてゐた。神近の鋭い目が先づ其の方をさした。
「二三日中つて仰しやつたものだから、私毎日待つてゐたんだけれど、ちよつともいらしやらないものだから、けふホテルまで行つて見たの。すると、お留守で、こちらだと云ふんでせう。で、私、其の足で直ぐこちらへ來たの。野枝さんが御一緒だとはちつとも思はなかつたものですから……」
　神近は愚痴のやうに、しかし云ひわけのやうに云つた。
「寄らうと思つたんだけれど、ちよつと都合がわるかつたものだから……」

と僕も苦しい辯解をするほかになかつ
あしたは歸るんだから』と云ふので、伊藤と僕とは、いろ〳〵甘さうな好き　御馳走を註文してあつた。僕はおげんさんにそれをもう一人前ふやすやうに云つた。それから食事の出るまでの三十分間が程は、殆んど三人とも無言の行でゐた。僕には何んとなくいよ〳〵もうお終ひだなと云ふ豫感がした。

其年の春、二度目の『近代思想』を止すと同時に、僕は一種の自暴自棄に陥つてゐた。先きに僕は知識階級の間に宣傳する事の殆んど無駄な事を悟つて、哲學や科學や文學の假面の下に自由思想を論じた最初の『近代思想』は、要するに知識的手淫に過ぎないものと斷じた。そして二年間もいつくしんで來て、漸く世間から認められだしたそれを止して、僕等の本來に歸るんだと云つて、別に勞働者相手の『平民新聞』を創めた。それが前にも云つたやうに、半年間發賣禁止を續けて遂に倒れ、更に半年間の準備によつて再び起された『近代思想』も同じ運命の下に倒されて了つた。僕等はもうちよつと手の出しやうがなかつた。それでも、若し僕等同志の結束でも堅いのであつたら、又何んとか方法もあつたのだらう。が、ごく少數しかゐない同志の間にもこれがうまく行かなかつた。同志の間にはまだ運動に對する本當の熱がなかつたのだ。

『僕等はまるで暖簾と腕押をしてゐるのだな。』

當時殆んど一人のやうになつてゐた荒畑寒村と僕とが、よく慨き合つた言葉だつた。

かくして、もう何もかも失つたやうな僕が、其時に戀を見出したのだ。戀と同時に、其の熱情に燃えた同志を見出したのだ。そして僕は此の新しい熱情を得ようとして、殆んど一切を棄てて此の戀の中に突入して行つた。

其の戀の對照が此の神近と伊藤とだつたのだ。が、其の戀ももう墮落した。僕等三人の間には、友人又は同志としての關係よりも、異性又は同性としての關係の方が勝つて來た。そして其の關係がへたな習俗的なものになりかかつてゐた。

例のおげんさんによつて夕飯が運ばれた。そして此のおげんさんの寂しい顏が、皆んなの氣まづい引きたゝない顏の中にまじつた。好きなそして甘さうな料理ばかり註文したのだが、僕も伊藤もあまり進まなかつた。神近もちよつと箸をつけただけで止した。

伊藤は箸を置くと直ぐ、室の隅つこへ行つて何んかしてゐたがいきなり立ち上つて來て、

『私歸りますわ。』

と、二人の前に挨拶をした。

『うん、さうか。』

と、僕はそれを止める事が出來なかつた。神近もたゞ一言、

『さう。』

と云つたきりだつた。

そして伊藤はたつた一人で、おげんさんに送られて出て行つた。

二人きりになると、神近は又、前よりももつと、愚癡らしくそして又云ひわけらしく、來た時に云つた言葉を繰返した。僕も不機嫌にやはり前に云つた言葉をたゞ繰返し　。そして僕は引返して來たおげんさんに直ぐ寢床を敷くやうにと命じた。

朝、秋谷で汗をかいたり風に吹かれたりしたせゐか、そして其の上に湯にはひつたせゐか、少し風邪氣味で熱を感じたのだ。肺をわづらつてゐた僕には、感冒は殆んど年ぢうのつき物であり、そして又大禁物だつた。が、ちよつとでも風をひくと、僕は直ぐ寢床に就くのを習慣としてゐた。

が、其時には、それよりも寧ろ神近と相對して坐つてゐて、何か話しなければならないのが

何よりも苦痛だつた。彼女が此の室にはひつて來て、伊藤の湯上り姿に鋭い一瞥を加へて以來、僕は彼女の顏を見るのもいやになつてゐたのだ。

彼女も疲れたからと云つて直ぐ寢床にはひつた。僕は少し眠つたやうだつた。

夜十時頃になつて、もうとうに東京へ歸つたらうと思つてゐた伊藤から電話がかゝつて來た。ホテルの室の鍵を忘れたから、逗子の停車場までそれを持つて來てくれと云ふのだ。僕は着物の上にどてらを着、二人で十幾町かある停車場まで行つた。彼女は一人ぼつねんと待合室に立つてゐた。

『一旦汽車に乘つたんですけれど、鍵の事を思ひ出して、鎌倉から引返して來ましたの。だけどもう今日は上りはないわ。』

彼女はさう云つて、一人でどこかの宿屋に泊つて明日歸るからと云ひだした。

僕は彼女を强ひて、もう一度日蔭に歸らした。いつそ、三人でめい〜の氣まづい思ひを打ち明け合つて、それでどうにでもなるやうになれと思つたのだ。が、かうして彼女が歸ると、室の空氣は前よりももつといけなかつた。そして三人とも、又殆んど口をきかずに床をならべて寢た。

神近も伊藤も殆んど眠らなかつたやうだ。が、僕は風邪をひいた上に夜ふけてそとでをしたので、熱が大ぶ高くなつて、うつら〜と眠つた。そして時々目をさましては彼女等の方を見た。神近は直ぐ僕のそばに、伊藤は其の向うにゐた。伊藤は顏まで蒲團をかぶつて、向うを向いてぢつとして寢てゐた。僕がふと目をあけた時、僕は神近が恐ろしい顏をして、それを睨んでゐるのをちらと見た。

若しや……』

と或る疑念が僕の心の中に湧いた。僕は眠らずに竊と彼女等を窺つてゐなければならないときめた。が、いつの間にか熱は僕を深い眠りの中に誘つて了つた。

四

目をさました時にはもう可なり日が高かつた。神近も伊藤も無事でまだ寢てゐた。僕はほつとした。

朝飯を濟ますと、伊藤は直ぐ出て行つた。勿論東京へ歸つたのだ。が、神近はそれを疑つてゐるやうだつた。もと〜僕と一緒にずうとゐるつもりで來たので、今は自分が來たからちよつと近所のどこかで避けて、又自身が歸れば直ぐこゝへ來るのだらう、と云ふやうな口ぶりだつた。彼女は割合に人が好くて、ごく人を信じ易いかはりには、疑ひ出すと隨分邪推深かつた。

僕はもう彼女の邪推と鬪ふには、あまりに彼女に疲れてゐた。さうでなくても、きのふ彼女が『侵入』して來て以來の僕の氣持は、到底靜かに彼女と話する事を許さなかつた。

しかし又彼女をすつぽぬかして伊藤と一緒にこゝへ來てゐると云ふ弱點は、彼女に對してあまり强く出る事も許さなかつた。で、彼女のそんな疑ひに對しては、たゞ一言『馬鹿な』と輕く受け流して、相手にせずにゐた。

そして晝飯が濟むと直ぐ、僕は苦りきつた顏をして、机に向つて原稿紙をとり出した。彼女は仕方なしにおげんさんの案内で海岸へ遊びに行つた。

其時はちやうど寺内内閣が出來た時で、僕は『新小說』の編輯者から、寺内内閣の標榜する謂はゆる善政に就いての批評を書く事を賴まれてゐた。憲政會は三菱黨だ。政友會は三井黨だ。從つて此の二大政黨には、今日の意味での善政、卽ち社會政策を行ふ事は到底出來ない。彼等

は資本家黨なのだ。官僚派は資本家の援助がなければ何事も出來ない事はよく知つてゐる。しかし彼れには此の資本家の上に立つ政治家だと云ふ、ともかくもの自尊がある。そして猶、此の資本家の横暴と對抗するには、勞働者の援助をかりなければならない。そこで其の政治は、善政、即ち社會政策をとるほかはない。僕はざつとそんな風に考へてゐた。そして、猶それを歴史の事實の上から論ずるつもりで、桂が其の晩年熱心な社會政策論者であつた事や、又ドイツのビスマルクの例を詳しく書いて見ようと思つてゐた。

僕はたれだかの『ビスマルクと國家主義』を其の參考に持つて來てゐた。で、先づざつと其の本を讀んで見ようと思つた。

が、かうして落ちついて机の前に坐ると、急に又風邪の熱で頭の重い事が思ひだされて來た。熱でばかりではない、いろ〳〵な雜念で重いのだ。

僕は神近とはもうどうしてもお終ひだと思つた。彼女と出來て半年あまりの間に、此のもうお終ひだと言ふ言葉が、彼女の口から三四度も出た。が、こんどは、それを始めて僕の方から云ひ出さうと思つた。

最初は、彼女との關係後二ケ月ばかりして、更に伊藤との關係が出來かゝつた時、彼女から隨分手嚴しくそれを申渡された。

『けふはきつとあなた、どこかでいゝ事があつたのね。顔ぢうがほんたうに喜びで光つてゐるわ。野枝さんとでも會つて？』

或晩遅く彼女を訪ねた時、顔を見ると直ぐ彼女は云つた。僕はそれまではそんなに嬉しさうにしてゐたとも思はなかつたが、さう云はれて始めて、彼女の言葉通りに顔ぢうが喜びで光つてゐるやうな氣がした。そして實際又、彼女の云つた通り、今伊藤と會つて來たばかりだつたのだ。しかもいつも亭主が一緒なのが、其日は始めて二人きりで會つて、始めて二人で手を握り合つて歩いて、始めて甘いキスに醉うて來たのだつた。僕は正直に其の通りを彼女に話した。

『さう、それやよかつたわね、私も一緒になつてお喜びしてあげるわ。』

彼女はもう餘程以前から僕等二人がよく好き合つてゐる事を知つてゐた。そして、たゞ好き合つてゐるばかりで、それ以上にちつとも進まない事を寧ろ不思議がつてゐた。で、自分が僕等の姉さんでもあるかのやうにして、ほんたうに喜んでくれたやうだつた。

彼女には、此の姉さんと云ふやうな氣持が、隨分にあつた。そして此の氣持の上から、僕や伊藤の我がまゝをいつも許してくれ、又自分からも進んでいろ〳〵な我がまゝをさせてゐた。彼女はもう三十だつた。そして伊藤は彼女よりも七八つ下だつた。

僕が、彼女と始めて手を握つた時にも、彼女は、伊藤に對する僕の愛を許してゐた。まだどうにもなつてゐない、今からもどうなるか見こみはちつともない。しかし、僕は非常に伊藤を愛してゐる、今からして相抱き合つてゐる彼女よりも以上に愛してゐる。僕は、此の事實を僞る事は出來ないと云つた。彼女はそれを承認した。しかも、ちつともいやな顔は見せないで、笑ひながら承認した。

『たとへば、僕にはいろんな男の友人がある。そして其の甲の友人に對するのと乙の友人に對するのと、其の人物の評價は違ふ。又尊敬や親愛の度も違ふ。しかし、それが僕の友人たるに於ては同一だ。そして皆んなは、各々自分に與へられた尊敬と親愛との度で滿足してゐなければならない。俺は乙よりも尊敬されないから、あいつの友人になるのはいやだ、などと云ふ馬

鹿な甲はゐない。』
と云ふのが僕の友人觀、兼戀愛觀だつた。
僕は友人と戀人との間に大した區別を設けたくなかつた。
が、理窟はまあどうでもいゝとして、とにかく彼女は、僕の心の中での彼女と伊藤との優劣を認めたのだ。と同時に又、其の尊敬や親愛の對象となるものの質の違つてゐる事をも認めたのだ。そして彼女は、此の優越を蔽ふために、年齡の上からの自分の優越を考へ出したのだ。しかし反對に又、彼女より年の多い保子に對しては、彼女は自分の知力の優越を考へてゐた。そしてやはり此の優越感の上から、保子に對してまでも姉さんぶつた心の態度を持つてゐた。此の姉さんぶると云ふ態度には、彼女の性格の一種の仁俠もあるのであるが、しかし彼女が其の競爭者に對してどうしても持ちたい優越感がそれを非常に助けてゐたのだ。
實際彼女は此の優越と云ふ事をよく口にしてゐた。そして彼女が有らゆる點に於て優越を感じてゐた保子に對しては、たゞ憐憫があるばかりで、殆んど何んの嫉妬もなかつた。それからもう一人これは今ちよつとその人の名を云へないが、やはり女文士でかりにFといふのがあつた。其のFと僕とのごく深い關係に就いても、彼女はやはり自分の優越感から何んの嫉妬をも感じてゐなかつた。寧ろ一種の興味をもつてすら見てゐた。
其晩は僕は麻布の彼女の家に泊つた。そして翌日保子のゐる逗子の家に歸つた。すると多分其の翌日の朝だ、僕は彼女から本當に三行半と云つてもいゝ短かい絕緣狀を受取つた。それは『若し本當に私を思つてゐてくれるのなら、今後もうお互に顏を合はせないやうにしてくれ。では、永遠にさよなら』と云ふやうな意味の、あまりに突然のものだつた。僕は直ぐ東京へ出た。そして彼女を其の家に訪うた。が、彼女は僕の顏を見るや、泣いてたゞ『歸れ、歸れ』と叫ぶのみで、話のしやうもなかつた。そして僕は何か放りつけられて、其の家を逐ひ出された。
僕は直ぐ宮島の家へ行つた。宮島の細君は彼女にとつての殆んど唯一の同性の友達だつた。
『ゆうべはひどい目に合つたよ。神近君が醉つぱらつて氣違ひのやうにあばれ出してね。そして君の事を「だました！　だました！」と云つて罵るんだ。漸くそれを落ちつけさして、家まで連れて行つて、寢かしつけて來たがね。實際弱つちやつたよ。』
宮島は、僕が彼女の話をすると、本當に弱つたやうな顏をして話した。
そこへ、暫くして、彼女がやつて來た。顏色も態度も、さつきとはまるで別人のやうに、落ちついてゐた。
『私、あなたを殺す事に決心しましたから。』
彼女は僕の前に立つて勝利者のやうな態度で云つた。
『うん、それもよからう。が、殺すんなら、今までのお馴染甲斐に、せめては一息で死ぬやうに殺してくれ。』
僕は其の「殺す」と云ふ言葉を聞くと同時に、急に彼女に對する敵意の湧いて來るのを感じたのであつたが、戲談半分にそれは受け流した。
『其時になつて卑怯なまねをしないやうに。』
『えゝ、えゝ、一息にさへ殺していたゞければね。』
二人はそんな言葉を云ひかはしながら、しかしもう、お互の顏には隱しきれない微笑みがもれてゐた。彼女は又もとの姉さんに歸つたのだが、僕と伊藤とは此の姉さんにあまりに甘えすぎたやうだ、あまりに無遠慮すぎたやうだ、それをあまりに利用しすぎたとまでは思はないが。そして其のたびに彼女はヒステリイを起し

はじめた。

ヒステリイとまでは行かんでも、其後彼女は、其の生來の執拗さが益々しつつこくなつた。いろんな要求が益々激しくなつた。そして、それが滿足されなければされない程、それだけ又益々しつこつくなり、益々うるさくなるのであつた。が、こゝに白狀して置かなければならないのは、僕はだん／＼此の執拗さにいや氣がさして行つたのであるが、しかし又、其の執拗さが僕にとつての一つの强い魅力でもあつた事だ。

彼女は折々其の執拗さを遠慮した。が、それはいつも、更に數倍の執拗さをもつて來る前ぶれのやうなものだつた。そして其の執拗さが滿足されないと、彼女はきまつて其のヒステリイを起した。そして其のたびに、彼女の口から、例の「殺す」と云ふ言葉が出た。其の言葉を聞くと、僕は奮然として、其の席を起つて出た。

かくして僕は彼女から三度ばかり絕交を申渡された。が、其の翌日には、彼女はきつと謝まつて歸るのだつた。そして其の最後に謝まつて來た時には、僕は彼女に、もう一週間熟考して見るがいゝと云つて、一旦それを斥けた。彼女は其の一週間が待てないで、其の翌日又謝まつて來た。

『しかし、こんどはもう、斷然其の絕交をこつちから申渡すんだ。』

僕は原稿紙を前に置いたまゝ、それにはたゞ「善政とは何ぞや」と云ふ題を書いただけで、獨り言のやうに云つた。

「こんど若し、君が殺すと云つたら、又そんな態度を見せた場合には、卽刻僕は本當に君と絕交する。」

最後の仲直りの時に僕は彼女にさう云つたのだ。そして今、ゆうべ僕は、彼女の顏の中に確かに殺意を見たのだ。

五

彼女は散步から歸つて來た。僕は机に片肱をもたせかけて、熱でほつぽとほてる頭を押へてゐた。彼女は僕が一行も書けないでゐる原稿紙の上を冷かにあざ笑ふやうにして見てゐた。

夕飯を食ふと、僕は又直ぐに寢床をしかして、橫になつた。彼女はしばらく無言で坐つてゐたが、やはり又そばに寢床に寢た。僕はもう出來るだけ何んにも考へないやうにして、たゞ靜かに眠る事だけを考へてゐた。が、長年の病氣の經驗から、熱のある時に興奮をさけ　、習慣のやうになつてゐる此の方法も成功しなかつた。ふと僕はゆうべの彼女の恐ろしい顏を思ひ出した。

「ゆうべは無事だつた。が、いよ／＼今晩は僕の番だ。」

僕はさう思ひながら、彼女がどんな兇器を持つて來てゐるだらうかと想像して見た。彼女はよく一思ひに心臟を刺すと云つてゐた。刺すとなれば短刀だらう。が、彼女はそれをどこに持つてゐるのだらう。彼女はごく小さな手提を持つてゐた。しかし、あんな小さな手提の中では、七八寸ものでも隱せまい。すると彼女はそれを懷ろの中にでも持つてゐるのかな。とにかく刃物なら何んの恐れる事もない。彼女がそれを振りあげた時に直ぐもぎ取つて了へばいゝのだ。だが、若しピストルだと、ちよつと困る。どうせ、ろくに打ちやうも知らないのだらうが、それにしてもあんまり間が近すぎる。最初の一發さへはづせば、もう何んの事もないのだが、其の一發がどうかすれば急所に當るかも知れない。しかし、それも滅多にはない事だらう。一發どこ打たして置いて、直ぐ飛びかかつて行けばいゝのだ。女の一人や二人、何を持つて來たつて、何んの恐れる事があるもの　。直ぐとつち

めて、はふり出して了へばいゝのだ。
「ね、何か話ない？」
一二時間もしてからだらう、彼女は僕の方に向き直つて、泣きさうにして話しかけた。彼女には此の默つてゐると云ふ事が何よりもつらいのだ。寂しくて堪らないのだ。どなり合つてでも、何か話してゐたいのだ。そして今は、もう堪らなくなつて、何もかも一切忘れたやうになつて、數日前の彼女と僕とに歸つて話したかつたのだ。
『してもいゝが、愚癡はごめんだ。』
『愚癡なんか云ひやしないわ、だけど……』
「其のだけどが僕はいやなんだ。」
「さう、それぢやそれも止すわ。」
『それよりも、此の一二日以來のお互の氣持でも話さうぢやないか。僕はもう、こんな醜い、こんないやな事ぁ飽き飽きだ。ね、お互にもういい加減打ちきり時だぜ。』
『えゝ、私ももう幾度もさう思つてゐるの。だけど……』
「又だけどだね。其のだけどでいつも駄目になるんだ。こんどこそはもうそれを止しにしようぢやないか。」
「だけど、もつと話したいわ。」

「話はいくらでもするがいゝさ、しかし、もうお互にこんないやな思ひばかり續けてゐたつて、仕方がないからね。本當にもう止しにしようよ。』
「えゝ……」
彼女はまだ何か話したさうに見えた。が、其の話のさきを一々僕に折られて了ふので、こんどは默つて何か考へてゐるやうだつた。彼女がかうして折れて來ると、僕は彼女の持つてゐる殺意にまで話を進める事が出來なくなつた。そして僕はたゞ彼女の此の上折れて來ようとするのを防がうとだけ考へた。
が、彼女はそれつきり默つて了つた。僕も默つて了つた。そして僕は　これだけの事でも云つたので多少胸がすい　ものと見えて、何も考へないで靜かに眠つたやうにしてゐる事に、こんどは成功した。
「ね、ね。」
それから又一二時間しての事だらう、彼女は僕を呼び起すやうに呼んだ。
「ね、本當にもう駄目？」
『駄目と云つたら駄目だ。』
「さう、私今何を考へてゐるのか、あなた分る？」

「そんな事は分らんね。」
『さう、私今ね、あなたが金のない時の事と、ある時の事とを考へてゐるの。』
『と云ふと、どう云ふ意味だい？
「野枝さんが綺麗な着物を着てゐたわね。」
「さうか、さう云ふ意味か、金の事なら、君にかりた分はあした全部お返しします。」
僕は彼女に金の事を云ひだされてすつかり憤慨して了つた。
「いゝえ、私そんな意味で……」
彼女は何か云ひわけらしい事を云つてゐた。
「いや、金の話まで出れば、僕はもう君と一言もかはす必要はない。」
僕は斷じてもう彼女の云ひわけを斥けた。そして彼女がまだ二言三言何か云つてゐるのも受けつけずに默つて了つた。
いつでもあの位氣持よく、しかも多くは彼女から進んで、出してゐた金の事を、今になつて彼女が云ひださうとは、全く僕には意外だつた。そして此の場合、金が出來たから彼女を棄てるのだ、と云ふやうな意味の事を云はれるのも、全く意外だつた。そしてそれが意外な程、僕は實に心外に堪へなかつた。
金の出道は彼女には話してなかつた。それも

彼女には不平の一つらしかつた。が、其頃にはもう僕は彼女に同志としてのそれだけの信用がなかつたのだ。僕は其の金を時の××××××君から貰つて來たのだ。

其の少し前に、伊藤が其の遠緣の頭山滿翁のところへ金策に行つた事があつた。翁は今金がないからと云つて杉山茂丸君のところへ紹介狀を書いた。伊藤は直ぐ茂丸君を訪ねた。茂丸君は僕に會ひたいと云ひだした。で、僕は築地の其の台華社へ行つた。彼れは僕に、白柳秀湖だの、山口孤劍だののやうに軟化をするやうにと勸めた。國家社會主義位のところになれと勸めた。さうすれば、金もいるだけ出してやる、と云ふのだ。僕は直ぐ其の家を辭した。

茂丸君は無條件では僕に一文も金をくれなかつた。が、其の話の間に時々出た「××」が「×××が」と云ふ言葉が、僕に或る一案を暗示してくれた。或晩僕は×××××に電話して、××がゐるかゐないかを聞き合はした。××はゐた。が、今晩は××××共を招待して御馳走をしてゐるので、何か用があるなら明日にしてくれとの事だつた。

「なあに、ゐさへすればいゝのだ。」

僕はさう思ひながら直ぐ永田町へ出かけた。

「御覽の通り、今晩はこんな宴會中ですから……」

多分××とか云ふ秘書×らしい男が僕の名刺を持つて挨拶に出て來た。

「いや、それは知つて來てゐるんです。とにかく×に其の名刺を取次いで、ほんのちよつとの時間でいゝから會ひたい、と云つて貰へばいいんです。」

秘書×は引つこんで行つた。そして直ぐに又出て來て、「どうぞ、こちらへ」と案内した。

宴會は下のやうだつたが、僕は二階のとつつきのごく小さな室へ案内された。テエブルが一つに椅子が三つばかり置いてあるだけで、飾りと云ふ程の飾りもない室だつた。

直ぐに給仕がお茶を持つて來た。が、其の給仕はお茶をテエブルの上に置くと、ドアの右手と正面とにある三つばかりの窓を、一々開けては鎧戸をおろして又閉めて行つた。變な事をするなと思つてゐると、こんどは左手の壁の中にあるドアを開けて、さつきの秘書×がはひつて來た。

「今直ぐ××がお出でですから」

彼れはさう云つて、出はひり口のドアを一旦開けて見て又閉めて、それにピチンと鍵をおろした。

「はゝあ、何か間違ひもあつた時に、僕が逃げられない用心をしてゐるんだな。」

僕は笑ひたいのをこらへて、默つて彼の動作を見てゐた。彼れはさつき給仕が閉めた窓のところへ行つて、一々それに窓掛けをおろして、そして丁寧にお辭儀をして又隣りの室との間のドアの向うに消えた。

「すると、××はあのドアからはひつて來るんだな。」

僕はさう思つて、其のドアの方に向つて、煙草をくゆらして待つてゐた。

が、まつてゐると云ふ程もなく、直ぐ××がはひつて來た。新聞の寫眞でよく見てゐた、×××とポワンテュの鬚との、まぎれもない彼れだ。

「よくお出でした。いや、お名前はよく存じてゐます。私の方からも是非一度お目にかゝりたいと思つてゐたのでした。けふはこんな場合で甚だ失禮ですが、しかし今ちやうど食事もすんで、ちよつとの間なら席をはづしても居られます。私があなたに會つて、一番さきに訊きたいと思つてゐた事はどうしてあなたが今のやうな思想を持つやうになつたかです。どうで

す。ざつくばらんに一つ、其の話をしてくれませんか。』
少々赤く醉を出してゐる××は、馬鹿にお世辭がよかつた
『え、其の話もしませう。が、今日は僕の方で別に話を持つて來てゐるのです。そして其の方が僕には急なのだから、今日は先づ其の話だけにしませう。』
『さうですか。すると其のお話と云ふのは？』
『實は金が少々欲しいんです。で、それを、若し戴ければ戴きたいと思つて來たのです。』
『あゝ金の事ですか。そんな事ならどうにでもなりますよ。それよりも一つ、さつきのお話を聞かうぢやありませんか。』
『いや、僕の方は今日は此の金の方が重大問題なんです。どうでせう。僕今非常に生活に困つてゐるんです。少々の無心を聞いて貰へるでせうか。』
『あなたは實にいゝ頭を持つて、そしていゝ腕を持つてゐると云ふ話ですがね。どうしてそんなに困るんです。』
『××が僕等の職業を邪魔するからです。』
『が、特に私のところへ無心に來た譯は？』
『××が僕等を困らせるんだから、××へ無心に來るのは當然だと思つたのです。そしてあなたならそんな話は分らうと思つて來たんです。』
『さうですか、分りました。で、いくら欲しいんです。』
『今急のところは三四百圓あればいゝんです。』
『ようごわす、差しあげませう。が、これはお互の事なんだが、ごく内々にして戴きたいですな。同志の方にもですな。』
『承知しました。』
金の出道と云ふのは要するにかうなのだ。そして僕は三百圓懷にして家に歸つた。
其の金は、しばらく金をちつとも持つて行つてゐない保子のところへ五十圓行き、猶もうぼろぼろになつた寢衣一枚でゐる伊藤に三十圓ばかりでお召の着物と羽織との古い質を受けださせて、まだ二百圓は殘つてゐた　それにもう五十圓足せば、市外に發行所を置くとすれば、月刊雜誌の保證金には間に合ふのだ。
―が、もう雜誌なぞはどうでもいゝ。あしたは其の金を伊藤に持つて來て貰つて、こいつに投げつけてやるんだ。
僕は一人でさう決心した。
又、彼女が伊藤の着物の事を云ひだしたのから思ひだすと、ふだん人の着物なぞにちつとも注意しない彼女が、さう云へば伊藤の風ていをじろ〳〵と見てゐた。彼女はもう大ぶ垢じみたメリンスの袷(それとも單衣だつたか)に木綿の羽織を着てゐた
『さう〳〵、彼女はいつか僕にいくらかの金をつくるために、其の着物を質に入れてゐたのだつけ。せめてはあれだけでも出して置いてやるのだつた。』
と僕も氣がついた。が、今になつてそんな氣がついたところで仕方がない。
『とにかくあしたは、あいつに金を投げつけてやるんだ。』

六

少しうと〳〵としてゐると、誰れかが僕の蒲團にさはるやうな氣がした。
『何をするんだ？』
僕はからだを半分僕の××の中に入れようとしてゐる彼女を見てどなつた。
『×、×　××××××。』
彼女は、其晩始めて口をきゝだした時と同じやうに、泣きさうにして云つた。

「いけません。僕はもうあなたとは他人です。」

「でも、私悪かつたのだから、あやまるわ。ね、許して下さいね。ね、いゝでせう。」

『いけません。僕はさう云ふのが大きらひなんです。さつきはあんなに云ひ合つて置いて、其の話がつきもしない間に、其のざまは何んて云ふ事です。』

僕は、彼女の訴へるやうな、しかし又、情熱に燃えるやうな目を手で斥けるやうにしてさへ切つた。

彼女のからだからは其の情熱から出る一種の臭ひが發散してゐた。

あゝ彼女の肉の力よ。僕は彼女との最初の夜から、彼女の中にそれを最も恐れ且つ同時にそれに最も引かれてゐたのだ。そして彼女は、其のヒステリカルな憤怒の後に、其の肉の力を最も發揮するのだつた。

しかし今晩はもう、僕は彼女の此の力の中に卷きこまれなかつた。僕は彼女の此の力を感ずると同時に、猶更に奮然としてそれに抵抗して起つた。今晩の彼女の態度は、始めから其のふだんの執拗さや强請の少しもない、寧ろ實にしをらしい音なしい態度だつた。が、此のしをらしさが、彼女の手と云つてもいゝ位に、かうした場合にはきつと出て來るのだつた。が、僕は最初からそれを峻拒してゐた。

彼女は決然として自分の寢床に歸つた。そしてぢつとしたまゝ寢てゐるやうだつた。

僕はいよ／＼だなと思つた。こんどこそは本當にやるのだらうと思つた。僕は仰向きになつたまゝ兩腕を胸の上に並べて置いて、いつでも彼女が動いたら直ぐ起ちあがる準備をして、目をつぶつたまゝ息をこらしてゐた。一時間ばかりの間に彼女は二三度ちよつとからだを動かした。其のたびに僕は拳をかためた。

が、やがて彼女は起き出して來た。そして僕の枕もとの火鉢のそばに坐りこんだ。

僕はこれは工合が悪いなと思つた。横からなら、どうにでもして防げるのだが、頭の方からではどうしても防ぎやうがないと思つた。しかし、今更、こつちも起きるのも强はらだと思つた。ピストルで頭をやられてはちよつと困ると思つたが、しかし刃物なら何んとか防ぎやうがあると思つた。ピストルはさう急に彼女の手にはひるまい。だから、兇器はきつと刃物だらうと思つた。

『しかし、どんな事があつても、こんどは決して眠つてはならない。眠れば、僕はもうお終ひなのだ。』

僕はさう決心して、やはり前のやうに目をつぶつたまゝ兩腕を胸の上に並べて、息をすまして、頭の向うでの呼吸を計つてゐた。其時、どこかで時計が三時を打つのを聞いた。僕はやはり息をすまして向うの動靜を計つてゐた。

ふと僕は、咽喉のあたりに、熱い玉のやうなものを感じた。

『やられたな。』

と思つて僕は目をさました。いつの間にか、自分で自分の催眠術にかゝつて、眠つて了つてゐたのだ。

『熱いところを見ると、ピストルだな。』

と續いて僕は思つた。そして前の方を見ると、彼女は障子をあけて、室のそとへ出て行かうとしてゐた。

『待て！』

と僕は叫んだ。

彼女はふり返つた。

（これで僕は、最初に話したお化のところまで戻つた譯だ。其のお化の因縁話をすました譯だ。が、事件はまだ續く。僕はそれもすつかり話して了はなければ、僕の責めは濟まないだらう。で、もつと話を續けて行かう。）

彼女はふり返つた。

僕は其の前夜、彼女が寢てゐる伊藤をにらみつけた、其の恐ろしい殺氣立つた顏を彼女に見ると思ひのほか、彼女がゆうべ僕に泣きついて來た時の其の顏よりももつと憐れな顏を見た。

「許して下さい。」

彼女がふり向くと同時に發した此の言葉が僕には意外だつた。

しかし、もうからなつた以上、僕は彼女を許す事が出來なかつた。少なくとも其の瞬間の僕は、何んと云ふ理窟はなしに、たゞ彼女を捕まへてそこへ叩きつけなければ已まなかつた。

僕は起きあがつた。そして逃げようとする彼女を追うて緣がはまで出た。彼女はそこの梯子を走り下りた。そして中途で僕は彼女の背中の上へ飛び降りるつもりで飛んだ。が、彼女の方がほんの一瞬間だけ早かつた。彼女は下の緣がはを右の方へ駈けて、七八間向うの玄關のところから更に二階の梯子段を登つた。僕は梯子段を飛び下りた時から、急に足の裏の痛みと呼吸のひどく困難になつて來たのを感じながら、猶彼女を追つかけて行つた。

其の二階は、僕の居室の二階とは棟が違つてゐて、大きな二つの室の奧の方が、其夜は宿の親戚の女共の寢室になつてゐた。彼女は其の手前の室の中にはひつて、紫檀の茶ぶ臺の向うに立ちどまつた。

「許して下さい。」

彼女は恐怖で慄へながら又叫んだ。

が、僕は其の茶ぶ臺の上を踏み越えて彼女を捕まへようとした。彼女は又走りだした。其の奧に寢てゐた女共は目をさまして、互にかじりついて、僕等の方を見つめながら慄へてゐた。

僕は呼吸困難で咽喉がひい／＼鳴るのを覺えながら、猶彼女を追つかけて行つた。彼女はさつきの梯子段を降りて、廊下をもとの方へ走つて、もとの二階へは昇らずに、そこから左の方へ便所の前に折れた。そして其の折れた拍子に彼女は倒れた。僕も彼女の上に重なつて倒れた。

僕はそれから幾分たつたか知らない。ふと氣がついて見ると、血みどろになつて一人でそこに倒れてゐた。呼吸はもう困難どころではなく殆んど窮迫してゐた。

「これはいけない。」

と僕は思ひながら、漸く壁につかまつて起ちあがつて、玄關の方へよろめいて行つた。玄關のそばには女中部屋があつた。僕は女中を起して醫者を呼びにやらうと思つたのだ。が、其の女中部屋の前で僕は又倒れて了つた。そして倒れると同時に、其の板の間が血でどろ／＼してゐるのを感じた。

女中は呼んでも返事がなかつた。皆んな二階の親戚の客におどかされて、一緒に奧の方へ逃げこんでゐたのだ。暫くして、其の親戚の一人の年増の女がおづ／＼とそばへ來た。

「あのね、直ぐ醫者を呼んで下さい。それから東京の伊藤のところへ直ぐ來るやうに電話をかけて下さい。それからもう一つ神近の姿が見えないんだが、どうかすると自殺でもするかも知れないから、だれか男衆に海岸の方を見さして下さい。」

僕はこれだけの事を、相變らず咽喉をひいひい鳴らしながら、漸くの事で云つた。そして僕は煙草を貰つて、其の咽喉の苦しさをごまかしてゐた。傷はピストルではなく、刃物だと云ふ事も其の時に漸く分つた。

やがて、どや／＼と警官共がはひつて來た。そして其の一人は直ぐと僕に何か聞き尋ねようとした。

『馬鹿、そんな事よりも先づ醫者を呼べ。醫者が來ない間は貴樣等には一言も云はない。』

　僕は其の男をどなりつけながら、頭の上の柱時計を見た。三時と三十分だつた。

『すると、眠つてから直ぐなのだ。』

　と僕は自分に云つた。

　それから十分か二十分かして、僕は自動車で、そこからいくらもない逗子の千葉病院に運ばれた。そして直ぐ手術臺の上に横はつた。

『長さ……センチメエトル、……深さ……センチメエトル。氣管に達す……』

　院長が何か傷の中に入れながら、助手や警官等の前で口述するのを聞きながら、僕は、

『けふの晝まで位の命かな。』

　と、ちよつと思つたまゝ、其儘深い眠りに陷つて了つた。

僕の故鄕（一）

　こんなちよい〳〵したエピソドのほかには、うちにゐる間は、讀書か思索か妄想かのほかに時間の消しかたがない。讀書にも飽き、思索にも飽き來ると、ひとりでに頭が妄想に向ふ。それも、そとの現在の事は一切僕の無意識的にあきらめて、考へても仕方のない遠い過去の事か、出獄間近になれば出てからの將來の事などが思ひ浮べられる。

　現在の女房の事でも、面會に來るか手紙が來るかの時でもなければ、それも二ケ月に一度づつしかないのだが、滅多には思ひ出さない。そして古い女の事や、子供の頃の女友達の事なぞが切りに思ひ出される。

　元來僕には故鄕と云ふものがない。

　生れたのは讃岐の丸龜ださうだ。が、生れて半年經つか經たぬうちに東京へ來た。そして五つの時に父や母と一緒に越後の新發田へ逐ひやられた。東京では父は近衞にゐた。うちは麴町の何番町かにあつた。僕は其の近衞聯隊の門の樣子と、うちの大體の樣子と、富士見小學校附屬の幼稚園の大體の輪郭とのほかには、殆んど何んの記憶もない。

　僕の元來の國、即ち父祖の國は、名古屋を西にさる四五里ばかりの津島に近い或る村だが、其處には自分が覺えてからは十四の時に始めてちよつと伯父の家を訪うて、其の翌年名古屋の幼年學校にはひつてから時々ちよいちよい遊びに行つたに過ぎない。少しも自分の國と云ふやうな氣はしない。本籍は其處にあつたのだが、其の後東京の自分の住んでゐた家に移した。

　たゞ越後の新發田にだけは、五つから十五までのまる十年間ゐた。其の後も十八の時までは毎年暑中休暇に歸省した。從つて若し故鄕と云へば其處を指すのが一番適切らしい。

　名古屋から始めて暑中休暇に新發田へ歸る途で、直江津から北越鐵道に乘換へて、長岡を超えて三條あたりまで行つた頃かと思ふと僕は、窓の向うに、東北の方に長く連なつてゐる岩越境の山脈を眼の前に見て、思はず快哉を叫びたい程の或るインスピレションに打たれた。其の山脈は僕が嘗て十年間見た其の儘の姿なのだ。そして其のあちこちには、僕が嘗て遊んだ、幾つかの山々が手にとるやうに見えるのだ。

（『獄中記』より）

日本脫出記

日本脫出記

一

去年の十一月二十日だつた。少し仕事に疲れたので、夕飯を食ふと直ぐ寝床にはひ てゐると、Mが下から手紙の束を持つて來た。いつものやうに、地方の同志らしい未知の人からの、幾通かの手紙の中に、珍らしく横文字で書いた四角い封筒が一つまじつてゐた。見ると、かねてから新聞で其の名や書いたものは知つてゐる、フランスの同志コロメルからだ。何を云つて來たのだらうと思つて、ちよつと其の封筒をすかして見たが、薄い一枚の紙を四つ折にした位の手觸りのものだ。もう長い間の習慣になつてゐるやうに、それがどこかで開封されてゐるかどうか、先づ調べて見たが、それらしい形跡は別になかつた。たゞ附箋が三四枚はつてあつたが、それは鎌倉に宛てて書いてあつたので、そこから逗子に廻り、更に又東京に廻つて來たしるしに過ぎなかつた。そんなにあちこちと廻つて來ながら、よく開封されなかつたものだと思ひながら、とにかく開けて見た。ほんのたゞ十行ばかり、タイプで打つてある。

それを讀むと、急に僕の心は踊りあがつた。一月の末から二月の始めにかけて、ベルリンで國際無政府主義大會を開く事になつたが、ぜひやつて來ないか、と云ふ、其の準備委員コロメルの招待狀なのだ。

大會の開かれる事は僕はまだちつとも知らなかつた。が、ちやうどいゝ機會だ、行かう、と僕は心の中できめた。そして枕もとの小さな丸テエブルの上から、其の日の晝來たまゝ未だ封も切つてなかつた、イギリスの無政府主義新聞『フリイドム』を取つて見た。果してそれには大會の事が載つてゐた。

招待狀にもちよつと書いてあつたやうに、九月の半ばに、スキツルのセン・テイミエで、最初の國際無政府主義大會と云つていゝ謂はゆるセン・テイミエ大會の五十年記念會があつた。フランス、ドイツ、イタリイ、スキツル、ロシア、及び支那の、百五十名ばかりの同志が集まつた。そして其のセン・テイミエ大會に與かつた一人のマラテスタも、ロオマから竊かに國境を脫け出て、そこに出席した。先年彼れは此のスキツルから追放されてゐるので、そこにはひれば、見つかり次第捕まる恐れがあつたのだ。

記念會は一種の國際大會のやうなものになつた。そして其處で、無政府主義の組織の事や、無政府主義とセンディカリズムの關係の事なぞが問題となつて、いろ〳〵議論のあつた末に、フランスの代表者コロメル等の發議で、新たに國際無政府主義同盟を組織しようと云ふ事になつて、急に國際大會を開く事にきまつたのであつた。

此の國際同盟の事は、もう隨分古い頃から始終問題になつてゐて、現に十五六年前のアムステルダム大會でそれが一旦組織されたのであつた。此の同盟には、僕等日本の無政府主義者も、幸德を代表にして加はつた。そして幸德は每月其の機關紙に通信を送つてゐた。しかし、元來無政府主義者には、個人的又は小團體的の運

動を重んじて、一國的とか國際的とかの組織を無んずる傾向があり、國際大會を開くにしても、其の選定した土地の政府がそれを許さなかつたり、又、各國の同志がそれに參加しようと思つても、政府の迫害や經濟上の不如意なぞのいろんな邪魔があつたりして、僅か一二年の間に此の同盟も立消えになつて了つた。最近滿足に開かれた大會は前に云つたアムステルダム大會一つ位のもので、隨分久しぶりに開かれた一昨年の暮のベルリン大會なぞも、長い間の運動の經驗を持つた名のある同志は殆んど一人も見る事が出來なかつた程の、餘程不完全なものであつたらしい。

しかし時はもう迫つて來た。殊に、ロシアの革命が與へた教訓は、各國の無政府主義者に非常な刺戟となつて、今までのやうな怠慢を許さなくなつた。

『フリイドム』の此の記事を讀んでゐる間に、Kが其の勸めさきから歸つて來た。

『おい、こんな手紙が來たんだがね。』

と云つて、僕はコロメルからの手紙の內容と大會の性質とをざつと話した。

『それやぜひ行くんですね。』

Kもだいぶ昂奮しながら云つた。

『僕もさうは思つてゐるんだがね。問題は先づ何より金なんだ。』

『どの位要るんです。』

『さあ、ちよつと見當はつかないがね。最低のところで千圓あれば、とにかく向うへ行つて、まだ二三ヶ月の滯在費は殘らうと思ふんだ。』

『其位なら何んとかなるでせう。あとは又あとの事にして。』

『僕もさうきめてゐるんだ。で、あした一日金策に廻つて見て、其の上ではつきりきめようと思ふんだ。』

『旅行券は？』

『そんなものは要らないよ。もう、とうの昔に、うまく胡麻化して行く方法をちやんと研究してあるんだから。たゞ其の方法を講ずるのにちよつとひまがかゝるから、あしたぢうにきめないと、大會に間に合ひさうもないんだ。』

Kは此の二つの條件を聞いて、すつかり安心したらしかつた。そして下へ降りて行つた。

しかし、僕にはまだ、さうやすく〳〵と安心は出來なかつた。實は其の借金の當てが殆んどなかつたのだ。借りれる本屋からは、もう借りれるだけ、と云ふよりもそれ以上に借りてゐる。そして、約束の原稿は、まだ殆んど何處へも何んにも渡してない。それに、若しまだ借りれるとしても、いやどうしても借りなければならんのだが、それは留守中の社や家族の費用に當てなければならない。ほかに二三人多少金を持つてゐる友人はあるが、それもほんの少々の金であれば時々貰つた事もあるが、少しまとまつた金はくれるかどうか分らない。それに此頃は隨分景氣が惡いんだから。

そんな事をそれからそれへと、いろ〳〵と寢床の中で考へて見たが、要するに考へてきまる事ではない。あした早く起きて、あちこち當つて見る事だ、さうきめて、僕は頭と目とを疲らせる眠り藥の、一週間程前から讀みかけてゐる『其角研究』を讀み始めた。

翌日は尾行をまいて歩き廻つた。果して思ふやうに行かない。夕方になつて、うんざりして歸りかけたが、ふと一人の友人の事を思ひ浮んで、そこへ電話をかけて見た。そして、最後の幽かな希望のそこで、案外世話なく話がついた。

それでもう事はきまつた。

其の翌日は、九州の郷里に歸つてゐる女房

と子供とを呼びよせに、Mを使ひにやつた。關西支局のWも女房や子供と前後して上京した。

準備は何んにも要らない。たゞ小さなスウツケエス一つ持つて出かければいゝのだ。が、其の前に、正月號の雜誌に約束した原稿と、やはり正月に出す筈の或る單行本とを書いて了はなければならない。そんな事で愚圖々々してゐる間に、もう暮近い事だ、やうやく貯つて來た金が半分ばかりに減つて了つた。そして、それを又やうやくの事で借り埋めて、十二月十一日の晩竊かに家を脱け出た。

二

家を脱け出る事にはもう馴れ切つてゐる。しかしそれも、尾行をまいて出る事が直ぐ知れていゝ時と、當分の間知れては困る時とがある。前の場合だと何んでもないが、後の場合だとちよつと厄介だ。

去年の夏日本から追放されたロシア人のコズロフが、其の前年竊かに葉山の家から僕の鎌倉の家に逃げて來て、そしてそこから更に神戸へ逃げて行つた時には、其のあとで僕は三日ばかり時々大きな聲で一人で英語で話してゐた。

が、二三日ならそんな事でもして何んとか胡麻化して行けるが、一週間も十日も胡麻化さうとなるとちよつと困る。

一昨々年の十月、僕は竊かに上海へ行つた。其時には、上海へ着いて了ふまでは、僕が家を出た事を其筋に知らせたくなかつた。で、夜遅く家を出たのであつたが、其の翌日から僕は病氣で寢てゐると云ふ事になつた。しかし大して廣い家でもなし、それに往來から十分のぞかれる家でもあつたので、尾行共は直ぐ疑ひだした。そして四つになる女の子をつかまへて、幾度もきいたゞして見た。そして其後、其の尾行の一人が僕にこんな話をした。

『魔子ちやんにはとても敵ひませんよ。パパさんゐる？と訊くと、うんと云ふんでせう。でも可怪しいと思つて、こんどはパパさんゐないの？と訊くと、やつぱりうんと云ふんです。おやと思ひながら、又パパさんゐる？と訊くと、やつぱりうんと云ふんです。そしてこんどは、ハハさんゐないの？ゐるの？と訊くと、うん／＼と二つうなづいて逃げて行つて了ふんです。そんな風でたうとう十日ばかりの間どつちともはつきりしませんでしたよ。』

こんどだつて、駒込の家はやはり狹いし、そとから十分のぞかれる。直ぐ前のあき地の小さな稻荷さんの小舍の中にゐる尾行共には、家の中の話聲を聞いてゐるだけでも、ゐるかゐないかは大てい知れよう。

尤も、四つの魔子は六つになつた。それだけ利口にもなつてゐる筈だ。そして女房は、子供をだますのは可哀さうだからと云つて、よく云ひ聞かして、尾行の口車に乘らせないやうにしようと主張した。しかし僕は利口になつてゐるだけそれだけ安心が出來ないと思つた。そして僕が出る日の朝、Mに連れさして、同志のLの家へ遊びにやつた。そこには魔子より一つ二つ下のやはり女の子がゐた。

『こんどは魔子のすきなだけ幾つ泊つて來てもいゝんだがね、幾つ泊る？二つ？三つ？』

僕は子供の頭をなでながら云つた。其の前に二つ泊つた翌朝僕が迎ひに行つて、彼女が大ぶ不平だつた事があつたのだ。そしてこんどもやはり、『二つ？三つ？』と云はれたのに彼女は不平だつたものと見えて、たゞにこ／＼しながら默つてゐた。

『ぢや、四つ？五つ？』

僕は重ねて訊いた。やはりにこ／＼しながら、首をふつて、

『もつと』
と云つた。
『もつと? それぢや幾つ?』
僕が驚いたふりをして訊ねると、彼女は左の掌の上に右の手の中指を三本置いて、
『八つ。』
と云ひきつた。
『さう、そんなに長い間?』
僕は彼女を抱きあげて其の額にキスした。そして、
『でも、いやになつたら、いつでもいゝからお歸り。』
と附け加へて彼女を離してやつた。彼女は躍るやうにして、Mと一緒に出かけて行つた。
彼女は、其の一ケ月前に、其の母が半年ばかりの豫定で郷里に歸つた時には、どうしても一緒に行く事を承知しないで、社の二階に僕と二人きりで殘つてゐた程の、パパつ子なのだ。そして今でもまだ僕は、時々彼女を思ひだしては、なぜ一緒に連れて來なかつたのだらうなぞと、理性の少しも許さない後悔をしてゐる。
子供の事はそれできまつた。あとは僕の顔が、ちよつとも見えない事の口實だ。それは、こんども亦、病氣と云ふことにした。そして多少それを本當らしく見せるために、毎朝氷を一斤づつ買ふ事にした。
『それも尾行を使ひにやるんですね。』
そんな事には ごく如才ない Mが さう 發案して、一人でにこ〳〵してゐた。
家からつい近所までKが一緒に來て、そこから僕は、自動車で市内の或る驛近くまで驅けつけた。そして其邊で小さなトランク一つとちよつとした買物をして、急いで驛の中へはひつて行つた。もう發車時刻の間際だつたのだ。
僕はプラットホオムを見廻した。が、僕の荷物のふろしき包みを持つて來てゐる筈のWの姿が見えなかつた。待合室の中にでもはひつてゐるのだらうと思つて、其の方へ行かうとすると、中から誰れか出て來た。姿は違ふが、其の歩きかたは確かにWだ。其の舊式のビロオドの服が、人夫か土方の帳つけと云ふやうに見せるので、よくさう云つてからかはれてゐるのだが、どこから借りて來たのか、今日は黑い長いマントなぞを着こんで、やはり黑のソフトの前の方を上に折りまげたのをかぶつて、足駄をカラカラ鳴らしてやつて來るところは、どう見ても立派な不良少年だ。
僕はWから荷物を受取つてもう發車しようとしてゐる列車に飛び乘つた。列車は走りだした。Wは手をあげた。僕も手をあげてそれに應じた。これが日本での同志との最後の別れなのだ。
前の上海行きの時には、Rが此の　目を勤めてくれた。偶然其日に鎌倉へ遊びに來たのだつたが、行先きは云はずにたゞちよつと行方不明になるんだから手傳つてくれと頼んで、トランクを一つ持つて貰つて、一里ばかりある大船の停車場まで一緒に行つた。もう夜更けだつたが、ちよい〳〵人通りはあつた。そして家を出る時に何んだか見つかつたやうな氣がしたので、後ろから來るあかりは皆な追手のやうに思はれて、二人とも隨分びく〳〵しながら行つた。殊に一度、建長寺と圓覺寺との間頃で後ろからあかりをつけない自動車が走つて來て、やがて又それらしい自動車が戻つて來た時などは、こんどこそ捕まるものと眞面目に覺悟してゐた。
それが何んでもなく通りすぎた時、僕はRに僕の本當の目的を話してない事が堪らなく濟まなかつた。そして幾度もそれを云はうとして、口まで出て來るのを漸くの事でとめた。彼れ

は決して信用の出來ない同志ではなかつた。しかしまだ僕等の仲間にはひつてから日も淺かつた。そしてごく狹い意味での僕等の團體とは直接に何んの關係もなかつた。

　そして僕は無事に大船から下りの列車に、彼れは上りの列車に乘つた。これはあとでKから聞いた事だが、Rは其時の事を誰れにも話さず、又Kにも其他の誰れにも嘗て僕の行方を尋ね事がなかつたさうだ。僕は今でもまだ、彼の顏を見るたびに、竊かに當時の事を彼れにわび、そして感謝してゐる。

　Wの姿が見えなくなるとすぐ、僕はボオイに顏を見られないやうに外套の襟を高く立てて、車內にはひつて寢臺の中にもぐりこんだ。僕はまだ僕の顏の一番の特徵の、鬚をそり落してゐなかつたのだ。そして一寢入りした夜中に、そつと起きて、洗面場へ行つて上下とも綺麗に鬚をそつて了つた。そしてWが持つて來てくれたふろしき包みの荷物を、トランクの中に入れかへた。荷物といつても、途中の船の中でやる豫定の、仕事の材料と原稿紙とだけなのだ。そして又一寢入りした。

　移動警察の成績が大へんいゝので、十五日から其の人數を今までの幾倍とかにすると云ふ新聞の記事が出たばかりの時だ。其の成績のいゝ一つの例に擧げられては大へんだ。が、それらしい顏も遂に見ないで、翌朝無事に神戶に着いた。

　神戶は、實は僕にとつては、大きな鬼門なのだ。先きにコズロフの追放されるのを送りに來た時、警察本部の外事課や特別高等課に顏を出してゐるので、多勢のスパイ共によく顏を見知られてゐる筈だ。そこから船に乘るのは隨分劍呑だとも思つたが、しかしそれよりもつと劍呑な橫濱からよりは、安全だと思つた。橫濱の警官で殆んど僕の顏を知らないものはない位なのだ。長年鎌倉や逗子にゐた間に、代る代るいろんな奴が尾行に來てゐる。

　改札口を出ようとすると、どこの停車場にも大てい一人二人はゐるのだが、怪しい目つきの男が一人見はつてゐる。そして僕が通り過ぎたあとで直ぐ、改札の男の方へ走り寄つたやうな氣はひがした。僕は直ぐ車に乘つて、いゝ加減のところまで走らして、それから更に車をかへて或るホテルまで行つた。

　あした出る筈で、其の切符を買つて來てある或る船は、あさつての出帆に延びてゐた。仕方なしに、其日と翌日の二日は、ホテルの一室に引つこんで、近く共譯で出す或る本の原稿を直して暮した。そしてたつた一度、晝飯後の散步にぶら〳〵そとへ出て見たが、道で改造社の二三人が車に乘つて、其晩のアインシタインの講演のビラをまいて步いてゐるのにぶつかつた。僕は僕の顏が果して彼等に分るかどうかと思つて、わざと其の方へ近づいて行つて、車の正面のところでちよつと立ち止まつて見た。が、分る筈はない。嘗て僕が入獄する數日前、僕のための送別會があつた時、僕は頭を一分刈りにして顏を綺麗にそつて、すつかり囚人面になつて出かけて行つた。そして室の片隅のテエブルに座を占めてゐたが、僕の直ぐ前に來て腰掛けたものでも、直ぐにそれを僕と氣のついたものはなかつた位だ。

　船の中に四五人の私服がはひりこんで、あちこちとうろ〳〵したり、僕が乘つた二等の喫煙室に坐りこんだりしてゐた。隨分氣味は惡い。しかし又それをひやかすのもちよつと面白い。船の出るまでキヤビンの中に閉ぢ籠つてゐるのも癪だし、僕は餘程の自信をもつて、喫煙室とデッキの間をぶら〳〵してゐた。そして一度は、私服らしい三四人のもののほかは誰れもはひつてゐなかつた喫煙室へ行つて、彼等の橫顏

をながめながら煙草をふかしてゐた。

船は門司を通過して長崎に着いた。そこでもやはり、二人の制服と四五人の私服とがはひつて來た。そして乘客の日本人を一人々々つかまへて何か調べ始めた。日本人と云つても、船はイギリスの船なのだから、二等には僕ともで四人しかゐないのだ。僕の番は直ぐに來た。が、それは寧ろあつけない位に無事に過ぎた。そして彼等は一人のヒリッピンの學生をつかまへて何やかやとしつつこく尋ねてゐた。

上海に着いた。そこの稅關の出口にも、やはり私服らしいのが二人見はつてゐた。警視廳から四人とか五人とか出張して來てゐるさうだから、多分それなのだらう。

僕は稅關を出ると直ぐ、馬車を呼んで走らした。そして暫く行つてから角々で二三度あとをふり返つて見たが、あとをつけて來るらしいものは何んにも　かつた。

三

最初僕は此の上海に上陸する事が一番難關だと思つてゐた。そして多分こゝで捕まるものと先づ覺悟して、捕まつた上での逃げ道までもそつと考へてゐたのだつた。それが、かうして何んの事もなくコト／＼と馬車を走らしてゐるとなると、少々張合ひぬけの感じがしないでもない。

『フランス租界へ。』

馭者にはたゞかう云つただけなのだが、上海の銀座通り大馬路を通りぬけて、二大觀樂場の新世界の角から大世界の方へ、馬車は先年始めてこゝに來た時と同じ道を走つて行く。

僕はこゝで、もう幾度も洩らして來た此の先年の旅の事を、少し詳しく思ひだす事を許して貰ひたい。

八月の末頃だつた。朝鮮假政府の首要の地位にゐる一青年Ｍが、鎌倉の僕の家にふいと訪ねて來た。要件は、要するに、近く上海で、×××××、××、×××××××××を開きたいのだが、そして今はたゞ日本の參加を待つてゐるだけなのだが、それに出席してくれないかと云ふのだ。

僕等は嘗て××××××と云ふものを組織したことがあつた。が、其の組織後間もなく×××××××××だ。そしてそれ以來僕等は、隨分長い間、僕等自身の運動は素より、諸外國との交通も全く不可能にされて了つた。

それが今、此の朝鮮の同志が齎らして來た××××××××の提案によつて、こんどは社會主義と云ふもつと狹い範圍で再び復活されようとするのだ。僕は喜んで直ぐさまそれに應ずるのほかはなかつた。

が、それと同時に、と云ふよりも、それよりももつと云ふ方が本當かも知れない、僕をして進んでそれに應じさせた、或る特殊の原因があつた。それは、Ｍが既にそれを堺や山川と相談して、そして二人から體よくそれを拒絶されたと云ふ事だつた。

Ｍを密使として送つた上海の同志等は、最初先づ竊かに堺と會つてそれを謀つた。しかし、まだ組織中でもあり、又ごく雜ばくな分子を含んでゐる社會主義同盟が、直ぐさまそれに加はると云ふ事は勿論、創立委員會でそれを相談すると云ふ事ですらも、到底不可能だつた。第一には先づ、事が非常に秘密を保たれなければならなかつた。そして第二には×××××の主な人達がそれを助けてゐるといふ事は、いろんな異論と共に非常な危險をも伴はなければならなかつた。

そこでＭは更に個人としての加盟を堺と山川とに申込んだ。が、二人とも、大して理由にな

らない理由で、それを拒絶した。そして更に又、誰れかほかに出席する事の出來さうな人の推薦を頼んだが、そして其の中には僕の名もあつたさうだが、二人はそれも到底あるまいと云つて拒絶した。Mは仕方なしに、それでは、せめて其の會議に賛成すると云ふ何か書いたものを土産にして持つて歸りたいと頼んだが、それも體よく拒絶された、

そしてMは殆んど絶望の末に僕のところへ來たのだ。僕は堺や山川がMをどこまで信用していゝのか悪いのか分らないと云ふ腹を持つてゐた事はよく分つた。僕にも其の腹はあつたのだ。よしMが誰れからどんな信任状や紹介狀を持つて來たところで、外國の同志との連絡のなかつた僕等には、其の信任狀や紹介狀其物が既に信用されないのだ。しかし一二時間と話してゐるうちに、Mが本物かどうか位の事は分る。そして本物とさへ分れば、其の持つて來た話に、多少は乘つてもいゝ譯だ。しかも堺や山川は、當時既に、殆んど、或は全く、と云つてもよかつたかも知れない、共産主義に傾いてゐたのだ。

（七十七字削除）これは其の當時僕等が皆んな持つてゐた恐怖だ。そして此の恐怖が、堺や山川をして、上海の同志の提案にまるで乘らせなかつた、一番の原因なのだ。

Mは其の事は十分に知つてゐたやうだつた。そして其の使命を果す事の出來ない絶望と共に、××××××××××絶望をも竊かに持つてゐるやうだつた。彼れ自身も、見つかれば直ぐ捕まる、そして幾年の間か分らない入獄の危險を冒してやつて來たのだ。そして日本の謂はゆる同志は誰れ一人其の話に見向いてもくれないのだ。そしてMは其の會議の計畫を僕に話するのにも、最初から僕に正面から加盟を求めると云ふよりも、寧ろごく臆病に、まるで義理の悪い借金にでも來たかのやうに、おづ〳〵した態度で、先づ僕の腹をさぐつて見るやうな話ぶりであつた。そして僕が其の廻り〳〵どい長い話を默つて一應聞いた上で、「よし行かう」と一言云つた時には、彼れは寧ろ自分の耳を疑つてゐるかのやうにすら見えた。

實は、此の上海行きの事は、其の二年程前にも僕に計畫があつたのだつた。僕は、日本での運動の困難を感ずるたびに、此の上海を考へない事は出來なかつた。支那の同志との聯絡を新しくする事を思はない譯には行かなかつた。

そして僕は、いよ〳〵それを實行する間際になつた或日、山川と荒畑とに其の計畫を洩らした。堺にも、山川を通じて、其の席に出てくれるやう頼んだのだが、堺はそれに應じなかつた。堺と僕との間には其の少し以前から或る個人的確執があつたのだ。山川と荒畑とはたゞ僕の云ふ事だけをごく冷淡に聞いてくれただけだつた。二人とも、やはり其の少し以前から、僕とは大ぶ冷淡な仲になつてゐたのだ。尤も、僕の此の計畫は中途で失敗して、まだ日本を去らない前に再び東京に歸つて來る事を餘儀なくされたに過ぎなかつた。

×××××は、いろんな一般的の目的を持つてゐたと同時に、十數年以前からのこれらの親しかつた舊い同志等の確執や冷淡を和らげると云ふ、特殊の一目的をも持つてゐた。が、それは無駄だつた。僕等の間には、いろんな感情の行き違ひの上に、更に思想上の差違がだん〳〵深くなつてゐたのだ。そして堺や山川はMの事を僕に話さず、僕も又二人に其の事は話さなかつた。Mが鼻であしらはれたやうに、僕も鼻であしらはれるだらう事をも恐れたのだ。そして若し事がうまく運べば、歸つて來てから彼等に

相談しても遅くはないと思つた。

約束の十月になつた。僕は竊かに家を出た。其時の事は前に云つた。

上海へ着いた時には、豫め電報を打つて置いたのだから、誰れか迎ひに來てゐると思つた。が、誰れも來てゐない。仕方なしに僕は、稅關の前で暫くうろ／＼してゐる間に切りに勸められる馬車の中に、腰を下ろした。

馬車は、まだ見た事はないが全くヨオロツパの街らしい所や、話に聞いてゐる支那の街らしい所や、とにかくどこもかも人間で埋まつてゐるやうないろんな街を通つて、目的の何んとか路何んとか里と云ふのに着いた。僕は此の何んとか路何んとか里と云ふ町名だけ支那語で覺えて來たのだ。

尋ねる筈の家は二軒あつた。同じ何んとか里の中の、たとへば、十番と十五番とだ。最初は十番の方へ行つた。そこにMが住んでゐる筈なのだ。が、そんな人間はゐないと云ふ。で、もう一軒の、そこに×××がある筈なのだ、十五番の方へ行つたが、そこでもそんな人間はゐないと云ふ。又十番へ行つた。返事はやはり同じ事だ。そこで又十五番へ行つた。が、返事はやはり同じ事だ。そして、かうして尋ね廻るたびごとに、出て來る男の語氣は益々荒くなり、態度も益々荒くなるのだ。しかし、馭者と何事か支那語で云ひ爭つてゐるやうなそれらの男が、朝鮮人である事だけはたしかだ。僕は、こんどは何んと云はれても、そこに坐りこむつもりで、又十番へ行つた。

十番では、始めて戸を開けてくれて、中へ入れた。僕は僕の名とMの名とを書いて、四五人で僕を取りかこんでゐる朝鮮人にそれを渡した。すると、其の一人が二階へ上つて行つて、暫くしてもう一人の朝鮮人と一緒に降りて來た。見ると、それは船の中で、日本人だと云ひ又それで通つて來た、そして僕が可なり注意して來た男だ。

「やあ君か。君なら僕は船の中で知つてゐる。」

僕は始めて日本語で、馴れ馴れしく彼れに言葉をかけた。かうした調子で、彼れはいつもデッキで、ほかの日本人と話してゐたのだ。尤も僕は、彼れと話をする事は殊更に避けてはゐたが。しかしもう此の家にゐるとなれば、僕の豫想も當つたのだし、何んの遠慮する事もなくなつたのだ。

しかし彼れは、船の中での日本人に對する其の馴れ馴れしさを見せるどころでなく、反對に僕の方からの此の馴れ馴れしさを先づ其の態度で斥けて了つた。そして僕が腰かけてゐる前に突つ立つたまゝ、僕の言葉なぞに頓着なく、まるで裁判官のやうな調子で僕を訊問しはじめた。

「君はどうしてMを知つてゐるんです？」

僕は、はあ始まつたな、と思ひながら、机の上に頰杖をついて煙草をふかしながら、有りのまゝに答へた。かうしてゐる間に、きつとまだ電報を受取つてゐないMが、どこかから竊と僕をのぞいてでもゐるんぢやないかと思ひながら。

しかし訊問は中々長かつた。そして裁判官の調子もちつとも和らいでは來なかつた。

そこへ、ふいと表の戸が開いて、Mがはひつて來た。そしてあわてて僕の手を握つて、ポカンとしてゐる皆んなに何か云ひ置いて、僕を二階へ連れて行つた。

四

「いや、どうも失禮。實は、日本人でこゝへはひつて來たのはあなたが始めてなんですよ。それに、あなたが來ると云ふ事は僕とLとのほか

には誰れも知らないんだし、僕もまだあなたからの電報は受取つてなかつたんですよ。』

Mは、さつきの裁判官程ではないが、可なりうまい日本語で、辯解しはじめた。で、怪しい日本人がはひつて來たと云ふので、此の朝鮮人町では大騷ぎになつたのださうだ。そして、先づ僕を十番の家へ入れたあとで、馭者に聞いて見ると、日本の領事館の前から來たと云ふので、(實際又稅關の前は直ぐ領事館なのだが)益々僕は怪しい人間になつて、一應調べて見た上で若しいよ〳〵怪しいときまれば殺されるかどうかするところだつたさうだ。それに又、どうしたものかMの名の書き方を僕は間違へてゐた。二字名の僞名を二つ揃はつてゐたのを、甲の方の一字と乙の方の一字とを組合はせたので、それがMの本當の、しかも餘り人の知らない號になつた。犯罪學の上ではよく出て來る話だが、僞名には大ていかうしたごく近い本當の何かの名の聯想作用があるものなのだ。で、Mは其の日本人が僕の名をかたつて、自分を捕縛しに來た日本の警官だと先づきめた。そしてこゝへ一人で警官がはひつて來る筈はないから、きつともつと多勢どこかに隱れてゐるのだらうと思つて、あちこちとあたりを探して見た。が、それらしいものは何處にも見當らない。そして最後に、漸く、自分で其の日本人に會つて見る決心をした。

「何しろ、顏だの服裝だのをいろ〳〵と細かく訊いて見ても、ちつともあなたらしくないんですからね。』

Mは最後にかう附け加へて、其のちつとも僕らしくなくなつてゐると云ふ顏を、今更のやうに又見つめ直した。

Mは、Lのところへ行かうと云つて、さつきの十五番の家へ案内した。

Lの室にはもう五六人つめかけて僕を待つてゐた。其の中で一番年とつたそしてからだの大きな、東洋人と云ふよりも寧ろフランスの高級の軍人と云つた風の、口髭をねぢり上げてポワンテュの顎鬚を延ばした、一見してこれがあのLだなと思はれる男に、僕は先づ紹介された。果してそれが、日本でも有名な、謂はゆる××××のLだつた。

「日本人とかうして膝を交へて話するのは、これが十幾年目(或は二十年目と云つたかとも覺えてゐる)です。或は一生こんな事はないかとも思つてゐました。』

Lは一應の挨拶が濟むと、Mの通譯でかう云つた。(以下原本の二行削除)

かうして僕は一時間ばかりLと話したあとで、Lの注意でMに案内されて或るホテルへ行つた。そこはつい最近までイギリスのラッセルも泊つてゐた、支那人の經營してゐる西洋式の一流のホテルだと云ふ事だつた。

××××の室と云つても、ごくお粗末な汚い机一つと幾つかの椅子と寢臺一つのファニテュアで、敷物もなければカアテンもない、何んの飾りつ氣もない貧弱極まるものだつた。それに僕がこんなホテルに泊るのは、少々氣もひけたし、金の方の心配もあつたので、もつと小さな宿屋へ行かうぢやないかとMに云ひ出した。が、Mは小さな宿屋では排日で日本人は泊めないからと云つて、とにかくそこへ連れて行つた。實際、道であちこちでMに注意されたやうに「抵制日貨」と云ふ、日本の商品に對するボイコットの貼札が到る處の壁にはりつけられてあつた。

そして僕は、それともう一つは日本の警察に對する注意とから、支那人の名で其のホテルの客となつた。

翌日は、ロシア人のTや、支那人のCや、朝

鮮人のRなどの、こんどの會議に参加する六七人の先生等がやつて來た。そしてそれからは殆んど二三日置きに、C 家で會議を開いた。Cは北京大學の教授だつたのだが、或事で入獄させられようとして、竊かに上海に逃げて來て、そこで『新青年』と云ふ社會主義雜誌を出してゐた、支那での共産主義 權威だつた。Rは其の前年、例の古賀廉造の際入りで日本へやつて來て、大ぶ騒がしかつた問題になつた事のある男だ。

僕は、日本を出る時に、きつと喧嘩をして歸つて來るんだらうと、同志に話してゐたが、果して其 會議は、いつも僕とTとの議論で終始した。Tは、こゝで××××××××××支那の同志も朝鮮の同志もそれにほゞ贊成してゐたやうだつた。で、僕が若しそれに贊成すれば、會議は何んの事もなく直ぐ濟んで了ふのだつた。

しかし僕は、當時の日本の××××××に加はつてゐた事實の通り×××××××××××××。で、無政府主義者としての僕は、極東共産黨同盟に加はる事も出來ず、又、國際共産黨同盟の第三インタナショナルに加はる事も出來なかつた。そして僕の主張は、××××××と云ふ事以上に出る事は出來なかつた。

又、そこに集つた各國同志の實情から見ても、朝鮮の同志ははつきりとした共産主義ではなかつた。支那の同志は、Cは既に思想的には大ぶはつきりした共産主義者だつたが、まだ共産黨の謂はゆる『鐵の規律』の感情には染まつてゐなかつた。そして皆んな、ロシアのTの、各國の運動の内部に關するいろんな細かいおせつかいに、多少の反感を持つてゐたのだつた。

で、此の各國諸革命黨の運動の自由と云ふ事には、朝鮮の同志も僕も贊成した。さうなればもう(以下原本の三行削除)

此の委員會の相談がきまると、Tは『少し内緒の話があるから二人きりで會ひたい』と云つて、僕を自分の家に誘つた。

其の話と云ふのは要するに金の事なのだ。運動をするのに金が要るなら出さう、そこで今どんな計畫があり、又其のためにどれ程金が要るか、と云ふのだ。僕は、さし當り大して計畫はないが、週刊新聞を一つ出したいと思つてゐる、それには一萬圓もあれば半年は支へて行けよう、そして其のあとは何んとかして自分等でやつて行けよう、と答へた。

其の金は直ぐ貰へる事にきまつた。が、其後又幾度も會つてゐるうちに、Tは新聞の内容について例の細かいおせつかいを出しはじめた。僕には、此のおせつかいが僕の持つて生れた性質の上からも、又僕の主義の上からも、許す事が出來なかつた。そして最後に僕は、前の會議の時にもそんな事ならもう相談はよして直ぐ歸ると云つたやうに、金などは一文も貰ひたくないと云つた。もと／＼僕は金を貰ひに來たのぢやない。又そんな豫想も殆んど全く持つて來なかつた。たゞ東洋各國の同志の聯絡を謀りに來たのだ。日本は日本で、どこから金が來なくても、今まで既に自分で自分の運動を續けて來ただ。これからだつて同じ事だ。條件がつくやうな金は一文も欲しくない。僕はさう云ふ意味の事を、それまでお互ひに話してゐた英語で、特に書いて彼れに渡した。

Tはそれで承知した。そして猶、一般の運動の上で要る金があればいつでも送る、とも約束した。が、いよ／＼僕が歸る時には、今少し都合が悪いからと云ふので、金は二千圓しか受取らなかつた。

歸ると直ぐ、僕は上海での此の顛末を、先づ堺に話した。そして堺から山川に話して、

更に三人で其の相談をする事にきめた。そして僕は、近くロシアへ行く約束をして來たから、週刊新聞も若し彼等の手でやるなら任してもいい、又上海での仕事は共産主義者の彼等の方が都合がいゝのだから、彼等の方でやつて欲しい、と附け加へて置いた。が、それには、堺からも山川からも直接の返事はなくて、或る同志を通じて、僕の相談には殆んど乘らないと云ふ返事だつた。

で、僕は、以前から一月には雜誌を出さうと約束してゐた近藤憲二、和田久太郎等のほかに、近藤榮藏(別名伊井敬)、高津正道等と一緒に、週刊「勞働運動」を創めた。前の二人は無政府主義者で、後の二人は共産主義者なのだ。近藤榮藏は、大杉等の無政府主義者と果して一緒に仕事をやつて行けるか、と云ふ注意を堺から受けたさうだが、却つて彼れはそれを笑つた。僕も一緒にそれを笑つた。

最初から僕は、此の新聞はこれらの人達の協同に、全部を任せるつもりでゐた。僕は仕事の目鼻さへつけば、直ぐロシアへ出發する筈にしてゐたのだ。が、其の仕事も始めないうちに、僕は病氣になつた。隨分長い間其のために苦しんで、そして暫く落ちついてゐたと思つた肺が、急に又惡くなつたのだ。醫者からは絶對安靜を命ぜられた。で、新聞の準備も殆んど皆んなに任せきりにしてゐる間に、こんどはチブスと云ふ難病に襲はれた。

僕の病氣は上海の委員會との聯絡を全く絶たして了つた。Tから直ぐ送つて來る筈の金も來なかつた。が、近藤憲二が僕の名で本屋から借金して來て、皆んな一緒になつてよく働いた。そして新聞は、僕が退院後の靜養をして殆んど其の仕事に與かつてゐなかつた、六月まで續いた。

多分四月だつたらう。僕は再び上海との聯絡を謀るためと約束の金を貰ふためとに、近藤榮藏を使ひにやつた。が、其の留守中に、近藤榮藏や高津正道が堺、山川等と通じて、竊かに無政府主義者の排斥を謀つてゐるらしい事が、大ぶ感づかれて來た。若しさうなら、僕は上海の方の事は一切共産黨に讓つて、又事實上、榮藏もさう云ふ風にして來るだらうとは思つたが、そして新聞も止して、僕等無政府主義者だけが別に又仕事を始めようと思つた。

すると、上海からの歸り途で近藤榮藏が捕まつた。新聞はこれを機會にして止した。

榮藏は一ケ月餘り監獄にゐて、出て來ると山川とだけ會つて、其の妻子のゐる神戸へ行つた。そして僕は山川から榮藏の傳言だと云ふのを聞いた。それによると、Tはちやうど上海にゐないで、朝鮮人の方から榮藏がロシアへ行く旅費として二千圓と僕への病氣見舞金二百圓とを貰つて來たと云ふ事だつた。しかしそれは、僕等がほかの方面から聞いた話、尤も十分に確實なものではなかつたが、とは大ぶ違つてゐた。が、そんな事はもうどうでもいゝ、それで彼等と縁切りになりさへすればいゝのだ、と思つた。

上海の委員會は、Tが大して氣乘りしてゐなかつたせゐだらう、僕が歸つたあとで何んの仕事もしないで立消えになつて了つたらしい。そして榮藏が警視廳で告白したところによると、朝鮮の某(そんな名の人間はゐない)から六千圓餘り貰つて來た事になつてゐる。

「ヨオロッパまで」が脇道の昔ばなしにはひつて、大ぶいやな話が出た。僕は其後或る文章の中で「共産黨の奴等はゴマノハヒだ」と罵つた事がある。それは一つには暗に此の事實を指したのだ。そしてもう一つには、これも其後だんだん明かになつて來た事だが、無産階級の獨

裁と云ふ美名(?)の下に、共產黨が竊かに新權力をぬすみ取つて、謂はゆる獨裁者の無產階級を新しい奴隷に陷れて了ふ事實を指したのだ。

かくして僕は、甚だ遲まきながら、共產黨との提携の事實上にも又理論上にも全く不可能な事をさとつた。そして又、それ以上に、共產黨は資本主義諸黨と同じく、しかもより油斷のならない、僕等無政府主義者の敵である事が分つた。

が、今こゝに上海行きのこれだけの話が出來るのは、共產黨の先生等が捕まつて、警察や裁判所でペラペラと仲間の祕密をしやべつて了つた、其のお蔭だ。それだけはこゝでお禮を云つて置く。

五

それでも、僕にはまだ、ロシア行きの約束だけは忘れられなかつた。そしてからだの恢復と共に、僕等自身の雜誌の計畫を進めながら、竊かに其時を待つてゐた。僕はロシアの實情を自分の目で見ると共に、更にヨオロッパに廻つて戰後の混沌としてゐる社會運動や勞働運動の實際をも見たいと思つた。

そこへ、突然、其の年の十月頃かに、ロシアで×××××××××××××××。そは共產黨の方に來たのだが、こんどは僕も其の相談に與つた。共產黨ではそこへやらうと云ふ勞働者がゐなかつたのだ。そして僕は、いづれ又上海の時のやうな事になるのだらうとは思つたが、とにかく日本から出席する十名ばかりの中に加はる事にきめた。しかし、あとでよく考へて見て、それも無駄なやうな氣がした。又、共產黨との相談にも、いろいろ面白くない事が起きた。そして、いよいよ二三日中に出發すると云ふ時になつて、僕一人だけそこから拔けた。

翌年、即ち去年の一月に、僕は又こんどは月刊の「勞働運動」を始めた。そして殆んど每號、其頃になつて漸く知れて來たロシアの共產黨政府の無政府主義者やセンディカリストに對する暴虐な迫害や、其の反無產階級的反革命的政治の紹介に、僕の全力を注いだ。

八月の末に、大阪で、例の勞働組合總聯合創立大會が開かれた。そしてそこで、無政府主義者と共產主義者とが始めて公然と、しかも其の根本的理論の差異の上に立つて、中央集權論と自由聯合論との二派の勞働者の背後に對陣する事となつた。

日本の勞働運動は、此の大會を機として、其の思想の上にもまた運動の上にも、特に劃時代的の新生面を開かうとする非常な緊張ぶりを示して來た。そこへこんどの××××××の通知が來たのだ。たとひ短かい一時とは云へ、日本を去るのは今は實に惜しい。又、殆んど寢食を忘れる位に忙しい同志を置きざりにして出るのも實に忍びない。しかし、日本の事は日本の事で、僕がゐようとゐまいと、勿論皆んなが全力を盡してやつて行くのだ。そして僕は僕で、外國の同志との、しかも、こんどこそは本當の同志の無政府主義者との、交涉の機會が與へられたのだ。行かう。僕は卽座にさう決心するほかはなかつた。

上海では、前に、三四軒のホテルに十日程づつ泊つた。同じホテルに長くゐてはあぶないと云ふので、其のたびに新しい變名を造つては、ほかのホテルへ移つて行つたのだ。此の時々變はる自分の名を覺えるのは容易な事でなかつた。先づ其の漢字と其の支那音との、僕等には殆んど聯絡のない、と云ふよりも寧ろ全く違つた二つの事を覺えなければならないのだ。が、それは先づ無事に濟んだ。けれども、支那語をちつ

とも知らない支那人と云ふのも、随分變なものだ。が、それも先づ、ボオイとは英語で、しかもほんの用事だけの事を話せばいゝのだから、何んとか胡麻化して濟ました。

しかし一度其の變名で、失敗のやうな又過失の功名のやうな事をした。それは、やはり上海にゐた支那の國民黨の或る友人に會ひたいと云ふ事を、朝鮮のRに話した。Rは其の友人の家へ行つたが、旅行中で留守なので、たゞ僕が何々ホテルにゐると云ふ事だけを書き置いて來た。友人は歸つてから直ぐ僕のホテルへ來た。そして、きつと變名してゐるのだらうと思つて、たゞ日本人がゐないかと尋ねた。すると、日本人はゐないと云ふので、更に日本人らしい支那人はゐないかと訊いたが、そんなのもゐないと云ふ。で、仕方なしに旅客の名と室の番號とを書き列ねた板の上を見廻した。

『はあ、これに違ひない。』

彼れは其の中の或る名を見て、一人でさうきめて、其の番號の室へ行つた。そして果してそこに僕を見出した。

『あんな馬鹿な名をつける奴があるもんか。』

彼れは僕の顔を見ると直ぐ、笑ひこけるやうにして云つた。

『何故だい。朝鮮人がつけてくれた名なんだけれど。』

僕は其の笑ひこける理由がちつとも分らないので、眞面目な顔をして訊いた。

『何故つて君、唐世民だらう、あれは唐の太宗の名で、日本で云へば豐臣秀吉とか德川家康とか云ふのと同じ事ぢやないか。が、お蔭で僕は、それが君だつて事が直ぐ分つたんだ。本當の支那人でそんな馬鹿な名をつける奴はないからね。』

此の友人は、近く廣東へ乘込む孫逸仙一行の先發隊として、あしたの朝上海を出發するのだつた。從つて、若し其の晩會へなければ、暫く又會ふ機會がないのだつた。

『新政府の基礎が出來たら、ぜひ廣東へ遊びに來たまへ。陳烱明は何んにも分らないたゞの軍人なのだが、社會問題には大ぶ興味を持つてゐるし、僕等も向うへ行けば直ぐ、支那や外國の資本家を壓迫する一方法としてだけでも、大いに勞働運動を興して見るつもりなんだ。』

今は立派な政治家になつてゐるが、昔は熱心な勞働運動者だつた彼れは、かうして其の新政治の必要の上からの勞働運動を主張してゐたのだつた。そして實際又、其頃既にもう、陳烱明の保護の下に無政府主義者等が盛んに勞働組合を起して、廣東が支那の勞働運動の中心にならうとしてゐたのだ。其後、香港で起つた船員や仲仕の大罷工には、これらの無政府主義者が其の背後にゐたのだつた。

上海で無政府主義者の誰れとも會ふ事の出來なかつた僕は、廣東のそれらの無政府主義者と會ひたいと思つた。そして此の支那の新政治家とは、近いうちに又廣東で會ふ約束をして別れた。

が、こんどは、例の共產黨の先生等のベラベラのお蔭で、これらのおなじみのホテルへは行けなかつた。近藤榮藏が捕まつて以來、日本政府の上海警戒が急に嚴重になつたのだ。そして僕等が前に泊つたホテルにはどんな方法が講じてあるのかも知れなかつたのだ。

で、僕は先づ、支那の同志Bの家へ行つた。まだ會つた事のない同志だ。しかし其の夏、やはり支那の同志のWが竊かに東京に來て、お互ひの連絡は十分についてゐたのだ。そして僕がこんど此の上海に寄つたのは、ベルリンの大會で××××××××が組織されるのと同時に、僕等にとつてはそれよりももつと必要な×

××××××の組織を謀らうと思つたからでもあつた。

折惡くBはゐなかつた。そして其の留守の誰れも、支那語のほかは話も出來ず、又筆談も出來さうになかつた。僕は少々途方にくれた。ほかへ行くにも、前に知つてゐる支那人や朝鮮人は今は皆なロシアへ行つて了つた筈だ。新政治家の友人も、其後陳炯明の謀叛のために廣東を落ちて、多分今は上海にゐるんだらうとは思つたが、どこにゐるんだか分らなかつた。こんなことなら、豫めBに僕の來る事を知らして置くんだつた、とも思つた。が、今更そんな無駄な事を考へても仕方がない。どこか西洋人經營のホテルを探して行くか、或はこゝに坐り込んでBの歸るのを待つかだ。僕は長崎から上海までの暴風で大ぶ疲れてゐたので、そして又よくは分らないがBが直ぐ歸つて來さうな話ぶりなので、とにかく少し待つて見るつもりで玄關の椅子の一つに腰を下ろした。

すると、直ぐそこへ、そとから若い支那人が一人はひつて來た。僕は、其の顏を見てハッとした。知つてゐる顏だ。去年まで東京でたびたび會つて、よく知つてゐるNだ。彼れも無政府主義者だと云つてゐた。そして其の方面のいろんな團體や集會にも出入してゐた。しかし僕は彼れがどこまで信用の出來る同志だか知らなかつた。そして又彼れが支那に歸つてからの行動に就いては何んにも知らなかつた。僕は彼れをちやうどいゝ助け舟だと思ふよりも、今彼れに見られていゝのか惡いのか分らなかつた。とにかく、何人によらず、知つてゐる人間に會ふのは今の僕には禁物なのだ。

彼れの方でも、僕の顏を見ると直ぐ、ハッとしたやうであつた。が、其の直ぐあとの瞬間に、僕は、彼れが僕の顏を分らなかつた事が分つた。そして僕は、さうだ、其の筈だ、と始めて安心した。

彼れは取次の者と何か話してゐたが、Bは直ぐ歸つて來る筈だから、と日本語で其の話を取次いでくれた。僕は彼れが僕の顏を分らずに、其のハッとした態度をまだ其のまゝ續けてゐるのが少々可笑しかつた。そしてちよつとからかつて見る氣になつた。

『あなたは餘程長く日本においでしたか?』

僕は濟ました顏で尋ねた。

『いゝえ、日本にゐた事はありません。』

僕は彼れの此のむつつりした返事を少々意外に思つた。が、直ぐ又、彼れが排日運動の熱心家で、其のために日本の警察から可なり注意されてゐた事に氣がついた。そして彼れが僕を普通の日本人か或は多少怪しい日本人かと思つてゐるらしい事は、更に又僕のからかひ氣を增長させた。

『しかし隨分日本語がうまいですね。』

『いや、ちつともうまくないです。』

彼れは前よりももつとむつつりした調子でかう云つたまゝ、テエブルの上にあつた支那新聞を取り上げた。僕は益々可笑しくなつたが、しかし又多少氣の毒にもなり、又あまり長い間話してゐては險呑だとも思つたので、それをいい機會にして默つて了つた。そして彼れには後ろむきになつて、やはりテエブルの上の支那の新聞を取りあげた。

かうして暫く待つてゐる間に、Bが歸つて來た。僕はNに分らんやうに、筆談で彼れと話した。彼れは僕をいゝ加減な名でNに紹介した。

翌日僕は、Bの家の近所を步き廻つて、ロシア人の下宿屋を見つけた。そして、たゞ少々の前金を拂つただけで、名もなんにも云はずにその一室に落ちついた。

僕は食堂へ出るのを避けて、いつも自分の室で食事した。從つて、下宿屋の神さんでも又

ほかの下宿人でも、殆んど顔を見合はした事がなかつた。二日經つても三日經つても、宿帳も持つて來なければ、名刺をくれとも云つて來ない。僕は呑氣なものだなと思ひながら、支那人のボオイに僕が何處の國の人間だか分るかと訊いて見た。ボオイは何んの疑ふところもないらしく、

『イギリス人です。』

と答へた。僕は變な事を云ふと思つて、

『どうしてさう思ふ？』

と問ひ返した。

「お神さんがさう云ひましたから。』

ボオイは、神さんと同じやうに、ごく下手な僕の英語よりももつと下手な英語で、やはり何んの疑ふところもないやうな風で答へた。

『ハア、奴等は僕をイギリス人と支那人との合の子とでも思つてゐるんだな。』

僕はこれはいゝ工合だなと思ひながら、其のボオイの持つて來た夕飯の皿に向つた。實際、かうした下宿屋には、東洋人が來る事は殆んど絶對にない。お客は皆な毛唐ばかりなのだ。

六

上海に幾日ゐたか、又其の間何をしてゐたか、と云ふことに就いては今はまだ何んにも云へない。たゞそこにゐる間に、ベルリンの大會が日延べになつた事が分つたので、ゆつくりと目的を果たす事が出來た。そして其の間に、日本では、僕が信州の何んとか温泉へ行つたとか、ハルピンからロシアへ行つたとか、香港からヨオロッパへ渡つたとか、いや何處とかで捕まつたとか、と云ふやうないろんな新聞のうはさを見た。上海の支那人の新聞にも、さうしたうはさを傳へたほかに、ロシアから毎月幾らかの宣傳費を貰つてゐる、と云ふやうな事までも傳へた。

そして、本年某月某日、僕は四月一日の大會に間に合ふやうに、或る國の或る船で、そつと又上海を出た。途中の事も今はまだ何んにも云へない。

（上海で何をしてゐたのかは日本に歸つた今でもまだ云へないが、こゝで大會の日延べになつた事が分つたとか、日本でのいろ／＼なうはさを聞いたとか云ふのはうそだ。それはパリへ行つてからの事なのだ。途中での事はほかの記事にちよい／＼書いてある。）

某月某日――これがあんまり重なつては讀者諸君に甚だ相濟まないのだが、仕方がない、まあ勘辨して貰はう――どこをどうしてだか知らないが、とにかくパリに着いた。

コロメルの宛名の、フランス無政府主義同盟機關ル・リベルテエル社のあるところは、パリの、しかもブウルヴアル・ド・ベルヰル――強ひて飜譯すれば、美しい町の通り――と云ふのだ。地を開いて見ても、かねてから名を聞いてゐるオペラ座なぞのある大通りと同じやうな、大きな大通りになつてゐる。

いづれその横町か屋根裏にでもゐるだらう、と思つて行つて見ると、成程大通りは大通りに違ひないが、ちやうどあの、淺草から萬年町の方へ行く何んとか云ふ大きな通り其儘の感じだ。尤も兩側の家だけは五階六階七階の高い家だが、其のすゝけた汚なさはちよつとお話にならない。自動車で走るんだからよくは分らないが、店だつて何んだか汚ならしいものばかり賣つてゐる。そして通りの眞中の廣い步道が、道一ぱいに汚ならしいテントの小舍がけがあつて、そこを又日本ではとても見られないやうな汚ならしい風の野蠻人見たいな顏をした人間がうぢや／＼と通つてゐる。市場なのだ。そとからは店の樣子はちよつと見えないが、皆な朝の

買物らしく、大きな袋にキャベツだのジャガ芋だの大きなパンの棒だのを入れて歩いてゐる。ル・リベルテエル社は、それでも、其の大通りの、地並の室にあつた。週刊ル・リベルテエル(自由人)月刊ラ・ルヴュ・アナルシスト(無政府主義評論)との事務所になつてゐるほかに、ラ・リブレリ・ソシアル(社會書房)と云ふ小さな本屋をもやつてゐるので、店は皆な地並にあるわけなのだ。

其の本屋の店にはひると、やはりおもてにゐるのと同じやうな風や顔の人間が七八人、何かガヤ／＼と怒鳴るやうな口調でしやべつてゐた。其の一人をつかまへてコロメルはゐないかと訊くと、奥にゐると云ふ。奥と云つても、店から直ぐ見える汚ならしい次の部屋なのだ。そこもやはり、同じやうな人間が七八人突立つてゐて、ガヤ／＼としやべつてゐるほかに、やはり同じやうな人間が隅つこの机に二人ばかり何か仕事をしてゐた。其の一つの机のそばに立つて、手紙の束を手早く一つ一つ選り分けてゐる男が一人、ほかの人間とは風も顔も少し違つてゐた。日本で云つてもちよつと藝術家と云つた風に、頭の毛を長く延ばして、髯のない白い顔を皆んなの間に光らしてゐた。ネクタイもしてゐた。服も、黒の、とにかくそんなに汚れてゐないのを着てゐた。僕は其の男をコロメルだときめて其のそばへ行つて、君がコロメルか、と訊いた。さうだ、と云ふ。僕は手をさし出しながら、僕はかう／＼だと云へば、彼は僕の手を堅く握りしめながら、さうか、よく來た、と云つて、直ぐ日本の事情を問ふ。腰をかけろと云ふ椅子もないのだ。

『何處か近所のホテルへ泊りたいんだが。』

と云ふと、

「それぢや私が案内しませう。」

と云ふ、女らしい聲が僕のうしろでする。ふり返つて見ると、まだ若い、しかし日本人にしてもせいの低い、色の大して白くない、脣の大きくて厚い、たゞ目だけがぱつちりと大きく開いてゐるほかにあんまり西洋人らしくない女だ。風も其邊で見る野蠻人と別に變りはない。

とにかく其の女の後について、二三町行つて、ちよつとした横町にはひると、殆んど軒並にホテルの看板がさがつてゐる。皆んな汚ならしい家ばかりだ。女は其の中の多少よささうな一軒を指して、あのホテルへ行つて見ようと云ふ。看板にはグランドホテル何んとかと書いてある。が、はひつて見れば、要するに木賃宿なのだ。今あいてゐると云ふ三階の或る室に通された。敷物も何んにも敷いてない狹い室の中には、ダブル・ベッド一つと、鏡付の大きな簞笥一つと、机一つと、椅子二つと、陶器の水入れや金だらひを載せた洗面臺とで、殆んど一ぱいになつてゐる。そしてその一方の隅つこに、自炊の出來るやうにガスが置いてある。すべてが汚ならしく汚れた、そして缺けたり傷ついたりしたものばかりだ。ちよつといやな臭ひまでする。が、感心に、今まで登つて來た梯子段や廊下は隨分暗かつたが、室の中は先づあかるい。窓からそとは可なり遠くまで廣く開いてゐる。

「中々いゝ室でせう。」

と連れの女は自慢らしく云ふ。とても、お世辭にもいゝとは云へない。實は、今までもあちこちのいろんなホテルに泊つてゐるんだが、こんなうちは始めて見たのだ。が、フランスへ行つたら勞働者町に住んで見たい、若し出來れば勞働者の家庭の中に住んで見たい、とはかねてから思つてゐた。

『いゝでせう、こゝにきめませう。』

と僕も仕方なしに、ではあるが又、こゝに住む事に就いての大きな好奇心を持つて答へた。

そして先づ、一ケ月百フラン（其時の相場で日本の金の十二圓五十錢）と云ふ室代の幾分かを拂つた。東京の木賃宿の一日五十錢に較べれば餘程安い。ガスは一サンティームの銅貨を一つ小さな穴の中に入れれば、三度の食事位には使へるだけの量が出て來るのださうだ。

　すると、こんどは宿帳をつけてくれと云ふ。今までも、どこのホテルでも宿帳はつけて來たが、そしていゝ加減に書いて來たが、こゝではナルト・ディダンティテ（警察の身元證明書 を見せろと云ふのだ。何んの事かよく分らんから、連れの女に訊いて見ると、フランスでは外國人は素より內國人ですらも、皆な其の寫眞を一枚はりつけた警察の身元證明書を持つてゐなければならんのだと云ふ。勿論そんなものは持つてゐない。で、仕方なしに、其の女と一緒になつて、いゝ加減にそこをごまかして了つた。

『フランスは隨分うるさいんですね。』

　僕はホテルを出て、社へ置いて來た荷物を取りに行く途で、女につぶやいた。

「えゝ、そしてあの身元證明書がないと、直ぐ警察へ引つぱつて行かれて、罰金か牢を仰せつかるんです。外國人なら其の上に直ぐ追放ですね。」

　が、僕は女の此の返事が終るか終らないうちに、社の直ぐ前の角に制服の巡査が三人突つ立つてゐるのを見た。皆な社の方を向いて、社の入口ばかりを見つめてゐるやうなのだ。

『おや、制服が立つてゐますね。』

　僕は少々不審に思つて訊いた。

「例のベルトン事件以來、ずつとかうなんです。」

　と云つて、彼女は、最近に王黨の一首領を暗殺した女無政府主義者ジェルメン・ベルトン名を出した。そして其の以前からも、集會は勿論嚴重な監視をされるし、家宅 索もやる、通信も一々調べる、尾行もやる、遠慮なく警察へ引つぱつても行 、と云ふ風だつたのださうだ。

「はあ、やつぱり日本と同じ事なんだな。」

　僕はさう思ひながら、多分其 巡査共の視線を浴びながらだらう、ル・リベルテエル社の中へはひつて行つた。（一九二三年四月五日、リヨンにて）

パリの便所

一

　パリにつくとすぐ、仲間の一人の女に案內されて、その連中の巣くつてゐる家の近所の、あるホテルへつれて行かれた。

　その邊は殆んど軒並に、表通りは安キャフェと安たべ物屋、横町は安ホテルと云つた風の、隨分きたない本當の勞働者町なんだ。道々僕は、どんな家へつれて行かれるんだらうと思つて、その安ホテルの看板を一々讀みながら行つた。

　一日貸し、一夜貸し、とあるのはまだいゝ。が、その下に、折り折り、トレ・コンフォルタブル（極上）とあつて、便所附きとか電燈附きとかいふ文句のついたのがある。便所が室についてゐないのはまだ分る。しかし電燈のないホテルが、今時、このパリにあるんだらうか。僕は少々驚いてつれの女に訊いた。

『えゝ、ありますとも、いくらでもありますよ。』

　といふ彼女の話によると、パリの眞ん中に、未だ石油ランプを使つてゐるうちがいくらでもあるんださうだ。僕はそんなうちへつれて行かれちや堪らないと思つた。そしてそのトレ・コンフォルタブルなうちへ案內してほしいと賴んだ。

　彼女と僕とは、グランドホテル何んとかいふ名のうちの、三階の或る一室へ案內されて行つ

た。なるほど、電燈はたしかにある。が、便所は室の中にもそとにもちよつと見あたらない。

『便所は？』

僕は看板に少々うそがあると思ひながら、一緒に登つて來たお神さんに尋ねた。

『二階の梯子段のところにあります。』

お神さんは平氣な顏で答へる。僕も便所が下にある位の事は何んでもないと思つて、平氣で聞いてゐた。

が、その便所へ行つて見ておどろいた。例の腰をかける西洋便所ぢやない。たゞ、タタキが傾斜になつて、その底に小さな穴があるだけなのだ。そしてその傾斜の始まるところで跨ぐのだ。が、そのきたなさはとても日本の辻便所の比ぢやない。

僕はどうしてもその便所では用をたす事が出來なくて、小便は室の中で、バケツの中へヂャアヂャアとやつた。洗面臺はあるが、水道栓もなく從つてまた流しもなく、一々下から水を持つて來て、そしてその使つた水を流しこんで置く、そのバケツの中へだ。僕ばかりぢやない。あちこちの室から、そのヂャア〳〵の音がよく聞える。大便にはちよつとこまつたが、そとへ出て、横町から大通りへ出ると、すぐ有料の辻便所があるのを發見した。番人のお婆さんに二十サンティム(ざつと三錢だ)のところを五十サンティム奮發してはひつて見ると、そこは本當の綺麗な西洋便所だつた。

貧民窟の木賃宿だから、などと、日本にゐて考へてはいけない。その後、パリのあちこちをあるいて見たが、かうした西洋便所ぢやない、そして幾室或は幾軒もの共同の、臭いきたない便所がいくらでもあるのだ。そして田舍ではそれがまづ普通なのだ。

僕はまた、西洋便所と共に、西洋風呂も氣持のいゝものだと思つてゐた。が、このトレ・コンフォルタブルな安ホテルでは、どこの看板にも風呂附きといふのは見たことがない。そしてまた、普通のうちで風呂なぞのあるのは滅多にない。男でも女でも、みんな一ケ月に一度か二ケ月に一度、お湯屋へはひりに行くのだ。しかもそのお湯屋だつて、さうやたらにあちこちにあるのぢやない。ちやうど有料の西洋便所とおなじ位の程度に、ごく稀にぶつかるだけだ。幸ひ僕は、このお湯屋もすぐ近所に見つけたので、二三日目には、二フラン五十(三十五錢ばかり奮發して、そこのいゝお得意様になつた。もう一フラン出せば、その邊では立派な夕飯が食へるんだ。

二

しかし僕だつて、そんな安ホテルで野蠻人のやうな生活ばかりしてゐたんぢやない。大して上等でもないが、とにかくまづ紳士淑女のとまるホテルへも行つた。

實は、前のホテルが仲間の巣のすぐ近所なので、その邊を始終うろついてゐるおまはりさんのぴか〳〵光る目がこはかつたのだ。そして早々逃げ出したのだ。

こんどは、室の中で栓一つねぢれば、水でも湯でも勝手に使へた。西洋風呂もあつた。西洋便所もあつた。

僕は、猿またの捨て場所にこまつて、そつとこの便所へ突つこんで、うんとひもをひつぱつてドドドゥと水を流して見た。うまく流れればいゝがと思ひながら、大ぶ心配しいしいやつたんだが、何んのこともなく綺麗に流れてしまつた。

「なあに、そんな心配はないよ。フランスの便所は赤んばうの頭が流れこむだけの大きさにちやあんと出來てゐるんだからね。」

僕がその話をしたら、友人の一人がから云

つて、そしてドイツでやはりこのでんをやつて失敗した話をした。猿またが中途でひつかゝつて管がつまつてしまつたので、お神さんに大ぶ油をしぼられた上に、その掃除代まで取られたんださうだ。

が、そのほかにもう一つ、室のすみつこに何んだかわけのわからんものがあつた。白い綺麗な陶器で出來てゐるんだが、ちやうどおまるのやうな大きさの、そしてまたそんな形のもので、そのきんかくしにあたるところに水と湯との二つの栓がついてゐる。そしてその眞ん中ごろの兩側が瓢箪形に少しへこんで、そこへ腰をおろすのに工合のいゝやうになつてゐる。が、おまるにしては、固形物の流れるやうな穴はない。また立派な西洋風呂のあるのに、こんなもので腰湯を使ふのも少しをかしいと思つた。試みに栓をねぢると、恐ろしい勢ひで、水か湯かがジャジャジャアと出てくる。そして僕は、夜中になるとよく、となりの室で暫く男と女の話聲が聞えると思つたあとで、このジャジャジャアのおとを聞いた。

寢臺は大きなダブル・ベッドだ。枕はいつでも二つちやんと並べてある。これは前の安ホテルででもやはりさうだつたが。

パリについた晩、近所のうすぎたないレストランへいつて、三フラン五十の定食を食つた。日本の一品料理見たいなあぢのものだ。で、しかめつらをして食つてゐると、日本ではとても見られないやうな、毛唐と野蠻人とのあひの子のやうなけつたいな女がはひつて來て、コヽココと呼びかける。坊やといふ程の意味だ。僕は恐ろしくなつて早速そこを逃げだした。

が、そとへ出ると、すぐおなじやうな女がそばへやつて來て「如何です」てな事をいふ。ホテルの前のかどでも、そんな女が二人突つ立つてゐて、いきなり僕の腕をとつて、何やかやと話しながら一しよにあるいてくる。よくは分らないが、「五フランなら」といふやうな言葉がその中にあつたやうに思ふ。實は、このベルギル通りの勞働者街を逃げ出したのは、おまはりさんもこはかつたが、この五フラン女もこはかつたのだ。

それからパリの中心のグランブウルヴァル近くの或るホテルへ引こすとすぐ、ゆふ方その邊をぶら〳〵しながら、ちよつとはひるのに氣がひけるやうな或る大きなキャフェへはひつた。キャフェは實にうまい。僕は二三ばい立てつゞけに飮んだ。そして「もう一ぱい」とボオイに云ひつけてゐる間に、ふと五つ六つ向うのテェブルにゐる若い綺麗な女が、僕の顔を見ながらニコニコしてゐるのに氣がついた。これはまた、日本ではとても見られないやうな、本當の西洋人の目のさめるやうな女だ。

僕はきつと僕があんまりキャフェを飮むんで笑つてゐるんだらうと思つた。それとも又、色の淺黑い妙な野蠻人がゐるなと思つて笑つてゐるのかともひがんで見た。どつちにしても、僕にとつては、あんまり氣持のいゝ事ではない。僕は少々赤くなつて、すましてほかの方を向いた。

すると、そこにもやはり、一人の若い綺麗な女が、僕の顔を見てニコ〳〵してゐるのにぶつかつた。少し癪にさはつたので、こんどは度胸をすゑて、こつちでもその女の顔をぢつと見つめてやつた。

が、笑つてゐるんぢやないんだ。目がうごく、口がうごく、何か話しかけるやうに。

僕は變だなと思つて、こんどは前の女の方を見た。やはりニコ〳〵してゐる。そして今の女よりももつと、しきりに話しかけるやうにして、顎までもうごかす。

僕は少々きまりが惡くなつて、急いでキャ

フエを飲みこんでそこを出た。

三

翌日は、ちよつと用があるんで晝からタクシイでそとへ出た。自動車で道が一ぱいなので、車はよく止まる。そして、ぞろ〳〵とまた、歩くやうにして走り出す。僕は急ぎの用ぢや自動車では駄目だなと思つた。

かうして、ある廣場の入口でちよつと道のあくのを待つてゐる間に、僕は、一人のやはり若い綺麗な女が、ニコ〳〵しながらのぞきこんでゐるのを見た。まど越しなので言葉は聞えないが、何か云つてゐるやうにすら見える。が、その言葉を聞きとらうと思つて耳をかたむけてゐる間に、車は走り出した。

その日は大奮發をして三十フランばかりの夕飯を食つて、また大通りをぶら〳〵してゐると、何んとか孃の何んとかの歌、何んとか君の何んとかの話といふやうな題をならべた、寄席のやうなものがあつた。はひつた。歌も話も、割りによく分るのでうれしかつたが、それがあんまりつまらないくすぐりばかりなので、いやになつてすぐ出た。

そして、また大通りのショオ・キンドオのあかあかとてらしたところや、キヤフエのテラスの前を、ぶら〳〵とあるいた。テラスといふのは、キヤフエの前の人道に椅子、テエブルを持ち出して並べてあるところだ。そこでは、大勢の男や女ががや〳〵面白さうに話しながら、何か飲んでゐる。そしてところ〴〵に一人ぼつちの若い女がゐて、それがほかの一人ぼつちの男にいろ〳〵と目くばせしたり、前を通る男に笑ひかけたりしてゐる。

道を通る女といふ女は、殆んど皆なその行きちがふ男に何か目で話しかけに行く。そして、おや見合つたなと思つてゐるうちに、もう二人で手を組んだり、或は肩や腰に手をかけたりして、ぺちやくちや何か話しながらあるいて行く。

女は皆な、あの白い顔にまた綺麗に白粉をぬつて、その上にところ〴〵赤い色をぬつて、脣には紅をさし、目のふちは黒く色どつてゐる。そしてその顏をまた、いろんな色の帽子と着物とでかざつてゐる。

その女のうしろ姿がまたいゝ。すらりとした長いからだの、殊に今は長い着物がはやつてゐるので猶更すらりとして見えるのださうだ、肩や腰をちよこまかとゆすぶりながら、小足で高い靴の踵を鳴らして行く。

僕はさういふのにうつとりとしてゐると、一人の女にぶつかつた。ぶつかつたんぢやない、あつちから僕の前へのこ〳〵出て來たんだ。そして、

『どう、今晩私と一しよにあそばない？』

と、首をかしげて、細いしかしはつきりした可愛い聲でいふ。

惡い氣持ぢやない。しかし少々面くらつた僕は、あわてて、ちやうどその前を通つてゐたやはり寄席のやうなうちの中へ飛びこんだ。

ドアをあけて、はひるにははひつたが、切符を賣るやうなところがないので、ちよつとまごついてゐた。すると、ボオイらしい男がやつて來て、

『いゝ席にいたしませうか？』

といふ。

『あゝ、一番いゝ席にしておくれ。』

僕はどうせ高の知れたものと見くびつて、大見得をきつた。ボオイはすぐ僕の前に立つて案内した。

もう一つドアをあけると、そこは廣いをどり場だつた。盛んなオオケストラにつれて、十人あまりの女が今踊つてゐる際中だ。僕はその

一番前のテエブルに坐らされた。僕はボオイに二フランの銅貨を一つにぎらした。ボオイは切りにお禮をいひながら、何か低い聲でさゝやいた。僕はちよつと聞きとれないので聞き直した。

「もしお望みの娘がゐましたら、ちよつと私に相圖して下さい。すぐ呼んで來ますから。」

ボオイはさういつて、何か小さな紙片を置いて行つた。そして、それと入れかはりに、またほかのボオイが來て、大きな紙片を一枚テエブルの上に置いた。見ると、シャンパンとかのメニュだ。五十フランとか六十フランとかいふ値段が書いてある。これや大變だ、と思ひながら、前の小さな方の紙片を取つて見ると、それには入場無料、飲物是非、とかいてある。

「ちよつと待つておくれ。」

僕は、踊りの方に夢中になつてゐるやうな顔をして、一まづそのボオイをしりぞけた。そして、短かい裾を盛んにまくりあげては足を高くあげて見せる、その何んとか踊りがすんで、そしてこんどは見物の男や女がをどり場一ぱいになつて踊りだしたのを機會に、シャンパンの註文をきゝにくるボオイの來ないうちにと思つて、とつとと逃げ出してしまつた。

四

今パリではミディネットが同盟罷工をしてゐる。

このミディネットといふのは、字引をひいてもちよつと出て來ない字だが、ミディ即ち正午にあちこちの商店や工場からぞろ〱と飯を食ひに出てくる女といふ意味で、いろんな女店員や女工を總稱するパリ語だ。そしてこのミディネットがやはり、正午のやすみ時間に、本職の勞働以外の勞働をするといふ話を聞いた。實は、僕がミディネットといふ言葉を覺えたのも、その話からなのだ。

が、今罷工をやつてゐるミディネットは、その中のお針女工だ。八千人ものこのお針女工がもう四週間も罷工をつゞけて、多勢大通りをねつてあるいて示威運動をしたり、罷工に加はらない工場へさそひ出しにいつたりして、あちこちで警官隊と衝突してゐる。

僕はそのミディネットの一人に會つた。そしてその生活狀態も訊いて見た。

彼女はまだ若いし、腕も大してよくはないので、一週間に六十フランしかもらつてゐなかつた。が、この一週間五六十フランから一ケ月三四百フランといふのが、まづパリでの一般のミディネットの普通の收入なのだ。パリの貧乏人の女は、娘でも細君でも、大がい皆なかうして働いてゐる。

そして彼女の毎日の支出は、その鉛筆で書いて見せた表によると、ざつとかうだ。

	フラン
朝飯(キャフェとパン)	0.60
電車(往復)	0.35
晝飯	4.50
夕飯	3.50
洗濯	0.80
室代	2.00
雜費(病氣や娛樂)	2.00
被服	2.00
合計……一日	15.75
同……一週	110.25
同……一月	441.00
同……一年	5.292.00
收入……一年	3.120.00
不足……一年	2.172.00

晝飯は友だちと一緒に食ふんで、日本人のお茶の、葡萄酒が少しはずむんだ。二フランの室といふのは、安ホテルの屋根裏だ。そしてパリのミディネットは、親のうちにゐるものは極くまれで、大がいは皆なこの安ホテルの屋根裏ずまひだ。

そこで、問題はこの一年二千フラン餘りの不足が、どうして補はれるかといふ事だ。或ものは自炊をして、晝も晩もパンとジャガ芋かスウプで濟ます。或ものは謂はゆる『お友だち』の男と同棲する。夫婦共かせぎする。そして或ものは、正

午のやすみ時間に働く、謂はゆるミディネットなる。

イギリスのタイムスでは、ミディネット等が『生活費や絹の靴下や白粉が高くなつたので』罷工した、と冷かしてゐた。實際、絹の靴下をはいてゐるものも可なりある。また白粉をつけてゐるものも可なり多い。しかし、パリの町の中をあるいてゐる女で、さうでないものがどれだけあるだらう。そして大がいのミディネット、その商賣上、雇主からさう強ひられるのだ。

また、この罷工中のミディネット等が、胸に箱を下げてあちこちのキャフェへ寄附金募集に歩くと、

『おい、そんな事をするよりや、往來をぶらぶらしろよ。』

とからかふ紳士が隨分ある。この紳士等の望み通りにミディネットに『往來をぶら〳〵』させるためには、そしてやがてそれを本職にさせるため、は、彼女等の賃銀は決して上げてはならないのだ。

そしてこの紳士等の淑女は、往來やキャフェをぶらつく若い綺麗な女共とその容色をきそふためには、決して子供を生んではならない。

貧乏人の、或ひは乞食のやうな風をした、或ひは淑女のやうな風をした、どちらの女も、これ又だん〳〵高くなつてくるその生活のためには、決して子供を生んではならない。

この頃發表されたフランスの人口統計表によると、この現象は最近甚しい。

一九二二年卽ち去年は、出産數が約七十五萬九千だが、一昨年は一昨々年よりも約二萬一千へり、そして去年は一昨年よりも更に又五萬三千へつてゐる。

それをもう少し詳しく云ふと、一九二二年には、

出産數……………………759.846
死亡數……………………689.267
差　引……………………70.579

であるが、前二ケ年には、この差引が、

1921……………………117.023
1920……………………159.790

になつてゐる。

そして死亡數はほんの少しづつ減つてくるのだ。しかもそれは、多くは早死する貧乏人の子供の上にだ。

結婚の數もへつた。

1920……………………623.869
1921……………………456.211
1922……………………383.220

この結婚の數を人口一萬に對する比例にすると、ちようど次ぎのやうになる。

1922……………………195
1921……………………233
1920……………………318

避妊は貧乏人にはちよつとむづかしい。サガア女史が一番有效なものとして推奬してゐるカプシュルは、一つ五十フランするのだが、それも長くはへない。又、前にいつた瓢簞形のギデなどは、貧乏人の夢にも思へるものぢやない。

勞働者には可なり子供が出來る。僕の知つてゐる勞働者で、五人六人、又は七人八人子供をつくつたのが可なりあるが、その多くは、まだ赤ん坊の間か、或はほんのまだ子供の間に死ぬ。往來をぶら〳〵する如何はしい淑女たちでも二十歳前に生んだ子供を一人位は持つてゐるのがおほい。

そこで、前に云つた赤ん坊の頭位はやすやすと通れる、大きな穴や管の便所が必要になつてくる。相應の醫者へ行けば、五百フラン位で、勿論ごく内々で何の世話もなく手術をしてくれ

る。しかし貧乏人にはさうは行かない。
墮胎はフランスでは重罪だ。が、こんど、それを輕罪にしたとかするとかいふ話を、四五日前の新聞で見た。そこには毎年のこの犯罪數などもあつたのだが、今その新聞が手もとにないのでくはしい事も、又はつきりした事も云へない。

これは貧乏人にとつて、餘程ありがたい改正のやうだ。が、實際はさうでもないらしい。今までは、重罪だつたので、陪審の人たちが多くは被告に同情して、容易にそれを有罪にさせなかつた。又、よし有罪ときまつても、容易にその執行をさせなかつた。それがこんどは、輕罪のお蔭で、陪審もなくなり、又裁判官の同情も餘程うすらがうと云ふのだ。そして其の改正の目的も、實はやはり、そこにあるらしいのだ。

（一九二三年四月三十日、パリにて）

牢屋の歌

一

パリに
すきな事二つあり
女の世話のないのと
牢屋の酒とたばこ

へたな演説には、きつと長口上の、何やかの申しわけの前置きがある。歌だつてやはりさうだらう。と、まづ前置きの前置きをして置いて、さて、そろ〳〵と長口上に移る。

パリの女の世話のない事は、前の「パリの便所」の中で話した。が、そこでは、物がちよつと論文めいた形式になつたために、大分かみしもをつけて、その中の「僕」といふ人間がいつもその世話のない女を逃げまはつてゐるやうに體裁をかざつてゐた。

が、體裁はどこまでも體裁で、事實の上からいへばそれは眞赤なうそだ。逃げまはつてゐたどころぢやない、追つかけまはしてゐた位なのだ。

その追つかけま　してゐた女の中に、ドリイといふ踊り子が一人ゐた。バル・タバレンといへば、パリへいつた外國人で知らないもののない、あまり上品でない、ごく有名な踊り場だ。そこの、と云つてもちつとも自慢にならないのだが、とにかくそこの女の中のえりぬきなのだ。

僕はその踊り場のすぐそばに下宿してゐたのだが、どうもパリは危險らしい樣子なので、三月のなかばにこの別れにくいドリイに別れて、リヨンへ逃げた。そしてすぐドイツ行きの支度にかゝつた。

それにはまづ、ドイツ領事のギザをもらふ爲めに、警察本部の出國許可證をもら　なければならない。それが、警察へ行くたびに、あしたやる、あさつてやる、といふ調子でごく小きざみに延び延びになつて、一ケ月あまり過ぎた。むしやくしやもする。もうメエ・デエも近づく。パリもなつかしい。ちよつと行つて見ようとなつてまた出かけた。

そしてその翌晩、夕飯を食ひがてらオペラ近所へ行つて、そこから更に時間を計つてドリイに會ひに行かうと思つた。が、そのオペラの近くのグラン・キャフェで、前に一度あそんだ事のある、そして二度目の約束の時に何かの都合で會へなかつて、それつきりになつてゐる或る女つかまつてしまつた。

その翌日はメエ・デエだ。今晩こそはドリイと思つてゐると、その日の午後、こんどはとんでもない警察につかまつてしまつた。
秩序紊亂、官吏抗拒、旅券規則違反といふや

うな名をつけられて、警察に一晩、警視廳に一晩とめられて、三日目に未決監のプリゾン・ド・ラ・サンテに送られた

のん氣な牢屋だ。一日ベッドの上に横になつて、煙草の輪を吹いてゐてもいゝ。酒も葡萄酒とビイルとなら、机の上に瓶をならべて、一日ちびり〳〵やつてゐてもいゝ。

　酒の事はまたあとで書く。その前にドリイの歌を一つ入れたい。

　獨房の
　寶はベッドのソファの上に
　葉巻のけむり
　バル・タバレンの踊り子ドリイ

　窓のそとは　　だ。すぐそばの高い煉瓦塀を越えて、街路樹のマロニエの若葉がにほつてゐる。なすことなしに、ベッドの上に横になつて、そのすき通るやうな新綠をながめてゐる。そして葉巻の灰を落しながら、ふと薄紫のけむりに籠つてゐる室の中に目を移すと、そこにドリイの踊り姿が現はれてくる。彼女はよく薄紫の踊り着を着てゐた。そしてそれが一番よく彼女に似合つた。

二

　パリの牢のスウヴニルに
　酒の味でも
　飲み覺えよか
　Ça va! Ça va!

　僕はもう五六年前から、ほんの少しでもいゝから酒を飲むやうにと、始終醫者からすゝめられてゐた。

　が、飲めないものはどうしても飲めない。日本酒なら、小さな盃の五分の一も甜めると、爪の先まで眞つ赤になつて、胸は早鐘のやうに動悸うつ。奈良漬を五切れ六切れ食べてもやはりおなじやうになる。サイダアですらも、コップに二杯も飲むと、ちよつとポオとする。

　たゞウイスキイが一番うまいやうなので、毎日茶匙に一杯づつ紅茶の中に入れて飲んでゐたが、それだけでもやはりちよつと苦しい位の氣持になる。

　フランスに來てからは、いや上海からフランス船に乗つて出てからは、食事のたびに葡萄酒が一本食卓に出るのだが、最初ちよつとなめて見てあんまり澁かつたので、其後は見向いてもみなかつた。

　けれども、牢にはひつてみて、差入れ許可の品目の中に葡萄酒とビイルの名がはひつてゐるのを見出して、退屈まぎれにそのどつちかを飲み覺えようと思つた。ビイルはにがくていけない。葡萄酒も、赤いんだと澁いが、白いんなら飲んで飲めない事もあるまい。女子供だつて、お茶でも飲むやうに、がぶり〳〵やつてゐるんだから。と、きめて、或日、差し入れの辨當のほかに、白葡萄酒を一本註文した。

　Ça va! Ça va! といふのはよからうよからう、位の意味だ。

　きのふは大ぶ澁かつたが
　けふは少しあまし
　飲みそめの
　Vin blanc

　Vin blanc（白葡萄）でも澁いことはやはり澁い。が、ほんのちびり〳〵、薬でも飲むやうに飲む。そして、ほんのりと顔を赤らめながら、ひまにあかして一日ちびり〳〵とやつて、いゝ氣持になつてはベッドの上に長くなつてゐた。

三日目に一本あけた
大手柄！
飲みそめの
Vin blanc

一本といつても、普通の一本ぢやない。アン・ドミとかアン・カアルとかいふ半分か四分の一の奴なのだ。

そして入獄二十四日目の放免の日には、警視廳の外事課で追放の手續きを待つてゐる半日の間に、このアン・ドミを百人近くの刑事共の眞ん中に首をさらされながら、一本きれいにあけてしまつた。

そのたびになつかしからん
晩酌の
味を覺えし
パリの牢屋

僕は日本に歸つたら、毎日、晩酌にこの白葡萄を一ぱいづつやつて見ようときめた。

三

Vin blanc　ちびりちびり
歌よみたはむる
春の日
春の心

春の心、と云つても、春情ぢやない。牢やの中では、いつも僕は聖者のやうなのだ。時々思ひだしたドリイだつて、實は一緒に寢たには寢たが、要するにたゞそれつきりの事だつたのだ。

——Faire l'amour, ce n'est pas tout.

Tu es trop jolie pour cela. Je t'adore.

と云ふやうな甘い事を、實際甘すぎてちよつと日本語では書きにくいのだ。子守歌でも歌つて聞かせるやうな調子でお喋舌しながら寢かしつけてゐたのだ。

そして又、それだからこそ、時々彼女を思ひだしたのだらうと思ふ。リヨンではたつた一人の、そして停車場まで夜遲く送つて來た女の事も、メエ・デエの前の晩會つた女の事も、又いつも赤い帽子をかぶつてゐたところから僕が「赤シャポオ・ルウジュ帽」のあだ名してゐた女の事も、其他本當に一緒に寢た女の事は一度も思ひだしはしなかつた。

そんな事ぢやないんだ。たゞ春の心なのだ。本當にのどかな、のんびりとした呑氣な氣持なのだ。いつも忙しい、そして多勢の人との交渉の多い生活をしてゐる僕には、實、何んの心配もない、たつた一人きりの牢やの生活ほど、のうのうするところはないのだ。尤も、それがあんまり長かつたり、時々すぎたりしては、さうばかりも行くまいが。殊に春の日の牢の中はいい氣持だ。そして、それが、ちびり〱のヴェン・ブランで猶更にいゝ氣持にあふられてゐては堪らない。へたな歌も出來よう。呑氣な事も考へてゐられよう。

が、これは出ると直ぐ仲間の新聞で知つたのだが、其頃、此の牢やでこんなに呑氣にしてゐては、知らん事とは云ひながら甚だ相濟まなかつたのだ。

僕がまだフランスに來る途中の船にゐた頃、共産黨の首領カシエン以下十數名のものが、ルウル問題の勃發とともに拘禁された。そして其の中には、ドイツの共産黨代議士何んとかと云ふのと、もう一人のやはり何んとか云ふドイツの共産主義者とがゐた。皆んなやはり僕と同じ此のラ・サンテの牢やにゐたのだ。

ところが僕がはひつてから、カシエン以下のフランスの共産主義者は保釋で釋放されたが、ドイツの二人だけは殘された。二人ともフ

ランスの法律に觸れる理由は何んにもなく、ただ其の政治上の都合でおしこめられてゐたので、たゞさへ二人は大ぶ憤慨してゐたのだが、ほかのものが皆んな出されて自分等だけ殘つたとなると、直ぐ釋放を要求してハンガア・ストライキを始めた。そして、それを知つた同じ牢やの政治監にゐる既決囚の無政府主義者四五名も、それに同情のやはりハンガア・ストライキを始めた。

　ドイツの二人は十幾日間頑強に飲まず食はずに過ごした。そして殆んど死んだやうになつて病院に移されて、僕が放免になつた二三日後に漸くの事で釋放の命令が出た。

『僕も知つてゐれば‥‥』

と、僕は自分の太平樂を恥ぢ且つくやしんだ。

（一九二三年七月十一日箱根丸にて）

入獄から追放まで

一

　どうせ何處かの牢やを見物するだらうと云ふ事は、出かける時のプログラムの中にもあつたんだが、たうとうそれをパリでやつちやつた。

實は、大ぶうかつではあつたが、此のパリでと云ふことは、最初はあまり豫期してゐなかつたのだ。

　日本では最近にヨオロッパへ行つた事のある誰れとも話はしなかつたが、支那ではほや〳〵のフランス歸りの幾人かの人達と會つた。

『なあに、フランスへあがりさへすれば、もう大丈夫ですよ。』

　其の人達は皆な同じやうにさう云つた。そして旅券なぞも、途中は素より、マルセイユ上陸の時ですら、なければなしで通れる程に世話がない、と云ふ話だつた。

　尤も、とにかく僕は、國籍と名だけはごまかしたが、しかし正眞正銘の僕の、しかも其時の着のみ着のまゝの風の寫眞をはりつけた、立派な旅券を持つてゐた。其の旅券からばれると云ふやうな事は先づないものと安心してゐた。現にフランスの領事館でも、又イギリスの領事館でも、僕自身が出かけて行つて、何んの事もなくギザをして貰つて來たのだ。其の旅券を、わざ〳〵餘計な手數をかけてまで、見せずに通す程の事もあるまいと思つた。

　途中での僕の心配はもつとほかの事だつたのだ。そしてそれは豫め何んともする事の出來ない事なので、若し間違つたら仕方がないとあきらめるよりほかに仕方がなかつた。

　しかし、それが無事に行つて、フランスにはひりさへすれば先づ大丈夫だと云ふ事は、僕も日本にゐた時から思はないではなかつた。殊にフランスの領事館へギザを貰ひに行つた時に、受附の男が僕の旅券を受取つたまゝちよつと引つこんだかと思ふと、直ぐに又それを持つて出て來て、幾らかの手數料と引換へに渡してくれたなぞは、其の官憲の無造作に寧ろ驚かされた程であつた。

　此のフランスの自由に就いては、其後、船の中ででも大ぶ聞かされた。

『まあフランスへ行つて御覽なさい。自由と云ふものがどんなものか本當によく分りますよ。』

　セスクワ大學出身の女で、嘗てパリに幾年か留學した事があり、其の兄が社會革命黨に關してゐた事から、彼女までもツアルの官憲から危險人物扱ひされた事があると云ふ、マダムNが何かの話から話しだした。彼女は暫く日本にゐて、今僕と同じやうにやはりフランスへ行くのだつた。

『先づ何處かのホテルへ着いてですね、一番氣

持のいゝのは、うその名刺でも本當の名刺でもとにかく名刺を一枚出しただけで、それつきり何一つ尋ねられる事はないんでせう。日本やロシアではとてもそんな譯には行きませんからね。』

然るに、此のマダムNと一緒にマルセイユに上陸して、或るホテルに着いた時、フランスの此の自由は直ぐさま幻滅させられて了つた。受附の男が活版刷の紙きれを持ちだして、そこへ何か書き入れろと云ふ。見れば立派な宿帳だ。しかも日本の宿帳なんかよりよつぽどうるさい宿帳だ。マダムと僕とは顏を見合はした。そして二人で一々書き入れて行つたが、最後のカルト・デイダンテイテ(身元證明書)の項で二人とも行きづまつた。

『これは何んでせうね?』

僕はマダムに尋ねた。

『さあ、何んですかね。』

マダムもちやうどそこへペンを休めて考へてゐたのだ。

『いや、若しカルト・デイダンテイテをお持ちでなければ、パスポオルでもいゝんです。』

二人は番頭にかう注意されながら、まだ其の『パスポオルでもいゝんです』と云ふのが何んの事かよく分らなかつた。が、たゞさう書き入ればいゝのだと分つて、二人は二階の一室へ案内されて行つた。

マダムはそれだけの事で、もういゝ加減其の顏をくもらしてゐた。が、二人ともまだ、其のカルト・デイダンテイテがどんなものかと云ふ事はちつとも知らなかつたのだ。

(前の『日本脱出記』の中では、パリで始めて此のカルト・デイダンテイテの問題にぶつかつたやうに云つてあるが、あの時にはまだ何處をどうしてフランスにはひつたかを其筋に知られたくなかつたので、わざとあゝ書いたのだつた。)

其の翌日(これも今となつては其の日にちを明かにしていゝのだが、僕は一月五日にフランス船のアンドレ・ルボンと云ふのに乘つて上海を出て、二月十三日にマルセイユへ着いたのだつた)僕はマダムと別れて、リヨンへ行つた。そこには僕の假國籍の同志が數名ゐて、僕はそれらの人達にあてた上海の同志からの紹介狀を持つてゐたのだ。そしてヨオロッパにゐる間其の國籍の人間として通つて行くには、先づそこの同志のいろんな厄介にならなければならなかつたのだ。

僕はパリへの旅を急いでゐた。そして此のリヨンには、又あとでゆつくり來るとしても、こんどは一晩か二晩とまつて直ぐパリへ立つ豫定でゐた。が、リヨンの同志はそれを許さなかつた。

『こゝには大勢僕等がゐて、いろ〳〵と便宜があるんだから、こゝを君の居住地ときめて置いて、先づカルト・デイダンテイテを貰つて、それから何處へでも行くといゝ。』

と云ふんだ。僕は支那からフランスに來るといふ旅券しか持つてゐないので、更にフランスからヨオロッパ諸國へ廻る旅券を貰ふ必要があつた。そしてそれには何よりも先づ、此のカルト・デイダンテイテが必要なのだ。それに、フランスに二週間以上滯在する外國人は、すべて其の居住地の警察のカルト・デイダンテイテを持つて居なければならないのだ。そして何處へ行くんでも、いつでも、必ずそれを身につけてゐなければならないのだ。それが無ければ、直ぐ警察へ引つぱつて行かれて、若し申譯が立たなければ、直ぐさま罰金か牢だ。そして其の上になほ追放と來る。

『まあ、犬の首輪も同じやうなものさ。』

と、同志のAは説明して聞かせながら、ポケッ

トから自分のカルト・デイダンテイテを出して見せた。寫眞もはりつけて　る。兩親の生年月日までもはひつてゐる。そして　れにフランス人が二人と同國人が二人保證人に立つてゐる。

　此のカルト・デイダンテイテを貰ふのに一週間程かゝつた。そして其の間に僕は、或日、新聞で見た其の晩のフランス人の同志の集會に案内してくれないかと頼んだ。が、それもやはりA等に許されなかつた。そんなとこへ行かうものなら、直ぐあとをつけられて、カルト・デイダンテイテは素より、ヨオロッパ歷遊のパスポオルも、又僕自身のからだも、どうなるか分らんとおどされた。

　こゝに於て、始めて僕は、戰後のフランスの反動主義がどんなものかと云ふ事が本當に分つた。そして此のフランスにはひれば、もう大丈夫などころではなく、却つて危險が直ぐ目の前にちらついてゐるやうに感じた。

二

　手帳のやうなものになつてゐるカルト・デイダンテイテの終りの幾ぺエジかは、出發、到着、歸還の三字づつを幾つも重ねた表で埋まつてゐる。要するに、其の居住地から何處かへ旅行するには、一々それを警察へ屆け出て、其の判を押して貰はなければならないのだ。

　が、僕はそんな面倒はよして、直ぐパリへ出かけた。そしてベルギルのフランス無政府主義同盟へ行く。そこは『日本脫出記』に書いたやうな警戒ぶりなのだ。

　更に又、同盟の事務所からごく近くのホテルに泊ると、そこでは普通に宿帳を書かした上に、カルト・デイダンテイテの本物を見せろとまで云ふのだ。

　僕はいよ〳〵あぶないと思つた。そしてリヨンから一緒に來た支那の一同志と、パリの郊外や少し遠い田舍にゐるやはり支那の同志等を訪ね廻つて、四五日して歸つて來ると、僕等を其の宿へ案内した、そして自分もそこに下宿してゐたイタリイの若い女の同志が、急いで引越し支度をしてゐた。警察がうるさくするので逐ひ出されるのだと云ふ。

　リヨンの同志は直ぐ歸つた。僕は其の女と相談して、何處かもつと安全な宿をさがして貰ふ事にきめた。そして其の晩は一緒に同盟の機關『ル・リベルテエル』の催しの民衆音樂會へ行つた。會場のC・G・T・U(統一勞働總同盟)事務所の入口の前には、十名ばかりの制服の憲兵が突つ立つてゐた。

　其の翌日、ル・リベルテエル社へ行つてゐると、痩せこけて、髮の毛や髭をぼう〳〵のばして、今にも倒れさうになつてはひつて來た男があつた。口もろくにはきけない。よく訊いて見ると、ハンガリイの同志で非軍備運動のために六ケ月牢に入れられて、出ると直ぐ窃かにフランスに逃げこんだのだが、パスポオルのないために又捕まつて三ケ月牢に入れられて、けふ放免と共に追放になつたんだと云ふ。

　其の晩は前から會ふ筈になつてゐたロシアの若い同志を訪ねた。いくら室の戶をノックしても返事がない。ゐないのかなと思ひながら又念のためにノックしたら、ちよつと待つてくれと云ふ慄へ聲の聲がする。やがて戶が開いて其の同志は僕の顏を見るといきなり飛びついて來て抱きしめた。どうしたんだと訊くと、いや、實は、いよ〳〵來たんだなと思つて、捕まる準備をしてゐたんだ、と云つて笑ひだした。此の男も旅券なしで、ロシアからドイツに、そして又ドイツからフランスに逃げて來たのだ。

　此のロシアの同志も直ぐ又ドイツへ逃げ歸ら

うと云ふし、僕もこんなフランスに逃げかくれてゐるんぢや仕方がないと思つて、それよりは、大ぶましらしいドイツへ早く行かうときめた。僕の目的の國際無政府主義大會は、四月一日に、ベルリンで開かれる事になつてゐたのだ。そこでは本名を名乘らなければならないし、そこで捕まるのは仕方がないとしても、それまでにお上の手にあげられるのは少々癪だと思つた。

そこへ日本人の友人のSが訪ねて來た。日本を出て以來、日本人は一切禁物として絶對に會はない方針にしてゐたのだが、此のSにだけはごく內々で僕の來た事と宿とを知らしてあつたのであつた。

Sは、それぢや直ぐ引越ししようと云つて、新しい宿を探しに行つた。そして其の日のうちに引越した。Sも暫く田舍へ行つてゐたのを又出て來たので、僕と一緒にそこへ宿をとつた。

『集會にも出れなければ、ろくに人を訪ねる事も出來ないんぢや、仕方がない、せめてはパリ第一の遊び場に陣取つてうんと遊ぶんだね。』

二人はさう相談をきめて、モンマルトルの眞ん中に宿をとつたのだ。そして豫定通り晝夜兼行で遊び暮しながら僕はリヨンからのたよりを待つてゐた。ヨオロッパ歴遊の新しい旅券が手にはひれば、直ぐ知らしてよこす筈になつてゐたのだ。そして僕は其の知らせと共にリヨンに歸つて、直ぐ又ドイツへ出發する手續きにかゝる筈だつたのだ。

一週間ばかりして其の知らせが來た。まだ遊び足りない事は甚だ足りない。それに漸く先づこれならばと思ふお馴染が出來かゝつてゐたところなのだ。が、其の知らせと同時に僕にとつては容易ならん重大事がそつと耳にはひつた。それは、日本の政府からパリの大使館にあてて、Sの素行を至急調べろと云ふ訓電が來たと云ふ事だ。僕はこれはてつきり、Sを調べさへすれば僕の所在も分ると云ふ見當に違ひない、と思つた。

(これはあとで、メエ・デエの日の前々日かに、パリでそつと耳にした話だが、實は其時既に、日本政府からドイツの大使館に僕の搜索命令が來て、そして其の同文電報がドイツの大使館から更にヨオロッパ各國の大使館や公使館に來てゐたのださうだ。)

僕もSも、持つてゐた金はもう全部費ひはたしてゐた。が、漸く借金して、大急ぎで二人でパリを逃げ出した。

Sはもとの田舍に歸つた。僕はリヨンの古巣に歸つた。そして、あちこちと歩き廻つてゐた事なぞは知らん顏をして警察本部へ行つてドイツ行きを願ひ出た。其の許可がなければ、ドイツ領事にヸザを願ひ出ても無駄なのだ。

警察本部とはちよつと離れてゐる裁判所の建物の中に、外事課の一部の旅券係りと云ふのがあつた。そこへ行くと、四五日中に書類を外事課へ廻して置くから、來週のけふあたり外事課へ行けば間違ひなく出來てゐると云ふ。で、僕は出立の日まできめて、すつかり準備して、其の日を待つてゐた。ドイツに關する最近出版の四五冊の本も讀んだ。ドイツ語の會話の本の諳誦もした。おまけに、歸りにはオオストリイ、スヰツル、イタリイと廻るつもりで、イタリイ語の會話の本までも買つた。

ところで、其の日になつて警察本部の外事課へ行つて見ると、又もとの裁判所の方の旅券係りへ廻してあると云ふ。そして其の旅券係りでは、同じ建物の中のセルビス・ド・シュウルテといふ密偵局へ廻したから、そこへ行けと云ふ。そして又其の密偵局では、二三日中に通知を出すから、そしたら改めて出頭しろと云ふ。うんざりはしたが、仕方がないから、歸つて其の

通知を待つ事にした。

二三日待つたが來ない。四日目にたうとうしびれを切らして行つて見ると、けふ通知を出して置いたから、あしたそれを持つて來いと云ふ。

其のあしたは密偵局でいろ〳〵と取調べられた。旅券や身元證明書は願書と一緒にさし出してあるんだが、それを見れば直ぐ分る事を始め、フランスに來てからの行動や、ドイツ行きの目的や、其他根ほり葉ほり尋ねられた。大がいの事はいゝ加減に辻褄の合ふやうに返事してゐれば済むんだが、一番困つたのは身元證明書の中に書き入れてある事の調べだ。親爺の名とか母の名とか其の生年月日とかは、國での二人の保證人のそれと同じやうに、皆な全く出たらめのものだつた。其の出たらめを、一々ちやんと覺えてゐるのは容易な事ぢやない。が、それも先づ難なく済んだ。

たゞ済まないのは、目的の許可證がいつ貰へるかだ。其の日には、あさつてと云はれたので、あさつて行つて見ると、又あさつて來いと云ふ。こんどこそはと思つて、其のあさつて行つて見ると、こんどはあしただと云ふ。そして其のあしたが又あさつてになり、其の又あしたになりあさつてになりして、向うちがあかない。

其の間に僕の宿の主人も三四度調べられた。そして一晩そこに泊つたSの事も、いろんな方面から調べてゐるやうだつた。

僕はだん〳〵不安になりだした。そして一その事そんな合法の手續きは一切うつちやつて、パリで會つたロシアの同志のやうに竊と國境を脱け出ようかと思つた。此の合法か非合法かの問題は、僕がフランスに來た最初から、僕とリヨンの同志との間に鬪はされた議論だつた。そんな七面倒臭いカルト・デイダンテイテなどは貰はずに、勝手に駈け廻る方がよくはあるまいか、と云ふのが僕の最初からの主張だつた。が、もし何かの間違ひがあれば、當然其の責任は僕の世話をしてくれたそれらの人達の上にも及ぶのだからと思ふと、僕はいつも其の人達の合法論にふしようぶしようながら從ふほかはなかつた。こんども亦さうだ。

そして僕は、かうして殆んど毎日のやうに警察本部に日參しながら、不安と不愉快との一ケ月半ばかりを暮した。

三

實際いやになつちやつた。

四月一日の大會は又々延期となつて、こんどは八月といふ大體の見當ではあるが、それも果してやれるかどうか分らない。ドイツの同志からは、とてもベルリンでは不可能だ、と云つて來てゐる。するとヨオロッパの何處に、其の可能性のある處があるんだらう。キインナと云ふ一説もあるが、それもどうやらあぶないらしい。

愚圖々々してゐる間に、金はなくなる。風邪をひいて、おまけに賣藥のために腹をこはす。無一文のまゝ、一週間ばかり斷食して、寢て暮した。

漸く起きれるやうになつて思ひがけなくうちから金が來たと思ふと、こんどは又例の日參だ。あした、あさつてと云はれるのにも飽きて、少々理窟を並べると、フランス人の癖の兩方の肩を少しあげて、「俺あそんな事は何んにも知らねえ」と云つたまゝ相手にならない。其の肩のあげかたと、にや〳〵した笑顔の癪に觸るつたらない。行くたびにむしやくしやしながら歸つて來る。

春にはなる。街路樹のマロニエやプラタスが日一日と新芽を出して來る。僕は郊外の小高い丘の上にゐたのだが、フランスの新緑には、日

本のそれのやうには黒ずんだ色がまじつてゐない。たゞ薄い青々とした色だけだ。其の間に、梨子だの櫻だののいろんな白や赤の花が點綴する。そして、それを透して、向うの家々の壁や屋根の、オランジュ・ルウジュ色が映える。それは、ほんたうに浮々とした、明るい、少しいやになる位に輕い、いゝ景色だ。が、其の景色も少しも僕の心を浮き立たせない。

それに、よくも〳〵雨が續いて降りやがつた。

もうメエ・デエ近くになつた。僕は殆んどドイツ行きをあきらめた。そして竊かに又パリへ出かけようと決心した。パリのメエ・デエの實況も見たかつた。もう一ケ月ばかり續けてゐるミディネット(裁縫女工)の大罷工も見たかつた。ついでに今まで遠慮してゐたあちこちの集會へも顔を出して見たかつた。いろんな研究材料も集めて見たかつた。又新裝をこらしたパリの街路樹の景色も見たかつた。女の顔も見たかつた。

四月二十八日の夜、僕はリヨンの同志のただ一人だけに暇乞をして、竊かに又パリにはひつた。そしてル・リベルテエル社にコロメルを訪ねて、メエ・デエの當日、セン・ドニの集會で又會はうといふことになつた。

メエ・デエの屋外集會や示威行列は許されてなかつた。勞働者のプログラムの中にもそれはなかつた。共産黨の政治屋共やC・G・T・Uの首領共は、警官隊との衝突を恐れて、出來るだけの事勿れ主義を執つたのだ。されば其の屋外集會も、パリの市内では僅かにC・G・T・U本部の集會一つ位のもので、其他は皆な郊外の勞働者町で催された。イタリイの同志ザッコとヴァンツェティとがアメリカで死刑に處せられようとするのに對する、アメリカ大使館への示威運動ですらも、共産黨はむりやりにそれを遠い郊外へ持つて行つたのだつた。

セン・ドニは、パリの北郊の鐵工町だ。そしてそこの勞働者は最も革命的であり、そこの集會は最も盛大だらうと豫期されてゐた。コロメルはそこでフランス無政府主義同盟を代表して演說する筈だつた。

メエ・デエの朝早く僕は市内の樣子を見に出かけた。が、パリはいつものパリと殆んど何んの變りもなかつた。たゞ多少淋しく思はれたのは、タクシイが一臺も通らなかつた位の事だ。店は皆な開いてゐる。電車も通つてゐた。地下鐵道も通つてゐた。

そして其の電車の中は多少着飾つた勞働者の夫婦者や子供連れで滿員だつた。僕はこれらの勞働者の家族が郊外の集會に出かけるのだとはどうしても考へられなかつた。

『おい、けふはメエ・デエぢやないか、お揃ひで何處へ行くんだい。』

僕は直ぐそばに立つてゐる男に話しなれた勞働者言葉で尋ねた。

『あゝ、そのメエ・デエのお蔭で休みだからねえ、うちぢうで一日郊外へ遊びに行くんさ。』

其の男はあまり綺麗でもない細君の腰のあたりへ左の手を廻しながら呑氣さうに答へた。そして其の右の手にはサンドキッチや葡萄酒のはひつた籠がぶら下つてゐた。

僕は其の男の横つ面を一つなぐつてやりたい程に拳が固まつた。

あちこちの壁にはられてあるC・G・T・Uのメエ・デエのびらは、みなはがれたり破られたりしてゐた。そして其のそばには『メエ・デエに參加するものはドイツのスパイだ』と云ふやうな意味のC・G・T(舊い勞働總同盟)のびらが獨り威張つてゐた。

セン・ドニの勞働會館は、開會の午後三時

頃から、八百人餘りの勞働者ではち切れさうになつてゐた。

演説が始まつた。豫定の辯士が相續いて出た。ルウル占領反對、戰爭反對、大戰當時の政治犯大赦、勞働者の協同戰線、と云ふやうな當日の標語が、いやにをさまり返つた雄辯で長々と説明された。聽衆の拍手は段々減つて來る。大きな口のあくびが見える。ぞろ／＼と出て行くものすらある。

時々聽衆の中から「もういゝ加減に演説をよして外へ出ろ」と云ふ叫び聲が聞える。會の始まる前に『ル・リベルテエル』や『ラ・ルギユ・アナルシスト』(無政府主義評論)などを會場で賣り歩いてゐた連中だ。が、それに應ずる聲も出ない。そして演壇の上からは切りに其の叫び聲を制してゐる。

僕はコロメルの演説がすんだら、一緒に何處かへ行つて、或る打ち合せをする筈だつた。が、そんな打ち合せはもうどうでもいゝやうな氣になつた。そして此の『そとへ出ろ』の叫びを演壇の上から叫びたくなつた。

いよ／＼コロメルの順番になつた。僕はコロメルを呼んで、君のあとでちよつと一こと喋舌りたいんだが、と耳打ちした。コロメルはそれを司會者の多分共産黨の何んとか云ふ男に通じた。司會者は僕のそばへ來て、何を喋舌りたいのかと訊いた。共産黨や無政府黨が共同で何かやる時には、何時も其時の標語に就いてだけ演説する約束のある事は知つてゐた。で、僕はたゞ、日本のメエ・デエに就いて話したい、と答へた。コロメルは僕を日本のセンディカリストだと紹介しただけなので、司會者は僕の名も何んにも知らなかつたのだ。

コロメルの演説の間、僕は草稿をつくつてゐた。そして其の演説の終り頃に演壇の上の辯士席についた。コロメルがルウル占領の張本人である王黨の一首領を暗殺した若い女の無政府主義者ジェルメン・ベルトンの名をあげて何か云つた時、演壇近くにゐた四十ばかりの一人の女工らしいのが涙を流し／＼、泣き聲で『セエサ、セエサ』(さうです、さうです)と叫んでゐた。

僕は司會者に云つた通り、日本のメエ・デエに就いて話した。

『日本のメエ・デエはまだ其の歴史が淺い。それに參加する勞働者の數もまだ少ない。しかし日本の勞働者はメエ・デエの何んたるかはよく知つてゐる。

『日本のメエ・デエは郊外では行はれない。市の中心で行はれる。それもホオルの中ででは ない。雄辯ではない。公園や廣場や街頭での示威運動でだ。

『日本のメエ・デエはお祭り日ではない。(以下四十字削除)』

僕の多少誇張した此の「日本のメエ・デエ」は、僅か二三十分ながら、とにかく無事で終つた。そしてさつきの四十女が時々「セエサ、セエサ」と叫んでゐるのが目にも耳にもはひつた。

そして僕は演壇を下つて、「そとへ出ろ、そとへ出ろ」といふ叫び聲を聞きながら、一人でそとへ出ようとしたところへ、四五人の私服がぞろぞろとやつて來て、「ちよつと來い」と來た。

四

警察は直ぐ近くだ。僕は手とり足とり難なく引つぱつて行かれた。

やがて警察の前で多勢のインタナショナルの歌が聞えた。叫喚の聲が聞えた。警察の中庭に潜んでゐた無數の警官が飛び出した。僕は警察の奥深くへ連れこまれた。

(これはあとで聞いた話だが、會場の中の十

数名の女連が先頭になつて、たゞ日本の同志だと云ふだけで名も何んにも分らない僕を奪ひ返しに來たのださうだ。そして警察の前で大格鬪が始まつて、女連はさんぐ\蹴られたり打たれたりして、其の結果百人ばかりの勞働者が拘引されたのださうだ。警察の中でもなぐつたり蹴つたり、怒鳴りわめいたりする聲が聞えた。」

僕は國籍も名も何んにも云はなかつた。旅券も身元證明書も、そんな書類は何んにも持つてないと云ひはつた。其他の取調べに對しては殆んど何んにも答へなかつた。

が、やがてそこへコロメルがはひつて來た。僕を貰ひに來たのだ。そして僕に旅券通りの名を云ふやうにと勸めて行つた。其のあとへ又司會者の男が二三名の連れと一緒にやつて來た。そしてやはり又同じやうな事を勸めた。要するに何んでもない事なんだから、名さへ云へば歸されると云ふのだ。

僕はちよつとのすきを窺つて、ポケットの中の手帳を司會者の手に握らした。それは一度警官の手に取りあげられたんだが、司會者等のはひつて來たどさくさまぎれに又取り返して置いたのだつた。が、又取調べが始まつた時、一人の私服が其の手帳のないのに氣がついた。そして僕を責めた。僕は知らないと頑ばつた。すると、もう一人の私服が、それぢやきつとさつきのムッシュ何んとか（司會者の名だ）に渡したんだらうから、行つて取つて來ようと云ひだした。

『なあに、もう持つてゐるもんか。誰れかほかの人間に渡しちやつたよ。』

最初の私服がさう云つてあきらめてゐるらしいのに、もう一人の奴は『でも』とか何んとか云つて出て行つた。そしてやがてそれを本當に持つて歸つて來た。最初の私服は大喜びで其のペエジをめくり始めた。

それを一枚々々よく調べて行けば、何處かに僕の僞名が出て來るのだ。少なくとも、何かの際の覺えにと思つて書きつけて置いた、カルト・デイダンテイテの中の出たらめ、たとへば僕の兩親の名や年齡なぞが出て來るのだ。それでなくとも、それからそれへの手づるはいくらでも出て來よう。僕は警察へ引つぱりこまれると直ぐ、水を飲ましてくれと云つてうんと飲んだ上に、更に小便が出ると云つて便所へ行つて、先づ第一にそれを破り棄てようと思つたのだつた。が、其の中にはひつてゐる名刺や紙きれを破つてゐる間に巡査に來られて、それを果すことが出來なかつた。

仕方がない。まだ少し早すぎるやうだが、とにかく皆んなの勸めに任して僞名通りの名を云つて了はう。僕はさうきめて、某國の某と云ふものだと答へた。そして旅券や身元證明書は、ドイツ行きの許可書を貰ふためにリヨンの警察本部にあづけてあると事實ありのまゝを云つた。職業は新聞記者だ。主義はセンディカリズムだ。なぜ日本人だと紹介したと云ふから日本には長くゐて其の事情にも詳しいし、日本の話をするには日本人だと云つた方が效果が多からうと思つたからだと答へた。

それで、リヨンの警察へ問ひ合はせられて其の實際が分り、本當になんでもなくつて放免されるならそれもよし、さうでなくつて此の上何んとかされるならそれももう仕方がないと思つた。

一應取調べは終つた。もう、とうに夜になつてゐた。

一人の私服がちよつと室のそとへ出たかと思ふと、直ぐ四五人の荒くれ男の制服がやつて來て、いきなり僕の兩手を鎖でゆはへつけて、

引つぱり出した。
『いよ〳〵監房かな。』
　と思つてゐると玄關の方へ連れて行かれて、そこには一臺の大きな荷物自動車と十人ばかりの巡査とが待つてゐた。そして、しやにむに僕を其の箱の中に押しあげ、十幾人かの巡査共が續いて乘りあがると直ぐ自動車は走り出した。
　高い屋根のある大きな箱だ。中は眞暗だ。僕は兩手をゆはへられ、兩腕や肩を握られながら、其の片すみにあぐらをかいてゐた。
　折々奴等の吸ふ煙草のあかりで、奴等の顏が見える。どうもヨオロッパ人くさくない面つきの奴が多い。或はアフリカあたりの植民地の蠻民か、それとも植民地の兵隊との合の子か、と思はれるやうな奴等だ。奴等は皆な何處かで喧嘩でもして來たやうな、ひどく昂奮した勢でゐた。そして何んだか譯の分らない言葉でキャッ〳〵と怒鳴つてゐた。
　やがて僕の一方の肩をつかまへてゐた奴が、熊のやうな唸り聲を出し、僕の肩をこづき始めた。僕は形勢不穩と見てとつて眼鏡をはづしてポケットに入れた。すると、僕の直ぐ前にゐた奴が、狐のやうな聲を出しながら、僕の額をげんこで突つつき始めた。そして、
『此の野郎、殺しちまふぞ』とか、
『支那人のくせにしやがつて』とか、
『ドイツ人に買はれやがつたな』とか云ふ。
　多少はつきりしたフランス語のほかに、何んの事とも分らない或は熊のやうな、或は猿のやうな、或は狐のやうな、いろんな唸り聲や鳴き聲が、僕の上に浴せかけられた。
　中には、サックの中からピストルを出して、それで僕の額を突くやら、劍を拔いて頭をなぐる奴まで出て來た。
　しかし、行くさきはつい近くだつたものと見えて、自動車は直ぐにとまつた。そして奴等は半分は前から僕を引きずりおろしながら、そして半分はうしろから僕をなぐるやら蹴るやらして、或る建物の中に押しこんだ。そこは同じセン・ドニの、たゞ南北の區の違ふ、別な警察だつた。そして入口の直ぐ奧の廣い室にはひると、そいつらが一どきに皆んな僕に飛びかゝつて來て、ネクタイやカラや腰のバンドや靴ひもを引きちぎつて、其の又奧の監房の中へ押しこんで了つた。僕は其のまゝぐつすりと寢た。
　翌日は朝早く二人の私服に護送されて、こんどは普通の自動車で警視廳へ行つた。
　一日、又きのふと同じやうな事の取調べだ。
　そして僕が前にパリにゐた時の宿をいつまでも頑ばつて云はなかつたら、四五人で一緒に自動車に乘りつけて、何處へ行くのかと思つたら、一々僕のもとゐた宿へ寄つて、そこの主人やお神に顏をたしかめさせた。皆んなもう知つてゐやがつたんだ。
　そして歸つて來ると、外事課の大きな室のそばに一室を構へてゐる、多分課長だらうと思ふ、警視が、
『君は大杉榮と云ふんだらう。』
　と圖星をさしやがつた。そこまで分つてゐるんなら、もう面倒臭い、何もかも云つて了へときめた。
　其の警視が何かの用でちよつとほかへ行つてゐる間に、さつき自動車で一緒に行つた私服の一人が、
『日本でも、うんとメエ・デエをやつたやうだから安心したまへ。』
と云ひながら、共産黨の日刊新聞リュマニテの、或る小さな一部分を指さして見せた。『數十名の負傷者あり』と云ふやうな文句がちらりと見えた。又、セン・ドニの僕の事に關する一段

あまりの記事も見えた。

それには素より僕の本名は出してゐなかつた。それがどうして分つたのか、よく分らなかつたが、あとで聞くと、日本の大使館から或は僕ぢやあるまいかと云ふので、誰れかやつて來たのださうだ。そして其の前か後か知らないが、內務省の役人一人と兵庫縣の役人一人と都合二人で、僕を探しにパリに來てゐたのださうだ。

其の私服は、まだ若い男だつたが、其の前後にもよくいろ〳〵と親切にしてくれた。そこへ來る途中で買つた煙草がもう無くなつて困つてゐると、フランス出來のいやな煙草ではあるが、自分の持つてゐるのを箱のまゝくれたりもした。又、あとでスペインの國境に向けて追放されようとした時にも、マドリッドよりもバルセロナの方に君等の仲間は多いんだからと云つて、わざ〳〵地圖や時間表などを探して來て、そこへ行く道筋や時間を敎へてくれたりもした。

が、其の男のほかにもう二三人代る代る僕のそばへ來て番をしてゐる私服もゐたが、そいつらの一人は實にいやな奴だつた。

『おい、わざ〳〵リヨンから出て來て演說したんだから、大ぶ貰つたらう。』

と云ふやうな事を、多分戰爭で受けた傷だらうと思ふ口のそばの大きな傷あとを妙に下卑て動かしながら、其の口さきを直ぐ僕の顏近くまで持つて來て尋ねて見たり、又、

『おい、これはドイツで買つたんだらう。』

と云ひながら、僕がシンガポォルで買つて來たしかもイギリスのセフィルド製のマルクのついてゐるナイフを取りあげて、いつまでもさう頑ばつてゐたりした。そしてこれもドイツで買つたのだと云つて、それと同じやうなのを出して見せたりした。それが其の證據だと云ふんだ。そして僕をドイツ政府から金を貰つてフランスの勞働者を煽動しに來たのだと云ふんだ。

其他あんまりうるさい馬鹿な事ばかり云ひやがるんで、お前のやうな奴とは話はご免だ、あつちへ行つてくれ、と云つたら、大きな握拳を僕の顏の前に突きだして、

『此のボッシュ(ドイツ人)の野郎!』

と怒鳴つておどかしやがつた。

『うん、なぐるならなぐつて見ろ。』

僕も少々癪にさはつたんで、さう云つて身構へしたが、さつきの私服がやつて來てそいつをほかの室へ連れだした。

本名をあかしたあとの取調べはごく簡單に濟んだ。そして僕は一人の私服に連れられて、ほかの建物の中の五階か六階かの上の方へ連れて行かれた。そこで裸になつて、身體檢査を受けて、寫眞をとられるのだ。

日本の警視廳では身長や體重を計つて指紋をとる位の事だが、フランスではさすがもつと科學的に、頭蓋の大きさや長さを人類學的に調べた。そして指を延ばして手と前腕との長さまでも計つた。寫眞も、横向きになつて椅子に坐ると其の椅子が自然に廻轉して、正面に向くまでの間の全瞬間を活動式にとる仕掛になつてゐた。

それが濟むと、又別な建物の豫審廷へちよつと行つて、判事のごく簡單な取調のあとで、又もとの建物の下の監房へ連れて行かれた。持物は皆んな取りあげられたが、たゞ煙草とマッチだけは持たしてくれた。

僕は此の二つの事に感心しながら、直ぐベッドの上に横になつて煙草をふかしてゐるうちに、いつの間にか眠つて了つた。

大ぶ疲れてもゐたんだらうが、警察や警視廳の留置場にぶちこまれた時には直ぐ横になつて

寝て了ふのが、僕のながい牢の習慣になつてゐたのだ。

その翌日、即ち三日の朝には、十五六人の仲間？と一緒に、大きな囚人馬車二臺でラ・サンテ監獄に送られた。

ラ・サンテ監獄は、未決監であると共に、又有名な政治監なのだ。僕がまだ途中の船の中にゐた頃に、何處でだつたか忘れたが、フランスからの無線電信で、首領カシエンを始め十幾名の共產黨員がそこにおし籠められた事を知つた。それもまだゐる筈だつた。又、僕がフランスに來てからも、其の以前からゐる幾名かと共に、十數名の無政府主義者がそこにはひつてゐた。

煙草とマッチとはやはり又持つてはひらした。そして日本だと、星形の建物のまん中の謂はゆる六道の辻から蒲團をかつがして行くのだが、こゝではいづれも薄ぎたない寝まきのシャツらしいのと手拭らしいのとを持たして行く。

僕は監獄のひやかしのやうな氣になつて、廣い廊下の右や左をうろ〳〵眺めながら、看守をあとにして歩いて行つた。

僕の室は第十監第二十房と云ふ地並の大きな獨房だつた。二間四方だから、ちやうど、八疊敷だ。それに窓が大きくて明るい。下の幅が五尺位で、それが三尺位上まで其のまゝで進んで、其の上が更に二尺位半圓形に高くなつてゐる。

こんな大きな窓は、僕が今まで見たあちこちのホテルでも、一流の家のほかは滅多になかつた。尤も、惜しい事には、それが漸く目の高さ位の上の方から始まつてはゐたが。

其後運動の時に知つたんだが、こんな窓は地並の室だけで、二階三階四階の室々のは其の半分より少し大きな位だつた。

窓からは直ぐそばに高い塀が見えて、其の上からそとのマロニエの梢が三本ばかりのぞいてゐた。もう白い花が咲いてゐた。

西向きの此の窓の左には壁にくつついて小さな寝臺が置いてあつた。ちやんと毛布を敷いてあつたが、ちよつと腰をかけて見てもスプリングは可なりきいてゐた。毛布も僕が前にゐたベルギルの木賃宿のよりは餘程よかつた。

右側の壁には、やはりそれにくつついて、テエブルが備へつけてあつた。そして其の前には、行儀よく、木の椅子が坐つてゐた。

此のテエブルに向つて左の入口の方の壁には、二つの棚が釣つてあつて、そこに茶碗だの、木のスプウンだの、やはり木のフォクだのが置いてあつた。

そして同じ壁の入口の向うの、寝臺の足の方の隅には、上に水道栓が出てゐて、其の眞下に白い瀬戸物の便所が大きな口を開いてゐた。便所の上で食器も洗へば顔も洗へる仕掛になつてゐるのだ。これだけは少々閉口だなと思つた。

床板はモザイクまがひに、小さな板きれをヂクザクに並べた、ちよつとしやれたものだつた。

成程これなら、アナトル・フランスのクレンクビユが、「床の上で飯を食つたつていゝや」と云つたのも尤もだと思つた。そして、いつかパリで見たクレンクビユの活動寫眞で、此のボテふりの親爺が始めて牢に入れられて、ボカンとした、しかし嬉しさうな顔をしながら、室の中を眺め廻してゐる姿を思ひ出した。

僕は先づ此の室がひどく氣に入つて了つた。

そして一通りの檢分がすむと、さつきスプリングを試して見た寝臺の上にごろりと横になつて、煙草に火をつけた。

暫くすると、看守が半紙二枚位の大きさの紙

を持って來て、それをテエブルの上の壁にはりつけて行つた。

活版刷りだ。『酒保賣品品目及價格』と大きな活字で刷つて、其の下に『消耗品』と『食品』との二項を設けて、いろ〳〵と品物の名や値段を書きつけてある。

インキ、紙、ペン、頭のブラシ、着物のブラシ、鏡、石鹸、スポンジ、ポマド、タオル、卷煙草、葉卷、刻煙草と云ふやうに、普通の人間の日常要るものは大がいならべてある。

又、パン、ビフテキ、ロオストビイフ、ソオセエジ、オムレツ、ハム、サアディン、マカロニ、サラダ、キヤフエ、チヨコレト、バタ、ジヤム、砂糖、鹽、米といふやうに、普通の食品を二十ばかりならべた上に、猶數種の果物と葡萄酒とビイルとまでがはひつてゐる。

そして其の上に猶、毎日酒保から食事をとりたいもののために、一週間の毎晩の獻立表が出てゐる。ちよつとうまさうな御馳走が一品づつならべられて、それでもまだ足りないもののために、夕飯にはもう一品づつの補ひをつけ足してゐる。

尤も、これはすべて未決の人間にだが、しかし既決の囚人にでもほんの少々の制限があるだけの事だ。たとへば、二週間に三回しか肉類の御馳走は與へないとか、葡萄酒やビイルには一日六十サンティリットルを超えてはいけないとか云ふ位のものだ。

僕は早速入口の戸を叩いて、廊下の看守を呼んだ。そしていろんな日用品を註文した上に、食事も毎日とつてくれるやうにと賴んだ。

『それはうちのレストランからかい、それともそとのレストランかい?』

兵隊あがりらしい、面つきやからだは逞しいが、そしていつも葡萄酒の酒臭い息を吐いてゐるが、案外人の好ささうな看守が、餘程注意して聞いてゐないと分らないやうな變ななまりのフランス語で尋ね直した。

僕はうちのよりもそとの方がいゝんだらうと思つて、そとのだと答へた。

すると、やがて普通のレストランのボオイのやうな若い男がやつて來て、メニュの小さな紙きれを見せて、晝飯の註文をしろと云ふ。見ると、十品ばかりいろ〳〵ならべてある。僕は其の中から四品だけ選んで、猶、白葡萄酒のごく上等な奴をと贅澤を云つた。ボオイはかしこまつて引き下つた。

僕はすつかりいゝ氣持になつて了つた。此の分だと、月に四五十圓もあれば、呑氣にかうして暮して行けさうなのだ。

が、其の白葡萄酒をちびり〳〵やりながら、晝飯の四品を平らげて、デザアトのチヨコレトも濟んで、又寢臺の上で、こんどは葉卷を燻らしてゐると、始めてでもないが、とにかくうちの事を思ひ出した。

もう今頃は新聞の電報で僕のつかまつた事は分つてゐるに違ひない。おとな共はたうとうやつたな位にしか思つてもゐまいが、子供は、殊に一番上の女の子の魔子は、皆んなから話されないでも、其の樣子で覺つて心配してゐるに違ひない。

いつかの女房の手紙にも、うちにゐる村木(源次郎)が誰れかへ差入れの本を包んでゐると、そばから『パパには何んにも差入物を送らないの』と竊と云つたとあつた。彼女をだますやうにして幾日もそとへ泊らして置いて、其の間に僕が行方不明になつて了つたもんだから、彼女はてつきり又牢だと思つてゐたのだ。そして、パパは? と誰れかに訊かれても默つて返事をしないか或は何かほかの事を云つてごまかして置いて、時々夜になるとママとだけ竊と何

氣なしのパパの噂をしてゐたさうだ。僕は此の魔子に電報を打たうと思つた。そしてテエブルに向つて、いろ〱簡單な文句を考へては書きつけて見た。が、どうしても安あがりになりさうな電文が出來ない。そして其のいろ〱書きつけたものの中から次ぎのやうな變なものが出來あがつた。

魔子よ、魔子
パパは今
世界に名高い
パリの牢やラ・サンテに。
だが、魔子よ、心配するな
西洋料理の御馳走たべて
チョコレトなめて
葉卷スパ〱ソファの上に。
そして此の
牢やのお蔭で
喜べ、魔子よ
パパは直ぐ歸る。
おみやげどつさり、うんとこしよ
お菓子におべべにキスにキス
踊つて待てよ
待てよ、魔子、魔子。

そして僕はその日一日、室の中をぶら〱しながら此の歌のやうな文句を大きな聲で歌つて暮した。そして妙な事には、別にちつとも悲しい事はなかつたのだが、さうして歌つてゐると涙がぽろ〱と出て來た。聲が慄へて、とめどもなく涙が出て來た。

しかし僕も、はひつた始めから出る時まで、こんな御馳走ばかり食べてゐたのではない。

ちやうどはひる前の日に、「東京日日」の記者から原稿料の幾分かを貰つてゐたものだから、二三ケ月はどんなに贅澤をしたところで大丈夫だと思つてゐると、四五日して看守がもう僕のあづけ金がないと云つて來た。そんな筈はない、と云ひはつて猶調べさせて見ると、はひる時に持つてゐた金の大部分は裁判所で押へて了つたのだと分つた。やはりドイツからでも貰つた金だと見たのだらう。

仕方がない。それからは當分牢やのたべ物でがまんした。

朝八時頃になると、子供の頭位の大きさの黒パンを一つ、入口の食器口から入れてくれる。黒パンである上に、更に眞つくろに焦げつかして、まだ少し暖かみがある。が、味はない、ぼそぼそもする。僕は二口か三口でよした。

前にベルギルの貧民窟にゐた時、自炊をして、よく近所のパン屋へパンを買ひに行つたのだが、黒パンはどこのパン屋にもつい見かけた事がなかつた。パリではそんなパンを食ふ人間はまづないのだ。

それから一時間か二時間すると、大きな聲で「スウプ！ スウプ！」と怒鳴りながら、ガラ〱車を押して、その謂はゆるスウプをくばつて歩く。アルミのどんぶりの中に、ちよつと鹽あぢのついた薄い色の湯が一ぱいはひつてゐて、上には脂がほんの少々ながらきら〱浮いてる、下には人參の切れつぱしやキャベツの腐つたやうな筋が二つ三つ沈んでゐる。これも始めの日にはちよつと甜めて見たきりで止した。

更に午後の三時から四時頃になると、やはり同じやうなどんぶりに、こんどは豆の煮たのを持つて來た。そして其の次ぎの日にはジャガ芋の煮たのを持つて來た。僕は豆も芋も好きなので、これだけは始めから食つた。そして更に其

の次ぎの日には、米のお粥の中に牛肉の可なり大きな片のはひつてゐるのを持つて來た。が、其の肉はとても堅くて、噛んだあとは吐き出さずにはゐられなかつた。

此のお粥と肉は一週に二度ついた。

これが牢やの御馳走の全部なのだ。最初の間はそんな風でろくに食べずにゐたが、しかしそれでは腹がへつて仕方がないので、辛抱しいしいだん／＼に食つて行つた。そして終ひには一日分の筈の黑パンも來ると直ぐに皆な平らげて了ひ、二度のどんぶりも綺麗に甜めずつて了つたが、やはりまだそれだけでは腹がへつて仕方がなかつた。そしてお湯一つくれないので、つい幾度となく水道の水をがぶり／＼とやつてゐた。

五

はひつた翌日、トレスと云ふ辯護士から手紙が來た。共產黨のちよつとした名士で、いろんな革命派の人々の辯護をいつも引受けてゐる辯護士だ。僕も名だけは知つてゐた。コロメルが頼んだのだ。

『豫審判事へ僕が君の辯護を引受けた事を知らしてくれ。そして若し豫審廷へ不意に呼ばれるやうな事があつたら、僕が立合の上でなければ一切訊問に應ずる事は出來ないと云へ。』

此の手紙は封じたまゝで僕の手にはひつた。僕はそれも面白いと思つたが、それよりも猶此の『立合ひの上でなければ』と云ふのが面白いと思つた。

僕は直ぐ判事と辯護士とに手紙を書いた。判事の方のは開き封のまゝだが、辯護士への分はやはり封じて出せとの事だつた。

其後トレスが面會に來たが、辯護士との面會は監視の役人なしだつた。お互ひに何を話さうと、何を手渡ししようと、勝手なのだ。

これなら、金さへあれば、いくらでも、僞證も出來、又證據の湮滅も出來さうだ。泥棒が其の盜んだ金を辯護士に拂つて、それで無罪になつて、又新たに辯護士に拂ふための新しい金まうけの事にとりかゝるやうな事が出來さうだ。

差入れの食事もとれず、煙草も買へず、讀む本もなし、となつてからは、毎日たゞベッドの上で寢てくらした。よくもこんなに寢られるものだと思つた位によく寢た。

眞つぴるま中寢床の中へなぞはひつてゐては惡いんぢやないかしらとも思つたが、叱られたら叱られたで其時の事と思つて、剛々しく寢てゐた。

が、日本の牢やとは違つて、看守は滅多にのぞきに來なかつた。朝起きると直ぐ、それも何んの合圖も號令もないのだが、看守が戸をあけて、中のごみを掃き出させる。それが一廻り濟むと、運動場へ連れて出た。それからは前に云つた三度の食事にたべ物を窓口まで持つて來るほかには、殆んど誰れもやつて來ない。日本のやうには、朝晩の謂はゆる點檢もない。たゞ、夕方一度、晝の看守と交代になる夜の看守がちよつと室の中をのぞきに來る位のものだ。

看守されてゐるんだと云ふやうな氣持はちつともしない。本當に一人きりの、何んの邪魔するものもない、靜かな生活だ。

しかし、さう／＼寢てばかりゐれるものでもない。時々は起きて、室の中をぶら／＼もする。其時の僕の呑氣な空想を助けたものは、四方の壁のあちこちに書き散らしてある落書だつた。大がいは皆な同じ形式のもので、

René de Montmartre　（モンマルトルのルネ）

tombé pour vol　（竊盜のために捕まる）

1916　（一九一六年）

とあるやうなのが普通で、其のルネと云ふ名

がマルセルとなつたり、モオリスとなつたりして、そして其のモンマルトルと云ふパリの地名は多くはそれか或はモンハルナスだつた。そこは、ちやうど本所とか淺草とか云ふやうに、さういふ種類の人間の巣窟なのだらう。

又、其の名前の下に、

det l'Italien (通り名、イタリイ人)

dit Bonjours aux amis (通り名、友達によろしく)

と云ふやうなあだ名がついてゐた。此のあとのは殺人犯だつたが、まだ同じ殺人犯の男で、『鐵腕』と云ふあだ名があつたり、其他いろんなのがあつたが、今はもう忘れて了つた。

其他にもまだ、

Encore 255 jours à faire. (まだ二百五十五日だんまりでゐなくちやならない)

Vive décembre 1923. (一九二三年十二月萬歳)

と云つたやうに、放免の日を待ち數へたのや、又、

Ah! 7! Perdu! (ああ、七だ、おしまひだ―)

と書いて、其のそばに四の目の出た骰子と三の目の出た骰子と二つ描いてあるのもあつた。何か不吉の數なのだらう。

それから、これは日本なぞではちよつと見られないものだらうが、

Riri de Burbes (ベルブのリリ)

Fat comme pisse (何んとかのやうなやくざ者の)

Aime sa femme (其の妻)

dit Jeanne. (ジャンを愛する)

と云ふのや、又、

Emile (エミル)

Adore sa femme (命にかけて)

Pour la Vie (其の妻を戀ひあこがれる)

と云ふ熱心なのもあつた。

Ce qui mange doit produire (食ふものは生產せざるべからず)

Vive le soviet. (ソヸエト萬歳)

とあつて、其の下にわざ〳〵ボルシェヰキと書いてあるのもあつた。

僕も一つ面白半分に、

E. Osugi. (エイ・オスギ)

Anarchiste Japonais (日本無政府主義者)

Arrêté à S. Denis (セン・ドニにて捕はる)

Le 1 Mai 1923 (一九二三年五月一日)

と、ペン先きで深く壁にほりこんで、其の中へインキをつめてやつた。

豫審へは一度呼び出された。

まだ辯護士の來ない間に訊問を始めようとしたので、早速例の手で兩肩をあげて見せた。判事はあわてて書記に命じて辯護士を探しにやつた。

取調べは實に簡單なものだつた。と云ふよりも寧ろ、大部分は判事と辯護士との懇談のやうなものだつた。

警視廳からの罪名書きには、暴力で警官に抵抗したと云ふ官吏抗拒罪や、秩序紊亂罪や、旅券規則違犯罪や、浮浪罪などと云ふいろんな出たらめが並べてあつたが、豫審判事は其の中の旅券規則違犯に就いての事だけしか尋ねなかつた。さうする方が一番面倒もなかつたのだらう。

そして何處からどう聞いて來たか、あなたのお父さんは陸軍大佐だつたさうですね、と云つたやうな事を大ぶ丁寧に訊いた。實は少佐なのだが、折角そんなに大佐を有難がつてゐるものなら、さう思はして置けと思つて、僕もさうですとすまして答へた。其他にも、もと相當な社會主義者で東洋方面の社會運動に詳しい、そして今は保守黨のレクシエルと云ふ日刊新聞の主筆

になつてゐる何んとかいふ男が、僕の事を大ぶえらい學者ででもあるかのやうに其の新聞で書き立てたさうなので、判事も大ぶ敬意を拂つてゐたのださうだ。

最初辯護士の話では、裁判所側はリヨンの方や其他いろんな方面を取調べなければならんので、公判まではまだ一二ヶ月かゝるだらうと云ふ事だつたが、豫審の日に辯護士が保釋を請求して、いろ〳〵判事と懇談の末、保釋は却下される事となつて、其の代り直ぐ公判を開く事に話がついた。

公判は、豫審の調べから一週間目の、五月二十三日に開かれた。

十四五人の被告がボックスの中に待つてゐる間に、傍聽人がぞろ〳〵と詰めかけて、やがてリンの響きと共に、よぼ〳〵のお爺さん判事が三人と其のあとへ檢事とがはひつて來た。

裁判官等のうしろの壁には、正義の女神の立像が、白く浮きぼりに立つてゐた。

裁判長は直ぐそばにゐる僕等にすらもよく聞きとれないやうな、齒なしのせゐか、たゞ口をもぐもぐするやうな口調で直ぐ裁判を始めた。

『お前はいつ幾日どことかで何んとかしたな。……よろしい。それでは……』

とちよつと檢事の方を向いて、其のうなづくのを見ると、こんどは兩方の判事に何か一こと二こと云つて、

『それでは、禁錮幾ケ月、罰金いくら。其の次ぎは何のたれ……』

と云ふやうな調子で、一瀉千里の勢で即決して行く。

僕の番は六七人目に來たが、やはりそれと同じ事だつた。

『お前はいつ幾日、にせの旅券とにせの名前でフランスにはひつたに相違ないな。』

『さうです。』

『それに就いて別に云ふ事はないか。』

『何んにもありません。』

『それぢや其の事實を全部認めるんだな。』

『さうです。』

それで問答はおしまひだ。檢事は何も云ふ事がないと見えて、默つて裁判長にうなづいた。そして辯護士が二十分ばかり其のお得意の雄辯をふるつたあとで、

『よろしい。禁錮三週間。罰金いくら〳〵。次ぎは何んの誰れ……』

裁判長がさう判決を云ひ渡すと、僕等のうしろに立つてゐた巡査の一人が、さあ行かうと云つて一緒にそとへ連れ出た。

フランスでは、未決拘留の日數は三日間をのぞいたあとをすべて通算する。で、僕は其の日に滿期となつて、翌日は放免の譯だ。

あつけのない事おびたゞしい。

裁判所の下の假監では、此の日同じ法廷で裁判される四五人の男と一緒にゐた。

裁判の始まるのを待つ間、皆んながヤ〳〵と自分の事件に就いての話をしあつてゐた。實はかう〳〵なんだが、そこをかう云つてうまく逃げてやらうと思ふんだとか、いや、實につまらん目にあひましてな、かう〳〵云ふつもりのがついこんな事になつて了ひましてとか、何あに、そんな事なら何んでもない、せい〳〵三月か四月だとか、話は日本の裁判所の假監のとちつとも違ひはない。そして其の大がいは、何百フランとか何千フランとかをどうとかしたと云ふ、金の話ばかりだ。それも、ちよつとした詐僞だとか、費ひこみだとかの、ちつとも面白くない話ばかりだ。

で、僕は默つて、薄暗い室の中の壁の落書を、一人で調べてゐた。

A bas Pavocat officiel!（くたばつちまへ官選辯護士の野郎）と云ふのが二つ三つある。其他は牢やの監房で見たのと同じやうな事ばかりだ。女房の誰れとかを戀するとか、生命にかけてブルタニユ女の誰れとかを崇めるとか云ふのも、幾つも書いてあつたが、其の女房かブルタニユ女かの肖像をなか／＼うまく描いてゐるのもあつた。變な猥褻な繪もあつた。

　そんなのを一々詳細に讀んで行く間に、

『おい、君は何んだ、泥棒か？』

と、僕の肩を叩く奴がある。さつきから切りに、皆んなに、君は幾か月、君は幾か月と刑の宣告をしてゐる、前科幾犯面の奴だ。

『あ、まあそんなものだね。』

といゝ加減にあしらつてやると、

『さうか、何を盜んだんだ？　君は安南人か？』

と又訊く。さうなつて來るとうるさいから、僕も、

『いや、僕は日本人だ。』

と、こんどは本當の事を云ふ。

『日本人で泥棒？　それは珍しいな。いつフランスへ來たんだい？』

　前科幾犯先生は益々しつこく訊いて來る。僕は此の上うるさくなつてはと思つて、

『まだ來たばかりさ。そしてメエ・デエにちよつと演說をして捕まつたんさ。』

と、本當の又本當の事を云つた。

『さうか、ぢや政治犯だね。』

　先生はさう云つたきりで、又向うをむいてほかの先生等と何か話しはじめた。

　すると、今まで皆んなの中にははひつてゐたが、默つてほかのもののおしやべりを聞いてゐた、一方の手の少し變な四十ばかりの男が僕のそばへやつて來た。

『あなたもメエ・デエでやられたんですか？　僕もやはりさうで、コンバで捕まつたんですけれど、あなたはどこででした？』

　其の男は見すぼらしい勞働者風をしてゐたが、言葉は丁寧だつた。コンバと云へばC・G・T・U本部の直ぐそばの廣場だ。そしてそこにル・リベルテエルの連中の無政府主義者がうんと集まつてゐた筈だ。で、僕はこれはいゝ仲間を見つけたと思つて、そこの樣子を訊かうと思つた。

『僕はセン・ドニでやられたんだが、コンバの方はどうでした？』

『それや、隨分盛んでしたよ。演說なんぞはいい加減にして、直ぐ僕等が先登になつてそとへ駈けだしましてね。電車を二三臺ぶち毀して、たうとう其の交通をとめて了ひましたよ。』

　此の男もやはり無政府主義者で、もとは機械工だつたんだが戰爭で手を負傷して、今は何やかやの使ひ歩きをして食つてゐるのだつた。そして、去年もやはりコンバで大ぶあばれたんださうだが、其時には一人も捕まらずに濟んで、彼れも無事に家に歸つた。が、ことしは警察がばかに嚴重で、あばれかたは去年と大差はなかつたのだが、百人近く捕まつたのださうだ。

『ことしは警察も大ぶ亂暴だつたが、裁判所も嚴重にやるつて、辯護士が云つてましたよ。あなたの方は、それぢや、追放だけで濟むんでせうが、僕はまあ半年ぐらゐ食ひさうですね。』

　こんな話をしてゐる間に、皆んなは法廷に引きだされたのであつた。そして僕が假監へ歸つて來ると、間もなく其の男も歸つて來た。

『あなたも直ぐ出れますね。僕も今晚出ますよ。やつぱり六ケ月食ふには食つたんですが。でも、此の名譽のてんぼのお蔭で、辯護士が切りにそれを力說しましてね、お蔭で二ケ年間の執行猶豫になりましたよ。』

　彼れは嬉しさうに、しかし皮肉に笑ひながら

はひつて來て、僕の手を握つた。そして、間もなく、又皆んなは假監から出されて、馬車で監獄へ送られた。

六

翌二十四日の朝、巡査に送られて裁判所の留置場へ行つた。

『グラン・サロン(大客室)へ！』

と云はれたので、どんなサロンかと思つて巡査について行くと、前にゐた留置場のそばの、やりそこと同じやうな鐵の扉をがちや／＼と開けて押しこまれた。

なるほど大廣間には違ひない。椅子をならべて演說會場にしても、五百や六百の人間はらくにはひれさうな廣さだ。昔は、此の裁判所は、そのそばの警視廳などと一緒に、何んとか王の宮殿だつたのださうだから、其頃の何かの大廣間なのだらう。床はたゝきになつてゐるが、そこには大理石の大きな圓柱が三四本立つてゐて、天井なんぞも隨分立派なものだ。はひつて見ると、あつちにもこつちにも、五六人乃至七八人づつかたまつて、何かおしやべりしてゐる。僕は其の一團の、少し氣のきいた風をした若い連中のところへ近づいて行つた。

皆んなはフランス語で話してゐるが、其の調子にどこか外國人らしいところがある。顏もフランス人とは少し違ふ。

『君も追放ですね？』

其の中の脊の高いイタリイ人らしいのが、僕の顏を見ると直ぐ問ひかけた。

『あゝ、さうですか、僕等も皆んな追放なんです。まあ、一ぷくどうです。』

そして、其の男は煙草のケエスを出しながら、かう云つた。

いろ／＼話はして見たが、別にどうと云ふ惡い事はした樣子もない。が、とにかくちよつと牢にはひつて、今追放されるのだと云ふんだから、いづれ旅劵か身元證明書の上の何かの不備からなのだらう。そして其の色男らしい風采や處作から推すと、どうも『マクロ』らしく思はれた。マクロと云ふのは、淫賣に食はして貰つてゐる男の事だ。

が、其の男等は誰れ一人として、イタリイやスペインやホルトガルなぞの、自分の國へ歸らうと云ふものはない。又、其のほかのどこかの國へ行かうと云ふものもない。皆な、このまゝフランスに、しかもパリに、とゞまつてゐるつもりらしい。

『追放になつても、國境から出なくつていゝんですか？』

僕は、皆んなあんまり呑氣至極に構へてゐるので、不思議に思つて尋ねた。

『えゝ、追放になつて、出て行くやうな奴はまあありませんね。今から上へ呼ばれて行つて追放命令を貰つて、それでもういゝからつて放免されるんでせう。あとは、何處へ行かうと、何處にゐようと、勝手でさあね。』

其の男は、彼等を不審がつてゐる僕を却つて不審がるやうにして、答へた。そして彼等の中の二人までも、これで二度目の追放なのだと附け加へて云つた。

僕は又、追放と云へば、いつかロシア人のコズロフの時に見たやうに、一週間とか幾日とかの日限を切つて、其の間多少の尾行をつけて嚴重に警戒するのだらうと思つてゐた。ところが、何んのこつた、たゞ一枚の書きつけを貰つて、さあ勝手に出て行け、と突つぱなされるのなら、實際幾度食つたつて何んの事もないと思つて安心してゐた。

やがて其の男等は呼ばれて、上へ行つた。そして順々に、今から何處とかの監獄に送られのだと云ふいろんな奴が呼ばれて行つたが、僕は

最後まで殘された。

　遂に僕の番が來た。が、僕は上へは連れて行かれずに、最初來た時に持物を調べられてそれを預けて來た、入口の小さな室に入れられた。そしてそこには、さつきの外國人どもが、もう其の所持品を貰つて出かけようとしてゐるところだつた。

『上の方は濟みましたか？』

　色男のイタリイ人が尋ねた。

『いや、まだです。』

『それぢや、君は追放ぢやないんです。直ぐ自由になるんですよ。』

　色男等はさう云つて出て行つた。僕は、それを信ずる事も出來なかつたが、しかし僕だけかうして殘されるのはどうした譯だらうかと、こんどは少々不安になつた。

　そして果して僕は其儘放免されずに、所持品を受取ると直ぐ、又一人の巡査に連れられて警視廳へ行つた。そして暫く、又始めの時と同じやうな身體檢査や何かでひまどつて、晝頃になつて漸く官房主事のところで内務大臣からの即刻追放の命令を受けた。

　本當の即刻なのだ。今から直ぐ、尾行を一人連れて、出て行けと云ふんだ。

『とにかく直ぐフランスの國境から出ればいゝのだが、都合で東の方の國境へは出る事を許さない。すると西の方だが、それだとスペインへ行くほかない。それでどうだ？』

　どうだもへちまもあるものぢやない。行くほかはない方へ行くより仕方がないのだ。が、スペインなら結構だ。ぜひ一度は行きたいと思つてゐた國だ。

『結構です。しかし、スペインへ行くにしても、勿論日本の官憲の旅行免狀が要るんでせう。それはどうするんです？』

『それはこつちで大使館とかけ合つて貰つてやる。それぢや向うで待つてゐるがいゝ。』

　と云ふ事になつて、僕は前にもお馴染の外事課の廣い室へ連れて行かれた。

　百人近くの私服共がそれ〴〵机に向つて、皆な同じやうな紙きれを袋から出したり入れたりして調べてゐる。其の袋の表には何んの誰れと云ふ人の名前が書いてある。きつとそれが皆んな日本で云へば要視察人とか要注意人とか云ふ危險人物なのだ。一つの袋の中には幾枚もの紙きれが、どうかすると十枚も二十枚もの紙きれが、はひつてゐるやうだ。

　皆んなは、其の室の眞ん中に腰かけさせられてゐる僕を時々じろり〳〵と見つめながら、其の紙きれを調べてゐる。やはり日本のさうした奴等と同じやうに、ろくな目つきの奴は一人もゐない。皆なラ・サンテの監獄で見た泥棒や詐欺と同じやうな、或はそれ以上の面構へをしてゐる。

　が、もう正午だ。皆なぞろ〳〵と晝飯を食ひに出かけ始める。僕は直ぐそばにゐた男に、俺れの晝飯はどうしてくれるんだ、と尋ねた。其の男は主任らしい男のそばへ立つて行つた。そして歸つて來て、何んでも欲しいものを云へ、とつて來てやると答へた。それぢや、と云つて、僕は例の贅澤をならべ立てて、それから極上の白葡萄酒を一本と註文した。

　四五人は代る代るに殘つてゐたが、二時頃には皆んな又歸つて仕事を始めた。

　大使館へ行つた使ひの私服はまだ歸つて來ない。僕は幾度も官房主事のところへ使ひをやつたが一向要領を得ない。

　待ちくたびれもし、たいくつでもあり、始終ぎよろり〳〵といろんな奴等に見つめられてゐるも癪にさはるので、僕はろくに飲めもしない

葡萄酒を絶えずちびり〳〵とラッパでやつてゐた。

四時頃になつて、漸く官房主事からの迎ひが來た。そして其の室へ行つて少し話してゐるところへ、せいの高い大男の、長い少しぼんやりした顔の日本人が一人、先きに大使館へ使ひに行つた男と一緒にはひつて來た。嘗て名だけは聞いてゐた大使館一等書記官の杉村何んとか太郎君だ。

杉村君はちよつと官房主事と挨拶したあとで、僕と話したいのだが許して貰へようかと訊ねた。主事は僕等のために別室の戸を開けた。

『今こゝからの使ひで始めて追放と云ふ事を知つて駈けつけて來たんですが、僕も出來るだけはあなたの便宜のために、こゝと交渉して見ようと思ふんです。』

杉村君はかう云つて、何んとか取りなして見たいと云ふ事を詳しく話した。大使館は日本の政府から僕に一切の旅券を出す事を禁ぜられたのだ。從つてスペイン行きの旅券も出す事は出來ない。で、僕に就いては大使館で責任を持つ事にして、もう數ケ月間追放を延ばして貰はうと云ふのだ。

杉村君は其の事をすこぶる鄭重な言葉で主事に嘆願するやうに云つた。が、主事は一旦出た命令はどうしても取消す事が出來ないと頑ばつた。

で、杉村君はもう一度大使館へ行つて相談して來ると云つて歸つた。

僕は主事に、大使館で旅券をくれなければ、よし僕が今フランスの國境を出たところで、スペインの官憲が其の國内に僕を入れるかどうかと尋ねた。

『さあ、それはよその國の事だから、僕には分らない。』

『それぢや、若しスペインで僕を入れなければ、僕はどうなるんだらう？』

『僕の知つてゐるのはたゞ、君がそれで又フランスの國境内にはひつて來れば、直ぐつかまへて牢に入れると云ふ事だけだね。』

僕は主事の此の返事を聞いて、昔、語學校時代に、フランス人の教師が話して聞かしたちよつと面白い話を思ひだした。それは、泥棒が國境近くでつかまへられさうになると、向うの國境内へ逃げて行つて、そこから赤んべいをしたり舌をだしたりして、どうともする事の出來ない巡査を地團太ふましてからかふと云ふのだ。

そして僕は、

『さうなると僕は、スペインの牢にはひるか、フランスの牢にはひるか、それともスペインとフランスとの國境にまたがつてゐて、スペインの巡査が來たら其の方の足を引つこまし、フランスの巡査が來たら其の方の足を引つこまして、幾日でもさうしたまゝ立ち續けるやうな事になるんだね。』

と笑つてやつた。が、主事は、

『まあそんなものさね。』

と、きまじめに濟ましてゐた。

僕は又二三時間、もとの室で待たされた。そして果して杉村君が又やつて來たのかどうか分らなかつたが、多分そのとりなしのせゐだらうと思ふ、又主事室へ呼び出されて、これから直ぐマルセイユへ出發しろと命ぜられた。

『誰れにも會ふ事は出來ない。直ぐ私服と一緒に停車場へ行つて、第一の汽車で出發するのだ。』

ガアル・ド・リヨンの停車場へ自動車で着いたのは、ちやうど八時幾分かの急行の出る少し前だつた。

私服は汽車の出るのを見送つて引返したやう

だつた。
　マルセイユの警察へは僕の出發と到着との時刻を電報してあるからと云ふのと、生じつか立寄つて又迷惑をかけてもと思つて、リヨンには寄らずに、翌朝マルセイユに着いた。が、マルセイユでは、別に制服も私服も迎ひに出てゐるやうな樣子はなかつた。
　僕は宿をとると直ぐ、領事館へ行つた。領事の某君はまだ新任早々で、一週間ばかり前までは杉村君の下に働いてゐたのだつた。
　某君はマルセイユの警察へ行つて、第一の船で出帆すると云ふ命令の其の「第一」と云ふのを日本船のと念を押して來、又郵船の支店へ行つて旅券なしで切符を買へる談判をして來て、ちやうどそれから一週間目に出る箱根丸で日本へ歸る都合をつけてくれた。
　僕は其の間にうちへも電報を打ち、パリやリヨンの友人等にも電報や手紙を出して、其の日までに立てる準備をした。そして僕が何んの心置きもなく安心して其の準備に取りかゝれたのは、僕の友人や同志が誰れ一人、僕のまき添へとしての迷惑を大して受けてゐなかつた事だ。
　即刻追放と云ふんで、パリではあんなに嚴重だつたのだから、こゝでも多分警戒がうるさからうと思つてゐた。そして、其のうるささを多少でも避けるつもりで、殊に選んで、一番いゝホテルに泊つた。
　が、一日ゐ、二日ゐして、いろ〳〵と注意して見てゐるのだが、何んの警戒もあるらしい樣子がない。ホテルでも取扱ひに何んの變りもない。そとへぶら〳〵と出ても、別に誰れもつけて來る樣子はなく、歸つても何處へ行つて來たとも誰れも訊ねない。
　領事がそれとなく警察で訊いて見たのださうだが、實際停車場へは誰れも僕を迎ひには出なかつたとの事だ。尤も、ちやうど其の汽車の中で大きな泥棒があつて、其のために大ぶごたごたしてはゐたさうだが、それが僕を迎ひに出なかつた理由にならうとも思はれない。そして、到着早々僕は警察に出頭しなければならない筈なのださうだが、それもわざ〳〵領事が行つていろ〳〵と話して來たのだから、此の上出頭するにも及ぶまいと云ふ領事の話だつた。
　かうなると、僕は裁判所下のグラン・サロンでの、色男等の話を思ひださない譯には行かなかつた。特別に大ぶ嚴重だつた僕の追放が、人なみのいゝ加減なものになつたのだ。さう云へばいつかル・リベルテエル社へ來た、ハンガリイの同志なども、追放になつたとは云ふものの、僕が其の近所にゐた四五日はまだ呑氣にぶらぶらしてゐた。又、辯護士も、判決のあつたあとで、
「それぢや又……」とか何んとか呑氣な事を云つて、出て行つて了つた。
　これが普通なのだとなれば、何も「即刻」なぞと云ふ言葉を眞に受けて、あわてて出て行く事もない。一旦は、もう歸されたつていゝ、とも思ひ、又さう思つたので演說なんぞをやつても見たのだが、かうなると又未練が出て來る。
「うちからか、パリからか、どつちかから金の來次第、一つ逃げだしてやらうか。そしてこんどは、全くの不合法で、勝手に飛び廻つてやらうか。パリへも歸らう。ドイツへも行かう。イタリイへも行かう。其他、行けるだけ行つて見よう。」
　僕はかう考へて、一晩ゆつくりと其の計畫に耽つた。と云つても、別に面倒な事はない。嘗てもそれを考へて、其の方法をいろ〳〵ときめた事までもあるのだ。要するに、少々の金さへあれば、らくに行ける事なのだ。
　僕は殆んどさうきめて、それからは毎日、半日

か一日がかりのちよつとした遠出を試みて、警戒のあるなしを更にたしかめようとした。

警戒はたしかにない。そして僕はマルセイユの或る同志を訪ねて、竊と其の相談をした。方法はたしかにある。

これなら、金のつき次第だと思つてゐるところへ、僕がまだ捕まらない前にうちから寄越した手紙が、或る方法で僕の手にはひつた。それで見ると、どうしても急に歸らなければならないやうな、いろんな事情だ。で、仕方がない、音なしく歸らう、と殘念ながら又きめ直した。

いよ〳〵船の出る前々日、次ぎのやうな借用證一枚に代へて、横濱までの二等切符を一枚、領事から受取つた。

借用證

一金五千何法也

右正に借用候也

月　日　　大杉榮

菅領事殿

そして其の翌日、うちから、三等の切符代とすれ〳〵ぐらゐの金が來た。で、それで大急ぎで女房や子供等への土産物を買つて、船に乗りこんだ。

いよ〳〵船に乗りこむ時には、ちよつと警察へ挨拶に行く方がよからう、と云ふ領事の話だつたので、先づ差支へのない荷物だけを持つて夕方警察へ出かけた。船はあしたの朝出るのだから、それまでにあとの荷物は友人に持つて來て貰ふ事にした。そしてとにかく警察へ行つて、それから船へちよつと行つて室だの寢臺だのの番號をたしかめて、更に又引歸してもう一晩友人等とお別れの遊びをしよう、と云ふつもりだつた。

警察では、パリの警視廳から來た長文の電報を前に置いて、いろ〳〵と取調べのあつた末に、私服を一人つけて、船へ一緒にやらした。

僕は、船の中でのいろんな事がきまると、友人等と一緒に飯を食ふ約束のうちへ行かうと思つて、船から降りようとした。すると、さつき僕について來た私服が、ほかに三人ばかりの私服と一緒に昇降口の梯子のところに突つ立つてゐて、通さない。

『もう、船に乗つた以上は、降りる事は出來ない。國境から出て了つたんだ。降りれば、再び又國境にはひつたものとして、六ケ月の禁錮に處する。』

そんな馬鹿な事があるもんか、それならさうと何故さつきさう云はないんだ、といろ〳〵に抗辯して見たが、要するに何んとも仕方がない。

僕は船のボオイに電話をかけさせて、友人等に其の事を知らせて、そして自分の室の中に寢ころんだ。

船は六月三日の朝早く碇をあげた。

（一九二三年八月十日、東京にて）

外遊雜話

一

いつも旅をする時には、行きは大名歸りは乞食、と云ふのがおきまりなのだが、こんどは例外でそのあべこべに行つた。歸りにはマルセイユの領事館で二等の切符を買つてもらつた。それもうまく行けばほんたうのお大名の一等のをもらへる筈だつたが、パリの大使館で誰れかが尤も千萬の三等説を持ち出したので、その間をとつて二等ときまつたのださうだが、行きは、ちやんと身分相應ところ相應の三等で行

つた。

尤もフランスの船の三等と云ふのは、ちやうど郵船の特別三等みたいなもので、二人部屋と四人部屋とあるのだが、僕はその二人部屋にはひつた。相客は支那の若い學生だつた。

支那の學生は、そのほかに、女二人と男が八人ばかりゐた。そしてそれらの人達と僕とが食堂では同じ一つのテエブルについた。皆んな少々英語を話す。日本語も、一人二人はちよつと話せた。が、どうしたものか、僕はそれらの人達とはあまり仲よしになれなかつた。そして僕は、同じ三等のそれらの支那人や、其他の人々とは離れて、大がい四等のデッキ・パセンジアの仲間にはひつてゐた。

此の四等には、最初、上海から乘つた支那の勞働者二三十名と、フランスの水兵十名ばかりとのほかに、十五六名のロシア人がゐた。そして僕が早速仲間になつたのは、このフランスの水兵の中の一人と、ロシア人の中の若い學生十人ばかりとだつた。

フランスの水兵は揚子江上りの砲艦に乘つてゐたのだが、滿期になつて國へ歸るのだつた。始終一緒になつて、何かの鼻歌を歌ひながら、デッキの上を散歩してゐた。其の中に一人、いつも皆んなとは別になつて、どこかの隅に坐つて本を讀んでゐる、まだごく若い利口さうな顔つきをした男がゐた。

僕は先づその男と直ぐ知りあひになつた。フランス語の會話のけいこにと思つて、ボンジュル・ムッシュ(こんにちは)とか何んとか話しかけたのがもとだつた。

僕は年は二十八、社會學專攻の一學生、勞働問題研究のためのフランス留學、と云ふ觸れこみだつた。從つて、その水兵との話は、お互ひの身分や行くさきの問答のあとで、直ぐフランスの勞働運動の事にはひつた。

彼れ自身が何等かの運動に加はつてゐたのでもなし、又特別に研究したと云ふ程でもないので、其の話から得るところと云つては何もなかつた。が、この男の、兵役や戰爭に對する峻烈な攻撃は、その身分から隨分面白く聞いた。

『ヨオロッパの大戰だつて、もう半年か一年續いて見たまへ。フランスなんぞは直ぐ滅茶苦茶につぶれて了つたんだ。(以下原本の五行削除)』

二

(三十一字削除)この水兵の話や、又その後フランスへ行つてからのいろんな人達の話で、その隨分範圍の廣かつた事や大げさだつた事に驚いた。

そのために殺されたものも可なり多い。又牢にはひつて今まだそこにゐるものも大ぶある。そして又、今でもまだ逃げ廻つて、日蔭者でゐるものも少なくはない。

そして戰爭中のこれらの謂はゆる犯罪人や、又その後の反動政治の犠牲者等のための大赦運動が、前々からも又僕が行つてゐる間にも、盛んに行はれてゐた。屢々示威運動もあつた。メエ・デエの要求の中にもそれが大きな一個條になつてゐた。

政府は幾度か大赦の約束をした。が、それはいつもたゞ約束だけの事だつた。

水兵のジャン君が話した、謂はゆる Mutins de la Mer Noire(黑海の謀叛人)の首領、共産黨の何んとかと云ふ男は、まだ牢にはひつてゐたが、僕がフランスを出る數日前に、パリ近郊の下院代議士補缺選擧の候補者として未曾有の投票數で當選した。反對諸黨は合同して一人の候補者を出す筈であつたのだが、この謀叛人側の前景氣がばかにいゝのに恐れをなして全くひつこんで了つたので、本當の一人天下で當選したのだ。そしてこの選擧にもう一つの面白い

現象は、棄權者が全有權者の半分以上もあつた事だ。近郊と云へば大がいは勞働者町なのだ。フランスの勞働者は、少くともパリ近郊の勞働者は、半分は謀叛人に組し、殘りの半分は全く政治に興味を持たないのだ。

この『謀叛人』は又、それと殆んど同時に、やはりパリ近郊の或る町から、市會議員としても選擧された。

が、果して彼れが、かくして勞働者の望み通り代議士又は市會議員となつて釋放されたか、或は又、政府の望み通り當選無效となつて、まだやはり牢やにゐるか、その後の事は知らない。

しかし、兵役を攻撃したり、戰爭に反對したり、又こんな謀叛人の話を得意になつてするからと云つて、ジャン君は決して共産主義者でもなければ、又その他の何々主義の危險人物でも何んでもない。

何にかの話の時に僕がかう云つてひやかしたら、

『君も一種の社會主義者だね。』

『さうだ、社會主義者だ。』

と立派に肯定して置いて、そして彼れ自身の謂はゆる社會主義なるものを説明して聞かした。それに據ると、要するに彼れは、資本家と勞働者との謂はゆる利益分配で十分滿足してゐるやうなのだ。

ヨオロッパで社會主義者だと云つてゐる人間は、まあ大がいそんなものと見てい丶。昔僕は、ドイツの社會黨首領ベエベルなぞは、大隈の少し毛のはえたくらゐのものだらうと云つた事があるが、今ではもつと〳〵社會主義者の値うちは下落してゐる。共産主義者だつてだん〳〵下落して來てゐる。

そしてジャン君は、ひまさへあれば、シェキスピア全集の英文の安本を字引を引き引き讀み耽つてゐた。そして又時々、一尺もの高さの手紙やハガキの束を引きずり出して、一人でにこにこしながら讀んでゐた。そのいゝひなづけだと云ふ、同郷ブルタニュの或る百姓娘からよこした文がらなのだ。そして彼れはこのいゝひなづけと一緒に、もとの平和な百姓の生活にはひるべく毎日日數を數へてゐた。

三

このジャン君と一二度話してゐる間に、もうその友達になつてゐた、若いロシア人の連中とも話しあふやうになつた。皆んな少々づつ英語を話せたのだ。

そのロシア人等は二十歳前後から二十五六歳ぐらゐまでの青年で、皆なハルピンから來たのだつた。そしてその年かさのものは、皆な兵隊に出て、先づドイツやオオストリイの軍隊と戰ひ、更にボルシェヰキの赤衞軍と戰つて、ヨオロッパ・ロシアからシベリアに、シベリアからハルピンに逃げて來て、今は或はドイツに、或はフランスに、そのもとの學業を續けに行くのだつた。

僕はこのロシア人等と直ぐに一番いゝ友達になつた。そして僕は、彼等の事をペチカ（ピョトルをピョちやんと云ふやうなものだ）とか、ミンカ（ミハエル）だとか呼び、彼等も又僕の事をマサチカ（彼等の間では僕は日本人として正一と云ふ變名でゐた）と呼んでゐた。

皆な元氣で快活で、よくしやべり、よくお茶を飲み、よく歌を歌ひ、よくふざけ、よく踊り騷いだ。そんなのはこのロシア人の連中だけだつたのだ。

僕は毎日そのお仲間入りをしてゐたが、しかし僕が一番興味を持つたのは、彼等の中の四五人殊にペチカやミンカがよく話しだすロシアの内亂の話だつた。そして又殊に、彼等がヨオ

ロッパ・ロシアやシベリアの到る處の反革命軍に加はつてゐながら、帝政復興とか反革命とかの思想や感情を少しも持つてゐない事だつた。

『ぢや、なんで、反革命軍なんかにはひつたんだ?』

と訊くと、要するに彼等は、農民に對するボルシェヰキの暴虐に憤つて、農民等と一緒に武器をとつて立つただけの事なのだ。

ボルシェヰキが食料の強制徴發に來る。農民がそれに應じない。すると、その勞働者と農民との政府は、直ぐに懲罰隊をくりだす。全村が燒き拂はれる。男は皆な殺される。女子供までも鞭うたれる。そして最後の麥粉までも、又次ぎの種蒔きの用意にとつて置いた種子までも持つて行かれる。山や森の奥深く逃げこんだ農民等は、謂はゆる草賊となつて、ボルシェヰキに對する復讐の容赦のないパルティザンとなる。

彼等はこの絶望的の農民と一緒になつたのだ。そして、やはり又その農民等と一緒に、帝政復興とか反革命とかの考へは少しもなしに、たゞボルシェヰキに對する復讐と自己防衛とのためにそのボルシェヰキと戰ふ唯一の力だと思はれた反革命軍に加はつたのだ。

これもその後フランスへ行つてから詳しく知つた事だが、かうしてロシアの反革命軍は、到る處で農民のパルティザンを併せて、ボルシェヰキと戰つた。そしてその反革命の野心を見やぶつた他の農民のパルティザンとも戰つた。そして又この最後のパルティザンは、それと同時に、ボルシェヰキの赤衛軍とも戰つてゐたのだ。そして更に又、この赤衛軍の中には、全く強制的に、その僅かばかりの財産と共に、からだまでも徴發されて行つた農民が隨分あつたのだ。

かうした全く混線の内亂の中で、謂はゆる革命のために、ロシアの農民は何百萬とかの生命を失つたと云はれてゐる。しかもその内亂は、殆んど皆な復讐と復讐との重なりあひの、聞いただけでも身の毛のよだつやうな容赦のない殘忍の、猛獸と猛獸との果しあひだつたのだ

四

この若いロシア人のほかに、まだ七八人の、多少年輩のロシア人やポオランド人やチェク人やユデア人がゐた。細君や子供のあるものは、それを三等に乘せて、男共だけが四等にゐた。

その連中の中に、細君一人だけ三等に置いて、もう二十歳ばかりの息子と一緒にゐた六十歳ぐらゐの老ロシア人があつた。品も何もない本當の百姓面に、兩方のを合せると一尺あまりになる胡麻鹽の太い口髭だけ厳めしさうに延ばして、きたない背廣のぼろ服の胸に青だの赤だのの略章の勳章を七八つならべてゐた。細君もきたない風の、やはり品も何もない顔の、お婆さんだつた。そしてその息子は、大ぶ低能らしく、いつも口をぽかんと開いてゐた。

この三人はいつも三等のデッキで籐椅子の上に横になつてゐたが、或日、お爺さんが僕の前へ來てこんにちはと日本語で挨拶して、あとは何んだか分らないロシア語でぺちやくちやとやつた。が、切りに胸の勳章を指さしては何か云つてゐるやうなので、よく注意して聞くと、ヤ・ヘロ、ヤ・ヘロと云ふ言葉が時々繰りかへされる。ヤは俺れで、ヘロは英雄だ。僕も仕方なしに、ダ・ダ・ギ・ヘロ(さうです、あなたは英雄です)とやつてやつた。それから猶よく訊いて見ると、ゲネラル(將官)で、日露戰爭にも出たと云つて、多分其時に貰つた勳章なのだらう、胸の略章の一つを指さして見せた。

あとでペチカに訊くと、實際ヘロ、ヘロで、一兵卒から將官にまでなつて、豪勇無雙なのだと云ふ。が、ペチカの連中は誰れもこのヘロ

の事なぞは相手にしてゐなかつた。
相手にしないと云へば、ユデア人に對する仕方なぞは隨分ひどかつた。
或日、ポオランド人の若いピアニストが何かの事から支那の勞働者を怒鳴りつけて、支那人なんかは人間ぢやないんだ、奴等にはどんな事をしたつていゝんだ、と傲語してゐるところへ、ペチカ等が來た。そしてペチカ等はこのピアニストに食つてかゝつて、支那人だつて人間だ、吾々ロシア人やポオランド人と同じ人間だ、と云つて、その半日を兩方眞赤になつて、この議論で暮した。
そのペチカ等が、ユデア人だと云ふと、まるで見むきもしないのだ。そして僕が時々そのユデア人等と話してゐるのを見ると、其の日一日は、僕に對してまでも不機嫌な脹れ面をしてゐるのだ。
僕はこのペチカ等の或者の紹介で、一等にゐた一人のロシア人の女とも知りあひになつた。この女はモスクワ大學の史學科を出て、パリにも留學した事があり、大ぶ進歩した自由思想の持主で、いつも僕と一緒に上陸しては出來るだけ遠く田舍へ、ドライヴして、土人の生活を見るのを樂しみにしてゐた。そしてマダムはそれら土人の生活を心から愛してゐたやうだつた。
然るにこのマダムが、アフリカのヂブチに上陸していろ／＼と買物をしようとした時、もう夕方で大がいの店はしまつてゐて、たゞユデア人の店だけ開いてゐるのを見て、たうとうそこの名物の、そしてマダムが切りに欲しがつてゐた駝鳥の羽も何んにも買はず船へ歸つて了つた。最後の一軒の店なぞでは、こゝはさうらしくなささうだからと云ひながらはひつて行つたのだが、主人らしい男の少しとんがつた鼻さきを見るや否や、青くなつて、慄へるやうにしてそこを飛び出した。そしてこんな汚らはしいところには一時も居れないと云ふやうな風で、少々呆氣にとられてゐる僕の手をとつて、大急ぎで歸つた。

五

フランスの船は、海防とか西貢とかの、佛領交趾支那の港に寄る。そして、そこから又、滿期になつたフランスの下士官共や兵隊が多勢乘つた。
たゞの兵隊は皆んな飲んだくれで、どうにもかうにもしやうのないやうな人間ばかりだつた。前に云つた水兵共は、皆んな若くて、多少の規律もあり、薄ぼんやりした顏つきはしてゐたが、人間らしさは十分にあつた。が、此の兵隊共になると、もういゝ加減の年恰好で、豚のやうにブウ／＼唸りながらごろ／＼してゐる奴か、或は猛獸のやうな奴か、とにかく人間と云ふよりは寧ろ畜生共ばかりだつた。
その中で一人、それでも一番人の好ささうな男だつたが、いつもふら／＼した足つきで僕等のそばへやつて來て、ろれつの廻らない舌つきで何か話しかける男があつた。
『俺あかう云ふもんなんだ。』
と云ひながら、その差しだす軍隊手帳を見ると、讀み書きは出來る、ラッパ手、上等兵とあつて、其の履歴には、殆んど植民地ばかりに、あすこに二年こゝに三年と云ふやうに、十八年間勤めあげた事が麗々しく書きならべてある。懲罰の項には何んにも書いてない。が、褒賞の方には何かいろ／＼とあつた。そして今は病氣のために除隊するのだとある。
『それでもこれつぽちの金しか貰はないんでさあ。』
彼れはさう云ひながら、破れた財布の中から十フランの札を四五枚ばら／＼とふつて見せて、

「アハハハ。」

と笑つた。それが不平なのだか、嬉しいのだかすらも、ちよつとは分らない程に。

が、この飲んだくれの兵隊共はまだいゝとしても、がまんの出來ないのは三等に乘りこんだ下士官共だつた。そいつらは、全く熊か猪かの、猛獸のやうな奴ばかりだつた。そしてそいつらの女房どもまでが、ろくでもない面をして。

「あれはこいつらがやつたんだな。」

僕はそいつらの顏を見ると直ぐ、其の日、陸で讀んだ或る新聞の記事を思ひだした。安南の土人がやつてゐるフランス文の日刊新聞の中に、大きな見だしで、或る殺人事件を論じてあつた。事件はごく簡單なもので、土人の一商人が川の中に溺れ死んでゐた、と云ふだけの事だ。が、それがたゞそれだけで濟まないのは、さうした事が隨分頻々とあつて、しかも其の原因がいつもちつとも分らない、いや分つてはゐるがそれをはつきりと公言する事が出來ない、そこに妙な事情がからんでゐるからだ。

「え、あいつらは何をするか知れたもんぢやない。恩給と植民地の無賴漢生活とをあてに、十年十五年と期限を切つて、わざ〳〵こんな植民地へやつて來る。本當の職業的軍人なんだからね。」

フランスの水兵のジャン君も直ぐと僕の直覺に同意した。そして僕は、デッキででも食堂ででもいつも傍若無人にふるまつてゐるそいつらとは、たうとう終ひまで、たゞの一度も「お早う」の挨拶を交はした事がなかつた。

其後、僕はフランスに着いてから、あちこちの壁に、此の植民地行きを募集する陸軍省の大きな廣告のびらを見た。三年間はいくら、五年間はいくら、十年間はいくら、十五年間はいくら、と云ふやうにだん〳〵其の率のあがつて行く、給料や恩給の金額も、殊更に大きく太い文字で書きならべてあつた。

六

多分香港からだつたらう、一人の安南人らしい、白い口髭や細いあご鬚を長く垂らして品のいゝお爺さんが乘つた。

僕は此のお爺さんと一度話して見ようと思つてゐたが、たうとう其の機會がなくつて、西貢かで降りて了つた。海防から乘つた若い安南の學生に訊くと、もとの王族の一人で、今も陸軍大臣とか何んとかの空職に坐つてゐるのだらうだ。ロシアの舊將軍が三等で威張つてゐるのは、ちよいと滑稽だつたが、これは何んだか傷ましいやうな氣がした。

それでも此のお爺さんは、溫厚らしいうちにも、どこかしらに侵す事の出來ない威嚴をもつてゐた。が、一般の安南人となると、見るのもいやなくらゐに、皆な卑劣と屈辱とでかたまつてゐるやうに見えた。そしてこれは、安南人が他の東洋諸民族にくらべて顏も風俗も一番吾々日本人によく似てゐるやうなので猶更いやだつた。

海防や西貢の町を步いて見ても、安南人は皆な乞食のやうな生活をして小さくなつてゐる。ちよつとした店でもはつて、多少人間らしくしてゐるのは、支那人が或は印度人だ。そして、フランス人は皆な王侯のやうな態度でゐる。

西貢で、マダムNと一緒に田舍へ行つて、路ばたの或る小學校を見た。バラックのやうな四方開けつぱなしの建物を二つにしきつて、三十人ばかりづつの子供がそこで何か敎はつてゐた。僕等がはひつて行くと、生徒は一齊に起ちあがつて腰をかゞめ、先生は急いで敎壇から降りて來て丁寧すぎる程にお辭儀した。それだけで僕はもう少々いやな氣がした。

先生はマダムNの質問に答へて、生徒には絶對に漢字を教へないで、一種のロオマ字で書き現はした安南語を教へてゐると云ふ事を、非常な得意で話した。勿論、それは惡い事ぢやない。大いにいゝ事だらう。が、フランスの植民政府でさうさせる意味と、此の先生がそれを得意になる意味とには、僕等の同意する事の出來ない或ものがあるのだ。

安南人の子供等は、かうして教育されて行つて、だん／＼にフランス語を覺えて、其の中の見こみのありさうなものはフランスへ留學させられる。そして歸ると、學校の先生か或は何かの小役人にさせられる。僕が前に云つた若い安南人と云ふのも、やはり以前フランスに留學して、歸つて暫く役人もやつて、今又再度の留學をするのだつた。

僕は支那で、外國人のところに使はれてゐる支那人が、其の同國人にいやに威張るのを見た。それと同じ事を、此の若い安南人はさうでもなかつたが、やはり安南でもあちこちで見た。殊に安南人の兵隊や巡査なぞは猶更にそれがひどかつた。

が、此のフランス留學には、それと違つた妙な意味あひからもある。安南人と云つても、さらさう卑劣と屈辱とにかたまつてゐるものばかりぢやない いろんな人間が出て來る。そしてフランスの官憲は、彼等に多少の言論の自由を許さなければならないまでに、餘儀なくされてゐる。しかし、其の人間共の中で、少し硬骨でそして衆望のあるのが出ると、直ぐにそれをパリへ留學させる。そして毎月幾分の金をやつて何處かのホテルの一室に一生を幽閉同様にして置く。

其の一人に、パリで會ふ筈にしてゐたが、やはりいろんな面倒があつて、たうとうそれを果す事が出來なかつた。

七

英領やオランダ領の、マレエ、ジャワ、スマトラなどの土人も、皆な安南人と同じやうに乞食のやうな生活をしてゐる人間ばかりのやうに見えた。シンガポオルでも店らしい店を出してゐるのは皆な支那人か印度人かだつた。土人はほんの土百姓か或は苦力かだ。

其の支那人や印度人や皆な泥棒みたいな商人ばかりでいやだつたが、道で働いてゐる勞働者の支那人や印度人は、土人と同じやうな實に見すぼらしいものだつた。殊に印度人が、あの眞黒なちよつと恐さうな目つきをしてゐながら、そばへ寄つて見ると實に柔和さうないゝ顔をしてゐるのには、猶更に心をひかれた。此の支那人や印度人や土人の苦力共は、まるで犬か馬かのやう 其の痩せ細つた裸のからだを棒でぶたれたり靴で蹴られたりしながら、働いてゐるのだ。

これは、歸りの船の中でスマトラから來た人に聞いた話だが、時々此の主人共に對する土人等の恐ろしい復讐がある。土人の部落の中にだけで祕密にしてゐる、或る毒矢で暗うちを食はす。椰子やゴムの深い林の中から、不意に、鐵砲だまが自動車の中に飛んで來る。虎だの犀だのの被害のほかに、こんな被害も珍しくはない。

が、さうして個人的の復讐ばかりぢやない、スマトラの土人の中には、既に賃銀勞働者として目ざめた勞働者の大きな勞働組合すらもある。そして其の中の鐵道從業員組合が、ちやうど僕等がそこを通る少し前の五月から六月にかけて、一ケ月あまりの總同盟罷工をやつた。

オランダの官憲は、急に法律を改正して、一切の集會は其の一週間前に屆出ろと命じて、殆んど勞働者の集會を不可能にした上に、更に

主なる首領等を一網打盡的に拘禁した。そして警察力のほかに兵力までも動かして、そして漸くの事でそれを鎮定した。

此の土人の組合は職業的にも組織されてゐるが、又宗教的にも組織されて、殊に回々教徒は最も強固に團結してゐる。そしてそこには、賃銀奴隷からの解放のほかに、民族的や宗教的の獨立と云ふ意味までも加はつて、猶更に其の熱烈の度を高めてゐる。

土地の新聞の云ふところでは、そこにはまだ謂はゆるボルシェキキの煽動や影響はないが、廣い意味での社會主義的思想は十分にはひつてゐる。若しそれが、更に印度や支那の同じ教徒等と結んで、英領やオランダ領の各地で事を擧げるやうな事があつたら、それこそ大變だ、さうだ。

さきに僕は香港の港を眺めながらの、支那の學生等の愛國的憤慨の言葉も聞いた。又、それらの學生の、安南をフランスから取返さなければ、と云ふ氣焔も聞いた。そして或時なぞは、フランスの下士官共が、船の中へはひりこんで來た支那人の泥棒(?)を血だらけになる程なぐつたり蹴つたりしたのを見て、皆んなキャビンにはひりこんだまゝ飯も食はずに憤慨してゐるのも見た。しかし又同時に、彼等が同じ支那人の苦力の車夫を、ちよつとした賃銀の問題から多勢でいきなりなぐつたり蹴つたりするのも見た。そして彼等に對する同情が全く失せて了つた。

救ひはこんな愛國者からは來ない。

八

コロンボ近くなつた頃だと思ふ。無線電信で、ルウル地方占領とフランスの共産黨首領カシエン等の捕縛とが傳へられた。

戰前のドイツ對フランスと、戰後のドイツ對フランスとは、少くとも其の軍備に於て全く正反對になつてゐる筈だ。ドイツの軍隊は殆んど全く破壞されて了つた。そしてフランスは、其の生産力を恢復よりも、軍備の充實により多くの力を注いだ。とてももう相撲にはならない。從つてドイツが急に此の挑戰に應じようとは考へられなかつたが、軍國主義と反動主義とのお塊りのやうになつてゐるフランスが、其の勢に乘じてどんな無茶をやらんものでもないと云ふ事は、十分に考へられた。そして僕は、そこから起る結果に就いての、或る大きな期待をもつてフランスにはひつた。

が、フランスは、マルセイユでもリヨンでもパリでも、實に平穩なものだつた。今にも戰爭が始まりさうだとか、こんどこそはとか云ふやうな氣はひは、少なくとも民衆の生活の中には何處にも見えない。皆んな何んの事もないやうに呑氣に暮してゐる。

僕は、大戰爭及び其の後も引續いて盛んに煽りたてられた狂信的愛國心が、まだ多分に民衆の中に殘つてゐると思つた。が、そんな火の氣は、王黨の機關紙ラクション・フランセエズを先登とする三四の新聞でぷすぷすといぶつてゐるくらゐのもので、何處にも見えない。

このラクション・フランセエズですら、フランスで一番保守的でそして一番宗教的な大都會のリヨンで、しかも郊外とは云ひながら寺院區とまで云はれてゐる或る丘の上で、僕は六軒も七軒もの新聞屋を歩き廻つて、たうとうその一枚も見出す事が出來なかつた。

『えゝ、戰爭中には隨分賣れたもんですけれどもね。此頃はもうさつぱりですよ。で、賣れないものを置いても仕方がないもんですから‥‥。』

新聞屋の婆さんは何處へ行つても皆な同じやうな事を云つ、。

そして、かうして歩き廻つてゐる間に、これは其他のどこででもさうなのだが、片つぽうの手がないとか義足で跛をひいてゐるとか云ふ不具者の、五人や六人や、九人や十人には會はない事はない。勿論皆な大戰の犧牲なのだ。かう云ふのを始終目の前に見せつけられながら、今更戰爭でもあるまい、とも思つた。

然らば、此のルウル占領や戰爭に反對してゐる共產黨やC・G・T・Uの方はどうかと云ふに、要するに、たゞ、新聞や集會でのえらさうな宣言や雄辯だけに過ぎない。時々の示威運動もあるが、一向にふるはない。占領を止める事は素より、占領軍の橫暴を少しでも輕くする事にすら、何んの役にも立つてゐない。

兵隊自身も、一九二一年に二ケ年の約束で召集されて、ことしの三月には滿期になる筈のが、一ケ月二ケ月と延びて、更にいつどこへどう送られるやうになるかも知れないのに、これと云ふ反對運動一つどこの兵營にも起らない。共產黨のリュマニテなぞは、毎日それに就いて何か書きたててゐるのだが、大した反響も見えない。尤も、此際官憲に乘ぜられるやうな事があつてはいけないから、皆んな出來るだけ音なしく反抗しろと戒めてはゐたが。

そして此の兵隊さんらは、日曜ごとに、女の大きなお臀を抱へながら、道々キスしいしいぶらぶらと市中を步いてゐる。

天下泰平だ。

九

僕がフランスに着いてからの主な仕事の一つは、毎朝、パリから出る殆んど全部の新聞に目を通す事だつた。

リュマニテには、僕が着く早々、北部地方の炭坑勞働者の大同盟罷工が報ぜられてゐた。そして其の罷工の勢ひが日增しに甚しくなつて行つて實際七八萬の坑夫がそれに加はつてやつたやうだつた。然るに、多くの資本家新聞には、毎日ほんの數行その記事があるくらゐで、しかも毎日坑にはひつて行く勞働者の數がふえて行くやうに書いてある。罷工者の數も大がいは何百とかせいぜい何千とかあつた。

其後パリで八千人ばかりのミディネット(裁縫女工)の罷工があつた時にも、資本家新聞を讀んでゐるだけでは、まるで分らない。きのふもけふも、幾百人づつの女工の幾組もが、あちこちの工場へ誘ひだしの示威運動に行つて、到る處で警官隊と衝突してゐるのに、新聞ではほんの數行、しかももうとうに其の罷工が濟んだやうに書いてある。そして新聞では幾度も皆んなそれぞれの工場に歸つてゐる筈の間に、C・G・T・U事務所の罷工本部では、それら數千の女工連が笑ひさゞめき歌ひどよめいてゐた。

かうした新聞の態度を、勞働者は其の運動の上に使ふサボタジュと云ふ言葉で云ひあらはしてゐる。資本家新聞は、有らゆる勞働運動の上に、實によくサボる。

が、それは當然の事で、何んの不思議もある譯ではない。それよりも、そら罷工だ、そら何んとかだ、と云つてちよつとした事でも騷ぎたてる日本の資本家新聞の方が、よつぽど可笑しいくらゐだ。

しかし、同盟罷工其者をサボる勞働者が、勞働團體が、あるのには少々驚かされた。それも嘗ては其の革命的な事を以て世界に鳴つてゐたC・G・Tがだ。石炭坑夫の罷工の時には、このC・G・Tの首領等が、目下の獨佛の危機に際して石炭業の萎縮を謀るのは敵國のためにするものだ、と云ふやうな事を云ひ廻つて、坑夫等をなだめてゐた。

僕は日本に歸ると直ぐ、最近本所の車輛工の

郵便電工で、友愛會の勞働總同盟がそれに似た罷工破りをやつた話を聞いて、どこもかもよく惡い事ばかりが似るものだと感心した。

共産黨やC・G・T・Uが何かやれば、社會黨やC・G・Tがサボる。そして、其の共産黨か又、無政府黨のやる事となると一々にサボる。

僕がメエ・デエに捕まつた時には、リュマニテでは一段あまりの記事を書いた。が、其の翌日僕が日本の無政府主義者と分つて以來は、裁判の事も追放の事も遂に一字も書かない。全くの默殺だ。そして王黨のラクション・フランセエズなんかになると、最初から最後まで、例の殺人教唆の無政府主義者』云々で押し通してゐた。

サボタジュにも、『安からう惡からう』の意味の消極的のものもあれば、『生産妨害』の意味の積極的のもある。

最近の東京朝日新聞に、其のパリ特派員の某君の記事の中に、王黨の一首領を暗殺したジェルメン・ベルトンの事を『例の政治狂の少女』と書いてあつた。それくらゐならまだいゝ。彼女は、フランスの資本家新聞では『淫賣』であり、『ドイツに買はれた賣國奴』であり、又『警察の犬』でもある。

そしてフランス無政府主義同盟の機關ル・リベルテエルは、殆んど毎週、彼女の辯護のために發賣禁止され、其の署名人と筆者とはラ・サンテにはふりこまれてゐる。

一〇

パリに着いた晩、夕飯を食ひに、宿からそとへ出て見て驚いた。其の邊はまるで淺草なのだ。しかも日本の淺草よりも、もつと〳〵下劣な淺草なのだ。

貧民窟で、淫賣窟で、そしてドンチャンドンチャンの見世物窟だ。軒なみに汚ないレストランとキャフェとホテルとがあつて、人道には小舍がけの見世物と玉轉がしや鐵砲やの屋臺店が立ちならんでゐる。そして、それが五町も六町も七町も八町も續いてゐるのだ。

黑ん坊の野蠻人が戰爭してゐる看板があげてあつて、その下に、からだぢうを眞黑に塗つた男や女や子供が眞つ裸と云つてもいゝやうな恰好をして、キイ〳〵キャア〳〵呼びながら槍だの刀だのを振り廻して見せてゐる。その隣りは、『生きた人蜘蛛』と云ふ題で、顏だけが人間であとは蜘蛛の大きな繪看板がかゝげてある。そして其の次ぎには、玉轉がし、文廻し、鐵砲、くじ引き、瓶釣り、其他有らゆるあてもの、いゝの店がならんでゐる。普通にものを買へる店は一つもないのだ。そして更に又其の次ぎには、ぐる〳〵廻る大きな臺の上に、玩弄品の自動車だの馬車だの馬だの獅子だのを乘せて、騷々しい樂隊の音と一緒に廻らしてゐる。そして、いゝ年をした大人がそれに乘つかつて喜んでゐる。下が小さな船の形をしたブランコがあつて、そこへ若い男と女とが乘つて、その船がひつくり返りさうになるまで振つてゐる。大きな輪のまはりに籠が幾つもぶらさがつてゐて、そこへ一人々々乘つて、輪が全速力でぐる〳〵廻る。前の籠と後の籠とがぶつかり合ふ。皆んなキャツ〳〵と聲をあげて喜んでゐる。往來に人をたゝして置いてパッと寫眞をとる大道寫眞師もゐる。

そして此の連中が皆な、一團づつ、電車の小さな箱くらゐの車をそばに置いて、其の中に世帶を持つてゐる。此の車でフランスぢうを或はヨオロッパぢうを歩き廻つてゐるのだ。

僕は前に淺草と云つたが、それよりも寧ろ九段の祭りと云ふ方が適當かも知れない。尤も僕はもう十年あまりも、或はそれ以上にも九段の祭りは知らないのだが

そこへうぢよ〳〵と、日本人よりは顏も風も

きたないやうな人間が、ちよつと歩けないほどに寄つて來る。實際は、ヨオロッパへ來たと云ふよりも寧ろ、どこかの野蠻國へ行つたやうな氣がした。

そして其後、日本の淺草よりももつとずつと上等の遊び場へ行つて、そこの立派な踊り場やキャフェの中に、やはり此の玉轉がしや文まはしがあるのには更に驚いた。

そして更に其後、リヨンで、町の人達がよく遊びに行くリイル・バルブへ行つた。飜譯すれば羊の鬚島だが、リヨンの町の眞ん中を通つてゐるサオヌ河の少し上の、ちよつと向島と云ふやうなところだ。が、そこには白鬚様があるのでもなし、たゞ小さな島一ぱいに、パリの貧民窟のと同じドンチャンドンチャンがあるだけの話だ。

それから、此のリヨンの停車場前の廣場が何かで大にぎやかだと云ふので、或晩行つて見ると、やはり同じドンチャンドンチャンと、玉轉がしと文まはしと鐵砲とだ。そしてそこをやはりパリのと同じやうに、五フランか十フランかの安淫賣がぞろ〳〵とぶらついてゐる。

フランス人の趣味と云ふものはこんなに下劣なものだらうか。　（一九二三年八月・東京にて）

僕の故郷（一）

始めて僕は故郷といふものの感じを味つた。

「故郷はインスピレションなり」と云つた蘇峰か誰れかの言葉が、始めて身にしみて感じられた。が、嬉しさの餘り、其の時にはまだ、それが故郷の感じだと云ふ理智は、其の感じの解剖は、本當に出來てゐなかつた。蘇峰か誰れかの言葉と云ふのも、どうやら、其の後の或時に思ひ出したもののやうだ。

此の故郷の感じは、其の『或時』になつて、再び十分に味つた。そしてこれが謂はゆる故郷の感じだと云ふ事は、其の『或時』になつて、始めて十分に知つた。

始め半年ばかりゐて、出てからまだ二月とは經たぬうちに、再び巣鴨へやられた時の事だ。巣鴨のあの鬼ケ島の城門を、護送の看守が「開門！」と呼ばはつて厚い鐵板ばりの戸を開かせて、敷石の上をガラガラッと馬車を乗りこませた時だ。

僕はいつものやうに、馬車の中の前のはじに腰をかけて、金あみ越しにそとを眺めてゐた。門が開くと監獄の建物の前の、廣い前庭の景色が眼にはひつた。其の瞬間だ。僕は思はず腰をあげて、金あみに顔を寄せて、建物のすぐ前に並んでゐる檜か青桐かの木を見つめた。そして暫く、と云つても數秒の間だらうが、或る一種の感に打たれてぼんやり腰を浮かしてゐた。それに氣がつくと、直ぐに僕は、嘗て歸省の途に汽車の中で打たれた彼のインスピレションを思ひ出した。ちつとも違はない、同じ親しみと懐しさとの、そして一種の崇高の念の加はつた、インスピレションだ。

僕は始めて、これが本當の故郷の感じなのだ、あの時のもやはりさうだつたのだ、と本當に直覺した。

馬車から降りる。何一つ親しみと懐しみとの感ぜられないものはない。會ふ看守毎に、

「やあ、又來たな。」

と云はれるのすらも、古い幼友達か何かの、暖かい挨拶に聞える。そしていよ〳〵、前にゐた例の片輪者の建物に連れて行かれて、お馴染の皆んなにこ〳〵した目禮に迎へられて、前にゐた隣りの室に落ちついた時には、本當に久しぶりで自分のうちへ歸つたやうな氣持がした。（獄中記より）

諸家略年譜

中江兆民

弘化四年、高知城下新町に生る。父は卓介、母は柳子。幼名竹馬。長じて篤介と改む。別に青陵、秋水、南海仙漁、木强生等の號あり。

慶應元年、齡十九、高知藩留學生となり長崎に遊び、平井義十郎に就き佛蘭西學を修む。

慶應三年、外國船に搭じて江戸に出で、深川眞田邸内の村上英俊の塾に入つて佛蘭西學を再修す。後破門せらる。

明治元年、神田裏神保町の箕作麟祥の門に入る。又、一時大學南校の助教たり。

明治二年、この頃、福地源一郎の本郷湯島の日新社に塾頭たり。

明治四年、司法省出仕に任じ、佛蘭西留學を命ぜられ、岩倉大使に隨行して渡歐す。

明治七年、歸朝。元老院書記官に補せられ、次いで外國語學校長に任ぜらる。幾もなく辭して番町に佛學塾を開く。小島龍太郎、酒井雄三郎、小山久之助等は當時の門生なり。時恰も自由民權熱の勃興期に際す。卽ち、西園寺公等と「東洋自由新聞」を創立し、又「政理叢談」を刊行して、ルーソーの民約論を唱へ、盛にフランス流の勁烈なる自由平等の政治論を主張して專擅政府を攻擊す。

明治二十年、保安條例發布せらるゝや、逐客の一人となり、十二月二十五日夕、母を奉じて徒歩大阪に向ふ。

明治二十一年、同志と共に「東雲新聞」を創刊、主宰す。又壯士演劇を創して其顧問となる。

明治二十二年、憲法發布、保安條例弛かる。卽ち家を挙げて東京に歸り、後藤象二郎の「政論」に主筆となりしも、後藤の入閣に依り大同團結解體するや、同志と共に自由黨を再興し、「自由新聞」「立憲自由新聞」「民權新聞」等を主宰して專ら民黨の糾合を圖る。

明治二十三年、國會開設に際し、大阪水平社に擁せられて衆議院議員に當選、握飯梅干竹の皮包みの辨當を持ちて登院し居たるも、豫算八百萬圓削減問題に關して、同志と議合はず、辭職す。

明治二十六年より九年の交、實業界人として東奔西走、北海道の紙店、毛武鐵道、河越鐵道、常野鐵道、京都パノラマ、中央清潔會社等、逐次經營せしも何れも失敗に歸す。

明治三十一年、伊藤內閣自由黨と提携するに及び、國民黨を組織し、雜誌「百零一」を發行して、在野黨聯合を說き藩閥討滅を唱ふ。而も資金缺乏のため數月にして潰散す。

明治三十三年、秋、「每夕新聞」の主筆となる。次で國民同盟會成るや、自ら投じて大に奔走す。此の年、紀州に客遊中喉頭癌に罹る。

明治三十四年、泉州堺に寓居して病を養ふ。醫より餘命一年半と宣告せられ、生前の遺稿として「一年有半」の筆を執る。九月、歸東、小石川武島町の自邸に入り、「續一年有半」を執筆、十月、刻成る。十一月に入り疾愈々篤く、十二月十五日、午後遂に長逝。青山に葬る。行年五十五。

『ショーペンホウエル道德大原論』『維氏美學』『ルーソー民約』『理學沿革史』『理學鉤玄』『革命前佛蘭西二世紀事』『三醉人經綸問答』『平民の目ざまし』『憂世慨言』『選擧人の目ざまし』『四民の目ざまし』『一年有半』『續一年有半』等の著あり。

酒井雄三郎

萬延元年九月九日、肥前國小城に生る。鍋島藩士酒井忠六の四男なり。

明治六年、齡十五、佐賀市満岡勇之助に就き漢學を學び、九年、佐賀縣立中學を卒へ、十年、津市なる土井有格に就き漢學を學ぶ。

明治十一年、單身上京、東京神田明法學社にて佛蘭西學を修め、十二年、更に佛學塾に入り、二ケ年にて業を卒へ、十四年より塾長中江兆民に就きて佛蘭西學を研究する傍ら斯塾の幹事、講師、塾長代理を勤むること五ケ年餘。この間、兆民の「理學鈎玄」の著を助け、又アコラス著「政理新論」を飜譯出版す。

明治二十二年、農商務省に職を奉じ、佛國巴里大博覽會事務官として渡佛し、二十三年、佛國巴里大學及び白耳義ブリュッセル大學にて政法經濟諸科を研究。二十四年、白耳義ブリュッセル府に開催の社會黨大會に、日本國代表として出席す。

明治二十五年、歸朝。官を辭し、社會問題研究會評議員となる。以後、主として著述飜譯に從事す。民友社より「排曲學論」を、「早稲田專門學校よりア、ド、ビヅール著「近世歐洲外交史」を飜譯出版。（二十二年頃より三十三年迄、「國民之友」「百零一」「世界之日本」等の諸雜誌、「朝日」「時事」「報知」「國民」「讀賣」「毎日」「二六」等の諸新聞に、巴里通信、時事評論、社會問題等を執筆す。）

明治三十二年、農商務省臨時博覽會事務局囑託として佛國巴里へ出張す。

明治三十三年、早稲田專門學校より『十九世紀歐洲政治史論』を出版す。十二月九日、巴里に客死す。行年四十二。

矢野龍溪

嘉永三年十二月一日、豐後國佐伯に生る。父は光儀、母はこま子。

慶應二年、齡十六、はじめて仕途に就き、藩主の側勤を命ぜらる。

明治元年、藩主に從ひて入洛し、朝廷の親兵となり、分隊長に擧げらる。幾もなく辭して歸鄉す。三年、一月、父光儀、葛飾縣知事となる。一家上京。田口江村の塾に入る。

明治四年、四月、慶應義塾に入る。十二月十三日、祖父多門卒す。

明治六年、慶應義塾教師となる。

明治九年、「郵便報知新聞」に副主筆となる。

板垣退助、後藤象二郎、大江卓等と交遊す。

明治十年一月、西南の亂に際し、沼間守一等と謀りて自衛協會の組織を企つ。

明治十一年七月、大藏省少書記官に任ぜらる。十二年、小幡篤次郎等と憲法を研究し、「私擬憲法」を起草す。

明治十三年、内閣と諸省と分離するに至り、大隈侯とともに内閣に轉じ、三月、太政官少書記官に、五月、太政官權大書記官に任ぜらる。九月十三日、父光儀卒す。

明治十四年六月、太政官大書記官に任ぜらる。十月、大隈侯免官。即ち廟堂を去り、「郵便報知新聞」を買收して同志の言論機關とす。

明治十六年、改進黨の黨勢擴張のため、尾崎行雄等と東海道を遊說す。この年、政治小說『經國美談』を上梓す。

明治十七年、四月、洋行の途に上る。主としてイギリスに於ける憲法運用の實際、政黨の狀態、選擧の模様等を調査し、且歐洲の文物制度を研究せんがためなり。五月、マルセーユに上陸、滯佛二ケ月、七月、ロンドンに移る。十九年、弟武雄渡英して同居す。依て『周遊雜記』を筆記せしめ之を日本に送る。森田思軒渡英、同居す。九月、武雄及び森田とともに歸朝の途

に上る。

明治二十年、「報知新聞」の改革斷行、其筆政を主宰し、傍ら、改進黨の擴張に努力す。

明治二十二年、十月、政界引退を聲明して、郷里佐伯に歸る。冬の初歸京し、一ヶ年を期限とし再び報知社長となる。『浮城物語』を執筆。

明治二十三年、十一月、宮內省御用掛となりて全く政界との緣を絕つ。

明治二十九年、十一月、諸陵頭に任ぜらる。

明治三十年、三月特命、全權公使に任ぜられ、清國駐劄仰付けらる。

明治三十二年、十二月、清國駐劄免ぜらる。

明治三十五年七月五日、『新社會』第一版を上梓す。三十六年、「近事畫報」の顧問となり、國木田獨歩を擧げて同誌の編輯主任たらしめ、又自ら每號隨筆等を掲載す。

明治三十九年十二月、大阪每日新聞社の相談役に選ばれ、爾來、監査役、副社長に歷任、現に相談役たり。

大正九年十月、「東京日々」紙上に、『露國の前途』を掲載して、レーニン及びトロツキー等の經濟組織を論じ、又同紙に、『日本の國是及び我國の覺悟』を掲ぐ。

大正十五年十月二十七日、東京郊外にて、自動車衝突の爲め、危禍に遭ひ、瀕死の重傷を負ふ。

昭和五年三月、『龍溪矢野文雄君傳』、大阪每日新聞社より出づ。

安部磯雄

慶應元年二月、福岡市に生る。

明治十二年、同志社入學、故新島襄先生の敎へを受く。十七年、卒業。爾來岡山市に於て基督敎の傳導に從事す。

明治二十四年、米國ハートフォード神學校に入り、神學及び社會問題の研究に沒頭す。

明治二十七年、英國及び獨逸に留學。歸朝後、同志社の敎師となる。

明治二十八年、駒尾と結婚す。二十九年、長女富士生れ、三十一年、次女京生る。

明治三十二年五月、同志社を辭して、早稻田大學(當時の東京專門學校)に敎鞭を採る。

明治三十三年、三女靜生る。

明治三十四年、『社會問題解釋法』を著す。

明治三十五年、長男民雄生る。此の頃ユニテリアン協會を起し、又社會民主黨を組織す。

明治三十七年、次男道雄生る。日露戰爭の始まると同時に『地上の理想國瑞西』を出版。

明治三十八年、早大野球部を引率して第一回のアメリカ遠征を斷行す。

明治三十九年、『理想の人』を出版。長女富士死亡。四十年、四女愛生る。

明治四十一年、五女節生る。『市政論』を出版。

明治四十三年、六女夏生る。『婦人の理想』出版。野球部を引率し布哇に遠征。

大正三年、『自修論』を、四年、『誰を選ぶべきか』を、六年、『歐洲社會黨の現狀』を著す。

大正八年、『子供本位の家庭』を出版。

大正十年、『社會問題概論』を出版。早大野球部を引率して渡米。

大正十一年、『產兒制限論』を著す。十二年、『社會主義は危險思想に非ず』を出版。この頃同志とフェビアン協會を起す。

大正十五年、普選實施と共に社會民衆黨を組織す。

昭和二年、『人口問題と產兒制限』を著す。

昭和三年二月、第一回普通選擧に當り、東京市二區より立候補して當選す。三月、早稻田大學を辭す。四月、腸チブスに罹り生死の間を徨彷ふ。四年、病後の靜養を兼ね、妻と共に渡米、約三ヶ月滯在す。

昭和五年、第二回普選に落選す。

幸德秋水

明治辛未四年、舊九月二十二日夜八ツ半土佐幡多郡中村に生る。（本名傳次郎）

明治五年、舊八月十四日父篤明（通稱嘉平次）死す。

明治十二年、修明舍なる學舍に孝經の素讀を授けらる。

明治十四年、夏、中村中學校に入る。

明治十八年、中村中學校（高知中學中村分校）廢せらる。生徒多く就學の途を失へり。此冬より學友多く淡成會てふ結社をなし學會を地藏寺といへる無住寺に設く。此頃より酒のみならふ。十二月、林有造君宿毛より中村に來ることあり、年長の人らに伴はれて往て其宿處を訪問す。初めて天下の名士豪傑なるものを見たり。淡成會にては會員の討論演說と牛肉を食ふことのみを仕事とせり。此頃輸入「自由新聞」の讀者なりきと記す。內閣官制改革、伊藤參議總理大臣。

明治十九年、一月十八日、年長の人々と宿毛に行き、林有造君を訪ひ、同君上京の途を中村に立寄らんことを求む、此頃屢々宿毛に往來せり。年長等が縣會議員選擧に運動するを見聞せり。頻りに牛肉屋に行く、一人の割前八錢位なりき。二月、板垣退助君銃獵の爲め我鄕に來る、有志迎へて小宴を張る、予も亦席に列り初めて自由の泰斗なるものを見たり、板垣は坐談にて人民の自由の必要、明君賢相の人民の進步に害あること、青年の身體を強壯にすべきことなど語れり、予は祝を朗讀せり。十二月二十二日、海路高知に遊學す、木戶明先生の遊厚義塾に寄寓す。四月末、遊厚義塾高知市鷹匠町へ移轉す。肋膜炎に罹る、五月八日、同市本町自然堂病院に入院す、母上家兄を伴ひ來つて看護さる、病重く殆ど死に瀕せり。八月、病稍閑、一日鄕里中村に歸る。二十一日、洪水大至、市中總て浸水す、山上の天神社內に遁る。

明治二十年、一月、再び高知に赴き、木戶先生の塾に入り、中學校に通學す。七月、他の家に下宿す、鄕里中村に歸る。八月十七日、高知に赴くと稱し家を出で、上京の途に就く、家を出る時旅費僅に五十錢、二十日、高知に着く。井上伯條約改正談判物議を惹き、谷干城農相を罷め、板垣高知に歸り、谷板垣兩氏の建白書は祕密に謄寫せられて全國に流布し、四方壯士皆結束して起つ、人々洶々、予交る所の年長の人々亦頻りに祕密に畫策する所ありき。書籍（史記・八大家文・等）を賣り四圓五六十錢を得たり。九月七日、午前八時汽船靑雲丸にて高知發、八日午前二時神戶着、同日長門丸に乘じ、九日夕横濱着、同船の書生に伴はれ八時東京着、錦町高知屋に投ず。林有造君の書生となり小石川丸山町岩村通俊別莊に起臥し、林包明の猿樂町美學館に通學す、岩村氏は北海道長官として任地にありき。十二月二十五日保安條例により退去を命ぜらる、東海道を徒步西下す、此時未だ汽車全通せず。

明治二十一年、新年を三州豐橋に迎へたり、一月十五日歸鄕。六月二十四日宇和島に出づ、二三友人と九州に赴き、長崎より淸國に航せんと計畫せり、八幡濱大洲に至り窮困して進むを得ず、再び宇和島に返り、七月より同地高木行正氏の家に寄食し、尋で同氏の紹介にて法圓寺の一室に寓居す、此時多少佛典を讀むを得たり。九月、退去令解除、十月、志を得ずして家に返る。十一月二日、再び東上の途につく、大阪に止まる、中江篤介、栗原亮一の諸氏大阪にて東雲新聞を發行しつゝあり。此時角藤定憲と共に壯士芝居を開始したる舊友濱田金馬の紹介にて中江篤介先生の學僕に住込めり。

明治二十二年、二月、憲法發布さる。東京にて「日刊政論」を發行し中江先生主筆たり、先生「東雲新聞」をかけもちて京阪の間を往來す。十月五日十二時、中江令閒令孃令息に屈して海路東京に向ふ、翌六日午後着京、隼町に寓し更に表神保町にうつる。

明治二十三年、六月、病む、一時千葉に轉地す。九月、鄕里に歸る。

明治二十四年、四月、上京、寓中江家、六月獲病、一時轉白山心光寺、國民英學會に通學す、七月、神樂坂小野に移る、鄕里より七圓づつを送り來ることとなれるより、森川町に下宿す、此頃文學書のみを讀めり。此頃より吉原に通ひ始む。此頃の讀書は皆貸本によれり。

明治二十六年、中江家に寓せり、國民英學會を卒業す。九月、「自由新聞」に入る、小松三省宮崎晴瀾溝口市次郎等主なる記者なりき、社は尾張町の角にあり、予の月給僅かに七圓にて英字新聞の飜譯に從事せりき。是れ予が新聞記者生活の始めなり。南波登發の家に寓す。

明治二十七年、三月より平河町一丁目に下宿す。日清戰爭開始。

明治二十八年、二月十一日、東京發、二日遠州大角氏宅に滯し、一日大阪に留り、十六日廣島に入る。三月より四月迄小田貫一の「廣島新聞」に從事す、前田三遊荻原絹濉と倶なりき。五月、中央新聞社に入る。

明治三十一年、二月、中央新聞を去り、朝報社に入る、但だ團々珍聞茶說を草する舊の如し。

明治三十三年三月十一日、母を奉じて歸省の途に上る、十四日着、十五日より老母耳順の賀筵を開くこと二日。六月四日、麻布宮村町七十三番地に轉ず。

明治三十四年、四月、『帝國主義』を著す、五月、社會民主黨を組織し禁止さる。八月二日、兆民先生の病を見んが爲め堺に向ふ。三日大阪に滯し、四日堺に赴き泊す、五日堺妙國寺大寺など見る、六日京都に出で八日歸宅。此頃大井馬城勞働運動の爲上京。八月三十日大宮政談演說に臨む、是れ予が勞動演說の初めなり。九月『一年有半』販成る、十月小山久之助死す、『續一年有半』成る。十一月十二日、草田中正造直訴文。十二月、兆民先生死す。(以上自記)

明治三十六年、七月「社會主義神髓」を著す。十月、日露戰爭反對の故を以て、萬朝報を退く。十一月、堺利彦等と共に週刊「平民新聞」を發行す。三十八年、三月「平民新聞」の論文に依り入獄す、禁錮五個月。十月、平民社解散の後、米國に遊ぶ。三十九年、六月、米國より歸り、「世界運動革命の潮流」を說く 四十年、一月、諸同志と共に日刊「平民新聞」を發行す。二月、日本社會黨大會に於いて議會政策に反對す。四十一年、赤旗事件に依り多數の同志入獄。四十三年、大逆事件を以て起訴さる。四十四年、一月二十四日死刑に處せらる。年四十一。

堺 利彦

明治三年、十一月二十五日、貧乏士族の子として福岡縣京都郡豐津に生れた。父は堺得司、母は志津野琴。

明治十五年、小學校優等卒業。豐津中學校に入學。「才子」の名、鄕黨に高し。

明治十九年、中學校を「一番」で卒業し、同藩中村千治の養子となり、東京に遊學、小石川同人社に入學。後、神田の共立學校に轉ず。

明治二十年、夏、第一高等中學校の入學試驗に及第。登龍門が開かれた。

明治二十一年、既に「飲む事と遊ぶ事を覺え」、間もなく月謝不納で登龍門が閉められた。養家からは離緣された。

明治二十二年、長兄平太郎が急死し、父母を養ふ責任の身となり、大阪天王寺高等小學校の

英語科教員となつた。
明治二十五年、次兄本吉欠伸の縁故に依り、西村天囚氏等の推挽を受け、漸く大阪の新聞界および文學界に踏み入つた。
明治二十八年、二月、貧しい生活の中に母を死なせた。間もなく父を奉じて東京に出た。田川大吉郎氏の世話で「實業新聞」の記者となつた。
明治二十九年、二月、寂しい下宿屋の一室で父を死なせた。間もなく友人堀紫山の妹美知子と結婚した。同郷の先輩、福岡日々新聞社長征矢野半彌氏に招かれ、同紙の記者となる。
明治三十年、福岡を引揚げて東京に歸り、今度は同じく同郷の先輩末松謙澄氏に拾はれて毛利家歴史編輯所に入つた。この年、兄欠伸が死に、長男不二彥が生れた。
明治三十二年、毛利家の仕事を終り萬朝報に入社。初めて稍や新聞記者らしい者になつた。こゝで幸德秋水等と交り、安部磯雄、片山潛等の諸氏をも知り、漸く社會主義者となつた。
明治三十六年、日露戰爭の勃發に際し、非戰論の故を以て秋水等と共に朝報社を去り、社會主義運動の機關紙として週刊「平民新聞」を發行す。
明治三十九年、二月、日本社會黨を組織す。
明治四十年、一月、日刊「平民新聞」を發行す。
明治四十一年、六月、「赤旗事件」に依り入獄（刑期二個年）。これより前、二三回の小入獄もあつた。
明治四十三年、大逆事件の間に出獄。生計のため賣文社を經營。
大正四年、久しぶりの社會主義機關紙として雜誌「新社會」を發行。
大正九年、山川均氏等と共に「日本社會主義同盟」を組織す。
大正十二年、謂ゆる「第一次日本共産黨事件」に引つかゝる。
昭和四年、日本大衆黨から推されて、東京市會議員（牛込區）候補に立ち、最高點當選。
昭和五年、二月、東京府第一區の衆議院議員候補に立ち、見事に落選。現に全國大衆黨に屬す。（自記）

木下尚江

明治二年、信州松本に生る。二十五年、松本にて辯護士を開業。三十一年、東京每日新聞記者となる。三十四年、社會民主黨成立の際黨員の一人たり。
明治三十九年、一切の社會的關係を捨てて隱退す。
『火の柱』は日露戰爭當時、非戰論の運動の一として書きし最初のもの。尙『良人の自白』『火宅』『靈か肉か』その他著書多し。

大杉榮

明治十八年一月十七日、（戶籍面は五月十七日）讚岐丸龜に大杉東の長男として生る。母は豐。幾くもなく東京に移る。
明治二十二年、麹町區富士見小學校附屬幼稚園に入る。十二月父の轉任に隨ひ越後新發田に移る。二十四年、新發田本村の小學校に入學。三十年、新發田中學校入學。三十二年、春、名古屋幼年學校に入學。三十四年十一月、退校。
明治三十五年一月、上京。東京學院、佛蘭西語學校、順天中學校等を轉々す。三十六年、外國語學校佛語科に入學。十一月「平民新聞」發刊さるゝや、運動に加はらんとして平民社を訪ひ、爾後、其の研究會に出席し、又新聞刊行の仕事を手傳ふ。
明治三十九年三月、外國語學校卒業。陸軍大學への就職を奔走中、「電車事件」に依り下獄。六月、保釋出獄、九月、堀紫山氏の妹保子

と結婚。此頃、黒板勝美氏等と「日本エスペラント協會」を創立。十一月「光」に「新兵諸君に與ふ」を轉載して起訴さる。十二月「光」廢刊。

明治四十年一月「日刊平民新聞」生る。二月、同紙に「歐洲社會黨の運動の大勢」發表。五月、前に「平民新聞」に譯載せし、クロポトキンの『青年に訴ふ』により新聞紙條令違犯として禁錮三ケ月に處せらる。巣鴨監獄に入獄中「新兵諸君事件」の判決により、引續き四ケ月服役。獄内にてハアド・ムウアの "Universal Kinship" の前篇『肉體篇』を譯出し、『平民科學叢書』の第六篇『萬物の同根一族』として刊行す。

明治四十一年、「屋上演說事件」「赤旗事件」等にて懲役二年六ケ月に處せられ、千葉監獄に送らる。四十二年、十一月、父死す。

明治四十三年、十一月、出獄。堺枯川の賣文社に入る。

大正元年十月、荒畑寒村と共に「近代思想」を創刊。二年、二月より毎月「近代思想社集會」を、七月より毎月「センディカリスム研究會」を開く。神近市子と知る。年末肺を患ふ。

大正三年、二月、鎌倉に轉地し、五月、大久保に歸る。九月、「近代思想」を廢刊し、十月、月刊「平民新聞」を發刊す。同月、論文集『生の闘爭』及びギュスタヴ・ル・ボンの『物質非不滅論』を出版。

大正四年、「平民新聞」廢刊。十月、「近代思想」を復活、十一月、第二論文集『社會的個人主義』を出版。

大正五年一月、「近代思想」廢刊。二月、伊藤野枝と戀愛關係を生ず。三月、『生活と藝術叢書』第四篇の『勞働運動の哲學』發賣禁止さる。同月、ダアキンの『種の起原』を出版。十一月、葉山「日蔭の茶屋」にて神近市子に刺さる。

大正六年、伊藤野枝と同棲。九月、長女魔子生る。十二月、伊藤野枝と「文明批評」を發刊。此の年、『男女關係の進化』『民衆藝術論』『相互扶助論』を續譯出版す。

大正七年一月、東京市外龜戸に轉居し、和田久太郎、久板卯之助と同居、「文明批評」を廢刊し、二月、月刊「勞働新聞」を創刊。七月、田端に轉居。

大正八年十月、月刊「勞働運動」發刊。十二月、「尾行毆打事件」にて收監さる（懲役三ケ月）。同月、次女幸子生る。

大正九年、入獄中に『一革命家の思出』、五月、『乞食の名譽』(伊藤野枝と共著)出版。六月、「勞働運動」を廢刊す。十月、上海に渡り、一ケ月許滯在。十一月、『クロポトキン研究』を出版。

この頃、「東京毎日」の記者となる。

大正十年、一月、週刊「勞働運動」を創め、六月、廢刊す。三女エマ生る。『自敍傳』に筆を染む。『惡戲』(伊藤野枝と共著)『人間の正體』『正義を求める心』を出版。

大正十一年一月、月刊「勞働運動」を復活。六月、四女ルイズ生る。十二月、フランス無政府黨よりの通報に接し、ベルリンの國際無政府主義大會參加の爲め日本を脫出す。この年、『二人の革命家』(伊藤野枝と共著)、『漫文漫畫』、ファブルの『昆蟲記』(第一卷)『無政府主義者の見たロシア革命』を出版。

大正十二年四月、『自然科學の話』(安成四郎と共譯)、八月、『科學の不思議』(伊藤野枝と共譯)出版。無政府主義大會無期延期となる。メーデーの日、パリ郊外に街頭演說をなし捕へられて、禁錮三ケ月に處せらる。七月、無事歸朝。八月、長男ネストル生る。九月、關東大震災の混亂中、十六日、伊藤野枝、甥橘宗一と共に殺害さる。行年三十九。（大杉榮全集に依る）

昭和五年九月十七日印刷
昭和五年九月二十日發行

現代日本文學全集　第三十九篇

編纂者　山本三生

發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷